

宇宙海賊キャプテン菜  
莉香 — 銀河帝国編 —

gonzakato

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アニメ版「モーレッツ宇宙海賊」の続編を書きました。

まずは、「海賊狩り」の後日談からスタートします。

そして、茉莉香とチアキが、「広い宇宙（うみ）」である銀河帝国へ出ていきます。

そこには、辺境で育った女子高生には想像も付かなかった「秘密」が待っています。

また「俺の宇宙（うみ）」を変えてしまう、新しい時代の流れがやってきます。

そのなかで、18歳になった茉莉香とチアキは、大人への入り口に立って、時に力強く、時に迷いながら、進んでいきます。

さあー、海賊の時間だあ！

追伸

ミニスカ宇宙海賊、モーレッツ宇宙海賊のファンの皆様！

2018年12月の終わり頃から、「ミニスカ宇宙海賊」が、KADOKAWAから再出版されたのをご存じですか。それによると、2019年6月に続編が出版されるそうです。

詳しくは、ネット上の「伝説のスペースオペラ「ミニスカ宇宙海賊」再発進」のページをご覧ください。

笹本先生だけじゃなく、アニメの佐藤監督や、小松未可子さんも登場しています。メディアミックスの得意な「KADOKAWA」がやる以上、アニメの二期もあると期待してます。

# 目次

第一章 海賊教師 | 1

第二章 卒業記念ダンスパーティー | 51

第三章 練習航海1 海賊教師の正体 | 86

第三章 練習航海2 宇宙大学 | 168

第四章 銀河帝国 | 192

第五章 銀河帝国の女王 | 224

第六章 帝国海賊 | 256

第七章 公爵の反乱 | 280

第八章 サーシャの秘密 | 371

第九章 チアキのウサギ熱 | 409

第十章 ブルック王国 | 435

補章 恐怖の大王の伝説 | 465

第十一章 銀河聖王家の魔女 | 486

第十二章 茉莉香とチアキ 十八歳の誕 | 505

生日 | 534

第十三章 幽霊海賊の秘宝 | 564

第十四章 海賊の力 茉莉香、帝国軍 | 603

を破る | 635

第十五章 サーシャ、ウルスラ、マミの進 | 680

路 | 680

第十六章 海賊の覚悟 茉莉香の進路 | 680

635

第十七章 追い出し航海 | 680

第十八章	白凰女学院地下迷宮の戦い	702	第二十四章	王女と茉莉香の生きる道	
その1			1010		
第十八章	白凰女学院地下迷宮の戦い		第二十五章	新しい弁天丸	1044
その2		743	第二十六章	茉莉香の答え	
第十九章	たう星系の決戦	784	第二十七章	卒業	1108
第二十章	M—8801星団の包囲戦	832	第二十八章	出航の日	1147
第二十一章	茉莉香とチアキ 華麗なる		エピローグ1	銀河聖王家の伝説	
出撃		883	1191		
第二十二章	レオニー二家の夕食会		エピローグ2	マリア王女の伝説1	
921			1216		
第二十三章	茉莉香とグリユーエルの進	971	エピローグ2	マリア王女の伝説2	
路			1265		
			第二十九章	弁天丸Ⅱの進水式 —セレ	

ニティ編	1292	第三十七章	新たな敵	1649
第三十章	グリューエルの危機	第三十八章	母なる星	1685
レニティ編	1328	第三十九章	未踏宇宙の先駆け・弁天丸	1723
第三十一章	セレニティ王国占領作戦	第四十章	海賊の取引	1760
第三十二章	海賊艦隊 VS セレニティ艦隊	第四十一章	薔薇の泉	1809
第三十三章	黄金の幽霊船クイーン・セレニティの攻防戦	第四十二章	海賊の結婚式 1	1862
第三十四章	王道	第四十三章	海賊の結婚式 2	1899
第三十五章	ウルスラとリリイの「学生生活」	第四十四章	嵐の予兆	1921
第三十六章	名も無い星	第四十五章	海賊の戦い	1959
	1610	第四十六章	大人の条件	1994
	1576		グリューエルの帰国	2046

2126	第 四 十 七 章	2091	第 四 十 七 章
	千 年 の 王 国		千 年 の 王 国
	そ の 2		そ の 1





## 第一章 海賊教師

### 1—1 海明星 新奥浜市

海明星の新奥浜空港に一台のシャトルが降りてきた。黒塗りの機体には、何の文字も書かれていない。

いつもならば、航空機やシャトルの離発着で慌ただしい空港が、この時ばかりは何故か、静まりかえっている。

シャトルの中から、数人の屈強な男女に囲まれて、一人の女が降りてきた。

男も女も全員、黒のパンツスーツにサングラスという、いかにも怪しい姿だが、空港の警察関係者が近寄る気配もない。

一行は出迎えの黒い大型リムジン車に乗って、空港ターミナルビルを素通りし、高速道路に入った。高速道路で新奥浜市の郊外に降りると、車はプラタナス通りに入った。

プラタナス通りは、新奥浜市で一番、いやこの星一番の高級住宅街である。プラタナスを始めとして美しい広葉樹の並木が続いているが、広大な敷地を持った屋敷が続くため、沿道からは建物は見えない。今4月で春になったばかりで、プラタナス通りの木々は、花をつけた木々や、若葉が芽吹き始めた木々が並んでいる。

海明星の新奥浜市は惑星海明星の赤道上にあるが、海明星が公転する楕円軌道の離心率が地球よりやや大きいため、母星たう星との距離が公転中に絶妙に変化することにより、赤道上にあつてもこの土地の気候は四季の変化を起こす。これは、自転軸の傾きが季節変化の主な原因である旧宋主星の地球とは異なつた原理である。その意味でも、この星は『奇蹟の星』であつた。

車の窓が開き、春の空気が車内に流れてきた。車の中の女が言った。  
「かぐわしい大気だ。」

こんな大気に包まれて生きることができるとは、恵まれた星だな。  
あの娘は、この大気の中で育つたのか。」

プラタナス通りの一角を曲がつて、さらに延々と続く並木に沿つてリムジン車は走つていく。やがて広々とした庭園の先に屋敷が見えてきた。大昔の貴族の館といった気品のある、大きな建物だ。

リムジン車は、玄関の車寄せに止まつた。すでに客人を迎えようと数人の男女が待つている。車からも、黒い服を着た数人の男女が先に降りて周りを見渡した。

その後、案内役の執事がリムジン車のドアを開け、一人の女が降りてきて、言った。  
「あいさつは後にしよう。」

それから、この星ではクリスティア・クオーツだ。クリスと呼んで欲しい。」

玄関の階段をのぼり、正面のドアを入ると広大な玄関ホールがあり、これを抜け、二階正面の客間に落ち着いた一行は、初めて言葉を交わした。

「初めまして。．．．ええつと、クリス様。」

この屋敷の主、ジョージ・ステープルが言った。

「初めまして。くわしい事情は聞いていようが、世話になる。よろしく。」

あと、挨拶は略式で。貴方も知っていようが、ああいうのは嫌いでな。」

「では、私の家族を紹介しましょう。」

妻のミーシャと、娘のサーシャです。」

「はじめまして、クリス様。」二人が挨拶した。

「ああ、はじめまして。」

その時、ノックの音がして、執事がドアを開けた。

「セレニティ王家のグリュール殿下とグリウンヒルデ殿下がお見えになりました。」

「お通しして下さい。」ジョージ・ステープルが言った。

「失礼します。」と、グリュールとグリウンヒルデが入ってきた。そして、クリスに向かって言った。

「初めまして．．．。」

「ああ、挨拶は略式で．．．。」

こちらこそ、初めまして。よろしく。

それから、クリスと呼んでください。」

クリスが、正式な挨拶の口上を述べようとするグリューエルたちを遮って、言った。

この星のお天気について会話が交わされたあと、クリスがグリューエルに言った。

「話は聞いていようが、しばらく白鳳女学院の教師としてこの星に滞在しようと思う。

そこで、貴方たちを呼んだのは、私が女子高の教師らしく振えるよう手助けしてほしいからだ。

そもそも、私は女子高というものに通つたことがないからだ。そういう常識が無いんだ。

よろしく頼む、ハハハ・・・」

「お話は伺っております。お役に立てるよう微力を尽くしたいと存じます。

それに、こちらのお屋敷のお嬢様、サーシャさんも白鳳女学院の生徒です。それも茉莉香さんと同じクラス、同じヨット部。

きつとお役に立てると存じます、クリス先生。」

「ほう、茉莉香と同じクラス、同じヨット部か。」

「はい、そうです、クリス先生。」サーシャが答えた。

「では、クリス先生。さっそく、白鳳女学院の教師らしくなれるよう、お手伝いいたしま

しよう。」

そう言つて、グリユーエルは、いかにもその筋の者が着るような、黒のパンツスーツに身を固めたクリスの服装を上から下まで眺めた。

「失礼を申し上げますと、まず服装からでございます。」

白凰女学院の若い女性の先生は、ファツションでも生徒の憧れる存在であり、その夢と期待に応えなければならぬと存じます。いかがですか。」

「……………」

こういう知恵を借りるためにグリユーエルらを呼んだのだから、従うしかないのは分かっていたが、クリスは少し不服そうに無言だった。

「それでは、今から街まで買ひものにまいりましょう。」

とグリユーエルは言つた。

「まいりましょうーご一緒には！」

とサーシャとグリウンヒルデが叫んだ。

四人は、新奥浜市の最高級ブティックにやってきた。

クリスを除く三人は、本当に楽しそうにあれこれとクリスの服を選び、それに合う靴やバック、アクセサリーなども次々に選んでいく。店の品物を全部買い占めるような勢いと熱気に溢れていた。

一方、クリスは、服を買うという行為のどこが楽しいか分からない様子で、呆然と三人をみていたが、たまらずに言った。

「グリューエル、さつきからミニスカートのばかり選んでいないか？」

私はミニスカートをはいたことがないし、パンツスーツでも良いと思うのだが……。「絶対にいけません。白鳳女学院の美人教師がパンツスーツでは、クリス先生の沽券にかかわります！」

「さあ、先生、次は、ご試着です。そうすればご納得頂けますわ。」

「お客様、試着室はあちらでございます」

支配人が特別室を指し示した。

この時まで、四人の派手な買い物ぶりは店内の注目を集めていた。

しかし、黒服の男女がさりげなく、然し断固とした態度で遠巻きに四人を囲み、他の客が近づけないようにしていた。

「あれ、なんか騒がしいと思つたら、グリューエルじゃない！」

そこで何してるの？」

「サーシャもヒルデもいるじゃない。」

白鳳女学院のヨット部の面々が制服姿であらわれた。

一行はごく自然に黒服の男女の壁をすり抜けて、グリューエル達に近づいてきた。

「あら、みなさん、おそろいで何のご用ですか？」

「それがさあ、例のダンスパーティの服をレンタルしようと、衣装合わせに来たのよ。」  
「あれですね。」

「ところがさあ、卒業記念のダンスパーティというのに、男物の燕尾服でしょ。」

うちのお母さんは、パーティドレスを着ないって聞いて、

『卒業記念パーティを私がどれだけ楽しみにしてたか、分からないの！』

ドレスを着ないなんて、ドレスの買物物が出来ないなんて、なんのためにこれまで娘を育ててきたのかしら！』

とか、怒っちゃって、昨日たいへんだったのよ。」

「うちも同じ。まあ、ダンスパーティは今回だけじゃないって納得してもらったんだけど、当然、燕尾服はレンタルで間に合わせろっていわけ。」

「私は、黒の燕尾服って結構気に入っているんだけどな……」ナタリアが言った。

「そういえば、茉莉香さんやチアキさんがいらっしやいませんかえ。」

「先輩達は、お仕事です。」

「ところで、サーシャ達はここで何しているの。」

「この方はどなた？」

ちよつと小声で、ハラマキが聞いた。

「こちらは、クリス先生。新学期から白鳳女学院の先生を勤められるの。

いまちよつと先生の服を選ぶのをお手伝いしていたところよ。

これからご試着……」

サーシャが答えた。

そう聞くとヨット部の面々は、各々クリス先生にご挨拶をした。

そして、グリユーエル達が選んだ、大量の、いかにも高価そうなクリスの服を横目でチラツと眺め、さらにお互い顔を見合わせた。

「私たちもお手伝い致しますわ……」

グリユーエルを真似た、不自然なほどバカ丁寧な言葉遣いで、皆一斉にそう言った。

こう言うときは何か企んでいるのは明らかだったが……。

そして、手に手にクリスの服を持って、特別室に運び始めた。

「さあ、先生。ご試着にまいりましょう。オホホホ……」

特別室に入ると、めいめいが服を手にとつて、一斉に歓声をあげた。

「うわ〜！すてき。これなら、いかにもキャリアウーマンって感じね。」

「こちらは、いかにもお嬢様って感じね。こんなにピンクのフリルが付いて、歩くと全身がお花のように揺れるのよね。」

「こういうの着て街を歩きたいわ〜」



ヨット部の面々は、自分の服を選ぶかのように、うれしそうにおしゃべりを始めた。「さあ、先生。まずはこの服からご試着ですわ。こういうスーツでビッシと決めて、魔女をビックリさせましょう。」

「魔女？」

「校長のごことでございます。生徒は皆、影でそう呼んでおります。」

ワイワイとひと騒ぎしたのち、グレーを基調にした細かい文様の入った生地で作ったたビジネス風のスーツとミニスカのコーデイネートを着て、クリスが鏡の前に立った。

「どうかな？ やはり、スカートが短かすぎないか。」

「うわ~~~~~ すてき。」

「すてきですわ。」

凛々しいキャリアアウーマン風のスーツだが、スタイルの良さがミニスカートとハイヒールでいつそう引き立っている。

最初はしぶしぶといった表情で鏡の前に立ったクリスだったが、皆が口々にほめるので、次第に表情がゆるんできた。

「お前達、私を着せ替え人形にして遊んでいるな・・・」

などと笑いながらも、鏡の前でポーズを取り始めた。

こうなると、次々とご試着しては、歓声、また大歓声。

そうこうするうちに、ウルストラが白いパーティドレスを持ってきた。「次はこれ！」

先生もダンスパーティーに出席されるんでしょう。だったら、このドレスはいかがですか。今、帝都の本店から届いたばかり、今年の最新ファッションだそうです。支配人から奪ってきました。」

「まあ、すてき!!」

皆が口々に叫んだ。

「私は、こういうドレスは大嫌いで、だからパーティーも大嫌いなのだが……」

「またまた……冗談を。大嫌いというのは大好きという意味だったりして。ハハハ。」

「さあ、ご試着、ご試着!!」

ちよつと心配顔のグリユール、グリユンヒルデ、サーシャの三人を気にする様子もなく、ヨット部の面々は、渋るクリスをおだてて、遂にパーティドレスを着せてしまった。

「どうかな? こういうのは……。本当に初めてなのだが……」

「はあ……ステキ!」

「お姫様みたい」

「こんな素敵なドレス、私も着てみたいです。」

「本当によくお似合いですわ。皆、感動しております。」

「そうかなあ。フフフ……それにしても、お前達にはかなわないなあ。私にドレスを着せるなんて。」

そういうクリスも意外にそのドレス姿が気に入っているようだった。鏡で側面や後ろ姿も写してもらい、見入っていた。

「そういえば、先ほどダンスパーティの話をしていたなあ。女の子が男物の燕尾服を着るとはどういうわけなんだ。」クリスがたずねた。

サーシャや他の部員が次々にその訳を説明した。

「白鳳女学院も高校卒業記念のダンスパーティをやるんです。正式名称は、ダンス部主催のダンス発表会という意味不明なものですが、へへへ。」

「もちろん、男女共学の公立高校ならば、卒業パーティは着飾った卒業生男女による徹夜のダンスパーティになります。白鳳女学院は女子高なので、徹夜は禁止、男の子も論外で、参加者は生徒達と教師それに父兄です。学校関係の招待客の方もいらつしやいます。」

「それでダンスなんです。結局、『兄』だけでは『男役』が足りないの、毎年、ダンス部員や頼まれた一部の生徒が、交代で『男役』をします。」

「そして、今年は、ヨット部が男役を頼まれているんです。」

だから、男役の燕尾服が必要という訳です。」

「18歳の高校卒業は大人への門出ですから、白鳳女学院の卒業ダンスパーティーは、共学の高校よりも、ずっとスゴイんです。」

大人のパーティードレスを始めて着るといっているので、生徒達も、お母さん達も、みんな気合が違いますから。」

「先生、今年のパーティーは特にすごいです。」

例年は、ダンスパーティーは、卒業式の頃に行われるんですが、今年は、3年生になったらばかりの五月に一回目を行うというんです。

何でそうなるかというところ、茉莉香と踊りたい女の子がすごく多いから、今頃から始める必要があるとダンス部は言っています。そうしないと、希望者みんなが踊れないと言っていますが、卒業までに何回やるんでしょう。

ハハハ、さすが、『茉莉香さま』ですね。」

「みんな、何回もパーティーがあるなんて困った困ったというんですが、何着もドレスのお買い物が出るので、うれしい悲鳴と言うヤツですね。」

「それに、ダンスパーティーの会場もいつもは学校の食堂やホールで行うんですが、今回は校長先生の意向で、特別に、私の家で行うんです。」

お母さんは、校長先生からこのお話を聞いたときに本当に大喜びでした。クリス先生

も、是非、ご出席ください。」

サーシャが言った。

「サーシャの家は、海明星一番の文化財というか、大きなお屋敷だものねえ。」

「そういえば、茉莉香さんも、この間はたいへんでしたね。」

でも、私がこの学校に来てから、ヨット部が男役をやるというお話は、初めてですね。」

グリユーエルが聞いた。

「ほらさあ、今までは部長がジエニー先輩とか、リン先輩とか、コワモテだったでしょ。ダンス部も恐くて頼みに来れなかったからよ。」

その点、今年には部長が茉莉香でしょ。

しかも『茉莉香さまと踊りたい』という娘がたくさんいるでしょう。

それならヨット部みんな男役だと言うことで、ダンス部も必死で頼み込んできたのよ。」

「茉莉香も最初は断っていたんだけど、何度断られてもダンス部はあきらめなかったのよ。」

そのうち

『茉莉香さま〜〜〜!』

とか叫んで茉莉香を必死に追いかけて回すようになって……」  
「やめてよ。」

思い出すと笑いがとまらなくなる。アハハハ……」

「あれ、おかしかったね。」

「でも、まあ、あそこまで必死に頼むのならばって、みんな了解したのよね。」

「では、私たちも男役で参加するのでしょうか。」

「グリュールとグリュンヒルデは中等部だからいいのよ。」

話がちゃんと伝わってなくてごめんね。」

「私もダンスパーティーに出たいですわ。茉莉香さんと踊りたい。」

グリュールが言った。

「お姉様！ 私も一緒にですわよ。」

グリュンヒルデが言った。

「ハハハ……。しかし、ヒルデもパーティーに出ると知ったら、みんな大喜びだろうね。」

なにせ、中等部の『王子様』は高等部でも人気だからね。

最近、背も伸びたし、そのショートカットは特に評判が良いんだよね。」

「このヘアスタイルのヒルデさんの写真、女性雑誌の王室コーナーにスクープされてましたね。」

よく似合っていて、きれいでしたよ。」

ヤヨイ・ヨシトミが言った。

「でも、ヒルデもお姫様なんだから、グリユールのようなお団子頭にしないで良いのかな。ショートカットにして怒られなかったの。」

「それはもう、姉の私まで監督不行き届きで叱られました。」

伝統あるセレニティの未婚女性の髪型を守れとね。

でも、私からは、ヒルデは中学二年生という難しい年頃だから、ソツとしておいて下さいとお願いしておきました。」

「ええー、ヒルデを中二病つてことにしちゃったの。ハハハ……」

こう言うやりとりを、ヒルデは、にこやかに見守っていた。

このような振る舞いの出来るところは、正真正銘のお姫様だった。

留学して一年、今やグリユンヒルデは中等部一の人気者である。

グリユールが万事におっとりとした性格で、おしとやかに振る舞う「お姫様」なのに対して、グリユンヒルデは、活動的な運動神経抜群のスポーツ・ウーマンで、そして、美少年のような透明感のある容姿と、さっぱりした性格から、「王子様」と呼ばれるようになっていた。

## 1—2 白凰女学院

白凰女学院の新学期が始まり、最初のホームルームの時間が始まるうとしていた。マミが茉莉香に言った。

「茉莉香くさア。新学期の初日から遅刻しちやだめだよ。」

おかげで、始業式での新任先生の紹介を見逃したでしよ。

うちのクラス担任の先生、新任の若い女のヒトよ。美人でカッコイイの。フアンクラブができそうね。」

「へー……。そーですかあ。ああ……眠い。」

こっちは今朝、海明星に帰って来たばかりなんですけどねエ……。」

茉莉香は腕を伸ばして、あくびをした。

その時、ドアが開いて、新しい担任教師が現れた。

さっそうとミニスカ姿で現れた新任教師に生徒達の歓声上がる。既に顔見知りのヨット部の面々は、にこやかに手を振っている。

「新学期から皆さんの担任となりました、クリスティア・クオーツです。よろしく。クリスと呼んで下さい。」

茉莉香は、一瞬で目が覚めた。

「グ、グ、グラントクロスの艦長、クオーツだ！」



チアキは、顔を少し背けて、つぶやいた。

「フーン！また海賊教師。一体この学園の教員採用はどうなってるのよ。」

放課後、ヨット部の部室に向かって茉莉香は急いでいた。

新学期なので、ヨット部の部室前の廊下には、大勢の新入生が、「加藤茉莉香」を生で見ようと目を輝かせて待ち受けている。

「あ、茉莉香さま」

「茉莉香さま~~~~~！」

声がかかると、茉莉香はグリュエルの「お姫様の顔」をマネしながら笑顔を作り、「どうも~~~~~」

などと愛嬌を振りまきつつ、しかし恥ずかしいので、次第に小走りになって部室へ駆け込んだ。

「よっ！ マリカさま！」

と部室の中から声をかけたのは、ウルスラではなく、クリス先生だった。

「ハハハハ・・・」皆が一斉に笑った。

『『マリカさま~~~~~！』は、もう学園名物よね。』

「ね、先生、言ったとおりでしょ。それにしても先生、かけ声上手。」

ウルスラが言った。

「もうくくく。ウルスラ。変なこと教えないでよね。それで、先生が部室にいらつしやると言うことは、まさか……。」

「そうだ、茉莉香。私がヨット部の新しい顧問だ。」

「あ~~~~~。」

「先生、第二種の大形屋間船舶免許をお持ちだそうよ。」

「すごいよね、船長もできる資格だものね。」

「練習航海が楽しみね。」

「そうですね。ナハハ……。」

船舶免許なんか海賊だから当たり前でしょと言いたいところを、茉莉香はこらえて、愛想笑いするしかなかった。

そうこうするうちに、茉莉香は先日からの経緯を聞かされた。

ブティックで出会った後に、ランプ館でパフェやケーキを食べて、お茶を飲みながら、この二年間のヨット部の大冒険について、部員達はクリスに全部話して、楽しく過ごしたらしい。

とはいうものの、部員達は、クリス先生もどうやら女海賊、それも大物かもしれないということは察しており、それならそれで、また面白い冒険が出来そうだと興奮しているらしいのだが……。

クリスを囲む和やかな部室の雰囲気の話が、これで分かった。

部室でのクリスは、教室での態度と一変して、オテンバ娘としての本性を隠さず、先生と言うよりも少し年の離れたアネキ、先輩という雰囲気でもうすっかり部員達になじんでいた。

そのため、茉莉香は、本当に聞きたいことがあるのに、言い出せなかった。

『あなたは、なぜこの星にやってきたのか』と。

茉莉香がクリスと二人だけで話す機会がないかと、ためらっているうちに、チアキが部室に現れた。

「どうも。初めまして。チアキ・クリハラです。」

挨拶の言葉は口にしたものの、チアキは怒っていた。

クオーツ・クリステイアが、海賊狩りと称して新鋭戦艦の実験のために大勢の海賊たちを犠牲にしたこと、海賊の巣での傲慢な態度に今も怒っていた。

しかも、その張本人が堂々と白凰女学院にやってきて、教師を名乗っていること、おまけに、ヨット部の顧問に収まり、アネゴ気取りで他の部員達とすっかり仲良くなっていることも、すべて気に入らなかつた。

『お前、何様のつもり』

と、チアキは詰問したかったが、さすがに皆の前ではそういう訳にはいかず、黙って

いた。

そういうチアキの気持ちにはお構いなしに、クリスがチアキに声をかけた。

「チアキ、そのケースはサーベルか。おまえ剣道をやるのか？」

「はあく。朝稽古だけですわ。．．．」

チアキは、ふてくされた声で答えた。

チアキは、最近、海賊営業の修行のためにと、剣道部の朝稽古に参加するようになっていた。今日も、スポーツ・サーベルのケースを持っていたので、クリスが気がついたのだった。

もちろん、海賊営業の剣劇は、本物、つまり真剣のサーベルを使っておこなわれる。

これに対して、スポーツとしての剣道では防具やヘルメットも使うし、サーベルもスポーツ用のもので、研ぎ澄まされた刃が付いていない。

しかし剣自体は本物のサーベルと同様の鋼で作られ、本物同様に重い。

「私も剣道は好きだ。朝稽古、一緒にやろう。チアキは上手そうだなあ。」

今日は、早朝から女らしく振る舞おうと緊張してたからなあ。疲れた。やはり汗を流して気分をすつきりさせたいね。ハハハ．．．」

「先生、そういうのを猫をかりるといふんですよ。」

「それをいうなら、猫をかぶるだろう。茉莉香」

「先生が自分でそれ言うんですかあ〜〜。」

「悪いかなあ、ハハハ」

茉莉香とクリスの、仲が良さそうなやりとりを聞いて、チアキはいっそう不機嫌になった。しかし、クリスに直接に気持ちをぶつけるチャンスと思いい、朝稽古を承諾した。「さあ、今日は新入生勧誘だよ。まずはピラ配り。わたしもちよつと用事を済ましたら、すぐ行くから。さあ、みんな、ただちに行動!!」

茉莉香は、ヨット部の部長として皆に指示すると、たちまち皆を部室から追い出してしまった。

部室で一人きりになると、茉莉香は部室の通信機で、ハロルド・ロイド保険組合の代理人シヨールと連絡を取った。

「やあ、船長。」

「この前の私の提案、回答はどうですか。」

「それが、こつちも驚いたことに、条件付きだが即答で、金は満額OKだったよ。」

「相手は？ グランドクロスを開発してたのは、どこの会社ですか。」

「それをこれ以上探らないというのが、第一の条件だ。」

第二は、もちろん今後の秘密厳守。

そして、第三の条件は、海賊同士でも手打ちをしたいということ。

ついでには、あちらの本拠地にご招待したいそうだ。

あんた達、グランドクロスと戦った海賊が手打ちの話を受けてくれれば、金も払うと言っている。」

「沈められた船への補償とか、荷主への補償とか、すべて了承したんですね。」

「ああ。保険組合の分も含めてな。」

おっと、これはそっちには関係ないな。聞かなかったことにしてくれ。」

「なるほど、うゝゝゝむ。それでかゝゝゝ。世の中、上手く出来てますね。」

茉莉香は、クリスが海明星に現れた理由のひとつが分かった気がした。

「船長、何かそっちに変わったことでもあったのかい？」

何か、あつたら教えてくれ。」

「いえ、なんでもありません。何もありません。」

「そうかい。では、なるべく早く返事を聞かせてくれ。」

じゃあ、またゝゝゝ。」

茉莉香は、以前にシヨールと話したことを思い出していた。

「船長、こつちも、最初は、海賊狩りの後始末は、辺境での海賊同士の小さな抗争に絡んだ事件として、事務的に処理すれば良いという方針だったんだ。」

しかし、イヤなヤツ、つまり、保険会社相手に一儲けを企むごろつき弁護士が、暗躍

しはじめた。

彼らは、襲われて沈められた船員の遺族、荷主や受取人の代理人と自称して、法外な補償金を保険組合に要求している。」

「つまり、お金をもつてる保険組合が狙われている訳ですね。」

「そういうことだ。船長、わかりが早いなあ。」

ヤツラは、これは銀河帝国の大スキヤンダルだと言って脅してきやがった。

つまり、『新兵器開発のため、銀河国内の軍艦製造メーカーが無許可の兵器テストを行った。』

それも、罪も無い船を実験台として一方的に襲って、大勢の死者を出すという非人道的な犯罪行為をした。』と言っている。

この事件の『真相』を暴露するぞと、脅してきたんだよ。

実際のところ、ヤツラも、事件の輪郭は裏ルートからの情報で理解しており、軍需産業も絡んだ表沙汰に出来ない秘密のスキヤンダルと睨んでいたわけだ。」

「でも、何を証拠にそんなことを言うんですか？

私たち達、私掠船免状の海賊達は、沈んだ船の関係者も含めて、余計なことを外部に話していませんよ。」

まだ、海賊狩りの正体や背景もわからないんだから。」

「それは承知している。

でも、やつかいなことに、彼らは、私掠船免状をもつ海賊達の弱点を突いて来やがった。

やつらは、裁判に訴えるという合法的な手段を使って、この事件の背景を公にすると保険組合を脅してきやがったんだよ。」

「裁判なんて、呑気なやりかたですなえ。無視すれば良いじゃないですか。」

「そうはいかない。

裏世界で生きている無法者の海賊なら、裁判所の命令なんか無視すれば良いが、お前さん達は、私掠船免状を持った「合法」の海賊だろう。

つまり、表の世界で生きている以上、公の裁判所の命令を公然と無視することはできないだろう。

例えば、お前さん達、私掠船免状の海賊が、証人として法廷で喚問されたらどうする。嘘を言ったり、証言拒否すれば、罰則もあるが、なにより私掠船免状を剥奪する口実を与えるようなもんだろう。」

「それは、困りますなえ。」

「まあ、こつちも、できれば表に出ない形で処理できれば良いんだけどなあ。

例の戦艦を製造したメーカーや、お前さん達私掠船免状の海賊達が、紛争当事者とし



て表舞台に引つ張り出されるのは避けた方が良いだろう。

「そう思わないかい。」

「うーん。なんか、まだ、私の知らない裏がありそうですねえ。」

「そうかなあ、単純だと思うけどなあ。」

そういうショーの口ぶりは、本当に何か裏があるようだった。

ひよつとすると、海賊狩りの正体を知っているのかもしれない。

「そうですね。でも、どうせ私たちからは表沙汰に出来ないんですから、これ以上、影でぶつぶつ文句を言っても仕方ありませんよね。」

そうすると、自分の置かれた立場も自覚して、やつぱり、貰えるものは貰っておくのがいいと思います。」

「相変わらず、答えがでるのが早いねえ。」

「それで、ショーさん、こうしてください。保険組合が仲介人となって、兵器テストの黒幕を探して、そいつらと和解交渉をして下さい。」

もちろん、戦った私達に対する報酬だけでなく、沈められた船の海賊や荷主などに対する補償についても、話をつけてください。」

ただし、事前に契約していなかったんですから、その分のペナルティも含め、いつもの倍額を支払えと言って下さい。」

「なるほど。」

「まあ、どこの誰だか分からないけど、あんな巨大な戦艦を三隻も性能テストに動かせる人たちって、もう限られているでしょ。」

だから、相手にとつても、私達にとつても、さつさと契約を結んだ方が良いと思うんです。

ですから、私の話は『お値うち』です。そう言つて下さい。」

『お値うち』かあ、面白いことを言うねえ。

キャプテン茉莉香。確かに事後でも契約して正式の海賊業務となつてしまえば、誰も文句は言えないなあ。

でも、他の海賊達がその話に乗ってくるかなあ。」

「それは、私たちの方で話してみます。」

私掠船免状の海賊達の中には、話を聞いて反発する者もいた。

しかし、ケンジョー・クリハラやカーン伯爵があつさり賛成したことから、反対派も次第に冷静になり、やがて皆、茉莉香の考えに同意した。

決断の早い、茉莉香ならではの手際である。

いや、それを見込んだ保険組合の深慮遠謀というべきかもしれない。

残るのは、悪徳弁護士を黙らせる裏交渉となれば、保険組合にとって「蛇（じゃ）の

道は蛇（へび）」であった。

続いて、茉莉香は、部室の通信機から、シヨ一の返事を弁天丸のミーサに連絡した。「そう。あつさり片付いたわね。」

それで、『あちらの本拠地』に行くことは、帝国海賊の伝説の本拠地『パイレーツ・キャツスル』にお招き頂くことになるのかしらね。

おもしろいわあ、一度行ってみたかったのよね。」

「伝説って、そんなに面白いんですかあ」

「そうね、おとぎ話では、帝国海賊は、今から千年前、銀河帝国の建国の時に戦力不足を補うために私掠船免状をもらって大暴れして、地球と呼ばれる宗主星から独立を勝ち取ったのよ。」

「私たち私掠船免状の海賊と同じですね。」

「その後が違うのよ。」

独立後、王から軍人として帝国軍に残って欲しいとか、爵位を与えて貴族にしてやるから帝国に残って欲しいとか言われても、

『俺たちは自由を尊ぶ』

と言つて、断つたのよ。」

「へえー。きつぱりしてますね。」

「それで、王様が、勲章の代わりに黄金のドクロの肩章の付いたマントを下さったの。いつまでも帝国海賊の誇りを失わないようにってね。

そして、海賊達は、宇宙の海のかなたへ消えていったの。

本拠地。パイレーツ・キャッスルも、それ自体が大きな船だったので、一緒に消えてしまったのよ。お宝を乗せてね。

それで、めでたし、めでたしって話よ。」

「その後、海賊達は、どこ行っただんですか。」

「おとぎ話だから、話はそれでおしまい。」

その方がカッコイイでしょ。

でも、どんな連中なのかしらねえ。まあ会えば分かるでしょう。」

「そうですね。でも、ホラー映画のように海賊の幽霊が出てくるのはやめて欲しいけど。」

「それで、手討ち式の方だけど、まあ、こう言う儀式みたいなのは、迦陵頻伽のカーン伯爵に代表になつてもらうのが、見栄えが良いわね。

作法にも詳しいしね。

船長達に相談しておくわ。」

「ありがとう。ミーサ、お願いね。」

私、この頃、新入生勧誘とかダンスの練習とかで、ほんと忙しいのよね。」

「グランドクロスの製造会社は、分かったのか。」

「それが、ぜんぜん。それも含めて、探らないのが条件ですって。」

「まあ、ああいう大型戦艦はスペース・ロッキード社とか、ユーロ・スターシップ社でも作れるが、グランド・クロスはステープル重工業が作ったと見当を付けているんだが。」

「そんなこと、どうして分かるの？ シュニツァー」

「白兵戦で、グランドクロスの艦内に乗り込んだときだ。」

廊下や部屋の壁や床の素材や気密室のドアとか、量産品で作る宇宙船の内装は、会社によって仕様に癖があるので、見ればどこの会社の製品か分かるものだ。

私の経験では、あれはステープル重工業製の船だと思う。」

「すごいね。シュニツァーは。」

「船乗りなら、当たりまえだ。」

船長も早く、本物の船乗りになって……。」

「ハイハイハイ……。あ、私呼ばれてるから……。」

茉莉香は、シュニツァーのお説教が始まりそうなことと、新歓のビラ配りをする部員達をこれ以上待たせないために、通信を切った。

一方、こちらは弁天丸のブリッジ。このところ、茉莉香がすぐに通信を切ってしまうので、クルー達も、茉莉香の様子が気になり始めた。

「また、通信を切ってしまった。」

俺、嫌われているのかな。」

「そろそろ、反抗期じゃないかあ。」

「そうじゃないでしょ。」

あのコ、まだ17歳なのよ。今年やっと18歳よ。

まだまだ自分が、これからどこへ行くかわからず、フワフワした感じが残っているんじゃないのかなあ。

だからイライラした気分にもなるんじゃないかしら。」

「さすが、医者ね。それって児童心理学？」

「う〜〜ん。でも最近になって急に変わったのは確かよね。」

やっぱり、何かあったのかしら。

そう言えば、保険組合のショーさんも、船長に最近何か変わったことがあったのかかって聞いてきたわねえ。」

「高校三年生でしょう。今後の進路の話友達から聞いて、自分も、白鳳女学院大学とか、それとも宇宙大学でも行きたくなったのかしらね？」

「宇宙大学って、入学試験は難しいんでしょう。」

しかし、急に熱心に勉強始めているって訳でもないなあ」

「その点では、変わったところは無いよね。」

まさか、オトコ？」

「それはないでしょ。ねえ、ケイン」

「ええっ！ミィサ、なんで俺に聞くんだ。」

「興味深い問題ねえ」

フフフと女達は一斉に笑った。

「まあ、ちよつと心配は心配ね。」

それじゃ、百目とクーリエにお願い。

地上で茉莉香の様子を偵察してきてくれないかしら。私の車使ってイイから。

でも、茉莉香にはナイショよ。」

「やったー。あのピンクのスポーツ・カー、乗って良いの。」

「そのかわり、傷つけたら、修理代、お給料から引いておくから。」

「ひえー。怖い。」

茉莉香が高校を卒業したら、弁天丸に腰を落ち着けて、船長稼業に精を出す。

これは弁天丸のみんなが期待していることだろう。

だから、学校の進路調査には、「就職。家業を継ぎます。」と答えるものとみんな思っているし、茉莉香も以前はそう思っていた。

しかし、最近になって、茉莉香は、それではもの足りないものを感じていた。

『茉莉香、おいでなさい、より広いうみ（宇宙）へ。それを望む人もいる。』

グランド・クロスの船内で最後に聞いた、クリスマスの謎めいた言葉が、今も茉莉香の胸の中に響いていた。

それがクリスマスに会って、いつそう強くよみがえってきた。

でも、自分にとって、それが何を意味するか、よく分からなかった。

その日の夜に、茉莉香は、思い切って母親の梨理香に自分の気持ちについて相談してみた。

「梨理香さん、じつはねえ……。」

茉莉香は、自分の気持ちを話した。

「なんだいそりゃ。おまえらしくないね。」

そういうときはねえ、おまえの心の中に、既に答えがあるんじゃないかい。

自分に聞いてみな。

お前は自分のことを自分で決められる力を持つてるはずだよ。

それから、弁天丸のクルーの気持ちを第一に考えて、自分の気持ちと違うことをする



んじゃないよ。

あいつら、船長が行くと言えば、どこへでもついて行くんだからさ。」

「そういうもんかなあ。船長つて。」

「そういうもんだよ。」

「ありがとう。お母さん。私、自分に正直に考えてみる。」

1—4 白鳳女学院 武道場

翌朝六時の白鳳女学院武道場では、早くも、エイ、エイ、ヤーと剣道部員の気合いが飛び交っていた。

「準備運動は済んだか。さあ来い、チアキ」

白いヘルメットと白い防具に身を包んだクリスが言った。

ヘルメットと防具全体の外観は、ユーロ・クラツシツクと呼ばれ、古代の鎧甲に似ていた。しかし、このスポーツ用の鎧甲は、超硬質の合金とプラスチックの部品を組み合わせて出来ており、刃が突き抜けない硬度があつて、しかも軽くて、通気性も確保されているという優れものだった。

「先生、手加減しませんよ。」

同じような形の赤い鎧甲を身につけたチアキは、サーベルを降りかぶつて一気に切り込んだ。

キーン

刃と刃のぶつかる鋭い音が鳴り、クリスがぎりぎりのところで身をかわした。

その身をかわした方向にさらにチアキのサーベルが切り込んでいく。

「そこよ。もらった。」

しかし、チアキのサーベルは空を切る。身をかわして動いたように見えたのは、フェイントだった。

今度は、クリスの剣がチアキを襲う。

「いつまでも、好きにさせないよ。」

キーン、キーンとサーベルのぶつかる激しい音が続き、クリスが切り込んでいく。

チアキは必死にこらえているが、サーベルを受け止める腕には強い衝撃が伝わる。

「うーん、受け止めるだけで、腕がしびれてくるわ。」

クリスの剣を振るパワーは女性としては相当に強い。チアキは少しずつ後退していく。

「どうだチアキ。そこまでか。このままでは、場外に出てしまうぞ。」

「そのくらいで負けるものですか。海賊狩りの張本人のアンタなんか、このくらいで負けるものですか。」

「今、なんと言った……」

チアキが必死に体勢を立て直して、打ち返した。二人はすごいスピードで動き回っているが、形勢は一進一退だった。

剣と剣がぶつかり合う度に武道場に激しい金属音が鳴り響いた。

二人の攻防の激しさに、いつしか、他の剣道部員も二人の勝負を見守っていた。

「ヤメーッ！ ハーフタイムです。」

剣道部長の声が響いた。

「フー……」

クリスとチアキは、ヘルメットを外して、一息つくために、並んで座った。

「チアキ、お前はあのととき、海賊船に乗っていたのか……」

「バルバルーサの船長、ケンジョー・クリハラの子供ですから。海賊の巣の海賊会議の場で

もあなたを見ましたよ。」

「……そうか。」

しばらく、沈黙が続いた。

「先生、ひとつ聞いていいですか。」

「何だ。」

「先生は、どうして私たちの前に現れたんですか。」

「茉莉香にもう一度会いたかったのだ。」

時間のあるうちに、会って確かめたかったのだ。

それと、もうひとつ……。」

「練習始め！」

また、剣道部長の声が響いた。

チアキは、茉莉香に「確かめたかった」ものとは何か、そして「もうひとつ」とは何か、さらに聞いたかったが、クリスはヘルメットをつけてしまった。

その後も激しい練習が続いたが、終わると授業時間が迫っており、その日はそれ以上二人で話すチャンスは無かった。

翌日以降も、ほぼ毎日のように朝稽古は続いたが、二人でゆっくり話すチャンスはなかった。

剣道部の部員達が、クリスを取り巻くようになったからだ。

部員達は、最初は遠巻きに二人の稽古を見ているだけだったが、やがて好奇心いっばいでクリスに近づいてきた。

そして、クリスは部員達とも剣道の稽古をするようになったからだ。

しかし、チアキと稽古するときと違って、明らかに他の部員達にはその実力に応じて、手加減しているようだった。動きの早さや剣のふれあう音が全く違う。時には大きな声で誉めたり、優しく励ましたりしている。

それを見ていたチアキは言った。

「ふーん。海賊教師、なかなか教師っぽくなつたじゃない。」

数日後、授業が終わると、チアキはヨット部の部室に向かつて学園の渡り廊下を歩いていた。

すると、3、4歳の小さな女の子がひとり、廊下の向こうから歩いてきた。

迷子かなと思ひ、チアキはしゃがんで、その子に声をかけた。

「どうしたの。誰かを探しているの?」

「そう。ネーネーを探しているの。」

「ネーネー? お姉さんのことかな。お姉さんは何て名前なの?」

「.....」

「あなたのお名前は?」

「.....」

女の子は名前を聞かれると黙ってしまった。この子に何か警戒させてしまったようだ。チアキは困ってしまった。

すると、廊下の反対側から、声がした。

見ると、高等部の真新しい制服を着た、赤毛碧眼ソバカス顔の質素な雰囲気少女が、十人ほどの子供達を連れて歩いてきた。

迷子だった小さな女の子も、声を上げてその子達の方へ走り出した。

「どうもすみません。妹がご心配かけました。」

新生児は、メリー・ランバートと名乗った。二人が挨拶を交わしていると声がした。

「おーい。こつちだ。」

クリス先生が呼んでいる。

その声に気がつくのと、子供達は歓声を上げて、一斉に走り出した。メリーもチアキに挨拶して、子供達の後を追った。

子供達は、一斉にクリスに飛びついた。それを受け止め、子供達を抱いたときのクリスの笑顔。

渡り廊下に子供たちの歓声が響いた。

「さあ、メリーの入学した学校を案内してあげよう。」

お前達も大きくなったら、この白凰女学院に入学するかい。」

「うん、する、する。」

「私も、私も」

「男の子の入る学校は？」

「ハハハ、今度連れて行ってあげよう。」

「約束だよ。」

子供達とクリスは本当に楽しそうに歩いて行つた。

「あいつ、あんなに優しい顔もするんだ。」

でも、あの子達は、実の兄弟姉妹ではなさそうだけどね。」

チアキは、クリスのもう一つの顔を見た気がした。

『あの海賊教師、いったい、いくつの顔を持っているんだろうか。』

ますます彼女の事が分からなくなつた。

『今度、メリー・ランバートに、クリスのことを聞いてみよう。』

あの様子では、メリーも海賊の娘かも知れない。

彼女に聞けば、もう少しクリスのことが分かるかも知れない。』

チアキはそう思いながら、ヨット部の部室へ急いだ。

1-5 白鳳女学院 ヨット部室

数日後、ヨット部の部室に新入生が揃つた。今年は、10人と大勢だ。

「メリー・ランバートです。」

ランバート星系から来ました。

・・・奨学金でこの学校に留学して、女子寮に住んでいます。」

「ジェシカ・ブルボンです。」

中等部から来ました。

高等部のみなさんと一緒にオデットⅡ世号で航海ができるのが楽しみです。」

.....

次々と新入生が挨拶し、上級生が拍手で迎えた。

「あのジェシカって、『親衛隊長』のジェシカね。」

「なんか、ヨット部は、どんどん有名人があつまるねえ。」

「中等部の人気者ヒルデを囲む女の子達のあだ名が、『親衛隊』で、彼女が『親衛隊長』なんだけど、ネーミングが上手いよね。」

あのテンションの高さ、そうとしかい言いようがないよね。」

「でも、彼女、中等部のヨット部長で、ヒルデ達と一緒にヒューゴ杯で団体優勝した強者よ。今年の新入生には、他にも中等部団体優勝メンバーがいるわね。」

上級生もすっかりしないとね。」

上級生の視線は、中等部の有名人、黒髪で浅黒い顔のジェシカ・ブルボンに集中していた。

ジェシカは、中等部一年生の時に銀河帝国の帝都クリスタルスターにある帝国女学院から白鳳女学院に転校してきた。

白鳳女学院は、辺境の海明星ではお嬢様揃いの名門校とされるが、帝国女学院は、銀河聖王家の子女も通うという銀河系随一の超名門私立校。そこに在学している生徒が



白鳳女学院に転校してくること自体が極めて異例だった。

従って、その理由をめぐって中傷めいた噂や憶測が生まれた。

実際のところは、親の事情らしいが、入学後も、気の強いオテンバ娘で、性格が悪いと同級生から怖がられる存在だったことも、そういう噂話が広まる原因になった。

もつとも、ママに言わせると、ジェシカこそ、「ウラで何やってるか分からない、スゴイ人だらけ」のヨット部に最もふさわしい人材であり、将来の部長間違いなしということになるのだが。

他方、メリー・ランバートは、ランバート星系からの留学生である。

ランバート星系と言えば、かつて倒産して放棄された辺境の鉱山星系で、20年ほど前から細々と開発が再開されたといわれるところである。倒産で鉱山開発だけでなく惑星改造も中断したため、今のところ可住惑星もない星系である。

従って、今や変わり者の鉱山関係者以外、殆ど人が寄りつかないと言われる貧しい星系である。

メリーは、そういう星から奨学金をもらって留学してきたと自ら言うように、最近の白鳳女学院にめずらしい「苦学生」であった。

実際、最近の海明星の白鳳女学院は、ジェシカが転校してきた頃とは、明らかに雰囲気が変わっている。

茉莉香の活躍や、グリーユエルやグリユンヒルデの留学で注目を集め、銀河中からお嬢様の留学生が増えたからだ。

新入生の挨拶が終わると、2年生が1年生をシミュレータールームに案内し、3年生が次の練習航海の相談を始めた。

そこへ、顧問のクリス先生がやってきた。

クリスは、部室のソファにどつかと座り込むと言った。

「やっぱりヨット部は良いなあ。」

ここに来ると気持ちが悪く落ち着くというか、ここにずっと居たい気がするよ。

ああ、ありがとう」

クリスは、礼を言つて、ハラマキが入れてくれた紅茶を飲み始めた。

「ところで、茉莉香、次回の練習航海のプランづくりは進んでいるのか。」

「はあ、今年は新入生も多いし、基本的なコースが良いと思ひまして・・・。」

2年前のフライト・プランと同じように、楢円軌道で、たう星を回って砂赤星に再接近して戻るコースではどうかと考えているんですが・・・。」

「2年前と同じというこのコースでは、平凡でつまらない航海になるぞ。」

私もお前達と初めての航海なんだから、もつとわくわくするような、大冒険プランでも考えているかと期待してたのに。」

近くで聞いていたチアキは、

『この海賊教師が何を言うのか』

と、むかついた。

しかし、茉莉香は、愛想笑いをしながら答えた。

「ナハハ……。いやー、ご存知の通りオデットⅡ世号は太陽帆船ですから、練習航海の日程では、そんなに遠くへは行けないですよ。

まあ、超光速ブースターでも使えば星間航行は可能ですが、オデットⅡ世号はカデゴリーⅡの宇宙船として登録されたままですから、正規のフライトプランでは星間航行は認められませんし……。」

「ふーん、『正規のフライトプランでは……』か。

実はなあ、茉莉香。私の知り合いに最新型の超光速ブースターの開発をしている者がいて、モニターになってくれるなら燃料費も含めタダで貸してくれるという話があるんだが……。」

「うわー！ やったー！ 」

「そこなくつちや。さすが先生。」

茉莉香とチアキ以外の3年生は一斉に歓声をあげた。

しかし、茉莉香とチアキは、口には出さなかったが、

『また性能テストとは！ 海賊狩りのグランドクロスの時と同じだ。』

『結局、ヨット部員が危ないことに巻き込まれるのではないか？』

と心配して、困った顔をした。

クリスは、そんな二人の心配顔を無視して、話を続けた。

「ところで、お前達3年生だろう。そろそろ、今後の進路希望について学校に調査票を出す時期が来るよなあ。」

「はあ……。でも、私たち、まだ、やっと三年生になったばかりで、ヨット部の部活がすごく楽しくて、まだ、他のこと考えたくないというかあ〜。」

それに、まだどんな職業と言ってもイメージが無くて……。」

と、リリイが言った。

「でも、一応、考えてはいるんだろう。」

「はあ〜。今、答えると言われれば、とりあえず白凰女学院大学の家政学部 of 生活美術学科という、例のお嬢様コースへ内部進学という答えしかないですねえ。」

それなら親も承知するだろうし……。」

「私もそんなところかなあと思ってます。」

ヨット部がずっと続けばいいなって。

そりゃあ、実家が小さい運送業やってるから、ジェーン先輩みたいに宇宙大学へ進学

して船乗りを目指すと言えば、両親とも大喜びだろうけど。

でも、私の成績では入学試験をパスするのは難しいかなア。

それに、女の子では茉莉香みたいに海賊にでもならないと船乗りとしてやっていくのは、なかなか難しいみたいだし……。」

と、ウルスラが言った。

「でも私たち、もう立派な船乗りだよ。

船動かすの、ほんと、たのしいよね。

私もヨット部大好き。

それで……、私は、頑張つて外で働くというより、家でご飯作つたりとか、家の事するのが好きなので、専業主婦が第一希望ですが、こんな志望つてありですかねえ、エヘヘヘ。」

「やっぱりねえ……ハラマキらしいよ。」と皆が笑った。

「とは言つても、まだ結婚は早いと思うし、だから、勉強はあんまり好きじゃ無いんだけど、志望と聞かれれば、やはり白凰女学院大学かなあ……。」

と、ハラマキが言った。

「サーシャは、どうなんだ。」

「みんな、ごめんね。」

わたしもヨット部が楽しい気持ちはみんなと同じだけど、決めていることがあるので言わせてね。

先生、私は、白鳳女学院大学の医学部へ進学して、医者になります。

父が福祉事業を始めるつもりですから、医師としてそれを助けたいと思っています。」と、サーシャが言った。

「へえ〜。サーシャはしっかりしているなあ。

で、茉莉香は、どうなんだ。」

「ええ!? 私ですかあ。

ええ・・・まあ、私はもう既に弁天丸の船長ですし、今後もそういうことだと思っ  
てはいるんですが・・・。」

茉莉香は、あいまいな事を言ってしまった。

しかし、本音はこう考えていた。

『サーシャがあんなにはつきりと自分の進路を考えているなんて、ビックリ。

それにひきかえ、私は、今頃、何を迷っているのかなあ。

でも、そんな気持ちなんて、クリス先生に言えるわけ無いじゃない。』

「なんかはつきりしないなあ。茉莉香らしくないぞ。

チアキは、どうなんだ。」

「私も一人っ子ですから、いずれバルバルサに乗るのじゃないかなあと思ってます。

オヤジは大学へ行っても良いし、後を継がず外の世界に行っても良いって言ってるんですが……。

そういうわれても、具体的に他に何かやりたいことがあるかと言われると、思いつかなくって。」

「サーシャ以外は、みんなホントのんきだなあ。

もう高校三年生だぞ。このまま行くと、みんな、なんの目的も無いままに、白凰女学院大学へ内部進学ってことになってしまふなあ。

まあ、このメンバーなら、それもホントに楽しそうだけど。」

「ねえ、楽しそうでしょ。先生もそう思うでしょ。」

大学でもヨット部で船に乗って、海賊やって……。」

「ウルスラ！ もうくくくくやめてよね。ヘンなこと考えるのは。」

「ハハハ。茉莉香も楽しそうじゃないか。」

「楽しんでません。困ってます。」

「まあ、そんなに怒るな。ハハハ……。」

それで、練習航海の話に戻ると、せっかく超光速ブースターが使えるんだから、さつき名前の出していた宇宙大学へ見学に行くというプランはどうだ。

みんな宇宙（うみ）が好きなんだし、進路指導のための見学と言うことで、校長には私からもお願いしておくから。

それでついだと云っては何だが、はるか遠く、宇宙大学のある銀河の核恒星系の方まで行く訳だから、お楽しみも必要だよな。

そこで、銀河帝国の帝都クリスタル・スターに寄って、お土産のお買い物して、美味しいスイーツを食べて帰ろう。

帝都はほんとに華やかだし、おまえ達も行ってみたいお店があるだろう。

それに、チアキ、帝都のチョコパフェは、美味しいぞ。

一番美味しい店はどこか、お前知ってるか？

あその美味しさは、格別だぞ。」

「わーい。すごい、そうこなくっちゃ。」

「私、ネット雑誌に載っていたあの店に行ってみてみたいなあ。」

そこで、洋服をオーダーするんだあ。」

皆は歓声を上げて、帝都のヌーベル・シャンゼリゼ通りとか、ニュー・五番街にあるお店のうわさ話を始めた。

「帝都かあ。華やかなんだろうな。」



銀河中からいろんな人が集まってきて、とても賑やかなんだろうなあ。」

茉莉香も、帝都の話が聞かされてうれしかった。

『私も、帝都に憧れてたなんて、自分でも気がつかなかったなあ。』

やっぱり、ここいら、田舎だものなあ。』

でも、一方で茉莉香は、こうも考えた。

『皆が喜ぶに違いない、甘い話を、わざわざ自分から言い出すなんて、クリス先生、本心はなにを考えてんだろう。』

この海賊教師、ますます怪しいわよ。

私は、部長なんだから、みんなのために用心しないとねえ。』

チアキも、

『また、海賊教師が何を企んでいるのか!!』、

『そんなチヨコパフェのような、甘い話には裏があるはず・・・』

と自分を戒めつつ、「帝都のチヨコパフェ」の妄想と戦っていた。

チヨコレートのカカオの香りや、アイスクリームのバニラの香りが鼻を刺激し、

チヨコやアイスの甘さと、

ホイップクリームの芳醇な油脂の味と、

添えられたクラッカーやプリッツの塩味が、舌の上で溶け合って・・・。

『ああ・・・。チョコパフエなんか食べたくない!』

▪

## 第二章 卒業記念ダンスパーティ

### 2—1 ステープル家の邸宅（海明星）

5月のある土曜日の夕方、いつもは静かなステープル家のお屋敷は、大勢の訪問客で溢れていた。次々と横付けする高級車や自家用車から降りたつた来客は、使用人に迎えられ、広大な玄関ホールに入っていく。

玄関ホールの頭上では、銀河系をかたどった巨大なシャンデリアが輝いている。

我々の銀河系は直径10万年、紡錘型の中心核から、渦巻き状に多数の光の腕、つまりオリオン腕、ペルセウス腕、ノーマ腕、サジタリウス腕などが、広範囲に伸びていく形をしている。この壮大な銀河の形を模した輝きが、訪れた人を照らしている。

玄関正面の中央階段の両脇には、星座となった神話の人物や動物を表現した、大理石の彫刻が立ち並んでいる。来客はこれらの大理石の彫像に導かれ、二階右手の大広間に進んでいく。廊下の壁や大広間の天井にも、宇宙の神話をモチーフにしたユーロ・クラシックと呼ばれる表現形式による、壁画が描かれている。

こうして、ステープル家の玄関から大広間までの空間は、銀河系宇宙を表現している。大広間では、パーティの主催者であるダンス部員達や白鳳女学院の教師達とならん

で、屋敷の当主、ステープル夫妻と娘のサーシャが、次々と到着する父兄や招待客に挨拶していた。

そんな来客のようすを、ダンスに出演する三年生達は、大広間を一望できる三階の廊下から眺めていた。

「うわー、華やか。今年は参加者が多いらしいわよ。招待客のみなさまもほぼ全員ご出席らしいわよ。」

「こんなの始めてと、ダンス部の子が喜んでましたわ。」

「見て見て、ほら、あちらのお兄様達。すてきな方が大勢いらっしやるわ。都会的な大人の雰囲気ねえ。すてき。」

クリスタルスターから、いらしたのかしら。」

『『クリスタルスター』っていう名前を聞いただけでワクワクしちゃうね。」

銀河帝国の首都かあ、私も行ってみたいわ。」

「それにしても素敵な大広間ね。シャンデリアの輝きとか、壁や天井のクラシックな壁画とか、ほんと素敵だわ。」

「これが本物のセレブのお屋敷なのね。」

「サーシャって、この家の娘なんでしょ。」

普段は、他の子を引き立てる側に回って、自分がセレブってところを見せないわよね

え。賢いのねえ。」

「あれ？ そのサーシャさんは今日は男装じゃなかったのかしら。白いドレス着てらっしやるわよ。」

「あれは、お母様のお望みだそうよ。ダンスが始まるまでにお着替えになるって聞いたわ。」

ほら、ご覧なさいよ。お母様がサーシャをお客様に紹介するときの、本当にうれしそうなお顔。」

「今夜のパーティーは、まるでサーシャさんの社交界デビューが目的みたいですね。」

「あっちの人だからりはなんでしょう？ 校長先生にご挨拶かしら。」

「それは口実かしら。お目当ては、クリス先生ですわよ。きつとそうよ。」

「先生のロングドレスも素敵。キラキラしてる。」

「私は、あなたのドレスの方が素敵だと思うけどね・・・。」

「あら、ありがとう。」

でも、私は、あなたのドレスの方が素敵だと思うわ。」

「ありがとう。ハハハ」

「やっぱり、美人は得ねえ。注目されて。」

でも、あの先生、美人でスタイルも良いけど、性格は残念系じゃないかしら。」

「そうよねえ。負けず嫌いで、オテンバだからね。チアキちゃんと剣道の稽古するときなんか、本性が出るって言うか、スゴイらしいよ。」

「もしかして、先生も海賊の娘だったりして。」

「まさか、それはないでしょう。ハハハ・・・。」

「でも、誰にも媚びたりしないところは、私、好きだなあ。」

「そうそう、それにお話してみると、本当はやさしい方でいらっしやるのよね。」

「ところで、今夜、茉莉香さんと踊るのはどなたなの。」

「今夜の分は、ダンス部の方で決めてるよ。希望者殺到だから。」

「でも、この後、何回もパーティをやるので、希望者全員が必ず踊れるって、ダンス部の部長が言ってたわ。」

「すごいね。さすが茉莉香さま。」

「ハハハ・・・。」

「ハイハイ、皆さん。ご準備はよろしいですか。そろそろ始まりますよ。」

ダンス部員の指示で、生徒達は二階の控え室に集合し、スタート順に並び始め、衣装や髪をチェックしたりと、それぞれがダンスパーティの入場行進の準備をはじめた。

この日ばかりは、いつもはミニスカの生徒達も白いロングドレスである。

もつとも、男性役の生徒達は、残念ながら、黒の燕尾服だが・・・。

「失礼します。」

そう言つて、セレニティ王宮の正装のドレスに身をつけたグリユーエルが現れると、ペアツとその場に光が差したようだった。

「本日は、わたくしの願いをおきき頂いて、パーティーへの参加をお認め頂いたこと、御礼を申し上げます。」

「いいのよ。お礼なんか。私たちだつて、グリユーエルが来てくれて、とてもうれしいわよ。」

そこへ茉莉香がやつてきた。

「やあ、みんなー。」

「茉莉香。遅いわよ、今夜の主役なのに。」

「いやあ〜〜、お仕事、お仕事。ごめんね。今、ようやく帰つてきたところ。」

「わあ〜〜茉莉香！」

なに、その衣装。本物の海賊服でそのまま来たの？」

茉莉香の衣装を見た生徒達から歓声が上がった。

「違うわよ。ダンス部と手芸部の子達が、どうしても、これを着ろつていうから・・・。」  
茉莉香の衣装は、どくろマークこそ付いていないが、古代の船乗り風の黒の帽子に、シルクが黒く輝く、礼装の軍服のような形の上着に、大きな金ボタン、肩章に金モール、胸

に七色にキラキラする勲章のようなものでぶら下げた、本物の海賊服よりも派手で、海賊らしいコスプレ衣装だった。もちろん下は、深紅に輝くシルクのミニスカート。

「茉莉香の衣装は、手芸部のマミが仕切っているんですよ。」

「でも綺麗なコスプレ衣装ね。マミのヤツ、腕が上がったね。」

「みなさま、本日はお忙しいところ、私たち白鳳女学院高等部のダンス部が主催いたします卒業記念ダンス発表会において頂き、・・・」

ダンス部の部長カトリヌ・クレソンが、形通りの開会の挨拶を述べると、校長が父兄や招待客に日頃の支援に対する感謝の言葉を述べた。

「それでは、生徒の入場でございます。」

ダンス部の司会者の言葉を合図に、大広間の角に陣取った指揮者がタクトを振り、楽団が入場行進曲をゆっくりと優雅に演奏し始めた。

「この曲、知っていますわ。ヒット曲のアレンジですね。大好きです。」

（注：アニメ版の最終回エンディングテーマ曲「未来航路」のメロディが流れる）

「そうだよね。この曲、今の私たちの気持ちにぴったりだね」

「さあ、グリユーエル行こう。」

「はい。」

加藤茉莉香とグリユーエルが、入場行進の先頭だった。茉莉香はグリユーエルの右側



に立って並び、手を取り合った二人は足をそろえて優雅に進みはじめた。

広間に入ってきた加藤茉莉香とグリューエルの二人の姿をみつけると大広間の父兄達から、歓声と拍手が寄せられた。

音楽に合わせ、その後から次々と二人づつ手を取り合った生徒達が続く。列は父母の前を通って、時計回りに大広間を一周する。父母に娘の晴れ姿を見せるため、女性役が左側に並んで行進しているのだ。

さらに列が長く続くので、一周した先頭から順に内側に回り込みながら、行進は進んでいく。

全員の入場が終わると、楽団の曲がワルツに変わった。

そして、先頭の茉莉香とグリューエルの二人が大広間のセンターに立った。

センターは光のステージである。大広間のセンターの頭上には、アンドロメダ銀河を模した巨大なシャンデリアが輝いており、センターの床には、タウ星の輝きをイメージした七色のガラスのタイルがはめ込まれ、シャンデリアの光を反射して輝いていた。

その光のステージの上で、二人は、互いに一礼する。そして、茉莉香が右手をグリューエルに差し出した。

「お手をどうぞ。」

グリューエルも白い手袋をした左手を茉莉香に預ける。

手を取り合つて近づいた二人は、向き合つて腕を組み、ステップを踏みだし、ワルツを踊り始める。

二人は、たがいに微笑みを交わしながら、ワルツのリズムに乗つて、軽やかに体を回転させ、大広間のセンターで踊つていく。

茉莉香もなかなかダンスが上手いが、やはりグリューエルの立ち振る舞いは、美しい。彼女の踊つた後の空間は、妖精が飛び去つた後に光の粉が広がるように、銀河の星々の光の粒が広がっていくように、輝いていた。

まるで、おとぎ話の王子様とお姫様のような、茉莉香とグリューエルのダンスに、周りの生徒達もしばらく見とれていた。

やがて、生徒達は、同じように、それぞれが一礼して、茉莉香とグリューエルのステップに合せて、ワルツを踊り始めた。

グリューエルにリードされて踊りはじめたためか、全員が、華やかな王侯貴族の舞踏会に参加しているような気分浸っていた。ワルツの調べに乗つて、大広間全体に、踊りの輪が広がつていった。

楽しい時間がいつまでも続くように思われたが、やがて、曲が変わつた。

茉莉香の場合は、希望者が殺到しているため、曲ごとに、ダンス部から指定された新しいパートナーと踊ることになっている。

二人は、向き合い、一礼して踊りはじめた。

「素敵なドレスですねえ」

「いえいえ、茉莉香さまの海賊服も素敵です。」

「いや、これは海賊服ではなく、ダンス部指定のコスプレ衣装で……ナハハハ。」

茉莉香の相手となった生徒は、本当にうれしそうに笑顔を振りまいて、踊っている。

そういう二人を見ているだけで、周りの生徒達も楽しくなる。

だから、みんな、茉莉香と踊りたがるのだろう。

他の生徒達も踊り始めた。

ヨット部の面々は、今夜は男役である。茉莉香の他、三年生であるサーシャも、チアキも、ウルスラも、リレイも、二年生であるヤヨイもアイもナタリアも、燕尾服で踊っている。一年生まで、男役で出演している。

皆、少し緊張がほぐれたせいか、まわりの様子が見えるようになってきた。

「あれ、ジェニー先輩がいらっしやるわよ。」

わざわざ帰国して、パーティーに参加されたのかしら。」

「あなた、何か事情を聞いていらっしやる？」

さらに、グリユンヒルデも、ダンス部のリクエストに応え、セレニティ防衛軍のきらびやかな礼服姿で、男役を務めている。

今夜のグリウンヒルデも、茉莉香同様に希望者が多いため、ダンス部に指定された手と踊っている。

「踊って頂いて私は本当にうれしいのですが、ご迷惑をおかけしたのではありませんか。グリウンヒルデ様も、お姉様のように、ドレスを着て踊りたかったのではありませんか。」

「お気遣いなく。姉は姉、私は私です。」

それからヒルデとお呼びください。

先輩こそ、ダンス、お上手ですね。」

「いえ、いえ。ヒルデ様にお褒め頂くなんて、本当に光栄です。」

二曲目に入った頃から、周りの父母、兄弟、姉妹や招待客達も、カップルで踊り始めた。

生徒達は、クリス先生がプレスレット型の「舞踏会の3D手帳」の立体映像を見ながら相手を探し、指定された男性と踊り始めたのを見逃さなかった。

「先生のお相手は、どんな人だろうかねえ。」

「ひよつとして、お見合いかもね。」

「私もああいう男性と踊ってみたいなあ。紹介してくれないかしら。」

華やかに「舞踏会」は進んでいった。

チアキは、自分も踊りながら大広間で踊る生徒達を見渡していた。

『あの子のドレスが、一番素敵ねえ。私も、ああいうのを着てみたかったなあ。』

チアキは、さらに踊りながら、大広間の周囲に集まっている人たちも観察した。

華やかなシャンデリアの光の下で、着飾った大勢の人々が、踊る生徒達を眺めていた。その中に、一人の男性が壁に寄りかかって、少し離れて立っているのが目に入った。

『なに、壁のシミ？たよりない男（やつ）ねえ。』

いかにもセレブっぽくて、背も高く、美形のくせに。』

そう思つて見ていると、当の男性がチアキの方を向き、二人の目が合った。

自分が悪口を云つたのを聞かれた気がして、あわてて、チアキは目をそらした。

何曲も続いた音楽がとまり、司会が休憩時間であることを告げた。

参加者は、ホールで立ち話を続けたり、お茶や軽食のため隣の大食堂に向かおうとしていた。大食堂も、頭上に、大小マゼラン銀河を模した二つのシャンデリアが輝く、豪華な部屋だった。

チアキは、大食堂にも向かおうとするところを、ジェニー・ドリトルに呼び止められた。

「チアキちゃん、久しぶり。今日はヨット部は男役ね。ごくろうさま。」

ところで、頼みがあるんだけど。」

「お久しぶりです、先輩。なんででしょうか、ご用は。」

「チヨット、こちらの部屋へ来てくれないかなあ。案内するから、付いてきて。」

ジェニーは、チアキを連れて、屋敷の廊下を右に左に曲がって、階段を上がつて下がつて、どンドン奥へ歩いていった。本当に迷路のような大きな屋敷である。

そしてジェニーとチアキは、とある小部屋に入った。その部屋には、衣装掛けに、美しいドレスがずらりと並んでいた。

そのなかで、ひとときを輝く、白いドレスに、キアキの目が吸い寄せられた。

『こんなドレス、着てみたいなあ。』

チアキは、自分がこのドレスを着て、舞踏会で踊っている姿を思い浮かべた。

一方、ジェニーは、並んだドレスを指さして言った。

「見てよ。こんなに沢山のドレス。私のために親が用意したのよ。私の機嫌を取って、今夜のパーティーで絶対にお見合いさせるつもりなの。」

でも、もうイヤ。VIPにもご挨拶だけは済ましたから、あとは、さつさと抜け出すわ。」

「いいんですか?」

「いいのよ。そこで、チアキちゃん、お願い。私の代わりに踊って。」

「本当に、いいんですか。」

「いいのよ。どうせ向こうもヤツピーのお坊ちやまだから、テキトーなヤツよ。パーティーが済んだら、誰と踊ったか、顔も名前も覚えてないようなヤツよ。」

「ね、お願い。それで、ドレスなんだけど……えくくつと」

ジェニーは、ズラリと並んだドレスを見て、

「そうだ。チアキちゃんには、このドレスがぴったりだと思っわ。これどう？」

靴とか手袋、アクセサリーもそこにあるから、好きなのを使ってちょうだい。」

そういつて、ジェニーが示したドレスは、先ほどチアキが見とれていた白いドレスだった。このドレスを着られると思うと、チアキは断れず、着替え始めた。

「思った通り、ドレスはこれがぴったりだわ。」

ジェニーは、着替えたチアキの姿を、上から下まで見て言った。

「うくくくん、チアキちゃん、正装すると一段と可愛いわねえ。シンデレラ姫よ。」

「そんなに誉めて頂くと……。」チアキは顔を赤らめた。

「えーつと、私は、そろそろ、リンが車で迎えに来る頃だから……。」

と言いながら、ジェニーはドアを開けて、部屋の外を見た。

「あ、ちょうど良いところに来たわ。」

ねえ、エド、このコを大広間へ案内してあげてよ。」

それで、私もう抜け出すから。」

「また脱走ですかあ。」と、廊下の方から男性の声が聞こえた。

チアキが廊下へ姿を現すと、ジエーンが言った。

「こちらには、エドワード・ドリトルさん。私の親戚、若いけど、ヒュー&ドリトル星間運輸の取締役よ。」

こちらはチアキ・クリハラさん。私が部長をしていたヨット部の三年生よ。

この子に代役を頼んだの。」

「チアキ・クリハラです。」

とチアキはまず挨拶してから顔を上げたが、男性の顔を見て、驚いて固まってしまった。

なんと、先ほど大広間で視線の合った「壁のシミ」男が、そこに立っていた。

「初めまして。エドワード・ドリトルです。エドとお呼びください。」

ところで、どうかされましたか？なにかご心配のことでも？」

エドワードは、キョトンとした表情で、チアキを見た。

『どうやら、先ほどのことは気づいていないらしい。』

と思い、チアキは少しホツとして、表情をゆるめた。

そうこうしているうちに、ジエーンは行ってしまい、二人が残された。

「いえ。初めまして。チアキとお呼びください。」



「では、チアキさん。大広間へ参りましょうか。」

エドワードは、チアキを連れて屋敷の廊下を右に、左に曲がって、元の大広間へ向かった。

いや、その筈だったが、いくら歩いても二人は元の大広間へたどり着かなかった。

「あのー、さつきから、同じ所を回っているような気がするんですけど。」

見かねたチアキが、それでもかなり遠慮がちに言った。

「やっぱりそうですかねえ。なんか変だと思っただけなんですけど。」

エドワードは、チアキの方を見て、苦笑した。

『なんと頼りないヤツ!』

と口には出さないが、チアキは腹が立った。しかし静かに淑女らしく言った。

「こちらの方に行ってみては、いかがでしょうか。」

チアキは、自分の思う方向を示して、二人はその方向へ歩いた。

しかし、またまた、行けども行けども同じ廊下が続いて、いつまで歩いても元の大広間へたどり着かないような気がした。

チアキは、自分が大広間に案内して、その上でエドワードにひとこと、文句を言っただけで済んだのだが、すっかり目論見が外れてしまった。

「エドワードさん、ごめんなさい。私も迷ってしまったようですね。」

「ハハハ。そもそも私が迷ったのが悪いんですから。チアキさんのせいではありませんよ。」

そう言つてエドワードは微笑んだ。

『このひと、笑顔が素敵なんだなあ。ちよつと頼りないけど。』

チアキは、エドワードの顔をじつと見てそう思った。

この時、チアキは慣れないハイヒールを履き、急いで歩いて来たため、足が痛くなつてきた。思わず顔をしかめて歩いていると、それにエドワードが気がついた。

「チアキさん、大丈夫ですか。確かベランダには、ベンチがあつた筈です。少し休みましょう。」

二人はベランダに出て、ベンチに並んで座つた。空には、満点の星が輝いていた。

エドワードは星空を見上げて言つた。

「ああ、この星の星空はなかなか綺麗ですね。小惑星帯が带状に白く輝いて、明るいんですね。」

いいなあ、明るい星空は。

帝都はねえ、核恒星系だから星の密度は高いのですが、母星が赤色巨星であることと大気の影響もあつて、星空はここよりも暗いんです。

そうだ、チアキさん。この星の星座にはどんな名前が付いているんですか。

「ご存知でしたら教えてください。」

「私もこの星の生まれじやないから、よく知らないんですけど、

あの中央の明るい五つ星が白羊座、あつちが子羊座、その横が母羊座。星座の動物たちにも家族がちやんとあるんですね。

それを囲む暗黒星雲にも名前があつて、右が犬座、左が羊飼座。開拓惑星だから、星座も牧場なんですね。馬や牛の星座もあります。・・・」

「キアキさん、星座の話が大好きなんですね。私も、小さい頃から、星や星座の話が大好きなんですよ。」

二人とも小さい頃から星の話が大好きと分かつて、チアキは少しうれしかった。と同時に、

『この人も、小さい頃から、ひとりぼっちで寂しかったのかも知れない。』  
とも思った。

チアキ自身は、生まれたときから宇宙海賊船で暮らし、しかも父子家庭であり、何かとひとり度過ごす時が多かったからだ。そんなチアキを見て、副長のノーラや船員達が星の話をしてくれた。星座の話、星の神話、宇宙旅行の冒険談や昔話・・・。

こうして、チアキは宇宙海賊船の窓から星を眺めて暮らし、星座や星座の物語について関心を持つようになった。

船が可住惑星の中継ステーションに着くと、父に星座や星の神話などの本を買ってくださるようにならされた。

宇宙時代でも、星座はその星の地上で暮らす人々の目線で名付けられるので、星座と星の物語は、星々で違うからだ。

チアキは、

『この人が寂しさを抱えて育ったのは、どうしてなのかなあ』

と、エドワードの生い立ちについて考え始めた。

その時、突然、ベランダのはるか向こうでドアが開き、明るい部屋の中が見えた。

開いたドアの向こうに大広間が見えた。

そして部屋から漏れた光であたりが照らされ、ベランダは大広間の前まで続いており、ベランダを歩いて向こうへ行けば、大広間に戻れることがわかった。

と同時に、チアキはたいへんなことに気がついた。

ベランダのベンチは、カップルシートだった。

あちこちのベンチに着飾った男女が座って楽しそうに話していた。そもそも、ドアが開いたのも、カップルが外に出てきたためだった。

そして自分達もベンチに座る一組のカップルとして見られている。

それに気がつくのと、チアキは恥ずかしくて、顔から火が吹き出そうだった。

『どうしよう。二人でいるところを見られたら。』

来週の月曜日には、教室や部室で、

『チアキちゃん、いつもと顔色が違うけど、何か悩みがあるんじゃないの。

話を聞いてあげるからさあ。・・・ダンスパーティの彼氏のことかな・・・。』

などと親切そうに言いながら、近づいてくるヤツラの顔、具体的にはリリーの顔が浮かんできた。

いや、それ以前に、今夜のTV電話攻撃が恐ろしい。

その時、エドワードが言った。

「チアキさん、今夜はすみませんでした。

廊下で迷ったときから、今にもチアキさんが怒って一人で行ってしまうんじゃないかって思っていました。

これ以上、ご迷惑をおかけするのも、申し訳ないです。さあ大広間へ戻りましょう。

自分でも分かっているんです。頼りないって思われているのが・・・。」

その少し寂しそうな声を聞いていると、はっとして、いつもの世話焼きで、意地っ張りなチアキが戻ってきた。

そして、こう思った

『そうね、幾つになっても男の子は男の子。』

男の子に自信をつけさせる方法は、ただひとつよ。ジユブナイルのお約束どおりだね。

「私に任せなさい。」

それを自分の役割と思い込むと、チアキは、ちよつと上から目線でエドワードに言った。

「さあ、エド！私を舞踏会に連れて行つて。

一緒に踊りましょう。」

そして、チアキは自分からエドワードと腕を組んで、彼を引っ張るように勢いよくベランダを歩き出した

大広間の前まで一気に歩くと、ドアの前で立ち止まって、彼に言った。

「あなた、ダンスは踊れるんでしょう？」

「はあ、小さい頃から習ってますから。」

「じゃあ大丈夫。」

あなた、見栄えは良いんだから、あとは自信のあるフリをするだけよ。

いいわね、『王子様の笑顔』のまま表情を変えず、周りを気にせずに落ち着いたフリをする。そうして、私をリードして大広間に入りなさい。さあ。」

「はい。」

でも、それで良いんでしょうか。」

「それで良いのよ。」

あなた、もともとカッコイイんだから。

そうして堂々と振る舞っていけば、向こうの方から勝手に貴方のことを、力と自信に溢れた男と思いい込んでくれるわよ。

相手がそう思えば、それがあなたの実力。」

チアキは、ひとつ深呼吸して、力強く言った。

「さあ、舞踏会の時間よ！」

エドワードは、チアキとともに大広間に入った。

「さあ、姫様、お手をどうぞ。」

チアキはエドワードにそう言われて、気持ちがちよつとトキメいた。

『私も素敵な彼に伴われて、一緒に舞踏会に行くのが夢だったのよね。』

二人は、ワルツを踊り出した。

「エド、良い調子よ。ほんと、素敵ね。」

エドワードは周りの人々を気にせず、ずっとチアキを見て微笑んでいる。

チアキも、ジューナイルのお約束通りに、彼を見て微笑んでいる。

「あなた、ほんとにダンスが上手ね。」

これも、ジュブナイルのお約束通りである。

こうして、チアキは彼をほめ続けていた。

踊ってる女の子たちは、見知らぬ美男美女が入ってきたかと眺めていたが、しばらくすると小声で話し始めた。

「あのコ、誰？」

「もしかして、チアキちゃんに似てない？」

「ホントに、キアキちゃんかな？」

「チアキちゃんなら、白いドレスじゃなく黒い燕尾服のはずよ。」

「でも、チアキちゃんじゃないのかなあ……？」

このささやきを小耳に挟んで、チアキは思わず言ってしまった。

『「ちゃん」じゃない！』

この声を聞いて、生徒達が一斉に気づいた。

「やつぱり、チアキちゃんだ！」

「チアキちゃんに間違いない。間違えちゃったよ。」

チアキは『しまった』と思ったが、もう遅い。チアキの言葉を聞いたヨット部のメンバーが、踊りながらチアキに近づいてきた。

『このままでは、つかまってしまう。でも、まだエドを一人前にする仕事が終わっていないな』



いから、すぐに逃げられないし……。』

仕方なく、ヨット部のメンバーと視線を合わせないために、エドワードを見つめた。そして、ヨット部のメンバーから逃れるために、こう言った。

「エド、私をセンターに連れて行って。シャンデリアの銀河の中心に。」

「はい、チアキさん。」

エドワードは、満面に笑みをたたえて踊りながら、大広間の真ん中の方へチアキをリードしていった。

大広間のセンターは、ダンス全体をリードするため、ダンス部の部長が踊るのが慣例である。今夜も、始めこそグリユーエルに敬意を表して譲ったが、その後は部長カトリーヌ・クレソンのペアが踊っていた。

そこへ、エドワードが踊りながら近づき、部長のカトリーヌに笑顔で会釈した。

カトリーヌは、その笑顔にポツと顔を赤くして、思わずセンターを譲ってしまった。

しかし、これからエドワードとチアキがセンターで踊ろうとしたその時、曲が終わってしまった。

どうやらこれが最後の曲だったらしく、広間のあちこちから声がした。

「アンコール」

「あと一曲」

楽団長がセンターに立つエドワードを見た。ダンスの進行を指図してもらうためだ。「クリスタル・ワルツをお願いします。」

エドワードは迷わず楽団長に言った。楽団長は笑顔で答え、楽団の方に向き直った。クリスタル・ワルツは、この時代のダンス音楽としては一番の人気曲だった。

いつの時代も政治・経済の中心となる都市が、文化の中心になる。そして、その華やかな中心都市の雰囲気を書し取った音楽が生まれる。

クリスタル・ワルツは、銀河帝国の帝都クリスタル・スターが繁栄する時代に、生まれるべくして生まれてきた名曲だった。

そして、この曲は、舞踏会の最後を締めくくる定番の曲でもある。

華麗なクリスタル・ワルツの曲が流れてきた。

「さあ、チアキさん、お手をどうぞ。」

エドワードとチアキの二人は、見つめ合ったまま、ワルツのリズムに乗って、回転しながら踊っていった。

それに合わせて、皆が踊り出し、ワルツの輪が広がっていく。

「エド、すごいじゃない。あなたがセンターのリーダーよ。大成功ね。」

それに、あなたの笑顔って素敵ね。ホントよ。」

チアキは、ジュブナイルのお約束通りに、彼をほめ続けていた。

その時、チアキの耳にまたリリイ達の声が聞こえてきた。

「やっぱり、チアキちゃん、ノリノリじゃない。」

「ノリノリだよねえ。」

それを聞いてチアキは、

『ノリノリじゃない!』

と、言い返したかったが、ぐっと我慢した。

「どうしたんですか、チアキさん?」

「いえ、なにも。ホホホ・・・」

舞踏会の夜はふけていった。

ダンスパーティーの後、チアキに対する白鳳女学院の女子高生達の反応は、彼女にとって全く予想外だった。

そもそも、チアキとエドワードをお似合いのカップルだと思っただけで生徒は全く無かった。そのことは、チアキもそう思っていないのだから、別に『問題』ではないのだが・・・。

問題なのは、大多数の生徒達は、

『ジェニー先輩のワガママに振り回されて困っていたチアキを見かねて、エドワード・ドリトル様がダンスを踊ってあげた』

と理解していたことだった。

例えば、チアキは、ダンス部長カトリヌ・クレソンから、次のように言われた。

「ジェニー先輩が、そのうち脱走するだろうとダンス部も予想していたのよ。」

だから脱走を確認したとき、直ちにジェニー先輩と踊る予定のお客様の相手をダンス部員がお勤めすることができたの。

なせなら、そういう代役をお勤めしたことがご縁で、玉の輿に乗った先輩がいたというのが、ダンス部の伝説でね。

みんな、待ち構えてたわけ。フフフ。

それにしても、チアキちゃん、よかったねえ。

『壁の花』で終わらず、エドワード様に踊って頂いて……」

『アイツ、ほんとムカつく。』

ナニが壁の花よ。

踊ってやったのは、ワタシの方なのに。』

チアキは、ダンス部の部長カトリヌだけでなく、そしてなぜか、エドワードに対しても怒っていた。

ダンスパーティーから数日後。

「イヤッホー。風が気持ちいいねえ。飛ばすよーっ。」

クーリエは、ミーサから借りたピンクのオープンカー型コンピューター車のアクセルをめいっぱい踏んだ。

車はぐんぐん加速してゆく。

クーリエと百目の二人は、茉莉香の様子を偵察するため、白鳳女学院に向かっていて。高速道路には他の車もないため、ピンクのオープンカーは、制限速度を遙かに超えて走っていた。

「やめてくれ、傷つけたら俺の給料が……。」

「百目、ケチなこと言っていないで、アンタも、この風を楽しみなさいよ。」

ああ、気分爽快。たまには地上もいいわねえ。」

外回りの格好をしたクーリエは、金髪を風になびかせて言った。

「そういえば、クーリエ、さつきから警告信号が鳴ってるぞ。減速、停車しろって。」

「おかしいわね。コンピューターのコントロール・センサーのコンピューターに弁天丸からアクセスして、この車は制限速度なしの緊急車だって教えておいてあげただけど。」

「おまえ、警察のコンピューターにハッキングしたのか。」

「そういう言い方、しないでよ。」

「どういいう言い方しても同じだよ。早く減速しろよ。」

「どうせ、そのうちに減速するわよ。もうすぐ、インターチェンジを降りて、白凰女学院へ向かうから。」

インターチェンジを降りた途端、車内の二人は激しい衝撃を感じた。

車が、急停車したのだ。

「ああ、事故っちゃった。ああ、俺の給料が……。」

百目は目をつぶって、天を仰いだ。

「百目、違うわよ。周りを見なさいよ。」

周りから数人の迷彩服を来た者が音もなく近づき、二人に銃口を突きつけた。

その中の隊長風の男が言った。

「このピンクのスポーツカーが、消防自動車ですってかあ？」

お嬢、やってくれるじゃねえか。でも、お前が運転してなかつたら、射ってたよ。

オイラ、美人さんは大切にするんだ。感謝して欲しいね。」

「さあ、チョット来い、車を降りろ。」

いかにもガラの悪そうな連中が、軍用の高性能ビームガンを百目の頭に突きつけた。

「あの一、皆様方は警察の方ではないんでしょねえ。まさか、強盗さんとか……。」

百目が、遠慮がちに言った。

「ハハハ。もしそうならお前さんの命は、今頃もう無いゾー。．．．」

その時、そばにいたガラの悪い兵隊風の男が通信を受けた。

「ボス、セレニティのキャサリンから連絡です。」

そいつらは弁天丸のクルードそうです。」

「ほう、キャプテン茉莉香の手下か。」

オイラ、美人さんの言うことは信じるんだ。じゃ、問題は無いな。」

迷彩服の男達は、銃を下げた。そして、離れ際に言った。

「言つとくが、この車は、こつちの用が済むまで動かないぜ。コミュニターの管理者権限で強制停車中だ。」

あと、電子機器も動かすな。レーダー照射を感知されると無警告で狙撃の的になるぞ。」

今から30分くらいの間は、おとなしくしてろ．．．」

本当かどうかは分からないが、狙撃手まで配置して警戒していると通告されたため、二人はその場で停車せざるを得なかった。

十数分後、数台の車が反対車線を通って、白凰女学園のある方向から新奥浜空港の方に向かつて走ってきた。

こんな大げさな警備をさせるVIPとは誰なのか。百目は、車に乗っている人物を見

極めるため、軍用光学補正眼鏡をつけた。

「こいつは、照準用レーザーじゃないからな。これをつけると車の中の人物まで、自分の目ではつきり見える。やっぱり最後は、生身の体を使うのが、一番確実さ。」

その結果、まず最初の車には、ヨット部のメンバーが車に乗っている姿を見つけ、さらにその次の黒塗りの車にグリューエルとグリユンヒルデが乗っていることを確認した。

警備対象はこの王女たちかと思った瞬間、次の黒い車に乗る茉莉香ともう一人の女が目に入った。

「ああ、クオーツ・クリスティア！」

あの女海賊が船長やヨット部の部員達と一緒にいるぞ！」

「どうして？ まさか」

「あいつも、海賊教師になってるの？」

2-3 海明星 中継ステーション

そのころ、海明星の衛星軌道にある中継ステーションでは、二組の男女が広場のベンチに並んで座っていた。



「本当に久しぶりだねえ。」

ジョージ・ステープルが、もう一人の紳士に懐かしそうな笑顔を向けた。

「済まないねえ。わざわざ出国手続きをして、出国エリアまで来てもらって。

でも、私たちが入国拒否されるとは予想外の厳しさだったねえ。せつかく定期便に乗って、目立たないように静かに来たのに。」

「こんなことになるとは、私も予想外だよ。」

「まあ、何はともあれ、会えてよかったわ。ミーシャ」

「私もうれしい。もう会えないかと諦めていたのに。」

姉さん。」

そこで、もう一人の紳士が言った。

「ところで、ああ、本当に済まないけど、私たちのせいで、この会話は、監視され録画録音されているから、そのつもりで話してくれ。」

それから、ここに居られるのも、あと一時間くらいかな。

次に出発するオリオン星系方面行きの定期便に乗って、たう星系をすぐに出ると当局に言われているからね。」

「それでは、まず私から、これを渡しておこう。」

君たち二人の宇宙大学の卒業証書と卒業式用の角帽とマントだよ。

それに、卒業パーティーで友達みんなから君たちへのメッセージを録画した立体映像記憶チップ。これを君たちに渡してくれて、私たちに託されたんだよ。

卒業式の一週間前のあの日以来30年、やっと再会できた。

そして、やっと君たちに渡せるよ。

チップは、当時のままだから旧式だけど、何とか再生できるだろう。あとで見てくれ。」

ジョージ・ステープルが、それらの品物をもう一人の紳士に渡した。

「私からは、近況報告。

この間ねえ、卒業記念というにはチョット早いけど、特別にうちの家で、サーシャの通う白鳳女学院高等部のダンスパーティーがあつたの。

その時の映像をお見せするわ。」

ミーシャ・ステープル夫人の手の上で、ダンスパーティーの立体映像が再生された。

まず最初に、白く、それでいて縁のレースが虹のように輝くドレスを着たサーシャの姿が、大きく映し出された。

皆がその美しさを誉めている声が聞こえる。

天使の輪も輝く美しい金髪を揺らし、碧眼の瞳を輝かせて、微笑しているサーシャの立体映像が、全身を回転させながら映し出された。

次に、ステープル邸の大広間で、ステープル親子三人が並んで次々と大勢の来客に挨拶をしている映像が写し出された。

遠景からでもひとときわ美貌の目立つサーシャが、ミーシャから紹介された来客の男性達に作法通りの正式な挨拶をして、笑顔振りまいている姿が映し出された。

それを見守るミーシャ夫人の笑顔も映し出された。

まるでサーシャの社交界デビューのような華やかなパーティーの雰囲気伝わってくる。

三番目は、一転して燕尾服を着たサーシャの立体映像が大きく映し出された。

「恥ずかしいから、撮らないで」と言つて、少しすねた表情をしている。

続いて、ダンスパーティーの映像。茉莉香とグリユーエルを先頭に大広間に生徒達が入場していく映像が続く。そして、輝く銀河のシャンデリアの下で、皆がワルツを踊つてゆく。サーシャのペアが踊る姿も映し出された。

「ハハハ、サーシャはダンスの男役じゃないか。それで燕尾服を着ていたのか、ハハハ……」

もう一人の紳士が吹き出した。目に涙を溜めて笑っている……。

最後に、パーティー終了後に、宇宙ヨット部のみんなで記念写真を撮ろうと呼びかけて、集まっている映像が映し出された。

クリス先生、グリユール姫、グリユンヒルデ姫を中心に、サーシャ、茉莉香、チアキ達が並んでいる。来賓の男性達も並んで、一緒に写真を撮ろうとしている。

しかし女の子達は、みな、パーティの興奮が収まらず、おしゃべりが止まらない。しかも、ウルスラが、

「小話その1。」

『明日からステイプル家の屋敷の周りに塀を作る工事が始まるんだってね。』

『へえー。』

小話その2・・・」

などと、おかしい小話を連発して笑わせ、なかなか皆のポーズが決まらない。

「たのしそうねえ。」

それに、サーシャは、本当に美しくなったねえ。

これでステイプル家の娘として大人の仲間入りね。お姫様達にもお近づきになれたようだし。あの子の夢もかなったようね。

おめでとう。

それにしてもパーティの出席者の華やかなこと、まるで銀河帝国の離宮みたいね。」

「本当に、こんなパーティが自宅で開けるなんて、ステイプル家にとっても名誉なことです。」

「ミーシャも、本当に幸せそうで、私もうれしいわ。」

「それもこれも、みんな姉さんのおかげです。私がこんな幸せな日を迎えられるなんて。」

二人の女性は並んで座って、目立たないように手を握り合っていた。

「この映像も持つて行ってください。」

「いいえ。これで十分。サーシャや貴方に迷惑がかかるといけないから。」

「では、そろそろ時間だ。」

もう一人の紳士が、立ち上がった。そしてジョージ・ステープルと握手をした。

「君たちの変わらない友情に本当に感謝するよ。会えてよかったよ。」

「私も会えてよかった。」

二人の女性は立ち上がって、何も言わずに手を握って、そして離れた。

そして、二組の男女は中継ステーションの人混みの中に分かれて、消えていった。

## 第三章 練習航海1 海賊教師の正体

3—1 弁天丸ブリッジ

ダンスパーティーから一週間後に中間試験が行われた。

試験の翌日、弁天丸のブリッジにいるミーサは、茉莉香との定時連絡をした。

「それで中間試験が済んだので、いよいよ明日から練習航海に行くの?」

ミーサが言った。

「そうなのよ。お仕事の予定、いまのところ何とかなるわよね。

私、部長だからオデットⅡ世号でも船長でしょ。だから、練習航海には必ず行かないとねえ。だから、ミーサ、お願いね・・・。」

茉莉香が言った。

「確かに、いまのところ、どうしても船長がいないと出来ない仕事はないから、いいけど。

それで、練習航海はどこに行くの?」

ちやんとフライトプランを弁天丸に送ってね。まさか、2年前みたいに、変なヤツラの船に襲われたりはしないだろうけどね。

「こちらだって船長の安全確保も大事なんですからね。」

「フライトプランは、後で送るよ。ざつというと、・・・」

まず、海明星の軌道を離脱して、外惑星の縞白星（しまのしろぼし）へ向かいます。その間、一年生に船の操作の実習や、太陽帆修理のための船外活動の訓練をします。

それから、縞白星の軌道上のリング地帯でも、船外調査活動の実習の予定かな。

そのあと、業者の人の船が運んでくる超光速ブースターを装備してもらい、核恒星系にある宇宙大学へ見学に行きます。これが航海の目的地です。

それから、帰りに、帝都クリスタル・スターに寄って、観光して、遊んで、お土産買って、帰ってきます。」

「宇宙大学ですって！茉莉香、宇宙大学に興味があるの。」

「イヤー、進学したいというわけでは無いんだけど、一応見てみたいというか、帝都もこの目で見てみたいというか・・・。」

「それで、ヨット部の高校生だけでそんな遠くまで行くの？」

顧問の先生はついて行くんでしょうね。」

「うん、大丈夫。ついて行ってくれる。」

「まあ、それなら大丈夫かな。他に何か変わったことはない？」

「うん、ないよ。じゃあね。」

茉莉香からの手短な通信が切れた。

「大丈夫？」

顧問の先生って、あいつよ。きつと。

何も聞かないのね。」

クーリエが心配そうに言った。

「大丈夫でしょ。船長が自分で決めたことだし。相談や手助けの必要があるなら、言ってくるでしょう。信じて待ちましょう。」

「しかし、当面たいした仕事はないから、船長の護衛のために、オデットⅡ世号を追跡して帝都方面まで行った方が良いだろう。この界限ならともかく、核恒星系となると緊急事態になってもすぐに行けないからな。」シュニツァーが言った。

「それはそうね。仕事の日程をやりくりして、茉莉香の練習航海にこつそりついて行きましょうか。」

### 3—2 オデットⅡ世号

中間試験後、白凰女学院宇宙ヨット部一行は、練習航海に出発する。

茉莉香は、中継ステーションの専用ドックに一年生を案内して、言った。

「さあ、これが私たちの練習船、オデットⅡ世号よ。」

「わあー。大きい。」



「カッコイイ。」

一年生達の歓声が響いた。

「それにしても、広いな。こんなサイズの有酸素ドックは久しぶりだなあ。」

クリス先生は、懐かしそうにつぶやいた。

「おまけに、このドック内は、無重力かあ。それなら、あれをやってみるか。」

おーい。一年生、ドックの中に入って、私のそばに集まれ！

それから、上級生は先に乗船して、出港準備だ。物資補給のスケジュールもチェックしろ。」

クリスがそう言っつて、先にドックの中に入った。

「先生！ 宇宙服に着替えなくていいんですかあ。」

「制服のままでもかまわない。集まれ！」

さすがに、今年の一年生は宇宙ヨットの経験者が多いというだけあって、無重力空間をさっと飛んで、クリスに近づいてきた。

「よく聞いてくれ。このドックの巨大な無重力空間を利用して、正確な編隊飛行をする訓練を行う。」

このような大きな無重量空間では、何の道具も使わずに自分の力だけで渡り鳥のようにきれいな編隊飛行をするのは、意外と難しいのだ。

スペースコロニーなら幼児のころから遊びとして始めるが、それは船乗りとしても初歩の初歩だ。でも大切な訓練だぞ。

まずは、編隊飛行を一回やってみよう。自分達の思うように飛んでみる。

メリー・ランバート。お前が、中心になって、先に飛べ。」

「はい、先生。」

「では、天井に書いてある、あのBの文字の方向に向かって飛びます。いいですか、行きます。」

一列に並んだ10人の制服姿の一年生が、中央のメリーに続いて、その両側の生徒、さらにその両側の生徒と順に飛んでいき、雁型の編隊をつくっていく。

上手く、編隊飛行が出来た様に見える。

しかし、天井までかなりの距離があるので、次第に飛んでいる方向が違っていき、露わになってくる。体が接近したり、離れていったりする者が出てきた。速度もわずかに違いがあったため、遅れたり、前に出てしまう者もいる。

そうして、編隊の隊列は乱れていく。

なんとかしようとして、何人かが、手足をバタバタし始めた。しかし、水泳のように急に激しく手足を動かしても、飛ぶ軌道や姿勢は急に変わらない。

そうやって皆が焦り始めた頃に、天井に到着した。

後を追って、クリス先生が飛んできた。

「どうだ、意外と難しいだろう。」

宇宙船のように随時、推力の調整が出来ないからな。

最初のジャンプ一回だけで皆が同じ軌道で飛ぶには、みんながお互いの力を知った上で、合わせる気持ちを持つことが必要なのだ。遅い者に合わせることも大切だ。

今度は、手をつないで編隊飛行をやってみよう。

ところで、スペース・デインギーで実際に宇宙を飛んだことのあるものは手をあげて。」

数人が手を上げた

「おお、半分ほどいるなあ。」

デインギーの編隊飛行も同じようなものだろう。思い出せ。

今度は、ジェシカ・ブルボン。お前が中心になって、手をつないで飛んでみる。両端の部員がオデットⅡ世号にぶつからないように注意して、進路を選べ。」

「はい、先生。」

では、皆さん、あちらの地上のAの文字を中心に、皆さんの位置に応じて、左右1メートルずつ目標をずらしてください。

次。しっかり手を握って、腰を落として、三つ数えたら一緒に飛びます。一緒に数え

てください」

「1、2、3、GO！」

「わあー」

今度は手をつないでいるためか、皆が一体となって飛んでいく。

「なかなか飲み込みが早いな。」

では、次は、一年生に、フリーフライト・チェックを教えるか・・・。」

オデットⅡ世号のブリッジでは、2、3年生が忙しく機器の点検をしている。

「茉莉香、一年生が、クリス先生にしごかれてるよ。」

ブリッジのモニターに映った一年生の編隊飛行をみて、リレイがつぶやいた。

「一年生もなかなかやるじゃない。私たちも、負けてられないわよ。上級生ってとこ、見せないとね。」

船長席に座った茉莉香が言った。

「船長、一時間後に業者の人が食料を配達してくれます。これを積み込んだら、出港準備完了です。」

チアキが言った。

「了解しました。でも、私のこと、『船長』って言うてくれるの、チアキちゃんだけだよ。ありがとうね。」

「だから、船長。『ちゃん』じゃない！」

「こちら、白鳳女学院練習船オデットⅡ世号、船長の加藤茉莉香です。中継ステーション聞こえますか。出港許可を申請します。」

「こちら、中継ステーション。キャプテン茉莉香、今日は弁天丸じゃないんですね。」

「ナハハハ、今日はヨット部の部長ですから・・・」

「それでは、オデットⅡ世号、出港を許可します。よい旅になりますように。」

「ありがとうございます。行って参ります。」

「では、オデットⅡ世号、出港します。」

「了解。」

・・・ドックの減圧完了を確認。

ゲート開放。

・・・開放確認。」

「エンジン点火。」

・・・点火確認。

出力安定。」

「微速前進。・・・」

「いま、中継ステーションの管制エリアを抜けました。」

「たう星の第二宇宙速度を、突破しました。」

「では、マストを展開してください。」

「展開確認。計器、オールグリーン。」

「茉莉香。今回は順調に開いたわねえ。」

「そういえば、一年生の時は、ビックリしたよねえ。いきなり、警報が鳴るんだもの。」

「そんなことがあったんですか?」

「リリイは一年生に、自分達が初めて航海した時の出来事を話した。」

「さて、もう大丈夫。ここまでは無事に来たかなあ。やれやれ。いつものことだけど緊

張するね。」

茉莉香は、手で顔を扇いで一息ついた。

そして、表情を正して言った。

「えー、オホン!」

みなさん、いよいよ、白凰女学院宇宙ヨット部の練習航海が始まります。

まず最初に、『ヨット部の歌』を歌いたいと思います。

ウルスラ、お願い。」

「では、皆さん、今回は遠くまで行くので、歌詞の3番4番でいきますよ。

せえーのー」

見送る人に手を振れど 古い世間に未練無し

たう星系に背を向けて 星の海原ひた走る

広い宇宙の 旅行く先に どんな出会いが待つものやら

われら、船乗り、白鳳、ヨット部

まだ見ぬ 人々よ 今、往かん

港離れて幾光年 見慣れた星座今はなし

まだまだ船は道半ば はるか海原漕ぎ出さん

広い宇宙の 旅行く先に どんな世界が待つものやら

われら、船乗り、白鳳、ヨット部

まだ見ぬ 星々よ 今、往かん

われら、船乗り、白鳳、ヨット部

まだ見ぬ 星々よ 今征かん

「えいえいおーー!」

「続きまして、船長として、皆さん、特に一年生に皆さんに、ひとこと申し上げます。

いまから私たちは、同じ船に乗って宇宙を航海します。

同じ船に乗ると言うことは、生死を共にすると言うことです。」

「ええー、生死を共にするだってえ・・・」

「チョット大げさ・・・。」

一年生が小さな声で言った。

「みなさん、大げさでも、なんでもありません。これは、宇宙旅行では本当のことです。では、そういうときは何が一番大切か分かりますか。」

「・・・。」

「それは、信頼です。」

そのためには、船の運航の安全に関わる重要な情報は皆が共有することが必要です。早い話が隠し事は無しってことね。

私はそういう方針で船を運営しますから、皆さんも協力してください。」

「はあーい！」

「それから、一年生は、担当部署の出港の手順をもう一度確認して下さい。」

上級生は、一年生がちゃんと覚えているか確認してください。」

「はあーい！」

「あの一ー。茉莉香先輩。今度の航海で、機会があつたら、サイレント・ウイスパーに乗ってもいいですか。私、操縦マニュアルを読んで、勉強してきました。」

アイ星宮が、遠慮がちに小声で聞いた。

「もちろん、いいよ。でも、アイちゃんはまだ操縦したことがなかったっけ。」



そういえば、いままで、ほとんどサーシャか、チアキちゃんが乗りまわしてたのかなあ。アイちゃん、遠慮しないで、乗ってね。」

「うわー！ありがとうございます。ナタリアも一緒に乗ろうね。」

「部長！ありがとうございます。」

「今、何て言った？ サイレント・ウイスパーだつて？」

いつの間にか、クリス先生がブリッジに来て、皆の後ろに立っていた。

「ヨット部に置いてあるとは聞いていたが、あれは最新型の軍用機で操縦や電子機器の操作もなかなか難しいぞ。」

それを実際に乗り回している女子高生がいるとは驚いたなあ。

てつきり、茉莉香が弁天丸との連絡用に使うだけかと思っていた。」

「ナハハ……。恥ずかしいんですが、私はあんまり乗ってなくて……。」

でも、そんなに難しいんですかあ。

チアキちゃんやサーシャは簡単そうに乗り回してましたけど。」

茉莉香が苦笑いした。

「私は海賊の娘ですから、武器の扱いには慣れてますよ。」

「……ねえ、そろそろ、先生も私たちに、もつといろいろ教えてくださっても、いいんじゃないですか。」

クリスが、何食わぬ顔で関心しているのを見て、少し腹を立てたチアキが、ついに言った。

クリスがニヤリと笑って、何か言いかけたときに、通信機の呼び出し音が鳴った。

「クリス先生。至急の通信です。発信人は、ヒュー&ドリトル星間運輸所属・出張修理船『おれのばあさん21号』船長ミツキー・ハヤマさんです。

どうしますか。」

「チアキ。悪いが、その話はまた後でさせてもらおう。

サーシャ、私の部屋へ通信を回してくれ。」

そう言つて、クリスは、足早にブリッジを後にした。

クリスの姿が見えなくなると、皆が一斉に笑い出した。

「アハハハ……。おれのばあさん号、だつて。変な名前。」

「それに、21号で『ばあさん』は、ないよねえ。70号くらいなら良いけど。」

「私としては、35号を超えると、ばあさん号の仲間に入ると思うんだけど。」

「アハハハ……。」

「あいかわらず、リライは厳しいねえ。17号からみれば、2倍以上だものね。世間じゃ、35号なんて、まだ若手なんだろうけど。」

「それにしても、ミツキー船長つて、21号なのかなあ。55号だつたりして。」

「アハハハ……。それ面白い問題。わたし、おもしろいから、21号に一票いれたい。」

「それをいうなら、クリス先生は、本当は何号かって問題もあるよ。」

「大学卒業したばかりの23号っていうけど、うちの学校の先生紹介のプロフィールは、当てにならないからね。」

「そうそう、校長なんて、もう何年も年齢が変わってないって言うしね。」

「おお怖い。さすが魔女。」

「ハハハ……。」

「だめ。会話が聞こえないわ。ガツチリ暗号化されてる。いろいろ試してみたが、全くだめ。どんな方法で暗号通信しているのかしら。もう、あきれるわ。」

クリス先生の通信を盗聴しようと試みていたチアキが、ぼやいた。

「ねえ、メリー。クリス先生の本当のこと、アンタ知ってるんでしょ。」

チアキは、通信担当で自分の補佐をしているメリー・ランバートに言った。

「私は何も知りません。……。」

彼女は、そういって、黙ってしまった。

チアキはますます腹が立ってきて、遂に言った。

「だいたい、このごろみんな変よ。あの女に良いように手なずけられて。」

あいつの正体知っているの?」

「チアキさんこそ、どうして、そんなにお怒りになっておられるんですか。」

「茉莉香。グリユーエルには、海賊狩りのことは詳しく話してなかったの？」

「まあ、営業上のことだから、詳しくは……。」

「そうかあ。茉莉香、もうみんなに話すからね。一年生は何も知らない訳だし。」

「そうね、同じ船で航海に出た以上、隠し事は無しと言ったばかりだしね。」

「上級生は覚えているでしょうけど、昨年度の学年末試験の前に、ここいらの海賊達が海賊狩りに襲われて、十数隻も船が沈められた事件があったのよ。」

そして、私たち私掠船免状の海賊達は共同して、海賊狩りの船と戦って勝った。

グリユーエルたちも、オデットII世号で応援に来ようとしてくれたね。」

「そうでしたね。私たちが戦場にたどり着く前に、戦いは終わってしまいましたけど。」

「その海賊狩りの船の名前は、『機動戦艦グランドクロス試作α号』といってね、その艦長はクオーツ・クリスティアと名乗っていた。」

つまりクリス先生だったのよ。」

「うそです。クリス先生がそんなことする訳、ありません。」

あんな優しい人がそんな海賊狩りなんて……。」

メリーは泣きだした。

「メリー、貴方や貴方の幼い兄弟姉妹（きょうだい）たちには気の毒だけど、本人に間違

いないわよ。

しかも、あの女は、自分こそが本物の海賊で、私たち私掠船免状の海賊はショーのよ  
うな営業をしているだけで、本物の海賊では無い。

無用のものだから無くなってもいい。

だから私掠船免状の海賊を相手に戦艦の性能テストをするんだとまで、言っていたわ  
よ。」

チアキが言った。

「その話、ほんとうですか。信じられません。」

グリューエルも驚いて、聞き返した。

「本当よ。私もチアキちゃんと一緒だったから、聞いてる。

でもね、海賊狩りの後始末については保険組合を通じて和解交渉が進んでいるので、  
心配いらないわ。」

クリス先生はもう敵ではないわ。」

茉莉香が言った。

「茉莉香、私が言いたいのはそのいうお金のことでなくて、どうしてあんな事をしたヤ  
ツを許せるのかという・・・」

その時、警報サインが鳴った。通信席のサーシャが言った。

「前方にプレドリブ現象確認。船がタッチ・ダウンしてくるようです。

・・・トレスポンドー取れました。

船籍、銀河帝国。船名、ヒュー&ドリトル星間運輸所属・出張修理船・俺のばあさん21号。」

船長の茉莉香が驚いて言った。

「ええ!? 修理船とのランデブーの予定は、明日だったでしょう。

間違えたのかしら。」

「船長、通信が入ってます。発、おれのばあさん21号船長ミッキー・ハヤマ、宛 オデットII世号船長加藤茉莉香 殿」

「通信回線開いて。モニターに映像を出して下さい。」

やがて映像が出た。年の頃は20代後半のような若々しく、しかも精悍な目つき、浅黒い肌の若づくりの女性が現れた。

「初めまして。キャプテン加藤茉莉香。」

おれのばあさん21号の船長、ミッキー・ハヤマです。ミッキーと呼んで下さい。」

「こちらこそ、初めまして、キャプテン・ミッキー。私も茉莉香と呼んで下さい。」

「早速ですが、キャプテン茉莉香。」

予定を早めて、今すぐにドッキングして、超光速ブースターのセッティングを始めた

いんですが、お許し頂きたい。

なにぶん、当方のスケジュールが立て込んでまして。

それに、お互いの利益になる話だと思いますが。」

「・・・そうですね、承知しました。」

「ではドッキングは自動操縦ですよね。誘導します。」

「いやあ、すみません。うちのは手動なので、船のデータも送って下さい。」

「了解しました。ドッキングしたら、工事完了まで、こちらの船にご乗船下さい。」

船長直轄の来客専用の区画へお嬢様達をご案内します。

他の乗組員は出入りしませんので、ご安心を。重力もありますし、食事とか休憩の設備は充実してますよ。ゲームセンターもありますから。」

いつのまにか、クリスがブリッジに戻って、船長同士のやりとりを見守っていた。

オデットⅡ世号は、「おれのばあさん21号」の修理用ドックに着艦し、伸びてきたアームで船体を固定された。

ドッキングポートが繋がれ、ヨット部員達は相手の船に乗り移った。

### 3-3 弁天丸

茉莉香を護衛するため、オデットⅡ世号を監視していた弁天丸だったが、今、ブリッ

ジでは、クーリエが慌てて言った。

「今、オデットⅡ世号が、出張修理船とドッキングしたけど、予定では明日じゃなかったのかなあ。」

それよりも、あの修理船、なんかヘンなのよねえ。フライトプランも、トレスポンドーもちゃんとしているんだけど、どこか嘘っぽいと言うか……。

いま、データベースで得られた修理船の過去の情報と、現実に受信したデータに不整合がないか、自動チェックさせてるんだけど……。」

「何やってるの。そんなにおかしいの。」

ミーサが言った。

「うん。」

あつ、一つ、エラーが見つかった。

この船、登録はカテゴリーⅡだ。

さつき、超光速跳躍してきたけど、航海法では超光速跳躍が出来ない種類の宇宙船だよ。」

「勝手に、改造しているの?」

「そもそも、それじゃあ、中継ステーションを正規に出港できるはずがないでしょう。」

「海賊ならともかく、持ち主は、ヒュー&ドリトル星間運輸だろう。プロが、わざわざ、



不法改造なんかするのなあ?。」

百目が言った。

「あ、もう一つ見つかった。

飛行経路の航跡もおかしいわ。計算結果は、超光速跳躍した距離が1万光年以上で測定不能。出発地の座標も不明、エラーが出てる。」

「1万光年以上だつて、ホントかな?」

あいつ、まさか、核恒星系から一気に飛んできたというの。」

「はあ? コンピューターが狂ってるんじゃないの。そんな距離をジャンプできる宇宙船なんて無いよ。」

そもそも、おれのばあさん号のような老朽船では、そんなことはあり得ないよ。」

「そうね。そんなことが出来るとしても、莫大なエネルギーが必要だから、もつとごつい船よね。」

「じゃあ、目の前のあれは、一体何?」

「.....」

弁天丸のブリッジのクルー達は、モニターに映った『俺のばあさん号』の光学映像を見た。

それは、どうみても、古いオンボロ宇宙船だった。

## 3—4 出張修理船・俺のばあさん21号

「おれのばあさん21号」の内部は、古ぼけた外観から想像できないほど、真新しくそして、広く、最新の設備で構成されていた。

オデットⅡ世号の一行は、船長の応接室に通された。

テーブルを囲んでお茶やお菓子が出され、工事の手順や艦内の説明が行われた。工事が終わるまで、ヨット部員は来客専用区画を自由に利用するようにと言われた。

その後、船内から連絡を受けたミツキー船長が言った。

「エンジンアの話では、オデットⅡ世号が予想より旧式の船なので、工事に時間がかかるそう。まあ2日はかかると言っている。

宿泊スペースもあるから、ゆっくりして下さい。」

「ええー！それじゃ、練習航海の予定が遅れてしまいます・・・」  
茉莉香、心配はいらん。この船でも訓練は出来る。

さあ、お茶を飲んだら、みんなで『ゲームセンター』へ行こう。」

クリスが「ゲームセンター」という言葉にアクセントをつけて、言った。

その後、クリスはドアを開けて廊下を進んだ。生徒達も、『ゲームセンター』と聞いて、もう身乗り出している。

「お嬢、私もお供してよろしいでしょうか。」

「ミツキー、みんな、私の可愛い生徒達だぞ。お手柔らかにな。」

「あはは。分かっております。」

ふたりは、歩きながら親しげに会話していたが、その様子を生徒達が怪訝そうに聞いているのを見て、クリス先生が言った。

「ミツキーは、昔、帝国軍士官学校パイロット科の教官だったんだ。」

「お嬢！昔ではありません。ついこの間までです。」

生徒諸君！改めて自己紹介しよう。銀河国内で一番若く、一番美人の船長、ミツキー・ハヤマ21歳とは、この私です。」

「……………」

「なんだ？拍手が無いなあ……………」

ああ、そうかあ。一番若い船長というのは、そこにいる加藤茉莉香が弁天丸の船長になったので、譲ったけどね。

ハハハ…………訂正、訂正。」

「ナハハハ……………」

その強弁ぶりに、茉莉香も苦笑いするしかなかった。

「……………」

生徒達はやはり言葉が出なかった。

「お姉様。帝国軍士官学校パイロット科の教官というと、『ライトスタッフ』といわれる超エリートパイロットですよ。」

あの方、本物でしょうか。」

ヒルデが小声で聞いた。

「うーん。クリス先生が、うそをおっしゃっているようには見えませんが、ミッキーさんは、ご自分のことを『一番美人』とか『21歳』とか、おっしゃってましたよねえ……」  
そんな生徒達の反応にお構いなしに、こつちこつちと言いながら、二人は広々とした船内の廊下を奥へ奥へと進んでいって、奥の部屋の大きなドアを開けた。

そこには、大小様々な宇宙船や重機械の操縦席を模した多数のシミレーターが置かれていた。「ゲームセンター」とは、この部屋のことだった。

クリスが言った。

「見ての通り、ここは、本来は、長い航海の間に、乗組員が目的地に着いた後の仕事に備えて訓練をする施設だ。」

だから、ここにあるシミレーターは、すべて、本物の船や重機械の操縦を体験できるプロ仕様のものだ。

一年生は、あちらの大型船のシミレーターを皆でやってみなさい。

まず、手動での発進の練習、次はステーションへの手動での着艦の練習。最初はモニターへのヘルプの指示通りにやってみなさい。慣れたらヘルプを見ずにやってみなさい。それで、自信がついたら、私かミッキーに言いなさい。パフォーマンスを見てあげよう。合格したら、次は超光速跳躍の練習に進むぞ。

上級生は、宇宙海賊船弁天丸の操縦も出来るそうだから、お前達も負けるな。」

「やった。よし、がんばろう。」ジェシカ・ブルボンが言った。

「おー」

一年生達が声を上げた。早くも、一年生の団結は固そうだ。

「上級生は、一年生のようなことは経験済みだから、何でも好きなのをやってみなさい。」

「私のオススメは、あちらの単座の戦闘機シミレーターと、その向こうの惑星開発用人型巨大ロボットの操縦シミレーターだ。」

人型巨大ロボットは、TVで見たことがあるだろう。いずれも乗ってヘルメットをかぶると、実際に搭乗しているような立体映像が見える。

こいつらのシューティング・バトル・モードの臨場感は、プロ仕様だよ。意味わかるかい。」

ミッキーが、ニヤリと笑いながら言った。

これを聞いて、さっそく戦闘機シミレーターにはウルスラが、人型巨大ロボットのシ

ミレーターには、リリイが飛びついた。

「ミツキー、危ないことを教えるなよ。まだみんな、高校生、未成年なんだよ。」  
「ちええ。わかりましたよ、お嬢。」

敵側のアバターのビジュアルをカワイイのに変えておきますから。アヒルの人形とか、熊のぬいぐるみとか……。」

「それから、アイとナタリアは、こちらに来なさい。」

クリスは、複座の小型宇宙船のシミレーターに二人を案内した。

「ミツキー、この二人はサイレント・ウイスパアの操縦を勉強したいそうさ。シミレーターのモードを調整してやって欲しい。」

「へえー。サイレント・ウイスパアかあ。優秀だねえ、キミたち。たっぷり教えてあげよう。」

ミツキーは、ニヤリと笑った。そのすぐみのある笑いで、アイとナタリアは、ミツキーが本物の鬼教官だとわかった。

その後も、ミツキーはシュミレーター席のヨット部員を順に回って、いろいろと操縦の極意を教えて回った。ミツキーは、正確に生徒達の問題点を指摘し、各人に最適なアドバイスをし、そのパフォーマンスを改善させた。

彼女の実力をみて、ヨット部員は、たちまち彼女を「先生」と呼び始めた。

その時、一年生のメリー・ランバートが、奥のシートで覆われたシミレーターの方へ走っていくのが見えた。

クリスが慌てて、後を追った。茉莉香達もメリーを心配して、後を追いかけた。

「メリー、そのマシンは止めなさい。危険だ。乗ってはいけない。」

「ねえさん、これなんですね、例のやつは。」

私もねえさんの役に立ちたいんです。私に出来るか、試させて下さい。」

「だめだ。危険だ。」

「ねえさん。先輩達が、ねえさんのこと誤解してます。」

先輩達が、ねえさんのことを影でなんと言ってるかご存知ですか。」

メリーは泣いていた。

「分かっているよ。メリー。だから、もう泣くのはよしなさい。」

「先生、メリーの気の済むようにさせてあげて下さい。」

大丈夫ですよ。このシミレーターは、それほど危険ではありません。

それに、私がそばについて見守っていますから。」

そう言ったのは、サーシャだった。

メリーが、覆っていたシートをはがした。

シートの中から現れたのは、丸い透明な球体型のシミレーターだった。その中に、電

子回路を張り巡らせた椅子が一つ備え付けられている。

さつそく、メリーが乗り込んだ。

「グランドクロスの操縦席と同じだ。」

白兵戦でグランドクロスに乗り込んだ経験のある茉莉香には、その正体が分かった。

茉莉香がそう言うと、グリューエルが緊張した声を上げた。

「例の重力制御推進の新型戦艦の操縦席ということですね。」

その様子を少し離れた所から見守っていたチアキがつぶやいた。

「まったく、サーシャも正体を隠してたのね。」

軍艦製造大手メーカーのステープル重工の社長令嬢といっても、ただの箱入り娘ではなかったのね。

グリューエル達もクリス先生の正体を知っているようだし、みんな隠し事ばかり。

『裏で何やっているか分からない人だらけ』というのは、本当だったわね。」

3—5 チアキの部屋（俺のばあさん21号船内）

「茉莉香。部屋に戻って夕食まで休んでるわよ。」

そう言って、チアキは船の来客用宿泊区域へ向かった。

「チアキ。夕食が済んだら、船長応接室へ全員集合だ。」



「わかりましたよ、センセイ。」

チアキは、クリスに背中を向けたまま、片手をあげて答えた。

「いったい、このシミレータールームは何のために作られたの。」

そもそも、この船自体も怪しい。外見はあんな小さなボロ船のように見えて、乗ってみると、船の中は移民船並みの巨大な部屋が続いているなんて、空間がおかしい。

そんな怪しい船をボロ船の出張修理船として登録するのは、トランスポンダーの偽装じゃないの。宇宙航海法違反よ。

ヒュー&ドリトル星間運輸は、ご立派な会社なこと。あきれるわ。」

チアキは部屋に入るまで、このようにつぶやいて、怒っていた。

しかし、部屋に入ると、少し気分が違ってきた。

「知らなかったのは私だけかなア。」

茉莉香もこの頃、少し様子が変わったし。

ヨット部の友情って、こんなものだったのかしら。なんか、怒るのが、バカバカしくなってきたわあ。 . . . .

そうだ、あいつに電話して事情を聞いてみよう。

あいつの会社のことだし . . . .

もつとも、あれ以来一度も返事していないけど . . . .」

チアキは、エドワード・ドリトルに電話した。

実は、ダンスパーティーのあと、エドワード・ドリトルから何度か電話がかかって来たり、メールが来たのだが、チアキは一切無視していた。

エドワードは来客中だったが、しばらくするとTV電話に出てきた。

「やあ、チアキさん。お久しぶりですね。お話しできてうれしいです。」

「ワタクシの方こそ、ご返事が遅れて失礼いたしました。・・・」

チアキは、丁寧な挨拶とお詫びを言った後、本題に入った。

しかし、練習航海の事情を話して、「俺のばあさん号」の名前が出たとたん、エドワードの話しぶりが一変した。チアキの話が続いているのに、無理に話を遮って、話し始めた。

「まあまあ、そのくらいで。だいたい事情は分かりましたから。ハハハ。」

私も会社の船の名前をみんな知っているわけじゃないので、調べておきますよ。

それはそうと、チアキさんは、クリスタル・スターにはいつ頃お着きなんですか。是非、お会いしたいですね。

詳しい話は、直接お会いして、それからゆっくりと・・・。」

チアキは、

『人の話を遮って、いきなりナンパを始めるわけ・・・。なに、コイツ。』

と思ったが、その時にエドワードの指先が手元の書類の文字を不自然な順序で指さしているのに、気がついた。それは次のような文字だった。

T、A、P、P、I、N、G

『tapping? この単語の意味は、ええーと……。まさか! 盗聴。』

ビツクリしたチアキは、話を合わせることにした。

「せつかくのお話でございませうが、ワタクシはまだ高校生でございませうので、殿方と二人だけでお会いするなんて、お母様に知られたら、ひどく叱られますわ。

いくら、お相手がエドワード様でも……」

チアキが調子を合わせて話し出したので、エドワードの表情が和んだ。

「チアキさんのお母様って、厳しい方なんですわねえ。」

「それが、クリハラ家の伝統と申しますか……。ホホホ。」

それからチアキは、通信を切らずに、自分が良家の箱入り娘であるかのような受け答えを続けた。エドワードから、「俺のばあさん号」の正体についてなにか教えて貰えないかと、粘ったのだ。

やがて、チアキの粘りに少し根負けしたためか、につこり笑ったエドワードが、こう言った。

「ところで、チアキさん。チアキさんのお召しになっている学校の制服、昔の言葉でなん

と呼ばれていたか、ご存知ですか。

セーラー服って呼ばれていたそうですよ。色も濃紺だったそうです。その色のことを、ネービーブルーって言ってたそうです。

昔、まだ船が惑星の海の上に浮べて航海する乗り物のことを指していた時、その海に浮かぶ船の中でも軍用船の乗組員をセーラーって呼んで、その制服がそういう青色のデザインだったんですってね。そして、海に浮かぶ軍用船の軍隊を海軍、つまりネービーって呼んでたそうですね。だから、制服の濃紺の色をネービーブルーって言うんです。

帝国宇宙軍のことを、いまでもネービーって呼ぶのは、その名残だそうですね。

知ってました？」

「エドワード様は何でもご存知ですねえ。

私は、そういう由来があつたなんて、存じませんでしたわ。この制服のデザイン、長い歴史と伝統がありますのね。」

と話をあわせつつ、チアキは考えた。

『??? いきなり変なことを長々話し出して、一体どうしたのかしら。』

そうか・・・制服の話からネービーの言葉を無理矢理に引き出したってことは、つまりこの船は銀河帝国宇宙軍のものだってことを言いたいのかしら。やっぱり・・・。』

納得したチアキに向かって、エドワードが意外なことを言った。

「話が変わりますが、チアキさんがなにかご存知だったらアドバイスを頂きたいんです。実は近々、ある辺境星域へ、星間交易や定期航路開設の交渉に行かなければならないんです。

でも、その惑星開発会社の社長がハードネゴシエーターで、これまで他の星間運輸会社がすべて交渉に失敗しているんです。

実は、その社長は元宇宙海賊という経歴の持ち主でして、会っただけでも恐怖感を覚えるという人もいる方でして……。

こういう方と交渉をまとめるコツというか、度胸の付け方というか、なにかアドバイスを頂けないでしょうか。」

『この人は私が宇宙海賊の娘であることを知っている。』

と、チアキは思った。

チアキは、いきなり現実引き戻された気がした。

というのも「良家の箱入り娘」のお芝居は、チアキにとっても結構楽しかったからだ。自分がジェニー先輩やサーシャのような立場だったらどんな暮らしをしているか、想像しながら会話をするのは楽しかった。

そういう生活に憧れが無いといえれば嘘になる。

『そうはいつても、私に大事なことを教えてくれたから、このまま借りを作りたくはないし、なんとか助けてあげたいけど・・・』』

そこでチアキは、「良家の箱入り娘」のお芝居を続けながら、こう言った。

「エドワード様、そういうことでしたら、ワタクシより、ワタクシのお父さまにご相談なされるとよろしいのではないのでしょうか。」

お父さまはお知り合いが多いので、その元宇宙海賊の社長さんについて、詳しい方をご紹介して差し上げることができるかもしれませんわ。」

「なるほど、それは心強いですね。」

「ワタクシからも、お父さまにお話をしておきますので・・・。」

どうも、一言、お礼を申し上げるつもりが、長い電話になりました、ご迷惑を・・・。「いえいえ、こちらこそ。楽しかったですよ。いつでもご連絡下さい。」

「ありがとうございます。」

そういつてチアキは電話を切った。

辺境星域にある、宇宙海賊出身の社長がやっている惑星開発会社と言えば、チアキも名前くらいは知っていた。その会社の名は、ブルドッグ宇宙開発株式会社である。

チアキは、さつそく父のケンジョーに電話して、エドワード・ドリトルからの話を簡単に伝えておいた。

もちろん、ダンスパーティーや「俺のばあさん号」の話は言わなかった。

一息つくくと、チアキはつぶやいた。

「お父さま、お母さま．．．かあ。私の『お母さま』って、どんな人だったんだろう。

私が赤ん坊の頃に死んだっていうけど、思い出してみると、船長のオヤジからも、副長のノーラからも、クルーからも詳しい話を聞いた記憶が無いのよねえ。

なんか、いまさら聞けない雰囲気というか．．．」。

3—6 船長応接室（俺のばあさん21号船内）

夕食後、船長応接室にヨット部員が全員集合した。

夕食まで、ゲームセンターでミツキー船長にさんざんしごかれて、

『もう、だめだめ。』、

『死んだ、死んだ。』

と苦しそうな言葉を連発していたヨット部員だったが、豪華な夕食とデザートで元気を取り戻した。

皆の表情が和んだところで、クリスが言った。

「落ち着いたところで、オデットII世号で出港したときに出来なかつた話の続きをしよう。同じ船に乗るんだからな、隠し事は無しだよな、茉莉香。」

「はい。そう願います。」

「それで、実は、あの時のミッキーからの通信では、私たちのオデットⅡ世号が狙われているという情報が入ったそうさ。海明星周辺でも襲われる可能性があるというので、急いでミッキーが迎えに来てくれた訳だ。」

「茉莉香、またなんかやったの?」と、リリーが小声で聞いた

「いや。何もしてないよ。今回は知らないよ。」と、茉莉香も小声で答えた。

「狙われているのは、茉莉香ではなく、私だ。」

「本当のことを言うと、私が狙われる理由は分かっている。」

「えー先生も海賊船の船長なんですかあ」

「違うよ。私は、銀河帝国の女王の娘だ。」

「うそー」

「ええー!?!本当ですか。」

「フン。」チアキは顔をそむけた。

「先生、私、女性雑誌の王室ページは良く読むんですけど、……。確か、銀河帝国の女王陛下は独身で、お子様はいらっしゃらないと報道されていますよねえ。王女様がいらつしやるとしたら、これは大ニュースですね。」

ヤヨイ・ヨシトミが驚いて言った。



「でも、海賊狩りの時は、先生は、帝国海賊と名乗っていませんでしたか。」

チアキは少し懐疑的だった。チアキは、今でもクリスの事を許す気にはなれないからだ。

「そうだなあ。信じられないのも無理はないなあ。それを説明するには、私の生い立ちから話そう。」

私は孤児として育った。その場所は子供に恵まれなかった元海賊の船長夫婦が運営する船で、その船自体が私設の孤児院のようなところだった。

夫婦は、始めは自分の船で子供を引きとって育てていたんだが、人数が増えてきたので、倒産したランバート星系で、鉦山開発の作業員宿舎として使われていた古い大きな移民船を安く買い取って、そこで暮らすことにしたんだ。私もそこで育った。

夫婦は、血の繋がらない子供達を、皆、自分の家族として育てた。つまり、私たちは、血のつながりが無くとも、同じ船に乗って、共に泣き笑い、命を分け合って生きる海賊の兄弟姉妹（きょうだい）だと言われて育った。」

「私も、そこで育ったんです。」メリーが言った。

「大きくなった子供達は、鉦山開発の再開を手伝ったり、船長夫婦の紹介で仲間の船に乗って働いたりして、独り立ちして行った。」

私も大きくなったので働くことになったが、私は、夫婦を助けて、その船に新しく引

き取られた小さな子供達の世話をする仕事を選んだ。メリーも私が世話した子だ。」  
「クリス姉さんは優しくかったです。私たちに愛情を注いでくれました。」

だから、私は自分の母を知らないんですが、先輩達がお母さんのことを言っているのを聞くと、クリス姉さんみたいなひとかなあとと思うんです。」

「それと銀河帝国とどう繋がるんです。話がそれたような気もしますが。」

相変わらず、チアキは批判的だったが、メリーの話は自分の母親に対する思いと似ているようで、少し共感するところがあつた。

「そうやって働いて、数年暮らした。」

ところがある日、多数の軍艦がやってきて、私たちの船を取り囲んだ。そして、大勢の人達が乗り込んできた。彼らは船長夫婦を連れて、私たちの所へ来た。

私は、彼らが小さな子供達を奪いに来たと思つて身構えていた。

ところが、彼らの中から一人の女性が泣きながら飛び出してきた、私に抱きついた。驚いている私に、船長夫婦は、この人がお前の母親だと言つた。」

「その人が銀河帝国の女王と言うわけですか。出来すぎた話ですなえ。」

私、海賊の娘ですから、今までそういう話をする女性を何人も見てきましたよ。

そう言うヤツは、大抵、オヤジに追い払われてましたけど・・・。」

チアキは言つた。



「でも、校長先生は、王女様のためにうちの屋敷でパーティを開催したいとおっしゃったそうよ。うちの屋敷は、なによりもセキュリティが良いからって。」サーシャが言った。「そうだよねえ。学校の食堂よりずっと良いよ。お食事は、肉料理よりもグラブサンドイツチが美味しかったなあ、

お菓子は、私の好きなマカロンに、チョコレート、クッキー、アイスクリーム、シャーベット、プリン、キャンデー。飴細工も美味しかったなあ。

ケーキは、ショートケーキに、ティラミス、モンブラン、チーズケーキ、ムース、ザッハトルテ、アツプルパイ、・・・」

「ウルストラ、いつまで言ってるの。・・・」

え？ まさか、それみんな食べたの・・・！

あきれた。」

「私は紅茶が美味しかったなあ。あれはプリンセス・オブ・エンパイアって最高級の新茶だよね。・・・」

あ、そういえば、紅茶の名前も王女様になってるのね。」ハラマキが言った。

「それにひきかえ、学校の食堂でパーティやると、サンドイツチ、ポテトチップに炭酸飲料くらいしか出ないらしいね。」リリイが言った。

「いやいや、食堂で開かれるダンスパーティでは、お昼ご飯の余り物も出るというウワサ

だよ。」ウルスラが言った。

「お料理とか、スイーツとか、紅茶とか誉めてもらってうれしいわ。お母さんが心を込めて準備させてたのよ。」

「アハハハ・・・ホント、お前達の話は面白いなあ。退屈しないよ。これだからお嬢が可愛がるわけだ。」

ホントは、結構、深刻な政治の話なんだぜ」ミッキー船長が笑った。

「そうですね。ホント、恥ずかしいですね。ウルスラはもう黙ってなさい。茉莉香、話を元に戻そうよ。」チアキが言った。

「では、先生、貴方が王女だとしても、マスコミにどうして公表しないんですか。不自然ですよね。」茉莉香が言った

「それは、銀河帝国聖王家の王位継承争いが原因だ。簡単に言う戦争が始まることを防ぐためだ。」クリスが言った。

ミッキーが言葉を継いだ。

「つまりなあ、学校で習ったかも知れないが、銀河帝国の聖王家には、現在四系統の血筋があつて、それぞれ、青薔薇家、赤薔薇家、白薔薇家、黄薔薇家と呼ばれている。直系の青薔薇家が本家として代々王位を嗣いでいる。

ところが、最近では、赤薔薇家の当主になったアンドレオ公爵が増長して、ついには、女

王様に対して、跡継ぎが無いのだから自分を皇太子にせよ、つまり次の王位を譲れと要求しているというわけさ。

アンドレオ公爵は帝国宇宙軍にも人脈を築いており、女王様がこの要求を拒否すれば、武力行使で王権を奪うことも考えているとも言われている。

そういう事情の中で、お嬢の存在が明らかになれば、公爵側は反乱を起こして、武力で決着をつけるしか、王位につく道が無くなるだろう。」

「たいへんな戦争になるんですか。」

「ああ。帝国宇宙艦隊同士が争うことになれば、銀河系を二分する争いになり、各星系軍も巻き込まれるだろう。」ミツキーが言った。

「どつちが勝つんでしょうか。」

ウルストラが遠慮無く聞いた。

「我々には勝つ自信がある。」

しかし、銀河のあちこちで大艦隊同士が正面から争う事態になれば、我々が勝つても帝国内の各星系が戦火の犠牲になるかもしれないだろう。海明星の新奥浜市も破壊されるかもしれないぞ。

そのような結末は避けたいと思わないかい？

だから、お嬢の存在を公表する前に、アンドレオ公爵側が戦意を失うような圧倒的に

有利な状況を作りたいのさ。」

ミッキーが言った。

「その切り札が、機動戦艦グランドクロス、それと、おそらくこの船も切り札と言うわけですね。」

では、先生にお聞きします。

貴方が王女だとすれば、なぜ、わざわざ自分で海賊狩りを行ったのですか。帝国軍には、グランドクロスの実験ができる優秀なパイロットがいっぱいいるでしょう。」

これは、チアキちゃんだけでなく、私も聞いておきたい事なんです。」

茉莉香が言った。

「それは、今思えば情けないが、あのころの私は虚勢を張って、気の強い、ワガママでツツパリの王女として、暴れていたのさ。」

そして、自分の力をアンドレオ公爵だけでなく、帝国軍全体に見せつけてやろうと思つて、勝手に一人で海賊狩りに出たのさ。」

「そんな、信じられません。」

ねえさんは、私たちの船ではツツパリの子供達にも優しく接していたじゃないですか。」

メリーが言った。

「情けないが、ツツパリのあいっらと同じように、私も、不安で押しつぶされそうになっていたのさ。」

考えてもみて欲しい。辺境の船の中で育った私が、母である女王に従って、いきなり銀河帝国に来たわけだ。

そこに自分の居場所があると思えるか？

自分が帝国の王位継承者になり、やがて女王として銀河帝国を率いて行けるか、そういう母の期待に応えられるか、不安にならない方が不思議だろう。」

「それは、分かる気がします。私だって今、バルバルーサの船長をやれと言われれば、不安で押しつぶされそうな気になります。」

チアキが言った。

「そんなことないよ。私だって出来たもの。チアキちゃんなら大丈夫。」

「はあ？」

いつものことだけど、茉莉香のそういうところ、信じられないわよ。

天然を通り越して……」

「そうだろう。」

私も、茉莉香と会って、本当に驚いたよ。

なんだか、今まで自分が悩んで悩んで、不安に押しつぶされそうになっていたのが、バ



カバカしくなってきたね。ハハハ」

クリスが笑った。

「私も、茉莉香さんに会って、そうとて、感じました。

なにより、茉莉香さんといると、退屈しませんし、ねえ。」

グリユーエルが笑った。

「そうそう、茉莉香のことをネタに話していると、なんか楽しいのよねえ。」

みんなが笑った。

「なんか、みんなして、私のこと、本当に誉めているんでしょうか・・・」

「まあ良いじゃないか。」

それに、帰ってから母上と改めて話したが、母上が私をとて心配していたことや、私への期待や思いも身にしてみ分かったよ。

死んだと聞かされていた私が生きていると知らされた時の驚き、うれしさ。

我を忘れて、私の元に飛んできたんだそうだ。

その衝動に身を任せたお陰で、今、内戦寸前のたいへんな状況になってしまったのだけどね。

だから、私には母親の記憶がまったく無いんだが、そう言う話を聞いて、やっぱりこの人は私の母親なんだなあ、思ったよ。」

クリスが言った。

「そういうもんですか、母親って。」

チアキが聞いた。

「ああ、そうだよ。」

「では、先生は、なぜ白凰女学院に来られんですか。私も、最初に教室で再会したときはビックリしましたよ。」

チアキが言った。

「それは剣道の稽古の時に言っただろう。」

もう一度、茉莉香の顔が見たくなつたから来たんだ。茉莉香が、不安で固まっていた私の心を溶かしてくれたからだ。

そう思っていると、帝国海賊のある船長が、それなら教師になつて乗り込んだらどうかって、手配してくれてね。」

「それで、先生は、帝国が戦争寸前の非常事態だというのに、茉莉香の顔を見ることだけのために海明星へやって来たんですか？」

チアキが言った。

「それはね、……先生、あの話は秘密にしなくて良いでしょ。チアキちゃんにも関係あるしね。」

「私はかまわないよ。」

「さつき、チアキちゃんが一人で部屋に戻ってしまったときに、先生から言われたんだ。帝国宇宙軍で、先生の副官にならないかって。」

先生が王女となるということは、銀河帝国の皇位継承者となり、やがて第一艦隊の司令官になるということ、その副官にならないかって言われたんだ。」

「まあーすごい！」みんなが言った。

「いよっ！マリカ様」

「ウルスラは黙ってなさい。」

茉莉香、ねえ、それってどういうことか、意味分かってるの？

その前に、弁天丸の船長はどうするの？」チアキが言った。

「わかってる、わかってるってえー。」

副官は、帝国軍のことを勉強する見習い士官ポストだって事くらい、わかってるよ。それに弁天丸の船長は、続けても良いって言われてるし……。」

「そう言うことじゃなくって、そのポストは、本来王族が就任するものだってこと知ってるの？」

アンタ、女王陛下のこともなの？」

「いいや、茉莉香さんのことだよ。」

「そう言うことじゃなくって……もう、一般人の私たちとしては、そう言う話は喜んでお断りすると言うのが、礼儀作法つてもものでしょ。」

茉莉香、分かってないの。」

「ええ？断らなくちやイケナイの？どうして？」

「もう、知らないわよ。」

先生、今までの慣例を破つて、こんな茉莉香が副官になつて良いんですかあ？」

「ハハハ、茉莉香らしくて、良いじゃないか。」

「それでね、先生から話を聞いたとき、何か引つかかるものがあつて、即答できなかったんだよね。」

それが何か、さつきから先生とみんなが話しているとき、私、分かつたんだ。」

ねえ、チアキちゃん、一緒に帝国軍の副官やろうよ。」

帝国軍人の見習いだよ。」

前に、海賊船の船長の見習いをいっしょにやった時みたいに。」

「はあ？海賊船の船長の見習いと訳が違うのよ。帝国軍の中枢に入るのよ。」

気が遠くなる程、たいへんそうじゃない。」

「だから、チアキちゃんと一緒に行こうつて言つてるんだよ。」

「茉莉香、あなた、面倒なことは全部、私に頼ろうつて、期待してるんじゃないの。」

「ナハハハ……そんなことないよ。」

出来ることはちゃんと自分でやるつもりだし。

それにふたり一緒だと心強いし、きつと大丈夫だよ。……ナハハハ。」

茉莉香は、苦笑いをした。

「チアキ、私からも頼む。一緒に帝国軍に来て欲しい。」

お前が気にする慣例なんか、私はこだわらないよ。

お前たちは、血の繋がった王族の妹では無くとも、りっぱに私の妹だよ。私はそう思っている。

ヨット部員みんなも、私の妹だよ。『海賊の妹』ってやつだよ。ハハハ。

それに、帝国軍の副官を勤めることは、バルバルーサの船長になるかも知れないチアキにとっても、良い経験になると思う。

ぜひ、来て欲しい。」

「でも、高校を続けられるか、卒業したらどうするとか、いろいろ考えないと。」

「茉莉香にも言ったが、副官と言っても毎日仕事があるわけではないので、白凰女学院高等部は卒業まで続けければ良い。」

卒業したら、帝都へ来てほしい。

大学へ行きたければ帝都の大学に行かせてあげよう。私と母上から推薦状をだすか

ら、帝国女学院なら入試の心配もしなくて良いはずだ。」

「チアキちゃん、スゴイ！王女様みたい。」

「スゴイじゃないの！これからは『チアキサマ』って言おうかな」

「ハハハ・・・マリカ様に、チアキ様かあ」

みんなが口々に言った。

「もう、人ごとだと思つて・・・。」

先生、せっかくの話ですが、少し考えさせてください。気持ちの整理を付けたいと思います。オヤジにも相談をしないと・・・。」

「わかつたよ。良い返事を待っている。」

それから、ヨット部員のみんなにもお願いがある。帝都にいたら、上級生が前にやった海賊ショーのような行事があるので、私と一緒に出演して欲しい。」

「ええー？ほんとですかあ」

「やったー！また海賊ができるよ。」

部員達は、その意味も分からず、大喜びだった。

その時、ミッキー船長の携帯通信機が鳴って、通信が入った。

「うん、うん、分かつた。すぐ行く。」

ミッキー船長は、皆に言った。

「敵が現れたようだ。」

さあ、皆さんをこの船のブリッジにご案内しよう。

これから敵にどう対応するか、お客様である皆さんの意見も聞きたいしねえ。

お嬢、良いでしょうか？」

「船長がそう言うのなら、私はかまわないよ。」

「では、参りましょう。」

ミッキー船長は、そういうと船長応接室の壁を指さした。

すると、壁が続いていたように見えていた所からドアが浮き出てきた。

彼女はドアを開けて、皆をその中へ導いた。

ブリッジは広がった。弁天丸の5、6倍の広さと多数の乗務員席があったが、実際に勤務しているクルーは数名だった。

そして、ブリッジの中央に船長席らしき大きな席があった。さらにブリッジの側面に、グラウンドクロスにもあつた透明な球体型の操縦席が左右に二席づつ、計四席置かれていた。

しかし、ヨット部員達が一番驚いたのは、ブリッジの後方、一段高い場所にある席だった。

そこには黄金で縁取られた玉座が大小2席あつた。玉座の背には、赤く輝く日輪の中

に七輪の青い薔薇、つまり「奇蹟の薔薇」をあしらった銀河聖王家の紋章がつけられていた。

「奇蹟の薔薇」は、宋主星のひとつ、地球には天然には存在しなかった青い薔薇の花である。はるか古代、クリスタルスターに着陸した移民団の先遣調査隊が、鮮やかな青い薔薇の花を発見し、七輪の花束にして王に献上したという。

この花は、赤色巨星に可住惑星があるという奇蹟の中の、さらなる奇蹟として、人々の心を大いに奮い立たせた。

以来、この故事にちなんで七輪の「奇蹟の薔薇」は、銀河聖王家の紋章とされ、そして、銀河帝国が、この星を首都として建国される契機となつたとされる。

その「奇蹟の薔薇」をつけた2席の玉座を囲むように、20席ほどの豪華な赤い椅子が並べられていた。

当然のようにクリスは小さい方の玉座に座つた。ヨット部員達は、玉座を囲む椅子に座るように言われた。グリユールとグリユンヒルデは、クリスに近い席を勧められたが断り、他のヨット部員と同じ席に座つた。

船長席の前に立つたミツキーは、帝国軍の軍服を着て、姿勢を正して敬礼した。

「銀河聖王家王女殿下、セレニティ聖王家正統皇女両殿下、白凰女学院ヨット部のみなさん、あらためて、歓迎のご挨拶をいたします。



銀河帝国宇宙軍第一艦隊、機動空母グランドマザー試作機へようこそ。私が『艦長』のミッキー・ハマヤマ准将でございます。

主なクルーをご紹介します。

右から、機関担当のチャーリー・チャン大尉、

パイロットのガルビオ・ガルビス大尉、

航路担当のジェニファー・ブラウン大尉、

通信と電子担当のマリオ・フェルナンデス少尉。

以上でございます。」

3-7 機動空母グランドマザー ブリッジ

ミッキー艦長が、電子担当のマリオ少尉に尋ねた。

「敵艦隊の動向は？」

「はい、タツチダウンした船が10隻。トランスポンダーを発信していませんが、宇宙マフィアの艦隊と思われます。戦艦1隻と巡洋艦クラス9隻が、本艦の前方30万キロメートルの縞白星（しまのしろぼし）の軌道付近に集結しつつあります。」

このままの軌道と速度では、本艦との最接近まであと15分ほどです。」

立体画像の宇宙海図に、本艦と敵艦隊の位置が示された。

「では、どう対応するか、弁天丸、じゃなかったオデットⅡ世号船長、加藤茉莉香殿に意見を聞きたい。」

あいつらは貴方の船を狙ってやって来た訳だからね。もちろん、皆さんの安全確保が私の任務と心得ていますが・・・。」

ミッキーは、クルーにも聞こえるように、大きな声で言った。

「ご配慮、ありがとうございます。ミッキー艦長。」

遠慮無く、私の意見を言わせて頂きますと、逃げましょう。

彼らが追って来られない、安全なところまで、例えば予定のフライトプラン通りの宇宙大学か、銀河帝国の中心まで逃げましょう。」

「その理由は?」

「理由は三つあります。」

茉莉香はすつと立って、三本指をつきだした。

「へえー、三つも理由があるのかい。」

ミッキー艦長は、微笑しながら言った。

「はい、一つ目は、表向きには、今私たちは、白凰女学院の練習船をドッキングしたヒューアンドドリトル星間運輸の『俺のばあさん21号』に乗っていることです。」

共に非武装の船です。だから私たちは逃げるしかない。あっちもそう思っているで

しよ。」

茉莉香が言った

「いきなり逃げるだなんて、面白いことをいうねえ。ヤツラが追いかけてきたら、どうするんだい？」

「宇宙マフィア艦隊だって、帝国軍と正面から戦う気はないでしょう。」

私たちを追いかけるとしても、帝国軍が出て来ないかどうか、警戒しながら追いかけるはずです。向こうが怖くなって、追跡をやめるところまで逃げれば、こちらの勝ちです。」

「それでは、二つ目の理由は何かな。」

「二つ目は、この船なら、安全に逃げられると思うからです。」

なぜって、10隻もの艦隊に狙われているというのに、先生やミツキー艦長がまったく落ち着いていらっしやるからです。やっぱり、この船はスゴイ新兵器なんですよ？

だったら、防御性能もいい筈だし、足も速いでしょう。それなら、宇宙マフィア艦隊に多少砲撃食らっても、安全に逃げきれれると思うからです。」

「フフフ、ますます面白いねえ、三つ目の理由は？」

「三つ目は、白凰女学院の練習船であるオデットII世号にとっては、宇宙マフィアの船を10隻も沈めたと言う戦果、戦歴は不要だからです。」

むしろ、そんなものは有害です。恨みをもたれて、私たちが卒業してからも後輩達が宇宙マフィアに付け狙われては困ります。私たちは、あの船を百年後の後輩達にも伝える責任がありますから。

それに、もう、新兵器のテストは、帝国軍の皆さんに、お任せしますよ。私やチアキちゃんは、海賊船に乗って先生を相手に十分やりましたから。

お互いに、命がけで・・・ね。」

茉莉香は、クリスとチアキの顔を見て、ウインクして微笑した。

「茉莉香は、面白いね。」クリスが言った。

「フフ、そういう天然っぽいところがね・・・。」キアキが言った。

「ハハハ・・・おい、どうだい、キャプテン茉莉香のウインクは。

船乗り達のウワサ通りのタマだったねえ。ハハハ・・・

ここまで見に来た甲斐があっただろう?。」

ミッキー艦長は、グランドマザーのクルー達に向かって言った。

クルー達も歓声を上げていた。

「今の、艦長とキャプテン茉莉香とのやりとりは、艦内にテレビ中継しました。みんなにウケてるみたいですねえ。」

クルーの一人、電子担当のマリオ・フェルナンデスが言った。

「ええー！ 私を試していたんですかあ？ そんなあ……ナハハハ……」

茉莉香は例の苦笑いをした。

「さて、茉莉香のウイंकを見てもらったところで、グランドマザーのクルーみんなに発表したいことがある。

このキャプテン茉莉香と、ここにいるチアキ・クリハラが、私が第一艦隊司令官に就任したときの副官の候補だ。まだ、本人たちから承諾の返事をもらっていないが、みんなも良い返事が貰えるよう協力して欲しい。

なんといつても、この二人は宇宙海賊の娘で、私にとつても妹のような存在だからな。」

玉座に座ったクリス王女が言った。

クルー達は、今度はさらに大きな歓声を上げた。

「お話が盛り上がっているとところで済みませんが、ビーム砲の威嚇射撃が来ます。回避する映像に切り替えます。」

あと、降伏勧告も来てます。」マリオが言った。

「ハハハ。宇宙マフィア艦隊がまだいたのを忘れてたな。」

もう面倒だから、さっさと逃げる映像に切り替える。時空間の波動も、航跡をクリスタルスターまで続けて、何回ジャンプしても先に逃げている形に重力波を放出しろ。予

定通りにな。」

ミッキー艦長が言った。

「了解。」

「どんなに用心深くないヤツでも、追いかけているうちにこれはヤバイと思うだろう。帝国防衛圏の最深部まで突っ込んでいく鈍いヤツは、私も見たことがないからな。」

オデットⅡ世号をドックに抱えた「俺のばあさん21号」が、あわてて超光速でジャンプしていく映像が、モニターに映し出された。

自分の映像を自分の船のモニターで見るとは通常はあり得ない視角であり、この船は光学映像を操作できるようだ。

続いて、宇宙マフィアの艦隊もジャンプして消えていった。

入れ替わりに、海明星の星系軍の艦隊が、戦闘態勢で急接近してくることをマリオが告げていた。宇宙マフィアの艦隊を発見して、スクランブル出動したのだろう。

「護衛艦隊ならば、通常3隻から5隻ですから、この船でなければ危なかったですね。」ヒルデが言った。

「それに、私、宇宙マフィアがあんな艦隊を持っているなんて、初めて知りました。彼らの軍事力は、星系軍以上の脅威ですね。」

グリユーエルが言った。

「先生、今の話じゃ、この船は、光学映像だけでなく、レーダー映像、おまけに超光速跳躍の航跡まで偽装できるんですかあ？」

チアキが言った。

「そうだよ。」

「それだけじゃなく、宇宙マフィアの艦隊からも、星系軍の艦隊からもこの船は見えないんですねえ。」

そんなことができるなんて、私たちは、一体どんな船に乗っているんですか。

軍事機密かもしれませんが、出来ればこの船の本当の姿を教えてくださいませんか。」

チアキが言った。

「王女様、かまいませんよね。」

・・・では、私から、我らが第一艦隊の、副官候補生チアキ・クリハラ殿にご説明しよう。機動空母グランドマザーの本当の姿を。」

おい、立体モニターに、グランドマザーの全体像を出せ。」

ミツキー艦長が言った。

「了解。」

モニターに映ったのは、円柱のような物体だった。

それは、幾何学的な立体のようで、船乗りが愛する船のイメージとはほど遠かった。

円柱の側面に滑走路のような筋が縦に何本もついていた。

「なんですか？ この幾何学模型のような形は。」

「これじゃあ、大きさがさっぱり分かりませぬえ。」

「クイン・セレンディピティぐらいの大きさではないでしょうか。」

「すると、長さは、2〜3キロですか。中継ステーション並みか、それより大きいのですかねえ。これホントに宇宙船ですか。」

「しかし、こんな形で、船として飛べるのが不思議ですよええ。推進剤の噴射口も見当たらないよ。」

「これが、重力制御推進ってヤツですか。」

「でも、これじゃあ超光速跳躍はどうやるんでしょう。」

「私たちの船はどの辺にいますか。確かドックのような所に入ったのはモニターから見えましたけど。」

「そもそも、他の船から見えないって、どんなステルス機能ですか？」

ヨット部員達は、口々に感想を述べた。

「なかなかよく分かっているね。もともと、この船は或る目的のための自走式の宇宙基地として設計されたものさ。その機体を軍用船として使っているからね。大きいはずさ。」



それから、この船が他の船から見えないのは当然さ。だって、我々は今、通常空間にはいないからね。」ミツキー艦長が言った。

「ええー！ こんな大きな船が通常空間と亜空間の間を出入りしたら、すごい時空震が発生するでしょう？」

セレニテイの黄金の幽霊船、『クイン・セレンデイピテイ』と遭遇した時なんか、弁天丸は、たいへんな衝撃を受けましたよ。

でも、この船の場合は、いままで、そんな様子はまったく無かったですよ。」

茉莉香が言った。

「そういうことも出来るようになったってことだ。キャプテン茉莉香。」

この船は、亜空間と通常空間の間の移動するのに、時空震とか重力の異常をほとんど起こさない。電子戦でも、電磁波だけでなく、重力波も自在にコントロールして放射出来るんだよ。もちろん、重力波は、推進力としても利用する。」

「時空トンネル航法ですか？」チアキが言った。

「さすが、お嬢の見込んだ『妹』だね。」ミツキー艦長が言った。

彼女も、改まった口調から、元のタメ口に戻ってきた。

そういえば、いつのまにか、彼女もクルーも准将、大尉などという軍の高官にもかかわらず、帝国軍の制服の上着を脱いでしまって、好き勝手な服装で勤務している。

「はあ……。でもそれは、宇宙物理学でも、その可能性が予想されていただけで、誰も解けなかった『百年問題』というか、『考えても無駄な問題』とされていたんじゃないんですか。

ほんとに実現したんですか。ビックリですねえ。」

誉められて、少し顔を赤くしたチアキが言った。

「そういう問題を解いたって人がいるってことだろうね。」

実際乗ってみると、これまでの宇宙旅行を全く変えてしまう、ものすごい発明だと分かったよ。これまでの重力制御という、宇宙船内の人工重力とか、超光速跳躍をする際の時空震の発生装置くらいだろう。コイツと比べると、そんな現代技術がものすごく幼稚に見えるね。

超光速宇宙船としても、すごいんだぜ。

まず、とても速い。この艦なら、このような銀河の辺境から核恒星系まで普通の船が超光速跳躍を使っても一週間近くかかるところを、ひとつ飛びで行けるんだからね。

そして、とても正確に飛べる。タツチダウンの誤差が殆ど無い。今まであんなに誤差修正の苦労をしたのは何だったんだらうと思うね。

そして、安全だと言うこと。タツチダウンの時の融合爆発なんて、原理的にありえないそうさ。」

「そんなにスゴイんですかあ。」ヨット部員が言った。

「ああ、まったくお前の親父さん達の仕事は、銀河系の社会を変えてしまおう、スゴイ発明だねえ。」

ミツキー艦長はそう言って、サーシャの方を見た。

「何がスゴイ発明ですか！

父さん達は、アンドロメダ銀河まで大航海の出来る船が欲しいという女王様の夢に答えようとしたんですよ。

それを、貴方たちは勝手に恐ろしい兵器にしてしまつて。

なにが、機動空母グラントマザーですか。そんなもの、絶対に許せません。」

サーシャが激しい怒りを込めて言った。

いつも穏やかで、周りの人を気遣うサーシャらしくない、激しい感情の爆発に、ヨット部員たちは、驚いた。

「サーシャ、前にも話したが、どうか分かつて欲しい。

母上も夢は捨てていない。むしろ、そのためにこそ、今は、まず、銀河聖王家と銀河系の再統一が必要だ。

もちろん、この船を兵器としてみだりに使うことは、私も決して許さないつもりだ。こいつの恐ろしさは、よく分かっている。グラントクロスとは比べものにならない。

それに、『ミルキーウェイ計画』つまり、このような船で出入り口を管理して、核恒星系から銀河系外縁部の星々まで時空トンネルを張り巡らせ、安全で迅速な宇宙旅行を実現する計画は、お前たちの願いでもあったのだろうか。

そのネットワークを管理できるのは、実際のところ、帝国宇宙軍しかないのは、お前も、父親も分かっていたのだろう。だから、納得して、この船を我々にゆだねたんだろう。

すでに『ミルキーウェイ計画』はこの船を使って実証実験に成功し、ゲート基地となる船の量産タイプの研究開発もステープル重工業で進んでいるじゃないか。

お前の夢は、銀河帝国が必ず実現する。」

クリス王女が言った。

「そう信じてました。

でも、海賊狩りの話を聞いて、本当に心が凍り付きました。

だまされたんじゃないのかと。

開発が難航していた重力制御推進の戦艦が、この船の時空トンネルの技術を応用して、あつという間に実用化されるなんて、思いもありませんでした。

それに、あんな巨大な戦艦を作るなんて。しかも、試作機が勝手に持ち出されて、海賊狩りの名目で大勢の人たちを犠牲にするなんて……。

やっぱり軍隊は、兵器を持つと必ず人を傷つけるために使うのかと失望しました。

所詮、私たちステープル家は武器を売る『死の商人』だから、私たちの願いは『きれいな事を言っているだけ』と、軽んじられていたのかと悲しくなりました。

ステープル家は、武器を作って売る家業だからこそ、人の命を救う医学研究や病院への寄付や支援には、とりわけ熱心に取り組んでいるんですよ。

私たちのそういう思いがおわかりですか。

今は、とても信じる気になれません。」

サーシャが言った。

「私は、なによりも、サーシャに海賊狩りのことを直接詫びて、分かってもらうために、海明星に来たのだ。どうか、帝国宇宙軍を信じて欲しい。

この前もヨット部員の前で話したように、あの時、私は自分の思いに囚われ、周りが見えず、自分のしていることの愚かさや、銀河帝国の王女の責任の重大さに、気がつかなかった。未熟だった。

何度でも詫びよう。」

「.....」

沈黙が続いた。

「王女様。あなたが今、座っていらつしやる玉座が、この船にある意味をご存知ですか。」

ジェニファー・ブラウン大尉が、沈黙を破って言った。「もちろん知っている。」

聖王家の者は、どのように困難な時も常に国民と共にあるという証（あかし）だ。」  
クリスの声は、腹の底から絞り出すようだった。

「なるほど、度胸というか、肝は据わってますね。さすが、アン女王の娘だね。気に入ったよ。」

ジェニファーの話し方は、タメ口が変わっていた。

「先輩。今のクリス先生の言葉は、大人の言葉遣いで、意味がハッキリわからないんですけど……」

一年生達が小声で、茉莉香に聞いた。

「その意味は、私にもわかるなあ。」

どんなに苦しい時でも、王族は先頭に立って、みんなと一緒に行動するってことよ。戦うときはもちろん、危なくなっても自分達だけ先に逃げたりしないって事よ。

海賊船の船長も、同じなんだけだね。

ねえ、ヒルデ、そうでしょ。前に貴方の乗った戦艦と戦ったとき、あなたもそう言うていたわよね。」

茉莉香が答えた。

「そうですね。今思い出すと、ちょっと恥ずかしい気もしますが。」

ヒルデが答えた。

「でも、あの時のヒルデは、堂々として、本当に立派でしたよ。」

グリューエルに誉められて、ヒルデは本当に恥ずかしそうだった。

「サーシャさん。実は私たち、本当は軍人では無く、民間人なんです。」

昔、ミッキーと一緒に働いていた私の民間宇宙飛行会社の仲間なんです。

私が社長ね。

昔、新米飛行士のミッキーが、飛行キャリアと年齢を偽って経験十分の操縦士だと自称してやって来たのを、私が雇ってあげたのよ。うちの会社も人手とお金が足りなかったからね。

ミッキーは、安月給で良く働き、ここにいるみんなに鍛えられて、一人前のパイロットになったの。

でも、ガルビオがミッキーの将来を心配したの。いくら家庭の事情で高等教育を受けられなかったといっても、この子の才能は惜しいって。

そこで、ミッキーは、働きながら皆に勉強を教えてもらって、帝国軍の士官学校の入学試験に合格したの。学費のいらぬパイロットの学校はあそこだけだからね。

そして、ミッキーは帝国軍に入って、ジェネラル（将軍）にもなったの。帝国軍、特

にパイロットは、ホントに実力主義だからね、女でも異星人でも実力があれば認められるんだよ。

とはいえ、サーシャさん。聞いて下さい。私達の方は、銀河帝国のホントにタダの国民です。その国民の声も聞いて下さい。

帝国宇宙軍、いや帝国軍全体は、女王様の軍隊ではありません。私たちの軍隊よ。国民の国民による国民のための軍隊よ。私たち帝国の国民は、そう思っているわ。

学校の授業でも習ったでしょうけど、私達のご先祖さまの移民航海は、苦難の連続。スペクトルG型恒星での可住惑星探しが失敗の連続で難航し、移民船の故障にも悩み、精神的、物理的にもこれ以上長い航海は限界かと思われた時によく発見した可住惑星が、今のクリスタルスターよね。

でも、その星は、赤色巨星、レッドクリスタルを母星としていたのよね。

しかし、もうこの星に住むしか、選択肢は無かったのよ。

当時はそう思ったのね。それで王室も国民も必死で国作りに励んだのよ。

その結果は大成功。こんなに良い自然環境と資源に恵まれた星系はそう無かったわ。

でも、赤色巨星はいつかは大膨張、大爆発、その前に太陽フレアで惑星を焼き尽くすでしょう。

そこで、未だに正確に予測できないその時に備えて、銀河帝国は30億人の帝都とそ



の周辺星系の星々の国民を移民船に乗せて避難させるといふ、途方も無く大きい避難準備体制を常に維持しているのよ。

その実行部隊が、帝国軍よ。帝国宇宙軍の膨大な数の軍艦は、本来、その時に私たち国民が乗るために建造されたのよ。そのために税金を払ってるんだから。

そして、その避難準備体制を続けるために、帝国の国民は、今も、男も女も2年間の兵役があるの。いざとなったら、誰でも宇宙船の操縦が出来るように訓練するのね。

愛する家族を守るため、当然だわ。

私もいざとなったら、うちの子達のために、銃を取って、船に乗るわ。」

「あの一、マリオさん。『うちの子達』って、社長のお子さんって、独身男性はいるんですかあ？」リリイが小声で聞いた。

「独身も、男性もいるよ。ビーグル犬が5匹だけどね。名前は、チャーリー、ルーシー、ライナス、・・・」マリオも小声で答えた。

「そこ、黙りなさい。」

そういうことだから、サーシャさん。貴方たちの開発したこの船について、ミッキーから協力を頼まれたときはビックリしたけど、とても嬉しかったの。

私たち、こんな船が出来るを待ち望んでたんだってね。

この頃は、レッドクリスタルからの磁気嵐が多くて、通信も乱れるのよね。不安観じ

ている国民もいるの。

だから、帝都と周辺の星系の国民30億人にとって、この船は約束の『方舟』よ。この船は私たち国民のもの。軍人なんか好きにさせない。

まして超兵器なんか悪用させるもんですか。

そういう意味では、銀河聖王家の今度のゴタゴタは、報道規制が敷かれても、口コミで知ってる国民は多いし、赤薔薇家のあの男のやり方には怒ってる国民は多いわ。

あいつらが銀河聖王家や帝国軍を牛耳ったら、私たちの銀河帝国が変質しちゃうつね。

だから、あいつらには負けられない。

どうか、サーシャさん。私たちの帝国軍を、私たち、帝国の国民を信じて下さい。」

ジェニフアーが言った。

「ありがとうございます、ブラウンさん。

でも、私は、まだ気持ちの整理が付きません。もう少し考えさせて下さい。」

サーシャが小声で言った。

「サーシャ、また話そう。」クリスが言った。

茉莉香も、チアキも、他のヨット部員も本当に驚いた。

サーシャや、ジェニフアーや、クリス王女の話から、海賊狩りの背後に何があったか、

宇宙海賊として飛び回っている「俺の宇宙（うみ）」が全く変わってしまったような、大きな動きが、自分達の知らないところで進んでいたことがわかったからだ。

「俺の宇宙」は、今までも、そしてこれからも、昔と変わらずに、自分達の前に存在するのだと思っていたのだから……。

「あの……お、おトリコミ中、失礼しますが、さつきから何度も、弁天丸から、オデットⅡ世号の船長、加藤茉莉香さん宛てに通信が入ってますが……。」

マリオが言った。

「……で話が出来ますか。」

「できますよ。船長席の前へどうぞ。……今、通信つなげます。」

ミツキー艦長が席を譲った。クリス王女も玉座から席を外した。

その時、モニターに、ミーサが少し怒った顔で現れ、質問を次々ぶつけてきた。

「茉莉香！何度も呼びかけているのに。もう、心配してたのよ。」

それに、いきなりジャンプしたけど、マフィア達に追われて、本当に大丈夫？

それで、いったい、今どこにいるの？

マフィアの艦隊が、いきなり、10隻も現れたので、本当に心配してたのよ。」

「いやあ、心配かけてごめんさい。その点は大丈夫です。こっちは安全です。」

「安全って、どういうこと？亜空間にでも隠れているっていうの？」クーリエが言った。

「ナハハ、こつちは『大船』に乗った気持ちなんですけどねえ。簡単に言うよ。」

「……まあ、船長が大丈夫というなら良いわ。ひと安心ね。はあく。」

ミーサは、ため息をついて、疲れた表情をし、さらに気持ちを切り替えて、言った。

「それと、例の帝国海賊との手打ち式の場所と日程が、決まったわよ。場所は、銀河帝国の母星レッドクリスタル星系の外縁部よ。」

「やっぱり、予想通りかなあ。」

でも、行く以上は、覚悟がいるってことよね。」

船長、分かっている？

銀河帝国の政情も不安定になってきたという情報もあるわよ。」

「分かっていますよ。焦げ臭い雰囲気は。」

きつと、仲間になれとか、言われるんでしょうねえ。」

「それを言うなら、『きな臭い』よ。いい加減に覚えなさい。」

ミーサは、やっぱりまだ機嫌が悪かった。本当に心配していたようだった。

「はあーい。ミーサ、心配かけてゴメンなさい。」

「もういいわよ。あんまり心配かけないでね。私たちもこつそり尾行していたから、船長から連絡が無いのも仕方がないんですものね。」

「それで、どんな人たちなんだろうね、帝国海賊って人たちは。ちょっと楽しみだなあ。」



茉莉香は通信を切った。

「さあ、もう今夜は遅いから、消灯だ。各自、就寝。」

この船は速いから、今晩中にユニバ星系に着く。宇宙大学本部のある惑星アカデミアには、明日の朝にシャトルで着陸だ。

入学希望者用の見学ツアーを予約してあるから、早起きしないとね。」

「はい、先生。」

少女達が返事をするのと同時に、艦長のミツキーが言った。

「グランドマザー、発進。」

船のモニタースクリーンの中央に七色に輝く光の輪が見えてきた。その輪が広がっていき、その中を船が通過していく様子が映し出された。輪は次々に現れては拡大し、その中を船が通過していった。次第に輪が現れる時間の間隔が短くなり、やがてモニターから光が溢れ、真っ白になった。

すでに亜空間を漂っていたグランドマザーは、すさまじい勢いで目的地の空間を目指しているようだ。加速度は全く感じられない。

「巡航速度に達しました。約4時間でアカデミア星に着きます。」

ですから、みなさん、通常空間を飛ぶ速度に直してしまうと、ただいま、時速1万光年です。」

パイロットのガルビスが言った。

「ええー！ 超光速跳躍を重ねても、弁天丸では核恒星系まで、普通は一週間近くかかるのに……。」

茉莉香が驚いた。

「速すぎるから、到着後、アカデミア星の近くの亜空間で、明日の朝まで停泊ですよ。」

目的地の時間に、こちらが合わせないとね。ハハハ」マリオが笑った。

3—8 弁天丸 ブリッジ（たう星系内）

一方、こちらは弁天丸ブリッジ。

「なあに、あの船の大きなブリッジは。茉莉香ちゃん、今どんな船に乗ってるの？」

おれのばあさん号って、確かボロ船だったはずよねえ。」

クーリエが言った。

「船長の映像の背景に映っていた様子からすると、あれは、帝国軍のハイレベルの軍艦だな。銀河聖王家のメンバーが乗るような船だ。玉座の一部が見えていた。」

シュニツアーが言った。

「銀河聖王家のメンバーって、まさか、あいつが聖王家の一員だっていうの？」

帝国海賊の女じゃなかったの。」

「そこまではつきりした真相は、まだ分からないわね。船長はもう、知ってるかもしれな

いけど。

どうせ、行けば分かるでしょう。

弁天丸、出発しましょう。めぎすは、銀河帝国の中心、レッドクリスタル星系。星系への進入許可も出たしね。

あそこは、海賊船ではめったに行けないところよ。」

ミーサは言った。

3—9 機動空母グランドマザー 船内（超光速飛行中）

先ほどのやりとりを振り返りながら、ヨット部員は部屋に戻ろうとしている。

「お姉様、先ほどのジェニファーさんの話は、興味深かったですね。」

銀河帝国の底力というか、強さの秘密を垣間見た気がしましたわ。」

ヒルデが言った。

「そうですね。国民の強い支持があつてこそ、銀河聖王家は三千年の統治を続けることができたのですものね。」

それよりも、私は、クリス王女様がおっしゃった『銀河聖王家の再統一、銀河の再統一』という言葉に驚きました。

銀河帝国は、私たちの知らないところで、大きく動き出していたんですね。例の海賊



狩りの船がその新兵器だったなんて、思いもせませんでした。

それに、私たちが、クリス王女様が白鳳女学院の先生として潜入する手助けをセレニティ王室から頼まれたと言うことは、我々の王家はすでに女王陛下の側に付くと決めていたんですね。

状況を自覚していなかった自分の至らなさが、ちよつと恥ずかしいです。」

「それにしても、茉莉香さんだけでなく、チアキさんまで王女様の副官におなりですか。お姉様の言うとおり、あの人たちと一緒にいると、やっぱり予想外の出来事に巻き込まれますね。退屈している暇がありませんわ。」

「そうですね。まだまだ、面白いことが起こりそうですわ。」

サーシャには、皆、どう声をかけて良いのか、分からなかった。

この子はいったいどんな重荷を背負っているのか、普通の女子高生には想像ができなかったからだ。

そんな雰囲気破って、メリーがサーシャに話しかけてきた。

「シユミレーターの時ありがとうございます。ごさいました。」

私、サーシャ先輩がそばにいてくれたので、とても心強かったです。

結果は、残念でしたが・・・。」

「残念で良いのよ。軍艦のパイロットの適性なんか無い方が良いのよ。」

貴方は医者になるために海明星へ留学してきたんでしょう。

私も医学部志望なのよ。医学部では一緒にかんばりましょうね。」

「はい。頑張ります。」

でも、先輩は本当にお強いんですね。尊敬してます。」

「それは、ちよつと過大評価というか、恥ずかしいねえ。」

サーシヤは微笑んだ。

サーシヤの笑顔を見て、ヨット部員はホットした。

「あ、サーシヤが笑った。良かった。」

ところで、ねえ、ウルスラ。さっきのシユミレーターって、ゲームマシンみたいだったけど、パイロットの適性評価も出来るらしいよ。私たち、テストされてたんじゃないかな。

それで、結果を聞いてみたのよ。私、Aだったよ。ウルスラはどうだった？」

リリイが、ちよつと得意げに言った。

「いいや、私は、ミッキー艦長からは、聞きたいことがあるから後で話したいって言われた。人前で言えないヒドイ成績かなあ、ハハハ・・・。」

ウルスラは自信がなさそうだった。

チアキも、先ほどのやりとりを振り返っていた。

「銀河聖王家の王女様や、ブラウン社長のような大人が、これだけ頭を下げて頼むなんて、サーシヤは、いったい、どんな秘密を隠していたの？」

「そもそも超兵器って何なの。」

「ミルキーウェイ計画って何なの。」

「そんなの聞いてないよ。」

「もう、海賊狩りどころの話ではないわねえ。王女も、ただのツツパリ・ワガママ娘というわけでもなさそうだし……。」

「チアキは、サーシヤの秘密を想像しながら、部屋に戻った。」

「部屋に戻ると、チアキは、クリス王女から頼まれた副官就任の件について、父のケンジョーに相談するために、TV電話をかけた。」

「どうだい、チアキ、練習航海は。」

「こっちは、例の帝国海賊との手打ち式に向かっているとこだ。」

「それは知ってる。茉莉香のところへも弁天丸から連絡があったのを聞いてたから。」

「それで、こっちのほうは、チョットたいへんな出来事の連続で。相談があつてね。」

「チアキは、クリス王女の副官に就任するよう求められている件をケンジョーに話した。」

「ええ?! …… 銀河帝国の女王の娘が生きていたのか。それは、本物か?」

「本物よ。セレニティ王宮からも身元保証つき。」

それに、今乗ってる帝国軍の軍艦がすごい船で、間違いないでしょう。」

「ふうーん。．．．．．そうか。．．．．．」

ケンジョーはしばらく沈黙した後、言った。

「まあ、副官の件は、お前が決めれば良い。」

お前ももうじき18歳だからなあ。大人として、自分の人生を決める時がきたんだな。

思えば、あつという間だったかなあ。」

「何、変なこと言っているの。まあいいわ、反対じゃ無いのよね。」

それから、良い機会だから、一度、聞いておきたいんだけど。」

「なんだい。」

「私の、死んだお母さんって、どんな人だったの？」

名前は？

写真はあるの？

考えてみると、今まで、全く知らなかったのよね。自分でも不思議だけど。」

「ああ、お前は、小さい頃のことを覚えていないんだねえ．．．．．」

お前のお母さんも宇宙海賊で、お前が一才になる前に

『ヤバイ仕事ができたので、行ってくる。片づいたら必ず戻ってくる』

と言つて、海賊船に乗つて行つたまま、まだ戻つてこないんだ。

お前が小さい頃、その話を教えたら

『明日、帰ってくるの』

『今日は帰ってくるの』つて、

毎日、毎日待ち焦がれて、いつも船窓から星空を眺めて暮らしていたのさ。

それで、こちとらあ、たまんなくなつてなあ。

『母さんは死んでるんだ』つて言つちまつた。

実際、海賊にはよくあることで、死んでるから、帰つて来れないんだらうつてね。」

「なに、それ。ホントいい加減ねえ。

で、名前は？ 写真はあるの？」

「名前は、アンドロメダと名乗つていた。彼女も海賊だから、本当の身元とかは、よく分からぬから。」

「だけど、いい女だったなあ。強く、賢く、美しく。それで、いつも仮面をつけててなあ。だから、写真はないよ。写真は嫌いだと言つてたんだ。」

「なに、ノロケてんのよ、親父！」

それに、なにが仮面よ。ヒロインが仮面なんて、大昔の『空想科学小説』じゃあるま

いし、アナクロもいいところよね。

で、その後の消息はなにか分かってるの？ お母さんを探したの？」

「ほら、あいつも海賊だからさあ、探すつて言つたつて、どこにいるか分からないわけだ。バルバルーサで待つている方が確実だと思つてなあ。

向こうからは、いつでもバルバルーサに連絡が取れるはずなんだし……。

チアキは、話を聞いているうちに父に腹が立つてきた。

『父も父なら、母も母。なんていい加減なのか』と思つた。

「もういいわ。そんないい加減な話はもういいわ。

それじゃあ、副官のことは、私やつてみるよ。

茉莉香は、広い海に出たくて堪らないんだけど、茉莉香ひとりで行かせる訳にはいかないし……。この先の進路も、どうするかまだ決めてないけど、とにかく、茉莉香と一緒に広い海（うみ）に出てみる。」

「ああ、きつとそう言うと思つてたよ。」

ケンジョーは、あつさりと笑顔で頷いた。

父の返事を聞いて、チアキは通信を終わつた。

母親のことは宇宙海賊としての名前だけしか分からなかつたが、親父が今も母親に惚れていることが分かつて、チアキはすこし嬉しかった。

そして、チアキは、自分が小さい頃から船窓の前に立って星空を眺めるのが大好きだった理由が分かった様な気がした。

「宇宙海賊アンドロメダ・・・か」チアキはつぶやいた。

## 第三章 練習航海2 宇宙大学

3—10 宇宙大学（惑星アカデミア）

白鳳女学院ヨット部一行は、朝早く、女子校の制服を着用して、グランドマザーからシャトルで出発した。一行は、惑星アカデミアの衛星軌道にある中継ステーションを経由して地上に降り、宇宙大学本部に向かった。クリス王女も引率教師に戻って同行している。

緑の木々がうつそうと茂った都市の中に、煉瓦色で統一された建物が幾つも並んでいた。そこに、宇宙大学の本部や様々な研究所、学生寮、教室などがある。もちろん、宇宙大学全体は、この本部都市だけでは収まらず、この星とこの星系のあと二つの可住惑星、それに星系内の数知れないスペース・コミュニティで構成されている。

一行を乗せたコミュニーター車は、とある建物に横づけされた。

建物の玄関に、学生らしい男女二人が待っていた。今日の案内係である。

「ようこそ宇宙大学へ。」

「みなさん、いらっしやい。歓迎します。」

「初めまして、お世話になります。」各々が、挨拶した。



「では、まず始めにガイドンス映像をご覧下さい。」

一行は、立体スクリーンのある部屋に案内された。

「ようこそ、宇宙大学へ。私は、宇宙大学宇宙歴史学科の4年生、ゲオルグ・ヘディンです。これから私が宇宙大学へ入学するまでと、入学してからの生活を、ご紹介します……」

興味深い映像が続くのだが、白凰女学院のヨット部員の中には、早くも居眠りを始める者もいた。

「ウルスラ、こら、起きなさいよ。」チアキが肘でつついて、起こした。

「いやあ、昨夜、ミツキー艦長と話し込んだ後、寝られなくてさあ。睡眠不足で……」

「あんたにしちゃ、珍しいわねえ。」

「ハハハ……」

「ねえ、チアキちゃん。チアキちゃんは、船の中で生まれて、船の中で育ったんでしよう。」

「そうだけど。それがどうしたの。……それから『ちゃん』じゃない。」

「そうかあ……、あのね……」

白凰女学院ヨット部一行は、映像を見た後は、都市内の図書館、博物館、教室、学生寮のモデルルームの見学、……そして昼食、さらに模擬授業体験とつづき、午後3時の

ティータイムとなった。

案内役の女子学生が、サーシャに近づいて来て、言った。

「サーシャ・ステイプルさんですね。お会いできて光栄です。

これからお茶の時間なんですが、学生会館のカフェにご案内しましょうか。」

サーシャの顔が、少し赤くなった。

「ええ。ぜひお願いします。私もカフェを訪ねるのをとても楽しみにしてきました。

でも、いざ訪れるとなると、少し恥ずかしいですね。

それから、学生さん達の憩いの場に、私たちがお邪魔して、ご迷惑ではありませんか。」

「いえいえ、お気になさることはありませんよ。私たちこそ、伝説のカップルのお嬢様が

お見えになると聞いて、楽しみにしておりました。」

話を聞いていた茉莉香は、驚いた。

「え？ え？ 伝説のカップルって、だれ？」

「ふふふ……。行けばわかるわよ。」サーシャが笑って、案内役の女子学生とともに、先に学生会館に入っていた。

### 3—11 カフェ（宇宙大学・学生会館）

宇宙大学の学生会館は、大学生が自主的に運営する大学生の憩いの場、たまり場であ

る。外観だけは古めかしい煉瓦造りを維持しているが、内部には最新の設備、広々とした勉強室、会議室もあり、カフェもある。カフェは夜は酒場にもなる。

学生会館は、基本的に大学生のボランティア活動によつて運営されている。なかでも、学生会館のカフェで働く仕事は、ボランティアの学生にとつて人気がある。特にウエイトレスやウエイターの仕事は、大人気だ。なぜなら、カフェは、宇宙大学の歴史と伝統を感じさせる場所だからである。

カフェは、学生会館の一階ロビー横にあつて、広々とした空間に、木製の床、天井が張り巡らされ、そこにクラシックな造作が施されている。テーブル、椅子などの木製家具も重厚なデザインのもが使われている

さらに、大学内外の有名人が客として訪れたり、銀河テレビのインタビュ撮影も毎週のように行われている。同じボランティアとして働くなら、こういう華やかな雰囲気の中でと言うわけである。

また、ウエイトレスの衣装は、クラシックなメイド服の雰囲気も踏襲しながらも、ミニスカ、ハイヒールである。現在の衣装は、有名ブランド・コッキー・シャネルのデザインで、自分が実にスタイルが良く、しかも美しく見えると、女子学生にもすこぶる好評である。

サーシャに続いて、茉莉香、チアキ達、ヨット部員やクリスマス先生がカフェに入つてい

た。

しかし、一步、カフェに足を踏み入れた途端、茉莉香は異様な緊張感に、鳥肌が立った。

「なに、ここ！ 何があるの？」

茉莉香はつぶやいた。

「茉莉香、あなた、また何かやったの。」

「この客の学生、半分くらいは偽物よ。警察とか軍人とか、そんなニオイがするけど……。」

チアキが小声で言った。

「さすがだなあ、お前達。一目で見抜くとは。」

その通り、私のための警備の者がいるけどね。」

クリス先生も小声で言った。

「先生、そうじゃなくて、この人達、外の方に対して何か異様に緊張してませんか。」

茉莉香が周りを見渡すと、中庭の窓から人影が動いて消え、それを追う人影も見えた。

「今の人影は、何だろう……。」

外の方で少し騒がしい音がしたが、カフェにいる警備部隊らしい偽学生の緊張が緩んだので、茉莉香達も安心した。

案内役の女子学生は、そんな騒ぎが一切耳に入らないかのように、カフェの案内を始め、さらに、こう言った。

「このカフェに来れば、必ず『伝説のカップル』の話をしないわけにはいきませんね。先ほど少し話が出てましたが、私たちが知っている『伝説のカップル』の話は、こうです。

サーシャさん、もし違っているとところがあつたら、訂正して下さい。」

・  
・  
・

今から30年ほど前に、双子の美人姉妹が宇宙大学に入学しました。姉は数学、妹は惑星環境開発学の分野で、難関の奨学金審査にパスするほどの優秀な学生でした。

そして、学生会館のボランティア当番の時が来たので、このカフェのメイドとして働き始めました。二人は、美人でスタイルも良く、メイド服がとても似合うとあって、最初から注目されましたが、しばらくするとキャンパス中の人気者になりました。

その理由は、二人は美人で優等生であるにもかかわらず、「天然」で「ドジッ子」だったからです。まず、「OTAKU」と呼ばれる先端芸術的な趣味を共通する男女のグループから人気に火が付き、一般学生にも人気広がっていったそうです。

なにせ、この二人はたいへんなドジっ子で、注文の届け先のテーブルを間違えるなんていうのは、間違いのうちには入らなかつたそうです。

注文を聞き間違え、ビックリするような料理や飲み物が届くのだそうです。調理の学

生達も、彼女達の聞いてきた『変な注文』をおもしろがってその通りに作るので、メニューに無いビックリするものが次々出てきたそうです。

例えば、「スパゲティ・ミートソース」と「ブルーベリーチーズケーキ」を注文すると、「スパゲティ・ブルーベリージャム味」と、「チーズ入りパンケーキのミートソースかけ」が届くと言う具合です。

OTAKU達は、注文と違うものが届いても、彼女たちが、

「お待ちどうさまでした。」

「ご注文は以上ですか？」

「ご利用、ありがとうございます。」

などと笑顔で礼を言ってくれるので、それで大満足。

それから、彼女達が、なぜ、どういう風に聞き間違えたのか、皆で推理して楽しんだそうです。もちろん、届いたものは、どんな奇抜なものでも完食するのが、彼らのルールです。

みんな、優しいですね。

それから、注文の品を床に落したり、お盆やテーブルをひっくり返したりして、彼女達がカワイイ悲鳴を上げるといふのも毎日のようにあったそうです。

もちろん、彼女達を怒ったり、笑ったりとか、彼女達の笑顔を曇らせることは絶対禁

止。服を汚されても笑顔で済ますというのが彼らのルールでした。

ルールを破りそうなヤツは外につまみ出したそうです。

自分達も笑いを我慢できなくなると、勘定を済まして、急いで中庭に飛び出していったそうです。

やつぱり、みんな、優しいですね。

でも、ここからが、大事な話なんですよ。

ところが、こんな人気者にまったく関心を示さない男子学生が二人いたそうです。二人は変わり者として有名でした。

いつも二人でカフェに来ては、数式を書き付けた論文を書いては捨て、書いては捨て、あるいは科学技術計算用の超高性能パソコンをずっと睨んでは二人で議論ばかりしていたそうです。

スゴイ集中力で、周りには全く関心を示さず、美人姉妹が注文を持ってきても、顔も向けずに小さな声で礼を言うだけ。コーヒーを頼んでトマトジュースが届いても、そのまま飲んでしまって、気がつかなかったほどだと聞いています。

そんなある日、二人が捨てた論文の束を姉の方が拾って、ふと読んだそうです。姉は数学が専門だったので、二人が何を研究しているかすぐに分かったそうです。

『あの二人、百年問題を解こうとしている。』

『なあに？ 百年問題って？』

『時空トンネルの実現方法ってこと。つまり時間と空間を一瞬に飛び越える、新しい超光速飛行の方法を考えているのよ。』

『そんなこと出来るの？』

『百年かかっても、良い答えが見つからない難問だから、百年問題っていわれてるの。

だから、あの子達は、解けない難問に魂を奪われているのよ。

かわいそうにねえ、人生を棒に振るよ、あの二人。』

『姉さん、私は、あのパソコンがイケナイと思うの。なんかパソコンに魂を奪われているというか、奴隷になっているわ。』

この前読んだ女性週刊誌に、へパソコンは乙女の敵と書いてあったけど、あの二人を見るとその通りかもしれないと思うわ。

本当に、かわいそうにねえ、パソコンと結婚するしかないよ、あの二人。』

そうこうするうちに、彼女達のボランティア最後の日がやってきました。OTAKU達は最終日に記念イベントを計画していたそうです。

ターゲットは言わずと知れたあの二人。姉妹の笑顔を曇らせた、ルール違反のヤツに天誅を加えようと企んだそうです。

まず、彼ら二人をいつものカフェの隅のテーブルではなく、カフェの真ん中に座らせ



るよう、予め席取りをしてブロックしておきました。そして夕方になり、まだ真ん中に座っている二人を狙って、沢山のビールをジョッキで注文したそうです。

「ダメでしょ、飲み過ぎよ。こんなに沢山のビールなんか注文して・・・。」

と姉が言っても、

「いやあ、ねえさん、今日で二人のボランテアは終わりでしょ。客のみんなで、二人が無事に勤めたお祝いの祝杯をあげたいんですよ。」

などと言つてごまかしたそうです。

もちろん、姉妹が危ない手つき、足取りで、例の二人の側を沢山のジョッキを運んで通りかかるよう、ビールを注文するテーブルの位置を計算していたそうです。

こういうことは知恵が回るんですね、O T A K Uの男子つて。

姉妹が例の二人の側を通りかかった時を見計らつて、O T A K U男子は姉妹にいろいろ声をかけたそうです。料理をあれこれ注文するか、メイド服やストッキングが汚れていると注意するとか、気を取られて手元、足下が怪しくなるようにね。

その結果、まず妹が服が汚れていると言われて後ろを振り返つたその時に、手に持ったビールジョッキを例の二人のパソコンにぶつけてしまい、イケナイと思つた瞬間には足を滑らせて、悲鳴を上げてテーブルをひっくり返してしまつたそうです。

姉も慌てて、ひっくり返つた妹に近づこうとして、ビールでぬれた床で足をすべらせ

しまいました。ちょうど、例の男二人は、ひっくり返って床に落ちたパソコンや論文を拾おうとかがんでいたのので、その上に、姉は手に持ったビールジョッキごと、悲鳴を上げて倒れ込んだそうです。

あまりの惨状に、OTAKU男子達は青ざめて、凍りついてしまったそうです。

そして、例の二人の男うちの一人が、妹に声をかけたそうです

「大丈夫ですか？お嬢さん、おケガはありませんか？」。

「いえ、貴方こそ、おけがはありませんか。論文とか、パソコンとか、ダメにしたんでは……。」

妹が視線を向けた先には、姉の膝の下で変形して凹んでいる超薄型のパソコンとか、ビールを飲んで床の上で赤くなっている論文の束があつたそうです。

「いや、気にしないで下さい。大丈夫、大丈夫」

と例の二人は、むしろ姉妹を気遣って安心させようとしているのですが、実際のところ、二人とも、とても落ち込んでいるようでした。

「私、ロツテ・ケストナーと申します。ロツテと呼んで下さい。こちらが、妹のミーシャ・ケストナーです。ミーシャと呼んで下さい。」

あのー、大事な論文やパソコンをこんな風にしてしまって、本当にごめんなさい。「ああ、いやいや、お気になさらないで下さい。」

ああ、まだ、名乗ってませんでしたね。どうも、初めまして。私は、レイ・ブライトベリーです。レイと呼んで下さい。」

「初めまして。私は、ジョージ・ステイプルです。ジョージと呼んで下さい。」

男子二人は、初対面の挨拶をしました。やはり、美人姉妹のウエイトレス姿は、それまで三ヶ月の間、まったく二人の目に入っていなかったそうです。

挨拶の間も、二人はビールでぬれた論文やつぶれたパソコンに時々目をやっては、とても落ち込んでいました。

その姿が痛々しく、姉妹は、申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。

そこで、姉さんのロツテが良いことを思いつきました。

「あの・・・レイさんとジョージさん。今週のダンスパーティーなんですが、お二人はご予約がおありですか。」

「・・・?」

もちろん、その男二人に予定などあるはずは無く、ダンスパーティーのことも聞かれて初めて知ったそうです。

「あのー、お詫びと言っては何ですが、ダンスパーティーに四人で行きませんか。気分転換になりますよ。」

気分転換して元気を取り戻せば、また研究を再開できますよ。」

姉のロツテが言いました。

「そうですよ。気分転換ですよ。ジョージさん、さつきは本当に済みませんでした。私  
が最初に転んだせいで、大切な……。」

妹のミーシャ・ケストナーが、自分を責めて、今にも泣きだしそうな表情でわびを言  
い始めたので、姉妹を泣かせまいと思つたジョージ・ステープルさんは言つたそうです。  
「行きましょう、ミーシャさん、行きましょう。」

貴方みたいな美しい人と一緒にダンスパーティーなんて、なんか急に嬉しくなつてきま  
したね。なあ、レイ。キミも嬉しくなつてきただろう。ハハハ……

私は、実はダンスパーティーって、初めてなんですけどね……。」

「ここまで話せば、おわかりでしょう。」

こうやって、ジョージとミーシャ、レイとロツテという二組の伝説のカップルができ  
ましたとき。めでたし、めでたし。

サーシャさん、お父様のジョージ・ステープル様には、これまでも宇宙大学にたいへ  
んなご寄付を頂いております。

例えば、窓の向こうに見える白い大きな建物、ステープル記念医学総合研究所と、ス  
テープル記念大病院もご寄付で建てられ、今もご援助頂いております。

おかげさまで、学生は無料で治療が受けられます。私たち学生からも、御礼申し上げ

ます。お父様お母様によろしくお伝え下さい。」

「ありがとうございます。皆さんの言葉、父と母に伝えます。」

それから、補足という程のこともないんですが、母は、今でも自分のことを『天然』とか『ドジツ子』だとは思ってませんよ。」

「ハハハ……。そうですね。そこなくっちゃ。」

「それから、母はその事件で大事なことが分かったそうです。それは、『モノにも心があ』る』ということですよ。」

具体的には、どういうことかというところ、その事件以来、二人が歩いていると、あちこちでパチンパチンという音がするようになったそうです。

音のしたところで、

『今の音は何?』

と聞いても、皆、そんな音は聞いてないと答えたそうです。

やがて、二人が中庭を歩いているときに、その正体が分かったそうです。

二人の姿を見ると、芝生の上やベンチに座る学生の膝の上に居たパソコンというパソコンが一斉にアタツシユケースという耐水・耐シヨック性能の強化外装の中に身を隠したそうです。

パチンパチンという音は、アタツシユケースが閉まる音だったんですね。

これを見て、分かったそうです。姉さんが転んで科学技術計算用の高価なパソコンを踏みつぶしたために、二人は大学中のパソコンにひどく嫌われてしまったと。」

「ハハハ、期待通りの話ですね。今もパソコンは乙女の敵です・・・かねえ。」

案内役の男子学生が、女子学生の顔を見ながら、言った。

「そうだ、大事なことを言い忘れていました。その事件の起きたテーブルがこれですよ。今もそのまま使っています。」

モノにも心があるなら、この机はどんなことを語ってくれるんでしょうね。」

「ステキ・・・。大学へ行くと、私にもそんな出会いがめぐってくるのかなあ。」

ヨット部員達はつぶやき、自分達の青春、大学時代を想像して、うっとりしていた。

サーシャは、テーブルを愛おしそうに撫でていた。

その沈黙を破って、ウルスラが言った。

「さあー、茉莉香。コスプレ、いってみよう。」

「ええー！　ここでやるのおく。」

「このメイド服、コッキー・シャネルのデザインなんだって。」

「コッキー・シャネルって、クリスタルスターで一番の売れっ子じゃないの。」

コッキー・シャネルと聞いて、メイド服を見る部員達の目つきが変わってきた。

「ねえ、茉莉香、こんな有名ブランドのミニスカ・メイド服を見たら、アンタもコスプレ

の血が騒いできたでしょ。ね、ね……。」

「当然ですわ。そう来なくっちゃ、茉莉香さんですもの。確か、見学者用の貸し出しもあるって、お聞きしましたが……。」

グリユーエルが言った。

「ええ、ありますよ。貸し出しは何着必要ですか……。」

案内役の女学生が言った。

「サーシヤはやるでしょ、当然。写真は、お母さんへのお土産にしないとね。」

「チアキちゃんも、やるんだよ。」

ウルスラが言った。

「なんでよ？イヤよ！……恥ずかしい。」

「だって、これからは、茉莉香様に、チアキ様の時代だよ。」ウルスラが言った。

「他にやる人、挙手！」

チアキの声を無視して、ウルスラが聞くと、その他の全員が手を上げた。

「じゃあ、多いから何組かにわけて、試着してみようか。一年生から五人づつかな。」

でも、グリユーエルとヒルデはまずいでしよう。」

ウルスラが言った。

「どうしてですか。私もやってみみたいです。」

お姉様もこのあいだ茉莉香さんの家でやっていましたし・・・。」

「貴方たち二人は、自重しなさい。ほら、周りの人垣を見なさいよ。ここでコスプレを披露すると、写真に撮られて、女性週刊誌にも出るかもしれないし。」

この前のヒルデのショートカット事件を思い出しなさい。

パラッチが撮ったショートカット姿の写真が女性週刊誌に掲載されただけで、たいへんなことになったでしょう。

今度、王宮から叱られたら、留学が打ち切られて、セレニティ星に連れ戻されるかもしれないよ。」

クリス先生が言った。

「はあくい。わかりました。」

グリューエルが、しょんぼりして言った。

「それから、グリューエルとヒルデは、このメガネをかけなさい。」

クリス先生は、黄色と黒の縞模様をついた細いメガネを箱から出して二人に渡し、自分もかけた。

「先生。これは、なんですか?」

「宇宙大学では、『パラッチ殺し』とか、『防虫メガネ』とか呼んでいるそうだ。

このメガネを身につけていると、メガネの存在をカメラが自動認識して、その人の画



像を写せなくするそうだ。

本来は、宇宙大学の研究機密の盗撮防止用に開発されたそうだが、プライバシーを守りたい女性やVIPにも貸してくれるんだ。」

クリス先生が言った。

そうしているうちに、最初の組の生徒達は、制服からメイド服への着替えが終わり、カフェのフロアに現れた。

メイド姿の一年生の五人は、ファッションモデルのように音楽に乗った歩き方で、一列に並んで歩いて来た。

試着用のメイド服には、生地が深紅、青、黄色、緑と派手なものもある。本来のメイド服の色は黒だが、見栄えを優先しているのだろう。

先頭は、ジェシカ・ブルボンだ。スタイルが良く、すらりと伸びた足にハイヒールと超ミニスカで、可愛いフリルがついたメイド服がよく似合う。服の色は、本来の黒である。

そして彼女は、先輩やクリス達の前まで歩いてくると、ポーズを決めて、くるりと一回転した。深紅、青、黄色、緑色のメイド服を着た他の生徒も、同じように次々とポーズを決め、そして5人がヨコ一列に並んで、またポーズを決めた。記念の3D写真を撮ってもらうためだ。

「すごい。ファッション・ショーみたい。今年の一年生はやるねえ。」  
茉莉香が感心して言った。

いつの間にか増えた人垣からも、歓声が上がっている。

こうして、この最初の5人の行動と観客の盛り上がりによって、ヨット部員によるメイド・コスプレショーが始まってしまった。

続いて、次の一年生五人組が同じように現れ、歓声を浴びた。

2年生三人が、3番目に登場して、また歓声をあびた。

ヤヨイは黒のメイド服。長身なので、まるで本物のモデルのように見栄えがして、ひととき大きな歓声を浴びた。

アイは、純白のメイド服だった。小柄で、エプロンドレスのような可愛いデザインがよく似合っていた。頭のカチューシャもよく似合っている。

ナタリアは、深紅のメイド服。

「ナタリア。お前、可愛いよー。似合ってる。普段からジャージなんか着ていないで、いつも、そういう可愛いカッコすれば良いのに。」

とウルスラから、余計な一言が出た。

「ゼツタイ、イヤです。」

そう言って、ナタリアは舌を出した。

これも、取り巻いていた観客からは、可愛い演出にみえてしまい、ナタリアはさらに歓声を浴びた。

「さあ、今度は私たちよ。着替えに行きましょう。」

「イヤよ。私は。」

チアキがまた言った。

しかし、ウルスラとリリイが

「チアキサマ、」

「オヒメサマ、」

「ワガママをおっしやつては、ナリマセヌ、」

「ナリマセヌ・・・ホホホホ。」

と、作り笑いをしながら、『オイ、コラ、ヤメロ』などと言って渋るチアキを両脇から挟んで連れて行ってしまった。

「チアキは嫌がつてたけど、大丈夫か？」

クリスがグリューエルに聞いた。

「大丈夫ですわ、先生。」

きつと、チアキさんが一番最初に、ノリノリで登場してきますわ。」

「なるほど、チアキは、性格も可愛いんだねえ。」

そして、三年生6人が、一列になって登場してきた。

グリューエルの予想通り、一番目は青のメイド服を着たチアキだった。モデルウォークの歩き方はなかなかサマになっていたし、ポーズの決め方もキリツとしてかつこよかった。さつきまで嫌がっていたのに、どう見てもノリノリだった。

そして、ウルスラ、ハラマキ、リリイと皆大歓声を浴びて、登場した。

5番目が、深紅のメイド服を着た、茉莉香だった。

今日の茉莉香は、宇宙大学という遠い所に着たせいとか、すっかり気楽になって、タダの女子高生の気分に浸っていた。機嫌良く、ノリノリで、ポーズを決め、ウインクまで披露して、さらに決めポーズまで見せるサービスぶりだった。

もちろん大歓声を浴びて、あちこちの機器で写真を撮す音がしていた。この時代も、機械で写真を撮すときはシャッター音が鳴るといのがお約束だった。

最後が、本来の黒のメイド服で登場したサーシャだった。魅惑的な碧眼で会場全体に視線を配り、輝く金髪を揺らしながら、すつとポーズを決めて中央に並んだ。サーシャの場合は過剰な演出は不要だった。

三年生6人はなかなかの美少女ぞろいなのだが、やはりオーラに包まれているような、サーシャの美貌が群を抜いており、一段と大きい歓声を浴びていた。

「あれが、伝説のカップルの例の娘さんらしいよ。」

「あれが、あのステープル家の娘、サーシヤかあ。」

「いやあ、サーシヤの本物を見るのは初めてだが、うわさ以上の美少女だねえ。ホントすばい。」

あちこちから、サーシヤのことを話題にする声が聞こえてきた。

「やつぱり、今日はサーシヤが主役だねえ。」茉莉香は思った。

こうして、白鳳女学院ヨット部一行は、学生会館のカフェで大騒ぎをしたのち、宇宙大学を後にした。そして、シャトルに乗って、グランドマザーに帰還した。宿泊は船内、クリスタル・スターへの移動も夜のうちに行うと、日程が決められていたからだ。

### 3-1-2 弁天丸ブリッジ

一方、こちらは弁天丸。レッドクリスタル星系へ向けて、長い船旅の途上であった。

当直のクーリエが、深夜の暇つぶしに、ネットニュースを見ていると、加藤茉莉香に関するニュースが流れているのに気づいた。

「キャプテン茉莉香、宇宙大学を襲撃!」

「女子高生宇宙海賊、大学生のハートを強奪!」

など、意味不明の見出しと共に、深紅のメイド服を着てVサインのポーズを決めた姿や、ウインクしている姿など、メイド服姿の加藤茉莉香の映像が、ネットニュースで

たくさん流れていた。

ネット・ユーザーの反響もすごい数になっている。

「あ〜〜、茉莉香ちゃん、派手にやっちゃったね。」

「宇宙大学に見学に行つたんだらう。何してんだい。」

いつの間にか、百目が後ろに立っていた。

「何やっているのよ。学校の部活行事で行つたんでしょ？」

でも、ホント、派手だけど、茉莉香によく似合ってるわね。こういうところは、母親似なのね。」

ミーサも後ろからのぞいていた。

「茉莉香ちゃん、これで銀河の核恒星系へ堂々のデビューね。知名度アップするわよ。」

おもしろいから、弁天丸のホームページにも転載しておこうつと。」

「記事によると、見学に来た女子高生多数がコスプレショーに参加したみたいだけど、他の女の子達は、ニュースの写真に写ってないね。」

う〜くん、なるほど、船長の所だけ切り取られて、載っているんだ。」

「未成年の一般市民だからじゃないかな。宇宙放送・通信コードつてやつよ。これ芸能ニュースだし。」

「そういうことは、うちの船長は、芸能人扱いかなあ。」

「なに和（なご）んでるの！

そもそも、昨日、海明星を出発して、今朝にはアカデミア星に着いているって、どうなってるんだい。おかしいでしょ。4万光年は離れているんだぜ、こっちはまだ旅の途中だつて言うのに。」

百目が、船乗りの視点で、ニュースの下に隠れている秘密に気がついた。

## 第四章 銀河帝国

### 第四章 銀河帝国

#### 4-1 帝都クリスタルスター

白鳳女学院ヨット部一行は、銀河帝国の帝都クリスタルスターの衛星軌道上の専用シャトルから、惑星クリスタルスターの地上を眺めていた。

いうまでもなく、クリスタルスターは、惑星の名前であり、帝都の名前でもある。

惑星クリスタルスターは、青い海が80%を占める美しい可住惑星である。

「あの大きな大陸が、ホワイトゲイブル大陸、資源豊かで工業都市がいくつもある。

その南の小さい島が、グリーンゲイブル島、ここが帝都の中心。

島と行っても実際は大陸なんだが、最初の移民団が衛星軌道上から眺めて、島と名付けたので、今でも島と呼ばれている。」クリスが言った。

「青い奇蹟の星ってところは、海明星といっしょだね。」

「遂に来たね。早く実際に街を歩いてみたいねえ。どんな街だろうか。」

「楽しみだなあ。」

「どうしたんですか、茉莉香さん。表情がさえませんねえ。」グリューエルが言った。



「いやー、てつきり昨日の主役はサーシャだと思ってたんだ。

でもねえ、ネットでは、私のミニスカ・メイド服姿の写真とか書き込みが大量にアツプされていて、もうビックリ。」

「やっぱり主役は、私ではなく、茉莉香さんでなくっちゃね。

ネットに出ている茉莉香さんの写真、なかなか良く写ってましたよ。ほんとに綺麗です。」サーシャが言った。

「いやー。恥ずかしいなあ、やらなければ良かったかなあ。」

「何言ってるの、茉莉香が一番ノリノリだったじゃない。」チアキが言った。

「チアキちゃんこそ、ノリノリだったじゃない。」

「私は、ノリノリじゃない！」

「アハハハ・・・」

茉莉香とチアキが、いつもの調子で言い合っているの、みんなが笑った。

「この調子では、空港のゲートで、花束抱えた茉莉香のファンが大勢で迎えてくれたりして。」

「いやあ、それはないでしょ。私たちが来るのを知ってるわけないし。」

「わかりませんわよ、茉莉香さんは、銀河のアイドル海賊なんですからねえ。」

「アイドル海賊って言葉、それいいねえ。」

空港でも、『マリカ様くくく！』って大勢のファンから声がかかってさあ。

ねえ、楽しそうでしょ。」

「私のことをネタにして、遊ばないでよね。たいへんなのは、私なんだから。」

「ハハハ……。」

やがて、白凰女学院ヨット部一行を乗せたシャトルは、クリスタルスターのメトロポリタン空港に到着した。

クリス王女が乗っているためか、シャトルの周りには、大勢の帝国軍の警備部隊が配置されていた。

「さて、空港に着いたね。

私は用事があるから、ここからはミツキーが案内をしてくれる。

あとで、また会おう。」

そういつて、クリス王女は出迎えの専用シャトルに乗り換えて、また、空港を飛び立つて行った。

「さあ、これで気が楽になった。

お嬢が抜けると、うるさい警備が少なくなつて、こつちも行動が自由になるよね。

さあ、ターミナルビルに行こう。

到着ロビーを抜けて、待っているコンピューターバスに乗ろうか。」

ミッキーが言った。

ところが、白凰女学院ヨット部一行が、到着ロビーにたどり着いたとき、それまでワイワイおしゃべりしていた部員達が一斉に沈黙して、驚いた表情をして固まってしまった。

「どうしたの。みんな？」

チアキがヨット部員を見ると、彼女らもチアキを見て、やがて意味ありげな笑顔を作つて、こう言つた。

「チアキちゃん、スミに置けないねえ。」

「隠し事してたのね。まんまと出し抜かれたねえ。」

「なかなかやるじゃないの。さすがだねえ。」

「いいなあ。チアキ先輩。」

「はあ？ 何言つてるの、みんな？」

チアキは状況が理解できなかつた。

グリユーエルが口到手を当てるに笑いながら、言つた。

「チアキさん、お出迎えの方がいらしてますよ。ほら、あなたの後ろ。」

グリユーエルが指さした方向には、赤い薔薇の花束を持った、エドワード・ドリトルが立っていた。

グリユーエルだけでなく、他のヨット部員もサーシャの屋敷で開かれたダンスパーティーの最後の記念撮影の際に、チアキと踊っていたエドワードも加わっていたので、彼のことを覚えていた。ジェーン先輩の親戚として挨拶も交わしていた。

そして、部員達の『女のカン』は、彼が誰の出迎えに現れたのか、答えをすぐに見つけたのである。

「チアキさん、クリスタルスターにようこそ。歓迎します。」

チアキに近づいてきたエドワードが言った。

「ああ……」

チアキは驚いて、そして顔を真っ赤にして、口がきけなくなってしまった。体の動きも硬直してしまったが、やっと、どうにか、エドワードから渡された赤い薔薇の花束を受け取った。

礼を言わなくちゃいけないと思いつつ、チアキは顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。

「うーん、チアキちゃん、かわいいなあ。じれったいけど。」

リリイが小さな声で言った。

その間に、セレニティ王国の在銀河帝国大使が、グリユーエルとグリユンヒルデの両皇女に恭しく出迎えのご挨拶をしていた。

これに対して、二人は皇女として堂々と挨拶を受けていた。

「おー、さすが、お姫様。いきなり、オーラが光ってきたね。」茉莉香が言った。

「ちよつとごめんなさい、チアキさん。仕事をしてきます。」

エドワードはそう言つて、グリユーエルとグリユンヒルデの両皇女、在銀河帝国セレニテイ王国大使にご挨拶をし、ドレスアップした小さな女の子二人によつて二人の皇女に、「奇蹟の薔薇」の花束が渡された。和やかに話が弾んでいるようだった。

皇女へのご挨拶が済んだところで、

「副社長、そろそろ、お時間が。」

と、ヒュー&ドリトル屋間運輸の秘書たちが、エドワードに催促している。

「うーん、もうこんな時間かあ。」

では、チアキさん、また連絡致します。今度は、ナイシヨですよ。」

チアキに近づいて小声でそういつて、エドワードは離れていく。

「あああ……」

エドワードの言葉でまた赤くなって固まってしまったチアキだった。しかし、何とかお礼を言わないと彼が行つてしまうと焦っていた。

そして、彼の姿がもう見えなくなるという、最後の最後で体が動いた。

「ありがとう！ エド！ ありがとう！」

ロビーに響く大きな声でそう言って、薔薇の花束を上に掲げて振った。

チアキの声に気がついたエドワードは、満面の笑顔で手を振って、去って行った。

チアキは笑顔を返したつもりだったが、思いがけない心遣いにちよつと涙ぐんでしまった。

白鳳女学院ヨット部一行は、バスに乗って、郊外の空港から高速道路を通り、銀河帝国の帝都クリスタルスターのメインストリート、グリーンガーデン通りに進んでいった。

この通りには、緑溢れる、幅の極めて広い並木道が続いており、両側の建物はユーロクラシック風の煉瓦造りの古風な外観を残していた。有名ブティックやレストランなどが並ぶ、観光名所でもある。

そして、一行のバスは、並木道の先にある、銀河聖王家の王宮クリスタルパレスの周りの道路を走っていった。

王宮は、何処まで続くか端が見えない程の、幅の広い五階建ての建物である。建物には、塔が、一定間隔で作られていた。塔の頂上には、丸い形をした、黄金のドームや青いドームが作られており、光り輝いていた。道路から見ると、意外にシンプルな建物である。

王宮全体は、中庭を持つ六角形の形をした建物であり、その中庭には、また六角形の

同じ構造の建物が建って、外側の建物とは建物で結ばれている。六角形の建物で二重に囲まれた中央の空間は、庭園となっており、王族のプライベート用とされている。

三千年の間に建て増しが続いて現在の形になったとされるが、古風な外観はそのまま維持されている。もちろん地下にも施設があるとされるが、外観からは想像できない。

「この王宮が、銀河の中心さ。授業で習ったろうけど、銀河標準時間も、銀河座標系もここが起点なんだよ。」

「女王様って、あそこにいらっしやるんですか。」

「まあ、公式行事が行われるときはいるだろうけど、実際には三分の一も居ないんじゃないかな。」

普段は、惑星軌道上にある王宮・第二クリスタルパレスに居るのではないかなあ。その方が便利だしねえ。」

ミツキーが言った。

その後、バスは、新市街に向かった。超高層ビルが建ち並ぶ官庁街やオフィス街を通り抜け、若者で溢れる賑やかな通りに面して止まった。

「さあ、ミルキーストリートに着いたよ。降りよう。」

ヨット部一行は歓声を上げて、通りに出て行った。次々とお店を見て回ったり、洋服や土産物を手に取ったり、記念写真を撮ったりして、楽しんだ。

その後、ヨット部員は、カフェテラスのベンチに陣取ると、海明星では見かけない様な珍しいジャンクフード、スイーツ、怪しい色の飲み物をあちこちの店からテーブルいっぱい買い集めた。

そして、

「ただきまーすー！」

と、皆で「ミルクーストリートを食べる会」を開催し、昼食となった。

#### 4-2 グランドマザー船内

白鳳女学院ヨット部の一行は、午後は、銀河系一番のお嬢様大学である帝国女学院大学、さらにミツキーの母校・帝国軍士官学校のキャンパスを見学して、夕方には空港に戻り、シャトルに乗って、グランドマザーに帰還した。

夕食をしながら、ヨット部の部員は今日の見学について話し始めた。

「今日は面白かったねえ。」

「帝国女学院って、学校を出るときに、校舎に向かって

『いきげんよう』

って、挨拶するのねえ。すご〜いお嬢様学校だねえ。びつくりだよ〜。」

リリイが言った。



「お辞儀の仕方、ちがうわよ、リリイ。

体を傾ける角度が違うのよ。こうよ。」

「ごきげんよう。」

チアキが実演して見せた。

「うわー、うまい、うまい。」

「チアキちゃん、上手、上手。」

ノリノリのチアキの実演に、ヨット部の皆は拍手、喝采した。

「ねえ。ジェシカは帝国女学院の中等部に通ってたんでしょ。どうだったの？」  
「あんまり思い出したくないんですけど、最初から最後まで、あんな調子ですよ。」

私は、白鳳女学院の方がずっと気に入ってますけどね……。」

「そっかあ……。」

ねえ、茉莉香とチアキちゃんは、帝国女学院に推薦入学で行くんですよ。

クリス先生は希望すれば大学に行っても良いとおっしゃってたし……。」

「そうねえ……。」

チアキは、まんざらでもない様子だったが、

「私は無理かな、あんなの。性に合わないというか、弁天丸の仕事もあるし……。」

「茉莉香は、士官学校の方が合っているかもね。」

「あはは……。あれもねえ……。」

茉莉香は苦笑いした。

「そういえば、ウルスラは、ずいぶんミツキー艦長に士官学校のこと、教えてもらってたよねえ。士官学校に興味があるの。」

「いや〜。」

ミツキー艦長から士官学校のパイロット科を受験するように勧められてるんだ。

女の子が、親にお金の心配かけずに自分の力だけで、宇宙船のパイロットになるには、士官学校に行くしかないってね。」

「そういえば、ミツキー艦長って、有名人だったんだね。」

士官学校に行くと、学生がたくさん集まってきたよねえ。」

#### 4-3 第二クリスタル・パレス（銀河帝国王宮）

夕食後、茉莉香とチアキは、クリスに呼ばれて迎えのシャトルに乗った。

「何処へ行くのかなあ」

「たぶん、第二王宮でしょ。」

惑星軌道にあるとミツキー艦長が言っていた第二クリスタル・パレスよ。」

シャトルの操縦席の窓から、核恒星系の賑やかな星空が見えている。クリスタルス

ターは、もう小さくなってしまった。

「うわー、星の数が多いねえ。」

加藤茉莉香は、シャトルの操縦席を覗き込んで、大きな声をだした。

「星空をご覧になりたいなら、いま客席に投影しますよ。」

シャトルの副操縦士が言った。

その途端に、シャトルの室内照明が消えて真っ暗になり、次の瞬間にシャトルの室内が満点の星空に変わった。

まるで、茉莉香とチアキの二人が星の海に浮かんでいるようだ。

「この船は来客用なので、こういう仕掛けがあります。光学迷彩技術の応用で、船内全体がスクリーンになる仕掛けです。」

銀河の星の海をお楽しみください。」

「うわー、星の数が多くて光が濃いねえ。まぶしいよ。さすが、核恒星系だねえ。」

ああ、ほら、チアキちゃん、天の川が私たちの周りをぐるっと取り巻いて、リングになっっている。」

「うん、そのリングの両端で、二つの花のように広がって輝く星の渦は、核恒星系の紡錘状星雲の両端かな。花の色が白っぽいのと青っぽいのと少し違って、青のほうが大きいから、こっちが銀河の中心核の方かな。」

そして、赤色巨星レッドクリスタルも、天の川のリングに重なって光ってる。こういうのを、壮大な景色っていうのかなあ。」

「銀河の各腕の公転面と、紡錘状星雲の軸線と、レッドクリスタルの惑星公転面がほぼ同一平面上にあるから、そう見えるって、シュニツァーから聞いていたけど、実際に見ると本当にきれいだね。」

「赤、白、青の宝石をつけた銀河のネックレスっていうけど、本当にそんな感じだね。」

「ねえ、茉莉香、この星空を見ると、銀河の中心って感じがするね。」

「そうだね。」

「ああ、とうとう、私たち、銀河の中心に来たんだねえ。チアキちゃん」

「うん、来たんだね。茉莉香」

二人は、星の海の中で、感激に浸っていた。

やがて、茉莉香が星の海の中に何かを見つけた。

「船長さん、11時の方角にある、あの黒いものは何ですか。」

画像では、まだ小さいけど、すごく大きい船かな、小惑星かなあ。

「このスクリーン、拡大投影できますか。」

「さすが、キャプテン茉莉香ですね。」

あれが、惑星軌道上の銀河帝国の王宮、第二クリスタル・パレスです。

この距離にもかかわらず肉眼で見つけてくれるとは、おなじ船乗りとしてうれしいですねえ。」

「ええ!? そんなに大きいんですか!」

「いま、拡大投影します。」

やがて、画像の中の黒い雲のようなものが、どんどん大きくなっていった。

上に長方形の滑走路のような形のものがあり、それに誘導灯のような光の列が見えた。

「宇宙船だから、滑走路は不要ですよねえ。あれは、何でしょうか。」

「今にわかりますよ。もう少し大きく拡大して見るとね。」

やがて、四角い黒い雲の正体がわかった。

黒いもの全体が王宮に出入りする宇宙船用の港湾区画であり、光の列はそこに停泊し、ライトアップされている宇宙船が並んだ姿だった。

その光の数は、膨大な数の宇宙船が停泊していることを示している。

「うわー、王宮って、すごく大きいね。」

二人が驚いて眺めていると、副操縦士が言った。

「船長、王宮の管制官からの連絡です。」

お二人を歓迎して、王宮のライトアップをするそうです。王宮を上からお見せするた

め、上空の飛行許可が出ています。」

「上から、ねえ。上空の飛行と。」

では・・・行きますよ、お嬢さんたち。」

船長は笑って、シャトルの機体を上下に反転させた。

「あわわ、ひっくり返るの?」

部屋の中の星空が反転するのにつられて、茉莉香は思わずシャトルの座席にしがみついた。

「なにをやってるのよ、茉莉香。」

船乗りなら、天地が変わっても驚かないでしょ。」

チアキは平然としていた。

「いやあー。地上育ちの私としては、頭では分かってはいても、なかなか慣れないというか、できれば避けたいと言うか・・・。」

自分でディングギーを操縦するときはそうでもないんだけど。やっぱり、シャトルに乗っている場合は・・・。」

でも、チアキちゃんは大丈夫なの。」

船上育ちはこんなことでは驚かないっていうけど、やっぱり、チアキちゃんも船上育ちなもの。」

「そうよ。船を下りたのは、海森星の白鳳女学院に行くようになってからよ。」

「そうかあ、咄嗟（とつき）の反応でこんな違うのかあ。よく覚えとこう。」

チアキちゃん、すごいね。」

「だから、『ちゃん』じゃないってば……。」

王宮へ行つてもその調子で呼ばないでね。もう……。」

「あ、チアキちゃん、見て見て！」

茉莉香は光の差す方向を指さした。

「だから、『ちゃん』じゃないってば……!?

ああ……」

二人の前には、第二クリスタル・パレスの輝く威容があった。

点滅する七色の光に包まれた中央の球体の周りにドーナツ型のリングが二重に取り巻いていた。中央の球体部の頂上では、ドーム型の開閉式外壁が開かれつつあった。その中から、まばゆい光に包まれた透明のドームが現れた。ドームの中には、青い塔を持つ建物を中心として、外壁に囲まれた古代都市風の街なみがあった。

「うわー、大きいね。中央のドームに街がひとつ入ってるんだ。」

「輝いてる。きれいだ。」

「街の中心にある建物が王宮だろうねえ。」

「さあ、ここが銀河の中心。行きましょう。」

二人を乗せたシャトルは、少しの間、第二クリスタルパレスの周りを回って、そのあと、再び、上下反転して、港湾区画に入っていた。

二人は、出迎えのコミューターに乗って港湾区画を出て、さらに船内のエレベーターに乗った。

「さつきまで下に降りてたけど、いま上に登っている感じだね。分かってはいるけど、変な感じというか・・・。」

「茉莉香、まだそんなこと言っているの・・・。そろそろ着くわよ。」

エレベーターのドアが開くと、そこには一人の女官が待っていた。

エレガントなロングドレスを着た女官は、厳しい視線で、一瞬のうちに、二人のミニスカ制服姿を足もとの靴から頭の髪型までチェックしたようだった。

そして無表情で言った。

「お持ちしておりました。ご案内いたします。」

エレベーターを降りて進むと、そこは王宮だった。

ユーロ・クラシック風の古代建築のデザインを継承する地上の王宮と同じように、壮麗な装飾が施された高い柱が並び、極めて天井の高い廊下が続いている。

廊下の床には、赤い絨毯が敷かれていた。



警備兵が両脇に立っている廊下を、二人は案内の女官に続いて歩いていった。

「うわー、チアキちゃん、見て見て。」

宇宙船の中なのに、あんなに天井高い。それに宮殿の中って、こんなに綺麗なんだ。」

「茉莉香、はしゃいで大きな声をださないでよ。」

私たち、田舎者つてことが、まるわかりじゃないの。」

とにかく、静かに歩きなさいよ。」

前を歩く女官が聞き耳を立てているので、肘で茉莉香をつつきながら、チアキは小声で言った。

二人は、案内された部屋に入ると、帝国軍の軍服を着たクリスがいた。

「いよっ。来たね。そこにかきなさい。」

「先生、その制服は帝国軍上級大将……」チアキが言った。

「ああ、昨日、第一艦隊司令官に任命された。」

そこで、お前達も正式に副官になってもらおうと思ってなあ。」

「はい。」

「では、早速、任命だ。立ちなさい。」

「はい。」

二人は立ち上がって、クリスの前に並んだ。

「では、加藤茉莉香、チアキキリハラ、お前達二人を第一艦隊司令官の副官に任命する。」

「はい。」

「はい。」

二人は、クリスに敬礼した。

そして、一人の男が近づいてきた。

「こちらが、秘書官だ。お前達にサインしてもらおう書類があるそうだ。」

「ご就任おめでとうございます。」

それでは、こちらの書類にサインをお願いします。

帝国軍人としての宣誓書、雇用契約書、それから……。」

二人は、文書の中身をまったく読まずに、次々とサインした。

「お前たちの任命は、これで終わりだ。次は、軍服に着替えなさい。」

二人の軍服は帝国軍の通常のデザインのように見えたが、細かなところは違っていた。なにより階級章やボタンに至るまで、全体のバランスがカッコイイ。

さらに、ウエストのラインが絞られて細くなっており、スタイルが良くみえた。

もちろん、ミニスカートである。

これはまったく見たことの無い、新しいデザインの制服だった。

二人は、帝国軍の軍服なのにミニスカは許されるのかと、クリス王女の方をみると、王

女の軍服も同じミニスカだった。

彼女は白鳳女学院でミニスカをはいて以来、すっかりハマッてしまったようだ。

しかも王女は青い薔薇をかたどった宝石のピアスマでつけて、若い女性らしさを強調した装いになっている。

二人の軍人としての階級は、茉莉香は大佐、チアキは中佐であった。

二人とも、聖王家の王族以外では史上最年少の高級士官であった。

なにせ、17歳と言えば士官学校の入学前の年齢であり、士官学校を卒業して22歳で少尉に任命されるのが普通だから、過去にそんな若い高級士官がいるはずもなかった。

もともと、茉莉香の場合は、王族と同じように世襲である宇宙海賊船の現役船長であり、その実力も弁天丸と演習をした第七艦隊の評判が高いので、実力主義の帝国軍としては、認める余地もあった。

しかし、チアキの場合は、海賊船の船長の娘であっても、本人の実力も知られておらず、王女のワガママを丸呑みした女王陛下の強い意向に沿って、やむなく茉莉香と近い階級にただけであり、「茉莉香のオマケ」、「副官の副官」として、帝国軍としては不本意かつ常識外の人事と思われていた。

「それから、お前たちは、今後、副官として私と行動を共にするとともに、見習士官とし

て教育や訓練も受けてもらう。その指導内容については、陛下のご意向により、勅令が出ることになっている。

私の妹分だから、王族なみの特別扱いだよ。」

「いよいよ、ですね。なんだか、ぞくぞくしますね。」茉莉香が言った。

「ちよつと怖いというか、不安ですね。」

それに、いきなり中佐だなんて、いままでお仕事してきた帝国軍の方に申し訳ないです。」

チアキが言った。

「あはは。まったくお前たちの反応は、予想どおりだなあ。」

でも、安心しろ。母上、つまり女王陛下下の指示で、お前たちの教育・訓練は、王族用のカリキュラムではなく、お前たちの性格とこれまでの経験に合わせて特別に作るそう

だ。だから、安心して学んでいけば良い。

さあ、帝国軍の首脳会議に行くぞ。」

4—4 帝国軍首脳会議（第二クリスタルパレス内）

クリス王女は、帝国軍の軍服に着替えた二人をひき連れて、廊下を進んでいた。

すれ違う人々が頭を下げたり敬礼をしたりと、クリスに敬意を払っているが、それで

もすこし驚きの表情を浮かべていることは隠せなかった。

「そうか、今日の先生、いや、司令官はイメチェンして、きれいなものねえ。みんな驚いているのでしょねえ。」

おまけに、私たちを連れてきたからねえ。」茉莉香は思った。

歩きながら、次第に軍人ばかりの区域に入ってきたのが分かった。

三人は、大きい会議室に入った。

その場は、本来、帝国の女王、宰相、帝国軍の参謀本部高官と各艦隊司令官が出席する帝国軍の最高レベルの首脳会議であった。

しかし、女王陛下と第三艦隊司令官が欠席のまま、会議が始まった。

そこで、新任の第一艦隊司令官としてクリス王女が紹介された。

ちよつとした驚きが会議の席を駆け巡り、やがて緊張に変わった。

「そうか、ついにクリス王女が出てきたので、みんな驚いたのね。」

クリス王女が第一艦隊司令官として表に出てくることは、王位は譲らないという決意の表明、決戦を受けて立つてことね。」

チアキは思った。

茉莉香とチアキは、遠く離れた席に座っていただけであったが、王女が女子高校生二人を副官として連れてきたという帝国軍始まって以来の出来事ゆえに、参加者の視線を

集めていた。

『あれが、うわさのキャプテン茉莉香か。』

出席者の目が、そういつているようだった。

「確かに、今日の茉莉香は輝いて見える。王族みたいな、オーラに包まれてる。」

チアキもそう思った。

こういうときの茉莉香は、大勢の視線を集めても実に悠々と構えており、17歳の少女としての可憐さを備えつつ、17歳とは思えない大物の雰囲気を漂わせていた。

おかげで、チアキは軍人たちからは注目を集めなかった。

もつとも、逆に、王宮の侍従や女官たちからは、『チアキさんの方が話しやすそう』と思われていたことが、あとから分かったが……。

首脳会議は、銀河系の主要星系を時空トンネルで結ぶという「ミルキーウェイ計画」の研究開発について進捗状況の報告と、

その完成時のゲート・ステーションの位置、

「時空トンネル」の航行ルール、

通常時のゲートの守備体制のあり方、

特に帝都防衛の在り方、

そのための帝国軍の再編成の素案、

レッドクリスタル非常時の国民避難計画の見直し案

などについて、簡単な説明があった。

これに対して、

有人船は遭難時の自力航行能力が必要なため、超光速機関をもつ船しか通行を認めないが、

無人の貨物船は超光速機関を持たない船も通行を認めるといふ

「時空トンネル」の航行ルールについて、疑問や慎重論が出て、議論になった。

「安全保障上危険であり、時期早尚ではないか」と慎重派が言えば、

「いや、超光速機関を持たない無人貨物船の通行を認めないと、ミルキーウェイ計画の経済上のメリットが最大限に発揮されない。これは、経済界が強く望むところだ。」

と賛成派は言う。

意見は堂々巡りだった。

『無人貨物船の通行が、安全保障上の理由でどうして議論になるんだろう。』

貨物船に武器を隠して運ぶ、テロ行為の実行犯が隠れて侵入する、どれも今の帝国軍にとってはいはいた脅威ではないはず。・・・』

チアキにも、理由が分からなかった。

このほか、各星系の軍事情勢に配慮したゲートの場所等について、いくつかの意見が

述べられ、更に検討することになった。

席上、代理出席者であった第三艦隊の副司令官から発言があった。

「例の宇宙マフィアの件は、どうなっているのでしょうか。」

討伐艦隊を派遣するならば、ミルキーウェイ計画がスタートする前に決着をつけておく必要があると存じます。」

「その件は、大丈夫だ。手は打ってある。」

とクリス王女が自信満々で答えた。

他の参加者は、じつと二人のやりとりを聞いていただけだった。

『なぜ、ここで宇宙マフィアの話が出るのかなあ。』

まだまだ、私たちの知らない裏事情があるんだねえ。』

と、茉莉香は思った。

結局、軍の首脳会議は、予定時間を大幅に超過しても結論が出ず、引き続いて議論することとなって、終わった。

帰り道の廊下を歩いているときに、クリス王女が言った。

「二人とも、今の軍首脳会議の話は、分かったかい？」

「いいえ。宇宙マフィアの話とか、超光速機関を持たない無人貨物船の話とか、なぜ問題なのか、分かりませんでした。」



茉莉香が言った。

「そうか、少し事情を話しておこうか。私の部屋へ来なさい。」

クリス王女は、自分の部屋に二人を案内した。

4—5 クリスティア王女の部屋（第二クリスタルパレス内）

王女の部屋に入ってみると、その質素というより粗末な、ただの事務室のような部屋の様子に、二人は驚いて、目を見合わせた。

「ハハハ、驚いているのか。」

「だろうなあ。銀河帝国の王女の部屋だから、さぞや、黄金の装飾や絵画など豪華なものに溢れていると思っていたのであろう……。」

「……ナハハハ。まあ、そうですねえ……。」

茉莉香は、苦笑いした。

「確かに、これじゃあ、ヨット部の部室の方が、よっぽど贅沢な部屋に見えますね。」

チアキも言った。

「だから、言ったであろう。私はツツパリ王女だったと。」

「ここはもともと、王女の侍女が使う部屋だったんだ。」

王女用の本来の部屋は、この壁の向こうだ。そこにお前達が想像するような部屋があ

る。

でも、私はそんな部屋は使いたくないと言って、ここを使っていたんだ。

今でも、この部屋の方が気分が落ち着くんだけ。」

「はあ……。」茉莉香とチアキはため息をついた。

「……そうだ、おーい、紅茶を三つ入れてくれ。」

遠くで、答える声がした。

「この部屋なら、ゆっくり話せるな。」

それで、先ほどのお前達の疑問の話だが、宇宙マフィアと時空トンネルとの関わりから話そう。

実は、時空トンネル航法を最初に成功させたのは、宇宙マフィアなのだ。

理論を確立して、試作機を飛ばすことに成功したのだ。

だが、彼らでは実用化に耐えるエンジンが製造出来なかった。強力な高出力転換炉は、製作費用が莫大で製造技術も高度であるだけでなく、部品一つから軍事機密として厳重に管理されているから、宇宙マフィアでは製造できなかつたからだ。

そこで、彼らは、中古の普通の転換炉を改造して1、2回使えば、エンジンが焼き切れて、壊れてしまうという「使い捨ての船」を作ることにしたのだ。

さらに、彼らは、資金回収のために、その技術をステール重工業に売ったのだ。

その金で彼らは惑星開発用の中古の資材、設備、武器などを目立たないように大量に買いつけて、何処かに運んでいったそうさ。

時空トンネルを使ってその貨物を運んだので、当時の帝国軍でも行き先を探知できなかったそうさ。

その資材や設備を使って、銀河の辺境星域に彼らの本拠地が作られているのは間違いないだろう。

しかし、いまだにその位置は帝国にも分からない。

宇宙ファイアがやって見せたように、時空トンネルを使えば、銀河の辺境まで大量の物資輸送が、迅速かつ安全にできる。

ミルキーウェイ計画が進めば、宇宙の貿易や辺境開発はすすむだろう。」  
「これじゃあ、宇宙海賊に物資の輸送を頼む会社は、なくなりますね。」

弁天丸の商売はどうなるんでしょうかねえ。」  
「そうだな。海賊商売も変わらざるを得ないだろう。」

では、次は、安全保障上の問題だ。

もちろん、時空トンネルを使うと、帝国軍の機動力は圧倒的なものになる。

帝国宇宙軍は、銀河のどこにでも、一日以内に大艦隊を派遣できる機動力を持つことになるからな。」

「まさに、無敵艦隊ですね。」茉莉香が言った。

「そうだな。」

では、超光速機関を持たない無人貨物船の問題はわかるかな」

「貨物船自体に伏兵が紛れて進入するとしても、帝国軍の圧倒的兵力ではたいした問題では無いでしょう。」

時空トンネルを民間経済活動に開放することは問題がないように思いますが。」

キアキが言った。

「そう。それ自体には、問題は無い。」

問題なのは、わざわざ宇宙船に積まなくとも、鉱物資源を自然天体の形でも、そのまま運べるという、時空トンネルの便利すぎる機能にある。

このような自然天体をそのまま運べる機能を軍事利用すると、どういう使い方があるか、わかるかな。」

「あ、そうか。小惑星自体を砲弾にして飛ばしちやえば、いいんですね。」

「バーンと大砲みたいに。」茉莉香が言った。

「バーンなんて、簡単そうに言わないでよ。茉莉香！

王女様、これって、恐ろしい兵器になりますよね。」

歴史で習ったユスティアン大王のマンチュリア戦役のような戦い方が簡単に出来ま

すね。

比較的大きな小惑星が、可住惑星近傍にいきなり出現して超高速で飛んできたら、大艦隊がビーム砲を集中しても簡単に砕くことは出来ないでしょう。

可住惑星を直撃して大惨事を起こす恐れもありますよね。」

大惨事の姿を想像して顔を曇らせた、チアキが言った。

「そのとおり。さすがチアキだな。」

このような攻撃を物理的に防ぐ有効な手段は今のところ無い。

現状では、帝国の星がそのような攻撃を受けたら、必ず相手の星にも報復するという、戦術的な抑止力しか頼る方法がない。」

「それで、マフィアの討伐艦隊の話が出たんですね。」

「表向きはそうだが、あの発言には裏がある。」

実は、アンドレア公爵と宇宙マフィアとは裏で繋がっている。彼のための非合法活動は、すべて宇宙マフィアが実行していると言われている。

それを表向きに否定するために、ああいう発言をしているんだ。」

「ひどい話ですね。」

「そうだな。宇宙マフィアも、いずれ彼に裏切られ粛正されると分かっているけど、彼の味方をしているのだから、悲惨な話だな。」

「では、サーシャが怒っていた『超兵器』って、これのことだったんですね。」

「そうだ。重力制御推進の船は、使い方によつては、星を砕いて大量殺戮を行う超兵器になる。」

「でも、サーシャって、この問題とどう関わっているんですか。」

もちろんお父さんの会社が開発した船だつてことは分かりましたが、話の雰囲気は、秘密というか、なにか、もっと深い関わりがありそうでしたよねえ。」

「サーシャは、グランドクロス操縦シミュレータも使ったことがあるようだったし、重力制御の船の開発にも関わっていたような雰囲気だったわね。」

「サーシャは、まだ、どんな秘密を抱えているんでしょうか。」

「それは、私からは言わない方が良いでしょう。」

サーシャは、お前たちの大切な友達だろう。サーシャが堅く守っている秘密なのだから、それを自分で話す気になるまで、見守っていてあげなさい。」

「そうですね。サーシャは大切な友達ですからね。わかりました。」

二人は答えた。

「それで、王女様が第一艦隊の司令官に就任されたということは、決戦の準備が整ったという事ですか。」

「お前達は、宇宙マフィアの艦隊が、オデットII世号を襲つて来たことを覚えているであ

ろう。その時から、実際の戦いは始まっている。

すでに、アンドレア公側からは、期限付きで王位継承に関する回答を寄こせと行ってきた。回答の期限は三日後だ。

三日あれば、第三艦隊がレッドクリスタル星系付近に到達できるので、その時間を稼いだつもりだろう。

宇宙マフィアの全艦隊も、集結するのではないかな。」

「ええー！三日後に開戦ですか……。」

「もしかして、私掠船免状の海賊達もそのために呼んだのですか。」

「例の手打ち式の日程を決めるときに、予め、そこまで考えていた訳ではない。

しかし、運命というか、日程が一緒になってしまったな。」

## 第五章 銀河帝国の女王

5—1 アン女王の部屋（第二クリスタルパレス内）

クリスティア王女が、茉莉香とチアキに帝国の情勢を話していると、女官がやってきて、女王陛下からの伝言を王女に伝えた。

「女王陛下が、みなさまをお夜食にお招きです。」

「私たち三人をお招きということか。」

「そうでございます。」

「では、直ちに参りますとお伝えして下さい。」王女が答えた。

「えー!!」女王陛下とお食事ですかあ。

王女様、お洋服は何を着ていけば良いんでしょうか？

私は、フリルのいっぱい付いたピンクのドレスとか、エナメル靴とか、かわいいアクセサリーとか、手袋とか、バッグとか、何も持ってきていませんよ。」

女性らしい正装を思い浮かべたチアキが、慌てて言った。

「そのまま、帝国軍の制服で良いんだ。私たちは、軍人だからな。」

「はああ……」



チアキはちよつとガツカリしたため息をもらした。

三人は女官の先導で、女王の部屋へ向かった。

その部屋は、茉莉香やチアキが期待していたようなとても豪華な装飾に飾られた美しい部屋だった。四、五人が会食できる程度の大きさの丸テーブルが、部屋の中央におかれ、その周りに、執事や侍女が控えていた。

「お席でお待ち下さい。まもなく陛下がお見えになります。」侍女が言った。

「私たち、陛下とこんな近くに近くで、お食事できるんですね。緊張しますね。」

チアキが小声でクリス王女に言った。

「言つたであろう。お前達は私の『妹』だと。いつも通りに振る舞いなさい。」

その人、アン女王は、まるで三人に何度も会っているかのような、自然な雰囲気で見られた。

「やあ、来たね。」

「初めてお目にかかります。加藤茉莉香大佐でございます。」

「初めてお目にかかります。チアキ・クリハラ中佐でございます。」

二人は、立ち上がり、緊張して敬礼をした。

「ハハハ、お前達はクリスティアの妹分だというから私にとつても身内だ。

以後はそういう賢苦しい挨拶は抜きだ。

さあ、テーブルにかけなさい。」

「はい。」

「はい。」

チアキは、テーブルに軽い料理が並べられる間に、クリス王女と話し始めた女王の顔を見つめていた。

髪の毛はクリス王女と同じくプラチナだが、

強い意志を秘めた目の光り、

聡明さが溢れる言葉づかい、

年齢を経てもますます知的な美しさを放つ顔立ち、

全身から放たれる光のオーラのような雰囲気、

そのすべてが、人の心を捉えて放さない魅力を放っている。

『すごいひと。銀河の中心になる人って、こういう人なのね。』

チアキはそう思った。

茉莉香とチアキの二人は緊張して、食事中に女王と打ち解けて話をする事が出来なかった。料理の味どころか、何を食べているのか、分からない有様だった。

食後の紅茶を飲んでる時に、三人が着ている制服の話になった。

「なかなかキリツとして、エレガントな服だが、それは私服か、軍の制服か？」

「母上、まずはご覧になって下さい。」

クリス女王は立ち上がって、両手を広げて、上級大将の階級章をつけた自分の制服姿を女王に見せた。

さらに、くるりと、その場でひと回りして、後ろ姿も見せた。

「これは、帝国軍の制服があまりに古くさいので、コツキー・シャネルに何か良いデザインはないかと頼んで、作ってもらったものです。」

三人おそろいで作ってもらいました。

いいでしょう。とても気に入ってます。」

女王は嬉しそうだった。

その姿を、女王は、目を細めて眺めていた。それは、娘の晴れ姿を心から喜んでいる母親の顔だった。

チアキは、そういう女王をうっとり眺めていた。私もお母さんと出会えれば、同じように見てもらえるのだろうか・・・と。

「素敵だねえ、クリスティア。立派な司令官になったお前を見て、私は嬉しいよ。」

フフフ・・・

しかし、帝国軍の風紀担当将校は、この制服について、なにか言ってきているのではないかな。」

女王が、側に控えた侍従の男性に聞いた。

「はい。確かに言つてまいりましたが、女官長が追り返したと聞いております。」

女官長は

『三人だけ特別扱いが認められないなら、女性の制服をみんな同じように変更すれば良　いではないか』

と言つたそうです。」

やつと女性らしいファッションに目覚めた王女の心に水を差すような軍部の意見を、宮廷の女官達が受け入れるはずもなかった。門前払いされたようだった。

「ハハハ、この件は、彼女に任そうか。」

そして、女王が海賊狩りの話を、茉莉香とチアキに聞いた。

もちろん二人はクリス王女に遠慮して、話題にするのを避けていたのだが、これを引きっかけに、茉莉香が「ブレイク」した。茉莉香はそれまでの緊張が限界を超えたようだった。

「そうですね。海賊の巣で初めてお会いした時の印象は……」

と、いつものように陽気で楽天的な茉莉香に戻り、堰を切つたように一気にこれまでのことを全部、話してしまった。

そして、最後にこう言つた。

「グランドクロスからの脱出前に、王女様が私におっしゃったんです。

『茉莉香、広い宇宙（うみ）に出ておいで』って。

私は、そのお言葉で、自分が何をしたかったのか気がついたんです。

私は広い宇宙（うみ）に出てみたかったんだって。

だから、ここまで出て来ることができたんです。」

「ほう、クリスティアも良いことを言うねえ。

それで、白凰女学院での教師ぶりはどうだったのかい？」

と女王が聞いた。

続いて、チアキが話した。

「なかなか立派な教師でいらつしやいましたよ。

まず、学校内でもコワモテのヨット部の上級生をあつという間に手なずけてしまわれ

ました。そして、先生の優しさが分かるにつれて、生徒にも人気が出てきて、・・・。

なかでも驚いたのは、

『白凰女学院に来る前には、ミニスカートをはいたことがない。

ダンスも踊ったことがない。

パーティ也大嫌いで、行ったことがない』

とご自分でおっしゃっていたそうですが、

普段の授業ではさっそうとミニスカを着こなしておられました。

さらに、卒業記念ダンス発表会では、目の覚めるような綺麗な白いドレスを着て、お客様と華麗に踊っていらしたことですな。

もつとも、私たちは、きつと、密かにグリユーエル姫に習ったのではないかと、ウワサしてましたけど。」

「チアキ、何を言うか。

私も、・・・グリユーエルと同じく、王女だからな。そのくらいのことにはちゃんと出来るのだよ。その気になれば、な。

それに、私は、教師で大人だから、中学生のグリユーエルに、

パーティのマナーとか、

ダンスのステップとか、

ドレスの着こなしか、

ダンスパーティで『微妙な殿方』からダンスに誘われたときの断り方とか、習ったりはしていないぞ。」

クリス王女の強がりにも、女王は吹き出して大笑いした。

「あの日のダンスパーティだけど、生徒の中では、やっぱり最初に踊った茉莉香とグリユーエルが一番素敵だったわね。」

茉莉香、男の子みたいにカッコよかったものね。」

チアキが言った。

「いやいや……。最後の曲で、チアキちゃんとエドワードさんのペアが踊ったワルツは、素敵だったよねえ。」

二人とも笑顔で見つめ合って、息がぴったり。

チアキちゃん、シンデレラ姫のようだったね。」

茉莉香が言った。

こうして、茉莉香が話すときはクリス王女とチアキが、

チアキが話すときは、クリス王女と茉莉香が、

自分の恥ずかしい話が出て顔を赤くしたり、言葉遣いに女王が怒らないかと心配して顔を青くしたりして、聞いていた。

しかし、女王は、終始笑顔を絶やさず、というより心の底から笑って話を聞いていた。本当に嬉しそうだった。

「そうだ。」

陛下、ダンスパーティーの時の立体映像をご覧になりますか。今持っております。」

チアキはそう言うのと、自分の軍用通信携帯を取り出した。

「私、写真が大好きですから、ここに自分のデータを入れて、持ち歩いております。」

そう言いながら、チアキは、沢山の写真の中から、ダンスパーティーの最後に写したヨット部のメンバーとクリス先生達との集合立体写真を、取り出して投影した。

その集合写真をさらに拡大投影すると、テーブルの上の空間には、凜とした貴婦人の姿をした「クリス先生」が現れた。

「お、お、お姫様。・・・」

感激した声をもらしたのは、後ろに控えていた一番年配の侍女だった。

「本当に、お前にも世話をかけたなあ。礼を言う。」女王が侍女に言った。

「もつたいないお言葉です。」侍女は涙ぐんでいた。

「チアキ、その携帯、ちよつと貸して欲しい。」

「ええ!」

チアキが驚いているうちに、女王はチアキの携帯を手にすると、次々に立体映像を映し出した。

もちろん、その中には、クリス先生の映像もあった。

なかでも写真部のコからもらった、クリス先生とチアキの剣道練習中の写真は迫力があつた。負けず嫌いの二人が、剣を交えて、必死の形相で向き合っている写真だった。

さらに、女王は、楽しそうに、どんどん写真のページをめくって、チアキの写真も写していった。チアキは、それぞれの写真について説明した。



ネビュラカップの優勝で表彰台上った写真、

海森星で中学生だった頃の写真、

さらに、バルバルーサで暮らしていた子供の頃の写真、・・・

そして、赤ん坊の時のチアキの写真

にたどり着いた。

その写真では、父に抱かれた赤ん坊のチアキが、満面の笑顔を浮かべて、カメラの側に向かつて、手をさしのべていた。まるで、抱っこをせがんでいるように。

「チアキは、ほんとうに可愛いなあ。抱きしめたくなる。」

女王は素晴らしいながら、赤ん坊のチアキを眺めていた。

「はあ・・・、

私は母を知りません。母の写真もありません。

でも、この写真は大好きです。

この写真を見ていると、母に見守られている様な気がするんです。」

「そうか。きつとそうだろうね。」

で、茉莉香の場合はどうなんだ。子供の頃は。」

「ええ、私ですかあ？・・・えーっと・・・梨理香さんは、写真に興味が無くてえ・・・」

## 5—2 王宮の客屋（第二クリスタルパレス内）

四人のおしやべりが遅くまで続いたため、結局、茉莉香とチアキは、その日の夜、王宮に宿泊することになった。

女王の指示で、二人は、王族用の客屋に泊まることになった。

茉莉香は、部屋に入るなり、豪華な内装に溢れた部屋中を歩き回って、はしゃいでいた。

「うわー、チアキちゃん。この客室、広いねえ、部屋がいくつあるんだろう。」

「ねえねえ、これ見てよ。金ぴかの洗面台と猫足の家具だよ。」

「壁紙もかわいいい〜。こんな部屋、初めて見たよ〜、チアキちゃん。」

「うお〜、チアキちゃん、天蓋付きのベッドだよ〜。私たち、お姫様みたいだよ〜。」

茉莉香は、軍服のままベッドに横たわった。

「私、こんなベッドに寝るの初めてだよ〜。チアキちゃん。」

「うわ〜、チアキちゃん。お風呂のバスタブがこんなに大きくて綺麗だよ。壁のタイルもすごいよ。」

はしゃぎ回る茉莉香の話を聞きながら、チアキは鏡の前で髪をとかしていた。

すると、突然、茉莉香が近づいてきて、チアキを後ろから抱きしめた。

そして、唇を耳に近づけて、小さな声で言った。

「ねえー、チアキちゃん。一緒にお風呂、入ろうよ。」

「なによ、いきなり抱きついて。ビックリするじゃないの。」

それに、子供じやないんだから。一緒にお風呂なんて、恥ずかしいじゃないの。

今晚の茉莉香は、なんかヘンよ。」

チアキは抱きつかれたことで顔を真っ赤にして、さらに二人でバスタブに浸かっていての姿を想像して、さらに顔を赤くした。

「ちえー。良い考えだと思っただのになあ。」

それに、私、ヘンじやないよ。チアキちゃんはカワイイから、みんな同じ事、考えると思うなあ。」

「そんなことより、着替えて、歯を磨く。茉莉香、聞いている。」

茉莉香は、さらに部屋中を見て回って、はしゃいでいたが、着替えてベッドに入ると、あつという間に眠ってしまった。

チアキも着替えて照明を消し、眠ろうとした。

しかし、今日のいろいろな出来事を思い出して、眠れなかった。

その時、眠っている筈の茉莉香が叫んだ。

「さあー、海賊の時間だあー！」

チアキは驚いたが、茉莉香の寝言と気がついて、苦笑した。

この時、茉莉香は夢を見ていた。

弁天丸で、いつものクルー達と、銀河のネックレスと呼ばれる壮大な空間を駆け抜けている夢だ。

『弁天丸、全速前進！』

ねえ、壮大な宇宙空間でしょ。銀河のネックレスっていうんだ。

私、ここに来たかったんだ。

そして、弁天丸のみんなといっしょに、この銀河の中心を飛び回ったかったんだ。』  
夢の中で、弁天丸船長加藤茉莉香は、そう言っていた。

5—3 王宮の屋上庭園（第二クリスタルパレス内）

「まったく、茉莉香はいい性格しているよね。あつという間にぐっすり寝ちゃって…。

それとも、茉莉香なりに緊張して疲れていたのかなあ。

でも、私は、まだまだ、眠れそうもない。……

こういうときは、星空でも見に行こうかなあ。気持ちの落ち着く、いい場所があるって教えてもらったし……」

チアキは、再び、帝国軍の制服に着替えて、星空を眺めるために、クリス王女に教わっ

た王宮の屋上庭園に行った。

「うわー、星がいっぱい。」チアキは目を見張った。

屋上庭園は広大な空間だった。

薔薇などの背の低い木々や草花だけが植えられているため、見晴らしもよく、透明なドームの向こう、360度視線を遮る物のない空間には、満天の星空があった。

『これが何千億の星々からなる銀河系かあ。』

その時、チアキは、親父から聞いた話を思い出した。

小さいころの自分は、毎晩、星を眺めてお母さんの帰りを待つていたそうさ。

『この銀河の星々の中に、きつと、私のお母さんがいるんだよね。』

どこにいるのかなあ。きつと会えるよね。

きつとチアキのところへ帰って来てくれるよね。

．．．．．

でも、実際にお母さんに会った時に、何を話したら良いのだろう。

いままでのことを何から話そうか．．．

そうだ、まず『お母さん』と呼びたいよねえ。　フフフ．．．』

チアキはそんなことを思いながら、

「お母さん！．．．フフフ、とうとう言っちゃった。」

チアキは思いを口に出してみた。

ドームの透明な壁には、チアキの姿が映っていた。

チアキは、先刻のクリス女王のマネをして、両腕を左右に広げて、自分の制服姿を透明な壁に鏡のように写して、その向こうに母親がいるかのように話しかけた。

「ねえ、お母さん、私、今日、帝国の軍人になったよ。階級は中佐だよ。

見て、見て、この制服、素敵でしょ、コツキー・シャネルなんだよ。

すごいでしょう。」

しかし、そのとき、チアキは、透明な壁に写った自分の姿の背後に、女性の人影があるのに気がついた。

「あああ、……」

チアキは、自分の独り言を聞かれたことに驚き、さらにその人影が女王陛下その人であることに気がついて、更に驚いた。

そして、驚きのあまりに、何を言ったら良いか分からず、顔を真っ赤にして固まってしまった。

女王は少し硬い表情のまま、チアキに近づいてきた。

そして、後ろからチアキを抱きしめた。

女王は、顔をチアキの髪に近づけ、大きく息を吸った。

そのままの姿勢で、二人は息を止め、何も言わなかった。

沈黙の時間はとても長く感じられた。

やがて、チアキが言った。

「私、お母さんを探しているんです。」

「・・・」

そうかい。

「・・・」

女王はチアキを抱きしめた姿勢のまま、しばらく沈黙していた。

やがて、こう言った。

「チアキ、クリスティアの妹になってやってほしい。

海賊の姉妹のように、心と心でつながった妹になってやってほしい。

そして、どんなときも、クリスティアの側にいてやってほしい。

あの子はあれで結構、寂しがりやなんだ。」

「・・・」

また、女王はしばらく沈黙したあとに、こう言った。

「そうだ、チアキ、人探しのコツを知っているかい。」

自分であちこち探し回るよりも、自分のいるべき場所において、なすべき事をしている

のが一番の近道なんだよ。

そうすれば、いつか、探している人のほうから近づいてくるんだよ。

だから、そうやって、お前がなすべき事をしていけば、いつか、母親のほうから、おまえの前に現れるんじゃないかなあ。

特に、ここは、銀河の中心だからね。」

「陛下は、父と同じ事をおっしゃるんですね。」

「そうかい。フフフ、船乗りの常識ってやつじゃないかなあ、……。」

チアキ、クリスティアのこと、くれぐれも頼んだよ。」

女王は、そう言うとチアキから離れ、微笑みを浮かべながら、去っていった。

「はあー。びっくりした。緊張したー。」

チアキは、何が起こったのか訳が分からなかったが、それまでの緊張が緩んで、ぐつたりと疲れを感じた。

そして、チアキは屋上庭園のセキュリティゲートを抜けて、来た道をたどって、自分たちの部屋に帰っていった。

その後ろ姿を、クリスティア王女が見守っていたことには、気づかなかった。

庭園に控えていたガーデンキーパーの存在にも気づかなかった。



## 5-4 グランドマザー船内

翌日の朝、クリス王女と茉莉香、チアキの三人は、シャトルに乗ってグランドマザーに帰還した。

ヨット部員一行は、この日は、クリスタルスター随一の観光名所、「水晶の地下都市」を見学する予定だった。

「地下都市」といっても、自然にできた長大な洞窟に、美しく巨大な水晶の結晶が、都市の建物のように無数にあるというものだった。洞窟の大きさ、水晶の美しさ、大きさのため、開拓当初から銀河系内でも有名で、星の名前の由来にもなったものだ。

しかし、出発前にクリスが言った。

「悪いが、本日の予定は変更だ。ヨット部員に参加してもらおう『海賊ショー』だが、予定が少し早まった。

今日は、船の中でリハーサルをして、本番の会場付近の空間へ移動、明日が本番ということになった。」

「先生、本番って、どこの船でやるんですか。豪華客船ですか?」

「違うよ。船の名は、パイレーツ・キャッスルだ。」

「ええ! それって、海賊船なんですかあ?」

「まさか!? 海賊船に海賊しに行くんですかあ。」

冗談みたいですね、おもしろい〜。」

「先生、それは、伝説の帝国海賊の本拠地である宇宙船の名前ですよね。」

本物なんですか？ やつぱり、ほんとに存在するんですね。」

「そうだ。みんなは、帝国海賊って言葉知っているか？」

「それって、『お伽噺』ってやつでしょ。」

「でも、お伽噺では、帝国海賊は宇宙のあなたに旅立ってしまったという話ですよね。」

どこかに行つてた帝国海賊が、戻つて来たのですか。」

「いいや。分かりやすく言うと、千年前の帝国海賊の未裔は、どこかに旅立ってしまったのではなく、姿を変えて、銀河帝国内部に潜んでいたのさ。」

普通の船乗りとして家業を続けた者もいるが、帝国軍や王宮やさまざまな民間会社で、帝国海賊という正体を隠して暮らしていたのさ。」

男も女もね。」

「では、今の女王陛下を王位につけるために決起した人たちの正体は、やはり帝国海賊の未裔の人々だったのですね。」

グリユーエルが行つた

「大半はそうだ。」

「でも、正体を隠して静かに暮らしていた人たちが、危険を冒して、どうして決起したん

ですか。自分の正体を明かせば、不利益を被ることも多いでしょうから。」

「そうだな。帝国海賊の末裔が正体を現して、そこまで母上に肩入れした理由は、もともとは、母上が小さな子供の頃からの話にさかのぼるそうだ。」

クリス王女が言った。

「母上は、小さな子供の頃から寝つきが悪くて、侍女たちを困らせていたそうだ。」

侍女たちがいろいろな方法を試して苦労した結果、王宮の庭園で星空を見つつ、お伽噺を聞くと、気持ちが悪く落ちて、その後よく眠れるとわかったそうだ。

それで、侍女たちが毎晩庭でお話を聞かせたのだが、困ったことが起きた。

小さな頃は同じ話を何度も聞きたがったが、母上は成長するにつれ、しだいに同じ話を何度も聞くのを嫌がるようになり、毎晩新しい話をしなければならなくなったそう  
だ。

それで、しだいに侍女たちには、毎晩、新しいお話をするのが重荷になっていった  
そう  
だ。

ある晩、

『また同じような話をした』

と母上の機嫌をそこねて侍女たちが困り果てていたそうだ。

そのとき、薔薇の木の向こうから、

『姫様にお聞かせする面白い話でしたら、私たちにお任せください』  
と侍女に声がかかったそうさだ。」

「それは、ガーデンキーパーの話ですね。帝国の伝説とばかり思っていました。が。」  
ヒルデが言った。

「そうさだ。ガーデンキーパーの正体は、帝国海賊の長老たち8人だ。

いつも庭に控えて、王の命令を受ける時を待っていたそうさだ。

もちろん、最初に王がそこで命令を待てと言ったから、そうして待っていたのだ。

とはいっても、帝国も平和が続き、帝国海賊の力が必要な時代はなかなか訪れず、千年以上もの時が経過していったという。

しかし、海賊の末裔たちは王の命令を守って待ち続けていたのだ。

そうやって庭に控える彼らだから、侍女が幼い王女、つまり母上に『お話』を聞かせていた一部始終を承知していた。

お話のうち、王女が宇宙の神秘的な姿や海賊の冒険談などに興味を示していたこともわかっており、声をかける機会をうかがっていたそうさだ。」

「それって、王宮のルール違反と言われませんか。」

グリユーエルが言った。

「もちろんそうさだ。」

ガーデンキーパーは王宮内で一番地位が低い者とされ、王族に直接、面会したり、話をするには許されないとというのが当時のしきたりだったそう。海賊達は、表向き、ガーデンキーパーに過ぎないのだから。

当然、王宮の侍女たちは大反対だったそう。

しかし、王女が

『毎晩、同じような話ばかりで、退屈していたところだ。話を聞いてやろう。』

しかし、面白くなかったら、死罪だ。

どうだ。それでも良いならば、やってみろ。』

と言ったそう。

「ううー、怖い。王女様って、残酷なことを平気で言いますね。」

リリイが言った。

「だから、王族たるものは、子供でも発言に気をつけるように言われてきました。」

グリユーエルが言った。

「ごめん、ごめん。グリユーエルのことを悪く言ったつもりはないはないんだけど、気に障ったら許してね。」

「はい、気にしてません。」

グリユーエルが言った。

クリス王女が話を続けた

「それで、海賊の長老が語ったのは、『海賊王子』と言う物語だったそうだ。

ある国の王子様が、王宮の暮らしに退屈して、勝手にお城を抜け出し、街を歩いていると、自分そっくりの顔をした少年に出会った。

王子は興味を引かれ、その少年に話しかけて、どんな暮らしをしているのか事情を聞いた。

すると、母親が亡くなって父親に会うために街に出てきたという。

でも、なかなか父親に会えず、わずかなお金も無くなって宿も追い出されて、困っていたという。

そこで、王子はかつて自分の家庭教師だった男の屋敷を訪ね、その少年を物置小屋に泊めて、食事を出してやるように頼んだ。

以来、王子はその小屋に通って、少年の話を聞いた。

最初、少年は母親との貧しい暮らしについては良く話したが、父親のことは話したがらなかった。

しかし、ある日、『父親と連絡がついた。もうじき迎えに来てくれるんだ。』といって、とてもうれしそうに、それまで黙っていた父親のことを、急に話し始めた。

少年の父親は『宇宙海賊』だった。

少年が母親から聞いていたところでは、母親も宇宙海賊だったが、少年を地上で育てるために船を下りたそうだ。

そして、母親から聞いた海賊の冒険話を語り始めた。」

「なんか、茉莉香の家の話と似ているよねえ。海賊つてみんなそうなの？」

「知らないよ。それに、似てません。．．．ぜんぜん、似てません！」

梨理香さんはまだ生きているし、私は海賊の娘だつてことを知らなかったし．．。

「茉莉香、話を続けるぞ。」クリス王女が言った。

「王子は少年の話が大変気に入って、自分も退屈な王宮を抜け出して宇宙に行ってみたくなった。」

そこで、王子は、少年に自分が王子であることを明かして、ひと航海だけでも良いから自分と代わってくれと頼んだ。

こうやって、王子は海賊たちと冒険の旅に出たそうだ。

その後、王子は、神秘的な宇宙の海を旅して、数多くの冒険をし、沢山の宝物を手に入れ、美しいお姫様を伴って、国に帰ってきたそうだ。

おとぎ話だからな、ハッピーエンドだ。

こうして、海賊たちは、国に帰ってくるまでの『王子の冒険物語』をひとつひとつ、語り始めたそうだ。

もちろん、母上はとても興味を持ち、

『続きは、また明晩に聞く』

といつて眠りににつき、その晩、海賊たちは死刑を免れたそうさ。

その後も毎晩毎晩、話は続いたそうさ。

宝探しの大冒険や、

悪者との激しい戦闘、

美しいお姫様との出会いと恋、

ブラックホール、二重太陽、様々な星々の不思議な姿、

資源探査や惑星開発の様子、

宇宙船の操縦など、

実際に経験したような臨場感で、王女に話したそうさ。

その話の中でも、子供の頃の母上は、アンという自分の名前がついたアンドロメダ星雲が特にお気に入りだったそうさ。

もちろん、銀河に自分の名前がついているというのは、子供の頃の母上の思い込みなんだがね。

でも、母上は、

『いつか、あの星々まで行ってみたい』



と空のアンドロメダ星雲を指差して、何度も言っていたそうだ。

そういうおとぎ話のあいまに、母上が、宇宙船に関する最先端の科学知識や軍事技術、帝国や主要星系の政治・経済事情など、高度で専門的な問題について質問をしても、海賊たちは直ちに答えたという。

こうして、母上も侍女たちも、ガーデンキーパーの老人たちは、海賊といっても無教養な荒くれ者ではないと気づいていたようだ。若い時は帝国各分野の要職を経験した人々なのだろうと。

一方、海賊たちも、わがままな姫様が、次第に聡明な王女に育っていくので、行く末が楽しみになって、この姫を応援したい気分になっていったそうだ。」

「ええ〜〜それ自体、おとぎ話みたいですね。」

「それで、そのあと、どうなったと思うかい。」

クリス王女が言った。

「ああ〜、まさか?!」

女王様が18歳で家出して、銀河の各地を放浪の旅に出たという『伝説』は、やっぱり本当だったのですね。

その真相が、おとぎ話の影響だったとは始めて知りました。

でも、18歳になって、子供の頃から許婚と決められていたアンドレア公爵様との結

婚式が迫ったため、これを嫌って家出したというのが、王室ファンの常識なのですが。」  
ヤオイ・ヨシトミが言った。

「そういう見方もあるだろうね。」

でも、その時には、母上の上には3人の兄王子がいた。だから、母上が帝国の王位継承者になる可能性は無いと考えられていたので、母上のような立場の女性は、政略結婚の道具に過ぎないと思われていたようだ。」

「いつの時代でも、王家やお金持ちの家に生まれた女性は政略結婚の道具にされそうになるのよ。ジェニー先輩だって、最初はそうだったでしょ。」

チアキが言った。

「そう言えば、サーシャの家もお金持ちだから、縁談がいっぱい来てるんじゃないの。」  
「うん、みんな、気を悪くしないでね。正直言うと、この前のダンスパーティが終わってから、親戚や父さんの知り合いから、沢山来たらしいよ。」

でも、私は、医者になるために当分、勉強を続けるからって、全部、断ってもらってるんだけど……。」

「サーシャはしっかりしているよねえ。」

でも、うらやましいなあ。私の場合は、

『もうじき18歳にもなるのに、お前のところには一つも縁談が来ない』

って、この間、母さんに嘆かれたよ。」

ウルスラが言った。

「茉莉香の場合は、どうなの。縁談。」

「ええ!? 梨理香さんからは何も聞いてないよ。弁天丸にもそんな通信、来ないし。」

「そういえば、弁天丸のブリッジは、男も女も、独身ばかりだよねえ。」

「それ、ヤバイねえ。茉莉香、弁天丸に乗っていると、一生、独身かも。」

「確かに、それヤバイ。アハハハ・・・。」

「もー。私のこと、ネタにして、遊ばないでよねえ。」

「縁談の話は、それくらいにしなさい。」

しかし、母上の場合は、結婚のことだけが理由じゃないのだ。

銀河帝国や聖王家は、多くの星系を併合した統一戦争において、初期の圧倒的な勝利に酔い、次第に『諸人類の自由と平等のための銀河の統一』という本来の理念を見失っていったのだ。そして巨大な帝国の権力をめぐって内向きの抗争を繰り返していた。

母上はそういう聖王家の現状にも絶望していたという。

子供の頃からの母上の夢だった、アンドロメダ遠征というような壮大な目標を追い求める進取の気風も、もはや失われたと思ったそうさだ。」

「銀河帝国が、各星系の自治権を尊重して、領土拡大政策を停止させた背景には、そうい

う政治情勢があつたのですね。」

グリユーエルが言った。

「そうだ。」

母上としては、そんな希望の無い退屈な人生を送るくらいなら、若い時に一度でも良  
いから海賊王子のように自由な冒険航海に出てみたくなつたと言つていた。

そこで、海賊たちに命じて、王宮を抜け出し、ひとりの女海賊として海賊船に乗つて、  
辺境宇宙をめぐる旅に出たそうだ。」

「そうなんですか？ ネットの裏情報では、女王様に婚約を無視されてメンツをつぶされ  
たアンドレア公爵の怒りが、聖王家の内紛の直接の原因という説も有力ですが・・・。」

「そんな愛憎劇が生まれるほどの濃厚な人間関係があるなら、苦勞はないと母上から聞  
いたよ。もともと、双方ともうべだけの政略結婚だと承知しているはずだから、遺恨  
の生まれるはずが無い。」

「やっぱり、女王陛下は、強いご意志でご自分の人生を切り開いた、すばらしい方ですね。  
私たちも見習わないといけませんね。」

王家の女性はそのような強い意思を持っていないと、政略結婚とか周りの思惑に、す  
ぐに流されてしまいます。

「私たちも、とんでもないことをするとこゝろでしたから。」

グリュールが言った。

「そうだな。特に王女には、自分の人生を選ぶ強い意志が必要だと、私も思う。

話を続けると、母上の家出を支援した帝国海賊たちの思惑は違っていたそうだ。海賊たちは、この機会に暗殺者の手から我らの姫を守ろうと思ったそうだ。

その頃、赤薔薇家では、アンドレア公爵の上の二人の兄が相次いで事故や病気で亡くなった。このため、アンドレア公爵が赤薔薇家を継いだ。海賊たちは、赤薔薇家の内情や公爵サイドの野心を知っており、聖王家の内紛が更に激しくなると予想したからだ。」「聞きにくいことですが、先生が孤児として育った背景は、そういうことなんですか?」「そうだ。女海賊としての母上の旅は、帝国海賊の連中がいつも見守っていたが、さすがに、母上が恋をするのは止められなかったそうだ。そして、私が生まれた。

そして、母上は、王に自分の結婚と私の存在を認めてもらおうとしたそうだ。

だが、逆にそれが赤薔薇家配下の暗殺者に手がかりを与え、追及を招くことになった。困った私の父は、母上と私を別々に、密かに帝国海賊達に託したそうだ。そして、親子三人を連れて逃げていると見せかけて、自分の乗っている船を暗殺者に狙わせたそうだ。それで、暗殺者は、宇宙船を撃沈し三人を殺したと思つて、引き上げたそうだ。

母上は、帝国海賊の長老から、私も父も死んだと聞かされて、とても悲しみ、二度と王宮に帰らないと誓つて、姿を隠したそうだ。

父も宇宙海賊だったそうだが、母上は今も名前を覚えてくれない。

その間に、銀河帝国の内紛は激しさを増し、聖王家の本家である青薔薇家の3人の兄王子が、相次いで、病気や事故で亡くなったそう。

これを受けて、アンドレア公爵は、王に、青薔薇家に跡継ぎがないのだから、赤薔薇家の自分を皇位継承者に指名しろと迫ったそう。

王は、悩んだ結果、ついにガーデンキーパーの老人たちを呼んだ。そして

『私はまだアンが生きているような気がする。アンを探してほしい。』

と、アン王女を探すことを命じたそう。

「それで、帝国の宇宙海賊は立ち上がったんですね。」

「そうだ。海賊たちには王女の居場所は分かっている。」

問題は、王女がどうやって姿を現すか、その方法だ。

結論から言うと、海賊たちは、大艦隊を率いて、堂々と王女を出迎えに行く方法を選んだ。そうやって軍勢力を示すことが、王女が王位につくために必要と思っただからだ。

最終的には千隻の軍艦が従って、帝都クリスタルスターまで、パイレーツ・キャッツルに乗船した王女を送り届けたそう。

「その中には帝国軍の船もあったのでしよう。」

帝国軍は政治的中立がモットーで、王位継承問題など聖王家の問題に介入しない軍規

を厳しく守ってきたはずですが・・・」

と、グリユーエルが言った。

「そうだな。その意味では、禁じ手を使ったことになる。」

官僚組織として政治的中立を保っていたはずの帝国軍の中に、王に絶対忠誠を誓う、王の『私兵』のような存在が姿を現したのだからな。

だが、帝国軍内部に潜んでいた海賊の末裔は、軍規違反覚悟で王女様を迎えに飛び出した。王の命を受けた海賊たちは、王位継承問題について、力による解決を選んだ。

こうして、長い間帝国軍の中に潜んでいた海賊の末裔が、ついに正体を現し、その軍事力に守られ、母上が王位についた。

その反省から、その後、公爵側も、帝国軍の中に自分の支持者を作ってきたから、帝国軍の主力は政治的中立を守っていると云っても、帝国軍内の対立は深刻になっている。」

「すごい話ですね。」

でも、どうして、その帝国海賊さんたちの前で、先生が、海賊ショーをやるのですか？」

「ハハハ、それは見てのお楽しみだ。」

さあ、練習するぞ。衣装の用意もしてきたので、まずは、着替えて・・・。」

## 第六章 帝国海賊

### 6-1 弁天丸ブリッジ

弁天丸ブリッジでは、昨日から、ミーサやシュニツツアーが、仕事で付き合いのある銀河帝国第七艦隊の艦長やクルー達からの、お祝いの通信で忙殺されていた。

帝国軍の首脳会議でクリスティア王女が登場したこと、その副官として茉莉香が現れたことは、帝国軍内部でも口コミで伝わっていたからだ。

「茉莉香は、とうとう銀河帝国にデビューしたわね。それも、派手にねえ。」

先日の宇宙大学のコスプレ・ショーとは、インパクトが違うわね。」

少し興奮気味に、ミーサが言った。

「そうだ。帝国軍の大佐、しかも17歳だから、史上最年少の高級士官。

さらに、クリスティア王女の副官ということは、王族並みの扱いだ。

帝国軍の連中が『キャプテン茉莉香も王女なのか?』と聞いてくるのも無理はない。」

シュニツツアーは、感情を表さずに、淡々と言った。

「マスコミには、まだ公表されないのねえ。」クーリエが言った。

「帝国軍の連中によると、しばらくの間、非公表らしい。」百目が言った。



「ねえミーサ、茉莉香ちゃんは、本当に王女じゃないのよねえ。」

「ゴンザエモンと梨理香の娘に間違いないわよ。」

「だったらすごいことね。でも、海賊稼業はどうするのかなあ。」

「何も言つてこないから、やめるつもりはないでしょう。」

帝国軍の副官より海賊の方が、あの子の性格に合っているはずだしねえ。」

「お取り込み中、済みませんが、まもなく、レッドクリスタル星系の目的空域にタッチダウンします。」ケインが言った。

通常空間に復帰した弁天丸は、レッドクリスタル星系の外延部、巨大な惑星ブルー・クリスタル周辺に姿を現した。

惑星ブルー・クリスタルは、水素、窒素その他の炭化水素を主成分とする巨大惑星である。その名の通り、輝くように青い大気に包まれた星である。

帝国海賊の旗艦パイレーツ・キャツルの姿はまだ見えないが、すでに、3隻の私掠船免状を持つ海賊船が到着していた。予定では、今日中にすべての海賊船がそろい、明日が手打ち式となっている。

「うわー。すごい星空。核恒星系の海は、やっぱり、星が多いねえ。」

「そして、あれが、銀河のネットワークか。これは、どうみても、白、青、もうひとつ青の宝石をつけたネットワークスだよねえ。キレイだねえ。」

「なるほど、ここでは、母星のレッド・クリスタルは遠すぎて大きく見えないから、ネットワークの宝石もレッド・クリスタルの赤じゃなくて、惑星ブルー・クリスタルの青になっているのかあ。惑星ブルー・クリスタルの青色って、ほんとにキレイ。」

「やつぱり、ここは、宇宙の中心だよねえ。う~~~~ん。」

壮大な星空の姿に、弁天丸のクルー達が声を上げていた。

翌日、私掠船免許を持つ海賊船10隻が勢揃いしている前方に、巨大な宇宙船が静かに姿を現した。現れた船は、全長1キロ程の、戦艦と言うより宇宙要塞であった。

「うわ、大きな船が出てきたわ。こんなものが、本当に超光速飛行してきたの？」

プレドライブ反応が殆ど無く、重力異常もわずかだったので、もしかしたらと思ったんだけど。この反応は、茉莉香ちゃんを乗せた『おれのばあさん号』の時と、同じねえ。

.....

えーっと、トランスポUNDER確認。船籍、銀河帝国、船名、宇宙海賊船パイレーツ・キャツスル。」

「すごいわね。こんなに大きな船、銀河系のどこに潜んでいたのかしら。」

「パイレーツ・キャツスルから、通信、来ました。」

港湾区域にドッキングするように誘導すると言っています。」

「了解すると返事しておいて。あと、ケイン、操舵お願い。」

それにしても、茉莉香は、遅いわねえ。何処で何やっているのかしら。学校じゃないんだから、海賊に遅刻はなしよ。」ミィサが言った。

「あ、また、同じような反応。もう一隻、亜空間から船が出てくるのね。今度のは、うわー、パイレーツ・キャッスルよりさらに大きいわ。」

全長2キロ以上、特大の移民船並みの大きさね。」

クーリエが言った。

「トランスポンダー確認。船籍、銀河帝国宇宙軍第一艦隊。」

船名、機動空母グランドマザー、だつて。」

・・・シュニツァー、この軍艦、知ってる？」

「いや、初めて見る名前だ。新型艦だろう。それにしても、大きい。」

「ミィサ、機動空母グランドマザーから通信が来た。茉莉香ちゃんからミィサ宛てよ。」

「そろそろ来ると思ってたわ。モニターに出してちょうだい。」

「やあ、ミィサ。遅れてゴメン。今、着いたところ。」

モニターに、帝国軍の新しい制服を着た茉莉香が現れた。

「遅いわよ。茉莉香。今、パイレーツ・キャッスルにドッキングして、海賊宮殿の大広間に集まるよう案内があったところよ。」

あなた、間に合うの？」

「それは、みんな一緒だから大丈夫。私も、船長として手打ちの儀式は出席するわよ。でも、そのあとの儀式にも出るの、準備に忙しいのよね。」

「わかったわ。手打ち式のあとは私が代理出席しておくわ。」

その『あとの儀式』というの、拝見させてもらうから。

それから、加藤大佐殿。

その帝国軍の制服、よく似合ってるわ。こんなかわいい制服を採用するなんて、帝国軍も見直したわ。」

「いやあ．．．ありがとう。ミーサにそんなにほめられると、少し恥ずかしいなあ。」

「で、やつぱり、あの帝国海賊の女は、銀河帝国の王女だったのね。」

「そうよ。クリス先生は、秘密の王女様だったの。」

それで、私、チアキちゃんと一緒に王女様の副官、つまり第一艦隊司令官の副官になったの。」

あー、だからと言っても、弁天丸の船長はちゃんと続けますから。ご心配なく。」

「へえー、あの女と命がけで戦って、手打ち式も済んでいないのに、もうあの女の副官になるなんて、気持ちの切り替えが早いのねえ。」

「そこが私のトリエだもの。エへへ．．．。」

ねえ、ミーサ。私、この間、夢を見たんだよ。その夢の中で、自分がこれから何をしたいのか、少しわかってきたよ。

私、もつと広い宇宙（うみ）に出てみたいんだ。もちろん、弁天丸のみんなと一緒にだよ。」

「そう言ってくれると思ってたわ。」

ミーサは、弁天丸のクルーの顔を見渡した。

ケインと、クーリエと、シュニツツアールと、ルカと、百目と、三代目とも、ミーサと目があつた。みんな同じ気持ちなのだ。

6-2 海賊宮殿大広間（パイレーツ・キャツスル船内）

パイレーツ・キャツスル艦上の、海賊宮殿の大広間では、細長い巨大なテーブルを挟んで、二組の人たちが席についている。

一方は、私掠船免状の海賊船の船長10人であり、テーブル中央がカーン伯爵とケンジョー・クリハラ。茉莉香は、今日は末席に並んでいる。

他方は、帝国海賊8人。中央の2席は空席であつた。彼らは、黄金の鬚髯を肩につけ、黒を基調にしたきらびやかな海賊船の船長の制服に身を包み、大半の者は仮面をつけている。

やがて、帝国海賊の船長たちが起立した。それに合わせて、私掠船免状の海賊船長たちも起立した。そして、中央の空席に、二人の女性が現れた。

深紅の生地に黄金の装飾も鮮やかな海賊服に身を包んだ二人のうち、一人はクリスティア王女だった。王女は仮面をつけていなかった。

もう一人の女性は、仮面をつけていたが、その圧倒的な迫力、存在感からその人が誰であるか、明らかだった。

『銀河帝国の王は、海賊の王』

それは、おとぎ話にも詠われている常識だった。そのことは、一般の人々にはおとぎ話の世界のことと思われている。わずかに帝国宇宙軍の旗艦が「クイーン（キング）・オブ・パイレーツ」という名前であることが、その名残だとされている。

しかし、銀河帝国の宇宙海賊たちにとっては『銀河帝国の女王は、海賊の女王』ということは、現代でも真実であった。

船長たちは、膝まづいて臣下の礼をした。

その人は、一堂に座るように促し、自らも着席した。

「みなさん、遠くからよく来てくれた。礼を言う。私が帝国海賊の王である。

こちらはわが子クリスティア、

そして副将のヴァイシユラ。

七長老のインドラ、

アグニ、

ヤマ、

ラークシヤ、

ヴァルナ、

ヴァーユ、

イシャーナだ。

これが、銀河系の八方面を治める帝国海賊、八氏族の長だ。

私も含め、故あって仮面をつけている者がいるが、昔からの習わしと理解してほしい。」

「海賊船迦陵頻伽の船長、カーンでございます。」

今日は、陛下からお招きをいただき、このように、陛下と同席する光栄を賜り、一同、深く感謝、感激いたしております。

それでは、私から、各船長をご紹介します。

バルバルーサの船長、ケンジョー・クリハラ。

ピラコーチャの船長、カチュア・ザ・レディ。

エル・サントの船長、ウィザースプーン。

シャングリラの船長、マスター・ドラゴン。

ロウ・オブ・ウオーの船長、コジヤ。

ラブマシンの船長、スリーJ。

ダークスターの船長、ザ・ピース。

村上丸の船長、スミコギ。

弁天丸の船長、加藤茉莉香。

以上でございます。」

船長ひとりひとりが、紹介されるたびに改めて礼をし、女王がそれにこたえた。

「では、本題に入ろう。」

そして、このたびはクリスティアが皆さんと戦いをはじめ、大きな被害を与えてしまった。そのことを陳謝し、改めて契約を結びたい。

クリスティア、お前からも謝罪しなさい。」

「心から謝罪したい。本当に自分の至らなさを恥じている。」

「いえいえ、我々も海賊。海賊が海賊として自分の判断と責任で戦っただけのことです。ごめいます。」

勝敗の如何にかかわらず、その結果は、すべて各々が自分で責任を負うものであって、陛下や殿下がお気に召されることはないと思存します。」



と、カーン伯爵が言った。

「伯爵、そのことばには、母としても感謝する。

では、さっそく契約の調印を始めよう。内容はすでに示した通りだ。」

重々しい皮の表紙がついた書類が二つ用意され、女王とカーン伯爵が、交互にサインをした。

調印式はあつげなく終わった。

そして、銀河帝国の女王が次のように語った。

「ありがとう。無事に話を収めることができて何よりだ。改めて礼を言う。

さて、このたびの戦いで、私掠船免状を有する海賊たる、お前たちの実力は十分にわかった。私は、お前たちを、一流の海賊と見込んで、私の望みを述べたい。

今日から帝国海賊となり、私のために働いてくれないか。

知っていようが、銀河帝国は、今、銀河を縦横に貫くミルクィウエイ計画を進めている。

これが実現すれば、銀河系内は今の星系内航海のように安全かつ短時間で結ばれ、交易や経済開発は大いに進むだろう。ほどなく宇宙の海は大きく変わり、大航海時代の名残は一掃されるだろう。

だが、銀河系の辺境開発はこれで終わりではない。

銀河系外延部の惑星開拓や銀河系近傍の星団・星雲への航路開拓など、ここ二百年ほどの間、銀河帝国が放置してきた仕事を片付けなければならぬ。

そして、その先には、わが念願のアンドロメダ星雲への大遠征が控えている。

このためには、一流の船乗りというだけでは足りない。帝国の先駆けとして、恐れることなく未踏の宇宙を駆ける、お前たちのような一流の海賊が必要だ。

お前たちも私の夢の実現に力を貸してほしい。」

その時、海賊の若者が、黄金の髑髏を私掠船免状の船長たちの前に置いた。もちろん、黄金の髑髏は、帝国海賊の船長の証である。

私掠船免状の海賊の船長たちは、緊張し沈黙している。

茉莉香も他の船長の気配を察して、黙っていた。

沈黙を破って、真つ先に、ケンジョー・クリハラが黄金の髑髏を手に取り、席を立つた。

ケンジョーは、左手で左肩に黄金の髑髏を当て、右手を床につけて臣下の礼をとり、言った。

「おれは、女王陛下、あなたのために命を懸けることを誓う。」

それを機に、ほかの船長も彼に続き、同じように誓った。

「ありがとう。私は、お前たちを新しい臣下として歓迎する。」

さあ、今日の良き日に、海賊王子指名の儀礼を行う。支度を始めよ。

新たに帝国海賊としてわが臣下となったお前たちも同席し、祝ってほしい。」

海賊王子指名の儀式は、銀河帝国の王位のもう一つの側面、海賊王の次の継承者を明らかにする、海賊だけの秘密の儀式である。

海賊宮殿の大広間では、女王が玉座に座り、海賊達が女王に向かって立ち並んでいる。海賊宮殿の玉座に座った女王が立ち上がり、宣言した。

「私は、我が子クリスティアを海賊王子に指名する。」

やがて、大広間に、クリスティアを先頭に、茉莉香とチアキ、そして白鳳女学院ヨット部たちが続いて現れた。

王女は、深紅の海賊服である。茉莉香も黒を基調とした、チアキも青を基調とした、ヨット部員も黄色を基調とした、きらびやかな黄金の装飾をつけた海賊服に身にまとっていた。みな、腰に剣を帯びていた。

先頭のクリスティアが叫んだ。

「パイレーツ・キャツスルに集いし海賊共よ。われを見よ。われの声を聞け。

われは、クリスティア。地上に降りた神の子孫、この世の光、銀河聖王安の娘なり。」  
続いて、白鳳女学院ヨット部の皆が叫んだ。

「地上に降りた神の子孫、この世の光、銀河聖王の娘！」

「われは、クリスティア。王の中の王、銀河の万物の主（あるじ）たる、銀河聖王安の娘なり。」

続いて、白鳳女学院ヨット部の皆が叫んだ。

「王の中の王、万物の主、銀河聖王安の娘！」

「われは、クリスティア。銀河の海をわが海とする、帝国海賊の八氏族を治める海賊の王、銀河聖王安の娘なり。」

続いて、白鳳女学院ヨット部の皆が叫んだ。

「帝国海賊の王、銀河聖王安の娘！」

「われは、クリスティア。今、この日、この時、われは、銀河帝国聖王安の継嗣にして、帝国海賊八氏族に君臨する海賊の王安の継嗣たることを宣言する。」

続いて、白鳳女学院ヨット部の皆が叫んだ。

「銀河聖王安の継嗣、海賊の王安の継嗣！」

「異議のあるものは、名乗り出よ。」

わが剣にかけて、われが銀河の万物の王安を継ぐにふさわしいことを、明らかにせん。

異議のあるものは、名乗り出よ。

いざ、名乗り出よ。」

そうやって、クリスティアは、腰の剣を抜いて、高く掲げた。

続いて、白鳳女学院ヨット部の皆が叫んだ。

「いざ、名乗り出よ。いざ、名乗り出よ。」

そう言つて、ヨット部の皆は、腰の剣を抜いて、高く掲げた。

さらに続いて、茉莉香とチアキが、叫んだ。

「われは、加藤茉莉香なり。」

「われは、チアキ・クリハラなり。」

「われら、銀河聖王の娘クリスティアに付き従うものなり。」

わが剣にかけて、われらの主が銀河の万物の王を継ぐにふさわしいことを、明らかにせん。

異議のあるものは、名乗り出よ。

いざ、名乗り出よ。」

そう言つて、茉莉香とチアキは、腰の剣を抜いて、高く掲げた。

「待て、待て。待たれたい。」

そう言つて、三人の若者が現れた。いずれも黒を基調とした、きらびやかな海賊服に身を包んでいる。

一人目は、30歳前後の男であつた。

「われは、帝国海賊、八氏族のひとり、キャプテン・ヴァイシユラ・キッドの長子、フレッ

ドなり。

王女クリスティアよ。御身が、われらの主、銀河の万物の王を継ぐにふさわしいことを、わが剣にかけて、明らかにせん。

いぎ、立ち会わん。」

「もとより、望むところ。」クリスティアが答えた。

二人目は、20代半ばの若い男であった。

「われは、帝国海賊、七長老のひとり、キャプテン・ヴァルナ・モーガンの長子、ギルバートなり。

加藤茉莉香よ、御身に問う。

御身の主が、われらの主、銀河の万物の王を継ぐにふさわしいことを、わが剣にかけて、明らかにせん。

加藤茉莉香よ、いぎ、立ち会わん。」

「もとより、望むところ。」茉莉香が答えた。

三人目は、30歳前後の女性だった。

「われは、帝国海賊、七長老の一人、キャプテン・インドラ・クキの長子、スカーレットなり。

チアキ・クリハラよ、御身に問う。

御身の主が、われらの主、銀河の万物の王を継ぐにふさわしいことを、わが剣にかけて、明らかにせん。

チアキ・クリハラ、いぎ、立ち会わん。」

「もとより、望むところ。」チアキが答えた。

そして、三組の若者は、剣を抜いて戦い始めた。一方が攻め、一方が受ける。次は、攻守が逆になる、という形だった。それが何度も繰り返されたが、儀式としてやっているとは思えないほど、剣を打ち合う音は鋭かった。

「えいっ!」

「えいっ!」

「えいっ!」

やがて、クリスティア、茉莉香、チアキの剣が、それぞれ相手の首筋に突き付けられ、相手の三人が剣を投げ捨て、言った。

「御身の力、いま、思い知りましてございます。」

貴方を疑ったこと、一生の不覚にございます。

この上は、わが命、いかようにも処断ください。

願わくば、わが生涯にわたり御身に仕え、この恥を雪ぐ機会をお与えください。」

「フレッド・キッド、お前の願い、聞きとどけた。生涯にわたり、我に仕えよ。」

「ギルバート・モーガン、お前の願い、聞きとどけた。生涯にわたり、我に仕えよ。」  
「スカレット・クキ、お前の願い、聞きとどけた。生涯にわたり、我に仕えよ。」

フレッド、ギルバート、スカレットの三人は、それぞれ自分の剣と用意された「黄金の髑髏」をクリステリア、茉莉香、チャキに献上した。そして、クリステリア、茉莉香、チャキは、これを改めて三人に授けた。

女王臨席の場で黄金の髑髏を与えられることは、この三人が帝国海賊の船長（キャプテン）に叙せられた栄誉を示している。

これに対して、フレッド、ギルバート、スカレットの三人は、それぞれに用意された花束をクリステリア、茉莉香、チャキに献上した。クリステリアには青く輝く奇跡の薔薇の花束、茉莉香には深紅の薔薇の花束、チャキには奇跡の薔薇の花束だった。

クリステリア女王を中央にして、茉莉香、チャキの三人は、その後ろにフレッド、ギルバート、スカレットの三人の従者を伴って、女王の玉座の前に進み出て、一礼をした。

「クリステリア、御身を祝福する。海賊王子の証として、我が宝剣を授ける。」

クリステリア女王は、女王から宝剣を受け取った。宝剣は、白銀の鞘に赤青黄白など色鮮やかな宝石をはめ込んだ美しいものだった。

六人が女王の前から下がろうとしたときに、女王が言った。



「待て。チアキ。御身はまだ帝国海賊の船長（キャプテン）ではなかったな。

では、今ここで、御身を船長（キャプテン）とする。近くに寄れ。」

「あああ……はい！」

予想外の女王の言葉に驚いたチアキは、あわてて女王に近づいて、片膝をつき、頭をたれた。

女王は、自らの肩にあつた黄金の罽褌を手にとつて、チアキの肩に授けた。

そして、再び、クリステイア王女を中央にした六人は女王に一礼した。

「女王陛下万歳！」

「王女殿下万歳！」

それまで大広間で黙つて儀式を見つめていた海賊たちや白鳳女学院ヨット部員から、大きな歓声が沸きあがつた。

「さあー！ 祝宴だ。」

皆、大いに飲んで食べ、今日の日を祝つてほしい。」

女王が言うと、テーブルが運ばれ、飲み物や料理が次々と並べられた。

白鳳女学院ヨット部の皆も、用意されたテーブルに案内されたが、そこにはすでにグリユーエルとヒルデが座つていた。

「私たちは、また、コスプレをさせて頂けませんでしたわ。」

「私も、儀式に参加させて頂きたかったです。」

二人は、少しふくれっ面だった。

「まあまあ、そんなに怒らないでよ。ねえ」

ヨット部員達が機嫌を直そうと言葉を掛けた。

しかし、グリーユエルは、厳しい表情で言った。

「かくなる上は、深い悲しみに陥った女性が自らを癒すために行うという、例の儀式を行うしかありませんわ。」

「??? 何のこと??」

「お姉さま、私も同じ思いの言葉を知っております。」

「グリーユエル、ヒルデ。 何のことを言っているの?」

「その儀式とは、『ヤケグイ』と呼ばれているそうですわ。」

「それから、同じような意味で、そういう精神状態の女性は『グレテヤル』と叫ぶそうですわ。」

「ええ???. . . . .」

「また、アイツだ!」

ヨット部員たちは、グリーユエルたちにこんな変な言葉を教えたのは、きつと、また、ママに違いないと思った。

ヨット部員達の脳裏に、いつものように笑うマミの顔が浮かんだ。

「マスター、マスター！」

海賊たちの心を甘く溶かしたという伝説のデザートを二つお願いいたします。大至急ですわ。」

「それから、ケーキにプリンにアイスクリーム……とにかく甘いものをこのテーブルが一杯になるまで、お願いいたします。」

グリユーエルとヒルデの注文の様子を呆然と見ていた白鳳女学院ヨット部の皆も、あわてて続いた。

「あのう、えーっと、私たちも伝説のデザートをお願いします。」

やがて、伝説のデザートが運ばれてきた。スイーツもテーブルに溢れるほど並べられた。

「さあ、皆様、銀河帝国中の様々な草花を蜜に漬けた五百年物の甘露、我が親父自慢のデザートでございます。至高の味を、どうぞ召し上がれ。」

どうやらマスターは、例の五人兄弟の一人のようだった。

「いただきますー！」

白鳳女学院のヨット部員たちは、いつせいに伝説のデザートと言われる氷菓子を、ものも言わずに食べ始めた。

「うわー、おいしい！」

「心にしみわたるねえ。」

少女たちはあつという間に器を空にして、言った。

「おかわり〜!!」

すぐに運ばれてきた伝説のデザートのおかわりを食べながら、リリイが言った。

「そういえば、茉莉香たちはどうしてるの？」

「茉莉香とチアキはあそこ。茉莉香は赤いバラの花束を贈ってくれたギルバートさんや大勢の船長さんたちと楽しそうに話してる。チアキは、スカーレットさんと一緒。」

「ねえ、茉莉香だけ赤いバラの花束って、どういう意味なんだろう。」

「まさか、プロポーズだったりして・・・。」

「キャハハハ。でも、本当だったら、茉莉香、すごい！」

「ねえ、あのギルバートさんって、かなり良い線いってると思わない。」

「私も、そう思う。素敵な大人って感じよね。あのひと、包容力があって、頼りがいがありそうで。」

「思いつきりわがまま言っつて、甘えたいって感じ。」

「でも本当はどんな人なんだろう。普段も、海賊なのかなあ・・・。」

「グリユーエル！ かき氷ばかり食べていると、おなか壊すわよ。」

チアキがそう言いながら、スカーレットを伴って皆のところへ来た。

「ご心配ありがとうございます。チアキさん。」

グリユーエルが微笑んだ。

伝説のデザートは、グリユーエル達のふくれっ面も溶かしたようである。

「チアキちゃん、おめでとうございます。船長さんですね。」サーシャが言った。

「ありがとう。ほんと、茉莉香についていくと、予想外のことばかりだね。」

チアキは、ちよつと照れて微笑んだ。

「ヨット部員みんな、本当に今日はありがとう。」

クリスティア王女がそう言つて、皆のところへ来た。

「先生！すてきでした・・・」

「その衣装、すごく綺麗です。」

ヨット部員たちは口々にそういつて立ち上がり、王女の周りに集まつていった。

王女は、先生の表情に戻り、みんなと言葉を交わしていた。

「そうだ、皆で、母上のところにあいさつに行こう。」

王女はそう言つて、ヨット部員の皆を連れて、女王のもとへ行こうとした。

その時、後ろからついてきたサーシャが、何かに気づいて突然走りだした。

「やめて！」

もう、やめて！」

そう言つて、サーシヤが女王に近づいたときに、光の幕が女王とサーシヤを包み、同時にブラスターの光が女王の周辺で折れ曲がつて、床やテーブルを焦がした。ビーム兵器対策用のバリヤーが機能したようだ。

「あそこだ！」

「撃て！」

「殺すな！捕えろ！」

女王への襲撃で、大広間は大騒ぎになっていった。

この時、茉莉香とチアキは、クリス女王の周りで自分の体を盾にして、剣を抜いて構えていた。三人の周りを、フレッド、ギルバート、スカーレットの三人の従者が固めている。

女王を襲撃した賊は三人組だった。ウエイターやメイドの服を着て近づいたようだが、狙撃手ともうひとりのウエイターが男、あとの一人はメイド服を着た女のようにだった。

逃げていく彼らを狙ったブラスターの光は、折れ曲がつて届かなかつた。彼らもバリヤーを張っているようだった。

ブラスターの光線では効果がないとみて、ケンジョー・クリハラが古式拳銃を放った。

轟音が響き、弾丸は賊の狙撃手の体に命中したが、狙撃手は倒れなかった。

そして、三人は大広間から逃げて行った。

「旦那様、ここは私が食い止めます。どうかお逃げください。」

私は傷ついて、もう長くはありませんから。」

廊下を走りながら、狙撃手が言った。

「すまん。ヒガンの世界で先に待っていてくれ。俺たちもすぐに行くから。」

「お待ちしております。」

狙撃手は、廊下の曲がり角に立ち止まって、追っ手に反撃した。激しいブラスタアの射撃に警備兵がひるんで、追跡が止まった。

すると、今度は、警備兵に変わって、白兵戦用の重装防護服に身を包んだ海賊の猛者たちが、分厚い蛮刀や斧を振り上げ、うなり声をあげて狙撃手に突進していった。

勝負は一瞬でついた。

だが、狙撃手は既に毒を飲んでいて、自分の命を犠牲にして、あとの二人を逃がしたのだった。

## 第七章 公爵の反乱

7-1 海賊宮殿大広間（パイレーツ・キャッスル船内）

パイレーツキャッスルの海賊宮殿大広間は、落ち着きを取り戻しつつあった。

「全艦、戦闘体制だ。まもなく、第一艦隊が通常空間に復帰して、艦隊戦の布陣をひく。

各船長は自艦に乗船して合流しろ。」

私掠船免状の船長も、自艦に乗船して、第一艦隊後方に待機。指示を待て。」

帝国海賊の船といっても軍事面では帝国宇宙軍第一艦隊と一体化しており、てきぱきと指示が飛んでいく。

「陛下、ヤマシタ参謀総長からクイーン・オブ・パイレーツに乗船頂きたいという進言が参っております。」

副将ヴァイシユラ・キッドが女王に言った。キッド自身も、帝国軍では参謀次長ウイリアム・キッド准将と名乗っており、士官学校出身のエリート軍人でもある。

帝国軍の最高指揮官である女王が、帝国軍全体の旗艦であるクイーン・オブ・パイレーツに乗船するのは当然のことであるが、それは帝国軍全体が戦闘体制に入ったことを示している。



「わかった。今行くと伝えよ。」

と答えつつ、女王はサーシャに言った。

「サーシャ、礼を言う。お前が最初に気づき、お前の持っていたバリエーが私を守ったよ。うだな。」

褒美をとらそう。お前の望みを考えておくがよい。何でも良いぞ。」

「……」

サーシャは何も言わず、頭を下げた。

「さあ、ヨット部員！ 私たちもグランドマザーへ戻ろう。」

茉莉香は弁天丸へ乗船しなさい。チアキは私と一緒に来なさい。」

クリス王女が言った。

「はい。」

茉莉香とチアキが言った。

茉莉香は、ギルバート・モーガンと並んで何か話しながら、弁天丸に向かっていった。

「あの二人、なかなか良い雰囲気よねえ。」リリイが言った。

「ちよつと、リリイ。何でも男女関係で見るのはおかしいわよ。」チアキが咎めた。

「わかったわよ。チアキちゃんとスカーレットさんは、そういう目で見ないから。」

「私はそういう意味で言ってるんじゃない！・・・」

それに『ちゃん』じゃない！」

7—2 弁天丸

茉莉香は、弁天丸ブリッジの船長席に立ち、そしてその隣には、ギルバート・モーガンが並んだ。

「みんな！ こちらはギルバート・モーガンさん。

私の……なんだっけ？」

茉莉香はギルバートを紹介しようとして、言葉に詰まり、恥ずかしそうに彼の方を見た。

「弁天丸のみなさん、はじめまして。ギルバート・モーガンです。

帝国海賊であるキャプテン加藤茉莉香さんから、その従者に任命された者です。」

「そ、そうでしたね。……とにかく、弁天丸を一度見てほしかったので、来てもらいました。」

これから、弁天丸のおもなクルーを紹介します。」

茉莉香は、一人ひとり紹介した。

「初めまして。帝国海賊でモーガン姓ということは、帝国海賊八長老のヴァルナ・モーガン卿の息子さん、たしか、帝国軍参謀本部にいたモーガン中尉ですね。」

シユニツツアーが言った。

「その通りです。現在、帝国軍では第一艦隊司令官の軍務秘書官で、加藤大佐付きを命じられています。」

「フフフ、でも、実際は茉莉香の教育係ってわけね、よろしくね。」

ミーサが言った。

「ええ！ そうなの？ モーガンさんって、私の先生なの？」

「茉莉香、もうちよつと自分の立場を自覚しなさい。」

あなた、銀河帝国では、聖王家の王族並みに大切にされているのよ。

でなければ、17歳の女子高生がいきなり大佐になれるわけがないでしょ。」

ミーサが言った。

「やっぱりそうかあ。王女様の副官にならないかと言われたときに、チアキちゃんも同じようなこと言ってたなあ。」

「クリハラの娘の方は、常識があるな。」

シユニツツアーがにやりと笑った。

「えー、お取込み中、失礼します。」

レーダーで通常のプレドライブ反応、多数確認。

たぶん軍艦がタッチダウンしてくるわよ。その数、3千、4千、うーくん、反応数が

どんどん増えて、数えられない。

トレスポンダー確認、みんな帝国宇宙軍第一艦隊、船名・・・

うわー、帝国軍の旗艦クイーン・オブ・パイレーツがいるわ。・・・

あとはもう省略ね。

戦闘用レーダー放射確認。高エネルギー反応確認。

みんな本気の戦闘体制よ。」

クーリエが言った。

「なんだ？　この艦数の多さは。

しかも、旗艦まで来て、全艦、戦闘モード。

クーリエ、帝国艦隊か帝国海賊から、俺たちに艦隊行動の指示はきているか。」

シユニツツアーが言った。

「それなんですけど、第一艦隊の後方に待機ということ・・・。

船長、そうでしたよね。」

モーガンが言った。

「あ、はいはい、忘れてました。確かにそうでした。」

「それで、船長。

タッチダウンしてくる第一艦隊と交錯しないように、惑星公転面の下から回り込ん

で、ここから20万キロ離れたこの辺に、私掠船免状の海賊船が集結するようにしたらどうでしょうか。」

モーガンが言った。

「20万キロ？ そんなに後方に下がるんですか？」

「第一艦隊の規模から、そのくらい必要です。」

帝国軍の作戦計画でも、通常、後方に待機する部隊との距離をその位に考えています。それで、船長。その旨のご指示と、他の私掠船免状の海賊船にその旨の連絡をすることをご指示いただくよう、進言いたします。」

「あ、はいはい、わかりました。」

ケイン、クーリエ、お願い。」

「了解」

「わかりました、船長」

「ナハハ……」

やっぱり、勝手が違うなあ。

帝国軍とは演習で敵として戦ったことはあるんだけど、編隊を組んで味方として一緒に戦ったことはないからなあ。」

茉莉香が苦笑した。

「茉莉香、いつも調子でやればいいのよ。

良いとこ見せようとする必要はないわよ。」

ミーサは、茉莉香に声をかけ、そしてギルバートの顔を見て笑った。

「いつものあの子は、呆れるくらい、ズル賢いんだけどね、ギルバートさん。」

「承知しております。」

第七艦隊の参謀たちからも、弁天丸はキャプテン茉莉香の代になってから、さらに手ごわくなったという評判を聞いております。

私も、弁天丸のみなさんにお会いするのを楽しみにしておりました。」

「そう、ありがとう。茉莉香をよろしくね。」

### 7-3 機動空母グランド・マザー・ブリッジ

銀河帝国宇宙軍の第一艦隊は、通常空間に出そろった。それらの軍艦は、パイレーツ・キヤツスルの両翼に整列し、陣形を整えつつある。

その後方にクイーン・オブ・パイレーツとグランド・マザーが控え、更にその後方に私掠船免状の海賊達の船が控えていた。

この時、これと対峙する通常空間に、新たな大艦隊がタッチダウンしてきた。

グランド・マザーのブリッジでは、クルーが、タッチダウンしてきた艦隊のデータを

解析していた。ブリッジでは、すべての席に帝国軍人スタッフが座っていた。マリオたち、ミッキー船長の昔馴染みは、役割を終えたようだった。

「トレスポルダー確認、すべて、帝国宇宙軍第三艦隊の船です。」

さらに、また、第三艦隊の右舷、30万キロに、プレドライブ反応を多数確認。ここらは、トレスポルダーを発信していません。

しかし、船のエネルギール反応のパターンが一致する船がありますので、以前に遭遇した宇宙マフィアの主力艦隊と推定されます。その数、千隻をこえて増加中です。」

「フン、第三艦隊と宇宙マフィアか。役者がそろったな。」ミッキー艦長が言った。

「艦長、第三艦隊司令官アンドレア公爵名で全艦隊各艦長あてに一斉通信が入ってます。」

モニターに表示します。」

やがて、飾り立てた軍服を着た、中年の精力的な容貌の男性が現れ、こう言った。

「諸君、私は大変悲しい知らせを伝えなければならぬ。」

たった今、女王陛下が賊に暗殺され、すでに崩御されたことが確認された。

この知らせを聞いて、私は大変な悲しみに暮れておる。

私は、このような非常事態に際して、帝国の安寧を確保するため、あらゆる責任を果たす覚悟である。

ついては、まず第一に、私自ら、女王陛下のご遺体の前にはせ参じ、お悔やみを申し

上げたい。

第一艦隊の諸君は戦闘体制を解除し、パイレーツ・キャツスル、クイーン・オブ・パイレーツ及びグラント・マザーは、第三艦隊の船とドッキング体制をとってほしい。」

公爵が演説する画像を見ていたクリス王女は言った。

「大芝居を打ってきたな。

白兵戦部隊を送り込んで、本艦や旗艦を制圧するつもりだろう。

そんな見え透いた作戦に乗るものか。

さあ、ミッキー、グラント・クロスIIの三機編隊を甲板に出してくれ。

作戦通り、私が出撃する。

新戦艦の本当の実力を見せてやる。」

クリスティア王女は、サーシャの顔を見ていった。

「まもなく、第三艦隊が、女王暗殺の犯人だとして宇宙マフィア艦隊を攻撃し始めるだろう。そうなる前に、できるだけ早く、第三艦隊を戦闘不能にする必要があるのだ。

マフィア艦隊には、非戦闘員である家族も大勢乗っていると聞いている。

私は、罪もない彼らの家族まで聖王家の権力争いの犠牲にしたくないのだ。

聖王家の争いは、聖王家の者だけで決着をつける。



それが私の責任だ。」

サーシャは、悲しそうな眼をして何も言わず、黙って聞いていた。

「私も2号機で行きます。」

チアキが言った。

「副官ですから、どんな時でも司令官と一緒に戦います。」

「チアキ、お前、単独で操縦できるのか。私の船にいつしよに乗ってもいいのだぞ。」

「いいえ、できます。グラント・クロスの操縦は、ミッキー先生に教えてもらいました。」

ミッキー艦長は、黙って肯いた。

「チアキ様には、私も御供します。クキ・ファミリーの海賊たちも連れてまいります。」

スカーレットが、言った。

「クキの白兵戦部隊も連れて行くのか。」

クリスが言った。

「はい、万全の備えが必要です。」

クリス王女がグラント・クロスに乗って私掠船免状の海賊と行った戦闘の分析から、第一艦隊では、一人で操縦が可能な新戦艦であっても、3隻とも各艦にパイロットだけでなく、ブリッジのサポート要員や白兵戦要員の乗艦は必要と考えられていた。

「あのう……私も3号機で行って良いかなあ。操縦士は3人いた方が良いでしょう。」

ウルスラが、おずおずと手を挙げて言った。

「ええ!?」 ウルスラ、プロがやる本物の戦闘だよ。高校生のヨットレースじゃないよ、大丈夫?」

リリイが言った。

「私も、ミッキー先生に教わってたんだ。先生に言われたよ、パイロットとしての才能があるって。

だから、大丈夫。

それに、私の進路についても心配してくれて、推薦状を書いてやるから、帝国軍の士官学校へ進学したらどうかって。

そこまで評価してくれて、うれしかったなあ。ヨット部のみんなに比べて、私はいつも出遅れて、後ろから追いかけるのが精いっぱいだったから。・・・」

ウルスラがそう言った。

「ウルスラ、危険だぞ。これは実戦だ。

確かに、お前には素質がある。トップクラスのパイロットに要求される高度な情報処理能力と、宇宙で生まれ育った子供の持つ無重力下での抜群の運動感覚がある。グランド・クロスのシミレーターでの成績もきわめて良い。能力は、お嬢さま達と同等だ。

だが、お前には、ここで戦う動機がないだろう。

実戦の極限状態では、戦うための強い動機があるからこそ、必ず生きて帰るといふ強い意志が生まれるのだ。

だから、今は思いとどまりなさい。

実戦にでるのは、士官学校を卒業してからでも遅くはない。」

ミツキー艦長が言った。

「戦う動機なら、あるよ、ミツキー先生。

私、サーシヤのために戦うよ。

さつき、クリス先生がサーシヤに話しているときに分かったんだ。

事情は分からないけど、あの船にはサーシヤのとても大切な人たちが乗っているんだよね。サーシヤの悲しそうな顔を見て、分かったんだ。

私ねえ、生まれてからずっと、父と母と一緒に、オンボロの宇宙輸送船の中で暮らしてたんだ。

でも両親は私に女の子として良い教育を受けさせたいと思って、経済的にも無理をして白鳳女学院の中等部に入れてくれたんだ。

だから、中等部に入るまでずっと通信教育で、私は学校に行ったことがなかったんだ。そんな育ちだったから、中等部に入った直後は、ほんとに変わり者で、言葉づかいもお嬢様育ちのみんなと違ってたので、何を言っても笑われたり、クラスで仲間外れにさ

れたりしたんだ。あのころは、本当につらかったよ。

でも、サーシャだけは違ったんだよ。笑顔で私を見てくれて、私を友達だと言ってくれた。言葉遣いや、学校生活の決まりも、私に分かるように教えてくれた。

今の私があるのは、みんな、サーシャのおかげなんだ。ヨット部も、サーシャが入りたいというから、私も入ったんだよ。

だから、私は戦う。

サーシャにあんな悲しい顔をさせるような奴は、許せないんだ。」

ウルスラが、強い決意を秘めた眼差しで、言った。

「そうか。それなら、ウルスラ、パイロットは他人の命まで預かっている事を忘れるな。だから、絶対に生きて帰るのだ。覚悟はいいな。」

クリステイア王女がそう言うと、ウルスラが黙って肯いた。

「それから、今回の戦闘は、亜空間と通常空間のはざまで行う、プロのパイロットでも未経験の新しい戦闘方法だ。

しかも、3機一組で行う作戦計画だから、ブリッジのスタッフの意見に従って、チームワークを守って、船を操縦すると約束できるか。」

クリステイア王女が言った。

「わかっています。シミュレーターの練習でも、ミッキー先生にそこは厳しく言われてま

した。」

「わかった。では、各自乗船を開始。ミツキー、司令部に連絡して出撃許可をもらつてくれ。」

クリステイア王女ら一行は、あわただしく出て行つた。

一行を見送つたミツキー船長は、サーシヤの方を見て、言つた。

「サーシヤ、みんな無事に終わると良いなあ。そうだろう。」

「それは、そうですね。でも、チアキちゃんやウルスラまで出撃させて、何もかも、貴方たちの思い通りに進んでいますから、みなさん、本当に気分がいいでしょうね。」

そこで、一つ、教えてほしいのですが、女王陛下を狙撃した犯人たちは、その後、どうなりましたか。」

サーシヤが言つた。

「それは気になるだろうね。狙撃手の男は、白兵戦で取り押さえられたが、既に毒を飲んで死んでいたそうだ。シンガリで、盾になつたわけだ。」

だから、他の男女二人は船外に逃げたそうだ。

彼らは、ステルス機能のある小型機で、しかもエンジンを切つて慣性航行で飛んでいふと思われるので、この近くの宇宙空間にいるはずなんだが、まだ見つけられないそうだ。

我々も本気で二人の命を狙っているわけではない。交渉のために身柄を確保したいだけだ。安心しろ。

もつとも、今は彼らの搜索どころではない事態になっているのだが……。」

グランド・マザーの船体の円筒形の表面甲板には120度の角度ごとに三本の大型戦艦用の滑走路があり、その上には、巨大戦艦グランドクロスIIと呼ばれる新型機がそれぞれ並んでいる。

もちろん、パイロットとして乗り込んでいるのは、クリスティア、チアキ、ウルスラである。このほか、大勢のクルーや白兵戦部隊が乗り込んでいる。

1号機のブリッジでは、クリスティア王女が操縦席に着くと、言った。

「リッジウェイ艦長、作戦計画が変わった。」

2号機、3号機にもパイロットが乗船する。」

「承知しましたが、司令官……。」

「大丈夫だ。あの子たちの腕前は、ミッキー・ハママが保証済みだ。私も見ている。」

それに、いざとなったら、私が三機をコントロールするから。」

「承知しました。」

「さあ、いくぞ。聖王家の争いは、聖王家の者が決着をつける。」

司令部に発信許可を求めろ。」

「了解。」

2号機のブリッジでは、チアキがブリッジに入ってくるなり、緊張が走った。

この時まで、チアキについては、『加藤茉莉香のお友達として、王女の副官、そして軍の階級もいきなり中佐になった女子高生』という情報しかなかった。

それが、いきなり実戦でパイロット、それも帝国軍の新型戦艦に乗り組むというのであるから、艦長やクルーが不安を持つのは当然である。

「ジョンソン艦長、ブリッジのみなさん、チアキ・クリハラです。

よろしくお願いします。」

チアキは、操縦席に着くと、そう言った。

その後、一呼吸おいて、艦の自動操縦機能が起動して、スタンバイ状態になった。

『二人の女子高生は、帝国軍パイロットのSクラスの実力がある。それは私が保証する。

それだけではなく、貴官が艦長を務める2号機に乗る少女は、操縦席の電子装置に触れるだけでセーフティロックを解除して、グランドクロスIIを起動できる能力まで備えている。

艦長。この戦いの意味は分かっているだろう。

我々軍人は、命令通り、戦闘に集中するのが勤めだぞ。』

チアキの様子を見ていた2号機のジョンソン艦長は、こう言ったハヤマ艦長の忠告を

思い出して、さらに緊張した。

「こ、こちらこそ、よろしくお願します・・・。」

ジョンソン艦長は、チアキに挨拶を返した。

その時、1号機のクリステリア王女から、通信があつた。

「どうだい、チアキ。そちらの様子は。」

司令部の許可が出次第、発進するぞ。」

「はい、司令官。こちらはスタンバイ状態です。」

「チアキは、なんでも早いなあ。もう機動しているのか。感心するよ。」

「司令官、良いんですか。」

これから実戦ですよ。そんなこと言っているヒマがあるなら・・・。」

「はい、はい、分かっているよ。相変わらずチアキは厳しいなあ。」

それで、そちらの用意は良いな。」

「はい。」

通信を終えると、チアキは言った。

「では、ジョンソン艦長。艦の操縦機能をパイロットに委譲してください。」

「承知しました。」

クリステリア王女とチアキの落ち着いた、親しげな会話に、次第に2号機のブリッジ



は落ち着きを取り戻していった。

チアキは、立体レーダーに敵方第三艦隊の編隊の全容を表示させると、それを前後左右上下から眺めた。これからグランドクロスⅡが行う攻撃を想定したレーダー画像の操作だった。

チアキの視線の変化に応じて、ブリッジのレーダーに写った第三艦隊の編隊画像がくるくると回転し始めた。

それを見た2号機ブリッジのクルーは、自分たちの乗った重力制御推進方式の新型戦艦が、いよいよ実戦に投入されるのだということを実感した。

ウルスラは、3号機の操縦席に座り、艦の自動操縦機能を起動させ、スタンバイ状態にすると、目を閉じた。

やはり、初めての実戦の緊張がずっしりと、彼女に襲いかかってきたからだ。

『こんな時、お母さんは、いつもお祈りをしていたよね。』

ウルスラはそう思って、祈りの言葉をつぶやいた。

「愛する天のお父様、御名（みな）をたたえます。

これから始まるしばらくの時間に、

私に、少しだけ、

知恵と、

力と、

勇気をお与えください。

この船に乗っている人たちと生きて帰るために。

あの船に乗っている人たちと、サーシャの願いをかなえるために。

お願いします。

これからはもつと熱心にお祈りしますから・・・。

そして、皆が幸せでありますように。

・・・

神の名において、

アーメン。」

「アーメン」

ウルスラの祈りの言葉に、誰かが唱和した。

見ると、隣に座ったエンジン担当のブラウン少尉と目があった。

彼はとても緊張しているようだったが、それでも口元だけは微笑を浮かべようとしていた。

彼に対して、ウルスラは、満面の微笑みを返した。

『そうだ。私は一人じゃないんだ。』

ブリッジでは、このひとを始め、大勢の人たちが私を支えてくれているんだ。

ミッキーさんも、そう言っていたのを思い出したよ。

よし。いくぞ〜〜』

ウルスラは、そう思つて、いつもの明るい表情を取り戻した。

「司令部より、グランド・クロスⅡ3機の発進許可が出ました。」

「よし、発進だ。」

各船独自で亜空間トンネルを形成し、直ちに亜空間に入る。」

「了解。2号機、発進します。」

「了解。3号機、発進します。」

チアキとウルスラが、元気なことばを返した。

7-4 弁天丸ブリッジ

こちらは、弁天丸ブリッジ。

「いまのアンドレア公爵さんの通信、何か変だったよねえ。」

茉莉香が言った。

「変も何も、大嘘じゃないの。女王陛下が暗殺されて死んだなんて。」

おまけに、自分がその後を務めるとはつきり言っているわよ。反乱よ、これは。」

ミーサが呆れた。

「いやー、そういうことじゃなくて。あの通信は、目の前に来ている第三艦隊の旗艦からの通信のはずだよねえ。」

でも、あの通信は。ノイズが多くて、まるで海賊が使うような旧式の通信機を使って、遠距離から話しているような・・・そんな感じだったでしょ。なぜかなあ？

演習の時に使わせてもらう帝国軍の情報通信網って、第七艦隊のだって、うちの海賊船と比べものにならない最新式で、すごくクリアな通信でしょう。

私、いつも、通信ひとつとっても、帝国軍と海賊には『格差』があると感じてるから思うんだけど、あの通信は、ゼツタイ、帝国軍らしくないなあ。

クーリエ、変だと思わない？

公爵さんは、海賊船にでも乗って、どっか別のところから通信しているのかなあ。」

茉莉香が言った。

「なるほど。情報通信網システム、たとえば、ノイズ対策のソフト・ウェアが旧式の船に乗ってるかもねえ。」

確認のため、画像をもう一回再生してみようか。」

そう言って、クーリエが、先ほどの通信の録画を再生した。

.....

「やっぱり、茉莉香ちゃんのおりとおり、通信の品質が悪いわねえ。レッドクリスタルからの磁気嵐が最近激しくなってるから、旧式だと対応しきれないのかしら。」

あー、でもログを見ると、弁天丸への通信は第三艦隊の旗艦から届いてる。」

「しかし、それじゃ、通信の品質が落ちるわけないわ。」

「すると、元の画像の通信があつて、それを再送信してることになる。元の画像の品質が悪いつてことになるかしら。」

「じゃあ、元の画像つて、どこから送られてきたの。それとも、あらかじめ作られた録画かしら。」

「録画ならば、ノイズが入ることはないでしょう。」

「でも、帝国軍の通信傍受もすり抜けて、どこから、どうやって通信を送ってきたのかしら。暗号通信でも、電波の発信自体は検知されるはずだし。」

そのとき、それまで話を聞いていたギルバートが、口を挟んだ。

「あのう、先ほど船長がおっしゃった海賊の旧式の通信機つて、なんですか？

まさか、アナログ式じゃないでしょうね。」

「正解！アナログ式よ。その装置はこれよ。」

クーリエが足元の通信機を示した。

「海賊会議の招集に使う、伝説の機械。このあいだ、百年ぶりに使ったけどね。」

ミーサがそう言つて、茉莉香の顔を見た。

「いやー。あの、その、お聞かせするような話とかじゃなくて……。」

茉莉香が少し慌てて、話を戻そうとした。

「とにかく、今はその話じゃなくて、公爵さんからの通信品質の話でしょう。」

戦闘中に話題を変えるのは、禁止。船長命令だからね。」

茉莉香とチアキが歌つた『海賊の歌』が、話題になるのを恐れたようだ。その唄をギルバートに聞かせたくないらしい。

「アナログ式の古式通信は、はるか古代の方式で、もちろん今では使われていません。だから、帝国軍の暗号通信の解読でも、意外な盲点なのです。」

いきなりアナログ通信を傍受しても、艦隊勤務の通信士のレベルでは対応が難しいんです。有意通信だと認識せず、自然現象の雑音電波と思つて見逃したり、アナログの古式だと分からずに、普通のデジタル暗号通信だと思つて、解読に時間を費やしたりとかね。

だから、柔軟なセンスと相当な知識のあるスタッフがいないと、迅速かつ的確な対応が難しいんです。」

ギルバートが言つた。

「それなら、弁天丸は心配ご無用。うちは一流の海賊ですから。……ね。」

茉莉香が急に元気を取り戻して言った。そして、クーリエの方を見た。

「で、……どうなの？」

「う……ん。受信記録を取り寄せて、今、見直しているところ。」

なにせ、今晩は祝宴だと聞いてたし、しかも停泊中なのでオフだと思って、私用を入れてたし……。

だから、リアルタイムで通信をチエックしてたわけではなかったの……。ゴメン。」  
クーリエは、様々にキーボードを操って作業を続けた。

「う……ん、私が席を外した時には何もなかったみたい。」

でも、確かに公爵の演説を放送している少し前から、分からない電波が来ているけど、方向はレッドクリスタルからだわ。

帝国軍は、公爵の演説中だったこともあり、そっちの電波は母星からの太陽フレアかもしれないと思って無視したようね。」

「でも、クーリエは有意通信だと思っただけでしょ。」

「正解。フレアの電波とは波形がちよつと違うよね。」

「でも。その方向に船はいないわ。」

その方向で近くにあるのは、惑星ブルー・クリスタルか。青く輝いて、リングをもつ巨大惑星か。レッドクリスタル星系の星は、ホント、色鮮やかなだね。」

茉莉香が言った。

「水素、ヘリウム、メタンその他炭化水素化合物で出来た氷の惑星だが、炭化水素類の成分のために青く輝いている。表面温度はマイナス200度くらい。リングの成分も、同じようなものなので、現代では資源としての価値は低い。」

あまり人の近づくとこころではないな。」

シュニツァーが言った。

「人が近づかない空域とすると、隠れ場所には最適よ。」

「やっぱり、この大きな星の辺りが怪しいよね。私たちから見て、死角になってるところもあるし。」茉莉香が言った。

「この辺に船はいないのか？ 航行記録はあるのか。」

「記録では、いない。」クーリエが言った。

「確か、この星の衛星軌道には昔に倒産して廃棄された、資源開発用の中継ステーションが今もあるはずですよ。」

ギルバートが言った。

「それはここね。確かにステーションだったと記録はある。」

「ここからは、ブルー・クリスタルの背後にあって、ちょうど、死角の位置に浮かんでる。」



なるほど！

こいつに、ここ2、3日の間に観光目的の船が近づいた航跡がある。

船籍、船名は、えー……銀河帝国、聖王家の御用船キング・ジョージⅧ世号。」

「あやしい。やつぱり、この古いステーションだ。」

弁天丸、行きましよう。」

「了解。」

「え？ さっきのアナログ通信を解読しないのですか。」

ギルバートが言った。

「解読しても、結果は予想がついてるでしょう。」

「だったら、早く行った方が勝ちでしょ。」

「それが海賊のやり方よ。」

茉莉香が言った。

「司令部にも連絡しないで、行くんですね。」

「そうよ。行先を言ったら、敵に聞かれちゃうでしょ。」

ギルバートさんも、黙っててね。なんとたつて、貴方は私の従者なんだから。」

茉莉香はそう言つて、ギルバートにウインクした。

「はいはい。だんだん、いつもの調子が出てきましたね、船長。」

ギルバートはそう言つて、ミーサを見た。

二人の目が合つて、ミーサも微笑んでいた。

「ブルー・クリスタルの旧ステーションまで、ショート・ジャンプ。超高速跳躍準備。」  
「了解。」

ルカが言つた。

「ええ？この近い距離で、巨大惑星のそばにジャンプするんですか。常識外の運行方法ですね。おもしろいですね。」

「それがいいのよ。相手だつて予想してないでしょ。」

もし、通常航法で近づいたら、近づくまでの間にジャンプされて、逃げられるだけよ。

それが海賊のやり方よ。」

そう言つて、茉莉香は背筋を伸ばして、ギルバートに胸を張つた。

「さあ、海賊の時間だ！」

「おぉー！」

7-5 惑星ブルー・クリスタル周辺宙域

第三艦隊も、グランド・クロスの発進をキャッチしたが、その意図が分からなかった。  
「超光速跳躍で亜空間に消えた？ いったい、何をする気だ。」

もしかして、女王派の聖王家の連中が、恐れをなして逃げ出したのか。だったら、この戦いはもう終わりだ。ハハハ・・・

よし、予定通り、宇宙マフィアの艦隊への攻撃準備をしろ。

女王陛下狙撃の犯人は、彼らだという一斉通信も、送れ。」

アンドレア公爵は、上機嫌で第三艦隊に指示を出した。

亜空間に入ったグランド・クロスⅡ3機は、亜空間で立体的に展開し、敵である第三艦隊の右舷下、左舷下と後下方に回り込んで、三方向から狙いをつけた。3機のコンピュータは、通常空間にいる第一艦隊のリーダー・センサーと、亜空間を走る超光速通信でつながっているため、通常空間のようすは手に取るようにわかるからだ。

クリス王女が言った。

「いよいよ戦闘開始だ。作戦は、タッチ・アンド・ゴー。つまり、通常空間に復帰すると同時にビーム砲の一斉射撃、そして直ちに亜空間への離脱だ。

我々の狙いは、敵の船の下弦後方にあるリーダー・センサー系統の集中部分だ。これを破壊して、戦闘能力を低下させることによって、降伏勧告を受諾させる。

撃沈が狙いではない。分かったな。」

「2号機了解。」「3号機了解。」

「ごくげ。」

三機のグラウンド・クロスIIは、通常空間に復帰すると同時にビーム砲を一斉射撃した。グラウンド・クロスIIは、自動照準でビーム砲を発射しているの、多数のターゲットを同時に狙うことができる。しかも、グラウンド・クロスII各艦の火力は、一隻で艦隊並みの威力があるので、一撃でも敵艦隊に大きなダメージを与えることができる。

第三艦隊は、グラウンド・クロスIIの3艦から、予想外の下方や後方しかも近距離で、ビーム砲の正確な攻撃を受けたため、大混乱した。

宇宙マフィア艦隊への攻撃を準備しつつ、前方の第一艦隊の動向を警戒するため、全くのスキをつかれたからだった。

こうなると、もう宇宙マフィア艦隊への攻撃どころではなかった。

「ひるむな。ミサイル発射だ。グラウンド・クロス対策はこれだ。思い出せ。」

ようやく、艦隊司令部の指示が飛んだ。

各艦は、グラウンド・クロスII3機に向けて多数のミサイルを発射した。グラウンド・クロスが私掠船免状の海賊と行った戦闘の分析から、重力シールドで守られたグラウンド・クロスIIには、ビーム砲よりミサイルが効果的と考えられたためである。

これに対して、グラウンド・クロスII3機は、ミサイルが到達する前に、亜空間へ離脱して、通常空間から消えてしまった。

目標を見失ったミサイルは自爆していった。流れ弾となって味方を誤爆するのを防

ぐためだ。

「フン、ワンパターンで、芸のない攻撃だな。重力シールド対策として、ミサイルで攻めれば、私を倒せると思っている。」

いつまでも、そんな手が通用すると思うなよ。」

操縦席のクリスティア王女が言った。相変わらずの負けず嫌いである。

「フフフ・・・聞こえてますよ。司令官様。」

通信システムを通して、笑い声が聞こえた。

「チアキか。お前、こんな時に笑うんじゃない。」

そういうクリスティア王女も笑っていた。

「今度は、冷静に行きましょうね、司令官様。私もついておりますよ。」

「ふん。要らぬお節介だ。後で、覚えてろ、チアキ。・・・行くぞ。」

これからが本物の攻撃だ。第二波攻撃、いくぞ。ウルスラもついてこい」

「はい。」

「はい。」

二人の元気な返事を聞いて、クリス王女は、微笑んでいた。

グランド・クロスⅡⅢ機の第二派攻撃は、熾烈を極めた。

今度は、3機が各自でランダムに見えるような角度から、亜空間から通常空間へ、タツ

チ・アンド・ゴーを何度も行い、第三艦隊への攻撃を繰り返した。もちろん、本当にラダムな角度から撃っているわけではなく、敵の指揮を混乱させるように、緻密に計算された行動である。

「ミサイルを撃つてやろうと狙うと、消えてしまう。」

「もう、こんな攻撃には、対応できない。」

「何が何だかわからない。」

第三艦隊のクルーは、じりじりと追い詰められた気分だった。

しかし、苦しんでいるのは、グラウンド・クロスⅡ3機のクルーも同じだった。ただし別の理由で。

つまり、機体の位置が、前後左右にめまぐるしく回転したままで通常空間に復帰するので、復帰したと勝手にレーダーやモニターの画像が急に回転する。頻繁に方向感覚を切り替えることを迫られたブリッジの大半のクルーは、次第に船酔いのような気分になられていった。

もちろん、新戦艦のクルーに選ばれている以上、クルーは皆、船乗りとして一流のベテランなのだが、こういう経験は初めてだった。

これに対して、クリスティア、チアキ、ウルスラのパイロット三人は、平然としているようた。宇宙船で生まれ育った子供の持つ独特の方向感覚が、三人には備わっているよう

だ。

「ふう．．．、タッチ・アンド・ゴーはシミレーター通りに出来るけど、射撃の精度がイマイチかなあ。手ブレっていうヤツかなあ、これ。」

チアキが冷静に分析して、つぶやいた。もちろん、その間にも手を休めず、タッチ・アンド・ゴーを繰り返し、敵艦にビーム砲をかなりの確率で命中させている。

「なあに？ 手ブレって。」

ウルスラが第3号機の操縦席から聞いてきた。戦闘中にこんな会話が出来るほど、彼女も余裕があるのだろう。

「いやあ、船から射撃するときに、船が揺れていると照準が狂うという話よ。」

写真を撮るときにカメラが揺れると、画像がブレるでしょ。あれと同じよ。」

「なるほど、なかなか命中しないのは、そういうことか。」

でも、そういうのは、自動補正機能がカバーしてくれることになっているはずなんだよね。ミッキー先生が言ってたけど。」

「実戦は今回が初めてだから、グラランド・クロスIIの自動補正機能は、今後さらに改良の余地があるってことね。」

「だから、私の命中率がこんなに低かったのかあ。原因がわかってよかったよ。」

実は、私、すこし落ち込んでたんだよ。」

ウルスラが言った。

「お前たち、そう言うけど、ターゲットはピンポイントであるにもかかわらず、今の命中率は50%をはるかに超えてるぞ。」

このスコアは、通常戦闘の命中率と比べても、相当にすごいぞ。」  
クリスティア王女が二人の会話に割り込んできて、言った。

「ええ!? 私、シミュレーターでの命中率は、タッチ・アンド・ゴーでも90%を超えてましたよ。」

それに比べると、こんなの、私のスコアじゃないっていうか……。」  
ウルスラが言った。

「まさか、司令官の命中率って、私たちより低いのですか?」

戦闘記録、見てもいいですか?」

チアキが、いたずらっぽいな声で聞いた。

「うるさい! 今は戦闘中だ。」

そこまで言うなら、勝負しよう。お前たちが負けたら罰ゲームだからな。

そうだなあ、甘いもの三か月禁止。

どうだ、チアキ。チョコパフェはお預けだぞ。後で謝っても遅いぞ。」

「上等ですね。私、勝ってしまいますわ。オホホホ……。」



チアキはわざとらしい作り笑いをした。チョコパフェお預けと聞いて、怒ったようだ。

「司令官の罰ゲームはどうしよう。チアキちゃん。」

「あれよ、先生が大嫌いだと言ってたヤツ。サーシャの家でやったアレ。」

「ダンスパーティー！」

「そう。女の子らしい、思いつきりかわいいドレスを着て、最低5回は王宮のダンスパーティーに出てもらいましょう。陛下もお喜びになるわ。」

「それで、決まり。楽しそうだね。」

「5回は多い。3回にしろ。」

「勝つ自信がないんですか？司令官……」チアキが挑発した。

「うるさい。戦闘中の私語は禁止だ。」

そういいながらも、クリスマス女は、微笑んでいた。

「さあ、また行くぞ。」

「はい。」

「はい。」

通常の船なら、通常空間に復帰してから射撃管制レーダーを発信して、その反応から照準を定めて、それからビーム砲を発射する。

しかし、グラウンド・クロスIIのビーム砲射撃は、射撃管制レーダーを発信せずに、通常空間に復帰した直後に、いきなりビーム砲を発射する。そのための射撃管制は、対峙している第一艦隊の管制レーダーのデータを亜空間経由の超光速通信でリンクさせている。正確な位置を特定してタッチダウンができる時空トンネル航法ならではの仕組みである。

とは言っても、実際の船の運航には微妙なずれや振動があり、時空トンネルによる空間の乱れもあって、チアキのいう「手ブレ」が生じると思われる。

次の第三派攻撃は、さらに難易度が高い。レーダー・センサー系統部分だけが攻撃対象ではない。抵抗を続ける船に対しては、ビーム砲やミサイル発射口も狙うからだ。

艦が通常空間に留まる時間が極めて短いことと、3機がばらばらに激しく動いているように見えるため、第三艦隊の船はミサイルの狙いが絞れず、ますます混乱した。味方の損傷も増えるばかりで、攻撃に参加できる船も激減してきた。

しかも、グラウンド・クロスIIからの攻撃は、圧倒的な優位に立っているにもかかわらず、第三艦隊の船に致命的なダメージを与えないように精密に狙いを定めていた。逆に言えば、明らかに手加減したものだ。逆にならば、

これは、第三艦隊の将兵も気づいていた。

『手加減してくれているならば、いずれ降伏勧告が来るはず。』

『降伏勧告が来るまでは、撃墜されるような無理はせず、撃たれたふりをして戦闘をやめたい』

という厭戦の誘惑も忍び寄ってきた。

疲労と不安と厭戦の誘惑が、艦隊の士気を奪っていった。

「ええーい。面倒だ。全方向にミサイルを打ちまくれ。そのうち、向こうの方から当たってくれるさ。」

軍事面にはまったくの素人のはずのアンドレア公爵の方が土壇場のプレッシャーに強かった。苦し紛れの指示が戦闘の流れを変えた。

指示に従って、これが最後の攻撃とばかりに、第三艦隊の船から、ミサイルが全方向に、一斉に発射された。

「ああ。何をやってるの。ホント、面倒なことをするわねえ。」チアキが言った。

「司令官、いったん、引いてくださるよう進言します。」

敵にはもうかなりダメージを与えています。

それに、そろそろ次のステップに入る時間でしよう。」

グラランド・クロスⅡの1号機のブリッジから、進言があった。

「そうだな。チアキ、ウルスラ、いったん亜空間に退いて、指示を待て。」

クリステリア王女が言った。

グラント・クロスIIの3機は、亜空間に退いた。

その時、ウルスラが叫んだ。

「だめだよ。一部のミサイルがマファイア艦隊の方へ飛んでいく。

私たちが亜空間に逃げたせいで、あちらの方を追いかけ始めたんだよ。

ミサイルを撃墜しないと、マファイアの人たちがやられる。それでは、私が出撃した意味がなくなる。

司令官、お願いします。」

「あんなにたくさんミサイル、どうやって撃ち落とすのだ。」

「重力波砲を使って一気に吸い込んで、どこかに吹き飛ばします。」

「そうか、大量破壊兵器といえども人助けに使える場合があるのか。重力波砲の初陣としては面白い。」

よし、行け。重力波砲の操作は、手順通り、クルーと一緒に言うんだぞ。ウルスラ。」

重力波砲とは、時空トンネルによる強制的空間移動、つまり、時空トンネルで物体を吸い込んで吹き飛ばしてしまう兵器である。重力制御技術により作り出した時空トンネル自体を艦隊戦用の兵器として利用するものである。そして、大量破壊兵器であるゆえに、パイロット単独では発射できないように、操作に制約がかけられていた。

「時空トンネルの路線設定が、できませんでした。出口は、近傍の惑星ブルー・クリスタルの周辺空域です。」

敵のミサイルは、惑星ブルー・クリスタルにぶつけます。水素、窒素などが液体で存在する極寒の巨大惑星ですから、ミサイルが爆発しても、問題ありません。

もちろん、トンネルの重力エネルギーは最小にしていますので、ほかの船まで吸い込むような影響はないと思われれます。」

「標的のミサイル群に、照準をロックオンしました。」

ブリッジのクルーから、パイロットのウルスラに次々と報告があつた。

報告を受けて、ウルスラの3号機は通常空間に復帰した。

「よし、重力波砲、発射。」

3号機は、時空トンネルを前方に展開した。

七色の重力のリングが前方に浮かび、激しい光を放って高速で移動して、第三艦隊と宇宙ファイア艦隊の間を飛んでいたミサイル群に向かっていった。ミサイル群は、リングに向かってらせん状に回転しながら、リングの中にある亜空間のトンネルに吸い込まれていった。

第三艦隊と宇宙ファイア艦隊も、かなり強い重力で引きつけられたが、推進剤を全力で噴射して姿勢を保った。

しかし、新兵器の発動を目の当たりにして、第三艦隊のクルーは動揺した。

「今のが重力波砲か。すごいな。これをまともに食らえば、艦隊全部が引き込まれ、どこかの空間へ吹き飛ばされるじゃないか。」

「重力波砲を装備しているのは、グラント・マザーだけと聞いていたが、グラント・クロスIIも装備しているのか。話が違うじゃないか。」

やがて、惑星ブルー・クリスタルの惑星表面上で爆発があった。

## 7-6 所属不明の小型機内

第三艦隊が出鱈目に放ったミサイルのうち、ウルスラの攻撃対象からはずれたものは、大半が重力波の影響で軌道を大幅に乱し、その結果、大半は目的を見失って漂流、自爆した。

だが、そのうち、一つのミサイルが新しい標的を見つけた。

その標的はステルス機能を備えた、所属不明の小型機だった。慣性航行で静かにマフィア艦隊へ近づこうとしていたが、機体の近くまで漂流してきたミサイルは、この船の極めて微弱な熱エネルギー反応を見逃さなかった。

「ミサイル、着弾まで35秒。」警告のアナウンスが流れている。

「ミサイルに見つかった。せつかく、ここまで戻ってきたのになあ。」

「ここで応戦すると、敵にこの船の位置を知らせるようなものだが。ここまでかなあ。」  
「レイ、最後まで全力を尽くしましょう。」

「そうだな、ロツテ。まず、ビーム砲で迎撃だ。」

小型機は、ステルスモードから戦闘モードへ移行し、ビーム砲でミサイルを破壊した。それと同時に、全速力でマフィア艦隊へ近づいた。

他方、付近を漂流していたほかのミサイルは、動き出した小型機のエネルギー反応をキャッチし、追いかけた。

これに対して、これまで沈黙を守っていたマフィア艦隊は、小型機を守るためビーム砲でミサイルを迎撃し始めた。

「いたぞ。動き出した。」

第三艦隊の船で壊されずに残ったレーダーも小型機をとらえた。

「女王陛下を暗殺した犯人に違いない。撃墜しろ。」

「しかし、大半の船で自動照準が破壊されており、ビーム砲が使いません。」

「バカ者！ 自分の目で見て打て。」

私は鴨（かも）猟に行ったときは、自分の目で鴨を狙って、古式散弾銃を撃っているぞ。プロのお前なら光学照準で打てるはずだ。」

軍事面には素人のアンドレア公爵のひとことが、また戦闘の流れを変えた。

第三艦隊は、目視で小型機を狙ってビーム砲を打ち始めた。

「公爵の奴、とうとう、裏切ってきたか。」

でも、射撃はでたらめだな。よし、あと少しで、艦隊に合流できる。あと少しだ。」

その時、「下手な鉄砲、数打ちや当たる」のことわざ通り、小型機のエンジン部にビーム砲が命中した。

小型機の推進力が落ち始める。ビーム砲も撃てなくなつた。

「ミサイル、着弾まで15秒。」

新たな警告のアナウンスが流れてきた。

「間に合わん。これまでか。ロツテ、ほんとにすまなかつた。こんな最後になるなんて。」

「レイ、何、言ってるの。私は自分の意思で自分の人生を選んだのよ。宇宙大学の卒業前に駆け落ちしたときにも言ったでしょ。」

「ありがとう。ホントに幸せだったよ。」

「私も幸せだったわよ。」

思いがけないところで、サーシャの姿を見ることが出来たし、もう思い残すことはないわ。」



7-7 ブリッジ（機動空母グランド・マザー）

小型機が撃墜されて爆発したせん光は、グランド・マザーのブリッジからも観測された。

サーシャは、何も言わず、映像を見つめていた。

その時に、クイーン・オブ・パイレーツから通信が入った。

「女王陛下から、サーシャさん宛てです。」

「出ます。」

サーシャが言った。

モニターに、銀河帝国の女王が現れた。クイーン・オブ・パイレーツのブリッジで、一段高い位置にある、玉座に座っている。

「今、パイレーツ・キャプスルから脱出した小型機が第三艦隊に撃墜されたようだ。

脱出した人間の身元は、最後まで確認できなかったが、悲しい結果になった。

心からのお悔やみを言いたい。」

女王が言った。

「陛下の御命を狙った者にまで、そのような御言葉をいただき、感謝の言葉もございません。」

サーシャが言った。

「このような時ではあるが、いや、このような時であるからこそ、サーシャ、お前の願いを聞かせてくれ。

私は、銀河帝国の積年の課題、とりわけミルキーウェイ計画の推進を通して、銀河系外延部の航路開拓、惑星開発を進めようとしている。

そのためには、宇宙開拓時代からの課題を一掃するつもりだ。

その過程では、アマージューグ族の問題も、解決せねばならないと思っている。

人は、自らの行いに応じて犯罪者としての責めを負うことはあろう。

しかし、生まれながらにして、親たちの罪を『原罪』のように背負いつづけるという理不尽なことは、あつてはならないと、私は思っている。」

女王が言った。

「ありがとうございます。今、陛下は、一族をアマージューグ族とお呼びくださいました。

そのような温かいお言葉を聞けるときに、ようやく訪れたのかと、本当にうれしく思います。」

しかし、私は、すでにあの一族とは無縁の者でございます。

私が、一族を代表して、何かを申し上げたり、何かをお約束することはできないでしょう。

ただ、一族のなかには、こういう願いを持つている者もいたということで、お聞き下

やう。」

そういつて、サーシャは語り始めた。

二人の話を聞いていた白凰女学院のヨット部員達は、サーシャの言葉に息をのんだ。「陛下もご存じのように、一族の者は、長い時間、宇宙開拓時代の祖先たちの罪を子孫が背負いつづけるという負の連鎖からどうやって逃れるかという答えを求め続けてきました。」

それには、二つの道があると考えられましたが、意見が分かれ、一方を選ぶことはできませんでした。

このため、一族は両方の道を同時に求めて生き残ろうとしてきました。

一つ目の道は、過去と未来を切り離し、「新人類」を作る道です。

このため、銀河系の文明から遠く離れた新天地で、新たな惑星開発をおこない、過去の歴史を全く知らない子孫を中心とした社会を作り、遠い未来に「独自の文明社会の発見」という形で銀河系との統合を図ろうという道です。すでに目的の惑星を定め、開発を進めています。

そして、罪に汚れた世代は、子孫のために新天地の繁栄に尽力しつつ、名を偽って歴史の闇に消えていこうとしています。

これは、宋主星の文明の起源、つまり人類の起源が現代になっても解明されていない

ことにヒントを得たものです。

人類進化説の言うような、人類が宋主星で発生した証拠となる『ミッシング・リング』の化石はいまだに発見されません。

逆に、宇宙開拓の結果、太古植民説が有力になっています。

何万光年も離れた星々に、遺伝的にほぼ100パーセント同一の人類が発見されたからです。だから、新たにもうひとつ人類が発見されても不思議ではないというわけです。

二つ目の道は、過去を歴史として相對化し、現状を認めてもらおうという道です。

もちろん何らかの犠牲や代償は必要でしょうが、実力により恩赦や免責を勝ち取り、銀河系の中で市民権を回復しようという道です。

このために、武装船団を組んで銀河系内を海賊と資源開発の旅を続け、あるいは銀河系の裏社会で徒党を組んで非合法活動を行い、実力と富を蓄え、機会を窺ってきました。お怒りになるかもしれませんが、この道は、帝国海賊の歴史にヒントを得たものです。一族も、帝国海賊になりました。

こうやって何百年が過ぎました。

でも、今、この二つの道は危機を迎えていると、私は思っています。一族は力を合わせて一つの道を歩まなければ、共倒れだと思のです。

新人類として生きる道は、銀河系近傍の球状星団に複数の可住惑星を発見し、開発を進めてきました。環境や資源の面から、理想的な可住惑星です。そして、この球状星団は、銀河系からは、暗黒物質の雲の向こう側にあるため、その存在と位置は今も知られていません。

一族はこの星団を「ヒガン」と名付けました。

ある古代宗教の言葉「彼岸」から名付けたもので、悟りの境地という意味です。同時に、そのような安住の地を得ることは一族の「悲願」でもあるからです。

また、その手前の暗黒物質の雲を「サンズ」と名付けました。

その古代宗教の教えでは、人の姿をした死者の魂は、三途（サンズ）の川を渡って彼岸（ヒガン）の地に行くそうですが、三途の川を渡るときに前世の記憶を失ってしまい、やがて魂は輪廻転生するそうです。

この三途の川の恵みこそ、一族が求めているものだからです。

でも、惑星開発は今、危機に立っています。ヒガンはあまりにも遠い地であり、現代文明を維持しながら、密かに開発を続けていくには人材も資材も不足しているのです。

このままでは、文明の水準は徐々に後退し、何千年も後には現代文明は痕跡も残さず完全にリセットされ、移住者の子孫は本当に「新人類」になってしまいかもしれません。それも予定されたことかもしれませんが、大きなリスクと犠牲を伴います。

もう一つの道、帝国海賊のようになりたいという道も困難な道でした。

もともと銀河帝国と辺境星系との戦乱に乗じて、復権の機会を得るといふ算段でしたが、平和な時代が長く続き、そのようなチャンスは訪れませんでした。一族が公爵様にお味方してきたのも、彼の野望がそのチャンスと見たからです。

しかし、一族の中には、非合法活動を続けていくうちに志を失い、本物の無法者に墮落していく者も少なからず出てきました。このままいけば、一族全体が、本物の犯罪集団に墮落していくのではないかと、私は恐れました。

でも、そんな私の思いは一族のリーダーにとっては、前からわかっていることでした。その解決のため、リーダーが選んだ方法は、現在よりはるかに速い超光速交通システムの開発です。みなさんご存じの『時空トンネル航法』の実現です。これが実現すれば、ヒガンの開発もさらに進むし、一族の船団の運行も有利になると思ったのです。

その結果、多くの犠牲の下に、基礎的なシステムの開発に成功しました。

しかし、それを超光速交通システムとして実用化するためには、銀河帝国の最新技術、特に軍事機密とされる高出力転換炉が必要でした。それまでも自力で開発する技術力や資金は、一族にはありませんでした。

そこで、リーダーは、自力開発をあきらめ、ステープル重工業にその技術を売り、それで得た資金でヒガン開発を進めたり、ヤミ市場で船や武器を買いました。こうして、

いままでの二つの道を両方向同時に進めようとしたのです。

そして、時空トンネル航法の開発は、一族にあらたな野望を生みました。時空トンネルは大量破壊兵器、星をも砕く超兵器としても使えることが分かったからです。

基礎的なシステムを備えた旧式の宇宙船といえども、一種のミサイル兵器として使うには十分です。

これさえあれば、その抑止力で銀河帝国から一気に政治的独立を勝ち取ることができないのではないか、そういう野望が一族に生まれたのです。

私は、『そんな野望はいざれ銀河帝国との全面戦争を招き、全面戦争となれば人材、技術そして資源に劣る我々一族は必ず滅びる』とリーダーに訴えました。

『だから、一族の悲願を実現するには、平和的な手段しかないはずだ』と。

でも、一族の人々の考えは、公爵様の野望に加担しつつ、銀河帝国の内戦に乗じて事実上の独立戦争を始めるといふものでした。

私はこの流れを押しとどめることは出来ませんでした。

そして、リーダーは、私を一族から追放しました。

陛下、どうか、このような愚かな一族のものにも寛大な慈悲を。

もちろん、罪を犯した者はその罪を償うべきですが、一族の子孫が、女王陛下の光の下、銀河の片隅で、平安に暮らせますように。

これが私の願いです。」

サーシャの話が終わった。

「サーシャ、よく言ってくれた。約束通り、お前の望みをかなえよう。

私も、お前たちアマージグ族の処遇は以前から考えていたところだ。帝国とアマージグ族は平和条約を結ぶべきであり、その条約内容に関する私の考えはこうだ。

第一に、アマージグ族の者に帝国の国民としての自由と権利を与え、ヒガン星団に国家としての自治を与える。そのため、一族の者全員に、銀河帝国の国民としてのID登録を命ずる。これにより、帝国は、国民となった一族がヒガン星団の地で平安に暮らせるよう、星団の開発に援助、協力する。

第二に、一族の者には、時空トンネル技術を放棄することを命じる。この技術は、帝国軍が独占し、ミルキーウェイとして利用者に公開するものだ。すみやかにヒガン星団にミルキーウェイのゲートを作り、帝国軍が駐留する。これにより、一族の船は、銀河系の諸星系とヒガン星団の間を自由に短時間で往来することができるようになる。

第三に、一族の者が、祖先の罪や法的責任を負わないことを保証する。

特に、以上三点が、一族の望みであろう。これは、アマージグ族と銀河帝国との平和条約に明記する。

第四に、自ら罪を犯した者は、自首せよ。その者は、裁判の上、罪状に応じた刑に服



せよ。なお、自首した者への刑罰はヒガン星団に流刑とする。流刑地内の行動に制限は設けない。これにより、優れた人材には、ヒガン星団の開発のために活躍の場が与えられるだろう。

なお、流刑者が、私の臣下として、銀河系外延部、近隣の星団やアンドロメダ星雲など未踏の宇宙への調査に従事するときは、星団を出ることを許されるものとする。

もちろん、帝国内にある、非合法活動で得た一族の資産はすべて帝国が没収する。一族の船は没収しないが、一旦、ヒガン星団へ集まり、船舶登録を受けることを命じる。そのため、帝国の船が作る時空トンネルを使って、一族の船を送り届けよう。

一族の船は有効に使うが良い。

以上の刑罰の特例は、銀河帝国の女王の名において、帝国に帰順した者に対する恩赦として実施する。

第五に、以上の条件に従い、平和条約が締結できるならば、褒美として、一族から帝国海賊の船長を何人か任命しよう。一族のリーダーとして、船長にふさわしい、優れた船乗りを選ぶがよい。

もちろん海賊船は、相応の武装を許す。これは、海賊女王の名において約束する。

以上だ。サーシャ、どうだろうか、何か意見はあるか。

これでよければ、一族のものに私の考えを伝えてくれるか。

「お前は一族の者にはいまだに人望があると聞いている。耳を傾けてくれる者もいよう。」

「ありがとうございます。ご承知のような身の上ですが、微力を尽くします。本当にありがとうございます。」

まずは、話し合いのために、一時停戦に同意するように、伝えます。」

サーシャは深々と臣下の礼をして、ミッキー艦長に向き直った。

「艦長、このアドレスに通信を送ってください。認証は、私が……」

#### 7—8 弁天丸船内

弁天丸は、ブルー・クリスタルの旧ステーション近くの空間にタッチダウンした。

「よし、絶好の位置よ。弁天丸、戦闘体制。照準用レーザー放射。トレスポンドー発信。弁天丸だつてこと、教えてあげて。」

それと、第一艦隊司令部に連絡、お願い。」茉莉香が言った。  
「了解。」

船長。旧ステーションからアナログ電波が出る。間違いないわ。」

クローリエが言った。

「それに、旧ステーションに船が数隻いる。今、トランスポンダーの発信を始めた。」

みんな、聖王家関係の旅客船だ。公爵の船もいる。あわてて、正体を明かしたのね。」  
「そのようですね。レッド・クリスタル星系内でのトレスポルダー発信義務違反は、『み  
なし反乱罪』の現行犯で、船は無警告で撃墜ですからね。

おまけに、彼らは軍艦でなく、普通の旅客船ですから、武装船である弁天丸を見れば、  
当然の行動でしょう。」ギルバートが言った。

「弁天丸、公爵の船に接近して。それと、第一艦隊司令部に、戦闘記録送信。公爵の船を  
発見したって連絡も、お願い。」

それから、シュニツアー、白兵戦準備。まずは、公爵の船に乗り込むわよ。これは、  
本気の戦闘だから、油断しないで、完全武装よ。」

「了解。」

「まって、船長。」

えーっと、偽装を解いた船が近づいてきた。トランスポンダーを発信していない。マ  
フィアの船に間違いないわ。」

「戦闘体制。主砲、発射準備。」茉莉香が緊張して言った。

「主砲、照準良し。こちらから先に打つか。」

シュニツアーが言った。

「うーん。おかしいなあ。」

向こうは戦闘モードじゃないよねえ。」

にらみ合ったまま、緊張が続いた。

「あ、船長、グランドマザーのサーシャちゃんから、船長宛てに緊急通信が入ってます。」  
「です。」

茉莉香が答えた。

モニターに白鳳女学院の制服姿のサーシャが現れた。

「茉莉香さん、サーシャです。」

「サーシャ、こんな時にどうしたの？」

「理由は後で話します。とにかく、撃たないでください。」

今、貴方の目の前にいる正体不明の船は、もう敵ではありません。いま、帝国と停戦し和平交渉中のために、公爵様の下から引き上げるところです。」

「宇宙ファイアが、単独で停戦に応じたのか。」

シュニッツァーが言った。

「わかったわ。公爵さんはまだ降伏していないのね。」

「ええ、まだです。」

「サーシャ、これから公爵の船に乗り込むから、またあとでね。」

「茉莉香さん、ご武運をお祈りします。」

「ありがとう。」

弁天丸のドッキングポートのドアの前で、茉莉香は、ギルバートとシュニッツアーら弁天丸の一行と一緒にドアが開くのを待っている。

茉莉香も、他の皆も、今回の白兵戦では、完全武装の黒い重装防護服を着ている。ほかの者はブラスタードだけでなく、斧や蛮刀も手にしている。

誰も何も言わない。

どくん、どくん、どくんと、茉莉香には自分の心臓の鼓動が聞こえてきた。

茉莉香は、隣のギルバートと顔を見合わせた。

「ギルバートさん、私ね、こんな本気の白兵戦って、初めてなんだ。」

茉莉香は、隣の彼にだけ聞こえるように、小さな声で言った。

「大丈夫ですよ。私が命がけであなたを守ります。」

「ありがとう。従者さんは頼りになるね。ウフフフ。」

「敵船に対する電子戦を完了。間もなくドアが開く。ブリッジまでの進路に爆発物は無い。」

「了解。」

間もなく、ドアが開き、一行は公爵の船のブリッジ目指して、突撃した。

ブリッジのドアが開いた。

「ええー！ みんな逃げだしたの？ そんな・・・。」

がらんとした無人のブリッジに突入した茉莉香は、驚いて声を張り上げた。

「残りの船員は既に降伏した。制圧は完了だ。」

シュニツァーが言った。

「はい、お疲れ様。お宝さがしの要員を残して早く撤収しなさい。」

王女様とチアキちゃんが旧ステーションに突入するそうよ。

「こちらも負けていられないわ。」

ミーサが言った。

「それはそうと、茉莉香。」

あなた、防護服での会話は、ブリッジにも全部聞こえてるってこと、知ってる・・・わ

よねえ。

宇宙服と同じなんだから。」

ミーサがシラつと言った。

「なかなか、ほほえましい会話だったわ。」

ルカが言った。

「ク・・・ク・・・ク・・・。」

クーリエが笑いをかみ殺している。

「ええ〜〜！ みんな聞こえてたの!? そんな・・・。」  
顔を真っ赤にした茉莉香が、また声を張り上げた。

7-9 帝国軍総司令部（クーン・オブ・パイレーツ船内）

こちらは、帝国軍の旗艦クーン・オブ・パイレーツの帝国軍総司令部。

旗艦のブリッジを見下ろす奥まった空間に、全艦隊の指揮命令機能が集中している。中央に大きな立体ディスプレイがあり、戦闘空域の艦隊配置が表示されている。ディスプレイの周りを、一段高い玉座に座った女王と参謀本部の高官が囲んでいる。

「宇宙マフィアの船団から、停戦同意の返答がありました。」

船団の戦闘モードは解除され、あちこちに隠れていた船も船団に集結しています。」

総司令部の担当官が、戦況を報告した。

ブリッジの歓声が、総司令部でも聞こえた。

必殺の大量破壊兵器をもつ宇宙マフィアの船団が、停戦に応じ、単独で戦線から離脱したとの知らせは、戦闘の大勢が決したことを意味している。

「グランドクロスII、2号機は、公爵の身柄確保のため、旧ステーションにまもなく突入します。」

王女殿下とチアキ副官は白兵戦の先頭に立つご意向です。

3号機はグラントマザーに帰還します。」

「公爵の船は乗員がほとんど逃亡し、公爵本人もいなかったと弁天丸から連絡がありました。」

弁天丸も旧ステーションに向かうそうです。」

「陛下、お聞きの通りです。」

参謀総長のヤマシタ提督が、女王に告げた。

「よし。チェックメイトだ。」

第三艦隊への降伏勧告は、私が行う。私が生きていることを見せてやろう。

一斉通信回線を開け。」

第三艦隊はじめとする帝国艦隊のモニター画面に、帝国軍総司令官の軍服を着た女王が玉座に座った姿で現れた。

「第三艦隊の諸君、私はこのとおり健在だ。」

私は、先ほどの第三艦隊司令官アンドレア公爵の演説を帝国に対する反乱と認め、帝国のすべての将兵に反乱の鎮圧を命じた。

そして、見ての通り、私は、聖王家の伝統にのっとり、クーン・オブ・パイレーツに乗船し、反乱を鎮圧するため、将兵と共に戦い、生死を共にする覚悟だ。

第三艦隊の諸君、諸君の船の玉座に聖王家の指揮官はすわっているか。



指揮官は、諸君と共に戦い、生死を共にする覚悟を示しているか。

その答えは諸君も知ってしよう。

諸君はそのような指揮官と共に戦う意思があるか。

第三艦隊は、直ちに降伏せよ。応じない者に対しては、いかなる兵器の使用もためらわない。私に戦いを挑む者は相手になってやろう。

ブルー・クリスタルの極寒の海に沈むがよい。

諸君、もはや勝敗は決した。宇宙マフィアと呼ばれてきたアマージューグ族は停戦に応じた。私は彼らと平和条約を結ぶつもりだ。

また、我々は、公爵の隠れ場所を発見した。まもなく彼を逮捕する。

第三艦隊の諸君は、直ちに降伏せよ。」

第三艦隊は、直ちに降伏した。

女王の言葉が艦隊の戦意を奪う決め手となった。

「われらの指揮官は安全な場所に隠れ、将兵と共に戦い生死を共にする覚悟を示していない。」という艦隊幹部だけが知っていた事実が明らかにされたからだ。

もちろん、新戦艦グランドクロスⅡの圧倒的な威力を見せつけられたことから、既に戦術的な敗北は明らかで、厭戦気分にとりつかれ、さらに、女王の口からアマージューグ族との「停戦」と「平和条約」という言葉が発せられたことから、戦略的に敗北し孤立

したことも理由としてあげられるだろう。

7—10 グランドクロスⅡ2号機船内

その頃、チアキの乗ったグランドクロスⅡ2号機は旧ステーションに一番乗りを果たそうとしていた。

すでに電子戦を完了し、チアキは、スカレットとクキ一族の白兵戦部隊と共に、ドッキング・ブリッジの相手側のドアが開き次第、突入しようと待機していた。

後から振り返れば、弁天丸からの連絡で、公爵の船から乗員が逃亡していると聞いて、一同には既に勝利の雰囲気か漂っていたのであろう。

「敵の艦内は、大半で真っ暗です。艦内の照明が点灯されていないためと思われる。従って、船内カメラでは旧ステーションの乗降口付近の様子が分かりません。敵艦内の赤外線その他のセンサーも機能していません。」

これが、老朽化によるものか、意図的なものか、原因がわかりません。グランドクロスⅡ2号機のブリッジから、良くない連絡があった。

「何、もたついているの。」

チアキはいらついていた。

「お嬢様。この展開は、危険な感じがします。後ろへ下がってください。」

スカーレットがチアキに言った。

「旧ステーション側のドッキング・ブリッジのドアが、勝手に開き始めます。」

白兵戦部隊の隊員が言った。

「ワナだ。」

ブリッジ、ドッキング解除。こちら側の外壁ドアを、閉める。急げ。

みんな、お嬢様を守れ。相手の船の中を撃つて援護しろ。」

スカーレットが矢継ぎ早に指示を出した。

次の瞬間、旧ステーション側のドアのスキマから、高出力のビーム砲がチアキに向かって放たれた。

その次の瞬間、グランドクロス側の外壁ドアが閉まり、ドッキングが解除された。

「お嬢様！大丈夫ですか！」

「私は大丈夫ですが、ヘルメットが汚れていて何も見えません・・・これは」

チアキは絶句した。

あたり一面、血の海だった。

チアキの防護服も大量の血を浴びていた。

チアキの前に3人の重装防護服を着た戦士が倒れていたが、2人が腹部をビームで貫かれ、3人目の体でビームが止まったものの防護服が破裂した状態であった。3人とも

自分の体でチアキを守ったのだった。  
「ブリッジへ。」

1号機及び弁天丸に至急連絡せよ。  
ドッキング・ブリッジにワナがある。

高出力ビーム砲を持った狙撃手が配置されていると伝えよ。

その次に、司令部に戦闘状況報告。チアキ様は無事だという報告も忘れるな。  
スカーレットが素早い指示を出した。

「了解。」

「ブリッジへ。」

直ちに、先ほどのドッキング・ブリッジを砲撃しろ。ビーム砲を沈黙させろ」

「了解。」

「あー遅くなりましたが……。旧ステーションの様子が分かりました。」

船内の主要隔壁は総て閉鎖中です。

先ほどのドッキング・ブリッジには、ロボット兵が配置されています。このほかの乗降口にも総てロボット兵が配置されています。

しかし、船内には、乗組員や戦闘員というような人間はほとんどいませんが、ブリッジには人間が一人います。」

「電子線担当、よくやった。さあ、ロボット兵の武装解除を急げ。」

「了解。」

.....

「スカレットさん。みなさん。私、なんと言ったら良いか……。」

チアキは惨状を見て、言葉に詰まっていた。

「お嬢様、まだ戦闘中です。お気を確かに。」

それに、死んだ兵士はお嬢様のために命を捧げたことを誇りに思っていますよ、きつと。」

「……そうですか。戦いは、まだ終わっていないと、気を引き締めないといけませんね。デインギーの操作でも、『ピンチの時は基本に忠実に』って言いますね。基本に忠実な操船をしつつ、落ち着いて状況を観察して、挽回のチャンスがうかがえと、教わりました。」

チアキが言った

「お嬢さまは、デインギーの大会で優勝経験があたりでしたね。」

そうおっしゃって頂くと、私も、基本に忠実に、なにか見落としていないか、考えないといけませんね……。

ほぼ無人の船内、隔壁閉鎖、ロボット兵か……。

そうか、

おい、毒ガスや生物兵器が使われていないか、ドッキング・ブリッジ周辺をチェックしろ。

各戦闘員も防護服の気密を点検、維持しろ。

ブリッジ、聞こえるか！ドッキング・ブリッジの気密を確保し、こちらに通じる隔壁を閉鎖せよ。

それから、化学兵器・生物兵器対策兵を船外を経由してこちらに派遣してくれ。」

「反応ありました。致死性の有毒ガスが検出されました。濃度上昇中です。」

「床に用途不明のカプセル弾が、いくつか散らばっているのを、見つけました。」

カプセルのなかには、既に割れて液体が出ているものもあります。

生物兵器の可能性もあります。」

兵士の報告が続いた。

「そうですか。」

もしかすると、化学兵器や生物兵器による攻撃が本筋で、ビーム砲による攻撃は陽動だったのかもしれないね。

ビームを防御してひと安心させたところで、致命傷を与える作戦。

まるで、テロリストですね。」

冷静になったチアキが言った。

「お嬢様の言うとおりですると、敵の狙いは白兵戦に突入してくる聖王家のメンバーの命ですね。」

王家の者は戦場でも常に先頭に立つのが、伝統ですから。」

「そうですね。」

「ブリッジ、聞こえるか！」

こちらは化学兵器の使用を確認した。致死性のガスだ。生物兵器については、目下調査中だ。その旨、司令部へ戦況報告。

それから、1号機と弁天丸に白兵戦突入を中止されたいと連絡せよ。敵の狙いは王女様と副官の命だと思われる。」

冷静になったスカレットが、指令を出した。

7-1-1 グランドクロスII-1号機船内

この時、グランドクロスII-1号機のブリッジでは、今まさに、旧ステーションへの白兵戦突入のため、クリステリア王女は、白兵戦部隊の待ち受けるドッキング・ブリッジに向かおうとしていた。

「お待ちください、司令官。2号機からの緊急連絡です。」

旧ステーションに乗降口から突入しようとした2号機の白兵戦部隊に罠が仕掛けら

れていたそうです。

ロボットの伏兵だけでなく、毒ガスが使用され、生物兵器も使用されている可能性があるため、突入を中止したとのことでした。

このため、1号機と弁天丸も旧ステーションへの突入を中止するようにとの進言です。

なお、旧ステーションの様子が判明したそうです。残っている乗員は、ブリッジの名だけと言っています。」

「なに!? 毒ガス、生物兵器? なんとという古臭い罫だ チアキは大丈夫か?」

「チアキ副官は無事との連絡もありました。」

「そうか。それはよかった。当艦もいったん突入を中止する。」

それで、旧ステーションに残っている乗員一名とは、公爵本人か?

私の名前で、連絡を取ってみよ。」

「了解しました。」

あ、旧ステーション周辺に停泊していた聖王家関係者の船が一斉に発進しました。プレドライブ現象確認。まもなく、超光速跳躍に入ります。」

「今頃、逃げ出すのか。司令部に連絡して処理を任せろ。」

「司令官、旧ステーションから返信がありました。モニターに画像が出ます。」



モニター画像に、アンドレア公爵が映し出されたが、その表情は屈折していた。片手に酒の入ったグラスを持っている。

「よう、クリスティア。こちらはご覧のように、一人ぼっちだ。

一時間ほど前は、このステーションのブリッジには大勢の貴族たちがいて、勝利間違いなしと騒いでおったが、いつのまにか、皆逃げ出しおったわ。

さあ、わしを捕まえたければ、ここまで来い。」

「そうしたかったのですが、叔父上は、罨を仕掛けてお待ちの方ですね。」

「フン、先ほど一機、罨にかかったが、お前の乗った機ではなかったのか。」

「それは、副官のチアキの乗った船でした。

もちろん、罨は不発。チアキも無事です。」

「フン、つまらん。」

お前さんか、アン女王が罨にかかってくると相撃ちの一撃になると踏んでいたのがなあ。そのために、罨のエサに、私自身を用意したのだ。」

「残念ですね。最後の一撃も空振りでした。」

「副官のチアキといったな？」

「そうか、お前は、女子高生二人を副官として連れてきたそうだが、その二人と3機編隊を組んでいたのか。」

「副官はチアキと加藤茉莉香。グランドクロスのパイロットは、チアキともう一人別の高校生です。」

「ふーん。それにしても、戦闘中のお前さんとチアキ達の会話は楽しそうだったなあ。賭けまでやりおつて。」

「聞こえてたのですか。」

「あたりまえだろう。腕のいい通信士がいれば、聞こえるさ。しよせん、同じ帝国軍の艦同士だからな。」

それで、俺の見るところ、賭けはお前さんの負けだな。罰ゲームとして、王宮のダンスパーティに最低5回が出るそうだな。あんなに嫌がっていたのに。

これは、おもしろいぞ。どういう心境の変化だ。」

「別に、心境の変化なんか無いですよ。」

私はあの二人より年上で、いわば姉の立場です。

しかも、海明星の女子高では彼女らの教師でしたからね。その気になれば、ダンスでも彼女たちにお手本を示すことが出来るんですよ。」

クリスティア王女は、例によって強がりと言った。

「そうか、そういう仕掛けか。アハハハ。」

「なにを笑うんですか。」

「いやあ。お前さんの性格が変わった理由がわかったよ。

お前さんはいいなあ。お前のために命がけで戦ってくれる妹たちがいて。

だから、楽しそうだ。」

「まあ、あの二人といると、退屈しないことは確かですねえ。」

「そうだろう。私なんか、最初からずっと一人ぼっちだった。

最後まで、私のために命がけで戦ってくれるヤツなんて誰もいない。

家族の中ですら、最後まで、私のために命がけで戦ってくれるヤツなんて誰もいない。

後のエカテリーナは、元々世話好きなヤツで、アンにローズガールデンクラブの会長に任命されてからは聖王家の縁談をまとめるのに毎日大忙し。私のことなど無関心だ。

娘のグロリアは、洞察力、統率力、人望など女王となる資質を持ちながら、演劇に中で、政治や軍事には無関心。やはり、私のことなど無関心だ。

グロリアが本気でアンと戦ってくれれば、帝国軍を二つに割って互角の勝負に持ち込めたのだからなあ……。

だから、最後まで、一人ぼっちになった。

そうだ、冥土の土産に、お前の副官二人に会わせろ。

おい、聞こえているんだろう。加藤茉莉香、チアキ。モニターに顔を出せ。」

「はい、チアキ・クリハラです。」

チアキが、防護服を着たままのヘルメット姿でモニターの副画面に現れた。

「もつと顔をよく見せてくれ。ヘルメットをとって。」

「せつかくですが、いま除染中なので、できません。」

「そうか、でも、分かったぞ。そうか、そういう仕掛けか。」

「何をおっしゃっているんですか……。」

この時、遅れて、加藤茉莉香が弁天丸の船長服姿で、かなりあわてた様子で、副画面に現れた。

「どうも……。遅くなりました。加藤茉莉香です。ナハハ……。」

茉莉香は、お得意の愛想笑いをしつつ、あわてて、会話に割り込んできた。

「いやあ、お土産としてご要望に答えてメイドになってお会いしたかったんですが、あいにく弁天丸には用意していなかったもので……、

すみません。それは、次回のお楽しみということですね。」

かわりと言ってはなんですが、こんなものでいかがでしょうか。」

「いらつしやいませ。」

突然、各船のブリッジに、ランプ館の制服を着た加藤茉莉香が、そう言ってお辞儀をして、つこり微笑む立体映像が、映し出された

「???.」

公爵もクリスティア王女も、加藤茉莉香が、なぜこんな映像を突然、見せたのか、理由がわからなかった。

「茉莉香！」

あなた、もう、はずかしいわよ。

今、『冥土』をコスプレの『メイド』さんと勘違いしていたでしょう。」

チアキが言った。

「ええ？ ええ~~~~!!!!!!

・・・違うの？

そ、そんな、ナハハハ・・・。」

「そうよ。それに、その苦笑いもやめなさいって、いつも言われてるでしょ。

「私、本当に間違えたの？」

どうしよう、チアキちゃん。」

「う~~~~！」

だから、『ちゃん』じゃないって、いつも言ってるでしょ。茉莉香」

「だってえ。チアキちゃんは可愛いから、やっぱり『チアキちゃん』って感じだよ。」

「茉莉香、あなた・・・。恥ずかしいから、やめてよね。」

「ううう・・・。何てことを・・・。」

茉莉香とチアキのやり取りに、弁天丸のブリッジでは、ミーサが頭を抱えていた。

「ウハハハハ……」

「アハハハハ……」

公爵もクリスティア王女も、大笑いしていた。

グラントマザーのブリッジで、事の成り行きを見守っていた白鳳女学院ヨット部員たちも大笑いしていた。

「なるほど、これじゃ退屈しないなあ。クリスティア、お前さんはいいなあ。こんなおもしろい妹たちがいて。」

「まあそうですね。否定できませんね。」

「おい、加藤茉莉香。私を最後に笑わせてくれた褒美に、ひとつお前の希望を叶えてやろう。なんでも言ってみろ。」

「はあ……。何でも聞いていいんですかあ。」

「茉莉香、常識つてものが……」

チアキは心配そうだった。

「公爵様、それじゃ伺います。」

公爵様はどうして反乱なんかしようとお考えになったのですか？

銀河帝国の王位ってそれほど魅力があるんですか？

聖王家の王族というだけでは、不満だったのですか？

私はこれでも弁天丸の船長として経営者ですから、毎月の給料が払えるよう、赤字にならないよう、毎月、毎月大変なんです。そういう苦勞がない王族のみなさんって、良いなあって思う時もあるんです。」

茉莉香が言った。

「ほう。良い質問だ。

お前、天然かと思わせておいて、実はなかなか賢いな。気に入った。

教えてやろう、遺言だと思つて聞けよ。

私が、銀河帝国の王位を狙つたのは、ただ、退屈だったからさ。

私は、本家の青薔薇家と違つて、傍流の赤薔薇家の出身、しかも三男坊。王位継承者の順位としては、いったい何番目になるか良く分からない程の存在だった。

それでも、一応、王族だ。

王族つてのは、退屈なんだぞ。なにせ、食うに困らないが、何かをする義務もない。だから、大人になったら、毎日何をして過ごすのか、何をして生きるのか、自分で考えないといけない。酒色や賭け事に漏れる奴もいるが、一般人のように学者や軍人になる奴もいる。もちろん、何もしないで順番が回ってくるのを待つだけの奴もいる。

私は、そのいずれも嫌だったね。もちろん、働く気なんて無かった。

それで、私が、唯一興味があつたことは、私の周りをうろつく人間を観察することだつた。観察すると、面白いことに気が付いたね。人は誰しも、心の中に、不満や欲望を抱えているってことに気が付いたんだな。人はそういう気持ちを感じていると言つても良いだろう。

それで、私がそいつをちよつと刺激してやると、みんな、面白いように走り出しているんだ。欲望に取りつかれてなあ。

そうやって人を操って遊んでいると、みんなが俺に望んでくるものがあることに気が付いたんだ。

『赤薔薇家の当主になれ』とね。それで、当主になれば、

『銀河帝国の王になれ』とね。みんな、私の栄達に乗つかつて、自分の欲望を実現しようとして考えてるんだな。

赤薔薇家の当主になる、銀河帝国の王になる、これは面白いゲームだつたね。誰をどう操ればそういう結論になるか、筋書きを考えるだけで退屈が紛れたね。

じゃあ、お前たちの望みをかなえてやろうと考えたのさ。」

「それでは、公爵自身が操られていることになるよ、お考えにならなかつたのですか。」  
クリステアが聞いた。

「そんなことはどうでもいいのさ。もともと退屈しのぎだからな。」



一度はチェックメイトまで行ってゲームが詰んだと思っただが、先王が帝国海賊に命じて、死んだはずのアンを探させたので、王座は逃げた。

アンを乗せたあの艦隊には驚いたね。

伝説の存在として、まったく形骸化していたはずの帝国海賊が、あれだけの軍事力を保持していたのは、驚いた。

それで、今度は帝国軍だけでなく、帝国海賊と対抗するために宇宙マフィアも操って挑んだのだが・・・。

まさか、死んだはずのお前さんまで生きていたとはなあ。

クリスティア、お前さんが、海明星とかいうあの娘の住む星に行つたと聞いた時にはあわてたよ。

でも、お前がその娘たちを乗せて非武装の太陽帆船で航海に出るって聞いたときは、マフィア艦隊を差し向けて、これで勝つたと思つたんだがね。

しかし、もう少しのところで、新型空母に追い抜かれて、お前さんたちを守られてしまった。

今思うと、あそこから後手に回り始めたな。

そして、最後の最後に、アンが平和条約の話を持ち出してきた。俺の周りになんことを考える奴はいなかったな。面白いことを考える。

あの和平条約の内容はとても高度なものだ。あれをまとめるには、長い時間をかけた激しい交渉が必要なはずだ。

してみると、帝国と宇宙マフィアの連中は密かに和平交渉を行っていたのだろうか。そんな情報は私の耳には入らなかった。マフィアのヤツラは二股をかけていたわけだな。ハハハ。

結局、アンの奴は、宇宙マフィアも手なずけてしまった。

まあ、そういう話だ。加藤茉莉香。」

「はあ。すごい話でしたね。」

でも、庶民の私としては、関連して、もう一つ確かめたいのですが……。」

「なんだ、まだあるのか。いいだろう。お前は面白いからな。」

「あのう、庶民の間では、公爵様の反乱の原因は、公爵様との結婚を陛下が嫌って家出して、その結果、婚約が解消されたことに、公爵様が腹を立てたからだというのが常識なんです。今の話ではそうではないと?」

「茉莉香……本人になんてこと聞くの! あんた……。」

チアキが青くなって言った。

「まあ、チアキ、そう怒るな。答えてやる。」

私とアンの婚約は、政略結婚でなあ、私も望んだものではない。

私は、そもそも、学生時代に結婚したい娘がいたのだよ。

清く正しく美しい素晴らしい娘だった。でも、その娘は、家柄も資産も何も無い普通の家の娘だったので、当然父親らは大反対。その娘に良い縁談を世話して、私から遠ざけてしまった。

王族には、さつきも言ったように何かをする義務はないが、王族がやってはいけないことはたくさんある。結婚だって制約がいっぱいある。

そのため、俺の唯一の望みはかなわなかった。

一方、親戚の聖王家の女達を、私は好きになれなかった。

『強く、賢く、美しく』が聖王家の女のモットーだそうだが、私にすれば、『気が強くて、ズル賢くて、無駄に美しい』だけだ。

やっぱり、女性は、気がやさしくて、おおらかであってほしいね。そういう女性であつてこそ、美しさにも価値があるのさ。

その点、アンの奴は、典型的な聖王家の女。特に気の強さでは、ナンバーワンだろう。わしの娘達も気が強くて、小学生の頃から剣を振り回して遊んでいるが、わしの娘、長女のグロリアですら、気の強さではアンにはかなわないだろう。

だから、形だけの政略結婚といつても、そんな気の強い女との婚約が解消されて、ほつとしたものさ。当時も今もそう思っているよ。

だから、今回の件と婚約解消とは全く関係がない。これが真実だ。ハハハ・・・」  
「うわー、大変なこと聞いちゃった。どうしよう、チアキちゃん。」

「ほら、言わんこつちやないでしょ。茉莉香。だから・・・」

「ううう、勝手なことを一方的に言われて、母上は怒るぞ、きつと。」

今度は、クリステイア王女が頭を抱えていた。

「まあ、お前たちが心配することはない。もう過去のことだ。」

そんなことより、クリステイア。お前さんは、これからどうするんだい。どんな女として生きていくのかな。王位継承者としてのお前さんの生き方は、銀河系の国民も無関係では無いぞ。

聖王家の神話のように神の子孫たる万能の王となろうと、果てしない緊張に耐えるか、あるいは、凡庸な王として怠惰や安逸に身をゆだね、退屈に耐えるか、王道も楽ではないぞ。せいぜい悩むことだ。

さて、私の退屈しのぎも、これで終わりだな。

今回の反乱の責任も誰かが取らないといけないし、今の話を聞いてアンの奴が怒り狂っているかもしれないから。ハハハ。

これから、爆弾でステーションの軌道を変えて、ブルー・クリスタルの海に向かう。だから、俺の体には誰にも触らせない。逮捕になんか、なるものか。

さようなら、女王陛下。

さようなら、エカテリーナ、娘達。

さようなら、帝国軍のみなさん。」

公爵は、手に持ったグラスを飲み干すと、通信を切った。

その後、旧ステーションは爆発して、巨大惑星ブルー・クリスタルに落下していった。

この後、女王から、次のような命令があった。

「逃亡した聖王家関係者の船は、帝国海賊に追わせる。その追跡経費は捕獲した船の積み荷や乗員の所持する貴重品を奪って当ててよいと伝えよ。

したがって、帝国軍には追跡を禁じ、逃亡した船が救難信号を出すのを待ってから、残された乗員を迎えに行けばよいと命令せよ。」

「やつと海賊の出番が来た。」

そう思って、私掠船免状の海賊船と帝国海賊の持ち船は、一斉に発進していった。

7-12 弁天丸ブリッジ

「ううう……。どうしようかなあ。陛下にお詫びに行った方が良いかなあ。司令官に相談しようかなあ……。」

その頃、弁天丸のブリッジでは、加藤茉莉香船長が、「余計な質問」をしたために、公

爵が女王陛下に対する一方的で身勝手な悪口を言う結果になったことを、ひどく後悔していた。

その時、茉莉香に、公爵の船に残っていた百目から通信が入った。

「あのう～～～～、船長、お取込み中のところ、済みませんが～～～～公爵様の船におります百目です。至急、船長に公爵様の船まで戻ってきていただけないでしょうか……。」  
茉莉香は、何か困ったことが起きたような微妙なトーンの百目の声を聞いて、我に返った。

「百目。どうしたの。お宝探しはどうなったの？」

「それなんです、……。」

「キャプテン茉莉香！　ぐずぐず言っていないで早く来なさい。」

いきなり百目のそばから年配の貴婦人がモニターの画像に現れて、口を挟んだ。

「公爵夫人でいらつしやいますね。失礼いたしました。船長以下、すぐに参ります。」

間髪を入れずに、ミーサが深々と礼をしつつ、承諾の返事をしたので、公爵夫人は満足してモニター画面から消えた。

「誰？　何が起こったの？」

「いやー、それなんです、お宝さがして公爵様の船の中を調べていたら、ご婦人方やお嬢様方が出ていらして『お宝が欲しいなら、船長がちゃんと海賊をしろ』と……。そ

れで、『言うことを聞かないと、お前の首を切るぞ』と言われまして……」

そういう百目の首筋には、モニターの画面でも、真剣のサーベルの穂先が3本も突き立てられているのがハッキリ見えている。

「聖王家のご婦人方？ お嬢様方？ 電子戦で、乗員はほとんどいないって確認していただけないの。どこから現れたの？」

「それがねえ、王族用の区画は最初からブリッジのコントロールが及んでおらず、そこには船内の監視カメラも設置されていないから、電子戦でブリッジを乗っ取ってもわからなかったのよねえ……。ほんと、すごい船ねえ。」クーリエが言った。

「わかりました。今すぐ行くわよ、首を切られないように大人しくして、待っててね。……」

「あ、茉莉香様だあ。」

「本当だ、茉莉香様く〜く〜く〜！」

「あんだ、邪魔よ。消えなさい。」

茉莉香の顔を見ようと、中学生くらいの年齢の、着飾ったお嬢様たちが剣を持ったままモニターの前に集まってきて、百目を追い払ってしまった。

「皆様、宇宙海賊船弁天丸船長、加藤茉莉香でございます。お見知りおきください。そちらの船まで、ただいまから海賊しに参りますの、少々、お待ちください。」

さあ——、海賊の時間だあ！」

茉莉香はそういつて、手を振りかぶつて、モニター画面の向こうのお嬢様方を指差し、お得意のポーズを決めた。いつもの茉莉香らしい、華やかなオーラが出ていた。

「きやー、カツコイイ。」

「ステキ〜〜〜〜！」

「茉莉香様〜〜〜〜。」

「茉莉香様は、わたくしを見てくださったわ。わたくしだけを……。ああ！」

「シルビア、貴方、その感覚、ちよつとおかしくない？」

「お姉さま、シルビアは最初、いつもこうなんです。そのうち熱が冷めますけど……。」

こうして、茉莉香は先ほどの悩みをどこかに置き忘れ、弁天丸は、気の強い聖王家の姫君たちが待つ公爵の船に向かった。

### 7-113 アンドレア公爵御用船の大広間

ほどなく、弁天丸は公爵の船にドッキングし、宇宙海賊船弁天丸船長、加藤茉莉香以下のクルーは、いつもとは勝手が違うと思いつつ、船の大広間に向かった。

「ねえ、海賊つて何するの。まさか私たちを襲ってくるのかしら。」

「ならば、この剣で戦うまでよ。」



「それにしても、遅いわねえ。」

手持ち無沙汰に会話を続けるお嬢様たちの目の前が、突然真つ暗になった。

「きやー!」

「ねえ、ついに来たんじゃないの・・・フッフ。」

正面の大きな扉が少しずつ開き始める。空いた扉の隙間から、明かりがさし、水蒸気が白い煙となって漂ってきた。

闇に隠れて、数人の人影が大広間に入り、正面扉の前に整列した。

そして、中央の人影にスポットライトが集中する。

もちろんその中心に立つのは、茉莉香であった。

「お待ちせしました。宇宙海賊船弁天丸船長、加藤茉莉香です。海賊しに来ました。」

「キヤー、茉莉香様!」

「茉莉香様!!」

「来たー。」

「お母様、私、宇宙海賊を見るの、初めて。」

大広間には、小中学生くらいの御姫様たちが大勢詰めかけており、黄色い歓声がとぶ。

茉莉香が海賊の名乗りを上げると同時に、左右に並んだ弁天丸のクルーたちにもスポットライトが当てられていく。

ぼろぼろの船員服に、派手な色のバンダナ、手に手に大きく輝く蛮刀や古式ライフルを持った船員たち、片手・片目のおとぎ話に出てくる海賊のような姿に扮装した船員、腰に二丁拳銃をぶら下げた女海賊……。みな、それぞれに古代からの海賊というイメージを大事にした格好である。それぞれに歓声があがり、興奮が増してゆく。

とりわけ、シュニツアアが照らし出されると、歓声に交じって悲鳴が上がった。こういう旧式の宇宙活動用のメタル・ボディを持ったサイボーグは、核恒星系では珍しいのだろう。

海賊たちは、茉莉香を先頭に大広間に進み出た。

そして、いきなり、船員たちが船の天井めがけて、ビーム・ガンを発射した。

焦げ臭いにおいが、大広間に広がる。

「ひゃー……！」

悲鳴とそして歓声があがる。

「いまのは、もちろん威嚇です。船の安全には支障はありません。」

加藤茉莉香は、大広間の照明を戻すように指示してから、言った。

「では、いつもの注意ですから、よく聞いてください。」

我々の指示に従って頂く限り、皆さんの安全は保障いたします。おとなしくこちらの言うことを聞いていただければ、無事な身体と帝国の中心レッド・クリスタル星系で宇

宙海賊に襲われたという、本当に珍しい自慢話を持つておかえりになれます。」

ここまで、いつのもセリフを言った茉莉香だったが、この後、特にオプシヨンの段取りは決まっていなかった。しかし、これで最後のセリフを言ってしまうのは、なにか物足りない気がして、茉莉香は戸惑った。

その時、高校生くらいの年ごろの一人の御姫様が、剣を持って茉莉香の前に現れた。剣を持っているが、着ているものは、いかにもお姫様というフレアがいつぱいついたカワイイ黄色のドレスだった。

「お待ちなさい、私はアンドレア公爵家の次女ゴールドディアよ。宇宙海賊キャプテン茉莉香、勝負よ。剣を抜きなさい。」

「どうしたのかしら、命知らずの御姫様ねえ。私は本物の海賊よ。どうなっても、知らないわよ。」

いつもの営業用のセリフをアドリブでアレンジして言いながら、茉莉香は大変なことに気が付いた。二人は、防護服なしで、真剣を抜いて対峙しているのだ。しかも、相手は事前に仕込んだ弁天丸の船員ではなく、素人のお客さん、しかもなんと聖王家の御姫様だった。

『聖王家の御姫様にけがをさせるわけにはいかない。手足に傷を負わせたならどうなる、顔に傷でもつけたら、海賊の方は命が無いかもしれない……』

一方、この場で海賊が負けるわけにはいかない。負けたらお宝場が頂けない。では、どうやって、この気の強いお姫様に負けを認めさせるのか。』

茉莉香が戸惑っているうちに、ゴールドディア姫が打ち込みできた。なかなか強い打撃だった。彼女の連続的な打ち込みを、ギリギリでかわしたり、受けとめているうちに、茉莉香はその後の展開がひらめいた。

『そうか、チアキちゃんとクリス先生の剣道の稽古のようにやればいいんだね。』

そう思いつくと、茉莉香は反撃の機会を窺った。

そのうち、姫の額に汗が浮かび、呼吸が少し荒くなったように感じられた。

「そろそろ、こちらから行くわよ。さあ、海賊の時間だあ〜〜〜！」

そう叫んで、茉莉香は、姫に対して連続的に打ち込みを続けた。姫も頑張っていたが、しだいに受けが甘くなっていた。

その時、一人の御姫様が二人の間に割って入った。

「はい、はい、お姉さま。貴方はもう三回は死んでますよ。そこまで。」

今までで、三回、茉莉香さんにスキを見逃してもらっていたの、わかってるんですよ。私と交代してください。」

「チエ〜、見られてたか。」すでに疲れ切っていたゴールドディア姫は、舌を出して引き下がった。

「さて、つぎは私、アンドレア公爵家の三女サファイアです。宇宙海賊キャプテン茉莉香、いぎ勝負。」

きりりとした表情で、髪も後ろに束ねた少し少年っぽい印象の姫君が剣を正眼に構えた。着ているドレスは、やや活動的な印象のものだった。

「弁天丸船長加藤茉莉香です。サファイア姫様、この勝負、承りました。では、いきましよう！」

サファイア姫が打ち込んできた。

『うまい。先ほどの勝負を見抜いただけあつて、この子は剣道が上手ね。』

でも、私は海賊よ。この勝負、剣道の試合じゃないんだからね。』

余裕の出てきた茉莉香には、次の作戦が浮かんでいた。

二人は、何度も攻守交代を重ねながら、剣を交えた。サファイア姫の額にも、汗が浮かんできた。

「もうそろそろ、いいかしら。」

茉莉香は、サファイア姫が打ち込んできたところをサツとかわして、体を姫に近づけ、ひじ打ちから腕をとって関節技を決めた。たまらず、サファイア姫は剣を落とした。

「はい、姫様。勝負ありました。」

「うう……。茉莉香様は、剣道だけじゃなく、総合格闘技も使ってくるのかあ。くやし

いけど、次は負けないわよ。」

その後、三人目の姫が現れた。この子のドレスは、三人の中で一番女の子らしいものだった。

「続きまして、私は、アンドレア公爵家の四女シルビアでございます。宇宙海賊キャプテン茉莉香様、いざ勝負。」

『え？ んん？ このコ、剣道をやる気が感じられない！』茉莉香は驚いた。  
「ええーいい」

シルビア姫が剣を打ち込んできたので、仕方なく茉莉香は剣をはじいた。

すると、剣だけでなく姫の体もはじかれて、バランスを崩し、あおむけに倒れそうになった。

「危ない！」

茉莉香は姫を支えようと、近づいて、手を伸ばした。

その時、さっとシルビア姫が身をひるがえして、茉莉香の懷に飛び込んで、茉莉香の胸に強くしがみついた。

姫は茉莉香の胸に顔をうずめて、こう言った。

「茉莉香様々々。シルビアは茉莉香様の胸に抱かれて幸せでございます々々。」

「ええ々々々!!」

茉莉香はシルビア姫に抱きつかれたまま、呆然と立ち尽くした。

長い時間が経過したように感じられた。

「はいはい、シヨーはこれでおしまい。ゴールドディア、サファイア。シルビアを連れて行きなさい。そろそろ、迎えの船が来るから、帰り支度をしてなさい。」

「はい、お母様。」

二人の姫はシルビア姫を茉莉香から引きはがすと、まだ未練たつぷりのシルビア姫の両腕を抱えながら、去って行つた。

中央に現れたのは、公爵夫人だった。

「茉莉香さん、うちのコたちと遊んでくれてありがとう。」

なかなか凛々しい娘海賊ぶりだったわよ。私も気に入ったわ。

はい、これ、公爵の部屋の鍵よ。中のはみんな持つて行つていいわよ。お疲れ様。」

そう言つて茉莉香に鍵を渡すと、公爵夫人も大広間から去つて行つた。それを合図に大広間に集まっていたご婦人や姫様方が一斉に大広間から出て行くこうとしてゐる。

弁天丸の一行は、いつもと勝手が違い、戸惑つてゐた。

その時、輝くように美しい女性が茉莉香に近づいてきた。

「初めまして。アンドレア公爵家の長女グロリアでございます。」

このたびは、父の身勝手で皆様には大変なご迷惑をおかけしました。さらに、妹たちの我儘勝手な振る舞い、重ね重ねお詫び申し上げます。

でもね、弁天丸船長加藤茉莉香さんは、うちの妹たちのあこがれの存在でしたの。そういう妹たちの気持ちも分かってやってくださいね。

私も貴方に初めてお会いして、妹達があなたに夢中になる理由がよくわかりましたわ。私もあなたのファンになりましたわ。

どうか、今後ともよろしくお願いいたします。」

「いえ、いえ、姫様にそんな言葉をかけて頂いて身に余る光栄です。こちらこそ、よろしくお願します。」

そう返事をしたものの、茉莉香は、グロリア姫に見つめられただけで、顔が赤くなり、胸の動悸がする自分に驚いた。

『なんてきれいな姫様なんだろう。これが、本当の聖王家の姫様なんだ』と。

さらに、彼女が去った後には、甘くて、それでいてさわやかで、まさしく『高貴な香り』としか言いようのない香りが漂っていた。

弁天丸のメンバーも同じ思いだったようで、みな魂を抜かれたように呆然として、去っていくグロリア姫を見つめていた。

公爵の部屋は、まるで倉庫のように、所狭しと金銀財宝が積み重ねられていた。贈ら



れたまま、開封をしていない宝物も数多くあった。

弁天丸のブリッジに戻った茉莉香が言った。

「公爵の部屋は、お宝がいっぱい。大儲けだったね。」

「そうね。もらい物ばかりだったから、あまり品の良いものはなかったけど。」

「ミーサは厳しいね。」

それから、グロリア姫にも会ったよ。美しくて優しそうな姫様だったね。本当に宇宙一の御姫様って感じだったよ。」

「え!? グロリア姫に会ったの。」

何故か公爵家の船の営業に出て行かなかったミーサが聞いた。

「うん、今回のお詫びを言われて、それに私のファンになったって。」

「それで、茉莉香、あなたも本当に彼女を『美しくて優しそうな姫』だと思ったの。」

ミーサは、すこし棘のある言い方をした。

「そうだけど・・・、なにか?」

その時、ルカが言った。

「バカな男たちはともかく、船長まで魂を抜かれるとは・・・。船長はもつと女を磨かないといけないわね。」

クーリエが、ニヤニヤ笑いながら言った。

「茉莉香ちゃん、彼女のあだ名、知ってる？」

「??」

「聖王家の魔女」

「え〜〜〜!!」

一方、公爵家の女性たちが乗ったお迎えの船の中では、グロリア姫がつぶやいていた。『ふ〜〜ん、加藤茉莉香、女の子が惚れる、カッコイイ女の子か。』

なかなか面白いキャラクターね。クリスティアのヤツが、あのコを自分の副官にして手元に置いた気持ち分かるわ。フフフ・・・。

また会いましょう、茉莉香。

## 第八章 サーシャの秘密

8—1 機動空母グランドマザー船内

こちらは、機動空母グランドマザーのブリッジ。

30分ほど前に、ウルスラの乗ったグランド・クロス3号機が帰還したはずなのだが、なかなかウルスラがブリッジに現れないので、ヨット部員たちは心配し始めた。

「何か、あったのかしら。」

「艦長、ウルスラは無事に帰ってきたんでしよう?」

「そのはずだ。その後、私には、特に連絡はない。」

「おい、3号機に連絡を取ってみろ。」ミッキー艦長が言った。

「承知しました。」

通信士が連絡を取り始めたころ、一人の青年士官がブリッジに現れた。

「グランド・クロス3号機の機関士ブラウン少尉です。」

「こちらに、サーシャ・ステープルさんはいらつしやいますか。」

「アブラモフ少尉がステープルさんにお会いしたいとおつしやつてるんですが。」

「え?」

「アブラモフ少尉って、誰？」

「もしかして、ウルスラのこと？」

「はあ、少尉のお名前は、確かウルスラでしたね。3号機のパイロットをした女子高生です。」

「間違いない！ウルスラだ。」

「私がサーシャ・ステープルです。ウルスラは、今、どこにいるのですか？」

サーシャが聞いた。

「3号機の医務室で応急治療中です。精神的なショックと疲労で動けない状態です。」

「ええ〜〜〜！」

この時、通信士が艦長に言った。

「艦長。3号機のブリッジと話しました。」

アブラモフ少尉の症状は、ブラウン少尉からお聞きの通りですが、医師の診察ではブラウン少尉もアブラモフ少尉も、絶対安静・面会禁止だそうです。

ところが、ブラウン少尉がサーシャ・ステープルさんに会いたいというアブラモフ少尉の願いをきいて、医務室を脱走。サーシャさん呼びにこちらに向かったということだそうです。

なお、医師は、アブラモフ少尉とサーシャさんとの面会については、事情を良くご存

じである艦長に、ご相談したいと言っているそうです。」

「私が電話に出る。医師に電話をつないでくれ。」

ミツキー艦長は医師の話を聞いたあとに、こう答えた。

「・・・そういうことなら、私は、なおさら、サーシャ・ステイプル嬢と会わせるべきだと存じます。」

アブラモフ少尉は、サーシャ嬢のために無理を承知で出撃したのですから、彼女の心を落ち着かせるためには、ぜひ必要と考えます。

はい。・・・とにかく、これから、サーシャ嬢を連れて、そちらにまいります。

はい。もちろん、ブラウンの奴も、引っ捕まえて連れてまいります。」

ミツキー艦長は船内電話を切って、サーシャに言った。

「サーシャ、ウルスラは『あの二人を死なせたのは自分のせいだ』と言って、自分を責めて、パニック状態になっているようだ。」

一緒に行こう。」

それを聞いて、サーシャの表情が一変した。

サーシャと艦長、そしてヨット部員たちも急いでグランドクロスⅡの医務室に向かった。

ブラウン少尉は、サーシャがウルスラに会いに行くと言っていて安心したのか、そのまま

ブリッジで倒れてしまったので、クルーによってストレッチャーに乗せられて運ばれていった。

「ああー、みんな私のせいだ。二人を助けられなかった。

私が余計なことをしたばかりに、二人を死なせてしまった。

あの二人がサーシャにとって大切な人に違いないって、分かっていたのに。

サーシャの大事な人たちを助けるため船に乗るって言ったのに、肝心な時に何もできなかった。

もう取り返しがつかないよう。

ああー、サーシャにすまない。

私なんか、もう死んでしまいたい。・・・」

医務室に近づくと、廊下でもウルスラの騒ぐ声が聞こえた。

医務室へは、サーシャと艦長が入り、ヨット部員は廊下で待つことになった。もちろん、「脱走者」のブラウン少尉もストレッチャーに乗せられて入っていった。

「ウルスラ、私だよ。サーシャだよ。」

サーシャはウルスラを抱きしめた。

「ああ、サーシャ、サーシャ、ごめんなさい。

みんなが悪い。偉そうなこと出して出撃したのに、結局、私は何もできなかった。

みんな私のせいだ。

あの二人が死んだのは、私が重力砲でミサイルの軌道を狂わせたからでしょ。私がそんなことをしなければ、あの二人は大丈夫だったのに。

死ぬことなかったのに。

ごめんなさい。

私なんか、何の価値もない。

もう死んでしまいたい。・・・」

ウルスラは、泣きながら、同じことを何度も言い続けた。

サーシャは、そういうウルスラをじっと抱いていた。

そして、言った。

「ありがとう、ウルスラ。

私のお母さんとお父さんのために、こんなに泣いてくれて、ありがとう。

本当にありがとう。

私ね、本当のお母さんとお父さんが亡くなったのに、いままで泣けなかったんだよ。

涙ひとつ流さない自分が、自分でも恐ろしかった。

そのくらい、心が凍ってたのね。

でも、あなたが泣いてくれたおかげで、私もお母さんとお父さんのために泣けそう。

ほら、もうこんなに……」

二人は、抱き合つて泣き続けた。

ずいぶん長い時間が経過した。

そのうち、ウルスラの泣き声が聞こえなくなった。サーシャの腕の中で眠ってしまったようだった。

「やっと、鎮静剤の効き目が出てきたようですね。眠つてしまいました。

もう大丈夫です。」

医師が静かに言った。

「ありがとうございます。先生。」

ブリッジに戻ったサーシャは、心配そうに見つめるヨット部員に向かって語り始めた。

「いったい、何から話そうかな。

今回の練習航海では、私のために帝国の反乱にみんなを巻き込んで、危険な目に合わせて、本当に、本当に、ごめんなさい。」

「何を言うの。サーシャのせいだなんて……」

「みんなには事情を説明しないといけないわね。

秘密にしていたことがいっぱいあったものね。



大半は、女王様と私の話や、公爵様と茉莉香さんの話の中で分かったと思うけど、一番大事なことは言ってなかったものね。

医務室でのウルスラとの話は、聞こえていたかしら。」

「詳しくは、聞いてないけど・・・。」

「あの狙撃事件で逃走した男女二人は、私の本当のお母さんとお父さんなの。

間違いないと思う。」

逃げた宇宙船に乗っていたのも、たぶんそう。」

「そんな！」

「そうよ。間違いないと思う。」

それで、私を生んだ本当のお母さんの名前は、ロツテ・ケストナー、お父さんの名前は、レイ・コルレオーネ。

そうよ、宇宙大学の伝説のカップルの姉夫婦の方よ。

お父さんは宇宙大学ではブライトベリーという姓を名乗っていたそうよ。」

「大変失礼なのですが、コルレオーネ姓というと、いわゆる・・・。」

ヒルデが聞いた。

「そうよ、いわゆる宇宙マフィアの大ボスよ。」

大ボスは世襲でね、お父さんはその大ボスの長男として生まれたの。」

私は、そのお父さんの三人目の子供として生まれたの。

サーシャ・ケストナー・コルレオーネが、私が生まれた時の名前よ。

それでね、お父さんは、宇宙マフィアの宿命から逃れるために、『時空トンネル』の研究をしようと、自分の身元が明らかになる危険も顧みず、宇宙大学へ入学したの。宇宙大学にある最新の研究データを手に入れるためにね。

そこで例の4人が知り合ったの。

それでも、結局、卒業直前に身元が分かかってしまい、命を狙われたの。

それで、お父さんは逃げるために、お母さんに別れを告げたの。

しかし、お母さんは一緒に生きる道を選んだの。」

「やっぱり、愛だね。さすが、伝説のカップル。」

「フッフ、そうね。」

でも、その後は、苦難の連続だったの。

公爵様にお味方して不法工作を行っていくうちに長男の兄が事故で死亡したの。

次男の兄は、時空トンネルの試作機に乗ってテストをしているときに、試作機が爆発して死亡したの。

その後、まだ子供だった私がパイロットとして試作機に乗って、開発を続けたの。

そういう兄たちの貴重な犠牲のおかげで、実験は成功したのだけだね。」

「マファイアとはいえ、大ボスのお嬢様だったのでしょ。そんな危ないことしなくても。」  
「いいえ。マファイアも、聖王家や宇宙海賊と同じよ。」

危ないことは率先して、ボスやその家族がやらないと誰もついてこないわよ。

そういうものよ。」

「先ほど、『宇宙マファイアの宿命』とおっしゃいましたけど、どういうことか、ご説明願えませんかでしょうか。」

それから、あの、マファイアいう失礼な言葉を使いましたが、どうかお許してください。」  
グリューエルが聞いた。

「ありがとう。グリューエルさんは、心遣いが素晴らしいわね。」

『宿命』か。

そうね、グリューエルさんの故郷セレニティ星系へたどり着いた祖先の移民船は、奇跡の七つ星を見つけて、宇宙開拓に成功したでしょう。」

でも、宇宙移民、宇宙開拓は成功例ばかりじゃなかったことはご存じでしょ。」

その失敗した船団や開拓民は、その後どうなったのか、ご存じかしら。」

「ええ！ そういうことなのですか？」

「そうよ。可住惑星探しに失敗し、あるいは開拓に失敗して、食料や資源が乏しくなった移民たちは、どうやって生き延びたのでしょうか。」

愛する家族や恋人を守るためには、どんなことでもしようという男たちが出てきても不思議ではないでしょ。

口にするのもおぞましい、凄惨な事件が数多く起こったそうよ。」

「そうですね。本で読んだことがあります。」

「そうして、彼らは、本物の海賊になったの。」

その後、宇宙社会で行き場をなくした人たちを受け入れて、組織は大きくなり、やがて、一族の本隊は、大船団をつくって銀河系の辺境や外延部を、隠れて旅をするようになったの。

そして、一部の人たちは、船団への資材や資源の補給を担当するために、銀河系の社会の中に身を隠して住むようになったのよ。

こちらの方が、やがて宇宙マフィアとして知られる存在になっていったのよ。

でも、一族の人にも家族がいて、子供たちが生まれる。

生まれた子供たちは、いったいどういう立場になるか、分かるでしょ。

もちろん、子供は一族の宝。子育ては一族のみんなが力を合わせて行っているし、教育だってきちんと行つた。

でも、子供たちは、銀河帝国の国民登録がないから、この世に存在しないはずの人間なのよ。

だから、普通に銀河系の社会の中で就職や生活ができないの。」

「え!? どうしてですか?」

親は親、子供は子供でしょ?」

「だって、昔ではあるけど、凄惨な事件を起こした加害者・犯罪者の子孫なのよ。」

その子孫たちは、今も、その事件の被害者や遺族の子孫からの追及を恐れながら、宇宙をさまよっているの。

初期のころには、辺境に自分達だけのコロニーを作って定住しようとしたこともあったらしいわ。でも、コロニーの存在が知られると、被害者の遺族の人たちが押しかけて、トラブルになったこともあったらしいわ。

だから、今も、宇宙をさまよって、旅をしているのよ。」

「そうなんですか。」

「そうなのよ。」

その後、さらに生き延びるために非合法的な活動を続けるから、いつまでも、その繰り返しから抜け出られない。

だから、生まれた子供は、非合法的な仕事につくしかないの。

結局、生まれながら犯罪者になるしかないという宿命を背負わされているの。

これが、『宇宙マフィアの宿命』よ。」

「子供たちから見れば、理不尽な話ですね。

女王陛下がおっしゃる通りです。

それで、一族の正式名称は、アマージグ族というのですね。」

グリユーエルが聞いた。

「そうよ。それは、宋主星に古代から存在する、誇りある民族の名前なの。

千年以上の間、異民族に支配され、バルバル人と呼ばれて蔑まれてきたにもかかわらず、決して誇りを失わなかった偉大な人たちなの。

かれらは、自分たちを『アマージグ』、高貴なる自由人という意味だそうだけど、そう呼んだそうよ。

一族の初期のリーダーの一人にその民族の出身者がいて、アマージグ族のように誇りを失わないで生きようと皆を励ましたそうよ。

それが一族の名前になったの。」

「そうなんですか。名前というものは、とても大切なのですね。

女王陛下がアマージグ族という言葉をお使いになったことは、とても大きな意味があるのですね。」

「そうね。一族の人は涙を流して喜んでいたわ。

私たちの気持ちを女王陛下が分かって下さったってね。」

「あのー、サーシャ先輩。私もお聞きしてもいいですか？」

一年生のジェシカ・ブルボンが言った。

「いいわよ。どうぞ。」

「私、小さいころ、クリスタル・スターにあるステープル家の御屋敷にお邪魔したことがあるんです。」

サーシャさんのお見舞いに、親に連れられて行っただんです。

もつとも、親は、お兄さん達に私を引き合わせる事が狙いだったようですがね。

あのー、聞きにくいことを聞いて大変失礼ですが、今までのお話からすると、先輩は、あのサーシャさんじゃないですね。

確かにあの子が元気になって成長すれば、先輩みたいな美しい人になるのかなって言うくらい、似ていらっしやるんですけど。」

「そう。あなた、やっぱり覚えていたのね。」

お母さんがあなたに気をつけなさいって、言っていた通りだわ。

さつきも言った通り、私はミーシャ・ケストナーとジョージ・ステープルの娘ではないの。

あなたの会ったサーシャが、二人の子供。つまり、伝説のカップルの妹夫婦の娘よ。」  
「やっぱり、入れ替わったんですね。」

それで、あの、もつと聞きにくい話なのですが、ダンス発表会の時に、先輩のことをクローン人間と言ってるお客様がいたんですよ。

『クローン人間でも、あれだけ美人なら許す』

なんて、ひどいこと言っていましたよ。

これは嘘ですよね」

「そうね。そう噂されているのは知っているわ。

私もステープル家の人たちも、噂を私の本当の身の上を隠すために利用してきたのだけどね。

でも、それは、当初、ステープル家の人たちが望んだことなの。重い遺伝病にかかったステープル家のサーシャを遺伝子操作でも何でも手段を選ばず助けたいと願って。

だから、宇宙大学の医学研究所に莫大な寄付をして、人間の遺伝子操作の研究を依頼したのよ。

これは、宇宙大学にとっても好都合だったらしいわ。

彼女の治療を大義名分に、人間の遺伝子操作に関する禁断の実験が、公然とできるわけだから。人間のクローン技術の研究は特に進んだらしいわ。

でも、結局、ステープル家のサーシャにとって、研究は間に合わず、彼女は死んだの。世間の人は、娘が重い遺伝病で死んだのはステープル重工業が作った武器で死んだ



人々の『呪い』だって、噂してたそうよ。

母さんは、泣き続けたそうよ。

この子が生まれた時にどんなに嬉しかったか、

遺伝病と知った時にせめて18歳までは生き延びさせてやりたかったと。

18歳になったら、屋敷でデビュー・パーティを開いて、大勢のお客さんと呼んで、この子の成人を華やかに祝ってあげたかったとね。」

「それで、ダンス発表会の時に、お母様はあんなに喜んでいらしたのですね。」

「そうよ。」

この頃は、やっぱり、二人のサーシャは別々の人間とは思えないって、言ってるの。

私と最初に会った時も、そう思ったそうだけど。」

「そんなに二人は似てるんですか?」

「外見だけじゃないのよ。」

私、ステープル家のサーシャが知っていたことは、ほとんど知ってるの。

彼女だけが知っているはずの、使用人さんたちとの内緒の約束も、秘密の宝物箱の鍵の開け方も。

だから、事情を知らない人は、それこそ、私がクローン人間である証拠だと思っただけよ。」

「ええ！本当ですか。」

「そうよ、たとえば、貴方がお見舞いに来てくれた時に何を頂いたか知ってるわよ。」

あなたは覚えてるかしら。」

「覚えてます。」

「チョコレートボンボンだったよね。あれを食べて、彼女は顔が熱いって言ったでしょ。」

でも彼女の一番のお気に入り、その入れ物だったの。ロイス&ロールス社製の宝石箱に入っていたのよね。」

秘密の宝箱として大切にしてたわ。」

今でも、海明星の屋敷の自分の部屋にあるわよ。」

「驚きました。どうしてそんなことを知っているんですか。」

「簡単なことよ。」

私たち、文通していたの。仮名で身元が分からないように、特別な方法で。」

きっかけは、サーシャの病気のことと悩んだお母さんが、失踪以来行方の知れないお姉さんに相談しようと、手紙を書いて、裏世界の人に託したことだそうよ。」

最初は、非合法でも何か良い薬とか、良い治療方法はないかという話だったそうだけど。」

それで、ある日、手紙の返事が来たそうよ。」

それで初めて姉さんにも、同じ年齢の、同じ名前の娘がいるってわかったの。

それなら、文通で、その子、つまり私に、ステープル家のサーシャの友達になってほしいと、母さんは頼んだそうよ。

だって、彼女は病気で学校にも行けず、外へ遊びにも行けず、いつも屋敷の部屋で暮らしていて、友達ができないわけだから。」

「そうだったんですか。」

でも、文通だなんて古代のやり方ですね。

今は、TV電話が普通じゃないですか。」

「茉莉香さんやチアキちゃんのうちと違って、宇宙マフィアは、合法の海賊じゃないのよ。電話番号もないし、私的な通信は艦隊の現在地を知られるから絶対禁止よ。」

でも、文通は楽しかったなあ。

お互いに、まったく暮らしが違っていて、驚きの連続だった。

だから、私は、お屋敷の暮らしにあこがれ、彼女は宇宙船で旅をする私の暮らしにあこがれたの。

お屋敷での華やかなパーティに、私も参加したくなったのよねえ。

私も、書いて良いって言われる範囲で詳しく宇宙船の暮らしを教えたいし、彼女もお屋敷での暮らしを詳しく教えてくれた。

彼女は、

『私がもう少し元気になったら、みんなに気づかれないように、お互いに入れ替わって遊ぼう』

って言ってた。文通は、その準備だつてね。

だから、なんでも知っているのよ。

まさか、本当にそういう夢がかなう日が来るとは、その時は思っていなかったけど。」「でも、サーシャさんが一族を離れたのは、お父様に追放されたからと、おっしやつてましたね。」

「そうよ。子供ながら、時空トンネル航法の宇宙船のパイロットとして実験を成功させたことで、一族の人が私を見る目が変わったの。」

『この子には幸運の女神がついている。』

『いや、この子こそ、幸運の女神だ。』

『この子を軍団長、やがて次の族長にして、銀河帝国を打ち負かそう。』ってね。」「恐ろしい事態ですな。」

王家の場合も、王を救世主のように国民が崇拜する事態が来た時が、実は王家にとって最大の危機だと教えられました。

だって、期待されるような奇跡を起こすことは容易ではありませんから。」

グリユーエルが言った。

「そうよね。グリユーエルさんは賢いね。そのとおりよ。」

私は、一族の人の期待に反して、戦争には絶対に反対だった。

『資源に劣る我々一族があゝの銀河帝国と戦って勝てるはずがない』、  
『戦えば一族は必ず滅びる』

と何度も父に言ったの。

子供でもわかることが、どうしても大人には分からないのだったね。

だって、私は父に連れて行ってもらった小惑星帯で、銀河帝国宇宙軍の演習を見たのよ。満天の星のような数の帝国の軍艦が間近に通り過ぎていく様子や、クイーン・オブ・パイレーツが備えているビーム兵器の破壊力の恐ろしさを見たのよ。

それを見た大人の私たちは、『銀河帝国の脅しには屈しない』って叫んで、興奮していたけど、そう叫ぶ人たちが私には怖かったのよ。」

「その気持ち、よくわかります。」

「ありがとう。」

それで、結局、私が意見を変えないことに困った父は、一族の人たちにはじめを示すために、私を追放したの。

もつとも、追放するための方法として、私を妹夫婦の養子として送り出すことにして

くれたのだけど。

身元を隠すため、私を孤児とし国民登録して、怪しげな孤児院によつて違法に売り買  
いされて施設を転々と移つていった子供を、今のお父さんとお母さんが、ある孤児院で  
偶然に見出したように装つてね。」

「その時は、とてもつらかつたでしようね。

でも、それは、ご両親が何よりも先輩の幸せを願つていたからですね。

そして、お父様は、族長として、一族の戦争ムードを冷却することも狙つていたので  
しようね。

私たちもセレニティの政争でそういう立場に立たされたことがあるので、先輩のお気  
持ちはよくわかります。」

ヒルデが言つた。

「そうですよね。

今になると、よくわかります。

でも、その時は本当に捨てられたと思つてつらかつたし、身元がばれないようにと、周  
りを見回して警戒ばかりしていたから。

ステープル家の父さんと母さんが帝都クリスタルスターから辺境の海明星に移り住  
んだのも、そういう事情があつたのよ。」

.....  
あまりの重苦しい話に、皆が沈黙してしまった。

「はい、はい、はい、グリューエルも、ヒルデも、難しい話はもうこの辺でやめなさいよ。サーシャも。あなたは王女様じゃないんだから、もつと気楽に女子高生やりなさいね。」

まだ、高校三年生は始まったばかりだよ。」

リリイが両手をたたいて、元氣よく言った。

しかし、リリイは無理に明るく振る舞っているようにも見えた。

そして、一瞬の沈黙の後、リリイは、サーシャを見つめて、言葉を継いだ。

「.....だから、さあ、反乱騒動もおさまったことだし、

サーシャも、私たちと一緒に海明星に帰るんだよね。

ねえ、帰るんでしょう？

そうだよね。.....」

「.....」

リリイの期待に反して、サーシャは何も答えず、沈黙した。

「私たち、これからずっと友達だよ。」

私はそう思っているよ。サーシャは大切な友達だよ。今までも、これからも。

サーシャが白鳳女学院大学の医学部へ行っても、私たちとまた遊べるよね。楽しくやれるよね。

また、これまでと同じように。ずっと、ずっと。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

やはりサーシャは何も答えなかった。

ヨット部員たちもようやくサーシャの真意を悟って、顔が青ざめた。

「・・・・・・・・まさか、・・・・・・・・まさか、

あの人たちと一緒に、『ヒガン』とかいう遠いところへ行ってしまうよね。今のサーシャの話を聞いていると、そんな気がしてきたんだ。

ねえ、行かないよね。

私たちと別れて、ひとりでどこかへ行ったりしないよね。・・・・・・・・」

リリイは、しだいに涙声になっていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

リリイの期待に反して、サーシャは何も答えず、沈黙を続けた。

「先輩、一緒に帰りましょう。」

先輩は私にこう言って励ましてくれたじゃないですか。

いっしょに医学部目指して頑張ろうって。」



ランバートが言った。

「まだ、ダンス発表会もあるよ。」

私たち前は男役だったから、まだ、一度もドレスで踊っていないんだよ。

サーシャもあの白いドレスで踊るところを、お母さんに見てもらわないといけないよ。

それが、お母さんの夢だったんでしょ。夢をかなえてあげようよ。」

ハラマキが言った。

「お父様もお母様も、あの美しいお屋敷で先輩のお帰りを待っていらつしやいますよ。」

サーシャさん。一緒に帰りましょう。」

ジエシカが言った。

「あなたの強い意思で、あなたが望む運命、あなたが望む幸せをつかみましょう。」

あなたの亡くなられたお母様も、そうなさったのでしよう。サーシャさん。」

グリユーエルが言った。

「.....」

サーシャは何も答えなかった。

ヨット部員たちには、重苦しい時間が続いたように感じられた。

やがて、サーシャが言った。

「みんな、ありがとう。そう言ってもらえて、うれしい。

私、ほんとに良い友達に恵まれているんだね。

わたしね、宇宙マフィアの大ボスの子供だという私の秘密が世間に明らかになっちゃったら、あの屋敷から出ていかなければならないと、ずっと前から思ってた。

そうしないと、お父さんにも、お母さんにも迷惑がかかると思ってた。

だから、必死で秘密を守ろうとしていたのよ。

いま、私の秘密を話しながら、今までの出来事を思い出してたの。

これで、もうお別れだと思いがら・・・。

でも、同時に涙が出てこない自分に驚いてたの。また心が凍っているのかなと思つて。」

「あなただって、本当は帰りたいでしょ。」

リリイが言った。

「・・・そうだよ。本当は。」

だって、あの屋敷での暮らしは、私はずーっと憧れてたものだから。

温かく輝く太陽、

澄み切った青い空、

かぐわしい大気、

緑あふれる広い庭、

遠くの青い山々、

木々を揺らす風の音、

明け方からの鳥の声、

雨上がりでにおい立つ草木、

緩やかだけど春夏秋冬の季節の移り変わりがあって・・・

宇宙船で生まれ育った私が憧れた、美しい世界があるんだよ。

とりわけ、毎年秋に、お気に入りのコートを着て、乾いた落ち葉をサクサクと踏みしめながら庭の並木道を散歩するのが、大好きだった。

そのころは、遠くに見える大通りのプラタナスの葉だけが色づいて、緑の濃い大地に黄色いリボンをかけるんだよ。

そういう時に、私、こんな美しい世界が永遠に続いてほしいから、空を見上げて、

『時間よ、止まれ!』

て、つぶやくんだよ。

それらすべてを失いたくなかったから。

ずっと、ずっと、ここで暮らしたかったから。

・・・

リリイはサーシャと抱き合って泣いていた。

「サーシャ、ずっといつしよだよ。」

「私、ここに居ていいのかなあ。いいのかなあ。」

「いいんだよ。」

「ありがとう。……」

私、秘密を守ろうと必死になっているうちに、自分がひとりではないことを見失って  
いたんだね。

みんなが、それを気づかせてくれたんだね。本当にありがとう。」

「いつしよに、海明星へ帰ろう。」

「うん。私も帰るよ、

みんなといつしよに。お母さんの待っている海明星に帰るよ。

なんたつて、私のうちだもの。」

「そうだよ。いつしよに帰ろうよ。」

これから、嫌なことも起こるかもしれないけど、私たちがいるから、良いこともきつ  
とたくさんあるよ。」

「ありがとう。そうだね。悪いことだけじゃないよね。」

悪いことが起きるからと言って、逃げちゃいけないよね。

グリユーエルさんに言われたように、大切なのは、強い意志だよね。

「やっぱり私は、帰ります。」

「うわー、よかった、よかった。」

「さあ、みんなで帰ろう。」

ヨット部員たちは、喜んで、声を上げた。

「そういえば、茉莉香とチアキちゃんが遅いわねえ。」

もう、とつくに戦闘は終わってるはずでしょ。

何をしているのかしら。」

「艦長、茉莉香とチアキさんは、どうなされているのですか？」

グリユーエルが言った。

ヨット部員のやり取りを黙って見つめていたミツキー艦長が言った。

「茉莉香は公爵の船に戻って、海賊しに行ったようだ。」

「ちゃんと海賊しないで、お宝探しかやるのは、けしからんと、公爵夫人に怒られたらしい。」

チアキは、化学兵器と生物兵器を浴びた防護服の除染がすんで、いま医師の診察をうけているそうだ。

「元気だそうだから、そのうち帰ってくるだろう。」

「なんですって！」

茉莉香、私たちに内緒で、海賊シヨールをするの？」

「友達なのに、誘ってくれないなんて、問題じゃないかしら、ねえ。」

「私たちも、また、参加させてもらえませんでしたね。」

海賊のコスプレ、したかったです。」

ヨット部員たちは、サーシャのことで安心したためか、一転して、加藤茉莉香と海賊シヨールの話題で盛り上がっていた。

8—2 帝国軍総司令部（クイーン・オブ・パイレーツ船内）

こちらは、クイーン・オブ・パイレーツの帝国軍総司令部。女王が医務将校から報告を受けていた。

「チアキ様におかれましては、化学兵器と生物兵器による影響はございません。」

ご安心ください。

ただ、診察した医師の報告では、チアキ様は流行性のウイルス感染症に罹っているとのことです。」

「ウイルス感染症だと？」

チアキは主要な生物兵器に対する抗体をすべて備えているはずであろう。

ほかにどんなウイルスに罹るといふのだ。」

「・・・兵器級の強毒性ウイルスに関しては、陛下のおつしやる通りでございます。」

しかし、チアキ様の罹っているのは、流行性耳下腺炎です。帝国の母親の言葉でいいますと『ウサギ熱』でございます。『おたふく風邪』と呼ぶ星もあるようです。」

「なんだ、ウサギ熱か。」

ウイルス感染症というから、どんな大病かと心配したぞ。

それにしても、17歳のチアキがどうしてそんな病気に罹るんだ。ふつう、小さい子供に罹る病気だろう。」

「とても大切に育てられたのでございましょう。」

ほかに、いくつかの子供の病気に対する抗体がないと診断されています。」

「それで、どうするのだ。そろそろ、海明星に帰って、学校に戻る頃であろう。」

「大人がウサギ熱に罹りますと、まれに重症化する場合もございしますので、嚴重な健康管理が必要かと存じます。」

念のため、3週間ほど入院をお勧めします。」

「そうか。フフフ。」

では、第二王宮にある帝国軍病院のセイント・ロイヤル・ルームへ入院させてやってくれ。

チアキも頑張ったから、ご褒美だ。少し休むとよい。」

「承知いたしました。」

8-3 機動空母グランド・マザー

機動空母グランド・マザーのブリッジに、クリステイア王女が戻ってきた。

「やあ、みんなにも心配かけてすまなかつたね。先ほど、ウルスラを見舞いに行ってきたが、もう大丈夫だ。グランドマザーの船内病院に移されて、グーグー寝てるよ。」

さて、練習航海の予定が大幅に狂ってしまったが、そろそろ帰らないとね。

「この船で海明星まで送っていくから、安心してくれ。」

「はい。それで、先生、いや王女殿下におかれましては大勝利おめでとうございます。」

「ああ、ありがとうございます。」

「あとう、先生。」リリイが聞いた。

「先生は、先生として、もう白鳳女学院には戻られないのですよね。王女様としてのお仕事を始められるのですか？」

「ああ、そういうことになるかな。」

「残念です。もつといろいろ教えてほしかったです。」

「先生のおかげで、大冒険の練習航海になりましたしね。海賊王女の儀式は、貴重な経験でした。ありがとうございます。」

「そういつてくれると、名残惜しいね。」



・・・うん、やはり、私もこの船に乗って、海明星まで見送ろう。

それまでの間、今までのように楽しくお前たちと過ごすことができるだろう。」

「わーい！」

「それじゃあ、まず、先生とみんなでお茶にしましょう。ね、みんな。」

ハラマキが言った。

「私、おながが空いてきました。モーレッツに。」

「お茶と言えば、私、原田先輩の焼いたスコーンが食べたいです。」

一年生たちが言った。

「わかったよ。ドーンと、任せといて。ドーンと。」

「ははは・・・」笑い声が弾んだ。

クリスティア王女とヨット部員は、ブリッジから、元の来客用の区画に帰って行った。

クリスティア王女とヨット部員が、お茶を飲みながら、わいわいと練習航海中のエピソードで盛り上がっていると、茉莉香が帰ってきた。

「やあ、みんな、楽しそうだね。」

「茉莉香！聞いたよ。」

「何よ。海賊ショーをやるなら、私たちを誘ってくれてもよかったじゃない。」

「茉莉香！聞いたよ。」

リリイが言った。

「ええ？」

「海賊してたんでしょ。」

「ああ、あれねえ。へへへ、もう終わっちゃいました。」

茉莉香はその話には触れたくないようだった。

「それより、チアキちゃんとウルスラは、どうしたの。」茉莉香が聞いた。

「ウルスラは、この船の病院で疲れ切って寝てる。」

チアキちゃんはまだ帰ってこないね。遅いね。」

「チアキは確かに遅い。聞いてみよう。」

クリスティア王女がブリッジに電話をかけて、様子を聞いた。

「フフフ……、遅い訳が分かった。」

チアキは、ウサギ熱に罹っているそうさ。

念のため、病院に入院するので、既にそちらへ向かったそうさ。

これでは、チアキは帰るのが遅れそうだなあ。」

「ええ？ウサギ熱ですって？」

「いやだあ。キャハハハ……」

「ウサギ熱なんて、幼稚園児の罹る病気じゃないですか。」

「高三の女子高生が罹る病気じゃないですよ。」

一年生たちが笑った。

8-4 たう星系宙域

「まもなく、たう星系軍の錨泊宙域付近の、通常空間に復帰します。」

機動空母グランドマザーは、時空トンネルを出て、たう星系に到達した。

付近の宙域では、銀河帝国の最新の時空トンネル航法で現れるところを見ようと、たう星系軍関係者が見守っていた。

「すごい。新航法は、まったくすごい。」

こんな大きな船が、レッド・クリスタル星系から数時間でここまで来ることができるのか。時空震やブレドライブ現象も想像以上に微弱で、スムーズだ。」

「やはり、新航法はもう完成段階だ。」

実戦で使用されたというのも、当然だ。」

「これで、帝国軍の機動力は、銀河系全体を自分の庭に変えてしまう程に向上したことになりますね。」

もう、銀河帝国と誰も戦争なんかできませんね。」

「まったくくだ。それにしても、大きい母船だなあ。どれだけの軍艦を収納しているのだろうか。」

加えて、重力波砲とかいう大量破壊兵器も装備しているそうだ。」

「この船一隻で、我がたう星系軍の軍事力を上回るのには間違いないですね。」

星系軍関係者が呆れている間に、空母の中から弁天丸が現れ、出航して行つた。

さらに、白鳳女学院のオデットⅡ世号も空母の中から現れ、出航した。

8—5 オデットⅡ世号ブリッジ

オデットⅡ世号船長の加藤茉莉香は、号令をかけた。

「さあ、中継ステーションに帰るよ。オデットⅡ世号、全マストを開いて、全速前進。」

「了解。」

「あー、帰つたら試験か。」

「私、このままでは、赤点で追試かなあ。それにしても、おなかすいた。」

元気になったウルスラが、元気のないことを言った。

「追試なんか気にしない。大事なのは、夏休みだよ。」リライが言った。

その時、オデットⅡ世号の警報が鳴つた。

「なに？何が起こつたの？」

茉莉香が驚いたが、どうも驚いているのは茉莉香だけだった。

「船長、密航者です。」

「ええー！ どこにいるの。」

「船長室で紅茶をお飲みになっていきます。」ヒルデが言った。

「え？ その言葉使いつてことは、まさか、王女様？」

「フフフ、当たり前・・・。」リライが言った。

「えー！ みんな知ってたの。それじゃあ、私だけ知らなかったの。それはないでしょ。ひどいよ。」

「フフフ、だって、船長さんまでご存じでしたら、密航になりませんかでしょ。」

グリユーエルが言った。

「それより、帝国軍へ、グラントマザーへの連絡を急いで。王女様がこっちにいるって。」

「大丈夫ですよ。打ち合わせ済みです。」

「ええー？ なにそれ。」

茉莉香が少し怒っていると、クリスティア王女がブリッジに現れた。

「まあまあ、茉莉香、そんなに怒るな。」

この前、お茶を飲んでいるときに、グリユーエルとヒルデから密航したときの話を聞いてねえー。スリル満点だそうだから、やってみたくなくなっただけ。」

「それはないでしょ、王女様。」

『かくれんぼ』じゃないんですよ。立派な航海法違反です。」

茉莉香はまだ怒っていた。

その時、白鳳女学院のWEB掲示板を閲覧していたハラマキが言った。

「やったー！ 帝国の反乱騒動で学校が休校になっている。

だから、期末試験は、希望すればレポート提出に替えられることになってるよ。」

「やったー！ 試験なし。ラッキー。」

ヨット部員全員が、歓声を上げた。

その時、王女が言った。

「そのことだが、練習航海の出発前から校長先生に言われていたことがあってね。

ヨット部員には出席日数に問題のある生徒が多いので、卒業や進級に支障のないように、全員、夏休みのほぼ全日にわたって、特別に補習授業を受けるようにと言われてた。

その後に、試験も行うそうさ。

だから、お前たちは、レポート提出は選択できない。」

「ええ!? 夏休みがすべて補習に……そんな。」

「もともと、お前たちにだけ特別に計らってくれたのだからね、校長先生によくお礼を言いなさい。」

特別補習授業は、このたびの休校措置と関係はなく行うそうさ。

もつとも、校長先生の話だと、茉莉香やヒルデが補習授業を受けると聞いて、他の生

徒の間でも、レポート提出ではなく、補習授業を希望する者が多いそうだ。

もちろん、これで、茉莉香も出席日数の心配がなくなるぞ。」

「いやあ、それを言われると弱いなあ・・・。」

茉莉香が言った。

「あ、でも・・・。」

まさか、先生、それを伝えるためにわざわざ密航してきたのですか。

実は言い忘れていたのだったりして・・・。」

茉莉香がにらんだ。

「いや、そんなことはない。断じて、ない。」

練習航海中には、いつか言わなければならないと思っていたけど・・・。」

「何、言ってるんですか。もう練習航海は終わりじゃないですか。」

「いやー、みんな、練習航海を楽しんでいて、

試験のことなんか心配していなかったし、

夏休みが無くなると聞いてガツカリさせるのも気の毒で、

なかなか言い出しにくくて・・・。」

アハハハ。」

「もう~~~~、練習航海では秘密は無しだと、約束してたじゃないですか。」

「そんな約束はしていないぞ、茉莉香。

秘密と言っても、これは、航海の安全にかかわる秘密ではないからなあ、

アハハハ・・・。」

「ああ〜、やつぱり、夏休みが・・・。マミ、チアキちゃん、助けて〜〜〜。」

茉莉香の小さい悲鳴にもかかわらず、オデットII世号は、無事、中継ステーションに到着し、波乱万丈の練習航海は終了した。



## 第九章 チアキのウサギ熱

9—1 白鳳女学院（海明星）

海明星に帰つてからは、ヨット部員は何事もなかつたように、以前と変わらず、彼女達にしては静かに学園生活を送っていた。チアキはまだ入院から帰つて来ない。

放課後の部室では、以前と同じようにおしやべりの花が咲いていた。

「それで、あのおう、ウサギ熱って、どういう病気なのでしょう。私たちにはよくわかりません。」

ヒルデが聞いた。

「ウサギ熱は、医学的には流行性耳下腺炎とよばれるウイルス感染症ですよ。セレニティではどう言う名前と呼ばれているのでしょうか。ひよつとして、ヒルデさんは罹つたことがないのですか？」

サーシャが言った。

「そうですね。罹つたことはありません。」

「私も同じです。セレニティでは、王族に対する予防接種は、細菌兵器対策も兼ねて、かなり厳重に行われますから、おそらく抗体ができているのでしょね。」

でも、なぜ、ウサギ熱という名前で呼ばれるのですか？

まさか、本当に耳が伸びる病気があるのですか？」

グリユーエルが言った。

「ハハハ、まさか。そんな病気ではないですよ。あの、それはですねえ……」

帝都に暮らした経験のあるジェシカ・ブルボンが言った。

「この病気は、耳の下が腫れあがるので、保冷剤で冷やす必要があります。そうしておけば、普通一週間くらいで治るんです。」

それで、その保冷剤を固定するためにあごから頭の上まで布を巻いて縛るのですが、その布の結び目を頭の上で作るんです。これがポイントなんです。

その結び目を作った後に、布の端をピンと立てて動物の耳のようになると、幼稚園くらいの小さな子供は、まるでウサギとか小熊とかの小動物になったように、とても可愛く見えるんです。

そのため、昔、これが帝都の若い母親に大流行したんですよ。特に子供が女の子の場合、ウサギの耳のようにかわいくしようと、みんな腕を競ったそうです。」

ジェシカは、頭の上に両手を乗せて指を立て、ウサギの耳のポーズをした。

「なるほど、それは可愛いでしょうね。それで、ウサギ熱というのですね。」

「そうです。ウサギは幸運のシンボルですから、子供の幸せを祈るという意味もありま

す。それが、どんどんエスカレートして、縛った布に装着するウサギの耳セットが売りに出されまして、これもまた大人気。

私の幼稚園時代の写真にも、ウサギの耳をつけて母親の膝の上で抱かれているものがありますよ。幼児の私は熱で気分が悪そうなのに、母親はニコニコ喜んで写真に写っているんですよ。

ホントに、うちの母はバカ親です。

さらに最近では、ウサギの着ぐるみを子供に着せるバカ親もいるそうです。「そう言っている、ジェシカの顔は、とてもうれしそうだった。」

「ウフフフ……。なるほど、楽しそうなお話ですね。」グリユーエルが言った。

### 9-2 銀河帝国第二王宮 帝国軍病院

チアキは、ウサギ熱の治療のため、スカレットに付き添われて、入院した。

入院先は、銀河帝国の第二王宮にある帝国軍病院のセイント・ローヤル・ルーム2号室である。その名前のとおり、王族専用の病室である。ベッドのある部屋のほかに、食堂も兼ねた居間や客間が三つ、このほか、治療室、従者用の大きな控室もあり、内装も豪華である。

最初の数日間、チアキは、ウサギ熱のため、高熱でぼーとして何も考えられず、ほと

んどベッドで眠って過ごした。戦闘での疲労の影響もあったのだろう。

もちろんチアキは、ウサギ熱対策の保冷剤を当てるため、あごの下から頭の上まで白い布で縛られた姿である。

だが、その後は疲れが取れたのか、熱が続いているものの気分が少し良くなり、目が覚めてきた。

そして、チアキはベッドに横たわりながら、練習航海中のいろいろな出来事を思い出していた。

茉莉香について銀河帝国に行ってクリステイアの副官になったこと、  
女王陛下に会ったこと、

帝国海賊のキャプテンに任せられスカレットが従者となったこと、

そして、グランド・クロスⅡのパイロットになって戦ったこと、

白兵戦で自分を守って大勢の人が死んだこと・・・

とりわけ、白兵戦で死体を目の前にした時の感覚は、自分にとって二重の驚きであった。

もちろん、焼けて破裂した死体を目にしたショックは大きかった。

しかし、一方で、心のどこかに既視感があつて、冷静でいられたことに、自分でも驚いていた。

『こんなこと、前にもあったのだろうか。．．．』

チアキは、自分の小さい時の思い出を遡っていった。

『そうか、バルバルーサか。．．．』

父のケンジョーと、副長ノーラを始めとするクルーたちによつて、いつも、あの帝国海賊たちのように命がけの気迫で、自分は大切に守られていたような気がする。』

と、チアキは、既視感の正体にたどりついた。

『今度、おやじに会つたら、今まで大事に育ててもらつたお礼を言おうかな。』

この秋には18歳の誕生日を迎えるからね。

それにしても、いよいよ大人かなあ。実感がわかないけどなあ。』

チアキが、そんなことを考えていると、スカーレットが大きな花瓶に赤い薔薇の花をいっぱい挿して持ってきた。

「お目覚めですか。」

今日も、ドリトル様から薔薇の花束が届きましたよ。」

「エドワードさんから？ 今日も？」

「はい。お嬢様が入院されてから、毎日届いています。」

ほら、同じような花束が、向こうの部屋の花瓶にも、ここにもございますよ。

やっぱり、眠っておられたから、気づいておられなかったんですね。

いかがですか、こんなにいい香りが・・・」

スカーレットは、ベッドを起こしてチアキに花瓶を近づけた。

「そうね。良い香り。・・・お礼を言わないといけないわ。」

「はい、面会のお申し込みもいただいています。」

「ご気分がすぐれないようでしたら、電話でもよろしいかと存じますが。」

チアキは会おうと思つたが、すぐに否定した。

「だめだめ。私、ほら、この通り、パジャマでしょ。男の方の前に出るといふのに、着る

ものがないわよ。お風呂にも入つてないし、髪も梳かしてないし・・・ああもう。」

「そうですね。お急ぎにならなくとも。」

でも、お嬢様がお目覚めになつたらすぐにお呼びしないといけない方もございませ

て・・・。」

「だれ?・・・」

チアキが聞いた。その時、病室のドアが開いて、誰かが入つてきた。

「チアキ、見舞いに来たよ。気分がよくなつたそうだな。熱の方はどうかかな。」

突然、女王陛下が現れた。

医師と女官長だけを連れて、いかにもお忍びという雰囲気である。

チアキがあわてていると、女王はチアキの額に手をあてて、熱をみた。

「ふうーん。まだ熱があるなあ。．．．フッフ、間に合った。」

女王は、意味ありげに笑って、女官長の方を見た。

女官長は、自ら両手にたくさんの箱を入れた包みをぶら下げており、それをベッドサイドのテーブルに置いて、そのうちの一つの箱を手にした。

「最初は、やはり、白でしようか。」

「そうだな。」

女官長の手から何か白くてふわふわしたものゝ女王の手に渡され、さつとチアキの頭に取り付けられた。

チアキは、ヘアバンドのようなものが頭に取り付けられたような気がした。

「うん、うん。やっぱりチアキは可愛いなあ。」

うん、うん。よく似合う。

スカーレット、鏡を持ってきてくれ。チアキにも見せてやろう。

どうだ、チアキ。可愛いだろう。」

鏡の向こうには、白いウサギの耳をつけたチアキの顔と、チアキの肩を抱いて体を寄せ満面の笑みをうかべている女王の顔があった。

「お前は小さい時に母親と生き別れたそうだな。」

だから、ウサギ熱にかかっても、ウサギの耳をつけて子供の幸せを祈ってくれる者が

いないと思つてねえ。

私が代りに、チアキの幸せを祈つてあげようと思つたのさ。」

「はあ……」

チアキは、自分でも、ウサギの耳をつけた姿は結構かわいいと思つた。

しかし、これが、本当の母親がやることなら、

『いい年をした娘に、何てカツコウをさせるんだ』

と、怒つてすぐに外してしまふだろうと自分でも思つた。

しかし、本当のところ、チアキは少しうれしかった。

女王の言うとおり、お母さんがいたら、小さい時の自分にもこうしてくれたのではないかと想像したからだった。

「さあ、スカーレット。写真を撮つてくれ。記念写真だ。」

「承知しました。」

チアキが嬉しそうなので、気を良くした女王は、さらに箱の中から次々と「耳」を取り出した。耳は、ピンクや青や黄色など、色とりどりだった。

そして、女王は、チアキにこれらの耳をつけさせ、二人の記念写真を次々撮つた。

「本当によろしいのですか……」

と言つて女官長が最後の箱から取り出したのは、黒い耳だった。



「これが一番似合うと思うけどなあ……。」

女王はそう言つて、チアキの頭に黒い耳をつけた。

「これは、……例の……。」

確かに、鏡で見ると、黒い耳は色白のチアキの顔にとてもよく似合っているが、それは年頃の娘のコスプレのような気がした。

「これには、着ぐるみの衣装がセットでついているんだが、これもどうだ……。」

女王は微妙な言葉づかいで言つたが、チアキにはその正体はすぐにわかつた。黒のレオタードに黒くて丸いウサギのしっぽがついたもの、蝶ネクタイ、付襟、網タイツ……

チアキはそれを着た自分の姿を想像し顔を赤くして、言つた。

「絶対、イヤです。ウサギ熱と関係ありません。」

「ハハハ、やつぱりそうか。残念。」

その後も、女王はとても機嫌よくチアキと話した。

最近の王宮での出来事、特にクリスティア王女がついに王宮主催のパーティに出席し、経済界や政府・軍の要人と懇談したり、若い男性たちとダンスを踊つたことを嬉しそうに話した。

「お前のおかげだな。あいつはずいぶん大人になつたよ。本当に礼を言う。」

「私からも、お礼を言わせていただきます。」

白鳳女学院のパーティで踊ったとお聞きしていましたが、王宮のパーティやダンスでも、本당にご立派に振る舞っておられるお姿を實際に拝見し、感激いたしました。

王宮の女官たちは皆、お嬢様に感謝いたしております。」

女官長も丁寧な礼を言い、チアキに深々と頭を下げた。

「ど、ど、どういたしまして．．．。」

チアキも慌てて頭を下げた。

また、女王は、薔薇の花束を誰がチアキに送っているかも知っていた。

「この病室は王宮の中にあるからね。」

毎朝、毎朝、王宮の廊下を花屋の配達人がとても大きくて立派な赤い薔薇の花束を持って歩いているので、誰からの誰への贈り物だろうかと、評判になっていたそうだ。」

女王が本當に嬉しそうに笑っていた。

女王が帰ったあと、チアキは黒いウサギの耳をつけて、鏡に自分の顔を写してみた。

「ゴッ、チヨットいじると、かわいいかなあ。」

チアキは、片方の黒いウサギの耳を途中から折って見た。そして、鏡に向かってウインクしてみた。

チアキは鏡に映る自分を見ながら、何処かにいる自分の母親に向かって言った。

『私、ちよつとかわいいでしょう。誉めてやっても良いでしょ、ねえ、おかあさん。』

その時、電話が入った。

チアキは、電話がクリスティア王女からと知って、あわててウサギの耳を外した。「元気になったのか。よかったね。」

チアキが少し元気になったと聞いたので電話したのだが、その通りだったね。」

「はい。まだ熱はあるのですが、気分が良くなってきました。」

「それは、よかったね。」

それで、お前の副官としての予定が入っているので、伝えたいと思って電話した。

まず、出張がひとつ。

ブルドッグ宇宙開発株式会社が開発した星系が、ブルック星系王国として帝国内で自治を認められることになったが、来月に、むこうでその条約調印式がある。

それに帝国代表として私が行けと母上から命じられた。

茉莉香とチアキも一緒にね。

それから、王宮のパーティだが、一度くらい茉莉香とチアキも出席させたいと思っている。しかし、茉莉香は仕事があつてなかなか都合が合わない。お前だけでも出席してほしい。

母上は、茉莉香は忙しいのなら仕方ないが、チアキは是非出なさいと言っておられる。ただし、チアキの出席するパーティの開催は、チアキの18歳の誕生日が済んでか

らにするようにとも言っておられる。

これは、お前の成人としてのデビュー・パーティーにしたいという母上の配慮だね。ぜひ出なさい。

もちろんドレスとかアクセサリーなどの準備は心配無用だ。母上が、フランソワに最高の品々をそろえるように頼んだそうさ。

母上も楽しみにしていたよ。

それと、ダンスのお相手も選んでおいたから。もちろん、母上も了解済みだ。」

「ええ、お相手って、なんですか？」

「??? お前、ダンスパーティーに一人で行くつもりか？」

ダンスというものは、ふつう、しかるべき男性に誘われて、踊るものだろう。」

言われてみれば、そうだった。

しかし、王宮のパーティーで踊ってもらえるような人と言えば、チアキには心当たりがなかった。

いや、一人なら、心当たりがない訳ではないが、誘ってもらえるとは思えなかった。

「そんな大事なこと、私に相談もなく、勝手に決めないで下さいよ。」

それで、その方はどなたですか。もちろん、微妙な人ならお断りしますよ。」

「それは大丈夫。お前も以前に踊ったことがある人だ。白鳳女学院のパーティーで。」

「え!？」

チアキは、心臓が止まりそうなくらい驚いた。

「エドワード・ドリトルだよ。薔薇の花束の送り主。お前も文句ないだろう。」

「……………」

チアキは顔を赤くして、返事ができなかつた。

そして、話をそらすためにこう言つた。

「それで、フランソワつて誰ですか?」

「フランソワは、フランソワ・シャネルに決まっているだろう。コツキー・シャネルの母親だ。母上がいつも服を頼んでいるデザイナーだ。」

チアキの入院中に、採寸して、ドレスのデザインも決めなければならぬから、明日にでも向こうから連絡があるだろう。」

「そんなすごい人が……………」

「私は、コツキー・シャネルの方が、若いお前の感覚に会っていると思うのだが、母上がフランソワだと言ひ張るので……………。お前が嫌なら、別だが……………」

それと、普段着もついでに頼みなさい。

母上も、チアキの病室のクローゼットには、女子高と帝国軍の制服が一着づつ入つて  
いるだけだつたと嘆いていたからな。」

こうして、チアキの入院生活は、あわたたしく過ぎて行った。

### 9-3 白鳳女学院（海明星）

チアキが遅れて海明星に帰ってきてから、ヨット部員は何事もなかったように、以前と変わらず、彼女達としては静かに学園生活を送っていた。夏休みの補習には、みな仲良く出席し、やがて2学期が始まった。

部室でのおしゃべりも以前と変わらず楽しいものだったが、練習航海の時の話題はあまり出なかった。茉莉香もチアキも後で事情を聞かされ、みな、サーシャに気を使って、何事もなかったようにふるまっていた。

しかし、学校以外では、チアキの生活は大きく変わった。

まず第一に、スカーレットがチアキ付きの第一艦隊司令官の秘書官として海明星についてきた。それだけではなく、帝国海賊の男たちが帝国軍の警備スタッフとしてチアキの下に配置された。

これらは、帝国軍から、グランドクロスⅡのパイロットとして反乱軍と戦った実績が認められ、帝国軍の中佐、第一艦隊司令官の副官という高級士官の地位にふさわしい警備等の処遇が実施されたためと思われた。

特に、チアキの場合は、帝国海賊のキャプテンの位を授けられてはいるが、まだ自分の船は持たず、また、海賊船バルバルーサ船長の娘といっても、チアキ自身にはスタッ

フがついていないための措置であった。もちろん、茉莉香の場合は、弁天丸の船長として自分の船を持ち、船長の警備は弁天丸の判断に任せられている。

第二に、住むところも変わった。それまで、チアキの宿泊先は、転校してくるたびに違い、ホテルや賃貸マンションだった。いずれも、父ケンジョーが手配した、相当に高度なセキュリティが確保されたところだったが、スカーレットと同居できる所ではなかった。

結局、警備の都合上、クリスティア王女の時と同様に、サーシャの家に下宿させてもらうことになった。従者の部屋もついたスイートルームがあり、警備部隊が常駐するスペースもあるためだ。

第三の変化として、海明星に帰って以来、茉莉香とチアキに対しては、放課後や休日の時間を利用して、副官としての教育が本格的に始められていた。教育と言っても、帝都と海明星を結ぶ超光速回線を使ったマンツーマンのTV講義形式が中心であった。

こうして二人はますます多忙な日々を送っていた。

他の三年生も秋になると受験勉強が本格化し、クラブ活動は休業状態になり、顔を合わせることも少なくなる。猛者揃いのヨット部員といえども、三年生となると多忙な日々を過ごしている。

そういう多忙な日々の中、茉莉香とチアキは、久しぶりに部室で顔を合わせた。

「チアキちゃん、久しぶり。」

「久しぶりって、部活はともかく、授業では、ほぼ毎日、顔を合わせてるわよ。」

ところで、茉莉香。副官見習いの勉強って、二人一緒にやるのかと思っていたけど、結局、別々になっちゃったのね。」

「そうだね。ちよつと、寂しいよねえ。」

私の方が弁天丸の仕事が入って、なかなか一緒に講義を受ける時間がないためかなあ。ゴメンなさいね。」

「まあ、それは、お互い様ってことで、気にしないんだけど。」

もつとも、私の方は、『バルバルーサの仕事は大丈夫だから、副官の勉強に専念しろ』とオヤジが言うので、このごろ、講義漬けなだけどね。」

「講義はどこまで進んでいるの？ チアキちゃん」

「一般的なガイダンスが終わって、歴史の講義に入ったところ。聖王家が絡んだ政治や軍事が中心ね。」

ほかに王宮の作法・慣例の講義も始まった。」

「なんか、私と少し違うわね。」

やっぱり、チアキちゃんは、王宮の人たちに頼りにされているんだね。この間の戦闘以来かなあ、一緒に戦って王女様との距離もぐつと近くなったというか。



私の方はね、一般的なガイダンスが終わってからは、弁天丸の船長として直ちに必要なこと、帝国軍の作戦計画、艦隊編成、艦船の運用とか、実務的なところから始まるよ。」

「そうだね、少し違ってるね。」

もともと、私は茉莉香ひとりで銀河帝国に行かせるわけにはいかないと思つて王女の副官になることを承知したわけですよ。

だから、その後も二人一緒だと思つていたけど。

でも、ふたりの役割が違うなんて、言われてないよねえ。」

そこへ、グリューエルとヒルデが、会話に加わつた。

「三年生のほかのみなさんは、お勉強ですか。お顔が見えませんかえ。」

グリューエルが言った。

「サーシャとウルスラは受験勉強の真最中。部屋に立ち寄るヒマはないみたいね。医学部目指すサーシャが、勉強で大変なのは分かるけど……。」

まさか、ウルスラまで受験勉強とはねえ。

練習航海で一番変わったのは、あの子ね。」リリイが言った。

「そうですね。帝国軍士官学校を受験されることになるとは、驚きでしたね。」

「そうよ、この間までは、白鳳女学院大学入つても、みんなでまたヨット部入つて、また

海賊しようって言っていたのにねえ。」

リリイが少し寂しそうな表情で言った。

「やっぱり、グランドクロスⅡのパイロットの適性者は、銀河帝国も手放したくないんでしようね。」

グリユーエルが真剣な表情で言った。

「だったら、勉強しなくとも合格確実なのにねえ。」

ウルスラの話だと、ミッキー艦長が家庭教師までつけて勉強させているそうよ。

私が推薦状を書いた受験生が、筆記テストはビリなんて許さないって。」

「フフフ、さすが元士官学校の教官。ウルスラのことよくわかってるね。」

チアキが言った。

「あのー、まさか、その家庭教師とは、あの方ですか？」

グリユーエルが言った

「それで、ウルスラさんが急に勉強熱心になられたのでしょうか。」

ヒルデも、身乗り出して言った。

「グリユーエルもヒルデも、なかなか鋭いわねえ。女のカンが冴えてるわよ。」

ウルスラは言わないけど、私もそうだと睨んでいるのよ。フフフ……」

リリイも身乗り出して言った。

「え、なに？ ウルスラがどうかしたの？」

「茉莉香、あなた、女のカン、鈍すぎよ。」

「この頃のウルスラを見てたらわかるでしょ。」

「え!?!」

「ところで、茉莉香。あなたの講義の講師って誰？」

「まさかギルバートさんじゃないでしょうね。」

「え……! どうして知ってるの……」

「茉莉香は少し顔を赤くして、口ごもった。」

「凶星みたいね。ふ~~~~ん、それで、どうなってるの。」

「リリイが身を乗り出して聞いてきた。」

「だから、さつきも言ったように、帝国軍の船長としての基礎を……」

「リリイは、キョトンとしている茉莉香の顔をじつとのぞきこんで、ため息をついて、言った。」

「はあ……相変わらず、見込み無しだなあ、茉莉香は。」

「リリイはあきれた顔をしている。」

「私たちは、そういうことをお聞きしているんじゃないやありませんよ。」

「もう、茉莉香さんったら。」

グリユーエルが笑った。

「それで、茉莉香は進学するの？」

王女様の副官と弁天丸の船長は、続けるんでしょ。」

「そつちは続けるんだけど、進学はどうもねえ、ぴつたりくるところがないのよねえ。

白鳳女学院大学は帝都から通うのは無理だし、帝国軍士官学校は全寮制だし、帝国女学院はちよつと雰囲気が私に合わないというか……。」

「そうか、難しいねえ、茉莉香の場合は。」

チアキちゃんは、どうなの。帝国女学院なの？」リリイが言った。

「私も茉莉香と同じで、迷っているのよねえ。」

そうは言ったものの、チアキは、結局自分は帝国女学院に進学するだろうと思つていた。むしろ、茉莉香がそう思つていないことが意外だった。

おしやべりが一段落すると、ヨット部の三年生たちは、足早に帰り始めた。

グリユーエルとヒルデは下級生のヨット訓練に加わるため、部室に残った。

今年もネビュラカップの時期が近づいている。三年生は、昨年の優勝者であるチアキも含め全員がヨット部内の選手選考レースを辞退したので、二年生以下の部員にとつてチャンス到来と、練習は熱気を帯びていた。

チアキは、校庭に出て、澄み切った秋空を見上げて思つた。

『もう秋かあ。卒業しても茉莉香と一緒に広い海を渡っていけると思っていたけど、なんか少し進路が違ってきたかなあ。』

そういえば、私も練習航海でいろんなことがあったものね。私の場合は、ウルスラが進路相談をしてきたことから、すべてが始まったのかなあ。』

チアキは、練習航海でのある出来事を思い出していた。

9—4 「ゲームセンター」(機動空母グランドマザー船内)

ウルスラは、練習航海中に行ったシユミレーター・ゲームの成績が極めて良かった。

これを見たミツキー艦長は、ウルスラに帝国軍士官学校への進学を勧めた。

そこで、その気になったウルスラが、『帝国軍士官学校に入って、パイロットになりたいたいんだけど、どう思うか・・・。』とチアキに相談してきたのである。

二人は、消灯時間後に、ゲームセンターの隅で話していた。

「ねえ、チアキちゃん。私も、チアキちゃんも、宇宙船の中で生まれ育ったでしょ。」

宇宙船の中で生まれ育った子供は、宇宙船の操縦に欠かせない特別な能力を持っていると言うけれど、本当かなあ。」

「何よ。そんなの、聞いたことがないわよ。」

誰よ、そんなことを言っているの?」

「ミッキー艦長が言っている。

私にはそういう能力もあるから、パイロットに向いているって。

だから、帝国軍士官学校への推薦状を書いてやるから、受験しろって。」

この時代は、帝国軍士官学校を受験するには、帝国軍士官の書いた推薦状が少なくとも一通、必要とされていた。

「変ねえ。どういうことかしら。」

「実はねえ、この前、眠れなかったから、夜中の消灯時間に起きて、内緒でこのゲームセンターに来て、船のシミュレーターで遊んでいたんだ。

そうしたら、ミッキー艦長が突然やってきて、

『そんなに上手なら、こっちのマシンで遊んでみないか』

と誘われたんだ。」

「まさか、それ、透明な球形のヤツじゃないの。あれは危険な機械だと、クリス先生が言ってたけど。」

「それだよ。それに乗って、宇宙戦争のシューティングゲームをやったんだ。

でも、チョー・カンタンだった。あつという間にクリアした。

それで、ミッキー艦長が『じゃあ、このレベルならどうだ。目を回すなよ。』  
って言って、レベルを上げたゲームも結局、クリアしたんだ。」

ハイレベルのゲームは、面白かったなあ。超光速で、こっちからあっちへとジグザグにジャンプしながら、しかも上下逆さまとか、変な姿勢でタツチダウンして、その瞬間に射撃をするというやつだったよ。」

「ええ？ どういうこと。そんな動きを要求されるゲームなんか、知らないわよ。」  
「あのゲームの面白さは、口ではこれ以上うまく説明できないなあ。」

なんか、自分が別の人間になったような、不思議な感じがして……。  
「どうかなあ、チアキちゃんもやってみない。」

チアキはウルスラに勧められて、グラランド・クロスのシミュレーターに乗った。

チアキも、グラランド・クロスの秘密を自分でも探つてやろうという興味があったので、ウルスラの誘いに応じたのだ。

実際にシミュレーターに乗ってみると、確かにウルスラの言うとおりだった。

超光速ジャンプを繰り返し、そのたびに反転、また反転と、上下、前後、左右の逆転など当たり前のようにめまぐるしく姿勢を変えながら、少しずつ確実に標的の大艦隊を打ち落としていくゲームだった。

しかも、タツチダウン直後に攻撃し、直ちに通常空間から離脱しないと、敵のミサイルやビーム砲に襲われるという設定だった。

瞬時の判断が求められる厳しいゲームだった。

「こんなに頭を使うゲームは初めてだわ。

正直言って、面白い。」

チアキは、頭をつかう、つまり全精神をフル回転させる不思議な快感に惹かれて、ゲームに引き込まれていった。

もともと、チアキはスペース・デインギーでは、2年生でネビュラカップ優勝の腕前の持ち主であり、普通の『宇宙戦争のシューティングゲーム』は簡単過ぎてやる気がしなかった。

そのチアキが、ゲームにこれだけ夢中になるのは珍しいことだった。

チアキは、頭と体のどこかにある「本気のスイッチ」が入ったような気がした。

そして、ゲームをしていくうちに、チアキはこのゲームの「秘密」に気が付いた。

「確か、この『ゲームセンター』にあるシミュレーターは、すべて実在する宇宙船や作業ロボットなどの操縦訓練用のものと、艦長は言っていたわね。」

それが本当ならば、このとんでもない操縦性能のある新型のグラウンド・クロスも、既に作られているかしら。」

「いやあ、宇宙船がこんな操縦性能を持つのは、あくまでもゲーム空間の中でのことじゃないかなあ。信じられないよ。」

ウルスラは信じていないようだった。



「グランド・クロスのジグザグ飛行を実際に見ていないから、そう思うのよ。

あれはすごかった。その改良型なら、こんなことも不可能じゃないわよ。」

そう言いながらも、チアキは次々敵艦を沈め、ゲームを進めて行った。

二人がゲームに夢中になっていると、突然後ろから声をかけられた。

「ゲームセンターが騒がしいので来てみたら、本当に驚いたね。」

そう言つて、ミッキー艦長が、真剣な表情でチアキたちの後ろに立っていた。

「乗っているのは、チアキ・クリハラだね。」

ウルスラを発見しただけでも腰を抜かすほど驚いたのに、もうひとり適性者がいるなんて。

それも、自動認証でシミュレーターの操縦を始めることができる適性者がいるなんて、本当に驚いたよ。

お前たち白鳳女学院のヨット部は、本当に人材豊富だねえ。」

結局、この時から、二人は、ミッキー艦長の『弟子』となつて、他のヨット部員に内緒で、このシミュレーターの操縦ゲームを教えてもらうことになった。

二人の上達は早く、たちまち最終のレベル、つまり、三機編隊による攻撃ゲームのレベルまでクリアした。

もちろん、その時は、このゲームが、クリスティア王女と共に戦う「訓練」になると

は思っ  
ていな  
かつた  
が・  
・  
・  
。

## 第十章 ブルック王国

### 10-1 ブルック星系

ここは銀河系の辺境部、ブルック星系と新しく呼ばれるようになった星々の空間である。

「まもなく、ブルック星系の指定された座標の通常空間に復帰します。」

機動空母グランドマザーは、時空トンネルを出て、待ち受けるブルック王国の船団の前に静かに姿を現した。

「ほう、これが銀河帝国の新兵器か。でかいなあ、この中に大型の新戦艦を三隻も積んでいるって、話じゃないか。」

ブルドッグ宇宙開発株式会社の社長にして、新しいブルック王国の国王となる、ビル・ブルックが言った。

「ブルドッグ」は、宇宙海賊時代の彼のあだ名だった。

海賊家業から足を洗って、可住惑星の開拓、資源惑星での鉱山経営などの宇宙開発の仕事が始めるにあたって、彼は、自分のあだ名を会社名にした。

やがて、開発は成功し、星系内の社員数が百数十万人という一大企業群になった。も

ちろん、星系内の住民は、大半が彼の会社の社員かその家族である。

彼の経営する企業へは、銀河中央の経済界から、業務提携や航路開設の提案から、企業買収の提案まで、彼の成功を利用しようという誘いが数多くあったが、彼は総て拒否した。

そのあと、銀河帝国からビル・ブルックにとつても予想外、というより願ってもない提案があった。

すなわち、帝国がブルックに対して王国として自治を認める代わりに、ブルックは、航路開設やミルキーウェイのステーション建設を認めるといふ提案だった。彼の開拓した星系は、今後の資源開発が有望視される銀河系外縁部の星団への航路上にあるので、帝国にとつても彼の協力が必要というのが、その理由だった。

ブルックにとつて、いつの日か王様になり自分の王国を築くのが若いときからの夢であつたので、帝国の提案を断る理由は無かつた。

なお、彼は、王国の名前も『ブルドッグ』にしようとしたが、彼の長女に大反対されて、本名のブルックとしたと言われている。

## 10—2 ブルック王国 宮殿船

やがて、クリスティア王女たち一行の乗った連絡シャトルが、ブルック王国の宮殿船

にドッキングした。

帝国軍の制服を着たクリスティア王女を先頭に、茉莉香、チアキの両副官、帝国の官僚や軍人の一行が、ブルック王ビルとその家族の出迎えを受けた。

クリスティア王女に、出迎え役の子供たちから歓迎の花束が贈られ、王女が笑顔で子供たちに応じた。

「歓迎セレモニーと自治条約調印式を船の大広間で行います。こちらへどうぞ。」

ブルック王が、クリスティア王女を先導した。銀河帝国一行が、これに続いた。

その時、ブルック王の息子3人が、茉莉香に駆け寄り、それぞれが自分の名を名乗って白い百合の花を茉莉香に差し出した。

「ジョージです」「トムです」「エバートです。」

「どうか、お受け取りください。」と三人声を合わせて言った。

「あ、あ、ありがとう。」

茉莉香は、びっくりしたものの、歓迎のしるしと思つて受け取り、三人に満面の笑顔を返した。

「やったあ。受け取ってもらったぞ〜〜!!」  
こういう大舞台で茉莉香から放たれる、華やかなオーラに包まれた笑顔だった。

3人の息子は、そう叫ぶと、それまでの緊張した雰囲気破つて、大広間に向かつて

バタバタと走って行った。大喜びでスキップして、天井に頭を打ち付けそうな勢いだっ  
た。

「フッフ、男の子って、大きくなっても、子供みたいなところがあるんだなあ。」

茉莉香は、そう思って微笑んだ。

しかし、茉莉香は、王女一行と一緒に大広間に入っていくと、どこか雰囲気が違うこ  
とに気づいた。

ブルック王国の人々の視線が自分に集中している。

歓迎の花束を持った王女より、白い百合の花を3本持った自分の方が注目を集めて  
いるのだ。

しかし、すぐに、歓迎セレモニーとして、大広間に掲げられた銀河帝国の国旗の前で  
一行は整列し、国歌「永遠なる銀河帝国」の演奏が始まってしまい、その理由をチアキ  
に聞くこともできなかった。

茉莉香は度胸を決めて、笑顔を絶やさず、ときおり茉莉香の方をチラチラと見る王の  
息子たちにも、さわやかな笑顔を返していた。

やがて、大広間の中央に置かれたテーブルで、ビル国王とクリステア王女による自  
治条約の調印が行われた。

そして、大広間に掲げられた銀河帝国の国旗が、帝国軍の兵士により降ろされ、代わ

りに、ブルック王国の兵士によりグルック王国の国旗が掲げられ、国歌が演奏された。そして、ブルック王が、王国の樹立を宣言し、大広間は歓声につつまれた。

その後も歓迎行事は一時間ほど続き、ようやく一行は王宮へ案内され、休憩となった。貴賓室に通された、王女、茉莉香、チアキの三人は、ようやく一息ついた。

「ねえ、チアキちゃん。

さつき、この国の女官の人が、私がおもらった百合の花を永久保存加工するからと言って持って行つたけど、この国は百合の花をそんなに大切にしているの？」

「ええ〜！ 茉莉香、知らなかったの。」

「・・・大変。」

チアキは言った

「ワハハハ・・・」

いつものようにニコニコしているから、何か変だとは思ったが、知らなかったとはなあ。」

クリステイア王女が笑った。

「茉莉香、この国では、男の子が女の子に白百合の花を贈るといふことは、結婚の申し込みをするという意味よ。」

チアキが言った。

「でも、ヘンだよ。三人一緒だったよ。」

「大丈夫。この王国の結婚法では、結婚はあくまで契約だから、平等に愛せるなら何人とも自由に結婚できるそうさ。」

茉莉香はすごいなあ、王子三人と同時に結婚できるぞ。」

クリステイア王女が笑った。

「ええ〜〜〜！じゃあ、受け取ったら、結婚承諾ってことになるの。」

「さすがに、それはないそうさ。」

贈られた女の子が、手編みのもの、たとえばマフラーとか膝掛とかをお返しに送れば、それが、結婚の承諾のしるしだそうさ。」

クリステイア王女が言った。

「はあく〜。ひと安心。私、そういう手芸、やったことないし。」

茉莉香はため息をついた。

「大丈夫よ。」

ママに頼んで作ってもらえばいいのよ。バレたりしないわよ。」

チアキが言った。

「私はそのいうことを言ってるんじゃないの。」

チアキちゃん、ひどいよ。」



「フッフ．．．」

やがて、大広間で歓迎の宴会が始まった。

ブルック王国の宴会は、大広間に巨大かつ豪華な絨毯を敷き詰め、そのうえでいくつかのグループごとに車座に座って行われる。

これは、大草原を旅する遊牧民がテントの中で客人をもてなしたというビル国王の祖先の風習が起源とされている。もちろん、国王一族の女性たちも参加している。

クリスティア王女、茉莉香、チアキの三人は、ブルック王国の王族たちの輪の中に座った。このグループは古代からの伝統に従って酒を飲まないグループだった。未成年の茉莉香とチアキがいることを考慮されたのだろう。お茶を飲みながら、料理などが振る舞われた。

やがて、男たちによる『戦士の踊り』が始まった。

来客を歓迎するため、宴席で披露されるのも、古代からの伝統とされている。

太鼓や笛の勇壮な伝統的音楽に合わせて、大広間の中央に、古代の甲冑や冠をつけた十数人の男たちが、隊列を組んで進んできた。男たちは、手に大きくて厚い刃を持つ刀や斧を持っている。よく見ると、男たちのうち、最前列の三人は、茉莉香に白百合の花を捧げた王子たちだった。

音楽に合わせて、剣道の型のような基本動作をし、刀や斧を振り回す。

全員の動きがびたりと揃って、しかも切れが良い。

重い刀をすばやく振り回し、しかも一瞬で静止する。

全員が静止したポーズも見事にそろっている。

しだいに太鼓のリズムが速くなり、それにつれて男たちの動きも早くなる。しかし、まったく乱れない。男たちの体に汗が流れ、筋肉が躍動する。

「すごいなあ。王子さんたち、さつきは少し子供っぽかったのに……。」

茉莉香もこうつぶやいて、王子たちの男らしさを見直した。

「そうね、茉莉香のおかげね。」

男の子って、女の子に認めてもらおうと自信をつけて、ぐんぐん伸びるのよ。」

チアキが言った。

「へえ〜。チアキちゃん、そういう経験あるんだ。」

茉莉香が微笑んだ。

「なによ。あるわけないじゃない。一般論よ、一般論。ジユブナイルのお約束じゃないの。」

チアキは、少し顔を赤くした。

「へ〜。フフフ……。」

茉莉香は信じていないようだった。

やがて、音楽が一段と大きくなり、踊り手一同の興奮が最高潮に達した。

「おお~~~~~!」

男たちは歓声を上げ、剣を正眼に構えて、きめのポーズを作り、踊りは終わった。

「うわあ~~~~」

大きな歓声が上がった。

踊りが終わると、三人の王子たちが王族の席の輪の中に、それも真つ先に茉莉香のそばにやってきた。

「おつかれさま~~~~。戦士の踊り、とても素晴らしかったです。」

茉莉香は、自分でお茶を注いだカップを王子たちに渡して、踊りを誉めた。

それを聞いた王子たちは、とてもうれしそうに茉莉香と話し始めた。

チアキは、その様子を微笑しながら見ていたが、すぐに彼らの周りを大勢の若い女性たちが取り巻いていることに気付いた。

チアキには、彼女たちが茉莉香を見る視線がしだいに険しくなっていくような気がした。

「茉莉香、あつちからも呼ばれているわよ。」

頃合いをみて、チアキはそう言って茉莉香を人垣の中から引つ張り出した。

「どうしたの、チアキちゃん？」

「あれを見なさいよ。」

チアキの目線の向こうでは、大勢の女性たちが王子たちを囲んでワイワイと大騒ぎを始めていた。

王子たちも、女性たちも、とても楽しそうだった。

「そっかあ。これでいいんだね。」

「うん。さあ、私たちは少しお仕事よ。」

チアキは、茉莉香と一緒に、同行してきた銀河帝国の官僚や軍人たちがいる輪の中に入って行った。そこには、ブルック王国の官僚や軍人たちもいた。

「どうもくくく、お疲れ様でした。」

「来た、来た。『メイド』の土産のキャプテン茉莉香と、『ちゃんじゃない』のお嬢様。」

少し酔っぱらった帝国軍人たちが、大喜びで迎えてくれた。

「ええくく？ 何、あれ。どうして知っているの？」茉莉香がチアキに聞いた。

「この間の公爵様とのやり取り、全艦隊に同時中継されていたらしいわよ。」

もう知らないから。」

チアキが言った。

二人がこんな話をしている間に、帝国軍人たちが同席のブルック王国の人たちに事情を説明したらしく、あちこちで笑い声が上がっていた。

そして、いつものように、茉莉香を中心に話がはずんでいく。

その後、チアキは大広間を回っていたカメラマンを呼んで、同席の人々と記念写真を撮ってほしいと依頼した。

茉莉香やチアキを囲んで記念写真をとる様子を見て、茉莉香の周りにますます大勢の人が集まってきた。

その時、チアキにブルック王国の執事の人が告げた。

「銀河帝国の王女殿下が、チアキ様をお呼びです。」

チアキは、クリスティア王女の元に戻った。

そこには、ブルック王国の王女たちも一緒にいた。

「お呼びでしょうか。」

「ああ、国王陛下がお前に会いたがっておられたのでね。」

「初めまして、とすべきでしょうか。チアキ・クリハラ様。

ビル・ブルックです。」

こちらは、長女のバレンシア、次女のアメリアです。」

「チアキ・クリハラです。初めまして。」

あの一、国王陛下、チアキとお呼びください。」

「では、チアキ様と呼ばせて頂きます。」

チアキ様、お美しく、立派におなりになられた。

お会いできて、うれしいです。」

「え？ 陛下は、以前に、私に会われたことがあるのですか？」

「はい、お父上のケンジョー・クリハラ様とは海賊時代からの付き合いでございます。」

チアキ様が、まだ赤ん坊のころにお会いしました。」

ビル国王は、ケンジョーと自分が若い頃からとても仲がよく、一緒に仕事をしたり、遊んでいたという話をした。

その話を聞いていて、チアキが言った。

「ところで、それほどの、父の古くからのご友人ならばこそ、お伺いしたいことがあるのですが、よろしいでしょうか。」

「なんででしょうか。」

「私の母をご存知ですか？」

赤ん坊のころに生き別れて、私は母を知らないんです。」

「……残念ですが、私がお会いした時には、もうケンジョウが一人であなただを育てていました。」

あなたのお母さんが仕事に出かける時に、この子を大人になるまで自分が命がけで育てると約束したと言っていましたよ。」

王は、チアキの質問に、少し考え、間を置いてから答えた

「そして、つい2か月ほど前に帝国からの使者を連れて私のところにケンジョーが来ましてね。

その時にも昔の話をしましたが、今年でもう18歳におなりになるのですね。

ケンジョウが自慢していました。良い娘になったと。

それで、ぜひ一度、お会いしたくなりましてね。」

「こちらこそ、お会いできて光栄です。」

「チアキ、帝国の使者とは、エドワード・ドリトルだ。

ブルック王国独立の話をまとめたのも、彼だ。」

クリス王女が言ったが、チアキは恥ずかしかつたので、エドワードについて詳しい話を聞きたいと言いだせなかった。

その後も、ケンジョーとブルック国王との若かりし頃の話が続いた。

チアキの父・ケンジョーと、ブルック国王のビルと、もう一人の海賊の三人が「三バカトリオ」と自称して、毎晩飲んで、喧嘩して、賭け事をして、時にはヤバイ仕事もして、飲み過ぎて金が足りなくなると借金までして、毎晩大騒ぎを繰り返していた頃の話だった。

そして、王が席を外し、クリスティア王女とバレンシア王女が話し始めた。

二人は同じ年頃の王女同士のためか、意気投合したようだ。

その時、アメリカ王女がチアキに内緒でささやいた。

アメリカ王女は小柄で、チアキより年下の中学生くらいと思われた。

「チアキ様、内密のお話がありますので、こちらへいらしていただけますか。」

二人は、大広間からでて、王女の自室に向かった。

アメリカ王女の自室に入ると、王女はいきなり態度を変えた。

「チアキ、決闘だ。剣を取れ。」

と、いって、一本の剣をチアキに投げてきた。

「何よ、これは？」

チアキは、理由が分からず、驚いた。

「ぐずぐずしているのなら、こちらからいくぞ。」

王女は、真剣を抜いて、チアキに切りかかってきた。

チアキは、理由も分からずに相手はできないので、王女の剣をやり過ごしていた。

幸い、王女の剣はそれほど鋭くなく、チアキは軽々とよけることができた。

「ばかもの~~~~~!!」

そう叫ぶ声が聞こえ、突然、王女の部屋のドアが開き、ブルック国王が飛び込んできた。



そして、劍を抜いているアメリア王女の頬を平手で強くはり倒した。たまらず、王女は床に倒れてしまった。

「オヤジの婆か！ 私だつて命がけなのよ。」

そう言つて、王女は寢室に飛び込み、閉じこもつてしまった。

「チアキ様、申し訳ございません。」

本来ならこの場で娘を手打ちにしてお詫び申し上げるところでございませぬ。

しかしながら、どうか、今日の良き日に免じて、我王国が銀河帝国へ永遠の忠誠をお誓い申し上げますことに免じて、娘の命だけはお助けください。」

国王は、チアキにひざまずいて許しを乞うた。

「陛下、お立ちください。」

如何なる理由があろうとも、王が私のような者に対して、そのような振る舞いをなさつてはいけません。」

チアキも膝をついて、ブルック国王の手を取つて立ち上がらせようとしたが、王は頑として立ち上がらなかつた。

「陛下、私を大広間にお連れください。」

王女様が私に決闘を挑んだ訳をお聞かせ願えませんか。」

チアキはそう言つて、とにかくこの場を離れることにした。

バレンシア王女は、大広間に戻ってきた国王とチアキの様子を見て言った。

「やっぱり、アメリカのヤツ、やったな。」

「何をしたのだ。」クリステイア王女が聞いた。

「チアキ副官に決闘を申し込んで、オヤジが止めに入ったのだろう。」

「なぜだ。チアキが失礼なことをしたのか。」

「いや、原因はオトコだ。」

「オトコ？ 誰のことだ。」

「エドワード・ドリトルだ。」

「彼が、どうして決闘の原因になるのだ。」

「あなたも知っている通り、先月に自治条約の交渉で最後の詰めをしようと、彼がここに乗り込んできたときのことだ。」

その時、父は銀河経済界のプリンスが来るといっているので、私を彼に紹介しようと思っていた。

まあ、私としても写真で彼を見るとなかなか良い男だったので、ちよつと期待して、手編みのひぎ掛けを用意して彼の到着を持っていたのさ。」

「それって、女の側から渡してもいいのか・・・。」

「もちろん、そうだ。」

今は、古代世界とは違うぞ。

それに、現代ではかなり儀礼的なものになっていて、それほど気にする必要はない。」  
「それで、渡したのか？」

「いや、それなんだが、私が彼に紹介されてひざ掛けを渡そうとしたときに、アメリカのヤツがそれを横取りして、ドリトル氏に渡そうとしたのだ。

その時のアメリカは、『ど、ど、どうじょ』と言って、セリフをかんでしまうほど緊張して真剣な様子だったな。

私も驚いて、その時はアメリカに文句を言う気になれないほどにな。」

「ええ！ それでどうなったのだ。」

「その後が、予想外の展開だった。」

儀礼的なものと承知して、彼も受け取ると思ってみていたのだが、なんと、ドリトルのヤツが受け取りを断ったのだ。

『私には、心に決めた人がいる。その人以外考えられない。』と言ってな。」

「ええ〜〜!!」

面白いヤツだ。

それで、姫はどうしたのだ。」

「目に涙をいっぱい浮かべて、寝室に飛び込んで、閉じこもったさ。」

「当然だろうな。」

「ああ、今思えば、あれがあいつの初恋だったかもしれない。」

しかし、物語の世界でも、初恋はハッピーエンドではない方が多いからな。」

「それと、チアキとどうつながるんだ。」

「それが、条約交渉の時に、ドリトルは、自分の会社の船ではなく、なぜか、チアキのオヤジの海賊船バルバルーサに乗ってここにやってきたと言っただろう。」

チアキのオヤジとうちのオヤジとは昔馴染みだから、オヤジの奴は条約交渉を私にまかせつきりにして、毎晩、チアキのオヤジとよく飲んでいた。

ドリトルもいっしょだった。

私もアメリカも時々宴席に同席していたが、宴席では、例の三バカトリオの愉快な話の他に、チアキの話がよく出ていた。

それで、チアキの話をする時のドリトルの顔が、実にうれしそうだね。

これを見たアメリカは、ドリトルの思い人は、チアキに違いないと思ひこんで、彼を巡って、チアキに決闘を申し込んだという訳さ。

そういうわけだから、アメリカの失恋に免じて、許してやってほしい。」

『まあ、一杯』

とバレンシア王女がクリステイア王女に酒を注いだ。

二人は、先ほどから差し向かいでワインを飲んでいた。

「わかった。私からもよく言っておく。アメリカ姫のために乾杯だ。」

二人は、乾杯のたびにグラスを鳴らし、ともに飲み干した。

「ところで、国王が話しておられた三バカ海賊の三人目は、女ではないのか。」

それがチアキの母親ではないのか。」

「貴方もそう思うのかな。私も父にそれを尋ねたことがあるが、父は違うと言っていた。

でも、そんな馬鹿騒ぎを続けた理由については、三人目の海賊は身内を亡くして、とても悲しんでいたのだから、気持ちが悪くなるまで一緒に思いっきり遊んでバカをやったと言っていたな。」

『身内を亡くした』と・・・」

クリスティア王女は、しばらく沈黙し、そして言った。

「国王は、そう言っていたのか・・・。フッフ、心優しい海賊の男達に乾杯だ。」

「私もそう思うよ。バカな男達に、乾杯。」

「それにしても、チアキと一緒に大広間に戻ってきたときのブルック王の様子はおかしかったぞ。本当に顔色を失っていたぞ。」

「そうだあ。この話は、普通は、聖王家の王女であるあなたに言えることではないが、ここまで親しくなったのだから、あえて言おう。聞いてほしい。」

帝国軍の実質的な司令官であるあなたのために、乾杯」

「わたしこそ、ブルック王国の実質的な支配者であるあなたのために、乾杯」

二人は、少し真剣な顔をしてグラスのワインを飲み干した

「聞いてほしい。父に限らず、銀河系の人々は、いま女王陛下の動静に注目し、緊張している。恐れていると言った方が良いだろう。」

つまり、反乱を治めて宿敵を倒し、絶対的な指導力、権力を握った女王陛下が、これから何をするかということだ。」

バレンシア王女が言った。

「なるほど、聖王家の歴史で言えば、恐怖の大王と呼ばれた、あのユスティアン大王のように、反対派への弾圧を始めることを恐れているのだろうか。」

クリステイア王女が言った。

「さすが、あなたは聡明な人だ。そのとおり。」

女王陛下は、『恐怖の大王』になるのではないかと、みな恐れている。

女王陛下下の人生を振り返れば、そうなる可能性、積もり積もった怨念はいくらでもあろう。」

「だが、私は、母上はユスティアン一世のような『恐怖の大王』にはならないと思ってる。」

彼と最も違うところは、彼とテオドラ皇后との間に生まれた王子は当時まだ一歳だったが、母上の子である私はもう成人していることだ。

子供の行く末を不安に思う必要はない。

私はそう信じている。あなたはそう思わないか。」

「貴方に関してはそうだろうなあ。」

でも、危険なのは貴方だけではないと父は思っている。」

「そういうことか。」

私だけではなく、チアキや茉莉香に危害が加えられると、やはり『恐怖の大王』が降臨すると思っているのか。」

「父はそう思っているようだ。」

「さっきも言ったが、私は、母上は恐怖の大王にはならないと思う。」

私の妹分も、もうすぐ大人になるからね。」

「私もそう願いたい。」

そう願って、女王陛下のために乾杯。」

「私も、母上の平穩を願って乾杯。」

「ところで、チアキとドリトルの関係は、本当なのか。」

「チアキはまだ17歳で、彼のことも将来のことも何も決めていないし、決める気にもな

らないだろう。それが偽りのない、現状だと思う。」

「そうだろうなあ。では、チアキ姫のために乾杯だ。」

乾杯と言うたびに、二人は、グラスを飲み干している。もう何杯飲んだらうか。

「そして、ドリトル氏のために乾杯だ。」

「それで、アメリカのことがあったから、今回、弟たちが加藤茉莉香に花を捧げる時に何が起こるか心配だったんだが、期待以上の展開で本当に礼を言う。」

「フフフ、茉莉香は白百合の花を贈られる意味は知らなかったそうだ。」

「それで、あの対応とはすごいな。」

弟たちにとっては、彼女は女神だな。

銀河系でも有名な人気者、キャプテン茉莉香に一人前の男と認められて、すっかり自信をつけたようだ。礼を言う。

キャプテン茉莉香のために乾杯」

「いやいや、王子たちの踊りもとても立派だった。よく鍛えられている。茉莉香がほめていたのも当然だ。」

王子たちのために乾杯。」

「それに見ただろう。一族の若い女たちが、茉莉香に激しく対抗意識を燃やしていたのを。昨日まで弟たちを『ガキっぽい』と低く評価してたのに、茉莉香が現れると豹変し



て……。

「見ていて、おかしかったよ。」

「ああ、私も見ていたよ。」

「それも、王子たちにとつては良かったじゃないか。」

ブルック王国の若い女たちのために乾杯。」

「ありがとう。ところで、銀河帝国のおかげで、私も王女となったわけだ。」

まずは、銀河帝国のために乾杯。」

すでに相当な量のワインを飲んでいるにもかかわらず、この後、バレンシア王女は真剣な表情で話し始めた。

「王国の樹立はオヤジの若いころからの夢で、今、オヤジは大喜びだ。」

しかし、……王女として育ったわけでもない私には、この地位は責任が無限に重すぎるように感じられる。

私は、これまでブルドッグ宇宙開発株式会社の特務取締役として会社の経営に参画していたが、その方がずっと気が楽だと思う。会社なら赤字にならないようにすれば良いだけで、経営に熱意を失えば株式を譲渡して会社から逃れられる。

同じように、共和制の指導者なら、任期が終われば仕事は終わりだ。

しかし、世襲の王国ではそうはいかない。王や王族は、国民に無限の責任を永久に負

い続けるように感じられる。

私は、王族としての責任、王の後継者としての責任をどう受け止めればいいのか。そうはおもわないか。」

「なるほど、そういう見方もあるね。

逆に言えば、その指導者が子々孫々まで無限の責任を負う覚悟を持っていることこそ、民主共和制よりも王制が勝っている点なのだがね。

そこに、宇宙開拓時代になって王政が至るところで復活してきた理由がある。

なにせ、宇宙移民の航海や宇宙開拓では、誤った選択は移民団全員の命に関わる。

誤った選択により生命の危険に直面すれば、多数決や根回しで決めたからと言っても何の慰めにもならない。

民主共和制で選ばれたリーダーが決めたとしても、人々は決断した当時のリーダーの任期が過ぎていようが、誤りの責任を追求した。

リーダー本人だけでなく、その子孫までも責めた。

そうなると民主共和制は機能を失い、有能なリーダーを選出できなくなってしまうた。

そして、絶対王政が復活した。」

「それは歴史の授業で習って、知ってはいるが・・・。

そうはいつでも、実際にどうやって無限の責任を負う覚悟を身につけたらいいのか？」

「そこが難しい。」

「そうだろう。生まれついた時からそう言われて育った者にはまだ当然のことかもしれないが、そうでないものはどう考えたらいいのだろうか。」

それで、失礼なことを言わせていただく、事情があつて、あなたも王女として育つたわけではないと聞いている。

そのあなたが、突然に王女となつてその責任をどう感じたのだろうか。

クリステイア、私の今後の人生のために、貴方の思いを聞かせてほしい。」

「フッフ、まずはブルドッグ宇宙開発株式会社のために乾杯。」

バレンシア、貴方もあの時の私と同じような気持ちなんだなあ。

私も母に連れられて銀河帝国に来たとき、その組織のあまりの大きさと帝国について自分がないにも知らないことに驚いたよ。

もちろん、自分が帝国を支配できるようになれるのか自信もなかった。帝国は自分がいなくとも動き続けるのだから、帝国には自分の居場所がないとすら思ったものさ。」

「なるほどなあ。私も辺境地域で育つたから、核恒星系の賑わいを始めて見たときは驚くというより怖かったよ。」

その中心である王宮にいきなり入るのだから、当惑するのは当然だろう。貴方の気持ちはよくわかる。」

「ありがたい。あのころ自信を失った私は、理由も無く周囲の人間に反抗していた。今思えば恥ずかしい限りだが……。」

ところが、ある日、開発中の新戦艦グランド・クロスの試作機を見学させてもらった時に私の運命を変える事件が起こった。

見学気分で勧められてグランド・クロスの操縦席に座ったところ、コンピューターが反応し、戦艦が自動的に起動し始めたのだ。

それは、帝国軍でも数少ない、新戦艦のパイロットの適性者として、私が認識されたことを意味していた。」

「自動的に動くとは、どういうことだ。パイロットの認証が必要だろう。」

「自動認証で可能だそうだ。」

聖王家の血を引く者であることを自動判別するようだ。」

「それは、ある意味では試されたのではないか。」

本物の王女かどうか。」

「そうかも知れないが、私にとっても、そんなことはどうでも良かった。

むしろ、自分がパイロットの適正者としての能力があると認められたことがうれし

かったのだ。

以来、私は新戦艦の操縦訓練に没頭した。

これだけが唯一自分の存在意義を示せると思ったからだ。

そして、私の戦闘能力を帝国の皆に見せつけてやろうと、たった一人で勝手に海賊船を襲いに出かけたのだ。」

「無茶をしたなあ。オテンバの姫様に乾杯。」

「ああ、乾杯。今思っても、本当に無茶をした。危うく、死ぬところだった。

それで、私が襲った海賊船の中に茉莉香の弁天丸もいた。

あいつの船は性能が圧倒的に劣るにもかかわらず、巧みな操船で私から逃げおおせた。

さらに、茉莉香の弁天丸やチアキの父の船バルバルーサを含めた10隻の海賊船と決戦をしたのだが、私の完敗だった。プライドはズタズタ。」

「陛下はなんとおっしゃられたのか。」

「母上は、私が無事に帰ってきたことを喜んでいて。とても心配したと言っていた。

そのことが私はうれしかった。

まあ、いい年をして反抗期だったのかも知れないな。

でも、それからだよ、親子が素直に話せるようになったのは。

母上に乾杯だ。」

「女王陛下に乾杯。その後、茉莉香とはどうしたのだ。」

「それで、海賊狩りの時に会った茉莉香に興味を覚えて、海明星にある茉莉香の学校の教師として潜入して、再会したのだ。」

素顔の茉莉香は、天然というか、何をやっても実に楽しそうで、気が負いがなかった。

あいつは宇宙に出てみたかったから、急死した父の跡を継いで海賊船に乗っただけだと言っていた。

海賊家業は結果オーライとも言っていたな。

驚いたよ。」

「そうか、なるほど。茉莉香に乾杯。」

「乾杯。私は、茉莉香と出会ったことで、目が覚めたよ。肩の力が抜けて、悩まなくなっ  
た。」

今は茉莉香もチアキも私の副官としてそばにいるからね。楽しいよ。

公爵の反乱の時もふたりは命がけで一緒に戦ってくれたよ。心強かった。

それに、二人と一緒にいると、退屈しないなあ。

でも、二人ともまだまだ世間知らずなどころがあるから、私が育ててやらないといけないし……まるで本物の妹みたいだけどなあ。

そういうわけで、力まず、気負わず、やっていくことさ。

貴方のために、ブルック王国のために、乾杯。」

「なるほど、そういう仕掛けか。では、クリスティア王女のために乾杯しよう。

それで、なあ、クリスティア、お前はもう立派になって、大丈夫だろう。

だから、私に加藤茉莉香をくれ。副官にするから。」

「だめだ。まだまだ私には必要だ。」

「それじゃあ、しばらく加藤茉莉香を貸してくれるだけでもいい。しばらくしたら、お前に返すから。」

「まずは、王国の最有力後継者とされる貴方のために乾杯しよう。

それで、バレンシア、いくら貴方の頼みでも、ダメなものはダメ。」

「まずは、銀河帝国の後継者である貴方のために乾杯しよう。

それでは、貸すのもだめなら、弟の嫁にくれ。

茉莉香の好みでどの弟を選んでも良い。茉莉香を嫁にした弟に王国を嗣がそう。

茉莉香は、王国の皇后だ。

これなら文句はないだろう。

茉莉香皇后陛下のために乾杯だ。」

「なんだって。う～～ん。まず、バレンシア王女のために乾杯しよう。」

それでも、答えは、何が何でも、だめだ。茉莉香は譲らない。

バレンシア、知っているか。加藤茉莉香を手元に置くとたいへんなんだぞ。

おいしいところは、みんな茉莉香に持って行かれる。

決して茉莉香には悪気は無いんだが、結果として常にそうなる。

それなのに、私は、あいつの姉貴分だから、我慢しないとイケない。

今回だって、ユリの花はみんな茉莉香のところへ行ってしまっただろう。一本ぐらい私の所へ来てでもいいのに……。」

「だからこそ、言っている。まず、クリスティア王女のために乾杯。

なあ、クリスティア、お前、加藤茉莉香をいつまでも手元に置いておくと、姉貴分なのに、茉莉香に先を越されるぞ。

だから、私に加藤茉莉香をくれ。」

「何を言っている。まず、バレンシア王女のために乾杯。

それは、お前も一緒だぞ。お前の所に茉莉香が行っても、お前が先を越されるだけだ。問題の本質的解決にはなっていない。

とにかく、答えは、何が何でも、だめだ。茉莉香は渡さない。」

その夜、二人の乾杯と茉莉香をめぐる交渉は続いたが、合意には至らなかったという。



## 補章 恐怖の大王の伝説

### 1 「恐怖の大王」の誕生

約九百年前、銀河帝国は、ユステイアンⅠ世の治世下において、版図を拡大し、銀河系の中核である核恒星系の覇権を確立し、今日の銀河帝国の基礎を作ったとされる。

この功績により、後世の歴史家は、彼を『大王』と呼ぶ。

この覇業達成のための宇宙戦争は、127回。戦死者は、敵味方、軍民間人を含め、約20億人に及ぶとも記録されている。ユステイアンⅠ世の指揮する銀河帝国宇宙軍はこれらの戦いにすべて勝利した。

これらの戦いも後半になると、銀河系の星々の指導者は、ユステイアンⅠ世の名を聞くだけで恐怖におびえ、戦わずして降伏したという。このため、後世の歴史家は、彼のことを『恐怖の大王』とも呼ぶ。

しかし、ユステイアンⅠ世が『恐怖の大王』と呼ばれる真の理由は、銀河聖王家への不敬と受け止められることを懼り、今日でも公の場で語られることはない。

真の理由の第一は、彼が聖王家反大王派の大粛清を行ったことである。

ユステイアンⅠ世は、テオドラ皇后との間に生まれた王子が一歳の誕生日を迎えた日

に、王子の命を脅かす恐れのある聖王家の反大王派を、不敬罪で処刑した。この事件の処刑者は、反大王派の王族の一家全員、それに主要な家臣を含めて、3千人と言われる。

事件の遠因は、二人の結婚前の第二次マンチュリア戦役に遡る。

マンチュリア星は最初の戦い（第一次マンチュリア戦役）後に銀河帝国に服したが、その後反乱（第二次マンチュリア戦役）を起こした。

反乱の背後には、大王とテオドラとの結婚に反対する聖王家の反大王派が、マンチュリア星の反乱を促したためと言われている。

古く厳しい階級制度に固執していたマンチュリア星の支配階級で構成される王政府は、同星の被支配階級の末裔で、貧しい遊牧民の娘であったテオドラが、銀河帝国の皇后となることに強い反発を示していたからである。そして、そのような結託を可能にしたものは、マンチュリアの王族・貴族と、聖王家の王族との間に張り巡らされた政略結婚の姻戚関係であったとされる。

戦いは銀河帝国側の優勢に進んでいるかに見えたが、正面对決を避けたマンチュリア星系軍は大王の命を狙って旗艦キング・オブ・パイレーツに強襲艦による奇襲攻撃を行った。その作戦の背景には、彼さえ倒せば有利な条件で和平を結ぶと言う密約が聖王家の反大王派とマンチュリア王政府との間で結ばれていたといわれる。

これに対して、大王はキング・オブ・パイレーツ艦上での激しい白兵戦の結果、これ

を退けた。

この時の大王とテオドラ皇后のエピソードは、おとぎ話「愛の死装束」として語り継がれている。

しかし、このような銀河帝国聖王家内の不統一を背景に、第二次マンチュリア戦役に関する和平も戦場での結果を無視した、不可解なものとなった。

それは、二人の結婚を認める代わりに、マンチュリア王政府の反乱を不問にするというものであった。

したがって、戦後に二人が正式に結婚した後も、さらに王子が誕生した後も、銀河聖王家内の争いは収まらなかった。ただ、暗殺と報復に関する恐怖と怨念が蓄積されていったといわれている。

聖王家反大王派の粛清は、その争いを一気に清算するものであった。

粛正の詳細については、総ての歴史書には何も書かれていない。書くことが許されなかったとも言えよう。

粛正の実行部隊は、帝国軍の軍服を着て、軍艦を動かしたといわれる。

しかし、帝国軍は政治的中立を守り、「粛正」に関与していないというのが、公式見解であり、真相はわからないままである。

真の理由の第二は、第三次マンチュリア戦役においてマンチュリア星を滅亡させた容赦のない戦闘である

大王は、聖王家反大王派の肅清後、マンチュリア王政府との争いに決着をつけるため、同星系への遠征に着手した。後世の歴史家はこれを第三次マンチュリア戦役という。

同星の支配階級は、テオドラ皇后が王子を生むとその子にも反発し、『結婚は認めだが、その子の王位継承を認めた訳ではない』等と公然と銀河帝国の王位継承問題に介入しようとしていたからである。

戦いは一方的であった。

すでにマンチュリア星には銀河帝国の大艦隊に正面から決戦を挑む軍事力はなかった。緒戦で星系の制空権を奪った銀河帝国軍は、マンチュリア星の月（衛星）を砕き、その巨大な破片を同星の各都市を狙って落下させる準備を始めた。

このような戦法は、都市の地下シェルターにある、王族の避難施設や軍の総司令部の破壊を狙ったものである。

かつて、マンチュリア王政府の王族は、次のように豪語していた。

「宇宙空間の艦隊決戦では帝国軍にはかなわないかもしれないが、マンチュリア星の首都にある王宮や軍の総司令部は、戦時になれば地下深くのシェルター内に移るの  
で、宇宙からのビーム砲やミサイルによる攻撃にも耐えられる。」

各主要都市の地下深くにも頑強なシェルターが築かれている。それらは相互に結ばれ、地熱を利用したエネルギー・食料の自給システムもあるので、いかなる攻撃にも耐え、何年でも戦い続けられる。

まさに、地下要塞、地下都市だ。」

「いつの時代も、結局、戦争の勝敗は、地上戦で首都を攻略できるかで決まる。

帝国軍と言えども、地上部隊を使って、シェルター内の地下首都を攻め落とすのは極めて困難だ。それは地下の空洞を利用して作られた天然の要塞である。攻め込んだ地上部隊は、地下トンネルの迷宮でゲリラ戦の餌食になろう。

だから我々は負けない。

月（衛星）でも落ちてこない限り、地下首都は落ちない。∴（笑）」

もちろん、『月でも落ちてこない限り∴』は、彼らの冗談だったが、帝国軍は本気だった。帝国の軍人たちにとって、旗艦キング・オブ・パイレーツ上の帝国軍総司令部を襲われた雪辱を果たすため、どんな手段を使っても敵の軍総司令部を破壊する覚悟だったからだ。

そして、帝国軍側にとっても、多数の戦死者を出す可能性のある地上戦で総司令部を攻略する作戦よりも、自然天体である月（衛星）の巨大な破片を落下させることにより、その莫大な運動エネルギーを利用して地下深くまで岩盤をえぐり、灼熱の炎で地下シエ

ルターを焼き尽くす作戦の方が、軍事的に効率的でかつ他の星々への抑止効果も大きいと思われた。

やがて、マンチュリア星の首都を狙って最初の破片が落下した。まず、巨大な質量体が落下し、地上に衝突したことによる衝撃波が発生して、星の大気を歪ませるほど大きな波を形成した。

この衝撃波の巨大な力で、マンチュリアの都市は砕かれ、がれきの山となったと言われる。

その一瞬後、落下地点から広がった灼熱の爆風は、首都周辺の人口集中地帯を一瞬で焼き尽くした。

その後、爆風は、星の大気圏を突き破るほどの火の玉となった。

爆発がおさまった後に首都のあった土地には、地下深くまでえぐられた巨大なクレターが形成されたという。

首都及び各都市に対するこのような帝国軍の攻撃は、その後、七日の間、昼夜を問わず繰り返されたという。この恐怖の戦闘の様子は当時広く伝えられ、以後、「辺境星域」が銀河帝国へ平和的に帰順する動きが急速に進む原因にもなったという。

直接の攻撃だけでなく、爆発によって大気圏に舞い上がった粉塵等による気候の寒冷化、それに伴う異常気象や災害の発生により、ほどなく同星の文明は滅んだ。この気候

の寒冷化や災害の誘発も、帝国軍の狙いであった。

さらに戦後も銀河帝国は、マンチュリア星の自治を尊重すると言う名目で、同星の荒廃を放置した。なお、生き残った被支配階級の人々の宇宙移民は支援した。

その結果、第三次マンチュリア戦役の死者は、民間人も含め16億人に及んだといわれる。

この戦後処理に関する方針は、マンチュリア王政府がブルカン星における惑星開発の撤退に当たり、テオドラ皇后の祖先である開拓民を遺棄した故事に沿って立案されたと言われる。

もつとも、開拓民を「遺棄」した経緯を、マンチュリア王政府の公式記録は次のように述べている。いつの時代も政治と歴史にはレトリックが駆使される。

『・・・のような理由でブルガン星における農業開発と資源開発の方針を見直すことを検討していたところ、当地に先行して開拓のために移住していた三等国民から、王政府に對して、ブルガン星に残りたいと言う請願があった。

彼らは、古代の祖先のように遊牧を生業としてこの星で暮らしたいと願っていた。

慈悲深い王政府は、三等国民のこの願いを聞き入れ、食料等の支援物資を下賜しただけでなく、彼らに自由市民としての身分を与え、ブルガン星の独立を認めた。

他の星系では、植民星と宋主星が独立をめぐり戦争まで行い愚かしい事態も生じてい

るが、ブルガン星については、賢明な王政府の英断によって平和的に独立が達成されたことは、まことに喜ばしく、我々の誇りとするところである。』

もちろん現実には、そのようなきれいなごとではなかった。

遺棄された「三等国民」は30万人に及び、当時その生存は絶望視されていた。これらの人々を再移住させる費用と遺棄の道義的責任を逃れるために、マンチュリア王政府は、自由と独立を与えたと過ぎない。

既に聖王家の大粛清により手を血で染めた大王には、第三次マンチュリア戦役において、自らに敵対した異星の王家に寛大な和平を与える意志はなかった。

また、帝国軍の軍人達も、今回は徹底的な戦闘を望んでいた。

もちろん、帝国軍は当時も聖王家の権力抗争に対しては政治的中立を保っていた。

しかし、マンチュリア軍に旗艦での白兵戦を挑まれ、帝国軍総司令部の高級将校に空前の戦死者を出すという屈辱を味わったにもかかわらず、第二次マンチュリア戦役が不可解な和平で収束したことに強い不満を持っていたからである。

他方、マンチュリア王政府は、大王が示した厳しい和平条件に同意することもできず、月を砕いて落とすという帝国軍の戦法に驚愕し、攻撃が続く七日の間、ただ滅びを傍観するだけであつたという。

これを、歴史家は、「絶望の七日間」と呼んでいる。



彼らが同意できなかった銀河帝国の和平条件とは、降伏しても支配階層は死を免れることができない厳しいものだった。

つまり、和平条件は、王制・貴族制等の身分制度を廃止し、ユステイアン大王に敵対した王族・貴族とその家族や主要な家臣・軍人を全員処刑し、さらに同星の自治を廃止して銀河帝国の直轄領とする（初代総督は大王とテオドラ皇后の息子であることまでも示された）という徹底したものであった。

後世の歴史家は、この戦いが銀河帝国の歴史の分岐点となったとする。

属国ながら銀河帝国の同盟国を自称して、その政治的影響力を誇ったマンチュリア星の文明は歴史から消えた。こうして、「銀河帝国に同盟国無し」という帝国の支配構造も決定した。

また、この戦いを機に、ユステイアン大王はゆるぎない地位を築き、聖王家の世継ぎ争いの時代は終わったとされる。処刑を免れた聖王家の家族は、百家と呼ばれるほど隆盛を極めた聖王家の一族のうち、わずか三家族のみだった。

この三家族とユステイアン王の子孫が、今日の聖王家の四家の源となっている。

## 2 「愛の死装束」の伝説

約九百年前、銀河帝国のユステイアン大王は、マンチュリア星の反乱を鎮圧するため、遠征軍を率いて進撃した（第二次マンチュリア戦役）。

戦いは優勢に進んでいるかに見えたが、王の乗る銀河帝国軍の旗艦キング・オブ・パイレーツは、偽装して潜んでいた敵の強襲艦による奇襲攻撃を受け、艦内で白兵戦を挑まれる事態に陥った。

不意を突かれた艦内は混乱し、艦内の過半を占領されたが、王を守るブロックは激しく抵抗し、必死に持ちこたえていた。

余裕のあるうちに王の脱出を進言する將軍たちに対して、ユステイアン王は迷った。

「私だけなら、撤退などあり得ない。しかし、この船には、テオドラはじめ女性兵士も乗っておる。われらが死んだ後に、彼女らが敵の手に落ちてはならない・・・。」

その時だった。

「お待ちください、陛下。」

テオドラは、そう言つて、彼女に従う10人の女性兵士全員を連れて、王の前に姿を現した。彼女らは全員、髪を男性のように短く切り、顔を浅黒く塗り、男性兵士でも敬遠する重装備の防護服を着ていた。

その姿には、女性兵士と侮られまいとの覚悟が感じられた。

テオドラは王に言った。

「陛下、今のうちなら、小舟で、我ら共々、逃げることもできましょう。大宇宙の片隅で、ひっそり暮らす資金もあります。」

しかし、それに何の意味がありません。賊軍の真の首謀者は、陛下を卑怯者と罵り、銀河帝国の王を僭称するでしょう。

私は、銀河帝国の王こそ、陛下の最高の「死装束」（しにしようぞく）だと存じます。陛下、私たちも戦います。御心を煩わすのは本意ではありません。敵に占領された区画の後方から新手の援軍を装って攻め入ります。私たちの出陣をお許してください。

そして、陛下もご存分に戦いをお進めください。」

ユステイアン王は、先ほどの迷いを恥じて、言った。

「お前たちの覚悟を聞いて、今、私も闘志を取り戻した。礼を言う。

お前達の出陣を許す。共に戦おう。

そして、テオドラ、お前出陣に当たり、言いたいことがひとつある。

今お前は、銀河帝国の王こそ私の最高の『死装束』だと言ったが、お前にも『死装束』を与えよう。

たった今から、お前は、私の妃、銀河帝国の皇后だ。

いままで苦勞をかけた。

私は、お前のために、出来るだけ多くの人に祝福された結婚をしたいと思うあまり、説得に無駄な時間を費やしてきたような気がする。

もはや何人にも異議は言わせない。

テオドラ、死んではならん。生きて再び会い、ともに銀河帝国を治めよう。」

.....

二人のその後について、おとぎ話では

『二人は、力を合わせて反乱軍を撃退し、その後、仲睦まじく銀河帝国を治めました。銀河帝国は永遠なり。』

メデタシ、メデタシ。』

と、ハッピーエンドで結んでいる。

しかし、その後二人が進んだ道は、大量の流血により切り開かれたものであった。皇后に従って戦った女性兵士10人は全員戦死した。

もちろん戦死者は女性兵士だけではなく、旗艦に帝国軍の救援部隊が到着したときには、白兵戦により、乗船していた帝国軍兵士の半数以上がすでに戦死していただけでなく、帝国軍首脳も大半がすでに戦死または戦闘不能の重傷となっていた。高級将校たちも、『皇后陛下に続け』と叫び、兵士とともに白兵戦の先頭に立つて戦ったからである。

特に、脱出を進言した将軍たちは真っ先に突撃し、押し寄せる敵陣の一角を崩したため、戦闘の流れを変えるきっかけになったとされる。

もともと、奇襲攻撃は帝国軍の救援部隊が到着する前に大王を討つという作戦であつ

た。しかし、帝国軍の激しい反撃にあつて戦鬪が膠着状態に陥り、目的を果たすことができないうちに救援部隊が到着してしまったため、奇襲は失敗に終わった。特にに皇后陛下が率いた決死隊の活躍は、恐れていた救援部隊の到着かと敵を動揺させたという。

結局、戦場で勝敗を決する最後の決め手は軍隊の士気である。

銀河帝国は王政でありながら民主共和制国家のように国民皆兵制を維持できるほど国民の支持が高かつたので、極めて士気が高かつた。

他方、貴族社会であるマンチュリア星の軍隊は、傭兵や奴隷が主体であつたので、帝国軍のように将校と兵士が一体となつて死にもぐるいで向かつてくるような軍隊ではなかつた。

従つて、敵が簡単に降伏せず、奇襲が成功しないとわかると、戦意が低下するのも早かつた。傭兵も奴隷も、最後は自分の命の方が大切だつたからである。

結局、帝国軍の旗艦キング・オブ・パイレーツ上の白兵戦での戦死者は、帝国軍側だけで3百人に上つた。

しかし、第二次マンチュリア戦役における、旗艦上の3百人の流血は、その後3千人と16億人の血が流れる前ぶれに過ぎなかつたことは、既に述べたとおりである。

### 3 「強く賢く美しく」の伝説

第二次マンチュリアン戦役の後、銀河帝国の王ユステイアン一世は、テオドラを正式

に皇后に迎えた。

聡明で美しいテオドラ皇后は、国民の人気を集めた。

なによりも、二人の出会いのエピソードが好感をもって迎えられた。

ユステイアン王は、幼少期から乗馬が趣味であった。王子の時代に、彼は良い馬を求めて、当時遊牧が主産業の貧しい草原の星、ブルカン星を訪れた。

その星は、もともとはマンチュリア星の植民星であったが、気候が寒冷で海が小さく資源が乏しいとされ、発展の可能性が低く投資効率が悪いという理由で開発が中止されたところであった。

しかも、マンチュリア政府は、開発の撤退に当たり、開発初期に開拓民として移住させたマンチュリア星の被支配階級の人々を、その星に遺棄した。

遺棄された彼らは、文明を失い多くの犠牲を払ったが、富者の隷属より貧者の自由を喜び、古代の祖先と同じように遊牧民として暮らし生き抜いた。

やがて、彼らは、羊だけでなく馬の飼育に熱心に取り組んで、名馬の産地としての評判がユステイアン王子の下にも届くまでになった。

ブルカン星を訪れたユステイアン王子は、買い付ける馬を探すために、遊牧民による草原での競馬大会を観戦した。

そこで、疾走する馬群の先頭を颯爽と走り抜けていく馬に乗った、長く美しい黒髪を

なびかせた若い娘の姿が王子の目にとまった。

この娘の名はテオドラといった。後のテオドラ皇后である。

その気品溢れる美しい横顔に王子は一目ぼれし、彼女に近づいた。

しかし、当然のことながら、テオドラは自分には王宮より草原の暮らしが合っていると王子の気持ちを受け入れなかった。

もちろん王子もあきらめない。

困った彼女の父親は、王子を狩りに誘って、こう言った。

「王子様、殿下は乗馬がお好きと伺っております。

はるばる辺境の星までお越しいただいたので、我らの草原を馬で駆け、我らの祖先から伝わる伝統の狩りをお楽しみください。

もちろん、テオドラもお供いたします。」

王子とその従者たちは、テオドラとその一族の遊牧民と共に、馬に乗って草原の狩りに出発した。

実は、遊牧民たちは、観光のために王子を狩りに誘ったのではなかった。

真の目的は、占いであった。それは、狩りの獲物で二人の結婚の禍福を占うものであった。

ところが、初日、翌日と草原を行けども、行けども、獲物となる獣が姿を現さなかつ

た。

しかし、夕方になって、野営のために馬を降りた王子が、テオドラに近づき二人が並んだ時に、それはやってきた。

「あれは、狼の親子か。三匹いるな。白い毛並がやや青みを帯びているということは……。」

「はい、殿下。この星の貴重な固有種、青狼（ブルーウルフ）の親子です。」

「この星で最も強い獣だな。夜行性と聞いていたが。」

「その通りです。夕方とはいえ、明るいうちに姿を見せることはありえないものです。しかも、親子連れは、私も初めて見ました。」

青狼の親子は、じつと二人を見つめていた。

王子の従者たちは、弓矢や銃を向けようとしたが、それを王子は制止した。

「やめよ。青狼は、この星の遊牧民にとって神聖な獣だ。狩りの対象ではない。」

二人は一緒に青狼の親子を見つめていた。

草原に静かな時が流れた。

やがて、王子は、青狼に向かって言った。

「私はこの女を妻とし、永遠の愛を誓う。」

我が言葉をそなたの神に届けよ。」



その言葉を待つていたかのように、青狼の親子は天に向かって遠吠えし、夕闇に消えた。

そして、遠くから、それに答える青狼の遠吠えが聞こえた。

その一部始終は、青狼の出現に気づいた遊牧民たちも見ていた。

結局、草原の狩りは何の獲物も得られなかったが、遊牧民たちには狩りの目的は達せられた。

「神は二人を祝福した。」

彼等には、そのような神託が下りたと感じられたからだ。

狩りから帰ると、テオドラの両親や一族は、『王子に従いなさい。それがお前の運命、草原の神の意志だ』と彼女を説得し、テオドラは王子に同行することを決意した。

このエピソードは、高度な科学文明を持つ銀河帝国の人々にとつては、希少な野生動物に遭遇した体験に過ぎないにもかかわらず、多くの人に好まれ、聖王家の歴史書にも記された。

もともと、銀河聖王家は、はるか古代の自らの起源について天孫降臨の神話を持ち、自らを神の子孫と称していることもあり、神秘的なエピソードが好まれる伝統もあつたからである。

もちろん、王の真摯な愛情が国民の、特に女性たちの好感を得たことは言うまでもな

い。

このエピソードについては、帝国国民の女性達は皆こう言う。

「神獣の前で永遠の愛を誓われるなんて、最高の幸せ。

胸がキュンとして、これで恋におちない女はいないわよ。」

その後、聖王家の王族や重臣の諫言を押し切つて、ユステイアン王子は、彼女の馬を買ひ、その飼育係と言う名目で彼女を連れ帰つた。

帰国後、王子は、こう言つてテオドラとの正式な結婚を望み、王家一族の薦める名家の女性との縁談をすべて断りつづけた。

「私は、彼女との結婚を神に誓つた。」

この意志は、即位後も変わらなかつたが、これに対する聖王家一族の反感も強かつた。

そこで、大王は王族の理解を得るため、テオドラを帝国軍人とした。

テオドラがいきなり高級士官である大佐に任じられたことに、当初は帝国軍内に反発もあつた。

しかし、彼女は、もともと、馬術、剣術や馬上からの弓術に優れており、さらに帝国軍人となるや、たちまちビームガンの射撃や宇宙戦闘機の操縦まで習熟して、新・旧の武術に優れた才能を発揮した。

テオドラの武人としての実力を知ると、同じ武人である帝国軍人達は、しだいに彼女を認めていった。

特にテオドラが披露した古式馬術は、帝国軍人、とくにパイロットの注目を集め、大いに研究されたという。古式乗馬自体が、人工知能を備えた宇宙船の操縦と通じるところがあると評価され、さらに疾走する馬上から振り向きながら、すれ違って離れていく敵に矢を放つような実戦的な弓術の発想は、宇宙時代の軍人にとって新鮮だったからである。

また下級兵士への気配りも厚く、やがて帝国軍内の人望を得た。

にもかかわらず、聖王家の世継ぎ争いは収まらず、マンチュリア星との緊張が高まったことは既に述べたとおりである。

後世の歴史家は、ユステイアン王とテオドラの結婚は、銀河聖王家にとっては、自由と平等の女神の降臨となったと評価する。もちろん、「愛の死装束」のエピソードが示すように、戦う女神であった。

つまり、彼女は、銀河帝国及び銀河聖王家にとって、「銀河聖王家の下での諸人類の自由と平等」を実現するという銀河系統合の正義を示すシンボルとなり、16億人の死者を出した第三次マンチュリア戦役を正当化する存在となった。

やがて、彼女は女神の如く神格化されていった。

その一例がテオドラ金貨である。テオドラ皇后の横顔は、その息子であるユステイア二世の即位二十五周年を記念して発行された銀河帝国の1ドル金貨に刻まれ、永遠の輝きをもって後世に伝えられた。その後も、聖王家の慶事に金貨が発行されたが、その片面には必ずテオドラ皇后の横顔が刻まれた。これが銀河帝国の「テオドラ金貨」の起源である。

そして、テオドラ皇后は、武術に優れ、庶民や下級兵士への気配りも厚く、颯爽と黒髪をなびかせながら馬を駆る姿は気品ある美しさに溢れていたことから、「強く賢く美しく」と言う聖王家の女性の理想とされ、その後の聖王家の教育方針に強い影響を与えた。

もちろん、聖王家の女性が軍人となる先例とされた。

さらに、テオドラ皇后の名声は、その時代に求められる魅力ある人物を、身分・出自を問わず、婚姻により一族に加えていくことが聖王家の繁栄にとつていかに有意義であるかを示す先例とされ、その後の聖王家の婚姻政策に強い影響を与えた。

他方、マンチュリアの王族・貴族との政略結婚を進めたことが聖王家の分裂と反乱を招いたとの反省から、特定の勢力が聖王家に影響力を強めるような姻戚関係の構築も慎重に避けるべきものとされたことは言うまでもない。

なお、この第二次マンチュリア戦役で旗艦への奇襲攻撃と白兵戦を許した経験から、

旗艦の重装備・要塞化が進んだ。

それまで、銀河帝国の旗艦キング・オブ・パイレーツは通常の戦艦タイプであったが、以後の新造艦は至近距離の砲撃戦や大規模な白兵戦にも耐えられる超巨大な要塞型戦艦となり、今日の「クイーン（キング）・オブ・パイレーツ」が誕生した。

しかし、実戦では、それ以後約九百年間、旗艦キング・オブ・パイレーツは、白兵戦どころか、砲撃戦すら挑まれたことはなく、実戦に投入されたことはなかった。

同様に、たとえ戦闘シミュレーションといえども、これまでは、旗艦キング・オブ・パイレーツが白兵戦などの直接戦闘を挑まれるような結果は生じなかった。

今日においても、帝国宇宙軍にとって、旗艦「クイーン（キング）・オブ・パイレーツ」は、無敵艦隊の象徴であり、帝国軍人にとって命懸けで守るべき神聖不可侵の砦である。

## 第十一章 銀河聖王家の魔女

11-1 白鳳女学院

白鳳女学院の下校時間は、門の外の方が校内より賑やかである。

門の外に運転手つきの自家用コミューターが何十台も待ち受け、徒歩で校門を出た生徒が、迎への車に乗っていく。その間をスクールバスも通っていく。茉莉香のように自転車通学をする者は少ない。

今日も部活を終えたヨット部員たちが、部室で帰宅の準備をしているときに、ネットニュースを見ていたハラマキが小さい声を上げた。

「まさか、ドリトルさんのスキヤンダル！浮気？」

パソコンには次のようなニュースが載っていた。

『グロリア姫、恋の逃避行か!? 元婚約者エドワード・ドリトル氏も所在不明。』

「チアキちゃん、知ってるのかしら。・・・」

「聞いてみる？」

「聞けるわけないでしょ。」

部室の反対側で帰り支度をしているチアキを見ながら、部員たちがつぶやいた。

結局、何事もなかったかの様に静かに帰り支度をし、部員たちは白凰女学院の校庭を歩いて、校門にさしかかった。

このとき、一人の男性が近づいてきた。

「やあ、チアキさん。」

いきなり噂のエドワードが現れて、チアキに近づいてきたので、部員たちは驚いた。

「……………」

チアキは何も言わず、不機嫌な顔をエドワードに向けた。

「やっぱり、チアキちゃん、例のニュースを知っているよ。あの顔は。」

ヨット部員たちは思った。

「お待ちください。エドワード様……………」

チアキとエドワードの二人が近づこうとしているときに、一人の女性が二人の間に割って入り、エドワードに声をかけた。

「誰？このひと。もしかしてニュースで言われていた姫様？」

チアキとエドワードの様子を心配そうに見守っていたヨット部員はつぶやいた。

「もしかして、グロリア姫なの？ この間、公爵様の船でお会いした時とは別人のようだけれど……………」

茉莉香も、戸惑いの声を上げた。

それもそのはず、公爵の船で会った時のグロリア姫は、花びらのような多くのフレアがついた豪華なドレスに、カールさせた長髪をなびかせ、派手なアイシャドウのメイク、そして何よりも光り輝くような美貌の持ち主だった。

しかし、今、目の前にいる女性は、清楚で美しいものの、衣服も全体に地味で髪も後ろにまとめ、質素堅実な女学生といった印象だった。

「やっど、お会いできましたね。エドワード様。」

グロリア姫は、見る人の心を奪ってしまいそうな美しい笑顔を向けて、言葉が続けた。そして、グロリア姫の体からは、さわやかで、しかし甘く、高貴としか言いようのない香りが漂ってきて、周りの人々をうっとりさせ始めていた。

「あのう、私たちの婚約のことですが……」

「お黙りなさいよ。ほんと、見事なカマトトね。ほめてあげるわ。」

グロリア姫の言葉をさえぎって、チアキが言った。そして、エドワードの方を向いてさらに言った。

「あなたねえ、私に結婚申し込んでおいて、モトカノとも、よりを戻そうっていうの？

ちよつと来なさいよ。事情を、聞かせてもらうわ。」

チアキはエドワードの手をつかんで引つ張ると、右手を挙げて車を呼んだ。

たちまち現れた大型のリムジンがチアキの前に停車し、中からスカーレットが現れ



た。

「お待たせしました。」

チアキは、エドワードを自分の車の中に押し込むと、エドワードの車の運転手に言った。

「運河通りのランプ館というカフェに行きます。ついてきて。」

さらに、チアキに厳しく言われて泣きだしそうな表情のグロリア姫をチラッと見て、チアキは茉莉香とグリユーエルに言った。

「茉莉香。」

このお姫様、例の事件以来、自宅謹慎中なのに脱走したのよ。

あなたの家にも連れて行って、事情を聴いて、帝国軍に連絡して。

グリユーエル、ヒルデ、お願い。茉莉香を助けてあげて。

茉莉香ひとりじゃ、このお姫様のお相手は無理よ。」

「はい、わかりました。チアキさん。」

グリユーエルは、うれしそうに答えた。

「チアキちゃん、わたし、一人でできるよ。事情聴取くらい……。」

「茉莉香、何、言ってるの。」

あなた、姫と自転車の二人乗りして、家に帰るつもり？

「グリユーエルに乗せててもらいなさいよ。」

「ハハハハ・・・。」

「たまらず、ヨット部員たちが笑った。」

「お任せください、茉莉香さん。」

「ヒルデも、こういうトラブルに巻き込まれるのが楽しくて仕方ないという顔をしている。」

「こうして、三台の車は風のように校門前から去って行った。」

「スカーレットさん、チアキちゃんのそばに居たんだ。知らなかったね。」

「アイが言った。」

「従者だものね。警備してたんだ。」

「ナタリアが言った。」

「じゃあ、茉莉香のところにも、ギルバートさんがいるのかなあ？」

「リリイが言った。」

「ええええ？もしかして、二人は同じ家に住んだりして・・・？」

「ウルスラが言った。」

「キヤー!!同棲?!!」

「皆が言った。」

いつものように話が脱線していくところに、ジエシカが言った。

「先輩方、大事な話をお忘れですよ。お聞きになりましたか。」

「う〜〜ん。」

「あ、あれか。チアキちゃん・・・」

「結婚申し込まれたって、言ったよねえ。」

「私も聞いた。」

「グロリア姫様に対抗するために、ハッターリを言っただけじゃないかしら。」

サーシヤが言った。

「でも、『ひょうたんから駒』というし・・・。」

リリイが言った。

「ですよねえ。気になりますよねえ。やっぱり、ここは白鳳探偵団の出番ですわ。」

ジエシカが言った。

「なに、それ？」

「今、作りました。」

「さあ、みなさん。いきましよう、ランプ館へ。」

校門前に残されたヨット部員たちも、通学用の自家用車に分乗してランプ館へ向かった。

## 11-2 カフェ・ランプ館

白鳳探偵団がランプ館へ着くと、入り口の黒板には「貸切」と書かれていた。

ボディガードの人たちが入り口に立っており、中に入れそうな雰囲気ではなかった。

「大丈夫ですよ。ほら、これ！」

ジェシカが指差したのは、『アルバイト募集中』の札だった。

「裏口へまわりましょう。マミ先輩に捜査への協力をお願いしましょう。」

裏口のドアをノックすると、マミが顔を出した。

「ウフフ、来たわね。」

あれ？茉莉香はどうしたの？

「茉莉香先輩は、もう一人の『容疑者』、グロリア姫様の取り調べ中です。」

「そうなの、ふふふ。」

とにかく、早く入りなさいよ。

しー、静かにね。」

白鳳探偵団の一行は、裏口からランプ館の調理場に入り、そこから室内に入った。

チアキとエドワードの二人は、店の中央にある席に向かい合って座っている。

少し離れた席にスカーレットがいる。

探偵団の一行が、チアキに気づかれぬように無言でスカーレットに手を振ると、彼女は笑顔を返してきた。

見逃してくれるようなので、一行は、カウンターの陰に隠れて、聞き耳を立てることにした。

「・・・ですから、私は、休暇を取ってこっそりチアキさんのところへ来ただけで、謹慎中のグロリア姫が私を追いかけてきたことは、まったく知らなかったんですよ。」

まさか、白鳳女学院の校門の前で出会うとは、本当にびっくりしましたよ。

しかも別人のように変身していたので、二度びっくりですよ。

行き先が二人とも海明星だったので、マスコミと一緒に行動していると決めつけたんでしようけど。」

「そんなところだろうと、思ったわよ。」

チアキの機嫌も少し良くなってきたようだった。

「うーん、この店の紅茶は、なかなかおいしいですね。」

そういうえば、チアキさんはチョコパフエがお好きでしたよね。頼みましょう。

あのう、チョコパフエひとつ。」

「いや、あのう、私はそんな子供っぽいものは、食べないので・・・。」

「はい、チョコパフエひとつ、入りま〜す。」

チアキの言葉を無視して、マミが言った。

チヨコパフエは、メイド服に着替えたサーシャが運んできた。

しかし、チアキは運ばれてきたチヨコパフエに気が付いたのだが、サーシャが唇に人差し指を一本あててエドワードに合図したので、彼も笑顔を返して気付かないづかないふりをした。

チアキは、運ばれてきたチヨコパフエを、ものも言わずに食べてしまった。

自分は実はこれが食べたかったから、彼を連れてランプ館に来たのかと思ったほど、チヨコパフエはおいしかった。

「おいしかったです。

ごめんなさいね、私ばかり食べてしまつて。お腹がすいていたみたいです。」

「それは良かったですね。お腹が満たされると気分もよくなりますからね。」

実際のところ、チアキは機嫌がよくなった。

それどころか、エドワードと二人、差し向かいでカフェにいたことが、恥ずかしくなつてきた。

「ところで、さっきの話ですが、

このままではチアキさんがグロリア姫に嘘を言ったことになるんですよ。

でも、これはとても大事なことで、この際、はつきり私の考えをお伝えしよう

「思います。」

「え……」

チアキは話の内容を察して、うつむいてしまった。

「チアキさん、あなたに結婚を申し込みます。」

もちろんご返事は今でなくとも、あなたのお気持ちが決まった時点で結構です。

白鳳女学院を卒業して、大学に進まれるなら、その後でも結構です。

私は待ちます。私には自分の妻としてあなた以外は考えられませんから。」

「……………」

チアキは、何も答えられず、うつむいたままだった。

自分の顔が熱かった。

話を聞いていた、白鳳探偵団の一行も、目をうるうるさせて、感動していた。

11-3 加藤茉莉香宅

茉莉香は、グロリア、グリユーエル、ヒルデの三人の御姫様と共に、セレニティ王宮の車で自宅へ帰った。

茉莉香の家のリビングに入ると、まだ泣きべそをかいている様子のグロリア姫が聞いた。

「この家は、茉莉香さん御一人で住んでおられるんですか。」

「お母さんと二人で住んでいるんだけど、最近はお母さんも仕事で留守にすることが多いからね。今日も留守だしね。」

「警備とかは、・・・」

「加藤茉莉香に関する不可侵協定とか、いろいろあつて、いろんな人が内緒で見守つてくれているよ。」

最近はお母さんも加わつたしね。この家も見かけと違つてフツツの家とは違うしね。」

「そうですか、まあいいかな。」

そういうと、グロリア姫は、着替えのため自分のスーツケースを持って隣室に行った。

やがて、颯爽とした上着とミニスカートに着替えて戻ると、グロリア姫は表情を一変させ、姿勢を崩してソファにもたれかかった。

「あーあ、疲れた。」

わざわざ、男性好みのおシトヤカな女になつて、遠く海明星まで来てみたが、やつぱりだめだったなあ。

もともと、オレはあんな政略結婚なんか未練はないのに、父上が勝手に婚約解消しただけだから、母上がもう一度、ドリトルの気持ちを確かしろと言うから、来たんだよ。

オレは他にやりたいことがあるので、今、結婚して御屋敷の奥様に収まる気なんて、まったく無いんだけどなあ。



しかし、チアキの奴には、オレの『アート』は通じなかったなあ。『見事なカマトトね。』なんて言われてしまったよ。まいったなあ。」

グロリア姫の表情や言葉遣いが、愚痴を言っているにもかかわらず、カッコイイ。

「え！ ええええええ！ 今のは、ウソ泣きだったんですかあ。」

「人の心を導くアートと言ってほしいね、キャプテン茉莉香。」

それに、今のこれが、オレの本当の姿だよ。」

「もう、茉莉香さんだったら……。ご存じないんですか。」

姫様には熱烈なファンが多くて、姫様のためなら命を捨てると誓っている人も多いんですよ。

先ほどのことも、姫様が本気でないのは、見ていて分かりましたから。

姫様が本気なら帝国軍の艦隊だつて言うことをきくと言われてるほどですからね。」

「よしてくれよ、グリユーエル。」

気を使ってオレのことを誉めなくていいよ。

負けは負けさ。チアキは、ドリトルを『自分のもの』だと言つて連れて行つてしまつたじゃないか。

それに、グリユーエル。オレは、軍隊の指揮なんて興味ないよ。

あんな面倒なことは、クリスティアにお任せだ。

茉莉香だって、オレのあだ名を知ってるだろう。」

「はあー。」

茉莉香は、『聖王家の魔女』というグロリア姫のあだ名を思い浮かべた。もちろん本人のまえでは口に出来ないが……。

「それにしても、チアキに実際に会ってみると、ドリトルがチアキに惚れて、こんなところまで会いに来るワケがわかったよ。」

「ええええ。どういうワケなんですか？」

茉莉香が聞いた。

「アイツ、あの人の若いころにそっくりじゃないか。」

目鼻立ちといい、あの向こう気の強さといい……。

あの人は、小さい子供のころのドリトルにとつて、憧れの人だったんだろう。」

「姫様、ご発言は慎重になさった方がよろしいのでは……。」

ヒルデが言った。

「ハハハ、今度の反乱騒ぎで、もう聖王家の王位継承争いは終わったから、気にしなくとも良いんじゃないかなあ。」

そういえば、父の反乱騒ぎで加藤大佐には本当に迷惑をかけたなあ。

改めてお詫びするよ。」

「いえいえ。それよりも、お父上の公爵様がお亡くなりになられたことに、お悔やみを申し上げます。

姫様たちも、いろいろとご不自由な思いをされているのではないかと……。」

「ありがとう。まあ、父上は自分で望んで逝ったのだから気にしないで欲しい。

それに、もともと、父上の暇つぶしの反乱騒ぎなんて、母上も私も付き合う気は全く無かったし、女王陛下と対立する気もなかったからね。

その点は女王陛下にもわかって頂いているので、私たちの事も心配ご無用だ。

むしろ、オレは、王族がもっと自由にやりたいことができるように、聖王家典範を改めるといふ女王陛下の考え方には賛成だよ。

オレにもやりたいことがあるんだからね。」

「はあ……。」

茉莉香には、銀河聖王家のお家の事情は、自分とは縁のない「雲の上の話」であった。

「それで、あのう、チアキちゃんのことなんですけど……。」

みなさんの、そんな遠回しの言い方では、私には話が見えないんですが……。

チアキちゃんが、どうかしたんですか……。」

「もう、茉莉香さんだったら……。」

グリユーエルが言った。

「茉莉香さんも帝国軍の大佐ですから、御発言は慎重になさらないと……。」  
ヒルデも笑った。

「ピン、ポーン。」

その時、茉莉香の家の玄関ドアホンが鳴った。

「あれ？ お客さんかなあ。」茉莉香が言った。

「いや、オレの迎えの車が来たんだらう。」

帰るよ、大人しくね。

それで、加藤茉莉香大佐殿。最後のお願だから、オレを車のところまで護衛してくれないか。」

「あ、はい、わかりました。」

茉莉香は女子高の制服姿のままにもかかわらず、帝国軍式に敬礼した。

二人は並んで家の外に出た。

ドアの外には秘書のようなヒゲの男性が立っていた。

道にはリムジンが一台止まっているが、その前には何人もの人が待っている。

かれらは、護衛の警官やセレニティ軍人に制止されて、茉莉香の家の敷地には入れないようだった。

グロリア姫が茉莉香の家の敷地を出て歩道に立ち止ると、待つていた人々が一斉に話しかけてきた。

カメラの照明も点灯され、映像も録画され始めた。

「姫様、海明星新聞です。今回の海明星ご訪問の目的は？」

「いやあ、加藤茉莉香大佐に直接、父の反乱についてお詫びを言うために来ました。」

そう答えるグロリア姫の姿は、女の子が憧れる、爽やかでカッコイイものだった。

「姫様、海明星テレビです。芸能界にデビューするという噂は、本当ですか。」

「いやあ・・・ナハハハハ。」

姫は、茉莉香そっくりの、照れた苦笑いをした。

と同時に、さわやかで甘い高貴な香水の香りが漂い始めた。

その時、グロリア姫を囲んでいたマスコミ関係者の表情が変わった。それまでの緊張した表情が、しだいに憧れのスターを笑顔で見つめるファンのそれに変わっていった。

その変化をそばで見ていた茉莉香は思った。

『うわああ・・・。みんなの姫様を見る目つきが変わった。』

「ゴメンなさいね・・・。その質問は、聖王家の広報を通してください。聖王家のお許しがないと、何ともご返事ができません。」

「帝国ニュース通信社です。」

姫様が主演すると噂されている映画『宇宙海賊キャプテン・マリー』のモデルは、弁天丸船長加藤茉莉香さんと言われていますが、実際にお会いになつたご感想はいかがですか？」

「映画の主演の話はともかく、ごらんのように、茉莉香さんはとてもキュートで、そしてカッコイイ女の子ですね。

私もファンになりました。

しかも、今は、海賊船弁天丸の船長だけではなく、帝国軍史上最年少の大佐。

あのテオドラ皇后陛下よりも若い大佐ですからね。軍人としても天才ですよ。

ほんとうに、茉莉香さんは、スゴイヒトですね。

ねえみなさん。茉莉香さんは、銀河系一番の、カッコイイ女の子ですよ。

そうお思ひになりませんか、みなさん。」

「ナハハハ・・・」

グロリア姫に大げさに褒められて、さらにマスコミの人々の熱い視線を集めた茉莉香は、照れ笑いをするしかなかった。

「姫様、加藤大佐、お二人が並んでいる映像を取らせてください。」

「加藤大佐、敬礼のポーズをお願いします。」

「私は、女子高の制服姿なんです・・・。」

「かまいません。女子高の制服の方がいつそう加藤大佐の魅力が引き立つんです。」

マスコミの人たちから、二人はカメラ照明の光を浴びせられて、撮影が続いた。「それでは、この辺で取材を打ち切ります。」

聖王家と帝国軍の広報への映像使用許可申請は、私ども帝国芸能プロダクションを経由して一括で行いますので、こちらのアドレスにご連絡ください。

マスコミの皆さんには言うまでもないことですが、聖王家の方々に関する無許可放映は禁じられています。違反した記者・編集者・経営者に対する連座制の終身刑という罰則はこの取材にも適用されますから、まだまだ娑婆の空気を吸いたい方はご用心を。

それから、姫様のイメージを損なう映像や報道は、私ども帝国芸能プロダクションとしても絶対に認められません。

みなさんと私どもの営業は、古代から共存共栄。

そのところ、よろしくご理解のほど、お願いします。」

先ほど出迎えに来た秘書風のヒゲの男が、そうやってマスコミ関係者を威圧しながら、名刺を配っていた。

もつとも、その場にいたマスコミ関係者は全員、すでに姫の魅力の虜になっており、そんな心配は無用だったが・・・。

茉莉香は、グロリア姫が海明星に来た、本当の目的をようやく理解した。

『やっぱり、姫様は“聖王家の魔女”だぁ・・・。』



## 第十二章 茉莉香とチアキ 十八歳の誕生日

12—1 加藤茉莉香宅（海明星）

「カンパア~~~~イ！」

「カンパア~~~~イ！」

海明星の加藤茉莉香の家のリビングでは、ヨット部のメンバー全員が集まって、茉莉香のお誕生日のパーティが開かれていた。

「お待たせしました。バースデーケーキの登場です。」マミとハラマキが遅れて入ってきた。

「これ、ハラマキの手作りなの？」

「そうよ。なかなかでしょ。」

「うん、すごくきれいで、おいしそう。」

「じゃあ、歌、いきましよう。」ウルスラがローソクに火をつけながら、言った。

ハッピー バースデー トウ ユー

ハッピー バースデー トウ ユー

ハッピー バースデー デイア マリカ

ハッピー バースデー トゥー ユー

歌が終わると共に、茉莉香が口ウソクを吹き消した。それに対して、また拍手が続いた。

「茉莉香、お誕生日おめでとう。これは、私からのプレゼント。」

「私からも、これ。」

皆が、お誕生日プレゼントを渡した。

「ありがとう。うわー、これ欲しかったんだあ……。」

茉莉香は、包みを開けて、歓声を上げていた。

「茉莉香、あなたには帝国海賊の人たちも、お誕生会か何かをやってくれて聞いたらよ？」

チアキが言った。

「わあー、すごい。海賊のお誕生会ってどんなのですか？」

一年生たちが目を輝かせて聞いた。

「いやいや、お誕生会ではなくて、成人式。」

普通は、海賊の子として生まれた時に名付け親を決めて、その人がその子の後援者となるシキタリなんだけど、私の場合はそういう機会がなかったので成人式の時にまとめてやるという話らしいよ。」

「いよいよ、本物の帝国海賊だね、茉莉香さんも。」

サーシヤが言った。

「茉莉香、大丈夫？」

海賊の成人式の場合は、海賊らしく派手にバカ騒ぎをするらしいわね。

スカーレットさんは、あんなオヤジたちのバカ騒ぎなんか付き合つてられないと言つて、あきれてたわよ。」

チアキは笑つた。

「ナハハハ……。まあ事務局は弁天丸が中心で、私は祝つてもらう方なので、何も聞いてなくて……。」

「なにか、面白そうですね。」

グリユーエルが好奇心満々に聞いた。

今日は、グリユーエルとヒルデは、ママの作ったコツキー・シャネル風のメイド服を着ている。ヒルデは、やっとメイド服を着る機会が出来たので、嬉しそうにパーティのメイドとして動き回っている。

「いやー、私には全然、相談が無くて、サプライズと言うことになつてるのよ。」

長老さんたちは準備ですごく盛り上がっているらしいんだけど、何をやるつもりなのかなあ、ナハハハ……。

まあ、この宇宙時代に幽霊海賊なんか出てこないと思うけど・・・。

それはそうと、アイちゃん、今年のネビユラカップ、がんばってね。」

茉莉香が言った。

「ありがとうございます。」

アイ・星宮が答えた。

「今年の選手選考レースは、激戦だったよね。一位から五位までのタイム差は5秒くらいしかなかったってね。」

「一年生の実力がすごいわね。」

「そうなんです。結果は、上位三人が昨年通り、ナタリアさん、ヒルデさん、と私の三人で、4、5位は、一年生のジェシカさんとメリーさんでした。」

でも、今年は、団体戦もあるので、5人出場できます。よかったです。」

アイが言った。

「昨年の中等部ヒューゴカップ優勝に続いて、団体戦の優勝を狙います。」

ジェシカが言った。

「すごい、すごい、その意気よ。そうこなくちゃ。」

「それで、来年の部長は、ナタリアで決まりなの?」

「そうです。みんなの意見は決まっています。」

「みんながそういつてくれるなら、私がやるつもりです。正式就任はもう少し先ですが、私が部長になったら、お前ら、ビシビシしごくぞくぞく。」

「おおくくく！」

ナタリアの言葉に、元気な一年生たちが右拳を突き上げて応じた。

「あと、先輩方の追い出し航海も企画を考えていますので、お楽しみに。」

ナタリアが言った。

「アハハハ、そうよね。もう、そういう時期なのよね。」

そういえば、クリス先生、今頃、帝都の王宮でどうしているかなあ。」

窓の外、海明星の青い空を見上げて、茉莉香が言った。

「チアキちゃん、クリス先生っていえば、ウルスラから聞いたよ。」

射撃の命中率を競って賭けをしたらチアキちゃんが勝って、先生が罰ゲームに王宮のダンス・パーティーに5回出席するんだってね。」

リリイが話に加わってきた。

「だって、先生の方は、私が負けたらチョコパフェ3か月禁止って言ったんだよ。」

ひどいでしょ。私、もー、必死だったよ。」

チアキは、ダンス・パーティーの方から話題をそらそうとした。

「ハハハ、でもチョコパフェっていえば、この間のランプ館でのアレ、感動的だったね。」

「なに？ 私が一人でチヨコパフェを食べたこと？」

「またまた・・・話をそらす。プロポーズですよ、プロポーズ。」

リリイは笑って、チアキの話題転換を封じた。チアキのチヨコパフェによる話題転換作戦は『やぶ蛇』だったようだ。

「ああ、あれ・・・。あれは、彼が調子に乗って一方的に言ってきただけよ。私、何とも思っていないし・・・。」

チアキは、顔を赤くしつつも、ツンとして精いっぱい何事もないように振る舞っている。

「そう？」

今年の三年生の婚約一番星は、チアキちゃんだってもつぱらの評判だよ。

昔は卒業即結婚という先輩も珍しくなかったらしいけど、最近は進学が大半で、婚約ですら5、6年に1人あるかどうかって話だから、チアキちゃん、注目の的よ。」

「カマ、かけないでよね。何も出ないわよ。ほんと。」

「だって、ダンス発表会の後の噂では、チアキちゃんがここまで行くと予想した人は無かったよ。」

プロポーズの話聞いたダンス部の部長は、ショックで三日も学校休んだっていう噂よ。」

「リリイ、いい加減なこと言わないでよ。

ホント、何も無いんだから。」

やはり、チアキは、精いっぱい何事もないように振る舞っている。

12-2 宇宙海賊船バルバルーサ

宇宙海賊船バルバルーサは、まもなく目的の船を電子戦により捕捉し、海賊行為に移ろうとしていた。

しかし、ブリッジのチアキはすこし沈んだ気持だった。

それというのも、今日は18歳の誕生日。

この日は、茉莉香たちヨット部員が茉莉香の家でチアキのお誕生会を開いてくれるというので、楽しみにしていた。

ところが突然に、父ケンジョーから、その日にチアキを名指しした仕事が入ったという連絡があったため、中止になってしまったからだ。

チアキにとって、自分の名前で海賊ショーにデビュー出来るのは、確かにうれしい。初出演の時は、茉莉香の代役だったからだ。

しかも、今は、自分も帝国海賊のキャプテンだから、「キャプテン・チアキ」と堂々名乗ってもウソじゃない。

営業の相手は、新造の超豪華客船ローズ・ガーデン号という銀河帝国船籍の船。

また、いつものようにヒマな金持ちがいっぱい乗っているのだろうが、デビューの舞台としては申し分ない。

しかも、父ケンジョーの今回のショーに対する気合の入れ方はすさまじい。娘のデビューだからか、船員への演技指導も熱が入っている。自分のすべてを教えよう、伝えようという意気込みが感じられる。

衣装もすべて新調された。今日のチアキは、黒を基調としたクラシックな船長服を着て、肩に帝国海賊の印である黄金の罽褌をつけている。

この船長服が、父のものより、はるかに豪華な衣装であることは、一目でわかった。この服にかける父の思いが痛いほどチアキにはわかった。

これが大人になるということだろうか。子供のころは、海賊ショーで父が張り切っているのを見ると、自分もうれしくて、ウキウキしていたものだった。

だが、今日は、少し違和感がある。

その正体がわからないまま、チアキは営業に突入しようとしていた。

「電子戦、終了。」

「ドッキングブリッジ、連結します。」

チアキは、ドッキングブリッジのドアの前に、白兵戦用の防護服を着て、ケンジョー



と並んで立つた。バルバルーサでは、海賊営業のシヨーといえども、実戦並みにというケンジョーの考えに従って、防護服を着て、相手の船内に乗り込む。

父と並んでみると、チアキは言うべき言葉を思い出した。

「お父さん、今日で、私は18歳です。」

今日まで育ててくれて、本当にありがとうございます。感謝しています。

ノーラ、バルバルーサのみんなも、本当にありがとうございます。」

「……」

ケンジョーは何も言わなかった。顔も横を向いたままだった。

しかし、父の気持ちは伝わってきた。

もちろん、既にヘルメットを装着した防護服を着ており、誰もヘルメットを外して、涙

をふくわけにはいかないが……。

「与圧確認。間もなく、ドアが開きます。」

ドアが開き、相手の船に乗り込む道が確保された。

「よし、突入。」チアキが号令をかけた。

12-3 豪華客船ローズ・ガーデン号

チアキたちが防護服を脱いで衣装を整え、客船の大広間に到達すると、大広間の照明が落とされた。

「きゃー!」

「うわー、海賊が、来たんじゃないの。」

正面の大きな扉が少しずつ開き始める。空いた扉の隙間から、明かりがさし、水蒸気が白い煙となって漂ってきた。

闇に隠れて、十人ほどの人影が大広間の正面扉の前に整列し、正面階段の中央にチアキが立った。

そして、チアキにスポットライトが集中する。

「オーホホホ。」

宇宙海賊船バルバルーサ、キャプテン、チアキ・クリハラよ。

この船は今、我々に乗っ取られたわよ。」

「来た、来た。キャプテン・チアキ様よ。」

「チアキ様、きれい。」

「いよー、いいぞ、いいぞ」

「やっぱり、娘海賊は華やかでいいなあ。」

乗客たちから歓声が飛ぶ。

チアキが海賊の名乗りを上げると同時に、左右に並んだバルバルーサの海賊たちにもスポットライトが当てられていく。その中にケンジョーもノーラもいる。

今日の出演者には、派手な色のバンドナを身に着け、手に手に大きく光輝く蛮刀や古式ライフルを持った船員たちもいるかと思えば、士官のような制服に身を包んだ軍人風の海賊も並んでいる。それぞれに古代からの海賊というおとぎ話のイメージを大切にされた格好である。

それぞれに歓声があがり、興奮が増してゆく。

海賊たちは、チアキを先頭に大広間に進み出た。

いきなり、チアキが船の天井めがけて、ビーム・ガンを連射した。

「ひゃー……」

大広間に悲鳴とそして歓声があがる。

しだいに照明が明るくなっていく。

「いまのは、もちろん威嚇よ。船の安全には支障はないわ。

では、いつもの注意を言うから、よくお聞き。

私の指示に従う限り、皆さんの安全は保障するわ。

おとなしくこちらの言うことを聞けば、無事な身体と、本日デビューするキャプテン・チアキさまの指揮する宇宙海賊に襲われたという、歴史的な自慢話を持つてかえることができるわよ。

さあ、私に文句のある者はいるかい、いなければ、金品、貢物をお出し。

早くしな。」

その時、チアキより年上の若い女性が、剣を持って現れた。

「お待ちなさい、私は、宇宙海賊キャプテン・マリーよ。」

宇宙海賊キャプテン・チアキ、あなたに決闘を申し込みます。

私が勝ったら、乗客の皆さんの金品に手を付けず、しつぽを巻いて帰りなさい。

いざ、勝負！」

「キヤー！」

「マリー様あー！ がんばって！」

歓声上がる。

「なによ。名前からして、誰かのパクリじゃないの。」

「あなた、誰？」

「フッフ、私の正体があったら、誉めてやるよ。」

「ホント、命知らずのコスプレ女ねえ。私は本物の海賊よ。どうなっても、知らないわ

よ。かかってらっしゃい。」

「それは、こちらの台詞だ。」

キャプテン・マリーは、そういうと剣を上段に構えて、チアキに近づき、剣を振り下

ろした。

連続技が繰り出されるが、ひとつひとつの動きがカッコイイ。

「マリー様は、わたくしを見てくださったわ。わたくしだけを……」

ああ！」

アンドレア公爵家の四女シルビア姫がいつものように、夢見る表情で言った。

「シルビア、何度言ったかわかるの。」

貴方の感覚、ちよつとおかしくない？」

公爵家の次女ゴルディアが、あきれて言った。

「ゴルディアお姉さま、シルビアには、いつものことです。」

この間までは、茉莉香さま一筋だったでしょ。これも、そのうち熱が冷めますよ……

もつとも、茉莉香さんと違って、グロリアお姉様は怖いから、シルビアが飛び出さな

いように押さえていないといけませんわ。」

公爵家の三女サファイア姫が、シルビア姫の腕を捕まえながら、言った。

「サファイアお姉様、あの方は、私の愛するキャプテン・マリー様です。」

グロリアお姉様じゃありません。」

「ア……、ハイ、ハイ。」

サファイア姫は仕方なく、答えた。

チアキは、キャプテン・マリーの剣をはじき返すと、切り返した。

「なかなかの剣さばきね。でも、打撃が軽いわね。練習不足、パワー不足ね。さあ、今度は、こつちからいくわよ。」

チアキの渾身の打撃が、連続技で繰り出される。

たまたらず、キャプテンマリーは、後退を余儀なくされている。

つばぜり合いで近づいたとき、チアキは宇宙海賊キャプテン・マリーの体から、さわやかでかつ甘い香水の香りが漂ってくるのに気が付いた。

「この香り、どこかで嗅いだことがあるわ。．．．」

どこかしら。．．．」

チアキは、記憶をたどって、考えた。

『そうか、こいつは、このあいだのカマトト姫か。』

いつの間にか、茉莉香のキヤラを盗んで、カツコイイ女の子にバケたわけね。

ほんと、魔女というあだ名は本当だったわね。』

「わかったわ、あなたの正体。あなた、グロリア姫様でしょう。」

「フフフ．．．」

その時、また一人、仮面の女海賊が現れた。

「そこまで。」

交代だ。

キャプテン・マリーの剣では、チアキには通用しないよ。

キャプテン・チアキよ。私が誰だかわかるかな。

さあ。キャプテン・マリーに代わって、私が決闘の相手だ。」

女海賊の声は、仮面に仕込まれた発声装置から出ているらしく、その正体を隠していた。

「それにしても、変な声。うるさいわねえ。

とにかく、キャプテン・チアキ様が、まとめて相手になってやるわよ。」

二人目の仮面の女海賊が剣を打ち込んできた。

「コイツ、強い。

・・・ううう・・・」

二人は激しい攻防を繰り返して、大広間を動き回った。

剣と剣がぶつかり合う、カン高い金属音が大広間に響き渡った。

その真剣勝負に、あちこちから悲鳴と歓声が上がった。

やがて、二人は向き合って止まった。二人の額に汗が浮かび、息が荒くなっている。

「もういいでしょ。

先生、というか司令官、打ち込みのパターンがいつもの練習通りですよ。

だから、最初の一振りで、あなたが誰か、正体がわかりましたよ。」

二人目の女海賊も、口元に笑いをうかべた。

そこへ、三人目の仮面の女海賊が現れた。

「フフフ・・・そこまでだね。」

今日はチアキのお誕生日だから、このくらいにしな。

さあ、今度は私が相手だ。」

「私はキャプテン・チアキよ。あなたは誰？」

これは、海賊同士の決闘よ。名を名乗りなさい。」

「では。名を名乗ろう。」

私の名は、アンドロメダ。宇宙海賊アンドロメダだ。

さあ、キャプテン・チアキ、勝負だ。」

「アンドロメダ！」

チアキは、ついにアンドロメダと名乗る女海賊に巡り合った。

「アンドロメダさん。一つ聞かせてください。」

あなたは、ずっと前からその名前を名乗って、海賊をしていたのですか。」

「ああ、そうだよ。お前が生まれる前からさ。」

アンドロメダが登場した時から、チアキの後ろに控えていたケンジョー・クリハラが片手片膝について頭を下げ、臣下の礼を取っていた。バルバルーサの船員たちも、船長



にならった。

チアキは、探していた人がいきなり現れた驚きで、ケンジョーたちの行動に気づく余裕もなく、ただ立ち尽くしていた。

「それにしても、チアキの女海賊姿は、本当に可愛いなあ。

お前も頑張らないと、チアキに先を越されるぞ。フッフ。」

海賊アンドロメダは、二人目の女海賊を見て、微笑んだ。

「フン。妹に先を越されたとしても、それが何ですか。

私は私です。

「だいたい、今日やっと18歳になる娘が結婚を申し込まれたと聞いて、手放しで大喜びする親の方がおかしいです。

普通の親は、早すぎると言って、止めるでしょう。

そんなバカな親の顔が見たいものですね。」

相変わらず、負けず嫌いの女海賊が、口をとがらせて言った。

「いいのかい。」

「どうせ、そのおつもりで、母上は、皆さんをお呼びになったのでしょ。」

負けず嫌いの女海賊は、微笑みながら、そう言った。

「フッフ、では、バカな親の顔をお見せしよう。」

もうこの場にいる人々には、この人が誰か、明らかだった。

仮面の下から、銀河帝国の女王、アンが姿を現した。

だれも声を上げず、沈黙が支配した。

「チアキ、長い間待たせて済まなかった。私がお前の母親だ。」

チアキは、いろいろな思いが同時にこみ上げてきて、とっさに言葉が出なかった。

もちろん探し求めていた母に巡り合った喜び、お母さんと呼んで母の胸に飛び込みたいという気持ち湧き上がった。

他方、小さい時から、母を慕いながら母の不在を寂しく思う気持ちすら押さえつけてきた自分が、いとおしかった。哀れだった。

いくら詫びを言われても、簡単に母を許せないとも思った。

やがて、チアキは剣を取った。

「もお〜。長い間、小さい子供を放り出して、寂しい思いをさせておいて、このバカ親  
！」

チアキは剣を振りかざして、女王に突進した。

女王も剣を抜いて、チアキの打ち込みに応じた。

キ〜ン！と音を立てて、チアキの振りかざした剣が弾き飛ばされ、チアキの体もはじかれた。

「もう一度、もおくくく濟まんの一言で許すもんか！ このくくく！」

再び、チアキの剣と体がはじかれた。

「もう一度、このくくく、ばかくくく、お母さんのばかくくく!!」

チアキは、涙を流しながら、また突進していった。

チアキが突進を繰り返しているうちに、ケンジョーを始めとするバルバルーサのクルーは、大広間から風のように立ち去って行った。

何度目かの突進のあと、女王がチアキの剣を奪って放り投げ、チアキをしつかりと抱いた。

「チアキ……。」

「お母さん……。」

二人は、そのまましばらく動かなかった。

やがて、大広間の照明が明るくなった。それと同時に、ホールに集まっていた人々の本物の姿が現れた。

それまで、男女の一般乗客の姿をしていた人々が、ふっと消えて、美しいドレスや寶石を身にまとった女性たちの姿が現れた。

その中から一人の年配の女性が二人の前に進み出た。

「そろそろ始めてよろしいでしょうか、陛下。」

女王がうなずくのを確認して、その女性は、チアキに対してカーテシーの礼をして言った。

「初めまして、殿下。」

聖王家の女性たちで構成いたしますローズガーデンクラブの会長を務めております、エカテリーナでございます。

当クラブへのお越しを心より歓迎申し上げます。

では、古くからの習わし通りに、殿下のお誕生日のお祝いを始めさせていただきます。

みなさん、殿下の前に運んでください。」

公爵夫人が指図すると、ウェイターたちが、大きな、大きな誕生日ケーキを、これまた大きなワゴンに乗せて、チアキの前に運んできた。もちろん、18本のロウソクに火が灯っている。

そして、出席者全員が、女王とチアキの二人を囲んで、歌い始めた。

ハッピー バースデー トゥー ユー

ハッピー バースデー トゥー ユー

ハッピー バースデー デイア プリンセス チアキ

ハッピー バースデー トゥー ユー

歌が終わると共に、チアキがロウソクを吹き消した。それに対して、また拍手が続い

た。

「チアキ、お誕生日おめでとう。」

これは、私からチアキに誕生日のプレゼントだ。

天井を開け放って見せよ。」

女王がそう言うのと、再び照明が暗くなった。

やがて、大広間の天井が開き、宇宙空間の星空が見えてきた。

そして、星空の中から、鮮やかなピンク色の流線型の船が近づいて、ドッキング体勢に入ってくるのが見えてきた。

「どうだ。これが、チアキの船だ。名前は、ローズ・アロー2号。」

重力制御推進方式で飛ぶ、最新型の超光速巡洋艦だ。」

「はあ……。これが、私の船。私も茉莉香のように本当の船長さんになるのね。」

チアキは、わくわくする気分で、どんどん近づいてくる新鋭艦の姿を眺めた。

と同時に、入れ替わりに遠ざかってゆくバルバルサの姿があるのに、気が付いた。

オヤジはどこへ行くのかと、女王に振り返って問いかけようとしたとき、女王が小さな声で言った。

「ケンジョーのことは後で話そう。」

「チアキ、お誕生日おめでとう。」

次は私からのプレゼントだ。」

クリスティア王女が言った。

もう仮面は脱ぎ捨てているが、海賊衣装のままである。

「これを見てほしい。」

これは、チアキの一番大好きな写真だよね。」

王女は、一枚の写真を大広間の空間に大きく拡大して、見せた。

それは、赤ん坊のチアキがケンジヨウに抱かれた写真だった。赤ん坊のチアキは、満面の笑顔を浮かべつつ、抱っこをせがんでいるかのようにカメラの側へ手を伸ばし、身を乗り出している姿であった。

画像を操作しつつ、王女は話を続けた。

「チアキは母の写真を一枚も持っていないと言っていたが、私は、この写真の中に母上の姿が映っているのではないかと思った。

そこで、写真を分析して、探した。

その結果、面白いことが分かった。

この写真は、普通の3D写真ではない。惑星探査用の高精度カメラで撮られたもので、惑星軌道上から地上の小さなものを判別できる極めて高い解像度がある特殊な写真だ。

ならば、たとえば、赤ん坊のチアキの瞳に母上の姿が映つてはいないかと思い、画像を拡大してみた。

しかし、お前の瞳に映つた画像は、下手な細工で意図的に消されていて、判別できなかった。

「このとおりだ。」

王女はチアキの瞳の画像を拡大して見せた。

「ところが、ケンジョーの瞳には、カメラを構えるバルバルーサ副長ノーラの姿がはっきり映っていた。

しかし、その隣には誰もおらず、宇宙船の壁が映っているだけだった。

こちらは完璧な画像のように見えた。この画像がそうだ。」

王女はケンジョーの瞳の画像を拡大して見せた。

「でも、これは、不自然だろう。」

赤ん坊のお前をよく見ると、お前はノーラではなく、ノーラの隣の方へ手を伸ばしているのだからね。

それで、ノーラに事情を話して、聞いたのさ。

そして、元の写真は、彼女が嚴重に保管していたことがわかった。

それがこれだ。」

同じように見える写真が大広間の空間に映し出された。

そして、赤ん坊のチアキ、さらにチアキの瞳が、しだいにクローズ・アツプで映し出された。

「おお~~~~~」

大広間に集まっている女性たちから、期せずして声が上がった。

彼女たちは、その画像に誰が映っているか、一目でわかった。

チアキの黒い瞳の映像の中に、一人の美しい女性が、満面の笑みをたたえてチアキの方を見つめ、そしてチアキを抱きかかえようと手を伸ばしている姿が映っていた。

髪の色はブロンドだったが、その人の目鼻立ちは、チアキによく似ていた。

それは、若き日のアン王女の姿だった。

チアキは、自分の瞳に映っていた母の姿を見つめていた。

もちろん、赤ん坊のころの記憶はない。

しかし、この写真の中で、自分は母に見つめられているという直感は、間違いなかったことが分かって、ただ、ただ、うれしかった。

「ありがとうございます。あの・・・」

チアキは、クリステイア王女にそこまで言うのと、涙がこぼれてきて、言葉が続けられなかった。



「泣くんじやない。チアキ。お前らしくないよ。」

「私は泣いてなんかいません。何言っているんですか。」

「それを泣いてるっていうんだ。」

「泣いてるのは、貴方の方です。」

「私は泣いてなんかいるもんか。この通り、笑っているぞ。」

そういうクリステリア王女の目も涙でいっぱいだった。

「あらあら、姉妹だけあって、性格も似ていらっしやいますね。」

そう言つて、元公爵夫人は、女王を見て微笑んだ。

「フン。クリステリアのヤツ。」

私の若い時の写真をひっぱり出してきて、余計な恥をかかせよつて……。」

女王はそう言つたが、彼女の目も涙でいっぱいになっていた。

公爵夫人は、やはり親子だけあって性格も似ていると思つたが、何も言わず、にっこりほほ笑んだ。

その後もパーティは延々と続いた。

まず、銀河帝国聖王家の伝統に則つた正装に着替えた女王親子三人は、ローズガードンクラブの盛大な晩さん会に臨んだ。

銀河系の星々からえりすぐつた至高の美食の数々につづいて、デザートは「海明星風

テヨコレートパフェ」であった。チアキが喜んだことは言うまでもない。

その後、女王親子三人は、別室に移り、聖王家の各家族ごと出席者からあいさつを受けた。二人の王女を両脇に従えた女王は、聖王家の女性たちからのお祝いにうれしそうに答えていた。

とりわけ、反乱の首謀者であった公爵家のエカテリーナ夫人、長女のグロリア姫を始めとする四姉妹と女王一家三人との、本当に楽しそうなやり取りは、他の出席者の気持ちを安どさせた。

話題の中心は、もちろんチアキ姫の女海賊ぶりであった。

あいさつは長時間に及んだ。

出席者の誰もが、聖王家の反乱が血なまぐさい惨劇にならずに、収まるという喜びでいっぱいだった。

それまで、ローズガーデンクラブの人々、つまり聖王家の女性達は、女王が「恐怖の大王」となり、公爵の反乱に味方した聖王家の王族を粛正するという血の惨劇になることを恐れていたからだった。

女王親子三人は、パーティ終了後、艦内のセント・ローヤルルームに引き上げた。

女王は、疲れた様子を見せる娘二人に目もくれず、TV電話をかけ始めた。女王がアドレス帳も見ずに、番号を入力したところをチアキが見たら、きつと驚いただろう。

やがて、バルバルーサのブリッジに立つケンジョーとノーラが、画面に映った。

「やあ。今日は、私の願いをきいてくれて、本当にありがとう。礼を言う。」

「なにをおっしゃいます。陛下の御意、当然でございます。」

父の声を聴いて、チアキが電話のそばへ飛んできた。

「オヤジ。」

チアキの声を無視して、女王は話を続けた。

「やはり、行ってしまふのかい。」

「はい。船乗りには、なによりも自由が大切。私も自由な航路（みち）を選びますから。」

ケンジョーは少し身を乗り出して、言った。

「なあ、私も女海賊アンドロメダもお互いに約束を果たした。」

アンドロメダはヤバイ仕事で済んだら必ず帰ってくる、私はチアキが立派な大人になるまで命がけで育てるとね。

「そうだろう。」

画面の中のケンジョーは、チアキの方を見て言った。

「チアキ、お前は今日で18歳。もう立派な大人になった。」

チアキ、あとはお前の人生だ。お前の自由に決めればいい。

俺のことは心配しなくていい。

俺も俺の人生を自由に生きる、船乗りの男らしくね。」

「そうだろうなあ。やつぱり、お前は船乗りだなあ。」

「オヤジ、どこへ行くんだ。おい・・・。」

「チアキ、幸せにな。エドワードはいい男じゃないか、私も気に入っているぜ。」

「オヤジ、いきなり何を言うんだ。私は何も・・・」

チアキは顔を赤くして反論しようとした。

「ノーラ、今までの礼を言う。本当にありがとう。」

そして、ケンジヨーも自由なら、お前も自由だ。」女王が言った。

「ノーラ、大切な写真を長い間守ってくれて、本当にありがとう。幸せにな。」

いつの間にか背後にいたクリスティア王女がそういうと、無口なノーラの口元が少し微笑んだように思われた。

「では、これで、お別れのごあいさつとさせて頂きます。」

チアキ、探さないでくれ。

お前はお前の進むべき道を行け。

じゃあな。」

「おい、オヤジ!! オヤジ!! . . .」

チアキは目に涙をいっぱいためて、何度も叫んだが、答えは返ってこなかった。

ケンジョーとノーラは画面の向こうで一礼した。

それを最後に、通信は切れた。

その夜のうちに、聖王家の女性達からの「あなただけに秘密の話」が、光より速く銀河国内に広まって行つた。

それは、恐怖の大王の代わりに第二王女が現れたという、帝国の女性達にとってこれ以上ない程、興味深いニュースだった。

翌日、銀河聖王家は、第二王女、チアキ殿下の存在を公表した。父親の名前は公表されなかった。

同日、海明星行政府及び銀河帝国に、宇宙海賊船バルバルーサの廃業届が、ひっそりと提出された。

## 第十三章 幽霊海賊の秘宝

13—1 宴会場（パイレーツ・キャツスル船内）

レットクリスタル星域外延部の宇宙空間に帝国海賊の宇宙船パイレーツ・キャツスルが停泊している。その港湾区画には、今日は極めて多数の船舶が停泊している。今日は、パイレーツ・キャツスルの宴会場で、帝国海賊キャプテン・加藤茉莉香の成人の祝いが行われるため、招待客が大勢詰めかけているためである。

今日の成人の祝いは、帝国海賊八氏族の族長の呼びかけで行われる。呼びかけ人に八人の族長全員が名前をつられることは極めて異例で、普通は一人、せいぜい二人であるといわれる。これも加藤茉莉香の人気ぶり、あるいは彼女への期待の表れであると言われる。

弁天丸の船員たちは、今日は受付やら来客の応対やらで、非常要員以外は船から降りて、宴会の裏方に回っている。

シュニツツアーは「自分の姿は宴会向きではない」と言つて、居残り組に入っているが、その本音は「バカ騒ぎ」には興味がないためと思われる。

一方、ミーサは、なぜか帝国海賊にも顔見知りか極めて多く、受付に次々と訪れる海

賊の大物やそのジュニアらと親しく挨拶して、受付を仕切っている。こういうミーサを見てみると、その経歴に関する謎は、ますます深くなっていく。

宴会場の入り口には、

加藤茉莉香及びギルバート・モーガンを中心に左右に四名づつ八氏族の長、すなわち、ヴァイシユラ・キッド卿、

インドラ・クキ卿、

アグニ・チャン卿、

ヤマ・ブラウン卿、

ラークシャ・ガンジ卿、

ヴァルナ・モーガン卿、

ヴァーユ・スミス卿、

イシャーナ・クラーク卿

が並んで、来客の挨拶を受けている。

みな、儀礼用の海賊服を着た正装である。

「こうして、船長とモーガン卿の息子が、長老たちに囲まれて並んでいるところを見ると、まるで、今日は二人のためのパーティのようだなあ。・・・」

受付係の百目が、宴会場の方を見て、こうつぶやいていると、

「コラ、ムダ口をたたかないで、黙って、仕事、仕事。弁天丸にとつても、今日は大事な日よ」

ミーサが、少し叱るような口ぶりで言ったものの、来客とにこやかに会話を交わす茉莉香を見て、こうつぶやいて、微笑んだ。

「今日の茉莉香の海賊服姿、華があつてきれい。芳紀まさに18歳か、いいわねえ。

・・・ それにしても、娘の晴れ姿を、理莉香も見に来ればいいのに、鉄の髭さんともども欠席だなんて。」

成人の祝いは、形どおりに始まった。

司会は、弁天丸を代表し、ケインが行っている。

正面の席の中央に茉莉香とギルバートが並び、その左右に四人づつに分かれた長老がすわっている。他の参加者は、それぞれ指定された丸テーブルを囲んで座っている。

呼びかけ人の代表として、八族長の一人モーガン卿があいさつをした。

つづいて、乾杯に続いて、会食が始まった。

その間にも来賓のあいさつが行われた。

高齢の大物海賊たちから順に挨拶があつたが、それが終わると、三人の若者が挨拶に立った。



「元海賊ブルドッグの息子三人でございます。」

「私が長男のジョージです」

「次男のトムです」

「三男のエバートです。」

「今日はブルック王国国王になったオヤジの代わりに、茉莉香さんのお祝いに駆けつけました。茉莉香さん、ご成人、おめでとうございます。・・・」

と、あいさつを続けたが、

「さて、今、オヤジの代わりに来たと申し上げましたが、これは単なるごあいさつの名目に過ぎません。」

実は、先日、茉莉香さんたち銀河帝国の使節が自治条約の調印のためにわがブルック星系に来られた際に、私たち三人は、茉莉香さんに白い百合の花を捧げました。」

それを聞いた途端、会場から歓声、拍手、足を踏み鳴らす音、机をたたく音などが響き出し、それまで静かだった宴会場の雰囲気が一変してしまった。もちろん、白い百合の花の意味を全員が知っているようだ。

「それで、もし今日これから、勝った者が茉莉香さんを嫁にするというような勝負があるならば、ぜひこれに参加して他の参加者を粉砕し、われわれの思いが一番と言う『男の気合』を見せたい。そう思っただけでやってまいりました。」

もちろん、茉莉香さんが望むなら、私たち兄弟同士の間で勝負を決することも覚悟してまいりました。

茉莉香さん、私たちの気持ちは今も変わっておりませんよ〜。」

三人は立ち上がって、正面の宴席にいる茉莉香に向かって手を振った。

会場では、大歓声が湧き上がった。

「よし。よく言った。」

「そう来なくっちゃ。」

いよいよ、バカ騒ぎの時間が近づいてきたようだ。

茉莉香は、この様子を見て、ため息をついた。

「ナハハハ、王子さんたち……。でも、あくあ、海賊ってやつぱり、こうなるのかなあ。」

この時、隣のモーガンが微笑して言った。

「ご心配なく。宇宙時代のいまどき、そんな失礼なこと、しませんよ。」

そして、司会者であるケインが、騒がしくなった会場の人々に対してこう言った。

「え〜〜、お話が盛り上がっているところ、まことに申し訳ございませんが、本日、これから行いますイベントには、そのような趣旨のものはございません。」

もちろん、会場からは、「え〜〜〜!?!」という失望の声が上がった。

それを聞いて、急にケインはくだけた調子で言った。

「しょうがないだろ。実行委員会で男たちからそういう『冗談』が出たらさあ、いや、あくまで『冗談』だよ、『冗談』。そうしたら、うちの弁天丸のミーサが、さあ、『なにそれ。いったい女をなんだと思ってるの。』

誰？ そんなこと言っているの。』  
と、怒ったんだよ。

そんなことを、本気で言ってる人って、ここにいるかい？」

もちろん、誰も声を上げなかった。

「ミーサって、すごい。

帝国海賊さんたちも、みんな、ミーサの言うこと、聞いちゃうんだ。」

茉莉香は、目を見張る思いだった。

司会のケインは、話を続けた。

「それから、知ってる人は知ってるだろうけど、うちの船長は、第一王女様の副官になった時に『加藤茉莉香に関する勅令』によつて、結婚に関してはあらかじめ女王陛下の許可を得ることとされているんだよ。

だから、うちの船長と結婚するには、それ相応の度胸がいるってことよ。」

「えー！ 本当なの？」

茉莉香は、思わず声を上げて、周囲を見渡し、隣のモーガンと目が合った。

モーガンは、微笑んで言った。

「ご存じなかったんですか？」

「ご心配なく。女王陛下は茉莉香さんを娘のように大切に思っていていらつしやるんですよ。チアキ様と同じようにね。」

「やっぱり、例の勅令、最後まで読んでいなかったんですね。」

「だって、勉強科目とかいっぱい書いてあって、とても長いから……途中で、以下同じかなと思って……。」

「ナハハ……。」

茉莉香はまた苦笑いをした。

一方会場では、ケインは、口調を格調高く改めて、話を続けていた。

「それでは、本日のメインイベントを始めたいと存じます。」

もともと、私も弁天丸の加藤茉莉香船長は、親の都合で出生の際に海賊としての名付け親の儀式を行っておりませんでした。本日はその趣旨も含め、成人した加藤茉莉香の名付け親等を決める儀式を行います。

すでに、帝国海賊八氏族の各族長さんから、名付け親としての立候補を頂いておりますが、他に立候補のお申し出はございませんでしょうか。なお、立候補には、海賊宝箱

一杯の9999（フォーナイン）の黄金インゴットか、または海賊宝箱一杯のテオドラ金貨が必要とさせて頂いております。」

誰も返事はなかった。

そもそも、帝国海賊八氏族の全族長が、名乗りを挙げることで自体前代未聞の事態であり、彼ら全員が名乗りを上げている以上、他の海賊が名乗り出られるはずもなかった。「では、立候補を締め切ります。続いて、これより、名付け親争奪戦を始めます。以後の進行は、弁天丸のクーリエが行います。」

「えー、弁天丸のクーリエです。よろしくお願します。」

あいさつに立って一礼したクーリエは、メガネをはずし、金髪をなびかせ、鮮やかな青のシルク生地で作られたバニーガールの衣装を身に着けていた。彼女がスポットライトに照らされると大きな歓声が上がったが、それを無視して、クーリエは続けた。

「えー、では、まず第一回のゲームの種類を決めます。1ゲームで一人脱落のルールです。から、8人の立候補者のため、計7種類のゲームを行うことになりました。」

ゲームの種類は、公平を期すため、フォーチュン・ルーレットで決めます。では、ルーレットを回します。」

ルーレットが回りだし、白い球がカードと書かれた箇所で止まった。

「カードゲームです。カードゲームと言えば、ポーカーでしょう。」

それでは、以後のカードゲームの進行は、弁天丸のルカが行います。なお、ご来場のみなさんは、手元のタブレット端末をご覧ください。

失礼ながら、八長老のカードの腕前を評価して、勝敗にオッズをつけさせていただきます。これを参考に、さあ、みなさん、張った、張った！

お手元のタブレットのゲーム参加欄に、ご自分の海賊番号と、勝つと思う出場者の枠番号、そして掛け金を入力してください。

さあ~~~~~行きますよ~~~~。ギャンブル、スタート!!」

クーリエが宴会場の来客を扇動する間に、宴会場の中央に、緑の布を被せた丸い大型のゲームテーブルが運ばれ、八人が席についた。八人の立体映像が宴会場に映し出され、カードゲームをする各人の表情が宴会の招待客にもわかる仕組みになっている。

ルカが、シルクの白いワイシャツと黒のチョッキ、蝶ネクタイというカジノのディーラースタイルで、テーブルの上に、八人のカードを配り始めた。

クーリエは、来客相手の賭けをあと始めた。

「さあ、オッズが出ましたが、なんと、ポーカーに強いモーガン卿、最初の手札のオッズは1.0です。元返しでは海賊のギャンブルではありませんから、みなさん、モーガン卿以外の人に賭けてくださるようお願いしますよ。

さあ、誰が勝つでしょうか。張った、張った。」

つまり、この場合は茉莉香の名付け親を決めるカードゲームの勝敗とその勝敗に賭ける来客のギャンブルとの二重構造になっている。もちろん来客相手のギャンブルの胴元は弁天丸である。

ルカが、カードを配り終えた。もちろん、八人の立体映像からは、各人の手札の内容は、見えない。

「クキ卿、カードは交換いたしますか？」

「2枚、頼む。」

ルカが二枚のカードを配った。

「モーガン卿は、いかがいたしますか。」

「私はこれで十分。」

会場からは、どよめきが湧き上がった。

こうやって、カードの交換等が一巡したあと、クーリエが言った。

「さあ、会場のみなさん、賭けの投票はそろそろ閉め切りますよ。八人の顔色を読んで、賭けてください。・・・はい、締切。」

投票結果が出ました。なんと、ほぼ全員が、モーガン卿に賭けてます。これでは賭けになりませんね。」

八人は、掛け金のコールに入った。

「チップ、3枚。」「5枚」「降りた」「6枚」……

「初回だから、手短に行こう。勝負だ。」

「ワンペア」「ツーペア」……

そしてモーガン卿が言った。

「ストレート・フラッシュ。頂きだね。」

「ああ……。なあ、これじゃつまらんよ。普通のカード・ゲームじゃ、金を賭けると、昔から、モーガンは負けなしだからな。」

「だから、モーガン投資銀行は千年負け無しなんだなあ。」

これには、観客たちがどつと沸いた。

「あれ？　ここですらどうして笑うの？」

ゲームの成り行きを見ていた茉莉香は、ギルバートに聞いた。

「いやあ、オヤジの銀行は、昨年、株式相場の下落で大損したんですよ。それをネタにした皮肉ですね。」

ギルバートが苦笑して答え、茉莉香も微笑んだ。

「なあ、海賊ポーカーにしようぜ。」

これなら、モーガンのカード運の良さは勝負に関係ないだろう。もちろん、掛け金は一番負けた奴の一人払いだ。」



クーリエが言った。

「次回のゲームは、それでよろしいですか。ルールを確認いたします。海賊ポーカーは、インディアン・ポーカーと似ていますが、違いもあります。

プレーヤーは、引いたカード一枚を、カードを見ずに、額につけます。あとは自分以外のプレーヤーの札を見つつ、丁々発止、皆で駆け引きしながら、降りるか勝負かを決めます。

札の勝負は、カードの強さですが、ジョーカーが最強、キング13からエース1の順で数字の多い方が強いとさせて頂きます。カードのマークは問いません。数字だけで勝負を決めます。だから、エースが最弱ですね、お間違いない。

ここまではインディアン・ポーカーと似ていますが、賭け金は、勝った者の総取りではなく、負けた者の一人払いです。つまり、一番弱いカードを持つ者が、各勝者の掛け金と同額を払うというところが、海賊ポーカーの特色です。

なお、観客の皆様は、プレーヤーに対してプレーヤー自身のカードの内容を知られないように、ヤジにご注意願います。

では、ゲームを始めます。さあ、みなさん、張った、張った。」

「はい、カードを配ります。」

ルカが、一枚つつ、カードを配った。各人は、そのカードを額につけた。

その途端、観客から、ため息が出た。なんと、モーガン卿がスペードのエースを額につけていた。このゲームでは、最弱のカードだ。

「ええ、このゲームでは、誰が負けるかに賭けて頂きます。失礼ながら、オッズはこれです。」

「お〜。」

観客がどよめいた。モーガン卿のオッズは、50倍。彼が負ければ大穴。逆に言えば、勝つて当然と言うものだ。他の長老のオッズは、3〜5倍と低かった。

「さあ、張った、張った。」

「……はい。賭けの投票はここで閉めさせていただきます。」

投票結果はこの通りです。」

観客の持つタブレット端末に結果が表示された。投票結果も、オッズ同様、モーガン卿が負けることに賭けた者は少ないが、他の誰が負けるか投票は分散した。

「では、ゲームを始めます。」ルカが言った。

「ハハハ、これでは、モーガンはついに年貢の納め時だ。」

キッド卿が、モーガン卿が降りないように、彼を挑発した。

「ええ？ お前、自分のカードを知らないから、そんなことを言うんだよ。」

悪いことは言わん、降りろ。

投資コンサルタント業を営む俺様の言う通りにすれば、必ずもうかるぞ。」

モーガン卿の自虐的なジョークに、また観客たちがどっと沸いた。

駆け引きが始まった。もちろん、各人は自分以外ではモーガン卿が一番弱いと分かっているが、自分もエースを引いていると、二人負けになると言う心理戦になっている。

そして、八人は、掛け金のコールに入った。

「チップ、3枚。」「10枚」「20枚」「26枚」・・・

掛け金は、どんどん吊り上っていくが、降りる者はいなかった。

観客のどよめきが広がる。このままいけば、50倍の大穴だ。

「100枚」

「この辺で勝負にしよう。」

「では、皆さん、札をテーブルに下してください。」

大穴に賭けそこなった観客のため息が流れた。

クーリエが言った。

「モーガン卿の一人負け。負けの総額がチップ100枚をはるかに超えましたので、この試合はモーガン卿の敗北と決定しました。」

「ハハハ、金貨700枚の大負けだ。やっぱり海賊は、楽しくて良いなあ。」

長老たちの賭け事は、チップ一枚がテオドラ金貨一枚にあたるというのが相場であ

る。

モーガン卿は、なぜか上機嫌で席を外し、クーリエが試合を続けた。

「では、つぎの試合のゲームの種類を決めるため、フォーチュン・ルーレットを回します。

それ〜！・・・次は、酒です。

もちろん、酔いつぶれたり、飲めなくなったり、気分が悪くなつて席を外した者が敗者です。オッズはタブレットに表示された通りですよ。

・・・さあ、張った、張った。」

ルカが、海賊のクック船長の絵が描かれたボトルを持って、言った。

「男の酒と言えば、これよね。『海賊魂』こと、パイレッツ・スピリッツ。

すつきりした味で、45度の蒸留酒よ。アルコール度数はたいしたことないわ。ストレートで、何杯いけるかが勝負ね。」

これでは当たり前すぎでつまらないという皆さんには、弁天丸特製のワーム・スピリッツとか、スパイス・スピリッツも用意したわよ。楽しみね。フフフ・・・」

ワーム・スピリッツとは、銀河系の星々に住む昆虫やその幼虫のうち、特に奇怪な姿をしたのを酒につけたものである。味も奇怪だと言われている。スパイス・スピリッツも同様に銀河系の星々に自生する様々なスパイスを酒に付け込んだものである。辛いもの、苦いものが多い。いずれもパーティーの罰ゲームの定番である。

「では、一杯目だから、『海賊魂』からどうぞ。」

ルカが、それぞれのストレート用の小さめのグラスに『海賊魂』を注いだ。長老たちは、一気に飲み干した

「なかなか良い飲みっぷりね。さすが海賊の男。さあ、二杯目を注ぐわよ。」

二杯目も皆が一気に飲み干した。三杯目、四杯目、五杯目、六杯目・・・と、長老たちは、皆、簡単に飲み干した。

ルカは、自家製と思われるボトルを持ちだして、言った。

「う～～ん、『海賊魂』じゃあ、勝負がつかないかしら。では、そろそろ、行きましょうか。」

私の秘蔵の品を提供するわ。はい、これはアンタレス星系の青サソリの幼虫を酒につけたものよ。青サソリ酒は、ちよつと舌が痺れる苦さなんだけど、それがまた良いのよね。それで、自分でも作ってみたけれど、弁天丸の人は誰も飲んでくれないのよね。船長は未成年だし。

一応、毒抜きはできていると思うんだけど、毒見はまだやってないから・・・そういうことで・・・。」

アンタレス星系の青サソリの毒は、銀河系の生物毒では一番の猛毒として有名である。

これには、さすがの長老たちも、皆、黙って顔を見合わせている。  
この時、茉莉香がつぶやいた。

「ねえ、ギルバートさん。45度の酒って、強いお酒なの？ たとえば、火が付くくらいに、アルコールが濃いのかしら。」

この茉莉香のつぶやきを聞いたキッド卿は、即座に隣のブラウン卿に言った。

「おい、キャプテン茉莉香が、『海賊魂』は弱い酒じゃないかと疑ってるぞ。お前、久しぶりに『火吹き男』の秘技を、キャプテン茉莉香にご披露しろよ。昔みたいに。」

「・・・わかったよ。俺がやればいいんだろ。俺が・・・」

ブラウン卿は、『海賊魂』を口に含んで、ふうつと霧にして吹き出し、葉巻用のライター  
の火を近づけた。すると、吹いた霧から、ぼわつと炎が燃え上がった。これぞ、海賊の  
秘技『火吹き男』だった。

これを見た観客から、盛大な拍手が沸いた。

しかし、予想外に火の勢いが強く、ブラウン卿の口元まで火がまわり、髭が焦げた。  
「あちち・・・」。調子に乗り過ぎて、失敗だ。ハハハ・・・」

ブラウン卿は、口元を抑えて、席を外した。

この様子を見ていたクォーリエが言った。

「いま、ブラウン卿が席を外しましたので、彼をこのゲームの敗者とします。」

「なんだ、つまらないわ。毒見をしてもらおうと思って、わざわざ持ってきたのに……。」  
これを聞いて、ほかの長老たちが安どしたのは言うまでもない。

「では、つぎの試合のゲームの種類を決めるため、フォーチュン・ルーレットを回します。  
それ……！」  
……次は、弓です。」

……

その後、試合は、弓、ビリヤード、腕相撲、射撃と進み、最終試合は剣と決まった。  
「では、最後の試合を行います。最後の試合は、キッド卿とクキ卿の一騎打ち、剣による  
決闘いたします。」

勝敗の判定は、審判のルカが行います。

オツズはタブレットに表示された通りですよ。

……さあ、張った、張った！

最後の勝負ですよ、負けている人は一気に取り返しましょう。勝っている人も、全額  
を賭けて儲けをさらに増やしましょう。さあ、張った、張った！

……はい。賭けの投票はここで閉めさせていただきます。投票結果はこの通りです。」  
観客の持つタブレット端末に結果が表示された。投票結果は、オツズ同様、半々に分  
かれています。

ざわつく中で、ルカの緊張した声が響いた。

「試合開始！」

二人の長老は、意外に身軽で、素早かった。

中央のテーブルを片付けて宴会場の中央に作られた空間の中で、カン、カンと剣を交わす音が響きはじめると、観客もしだいに興奮し、声援もそれにつれてどんどん大きくなっていく。

「いいぞ、やれやれ！」

「そこだ！、右、右に回り込め。」

「もつと踏み込め！ 行け、行け！」

「ええ!? 二人は、真剣で勝負しているんでしょう?」

茉莉香は、心配そうな顔をして、隣のギルバートを見た。

「そうです。二人が使っているのは、真剣ですよ。」

「防具も付けずにやるなんて、危ないじゃないですか。怪我でもしたら・・・。」

やがて、茉莉香の心配が的中した。クキ卿の突き出した剣が、キッド卿の胸に深々と突き刺さり、激しく出血した。

「ううううう。」

苦しそうな声を上げて、キッド卿は床に倒れた。

「ええ〜!、大丈夫ですか。ミーサ、応急処置をお願いします。」



茉莉香が、倒れたキッド卿に駆け寄ろうとしたが、彼を突き刺したクキ卿が茉莉香の前に立ちほだかった。

「ご心配なく。倒れたのは演技で、すぐに立ち上がるよ。」

刺されたキッド卿は、胸に剣を突き刺したまま、立ち上がってきた。

「大丈夫、剣が胸に刺さっても、帝国海賊は、死なないよ。」

キッド卿は、自分で胸に刺さった剣を抜いてみせた。剣は黒い血のようなものが、べつとりついていた。

それを見た茉莉香は、少し冷や汗をうかべて、言った。

「・・・まさか、皆さん。サプライズとか・・・。」

「いいや、俺たち帝国海賊は、千年前にみんな死んでるから、二度と死ねないだけさ。」

「だから、不老不死だ。」

さあ、キャプテン茉莉香、貴方には青サソリの毒で作った酒をオススメするよ。

これで、貴方も18歳の若さ、美しさそのままで、不老不死になるんだよ。

いいだろう。

そして、ここにいるみんなは、今日は、キャプテン茉莉香が我々の仲間になるお祝いをするために墓から出てきたんだ。実は、この船は、千年前から帝国海賊の墓場なんだよ。

これが、帝国海賊伝説の秘密さ。分かっただろう。

さあ、青サソリ酒を召し上がれ。」

キツド卿は、青い酒をついで、青く輝くグラスを茉莉香に差し出して、勧めた。

そういう彼の顔には、次第に髑髏の白い骨格が浮き出てきた。

茉莉香は、宴会場の海賊たちを見回したが、皆、突然、骸骨やらゾンビやらの奇怪な姿に変身していた。いや、この場合は、元の姿に戻ったと言うべきだろう。

茉莉香は、目の前に近づいてきたミーサ、ルカたち、弁天丸のクルーを見て、言った。

「え、え〜〜！ ミーサたちも幽霊だったの？」

「ごめんね。一足先にね。：だつて昨晚、ルカが、青サソリの酒ではなく赤サソリの酒なら毒が無いから大丈夫というんで、みんなで飲んだのよ。」

そうしたら、こうなつちやつた・・・どうやら、間違えて青サソリの酒を飲んじやつたらしいわ。」

そういうミーサや弁天丸のクルーの顔は、しだいに白と青に変色し、やがて不気味なほど鮮やかな白と青で塗り分けられた隈取の顔になった。

「え、え、ギルバートさん！ 助け・・・て・・・」

茉莉香は、振り返ってギルバートに駆け寄ろうとして、立ち止まり、言葉を飲み込んだ。目の前のギルバートの顔にも、白と赤の隈取がしだいに浮き出てきた。

「え、え、ギルバートさん！ あなたも、幽霊海賊だったの……？」

茉莉香は、呆然として、ギルバートを見つめていた。

ギルバートも黙って、茉莉香を見つめていた。

「……………」

そして、ギルバートは言った。

「もうやめましょうよ。見てられませんかよ。」

茉莉香さんは、やっぱり怖がってるじゃないですか。」

「ダメじゃないの。最後までシナリオ通りにやらないと、『ホラー映画・幽霊海賊の秘宝』は、茉莉香のお気に入りのストーリーなのよ。」ミーサが言った。

「裏切り者。やっぱり、茉莉香の側についたわね。」ルカが笑った。

「ウフフフ……」クーリエは、笑いをこらえている。

この時に、ギルバートや弁天丸のクルーの顔色が一斉にいつもの通りに戻った。宴会場の海賊たちも、全員、元の顔色、元の衣装に戻ったことは言うまでもない。最新の光学迷彩技術により、変身していたようだ。

「ええ……！ みんなで幽霊に変身して、私を脅かした訳なの？」

茉莉香の胸の中には、ほっとした気持ちと、バカ騒ぎと笑い飛ばしたい気持ちが湧き上がってきた。

しかし、手元に給仕ロボットが、大きくて丸いクリームパイをたくさん運んできたのを見つけると、まったく違う衝動が湧き上がってきた。

「もう~~~~~！ 許してあげない。私は幽霊が苦手なのよ。それ知っててやったでしよ。」

それ、ちよつとひどいよ。もう。

ええい~~~~~！ それ！

もう~~~~~！ 私が笑って許すと思つたら、大間違いですからね・・・」

茉莉香は、クリームパイを手に取ると、帝国海賊の族長たちに向けて、次々と投げつけはじめた。パイは、次々に彼らの顔に命中した。

族長たちは、投げつけられたパイを手に取ると、「お祝い返し」「御裾分け」などと言って、茉莉香の方ではなく、宴会場の海賊たちに向かって、投げつけた。

これを合図に、宴会場の海賊たちがパイ投げ合戦を始め、宴会場中にパイが飛び交った。宴会場の中では、ブルック王国の王子達が周囲の海賊から集中攻撃を受けていた。

「キャプテン茉莉香を嫁にするだとお、10年早いわ。えい~~~~~！」

「何を言うか、100年早いわ。えい~~~~~！」

「1000年早いわ。え~~~~~い！」

もちろん、王子達も負けていない。すぐさま投げ返している。

「何を言うんですか。私たちの『男の気合い』を見せてやる。」

「負けませんよ。えい！」

「茉莉香さんのためなら．．．えい！」

こういう調子で、宴会場のパイ投げ合戦は続いた。給仕ロボットが次々とパイを運んでくるので、投げるパイが無くなるからだ。

『海賊のバカ騒ぎ』とは、これだったのかあ．．．。

茉莉香は、その様子をしばらく呆然と見つめていた。そして、つぎのターゲットである弁天丸のクルー達の姿を探したが、既に逃げられていた。しかし、ギルバートは、逃げてずに茉莉香の側近くに立っていた。

茉莉香は、一瞬、迷ったが、

「もお〜、なんかわかんないけど、あなただけは、許せないっていうか、腹が立つというか．．．」

と言って、やはり、ギルバートにパイを投げつけた。

パイが顔に命中したままで、ギルバートが言った。

「ゴメンさいね。やっぱり、怖かったんですね。」

「そういうことじゃなくて、なんというか．．．」

「でも、茉莉香さん、映画『幽霊海賊の秘宝』の結末はどうなったか、覚えてますか。」

「あれは、確か、ヒロインが秘宝を手に入れて、ハッピーエンド……。」

そういうしながら、茉莉香は、左手を腰に当てて、右手でVサインをして、にこやかにパツピーエンドのポーズを決めた。

こういう姿を見せると、「加藤茉莉香は、ホラー映画が大好き」と誤解されてしまうのだが……。

「そうですね。だから、私たちも、あなたにプレゼントする『帝国海賊の秘宝』は、ちゃんと用意してますよ。こちらは、みんな本物ですよ。」

ほら、弁天丸のみなさん、運んできてください。」

弁天丸の百目や三代目が、大きな台車に乗せて、沢山の海賊宝箱を運んできた。

その箱の一つを開けて、ギルバートが言った。

「ほら、黄金と宝石がぎっしり。テオドラ金貨が詰まった箱もありますよ。」

「うお〜、すごい、すごい。うわ〜。」

金貨や宝石を手にとって、たちまち機嫌の直った茉莉香が、族長たちの方を見ると、キッド卿が、顔や衣服にパイのクリームをいっぱいつけたままの姿で、茉莉香に近づいてきて言った。

「キャプテン茉莉香、成人した貴方を帝国海賊の一員として歓迎します。」

そして、貴方の後援者として、我々八人が、先ほど決めた順位に従って生涯、貴方の

力になることを誓います。

これは、古くからのしきたり通りに、そのことなどを記録した羊皮紙です。すでに私たちはサインしてしますので、貴方のサインをください。」

茉莉香は、また中身も読まずにサインした。

「さあ、これであなただも大人の仲間入り。おめでどう、キャプテン茉莉香。」

ここにある『お宝』は、私たちだけでなく、この宴会場にいるすべての人たちからのお祝いです。どうか、お納めください。」

「おめでどう!!」

宴会場の隅々から歓声が上がった。

「あ、ありがとうございます。みなさん。」

### 13-2 弁天丸のブリッジ

成人の祝いを終え、弁天丸は、次の仕事に向けて航海中である。ブリッジでは、茉莉香とクルーたちが「成人の祝い」について話していた。

「ミーサ、あれはないよ。本当に怖かったんだからね。私、そのことは、まだ怒ってるからね。」

「私じゃないわよ。そんなくだらないことを考えたのは。」

たぶん、茉莉香が帝国海賊の人たちが幽霊だったら面白いかなあって、何回も言ったでしょ。だから、それを聞いた実行委員会の人たちが、ひとつ、茉莉香の期待に応えて面白くしようと思つて、考えたんじゃないのかしら。フフフ。

それとも、勝者があなたを嫁にするというゲームの方がよかつたかしら・・・」

「自分で相手を決められないなら、それもいいかも。」ルカが言った。

「何、言ってるんですか。今時、そんなのありえないつて、ミーサも言ってくれたんですよ。それに、私、幽霊を面白いなんて言つてませんよ。嫌がつてたんですよ。」

「ハハハ、でも、茉莉香ちゃん、ゲームと一緒にやった賭けでは、胴元の弁天丸は大儲けよ。ざっと金貨2300枚の儲け。すごいわねえ。お祝いにもらつたお宝と合わせるよ、船が一隻、新しく作れるくらいのお金になるかしら。」クーリエが言った。

「そうねえ。頭金くらいにはなるんじゃないかなあ。それにしても、ものすごく沢山のお祝いをもらつちやつたわね。」

「それだけ、期待されているつてことよ。」ミーサが言った。

「幸い、船長の帝国海賊としての免許はほとんど制約がないから、船の新築もできる。私掠船の免許とは、大違いだな。重力制御推進方式の新型船をつくることもできるだろう。弁天丸二世号ができるな。」シュニッツァーが言った。

「それもいいかも。あれ、速いものね。」



この前、グランドマザーに乗せてもらった時、ほんとびっくりしたわ。あんなのが、銀河系をうろつきだしたら、宇宙航海が、まったく変わっちゃうね。私たち海賊は、どうなるのかした。」クーリエが言った。

「その点は、船長として、じっくり考えてます。」

「はいはい。それはそうと、例の羊皮紙の契約書、最後まで読んだ？」

後見人のことが書いてあるんでしょ。また、何か面白いことが書いてあっても、知らないわよ。フフフ……」

「ええ!? ……ヤバイ! ヤバイ! ヤバイ!」

まだ読んでないわ。船長室の金庫に入れっぱなし。すぐに持つてくるわ。」

やがて、茉莉香が、羊皮紙の契約書を読みながら、戻ってきた。

「ええ……!」茉莉香が言葉を失っている。

「どうしたの? 見せて、見せて。」クーリエが言った。

クーリエは、茉莉香が手渡した羊皮紙を読んで、言った。

「アハハハ、面白いわあ。やっぱり名付け親を決めてたんだあ。」

「どれどれ……」とミーサやルカも羊皮紙を覗き込んだ。

「アハハハ、なるほど、茉莉香が産んだ子供にも八人の名付け親が決まっているんだ。茉莉香、これじゃあ、子供は最低八人生まないとね。」ミーサが微笑んだ。

「それについては、『加藤茉莉香は、誠心誠意努力する』とも書いてあるわね。」ルカがそういう言つて微笑んだ。

「茉莉香ちゃん、頑張らないとね、八人だつて。」クーリエが笑つた。

「ナハハハ・・・」

茉莉香は、苦笑いして、ごまかした。

「でも、これつて、おかしいわよ。宴会の時は、私の名付け親のことしか言つてなかったよねえ。ケインが司会をした時に、そう言つてたでしょ。」茉莉香が言つた。

「いいえ。私は、ちゃんと『成人した加藤茉莉香の名付け親等を決める儀式』と言いました。『等（など）』と言う言葉を、ちゃんと言いましたよ。船長、聞いてました？」

ケインが言つた。

「ええ、何、それ。」

「それが大人の言葉づかいよ。茉莉香。」ミーサが笑つた。

「そんなの、あり？・・・うーん、

それに、私の子供の名付け親八人の順番は、なぜ最初にモーガン卿が出てくるの？

あの人が、一番最初にカードゲームで負けたから、最下位のはずでしょ。なぜなの？」

茉莉香が言つた。

「え!？」

女三人が同時に叫んで、茉莉香の顔をじっと見つめた。

「え？ 三人とも急にどうしたの？ まさか、あの勝負、八百長だったの。」

「失礼ねえ、ショービジネスと呼んでほしいわ。」ルカが言った。

「話はそつちの方向じゃ無いでしょ。クフフフフ……。」

クーリエが笑った。

## 第十四章 海賊の力 茉莉香、帝国軍を破る

14-1 弁天丸

弁天丸は、ミルキークウエイ計画のテストのため、時空トンネル内を航行していた。弁天丸は、重力推進機関を持っていないが、時空トンネルのゲートを経由して、時空トンネル内に入っている。

今、ブリッジの立体スクリーンには、電磁波によるレーダーの映像の代わりに、重力波に対応した時空間ナビゲーション・システムの映像が投影されていた。

「この時空ナビって、すごい発明だねえ。少尉たちが開発したんでしょう。」

こいつがあると、いま、時空トンネルのどの辺を、どこに向かって飛んでるか、すぐわかるのね。」

クーリエが言った。

「クーリエさん、正確に申しますと、時空トンネル内は時間の流れを含めて四次元ベクトル空間であり、それをわかりやすいイメージ映像で表示しているだけで、三次元空間としての位置を表示しているわけではないんですが……。」

「ブラウン少尉、そういう正しい説明はいいから……。」

「俺もこいつには驚いたよ。」

通常空間では、どこを飛んでいるか常に正確に分かるんだよね。

これまでは、超光速跳躍の時には、通常空間へ復帰した位置の座標を、事前の計算予測値と周辺の星座とを照合して、コンピュータが再計算していたけどなあ。

でも、これでは大昔の天測航法の原理と同じで、進歩していないんだよな。

これに対して、時空ナビは、銀河系の中心などの高重力源からの重力波を感知して、位置を測定する仕組みだっけねえ。すごいねえ。」

ケインも感心した声で言った。

「ではそろそろ、テスト開始の秒読みです。」

10、9、8、7、6、5、4、3、2、1、0。

時空トンネルへのエネルギー供給停止。

弁天丸、通常空間へ射出されます。」

ドーンと言う衝撃波を発しながら、弁天丸は通常空間へ出た。

「時空ナビゲーター、正常に作動中。現在位置、計測開始中。」

突然、時空ナビの警報が鳴った。

「重力の異常傾斜を確認。」

現在位置は、B-52ブラックホールの要警戒重力圏内だ。」

「ええ？　大丈夫？　事前の予定よりかなりブラックホール寄りにタッチダウンしたの？」

茉莉香が言った。

「そのとおりのよ。時空ナビの位置データを確認したわ。これは、かなりヤバイ距離よ。」  
クーリエが言った。

「全速力でも逃げ切れるかしら・・・推進剤が持つと良いけど。」ルカが言った。

その間にも、警報は鳴り続けている。

それどころか、ブリッジの照明も点滅して、非常事態を警告している。

「ええいっく。ぶちぶち言わないの。」

ブラックホールと正反対の方向に、超光速跳躍。大至急。

いつも通りてきばきと、茉莉香が言った。

「おもしろいねえ、船長の言うことは。ブラックホールの近辺では、超光速跳躍は危険だというのが常識なんだけどね。正反対の方向なら大丈夫だろうってかあ・・・フッフ」

「超光速跳躍、セットしたわ。」

「弁天丸、飛びます。」

「了解。」

やがて、弁天丸は、平穏な通常空間へタッチダウンした。

「ふう〜つ。ちよつと緊張したなあ。」茉莉香が言った。

「さすが、弁天丸ですね。あそこで超光速跳躍とは大胆ですね。」

銀河帝国の技術士官ブラウン少尉が言った。

「そんなことより、仕事の話でしょう。」

今回、弁天丸が有人機として初めて時空トンネルの非常脱出テストをしたわけだが、やはり緊急排出されてタッチダウンした位置が、事前の予測よりも高重力源の方向にずれるという欠点が残っている。

前回の無人機のテスト結果からあまり改善されていない。」

シュニツツアーが言った。

「申し訳ありません。そうなんですよ。」

弁天丸のような船ならともかく、普通の船じゃあ、ブラックホールからうまく脱出できなくて、飲み込まれる場合もありますね。」

「それは、冗談では済まされない問題だ。」

時空トンネルを民生用に使うには、下手な操縦でも無事に帰還できるような、高い安全性が求められるはずだ。

こうすれば安全に脱出できるという方法を、時空トンネルのシステム側か、飛んでいる宇宙船の操縦側か、どちらかで考えないといけない。」

「ねえー、時空トンネルが崩れて亜空間から飛び出る前に、亜空間から自分で超光速跳躍して好きなところへタツチダウンできないの？」茉莉香が言った。

「それができれば、問題ないんですが……。」

そもそも亜空間と言うのは、通常空間と同じような三次元空間ではないのですよ。超光速跳躍によつて離れた2点間を飛び移るときに、外の宇宙空間と高速で移動する宇宙船の中の空間とは時間の流れが違っているわけです。

その時間の流れのずれを、宇宙船の搭乗者の意識では、空間を移動していると認識している訳でして、その移動していると感じる空間を亜空間と呼んでいるわけです。

ですから、亜空間は、いわば人間の頭の中での仮想空間でして……。」

「わけわかんないなあ、その説明。だって、実際に、空間を飛んでいるように感じられるもの。」

「ブラウン少尉、もっと船長に分かりやすい説明を考えておいてね。」

「そうですかあ。この説明は、女子高生どころか、『サルでもわかる』と好評だったんですけど……。」

「ええ！……私は、サル以下かあ。」

それにしても、そんな言葉でブラウン少尉を誉めたのは、……まさか、ウルスラじゃないでしょうね。」



茉莉香が少し意地悪そうな顔をして言った。

「え!?・・・」

ブラウン少尉は、顔を赤くした。

「それより、今回の弁天丸のやり方を分析して、通常空間に復帰後、危険な空間だと分かればすぐに自動的にジャンプする操縦プログラムでも考えた方が、実用的じゃないの。」

クーリエが言った。

「そうですね。今回の実験データを分析して、考えます。」

「それだけじゃなく、時空トンネルのシステム側でも、もつと安全なところへタッチダウンできるように、壊れかかった時空トンネルをコントロールできないのか。」

これが本筋の解決策のはずだが。「シユニツツアーが言った。

「おっしやるとおりです。その点はまだまだ・・・」

今回は、加藤大佐がお乗りになる船だというので、安全の上にも安全を確保せよという上からの指示もあって、プログラムをずいぶん改良したつもりだったんですが・・・。「帝国軍も、茉莉香がかかわると大変そうですね。」

でも、貴方の方も、ここまで宇宙を変える大仕事を成し遂げたなんて、とても立派。ハナマルをあげたいわ。

ところでウルスラちゃんのこと、聞いたわよ。おめでとう。よかったわね。」

ミーサが、にっこり笑って言った。

「え、え、・・・」

ブラウン少尉は顔を真っ赤にして、口ごもったが、一気にこういった。

「ミツキー船長に『思い切って告白しろ』と励まされたんで、いろいろ考えたんですが、『好きです。交際してください。』って言っても、彼女が士官学校に入学すると彼女の気持ちがある後どう変わるか分からないし、やっぱり結論から言うのかなと思って、思い切って結婚申し込んだんです。」

「えっ・・・!!」茉莉香が驚いて声を上げた。

「そうしたら、彼女は即答で、OKだったんです。」

うれしかったなあ。

もちろん、今は婚約だけで、正式に結婚するのは彼女の士官学校卒業後にするつもりですが・・・。」

「ええ~~~~~~~~!!」

茉莉香は、さらに驚いて大きな声を上げた。

「あら、そこまで話が進んでいたのね。」

私は、ウルスラちゃんの帝国軍士官学校の入試合格おめでとうって、言ったつもりだったのよ。家庭教師、ご苦労様ってね。

でも、よかったわね。おめでとう。」

ミーサが、驚いたふりをして微笑んでいる。

「しまった。加藤大佐は、ご存じなかったんですか。引つかかったなあ。

彼女から、白鳳女学院高等部卒業までは言うなど口止めされてたんですけど……。彼女に怒られます。どうしましょう……。」

ブラウン少尉は本当に困った顔をして、ミーサに助けを求める眼差しを向けていた。「大丈夫よ。」

女がこんな良い話を黙っていられるはずはないわ。

友達より先に婚約や結婚が決まったなんて、一生で一番良い自慢話なんだから。

船長が今度学校に行くときには、学校中みんな知っているわよ。」

ルカが、冷静な表情で言った。

「私もそう思う。フフフ……」クーリエが言った。

「でも、みんな、びっくりするだろうなあ……。ウルスラが婚約の一番星になったんだからねえ。」

「茉莉香、笑ってる場合じゃないわよ。あなたは卒業までにどうするの。」

「ええ……？ 私？ だって私は何も『お話』は来てないし……。」

海明星に帰った加藤茉莉香は、日課となっているギルバートからの講義を聞いていた。もちろん、講義は、超光速回線で海明星にいる茉莉香と帝都にいるギルバートとを結んで行われる。今日のテーマは、帝国軍の軍事演習の進め方である。

帝国軍の軍事演習の進め方は、第一部として、まず、コンピューターシミュレーションで軍事演習の様々なシナリオを検討して、第二部では、決定したシナリオをもとに、実際に艦隊を動かして軍事演習を行うというものである。

近々おこなわれる軍事演習では、茉莉香は第一部から第二部まで帝国軍参謀本部の作戦司令室で軍事演習に参加する予定である。第二部では弁天丸も標的船を務めることになっているが、その際の船長役はミーサに任せることにしている。

これは、一度、帝国軍の軍事演習を帝国軍の側から見る経験をしてほしいというギルバートのアドバイスを受けたものだ。

講義が終わった後は、いつものように帝国海賊の話になった。

「それで、帝国の独立戦争が終わって平和になった後は、宇宙海賊さんたちはいろんな仕事について生活していったといわれますけど、それぞれの生きる道をどうやって見つけたのですか。モーガン家は、なぜ金融業を選んだのですか。」

「それはいろいろな事業を行った結果でしょうね。最初から金融業だったわけではありませんよ。」

最初は、やはり辺境宇宙での資源開発でした。それで成功して、稼いだお金やほかの人の金をもとに、自分の資源開発だけでなく他の会社の資源開発事業も応援したりして、次第に投資信託銀行業というか、金融的なところが大きくなっていったんです。そこを我が家が受け持ったということです。

だから、今も、一族の中には辺境宇宙の資源開発をやっている家や、船を持ちつづけるために運送業や警備業をやっている家もありますよ。

船を持つ家の営業の実態は、たぶん茉莉香さんの弁天丸と似ているでしょう。」

「その辺は、そうでしょうね。」

でも、それぞれの仕事についても、昔の海賊としての意識を今も持ち続けることができた秘訣と言うか、秘密と言うか、そこが今一つピンと来ないんです。」

「つまり、それだけ実業をやっているれば、いつのまにか普通の実業家になってしまうだろうということですか。」

「そうですね。そういうことでしょうか。」

「それなら、一度、私の家にお越しく下さい。母や祖母も、前からあなたに会いたがっていますので、ちょうどいい機会です。」

私の家には先祖の歴史とその思いを伝えるための仕掛けがいっぱいあります。これがあるから、我家は海賊としての誇りを受けつづけることができたともいえるんです。

私の家を見れば、モーガン家が宇宙海賊として千年続いた秘密を納得していただけると思いますよ。」

「やっぱりモーガン家にお邪魔する必要があると・・・ううむ。」

茉莉香は即答を避けて、別の話題を持ち出した。

「それからもうひとつ、今までなかなか聞きづらかったことを、聞いていいですか。」

「どうぞ、聞いてください。」

モーガンは、笑顔で答えた。

「あのう、モーガンさんが帝国軍人になったことも、海賊の家の息子であることと関係しているんでしょうか？」

「そうですよ。大いに関係しています。銀行家の息子なら銀行員になるのが当たり前で、軍人になるとは限りませんからね。」

逆に茉莉香さんにお聞きしますよ。

茉莉香さん、モーガン家が宇宙海賊としての力を保持し続けるためには、なにが必要だと思いますか。」

「船かなあ・・・あ、そうか、人ですね。」

「そうです。なによりも人材です。一族の中で軍事、武術や航海に精通している人材を常に育てて、維持する必要があるでしょ。」

そのためには、平和な時代では帝国軍とかかわりを持つ、つまり軍人になるのが必要不可欠ということなんですよ。」

「やっぱりそうなんですな。」

私、16歳になるまで自分が宇宙海賊の娘だなんて知らずに育ったもので、その辺のところがよくわからないんです。

加藤家の伝統と言っても、教えてもらったのはポトフの作り方くらいで、あとはコンピュータに入ったデータだけというのでは、今一つ実感が無いというか……。

でも、加藤家のポトフ、とってもおいしんですよ、へへへ。

だから、そういう海賊の家の伝統を背負って堂々とやっている人たちって、すごいなあと思うんです。」

「それなら、なおのこと、クリスタル・スターのモーガン家にお越しく下さい。我が家はこの目で見て頂くと、納得できますよ。」

それから、加藤家のポトフ、いつか必ずごちそうしてくださいね。」

「わかりました、ご馳走しますよ。」

でも、ちよっと恥ずかしいなあ。ギルバートさんのお母様やお祖母様にお会いするのは。」

「大丈夫ですよ。この間、茉莉香さんは父や私の顔にパイを投げつけたけど、母や祖母か

ら返礼のパイ投げはありませんから。」

「ハハハ・・・。」

笑いながら、茉莉香は先日のバカ騒ぎを振り返って、恥ずかしさに顔を赤くした。

「ハハハ、今、思い出してもおかしいですね。」

もつとも、あれは、海賊の男たちのバカ騒ぎだと、女たちは昔から呆れてたそうです

よ。そもそも、女性は服を汚すのが嫌いですからね。・・・」

モーガンも笑っていた。

「そうでしようね。」

でも、私、モーガンさんにまだちよつと怒ってますからね。」

そう言つて、茉莉香はモーガンにアカンベート、舌を出した。

14-3 銀河帝国軍参謀本部作戦司令室（帝都クリスタル・スター）

加藤茉莉香は、ギルバート・モーガン中尉の案内で、帝都クリスタル・スターにある銀河帝国軍参謀本部作戦司令室を訪問した。次の軍事演習の予習をするためである。

帝国軍参謀本部作戦司令室には、巨大な立体スクリーンが備えられている。ここに作戦時には、敵味方の膨大な数の船の映像が映し出される。平時には、帝国軍帝都管制室とリンクした、帝都周辺空域のリアルタイムの船舶運航映像が映し出される。



加藤茉莉香大佐が、作戦司令室の概要について、説明を受けていた。

「スクリーンの最前列が司令部の人たち、奥の一段上が、女王陛下や將軍さんの席かあ。こういうところは、グランドマザーと同じだなあ。」

でも、今は、玉座が三つになっているところは違うかなあ。」茉莉香はつぶやいた。

「加藤大佐、つぎは隣の演習室へまいります。」

指令室では、ギルバート・モーガン中尉は、上官である加藤茉莉香大佐に対して敬語を使っていた。

「あ、はい。では、司令室のみなさん、どうもありがとうございます。」

茉莉香は敬礼をし、司令室の軍人もこれに答えた。

指令室の隣の演習室には、司令室のものと同じ立体スクリーンがあったが、その両側は敵味方の船団の司令部を模した席が置かれており、真ん中がスクリーンのコントロール担当者の席だった。

簡単な部屋の説明が済むと、ギルバートが言った。

「では、加藤大佐に今回の演習プランをご説明いたします。」

今回の演習は、時空トンネルにテロリストが侵入して帝都に侵攻したときに、これにどう対抗するかがテーマです。テロリストの標的船として、海賊船も参加する計画です。」

「ふうくん、テロリスト対策かあ。」

「そうですね。もう、銀河帝国に対して艦隊決戦を挑んでくる国や組織は、銀河系には存在しませんよ。帝国軍の目下の急務は、時空トンネルの安全確保・治安対策を作り上げることです。」

「そうですね。反乱鎮圧以後、今まで以上に平和な時代になりましたからね。」

では、テロ対策は、どういう展開になるんですか・・・。」

ギルバートは、予想される五つのシナリオを説明した。

「どうでしょうか、加藤大佐。」

「敵のテロリストの行動は、なんか平凡ですね。これじゃあ、捕まえてくださいって言うてるようなものですね。」

「では、大佐がテロリストなら、帝都をどう攻めますか。」

ギルバートにそう言われて、加藤茉莉香はニコリと微笑んだ。

「私の考えですか？ 知りたいですかあ。」

う〜くん。でも、ことばで言うのは、ちよつと、難しいなあ。」

やっぱり、実際に船を動かしてみないと・・・。」

「そう言うと思いましたよ。」

大佐、ここは何処か、お忘れですか。帝国軍の演習室ですよ。」

「ここなら、実際に船を動かすのと全く変わらない模擬戦ができますよ。」

「ええ？ そんなこと、いきなり出来るんですか？」

「実は、大佐がそうおっしゃると思つて、準備は出来ていますよ。」

今から二チームに分かれて、シミュレーターで模擬戦をしましょう。

チーム編成も、準備が出来ています。

Aチームが帝国軍側、Bチームがテロリスト側。

Aチームは参謀本部のミニッツ大佐が、Bチームは加藤大佐が指揮するということ、加藤大佐以外のBチームのメンバーは私が決めて準備していますが、よろしいですか。」

「いいですよ。」

「では、ご紹介します。」

「こちらがミニッツ大佐です。」

「初めまして、キャプテン茉莉香。ミニッツです。」

「こちらこそ、初めまして、加藤茉莉香です。」

ミニッツ大佐、ご高名は辺境の海賊にも伝わっております。今日は、対戦できて光栄です。どうか、お手柔らかにお願いします。」

「こちらこそ。噂に聞く、キャプテン茉莉香との対戦、楽しみにしていました。」

「では、Bチームのみなさん、別室に集合してください。昼食を兼ねて作戦会議です。」  
「それから、演習フィールドの情報は、現実の帝国軍防空情報システムのコピー、すなわち帝国の現実そのものと言うことでいいですね。」

「了解しましたよ。一時間後に模擬戦開始ですよ。フッフ・・・」

茉莉香が笑った。なにか策があるようだ。

14-4 軍事演習（参謀本部作戦シミュレーターの仮想空間内）

一時間後、演習が始まった。

茉莉香が指揮するBチームは、どこから持ってきたのか、おそろいのバンダナを頭にかぶっている。もちろん衣服は帝国軍の制服のままであるが、「海賊チームのしるしが必要」という茉莉香のアイデアだった。皆、けっこう面白がっていた。

しかし、演習時間で10時間（実際は60分）たつても、帝国軍防空情報システムにおいては、テロリスト側は何も行動を起こさなかった。実際には、Bチームは、なにかいろいろパネルを操作しているが、帝国の防空システムには何も変化がなかった。

それまでの間、Aチームは待ちくたびれて、何かあるぞという警戒感も薄れていった。防空情報システムに変化が感知されたのは、演習時間で約24時間後（実際は2時間）であった。

最初の変化は、小さな海賊事件だった。

豪華客船が海賊に襲われ、乗っ取られたという情報が入った。

普通なら帝国軍が出るまでもないので見過ごすところだが、襲われた船を海賊が牽引して超光速跳躍したため、注意を引いたのだ。

「さあ、海賊の時間だあ。」

茉莉香が掛け声をかけて、Bチームのメンバーは実に楽しそうだ。

もちろんAB両チームからお互いの様子は見えない。

続いて、海賊船は豪華客船を連れて、ミルキーウェイのゲートに現れた。人質を盾にゲートを突破しようというのだろう。当然、Aチームからの反撃が予想された。

Aチームは『テロリストとは取引しない』と言う原則から、人質の豪華客船もろとも攻撃の対象にしようとしたが、Aチームの指揮官ミニッツ大佐は言った。

「待て、すぐに手を出すな。」

この人質船の船名、乗員名簿を確認しろ。」

「確認しました。」

船名 ローズガーデン号

船籍 銀河帝国

乗客 公爵夫人エカテリーナ・レッドローズ殿下、王女アメリカ・レッドローズ殿下、

王女マリア・ホワイトローズ殿下……」

「うあく、銀河聖王家の御用船だ！」

電子戦担当の士官が、思わず声をあげた。

神の子孫を自認する銀河聖王家には、姓（ファミリーネーム）は無い。

しかし、それでは王家のなかで区別が付きにくいので、女王以外は、慣例的に四家の家名を付して呼ばれる。例えば、青薔薇家の娘であるチアキは、今はチアキ・ブルーローズと呼ばれる。

Aチームの指揮官ミニッツ大佐が、攻撃を控えている間に、海賊船と豪華客船は、ミルキーウェイのゲートに侵入した。

「さすが、帝国軍の皆さんも、銀河聖王家の王族の方々を攻撃するようなことはしませんでしたね。お行儀がいいですねえ。ナハハハ・・・

さあ、ここからは、私たちは極悪非道のテロリストよ。

みんな、メガネをかけて。

さあ、行くわよ。」

茉莉香が声をあげた。

それに合わせて、Bチームのメンバーは、全員が黒メガネをかけた。悪者ぶったコスプレのつもりだろう。

だが、Bチームのメンバーは実に楽しそうに笑っている。

「おのれ、テロリストめ。」

人質の船があるので、時空トンネルを切断して、テロリストの船をブラックホールや中性子星に落としてやることもできないし……

おい、時空トンネルの出口で包囲網を引いて、待ち構えろ。

通常空間に復帰したところで、重力波砲を浴びせて、客船と海賊船を強制的に引き離せ。

引き離れたところで、一斉射撃だ。

この借りは『倍返し』だ！

通常空間への復帰タイミングを狙って討つぞ！

重力波砲の発射時刻を、カウント・ダウンしろ。」

「フフフ……出口で待ち伏せかな。そんなこと、お見通しよ。」

機関士さん、マニュアル操作で、重力推進エンジンを始動。

時空トンネルを分岐して、予定の空間へジャンプします。

もちろん、客船はトンネル内で解放ね。」

「了解。マニュアル操作で、重力推進エンジンを始動。」

「うわああくく。海賊船が時空トンネル内に客船を置き去りにして、別の空間へタツチダウンします。」

「重力波砲の砲撃を中止！」

客船の保護のために、時空トンネルの航路を維持しろ。

それから、海賊船のタツチダウン地点を調べろ。

とにかく、標的となる可能性の高い帝都に非常防空警報発令を進言しろ。

タツチダウン予想地点に、近くの船を動かして、海賊船を包囲させろ。」

Aチームのミニッツ大佐は、矢継ぎ早にいろいろな指示を出して包囲陣形を立て直すために動き回った。

「敵さん、あちこち動いてるわね。そうこなくっちゃ。

みんな、いくわよ。」

「お……！」

茉莉香の指揮する海賊船は、通常空間に復帰するため亜空間を抜けようとしている。

しかも、その行き先は、レッドクリスタル星系の帝国軍第一艦隊が駐留する中央基地だった。

軍艦が集まっているところ、しかも帝国軍最強といわれる第一艦隊の中央基地の前にはわざわざタツチダウンするのは、常識的には「討たれに行くようなもの」だが、海賊船には秘策があった。

「よーし、通常空間に復帰次第、例のヤツをお見舞いするわよ。」



全船、対衝撃防御。振り落とされぬようにね。」

やがて、海賊船が復帰しようとする空間では、時空震が発生した。

そこから強烈な重力波が発生し、さらに強力な衝撃波が発生した。

茉莉香船長は、わざわざ、マニュアル制御で下手なタッチダウンをさせて、時空震を発生させたのだ。

そもそも、超光速跳躍や時空トンネル航法は、時空震を発生させないようにコンピュータ制御されている。そうしないと、大艦隊が編隊を組んで安全に飛行することができないからである。

茉莉香はそれを逆手にとって、発生した時空震で周辺を取り囲む帝国軍の軍艦を追い払おうとしたのである。

中央基地に集結していた多数の帝国軍第一艦隊の軍艦は、強力な重力波と衝撃波によりコントロールを失い、大混乱に陥った。

多数の船が完全な非番のため、動力をセーブモードにしていた。これらの船は、衝撃波に吹き飛ばされて、周辺の船と衝突した。

茉莉香の海賊船を攻撃しようとして待ち構えていた船も、想定外の緊急事態に遭遇して、衝突回避に必死になった。

「うわー……はじき飛ばされる。」

姿勢制御エンジン全開！ 現在位置を確保。」

「おい、何してるんだ。逆噴射して現在位置を確保しようとするな。

かえって、吹き飛ばされた船と衝突するじゃないか！」

「衝突回避のために、急いで加速して散開しろ。」

「それじゃ、敵船がビーム砲の射程外になってしまいます。

包囲網が敗れて、侵入した敵を討てなくなりますが……。」

「かまわん！ 衝突回避を優先する。」

敵は一隻だ。再集結してからでも攻撃は間に合うはずだ。」

被害は甚大で、もはやタツチダウンしてきた海賊船を攻撃する余裕は無かった。

しかし、ミニッツ大佐は冷静だった。

第一艦隊は、時空震の一撃で多数の船が衝突により損傷し、残った船も衝突回避のた

めに散開して、進入してくる海賊船に対する包囲網を解いてしまった。

このため、艦隊としての戦闘能力を一時的に失ってしまった。

「予想どおり、大混乱よね。ウフフフ……」

クイーン・オブ・パイレーツの護衛艦も、どっかに行っちゃったわ。

よし、このスキに、あそこにいるクイーン・オブ・パイレーツに突撃！

船をぶつけて！ さあ、白兵戦よ。

いけいけ!!

海賊船が帝国軍の旗艦クイーン・オブ・パイレーツに突撃した・・・はずだった。

しかし、船が接触したと思ったその時、ブザーが鳴って、立体スクリーンに次の文字が表示された。

『GAME OVER』

14—5 銀河帝国軍参謀本部作戦司令室（帝都クリスタル・スター）

「あれ……？ 私たち負けたの？」

まだ勝敗はついていないでしょう？

あと少しで、非番で空っぽのはずの旗艦クイーン・オブ・パイレーツを乗っ取って、帝都へ攻め込めるとおもったのに。」

両手を腰に当てて、ふくれっ面の加藤大佐に、Aチームの指揮官ミニッツ大佐が言った。

「いやあ、お見事でした、加藤大佐。負けたのは私たちです。

シミレーターは、帝国軍側の勝敗を表示します。

それに、このシミューレーターは、クーン・オブ・パイレーツにおける白兵戦まで想定してません。艦隊司令部としては、陛下の御命を危険にさらす前に勝敗をつけるのが戦

闘のルールです。

「そう言う意味でも、白兵戦に持ち込まれた段階で私たちの負けです。」

「そうなんですか。」

でも、昔から少女マンガですら、『恋愛と戦争にはルールは無い』（どんな汚い手を使っても、とにかく勝てば良い：「勝てば官軍」）っていうのが常識ですよ。」

「そうですね。帝国軍は甘いですね。こんなルールは、実戦では言い分けにはなりませんからね。」

特に、帝国軍にとって今後必要となる、テロ対策のような非正規軍との戦い方は、正規軍同士の戦闘を想定したこれまでの戦い方とは大きく違いますからね。」

シミュレーターも抜本的に改良が必要ですね。報告しておきます。」

それと、今日の模擬戦の結果も踏まえて、演習のシナリオを再検討します。」

「お願いします。」

「それにしても、恐れ入りました。加藤大佐のウワサは、第七艦隊の連中から聞いていましたが、これほどスゴイとは。」

何時の時代も、優れた軍人は現実重視、実力主義のリアリストである。

ミニッツ大佐は茉莉香の実力を認めて、それを吸収しようとしていた。

「ナハハ……。そうでしょうか。思いつくままやっただけですけど……。」

「まず、旗艦クイーンオブパレーツが非番の時の安全体制はどうか、今日の結果は深刻です。正規の戦闘では、旗艦での白兵戦に対しては、ユステイアン大帝時代の戦闘経験で踏まえて、作戦計画が決められているというものの、旗艦では、それ以来実戦経験がありませんからね。」

それに加えて、非番の時に本当に乗っ取られていたら、最強の兵器が敵にわたることになりますからね。」

「なはは．．．そんなに大きさに誉めて頂かなくても．．．。」

「それにしても、時空トンネルの性質を良くご存知ですね。」

人質を連れて入ったのは、トンネルの切断を防ぐためですよね。

さらに、トンネルの分岐をつくるという技を実行して見せたのは、大佐が初めてですよ。

しかも、それもこれもクイーン・オブ・パレーツを武器として奪うためだったとは。「いやあく〜。この間、弁天丸で、時空トンネル切断の実験に参加して、もう少してブラックホールに落ちるところだったんですよ。」

あとで、航跡の精密な解析結果を見せてもらうと、本当に危ないところだったんです。それで、私も、クルーもちよつと怒って、ブラウン少尉にいろいろ文句を言ったら、彼も真剣に考えて答えてくれたので、時空トンネルを使うコツがわかったというか．．。」

「なるほど。」

では、最初の戦闘までに時間がかかったのは、人質のためですか。ローズガーデン号の存在を良くご存知でしたね。」

「どの船にしようか、迷ったんですが……。」

昔、弁天丸でセレニティ星系軍と向き合った時に、こちらに王女様が乗っているとわかると向こうは戦闘モードを解除した経験がありまして……。

ローズガーデン号のことは、個人的に、ナハハ……。

それに、私は、今、極悪非道のテロリストになりきってますからね。エツヘン。

人質は高く売れるものを選んで訳ですよ。」

茉莉香は、鼻の下で指を動かして、長くピンと伸びた海賊の髭をなでるような、おどけたしぐさをした。

これを見た演習参加者の軍人たちが皆笑った。

しかし、Aチーム指揮官のミニッツ大佐は笑っていないかった。

「では、加藤大佐、わざわざマニュアル制御でタツチダウンさせて、時空震を発生させるという戦法は、どうやって思いつかれたんですか？」

「昔、セレニティ王国の『黄金の幽霊船』クインセレンデイピティと遭遇した経験からですね。あの船は旧式で、極めて不完全な超光速跳躍しかできず、一時的にタツチダウン

するとスゴイ時空震を起こすんですよ。

それをヒントに、「再現してみたいと思っただですよ。」

「なるほど。でも、時空震を起こす方法をどうして見つけたんですか？」

「都合の良いことに、最新の転換炉のパワーは、黄金の幽霊船の何千倍も強力なので、やんちゃな操縦をすると、意外に簡単に時空震を起こせましたね。」

それに、なんと言っても、私のチームの皆さんは、チヨウ優秀ですね。

超光速跳躍の正規プログラムを、時空震を起こすように『不正改造』するなんて、

『初めてなんですよ。』とか、

『一度やってみたかったです。』と言って、

自信の無いようなことを言っていたのに、すぐにやってくれましたよ。」

「なるほど。最先端の技術に慣れきっていると、そう言う『やんちゃな』操縦をするという発想が出てきませんね。」

「私の弁天丸は、百年前の旧式の海賊船ですからね。アハハハ・・・」

こうして女子高生つぼく、笑いを取る会話の中にも、海賊船船長としてのキャリアや諸王家との人脈がうかがわれ、その場の士官たちにも、軍人としての茉莉香の、敵に回したくない『怖さ』がうかがわれた。

「しかし、加藤大佐、笑い事じゃありません。」

この戦闘結果をみると、これはもはや『新兵器』です。とても、『やんちゃな操縦』なんて言ってられません。

なにせ、帝国分の中央基地にいた第一艦隊の大半を、人工時空震の一撃で戦闘不能にしたのですからね。

このシミュレーション結果では、要人や帝国軍基地の警備体制の見直しが必要とすることですよ。ミルキーウェイの警備上の課題に付け加えておきます。」

「そんな、新兵器だなんて、大げさな……。ナハハハ……。」

茉莉香は、いつもの苦笑いをしたが、この時ばかりは、誰もつられて笑わなかった。

その場にいる誰もが、軍事技術に新しい波が襲来するという予感に震えていたからだ。特にテロ対策のような決まった形の無い戦闘には、士官学校出身の優等生よりも、海賊船の船長のような自由な発想が重要になってくる事も明らかだった。

「やっぱり、重力という宇宙の究極の力を我々銀河帝国が手に入れたというのは、我々の『思い上がり』でしたね。」

加藤大佐と戦ってみて、それがよく分かりました。

これがコンピュータ上での演習でよかったですよ。

先の反乱の際に、この『新兵器』により人工時空震を使った攻撃を帝国軍が受けていたら大変なことになっていたでしょう。



女王陛下のお言葉は、やはり正しかったですね。」

「ええ？　女王陛下のお言葉とは、どういうことですか？」

「いやあ、当初、宇宙マフィアとの和平条約の内容について、帝国軍では私も含め反対意見が多かったのですよ。」

『我々は戦えば勝てるのに、この内容ではまるで負けたようなものだ』とか、

『あまりに譲歩しすぎている』と言ってね。」

「なるほど。あの条約は、言われてみると、表面は帝国の勝利ですが、中身は宇宙マフィアの人たちが長年望んできた理想そのものですよねえ。」

「もともと、彼らは宇宙移民に失敗した人達の集まりでしたからね。」

「そうです。加藤大佐は、宇宙マフィアのこともよくご存知ですね。」

「それで、帝国軍内の反対意見に対して、陛下は

『帝国軍は、思い上がるな』

とおっしゃいました。さらに、

『ユステイアン大王の御代、第二次マンチュリア戦役では、帝国軍が楽勝ムードで思い上がっていたからこそ、奇襲攻撃を受けて白兵戦を許し、帝国軍にも大きな犠牲を出した。』

『その雪辱を果たすために、第三次マンチュリア戦役で、16億人も住む星一つを滅ぼす結果になったのだ。』

とおっしゃいました。」

「確かにそういう見方もできますね。」

「そうです。油断せずに奇襲を退けていけば、第三次マンチユリア戦役を戦う必要が無かったかもしれません。」

そして、陛下は、おっしゃいました。

『時空トンネルや重力波砲の技術を手に入れたからと言って、重力という宇宙の究極の力を我々銀河帝国が手に入れたというのも、思い上がりだ。』

楽勝ムードで浮かれていると、予想も付かない戦法でその隙を突かれて苦戦し、その反撃のためにアマージグ族も含めて銀河系の人々に大きな犠牲を強いる事態になるかもしれない。』とね。」

「そうだったら、怖いですね。」

「ですから、陛下は、こうおっしゃいました。」

『私は、アマージグ族は放浪の旅を終えて安住の地となる星が欲しいだけなのだと思っている。』

そして、銀河系の諸人類を戦火から免れさせるためなら、銀河帝国の王たる私にとつて、彼らに安住の地を与えることは簡単なことだ。

彼らはヒガンの地に栄えるがよい。』

こうして、帝国のアマージング族、つまり旧宇宙マフィアの一族に対する施政方針は決まり、それに沿って軍の作戦計画が決まりました。

あとはご存知の通りです。」

「そんな裏話があったのですか……。」

茉莉香は、帝国軍中枢にいるミニッツ大佐でならでの秘話に聞き入った。

「それにしても、加藤大佐には、優秀な副官が付いておられる。

今度の演習のチーム編成では、事前にモーガン中尉が変わり者の『コンピューターO T A K U』をたくさん集めて、みんな本当に楽しそうに騒いでいました。

だから、参謀本部の士官達は『彼は何をしているのだろうか』と疑問に思っていたんです。

予め、加藤大佐のアイデアを実現できる実力のあるエンジニアを集めていたんですね。恐れ入りました。」

ミニッツ大佐が言った。

「そ、そうだったんですか……。」

驚いた茉莉香はモーガンを見たが、彼は微笑んでいるだけだった。

「そうですよ、加藤大佐。」

海賊船の船長をなさっておられるから、船長が自由自在に船を操るには優秀な操舵手

が必要なおことはおわかりでしょう。」

「そうですね。弁天丸の操舵手は凄腕ですよ。」

「同じように、帝国軍の将校が軍を動かすには、将校の意図を読んで動く優秀な副官が必要なんですよ。」

「やっぱり、お二人は良いコンビですねえ。」

「そう言つて、ミニッツ大佐は、二人を見て微笑んだ。」

14—6 モーガン家のお屋敷（クリスタル・スター）

帝国軍参謀本部作戦司令室を見学して、シミュレーションでひと騒ぎをした後に、茉莉香は、ギルバートの誘いに応じて、モーガン家を訪ねた。

投資銀行経営で有名なモーガン家のお屋敷は、帝都クリスタルスターの王宮近くのガーデンストリートの一角にある。モーガン家の邸宅は、豪邸ぞろいのこの街ではあまり広くはないが、歴史と風格に満ちた外観の屋敷である。

執事に迎えられ、玄関に入った二人は、ギルバートの母の出迎えを受けた。

「初めまして、加藤大佐。ギルバートの母の、マーガレット・モーガンです。」

「は、は、はじめまして。加藤茉莉香です。茉莉香とお呼びください。」

制服姿で軍人としての敬礼をした茉莉香は、ガチガチに緊張していた。

「では、茉莉香さん、こちらへどうぞ。」

三人は、吹き抜けの玄関ホールを通つて客間へ案内された。その途中の廊下や玄関ホールには、モーガン家の歴代当主の肖像画や銅像などが飾られていた。

マーガレットは、玄関ホールの中央にある、3メートルほどの巨大な像を指差して言つた。

「茉莉香さん、この銅像が、わが家が帝国海賊となつた時の当主、つまり初代モーガン卿ですわ。つまり、『歴代当主はかくの如くあれ』という御先祖の姿なんですの。」

「銀行を始めたのは、三代目の当主なのですが、その人がこの像を立てたんです。子供たちに、おじいさんのことを教えるためにね。」

「そうなんですかあ。ご先祖の想いを伝えるためには、こういう仕掛けがあると、分かりやすいですね。私の家には、こういうものは一切無かつたもので・・・。」

「そうはいつても、たいていの子供たちは、小さい時にこの像のてっぺん、つまり頭の上に登ろうとして、怒られるんですけどね。」

「ごらんなさい。よく見ると、銅像のあちこちがすり減つていてしょ。大勢の子供達に登ろうとしてすり減つてしまつた跡なんですよ。」

そう言つて、ギルバート・モーガンが笑つた。

「この子もやりましたよ。親の監視の隙をうかがつて、像の頭のとっぺんまで登つて、立

ち上がって周囲を見下ろして、そして飛び降りる……。

だから、銅像の周辺は特別に分厚いじゆうたんが引いてあるんですよ。けがをしないようにね。

もつとも、てっぺんまで登れる子は優秀で、立派な軍人になれるというジंकスもあるんですけどね……フフフ。」

母親マーガレットが、ちよつと自慢げに言った。

「フフフ……そうなんですかあ？　ギルバートさん、本当ですかあ？」　茉莉香は言った。

「ハハハ……どうでしょうかねえ。」

「あ、若い女性の方の肖像画もありますね。きれいな方ですね。」

軍服を着ているということは、帝国軍人だったのですか」

「この方も、銅像の頭の上まで登ったオテンバ娘だったそうですよ。オホホ……。」

茉莉香は、ずらつと並んでいる肖像画を眺めた。大半は壮年期の威厳に満ちた姿の絵だったが、ところどころに若い当主の肖像画があった。

「当主の方の肖像画は、どれも立派ですね。でも、絵に描かれた年齢が、それぞれ違うんですね……。」

違うのはなぜかと問いかけて、茉莉香は口を閉ざした。

若い時の肖像画が描かれた理由に気が付いたからである。

「この女性の方は、お若い時に戦死されたんですね。」

「そうですよ。テオドラ皇后陛下が指揮された決死隊のひとりでした。もちろん、キング・オブ・パイレーツ船上での白兵戦における戦死です。」

『愛の死装束』のおとぎ話に出てくる女性兵士の一人ですわ。」

この絵ひとつとっても、おとぎ話や伝説の時代から、この家の海賊たちは銀河帝国に仕えてきたことがわかり、茉莉香はこの家の伝統の重みを感じた。

「ねえ、ギルバートさん、失礼なことをお聞きするかもしれませんが、こんなに立派な伝統のある、お家の長男に生まれて、帝国海賊を継ぐことが期待されているなんて、重荷に感じたことはないんですか。」

「そうですねえ。一族の中には、それを重荷に感じて家を離れる人もいるのですが、私はそんなことは感じませんでしたね。」

むしろ、子供のころから聞いていた宇宙の冒険航海に自分も早く出てみたいとか、そんなことを考えていましたね。」

「アハハハ、それ私とおなじですね。」

私も宇宙に出てみたいから、父の跡を継いで海賊船の船長になる決心をしたんです。」

「そうでしたね。」

「あらまあ、仲のいいこと。フフフ。」

「さあ、客間でお祖母様がお待ちですよ。」

「マーガレットは、客間のドアを開けて、二人を招き入れた。」

「初めまして、加藤大佐。ギルバートの祖母の、メイフラワー・モーガンです。」

「は、は、はじめまして。加藤茉莉香です。茉莉香とお呼びください。」

制服姿で軍人としての敬礼をした茉莉香は、また、ガチガチに緊張していた。

「茉莉香さん、こちらへお掛け下さい。どうぞ。」

「この年ですからね、玄関までお出迎えに出るのが難しくて。ここで待たせていただいたのをお許しください。」

メイフラワーは言った。

「いえいえ、こちらこそ、急にお邪魔して。」

「茉莉香さん、どうです、この家は。気に入って頂けましたか。」

「はい、ああ……ええつと、なんというか……。」

「茉莉香さん、そんなに深い意味をもつて聞いたのではありませんから、難しく考えることはありませんよ。」

「そうですね。ナハハ……。」

やがて、メイドさんが運んできた紅茶を飲みながら、話が弾んでいった。

茉莉香の子供のころのこと、



白鳳女学院高校での生活、

ギルバートの子供のころの話、

士官学校時代の話……、

女三人の話題は尽きなかった。

「ところで、茉莉香さん。高校を卒業した後はどうなさるの。もう、決めておられるの。

大学進学か、このまま今のお仕事ですか。」

メイフラワーが聞いた。

「いやー、まだ決めかねていました。

進学についても、帝国女学院はちよつと私には合わないかなあと思つて、自信がなく

て。」

「そうですね、まだ迷っているんですね。

でも、高校卒業後の進路を考えるには、もうあまり時間がありませんよね。

では、いいものを差し上げましょう。

迷つた時はこれを眺めなさい。きっと答えが浮かんできますよ。」

と、メイフラワーは言いながら、懐から、大きな赤い宝石の玉を出して、茉莉香に差

し出した。

「おばあ様、それは……。」マーガレットが言った。

「良いのですよ。茉莉香さんの役に立てば。」メイフラワーは言った。

茉莉香は、赤い宝石の球を手を取って眺めた。

赤い玉の中心に、何か、光る星のようなものが見える。

「とても大切なものようですが、良いのでしょうか。私が頂いても。」

「良いんですよ。私はもう迷いませんし、願いをかけることもありませんから。ホホホ。」

## 第十五章 サーシャ、ウルスラ、マミの進路

15—1 ステープル邸（海明星新奥浜市）

「はい。」

サーシャは受験勉強の手を止めて、自室のドアをノックする人に答えた。

「サーシャ、今日はお父さまもいらつしやるし、三人で秋の庭を散歩しませんこと？」

お天気もいいし、大通りのポプラ並木がとてもきれいに黄色く色づいてますよ。」

「はい。おかあさま。いま、参ります。」

サーシャはお気に入りの濃紺のベルベットのコートを着て、母と一緒に階段を下り、玄関間で父と待ち合わせて、庭に出た。

この星の穏やかな四季の移ろいは、ここに住む人にとって本当に心地よい。

秋の空は高く青く澄みきって、風は爽やかで、午後の日差しは穏やかだった。

三人は、乾いた落ち葉をサクサクと踏みしめながら、庭の並木道を歩いて行つた。

「おとうさま、この並木道だけ、落ち葉を掃除せずに残して頂いてるのですか。」

「そうだよ。庭師のジエームズたちが、

『今年は、まだお嬢様が一度も秋の散歩をなさっていないので……』

と言つて、落ち葉を残したままでお前が散歩に来るのを待っていたんだよ。」  
「入試も近くなつたので、サーシャは、学校から帰ると部屋に籠つて遅くまで勉強しているでしょ。」

「この頃ちよつと心配だったから、散歩に誘つてみたのよ。」

「おかあさま、ありがとうございます。」

「サーシャ、ほら。ポプラ並木が黄色いリボンのようになって、きれいだわ。」

「ほんとですね。」

サーシャはプラタナス通りの並木道を眺め、そして空を見上げた。

もう、『時間よ、生まれ』と悲痛な声を上げるような心境ではなかった。

でも、この『奇跡の星』の美しい景観がいつまでも続いてほしいと思つた。

そして、親子三人は、海明星の秋の美しい青空を眺めながら、亡くなつた人たちに思いを届けた。

『お父さん、お母さん。ありがとうございます。』

私は、この星で、この家の娘として生きてゆくわ。』

『姉さん、ありがとう。』

私は、この星で、この子の母として、姉さんの分まで生きていくわ。』

『レイ、ロツテ、ありがとう。キミたちのお陰だ。』

銀河系が戦乱の渦に巻き込まれず、アマージグ族も安住の地を得る事が出来た。

そして、私たちも。

みんな、みんな、願いを叶えることが出来た。』

ステープル家の屋敷の裏には、広々とした牧場、さらには広大な原生林が続いている。もともと、プラタナス通りの邸宅街は、この牧場が起源である。祖先のステープル家当主が、ビジネス引退後の余生を過ごすために、広大な原生林を買って牧場を開拓し、牧場の端に自宅として建てたのが、この屋敷のはじまりである。

ただし、牧場の開拓は初期段階で中止された。原生林を、この星固有の動植物保護のためのナショナル・トラストとして残すためである。

さらに、ステープル家の屋敷を訪れた歴代当主の友人たちが、この星の気候風土を気に入って、この屋敷の周辺に自分の屋敷を建てはじめた。

これを見た後代の当主たちが、ステープル家の屋敷を今のように増築したり、屋敷から新奥浜市までの都市計画プランを立て、銀河帝国のガーデン・ストリート風の並木道を整備した。こうして、プラタナス通りの邸宅街が出来上がって行った。

そのため、屋敷の庭からは、牧場の草原が見渡せる。

「あ、チアキちゃんだ。」

牧場の草原を、数人が馬に乗って駆けている。その中にチアキの姿を見つけて、サー

シヤが言った。

「チアキ様、乗馬を始められたのよね。」

「牧童達の話では、上達が早いそうだよ。」

乗馬は、せっかく牧場の隣に住んでいるのだから習うようにと、女王陛下が勧められたそうだと。

「青薔薇家にとつて百年ぶりの黒髪のお姫様の誕生ですものね。伝説の乗馬の名手テオドラ皇后様のように育ててほしいという親心でしょうね。」

「テオドラ皇后様というと、草原で颯爽と黒髪をなびかせて馬を駆る気品あふれる美しい姿に、ユステイアン大王が一目惚れしたというあの伝説ですね。」

「そうよ。テオドラ皇后様のように強く賢く美しくと言うのが、今も聖王家の理想の女性像ですからね。」

「そう言えば、ヒルデ様も乗馬を始めたいとおっしゃっているそうね。」

「チアキ様から、乗馬のおもしろさを聞いて、興味を持たれたようだよ。」

「この調子では、ヨット部だけでなく、乗馬部も賑やかになりそうね。」

「さあ、サーシヤ、ミーシヤ、家に戻ってお茶にしよう。」

「はい。おとうさま。」

15—2 白鳳女学院宇宙ヨット部部室（海明星）

今日の放課後の部室は、いつになく賑やかである。

部員たちは、今日、学校で広まったニュースに興奮して集まってきたからである。

「ねえ、聞いた？」

ウルスラ先輩が婚約したってニュース、本当なの。」

「私も聞いた。」

本当なら五年ぶりだって。もちろん、今年の婚約一番星。」

「みんな、突然で事情がわからないって言ってたね。」

「それはそうでしょう。」

ヨット部員なら知ってるけど、例の新型戦艦の話は、帝国の軍事機密でしょ。」

「そうよねえ。」

でも、やっぱり、あの医務室脱走事件が決め手かなあ。」

「あれって、後から考えると、結構、ロマンチックだよね。」

一年生たちが噂しあっているところへ、チアキがやってきた。

「チアキ先輩、おひさしぶりです。」

「先輩こんにちは。」

「やあ、こんにちわ。」

部員がチアキに接する態度は、以前と変わりがない。

ヨット部は『平等が基本』というルールであり、それは、チアキが聖王家の王女だと公表されてからも今までと同じように振る舞ってほしいというチアキの意向でもあった。

「ねえ、茉莉香。ウルスラのこと、聞いた？」

「聞いているけど。ウルスラが自分でそのことをしゃべったの？」

「そうよ。もうあきれたわよ、あのチョー自慢げな作り話には。」

「やっぱり。ルカの言うとおりだったかあ。」

それで、ウルスラは、なんて言っていたの？」

「この間の練習航海の時に、帝都に行つて、乗り物に乗ったら、隣に座った男に声をかけられたんですって。」

「ええ！・・・街でナンパされたって言ってるの？」

「ウフフフ。でも、確かに、軍事機密を除いて、二人の知り合った『いきさつ』を話すとそういう話になりますわよ。」

練習航海で『帝都』に行つたのも事実だし、例の新戦艦という『乗り物』にも乗つたし、お相手はそこで『隣に座った男』の方だったんでしよう。

でも、いきなりプロポーズだなんて、あの方、熱い熱い愛情をお持ちなんですわね。



ロマンチックですわ。」

グリユーエルが微笑んだ。

「そりや、そうだけど、なんかあの自慢話はムカつく・・・。」

「まあいいじゃないの。あの子が、そのくらい自慢したって。

うれしいんだよ。」

中等部時代にウルスラのことをバカにしていた子たちは、もうパニックよ。

帝国軍士官学校合格に続いて、婚約一番星でしょ。

しかも、お相手が帝国軍の技術士官という大秀才。

『風呂の栓が抜けた』

と言つて、みんな、驚いてたよ。」

リリイが笑つた。

『『風呂の栓』とは、どういう意味ですかあ。』ヒルデが聞いた。

「バスタブの栓のことだよ。」

これがあると安心してぬるま湯に浸かっていられるけど、抜けてしまうとさあ大変。

ウルスラは、風呂の栓のように一番下に位置する存在だと思つてたのよ。

抜かれて、悔しいんですよね。」

「ひどい」と言つてますね。」

「そうかもね。」

でも、ウルスラも、練習航海前の5月には、『私にはひとつも縁談が来てない』って言うてたのにねえ。まさか、こんな事になるとはねえ。」

そうこうするうちに、ウルスラが部室にやってきた。

「先輩、おめでとうございます。」

下級生たちにさっそくお祝いを言われて、ウルスラは嬉しそうだった。

「アブラモフ少尉殿、ご婚約おめでとうございます。」

茉莉香が、おどけたしぐさで帝国軍風の敬礼をして、お祝いを言った。

「ありがとうございます。加藤大佐殿。」

ウルスラも、これにこたえて、おどけたしぐさで敬礼を返した。

「わははは・・・おめでとう。」

「おめでとうございます。」

部室の部員たちが、一斉に笑いつつ、お祝いを言った。

「まだ、敬礼なんて慣れないなあ。」

「軍服を着るようになれば、そのうち、板についてきますよ。」ヒルデが言った。

「ねえ〜、軍服と言えば、ファッション雑誌に出てたけど、帝国軍の制服、来年度から変わるんですってね。女性用だけ。」

しかもなんと、デザインがコツキー・シャネルで、まさかのミニスカ。」

「見た。見た。発表された写真は、茉莉香がモデルだったね。」

「茉莉香、あの写真、なかなかイケてたよ。」

「ああ、あれね。ナハハ・・・」

でも、恥ずかしいなあ、もともと身分証明書用の写真だったんだけど、あんなにあちこちで使われるなんて。」

「あの新しい制服って、練習航海の時にクリス先生や茉莉香とチアキちゃんが着ていたものでしょ。先生、ファッションに目覚めたんだよね。」

「クリス先生、白鳳女学院に来てから少しの間で、ずいぶんイメージが変わったよね。」

あつというまに、女性らしくなって、優しくなって・・・。

また会いたいねえ。」

「そうねえ。」

「先生と行った練習航海も楽しかったなあ。」

あのメイド服のファッションショーも盛り上がったね。」

「チアキちゃん、ノリノリだったじゃない。」

「絶対にノリノリじゃない！」

私は、いつまでも嫌がっているとみんなに迷惑をかけると思って、周りに合わせただけ

よ。」

「あゝ、はい、はい。わかつてるゝゝ、わかつてるってえ。」

「わかつてない！」

「ハハハ・・・」

いつものようなチアキと茉莉香の掛け合いに、皆が笑った。

「もう、茉莉香ったら・・・」

それにしても、ねえ、ウルスラ。よく結婚の決断したわねえ。

不安とか、なかったの。」

チアキが、こつそりと小さな声でウルスラに聞いた。

もちろん、みんなウサギのように素早く聞き耳を立てている。

「うん・・・私の場合は、茉莉香やチアキちゃんとは違うって、そういうこと言える場合

じゃないってどうか、前から母さんにも言われてたから。

練習航海から帰ってきて、あの人から電話がかかってきたり、受験勉強の家庭教師を

してもらってる時に、いつも、母さんは、

『お前、このチャンスを逃すと一生結婚できないよ。何か言われたら、なんでも即座に〇

Kしなさいって。』

って言ってたんだよ。

父さんだつて、

『あんな良い男、もう二度と現れないぞ。結婚するなら、士官学校なんかどうでもいいんだ。優先順位を間違えるな。』

なんて、言つてたんだよ。

だから、私も決めてたんだ。

あの人に何か言われたら、あとさきを考えず、茉莉香みたいに結果オーライで思い切つて飛び出そうつて。」

「ナハハハ……。私、そんな風に何も考えてないように見えるのかなあ……。」

茉莉香は苦笑いした。

「そう決めていたら、彼がとても緊張して、

『ウルスラさん、とても大事な話があります。』つていうんだ。

最初だから、きつとデートのお誘いかなと思つて聞くと、彼がいきなり

『結婚してください』つて言つてくれたんだ。ウフフ……。」

ウルスラは、本当に嬉しそうに笑つた。

「あなたも、ご両親も、ある意味すごいわね。肝が据わつていふか、娘の女としての幸せ最優先と言うか。

私も、見習わないといけないわね、」

真剣な表情で、ハラマキが言った。

「ところで、チアキちゃんは、どうなってるの？」

卒業したら結婚するの？」

リリイが聞いた。もちろん、部室のヨット部員全員が、チアキの返事に対してウサギのように聞き耳を立てている。

「私？ 私は何もないわよ。」

だから…… この前にも言ったけど、あれはあいつが勝手に言ってきただけよ。

私は何とも思っていないから。」

チアキは、何事もない口ぶりだった。

しかし、リリイは言った。

「また、また、ご冗談を……。」

女性雑誌の『超豪華愛蔵版・緊急増刊・銀河聖王家第二女王特集号』の分厚い本は、私も買いましたよ。」

「ああ、あれ！」

私のお母さんも買って親戚に自慢してた。うちの娘も写ってるって。」

「うちもそう。」

「ハハハ……。」

「そうよね、

わたしたちちヨット部員全員がダンスパーティーで写した記念写真が載ってたからね。

で、その特集号によると、チアキちゃん、王宮のデビューパーティーで誰かさんと、また踊ってたわよね。」

「あれは、私が知らないうちに、相手が決められていたのよ。」

「フフフ・・・。そうかなあ。」

チアキちゃん、なんか、不安とか、心配事とか、聞いてほしい話があるんじゃないの。今なら相談に乗るわよ。

自慢じゃないけど、女の子の悩みなら、ウルスラに相談するより、私の方が頼りになると思うよ。

ねえ、思い切って話してしまうと、気分がすっきりするわよ。・・・」

リリイが、わざとらしい微笑をうかべて、チアキにすり寄った。

「そんな相談なんか、無い！」

不安も、心配事も、絶対に、無い！」

チアキが、顔を赤くして強い口調で言った。

「ハハハ・・・チアキちゃんらしい。」皆が笑った。

「あの・・・、先輩方、そろそろ今日の本題に入ってよろしいでしょうか。」

新しく部長になったナタリアが言った。

「え〜本日は、三年生の先輩方にお忙しい中をお集まりいただいたのは、『追い出し航海』のプランが決まりましたので、先輩方に発表したいと思つたからです。

おほん。」

ナタリアは、ひとつ咳払いをしてから言った。

「今年の追い出し航海のテーマは、『海明星を飛ぶ』です。

三年生のみなさんには、卒業すると海明星を離れてしまい、なかなか戻って来られない方もいらつしやいます。

それなら、今のうちにこの故郷の星の宇宙（うみ）を思いっきり飛んで頂こうというプランを考えました。」

「なるほど、いい考えだねえ。具体的にはどうするの。」ウルスラが言った。

「具体的には、まず第一日目では、オデットII世号で、中継ステーションを出発して、海明星をめぐる楕円軌道を飛んで、宇宙空間のいろいろな角度からこの星を眺めたいと思います。船外に出て眺めるのも良いかなと思います。」

第二日目では、中継ステーションに戻ってから宇宙ヨットステーションに移動して、全員でデインギーに乗って編隊飛行して、海明星を周回し、新奥浜市に着陸します。

これが追い出し航海の目玉です。



海明星の大気圏の飛行を、満喫してください。」

「良いねえ。良いじゃない、このプラン。」茉莉香も言った。

「それで、着陸ポイントは、新奥浜空港ではなく、自家用機専用の旧奥浜空港になります。これは、ヨットの数が多いので着陸に時間がかかりますし、新奥浜空港ではシャトル定期便の運航に支障が出るためです。」

「警備と安全対策は、スカーレットさんがローズアロー2号で随行してくれるから、大丈夫よ。」

「この船は最新型の重力制御推進方式だから、弁天丸と違って、大気圏の飛行も可能なので、ヨットが無事に着陸するまで随行してくれるよ。」

チアキがちよつと得意げに言った。

「そういえば、私たちが1年生の時のネビュラカップは大変でしたね。」

茉莉香先輩の弁天丸が無理して大気圏まで降りて来て、私たちを守って頂いたんですね。」アイが言った。

「そういうこともあったよね。でもあの時は、アイちゃんにも助けてもらったよねえ。」

アイちゃん、あのころからヨットの操縦うまかったよねえ。」

「そんなに褒めていただいて、ちよつと恥ずかしいです。」

アイは、ほおを赤らめて、うつむいた。

「ねえ、チアキちゃん。ローズアロー2号は、チアキちゃんの船でしょ。」  
リリイが言った。

「そうだけど、なにか。」

「だったら、ちよつと乗せてよ。」

ねえ、私、聖王家の方の船って、どうなってるのか、ちよつと興味あるんだなあ。」

「うわー・・・。」

ヨット部員みんなが、よくぞ言ってくれたという声をあげた。

「そうねえ・・・。」

中継ステーションから宇宙ヨットステーションに移動する間なら、ちよつと乗せてあげても良いわよ。中継シャトルに乗るより安全でしょうから。」

チアキも自分の船をみんなに見せたいようだ。

「わーい、やったあ。」

「そうこなくつちや。」

一年生たちが喜んだ。

「それと、リリイ。」

「なに・・・?」

「『ちゃん』じゃない!」

「ワハハハ……」皆が笑った。

15—3 シャネル新奥浜（海明星）

新奥浜市に、超高級ブティック「シャネル新奥浜」が開店した。

開店のにぎわいも落ち着いたある日、サーシャは、母ミーシャとこの店を訪れた。

「いらつしやいませ。」

「あら、マミちゃん、今度は、ここで働いているの？」

ミーシャ・ステイプルが、ドアを開けて出迎えたマミに言った。

「はい、将来、ファッションの道に進もうかなあと思ひまして、ここでバイトさせてもらっています。」

「そうなの。えらいわねえ、自分の進む道をちゃんと考えているのね。」

「今日は、先生が、奥様とお嬢様をお待ちしていただきしております。」

「ご案内いたします。」

マミは、店の従業員として、サーシャのことも「お嬢様」と呼んでいる。

「ねえ、マミさん。今日は、このあと、茉莉香さんやチアキちゃんも来るんですよ……」

おっと、いけない『チアキ様』よねえ。外ではそう呼ばないとね。……フフフ」

つい、サーシャもヨット部での呼び方を口にしてしまい、自分で笑った。

「茉莉香様もチアキ様も、いらつしやいますよ。．．．」  
につこり笑つたマミは、店員としての言葉づかいで応じた。

「いらつしやいます。奥様、お嬢様、本日はご来店いただき、ありがとうございます。」  
店のオーナーであるコツキー・シャネル本人がすぐに出迎えに現れた。

「奥様、お久しぶりでございますね。」

「本当ね。お久しぶりですね。こちらにずっと暮らして、帝都にはほとんど出かけませんでしたから、先生にお会いするのは何年ぶりかしら。」

お母様は、お元気でしょうね。」

「はい、相変わらず元気で、シャネル家の当主を務めております。」

元氣すぎて困るくらい、元氣です。」

「聞きましたわよ。王女様のことで、ご意見の違いがおありだったそうですね。」

「アハハ．．．。奥様の耳にまで入っているのですね．．．。恥ずかしいです。」

それで、早速でございしますが、お嬢様の大学入学式用のドレス、それから大学の通学用のドレス、デザイン画を作つてまいりましたので、ご覧いただきたいと思ひまして。

こちらへどうぞ．．．。」

母娘は、店の奥にある豪華な応接室に通された。

デザイン画を見ながら、コツキー・シャネルとステープル夫人ミーシャの話題は、最

近の帝都のファツション事情から始まって、やがて娘のサーシャの話に移って行つた。

話が一区切りついたところで、サーシャが嬉しそうに笑つて言った。

「先生、お母さまつたら、おかしいですよ。」

私の入学試験もまだ済んでおりませんのに、私が大学に着ていくお洋服を先生に願ひする話ばかりなさっていますのよ。」

彼女は、この場の空気に合わせて、普段、学校では見せない、いかにも帝都育ちの良家の娘というような立ち振る舞いをしている。

「サーシャさん。あなたのためには、それが一番大切なですよ。」

ちようど、開店記念で、先生が海明屋にいらつしやるとお聞きしましたので、この機会に直接お会いしてお頼みしておきませんかね。」

これからずっと、先生のお世話になるのですからね。」

「はい。お母様のおつしやる通りでございませぬ。」

先生、よろしくお願いたします。」

サーシャが頭を下げて言った。

「こちらこそ、末永くよろしくお願します。」

「ああ、本当によかつたわ。先生にサーシャのデザイナーを引き受けて頂いて、私も肩の荷がおりましたわ。」

シャネルの店は、高級な服を注文する顧客に対して、「担当デザイナー」を決めている。シャネルの「担当デザイナー制」とは、顧客がシャネルの店に服を頼む場合は特定の担当デザイナーが顧客の生涯にわたって担当するというものである。もちろん、シャネルの店で「担当デザイナー」になれるのは、ブランドを背負うにふさわしい能力を見込まれたデザイナーだけであり、顧客の女性にとってもシャネルの店に担当デザイナーを持つのは、大変なステータスである。

なかでも、銀河聖王家御用達のシャネル親子に担当してもらうのが最高のステータスであることはいうまでもない。

サーシャ親子の来店は、サーシャの担当デザイナーを決めるという大切な意味を持っていた。銀河帝国の上流階級の人たちから見たサーシャのステータスが、またひとつつまつていく。

もちろん、ステープル家の娘なら当たり前のことかもしれないが、母は、引き受けてもらえるかどうか、とても心配していたようである。特に最近ではどんなにお金を積んでも新規にコツキー・シャネルに担当してもらうのは殆ど不可能といわれている。それだけ希望者が殺到しており、親子代々でもなかなか難しいと言われているからである。

ちなみに母親ミーシャの担当デザイナーは、コツキーの母親のフランソワ・シャネルである。顧客も店も、世代交代をしながら付き合っていくのである。

ところが、銀河聖王家の第二王女であるチアキについては、大変なことが起こった。

最初、第一王女クリスティアから、チアキが着る帝国軍の新しい制服の注文を受けたのは、コツキーの方だった。クリスティア、茉莉香、チアキの三人御揃いの制服である。

その後、母のフランソワが、女王からチアキのダンスパーティー用のドレスに関する相談を受けた。チアキが『ウサギ熱』で入院中のことである。

しかし、それはカモフラージュで、女王の本心は、チアキのために極秘に聖王家伝統の正装用ドレスを用意しておくことにあつた。これが、チアキの誕生日に宇宙船ローズガーデン号で開かれた晩餐会でチアキが着た正装用ドレスである。

もちろん女王の担当デザイナーはフランソワ、第一王女の担当デザイナーはコツキーである。女王としては、チアキに関する秘密厳守のため、信頼できる自分の担当デザイナーであるフランソワに話をした。

しかし、これが問題の発端だった。

王宮の病室でチアキに引き合わされたフランソワ・シャネルは、チアキを一目見て女王の真意を悟り、こう思ったと言われている。

「この娘は、魔法のドレスを着て舞踏会に出かける時を待つシンデレラ。」

私が、その魔法使い。」

一世一代の仕事と張り切ったフランソワは、チアキに対してだけでなくシャネル社内

でも気づかれないよう極秘チームを作って仕事すすめ、依頼を立派に果たした。

後日、チアキのドレスを作った者が母だと知ったコツキーが怒って文句を言ったが、母親のフランソワは、こう言って鼻であしらったと言われている。

「軍服の注文なんか、シャネルの服の注文とは認められないわ。」

だから、お前が先に担当と決まっていた訳ではないでしょう。」

その後、親子は店の客にまで聞こえてしまうほどの大きな声でケンカしたと言われている。

というのも、担当デザイナーを店の誰が務めるかは、最初に顧客から服の注文を受けたデザイナーとするのが、シャネルの店の「鉄の掟」である。横取りしようものなら、「死の制裁」が待っていると噂されているほどの大問題だった。

サーシャと母親のミーシャが洋服の注文を済まして帰り支度をしていると、店の前では警察の交通規制が始まり、すこし騒がしくなった。

やがて出迎えを受けて、店に入ってきたのは、茉莉香、チアキ、グリユーエル、ヒルデの四人だった。

サーシャも合流して、5人が応接室で顔をそろえた。

コツキー・シャネルから丁寧なあいさつを受けた後に、チアキが言った。

「こういうお店で友達に会うとほっとするわ。マミ、言葉遣いはいつもの調子でお願い



ね。」

マミは、オーナーのコツキー・シャネルの表情を確認してから、言った。

「わかったわよ。チアキちゃん。でも、この部屋の中だけだよ。」

それで、今日は茉莉香のダンス発表会用ドレスの話でしょ。どうしてお姫様が3人もついてきたの。」

「ナハハ……。お目付け役だって……。」

茉莉香が苦笑いした。

「まったく、姉さんは、私たちのことをどう思っているのかしらね。何でもグリユーエルに相談しろ、だって。」

チアキがふくれっ面で言った。

マミは、茉莉香と自分を「私たち」と言ったチアキを、黙って見つめていた。

「私は、後学のために見学させていただきに参りました。今日は、先生もいらつしやるとお聞きしましたので。」

ヒルデが言った。

グリユーエルは、何も言わず、微笑んでいる。

「それはそうと、ダンス発表会も五回目で、やっと茉莉香さんは男役から解放されるのね。」

サーシャが言った。

「ダンスパーティーは、これで最後なんだものね。で、ダンスのお相手は、誰なの？」

マミが、興味津々といった顔で聞いた。

「お客様だよ。ダンスの相手は、私の父兄枠でやってくるお客様だよ。」

今、分かっているのは、モーガンさんとブルック王国の王子さん3人の、合わせて4人。みんな、お仕事関係のお客様さま。

あとは、サプライズだって。ダンス部の部長がそう言っていたよ。

私のお客様は、私と踊るとき以外はダンス部の三年生がお相手をするというので、彼女たちは喜んでいただけだね。」

茉莉香が、すこし気が重そうに、他人事のように答えた。

「その四人と踊るって、茉莉香、なにか理由があるの？」

マミが聞いた。

「これもお仕事のうちかなあ。ほかには何も無いよ。絶対、何もありません。」

そうだよね。チアキちゃん。」

「白い百合の花、赤い玉・・・」

チアキが顔をそむけて、少し悪戯っぽく小さな声でつぶやくと・・・

「わわわわわわわわ。お仕事だってば・・・。」

茉莉香は、顔を赤くし声を上げてチアキの話をさえぎり、両手を振ってチアキの声をかき消そうとした。

「ウフフ……それでサブライズのお客様とは、もしかして……」

グリユーエルが言った。

「そうよ、きつとね。」

聖王家の男性にも、大学生くらいの年ごろで、カッコイイ人が結構いるらしいよ。

茉莉香、これもあなたのためだと思うよ。」チアキも言った。

「フフフ……。茉莉香さん、人気者は大変ね。」サーシャが言った。

「はあ……。茉莉香はため息をついた。

どうして、こんなことになったのか？

それは、ブルック王国バレンシア王女の電話から始まった。

「……ということで、弟たちに王族としてのマナーやダンスなどの習い事をさせているのだが、彼らも元が海賊なので『お上品な習い事』にはやる気が出なくて、私も困っている。」

そこで、茉莉香。頼む。

ダンスパーティーで弟たちと踊ってやってほしい。

場所は、銀河聖王家のパーティーでもいいのだが、クリステリア王女に聞くとところによ

ると、白鳳女学院の卒業記念ダンスパーティーもなかなか華やかだそうだね。そこで、一曲づつでいいから弟たちと踊ってやってほしい。

頼む。

彼らも男の子だ。大好きな女の子の前でイイカッコするためなら、やる気も出るとうものだ。

茉莉香、茉莉香サマ、茉莉香サマ〜！ 恩に着るから、頼む。

たかがダンスだと、気楽に考えてほしい。

弁天丸の営業だと考えてもいいから、

もちろんドレスとか必要経費はみんな私が出すから、

ギヤラも出すから、

弟たちと踊ってやってほしい・・・。」

バレンシア王女は、弟たちを大切に思う気持ちから、本当に熱心に頼んできたので、恥ずかしいから断りたいと言えるような雰囲気ではなかった。

もちろん、クリステイア王女からも、

「茉莉香、ぜひ踊ってやってほしい。」

彼らに招待状を出すように、校長先生には私から話しておくから。」

と言われて外堀も埋められ、ますます断れなくなってしまった。

さらに、この話をミーサに相談すると、

「それなら、ギルバート・モーガンさんも呼ばないといけないわね。

あの人、船長のために本当に尽くしてくれているでしょ。

このあいだの『本気の白兵戦』でも、船長を守って、一緒に戦ってくれたんでしょ。ウフフフ……。

あなたも、帝国海賊のキャプテンなのだから、大人の対応をなささいよ……。

と言われ、さらに、

「ダンスで、花嫁決定戦かあ!! パイ投げよりロマンチックで良いわよねえ。」

と、クーリエに『冗談』を言われ、

「四人で済めば、良いけど……。」

ルカが水晶玉を見ながら言った。

今回は、ルカの占いが的中してしまったのだ。

「……………」

茉莉香のため息に皆が沈黙した。

その沈黙を破ったのは、コツキー・シャネルだった。

「さて、マミさん。加藤茉莉香さんのドレス、書いてきたデザイン画をお見せしなさい。」

「先生、本当に私が注文を受けて良いのでしょうか？」

「良いのよ。これは、あなたが本当にプロを目指すかどうか、自分の気持ちを確かめるためのテストよ。」

ただのアルバイトのママにドレスの注文を受けさせるのは、それだけママの才能への評価が高いとおもわれる。足りないのは、プロ根性だと思われるのだろう。

「はい、先生。」

では、これが、私がデザインした茉莉香のダンスパーティー用のドレスよ。」

「うおー！　きれいだねえ。」

デザイン画に書かれたドレスを着た自分の姿を想像して、茉莉香の表情は、たちまち明るくなった。

グリユーエル達もママのデザインしたドレスを誉めた。

「この絵に書かれた形のティアラでしたら、私のものをお使いください。ドレスが一層引き立ちますわ。」

きつと、茉莉香さんによくお似合いだと思いますよ。」

グリユーエルが言った。

「それなら、この絵にある首飾りやブレスレットは、私のものを使ってよ。」

このドレスには本物の貴金属が似合うわよ。海賊服じゃないんだから・・・。」

チアキが言った。

こうして、ドレス以外の、必要なアクセサリーなども整っていった。

そして、チアキの話がきつかけになり、これまでのダンス・パーティーでマミが作った海賊服の話題になり、少女たちはファッションの話で大いに盛り上がった。

この時を待っていたとばかりに、コツキー・シャネルがこう言った。

「海賊服も素敵ですけど、ドレスといえば、なんと言ってもウエディングドレスではないでしょうか。」

ちようど、いま、新春に発表する予定の新作ウエディングドレスの試着品を持って来ているのですが、ご覧になりますか。」

「うわあ〜。本当ですか、先生。」

「先生が試着品とおっしゃると言うことは、試着させて頂けるのでしょうか。」

「もちろんですわ。どうぞ、どうぞ。」

「うわああ〜。」

「まあ〜。」

これを聞いて、五人の少女たちが大興奮したことは言うまでもない。

まず、「後学」のため、ヒルデが試着してみることになった。ヒルデは、この店でドレスを作る手順などの説明を受けながら、試着室で着替えて現れた。

「どうでしょうか。みなさま。」

純白のウエディングドレスを着たヒルデは、天使のように美しかった。「うわぁー、素敵。」

皆が歓声を上げ、自分の姿を鏡で見たヒルデも満足そうだった。

皆が次々と試着し、やがて、茉莉香も試着して皆の前に現れた。

「どうかなあ〜。みんな」

「まあ、茉莉香さん、素敵ですわ。」

グリーユールが言った。

「まあ、本当にお美しいですねえ。虹のように輝くオーラを感じますわ。」

茉莉香さんは、このドレスのイメージにピッタリですね。これだけ似合う方に着ていただく、私もうれしいです。」

茉莉香はコツキーからも絶賛された。

茉莉香の試着したドレスは、イメージどころか、サイズもピッタリ。やはり、コツキーの狙いは、茉莉香だった。

しかし、茉莉香は鏡で自分のウエディングドレス姿を映してみた時に、鏡の端に映ったマミの顔が笑っていないことに気がついた。

そして、茉莉香は笑顔でマミにこう言った。

「マミ。私が本当にウエディングドレスを作るときは、マミに頼むからね。なんたって、



「マミは私専属なんだから。」

「ありがとう。」少し笑顔が戻ったマミが答えた。

しかし、チアキが言った。

「マミ。甘いわね。茉莉香のドレスがプロへのテストと言うのなら、私もドレスを注文するわ。茉莉香以外の人の服を作るかしら。」

そう言つて、チアキがマミをみつめ、マミがチアキを見つめ返した。

「チアキちゃん、担当デザイナーが決まっているのでしよう?」

「そんなのはプロの世界の話よ。あなたは、まだプロじゃないでしょ。」

「先生、良いのでしょうか?」

「王女様のおっしゃる通りよ。自分の気持ちを確かめてみなさい。」

「・・・わかりました。やってみます。」

「しかし」と言うか、「予想通り」と言うか、後日、マミは、チアキの注文を断つてしまった。銀河聖王家御用達の榮譽など彼女には興味が無かった。

マミは、茉莉香のドレスを仕上げるとランプ館のバイトに戻り、店の前の歩道から空を見上げてつぶやいた。

「茉莉香。やはり、私は茉莉香専属だよ。」

茉莉香の服でないと、アイデアが湧いてこないよ〜。」

マミは、マミの道を往く。

## 第十六章 海賊の覚悟 茉莉香の進路

16—1 銀河帝国王宮クリスタル・パレス（クリスタルスター）

この日、茉莉香はクリスティア王女に呼ばれて、銀河帝国の王宮クリスタル・パレスへ向かった。

クリスタルスターにある地上の王宮は、練習航海の時に外から眺めただけで、実際に入るのは、初めてだった。

ギルバートが運転する帝国軍のコミューター車は、王宮からかなり離れたところで、強制的に自動運転に切り替えられた。ここから王宮側のコントロールにより、コミューター車は地下道に入り、複雑で迷路のような道を進んで、王宮付近の地下駐車場に止まった。

そこで、茉莉香とギルバートは、男3人女2人の屈強な兵士の出迎えを受けた。その中から進み出てきた女性士官が茉莉香に敬礼して、言った。

「特別警護隊のホワイト大尉です。まずは、加藤大佐を第二王女殿下の下へお連れするように言われております。」

「加藤茉莉香です。お出迎え、ありがとうございます。ご伝言、承知しました。」

茉莉香も敬礼した。

ユーロクラシック調の高い柱が並ぶ王宮の廊下を、女官に先導され5人の警護隊に囲まれて、茉莉香とギルバートは進んでいった。

そして、第二王女の部屋に通された。警護隊は部屋の外で待機している。

チアキは、豪華な応接セットに座って、待っていた。

「やあ、チアキちゃん、久しぶり。」

ところで、あの私への警備、なんかすごいことになっているわね。」

チアキと話すときの茉莉香の口調は全く変わらない。

「何、言ってるのよ。」

その原因を作ったのはあなたでしょよ。

先日の模擬演習の結果、聞いたわよ。

聖王家のローズガードン号を捕虜にして、ミルキーウェイを経由して、レッドクリスタル星系に進入。

帝国軍中央基地に攻め込んで、人工時空震で第一艦隊を撃破。

さらにクイーン・オブ・パイレーツに体当たりして、白兵戦までやろうとしたんですってね。

「結果はあなたの大勝利。」

「ナハハ……。もう知ってるの。」

「その結果にショックを受けて、要人警備の強化が決まったんですってよ。」

なにせ、この九百年間、たとえ、シミレーションであっても、旗艦のクイーン・オブ・パイレーツまで攻め込んだ軍隊はいなかったらしいから、参謀本部は相当なショックを受けたらしいわよ。

しかも、貴方の相手が、帝国軍のエース、ミニッツ大佐と知って、二重のショックを受けたらしいわよ。

さすが、海賊の娘だつてね。

本当に、うちの軍隊、油断してるといふか、マツタク、なつてないわよ。

母さんに『思い上がるな』って、叱られた訳よね。

まあ、警備強化の対応が早いだけ、マシかもしれないけれど。」

「それで、今日は、司令官に呼ばれてるんだけど、その前にチアキちゃんのところへ行くように言われたんだけど……。私に、なにか、用があるの?」

「それなんだけど、茉莉香、進学、どうするの。まだ決めてないんでしょ。」

「うん。まだ決めかねている。」

「だったら、私と一緒に帝国女学院の家政学部特別コースに進学しなさいよ。」

そのコースは、今のところ学生は私だけなんですって。

でも、私一人じゃ、大学に行ってるような気分にならないし、せつかく大学行くなら、茉莉香もいっしょに進学すれば、なにかと便利じゃない。」

「チアキちゃん、それって、お姫様コースじゃないの・・・。」

「そうかもしれないけど、いいじゃないの。」

もともと、二人で見習いやろうって副官に誘ったのは茉莉香の方だし、その続きのよ  
うなものよ。」

「いや、それとこれとは・・・。」

「それに茉莉香、あなた、何も決めていないと大変なことになるわよ。」

今日呼ばれたのは、何の用事か知っているの?」

チアキはギルバートの方をちらりと見て、席を外すように言った。

彼が部屋の外に出てから、チアキは言った。

「ズバリ、縁談よ。その準備のために、すでにあなたの気持ちが決まっているかどうか、  
確かめようというのよ。」

あなた、ギルバートさんと結婚すると、決めているの?」

「ええ? 私?」

ギルバートさんは、私には何も言わないし、そんな話はお母さんや弁天丸にも来てい  
ないし・・・。

それに、私はまだ高校生で、結婚なんて考えるような年齢ではないというか、まだそんな気分ではないし……。」

「茉莉香、あなた、自分の結婚に女王陛下の許可が必要という話、軽く考えてはだめよ。それ自体、王族並みの扱いだし、実際に、王族になつてもおかしくないつてことよ。それに、あなたの結婚の許可を実際に仕切るのは、ローガーデンクラブの会長であるアンドレア公爵夫人のエカテリーナ様よ。」

「ああ、あの人ね。会ったことある。」

「あの人、茉莉香を気に入ってるみたいだから。」

「あなたがギルバートさんと結婚すると決めているならいいけど、何も決められずにふらふらしていると、王族との縁談をセツトされるかもしれないわよ。」

「ええ……！それって、本当？」

「だって、聖王家は、婿や嫁に時代の流れに沿つて優秀な人材を受け入れてきたからこそ、銀河系の王として君臨できた訳よ。テオドラ皇后みたいにね。」

「あの、金貨の女神様ね。」

「そうよ。だから、今の時代なら、あなたが選ばれてもおかしくないわよ。」

それに、あなたが王家に嫁げば、私も姉さんも母さんもずっとあなたがそばに居てくれるんだから、大歓迎だしね。」

「でも、私なんか、お姫様ってガラじゃないよ。海賊の娘だし……。」  
「私だって、海賊の娘よ。」

「そりゃ、そうだけど……。」

「だから、結婚の決心がまだつかないなら、せめて進学先だけでも決めて、将来のことをしっかり考えてますと、アピールしないとね。」

のんびり、うかうかしてて、王族との縁談が着たら、断れないわよ。」

「はあ……。私たち、まだ18歳だよ。」

「もう18歳と見る人もいるのよ。サーシャだって、縁談がいつばい来て、大変だって言ってたでしょ。……。」

「はあ……。チアキちゃん、助けて……。」

「だから言っただけよ。」

それから、茉莉香。」

「なに？」

『「ちゃん」じゃない。』

茉莉香は、チアキの部屋を出るとつぶやいた。

「チアキちゃん、帝国軍のことを『うちの軍隊』って言ったよね。」

もう立派な王女様なんだね。フフフ……



でも、性格は変わつてないなあ。『一人じゃ寂しいから、一緒に進学して欲しい』って  
言わないんだもの。フフフ……。

でも、私もしつかりしないとなあ……。」

茉莉香は、モーガン家でもらつた赤い球を掌に乗せて、その中に輝く星を見つめた。

茉莉香は、つぎに王宮内のクリスティア王女の部屋に向かった。

茉莉香は、女官に先導されて、ギルバートや警護隊に伴われ、王宮の廊下を進んでい  
く。

すれ違う来客の人々は、堂々とした行列の中心が、帝国軍の新しい軍服を着た少女と  
知つて驚き、茉莉香に視線を合わせていく。

そして、

『ああ、あのキャプテン茉莉香だ』

と、人々は納得して、すれ違っていく。

帝国軍の高官たちは、連れ違う茉莉香と敬礼を交わしていく。

やがて、向こうから小さい女の子を連れだした夫婦を中心にした人々が歩いてきた。

「白薔薇家の次期当主、ニコライ殿下ご一家です。」ギルバートがささやいた。

茉莉香たちは道を譲るため、廊下の絨毯のわきに下がり、臣下の礼を取つた。

夫婦がにこやかに笑顔で答え、通り過ぎようとしたときに、連れの小さな女の子が茉

莉香を見つけて立ち止って、言った。

「そのコスプレ、よくお似合いよ。」

あなたも、キャプテン・マリリーが大好きなのね。私も大好きなのよ。

私も今度、あなたのような、キャプテン・マリリーの衣装を作ってもらうんだ。ウフフ。いいでしょう。」

「あああ……、ごめんなさいね、キャプテン・茉莉香でいらつしやいますよね。

娘は、テレビドラマ『宇宙海賊キャプテン・マリリー』に夢中なんですよ。」

すこしあわてて、妃殿下が茉莉香に説明した。

「お母様、キャプテン・マリカではなくて、キャプテン・マリリーですわよ。」

「ああ……はい、はい。」

「キャプテン・茉莉香、失礼しました。」

でも、いい機会だから、娘と一緒に写真を撮らせてください。

娘にはあとでよく言っておきますよ。もう少し大きくなったらね。」

ニコライ殿下が、微笑みをうかべて言った。

「承知いたしました。」

茉莉香が答え、四人は記念写真に納まった。

グロリア姫は、映画『宇宙海賊キャプテン・マリリー』に主演して人気を集め、次いで

子供向けテレビドラマ『宇宙海賊キャプテン・マリー』に主演して、銀河系の小さな女の子にとつてあこがれのヒロインとなっている。

したがって、子供たちにとつて、宇宙海賊キャプテン・マリーは、原作のモデルであるキャプテン・茉莉香をしのぐ知名度を獲得するまでになっていた。

このような事情は、逆に、大人たちの間では、モデルとなつたキャプテン茉莉香の評価が高くなるという結果をもたらした。

ニコライ殿下は振り返つて、遠ざかつていく茉莉香一行を見て言った。

「あれが、公爵夫人お氣に入りのキャプテン茉莉香ですか。

それにしてもモーガン卿の息子となかなかお似合いのカップルではないでしょうか。

もう付け入るスキはないようですね。」

「いえいえ。」

あの子の今の輝きは、あの子自身から発するもので、恋の炎から発するものではありませんわ。あの子はまだ恋に落ちてはいませんよ。」

茉莉香の後姿を見て、妃殿下が言った。

「そうですか。ではまだチャンスはあると……。」

「フフフ……。これからが楽しみですわ。」

さらに宮廷の廊下を進んだところで、茉莉香は意外な人たちと出会った。

「あつ、梨理香さん、こんなところで何しているの!？」

向こうから歩いてきたのは、加藤梨理香と宇宙海賊『鉄の髭』だった。

「あ! やつぱり王宮で茉莉香に会えたねえ。うれしいよ。」

お前、今、何してるんだい。」

「司令官に呼ばれたから・・・。」

「そうか、そうだったね。第一艦隊司令官の副官になったんだよな。」

その軍服姿、なかなか似合うじゃないか。

それにしても帝国軍の大佐かあ。立派になったねえ。こんなに大勢の人をひきつれて。

あ、みなさん、茉莉香の母です。

娘がいつもお世話になっていきます。お礼を申し上げます。」

梨理香は、実に愛想よく、頭を下げた。

「ナハハハ・・・。」

あつ、鉄の髭さん、お久しぶりです。」

「やあ、キャプテン茉莉香。」

・・・そちらは、モーガン中尉ですね。初めまして、鉄の髭です。」

「へえー、この人がモーガン中尉・・・。」

初めまして、加藤莉里香です。娘がお世話になっていきます。

ふつつか者ですが、これからもよろしくお願いします。」

「ギルバート・モーガンです。初めまして。こちらこそ、お嬢様にお世話になっております。これからも、よろしくお願いします。」

「それで、梨理香さん、王宮に何の用なの？」

「いやあ、私は初めて来たんだけど、すごいところだねえ、銀河帝国の王宮は。」

茉莉香、実はねえ、この鉄の髭が、帝国海賊の免許を返上して、辺境宇宙に行つて資源開発事業をやるかと決めたんだ。

昔から、こいつは、大事なことはいつも勝手に決めるんだけどね。

それで、お世話になった女王陛下や第一王女様にご挨拶に行くというので、私もついてきたんだ。

最後に一度くらい茉莉香が仕えている銀河帝国の王宮を見てみたかったしね。」

『最後に一度』って……、もしかして、梨理香さんも、一緒にどこか遠いところへ行つちやうの？」

「ああ、そうだよ。わたしもパラベラム号のクルーだしね。」

「ええ！ お母さん、そんなこと今、初めて聞くよ。どういふことなの……。」

茉莉香は動揺して、声が大きくなった。

「驚くのは無理もないねえ。

まあ、ここじや、お前ともゆっくり話はできないだろうから、今度、お前が家にいる時に詳しく話すよ。こここのところ、いろんなことがあつたしねえ。

「じゃあな……。」

「お母さん！　ちよつと待って！」

加藤梨理香と鉄の髭は、茉莉香が呼び止めているにもかかわらず、王宮の廊下を歩いて遠ざかつて行つた。

歩きながら、梨理香は鉄の髭に言つた。

「本当にこれでいいのかい。何も言わないままで。」

「ああ。『新しい酒は新しい革袋に入れろ』……。」

「ぶつ……、何を言つてるんだい。また訳のわからないことを。」

まあ、娘が予想以上に立派になつちまつたので、今更つてことだろう。

しかし、あの子が、さつさと玉の輿に乗つて、大邸宅の奥様とかお城の奥方様にすんなり収まるとは思えないけどね。

女王陛下からアンドロメダ遠征隊に参加するようにと誘われると、弁天丸に乗つて喜んで付いていったりするのかなあ。

それにしても、もう、私たちが茉莉香にしてあげられることは、ほとんど無いだろう

ねえ。

お前さんの作った、加藤茉莉香に関する不可侵協定も、もう用済みだしなあ。

あの子には、女王陛下や帝国海賊の八長老が後見人としてにらみを効かしてるからね。」

「ああ。」

「まあ、こんなところで、そっけなく別れを言えたのは、むしろ幸いだったかもしれないね。・・・ハハハ。」

そう言つて、梨理香は、茉莉香が歩いて行つた廊下を振り返り、そしてシャンデリアが輝く銀河帝国の王宮の天井を見上げた。

「ココが銀河の中心か。」

茉莉香。遠いところへ行つてしまったのは、お前の方だよ。」

海賊達もそれぞれの道を征く。

茉莉香は、クリスティア王女の部屋に着き、控室に通され、呼び出しを待った。

そこへ公爵夫人エカテリーナが何気なく入ってきた。

「あら、茉莉香さん、お久しぶり。」

『キター〜！』と茉莉香は一瞬、身構えた。チアキが警告したとおりに、聖王家との

縁談を茉莉香に勧めようとしたのだろうか。

「お久しぶりでございます。」茉莉香とモーガンは立ち上がって、敬礼をした。

「どうぞ、お坐りなさい。どう、このごろ海賊家業は？」

「いやあ、それは、ぼちぼちです。」

「こちらの方は？」

「こちらは、ギルバート・モーガン中尉でございます。帝国軍では私付きの秘書官ですが、ご存じ帝国海賊モーガン卿の御長男でいらつしやいます。」

「あら、あなたがメイフラワーさんのお孫さんね。初めまして。」

「はじめてお目にかかります。ギルバート・モーガンでございます。」

「お坐りなさい。こう見ると、お二人はなかなかお似合いのカップルですね。」

公爵夫人の口から出た言葉は、茉莉香の予想外だった。

てつきり、聖王家主催のパーティにでも誘われて、事実上のお見合いをするように勧められるものと予想していたからだ。

予想外の言葉に、茉莉香は何と答えようか戸惑った。

「ハハハ……。いえいえ、そんなことをおっしゃられても……。ギルバートさんにご迷惑が……。」

そういつて、茉莉香は苦笑しながら、ギルバートを見た。



その時、茉莉香の懐中時計型通信機が鳴った。もちろん弁天丸からの通信であるが、こんな時に出るわけにもいかないので、呼び出し音を切ろうと茉莉香はポケットに手を突っ込んだ。

『え〜と、懐中時計はたしか・・・』

茉莉香は焦ってしまい、呼び出し音のスイッチがなかなか切れなかった。仕方が無いので、ポケットの中のをまとめてつまみ出した。

すると、懐中時計といくつかの紙切れと一緒に、赤い玉も出てきた。

「あら、その赤い宝玉はスタールビーかしら。鮮やかな色といい、中心の星の輝きといい、大きさといい、なかなかの逸品ね。」

茉莉香さん、これは、どなたかに頂いたものかしら。」

「あ、あ、はい。頂きました。」

ギルバートさんの御祖母様、メイフラワー様から頂きました。

な、な、悩んだときはこれを見て占うと良いとおっしゃってました。」

なぜか、茉莉香は口ごもってしまった。

そして、茉莉香は赤い玉を掌に大切そうに載せて、夫人に見せた。

「やっぱり、『モーガンの赤』ね。そうなの。よかったわね。」

あら、茉莉香さん、王女様がお呼びのようですよ。」

公爵夫人は、女官が茉莉香を呼びに来たのを見て、言った。「失礼いたします。」

茉莉香とギルバートは立ち上がって、敬礼した。

二人の後姿を見ながら、公爵夫人はつぶやいた。

「フッフ、加藤茉莉香。ますます欲しくなったわ。」

彼女の気持ちはまだ固まっていないようだし、モーガン家のメイフラワーには負けられませんからね。」

クリスティア王女の部屋は、以前のようなメイドの『控室』ではなく、銀河帝国の第一王女が本来使う豪華な部屋だった。

「いよいよ、来たね。まあ、かけなさい。」

「おい、紅茶を三つ。」

そう言うクリスティア王女の姿は、笑顔にあふれ、そして全力で働いている人が発する輝くオーラに包まれていた。

「来てもらったのは、茉莉香、おまえの進路のことだよ。」

知っているかもしれないが、妹のチアキは帝国女学院大学の家政学部特別コースに進む。

そこでだなあ、お前も一緒に特別コースに進学してくれないか。

「あいつは、自分一人ではイヤだと言いつけ出しかねないからな。その点、お前といっしょなら、チアキも安心だ。」

「それは、チアキちゃんからも聞いています。私、お勧めのように帝国女学院大学の家政学部特別コースに進学したいと思います。」

チアキちゃんからその話を聞いたときには、正直迷っていたんですが、私、この赤い玉を見つめていて思ってたんです。

チアキちゃんと一緒に銀河の真ん中に出てきたのですから、これからもできるだけに一緒に進みたい。だから、大学も一緒に進もうと思いました。」

「そうか、ありがとう。」

で、その宝玉は、モーガンの赤か。」

「ええ？ご存じなんですか。」

「お前、また、何も知らないで受け取ったんだろう。ハハハ・・・」

「やつぱり、そうなんですか。」

「おい、モーガン中尉、あとでちゃんと教えてやれよ。お前の責任だぞ。」

「はい、承知しました。」

「でも、よかったよ。茉莉香も進学を決めてくれて。これで、三人目もあつまる。」

「ええ!! 私たち二人じゃないんですか?」

「ハハハ、茉莉香。こういう時に必ず出てくる誰かさんを、忘れてはいないかなあ。おおくい。もう隠れていなくてもいいよ。」

「ま、まさか、あの子のことじゃないでしょうね……」

「こんにちは、茉莉香さん。また、ご一緒できますね。」

それに、今度は同級生ですよ。」

茉莉香の予想通り、衝立の向こうから現れたのは、グリューエルだった。

「よかったよ。茉莉香とチアキだけじゃ、ちよつと危なっかしいけど、グリューエルがいれば安心だからね。」

クリスティア王女は笑った。

『司令官は私たちのことをなんだと黙っているんだろうか……。ナハハ……。』

茉莉香は、内心でそう思い、苦笑いした。

そして茉莉香は、グリューエルに向かって言った。

「グリューエル。あなた、まだ中学生でしょう。どうして大学と一緒に入れるの？」

茉莉香がさういうと、グリューエルは、セレニティ王国の紋章が付いた豪華な書類ケースに挟まれた、一枚の重々しい書類を茉莉香に見せた。

そこには、次のように書いてあった。

『大学入学資格証明書』

「私は、茉莉香さんの行くところ、どこへでもついていきますわよ。そのために、この証明書だって、ちゃんと学力試験に合格して頂いたのですよ。」

グリユーエルは満面の笑みを浮かべた。

グリユーエルも彼女の航路（みち）を征く。

## 16—2 弁天丸船長室

次の仕事へ向かう弁天丸の船長室では、茉莉香がいろいろなことを思いだして、気持ちの整理をしようとしていた。

『モーガンの赤』と呼ばれるスタールビーの大きな宝玉は、予想通り、ギルバートの祖母がモーガン家に嫁いだ時に夫から送られたものだった。モーガン一族の女は、代々赤いルビーの宝石を身に着けるものとされており、その中でも祖母の宝玉は特に有名なもので、代々の女から受け継がれているものだった。

つまり、それを茉莉香に譲ったのは、祖母は茉莉香にモーガン家に嫁いでくれることを望んでいるという証だった。

そして、もちろんこの話を茉莉香に説明してくれた後で、ギルバート・モーガンは茉莉香に結婚を申し込んだ。プロポーズは高校を卒業してからと思つてこれまで控えていたとも言われた。

「やつぱり、そうかあ。

ギルバートさんは私の先生だから、私、先生と生徒はそういう関係ではないと思つてただけだなあ。そうすると……はあ〜」

茉莉香は、掌のスタールビーの宝玉を見つめて、ギルバートの話を思い出し、ため息をついた。

その時に、船長室のドアを誰かがノックした。

「ちよつと、いいかしら。」

ミーサだった。

「なに？ 用事かしら？」

「いえ、ねえ。茉莉香がなにか考え込んでいるようだから……。」

「はあ〜。わかりますかあ。」

「そりや、見てれば分かるわよ。」

「実はねえ……。」

茉莉香は、先日からのクリスタル・スターでの出来事をミーサに話した。

モーガン家を訪ねて赤い宝玉をもらい、ギルバートから結婚を申し込まれたこと、そして、宮廷の廊下で梨理香と鉄の髭に会い突然別れを告げられたこと、宮廷でエカテリーナ公爵夫人に会ったこと、チアキやグリユーエルと一緒に帝国女学院進学を決めた

ことなどを一気に話した。

「それにねえ、この間、帝国軍の司令部で模擬戦をしたでしょ。」

「ずいぶん派手にやったそうね。おかげで、弁天丸の中まであなたの特別警護部隊がついてくることになったじゃないの。」

「ハハハ、それはともかく、その経験から、私、思ったんだ。」

「これからは重力制御推進方式の船でないと仕事にならないって。」

「そうねえ。この間の実験も危ないところだったしねえ。」

「でしょう。これからも海賊家業を続けようと思えば、弁天丸二世号の建造を本気で考える必要があるわよね。」

「幸い、私の帝国海賊の免許は、船の新造を禁止していないでしょ。」

「そうね、加藤茉莉香に関する勅令を順守することって以外は、無条件なものね。」

「そうでしょ。」

「でも、この頃は、この辺で海賊家業に見切りをつけようとする人もいるけどね。」

「そうかあ。この辺で見切りかあ。．．．でも、私は嫌だな、そんなの。」

「茉莉香の気持ちは、はっきりしているのね。」

「そうだよ。だって、私は海賊だもの。今までも、これからも、ずっと。」

「茉莉香。ここで海賊家業に見切りをつける人は、これから何をしようって考えている

か知ってるかしら?」

「知らないよ、そんなの。」

「実は、今ねえ、そういう海賊たちの間では、銀河帝国のフロンティア（辺境）拡大政策に乗っかって、辺境宇宙の開発に乗り出そうっていうヤツが多いのよ。成功すれば、ブルドッグの奴みたいに『俺の王国』ができるってね。」

「あ、そうかぁ……。鉄の髭さんもそう考えているのかぁ。」

「そういうこと考えているのは、海賊だけじゃないわよ。聖王家の男たちも、暇つぶしをして人生を過ごすよりは楽しいだろうって、大勢、出かけていくらしいわ。」

「そうなんだ……。ブルック王国も実際は大変そうだけどね。」

「いい機会だから独断で言うけど、茉莉香、本当は知ってるんでしょ? 鉄の髭は……。」

「言わないで。ミーサ。」

私、分かったんだ。今の私は自分の成すべき事をしていけば良いってね。

チアキちゃんのお母さんのように、その時が来れば向こうからやってくるでしょう。

でも、それまでは、私は、私。

弁天丸で、自分のなすべきことをするだけよ。」

「あなたも、船乗りになつたわね。」

「そうだよ。私は、今までも、これからも、弁天丸船長加藤茉莉香だよ。」



「そうね。それでいいわよね。」

どうかしら、少し気持ちの整理はついたかしら。」

「うん、ありがとう。ミーサ。」

「ところで、私が王宮にいる時に、弁天丸から通信の呼び出し音が鳴ったけど、あれ、何の用だったの？ 後で折り返しの連絡をして用件を聞くのを、すっかり忘れてたんだ。」

「ええ？ そんな通信してないわよ。そもそも、王宮の中って、通信電波がつかないんでしょ。」

「たしかに……。」

ええ?! じゃあ、あれは誰から？」

「フフフ……。」

茉莉香、『モーガンの赤』の中には、死んだ帝国海賊の魂が封じ込められているって噂、知ってる？ スタールビーの星の輝きは、その魂の輝きなんだって。

それに、現代のホラー映画では、幽霊が電話をかけるのは、常識よ。フフフ……」

「もう……! そんな話、やめてよね。」

茉莉香は両耳を押さえて、ミーサに言った。

「この間のこと、私、まだ怒ってますからね。わたしが怖い話は苦手だって知ってて、あんなシナリオを書いたのは、やっぱりミーサでしょ。」

「ホホホ、どうかしらね。」

16—3 弁天丸ブリッジ

呼び出し音の謎は解けぬまま、茉莉香は船長室を出て、ブリッジへ向かった。

途中、船員室の方から、にぎやかな騒ぎが聞こえてきた。

「それ、猪、鹿、蝶、と来た。また、俺の勝ちだな。」ケインの声が聞こえる。

「また、負けたあ．．。」クーリエの声も聞こえる。

タバコと酒のにおいが鼻を突き、茉莉香はその前を急いで通り過ぎた。

海賊がタバコ、特に葉巻を吸うのは『海賊の伝統文化の尊重と伝承』のためというのが、海賊の愛煙家の主張であり、喫煙は弁天丸でも認められていることである。

しかし、ケインが葉巻を吸っている姿を見るのは、茉莉香は初めてだった。

茉莉香は、ブリッジに戻るとクルーの皆を呼んで、重力制御推進方式の弁天丸二世号を新造するつもりであることを告げた。

具体的な船の設計は、シュニツァーがほかのクルーの要望も聞いて、造船会社と相談して詰めていくように指示した。

「百年ぶりの新造船、今度は高出力転換炉だあ。」

もう寿命切れの阿号、卍号ともお別れと思うと少し寂しいけどね。

でも、わくわくするなあ。

よし、いっちょようやるかあ!」

「造船会社は、やつぱり、ステープル重工業だろう。」

船長、社長に掛け合つて安くしてもらつてよ。」

「いや、この頃、他社も頑張つてると聞いたよ。」

「この弁天丸つて、どこの会社が作つたの?」

「作つた会社は、とつくにつぶれてると聞いたわよ。百年前だものねえ。」

「時空ナビをいれるなら、あたしのデスクは、この際に直してほしいところがいっぱいあるのよね。」

「時空ナビを入れると、未知の宇宙を航海するスリルが無くなつて面白くないわよ。」

それで、この際、ブリッジに水晶玉を設置したらどうかしら。」

時には運を天に任せて航海するのもスリル満点よ。」

みな、茉莉香の話聞いて、張り切つていた。

「あれ、そういえば、まだケインが来ないわねえ。」

どうしたの、さつきは賭け事に勝つて元気そうだったじゃないの。」

茉莉香が言った。

「一応、今は休暇中よ。」

「船に乗ってるのに休暇をとっているなんて、なによ、それ。」

「それなんだけどね、茉莉香。また悩み事を増やして、悪いんだけど……。」

ミーサが茉莉香のそばに来て、小声で言った。

「なに？」

「実は、ケインが弁天丸をやめたいって、言ってるのよ。」

「やめる？」

「どうして！ 理由は何？ 何か不満でもあるの？」

茉莉香は突然の話に驚いた。

「いやあ、前から考えていたらしいんだけど、船を降りて大地の上で働きたいそうよ。」

「船を降りる？ ケインが？ 本当に？」

あの人、根っからの船乗りだって自分から言ってたじゃないの。」

「そうね。どういうことかしら。」

茉莉香は、先ほどケインが賭け事をしていた船員室に向かって駆け出した。

「ケイン！ ケイン！ いるんでしょ。」

ケインがいるはずの船員室は、酒とたばこの臭いが充満していた。

少し息をつめて、茉莉香はその部屋に飛び込んだ。

ケインは眠っていた。大きないびきをかいている。髭も伸びて、服も着替えていない

ようで、少し荒んだ印象だ。

以前のケインは、決してこんな姿は見せなかった。少なくとも、弁天丸の操舵手として、そして白鳳女学院の先生として茉莉香の前に登場したときには……。

「ケイン！ ケイン！ 起きなさい。起きなさい。聞こえてないの！」

茉莉香が何度か名前を呼ぶと、ケインは薄目を開けた。

「なんなのよ、この生活。ケインらしくないじゃない。」

「そうですか、俺はもともと、こんな人間ですよ。海賊なんだから。」

「そんなのおかしいわよ。あなたらしくない。」

それに、弁天丸を辞めるって、なによ。地上に降りるってなによ。

あなたは、根っからの船乗りじゃなかったの。」

「いやあ、宇宙の海も変わるし、この際、もともと憧れてた地上での暮らしを始めてみようかと思ひましてね。……もう決めましたよ。牧場でカウボーイも良いかなって。」

ケインはまた眼を閉じて寝転んでしまった。その姿は、船長ともう話すことはないと言ふ拒絶の態度に見えた。

「ケイン……」

茉莉香がしょんぼりして去った後に、ケインの前にミーサが現れた。

「あまり上手なやり方ではないわね。」

「そうかい？」

でも、俺がここに来た時には想像もなかったようなことが、いっぱい起きたからね。そのなかで、御嬢さんは、立派になったよ。予想以上にね。

だから、おれが、御嬢さんにしてあげられることは、もうこれしかないと思つてね。「だから、男は勝手なのよね。自分一人で格好つけて。」

「フフフ……。」

それで、ミーサは、これからどうするんだい。せつかく辺境に来て、気ままに暮らしていたのに。」

「私はこの船の船医だからね。船の行くところへ行くわよ。どこへでもね。」

「そうかい。シュニツツアーも同じ気持ちなのかい？」

「似たようなものよ。核恒星系にもどるには、良い潮時かも知れないと言つてるわ。」

「他のみんなも、着いていくのかい。」

「あたりまえよ。だって、弁天丸のクルーですもの。」

それで、あんたはどうするの？

本当にカウボーイになるつもり？

それとも、アイツのところへ戻るつもりなの？

「アイツのところへ戻るとは、まだ決めてないよ。」

俺も少し、気ままに休暇を過ごしたいからね。

じゃあ、御嬢さんのこと、よろしく頼むぜ。」

ケインはまた眼を閉じて寝転んでしまった。

弁天丸のクルーたちも、それぞれの航路（みち）を征く。

16—4 加藤邸（海明星）

茉莉香は、海明星の自宅で、約束通りに電話してきた母の梨理香と話していた。

「えーっと、梨理香さんの言うとおりに、帝国軍のハイレベルの秘話通信にセットしたよ。」

それで、ねえ、梨理香さん、いったいどうなってるの？」

「いやあ、転職するって言ってただろう。」

そこへ、たまたま、海賊船パラベラム号からお誘いがあったね。

まあ、乗ってみることにしたわけだよ。」

「梨理香さん、海賊船だからあの船に乗ったんでしょ。」

でも、あの船、帝国海賊を止めちゃうんでしょ。せっかく、スゴイ重装備の船を新しく作ったのに、すぐに止めちゃうなんて……。訳がわかんないなあ。

どうして止めちゃうの？ どうして海賊より辺境の資源開発の方を選ぶの？

私だったら、海賊を続けると思うよ。」

「いやあ、あんな重武装の海賊船を作ったのは、鉄の髭のヤツが、公爵様が反乱を起こせば銀河系内のあちこちでドンパチが始まると見込んで、その際に帝国側についてひと儲けしようと考えただけだね。

それが、お前も知つてのとおり、すっかり当てが外れてなあ。

あんな重武装の船、平和な時代じゃあ『お荷物』で、維持費だけでも大変なんだよ。お金持ちの帝国軍なら、そんなの、どうつてことないけど、こっちは民間の海賊船だからねえ。維持費を稼ぐのも、大変でなあ。

それで、もうここらで海賊家業に見切りをつけて、辺境の資源開発でも始めるかつて事になったんだ。

その点、弁天丸はうまく稼いだねえ。公爵のお宝をがっぽり頂いたそうじゃないか。「ナハハ……。そこは頑張りましたからね。

でも、梨理香さん、辺境つて、どこに行くの？」

「場所は、もう目星をつけている。

その辺のところは、ヤツは頭の切り替えが早いからね。

ヒガン星団のさらに先、アンドロメダ航路予定地域上にある、M—9801つて球状星団を目指すんだがね。」

「へえ〜〜ヒガン星団のさらに先。ずいぶん遠いところだねえ。」



「ああ。最初、私も聞いたときはびびったりしたがねえ。

でも、ヤツは抜け目がなくてさあ。

銀河帝国の補助金を利用しようってことまで考えているのさ。

お前も知っての通り、アンドロメダ大遠征のための、航路予定空域の調査と、中継地点の開拓は、女王陛下直々の最重要課題だからね。民間船がその予定空域で行う事業には、がっぽり補助金が出るのさ。

もつとも、そんなトンデモナイところまで行つて惑星開発事業をしようっていう者は、海賊のような命知らずの連中だけだがねえ。」

「ナハハ……。『命知らず』って、自分で言うなんて……。

でも、もうそこまで決まっているんだね。

梨理香さん、知らせてくれてありがとう。

新しいお仕事にチャレンジするんだね。

惑星開発って、大変なんでしょう。歴史の授業でも、宇宙移民がおこなう惑星開発ってリスクが多くなって大変だったって教えられたよ。

でも、がんばってね。」

「何、言ってるんだい。」

大事な話はこれからだよ。」

茉莉香は、緊張した。「鉄の髭」の話が出るのかと思つたからだ。

しかし、梨理香が話したことは、予想外の深刻なものだった。

「実はなあ。M—9801に行く途中には、M—8801つて星団があつてね。船はその星団に寄る予定なんだ。」

「はあ……？ でも、どうして？」

「そこは、宇宙マフィアを脱退した少数派の一団が、密かに住み着いているらしいんだ。そいつらは、銀河帝国との和平条約にも反対していたそうだ。だから、和平後は宇宙マフィアから脱退すると言つて、連絡を絶つたようだ。」

加えて、その奴らは、とつても秘密主義でなあ。宇宙マフィア主流派の奴らでもその星団の内情がよく分からないんだつてさ。

だから、M—9801に行くついでに、M—8801の奴らの様子を探つて来いっていうお仕事で帝国から依頼されているのさ。もちろんギヤラは、たんまり頂くんだけどね」

「でも、わかんないなあ……」。

宇宙マフィアつて、銀河帝国と和平条約を結んだんでしょ。

おまけに、そんな辺境の人たちの動向なんて、そんな小さなことを、わざわざ銀河帝国が気にする必要があるの？」

「常識からいえば、そうだよ。」

でもなあ、せいつらは、マンチュリア星人の末裔らしいんだ。」

「ええええ!？」

マンチュリア星の人って、戦争で滅んだんじゃなかったの。たしか千年前に。」

「ああ、九百年前にな。」

でも、その時すでに出発していた宇宙移民船に乗っていた連中が、宇宙マフィアの仲間になって生き残ったらしいんだ。

それで、宇宙マフィアがヒガン星団の開発を始める際に、近くで密かに自分たちのための惑星開発を始めたってことらしい。」

「へええええ。苦労したんだねえ。」

それなら、その人たちも、そこで静かに暮らさせてやれば、いいじゃないの。

それで、『メデタシ、メデタシ』じゃないの。

なにも、わざわざ、梨理香さんたちが、ちよっかい出しに行かなくとも。」

「ハハハ、面白いことを言うねえ。」

本当にそうなら、それもひとつのハッピーエンドだよなあ。

でも、茉莉香、困ったことに、奴らは、いまでも銀河帝国に強い恨みを持っているらしいんだよ。」

梨理香は、少し真剣な顔つきで言った。

「ええ〜〜!!? いまでも、銀河帝国相手にまた戦争をしようって考えてるの？」

そんなの勝てるわけないし、そもそも、九百年前の恨みをまだ持ち続けて、復讐しようっていう気持ちだが、わかんないなあ。

当時の人はとつくに死んじやって、今は何世代も後の人たちでしょ。」

「それは、恨む側の人たちだって、九百年の間、恨みを忘れないように努力してきたのだろうか。」

「なに、それ？ 九百年も千年も恨みつづける努力って、そんなのアリなの？」

「『銀河帝国への恨みを忘れるな』って、何世代も教育され続けてきたんだろうなあ。」

茉莉香、教育ってものは、結構、恐ろしいもんだよ。

お嬢様を育てるだけが、教育じゃないんだよ。

『教育』って名前でも、実は『昔の恨み』を煽って、戦争を起こすのが目的というものなんだ。」

「はあ〜〜。わかんない。」

どうして、そんなに恨み続けなきゃいけないの？

未来に向かつて、幸せに生きることを選ばないの？」

「そうだなあ。マンチュリア星人は、銀河帝国に負けて、自分たちの誇りを無くしたんだ

ろうねえ。

なにせ、『諸人類の自由と平等を実現する正義』の味方である帝国軍と戦ってふるさとの星を滅ぼされてしまったんだからね。まるで、滅ぼされて当然の『悪の一味』にされてしまったんだからね。

残ったのは恨みだけで、これを忘れちゃったら、自分が自分でなくなっちゃまうと思っ  
ているんだろうかねえ。」

「そこまでいくと、むしろかわいそうになってくるね。もつと自由に生きればいいのに。

でも、梨理香さん、本当に大変なところへ行くんだね。

ホントに、気を付けてね。まあ、梨理香さんなら大丈夫だと思うけど。

はあく〜。」

茉莉香は、ため息をついた。

「何、落ち込んでるんだい。

大事な話は終わっちゃいないよ。まだ、これからだよ。」

「ええ!! もつと大変な話があるの?」

「ああ、茉莉香。

なあ、ヤツラもバカじゃない、戦争しても銀河帝国に勝てないという現実は分かっている。でも、恨みは晴らしたい。」

「そこで何をすると思うかい？」

「ええええええ？」

まさか、テロをやるうつつていうの？ そんな、誰の得にもならないことをやって、何になるの。」

「ヤツラの損得勘定は、ヤツラしかわからないさ。」

茉莉香、よくお聞き。恨みを晴らすために狙われるのは、誰だと思うかな？」

「それは、まず第一に、銀河帝国の女王様かなあ」

「そうだなあ。第一のターゲットはそのとおりだろう。でも、実際には、王宮の中で厳重な警備に囲まれているだろうから、狙うのは難しいよなあ。」

では、その次のターゲットは？」

「ええ？ 梨理香さん、何が言いたいの？」

「茉莉香、ヒントをやるうかい？」

歴史上の人物で、ヤツラが最も恨みを抱くのは、もちろん、ヤツラの星を滅ぼした銀河帝国のユステイアン一世とテオドラ皇后だろう。

でも、二人ともすでに死んでいるから、ユステイアン一世の代わりとしては、今の女王陛下を狙うだろう。

では、テオドラ皇后の代わりとして狙われるのは、誰だろうかな。」

「ええ？ 女王陛下は独身だから、夫はいないしなあ……」

テオドラ皇后と言うと、あの金貨の女神様だということしか知らないけどなあ。

……

あ！ ま、ま、まさか、

チアキちゃんが狙われるって言うの」

すでにチアキは第二王女として銀河系の国民に広く知られており、特にその容貌と性格から「カワイイ姫様」として、人気が出ていた。そして、『ゴールドデン・プリンセス』というニツクネームがついた。

つまり、海賊の娘から銀河帝国の王女と言うシンデレラ・ストーリーに加えて、黒髪ロングの風貌とあいまって、横顔が金貨の女神・テオドラ皇后に最近よく似てきたと言われているからである。

従って、テオドラ皇后が憎い人たちが、その末裔であり、風貌まで似ている青バラ家の娘、チアキが第二のターゲットだと考えても不思議ではなかった。

「まあ、そういうことだ。

こいつは、帝国軍や警察の関係者が一致した意見だ。

彼女はお前の親友だろう。茉莉香、頼んだぜ。姫様を守ってやってくれ。

パラバラム号が動き出すと、ヤツラも焦って動き出すかもしれんからね。」

「待つてよ、梨理香さん。」

その話は、本当かなあ。帝国軍の人からは何も聞いてないよ。」

「お姫様だけでなく、お前にまでその話が伝わっていないのは、卒業までのあとしばらくの間、海王星で、楽しい時間を過ごさせてやりたいという女王陛下の『親心』かも知れないねえ。」

実際には、その間が一番危ないんだけどなあ。」

「えええ!? . . .」

「そこで、茉莉香。」

お前、覚悟はできているんだろうね。

帝国海賊キャプテンとしての大人の覚悟だよ。

私は、それが聞きたくて電話したんだよ。」

「わかってる。」

覚悟つて、命懸けで守るってことだよ。公爵様の反乱の時にも、帝国海賊の兵隊さんたちが、チアキちゃんの盾になって大勢死んだよ。」

「そうだよ。さすが私の娘だねえ。分かってるじゃないか。うれしいねえ。」

でも、それだけじゃないよ。」

「えええ? それだけじゃないって . . . .」



「たとえば、奴らが私たちを人質にして、お前に裏切りを迫ってきたときにはどうするか。  
な。」

「梨理香さんたちを人質に……。」

「これから奴らの本拠地に乗り込むのだから、そんなことも起こりうるさ。」

「そんなこと……。」

「ほかにも考えられるよ……。私とか、お前の親しい人たちが裏切り者になってお前の前に現れたら、お前はどうするかな。」

「まさか、私にその人たちを……。」

「ああ。帝国海賊キャプテンとして、弁天丸船長として、お前は、『撃て』と命じる覚悟があるかい。」

「やっぱり、そうかあ。」

「帝国海賊って、そういう覚悟を決めた人たちなんだねえ。」

「帝国海賊として、親子代々、王家に仕えるってことはそう言うことだよ。茉莉香。」

「言っとくけど、私は自分が裏切り者になったり、お前を裏切り者にするくらいなら、自分の命なんか惜しくないからね。」

「覚えといておくれ。」

「……わかった。お母さん、覚えておく。」

思い出してみると、モーガン家の女の人たちも、シャキツとした人たちだったものなあ。

誰かに感じが似ているって思ったんだけど、そういうところは、梨理香さんに似ているんだ。」

茉莉香は、真剣な表情で梨理香を見返した。

「ありがとうよ。お前とこういう話ができる日が来たなんて、うれしいよ。」

「ありがとう。お母さん。」

そう言つて、緊張を緩め、ほっとため息をついた茉莉香に、梨理香は言った。

「まだ、大事な話があるんだよ。気を抜くんじやないよ。」

「ええ？ まだ話があるの。」

茉莉香は、再び緊張した。

「帝国海賊キャプテンとして、弁天丸船長として、お前にはもうひとつ大事な責任、果たすべき役割があるんだよ。」

「わかっているかい？」

「命懸けで王家を守るってこと以外に、まだ、何かあるの……。」

「ああ、親子代々、王家に仕え、船を守るには、跡継ぎが必要だよ。わかっているだろう。」

「わかっているけど……。」

弁天丸の方は、重力制御推進方式の新型船、弁天丸二世号の建造を考えてるんだけど・・・。これからも海賊ができるようにと思ってるね。

でも、私の方は、まだ高校生で、18歳で、来年はチアキちゃんとグリューエルと一緒に女子大に行こうとしているし、船長の仕事だつてやるのがいっぱいあつて、とてもまだ、地上に降りて結婚とか婚約とか考える気分じゃないと言うか・・・。」

茉莉香は、顔を赤くして俯き加減に話し始めた。

「へえー。弁天丸二世号かい、やるじゃないか。

あの『ろくでなし』も、旧式の弁天丸じゃ、いずれ限界が来るつていうんで、ああいう船を作ったんだが、すっかり時代に乗り遅れちまつたなあ。

けど、お前さんは違うねえ。

お前さんは、新しい時代の海賊だよ。うれしいねえ。

フフフ。でも、あつちの方はまだ娘のまんまかあ・・・。

覚悟が決まっているわけじゃないのかい。」

「もおく。お母さん！ 何を言ってるの。」

お母さん、私のことをからかっているの・・・。」

頭の中のどこかでスイッチの入った茉莉香は、少し怒つて、声が大きくなってきた。

「そんな訳、ないだろう。めつたに出来ない親子の大事な話さ。」

「私は私です。その時が来たら、自分でちゃんと決めます。ほっといてください。」  
茉莉香は、言葉は丁寧だが、精いっぱい反抗的な口調で言った。

「そうかい……。わかったよ。」

で、モーガン卿の息子と付き合ってるのかい。」

梨理香は、興味深そうに、笑顔で聞いた。

「お母さん！ 私が誰とお付き合ひしようと、しまいと私の勝手です。」

口を挟まないでください。」

「そんなこと言っちゃって……。」

私はお前の母親だから……。」

最後にモーガン家にご挨拶でもしておこうかと思つて……。」

「もおー！ お母さん、

そういう余計な『おせっかい』はしないでください。」

「それとも、ブルドックの息子の方が良いのかい？」

オヤジのブルドックの奴は、私は昔から顔なじみでなあ……。」

お前がその気なら、私も応援しようかと……。」

で、三人のうち、誰が気に入っているんだい？

長男のジョージかい？

次男のトムかい？

三男のエバートかい？」

「も～～！ お母さん、それも余計な『おせっかい』です。」

「ええ～～？ そうかい？」

親としては、当たり前じゃないかなあ。

それとも、いまどきの娘は、みんな、そういう考えなのかい？」

「も～～ お母さんつたらー！

当たり前じゃないですかあ。」

それからしばらくの間、急にフツの母親らしいことを言い出した梨理香は、茉莉香の地雷を踏み続け、どこにでもあるフツの母親のような「会話」が続いた。

梨理香は、『ろくでなし』と違って、母親の自分には、まだ茉莉香にしてあげられることがある」と思って、柄にもなくこういう行動に出たのだが、茉莉香の反応は梨理香にとっては予想外だった。

そして、茉莉香は反撃に出た。

それは、これまで聞きたくても聞けなかったことだった。

「ねえ、梨理香さん。いい機会だから聞いておきたいんだけど、梨理香さんは私のお父さんとどうして一緒になったの？」

どこが気に入ったの？

そして、どうして別れたの？

なぜ、船を降りて、海明星で私を生んで育てたの？

こういうこと、今まで、何にも話してくれなかったじゃないの。私のことを聞く前に、自分のことを話してよ。」

「う〜ん。そいつは、今でも思い出すと蹴つ飛ばしてやりたいことがたくさんあったんだがねえ〜。・・・」

梨理香は、少し考えた末に、一気に話し出した。

「茉莉香、簡単に言うかねえ、私もゴンザエモンも、船の中で生まれて船の中で育ったのさ。そして、小さいころから『お前たち二人は夫婦になって弁天丸の後を継ぐんだ』って言われて育ってきたってことだ。」

その時は大して疑問も持たずに、そうなっちゃまったんだが、お前がお腹の中にいる時に、分かったんだ。

私は、緑の大地の上の暮らしに憧れてたんだってね。

だから、この子は、緑の大地の上で生んで育てて、自分で自由に人生を選ばせたいって思ってたんだよね。」

「そうだったの。」

でも、お父さんはそれをどう思ったの？喧嘩別れしたの？」

「そりゃ、いろいろあったさ。」

でも最後には、少し笑って送り出してくれたよ。

『実は、俺もそういう暮らしに憧れてたよ。お腹の子をよろしく頼む。』って、言っ  
ね。

おまえのために了解したんだよ。」

「そうかあ、緑の大地の上の暮らして、実は船乗りの人たちが憧れるものなんだね。」

そういえば、サーシャも、ケインも、同じようなことを言ってたなあ。」

それからしばらくの間、二人は茉莉香の子供時代の話を楽しそうに語り合った。

そして、別れの挨拶をした。

「だいぶ長い話になったなあ。」

じゃあ、茉莉香、達者でなあ。

お前が本当に立派になったので、私はうれしいよ。」

「うん、ありがとう。お母さんも、元気でね。」

この日を境に、茉莉香は母のことを「梨理香さん」とは呼ばなくなつた。

## 第十七章 追い出し航海

17-1 オデットⅡ世号

中継ステーションを離れたオデットⅡ世号は、海明星を周回する橢円軌道に入った。船外へ宇宙服を着て乗り出したヨット部三年生たちは、並んで海明星を見た。

「何度見ても、きれいな星。」

「初めての練習航海の時も、きれいに輝いていたよね。」

「うん、そうだね。満天の星の中で、この星だけが青く、きれい。」

「この星で、私たちは出会ったんだね。」

「そうだね。何千億の星の中でも、この星なんだよね。」

「それって、やっぱり奇跡の出会いかなあ。」

「なに、少女趣味に浸ってるのよ。」

「でも、私とチアキちゃんも、この星で出会ったんだよ。チアキちゃんが、弁天丸の次期船長候補である私を見て来て、出会ったんでしょ。」

「あの時は、まさか、こんな物語になるとは思っていなかったけどね。」



「そりゃ、分かるわけないよ。」

私だって、ヨット部に入ったときは、自分が海賊船弁天丸の船長になるって想像もしてなかったもの。」

「波乱万丈の高校生活も、あともう少しでおしまいかなあ。早かったなあ。」

もつと楽しみたかったなあ。」

「ウルスラ。あんた、あれだけ大騒ぎしといて、まだ足りないの。」

「足りないよ。時間足りないよ。結婚前に出来るだけ遊んでおかないと・・・。」

「何、言ってるの。あなたに足りないのは勉強時間でしょう。士官学校、甘くないわよ。」

「ハハハ・・・。」

「こちらオデット二世号船長のナタリアです。」

先輩方、そろそろ、食堂のほうへおいでください。追い出しコンパの準備ができましたので・・・。」

船長になったナタリアが、ブリッジの船長室から連絡してきた。

「ナタリア船長、了解しました。」

「ナタリアが船長かあ。時代は変わるねえ。」

「でも、私たち、無事にこのオデット二世号を後輩に引き継ぐことができたんだよね。」

「そうだね。」

「さあ、船内に戻ろう。」

「了解。」

食堂にヨット部員が勢揃いした。

「乾杯！」ウルスラが言った。

「先輩、まだ、ですよ。」

「ハハハ……。」

「え〜、追い出しコンパの開催に当たり、私、部長のナタリアから、ひとことごあいさつ申し上げます。」

「手短に。お腹空いているから……。」

「今年の三年生の皆様には、ほんとうにお世話になりました。」

「というか、銀河系を揺るがす大冒険に私たちを連れて行ってくださって、本当に貴重な経験をさせて頂きました。」

これは、ヨット部始まって以来の大冒険だったと思います。

おかげさまで、私たちも、なんだか少し大人になった気分です。

私たちは、この船で培った先輩方との絆や先輩方の教えを、いつまでも忘れずに、大切にしていきたいと思います。

先輩方は、ご卒業後は、それぞれの進路へ進まれるとお聞きしていますが、どうか今

まで以上にお元気でご活躍ください。

そして、たまには、この白鳳女学院のヨット部のことを思い出して、できれば遊びに来てください。

では、先輩方の前途と白鳳女学院ヨット部の発展を祈念して、乾杯！」

「乾杯！」

部員たちはジュースで乾杯して、テーブルに並べられた料理を食べながら、あちこちで話が弾む。

「ねえ、ヒルデは来年はどうするの。グリューエルと一緒に帝国女学院へ転校しないの？」

「いいえ。私は高校まではこの海明星で過ごすつもりです。」

「よかった。」

でも、これで来年からは、お姉さんとは違う道を行くんだね。」

「そうですよ。ヒルデには中等部にたくさん良いお友達がいいますからね。その出会いを大切にしましょうね。」

「はい、お姉さま。」

「そういえば、チアキちゃん。ヒルデも乗馬を始めたんだってね。乗馬部のコたちが言ってたよ。」

「ヒルデ。乗馬は、本当に楽しいでしょう。」

「はい。乗って初めてわかりましたが、馬と言うものは本当に賢い生き物ですね。ますます興味がわいてきました。」

「よかったよね。」

それで、来年のヨット部はどうなるんだろう。

もう『茉莉香様あ〜〜！』は無くなるんだよね。」

「ははは．．．今度は『ナタリア様あ〜〜！』じゃないかなあ。」

「そうかもね。」

ナタリアは、この頃ますますカツコよくなつて、ファンが増えてきたよね。」

「ねえ、ハラマキ。受験勉強はどうなの。」

「私やリリイは、家政学部への内部進学だからまだ楽だけど、サーシャは大変みたい。医学部は別よ。」

「サーシャ、大丈夫なの。」

「なあ何とかね。今は、本当に勉強だけに集中できるから。」

「そうだね。いろんなことがいっぱいあったけど．．．。」

「それからねえ、このまえ、お父さんが言つてたけど、来年度からうちの屋敷に白鳳女学院への留学生の下宿人が大勢来るらしいわよ。うちはセキュリティが良いからって、

あちこちから頼まれたんだって。

父さんは、これでは、うちが白鳳女学院の女子寮みたいになるって、笑ってた。」

「うちの学校、結構有名になりましたからね。先輩たちのおかげです。」

「ヨット部にも、またすごいのが入ってくるんじゃないかなあ。海賊の娘とか……。」

ウルスラが言った。

「ハハハ……。歴史は繰り返すわね。」

「すごいのもって、誰のこと言っているのよ。」

「ハハハ……。」

17-2 オデット二世号・三年生の寝室

「さーて、そろそろ、いくかな。三年生だけの恒例、秘密の儀式、『闇のフルーツパンチ』をやるよ。」

ウルスラが言った。

「ええ、やっぱり本当にやるの!? どうなっても知らないわよ。」

サーシャが言ったが、言葉とは違い、その表情はいたずらをする子供のように楽しそうだった。

「あたりまえでしょ。ヨット部の伝統よ。昨年だってリン先輩たちはやってたでしょ。」

「あのう。私も参加したいんですけど。」

「ええ!? グリユーエルはまずいでしよう。三年生じゃないし。」リリイが言った。

「私も中学の三年生ですわ。それに、今年でヨット部は卒業ですし・・。」

「とにかく、お姫様だからだめよ。」

「お姫様なら、チアキ先輩もいらつしやいますよ。」

グリユーエルは、納得せずに食い下がった。

「もう・・・理屈じゃないのよ。・・・茉莉香あ、何とかしてよ。」リリイが言った。

「ナハハ、グリユーエル。我慢してね。」茉莉香が言った。

「でも・・・。」

「では、五分後に『荷物』を持って三年生専用の寢室に集合よ。」

三年生の茉莉香、チアキ、サーシャ、ハラマキ、リリイ、ウルスラの6人は、二段ベッドがならぶ船内の寢室の床に輪になって座った。

その輪の真ん中に、大きなガラスボウルが置かれ、中には刻んだ色とりどりのフルーツが入れられている。そして、コップが6個置かれている。

「さあ、電気を消すわよ。」

「いよいよだね。」

「みんなの人間性が試されるわね。」

「よし、消灯。」

それでは、各自持ち寄った『ドリンク』を、こぼさないようにボウルに入れてください。」

トクトクと液体を注ぐ音が聞こえた。

「入れたわよ。」チアキの音が聞こえた。

「では、かき混ぜます。そして、出来上がった『フルーツ・パンチ』をコップに注ぎます。

そして、こぼさないよう、コップは手渡しするからね。はい、一つづつよ。」

リリーの声が聞こえた。

「これで、全部ね。みんな、コップを持ったかしら。いくわよ。」

「ええ!? 待ってよ。私はまだもらってないよ。」

ウルスラの声が聞こえた。

「冗談と言うか、怪談はやめてよね、ウルスラ。まるでもうひとり、幽霊さんとか、いるみたいじゃないの。」

茉莉香の、怖そうな声が聞こえた。

「茉莉香、やめてよね。あなたが怖がると、雰囲気やばくなってくるじゃないの。」

リリーの怖そうな声も聞こえた。

「でも、私、本当にもらってないよ。ウルスラ、嘘つかない。」

「ハハハ・・・。」

「やっぱり、電気をつけようか？　ねえチアキちゃん。」

また、茉莉香の怖そうな声が聞こえた。

「だめよ。電気をつけたら、『闇のフルーツ・パンチ』じゃ、なくなるわよ。面白くなくなるじゃないの。」

チアキの声が聞こえた。

「しよがないわねえ。ウルスラ、予備の紙コップに入れるから、これで飲みなさい。」

「はい。今度はもらったよ。確かに。」

「さあ、とにかく、『誓いの言葉』を始めるわよ。みんな、覚えてきた？」

「うん、大丈夫。」

「では、みんなで言おう。」

「ヨット部に集いし友よ

われらの青春は　ここに始まる

共に空を駆け抜けた日々よ

熱き思いは　ここに始まる

われらの学び舎　白鳳女学院よ

われらの愛機、オデット二世よ



われらのヨット部に集う 乙女たちよ

いつまでも 花咲き誇れ

われらの団結は、つねに固く

結ばれた絆は、永久（とわ）に続く

船乗りの友よ いざ旅立たん

またいつの日にか ここに集わん

良き風、良き航海、良き人生を願ひ 乾杯！」

「乾杯」

何処かで、もう一人が乾杯の声をあげた。

「ん？・・・今のは誰？・・・」

「私、わかった！」

「それは後。とにかく、飲むのよ。」

三年生達は、暗闇の中で、いっせいにコップのフルーツパンチを飲み干した。

「う！・・・これなあに。」

「う・・・すごい味。甘くて、からくて、ひりひりして、それに・・・。」

「それから先は、言わないのよ。」

「でも、この味になったということは、信用できない人がこの中にいたのは確かよね。」

誰かしらね。ウフフフ」

サーシャの楽しそうな声が聞こえた。

「フフフ……。誰かしらね。暗闇で分からなかったけど。」

ハラマキも楽しそうな声を上げた。

「私たち、被害者よねえ。」

「そうよねえ。」

「そこが、『闇のフルーツ・パンチ』の醍醐味でしょう。ウフフフ……。」

「みんな、一気に飲みきったかしら。」

「飲んだよ。」

「じゃあ、点灯。」

点灯と同時に、7人目の参加者を探して、みんなの視線があたりを巡った。

すると、何も無いように見える空中に、空のコップを持った小さな手だけが浮かんでいた。その華奢な手には見覚えがあった。

「予想通りね。」

グリユーエル、光学迷彩スーツのスイッチを切りなさいよ。」チアキが言った。

「やっぱり、分かっちゃいましたね。」

「はあ、また『密航』かあ。グリユーエルとは、密航に始まって、密航に終わるのね。」

茉莉香が言った。

「何言っているんですか。茉莉香さん、私たちは、これで終わりじゃありませんわ。

また始まるんですよ。これからも。ウフフフ。」

グリユーエルの笑顔が輝いた。

それから、グリユーエルも含めた『三年生』たちの思い出話は、夜遅くまで続いた。

16-3 中継ステーション

翌朝、オデット二世号は、中継ステーションに入港した。

ヨット部一行が、オデット二世号を専用ドックに収納して、中継ステーションのフロアに降り立つと、ステーション内は大騒ぎだった。原因は、チアキの船、銀河聖王家の御用船ローズアロー2号が入港しているためだった。

ローズアロー2号は、ピンク色の美しい流線型をしているが、翼のようなものは一切ついていない。そして、先端部の両側には、赤い日輪の上に七輪の青い薔薇の花束という銀河聖王家のエンブレムを付けており、銀河聖王家の御用船であることを示している。その他には何も表示がない。もちろん、船籍は、銀河帝国軍・第一艦隊の高速巡洋艦という、れっきとした軍艦である。

大勢の人がドックの窓際に張り付いて、ローズアロー2号を眺めていた。

「銀河聖王家の船なんて、初めて見たよ。」

「あれが、銀河聖王家のエンブレムかあ。へえ〜〜。」

「うわー、カワイイ。ピンク色の船。さすが、お姫様の船よねえ。」

「これが、重力制御推進方式という、最新技術の粋を集めた軍艦かあ。」

でも、これで本当に飛べるのかい？

そもそも、翼も無いし、ジェット噴射口も無いじゃないか。」

「こんな、レジャー専用船みたいなのが、たった一隻で、我が海明星の星系軍の全艦隊よ  
り攻撃力が上回るといわれているそうだけど、本当かなあ。実感わかないよ。」

「おかあさん、キンギョ（金魚）」

小さな男の子が、チアキの船を指さして言った。

この子の目には、ピンクの流線型が魚の形で、先端についた聖王家のふたつのエンブレムが目玉に見えたようだ。

「まあ、そうね。金魚よね。」

「これはいい。ゴールドプリンセスの船が、ゴールドフィッシュ（金魚）か。」

「あはは・・・。」

男の子の話を聞いていた大人達が笑った。

もちろん、ゴールドプリンセスとは、マスコミがチアキに付けた愛称である。

白鳳女学院ヨット部一行は、警備の都合で、群衆の集まるフロアを避けてドックの中

へ入り、船のタラップに向かった。

タラップの前では、中継ステーションの艦長一行が整列して待っていた。現在、中継ステーションは警備強化のため星系軍が管理しており、艦長はロビンソン少佐である。

「艦長のロビンソンです。」

王女殿下、航海のご安全をお祈りします。」

「少佐、お見送り、ありがとうございます。行つて参ります。」

チアキが答えた。「両脇に控えた、軍服を着たスカーレットとミニスカ学生服の茉莉香も敬礼した。」

王女が現れたことに気づいた群衆が歓声をあげた。

チアキは、歓声に軽く手を振って応え、船に乗った。他のヨット部員も続いた。

「さすが、ゴールデン・プリンセス、お姫様ぶりもカッコ良いねえ。」

手を振るチアキとそれに応じて沸き返る観衆の反応をみて、リリイが言った。

ドアが閉まり、数分後、減圧の完了を告げるブザーが鳴り、ハッチが開いた。

ローズアロー2号は、ドック内でふわりと浮き上がると、風のようにすーつと移動してドックを飛び出していった。

その様子を、群衆はじつと眺めていた。

「ああ、動いた、動いた。」

「推進剤の噴射も無いのに動くなんて、不思議だね。スゴイ。」  
「こんなの、初めて見たよ。」

ローズアロー2号は、追出し航海のファイナーレ、ヨットステーションへヨット部員を運んでいった。

16—4 チアキの個室（ローズアロー2号）

ローズアロー2号では、ヨット部一行はチアキの個室に通された。

「まあ、宇宙船の中だからこのくらしいの部屋だけど。」

とにかく椅子に掛けてよ。今、お茶を持ってきてくれるから。」

一行が楽に座れる数の豪華な椅子が広々とした部屋に用意されていた。

メイドさんが入れてくれたお茶を飲みながら、皆、部屋の中を見回してきよろきよろしている。

「うわーっ、すつごい部屋。ピッカピカの、フッカフカ。」

「宇宙船の中まで、この広さ、この仕様のお部屋なんて、さすが銀河聖王家ですね。」

「壁紙がなかなか良いセンスよね。草花の柄ね。家具も猫足のクラシックなデザインね。」

「壁紙は、イングリッシユ・クラシックという伝統的な柄のひとつだそうよ。」

「へえー、きれいなね。よく見ると、隅々まで細かい花や葉が書き込まれているのね。」

「チアキちゃん、こういう柄の壁紙が大好きだったものね。チアキちゃんの好み、よくわかってるんだ。」

「まあね。この船は、お母さんからの誕生日プレゼントだったし。」

チアキは嬉しそうに笑った。

「お母様にめぐり会えてよかったですね。」

「ええ、ありがとう。いろいろあつたけどね……。」

茉莉香について銀河帝国に入っていったときは、まさか、こんな結果になるとは想像してなかったけどね……。

あつ！ ハラマキ！

壁のスイッチとか、いろいろあるから触らないでね。

弁天丸に始めて乗ったときのようなことになっても、私、知らないからね。」

キヨロキヨロしながら部屋の中をうろつき始めたハラマキに、チアキが言った。

「そう言えば、始めて弁天丸に乗ったとき、ハラマキったら、『ポツチ』って、いきなり知らないボタンを押して、なんと弁天丸の主砲をぶつ放したのよねえ。」

リリイが言った。

「ええ〜！ そんなこと、あつたんですかあ」

「す〜す〜い。」

一年生達が驚いた。

「ほんと、危なかつたねえ。お陰で星系軍には追いかけるしさあ・・・」

「でも、あれって、発射装置にセーフティ・ロックがかかっていなかったの？」

「そういえば、そうね。あの時はそんなこと、わかんなかったけど。」

「そう。今なら分かるけどね。」

茉莉香、弁天丸って、とても危険な状態のまま停泊してたんだねえ。」

「茉莉香、船長として問題じゃないかなあ。」

「今もあんな調子なの？」

「私が乗った帝国軍の戦艦では、主砲には常に何重にも嚴重なロックがかかっていたよ。」

軍艦に詳しくなったウルスラが言った。

「ナハハ・・・まあね。プロの海賊船だからね。」

セーフティ・ロックなんて、そんな面倒なことはねえ・・・。」

茉莉香が苦笑いして、弁解した。

「チアキ先輩、ここはリビングですよ。まだお部屋があるんでしょう？」

「あとは、寝室、浴室、衣裳部屋、TV電話用の執務屋、食堂、従者用の部屋、医務室と客間・・・。」



「すごいね。それみんな、チアキちゃん専用？」

「一応ね。この船、そもそも私専用の船だから。」

「ねえ、寝室見せてよ。」

あるんでしょ。天蓋つきの御姫様ベッド。見たいなあ。」

「だめ。恥ずかしいから。」

「いいじゃないの。それとも、彼の写真とかあ、見せられないものが飾ってあるのかな。ウフフフ……」

「そんなのある訳、ないでしょ。」

チアキは顔を赤くして否定した。

その時、部屋の中を眺めて、あちこち触って回っていたハラマキが、部屋の奥のドアの横にあるスイッチを見つけた。

「フフフ、このスイッチ、なにかなあ。押してみようかなあ。フフフ♪」

「あ、ダメ。開けちゃ。」

チアキの制止が聞こえないふりをしたハラマキが、鼻歌を歌いながら、スイッチを押すと、ドアが開いた。

予想通り、ドアの中は寝室であった。

部屋には天蓋付きのベッドや化粧台があつたが、どれも女の子にとって夢のような豪

華さだった。

化粧台や棚の上には、カワイイ小物が所狭しと並んでいた。

「うわあ！ピカピカ。」

「すてき！かわいいものがいっぱいある。」

「お姫様の寝室つて、こんなに輝いているんだ。」

部員たちはいつせいに部屋を覗き込んで、叫んだ。

興奮する一年生達を眺めながら、三年生たちがチアキを囲んだ。

「ああいうカワイイ小物とか、ぬいぐるみとか、チアキちゃん、大好きだものね。」

「そうそう、運河通りのお店を、よく一緒に見て回ったよねえ。」

「そうねえ。楽しかったよねえ。」

まあ、あの小物は、たいていお母さんのプレゼントなんだけどねえ。

お母さんは私が赤ちゃんの頃に分かれたきりだったから、時々、私のことを幼児のよう扱って、小さい子供の喜びそうなものをプレゼントしてくれるんだけどねえ……。」

チアキが笑顔で言った。

「お幸せそうですね。」グリューエルが言った。

「ありがとう。」

しかし、『三年生』達がほのぼのとした会話をしている間に、好奇心旺盛な一年生達は、

ぬいぐるみを抱きしめたり、化粧品のブランド名を確かめてその香りをかいだり、鏡台の前に座って自分の髪をといだり、天蓋付きベッドを覆うレースのカーテンを開けて中に入り込んだりと、チアキの寢室を『侵略』しようとしていた。

「ああ！ だめよ。そこまで。」

そろそろヨットステーションに着くわよ。

はいはい、みんな出発の用意をして……。」

顔を赤くしたチアキが、あわててみんなを追い出して、ドアを閉めた。

16-5 未来への航路（海明星衛星軌道上ヨットステーション）

ヨットステーションに着いた白鳳女学院ヨット部員は、あわただしく搭乗手続きを済ませ、全員がヨットに搭乗した。

いよいよ追い出し航海のフィナーレ、スペース・デインギーによる海明星の衛星軌道飛行と新奥浜市への帰還のはじまりである。

「こちら、白鳳女学院ヨット部部长、ナタリア・グレンノースです。

ヨットステーション、聞こえますか。

出港許可をお願いします。」

「聞こえます。こちらヨットステーション。出港を許可します。」

「さあ、いくぞ〜。出港。」

「おお！」

ナタリアの号令で、白鳳女学院ヨット部一行の一人乗りスペース・ディングーが次々と出航する。

「アイ・ホシミヤ 出港します。」「了解」

「ヤヨイ・ヨシトミ 出港します。」「了解」

「加藤茉莉香 出港します。」「了解」

「チアキ・ブルーローズ 出港します。」「了解」

「ウルスラ・アブラモフ 出港します。」「了解」

「リリー・ベル 出港します。」「了解」

「原田真希 出港します。」「了解」

「サーシャ・ステープル 出港します。」「了解」

「グリユール・セレニティ 出港します。」「了解」

「グリユンヒルデ・セレニティ 出港します。」「了解」

「ジェシカ・ブルボン 出港します。」「了解」

「メリー・ランバート 出港します。」「了解」

そして、他の一年生が続いて名前を名乗って、出港していった。

少女たちを乗せた宇宙ヨットは、雁型の編隊で進んでいく。

眼下には、青く輝く海明星が見えている。  
海は青く、大陸は緑濃い。

そして頭上には母星である「たう星」が少女たちの進む空の道を照らしている。  
彼女たちにとって、希望に満ちた未来への航路は、まだ始まったばかりである。

## 第十八章 白凰女学院地下迷宮の戦い その1

18—1 加藤邸（海明星）

目覚まし時計が鳴っている。

「ん？ まだ朝5時かあ。 もうひと眠り……。」

茉莉香は、また目を閉じた。

その時、

「うわあああ……。寝坊、寝坊。今朝から早起きだったあああ……。」

茉莉香は、あわてて寝室から飛び出し、パジャマ姿のままリビングルームに出てきた。

「茉莉香さん、パンが焼けてますよ。」

茉莉香専属の特別警備隊員であるジエーンが言った。

「いやあ。ありがとうございます。」

そういうと、さっそく茉莉香は朝食を食べ始めた。

先日から警備強化のために茉莉香専属の特別警備隊から女性隊員三人が、海明星の加藤邸に泊まり込みで警備にあたっている。その中で一番年配のジエーンが、まるで母親のように茉莉香の身の回りの世話も焼いてくれている。

そして、今日からは、茉莉香は特別警備隊の専用装甲車に同乗して、早朝にステープル邸に行き、チアキやサーシャと一緒にチアキのリムジン車で通学することになった。チアキの警備に参加するためだ。もちろんチアキの乗るリムジン車は、外見は普通の高級車だが、装甲車と同じくらい頑丈な安全対策が施されているためだ。

このため、中学入学以来続けていた自転車通学はあきらめられた。「ピンポーン。」

誰かがやってきた。

もちろん、家の外を守る特別警備隊が通行を認めているからベルが押せるのであって、来訪者は帝国軍の関係者であろう。

「はい。」

警備隊の隊員がドアフォンに応答している。

「加藤大佐、モーガン秘書官ですが……。至急のお話があるそうです。」

お通ししますか？」

「わかりました。お通ししてください。」

茉莉香は答えたが、それを聞いたジェーンの目つきが厳しい。

それに気づいた茉莉香は、ジェーンの視線の先にある自分になにか問題があるのかと疑問に思いながらも朝食を食べ続け、ギルバート・モーガンが入ってくるのを待ってい

た。

「失礼します。」

ギルバートの声が聞こえ、彼が今まさにリビングルームに姿を現わそうと言う時になつて、茉莉香はジェーンの「厳しい目つき」の意味が分かった。

『あー！ 私、まだパジャマ姿のままだった！』

「待つて、待つて、ギルバートさん。こつち見ないで。」

今、着替えてきますから……。」

顔を赤くした茉莉香は、大きな声を上げてギルバートを制止し、食べかけのパンを口にくわえたまま、リビングルームを飛び出した。

一方、リビングルームでは、ジェーンが頭を抱えていた。

「ううう……。」

あの子が実の娘なら、うちの息子たちのように、パジャマ姿でリビング　　グループに食事に出てきたところで叱っているんだけど……。

私、甘いのかなあ……。」

18—2 特別警護隊装甲車内（新奥浜市路上）

あわてて白鳳女学院の制服を着た茉莉香は、ギルバートからの話を、ステープル邸へ



向かう特別警備隊の専用車の中で聞いた。

特別警備隊の専用車は大型トレーラーサイズの装甲車で、運転席のほかに、警備用の電子装置のオペレーター席、将校席、警備隊員の待機席などもあり、中は意外に広かった。

「早速ですが、加藤大佐。警戒指令です。」

今日、白鳳女学院に転校生が二人やってきました。

一人は、イリーナ・フェリーニ。高校三年生で、ヨット部に入部希望です。しかし、その身元が怪しいのです。

彼女が今まで住んでいたレオン星は治安が悪く、国民登録はあまり信用できません。目下のところ、我々は安全が確認できていません。

しかし、海明星行政府は、留学のための入国を許可しましたので、彼女は今日から通学してきます。

もう一人は、大佐も御存じの方です。ブルック王国のアメリア王女です。私たちとしては、こちらの方は問題ありません。」

「わかりました。この時期に転校生で、しかもヨット部希望という女の子は、怪しいですね。」

と答えながら、茉莉香は思い出した。

『そういえば、チアキちゃんと初めて会った時も、あの子は同じような怪しい転校生だったなあ。』

でも、アメリカ王女の方は、ギルバートさんは問題ないと言ったけど、大アリだよなあ。

チアキちゃんとケンカしなければいいけど……。』  
考え込んだ茉莉香に、ギルバートが言った。

「そこで、加藤大佐、学校の中ではお願いしますよ。」  
「わかっていきます。覚悟はできていますよ。」

私、海賊だから。」

茉莉香は、不敵な笑いをうかべて、そう言った。

「そうですね。」

あなたのそういうキツパリしたところは、祖母も母も誉めていましたよ。」

「いやあ……。そんな、わたしなんか……。」

「でも、茉莉香さん、帝国海賊として命懸けで王家を守るといふことは、自分の命を粗末にするということとは違いますよ。」

「……」。母からも言われました。私も考えています。」

この時は、茉莉香は、少し硬い表情で静かに語った。

装甲車は、プラタナス通りを抜けて、ステープル家の邸宅へと近づいている。

茉莉香は、警備用のモニターを見て、道路沿いや屋敷周辺に警備隊が、実に広範に、かつ目立たないように配置されているのに気が付いた。

「すごいですね。この配置。」

「ええ。24時間態勢です。」

「やつぱりすごいなあ。」

でも、警備のみなさん、雨の日や夜間などは、とてもつらい思いをされているのではないですか。もうすぐ、冬が来るので、さらにつらくなるでしょう。」

「お気遣いありがとうございます。加藤大佐がそうおっしゃっていると聞いたら、皆喜びますよ。」

「いや、そんな、私なんか・・・。」

「いや、加藤大佐、ご自身の立場、あなたが今の銀河帝国、とりわけ聖王家の方々にとつていかに大切な人かということを改めて自覚してください。警備に携わる者たちはそれに誇りを持って任務についています。」

もうご存知だから言いますが、この警備態勢については加藤大佐にも知られないようにと、箝口令が敷かれていた程なんですよ。」

「そうですってね。ご配慮、感謝しています。」

でも、マンチュリア星人の末裔の人って、そんな昔の復讐に、まだこだわっているんですか。私には、実感がなくて……。」

「それについては、確実な情報があります。また機会を改めてご説明しますよ。」

ですから帝国軍としては、第四次マンチュリア戦役を防ぐために、女王陛下と両王女殿下だけでなく、貴方とサーシャ・ステープル嬢に対しても、同様に厳重な警備を行うことに決めました。」

「え？ サーシャも警備対象ですか？」

「そうですよ。」

ご存じのように、彼女は、レオニーニ家の前当主の実の娘であり、先の反乱の際にも宇宙マフィアと銀河帝国との和平交渉にかかりましたからね。」

「そうですね。」

「マンチュリア人は、彼女が一族から追放されたこと自体、銀河帝国との和平交渉を行うための偽装工作だと疑っていたそうです。」

「そんな……。そこまで疑うなんて……。」

「そういう人たちなのです。銀河帝国との和平を永遠に拒否する考えです。」

だから、サーシャさんを『裏切り者の娘』として狙っているんです。

一方、旧宇宙マフィアの人たちにとっては、彼女は『安住の地』を与えてくれた『女

神』のような存在なんです。

だから、彼女にもしものことがあれば、レオニー二家を始めとする旧宇宙マフィア主流派とマンチュリア人との抗争が始まるでしょう。

そうになると、銀河帝国としてはアンドロメダ航路の予定空域における治安確保のため、抗争に介入せざるを得なくなります。

結局、抗争はエスカレートして、第四次マンチュリア戦役が起こるでしょう。」

「そうなるか……。」

「女王陛下が重力兵器の使用をお許しになれば、戦争は一瞬で終わります。昔の第三次マンチュリア戦役のように、七日間もかかりませんよ。

帝国が艦隊を動かすとしても、時空トンネルを使えば、核恒星系からM—8801星団までの往復の道のりは、たった一日で足りるでしょうね。」

「それは、彼らは一瞬で滅ぶと言うことですか……。」

「そうです。」

彼らも旧宇宙マフィアが開発した重力兵器を持っているかもしれませんが。

だから、帝 国軍としても手加減はできません。全力で一撃を加えます。

もし、彼らが先に重力兵器を使えば、帝国側に何十億人の犠牲がでることも予想されますからね。もちろん、対策は考えているそうですが……。

参謀本部は、テロ対策だけでなく、第四次マンチユリア戦役を想定した作戦計画も検討しています。」

「そんな……。」

茉莉香は言葉を詰まらせた。

しかし、次の一瞬、こう言った。

「うう〜ん。もういいわ。朝から、そんな深刻なこと考えるの、ヤメ、ヤメ。

ねえ、ジエーン。さっきのバスケット箱を出してよ。

私、まだ、朝ご飯の途中だったのよね。

何をするにも、まず朝ごはん……。」

18-3 ステープル邸（海明星）

茉莉香たちの装甲車は、ステープル邸の通用口に乗りつけ、執事の出迎えを受けた。

「加藤大佐を、地下倉庫にご案内するように、旦那様から言付かっております。」

「え!?! 地下倉庫?！」

「はい。お嬢様とチアキ様もそちらにいらつしやいます。」

茉莉香は、ギルバートたちと一緒に通用口の奥にあるエレベーターで、地下倉庫に向かった。エレベーターのパネルは、地下2階の次は地下15階の表示だけがあり、茉莉

香を乗せたエレベーターも地下15階に向かっている。

「ずいぶん深いですね。」

「はい、もともとは、独立戦争時の避難用シエルターとして作られました。

その後は、最近までワインの貯蔵庫やチーズなどの熟成室として使っていましたが。」  
エレベーターを降りると、薄暗い照明しかない廊下が奥まで続き、両脇に小部屋が並んでいる。小部屋の木製のドアには、各種のワイン、チーズなどの名札が掲げられている。

しかし、廊下のいちばん奥の部屋には、真新しい金属製のドアがついている。執事はそのドアを開けた。

キューン、キューン、キューン……

いきなり、ブラスタアの発射音が聞こえてきたので、茉莉香たちは身構えた。

「大丈夫ですよ。たぶん、お嬢様が試射をなさっているのでしょう。」

執事は悠然と答えた。

見ると、ドアの向こうの部屋の奥には分厚いガラス窓があつて、その窓の向こうに、なぜか防護服の上から白鳳女学院の制服を着た、サーシャらしい人影が、ブラスター銃のようなものを連射している。

ガラス窓の手前では、ステープル夫妻、チアキ、そしてスカーレットが様子を眺めて

いた。茉莉香は四人に目礼して、窓に近づいた。

「新兵器が仕えるかどうか、実際に試しています。」

ジョージ・ステープルが言った。

「新兵器？」

「開発ほやほや。銃の方は、帝国軍にもまだ納めていない最新型の試作品よ。」

もつとも、今テストしているのはサーシャが着ている学校の制服の方なんだけどね。」

チアキが答えた。

「銃の方は、普通のプラスチックじゃないよね。光が熱線じゃないよ。」

茉莉香が言った。

「ガンマ線プラスチックですか。こんな小型化に成功したんですね。」

ギルバートがそう言うのと、ジョージ・ステープルが肯いて、語った。

「問題は、ガンマ線の悪影響から銃の使用者を守ることです。そのためいろいろ対策を講じていますが、いま、サーシャが着ている制服にも、そういう機能が織り込まれています。」

「そうですね。お嬢様の健康がなにより大切ですからね。」

ギルバートが言った。

「うわー。サーシャがこんなに射撃が上手だなんて知らなかったなあ。」



「さすがよね。．．．」

モニターに示された射撃成績を見て、茉莉香とチアキが感心していると、ステープル夫人が、少し悲しそうに言った。

「あの子は、自分の身を守る術(すべ)をしつかり身に付けています。そういう子です。」  
「あ、．．．いや、あもう。失礼なことを申し上げました。お許してください。」

茉莉香とチアキが、あわてて頭を下げた。

このやり取りに、ジョージ・ステープルが答えた。

「いや。こちらこそ、失礼しました。お気になさらないでください。」

ミーシャもやめなさい。チアキ様も茉莉香さんも同じ立場なんですよ。

それに、ガンマ線ブラスターの練習をしたいと言い出したのは、あの子なんですから。」

「お嬢様ご自身の意志で練習をはじめられたんですか？」

ギルバートが聞いた。

「ええ、サーシヤは運動好きで、日課のスポーツ・トレーニングは欠かさないんです。それでも入試前は中断していました。」

しかし、入試が終わった途端に、射撃の練習を始めると言い出しまして．．．。

サーシヤが射撃の練習をするなんて、私たちも見たことがなかったんですが．．．。」

ジョージ・ステープルが言った。

「狙いは、生体兵器対策ですか。」

「それ例外に考えられません。」

ギルバートとジョージ・ステープルは、他の人に聞こえないように小声で言葉を交わした。二人の間には、緊張感が漂っていた。

手前のコントロールパネル席で、モニターを眺めていた技術者たちが言った。

「社長。テスト終了です。」

「結果はどうかかな？」

「成功です。」

すべての測定ポイントで、お嬢様の被爆値は、安全基準をはるかに下回っています。「まあ、素晴らしい。使えるめどが立って、ほんとによかったわ。」

皆さん、海明星に着いてから、今まで休みなしでテストに付き合って下さって、本当にありがとうございます。

この辺で、ひと休みされたらどうかしら。

まず、お先に上の階にあがって、お食事にしてください。食堂には、うちの牧場や農園でとれたおいしい食べ物がいっぱいよ。たくさん召し上がってください。味には自信がありますわよ。」

ステープル夫人がそう言っつて、執事に食堂へ案内させた。技術者たちは、席を外すように言われたと思ったようだ。

「生体兵器かあ。本当なんですね。」

技術者たちが部屋を出たのを見て、チアキが言った。

「ええ、歴史に悪名高いマンチュリアの生体兵器は、今度も使われると考えられています。」

今日やつてくる転校生もその可能性がありますので、爆発物探知器を常にお持ちください。普段は何も反応がなくても、警戒が必要です。」

スカールレットが言った。

『それって、人間爆弾ってこと……。そんなむづかしいこと……。』

茉莉香は声にならない声を上げた。

マンチュリアの生体兵器の本体は、人間の胃の中に有機物でできた袋を取り付けたものである。起爆装置も袋と一体になった有機物で出来ている。

しかも、普段は袋の中に何もいれず、ある日突然に、その袋に液体の爆発物を注入して、最悪の場合は本人も知らないうちに兵器にするという。こうして以前から潜入していた人物が、ある日突然に爆弾となってターゲットに近づき、爆発するとされる。

しかも金属反応が出ないので、兵器として見逃しやすいという。

さらに、相手を油断させ、あるいは射殺をためらわせるため、兵器となるのは多くの場合、子供や若く美しい女性であると言われている。

したがって、人道上の見地を無視すれば、暗殺用の「兵器」として、きわめて有効とされる。

このような「兵器」を使って、マンチュリア王政府は、反体制派の弾圧を徹底的に行つたとされている。

唯一の欠点は、爆発物の液体がスーパー・ヒドラジン系の有毒化合物であることとされる。スーパー・ヒドラジンは、この時代でも宇宙船の推進剤として使われる爆発力の強い物質である。

しかし、それはきわめて毒性が強いため、袋から少し漏れただけでも兵器となった人間が死亡する。その結果、ターゲットに近づく前に運搬役の人間が死んで爆発することがあるとされる。

これに対して、ガンマ線プラスターは、もともと重金属の盾や装甲板を貫いて中の兵士を倒す兵器として開発されたものである。

使用するビームが人体に有害ではあるが、透過性の強い放射線であるため、マンチュリアの生体兵器に対しても、胃の中の有機物の袋を外部から狙撃して、袋を破ることもなく爆発させることもなく、有機物で出来た起爆装置を無効化できるといわれている。

従って、起爆装置を無効化できれば、その後の治療次第では、生体兵器とされた人を救うことも可能になるので、人道的な対抗兵器と期待された。

しかし、同時に銃を使用する側の者が被爆する危険もあるとされた。

この欠点がなかなか克服できなかったため、ガンマ線ブラスターは通常兵器としては普及していなかった。

しかし、新型のガンマ線ブラスターは、放射線の安全基準をクリアする製品であるという。

やがて、サーシャが戻ってきた。放射線対策の防護服を脱いで、アンダーウェア姿になっている。

「皆様、おはようございます。

茉莉香さん、今日から一緒にね。うれしいわ。」

「おはよう。私もうれしいよ。

サーシャやチアキちゃんと一緒に通学するなんて、なんか、私、お姫様になった気分よ。」

茉莉香が、いつものように輝く笑顔で答えた。

『もう、茉莉香ったら、この前はお姫様になるのを嫌がってたのに……』

『そうか、みんなの気持ちが沈まないように気を使ってくれているかあ。』

チアキはそう思つて、微笑んだ。

18—4 白鳳女学院三年雪組教室（海明星）

「えー、みなさん。転校生のお友達をご紹介します。」

担任教師が、転校生を連れて教室に現れ、紹介を始めた。

「イリーナ・フェリーニです。レオン屋から来ました。部活は、宇宙ヨットをやつてました。よろしくお願します。」

金髪ショートカットで碧眼、目鼻立ちはサーシャに似ているように見えるが、彼女よりもかなり長身の娘が、少し緊張した表情で話した。

「席は、サーシャさんの隣が空いているから、そちらを使つてください。」

「はい。」

イリーナは、サーシャの隣の席に着いた。

『えー！サーシャの隣りだなんて、大丈夫かなあ。』

茉莉香は心配したが、サーシャはいつも通りの笑顔で転校生に挨拶し、警戒している様子は見えない。

「では、出席を取ります。・・・」

授業が始まった。

昼食の時間になると、サーシャとその周りの席の生徒たちは、イリーナを誘って、楽しそうに話しながら食堂へ行ってしまった。

茉莉香は、その様子を心配そうに見守っていた。

そこへمامミが茉莉香に話しかけてきた。

「ねえ、ねえ。高等部の一年にまたお姫様が転校してきたそうよ。」

噂では、茉莉香やチアキちゃんの知り合いらしいよ。どういう関係なの」

「مامミは相変わらず、情報が早いねえ。」

まあ、知っているとえば知っているけど……。お仕事の関係でね。」

茉莉香は言葉を濁した。

「ねえ、チアキちゃん。あなたも、転校してきた姫様とお友達なの？」

「まあ、知っているとえば知っているけど、友達とは言えないわね。あんな奴。」

チアキは、少し機嫌の悪そうな口調で話した。

「まあまあ、チアキちゃん。今度は、なかよくしてね。」

茉莉香がチアキをなだめようとして言った。

「何、言ってるのよ。ケンカを売ってきたのはあっちでしょ。」

急に機嫌が悪くなったチアキが言い捨てた。

「なに？ どうしてケンカしたの？」

「ママが興味深々の様子で、チアキに聞いた。

「それは、あつちがあいつに勝手に惚れて、しかも勝手に私がライバルだと思いで、ケンカを売ってきたからよ。」

「こっちは関係ないのに、ほんと、ムカつく・・・」

チアキはそこまで言った時に、いつのまにかクラスメートたちが自分を取り囲んで、自分の話に聞き入っていることに気が付いた。

それは、チアキと転校生のお姫様が『恋のライバル』という女子高生にとっては最も興味深い話題だったからだ。

もちろんチアキの言う「あいつ」とはエドワード・ドリトルのことだとみんな分かっている。だから、なおさら関心が高い。

「なによ、みんな。こんなに集まってきて。」

もう昔の話よ。もう関係ないわ。

それに、私はいつのことなんか、なんとも思っていないんだからね。だから、ライバルでも何でもないんだからね。・・・。

はいはい、解散、解散。

これ以上聞いてても、何も出ないわよ。」

チアキは、顔を赤くしながら、ライバルであることを否定し、周りのクラスメートを



追い払った。

もちろん、チアキの否定にもかかわらず、『二人の姫は、恋のライバル』という噂は、下校時刻までに、学校中に広がっていた。

そして、クラスメートの間では、こういう会話が交わされていた。

「チアキちゃん、売られたケンカは買うのね。」

『『アイツのことは、何とも思っていない』って言ってるのにな。』

「そこが、チアキちゃんのカワイイところなのよね。フフフ」

「そうね。フフフ。」

18—5 ヨット部部室（海明星・白鳳女学院）

放課後のヨット部部室では、ナタリアとヤヨイが、部室の奥の本棚の前で、何かやっている。

「うーん。このあたりかなあ。ヤヨイちゃん、そこの本棚、動かないかなあ。」

「見た感じ、動きそうもありませんよ。」

「どうしたの？ ナタリア、ヤヨイちゃん、二人で何やってるの。」

部室にやってきたリレイが声をかけた。

「いやー。この前、パソコンで、歴代部長の引き継ぎ資料を見ていたら、『白鳳女学院

『地下迷宮探検記』というのを見つけてましてね。

15年位前の先輩が、学校の地下空間を探検して、地図を作っているんですよ。それによると、このあたりに入り口があるらしいんですがね……。」

ナタリアが答えた。

「ええ？　ここにもしも入り口があるんですか？」

面白そうですね。ぜひ、探検しましょうよ。」

いつの間にかグリューエルが部室に入ってきて、話を聞いていた。

「あなた、何か知っているの？」

「はい。もともと、学校の地下には、独立戦争の時に植民星連合軍の司令部があったらしいですよ。」

なかは、けっこう広いですよ。」

「あなた、学校の地下に入ったことあるの？」

あきれた。いつの間に入ったの。」

「去年、ジェニー先輩や茉莉香さんたちと独立戦争時代の書類を探すために入ったんです。ドロボーを追いかけて……。」

あれ？　この話は秘密でしたっけ？」

「秘密じゃないんだけど……。」

そうやって、茉莉香も部室に入ってきた。

「グリユーエル、お姫様なんだから、そんな危ないことやっちゃ、だめでしょ。」

リリイが言った。

「はい、気を付けます。」

グリユーエルは笑顔で言った。反省している様子は無さそうだが……。

そういううちに、部員が集まってきた。

今日は、転校生が二人ともヨット部に入ると言うので、顔合わせのためナタリア部長が全員集合の呼びかけをしたからだ。

集まった部員を前にして、転校生があいさつを始めた。

「イリーナ・フェリーニです。レオン星から来ました。三年雪組です。」

環境のいい星で大学生活を送りたいと思って、来年からは白鳳女学院大学で学ぶ予定です。

そう思うと一時も早くこちらに来てくれて高等部に転校してきました。

ヨットはこれからもやりたいと思っていますので、よろしく願います。」

「そうかあ、大学も一緒なのかあ。なるほどね。」

リリイが言った。

「私たちも一緒の大学よ。よろしくね。」

医学部に合格したサーシャが言った。

二人目の転校生が、あいさつを始めた。

「ブルック王国の第二王女、アメリカ・ブルックです。一年花組です。

よろしく願います。」

そして、チアキの方を向いて、言った。

「王女殿下には、その節は無作法をいたしました。お許してください。」

そう言つて、アメリカは、カーテシーの作法通りの挨拶をし、深く頭を下げた。

二人とも、表情は硬い。アメリカ姫の『口先だけの謝罪の言葉』は、またケンカを売つているように見えたからだ。

「いえいえ、わざわざお詫び頂くには及びませんのに。」

「ご丁寧なごあいさつ、恐れ入ります。」

あなたも、この前お会いした時より、ずいぶん大人っぽくて、本当にお美しく、おしとやかになられましたね。」

「いえ、いえ、殿下には及びません。」

「おほほほ、何をおっしゃいます。銀河標準語もずいぶんお上手になりましたこと。

驚きましたわ。」

きつと、一族伝統の編み物もお上手になつておられるのでしょね。」

チアキは、アメリカ姫がエドワードに渡そうとした『プロポーズのひざ掛け』は、姉のバレンシア姫が編んだものを横取りしたものだど知っている、パンチを食らわした。

「いえいえ、私など田舎者育ちの海賊の娘です。とても殿下には及びません。」

今後はアメリカ姫がパンチを返した。

自分を「田舎育ちの海賊の娘」と卑下したように聞こえるが、チアキも同じではないかと言う嫌味である。

「何を、」謙遜を。

それよりも、あなた、白凰女学院の制服、とてもよくお似合いですわ。

胸元がとてもふくよかに見えましてよ。おほほほ……」

今後は、チアキのパンチである。チアキは、アメリカ姫の胸元が見事な貧乳であることを承知の上で、誉めている。

こういう表面的にはお上品で優雅なやり取りを聞いていたりリイが、つぶやいた。

『なんか、寒気（さむけ）がしてきた。

チアキちゃん、最高に不機嫌そう。』

「それから、茉莉香さん。三人の兄たちから伝言がございます。」

アメリカ姫が、突然、茉莉香の方を向いて、言い出した。

「ええ？ 私？」

「はい。兄たちからは、

『このたびのダンス発表会にお招きいただき、感謝申し上げます。お目にかかる日を楽しみにしております』

とお伝えするように言われております。

兄たちは、茉莉香さんとダンスを踊れる日をとて楽しんでおります。」

そしてアメリカ姫は、茉莉香には、本当に心からの、かわいい笑顔を見せた

「キヤー！」

「・・・王子様だって」

部室の中が大騒ぎになった。

部員たちはまだ次回のダンス発表会で茉莉香が誰と踊るか知らされていなかったからだ。

「茉莉香先輩、その王子様たちとはどういうご関係なのですか？」

下級生たちが、ずばりと核心を突いた質問をした。

「いや、その・・・、仕事の関係で・・・あの・・・。」

何とかごまかそうと、茉莉香が苦しい答えをした。

ピ、ピ、ピ・・・

そのときに、ヨット部員の持つている携帯情報端末から一斉に緊急通信を伝える警告音が鳴った。また、学校の校内ネットに接続しているパソコンからも、緊急メール着信の強制警告音が鳴った。

「え!? 何が起こったの?」

さっと携帯端末を開いてメールを読み、皆が口々に言った。

「緊急警報よ。直ちにガードマンと一緒に下校しなさいって、なにが起こったのよ!」

「新奥浜市の中心市街で、環境過激派のデモが暴動に発展しているらしいわ。」

「すでに、機動警察が出動しているって。」

「負傷者多数ですって。」

「この街は静かなところなのに。どうしてこんな騒ぎが起こるの。」

「デモ隊は、『重力兵器の配備、絶対反対』を叫んでいるらしいわ。」

「そんなものがこの星に配備されると、戦争やテロに巻き込まれるって言っているそうよ。」

「ねえ、『ジュウリョクヘイキ』って、なにそれ?」

「あのく、公爵様の反乱の時に、ウルスラ先輩が使ったグランドクロスの主砲みたいなヤツのことですか?」

「そうよ。私の船にも装備されているわ。」

チアキが言った。

「でもね、デモ隊が反対しているのは、銀河帝国が極秘にこの星に配備する予定の新兵器の話だよ。敵の重力兵器による攻撃を防ぐ機能もある船らしいよ。

でも情けないなあ、極秘情報がデモ隊に漏れているんだよね。」

ウルスラが言った。

「ウルスラ先輩、どうしてそんなことを知っているんですか。」

「だって、船が来たら、私もテストパイロットをやってほしいって言われているから。」

「そうかあ。すっかり忘れていましたね。」

ウルスラ先輩は、今も帝国軍の予備役パイロットなんでしたね。」

「うん。もう平和になったから、そんな役目は必要ないと思っていただけね。」

「でも、なぜ、銀河帝国がこんな辺境の星にそんなスゴイ新兵器を配備するんですか？」

帝都なら当たり前でしょうけど。」

「私には分からないよ。聞いてないし……。」

ウルスラはそう言った。

そして、ヨット部員の視線がチアキに集中した。

「そうね。……たぶん私、いや、私たちがここにいたためでしょうね。」

「きつと、そうでしょうね。」



でも、平和になったのに、誰が私たちを狙うというのですか。」

「それはまだ……。」

「もう今日はその辺で終わりにしましょう。」

それより、みなさん、学校の指示通りに、さっさと帰宅しないと。

ガードマンの方も皆さんをお待ちになっているのではないのでしょうか。」

部長のナタリアが注意を促した。

その声で我に返った部員たちは、あわただしく帰り支度を始めた。

その時に、ジェシカ・ブルボンが茉莉香に言った。

「先輩、今日もファンレターがいっぱい来ていますよ。この袋に入っていますので、忘れないで持って帰ってください。」

それから、チアキ先輩とサーシャ先輩の分は、学校側が直接、警備の方にお渡ししたそうです。」

「ありがとう。今日の郵便当番は貴方だったのね。お世話になります。」

茉莉香が笑顔で答えた。

「ありがとう。一所懸命、お返事を書くわよ。」

チアキが答えた。

「ありがとう。私宛もあるなんて、珍しいわね。」

サーシャが答えた。

18—6 ステープル邸（海明星）

サーシャ、チアキ、茉莉香、グリユーエル、ヒルデ、ウルスラ、アメリカの7人は、下校してステープル家の大きな客間の一室に集まっていた。今後の警備上の理由で、全員がステープル家に集められたためだ。

このほか、部屋にはスカレット、ギルバート、特別警備隊のジーンとセレニティ軍のキャサリン、それにステープル夫婦が同席している。もちろん部屋の隅には警備隊の人たちが控えている。

部屋の中の空気は、緊張感に溢れていた。

原因は、部屋の中央にある大きなテーブルの上に置かれた、三通の手紙であった。それらは、チアキ、サーシャ、茉莉香の三人宛てのファンレターの中から出てきたものだ。

チアキ宛ての手紙には、こう書かれていた。

『第二王女と帝国軍は、海明星から出ていけ。この星を戦争に巻き込むな。』

サーシャ宛ての手紙には、こう書かれていた。

『死の商人の娘、裏切り者の娘は、海明星から出ていけ。この星を戦争に巻き込むな。』

茉莉香宛ての手紙には、こう書かれていた。

『海賊の娘は、海明星から出ていけ。この星を戦争に巻き込むな。』

ジェーンが報告した。

「いずれも、紙の印刷物から様々な大きさの文字を切り抜いて、張りつけて作った脅迫状です。これは、手書き文字の筆跡を隠すための、大昔のやり方です。

見たところ、宛先の人物のところ以外は、いずれも同じ切り抜きをコピーして使っています。

封筒にも、手紙にも、差出人の名前などは書かれていませんでした。

消印がないので、白鳳女学院内から差し出されたものと思われませんが、学校内の監視カメラでは不審な人物は写っていませんでした。

また、手紙本体の精密物質解析からも、犯人の手掛かりは見つけられませんでした。「今の科学捜査は、電子戦対応ですからね。電子メールで脅迫状が来たら、発信元はすぐ見つけられるのに。……こういう大昔のやり方は盲点でしたね。」

スカレットが言った。

「ねえ、あなた。今日にでも帝都へ帰りましょうか。サーシャに『もしものこと』があつたら、私はどうしたらいいの……。」

「落ち着きなさい。ミーシャ。こういう時は、軽々しく動かないものだよ。」

「お母さん。私は大丈夫よ。負けないわ。」

「それで、この手紙の意味について、警備陣の皆さんはどう考えているんでしょうか。」  
茉莉香が聞いた。

「戦争に巻き込まれると言っていることは、環境過激派の主張と同じです。兵器があるから戦争が起こるといふ論理と同じです。」

しかも、手紙の差出人は、テロリストがステープル家のお嬢様を狙っていることを知っています。」

ギルバートが言った。

「私たちがいるから戦争に巻き込まれるというのは、いくらなんでも大げさでしょう。」

それに、今時、どんな戦争に巻き込まれると言うのよ。」

「加藤大佐、こういう人たちは、実は、海明星の人々の利益よりそれ以外の誰かの利益を代弁しているものですよ。」

具体的には、彼らはどんな戦争に巻き込まれる恐れがあるのか、何も明言していません。

しかし、今、現実的に考えられるのは、ご存じのように、マンチュリア人との戦争です。だから、戦争になれば、彼らが持っているかもしれない重力兵器によって、この星も攻撃を受ける恐れがあるということですよね。」

彼らはそれを知って動き出したと思われれます。」

「環境過激派は、そういう秘密情報をどこから知ったの？」

「こういう情報や活動資金は、マンチュリア人の工作員から出ていると考えるのが自然です。」

「そんな……。」

「敵を分断するのは、戦略・謀略の基本ですよ。加藤大佐。」

マンチュリア人は、宇宙マフィア時代からの非合法工作員を、各地にそのまま維持していると言われています。」

ギルバートが言った。

「では、今、私たちはどうすれば良いの？」

「加藤大佐。油断せず、動かないことです。耳を澄まして、じっとしていることです。」

そうすれば、怪しい人たちの正体が浮かび上がってきますよ。きつと。」

スカレットが言った。

その時、ウルスラが持っている帝国軍標準装備の携帯端末が鳴った。音声だけを使う最高難度の軍用秘話通信装置が作動しているようだ。

「もしもし、アブラモフです。……。」

あ！ ダーリン……。」

ウルスラの「ダーリン」の一声で、それまで緊張していた少女たちは脱力してしまつた。

「なに?・・・」

いま『たう星系』に着いたの。そう、早かつたね。・・・

うん、わかつた。もうすぐ会えるね。楽しみだなあ。・・・

うん。わかつた。ちよつと待ってね。」

『軍事用の最高レベル秘話通信でラブコール!? しかも、デートの約束!』

いくらなんでも、それはないだろうと思われた。

しかし、そういう空気を一切気にしないウルスラが、立ち上がって言った。

「加藤大佐、皆様。ただいま、新戦艦が到着したようですので、さっそくテスト飛行に行つてまいります。」

すぐに、迎への小型機が来ると聞いておりますので、玄関で待機いたします。」

ウルスラは、きりつと敬礼して、部屋を出て行った。

もちろん、ウルスラは、そう言い終わるとすぐに「ダーリン」との会話に戻つて、楽しそうに話しながら歩いて行つたが・・・。

ウルスラの話に当てられて、赤くなつた顔を冷やすために携帯情報端末を操作し始めたヒルデが、声を上げた。

「ああ、みなさま。大変なニュースが入っています。

銀河アカデミー賞受賞者の有名な宇宙物理学者、サハリン博士が、論文を発表して、銀河帝国の重力推進機関の開発とその軍事利用を批判したそうです。」

「ええ？ どういうことですか。」

グリユーエルが言った。

「銀河系を結ぶミルキーウェイ計画は、民生用と言いながら、これにより帝国の大艦隊が今まで以上の超光速で銀河系内を移動できるようになるので、銀河系の専制的軍事的支配を強化しようとするのが真の狙いだと言っています。」

また、時空トンネルを武器として利用する重力波砲は、小惑星を砲弾としてぶつけて可住惑星を砕き、何十億人もの人間を一瞬に殺戮できる大量破壊兵器であり、絶対に許すことができないと言っています。」

「ねえ、ギルバートさん。今頃こういうことを言い出すって、どういうことなんですか？」

茉莉香が言った。

「彼は、『恐ろしい技術や兵器』を開発したのだから、銀河帝国は『悪の帝国』に違いないと言いたいだけなんですよ。」

「それって、理屈が逆ですよね。」

『武器がなければ、平和が達成される』と考えることと同じように、どこかおかしいですよね。

うまく言えませんが。」

「そうです。とても理想的で美しそうな話ですが、非現実的ですね。

まあ、平和な時代になったから、こういう非現実的な主張が魅力的に見えるんですよね。」

ギルバートが言った。

「そうはいつでも、直ちに反論すると『苦しい言い訳』にしか聞こえませんかよね。

環境過激派対策と同様、しばらくは銀河帝国批判のキャンペーンを見極める必要があるでしょうね。」

スカレットが言った。

「話を元に戻しますと、脅迫状への対策ですが、如何なる状況にも対応できるようにするため、やはり、皆さんも最小限の武器を持ってもらうことが必要でしょう。」

学校内での武器の携帯について、校長先生には、私からお話します。」

ギルバートが言った。

「武器を持つと、かえってほかの生徒たちが危険な目にあうリスクが高まるのではないですか？」



グリーユールが聞いた。

「いや。武器の無い方が、かえってリスクが高いでしょう。」

武器がないと、犠牲が増えると思います。

例えば、他の生徒を人質に取られたらどうしますか？

相手がマンチュリアの工作員ならば、皆さん方を倒すためなら、ほかの生徒の命なんかためらわず犠牲にするでしょう。」

「……テロとはそういうものですね。」

「そうです。」

では、具体的な作戦ですが、武器はこういうように……。」

18-7 ヨット部部室（白鳳女学園）

それから数日経過した放課後、イリーナとグリーユールを加えた8人の「三年生」たちは、ナタリア部長、ジェシカ副部長の呼びかけで、再び部室に集まった。

用件は、卒業記念の寄付の相談である。

「それで、ナタリア部長としては卒業記念の寄付は何か良いと思うの。」

「茉莉香先輩、卒業したら、サイレンウイスパーは、どうされるおつもりですか？」

「そうね。みんなが乗りたいのなら、寄付してもいいんだけど……。」

軍用機だから、今までは私の名義でことで保有できたわけだけど、これから学校名義でも大丈夫なの？」

「それは校長先生が星系軍と話をつけたようです。維持費の予算は大変ですが。」  
「それは、お父さんが寄付してもいいって言ってるわよ。」

大学生のヨット部も使わせてくれるならばね……。ウフフフ……。  
サーシャが言った。自分も使い続けたいようだ。

「今年はそれで決まりかなあ。」

茉莉香が言った。

「そういう訳にはいかないでしょ。茉莉香とサーシャだけに負担させるわけにはいかないわよ。」

チアキが言った。

「では、このほかに、ディングーの買い替えのために貯金をしまするので、応分の御寄付をお願いします。」

「なるほどね。それはいい考えだね。あのコたち、ちよつと古いものね。」

チアキが言った。

バン。バン。バン。

ドカーン！

その時、部屋の外から、銃の発射音のような音や爆発音が聞こえてきた。

「あれ、ついに来たのかなあ。茉莉香。」

「うん。そうかもしれないね、チアキちゃん。」

「私、ちよつと、外の様子を見てきます。」

皆が止める間もなく、ジェシカが廊下へ飛び出していった。

その時、それまで黙っていたイリーナ・フェリーニが、言った。

「こういう時は、陽動作戦も気を付けないといけません。」

皆様、地下通路を使って逃げましょう。」

「ええ!? あの襲撃は、おとりだと言うの?」

「その可能性があります。もしそうなら、警備の注意をそらしているうちに、私たちを狙うテロリストがここにやってくるはずです。」

そういうと、イリーナは部屋の奥の本棚に向けて、リモコンスイッチを押した。

すると、本棚が自動的に手前に動き出して、さらにドアのように右に開き、壁に地下への入り口の扉が見えてきた。

「ええ! こういう仕掛けだったの。知らなかったなあ。『探検記』にも書いてなかったよ。」

ナタリアが驚いた。

「さあ、中へお入りください。地下通路を使って追っ手から逃げましょう。」  
「ええ? . . . とうか、あなた何者なの?」

茉莉香が言った。

「茉莉香さん、イリーナは味方よ。話は後。さあ、急いで。」

サーシャが言った。

一行が地下通路に入ったその時、部室のドアが激しい音を立てて吹き飛んだ。

「手を上げろ。抵抗すると、こいつの命が無いぞ。」

部室に三人の黒い防護服・黒いゴーグル姿の人間が入ってきて、そのうちの一人がジェシカの腕を捕まえ、銃を頭に突き付けている。あとの二人は、こちらに銃を向けている。

これを見たイリーナは本棚の陰に隠れて、銃を向けている二人に激しく発砲した。

いつの間にか、彼女は自動小銃のような武器を手持っていた。

そして、彼女は、侵入した賊が銃撃でひるんだすきに、人質のジェシカにかまわず、地下通路への入り口のドアを閉めてしまった。

18—8 『地下迷宮』（白鳳女学院地下の旧植民地連合軍司令部）

「あなた、ジェシカを見殺しにしたの?」

地下通路の中で、チアキは咎めるような口調で言った。

これに対して、イリーナは軍人のようにひざまづいて、臣下の礼を取り、言った。「失礼いたしました。王女殿下。名乗らせていただきます。」

私は、ヒガン共和国国防軍の特殊部隊に所属しております、イリーナ・フェリーニでございます。

そして、子供の頃からレオニーニ家でサーシャお嬢様の「カゲ」として護衛を務めておりましたものでございます。」

「私を守るために、わざわざ、ヒガン星団から来てくれたのよ。」

サーシャが言った。

「そうなの。でも、ジェシカはどうなるの……。」

「殿下。ご安心を。」

彼女が人質であるならば、まだ殺されることはないはずです。

そして、もう一度、私たちの前に現れるでしょう……。」

そう言つて、イリーナは、暗い地下通路の奥に向けて、耳を澄ました。

ドーン

腹に響く爆発音が、地下通路の左側から聞こえてきた。

「どうやら、白鳳女学院の外にある出入口から、テロリストが侵入したようですね。」

皆様、地下通路の右側を進んで、校舎の下、つまり旧植民地連合軍司令部の方へ行き

ましよう。

皆様。武器のご用意をお願いします。」

## 第十八章 白凰女学院地下迷宮の戦い その2

18—9 『地下迷宮』の通路（白凰女学院地下の旧植民地連合軍司令部跡）

イリーナは、手元の情報端末を見ながら、薄暗い地下通路の中を、皆を先導して進んでいった。

情報端末には、敵味方を識別した赤と緑の光点が通路を動いている様子が表示されている。

「あ、行き止まりだ。確か、昔の先輩が作った『地下迷宮』の地図では、ここは真っ直ぐ地下の司令部跡に続いているはずだったけど……」

ナタリアが、走りながらつぶやいた。

「よくご存知ですね。ここは最近、改修されて、迷路のような複雑な回廊になったんです。」

さあ、こちらに曲がりますよ、みなさん。」

イリーナも走りながら言った。

「いつ、そのような改修工事が行われたのですか。私たちは全く知りませんでした。」  
グリユーエルも、迷路のような地下通路を走りながら聞いた。

「公爵様の反乱で学校が休校になってる間ですよ。」

その間に星系軍は、銀河系規模の内戦に備えて地下司令部の再整備を計画したのです。この時に、地下通路は、白兵戦を想定したセキュリティ対策強化のため、複雑な迷路のように改修されたんです。

もつとも、司令部本体の方は、コンピュータなどの設置に膨大な費用が掛かるので予算折衝が長引いている間に公爵の反乱が終わってしまい、結局、再整備は中止になったそうです。」

「私たちが練習航海に行っている間ですね。」

でも、そんなことを良くご存知ですね。秘密が漏れているんでしょうか。」

茉莉香も走りながら聞いた。

「いや、校長先生からお聞きしました。」

お嬢様たちを守るためにと、ご協力いただきました。この情報端末も校長先生から頂いたものですよ。」

イリーナが答えた。

「校長先生って、やっぱり、顔が広いなあ。」

「校長先生は、現役の情報部員だった時代から、私たちの旧組織にとって『手ごわい相手』だったそうです。」



だから、お若いころから、『魔女』というニックネームで呼ばれていたそうですよ。」  
「やっぱり。ナハハ・・・。」

茉莉香は苦笑いした。

茉莉香と話しながら、イリーナは情報端末を見て考えている。

「思ったより敵の動きは速いですね。このままでは、追いつかれて後ろから狙撃される恐れがあります。」

「この先の迎撃ポイントで、迎え撃つしかないでしょう。」

「え!? 銃撃戦をやるんですか?」

私たち、銃なんか打つたことがないんですが・・・。」

ハラマキやリリイは、怖そうな声を出した。

グリーユーエルとナタリアも、驚いて声が出ない。

「大丈夫ですよ。銃撃は私一人でやります。そのために私が来たんですから。」

イリーナが答えた。

「あなた一人に銃撃戦をさせるなんて、そんなわけにいかないでしょう。」

私もやるわよ、海賊だから。」

茉莉香が言った。

「茉莉香ひとりに押し付けるわけにいかないでしょう。」

チアキも言った。

「そうですね。イリーナ、みんなで乗り切らないと。」

サーシャも言った。

「私も帝国軍人のタマゴだからね。」

ウルスラも言った。

イリーナはさらに進んで、ある地下通路の角で、立ち止まった。

「ここです。ここが白兵戦用の迎撃ポイントです。」

イリーナは、廊下の天井や床に向けて、通信端末を操作した。

すると、たちまち天井や床から分厚い壁がせり出してきて、銃撃用のわずかなスキマを残して、通路をふさいでしまった。壁からは、武器庫のようなものがせり出てきた。「お嬢様。ここから、通路の向こうの角を曲がって現れた敵を狙撃します。照明は暗いので、暗視用のゴーグルをお付け下さい。」

それから、皆様の武器は少し威力が弱いので敵の防護服を破れないかもしれません。武器庫にある軍用ブラスターをお使いください。

システムの情報では、追っ手のテロリスト兵士は、三人です。

サーシャ様は、お持ちのガンマ線ブラスターで、兵士の起爆装置を狙ってください。

他の皆様は、兵士の足を狙ってください。

敵の足を止めて、我々を追跡できなくすればいいのです。殲滅は必要ありません。」  
「わかったわ。いくわよ。」

茉莉香もゴーグルをつけながら言った。

結局、茉莉香、チアキ、サーシャ、ウルスラとイリーナの五人が銃を構えて、敵の兵士を待ちかまえた。

「グリユーエルさん。」

このガンマ線ブラスターは、人間爆弾にされた兵士を放射線で倒すためのものではありませんよ。起爆装置を無効化して、その兵士に生きのびるチャンスを与えるものなんですよ。

これで攻撃をあきらめるといいのですが・・・。」

サーシャは、緊張して銃を持った少女たちを見つめるグリユーエルに言った。

そして、持ってきた拳銃タイプの小銃型のガンマ線ブラスターをグリユーエルに渡して、言った。

「これを持っていてください。」

グリユーエルさんなら、人間爆弾にされた人を救うために引き金を引くことができるはずですよ。

たとえば、他の人がためらう場合でも。」

「間もなく来ます。三人の人影が見えたらすぐに撃つてください。」  
ドカドカと、人が走る音が近づいてきた。

人影が見えた途端、チアキの手元の情報端末には、爆発物を検知したことを示す赤いランプがついた。

キューン、キューン、キューン……

少女たちは壁の隙間からいつせいに射撃した。

銃撃が終わってみると、二人の兵士が床に倒れ、足を抑えている。しかし、残りの一人は、撃たれた足を引きずりながら、通路の角まで引き返して隠れてしまった。

「二人、撃ち漏らしたわ。三人目は、起爆装置の無効化ができなかったわ。」

サーシャが言った。

「そのようね。赤いランプが点滅し始めたわ。」

チアキが言った。

「いけません。みなさん、すぐここを離れましょう。」

30秒以内に爆発します。」

イリーナがそう言うのと、情報端末を操作して、壁の隙間を閉鎖し爆発に備えた。

「ええ!! 爆発!!」

少女たちは、一斉に走った。全力で走った。

グワーン!

やがて背後で大きな爆発が起こった。

「キヤーツ!」

爆風が、後ろから少女たちの髪を吹きあげていく。

「大丈夫です。もうすぐ、旧司令部跡です。そこまでいけば、味方がいるはずですよ。」

18—10 白鳳女学院正門前（海明星）

「王女と帝国軍は、この星から出て行け!」

「出ていけ!」

「海明星を戦争に巻き込むな!」

「戦争反対!」

デモ隊が口々に叫んでいる。白鳳女学院の正門前は、環境過激派のデモ隊が押し寄せ、道をふさぎ、車両の通行ができなくなるなど大混乱していた。

帝国軍の警備隊は姿を見せず、海明星行政府の警察と学校のガードマンが規制にあたってはたっている。

というのも、デモ隊は武器を持たず、プラカードや旗を掲げているだけなので、警備のガードマンや警察により、学園内にデモ隊が侵入するのを防ぐだけの規制しかできない。

いと思われたからだ。

デモ隊は『校長に会わせろ』、『抗議声明を受け取れ』と騒ぎ、容易に退去しないので、正門前は混乱が続いていた

ドカーン、パン、パン、パン。ドカーン！

その時、正門西側の丘陵地から爆発音や銃の発砲音が聞こえてきた。

白鳳女学院は小高い丘陵地の上にあり、正門前まで丘陵地を上る道が通じているが、その両側の丘陵斜面は、公園や学校の運動場として整備されている。

正門の西から少し離れたところには管理事務所のような小屋が立っていたが、爆発や発砲はそこから聞こえてきた。

見ると、小屋の前に止まっていた警察の装甲車が火を噴いて煙を上げている。

黒い防護服姿の人たちが、銃を撃ちながら、小屋を襲っている。

これに対して、警察が反撃しているが、軍用の高性能な武器には歯が立たず、何人か倒され、残りの警官は退却してしまった。

やがて、黒い人影は小屋に突入していった。

すると今度は、それを追うように、迷彩色の防護服姿の軍人たちが、銃を撃ちながら小屋に突入していった。

実は、この小屋は、白鳳学園の地下にある旧植民星連合軍の司令部への入り口のひと

つであつた。そして、そこから最初に侵入したテロリストが、地下通路で茉莉香たちが出会った三人だつた。

突然、激しい銃撃戦を間近で見せつけられたデモ隊の人々は驚愕した。

すでに、一部の人々は銃声に驚いて、逃げはじめていた。

誰かが逃げはじめると、デモ隊はパニックに陥って、皆が正門前から逃げ去つた。

他方、テロリストの襲撃を受けて、星系軍と帝国軍の警備部隊は、一斉に動き出した。

そして、警備部隊は、あちこちから侵入しようとしていたテロリストの軍団を一斉に捕捉していた。不思議なことに、白鳳女学院に侵入したテロリスト集団は防護服を着ているにもかかわらず、射撃の精度も低く、あつという間に追い詰められた。

しかも、彼らの近接戦闘能力は極めて低かつたため、警備部隊による格闘戦で簡単に取り押さえられてしまった。もちろん、起爆装置も簡単に無効化された。

「爆発の危険がないか、もう一度、チェックしろ。」

そして、警備部隊の軍人たちは、尋問のためにテロリストの頭部のマスクを外させてみて、驚きの声を上げた。

「ええ!? みんな子供か?」

「男の子だけかと思えば、女の子もいるな。見たところ、せいぜい高校生くらいか。」

「どうりで、軍人としての訓練ができていないはずだ。」

「それよりも、これはおかしいだろう。みんな同じ顔をしているぞ。」  
「これが、噂のマンチュリア軍のクローン兵士なのか……。」

18—11 『地下迷宮』の通路（白鳳女学院地下の旧植民地連合軍司令部跡）

茉莉香たちは、テロリストの襲撃を退けて、ようやく旧植民地連合軍司令部跡の大ホールに近づいていた。

この時、地上にいたテロリストは既に逮捕され、残るは、既に地下に侵入したテロリストだけとなっていたが、茉莉香たちはまだそれを知らなかった。

「茉莉香さん、情報端末を見ると、地下に侵入している敵は、あと二組ですね。」

「いずれも、私たちと同じところ、旧司令部跡の大ホールを目指して進んでいます。」  
「それはまずいわね。」

ホールには、他の生徒たちが大勢避難しているでしょ。そこへ私たちが加わると、敵の攻撃がホールに集中する結果になるわね。

「いいわ。そろそろ、私たちのやり方で戦いましょう。作戦通りにね。」

茉莉香は言った。

「はい。」

「それで、向こうさんも同じところを目指していると言うことは、このセキュリティシス



テムの画面は、向こうさんも見ているってことでしよう。」

茉莉香が言った。

「なるほど。情報がもれているのか．．．ありうるわね。」

チアキが言った。

「それで、情報が漏れているなら、それを利用して、向こうさんを引つ張りまわしてあげましょう。」

そのためには、えーっと．．．」

茉莉香は情報端末の画面に示された、地下通路の迷路を眺めながら、作戦を考え始めた。

この時、即座にグリューエルが答えた。

「茉莉香さん、こういう作戦はどうでしょうか。」

グリューエルは情報端末の画面を指差しながら、説明した。

「この道の先を左に曲がって、旧住居区画の中を通って、私たちがもとのヨット部屋に戻ろうとしているように見せかけます。」

そうすると私たちの後から追いかけてきた、このひと組は、元に戻って私たちを待ち伏せしようとするはずです。もう一組も私たちを追いかけるでしょう。」

そこで、私たちが逃げるためにあちこちの通路を閉鎖したように見せて、待ち伏せ予

定地点をここしかないようにします。」

「それで、私たちはどうするの。そこで戦うの?」

「いいえ。それは警備隊にお任せしましょう。」

どうせ、そこまで戻れば、更にあとから追いかけてくる警備隊と対面して戦闘になるでしょうから。」

「いいわ。その作戦でいきましょう。」

茉莉香が言った。

「ええ!? その作戦って、海明星の軍が管理するこの地下基地のセキュリティ・システムをハッキングして、偽のデータを表示させるってことですよね。」

イリーナが驚いた。

「そうよ。」

「そんなの、アリですか? 味方同士じゃありませんか!」

「アリなのよね。困ったことに。」

たう星系軍も帝国軍もお互いに協力しているはずなのに、肝心のところは縄張り意識があつてね。たう星系軍も、セキュリティ・システムの重要なところは帝国軍には教えないのよね。

だから、ハッキングが必要なわけ。」

「本当ですか？」

我々ヒガン共和国軍と帝国軍は、いままでは最大の宿敵でしたが、今はとても良い協力関係にありますよ。」

イリーナは、まだ信じられないと言う表情だった。特殊部隊の隊員と言っても、見かけ以上に、生真面目な性格なのだろう。

「そうね。」

でもね、あなたの身元だって、海明星行政政府は、本当のことを知っていたかもしれないけれど、帝国軍には教えなかったのよ。

だから、私も知らなかったのよ。

たぶん、情報が漏れることを警戒していたんだと思うけどね。

お互い様でしょ……フフフ。」

茉莉香が言った。

「できました。動かします。」

グリユーエルが言った。

すると、情報端末の画面上に表示された緑の点の塊が、次の角を左に回って、元のヨツト部室の方へ引き返そうとしているように、動き出した。

同時に、逃げ出したと見せかけるため、背後から追いかけていくように、通路が次々

閉められた。

通路の閉鎖は実際に行われた。ヨット部員の移動が偽の情報と気づかれなかったためである。

この動きに対応して、二組の赤い点が、ヨット部員の移動を追いかけるように動き出した。

「さあ、これで敵は罠にかかったわよ。次はどうしましょうか？」

「茉莉香さん。二組目の敵が動いた後に、緑の点がひとつ、この部屋に残されています。

どうやら、味方の誰か一人が、この部屋に置き去りにされたようです。」

グリューエルが、画面に表示された地図を指差しながら言った。

「これって、ジェシカじゃないの？」

チアキが言った。

「ジェシカさんかどうか、わかりません。」

このシステムは個体識別まではできませんので。」

グリューエルが答えた。

「茉莉香、助けに行こうよ。」

チアキが言った。

「危険です。おやめください。」

イリーナが止めたが、チアキはこう言った。

「ジェシカは、ヨット部員、私たちの友達よ。見捨てることはできないわ。」

「グリユーエル。この先をこういうふうにジグザグに曲がって行けば、この部屋にたどり着くのよね。」

茉莉香が、情報端末に示された通路を指でたどりながら、進路を聞いた。

「そうです。」

「じゃあ、行こう。」

茉莉香も言った。

茉莉香たちヨット部員は、ジェシカがいると思われる部屋に向かった。部員達は、イリーナが先頭に立って、安全を確かめながら、地下通路を慎重に進んでいった。

あと少しと言ったところまで来た時、リリイが言った。

「情報端末では、敵は向こうへ行っちゃたと表示されてるんでしょ。」

もう敵はいないから、もう大丈夫よ。急ぎましよう。」

そう言って、リリイはイリーナを追い越して、地下通路の角を曲がろうとした。

「危ないです。リリイさん、下がってください。」

イリーナがリリイを引っ張って、地下通路の角から引き戻した。

その時、ブラスターの熱線が、リリイの今までの空間を貫いた。

「敵だ。隠れて狙撃している。」

「どこにいるの。」

「こっちの情報端末には表示されていなかったわ。」

「なはは・・・。ハッキングはお互い様ってことかしら。」

茉莉香が苦笑いをした。

「厄介なことになったわね。」

チアキが言った。

「まかせてちょうだい。このブラスタ―なら、壁越しにでも攻撃できるわよ。」

サーシャがそう言って、ガンマ線ブラスタ―の出力を最大に調整した。

サーシャは、地下通路の角から敵の様子を窺った。敵も地下通路の角に隠れているらしい。それならと、サーシャは、敵の隠れているあたりで、起爆装置の埋め込まれた腹部を狙って、ブラスタ―の引き金を引いた。

キューン、キューン、キューン・・・。

敵がうめき声をあげたり、倒れる音が聞こえた。

すかさず、イリーナが突進して、ガンマ線ブラスタ―で腹部を撃たれて苦しんでいる三人の敵をなぎ倒し、武装解除した。

テロリストは白兵戦用の防護服を着ているにもかかわらず、格闘戦となると驚くほど

弱く、簡単に倒されてしまった。

チアキは手元の情報通信端末を見て、起爆装置が機能を停止していることを確認した。

茉莉香は銃を構えながら、左右を見わたし、耳を澄ました。

そして言った。

「よし。付近に敵はいないわ。安全を確認。行きましょう。」

今度は茉莉香を先頭にして、ヨット部一行は通路を慎重に進んで、誰かが置き去りにされている部屋のドアを開けた。

18—12 地下迷宮の小部屋（白鳳女学院地下の旧植民地連合軍司令部跡）

部屋の中には、椅子に縛りつけられたジェシカが、一人でいた。

「ジェシカ！ 大丈夫？」

茉莉香が言った。

チアキやサーシャは、ホツとした顔をしてジェシカを見つめていた。

「よかったよ。ジェシカが生きていたよ。よかったね。」

ナタリア、ウルスラ、ハラマキ、リリイが、喜びの声を上げた。

「あ、私を助けに来てくれたの？」

しかし、茉莉香たちを見たジェシカは、うれしいような、悲しいような複雑な表情をした。

「そうですね。あなたを助けに来ました。」

グリユーエルはそう言ったにもかかわらず、ジェシカの前に進み出て、彼女に銃を突きつけた。

グリユーエルの顔には、今にも引き金を引いて、彼女を打とうという強い気迫があふれていたが、彼女は震える両手で拳銃を握り、とても緊張している様子だった。

「ああ、グリユーエル。何するのよ、ジェシカは私たちの友人、味方よ。」

茉莉香は、あわてて止めに入った。

「茉莉香さん、邪魔しないでください。私は……。」

グリユーエルは、悲壮な表情で引き金を引いた。

キューン。

青白い光線が、ジェシカの腹部を突き抜けた。

彼女はそのショックで気絶してしまった。

グリユーエルの撃った銃は、サーシャから託された小銃タイプのガンマ線ブラスタ―だった。

発砲を止めるためグリユーエルに近づこうとした茉莉香は、チアキの持った情報端末



に赤い光が点滅していることに気が付いて、立ち止まった。

そして、あわてて、『みんな、逃げて！』と警告を発しようとしたが、すぐに光の点滅が消えたことにも気が付いた。

「チアキちゃん、・・・人間爆弾。」

茉莉香は、チアキを見て、かろうじてそれだけ言った。

「そうね。ジェシカの顔を見た時に、ついほっとして、爆発物検知器を確認するのを怠ったわ。」

これが、マンチュリアの暗殺用生体兵器ね。まったく、恐れ入ったわ。」

チアキが言った

「爆発まで30秒なんて、再会を喜んでいたらあつという間に過ぎるものね。」

ほんと、グリューエルがいなかったら、みんな、やられていたわ。」

ありがとう。」

茉莉香はそう言って、グリューエルを見た。

本当は笑顔で礼を言いたかったが、緊張して硬い表情のままだった。

「はあ、どうも・・・。」

グリューエルも緊張に震え、落ち着かない声で答えた。

「それで、ジェシカは大丈夫なんでしょう？」

死んじやいないよね。」

リリイが聞いた。

「たぶん大丈夫。今は、気を失っているだけよ。

爆弾を取って、治療を受ければ、直るわよ。きつと。」

サーシャが答えた。

ヨット部一同がようやくほっとしたところで、警備隊の人たちが部屋に入ってきた。

「皆様、ご無事でしたか。」

「こちらは大丈夫です。」

それから、この縛られている生徒は、マンチュリアの工作員でした。いま、起爆装置を無効化したところですが、注意してください。」

イリーナが答えた。

「地下に侵入した敵はどうなりましたか。まだ交戦中ですか？」

茉莉香が聞いた。

「はっ。すべて制圧しました。テロの鎮圧はこれで完了です。」

警備隊の指揮官らしい人が、茉莉香に向かって敬礼して言った。茉莉香のことを知っているようである。

「ありがとうございます。」

茉莉香も敬礼して、答えた。

そのとき、応急手当てを受けて、ジエシカが意識を回復した。

「ジエシカ！ 大丈夫？」

ナタリアが言った。

「ああ、部長。すみません。部室を壊してしまいました。」

ジエシカが詫びた。

「そんなことはいいいよ。あなたも治療を受ければ大丈夫だそうだから。

心配しないで、病院へ行つてね。」

ナタリアが言った。

「はあ、でも、もう、どうでもいいんです。私のことは……。」

ジエシカが、元気なく答えた。

「ねえ。一つ聞かせてよ。」

あの脅迫状を私たちに出したのは、あなたでしょ？」

チアキが聞いた。

「そうですよ。チアキ先輩たちがこの星を出ていけば、私たちが命令されたテロも中止になるのかなって、思ったものですから……。」

「あなた、独断で脅迫状を出したの？」

「そうですよ。

テロが中止になれば、私も、このまま学校に通って普通に暮らせるかなと思つて。

だつて、お父さん・お母さんの時代も、その前のおじいさん・おばあさんの時代も、何も命令の来ない平和な時代が続いていたのに、私の時になつて命令が来るなんて・・・。

そんなこと・・・。

せめて、あと一年あれば、私も部長になつて、あのオデット二世号の船長席に座れるのになあつて、思つたものですから・・・。」

ジェシカはそう言いながら、涙を流していた。

「ジェシカ、まだ諦めてはだめよ。やり直せばいいのよ、私のように。」

サーシャが言つた。

その言葉に対しては、ジェシカは黙つて、ただ首を振るばかりだつた。

そして、やがて、沈黙してしまつた。

『これは、精神的なショックや疲労のためだ』として、衛生兵は彼女をそつとしておくように言つた。

18—13

白凰女学院校庭（海明星）

地下迷宮の戦いを終えたヨット部員一行と警備隊は、拘束されたジェシカを連れて、

エレベーターで地上へ上がった。

地上の管理棟正面の広場では、生き残ったテロリスト達が拘束され、固まって座らされていた。

彼らは、高校生くらいの若い男女であった。みな何も言わず無表情であり、人間らしい意思や感情が無いように思われた。

警備隊は、ジェシカもテロリスト達と一緒に座らせたが、改めてジェシカの顔を眺めて、皆、驚いている。

「この生徒は、テロリストの女の子達と同じ顔をしているではないか。」

「この子も、やはりマンチュリアのクローン人間に間違いない。」

「予め潜入しているヤツがこの子だとは……。」

「しかもヨット部の副部長をしていたとは、驚いた。」

「この子は、いつごろから潜入工作員として活動していたのですか？ご存知ですか。」

スカレットが、ヨット部員に聞いた。

「白凰女学院には中等部時代に転校してきましたよ。」

ウルストラが言った。

「そうですね。」

でも、ステープル家がクリスタルスターに住んでいた頃から、正確には彼女よりも前

に、彼女のお父様、お母様の時代から、我が家に出入りしていたそうですよ。」  
サーシャが言った。

「そんな前から……。」

スカレットが驚いた。

それ以上、サーシャは何も言わなかったが、ヨット部員達には、マンチュリア人が以前からステープル家を監視していた理由は、理解できた。

練習航海で宇宙大学を見学したときに、サーシャの両親達「伝説のカップル」の恋物語を知ったからである。

つまり、サーシャの実母ロッテとステープル家の養母ミーシャが実の姉妹で、しかもロッテが宇宙マフィアの大ボス、レイ・レオニーニの妻だったという秘密の事情を知っているからである。

しかし、広場ではもうひとつの驚きが広がっていた。

拘束されていたマンチュリアのクローン人間達が、ジェシカに強い興味を示したからだ。ジェシカが自分達と同じクローン人間だと分かったようだ。

みな、それまでの無表情が一転して、食い入るように彼女を見つめていた。

やがて彼女と同じ顔をしている女の子の一人が、地面に座った姿勢のまま、ジェシカににじり寄った。そして、縛られた両手でジェシカの着ている制服を触ったり、顔を近

づけてジェシカの体のおいをかいだりし始めた。

その間、ジェシカは何も言わず、じっとしていた。

そして、その女の子は、うっとりとした表情を浮かべて、他のクローン人間に言った。

「モニニチミチイカ。キイクマトニナ、ナイミトノキナ・・・」

それを聞いた他のクローン人間の女の子たちも、ジェシカの回りに集まってきて、生ききとした表情で、口々に何かしゃべっている。

男の子のクローン人間たちも、ジェシカを見つめ、お互いに何か話し出した。その顔には明らかに感情や意思が表れていた。

警備隊員やヨット部員には、クローン人間達が何を言っているか分からなかった。

しかし、表情や動作から、ジェシカに対して、憧れのような気持ちを抱いていることがうかがえた。

「ねえ、イリーナ。あの子達が何を言っているか、分かりますか？」

茉莉香が聞いた。

「だいたい、わかります。

彼らは、マンチュリア語、それも下等身分専用の言葉で話しています。

ジェシカさんのことを

『良いにおいがする』とか、

『綺麗な服だ』とか、

『王族のような暮らしをしている』とか、

『私も、死ぬまでに一度で良いから、この子のような暮らしがしてみたかった。』とか、  
口々に言っています。」

それを聞いていたチアキが言った。

「この子達も、同じ人間なのよ。」

むしろ、この子達にこんなことをさせたヤツラこそ、許せないわ。」

チアキの言葉に続けて、グリューエルが言った。

「でも、この人達は、いったいどうなるのでしょうか。」

チアキさんを狙ったことは明らかなんですから……。」

グリューエルは、言葉に詰まった。つまり、『銀河聖王家に対する不敬罪により死刑になるのが当然……。』という言葉を最後まで言うことが出来なかったからだ。

「そうね。母上に恩赦をお願いしてみるわ。」

この子達は自分の意思ではなく、洗脳教育でテロリストになったのでしようからね。

イリーナ、この子達に伝えてください。

私から貴方たちを死刑にしないように女王陛下に働きかけることと、

銀河帝国の下では総ての国民は平等であり、貴方たちもジェシカのように学校に行け



るようになるかと、伝えて下さい。」

チアキは言った。

「承知いたしました。寛大な御心遣い、感謝申し上げます。」

イリーナは、片膝をついて片手を地面につけ、深く頭を下げ、軍人としての最高の敬意をチアキに示した。イリーナも、目の前のクローン人間達に深い同情の気持ちを持っていたことが、その敬意の表し方にかがえた。

イリーナがチアキに片膝をついて敬意を示したところは、クローン人間達も見えていた。

チアキが王女であることを理解したと思われた。

しかしイリーナの話聞いて、彼らは驚くと言うより、呆然として信じられないという表情をした。

「信じられないのかなあ。無理もないわね。」

スカールレットさん、この子達の治療はどうするのですか。」

「はい、チアキ様。」

この後すぐに、けがの治療、体内の爆発物の除去手術と放射線障害の検査をすることになるでしょう。

たぶん、どの子も生命の危険は無いと思われませんが、医師にお任せ下さい。

その後は、おそらく、洗脳を解除するための治療になるでしょう。」  
「そうですね。お願いします。」

テロは鎮圧され、白凰女学院は落ち着きを取り戻しつつあった。

正門前では、テロ鎮圧の知らせを聞いて、生徒の親たちが迎えに現れていた。みな、無事な我が子の顔を見て安心した様子であった。

そこで、ヨット部一行もようやく家路につこうとした。

「チアキちゃん、無事におさまって良かったね。」

「そうね。茉莉香、良かったね。サーシャ、イリーナ、ありがとう。」

「いえ、こちらこそ。」

「グリユーエルさんもありがとう。ジェシカを救えたのは、貴方の決断でしたよ。」

「いえいえ、どういたしまして。」

そうやって、ヨット部一行がホットしていると、キアキの携帯端末が鳴った。

「はい。チアキです。」

と、チアキが応えた。

「お母様。……」

はい、こちらからご報告すべきところ、わざわざお電話頂き、ありがとうございます。

ご心配をお掛けしました。私は無事です。ケガもしておりません……

はい、テロは鎮圧されました・・・

それでお願いがございます。テロリストの少年少女達のことですが・・・

ああ、はい。そうですか。ありがとうございます。」

チアキは、茉莉香に向かってウインクして、OKのサインを出した。恩赦が認められると聞いたのであろう。

だが、その後は、チアキの表情は緊張感に溢れ、口調が重くなった。

「ええ!?!・・・」

はい。分かりました。

ご命令に従い、遠征艦隊に合流するため、ただちに出発します。・・・

はい。加藤大佐にも、弁天丸で合流するように伝えます。

その他には・・・

はい、分かりました。伝えます。」

チアキは、通信を切つて、茉莉香と顔を見合わせた。

「チアキちゃん・・・。始まるの。」

「そうよ。母さんは、マンチュリア人に対して本気で怒っているわよ。」

「第四次マンチュリア戦役ですか・・・。」

「そうね。M—8801星団への遠征が決定されたそうよ。」

それも、銀河帝国の女王が自ら軍を率いるという、1000年ぶりの親征だそうよ。すでに帝国軍に動員が命令されたそうよ。」

「それで、私の弁天丸も……。」

「そうよ。」

今回は、姉さんは帝都で留守番ですって。女王の後継者、帝国のNO.2だからね。

代わりに、私が副司令官としてグラントマザーに乗って、旗艦のクイーン・オブ・パイレーツと一緒に行くようにと命令が下ったわ。

弁天丸も、グラントマザーに合流よ。」

「わかりました。陛下のご命令に従い、出動致します。」

茉莉香も敬礼した。

そして、茉莉香は弁天丸に連絡を取り始めた。

そして、チアキはサーシャに言った。

「それから、サーシャ。あなたも遠征艦隊に随行して欲しいと、陛下がおっしゃっているわ。」

「私も、ですか……。」

「ええ。『グランマがあなたに会いたがっている』と伝えて欲しいとおっしゃっていたわ。」

「グランマ、ですって。陛下がそうおっしゃったのですか……。」

「そうよ。どこのグランマか、私には分からないけど。」

でも、サーシャにそう言えば分かるって、おっしゃっていたわ。」

「……そうですか。……分かりました。」

でも、父と母に言っておかないと……。」

サーシャは、硬い表情で父母に連絡を取り始めた。

『大丈夫よ。お母さん、私は必ず帰ってくるから。必ず帰ってくるから……』

サーシャはそう言って、同じ言葉を何度も繰り返し話していた。

更に、ウルスラにも連絡が入った。

「あー、ダーリン。……。」

心配してくれてありがとう。……

うん。こっちは大丈夫。王女様も茉莉香も、みんな無事だよ。

それよりも、帝国軍は大変なことになったね。……

情報が早いって？それは、こっちにも情報入ってるからね……

ええ!!? ……

私も……。

分かりました。そちらに合流します。」

ウルスラは、電話の後に、チアキと茉莉香に敬礼して言った。

「小官は、帝国軍の海明星駐留艦隊に合流して、この星を守る任務に就きます。」  
こういう時でも、ウルスラの表情は、とても明るい。

まるで、デートに行くようなくらいに……。

軍関係の話が一段落するのを待っていたかのように、グリューエルが言った。

「あの……茉莉香さん。私も……。」

「グリューエルはダメだよ。危ないよ。」

「でも、私は茉莉香さんと一緒に行きたいんです。」

「だから、これは帝国軍のお仕事だから……。貴方は軍人ではないし……。」

「でも……。私は……。」

「茉莉香、いいかげんに押し問答はやめて、乗せてあげなさいよ。」

見かねて、チアキが口を挟んだ。

「いや、それは……ちよつと……。」

「もう……。茉莉香が、自分で決められないなら、私が決めてあげるわよ。」

グリューエルを弁天丸に乗員として乗せるのと、密航されてやむなく乗せるのと、どっちらか、茉莉香の好きな方を選びなさいよ。」

チアキが言った。

「ナハハハ……。どっちもなあ……。」

茉莉香は、苦笑いしていた。

「ありがとうございます。」

グリューエルの笑顔が輝いた。

まもなく、白凰女学院の校庭の上空に、チアキのローズアロー2号が静かに姿を現した。たう星の日光を反射して、船の前方につけられた銀河聖王家のエンブレムが、遠目からもひとときわ輝いて見える。船は、重力制御推進方式のため、ジェットの噴射もなく、飛行船のように静かにふんわりと空中にうかんでいる。

人々は、地上から船を見上げて、ローズアロー2号の巨大さに驚いた。チアキ専用の船と聞いていたので、人々はもつと小さい船を想像していたからだ。

しかし、ローズアロー2号は全長が約200メートルであり、学院の校舎と見比べるとその巨大さがよく分かった。

もつとも、ピンク色に塗られているといっても、れっきとした帝国軍の超高速巡洋艦であるので、そのくらいの大きさは、当然と言えば当然だが……。

やがて、連絡シャトルが、静かに運動場に降り立ち、チアキ、茉莉香、サーシャ、イリーナ、グリューエルを乗せていった。茉莉香とグリューエルは、チアキの船でいったん海明星の衛星軌道上に上ってから、弁天丸に乗り移る予定だ。

「いつてらっしやい。

ヨット部のことは、お任せください。」

ナタリアがそう言い、リレイ、ハラマキ、ウルスラも加えた四人が見送った。その後、ウルスラも、迎えのシャトルがやって来て、行ってしまった。

18—14 ブリッジ（宇宙海賊船弁天丸）

「いやあ、やっと弁天丸まで帰って来ましたねえ。

ほっとしましたね。」

船長席に座った茉莉香が、お茶を飲みながら言った。

「そうですね。」

家に帰ってきた気分ですね。」

補助席に座ったグリューエルも、お茶を飲みながら言った。

「あらあら、お姫様にそう言っただけは、うれしいですね。」

ミーサが、カップに自分のお茶を注ぎながら言った。

そうはいうものの、弁天丸のブリッジでは、お茶を飲んでいるこの三人以外のクルーは忙しく働いていた。

みな、M—8801星団への遠征に参加するための準備で大忙しだった。



今も、ルカが、帝国軍の航路情報局との間で、厳しい口調でやり合っている。ルカが仕事の話をしているのも珍しいが……。

「……ええ!？」

時空トンネルで行くから、途中の航路情報は無くても良いですって!?

あなた、何言っているの。

船乗りが最後に頼れるのは、自分の船だけよ。

自力で帰還できるのに十分な航路情報が無ければ、万が一の時はどうするのさ!

さつさと、アンドロメダ予定航路の星図と重力分布図と……みんな出しなさい!

ええ!?

民間船、特に海賊船にはそんな機密データは出せないというの……!?

いいわよ。船長に言いつけるから……。

……

わかればいいのよ……。

最初から素直にそう言いなさい。」

電話を切ったルカが、いらだっている。

「ほんとに、航路情報局の『役人』は、民間船には威張るんだから……。

そのくせ、弁天丸の船長がキャプテン茉莉香だと気付いた途端に、一転してペコペコ

しちゃってさあ……。急に態度を変えるなんて。

腹立つわ……。」

クルーはみんな真剣だった。

勝手知った『俺の海』と違って、ヒガン星団やM—8801星団までのアンドロメダ予定航路は、航路情報が不十分で危険がいっぱいの、海賊にとつても『未知の海（未踏の宇宙）』だったからだ。

ブリッジがこのような大騒ぎを繰り返している間に、百目がネットニュースを見て、叫んだ。

「あゝゝゝ、パラベラム号が警察の手入れを拒否して、逃げたって、ニュースで言っているぞ。」

「え!? なにそれ。パラベラム号がなにをしたの?」

茉莉香が聞いた。

「奴隷売買だって……。こりゃ、やばいなあ……。」

「ええ! 鉄の髭さん、いったい何をやってたの?」

それは次のようなニュースだった。

『 奴隷商人摘発される! 』

銀河帝国とヒガン共和国政府は、共同して、ヒガン星系から銀河系外延部までの空間

を航行する宇宙船に対して、大規模な臨検を行ったことを公表しました。

この臨検は、この一帯を中心に密かに行われていた奴隷売買を摘発するためのものです。臨検によつて50隻以上の宇宙船が奴隷売買にかかわつたとして、船長らが逮捕されました。そして、宇宙船からは奴隷として売買された大勢の人々が発見され、両国政府はこれらの人々を保護しました。

これらの人々は、奴隷として売買するために人工的に生み出された、いわゆるクローン人間といわれています。現在、両国政府はその製造元を突きとめようと、捜査を続けています。

このクローン人間については、この後の特集で、詳しくお伝えします。

なお、臨検を拒否して逃亡した船も数多くあり、両国政府はその船名を公表しました。

その船名は、ネバーランド号（船長キャプテンフック）、旧帝国海賊船・パラベラム号（船長鉄の髭）、……』

「うわー。ひどいわねえ。

マンチュリア人によるクローン人間製造って、軍事用だけかと思つていたけど、奴隷売買までやってたのね。」

茉莉香は驚いた。母からの情報もあつたので、鉄の髭のことは心配しなかつた。

「そうね。さすがに、ここまでくると『悪の王国』って感じね。」

でも、私としては、旧宇宙マフィアの主流派が、銀河帝国と組んで、旧宇宙マフィアの少数派であるマンチュリア人と対立する構図になっているのが、面白いわ。

時代は、どんどん変わっていくのねえ。」

ミーサが言った。

「でも、ニユースでは、『マンチュリア』の名前が出ていないわね。

とづくにわかっているんだから、発表すればいいのに。なぜかしら。」

「茉莉香さん、これは情報戦でしょう。」

グリュールが言った。

「情報戦？」

「そうです。」

「M—8801星団への遠征に向けた戦いは、もう始まっているのではないでしようか。」

「まず、この報道をきっかけにして、マスコミによる、クローン人間に関する報道合戦が始まるでしょう。」

「その結果、マスコミによって、マンチュリアの名前や、あの国の人倫に反した、おぞましい実情が報道されるでしょう。」

「そうやって、遠征の意義を国民に理解してもらおうことが狙いではないでしようか。」

マンチュリア人だつて、環境派の人々を使って、帝国軍を批判するキャンペーンを行っていたでしょう。」

その対抗策でしょうね。」

グリユーエルが言った。

「それなら、うちの学校を狙ったテロも報道されてもいいと思うんだけど、こっちはニュースになっていないよねえ。」

「そうですね、ねえ、百目。」

茉莉香は、百目に聞いた。

「白鳳女学院のことは、何も報道されていませんよ。船長、不思議ですね。」

百目が答えた。

「そういえば、ウルスラが言ってたけど、帝国軍の駐留艦隊が海明星の防衛任務に就いているんですってね。」

重力兵器にも対抗できる最新鋭の戦艦が来ているらしいわよ。

チアキちゃんは、自分たちの護衛じゃないかって、言ってたけど。」

「ええ！ それは初めて聞いた。」

シユニツツアーが話に割り込んできた。

「ええ？ それって、秘密だったの？」

今度は茉莉香が驚いた。

「この界限を担当する第七艦隊に新型戦艦が配属されること自体が、異例ですよ。どういふことなのか、調べてみましょう。」

シュニッツァーがそう言つて、第七艦隊の司令部に連絡を取り始めた。

「そつかあ。ここいら、やっぱり田舎だものねえ……。」

茉莉香がつぶやいた。

「船長、分かりましたよ。」

かなり異例ですね。

駐留艦隊は、第一艦隊から直々に派遣された、新型戦艦の三隻です。

しかも、司令官は、参謀本部のミニッツ大佐だそうですよ。」

「ええ!! あの人なの……。」

まさか、模擬戦で私に負けて、左遷されたとか……。」

茉莉香が、気の毒そうに、恐る恐る言つた。

「ハハハ、まさか、それはないでしょう。あの人、帝国軍のエースよ。」

ミーサが笑つた。

「それじゃ、なぜ、エースさんがこんな田舎に来るの？」

ふうむ、やっぱり……。」

そう言って、しばらく考えて、茉莉香は話を続けた。

「・・・なんか、キナクサイ。」

「正解。やつと、言えたわね。」

ミーサが微笑んだ。

「私だって、18歳。もう大人なんですからね。このくらいは言えて、当然です。」

茉莉香は、胸を張った。

『フフフ・・・茉莉香さんって、ほんとに可愛いですね。』

そう思って、グリユーエルが微笑んだ。

## 第十九章 たう星系の決戦

19—1 新鋭戦艦ベンケイ号ブリッジ（銀河帝国軍たう星系駐留軍艦隊）

帝国軍参謀本部は、M—8801星団への遠征を女王が決定したことをうけて、作戦計画の練り直しに大忙しだった。しかも百年ぶりの女王親征とあつて、軍人たちは張り切っていた

その参謀本部の同僚たちを横目で見ながら、ミニッツ大佐は、新鋭戦艦ベンケイ号に乗つて、たう星系駐留軍の指揮を執るため帝都を離れた。

それは、彼は、自分からこの駐留軍の指揮を執ることを志願したからである。なぜなら、彼は、今回のマンチュリア人との戦いでは「たう星系」で最も激しく、かつ注目すべき戦いがおこなわれると予想していたからである。

たう星系駐留軍艦隊の旗艦、新鋭戦艦ベンケイ号ブリッジでは、ミニッツ大佐が遠ざかる帝国軍中央基地を見ながら、つぶやいていた。

「正面から戦つても勝てないのだから、敵の狙いは、帝国に恥をかかせ、銀河系を混乱させることだと思う。

俺が敵将なら、そのためには帝国に協力的な自治国家を攻撃して、見せしめとするの



が一番効果的と考えるな。政治的には、帝国と自治国家の関係を動揺させ、さらにヒガン共和国への脅しになるからだ。軍事的にも、自治国家は最新の重力兵器に対する防衛が手薄で、攻撃しやすいからな。」

ミニッツの話の聞いて、副官の青年が尋ねた。

「その通りだと思いますが、なぜ、第一の攻撃目標が、『たう星系』なのでしょうか。」

「それは、たう星系には第二王女殿下を始めとする例の三人娘が暮らしているからだ。

だから、私の予想通り、敵は、必ず、たう星系にやってくる。

しかも、必ず必殺の重力兵器を使ってくる。

重力兵器を備えた宇宙船同士が初めて交戦するのだ。この経験は、軍事史上極めて重要だ。」

「おっしゃる通りですね。

しかし、大佐。仮に自治国家を攻撃できたとしても、戦争全体では、一時の時間稼ぎに過ぎません。それが戦略的にどれほど意味を持つのでしょうか。」

「それは、情報不足で、私にもよくわからない。

しかし、古来からの格言にもあるが、『戦争は政治の手段』に過ぎないのだから、ヤツラの真の目的は軍事的な勝敗以外のところにあるのだろう。

先月の帝国軍の最高首脳会議で宰相がおっしゃったことは、急所を突いていたと私も

思う。

まあ、われわれとしては、キャプテン茉莉香との対戦に学んで、敵がズル賢く、ヤンチャに立ち回ってきても、それ以上にやんちゃに立ち回って、さつと敵の『グビネツコ』を押さえて生け捕りにしてしまうことだ。

今度は負けないぞ。」

「ハハハ、そうですね。」

### 19—2 帝国軍最高首脳会議

海明星がテロリストに襲われる一か月ほど前のことである。帝都の王宮で開かれた帝国軍最高首脳会議は、M—8801星団への作戦計画案をめぐって、紛糾した。

まず、帝国軍ヤマシタ参謀総長がM—8801星団への作戦計画案について、説明した。

「以上のように、帝国との和平を拒否しM—8801星団に籠ったマンチュリア人は、依然として帝国に敵意を抱いております。

しかも、旧宇宙ファイアの開発した重力兵器を保有している疑いがあります。これを放置しては、帝国への脅威は日増しに大きくなるばかりです。

参謀本部としては、この脅威に対しては早期の対処が必要と考えまして、本日も説明

する作戦計画を立案いたしました。

大局的に見れば、銀河帝国とM―8801星団のマンチュリア人との戦力差は極めて大きいと存じます。艦隊同士の前対決では、結果は明らかでございませう。

このため、作戦計画立案にあたっては、マンチュリア人の側が、奇襲も含めどのような戦い方をすると予想するかが、重要となります。

参謀本部としては、マンチュリア人はM―8801星団に立てこもりつつ、他方で時空トンネルを使って小惑星を帝国の主要星系、とりわけ帝都に打ち込んでくると予想しております。

この小惑星弾による奇襲への対抗策としては、現在開発中の重力兵器に対応する機能を備えた新戦艦による拠点防衛で臨みますが、防御一辺倒では限界があります。

そこで遠征艦隊が、時空トンネルを使って一気にM―8801星団まで跳躍飛行し、重力兵器を使用して敵の本拠地を一気に叩くことが適切かと存じます。遠征艦隊は24時間で目的を達します。早期の先制攻撃こそ最大の防御です。」

ヤマシタ参謀総長は自信を持って説明した。

しかし、珍しく、リシユリユー宰相が発言した。

「それでは、900年前と同じようにマンチュリア人の星を滅ぼしてしまうことになるが、それに銀河帝国としてはどういう政治的意義があると思うのか。」

星ひとつを滅ぼすような戦いを、正義の戦いだと国民にどう説明するのだろうか。

今の時代は、900年前のような銀河系の戦国時代とはちがうのではないか。」

これに対して、ヤマシタ参謀総長は答えた。

「マンチュリア人が、古代からの身分制社会を維持し、下等階級の人々を虐待していることは、歴史的にも今日でも明らかです。」

また、銀河帝国に敵意を抱いていることも多くの証拠があります。

彼らが帝国の大義、「聖王家の下の自由と平等」の敵であることは明らかだと存じます。」

「その主張は正しいが、少し古くさいキャッチフレーズであり、現代の国民の胸に響かないのではないか。」

むしろ、圧倒的な銀河帝国の軍事力を見せることによって、サハリン博士のような帝国軍批判に同調する国民が増えるのではないか。また、環境派の言うように、『民力休養』という名の、軍事費削減による減税要求にも賛成者が増えるだろう。」

「しかしながら、帝国の内政上の配慮より、敵の軍事的脅威の方が大きいと存じます。」

一度でも重力兵器による攻撃を受ければ、犠牲者は数十億人にも達します。」

それまで会議の様子をじっと聞いていた第一艦隊司令官クリステリア王女が言った。

「参謀総長、すでにマンチュリア人は、宰相が指摘するような世論工作をして帝国の内

政をかき回そうとしているが、貴官はこれは何のためだと考えるのか。

これも帝国と戦うための準備だというなら、あまりに遠回りというか、迂遠なやり方ではないか。」

これを受けて、リシユリユー宰相が、議題を外れた雑談を始めた。

「軍事的な解決策以外の方法を考えているのでしょうか。」

予想がつきませんが……。

ちよつと話が行き詰りましたかなあ……。

そういうえば、殿下。きょうはあの娘をお連れになつておられませんな。あの娘がいれば、ちよつと違う、面白いことを言うのではないかと……ハハハ。」

「キャプテン茉莉香のことかな。今、高校卒業目前だから、できるだけ学校に行かせているのだが……。」

そうだなあ、茉莉香には驚くよなあ。

初めて茉莉香をブランド・マザーに乗せた時、追ってきた宇宙マフィアの艦隊にどう対処するか意見を聞いたことがあつたな。

その時、茉莉香は即答でこう言ったよ。

『逃げましょう。』とね。

それも、相手が自分の判断で追跡をあきらめるような逃げ方をしてほしいと言つた

よ。

それを聞いた艦長のハママ准将が、高く評価していたな。こちらの手の内を明かさないで、事態を処理するには、最適な答えだつてね。」

「ハハハ・・・マツタク、なんてことを言うのでしょうかね。」

グランド・マザーに乗っているのに、逃げまじうと言ったのですか・・・。

海賊の娘は面白いことを言いますね・・・。

帝国の大艦隊にも匹敵する戦力を有する、銀河系最強の機動空母ですよ。・・・グラ

ンド・マザーは・・・ハハハ」

リシユリユー宰相は、大きな声を出して笑った。

同席していた軍人たちも笑っていたが、ミニッツ大佐は笑えなかった。軍人の盲点を突かれたような気がしたからだ。そして、リシユリユー宰相は、第一王女に茉莉香の話をさせるために、わざわざ雑談のふりをして話題を変えたのかもしれないとすら思った。

『相変わらずの、タヌキ親父。いや、実にずる賢いワルだ。』

ミニッツ大佐は、宰相の発言を聴きながら、そう思った。

その時、女王が発言した。

「銀河系の辺境部や外延部などの治安維持では、何か問題は起きていないのか。」

第七艦隊司令官が答えた。

「お尋ねの辺境情勢でございますが、最近、銀河系外延部からヒガン星団への航路一帯において、奴隷売買その他の違法ビジネスが盛んになっていると言われております。このため、各星系の警察だけでは取締りの手が足りないのです、帝国軍にも応援をしてほしいと言う要望が増えております。」

帝国軍の仕事ではないと断っているのですが、依頼は多くなっております。警察サイドでは旧宇宙マフィアが復活したのではないかという恨み節も出る始末です。」

これに、山下参謀総長が反応した。

「なるほど、奴隷売買については、マンチュリア人が主な奴隷の供給源といわれております。帝国軍がこれを一斉摘発すれば、M—8801星団遠征への世論工作にもなるかもしれません。」

リシユリユー宰相がすかさず言った。

「取締りならば、ヒガン共和国との共同作戦とするよう進言いたします。」

銀河辺境の無法者どもにも、旧宇宙マフィアが『法と正義』を守る側についたということを教えてあげましょう。」

それには、ヒガン共和国軍への軍事援助を惜しまないことですな。」

最近の自治国家の軍部は、なかなか帝国軍の言うことを聞かないようですが、ヒガン

の連中を手なづけるなら、今がチャンスですぞ。」

宰相の皮肉たっぷり発言のあと、女王が会議を取りまとめた。

「では、ヒガン共和国と共同して、奴隷売買の取り締まりを行うよう、帝国軍に命ずる。せつかくの宰相の助言だ。これまで、かれらは宇宙船の入手や修理にも苦勞してきたと聞いているから、この際、支援を惜しまないように。」

時空トンネルを使う攻撃に対する防衛策も直ちに実行だ。対象は帝国の主要星系でよいが、海明星のある『たう星系』も加えるように。

M—8801への遠征計画は一時保留で、私の預かりとする。だが、いつでも作戦を発動できるように参謀本部は検討を続けるように。以上だ。」

会議は終わった。参謀本部の作戦提案がそのまま了解されなかったことは、異例だった。

しかし、帝国軍は、奴隷売買の取り締まりに参加するメリットにすぐ気が付いた。

ヒガン星団から銀河系外延部の空域は、アンドロメダ航路予定空域であり、しかも、銀河帝国軍にとつても未踏の宇宙であるので、取り締まりを通じて、その実地調査とM—8801星団遠征の予行演習を兼ねた活動ができるからである。

もちろん、その時、参謀本部の軍人たちは、そのわずか1か月後に、チアキが襲われたことに激怒した女王がM—8801星団遠征を命じるとは、予想もしていなかった。



19—3 新鋭戦艦ベンケイ号ブリッジ（たう星系駐留軍艦隊）

「司令官、タッチ・アンド・ゴーの訓練を始めます。」

「よし、はじめろ。」

ミニッツ大佐が命令した。

たう星系駐留軍艦隊がおこなっている「タッチ・アンド・ゴー」の訓練は、ベンケイ号の艦載機として装備されている小型宇宙船を使って、敵の宇宙船を攻撃するものであった。

これは、グラントクロスのような大型戦艦が艦隊規模の大船団を相手に行う「タッチ・アンド・ゴー」と比べれば、はるかに小規模なものだった。しかし、パイロットたちにとっては、これこそ本当の「タッチ・アンド・ゴー」であった。

「いくよ。タッチダウン！」

ウルスラが4機編隊のトップを切って通常空間に突入し、標的艦の目標をビームで射撃して、また亜空間に消えていく。後続の3機も、同じように射撃して、消えていく。

編隊は何度も何度もタッチ・アンド・ゴーを繰り返した。

「アブラモフ少尉。そろそろ終わります。他のパイロットが疲れてきましたから。」  
「了解しました。では帰艦します。」

「どうだ。射撃成績は？」

「相変わらず、アブラモフ少尉が命中率95%以上で、トップです。他のパイロットは、命中率が70%程度ですから、彼女はケタ違いの腕前です。」

「ということは、照準の自動補正装置はほぼ完成レベルと言うことだな。あとはパイロットの腕前しだいということか・・・。

それにしても、ウルスラ君はすごいなあ。

うちのエース級のパイロットをまったく寄せ付けない、こんなすごい成績を軽々と出すんだからなあ。

本当に、彼女は士官学校入学前の女子高生なんだろうかなあ。ハハハ」

ミニッツ大佐は満足げに笑った。

ウルスラは、帝国軍内では、先の公爵の反乱の実戦経験から、ハヤマ准将の「秘蔵っ子」と高く評価されていた。

そのウルスラがミニッツ大佐の船に乗りくむのは、もちろんミニッツ大佐が望んだからだった。

これは、公式には帝国軍の人事に過ぎないが、ミニッツ大佐はわざわざ自分でハヤマ准将に非公式に了解とアドバイスを得ようとした。

これに対してハヤマ准将は、一つだけアドバイスをした。

『一つだけ、アドバイスさせて欲しい。

ウルスラが戦う動機、理由をきちんと彼女に理解させることだよ。それが彼女が力を出せる条件だ。

彼女は大切な人材だから、大事に育てて欲しいからね。』

これが、アドバイスだった。プロの軍人としては、まだまだ精神的に未熟な彼女がその力を発揮するには、戦う動機、理由が大切だからだ。

その点、今回の海明星駐留軍の戦いは、彼女の故郷・父母・友人を守る戦いであり、彼女にとって理解しやすいものであった。

さらに、ミニッツ大佐は、婚約者であるブラウン中尉もわざわざ駐留艦隊に呼び寄せ、ウルスラの精神が安定するように配慮していた。

#### 19-4 ランプ館（新奥浜市）

先日のテロリストの襲撃で、ヨット部の部室が破壊されたため、ヨット部のメンバーは、今日はランプ館に集まってお茶をしている。

「あーあ、チアキちゃんも、茉莉香も、ウルスラも、サーシャも行ったわね。」

ハラマキが言った。

「どうなるんでしょうね。」

アイ・ホシミヤが言った。

「ニュースでは、戦争のことは何も言ってますね。」

ヤヨイが言った。

「それどころか、先日の、白鳳女学園がテロリストに襲撃された事件すら、何も報道がありませんね。」

生徒達のうわさ話では、『娘にキズがつく』とか言って、親たちがマスコミに圧力掛けて報道を握りつぶしたと言われてますが……。

白鳳女学院は、校長だけでなく、親たちもすごいんですね。」

ナタリアが言った。

「でも、いったい、私たちにどういう傷が付くというのかしら……ねえ。」

リリイが言った。

「ハハハ……。」

皆が一斉に笑い出した。

「まあ、軍としては、学校の地下の旧植民地連合軍司令部跡をマスコミに公開したくないのでしょね。」

それに、学校としても、生徒の中にテロリストの手引きをした者がいるという事実を隠したいんでしょうね。」

ナタリアが言った。

「そうですね。ジェシカのためにもそうして欲しいよね。」

一年生達が声を合わせて行った。

「そう言えば、ジェシカはどうしてるかなあ。元気かなあ。」

ねえ、ヒルデ。ジェシカが今どうしているか、情報は無いの？」

リリイが聞いた。

「セレニティ軍筋の話では、郊外のステープル記念病院に入院しているらしいですよ。」

そのの、星系軍が嚴重に警戒している病棟に、隔離状態で入院しているらしいです。

彼女は、事件直後から、相当なショックを受けて、口をきかなくなっていたそうですね。

いまでも、軍や警察の取り調べの時だけでなく、医者や看護師とも口をきかないそうですね。すでに、爆発物を取り出す手術は終わり、放射線障害の治療も、順調に進んでいるらしいですね。

軍関係の情報では、洗脳が解けないと言われているそうです。」

ヒルデが言った。

「そうなのよね。口をきかなかったのよね。心配だなあ。」

リリイが言った

「先輩達は事件の当事者ですからね。」

先輩達に対する気持ちの整理が付かないんでしょうね……。

そうだ。ヒルデ、あなたと私たち一年生でお見舞いに行きませんか。」

一年生のヨット部員達が言い出した。

「でも、面会の許可が下りるでしょうか。」

「そこは何とか、みんなの親のコネで……ね！」

「そうそう、コネは使わなくっちゃ。」

「それに、ヒルデ。貴方が一緒ならば、彼女も心を開くかも知れないわよ。」

なんととっても、貴方は彼女のプリンセスなのだから……。

それに、私たちも、ジェシカと一緒に中等部時代にヒューゴ杯で優勝したメンバーなんですからね。」

「そうですわねえ。」

優勝したときのジェシカさんの言葉、いまでも覚えておりますよ。

『生まれてきた良かった。うれしい。』って、おっしゃってましたね。」

ヒルデもそう言って微笑んだ。

「そうそう、あの時の笑顔は本物だったよ。」

「よし。では、プリンセスと我ら一年生でお見舞いに行こう。」

「賛成!!」

19—5 海明星ステープル記念病院（海明星・たう星系）

新奥浜市の郊外にあるこのステープル記念病院も、歴代ステープル家の寄付で建てられたものである。

街の中にある総合病院と違い、ここは高度かつ専門の治療を行う病院である。だから、ここには、長期療養を要する難病や大ケガの患者や、伝染病患者等の隔離病棟で治療を要する患者が入院している。

この病院に、ジェシカも含め、白鳳女学院を襲ったテロリスト達が入院している。病院の周囲は、今も、軍による警戒が続いている。

ある日の午後、白鳳女学院のヨット部一年生達とヒルデは、面会に訪れた。面会には、キャサリン小隊長始め、セレニティ軍の警備隊も同行した。

「なんか、すごい病院。警戒が厳しいね。」

「そんなところに、良く面会の許可が下りたね。」

「治療も手詰まりなので、良い刺激になるかもしれないと許可が下りたそうですわ。」

「そうだといいいね。」

看護師の案内で、一行はジェシカがいる病棟へ向かった。

ところが、ジェシカの病室に、彼女はいなかった。

看護師が周辺の病院関係者に聞くと、談話室で他の患者と話しているというので、一行は、談話室へ向かった。

「え！ 話しているですって……」

良かった。話せるようになったんだ。彼女、今まで誰とも口をきかなかったんでしよう。

本当に良かったね。

でも、他の患者ってだれでしょうね。」

「そうですね。だれでしょう。」

一行が談話室に行くと、白鳳女学院の制服を着たジェシカが、入院患者用の服を着た大勢の男女の若者達に囲まれて、楽しそうに話していた。

「ジェシカ様、私たちはこれからどうしたら良いんでしょうか。」

「大丈夫。私が着いているわよ。少しずつこの星の暮らしを学びましょう。」

「今日の2回目の食事が出された、黒い丸いモノは肉でしょうか。柔らかでとても美味しいものでした。」

その横の小さい器に入った黄色い甘い物は、とても良い香りがして甘かったです。

あのような美味しい物は、初めてです。



まるで王族のような食べ物ですね。」

「黒い丸いモノは、ハンバーグという料理よ。肉をひいて食べやすくしたものよ。黄色いモノは、桜桃という果物よ。缶詰だけどね。生の果物は、もつと美味しいわよ。」

これらの食べ物、この世界では誰でも食べるものですよ。これからも毎日3回、いろいろと美味しいものが食べられますよ。楽しみにしていなさい。」

ジェシカが説明している。

「食事が一日3回もあるなんて、いまだに信じられません。」

しかも、チューブに入っていないなんて……」

白凰女学院のヨット部一年生達は、談話屋の入り口付近に立ち止まって、ジェシカが優しそうに話している様子を眺めていた。

どうやら、ジェシカを囲んでいる若者達は、テロリストとして逮捕され、治療のために入院しているマンチュリア人の若者のようだった。

ヨット部員達に近づいてきた医者、ジェシカが話し始めた訳を話してくれた。

「昨日、女性看護師が、彼女に白凰女学院の制服を着せてあげたのですよ。彼女がいつもの入院服ばかり着ているのとはかわいそうと言って、皆さんの着ているようにね。」

そして、彼女が制服を着て病院の中を歩いていると、マチュリア人の青年達が彼女を取り囲んで話し始めたんですよ。彼らもここに来て始めて言葉を交わし始めたんですよ。」

す。」

「あ、白凰女学院でもそうだったと聞きました。彼らはジェシカに憧れのような気持ちを持って、言葉を話していたそうです。」

メリー・ランバートが言った。

「本当ですか。それは興味深いですね。その時、ジェシカさんは制服を着ていましたよね。」

「そうです。」

ただし、その時は、彼らはマンチュリア語を話していたそうです。今のように銀河標準語を話していませんでした。」

メリーが答えた。

「なるほど、そうですか。」

マンチュリア人の青年達は、それまで、入院服を着ているジェシカには何度もあつているのに全く反応しなかったのですが、制服を着たジェシカには憧れのような気持ちを抱いて、話し始めたんです。」

「どういうわけでしょうか。」

「まだ、分かりません。その時だけ、洗脳が解けたのか、制服を着たジェシカさんに従うようにプログラムされていたのか、まだ分かりません。」

「そして、今は、ジェシカも話し始めていますよね。」

「そうなんです。昨日、ジェシカさんもマチュリア人の青年達に答えて、話し始めたんです。ジェシカさんも、ここに来て始めて、言葉を発し始めたんです。」

でも、ジェシカもマチュリア人の青年達も、自分達同士で話し始めたばかりなのですから。医者や看護師には、まだ口をきいてくれません。

でも、希望が出てきましたね。」

「そうなんですか。私たちが話しかけても大丈夫でしょうか？」

「やってみて下さい。このような治療には、試行錯誤は必要かつ不可欠です。」

それから、お見舞いの様子は総て録画されますから、ご承知おき下さい。」

笑顔でそう答えると、医師は、ヒルデに付き添ってきたキャサリン達の警備隊を見ながら、緊張した表情をして言った。

「ただし、警備の皆さんは警戒を怠らないで下さい。」

この青年達の洗脳プログラムはどういうものか、まだ分からないんです。

例えば、現地工作員として潜入するために現地の生活を学び、その国民になりますことも、予め与えられた任務の一つと考えれば、今までの行動は説明できますからね。」

キャサリン小隊長がいつものように無言で頷いた。

「ジェシカ、お見舞いに来たよ。ヒルデも来てくれたよ。」

一年生達が、他の青年達に囲まれて座っているジェシカに、元気に声を掛けた。

「あ・・・、ヒルデ様も・・・。」

ジェシカは、うれしいうな、悲しいうな複雑な表情をした。

「心配しましたよ。元気で何よりです。」

ヒルデはそう言つて歩み寄り、ジェシカの手を握った。

「ヒルデ様・・・」

ヒルデは、そう言つて涙ぐみ始めたジェシカをしつかりと抱きしめた。

それを見て、他の部員達もジェシカのもとに集まつて、彼女に抱きついたり、手を握つたりして、口々に言つた。

「よかつたあ。ジェシカ！心配したよ。」

「私たち、ヨット部部員なんだよ。」

同じ空を飛んだ仲間なんだからね。」

「また、デインギーで空を、宇宙を飛ばうね。」

「中等部でのヒューゴ杯の優勝に続いて、高等部ではネビュラ杯で優勝するのが私たちの目標だよね。」

「そういつて誓い合つたよね。」

「来年、オデットⅡ世号の船長は、ジェシカだつて私たち決めてたよね。」

「オデットII世号で、いつしよに練習航海に行こうね。」

部員達はそう言いつつも、次第に、皆、泣きだして言葉にならなくなった。

マンチュリア人の青年達は、そう言うヨット部員とジェシカの様子を呆然と眺めていた。

やがて、ひとりの少女が決意した様子で口を開いた。

「私も、訓練でスペース・ディングーに乗ったことがある……。」

それを聞いたヨット部員達は驚いた。

「ええ!? どんな機種なの、一人乗り?二人乗り?」

「二人乗り。」

会話が成立した。

驚いた部員達が口々に質問し、あちこちの男女から答えが返ってくる。

「地上何キロくらいから降りるの?」

「目的地は何キロくらい先なの?」

「地上50キロくらい。目標は5000キロ先。」

「レース、つまり競争するの?」

「訓練は、いつも競争。遅れると、食事抜きのパナルシ。でも、一番になると沢山食べられる。」

「どんな操縦するの。推進剤は何キロくらい積んで飛ぶの?」

「推進剤は使わない。舵だけで降りる。」

「ええ〜！ スゴイ、上手。」

.....

やがて、マンチュリア人の青年達からの質問が出た。

「ヒューゴ杯って、何ですか？」

「オデットⅡ世号って、何ですか？」

.....

スペース・デインギーのお陰で、彼らが遂に口を開いた。

19—6 帝国軍新型戦艦ベンケイ号ブリッジ（海明星衛星軌道）

「本当に、マンチュリア軍は海明星を攻撃してくるのでしょうか。」

「来る。必ず来る。」

先日、ローズアロー2号はわざわざ地上まで降りて、第二王女殿下を乗せて飛び立った。当然、ヤツラの現地作業員は、それを報告しており、帝国は警戒を緩めると思わな  
ずだ。

その『スキ』を、ヤツラは必ず狙ってくる。

加えて、我々も、ヤツラの攻撃を誘うために、駐留艦隊の存在を海明星行政府にも秘

密にしているのだからな。」

駐留軍の指揮官ミニッツ大佐は言った。

「今日で、テロ活動から一週間が経過します。周辺1000光年の空域には不審な船影は見られないようですが……。」

「重力トンネル航法で来るならば、ヤツラのM—8801星団から2万光年以上の距離をひとつ飛びだ。

油断するな。」

それから、今までの常識で判断するな。これから始まるのは、我々も未体験の、全く新しい宇宙戦争だぞ。」

われわれも弁天丸のクルーになったつもりで、大胆に行くぞ。」

「はい、海賊船に乗ったつもりで、こっちもやんちゃにいきます……。」

それから、数時間が経過した。

「あ、司令官。」

時空ナビは、海明星に近い砂赤星軌道上に、微弱な重力の乱れを検知しています。

時空トンネル開口部が出来つつあります。

トンネルの反対側は、二万三千光年の彼方と推定されます。

マンチュリア軍に間違いありません。」

「よし、全艦、戦闘態勢。

作戦どおりに、こちらも時空トンネルを形成して、敵の形成した亜空間に乗り込むんだ。」

帝国軍の新型戦艦三隻は、それぞれ独自の時空トンネルを形成して、亜空間に消えた。「亜空間に入ったな。」

よし、第二段階だ。時空ナビで重力波の乱れを探查しろ。索敵をするんだ。」

「重力波の乱れを発見。四つの物体が近づいてきます。」

一つは極端に大きいです。たぶん岩石で出来た自然天体です。エネルギー反応がありません。」

他の三つは小さいながら、エネルギー反応があります。これらは三隻の宇宙船と思われませんが、重力波が出ているのは、最後尾の一隻『チャーリー』（仮称)だけです。」

「敵の重力推進機関は、ひとつだけか。」

事前の情報が正しければ、彼らは、転換炉のオーバーヒートを覚悟した使い捨て方式の重力推進機関を使うはずだ。」

だから、かれらの小惑星弾による攻撃は、やり直しのきかない一発勝負だ。海明星から出来るだけ離れた、通常空間に撃ち出して、狙いを外せばよいのだ。」

よし、作戦通り、各艦の戦闘爆撃機を発進させろ。第一目標は、最後尾の一隻のみ。あ



の船が持つ対空砲火とメインのビーム砲塔を攻撃しろ。

さあ、亜空間の空中戦だぞ。」

各戦艦から三機づつ、ウルスラを加えて十機の戦闘爆撃機の編隊が、敵の三番艦チャリーに襲いかかった。

敵は亜空間の戦闘、それもタッチダウン間近のタイミングで襲われたため、全く無警戒だった。このため、第一波攻撃で、敵の三番艦チャリーのほぼすべての対空砲火と主砲の一部が破損した。

更に、タッチアンドゴーで、敵の反撃を交わして通常空間へ消え、また別の角度から第二派攻撃を掛けてきた。第二派攻撃の対象は、一番艦アルファ、二番艦ブラウンだった。

攻撃が順調に成果を上げたので、ウルスラや他のパイロット達も余裕が生まれてきた。

タッチアンドゴーの攻撃を継続しつつ、敵艦を観察して、話し始めた。

「敵の対空砲火の角度やパターンが、帝国軍の船と同じですね。」

これって、全宇宙共通の方式なのかなあ。」

ウルスラが言った。

「そうか、言われてみて、わかったぞ。」

この船、帝国軍の旧式戦艦、ビスマルク型ですよ。

近づいて光学映像で見れば、ハッキリ分かります。」

「あ、本当だ。50年以上も前に退役した旧式艦だ。」

敵はいつたい何処でこの船を手に入れたんだろう。」

「そんなに古い船なの。私の生まれる前じゃないの。」

「ウルスラ・ブラウン総隊長がご存じないのも無理ありませんね。ハハハ・・・。」

「でも、それを言うならば、皆さんだって生まれてないはずでしょ、50年前なら。」

「そう言えば、そうですね。参った、一本取られましたね・・・ハハハ。」

「それに、まだ私はウルスラ・アブラモフであつて、ブラウンじゃありませんよ。」

「そう言われるのは、とても嬉しいんですが、もう、からかわないで下さいよ、ウフフ」

「おい、みんな。見ろよ。」

敵艦にはあちこちに大きな修理の跡があつて、機体がツギハギだらけだぜ。

「これで、よく二万三千光年も飛んできたなあ。」

「確かに外見はボロボロですねえ。」

海明星の中古宇宙船業者でも、こんなモノは売りませんよねえ。」

「総隊長、軍艦の売買は禁止です。」

「そうですかあ。では、帝国軍が演習の標的として砲撃でボコボコにして、演習場に捨て

た機体の残骸を拾ってきて、自分で直したものでしょうか。」

「総隊長、いくらなんでも、そんな、ゴミを拾ってきて戦艦を作るようなことは、出来ませんよ……はははは」

ウルスラは、十機編隊の総隊長だった。

実力優先のパイロット達の間では、この人事は当たり前だった。戦場では、上手なパイロットが先陣を切って活路を切り開くことが、皆が生き残るための基本だった。

今回の実戦でも、ウルスラは、敵の対空砲火のパターンを観察して、敵の軍艦の正体が帝国軍の旧式軍艦だという重要な発見のきっかけをつくっている。

明るい性格のウルスラは、隊員達の気持ちをリラクセスさせ、戦いを良い方向に向かわせていた。

「よし。戦闘爆撃機は一旦、帰艦せよ。

強襲艦は、『チャーリー』に予定通り突進せよ。

一番艦アルファ、二番艦ブラウンには、戦艦ムサシと戦艦ヤギュウから砲撃を開始せよ。」

帝国軍は出来るだけ敵艦を生け捕りにする作戦だった。そのため、強襲艦を送り込んで白兵戦で三番艦チャーリーを、まず生け捕りにする作戦だった。

「三番艦チャーリーが発生する重力波のパワーが落ちてきました。タツチダウンに備え

ています。」

「よし、そうはさせないぞ。勝負だ。」

こちらの重力推進機関の出力を上げて、こちら側の時空トンネルの影響力を増せ。小惑星ともども、こちらのコントロール下に置くのだ。

そして、時空トンネルを分岐させて、こちら側の指定する出口に誘導しろ。」

「了解。」

「戦闘爆撃機隊が全機、帰艦しました。全機、損傷ありません。」

「よし。」

亜空間では、激しい重力波のぶつかり合いで重力波の異常振動が続いていた。

しかし、次第に帝国軍側の重力波パワーが、敵の重力波パワーを圧倒し始めた。

「敵の重力推進機関のパワーが急激に落ちていきます。」

これで、敵艦隊は、こちらのコントロール下に入ります。

.....

まもなく、小惑星と敵船は、通常空間に復帰します。出口は、当方の予定地点、たう星系の縞白星（しまのしろぼし）周辺です。」

「よし、小惑星の運動ベクトルを縞白星に向ける。」

続いて、当艦隊も通常空間へ復帰する。」

小惑星と敵船、そして帝国軍の艦隊が、縞白星周辺の通常空間に復帰した。

「手を緩めるな。一番艦アルファ、二番艦ブラウンへの砲撃を開始する。主砲一斉射撃。小惑星に向けて、重力波砲の発射準備せよ。」

各艦の戦闘爆撃機隊、強襲艦、発進準備せよ。

三番艦チャーリーに突入した白兵戦部隊から報告はあったか？」

ミニッツ大佐は、矢継ぎ早に指示を出した。

「報告はまだです。今、連絡を取っています。」

「重力波砲の発射準備は完了です。」

ですが、司令官。小惑星は、縞白星に落下する軌道を進んでいます。このままで進むと、あと5時間後に衝突します。重力波砲を発射しますか？」

「発射中止だ。ただし、小惑星の軌道の観測は、怠るな。」

では、一番艦アルファ、二番艦ブラウンの制圧を優先する。

戦闘爆撃機隊、強襲艦はただちに発進だ。」

「電子戦班、敵艦への電子戦の進み具合はどうだ？」

「それが思わしくありません。」

どうも、敵の船は、メインコンピュータで船の機能を集中制御する方式ではないようです。制御しているのは通信だけのようです。

他の機能は、別々のコンピュータで分散処理、悪く言うと雑多な機種のツギハギなものではないでしょうか。」

「それじゃ、生け捕りにするには、白兵戦で制圧しないとダメか。」

死傷者が多く出るかも知れないなあ。」

「そこで進言なんですが・・・。」

「何だ、言ってみろ。」

「あのう・・・アブラモフ少尉の持ち込んだ、例の映像を試してみませんか。」

どうせ電子戦では、通信しか制圧できないんです。

従って、今の段階で出来ることは、このくらいですから・・・。」

「あのセレニティのお姫様が作らせたという映像か。」

本当に、マンチュリア兵の戦意を奪って抵抗を止めさせる効き目があるんだろうか。

まあいい。やってみろ。

この戦いは、新しいことは何でもアリの実験場だからな。」

ミニッツ大佐は、簡単に了解した。以前の彼なら、考えられないことである。

茉莉香に演習で負けて、ウルスラの実力を見せつけられた彼は、新たな「女子高生パ

ワー」を試そうという気になっていた。

もつともヒルデ姫が、高校生ではなく中学生だと言うことは知らなかったが。

19—7 マンチュリア軍三番艦（仮称チャーリー号）ブリッジ（縞白星の衛星軌道）マンチュリア軍三番艦では、すでに、帝国軍の白兵戦部隊が艦内に侵入していた。

しかしマンチュリア軍はこれに対抗する白兵戦部隊を搭乗させておらず、隔壁閉鎖を行い、ブリッジへの侵入を防ぐという形で抵抗していた。しかし、既に隔壁は次々破られ、残る最後の隔壁も破られようとしていた。

しかし、ブリッジの指揮官には焦燥感が感じられなかった。

「タッチダウン地点がずれるという想定外の事態が発生した。本国の指示を仰ごう。」  
「通信が繋がりません。電子戦で制圧されているようです。」

「……。」

「あつ、通信が回復しました。」

今、通信が流れます。画像が出ます。」

ブリッジの画像には、白鳳女学院の制服を着たジェシカ・ブルボンが現れて、ブリッジのクルーに語りかけた。

「マンチュリアの同志の皆さん。私は海明星駐在工作員のジェシカ・ブルボンです。」

想定外の事態が発生したため、私が指揮を執ります。」

この言葉を聞いて、ブリッジのマンチュリア軍人たちが一斉に立ち上がって、敬礼し

た。

皆、誰も何も言わず、立ち尽くしていた。

「皆さんには、降伏を命じます。」

降伏とは次の行動を取ることです。

第一に、自爆する必要はありません。生き続けることを命じます。

第二に、ただちに戦闘を停止して、帝国軍の武装解除に応じて、指示された場所に移動して下さい。また、体内の起爆装置を解除して下さい。

第三に、次に私の指示があるまで、帝国軍の指示に従い捕虜として生活して下さい。

第四に、帝国軍の捕虜の待遇は、行動が制約されますが、帝国の一般国民と同じように扱われます。帝国の一般国民の日常生活は、マンチュリアの王族のように豪華ですが、驚くことはありません。

以上で、命令を終わります。ただちに実行して下さい。」

その言葉を聞き終わると、マンチュリア軍三番艦は、降伏した。

続いて、一番艦、二番艦も降伏した。

ミニッツ大佐は、予想外の展開に驚いたが、すぐに予定の行動を始めた。彼は、三艦を占領し、マンチュリア軍の実情を調査することを命じた。

敵の三艦を撃沈せず、わざわざ生け捕りにしたのは、そのためだった。やってきた敵



船を全部捕獲できたことは、彼にとって大戦果だった。

駐留艦隊は、捕虜を尋問すると共に、連れてきたエンジニアを派遣して三艦の実情を軍事技術的に調査し始めた。

その最中、海明星を狙って砲弾として打ち込まれたものの、帝国軍によつて狙いを外された小惑星が、予測通りの時間に縞白星に衝突した。

小惑星は直径が一キロくらいの大きな物体ではあるが、巨大な外惑星である縞白星にこれが衝突しても天文学的には影響は無い。

しかし、衝突によつて発生した巨大な火球は、激しいせん光を放ち、海明星や中継ステーションからも観察された。

これを受けて、銀河帝国は、M-8801星雲の「マンチュリア残党」により、海明星が重力兵器で攻撃され、帝国軍がこれを防いだことを公表した。敵の戦艦三隻を捕獲したことは公表されなかった。

そして、これを報じるニュースは、大反響を巻き起こした。

もし、これが海明星に打ち込まれていたら、爆風や発生した津波により海明星の人々は全滅の恐れがあったからだ。

さらに、これが自分の住んでいる星だったらと、帝国内の星々へと恐怖は伝染していく。

マスコミでは、帝国の主要星系の防衛強化が叫ばれた。

また、マンチュリア残党の懲罰や、M—8801星雲への先制攻撃を叫ぶ世論もわき上がった。

このような世論の動向を受けて、銀河帝国は、帝都から六万三千光年離れたM—8801星団への遠征計画を公表した。遠征軍は、帝国の各艦隊からの選抜メンバーで構成され、女王自らが総指揮官となることが公表された。

また、帝国は、情報戦にも勝利することを狙って、遠征には帝国や主要な自治国家のマスコミの取材陣が同行することも公表された。

19—8 グランドマザーのブリッジ（たう星系外延部）

いよいよ、M—8801星団への遠征に出発する日が迫ってきた。

M—8801星団までは、辺境の海明星からでも二万光年を超える長距離飛行である。このため、すでに弁天丸やローズアロー2号は、たう星系外延部まで出迎えに現れたグランドマザーの船内に収容されている。グランドマザーに乗って長距離の跳躍を行うためだ。

弁天丸船長加藤茉莉香と、銀河聖王家第二王女としてこの遠征の副司令官に任命されたチアキの二人は、機動空母グランドマザーのブリッジで、今後の作戦行動について、参謀本部の将校から説明を受けた。

説明を聞いた後、二人は、グリューエルとサーシャを加えて、ブリッジ貴賓席の奥にあるテーブルでお茶を飲みながら、今後の遠征について話し始めた。

お互いに、聞きたいこと、話したいことがたくさんあったからだ。

「茉莉香さん、今回の遠征には、重力兵器が使用されるのでしょうか。」

公爵様の反乱の時には、その使用は抑制されていましたが、今回の戦いでは、ついに……。」

サーシャが心配そうな顔で言った。

「ちがうよ、サーシャ。安心してね。」

今回はたぶん重力兵器は使わずに済むだろうって。

それに、帝国軍の側からは、重力兵器による先制攻撃はしない方針だそうだよ。」

茉莉香が言った。

「本当ですか。」

「そうだよ。」

例の奴隷商人の捜査で、すでに数千隻の軍艦が銀河系からヒガン星団まで展開しているでしょう。その捜査の包囲網の先端が、徐々にM—8801星団に迫っているのださうよ。

帝国軍としては、その包囲網の先端に増援部隊を送る形で、M—8801星団に攻め

込むそうよ。」

「では、通常の宇宙艦隊による作戦行動になるのですね。」

海明星が重力兵器による攻撃を受けたと聞きましたので、てつきりその報復攻撃になるのかと思っていました。」

グリユーエルが言った。

「海明星への攻撃は、駐留艦隊がうまく防いでくれたからね。」

その時に捕獲した敵の兵隊や戦艦を調べて、敵が保有している重力制御推進機関は、数が限られるので、重力兵器による帝国の星々への追加攻撃はないと判断したそうよ。」

チアキが言った。

「よかったですね。さすが、帝国の新戦艦は強いですね。」

グリユーエルが言った。

「敵が弱かっただけよ。」

ウルスラによると、現れた敵の戦艦があまりにボロボロの、ツギハギだらけなので『ごみを拾い集めて作ったのか』って冗談を言っていたら、本当にそのとおりだって。

これじゃ、怖くないよって、ウルスラも言っていたわ。」

チアキはそう言いながら、少し機嫌が悪そうだった。

「どうしたの？ チアキちゃん？」

茉莉香が聞いた。

「だって、ウルスラがそう言ってきたときに、アイツ、何をしていたと思う?」

チアキが聞いた。

「彼氏といっしょだったとか・・・。」

グリユーエルが答えた。

「ええ!?! それ本当?」

茉莉香が目をぱちくりさせて、驚いている。

「その通りよ。」

しかも、アイツ、海明星駐留軍の祝勝会で大騒ぎしている真最中に、電話してきたの

よ。」

チアキが言った。

「ええ!?! どうしたの?」

茉莉香が言った。

「なにか、よほど嬉しいことがあったのですよね?」

「グリユーエルさん、鋭いわね。私もそう思うわ。」

サーシャが言った。

「その通りよ。」

指輪をもらったと言って、左手の薬指を見せて、大喜びしていたわ。

しかも、『チアキちゃんはまだもらってないの？』って、聞いてきたわよ。

まったく、もう……。」

「まあ。おめでたいことですね。」

グリユーエルが言った。

「チアキちゃんも、欲しければ、早くもらえばいいじゃないの。」

茉莉香が言った。

「何を言うのよ。茉莉香。」

私はそんなもの欲しくないし、そもそも、相手がないわよ。」

チアキは、ツンとして、横を向いてしまった。

「あ……。話題を元に戻して……よろしいでしょうか……。」

チアキの機嫌がますます悪くなったので、茉莉香が、恐る恐る言った。

「そうね。私の話も聞いてほしいの。」

今、マスコミで厳しく非難されている奴隷売買のことだけど、クローン人間が生まれるようになった元々の事情を分かってほしいのです。一族の名誉のためにね。」

サーシャが言った。

「ということは、クローン人間も、宇宙移民の厳しい現実に対応するために、生まれてき

たのですか。」

グリユーエルが聞いた。

「そうよ。」

まず、マンチュリアの人たちが、移民船一隻分、つまりたつた数千人以上になった人口を少しでも早く元の16億人に戻そうと、クローン人間づくりを始めたのです。」

サーシヤが言った。

「でも、報道では、昔は宇宙マフィア全体が関与していたと言われてましたね。」

「そうよ。」

だって、茉莉香さん、辺境の厳しい宇宙環境の中で、一族が、資源開発を行いながら、安住の地を求める旅を続けていくために、一番貴重なもの、大切なものは何だと思いますか?」

「えーと、エネルギーかなあ、いや、食料かなあ。．．．」

「それも必要です。でも、それだけでは足りません。」

一族にとって、一番大切なものは、子供です。

子供がいなければ、移民に未来はありませんからね。」

「それはそうね。」

でも、船の中でも、子供が生まれるでしょう。それで足りないの?」

逆に、人口が増えすぎても困るでしょ。」

チアキが言った。

「ウフフ……。チアキさん、

サーシャさんは、そんなことを言っているんじゃないよ。」

グリューエルが微笑んだ。

「フフフ……。少し遠まわしに言い過ぎたかしら。」

要するに、男女の出会いが無くて、パートナーとなる人がいないことが問題なのよ。

特に、危険な資源開発にかかわる人とか、非合法活動にかかわる人と結婚しようと思  
う人は少ないわ。

でもそれを放置すると、みんなのためにそういう厳しい仕事をする人がいなくなるで  
しょう。」

「う〜〜ん。」

事情は分かるけど、それをクローン人間で補おうと言うのは、なんかイケナイことを  
やっている気分は残るなあ。」

茉莉香がうなった。

「そうね。」

何十億人もいる星では、社会全体の中で、そこところは自然にうまくいっているよ



うな気がするけど、その結果として、一人ぼっちのままの人は残るし、更に、貧富の差とか、差別とかが生まれるでしょ。

一族は、一人一人の幸せに、真剣に向き合ったのよ。」

サーシャが言った。

「うーん。それを言われるとねえ。確かにねえ、一人ぼっちじゃねえ……。」

「それに、パートナーが欲しいというのは、当人たちの願いだけでなく、親たちの強い願いでもあるのですよ。」

『うちの子に、お婿さんやお嫁さんを授けてほしい』ってね。

『そのためなら、お金だけでなく、自分の細胞や子宮までもクローン製造のために提供してもいい』

とまで言った母親もあるそうですよ。」

「当人や家族たちにとっては、切実な問題ですからね。」

「でも、クローンの人の側から見ると、結婚相手を自分の意志で選べないわけだよね。」

あのね、お母さんが海明星において私を生んで育てたのも、私に自分の人生を自分で選べるようにしてやりたいっていう願いもあつたって聞いたんだ。」

茉莉香が言った。

「そうね。あなたのお母さん、ブラスタ―梨理香は、弁天丸から降りればそれが実現でき

るから、船を降りたのでしよう。」

チアキが言った。

「そこなんですよ。」

どうしても宇宙船を降りられない人々はどうか、という問題は残るんです。

そういう人たちの希望を叶えるには、見目麗しくて、性格が温和で従順かつ忍耐強い、マンチュリアのクローン人間は最高のパートナーだったのです。」

サーシャが、少し悲しそうな表情で話を続けた。

「だから、一族は、兵器としてクローン人間を生み出したのではなく、人間として、自分たちのパートナーとして、生み出したのです。」

最初はそうだったんです。

そこのをわかって欲しかったのです。」

「でも、生み出したクローン人間を、『出荷』まで、古い移民船を利用してコールドスリープで眠らせておいたなんて、人をモノ扱いしてるわよ。虐待じゃないの。」

チアキが言った。

「それも仕方ないのですよ、チアキさん。」

オーダーメイドでは無理なのです。

オーダーメイドでやると、生まれたての赤ん坊が欲しい人は1年ほど待てばいいので

すが、年頃の男女が欲しい人は、短くても20年くらい待たねばなりませんからね。

だから、あらかじめ生み出して育てて、童話の『Sleeping Beauty（眠れる森の美女）』のように、眠らせて目覚めるべき時を待つてもらうしかないのです。」

「Sleeping Beauty かあ。」

まあ、それはそうね。20年も待つことはできないわね……。」

「そうですね。人間の成長スピードを自在にコントロールする技術は、現在でも実用化されていませんからね。」

でも、その難しいところを、移民船のコールドスリープ装置でカバーするなんて、よく思いつきましたね。」

グリュエールが言った。

「コールドスリープ装置は、古い移民船には当然のように備えられた施設でしたからね。」

そこにあるものを最大限に利用したのでしょうかね。」

「今までの話を聞くにつけても、最近のマンチュリアのやり方は、メチャクチャよね。」

クローン人間を兵器としたり、奴隷として売ったりして。」

彼らは、クローン人間をいっただい何だと、考えてるのかしら。」

茉莉香が言った。

「ねえ、サーシャ。」

クローン人間の供給って、それほど簡単に増やせるの？」  
チアキが聞いた。

「簡単ではないと思います。成人まで育てるのに時間が必要ですから。」

「では、最近、急に奴隷売買が多くなっていると言ふことは、手持ちの眠らせていたクローン人間を一斉に売り出していると言ふの？」

それじゃあ、まるで在庫一掃の『閉店セール』みたいじゃないの。

そんなこと、何のためにやっているの？」

チアキが言った。

「閉店セールだなんて・・・でも、マンチュリア人は、そんなにお金に困っているの？」

もしかして、帝国と戦争する軍事費を稼ぐためなの？」

茉莉香も言った。

「それは、私にもわかりません。」

サーシャは言った。

「ねえ、サーシャ。私にも教えてほしいことがあるのだけど。」

チアキが言った。

「母さんからあなたへの伝言で、名前の出ていた『グランマ』って誰なの。」

もしかして、あなたの本当のおばあさまなの？」

「ええそうです。」

レオニー二家で『グランマ』といえは、私の実の祖母、先々代の宇宙マフィアの大ボス、マリア・レオニー二のことです。

祖母はすでに引退して、今年で98歳になりますが、いまだに一族の人に慕われています。」

「それでね、私の聞きたいのは、母さんとグランマはどういう関係なのかってことよ。

もしかして、母さんは、グランマと古い知り合いなの？」

「・・・私は知りません。」

「うーん。言いにくいことを聞いてごめんなさいね、サーシャ。」

実は、母さんが、女王になるずっと前の、家出して女海賊だった時代に、どこで何をやっていたか、ほとんど謎なのよね。

しかも、その間に私たち姉妹が生まれたでしょう。

だから、その問題は私たちのルーツにも関係するかもしれないから、大切なことなのよ。わかってくださいいね。」

「わかりました。お役にたてなくて、すみません・・・」

「サーシャさん。」

チアキさんのルーツと言う話が出たので、私にも教えてください。

今のマンチュリア人は、銀河聖王家の青薔薇家のルーツが、マンチュリアの被支配階級の人々の子孫であるテオドラ皇后様にあるという事実を知っているのですか。

一般のマンチュリア人、特に被支配階級の人々は、このことは知らされていないのでしようね。」

グリュールエルが言った。

「知らされていないようです。」

捻じ曲げた歴史を教えているらしいわ。」

「はああ……ため息しか出ない話だねえ。」

でも、やっぱり、『宇宙では男女の出会いがない』のかなあ。

海賊の方も同じような事情らしいからねえ。

私のお母さんがお父さんと結婚した理由は、昔の弁天丸にはお父さんとお母さんしか子供がいなくて、小さいころから『大きくなったら、二人は夫婦になつて、弁天丸をつぐんだ』つて言われて育つたから、その時はそういうものかと思つてたと、言つていたなあ。」

茉莉香が独り言のようにつぶやいた。

「驚いたわね。」

美人海賊で有名だった『プラスタ梨理香』が、結婚相手をそんな理由で決めていた

なんてね。」

チアキが言った。

「あんな素敵な方でも、宇宙では運命の出会いが無かったのでしょうか。」

ロマンチックじゃありませんわ。」

グリユーエルも、驚いて言った。

「ホントねえ。営業で出歩くときに、ちよつかい出してくる男は、星の数ほどいたでしょうに……ウフフフ……」

チアキが、笑った。

「まあ、その辺は、私も詳しいことは……」

「……ん?!」

突然、茉莉香は、両手を腰に当てて立ち上がり、チアキとグリユーエルを指差して、毅然として言った。

「……というより、私のお母さんの話をネタにして盛り上がるのは、禁止です。」

「やっぱり、茉莉香さんって、怒っても可愛いですねえ。」

グリユーエルが微笑んだ。

## 第二十章 M—8801星団の包囲戦

20—1 ミルキイ・ウエイ中継ステーション（ブルック星系外延部）

ブルック星系外延部にあるミルキイ・ウエイ中継ステーションは、アンドロメダ航路への交通のかなめである。

今回の遠征は、銀河系各星系から時空トンネルを使って一気に超光速跳躍して、ブルック星系に集結し、さらにここからヒガン星団まで跳躍する計画である。

そもそも、この遠征のために、時空トンネルが先行して整備された。

なお、ヒガン星団へはサンズの暗黒星雲を迂回するため、一気に飛ばず、途中の中継地点で一旦時空トンネルを降りて、方向を変えて、さらにヒガン星団まで飛ぶ行程である。さらに、ヒガン星団からは、各艦隊ごとにM—8801星団を包囲する作戦領域へ個別に超光速跳躍する計画である。

遠征軍の数は5万隻と公表されている。

今も、銀河系各地から時空トンネルを通って、銀河帝国の大艦隊が続々とタッチダウンしている。

そして、到着した各艦隊は一旦隊列を整えて待機し、ミルキイ・ウエイ中継ステーション



ンの管制官の指示で、ヒガン星団への時空トンネル・ゲートへ進んでいく。

このほかにも、帝国軍への補給物資やヒガン共和国への援助物資を運ぶ民間船が続々到着している。こちらにも軍艦に負けないくらい多くの船が、タッチダウンして、また時空トンネルへ入っていく。

ミルキイ・ウエイ中継ステーションでは、銀河系各星系のマスコミがこの様子を中継している。

いまも、ひとりの女性ニュース・キャスターがカメラに向かって話している。

名前は、スージー・リットン。さわやかな美人で受け答えも賢く、老若男女を問わずフアンの多い人気者である。

「みなさん、こんばんは。

銀河テレビのスージー・リットンです。

私は今、ブルック星系にあるミルキイ・ウエイ中継ステーションにおります。

窓の外をごらんください。われらが銀河帝国の大艦隊です。

艦隊は、これから、奴隷売買を撲滅するためM—8801星団を包囲、占領する作戦に出動します。」

テレビの画面が、帝国の大艦隊を映し出す映像に切り替わった。

「宇宙船が、次々と七色の光を発して、時空トンネルからタッチダウンしてきます。」

そして、ここには膨大な数の宇宙船が停泊しています。きれいに並んでいる宇宙船には色鮮やかな航空灯が点滅して、ご覧のような壮大な光の行列を作っています。

そして、この大艦隊は、いまま続々と、ヒガン星団方面へ出発していきま

私、宇宙船がこんなに光り輝いて、こんなに美しいなんて、初めて知りました。」

やがて、ひととき大きな光を発する宇宙船が、タツチダウンしてきた。

「あちらををご覧ください。一段と大きな宇宙船がタツチダウンしてきました。周りの船と比べて、ずいぶん大きいですねえ。」

ハヤマ准将、あれがクーン・オブ・パイレーツ号ですか？」

「そうです。銀河帝国軍の旗艦・クイーン・オブ・パイレーツです。現在、女王陛下が乗っておられます。」

「銀河テレビをご覧のみなさん。今、ご覧のように、女王陛下がブルツク星系に到着されました。」

私、クイーン・オブ・パイレーツを始めてみましたが、その名の通り、頼もしい船ですねえ。これで、奴隷商人をぎやふんと言わせてほしいです。」

テレビは、キャスターのスージー・リットンと軍服姿のハヤマ准将を映し出した。

「最後にお知らせです。」

銀河テレビでは、この後9時から、『奴隷売買を撲滅する戦い』に関する特別番組をお

送りします。

この特別番組は、こちらのミツキー・ハマヤマ准将が艦長を務めておられます機動空母グランドマザーの艦内から、生中継でお送りします。」

テレビカメラは、ハマヤマ准将の姿をアップで写した。

『この女の人、すごくカッコイイ。』

何億人の視聴者がそう思ったことだろう。帝国軍もテレビにはタレント性のある将校を出して、勝負に出ている。これも戦いなものだから。

「グランドマザーの内部にテレビが入るのは初めてです。

『銀河系最大、最強の宇宙空母』といわれておりますグランドマザー、いったいどんな宇宙船でしょう。

それに、この船には、現在、我らがゴールドエンプリンセス、チアキ様と、キャプテン茉莉香が乗船されているそうです。

楽しみですねえ。

これでいったん中継を終わります。みなさん、この後の特別番組、見てくださいね。スージー・リットンがお伝えしました。」

銀河帝国は、今回の遠征では、マスコミの取材を大幅に認めている。それどころか、宇宙船に同行する従軍取材も認めている。戦争自体を報道させようと言うのだ。どれも

これも、帝国の主張を国民に伝えさせるためだ。

これに対して、マスコミは帝国の思惑に乗せられているふりをしながら、虎視眈々とチャンスをねらっている。

例えば、銀河テレビでは、今回の遠征でグランドマザーに同行して放送するテレビ番組では、生放送を言い訳にして、検閲を受けない突撃取材をたくらんでいるのだった。

狙いは、もちろん、チアキと茉莉香。この二人が出演すれば、高視聴率は間違いなしと考えて、キャスターが行う特別番組の宣伝にもわざわざ二人の名前を挙げさせた。

## 20—2 機動空母グランドマザーの艦内（ブルック星系外延部）

グランドマザーのブリッジでは、銀河テレビのスタッフが、間もなく始まる特別番組の放送開始に備えて忙しく動きまわっていた。

一方、ハヤマ艦長やクルーは自分の席に座り、帝国軍の制服を着たチアキも貴賓席の玉座に座っていたが、同じく帝国軍の軍服姿の茉莉香だけは落ち着かない様子で貴賓席の中を歩き回っていた。

「う～～～ん。

う～～～ん。

ねえ～～、グリュール。こっちへおいでよ。」

「いけませんわ、加藤大佐。私たちは帝国軍人ではありませんから。」

わざと他人行儀なことを言って微笑むグリューエルとサーシャは、テレビ局の用意した見物席の椅子に座り、飲み物を飲みながら、楽しそうに番組の収録準備を見守っている。しかも、テレビ局は、二人に黒と黄色の縞模様をついたパラッチ対策用メガネまで用意して、テレビに姿が映らないように気を使っている。

茉莉香は、グリューエルとサーシャも含めた、四人で出演するとばかり思っていたのだが、テレビ局と打ち合わせて、チアキと茉莉香だけが出演することを知った。

その結果、玉座に座るチアキはともかく、茉莉香は、貴賓席の中に自分だけが取り残されて落ち着かない気分だったのだ。

「加藤大佐、動物園の熊みたいに、歩き回ってないで、座って下さい。」

もうすぐ、放送開始です。」

テレビ局のディレクターが言った。

『フフフ……テレビの前で緊張しちゃって。』

有名な海賊船の船長といっても、やっぱりただの高校生なのね。

でも、その方が扱いやすいわ。』

キャスターのスージー・リットンは、加藤茉莉香を値踏みしていた。

「あ、あ、あ、はい。わかりました。」

茉莉香は、あわてて貴賓席から降りて、ブリッジに向かおうとした。

「ダメよ。茉莉香は、ここよ。」

チアキが、自分の隣の席を指差した。

「ええ!? チアキちゃん、そこは將軍さんとか、もつと偉い人の席だよ。」

「何、言ってるの、私一人にしないでよ。」

それに、『ちゃん』じゃない。

放送中に絶対に『チアキちゃん』なんて言わないでね。」

「わかってるつてえ。わかってます。」

茉莉香は、いつものように答えた。

「間もなく、放送開始です。」

カウントダウンが始まった。

「みなさん、こんばんは。銀河テレビのスージー・リットンです。」

ただいまから、特別番組『奴隷売買を撲滅する戦い』をお送りします。

私は今、ブルック星系に停泊している銀河帝国軍の機動空母グランドマザーのブリッ

ジにあります。

皆さん、ご覧下さい。この電子装置のずらつと並んだブリッジ、すごいですねえ。

こちらには、ハヤマ艦長の席があります。

艦長、よろしく願します。」

キャスターのあいさつに応えて、ハヤマ艦長がさつと敬礼した。やっぱり、彼女のこういう仕草は絵になる。

「さらに、その一段上の貴賓席には、チアキ殿下がいらつしやいます。

殿下、今回の遠征では、副司令官の重任、ありがとうございます」

チアキが、お姫様らしく、肯くように少し首を傾けてあいさつした。

チアキは、テレビの前では完璧に猫をかぶるつもりでいる。

「その隣には、帝国軍大佐、兼有名なアイドル海賊、加藤茉莉香さんが控えておられます。さあ、ちよつとインタビューしてみましよう。」

そういうと、キャスターのスージーは、最初から狙いをつけていた茉莉香に近づいてきた。

「加藤大佐、今のご感想はいかがですか？」

「はい。楽しみです。たとえば、ヒガンってどんな星なのか、想像するだけでも、わくわくします。」

それから、茉莉香って呼んでください。」

笑顔でこう話す茉莉香は、先ほどまでの落ち着きの無さを全く感じさせず、堂々としていた。そして、笑顔にも輝くような華やかなオーラがあふれていた。

テレビは、そういう茉莉香の笑顔をアップで写した。

その画面の向こうで、『ああ、茉莉香様くくく』とか、叫んでいるファンが、きつと何百万人もいるだろう。

女性キャスターは茉莉香のオーラに圧倒されて、茉莉香を『ただの女子高生』と見くびっていたことを反省しつつ、負けるものかと、少し意地悪く突っ込んできた。

「茉莉香さんは、どうして、この遠征が楽しみなんですか。」

帝国軍は、これから戦争に行くんですよねえ……。」

「スージーさん。この遠征は、戦争じゃありませんよ。奴隷として売られた人たちを救い出して、奴隷商人の元締めを捕まえに行くのです。」

これは、犯罪者の取り締まり、つまり警察のお手伝いをするお仕事です。」

「そそ……、そうでしたね。」

キャスターは、たじろいだ。

茉莉香が、帝国軍が言い出したこの遠征の『建前』を、自分の言葉でサラッとわかりやすく語ったからだ。

このため、茉莉香をいじるつもりが、かえって

『キャプテン茉莉香は、なかなか賢いなあ。』

と視聴者に思わせてしまった。



もちろん帝国軍は、茉莉香の登場で情報戦に幸先の良いスタートを切った。

「そして、私が楽しみにしているのは、お仕事の合間に見える宇宙の星々の姿です。

銀河系から一万年も離れると、銀河の星々はどのような姿を見せてくれるんでしょうね。それが、楽しみです。」

「なるほど。」

「私ねえ、辺境で育ったでしょ。だから、銀河の中心から宇宙を見たことがなかったんです。

それでねえ、帝都のレッドクリスタル星系に初めて行って、チアキちゃんと一緒に、『銀河のネットワークス』と呼ばれる壮大な星空を見た時、とても感動したんです。

『私たち、ついに銀河の中心に来たなあ』ってね。」

「その気持ち分かりますよ。」

銀河のネットワークスと呼ばれる銀河系中心部の星空は、帝都に住む人々の誇りですからね。」

「そうですね。だから、今度の航海も期待しています。

だって、ヒガン星団までの航路は、250万年もあるアンドロメダ航路への入口なんですよ。」

この先のアンドロメダ航路では、銀河はどう見えるんでしょうかねえ。

どんな星々がみられるのでしょうかね。

さらに、アンドロメダ銀河まで行くと、どんな星々が見られるのでしょうかね。想像するだけで、わくわくしませんか？」

「そうですね。これから銀河テレビでも、視聴者のみなさんに、この遠征の際に見られる宇宙の星々の美しい姿を伝えていきたいと思っています。

茉莉香さん、どうもありがとうございました。

では、ここで、一旦、画面を帝都のスタジオの方にお返しします。

ジョージ、お願いします。」

テレビから『ハイイ、スージー・・・』と答える声が聞こえ、ディレクターが言った。

「はい、お疲れ様。一旦、中継はカットします。

今は、帝都のスタジオから、この遠征計画の解説を送っています。

10分後、この船の説明を艦長からお願ひします。」

テレビの中継放送が途切れたことを確認して、チアキが言った。

「なかなかよかったわよ。茉莉香。

さすが、海賊ショーで場数を踏んでいるだけのことはあるわね。

でも、約束を破ったから、あとで罰ゲーム一回ね。」

「え？ 約束を破った??？」

「フフフ、茉莉香さん。放送の中で『チアキちゃん』って言ったでしょ。」

サーシャが笑いながら言った。

「ああ……気が付かなかった。でも、罰ゲームって何？」

「遠征が終わるまでに、考えておくれ。」

ねえ、グリユーエル、相談に乗ってね。」

「はい、かしこまりました。」

茉莉香さんのために、素敵な罰ゲームを考えて差し上げますわ。」

グリユーエルが微笑んだ。

こういう四人の仲の良いやり取りを、秘書官のギルバートやスカレット、護衛のキャサリンやイリーナが、テレビカメラの後ろで見守っている。

このあと、テレビ放送は、艦長のインタビュ、艦内の各所からの中継放送と進み、最後に空母の甲板から宇宙船が登場するところを視聴者に見せたいというテレビ局の希望にこたえて、弁天丸が甲板に登場することになった。

テレビに映るのが帝国軍の宇宙船ではないのは、テレビ局からのリクエストだった。赤を中心に彩色された、色鮮やかな弁天丸の方が見栄えがいいと言う訳である。

茉莉香とギルバートがキャスターのスージーを連れて、船外の空間に出て、弁天丸を説明することになった。茉莉香の宇宙服は、真っ赤な色の派手な弁天丸船長用のもので

ある。ギルバートとスージーは、帝国軍の標準仕様の地味な宇宙服を着用している。

「スージーさん、大丈夫ですかあ。ハッチの外に出ると、いきなり無重力ですよ。」

茉莉香が言った。

「大丈夫です。」

スージー・キャスターは気丈に言った。

彼女は、以前にも取材で宇宙空間に出たことがあるので、自信があつた。

「うわ〜。」

しかし、外へ出た途端に、吸い込まれそうな宇宙の深さに恐怖感が湧いてきた。

以前に宇宙空間に出たのは、クリスタルスターの衛星軌道上なので、眼下には青い惑星の景色が広がっていた。だから、安心感があつた。

しかし、ここでは全天が真っ暗な宇宙空間であり、そこに寂しげに星々が光っているだけだったからだ。

驚いたスージーは、宇宙船から足が離れ、無重力空間を漂い、回転し始めた。

「キャー・・・。」

「あ、いけない!!!」

茉莉香とギルバートが同時に手を伸ばしたが、スージーはギルバートの手をつかむと、彼に引き寄せられ、さらに彼にしつかりと抱きついて離れなかった。

「ああ、びっくりしました。どうもありがとうございました。」

「ああ、いえ、いえ。」

「……………」

「間もなく放送が始まります」

カメラマンが、通信機を通じて知らせてきた。

「はい。わかりました。」

スージーは、ようやくギルバートから離れると、一人で立ってカメラに向かって、言った。

「みなさん、スージー・リットンです。」

私は、今、機動空母グランドマザーの飛行甲板の上にあります。ご覧のように、宇宙船の甲板上は宇宙空間ですから、私たちは宇宙服をつけています。

こちらには、宇宙海賊船弁天丸の船長こと加藤茉莉香大佐にお越しいただいております。

大佐、これから、弁天丸を見せて頂けるようですが、どんな宇宙船なんですか。「これから、甲板に上がって来ますから、まずは見てください。」

カメラは、そういう茉莉香の派手な宇宙服を、上から下までアップで映し出した。

「茉莉香さんの宇宙服、ずいぶんきれいな色ですね。」

「これは、海賊の営業用ですから。みなさんにご覧いただくには、こっちの方が良いと思つて・・・。」

あ、上がつてきましたよ、弁天丸が。」

弁天丸は、まるでプールの水の中から水面に顔を出すように、スーッと甲板に上がってきた。甲板の中で弁天丸が登場する部分だけが、金属光沢の液体になっているように見える。

昔の映画のように甲板のハッチが開いて、その中からエレベーターで上がってくると言う機械式の昇降装置ではない。

「なんか、不思議な感じです。魔法を使ったような登場の仕方ですね。」

「ははは・・・。この船は最新式ですから。」

ご覧下さい。これが、弁天丸です。

全長は、約220メートル、幅は約110メートルあります。」

「大きい船ですね。でも、巨大空母グランドマザーの甲板の上では小さく見えますね。」

「そうですね、グランドマザーの甲板は3000メートル以上ありますからね。」

「この船、もちろん動くんですよえ。」

「もちろんですよ。重力制御推進式ではありませんが、超光速跳躍もできますから。」

管制官、発信して見せてもいいですか？」

「了解です。」

「ミーサ、聞こえてるかしら？」

弁天丸、発進、お願い。私の頭の上を通り過ぎるくらいでイイから。」

「了解。サービスするわ。」

「ナハハハ……。」

弁天丸を空母の船体に固定しているアームが外れた。

弁天丸は、姿勢制御ジェットを噴射してグラウンドマザーの船体から離れ、補助エンジンを噴射した。

ゴオオオオという轟音が宇宙服のマイクを通じて聞こえてきた。テレビにも伝わっているだろう。

弁天丸がゆっくりと浮き上がりつつ、茉莉香の頭上を通過して、離れていく。

その姿をテレビカメラが追ってゆく。

轟音も弁天丸が離れていくにつれて、小さくなっていく。

「茉莉香さん、さすが船長さんですね。早速、弁天丸の発進を見せていただいて、ありがとうございました。」

それにしても、弁天丸すごい迫力でしたねえ。お腹に響きました。」

「ナハハハ……。」

今の音は、海賊シヨールの際に流すお客様サービスの効果音です。

実際は、宇宙では音は伝わりませんので。」

「あらまあ、そういうえば、そうでしたね。」

でも、海賊シヨールと言えば、茉莉香さんの海賊服姿もぜひ見たいです。

また、お願いしますね。

・・・

と言っている間に、放送時間が残り少なくなってきました。

銀河テレビの私たちは、今回の遠征ではグランドマザーに同行取材をします。これか  
らも見逃せない映像を生放送でお送りしますので、みなさん、ご期待ください。

スージー・リットンがお伝えしました。」

「ハイ。放送終了。」

「ありがとうございます。」

スージーは、茉莉香に挨拶すると、またギルバートの腕をしっかりと取って、自分の胸  
に押し付ける形で彼にしがみついた。

結局、彼女は、人工重力のあるエリアに戻っても

『まだ怖い・・・』

と別人のような小さな声で言って、宇宙服を脱ぐまで彼にしがみついたままだった。



「……………」

そんな二人を、茉莉香は何も言わず、見つめていた。

20—3 アルファ星系第四惑星の衛星軌道上（M—8801星団）

M—8801星団のアルファ星系第四惑星の衛星軌道上に、相次いで二隻の船がタッチダウンしてきた。一隻は奴隷商人の船、船名はパラベラム号、もう一隻はそれを追跡する帝国軍の巡洋艦アラスカ号だった。

帝国軍の巡洋艦アラスカ号のブリッジでは、艦長ロツケンハイムがM—8801星団への一番乗りを果たして、意気揚々としていた。

「通常空間にタッチダウンしました。」

奴隷商人の船は、前方50キロにタッチダウンしています。

座標は、M—8801星団のアルファ星系、第四惑星の衛星軌道上です。

艦長、一番乗りですね。」

「そうだなあ。やったなあ。」

でも、油断するな。周辺で敵に増援の動きがないか、注意しろ。」

「はい。」

……………今のところ、アルファ星系内に敵船の姿はありません。」

「うーん。敵側の援護がない？」

では、なぜ、あの奴隷商人の船はここへ逃げてきたんだ？」

「この第四惑星は、可住惑星というより、人間が住んでいる兆候がありますねえ。」

「へえ……、ここがヤツラの本拠地かもしれないなあ。」

まず、データを集めて、司令部へ送れ。俺たちが一番乗りだという証拠を送ろう。」

「了解しました。」

「船長、奴隷商人の船が速度を落として、第四惑星に降下していきます。着陸すると思われず。」

我々も、追跡しますか？

それとも、威嚇射撃でも撃ちますか。」

「深追いはするな。もう捕獲は不可能だ。」

もちろん撃つな。

そもそも、今回の我々のミッションは、奴隷商人の船の臨検と奴隷として売られた人々の救出だ。ヤツラの船を撃沈することは許されていない。」

「そうですが、……」

「それに、この惑星は敵の本拠地かもしれないから、何が出てくるか分からない。」

これ以上の接近は危険が大きい。」

「この星の衛星軌道から離脱する。」

艦長は、冷静だった。

「それにしても、デブリが多いですねえ。

まるで我々を狙っているようです。

「デブリ排除の自動対空砲火機能が無ければ、今頃、船体に一つや二つ、穴が開いてますねえ。」

戦闘指揮官がぼやいた。

「そういうことか。」

危険だ。デブリを避けて、衛星軌道から急いで離脱せよ。」

船長がそう言った途端、ガンという衝撃が艦内を襲った。

「左舷にデブリ衝突。被害は調査中。」

「船長。ぶつかったデブリは水素、窒素、水やメタンなどの氷だと思われまます。

ビームが当たってもデブリに穴が開くだけで、そのまま船に衝突したそうです。」

「水でも何でも、高速で船体に当たればダメージは同じだ。

とにかく、主砲も動員して、デブリを撃ちおとせ。

航海士。デブリの少ない軌道を探せ。」

「やっています。．．．」

10分後、アラスカ号は、ようやくデブリの多い空域を抜けた。「結局、五発も食らったか。」

これが装甲板の薄い、安普請の民間船なら沈んでいたぞ。

それにしても、あのデブリは、自然の岩石か氷のようだったが、なぜ、あそこにあるのだ。あんなデブリの多い宙域があれば、自分たちの船の航行にも邪魔になるはずなのに。

そんなものを、どうして放置しておくのだ。」

デブリ撃墜に汗を流した戦闘指揮官がぼやいた。

「奴隷商人は逃がしたが、まあいい。」

アルファ星系のデータは取れたので、これを土産に帰投するぞ。

超光速跳躍、開始。」

艦長の指示に従って、アラスカ号は、亜空間に消えた。

20-4 グランドマザーの飛行甲板（ヒガン星団航路の中間地点：サンズ回廊）

機動空母グランドマザーは、ヒガン星団への航路の中間地点にある時空トンネルを抜けて、いわゆるサンズ回廊にタッチダウンした。中間地点にもすでに多くの宇宙船が到着し、待機していた。

ここでは、遠征艦隊など、次のヒガン星団に向けて再び時空トンネルに入ろうとする船と、ここからは時空トンネルを使わず、個別に超高速跳躍して航路内の各地に向かう船との交通整理が行われている。

待ち時間を利用して、茉莉香とギルバートとスージーは、テレビ中継のために、グランドマザーの飛行甲板に出た。

「みなさん、こんばんは。銀河テレビのスージー・リットンです。

機動空母グランドマザーは、いま、ヒガン星団への航路の中間地点、いわゆるヒガン回廊に到達しました。すでにたくさん船が到着して、停泊しています。

そして、ご覧ください。

私たちの背後には、銀河が天の川のように広がって見えます。しかし、私たちの前の宇宙空間には、銀河はありません。深い宇宙空間があるだけです。

そうです。私たちは、今、銀河系を少し離れた宇宙空間に立っています。外宇宙からのテレビ中継は局が初めてです。

みなさん、この壮大な景観をご覧ください。」

テレビ画面は、外宇宙から我々の銀河系を眺めた壮大な景色を、360度のパノラマとして回転しながら、映し出している。

「どうですか。茉莉香さん、この星空の感想は。」

「わくわくしています。やっぱり、宇宙っていいですねえ。」

銀河は、こんな形をしているんだなあって、初めて自分の目でみましたよね。

この角度からだど、銀河中心の紡錘状星雲の形がはっきりわかりますねえ。

一方、こちらの暗黒星雲サンズもすごい迫力ですねえ。ここから見ると一部に星が形成されているところもあって、光と影の入り混じったダイナミックな姿ですねえ。

だから、私、宇宙って大好きなんです。」

そして、茉莉香はヒガン星団の方角を指差しながら、続けた。

「うわーあー！ 見て、見て。」

ヒガン星団が見えますよ。私、実際に見るのは初めてなんです。

感激だなあ。

あの方角の、あの星々ですね。カメラさん写してください。

ヒガン星団は、銀河からは見えませんが、ここまで来ると自分の目で見えるんですね。」

テレビカメラは、まだかすかな光の点に過ぎないヒガン星団の恒星群を写した。

「あれが、第一の目的地、ヒガン星団ですか。」

「そうです。楽しみですねえ。」

どんな星々なんでしょうかねえ。恒星はスペクトルG型ばかりだそうですから、若い

星団ですわね。

水に溢れた、きれいな青い惑星があると良いですわねえ。

光学観測も始まっているでしょうから、中に戻ったら映像を船のスタッフに見せてもらいたいなあ。

早く、ヒガンの星々に会いたいです。」

テレビ画面は、初めて見る星々の前で、茉莉香がはしゃぐ様子をアップで映し出した。それは、目的地に近づいて深刻になりがちな将兵やテレビの視聴者の緊張感をさつと吹き飛ばす、さわやかな笑顔だった。

一方、テレビに映らないところでは、スージーは相変わらずギルバートにしがみついたままだった。

20—5 レオニー二家の屋敷（ヒガン星団ベータ星系第三惑星ライセ）

惑星ライセにあるレオニー二家の屋敷は、緑にあふれ、一つの街と言っても良いくらいに大きい。現在のところ、ヒガン共和国大統領府もこの中にある。

その広大な屋敷の奥まった一室で、一人の老婆がテレビ中継を見ていた。

テレビ放送は次のように伝えていた。

『みなさん、銀河テレビのスージー・リットンです。』

機動空母グランドマザーは、いま、ヒガン星団の中心、惑星ライセの衛星軌道上に到達しました。

ご覧ください。

眼下には、惑星ライセの青く輝く海や緑の陸地が見えます。

この美しい星が、アメージーグ族の開拓した新天地です。』

老婆は、自分の周りにいる一族の子供たちに語った。

「やつとサーシャが来てくれた。

久しぶりだねえ。やつと、会えるよ。もうすぐだ。

サーシャは、ここに来るのは初めてのはずだが、それでも私はあの子に『お帰りなさい』

』と言いたいよ。

なあ、ジュリアーノ。

お前は、あの子に会うのは初めてだけど、美しくて、賢い娘に育ったそうだよ。

楽しみだろう。」

「そうですね、グランマ。もうすぐですね。」

ジュリアーノ・レオニーニが答えた。

彼はまだ24歳の若者だったが、ヒガン共和国大統領フランシスコ・レオニーニの息子

であり、次世代のリーダーとして一族の期待を集めていた。



20—6 帝国軍最高司令部（クイーン・オブ・パイレーツのブリッジ）

旗艦クイーン・オブ・パイレーツは、ヒガン星団に向けて航行中であつた。

そのブリッジの貴賓席に置かれた帝国軍最高司令部では、参謀本部から女王陛下に作戦の進行状況が報告されていた。

「現在のところ、帝国とヒガン共和国の各艦隊は、順調に船を進めております。

奴隷商人たちは我先にと、全速力でM—8801星団へ逃げ込んでおり、それを追う形で、包囲網は急速に狭まっております。」

「なるほど。それで、M—8801星団の様子はわかつたのか？」

「先行している船からの報告によりますと、M—8801星団の可住惑星は五つあります。」

しかし、そのうち四つは惑星改造が中止されており、エネルギー反応もありません。もちろん、この他に人工惑星や中継ステーション等の浮遊構造物はありません。

残る一つの惑星に、人間の住んでいる様々な兆候が観測されています。それが、アルファ星系の第四惑星です。軍は、この星を『アルファ4』と呼んでおります。

「ここがマンチュリアの本拠地と思われませんか？」

「ここが本拠地と断定できるのか？ ヒガン共和国も同じ意見か？」

「ヒガン共和国からの情報でも、彼らの本拠地はこの惑星ひとつだけと聞いておりましたので、間違いありません。」

「それでは、アルファ4を占領するまでのスケジュールを聞こう。」

「はい。まず、全艦隊がヒガン星団に集結するのに、あと2日、

それから、M—8801まで展開し、包囲網を狭めて、アルファ星系の外延部に集結するのに2日かかります。」

敵が艦隊を集結して決戦を挑んで来れば、4日目あるいは5日目がその決戦の日程になると、見込まれております。」

「本当に彼らは決戦を挑んでくるのか？」

「今のところ、五分五分です。もちろん、降伏を勧告しますが。」

「艦隊決戦が終わる、あるいはこれが無ければ、アルファ4へ地上戦闘部隊を送り込み、占領します。地上全体の占領には、一週間程度を要すると見込んでいますが、抵抗次第では延びる可能性があります。」

「徹底抗戦されると、厄介だな。」

「はい、多数の戦死者が出る可能性があります。」

「ところで、重力兵器による帝国領内への奇襲攻撃の恐れはないのか。」

「今のところ、兆候はありません。奇襲攻撃は、海明星だけと思われれます。」

担当将校からの説明が終わったあとに、ヤマシタ参謀総長が付け加えて言った。

「陛下。」

ただし、ひとつ気になりますのは、マンチュリアの支配階級の人間が姿を現さないことです。捕獲した彼らの軍艦も、支配階級出身の軍人は乗船しておらず、クローン人間ばかりが乗船しています。

支配階級の人間は、どこに潜んでいるのか、居場所をつきとめる必要があります。」  
「持つて回ったような言い方をするな。ハッキリ言ったらよからう。」

女王が少しイラついた声を出した。

「はい。進言いたします。」

この状況は罠を仕掛けられている気がします。

その根拠はありません。軍人としてのカンに過ぎませんが……。」

「罠?。」

「どんな罠なのか、まだわかりませんが……。」

20—7 ヒガン共和国宇宙空港（惑星ライセ）

惑星ライセにあるヒガン共和国宇宙空港に、相次いで2隻の宇宙船が降り立った。

2隻は、ともに聖王家のエンブレムをつけた船だった。

一隻は、女王の乗船する青い船、ローズアロー1号、もう一隻は、チアキの乗るピンクの船、ローズアロー2号だった。

この歴史的瞬間を銀河テレビが興奮して伝えていた。

「みなさん、おはようございます。銀河テレビのスージー・リットンです。

私は、今、惑星ライセにあるヒガン共和国宇宙空港におります。

ついに、銀河帝国とヒガン共和国にとって歴史的瞬間がやってまいりました。

いま、女王陛下と第二王女殿下が、惑星ライセにあるヒガン共和国宇宙空港に到着されました。

青と赤の二隻の船が、地上に着陸しているのがご覧いただけますが、このうち青い船が、女王陛下の乗船されたローズアロー1号です。ピンクの船が、チアキ殿下の乗船されたローズアロー2号です。

そしてご覧のように、儀仗兵が並ぶ中をヒガン共和国の大統領が出迎えにあらわれしました。

そして、今、女王陛下が船を降りてこられます。続いて、チアキ殿下も降りてこられました。

地上に降りた女王陛下に対して、ヒガン共和国大統領フランシスコ・レオニーニ氏が一礼し、二人は握手をされました。

ご覧ください。

長い間、帝国と緊張関係にあったアメージング族との和平が、このように実を結び、銀河の平和が達成された歴史的瞬間です。

現在では、両者は、銀河系の『法と秩序』を守るパートナーとも言える密接な協力関係にあります。

.....  
—

テレビ放送では、宇宙マフィア時代の昔を知る人間が聞けば、大笑いして吹き出しそうな美辞麗句が続いている。

実際、テレビを見ながら、そんな思いを抱いている人は多いだろう。

もちろん、現在では、「宇宙マフィア」と言う言葉は、テレビでも放送禁止用語になっている。そう言った方が分かり易くても、言つてはいけない言葉とされてしまった。「ヒガン共和国」や、「アメージング族」と言い換えなくてはいけない。

スージーのレポートは、そういう時代の到来を告げていた。

そして、女王と大統領たちが空港を出発して大統領府に向かった。茉莉香とグリューエルも、チアキと同行した。この後、首脳会談が行われ、夜には盛大な歓迎行事が行われる予定である。

やがてテレビの中継が終わって、空港が静まり返った。

その時を待っていたように、一団の人々がローズアロー2号から降り立った。サーシャと、イリーナを始めとする護衛の人々である。

一行は、ヒガン共和国軍の出迎えの車に乗って、空港から走り去っていった。多数の護衛の車が随行していった。

20—8 機動空母グランドマザーのブリッジ（M—8801星団アルファ星系外延部）

銀河帝国とヒガン共和国の軍艦は、奴隷商人を追って、ついに、アルファ星系に進軍し、同星系を包囲した。

包囲作戦に参加した船は約一万隻。遠征軍五万隻のうち、二割が参加しただけだった。しかし、これでも艦船の数が多すぎるため、ここからは、まず選抜部隊1000隻が攻め込む計画となった。選抜部隊の司令官は、グランドマザーの艦長、ハマ准将が任命された。

アルファ星系の星々を写すモニターを眺めながら、艦長のハマ准将が感想を漏らした。

「ついにここまで来たなあ。

司令部からは、予定通りアルファ4へ侵攻せよとの命令が来ている。

われわれは、選抜部隊の中心だからな、みんな気合を入れる。」

「おう!!」

その後、ハマ艦長は、貴賓席の奥のテーブルにやってきた。

そこに集まっているのは、チアキ、茉莉香そしてグリューエルの三人だった。サーシャは、惑星ライセで用事があるといって、その後の遠征には乗船しなかった。

「う~~~~~ん。」

茉莉香は、テーブルの上の布に、赤いスタールビーの宝玉を置いて、その中の星を見つめていた。

そのそばで、チアキとグリューエルが微笑みながら茉莉香を見守っている。

「う~~~~~ん。」

「ん?・・・茉莉香、なにをしているんだい?」

「う~~~~~ん。」

ああ、ミツキーさん、ちよつと考え事があつて・・・。」

「お前が考え事とは、めずらしいなあ。」

取り込んでいる時で悪いが、こつちもお仕事のことと相談があつてなあ。だから、茉莉香と少し話したいのだけどねえ・・・。」

「お仕事の話なら、ご遠慮なく。私の考え事は、個人的もので・・・。ナハハハ」

茉莉香は、苦笑いをした。

「それで、艦長さん、話は何ですか？」

「ほかでもないんだが、今後の作戦計画についてお前の考えを聞かせてほしい。

お前がマンチュリアの指揮官だったら、敵に一泡吹かせてやるとすれば、どうするか。  
な。

例えば、帝国軍をどんな事態に追い込んだら、気分爽快で、面白いだろうか？」

「そうですねえ……。」

う～～～～ん、私ってヘんな子なのかなあ？

こういう話だと、すぐ答えが浮かびますねえ。」

「へえ……即答かい！ それで、どんなアイデアなのかな？」

「やっぱり一番痛快なのは、敵をだまして同士討ちさせることでしょうね。」

例えば、鬼ごっこみたいに追いかけておいて、さつと身をひるがえして逃げ出して、残された敵が鉢合わせして、敵同士がそれと知らずに戦ってしまうなんて……。

ハハハ

そういう喜劇、いや悲劇かな？

これって、少し意地が悪いでしょうか？

やっぱり、私って、ヘんな子なのかなあ？」



「いや、戦場では正しいよ。茉莉香の言う通りだ。」

「そのお話は、今回の作戦で私たちが罠にかけられているかもしれないという疑問に關連しているのでしょうか？」

チアキが聞いた。

「そうだよ。少なくとも、ヤマシタ参謀総長は、そういう疑問を抱いているよ。

でも、どういう罠かが、私にもわからない……。」

ハヤマ艦長が答えた。

「う……ん。現状では私もわかりませんが……。」

茉莉香も即答できず、唸ったが、

「そうか、たとえば、この前のアレはどうでしょうか。」

艦長、私が参謀本部の模擬戦でやった人工時空震みたいな罠ですよ。

帝国軍の大艦隊を密集させておいて、そこへドーンと『やんちゃな操縦』でタツチダウンしてきて人工時空震を起こす罠ですよ。それで、帝国軍の船を吹き飛ばしたり、帝国軍の船同士を衝突させたりして、大混乱に追い込むのです。

これなら、帝国軍の『同士討ち』をたつた一隻で実現できます。

艦長、きつとこれですよ。私なら、これで決まりです。」

と、茉莉香は答えた。

「なるほど。あれか。」

あれなら、十分ありうるなあ。参謀本部に進言しておこう。

でも、あの敗戦には参謀本部も大ショックを受けて、対策の研究は進んでいるよ。」

「そうですか。それならいいのですが。」

「もつと、他に、もつともつと意地の悪い『同士討ち』のアイデアはないかなあ。」

「そうですねえ……。」

ん？……。

艦長、私のことを意地のわるい、ヘンな子だと思つてませんか？」

「いやいや、そんなこと考えていないよ……ハハハ。」

「あの……よろしいでしょうか……同士討ちの意味なんですけど……。」

「なに、グリユーエル？」

「帝国軍同士ではなくて、同じ民族同士が、騙されてそれと知らずに戦うというのも、同

士討ちでしょうか？」

グリユーエルが聞いた。

「どういう意味だい？」

ハヤマ艦長が聞いた。

「チアキさんを前にして言いにくいんですけど……。」

「構わないわよ。何を言いたいか想像がつくわ。」

「では、お許しが出たので、言います。」

マンチュリアのクローン人間たちと、銀河帝国が戦うのは、マンチュリア人の支配階級の人たちから見ると、同じ民族同士の『同士討ち』なのではないでしょうか。」

「ええ!?! そんな発想は初めて聞きました。」

姫様、もつとくわしく説明して頂けないでしょうか。」

ハヤマ艦長が言った。

「はい。妹のヒルデから聞きましたが、マンチュリアでは、被支配階級の人が、他の星の人と結婚して子供を設けても、その子供、その子孫は依然として被支配階級の民族に属すると考えるのだそうです。もちろん、支配階級の人たちは、自分たちと被支配階級の人たちは別々の民族だと思っているそうです。」

ですから……」

グリユーエルが言った。

「そこから先は、グリユーエルでは言いにくいだろうから、私が言うわ。」

そういう考えに沿って言うと、マンチュリアの被支配階級出身のテオドラ皇后の子孫である青薔薇家の私たちは、マンチュリアの被支配階級の民族と同じ民族に属すると言うことになるわね。」

そして、マンチュリアのクローン兵士が、被支配階級の民族の人から作られたならば、今回の戦いは、同じ『民族』による同士討ちかもしれないわね。

おまけに、クローン兵士が偽の歴史を教えられているのならば、騙されているとも言えるわね。」

チアキが言った。

「ええ！そんな考え方って、アリなの？」

茉莉香が言った。

「それは彼らの考え方の問題だから、アリと思えばアリよ。」

そういう『同士討ち』をさせれば、敵、つまり帝国が悔しがるだろう。だから、彼らは帝国に悔しい思いをさせて愉快と思うのかしらねえ。

帝国の方は同士討ちだと思っていないのだから、そんな一方的な理屈を言っても、帝国にとっては何の意味もないでしょう。

ほんと、ばかばかしい話けど。」

チアキは、少し怒ったような口調で言った。

「ごめんなさい。チアキさん。」

グリユーエルが言った。

「気を遣わせてごめんなさい。あなたに怒ってる訳じゃないわよ。」

そういうことを考えているかもしれないマンチュリア人に、怒っているのよ。」

「それじゃあ、銀河帝国が、もしもM—8801星雲の惑星を先制攻撃で滅ぼしてしまっていたら、それは『同士討ちの罨』に嵌ったことになったのかなあ。」

茉莉香が言った。

「はい、彼らは、そう思ったかもしれませんがね。」

軍事でも経済でも何でも銀河帝国に勝てないとすれば、歴史の解釈から自分たちだけの『勝利の定義』を作り出して、それを実現したと言って、自尊心を満たすしかないでしょう。」

グリユーエルは言った。

「それって、おかしくない。歴史の一部分だけを取り出して勝ったと言っても、それじゃあ、世の中は何も変わらないじゃない。」

そもそも、自分たちの歴史を棚に上げて、都合のいいところだけを持ち出すわけですよ。」

チアキが言った。

「そうですね。ダブルスタンダードです。」

でも、弱者の立場ならば、そうする以外はありません。

それがどんなに愚かなことであっても、そうしたい気持ちは分かります。

「そう思うと、とても悲しい話ですね。」

グリユーエルが静かに言った。

「そうかもしれないわね。私も辺境で育ったから気持ちは分かるわ。」

チアキが言った。

「私は難しい政治の話は苦手だけど、軍事的に見ても、やっぱり、罨をかける作戦として、それは変だよな。」

「だって、もし帝国の重力兵器による先制攻撃が、敵の『思う壺』だったとすれば、それで自分も滅ぼされないように、マンチュリア人の支配階級の人たちは予め何処かへ避難しているはずでしょ？」

「どこに隠れたの？」

茉莉香が言った。

「この銀河のどこへ隠れても銀河帝国の追及から免れることはできないわよ。」

茉莉香の言うように、『敵をだまして、さつと逃げて、同士討ちさせる』なんて、実際にはできないわよ。」

チアキが言った。

「そうですね。結局、自分たちも滅んでしまいますね。」

「失礼なことを言って、ごめんなさい。」

グリユーエルが詫びた。

「だから、グリユーエルが誤ることなんかないのよ。悪いのはあいつら……。」

チアキが言った。

「なるほど。そういう発想もあるのですか……。」

ハヤマ艦長が言った。

「艦長、今の話を司令部に伝えるならば、すべて私が言った話としてください。」

チアキが言った。

「お心遣い、ありがとうございます。皆さんにご迷惑をおかけしないよう気を付けます。」

20—9 惑星アルファ4の周辺宙域

銀河帝国軍とヒガン共和国軍の選抜部隊は、アルファ星系の第四惑星、アルファ4の周辺宙域まで進軍した。

「アルファ4の様子はどうか。敵艦の位置は？」

ハヤマ艦長が聞いた。

「はい、報告します。」

アルファ4の赤道の衛星軌道に敵艦隊が集結しています。その位置は、われわれの

死角、つまりアルファ4を挟んで我々と反対側にあります。」

「死角か。我々にそんなものがあると思っているのかな。」

すでにレーダー監視網は、アルファ4の全面を覆う配置を完了しているのにねえ。

よし、敵艦の機種や装備、戦闘能力を調査しろ。ポンコツ揃いかもしれないが、侮るな。」

ハヤマ艦長は、警戒を怠らない。

「問題は、時空ナビの方か……。」

航海士、ナビは何か重力異常を感知しているか？奇襲の予兆を見逃すな。」

「はい。監視を継続します……。」

「敵艦隊の概要が判明しました。」

その数、約500隻。帝国軍の旧式艦と思われる型式の艦が中心ですが、一部に奴隷商人の船も交じっています。武装は、通常の戦艦から巡洋艦クラスと思われれます。特に目立って強いエネルギー反応はありません。」

「この程度の艦隊なら、通常の艦隊戦で粉砕できるが、あまりに簡単過ぎる。

やっぱり、ヤツラは罠のエサなのだろうか……。」

「艦長、そろそろ、デブリの多い宙域に近づきます。」

「よし。先頭の陣営に、デブリを片付ける指示を出せ。」



「了解。掃海の指示を出します。」

帝国軍は、巡洋艦アラスカ号からの情報から、レーダー監視網を先行して稼働させるため、偵察船を多数、アルファ4の周りに配置した。そしてデブリの分布もつかんできた。

ハヤマ艦長の指示を受けて、デブリの掃除、すなわち掃海が進められていく。

その掃海方法は、公爵の反乱の際にウルスラがやった方法である。

重力波砲を最少出力で発射して、デブリを吸い込んで、別の空間に放出するものである。対象がミサイルだろうと、デブリだろうと同じであって、多数の物体を一度に排除するには効果的な方法として、その後、さらに研究されていた。

「あ、艦長。微弱な重力異常です。」

向こう側の敵艦隊から、こちらの正面へ時空トンネルを使って跳躍してくる船がいると思われれます。」

「全艦、作戦通り、球面後退開始。人工時空震に備えよ。」

あ、そうか……。デブリはこのためか。

全艦、人工時空震に乗ってデブリが弾丸として飛んでくる恐れがある。

デブリ撃墜対策を怠るな。」

選抜艦隊は、球面後退を開始した。

「球面後退」とは、人工時空震の対策として帝国軍が開発した艦隊行動である。

通常、同一平面上で艦隊行動を取りがちな大艦隊は、後退する時も同一平面上の航路を取りがちである。

しかし、これでは、時空震に見舞われたときには、コントロールを失って衝突するおそれがある。

そこで、艦隊の各艦が、時空震の震源を中心として半球状に後退するように、各艦の退路を設定してこれを維持すれば、時空震に流されながら後退しても衝突せず、艦隊全体も時空震をやり過ぎればまた態勢を立て直すことができると考えられた。

これが「球面後退」である。

予想通り、猛烈な時空震が発生した。各艦に対して、強い重力波、続いて衝撃波が襲った。

これに対して、選抜艦隊は、流されながらも、各艦が何とか予定の後退航路を維持するように姿勢制御を続けていた。

続いて、デブリの弾丸が飛んできた。幸いにも、デブリ掃除が始まっていたために、かなり数は少なかった。

さらに飛来したデブリに対しては、デブリ対策の自動対空砲火だけでなく、正面に向けては主砲も撃たれ、火力はフル稼働した。

球面後退のおかげで、味方の船を撃つ可能性は低くなっていたことも幸いした。

「ふう……、どうやら時空震のピークは越えたね。」

各艦の被害状況を確認しろ。」

「はい、被害状況を確認します。」

「時空震だけでなく、デブリの弾丸までお見舞いされたか。このために、ヤツラの艦隊は、惑星の反対側に位置していたんだな。」

なるほどなあ。敵にも、ちよつとは考える奴がいるってことか。」

「艦長。人工時空震の震源付近に敵の戦艦一隻がタツチダウンしてきます。」

それから、敵艦隊が衛星軌道を回って、こちら側に移動してきます。約30分でこちら側に最接近してきます。」

「よし、各艦、再集結準備。」

同時に、人工時空震を起こした敵の戦艦の探査を行え。重力兵器使用の兆候がないか、確認しろ。」

「各艦の被害は、軽微です。再集結後、ただちに戦闘可能です。」

「タツチダウンした戦艦のエネルギー反応は急激に減衰しています。転換炉の出力が低下しつづつあると思われます。」

「ふん、転換炉がオーバーヒートして、緊急停止しているのか。」

よし、艦隊再集結。決戦の用意だ。」

ハヤマ艦長が指示を出した。

「あ、艦長。」

敵艦隊からトレスポンドーが発信されています。

いずれも、奴隷商人の船からです。船名は、ネバーランド号、パラベラム号、……」

「それは記録しておくだけでいい。ヤツラに何が起こったのだ？」

「トレスポンドーを発信した船が、敵艦隊から離脱していきます。」

つぎつぎに、超光速跳躍していきました。」

「よし、状況を総司令部に報告。彼らの捕獲は総司令部で手配してもらおう。」

ついに、奴隷商人が逃げ出したか。

ヤツラは、もはや勝負はついたとみた訳だな。」

パラベラム号と聞いて、茉莉香は貴賓席から身を乗り出した。

そして、戦場から無事に離脱したと聞いて、ひと安心した。

「う~~~~~。」

しかし、そう言つて、茉莉香は、じりじりとした焦りの声を出した。

『宇宙空間の戦闘が、弁天丸の出番も無のまま、本当にこれで終わってしまうなんて、

許せない！』

これが茉莉香の本音だった。

もちろん、この後、アルファ4を占領するために行われる地上戦に弁天丸の出番はないのは、分かり切っていた。

30分後、選抜軍約1000隻と敵のマンチュリア軍約400隻がアルファ4の衛星軌道上で対峙した。

敵軍は、最初は500隻だったが、すでに100隻ほどが逃げ出している。数の上でも、個々の戦艦等の武力・防御力のレベルから言っても、もはや勝敗は明らかだった。

帝国軍とヒガン共和国軍の選抜部隊は、強力な新鋭艦ぞろいだったからだ。グラントマザーの出番すら無い雰囲気だった。

「私の名前で、ヤツラに降伏勧告をしろ。」

「了解。降伏勧告をします。」

五分ほど時間が経過した。

「艦長、応答がありません。」

「ええ？　なんだ、あいつらは。」

降伏勧告に返事もしないし、そうかと言って、これ以上接近もしてこないし、自ら撃つて来ないぞ。まるで、こっちから撃つのを、並んで待っているようだ。

本当に、そんなつもりなのかなあ？

・ ・ ・ ・ ・  
しかし、困ったなあ。

この戦いの様子はテレビ中継されているから、無抵抗の敵を撃ち落とすようなシーンはカッコ悪くて見せたくないし、本当にやりにくいよ。」

ハヤマ艦長兼選抜軍司令官は、ぼやいた。

銀河テレビがこの戦いの様子を生中継しているからだ。さすがに戦闘中のブリッジではテレビの取材は認められなかったが、別室でモニターを見ながら、中継していた。「う~~~~~」

茉莉香は、近くで誰かが同じようにじりじりとした焦りの声を出すのを聞いた。

振り返ると、チアキが同じようにストレスのたまった顔をしていた。

「チアキちゃん、なんか黙って見てるのが、辛くなってきたよねえ。」

茉莉香が言いい、チアキと顔を見合わせた。

そして、意を決した茉莉香が言った。

「司令官。進言があります。」

「なんだ、言ってみろ。茉莉香。」

「はい、重力兵器を使った戦艦が敵の司令船と思われます。これに対して弁天丸で強襲攻撃をして、占領したいと思ひます。」

そうすれば、他の船も降伏するでしょう。」

「白兵戦をやる気なのか？」

「はい。そうです。」

「私も行きます。茉莉香ひとりで行かせるわけにはいかないし、私の船も行けば、敵艦隊の前を横切らず、弁天丸と一緒に時空トンネルで一気に敵艦に突っ込めますから。」

チアキが言った。

「チアキちゃん、良いの？」

「もうこれ以上、ネコかぶってられないわよ。我慢の限界よ。」

「大丈夫か？」

「大丈夫です。」

茉莉香が答えたが、ハママ艦長は秘書官のギルバートやスカーレットの方を見ていた。

二人が、微笑んでいるのを見て、ハママ司令官は答えた。

「よし、出撃を許可する。」

ただし、白兵戦はギルバートとスカーレットの指示に従うこと。

姫様、よろしいですね。」

「わかってるわよ。罨にかかった失敗は繰り返さないわよ。」

チアキが答えた。

チアキは、「罨にかかった失敗」つまり、公爵の反乱の際に、旧ステーションに白兵戦を仕掛けて、逆に罨にかかって犠牲者を出したことを自ら口にした。

「茉莉香さん、チアキ様。ご武運をお祈りします。」

グリユーエルが言った。

「ありがとうね。さあ、茉莉香、行こう。」

「さあーっ。海賊の時間だあ！」

そう言つて、二人は、ブリッジを後にして、グランドマザーの艦内をそれぞれの愛機に向かって駆け出した。

もちろん、ギルバートとスカレット、その他大勢の軍人たちが続いた。他のメンバーは実は帝国海賊の白兵戦部隊だった。

その時、一人の男が追いかけてきた。

「あのおう、同行取材させてください。」

銀河テレビのディレクターが追いかけてきた。スージーを始めとするテレビのクルーム、その後から必死に追いかけてきた。

「何を言ってるの、命懸けよ。」

チアキが咎めたが、ディレクターも引き下がらない。



『娘海賊の立ち回り！』

しかも、出演は、キャプテン茉莉香とチアキ姫！

この遠征で、これ以上素晴らしい映像は無い！』

と、彼は思っていたからだ。

「私たち、マスコミの人間も命知らずですから。海賊以上に……。」

「呆れたわ。どうなっても知らないから……。」

でも、私の船はだめよ、王室機密や軍事機密が多いから。

弁天丸が良いなら、そっちは構わないけど……。」

チアキはそれ以上、咎めなかったので、ディレクターは同行が許されたと思ったようだ。テレビの取材陣は勝手に弁天丸に乗り込んでいった。

やがて茉莉香とチアキの二人はグラランドマザーの格納庫で、それぞれの船に搭乗するため、別れようとしていた。この時は、二人とも帝国軍の制服姿だった。

「茉莉香、以後の手順はブリッジから連絡するから。」

「了解。」

「あと、茉莉香は海賊の船長服に着替えて、白兵戦に出るんでしょ？」

チアキが聞いた。

「もちろん、そのつもりだけど……。それが何か？」

「そうなの、ふーん。．．．フフフフ．．．」  
チアキは、意味ありげに笑った。

## 第二十一章 茉莉香とチアキ 華麗なる出撃

21-1 弁天丸ブリッジ（アルファ4衛星軌道上）

茉莉香は、弁天丸の船長服に着替えて、弁天丸のブリッジに立った。

そして、直ちに言った。

「弁天丸、発進！ やつと海賊の出番だよ。チアキちゃんの船に遅れないようにね。」

「了解。発進します。」

弁天丸の新しい操舵手になった、ウイリー・モーガンが答えた。彼は、帝国軍を定年退官した大ベテランの船乗りであり、その名の通り、モーガン一族の人間だった。

もちろん、今回の弁天丸にはギルバートも同行して、茉莉香の隣に座っている。

グランドマザーの甲板上に浮上した弁天丸は、姿勢制御エンジンを噴射して、グランドマザーから離れつつあった。

やつと来た出番に緊張する茉莉香に、さつそく、ミーサが聞いた。

「あら、もう発進しちゃったのね。」

ところで、ねえ茉莉香。テレビ局の取材をOKしたの？ それとも彼らは密航者かし

ら。」

「ええ!？」 どういうこと?取材の話は聞いていないわよ。」

茉莉香が戸惑っているところへ、テレビ局のディレクターがブリッジへ乗り込んできた。

しかし、彼は、いきなりミーサに向かって、名刺を差し出した。

「どうも、どうも、このたびは。よろしくお願します。」

いやーっ! グランドウッド先生、相変わず御綺麗ですねえ。

覚えて頂いておりますでしょうか。昔、銀河テレビの記者をしておりました、クラーク・ケントですよ。その節はお世話になりました。」

「ええ〜〜! まさか、あの『パーマン』が、あなたなの……。」

でも、あなた、出世して重役になったって噂を聞いていたけど……。」

「ええ、今は銀河テレビの代表取締役、副社長をしています。」

しかし、今回の取材はとても重要で、しかも憧れのグランドウッド先生にまた会えると言うので、私が直接に乗り込んできました。ナハハハ……。

いやあ〜〜。また、お会いできて、うれしいです。

おまけに、その後も私のことを気にかけて頂いていて、しかも、昔のあだ名までも覚えて頂いていて、本当に光栄です。

ハハハ……。楽しい船旅になりそうですねえ。

戦いが済んだら、お茶しませんかあ……。お願いしますよ。」

「……………」

彼の堂々としたゴマスリに、さすがのミーサも、あきれて何も言えなくなつた。

そして、ケントは、茉莉香に向かって名刺を差し出して、言つた。

「銀河テレビの副社長をしております、クラーク・ケントです。今回の遠征の取材では、ダイレクターを勤めさせて頂いております。」

急なご出陣で事前に了解を得るといふ訳にはいきませんでした。が、ぜひ、乗船と取材を認めて頂きたいと存じます。

私どもは、銀河のヒロイン、キャプテン茉莉香さんのカツコイイ映像をお届けしたいし、銀河系の視聴者のみなさんもそれを『早く、早く』と期待して待つております。

ですから、ぜひお願いします。」

「いやあ、その、いきなり言われても……………」

「モーガン中尉からも、薦めてくださいいよ……。お願いしますよ……。」

お二人は『帝国軍の最強コンビ』と評判なので、今回の戦いでも、ぴたりと息の合ったところを見せて頂けるのでしようねえ。期待していますよ。

きつと、視聴者のみなさんも喜ぶと思いますよ。」

これには、ギルバートも茉莉香も顔を見合わせて照れ笑ひし、何も言えなかつた。

ケントはこの後も、シュニッツアーには「サイボーグのボディに旧MZタイプの大型を使っているところがシブイ」とか、ルカには「眼帯をしている横顔が凛々しくて美しい。ぜひ水晶玉といっしょにアップで写させてほしい」とか、クーリエには「今回の遠征軍の中では最高級の美人なので、衣装やメイクはテレビ局で用意するから、メガネをはずして出演してほしい」とか、硬軟織り交ぜて、クルー全員にゴマをすつてまわった。

このゴマスリ攻勢に対しては、クーリエですら、「イヤダ」と一言、返事するのが精いっぱいだった。

こうして、彼は、クルーが「無断乗船」と怒りたくなる気持ちを萎えさせてしまった。「うう〜くん。もう出航してしまいましたし・・・仕方ないかなあ。」

茉莉香が言った。

「ありがとうございます。」

ケントは、茉莉香に礼を言うと、茉莉香だけに聞こえるように小声でささやいた。

「スージーには、いい加減にしろと言っておきますから・・・。船長さんは、戦いに集中してください。」

「???.」

その時の茉莉香は、ケントのささやきが何を言っているのか、分かっていないようだった。

そうしているうちに、チアキから通信が来た。

「あ、始まるようですね。私たちはモニタールームに居ますから……。」

そう言つて、ケントはブリッジを出て行つた。

「はあくくく。やつと出て行つたか。やれやれ。」

でも、ねえ、ミーサ。あの人のあだ名は、どうして『パーマン』なの？」

「ああ、それはね。古典コミックに、『スーパーマン』と言う、昔は有名だった作品があつたのよ。それで、そのヒーローの本名が、『クラーク・ケント』つて言つたの。」

「同じ名前なのね。」

「そう。」

でも、本人は昔からあんな調子で、女たちから見ると、スーパーマンの『ス』の字も似てない残念なヤツだったのよね。わかるでしょ。

だから、スーパーマンのスを取つて、『パーマン』つて、あだ名がついたのよ。」

「それつて、かなりキツイあだ名だよねえ。」

「いえいえ、その逆なのよ。」

当の本人は、『あだ名がつくくらい、皆さんにイジツつてもらえて、これはオイシイ』と喜んでいたそうよ。

マツタク……。そのころから、こういう、どうしようもないヤツだったのよ。」

ミーサは、辛辣な言葉を言いつつも、『でも憎めないヤツ』という笑顔であった。  
「ナハハハ・・・」

茉莉香は苦笑いをするしかなかった。

「それで、茉莉香。突撃の手順の打ち合わせなんだけど・・・」

チアキは、輝くようなシルクの青を基調にした海賊服を着て現れた。

通信モニター画面に映るチアキの姿を見て、茉莉香は驚いた。

「うわーあ！ チアキちゃん、その海賊服、とつても素敵だよ。ほんと、キラキラしている・・・」

「あら、そうかしら・・・」

チアキは、咄嗟にそう言つて猫をかぶつた。そして、微笑みを浮かべて目を逸らし、金貨の女神に似ていると言われる、美しい横顔を見せた。

チアキの衣装のデザインは、茉莉香と同じカリビアン・スタイルである。しかし、帽子のマークはドクロではなく金貨の女神の横顔のレリーフだった。上着はウエストがくびれて、若い女性らしい細身のスタイルを強調した大胆なカットが施され、さらに随所に華やかなフリルがつき、金ボタンや肩章、胸の金鎖まで、すべてのアクセサリーには本物の貴金属や宝石が輝いていた。もちろん、青のミニスカである。

この戦闘の取材では、画像だけがテレビ局にも提供されていたので、銀河テレビは、海



賊服を着て笑顔でことばを交わす茉莉香とチアキの映像を交互にアップで生中継していた。

いよいよ、この遠征最大の見せ場が近づいてきた。視聴率は「うなぎのぼり」である。テレビ中継では、二人の艶やかな「娘海賊姿」を見ながら、スージーのレポートも熱が入っていた。

「弁天丸とローズアロー2号が出発しました。

そして、皆さんご覧ください。チアキ様とキャプテン茉莉香が、色鮮やかな海賊服にお召し替えになって、お出ましになりました。いま、お二人が言葉を交わし、打ち合わせがおこなわれているようです。

お二人とも、光り輝いていますねえ。この美しい姿には、うっとりしますねえ。

さあ、華麗なる出撃はもうすぐです。

この後も、銀河テレビは生中継でお送りします。

チャンネルはこのまま、銀河テレビです。」

21—2 マンチュリア軍・戦艦「栄光号」艦内（アルファ4衛星軌道上）

マンチュリア軍の戦艦、栄光号のブリッジでは、防衛軍総司令官兼栄光号艦長のキム大将が、銀河テレビの放送を見ながら、こう言っていた。

「姫様たちが、いよいよ、来るな。」

それにしても、こつちの誘いに乗ってわざわざ白兵戦を挑んでくるなんて、相当に自信があるのだろうか。

わが軍の王族にはそんな度胸のある者はいなかったが、さすが銀河聖王家だ。伝統に則つて、常に兵の先頭に立つ気概を失つておらぬ。」

「そうですね。敵ながらあつぱれな姫様たちですね。」

防衛軍副司令官兼栄光号副長のチヨウ少将がそう言った。

「だから、本来なら、わが王族が姫様のお相手をすべきところだが、いまのわが軍ではそれはかなわない。」

その代わり、総司令官である私がお相手することでお許しいただこう。

お前ら、姫様に手出しをするんじゃないぞ。俺の相手だからな。」

キム大将が言った。

「わかつていますよ。」

では、私は、キャプテン茉莉香のお相手を勤めさせていただきますよ。

お前ら、キャプテン茉莉香に手出しをするんじゃないぞ。俺の相手だからな。」

チヨウ少将が、それに加えて言った。

「へえーい。」

防護服に身を包んだ5人の軍人たちが、ニヤリと笑って答えた。

キム將軍以下、7人の軍人は、マンチュリア軍の本物の軍人だった。彼らは皆、定年退官して予備役に編入されていた老人ばかりだった。

ただし、彼らは、軍の中でも現役時代から実力者と評価されていた者だった。その点が、乗員として栄光号に乗り込む若いクローン兵達とは、決定的に違っていた。

その時、7人のマンチュリア軍人のうち、ブリッジで操舵手を勤める者が言った。

「弱い時空震です。敵船がタツチダウンしてくるものと思われます。」

「いよいよ来たか。ビームシールド展開せよ。」

「了解。」

しかし、タツチダウン直後のローズアロー2号が次々に放った火球の炎が、ビームシールドを突きぬけて、栄光号の対空砲火や主砲を焼いた。

たちまち、栄光号は火力を失い、攻撃ができなくなつた。

「よくし。敵の攻撃は止まったぞ。白兵戦部隊、出撃準備。」

強襲用のドッキング・ハンドを出して、敵艦に打ち込め。」

ローズアロー2号では、スカーレットが敵艦に乗り込むルートを確保しようと指示を出していた。

「弁天丸も負けるな。体当たりだ。いけーっ！」

続いてタッチダウンした弁天丸では、シュニツツァーが強襲の指揮を執っていた。やがて、ローズアロー2号は栄光号の左舷に取りついて、弁天丸は右舷に体当たりして、ともに強制的にドッキングを果たした。

栄光号のブリッジでは、キム大將が最後の指示を出そうとしている。

「なんだ、今の攻撃は？」

ビームシールドを簡単に突き抜けて、撃ってきたじやないか。

人工時空震も、デブリ攻撃も、帝国軍に簡単にかわされたし、白兵戦もあつという間に船に取りつかれたか。

やはり、機械兵器の力では帝国軍にかなわないか……、残念だが。

だが、人間の力では負けないぞ。

最後に、我々、マンチュリア軍人の意地を見せてやる。

さあ、モノども、行くぞぞ。」

「おう！ まず、われら5人が出撃します。将軍、ご武運をお祈りします。」

「ああ、お前たちの武運も祈るぞ。

俺たち二人は、ブリッジで姫様たちが来るのを待つ。

さあ、最後の決戦だ。」

「おう！」

白兵戦に応戦するのは、司令官も含め7人の軍人だけだった。

というのも、大勢のクローン兵は、船を動かすためだけの役割で栄光号に乗船しているからである。それは、マンチュリア軍は、反乱を警戒してクローン兵には武器を持たせず、近接戦闘の訓練もしていないためだった。

キム司令官は、5人がブリッジから出ていくのを見送った後に、チョウ副司令官に言った。

「さあ。私たちも着替えようか。

姫様たちは、派手な衣装に着替えてやってくるからな。

「こつちも、衣装でも負けないように、正装でお出迎えしよう。」

「承知しました。あなたなら、そう仰るだろうと思つてましたよ。ハハハ・・・」

「ハハハ・・・。」

2人の軍人は、妙に明るく笑った。

21—3 ローズアロー2号ブリッジ（アルファ4衛星軌道上）

ローズアロー2号ブリッジでは、艦長のソフィア・クキが白兵戦に備えて艦内に指示を出していた。

ソフィア艦長は、そのファミリーネームの示す通り、帝国海賊クキ一族の人であるが、

帝国軍でも有名な実力派女性艦長だった。ハヤマ准将より先輩にもかかわらず、あくまでも船乗りにこだわり司令部勤務を拒否し、階級は少佐のままだったが、女性士官からは「お母さん」と慕われていた。

「よし、強襲用ドッキング・ハンドが敵艦をつかんだぞ。次は進入路の確保だ。」

「自走式進入路が、敵艦に穴をあけています。まもなく通路を確保します。」

「よし、後はまかせたぞ、スカーレット。間もなく、敵艦への通路が開く。気をつけろよ。」

「了解。」

「艦長、敵艦から通信が入ってきました。」

発、マンチュリア防衛軍総司令官、兼栄光号艦長、大将ビクトリア・キム、宛て、銀河帝国遠征軍副司令官、第二王女チアキ・ブルーローズ殿下。

姫様宛に通信です。」

「ふう〜ん。初めて、軍人らしい奴が出てきたなあ。」

姫様、いかがいたしますか？」ソフィア艦長が言った。

「出るわよ、つないで。」

チアキが言った。チアキは突入用の重装防護服を着ていたが、急いでこれを脱いで、海賊服を着て、帽子をかぶった。

「了解しました。映像が出ます。」

やがて、正装の軍服を着た精悍な目つきをした老人がモニターに現れ、深々と一礼した。

「お初にお目にかかります。殿下。マンチュリア防衛軍総司令官のキムでございます。」

お願いの儀があつて、参上いたしました。」

「キム総司令官。私がチアキだ。話を聞こう。」

「ありがたき幸せにございます。」

それでは申し上げます。私は、王女殿下に一騎打ちを申し込みたいと存じます。

もし私が勝てば、帝国は軍を引いていただきたい。そして、マンチュリアの民がこのニュー・アトランティス、私たちはこの惑星をそう呼んでおりますが、ニュー・アトランティスで静かに暮らすのをお認め下さい。

万が一、私が敗れば、全軍が降伏いたします。いかようにも御処断ください。

いかがですか。」

「キム総司令官、潔い申し出だが、疑問がある。」

王女である私に、そのような申し出をするならば、マンチュリアの王族が出てきてしかるべきであろう。なぜ出てこないのだ、理由を申してみよ。」

チアキは、鋭く突っ込みを入れた。

二人の通信は、弁天丸はじめ帝国の軍艦、そして特別にテレビ局にも中継されていた。『うわーっ、チアキちゃん。カツコイイ！』

さすが、王女様。堂々としているわあ・・・』

中継を見ていた茉莉香も感心していた。

「ご指摘はごもつともでございませぬ。」

大変に申し訳ないこととでございませぬが、この星には、もはや我が王族はおりませぬ。残った者の中では、私が最高位のものでございませぬ。どうかお許しください。」

「どこかへ逃げたと申すのか。」

「失礼ながら、それ以上は申し上げられません。」

「なるほど。逃げたのだな。」

さらに言えば、お前たちの軍規では、生きて捕虜になることは認められず、自決を命じているはずではなかったのかな。あるいは、生き残ったように見える者も、自ら爆弾となつて戦い続けることを命じられているのではないか。

卿の言う『降伏』とは、帝国軍規に従つた降伏ではなからう。」

「殿下は、わが軍の軍規を良くご存知ですなあ。」

「事情は聴いておる。」

それに、私は、既に海明星でお前たちの兵に命を狙われて戦つたので、お前たちのや



り方は承知しておる。

キム大将、私に一騎打ちを申し込むなら、この場で、兵たちに自決を禁じ、生体兵器としての洗脳を解除してみせよ。兵たちが、帝国軍規に沿った降伏をして、その後には帝国の市民として暮らせるようにせよ。」

「わが軍の戦い方を良くご存じで、恐れ入ります。

私は、もはや、そのような姑息なたくらみをするつもりは、ございませんでした。

ですが、せつかくの殿下の御言葉、承知いたしました。お疑いを晴らすためにも、殿下のおっしゃる通りの命令を全軍に出しましょう。」

キム総司令官は、通信機に向かって言った。

「私は総司令官のキムだ。最後の司令を出すので、よく聞きなさい。

兵に命ずる。これから行われる王女殿下との一騎打ちに、私が負けた場合には、兵には自決を禁じ、生きて捕虜となるように命ずる。その後は帝国の指示に従って、帝国の市民として生きよ。

特務員に命ずる。次のことばを復唱せよ。これは、諸君に与えられた命令をすべて解除するコマンドだ。そして、これから行われる王女殿下との一騎打ちに、私が負けた場合には、特務員も、兵と同じように、自決を禁じる。特務員は自爆攻撃を行わず、生きて捕虜となつて、帝国の市民として生きよ。

さあ、これが、復唱することばだ。

『コギンコ、メセンメオ、オインコジョナ。』

.....

いかがですか。殿下、信じて頂けますでしょうか。」

「了解した。」

これから、卿の船のブリッジに向かおう。待つておれ。

ところで、キム総司令官、卿はなぜ白い軍服を着ているのか？」

「ハハハ、それは殿下が帝国軍の制服を着ていらつしやらないのと同じ理由です。

これでも、私は伊達男でございまして……。」

帝国軍旗艦クイーン・オブ・パイレーツでは、チアキとキム総司令官のやり取りを聞いていた女王が、ヤマシタ参謀総長に聞いた、

「キム將軍の言葉は、信じられると思うか？」

「信じられると思います。理由は、彼も軍人だからです。」

陛下、彼の白い軍服をご覧ください。帝国軍規では戦場であの白い軍服を着る時は、いかなる場合か、陛下も御存じでしょう。

あれは、軍人にとって古代から万国共通のルールです。」

「死に装束だと言うのか。」

「はい。」

栄光号のブリッジでは、キム総司令官が話を続けていた。

「それから、殿下。わが軍の副司令官からもお願いがあります。

防衛軍副司令官のチヨウウ少将が、加藤茉莉香大佐に一騎打ちを申し込みたいと言っております。お許しください。

それから念のために申しあげますと、艦内では私の5人の部下が、殿下の部下のお相手をするべく控えております。しかし、彼らには殿下とキャプテン茉莉香はブリッジにお通しするように申し付けておりますので、ご承知おきください。」

「うわー!!!? 私にも一騎打ち? いきなり、そんなことー!」

突然に飛び出た話に驚いた茉莉香だったが、次の瞬間こう言った。  
「面白いじゃないの。海賊を甘く見るんじゃないわよ。」

チアキちゃん一人じゃ、行かせられないから、ちようどいいわよ。

さあー! キャプテン茉莉香の出番よ!」

茉莉香は、チアキの通信に割り込んだ。

弁天丸船長の制服を着た加藤茉莉香の姿が、モニターに移った

「キム総司令官。加藤茉莉香です。

チヨウウ副司令官はいらっしゃいますか?」

「私が、副司令官グレート・チョウウです。」

太った大男で白髪の良い目をした老人が、やはり白い軍服を着て、モニターに現れた。

「加藤茉莉香です。一騎打ちの申し出、お受けいたします。」

「ほう、ほう、即答ですねえ。さすが決断が速いですね。」

銀河系でも高名なあなたと勝負ができて、光栄です。」

チョウウ副司令官は、笑顔を浮かべて答えた。

「それでは、栄光号のブリッジでお待ち申し上げます。」

キム総司令官が、モニター画面の向こうで深々と一礼し、通信は切れた。

#### 2114 戦艦栄光号艦内（アルファ4衛星軌道上）

弁天丸の出撃用ハッチ前では、重装防護服を着た茉莉香、ギルバート、シュニッツァー、それに海賊や帝国軍の兵士たちが突入の合図を待っていた。帝国軍と言っても、実際は、帝国海賊としてのモーガン一家一族のメンバーである。

「船長、与圧確認。ハッチは間もなく開きます。」

ハッチが開いた。

「ようし、突撃。さあー、海賊の時間だあー！ー！」

茉莉香が叫んだ。

茉莉香以下弁天丸と帝国軍の一団とそれに続くテレビ局のスタッフは、マンチュリア軍の戦艦栄光号の艦内に侵入した。

艦内では、ブリッジまで続く廊下の先に、防護服を着た三人の老人の兵士が待っていた。

「キャプテン茉莉香。ようこそ、栄光号へ。さあ、お先にブリッジへどうぞ。」

「そうはいかなわよ。降伏しなさい。もう勝敗は明らかでしょう。」

「失礼ながら、武人としての勝敗はまだついておりません。兵器を使う軍人としては銀河帝国には及びませんが、生身の武人としては我々の方が負けてはいないことをお示ししたい。

我々も、一騎打ちを申し込む。

武器は、剣のみ。ブラスターなど、武人の命を懸けるものではありません。」

そう言つて、三人の軍人は自分のブラスターを放り投げた。

「何、アナクロなことを言っているの……」

その時、茉莉香の話を遮つて、シュニツァーが言った。

「いいだろう。受けてやる。」

「でも、サイボーグのあなたが出るのは、反則かも……。」

そうつぶやいて、茉莉香は苦笑いした。

「わかつている……。弁天丸からは、おい、サブロー。お前が出る。」

シュニツツアールも苦笑いをしながらそう言つて、更にギルバート・モーガンの方を見た。

「では、一族からは、私と、そして、アーサーに出てもらおう。いいかな。」

「若！ なるにも、ご自分が……。」

ギルバートのそばに控えていた老人が言った。

「このあと、加藤大佐が一騎打ちに臨まれるのに、私が何も知らない訳にはいきませんよ。」  
「フフフ……、名門の御子息とお見受けしたが、良い覚悟だ。」

いざ、勝負。」

「おう！」

この後、六人は互いに名乗り会つて、一騎打ちに臨んだ。

「みなさん、スージー・リットンです。銀河テレビでは、白兵戦の様子をライブでお届けしています。」

キャプテン茉莉香とチアキ様の一騎打ちが始まる前に、ブリッジに通じる廊下でも白兵戦が始まろうとしています。

私、白兵戦と言うと激しい銃の打ち合いを想像していたのですが、なんと3対3の一

騎打ちになりました。しかも、古代の戦闘のように、剣だけの勝負です。

私たちの乗った弁天丸側は、弁天丸と帝国軍から合計3人の剣士ができました。

なお、この放送はライブ中継ですが、放送コードに触れる恐れのあるショッキングな映像は、皆さんにお届けできないかもしれないかもしれませんので、ご了承ください。」

スージーのアナウンスの声はいつもと変わりがなかったが、内心はギルバート・モーガンが自分から一騎打ちに出ると言い出したことに驚愕していた。

『高級士官なのに、最前線に自ら進んで出るなんて、そんなバカな。テレビ局じゃ考えられない……』

いや、うちの局にも、そんなバカが一人いた。……あのパーマン副社長……』

そう思った、次の瞬間、スージーは、ギルバートに何かあったらどうしようかと、心配で、心配で、胸が張り裂けそうになった。

一騎打ちの勝負で、最初に動いたのは、弁天丸のサブローだった。

サブローは床すれすれに長い剣を低く構え、唸り声をあげて、そのまま全力で突進した。そして間合いに入る瞬間に剣を少し起こし、突進の勢いのままに、敵の防護服に剣を突き刺した。

敵の軍人も熟練の業でサブローの剣を払おうとしたが、低く構えたサブローの剣はその相手の剣の力に負けずに、防護服の腹を貫いた。

腹に剣を刺されたままの老人は、廊下に寄りかかりながら床に座りこみ、ヘルメットを外して、こう言った。

「・・・集団戦用の剣技か。狭い船内の白兵戦では依然として有効な技だなあ。薙ぎ払ったが払いきれず、力負けしたぞ。」

おい、サブローとやら、見事だぞ。・・・」

続いて、アーサー・モーガンが刀を交えた。

カン、カン、カンと剣を打ち合う音が響き、互いが技を繰り出して、攻守がめまぐるしく入れ替わった。二人とも、熟練の剣士だ。

だが、次第にアーサーの剣の勢いが勝ってきた。アーサーの剣を受けながら、敵の剣士が後退する場面が多くなり、やがてアーサーの一撃が敵の剣士の手から剣を弾き飛ばした。

「私の勝ちだな。」

敵の剣士の喉に、剣を突きつけながら、アーサーが言った。  
「では、私たちの番ですね。」

ギルバートが言った。

カン、カン、カンと剣を打ち合う音は、先ほどの二人よりずいぶん激しい。攻守の切り替えもさらに目まぐるしく、二人は激しく動き回っていた。敵も強いことが誰の目に



もわかる。

ギルバートの激しい戦いぶりを見ていたスージーは、心配で、心配で、仕方がなかった。

『この人は、どうして、こんな命懸けのことを平然とやっているのだろうか……』

こんなに私を心配させるようなことは、すぐにやめてほしい……。

そうだ。私と結婚したら、ギルバートさんには帝国軍なんかさっさと辞めてもらって、お父様の銀行に入ってもらおうわ。

それが結婚の条件よ。決めたわ。そうしましょう。』

スージーがそう思っている時、ディレクターのケントがスージーに言った。

「スージー、怖がってばかりいないで、キャプテン茉莉香の顔を見てみる。」

あの笑顔。ギルバートの勝利を微塵も疑っていないぜ。

むしろ、これからギルバートが何をやるか、楽しみにしているように見えるぜ。」

ケントの言うとおりだった。

スージーの目からは、茉莉香はまるで恋人を見つめるような、うるんだ目と表情で、ギルバートの戦いを見つめているように感じられた。

いや、茉莉香だけではない。他の弁天丸の海賊や帝国軍の兵士たちも、少し笑みを浮かべて、ギルバートの戦いぶりを見ているように、スージーには感じられた。

やがて、敵の剣士の背中が廊下の壁に突き当たり動きが止まった瞬間、激しい気合いと共に、ギルバートの剣が振り下ろされた。

ギルバートの剣は、自分の身をかばうために打ち返してきた相手の剣を割り、さらに防護服のヘルメットを叩き割った。ヘルメットの透明なプラスチックは大粒の透明な塊に分かれて飛び散った。

「うわ~~~~人の頭をぶち割るなんて・・・!!」

スージーには、ヘルメットを割ったギルバートの剣が、そのまま敵の剣士の頭を貫いたように思われた。このため、彼女は思わず目を閉じた。

だが、ギルバートの剣は、敵の剣士の額の上で寸止めされていた。

「私の勝ちですね。」

ギルバートがそう言うと、敵の剣士は闘志が抜けて床に座り込んだ。

『カブト割り』の秘技だった。

防護服のヘルメットは、強化プラスチックで出来ており、古式銃の銃弾でも貫通できないと言われる程に硬いものだが、見事に叩き割られている。

ギルバートは、真つ先に茉莉香の方を振り返って、茉莉香の目を見た。

茉莉香もギルバートの目を見ると、肯いた。

『勝ちましたよ。』

『おめでとう。次は、私の出番だよ。』

二人は目と目でそういう言葉を交わしているように見えた。

そういう二人を、周りの海賊たちは笑顔で見守っていた。

しかし、スージーは、呆然と二人を見ていた。

『この二人の雰囲気は何?!? この二人は何者なの?!?』

その時、ディレクターのケントがスージーに言った。

「ごらー！ ポカンと見とれていないで、レポートしろ。勝ったんだぞ、帝国軍が。」

スージーはハツとして、マイクを持ち直し、口を開いた。

「スージー・リットンです。」

みなさん、ごらんになりましたか。一騎打ちは、弁天丸の勝利に終わりました。

それにしても、強いですねえ。・・・」

「今、連絡がありました。あちらでは、姫様の部隊の一騎打ちも始まるようです・・・。」

中継を切り替え、私もそちらに向かいます・・・。」

ローズアロー2号の白兵戦部隊が侵入した反対側の廊下では、マンチュリア軍の老兵士2人と、チアキ、スカレットを始めとする帝国軍の兵士たち数人が対峙していた。

「あちらは、勝負が付いたようですね。こちらを始めましょう。」

私たちは、ブラスタも剣も使いません。ただこれだけです。」

そう言つて、マンチュリアの二人の老兵士は、名乗りを上げて、剣もブラスタも投げ捨てて、さらに防護服を脱いで、両手を構えファイティングポーズをとつた。

「良いだろう、受けてやろう。私と、ブブカがお相手する」

スカレットが言つた。ブブカは、2メートルを超える大男で、手足が太く長く、いかにも力持ちという兵士である。二人も防護服を脱ぎ捨てた。

「ほう、大男だけでなく、お嬢がお相手して下さるか。なかなかの使い手とお見受けしていたので、対戦できるとうれしい限りですなあ。」

「姫様の進まれる道を切り開くのが、私の務めですから……。」

「そうですか。姫様は、良い家臣をお持ちだ。」

「話が長いな……。俺から行くぞ。」

ブブカは、待ちきれずに、力任せに相手の兵士を捕まえようと突進した。

しかし、相手の兵士は身をかわしてブブカに小手投げをかけて、床に投げ飛ばした。そして、すかさずブブカの首を絞め始めた。

「いけない!」

スカレットがブブカを助けに行こうと飛び出し、自分の相手から目を逸らした。

その隙をチャンスと見たスカレットの相手の兵士が、素早くスカレットの後ろから忍び寄つた。

「キエーイー！」

兵士がスカールレットの間合いに入ったその時に、気合の掛け声とともに、スカールレットの後ろ回し蹴りがさく裂した。兵士は、勢いよく飛び込んだところに頭部をけられたので、吹っ飛ばされて、通路の壁に崩れ落ちた。

スカールレットはそのままブカの応援に向かおうと近づいたが、首を絞められ倒れているはずのブカが、片手をあげてスカールレットを制した。

ブカは、首を締め上げている相手の兵士をぶら下げたまま起き上がり、逆に兵士の首と足を両手でつかんで、肩の上で背骨を反り上げ始めた。

相手が両手を離し、うめき声をあげはじめたので、ブカは力を緩め、相手の兵士を床に投げ捨てた。

「お嬢。私に助けなど不要です。」

ブカは、そう言ってニヤリと笑った。

「スカールレットさんの後ろ回し蹴り、目にも止まらない速さ。すごい大技でしたねえ。たまらず、敵の兵士が吹っ飛びました。」

大男のブカさんの力技もすごかったですねえ。

こちらにも、あつという間に帝国軍の勝利です。」

スージーが興奮してアナウンスをしている。

「さあ、決闘が終わり、姫様たちがブリッジへ進む道が切り開かれました。

いよいよ、最後の最後、娘海賊の出番です。姫様たちの華麗なる出撃まであと少しです。

チャンネルはこのまま。銀河テレビです。」

スージーが中継コメントを終わってホッとしたその時、ディレクターであるクラーク・ケントが言った。

「コラー！ スージー。ボヤボヤするな。」

われわれは、姫様たちより先に、ブリッジに行くぞ。」

「え!? 危ないんじゃないですかあ？ あそこは、まだ敵の支配区域でしょう?」  
「何を言っているんだ。ここが勝負どころだ。」

先に、ブリッジに入ってカメラを構えていないと、姫様たちが華麗な衣装でブリッジに登場されるという今日一番の見せ場の映像が取れないからな。」

「そんな・・・、武器も持たずに突入するなんて・・・」

「オレの武器はこれだ。」

クラーク・ケントは、自分の名刺入れを振りかざした。

「そんな・・・。海賊よりも危ないことをするんですかあ。」

「わかっているだろう!」

テレビ局は、放送の為なら、何でもするんだ。海賊以上に命知らずなんだぞ。さあ、行くぞ！」

21—5 戦艦栄光号ブリッジ（アルファ4衛星軌道上）

チアキと茉莉香は、防護服を脱いで、色鮮やかな海賊衣装に着替え、栄光号のブリッジ入り口のドアに近づいた。

二人は、顔を見合わせて、微笑した。先ほどの一騎打ちの気合から力をもらったためか、チアキも茉莉香も、緊張感が心地よかった。

「私たち、ここまで一緒に来たね。」チアキが言った。

「これからも、一緒だよ。」茉莉香が言った。

二人はドアの前に立って並んだ。

「さあ、海賊の出番だ〜〜。」

ドアが開くと、強いスポットライトが二人を照らした。テレビ局のクルーがライトをつけている。もちろん、二人の衣装を色鮮やかに写して放送するためだ。

銀河テレビの中継は、ドアが開いて、派手な海賊衣装に身を包んだ二人の美少女が、ブリッジに登場する瞬間を、色鮮やかに写しだした。

チアキも茉莉香も、緊張感を持ちつつ、かすかな微笑を浮かべているように見えた。

そして、二人はまるで光のオーラに包まれていくように感じられた。二人の衣装に着けられた黄金の飾りや宝石が、そして、青や黒のシルクの生地が、光に照らされて、まばゆい光を放ち、二人を包む空間自体も輝いているように感じられた。

『まあ、きれいなー!』

『茉莉香様あー!』

『チアキ様あー!』

テレビの向こうでは、何百万人の人々がこう言つて、うっとりし、そして歓声を上げていることだろう。

「お待たせしました。」

茉莉香が一礼しつづつ言った。

「姫様、栄光号のブリッジにお越しいただき、光栄に存じます。」

今度は、総司令官の大将ビクトリア・キムと副司令官の少将グレート・チョウが、チアキに向かって深々と一礼した。

そう言われて初めて、チアキはうなずくように顔を少し傾けて、礼に答えた。王族としての作法通りである。

「では、さっそく、最後の決戦を始めさせていただきます。」

まずは、私から。キャプテン茉莉香、参る。」



「望むところです。」

実際に剣を構えたチヨウ將軍は、太った大男というテレビで見た印象とは違っていた。腹はデブで太いが、筋肉がついた手足の太さは本物だった。

チヨウは、ニコニコと笑みを浮かべながら、鋭く剣を打ち込んできた。その打撃の強さ、剣を振る速さに、茉莉香はじりじりと後退させられた。

壁際近くまで後退した茉莉香は、チヨウの剣とつばぜり合いをしながら、体を入れ替えて態勢を立て直すため、左に回り込もうとした。

それを好機と見たチヨウは、茉莉香への圧力を強め、前へ突進しようとした。

その時、茉莉香が、自分の足でチヨウの足を払った。総合格闘技の足払いの技だ。

不意を突かれたチヨウは、足を高々と宙に浮かせてしまうほどに見事に投げ飛ばされて、ベタンと床に倒れてしまった。

その隙に、茉莉香は腰の拳銃を抜いて、チヨウの頭に銃口を押し付けた。

「私の勝ちと言うことで、よろしいですね。」

茉莉香は言った。

負けを認めて床に座り込みながらも、まだニコニコ笑っているチヨウの顔を見ながら、キム將軍は言った。

「相変わらず、そそっかしい奴だな。ルールも決めずに突つかかるなんて。」

おまけに、その派手な負けっぷりは、まるで海賊ショーだな。情けない。」

「そこまで言うことはないだろう。ひどいなあ。」

「何を言うか。」

やっぱり、お前は、トレーニングして痩せろという俺のアドバイスを無視しているから、いざと言う時に、足払いでひっくり返る羽目になるんだ。

わかったか、親友の忠告には耳を傾けるものだぞ。」

そういうキム將軍の顔も、ニコニコ笑っていた。

「では、姫様、参ります。私は劍のみで勝負を挑みます。」

キム將軍は、鋭く劍を振りまわして、チアキに迫ってきた。チアキも防戦しつつも、反撃の機会を窺っている。

やがて、チアキは、フェイントでキム將軍の劍をかわすと、反撃に転じた。激しく切り込んでキム將軍を追い詰めた。

二人の劍がぶつかり合い、激しい音をたてている。

そのさなかに、不意に、キム將軍が語りだした。

「楽しいですなあ。実に楽しい。」

姫様が劍をふるうお姿を拝見していると、自分の若いころの話を思い出して、あのころの楽しい思い出がよみがえります。」

「卿は、いきなり何を言い出すのだ。」

チアキとキム將軍は劍を交わしながら、言葉も交わし始めた。

その時、テレビ撮影を指示していたクラーク・ケントが、カメラマンに言った。

「音声は放送されていないよな？」

「はい。カットされています。」

「ならば、姫様の画像がテレビに写るように追いかける。」

視聴者は姫様のお姿が見たいのだ。敵役の將軍なんか後ろ姿で写せば良い。老人の顔や口元を写しても仕方がない。」

クラーク・ケントは、急にカメラマンに指示を出した。

もちろん、その真意が、キム將軍の唇を読まれて、その話が視聴者に理解されることを防ぐことだと、カメラマンにもわかった。

「はい。承知しました。」

「私たちは、若いころに海賊船に乗っていたことがありますてねえ。」

「ほう、アメージング族の海賊船か。」

「ハハハ・・・もう忘れましたなあ。」

その船の船長は、実に勇敢な男でしたが、その船の副長が、また飛び切りの美しい女海賊でした。

しかも、副長は、剣を抜けば、どんな男にも負けないくらい強かったし、船の運航や戦いに関する船長への進言も、あの若さにもかかわらず、どこで経験を積んできたのかと驚くほど、的確でしたなあ。本当に賢い方でした。」

「その船の名はなんというのだ。」

「忘れましたなあ。ずいぶん昔のことですからなあ。」

なにせ、あの頃の私たちは、ただの下級船員でして、毎日毎日、大酒を飲んでは大騒ぎして、ケンカして、思いつきりバカをやっていましたから……。

楽しかったと言うことしか、覚えておりませんなあ。ハハハ……。」

「嘘を申すな。船長の名はなんという。副長の名は何というのか？」

「忘れましたなあ。」

でも、船長と副長が並び立ったお姿は、絵のように美しかったので、心に焼き付いております。とりわけ、美しい副長は私たち下級船員の憧れでした。

それにしても、副長にはよく怒られ、殴られ、蹴飛ばされたりもしましたなあ。

なにせ私たちは、酔い潰れると、すぐにブリッジでも廊下でも所構わず、寝てしまいましたからなあ。

『目を覚ませ！』、

『寝るなら船員室で寝ろ！』とねえ。

ハツハツハ……。」

「そんなに大切な思い出ならば、船の名も、船長の名も、副長の名も、忘れるはずはなからう。この大嘘つき！」

キム將軍の話にいらだつたチアキは、そう言つて劍を振りかざし、將軍の劍に向かつて渾身の一撃をたたきつけた。

キーン！

チアキの一撃で、キム將軍の劍が、彼の手から弾き飛ばされた。

「私の負けですなあ。」

もう握力が無くなつていました。恐れ入りました。」

そう言つてキム將軍は痺れた手を振りながら、チョウ將軍の横に並んでブリッジの壁際に座り込んだ。

「チアキちゃんくくく!! 勝つたよ。勝つたんだよ、私たち。」

それまでのチアキとキム將軍の勝負を緊張して見守つていた茉莉香は、そう言つて、すぐに駆け寄つて、チアキにしがみついた。

「茉莉香、勝つたね……。私たち、勝つたね。」

チアキも茉莉香を受けとめ、二人は抱き合つた。

それまでの緊張が解け、二人は涙を流していた。

「皆様、ご覧下さい。華麗なる出撃が、いま、勝利の栄光で幕を閉じました。

チアキ様とキャプテン茉莉香が、決闘に勝ちました。

ご覧のように、チアキ様とキャプテン茉莉香は、しっかりと抱き合い、勝利を喜び合っています。

これでマンチュリア軍は降伏し、戦いは終わるでしょう。

銀河帝国とヒガン共和国の勝利です。

しかも、お二人の命懸けの戦いのおかげで、敵の大勢の兵士が命を救われました。

何と、素晴らしいことでしょう……」

スージーのアナウンスは、最高潮だった。

テレビの中継の外では、喜び合うチアキと茉莉香を見ながらブリッジの壁にもたれて座っていたキム將軍とチヨウ將軍が話し始めた。

「うまくいきましたなあ。」

「ああ、予想以上だ。時間も稼いだし、兵士の犬死は防いだし、娘海賊と楽しく一戦交えたし……」

「これから、どうしますか？」

「決まっているだろう。我らの『副長』がたたき起こしてくれるまで、眠ろう。」

「そうですねあ。あの怒鳴り声をまた聞きたいですねあ。それに、船長にも、またお会い

できますよ。フオフオフオ・・・」

そう言つて、二人は、ポケットから取り出した錠剤を呑んで目を閉じた。テレビ放送が終わった。

まだ、茉莉香は、チアキにしがみついたままだった。

「茉莉香。いい加減に離れなさいよ。恥ずかしいじゃないの。」

チアキが、感激の涙の余韻が残る声で言った。

しかし、茉莉香は離れなかった。

茉莉香は、これほどまでの本気の戦いを経験したことは無かった。それだけに、興奮が収まらず、涙があふれて止まらなかったからだ。

「チアキちゃん、・・・ううう。」

「もう、しょうがないなあ、茉莉香は。良いわよ、・・・泣きなさい。」

「うん、一緒にね。」

「何を言つてるの。私は泣いてなんか、いないわよ。私は。」

「また、また・・・」

「泣いてない!」

茉莉香にしがみつかれたまま、チアキは叫んだ。

その後、銀河帝国軍とヒガン共和国軍の共同部隊は、後に「ニュー・アトランティス」

と改称される「惑星アルファ4」に地上戦用の部隊を降下させて、占領作戦を実施した。しかし、占領に当たって、逃げ遅れた奴隷商人たちがゲリラ戦を挑んで抵抗したため、地上部隊に相当数の死傷者が出た。

その後、星に残っていた被支配階級のマンチュリア人の協力もあり、地上戦は一週間で終わり、惑星の治安は回復に向かった。

他方、支配階級のマンチュリア人は、全員、宇宙のどこかへ逃亡していた。こうして、銀河帝国史上最長の遠征、M—8801星団の包囲戦は終わった。



## 第二十二章 レオニー二家の夕食会

22—1 帝国軍最高司令部（クイーン・オブ・パイレーツ艦上）

M—8801星団への遠征では、帝国軍の旗艦クイーン・オブ・パイレーツはヒガン星団の惑星ライセ衛星軌道上に留まり、M—8801星団自体への遠征作戦の指揮は、機動空母グランドマザーが担当した。

クイーン・オブ・パイレーツ上の帝国軍最高司令部では、M—8801星団の惑星 $\alpha$ 4の占領作戦が一段落したことを受けて、参謀本部のヤマシタ参謀総長から女王に今後の方針が説明された。

「M—8801星団における宇宙空間での戦闘は、完全に終結しました。

つづいて、M—8801星団遠征軍の本隊が、惑星 $\alpha$ （アルファ）4に着陸し、マンチュリア人の本拠地、惑星 $\alpha$ 4の占領も完了しました。惑星 $\alpha$ 4の占領軍は、惑星の主要行政施設と、マンチュリア人の奴隷売買のもととなったクローン人間の生産・保育施設を押さえました。

現在は、占領地の民生を安定するため、当面の間、軍政を敷く準備をしております。今後は、戦闘にかかわった部隊を順次帰還させて遠征軍の規模を縮小しつつ、惑星 $\alpha$

4の占領行政にかかわる部隊と交代することにしております。そのため、すでに、帰還予定の将兵と船舶に対して、健康診断と検疫を始めております。」

「そうか。予想以上に順調だな。」

それで、マンチュリアの王族を始めとする支配階級の人々の逃亡先は、わかったのか。」

「正確には、まだわかりません。」

逃亡した宇宙船の出発が予想外に早い時期に行われたようで、時空震の航跡も探査することができませんでした。

ですが、α4に潜入して情報を探っていた海賊達によると、行き先はマゼラン星雲と聞いているそうです。」

「マゼラン星雲?! またずいぶん遠いところを選んだなあ。」

「はあ、銀河系内や近傍の星団では、銀河帝国の追及を逃れられないため、思い切つて遠いところを目指したと聞いております。」

「アンドロメダと違って、われわれから遠ざかる銀河か。われわれから逃げるのには、都合という訳か。」

しかし、彼らは、そんな遠い目的地に、無事にたどり着けるのかなあ。

彼らの航海技術は、銀河間の航海を可能にするほど進歩しているのか?」

「いえ。捕獲した彼らの軍艦を調査した結果では、進歩していると思えません。

実際に捕獲した彼らの船は、ヒガン星団のアメージーク族から譲り受けた船と帝国内の船のスクラップを集めて作った船だけでした。

そのような手持ちの船だけで、銀河間の航海に出発したようです。」

「そうか。それほどまでに、帝国の攻撃を恐れていたのか。」

「そう思われます。」

ですから、移民船の出発のために、クローン人間の眠っていたコールドスリープ・ベッドを、急いで空ける必要があったと思われます。

その結果、急に目覚めさせたクローン人間の処遇に困って、奴隷として売り出したと言うのが、奴隷売買のもう一つの理由だったという情報があります。」

「では、帝国での反軍ムードを醸す世論工作も、時間稼ぎだったという訳か。」

「そう思われます。」

それに、被支配階級のマンチュリア人を置き去りにしたのは、船団を身軽にして出発を急ぐためだけでなく、置き去りにした被支配階級の人間を帝国に戦闘で殺害させて復讐するためだったという情報がございます。」

「どうして、それが復讐になるのだ。」

「恐れながら、聖王家のなかでも青薔薇家の始祖が、マンチュリア人の被支配階級の末裔

であるテオドラ皇后様とされていることと関連があると存じます。」

「……そういうことか。そんなことで優越感にひたつていたのか。悲しいことだ。

それから、チアキや茉莉香たちと一騎打ちをしたマンチュリア軍人七人の身元は分かったか？」

「はい。すでに全員自決して死亡しておりますが、こちらでございます。」

ヤマシタ参謀総長は、タブレット・ブックに情報を表示して、女王に手渡した。

『やっぱり、酔っぱらいのピクターとデブのグロチャンたちではないか。』

アイツらも大人になって、どうやら、まともな軍人をやっていたのだなあ。フフフ……』

女王はそう思つて微笑みを浮かべたが、すぐに笑顔を消して、ヤマシタ参謀総長に向かつて命令した。

「この7人の情報は、第一級の王室機密とする。公式には身元不明ということによからう。」

『第一級の王室機密』とは、女王の許可がないと情報を閲覧できないことを意味している。

「承知いたしました。」

ヤマシタ参謀総長は、表情も変えずに、命令に従つた。

「陛下、話は変わりますが、今日も、クリスティア様から、通信が参っております。

帝国の行政についてご報告と御決裁を頂きたいということですが……。」

「はあ……。」

女王の顔からは銀河帝国の最高権力者としての張りつめた緊張感が消え、いかにも気乗りがしないという表情で、銀河標準時の時刻表示を見て言った。

「もう執務時間は終了だ。明日聞くとっておけ。私は、忙しいのだ。

発進準備は出来ておるか？」

「はい。いつもどおりです。」

今度は、参謀総長に代わって遠征に随行した副女官長が答えた。もちろん発進準備とは、女王の愛機ローズアロー号のことを言っている。

「では、行ってくる。戻りはいつも通りかなあ。」

「承知いたしました。」

ヤマシタ参謀総長が答えた。

22-2 医務室（機動空母グランドマザー船内）

機動空母グランドマザーでも、帰還の準備が進んでいた。

その医務室では、連日、乗組員の健康診断と検疫のチェックが行われている。今日は、

女性乗組員の診察日で、茉莉香、チアキとグリユーエルも、診察を受けにきた。

「あれ〜。今日は、ミーサはいないんですかあ。」

茉莉香が言った。

「グランドウッド先生は、今日は別の船に行つて、地上戦での負傷者の治療に当たつておられます。代わりに私が来ましたので……。」

担当の医師は、若い男性だった。茉莉香はそれが少し意外で、少し恥ずかしかった。

「いや、その、あのう……弁天丸の船長として、単に、ミーサはどうしたのかなあというだけでして……。」

茉莉香は、結果として若い医師に失礼なことを言ったことになる気が付いて、あわてて言い訳した。

「地上戦でのけが人が予想外に多くて、これまで治療に当たってきた医師の疲労も激しいので、艦隊全体から交代で応援の医師に来てもらっている状態です。できれば、帰還前に治療にめどをつけたいわけです……。」

申し遅れました。私は医師のアレクサンドル・ホワイトです。」

「どうも。加藤茉莉香です。……。」

「では、さつそく、健康診断を始めさせていただきます。……。」

ホワイト医師は、身体の違和感はないかと簡単な質問をして、医療用センサーを茉莉

香の腕や喉に当てた後に、古式の注射器を取り出して、言った。

「採血をさせて頂きます。」

『ええ〜！ 今どき、こんな注射器を使うなんて、・・・』

と、茉莉香は思い、同時に全身から冷や汗が出てきた。

実は、茉莉香は、幼児の頃に海王星で受けた予防接種の注射が痛くて大泣きをしたことがあり、そのトラウマから今でも『注射』とか『注射器』が大嫌いだっただ。

ホワイト医師は、そんな茉莉香の気持ちには気付かないように、茉莉香の腕を取って注射針を茉莉香の静脈目指して突き刺した。

「痛い！」

思わず、茉莉香は叫んだ。

「あ、ごめんなさい。外れてしまいましたね。もう一度、お願いします。」

ホワイト医師は、再度、茉莉香の腕を取って、注射針を突き刺した。

「痛い！」

「あ、またごめんなさい。また、外れてしまいましたね。もう一度、お願いします。」

ホワイト医師は、また茉莉香の腕を取って、三度目の注射針を静脈に突き刺した。既に茉莉香は、顔面蒼白の状況である。

「痛・・・くなかったけど、今度は・・・。」

「はい、うまくいききましたね。何度もごめんなさい。・・・」  
「ご協力ありがとうございました。」

注射器の中には、茉莉香の赤い血液が入っていた。

「どうも～～～。はあ～～～。」

茉莉香は、冷や汗をたくさんかいて、ぐったりした様子で、医務室を出ていった。

「よろしくお願します。」

次に医務室に入ってきたのは、グリユーエルだった。

ホワイト医師は、身体の違和感はないかと簡単な質問をして、医療用センサーをグリユーエルの腕や喉に当てた後に、グリユーエルの細い腕を見て言った。

「直接の採血は無理の様ですから、血液センサーを使わせていただきます。少し痛いかもしれませんが、傷も残りませんので・・・。」

ホワイト医師は、血液センサーをグリユーエルの腕に当ててデータを取った。

「はい。終わりです。どうも。」

「フッフ、先生。」

先生はまだ学生でいらっしやるんですね？」

「ええ？ どうして、姫様にはそんなことがわかりになるのですか？」

医師のいかにも驚いたという声に、周りの医療スタッフが笑いを必死でこらえてい



た。

「だって、注射の練習をなさりたがるのは、先生がまだ医学部の学生さんだからだと思ひまして。」

「ははは……。さっきの加藤大佐の声が聞こえていましたか……。」

「いいえ。茉莉香さんの声は聞こえませんでした。いつも元気な方が、ぐったりした様子で出てきて、何も言わずに戻って行かれましたから……。フフフ」

「いやあ……。でも、私は、学生と言つても、医師免許も取っているし、帝国軍の遠征にも医師として随行させてもらったし、実務研修もあと一年で卒業なんですけどね……。」

それにしても、セレニテイ家の姫様の御言葉は違いますねえ。

あなたは本当に優しい方ですねえ。

それに引き替え、この後にいらつしやる青薔薇家の姫様なら、私のことを何と呼ぶか、想像がつかますからねえ。」

ホワイト医師の自虐的な発言に、また周りの医療スタッフが笑いを必死でこらえていた。

「やつぱり、チアキ様とお知り合いだったのですねえ。」

これからは、私のことは、グリニューエルとお呼びください。」

「はい、ありがとうございます。私のことは、アレックスとお呼びください。よろしくお願います。」

「はい。こちらこそ、よろしくお願します。」

さて、お話の姫様がお待ちのようですから、この辺で失礼しますわ。」

グリユーエルは笑顔を浮かべて、医務室を出て行った。

続いて、チアキが入ってきた。

「よろしくお願します。」

・・・

というより、アレックス！　あなた、やっちゃまったわねえ。

やぶ医者の本領発揮かあ。キャハハハ・・・。

それも、よりによって茉莉香相手にねえ・・・。

茉莉香ったら、ぐったりして、何も言わないで戻って行ったわよ。」

チアキは、ポンポンとまくしたてるようにホワイト医師に言った。

もちろん、また、周りの医療スタッフが笑いを必死でこらえていた。

「いやあ・・・良いところを見せるはずだったんですが・・・。

ちよつと緊張してしまって・・・。」

「もう、ファースト・コンタクトの印象は、最悪ね。」

せつかく、ミーサに代わってもらったのに、ダイナシ。

まあ、最初が最悪なら、このあとはこれ以上悪いことは起こらないと思つて、希望を持つてがんばりましょうね。アレックス。」

「それ、私のことを励ましているんですかあ。」

「あははは、そうよ。私つて、結構、優しいのよ。」

そして、苦笑したホワイト医師は、手順通りの診察をしていった。

「ねえ、アレックス。私も注射の練習に付き合ってもいいわよ。やつてごらんなさいよ。」

チアキが言った。

「ええ？あなたもですかあ？」

「アレックス、それは私の言うセリフでしょう。」

茉莉香もやったんだし、私が協力しない訳に行かないでしょ。」

ホワイト医師は、古式の注射器を取り出して、チアキの腕に刺し、採血をした。

「あら、普通に出来るじゃないの。」

「あたりまえです。私だつて医者です。」

二人のやり取りを聞いて、ついに、周りの医療スタッフが笑いをこらえきれず、吹き出した。その明るい笑い声から、ホワイト医師がなかなかの人気者であることがうかが

えた。

22—3 王族用執務室（機動空母グランドマザー船内）

健康診断のあと、夕食を済ませたチアキとグリューエルは、グランドマザーの貴賓席の奥にある王族用の執務室でくつろいでいた。ここは、極めて高い水準の情報通信セキュリティ・システムが整備された部屋である。

「ねえ、茉莉香は？」

「少し休むと言って、ご自分の部屋に帰られましたわ。」

「そうかあ。本当に茉莉香は注射が苦手だったんだね。」

アレックスに悪いことしたかなあ。

健康診断なら、ちょうどいい機会だと思っただけだねえ。」

「頼まれたのですか。」

「そう。遠征軍のなかにも茉莉香にふさわしい人がいるから、さりげなく引き合わせて欲しいってね。」

茉莉香が、ギルバートさん一筋と決めているなら、私もこんなことは引き受けなかつただけど……。」

「そうですね。」

でも、こういう話は自然と落ち着くところへ落ち着くものですよ。お気になさらないように。」

「グリューエルは優しいね。」

それはそうと、お約束の罰ゲームはどうしようか。」

「それなら、こんなアイデアはいかがでしょうか。茉莉香さんのためになると思いますが……。」

「なるほど、それはいいねえ。もう少し詳しく教えて……。」

「はい……。」

二人の密談は続いた。

「あ、姉さんから電話だ。」

「席を外しましょうか。」

「大丈夫。姉さんは、グリューエルのことをすごく信頼しているから。」

やがて、執務室のテレビ電話に、クリスティア王女の姿が現れた。

「やあ、チアキ。グリューエルも一緒かい。茉莉香はいないのかな？」

「ちよつとお部屋で休んでいらつしやいます。」

グリューエルが答えた。

「そうか。」

それで、早速だが、チアキ。電話したのは母上のことだ。「母上がどうか、されたのですかあ。」

「それが、久しぶりに王宮を離れたせいか、このところ、すっかり羽を伸ばしているようだ。」

夕方近くになって、帝国行政について私が決済を求めようとすると、

『私は忙しい』と言って、嫌がるのだ。

どうも、毎晩のように、惑星ライセのレオニー二家の屋敷に降りて行って、レオニー二家の女たちと遊んでいるらしい。」

「へえ〜〜〜。」

「しかも、副女官長を問い詰めて分かったのだが、警備陣が深夜の帰艦は船の運航上危険が多いと言ったのを良いことに、堂々と『朝帰り』だ。」

「あははは〜〜〜〜〜！ 朝帰り！ ああ、おかしい。」

それでは、まるで『不良』ですね。」

チアキは、『朝帰り』と言う言葉に思いつき吹き出してしまった。

「そうだろう。困った親だ。」

だが、母上がレオニー二家でそれほどまでに楽しい時間を過ごすことができるのは、なぜだろう。

なにか、事情があると思わないか。」

「そうですね。」

「それから、先日、チアキが一騎打ちで戦ったキム將軍たちの素性は知っているかな？」

「それは調査中と聞いていますが……。」

「いや。今日、調べさせたら、第一級の王室機密に指定されていた。」

「やつぱりそうですね。あの話は、まんざら嘘ではなかったのですね。」

「あの話とは？」

チアキは、一騎打ちの最中に、キム將軍が語ったことを話した。

「なるほどなあ……。その『副長』が海賊時代の母上だとすると、船の名前、船長の名前が重要になってくるね。やはり、何か事情があるね。」

「そうですね。」

「そこで、頼みたいのだが、チアキ。」

お前、母上と一緒にレオニー二家の屋敷に行つて、母上の様子を見て来てくれな  
いか？

事情を探るのに、無理をする必要はない。感じたことを教えてくれればいいから。」

「わかりました。」

ちようどいいタイミングです。一緒に来たサーシャがなかなか帰つてこないの  
で、気

になつていたところですから。」

「サーシャか、懐かしいなあ。練習航海以来、会っていないよ。」

「姉さん。私からも、お聞きしてもいいですか。」

「いいよ。」

「お聞きしたいのは、サーシャのことです。」

レオニー二家のグランマが、わざわざサーシャを呼んだ理由、そして、母さんがサーシャを帝国軍の軍艦に乗せて連れて行った理由を、ご存知ですか？

もちろん、久しぶりに実の孫の顔が見たいという単純な話だけではないでしょう。」

「そうだな。でも、私も詳しいことは聞いていない。」

「そうですか・・・。」

「グリューエルなら、そこのところはどう考えるかな？」

クリステイア王女が逆に聞いた。

「私が口を挟んでよろしいのでしょうか。」

「かまわないよ。あなたの考えが聞きたいのだ。」

「はい。私の考えを申し上げます。」

サーシャさんをわざわざヒガン屋団まで呼び寄せると言うのは、それだけ大切な御用があるからだと思えます。



それで、現代でも、妙齡の女性にとつて、本人が直接会う必要がある大切な御用と言え、まず第一に縁談ではないでしょうか。

だから、サーシャさんの御用も縁談に関係があることではないかと・・・。」

「縁談!」

チアキが大きな声を出した。

「はい。チアキさんだつて、茉莉香さんたち二人を直接に会わせることを頼まれたのでしよう。」

「なるほどね。」

縁談なら、何万光年離れていても出かけて行つて、直接会うことに意味があるわね。」  
「ですが、その縁談が、レオニー二家にとつて、さらに銀河帝国にとつて、どういう意味があるのか、そこまでは私にはわかりかねますが・・・。」

「なるほど。グリユーエルは鋭いねえ。・・・」

ああ、そろそろ時間だ。

では、チアキ、頼んだぞ。」

クリスティア王女は忙しそうに電話を終えた。

「姉さんも忙しそうだね。」

さて、では、母さんに電話して、私も連れて行つてもらおう。」

チアキは、クイーン・オブ・パイレーツの女王宛てに電話した。

しかし、電話に出たのは、副女官長だった。

「陛下は、もうお休みになりました。ご伝言なら、お預かりしますが。」

「そう。・・・では、明日また電話するとお伝えください。」

そう言つて、チアキは電話を切った。

「ねえ、グリューエル。今の話、どう思う？」

「正直に申し上げてよろしいのでしょうか？」

「もちろんよ。」

「あの方は、嘘を言っていると思いました。」

「私もそう思ったわよ。これは、直接、母さんのところに乗り込んでいかないと駄目ね。」

明日の朝、クイーン・オブ・パイレーツに行きましょう。

グリューエルもお願いね。

前にも言つたけど、母上の海賊時代のことは全く分からないのよ。

だけど、それは私たち姉妹にとって自分のルーツにかかわる大事なことなのよ。

だから、ぜひ知りたいの。あなたも協力して下さいね。」

「はい。」

とうとう、私にも出番が回ってきましたわ。ウッフ・・・」

グリユーエルは嬉しそうだつた。

22—4 女王執務室（クイーン・オブ・パイレーツ）

翌朝、チアキは、グリユーエルと茉莉香と共に、ローズアロー2号に乗つてグラランドマザーを出発して、クイーン・オブ・パイレーツに到着し、女王の執務室に入った。

三人とも、今日は白鳳女学院の制服を着ている。

女王は、テーブルに向かつて書類を読みながら、紅茶を飲んでいた。

「おはようございます。」三人は朝の挨拶をした。

「やあ、チアキ、グリユーエル、茉莉香、おはよう。」

今日は三人そろつてどうしたんだい。

そういえば、三人とも今日は、白鳳女学院の制服だね。」

「今日は、母上にお願ひがあつてまいりました。」

「なんだい？」

「今日、私たち三人で、惑星ライセのレオニー二家を訪ねてみたいのです。」

実は、帝都へ帰還する日が近づいておりますが、サーシャがまだ戻りません。心配になつてまいりましたので、向こうでの彼女の様子を見てまいりたいと思ひます。

レオニー二家の方にその旨、お口添え頂けませんでしょうか。」

「ふうむ……サーシャかあ。グランマに聞いてみるかなあ……。」  
女王は、傍らに控えている秘書官にレオニー二家のグランマへ電話するように命じた。

やがて、テレビ電話に、ベッド上で上半身を起こした姿勢でこちらを向いた、老婆の姿が現れた。

「おはようございます。グランマ。」

今日はおかげんがよろしいようで、何よりですね。」

「ありがとう。アン。」

ところで、こんな朝から電話してきて、どうしたんだい？」

茉莉香たち三人は、レオニー二家のグランマの姿を初めてみて、その愛情と包容力に溢れ、それでいて年を経てもかわいらしさを失わない笑顔に驚いた。

『この人が、旧宇宙マフィアの大ボスだったなんて、信じられないわよ。』

茉莉香は、ほんとうに驚いた。

「実はお願いがありました、……」

その前にご紹介します。

こちらが、次女のチアキ、真ん中が、セレニティ家のグリユーエル、向こうが加藤茉莉香です。」

女王は三人を紹介し、三人は、それぞれ名を名乗って、初対面の挨拶をした。

「こちらこそ、初めまして。マリア・レオニー二です。」

皆さんには、サーシャがずいぶんお世話になったようだね。私からもお礼を言います。

これからは、私のことをグランマと呼んでおくれ。」

「はい。ありがとうございます。」

「それで、グランマ。お願いのことなんですが……」

この子たちがサーシャに会いに今日にでも、そちらへお伺いしたいのですが、いかがでしょうか。」

女王が言った。

「ああ、おいでなさい。」

私もあなた達に会いたいと思っていたところだよ。

サーシャは、今日は、子供の頃に暮らしていた宇宙船を見に行っているはずだから、早めに帰ってくるように連絡しておくから。」

それで、アンと一緒に来るのかい、別々かい？」

「グランマ、それは……」

女王は少しあわてて言った。

「何、言っているんだい。いくら隠しても、子供は親のことは御見通しさ。うまく隠し通していると思っっているのは、親だけさ。ハハハ……。」

なあ、チアキ。」

「はい。毎晩、毎晩、母がご迷惑をお掛けしているのではないかと、案じておりました。」  
チアキはそう言っつて、わざとらしく、ゆつくりとカーテシーの作法をしつつ、グランマに頭を下げた。

「あははは……。私の言うとおりだろう、アン。」

それに、礼儀正しく、賢い娘さんじゃないか、さすがお前の娘だよ。」

「うむむむ……。」

女王はグランマに何も言い返せなかった。銀河帝国の女王もこの人の前では、ただの『後輩』だった。

「では、チアキ、グリユーエル、茉莉香。」

皆さんたちも、今宵のレオニー二家の夕食会にお招きするよ。

私からも紹介したい人が大勢いるからね。呼んでおこう。

何せ、この前の公式歓迎会は、私も欠席だったし、皆さんもレオニー二家の者と十分に話ができなかっただろうからね。

その点、夕食会は、インナーだけで、しかも、時間無制限だからね。

楽しみに待っているよ。」

グランマからの通信が終わると、グリューエルが目を輝かせて、言った。

「あら、まあ。夕食会は『時間無制限だ』と、おっしゃいましたわね……」

「セレニティ王宮のパーティと同じかしら……」

とすると、お客さんがすべて帰るまで続くということかしら……」

茉莉香が言った。

「茉莉香、言っておくけど、私は他のお客様がみんな帰るまで、絶対に帰らないからね。

もちろん、寝ないわよ。」

あそこで何が行われているか、見極めたいのよ。」

ね、グリューエル、お願いね。」

チアキが言った。

「はい。承知しました。」

もちろん、茉莉香さんも、ご一緒ですよ。」

グリューエルが言った。パーティに強いグリューエルは、時間無制限と聞いて、さらに張り切っていた。

「ナハハハ……」

グリューエルの喜んでいる姿を見て、茉莉香は苦笑いした。

「でも、グリユール。翌日の朝になっても、昼になっても、『夕食会』が続くなんて、ヘンだよ……。」

「茉莉香さん、この前、セレニティにいらつしやつた時にお気づきになりませんでしたか。」

「パーティーの時、王室の時計は、午後12時を過ぎると止まるのですよ。午前0時のま  
ま、お客様が帰られるまで、無制限に……。」

「王がお命じになるまで、時計の針は動き出しませんわ。フッフ。」

「そんなこと、何のためにするの?」

「それは、楽しい時間があつという間に過ぎ去ってしまったくないようにという、『おもてなし』のこころです。」

「これは、昔からの王家の伝統なのです。」

「大昔から、暦や時間を決めるのは、王の権限なのよ、茉莉香。」

「セレニティ王家は、パーティーの時だけは今もそれをやっているのよ。」

「チアキは、そう言つて笑つた。」

「ええ!?! …… そうなの? …… ふーん……。」

「そういう風に言われると、王室が時間を止める気持ちもわかる気がして、茉莉香は微笑んだ。」



『それにしても、銀河系の王室の古い伝統と同じことを、今も続けているレオニー二家の人たちは、いったいどんな人たちなんだろう・・・?』  
 そう考えて、チアキは、ますます興味がわいてきた。

### 22—3 レオニー二家の屋敷（惑星ライセ）

その日の夕方、女王と茉莉香、チアキ、グリユーエル一行は、惑星ライセのレオニー二家の屋敷に到着した。レオニー二家の屋敷は一つの都市といつても過言ではない程の広さがあるが、一行はその最深部、レオニー二家の私的空間に通された。

その部屋は、華麗なステンドグラスやタイルの装飾に彩られ、天井から宝石をちりばめたシャンデリアが輝く豪華な広間だった。そこでは、すでにウエルカム・ドリンクが配られ、大勢の人々が談笑していた。

その人垣の中央に、車いすに座ったグランマを見つけて、一行は近づいた。

「ア~~~~~ン~~~~~! お~~~~ そ~~~~ い~~~~。」

海賊服に身を包んだ女性が、女王の姿を真つ先に見つけて、まるで昔なじみのようなため口で、女王の名を呼んだ。

「ごめん、ごめん。ミューラ。今日は娘たちを連れてきたよ・・・。」

女王も、ため口である。

「皆さん。ご紹介します。」

こちらから、私の次女のチアキ、真ん中がセレニテイ家のグリユーエル、向こうが加藤茉莉香です。」

三人は、それぞれ名を名乗ってあいさつした。

それに対して、グランマの周りを囲む出席者から返礼の挨拶があった。

「初めまして、王女殿下。ミューラ・グラントです。ミューラとお呼びください。」

そして、茉莉香。グリユーエル。久しぶりだねえ。」

茉莉香は驚いた。目の前にいたのは、辺境海賊ギルドの大幹部にして、海賊船キミィラ・オブ・スキュラの船長ミューラ・グラントだった。賞金首の彼女が、なぜここに居るのか、しかも賞金をかけているはずの銀河帝国の女王と極めて親しい様子なのだが、それらの理由が分からなかった。

「初めまして、王女殿下。マイラ・グラントです。マイラとお呼びください。」

・・・よう、茉莉香。グリユーエル。久しぶりだねえ。」

その隣には、ミューラ・グラントの妹、海賊船愛の女王号の船長マイラ・グラントもいた。彼女もチアキに挨拶した後、グリユーエルと茉莉香の顔を見て言った。

そのあとも、三人は、銀河系各地の女海賊から次々とあいさつを受けた。いずれも、名だたる女海賊たちだった。

たちまち、茉莉香を中心に、海賊世界の世間話、つまり海賊稼業の最近の出来事に関する女性たちのおしゃべりに花が咲いた。

「オリオン腕方面の景気はどうだい？」

「まあ、ぼちぼちですね。」

「そう言えば、オリオン腕の先端部を根城にしている、フック5世船長の娘が婿をもらつたそうだってねえ。」

「あそこは、跡取りが、ひとり娘だからね。」

「へえ〜。そうなんですかあ。」

茉莉香は、他人事でないに興味を持った。

「その娘は、確か18歳じゃなかったかなあ。」

「茉莉香、お前も18歳だろう。ぼやぼやしてられないねえ。」

「ナハハハ・・・」

そういうえば、みなさん、ここへ来るときにはミルキーウェイを通つてこられたんでしょう。時空トンネルの使い心地はどうでしたか。・・・」

茉莉香は苦笑いして、話題を変えようとした。

「サーシャを呼んでおくれ。」

世間話が一段落したところで、グランマが、給仕に言った。  
すぐに呼ばれて現れたサーシャに、グランマは言った。

「サーシャ、お前のお友達に、一族の若い人たちをご紹介なさい。」  
「承知いたしました。」

サーシャは、グランマに一礼して、茉莉香たちの方に振り向いた。

「ごめんなさいね。長い間、留守にして。ご心配をおかけしました。」

さあ、こちらへどうぞ。」

サーシャは、三人を連れて、大広間の別の場所に移動していった。

「なかなか良い子たちだねえ。」

「グランマが言うとおり、次の時代を背負って立つにふさわしい子たちですね。」

「私も賛成しますよ。あの子たちがいれば、われらの協会も安泰だ。」

遠ざかる四人を見ながら、ミューラ達、女海賊が口々に言った。

「私もそう思うけれど……。」

それで、グランマ。結局、サーシャは承諾しなかったのですね。」

アン女王が言った。

「ああ。そのとおりさ。」

父の跡を継いで我ら一族の当主になることも、将来、ヒガン王国を樹立した際に王か

王妃になることも、興味がないそうさ。

もちろん、大統領フランシスコ・レオニー二の息子、ジュリアーニとのお見合いも断られたよ。ハハハ……。

医者になって、海王星であの家の子として暮らしていくと決心しているそうさ。

あの子は、一旦、こうだと思ったらあ、絶対に人の意見なんか聞かないんだよなあ……。本当に強情と言うか、頑固なんだよ。

でも、私もあきらめないからね。気長に待つことにしたよ。」

グランマは、顔をしわだらけにして、微笑んだ。

「そういう意志の強いところは、さすが、あなたのお孫さんですなえ」

「そう言えば、昔、グランマも、ご両親の薦める縁談を断って、自分の好きな男と結婚したんですよ。」

断られたあいつの方が、みんなが認めるいい男で、人望も実力もあったのに……。」  
女海賊たちは、そう言って昔話を始めた。

「ハハハ……そういうこともあったなえ。」

「それで協会の未来のことですが、チアキと茉莉香は良いとして、あとは、グリユーエルが、まだ海賊ではないのでしたよなえ。」

と、アン女王が言った。

「それについては、すでに打つ手は考えている。」

「まさか、あの手を使うんじゃないでしょうね。」

「そうだよ。深窓のご令嬢が、自ら進んで広い海に乗り出していくには、やっぱりあれが一番良いと思うがねえ……。」

グランマとアン女王のやり取りに、ミューラ達が口を挟んだ。

「そうですよ。それが、一番良いんじゃないかい。」

「本人は、結構、ロマンチックだと思うんじゃないかなあ。家出なんて。」

『女王様と同じだ』と言って、喜ぶと思うよ。」

「おいおい、過激だなあ、その言葉は。」

あわてて、アン女王が打ち消した。

「アン！ 自分もやらかしたくせに、『過激』とはよく言うわねえ。」

「あれは、事情がちがうよ……。」

「お前、いつの間に、そんな分別のあるオトナになったんだい……。」

「ハハハ……。」

女海賊たちが、一斉に笑った。

「私も、全力で応援するよ。」

「それに、あの子は、三年も飛び級して大学に入るそうじゃないか。その余った三年を有

意義に過ごすべきだよ。貴重な青春なのだからね。」

他の女海賊たちも口々に賛成すると言いながら、グリューエルの方を眺めた。

どうやら、グリューエルをめぐる陰謀がまとまったようだ。

女海賊たちの視線の向こうでは、茉莉香、グリューエルそしてチアキの三人が大勢の若い男女に囲まれて、楽しそうに話していた。

「ええ〜〜！ そうなんですかあ！」

レオニー二家の若者の話には茉莉香が驚いて、大きい、しかし、とても楽しそうな声を張り上げている。

「それでねえ、茉莉香さん……。」

茉莉香の笑顔を見た周りの男女が、さらに楽しそうな表情で茉莉香に話しかけていく。

こういう時の茉莉香の笑顔は、ひとときわ光り輝いている。誰もが、茉莉香の笑顔を見つと見ていたくて、その場を離れられない。

そんな若い人たちの姿を見ながら、グランマが言った。

「さあ、我々の仕事はこれで終わりだ。みな、このあとは大いに、飲んで、食べてくれ。」

「アン……。わかってるよな！ 今晚は帰さないぞ。」

「何を言っている。先に酔って寝るのは、いつも、お前の方だ……。」

「なにを言う。お前なんか、まだ50年ほどしか生きていないじゃないか。」

「そうだ。私たちと比べれば、お前は、まだまだ、生意気な小娘に過ぎん……。」

「勝負だぞ……。今晚こそ決着をつけてやる……。」

長命種のミューラ、マイラの姉妹が声を合わせて言った。

「望むところだ……。」

アン女王が答えた。

こうして、女海賊たちは、上機嫌で食堂へ向かった。

#### 22-4 弁天丸ブリッジ（ヒガン星団宙域）

弁天丸は、機動空母グランドマザーの船内にまだ収容されたまま、ヒガン星団から銀河系への帰還の準備中である。しかし、クルーはすでに帰還後に向けて動き出している。

弁天丸船長加藤茉莉香は、ミーサから、帰還後のお仕事のスケジュールについて相談されていた。

「ほんと、テレビの力（ちから）ってすごいわねえ。」

このあいだの茉莉香の一騎打ちを見たといつて、海賊ショーの出演依頼が殺到しているのよね。」



「ええ？こんなにくさん！」

私、もう少しで卒業だから、出来るだけ学校にも行きたいのよね。」

「まあ、これをみんな引き受けることは弁天丸のスケジュールとしても無理なので、可能な限り絞ることにしても、ざっとこのくらいはあるわね。・・・」

「ええ、削つても、こんなにあるの。」

「仕方がないわよ。」

昔から、仕事の依頼は断らないというのが、弁天丸のポリシーだからね。今回のスケジュールから漏れた仕事も、時期をずらしてもらうだけよ。必ず依頼は果たすわよ。

それに、船長が出演するショーのギャラも上がったのよ。もう最高ランク。ほら、こんなに。」

「おおお〜〜すごい。これは、稼がないとねえ。」

「それはそうと、このあいだ、惑星ライセにあるレオニー二家のお屋敷に行つたんですつてね。」

「行つたよ・・・。楽しかったなあ。」

「そう、よかつたわね。例の『時間無制限の夕食会』だったんでしょ。何時間くらい遊んだの。」

「グリユーエルとチアキちゃんは、最低でも100時間は頑張るつて言つて乗り込んだ

けど、結局、五日五晩、120時間くらいかなあ。

サーシャが、レオニー二家の若い人たちを紹介してくれたんだけど、あの子たち、銀河系中から集まっていたんだよ。

それで、みんな、元気なんだよね。みんなで、おしゃべりして、食べて、歌って、踊って、ゲームして……。

それから、スポーツもしたよ。私、スカッシュは連戦連勝。男の子を何人も負かしたよ。」

「それにしても、ずいぶん長い時間、続いたのね。」

「そうなんだよ。眠いのを通り越すと、もう何でもよくなっちゃって……。結構ハイな気分だったよ。」

「それから、レオニー二家風のコスプレ大会もやったんだよ。みんな、与えられたテーマに合わせて、思い思いに趣向を凝らした衣装を身にまとい披露しあうんだよ。

衣装は、注文に合わせてその場で作ってもらうんだよ。すごいでしょ。」

「それで、茉莉香は、どんなコスプレをしたの?」

「お題が、『ハムエッグ』だったから、……」

「ハムエッグ? なにそれ?」

「敵(かたき) 同士の二人が、実は恋人同士という関係だそうよ。」

「なんか変ねえ。それで、茉莉香はどういうコスプレをしたの。」

「私は警察官の男の子ロメオ役、グリユーエルが仮面の怪盗のジュリエット役よ。しかも、二人は恋人同士っていう設定なの。」

私、男装は初めてだったけど、とてもカッコイイって、大評判だったのよ。」

「それは良かったわね。でも、そのテーマ・・・やっぱり、ヘンね。」

それは、『ハムエッグ』じゃなくて『ハムレット』じゃないの。」

「ナハハハ・・・、そうかなあ。」

それからね、時々『リフレッシュ』と言っては、水着に着替えて、お花をいっぱい浮かべた温水プールで泳いだり、女の子たちみんなでエステもしてもらって・・・

ホント、みんなと仲良くなっちゃったよ。」

「ほんとうに、よかったわねえ。」

「うん。」

女の子たちと、本当に仲良くなって、最後の別れ際には、

『これから先、幾つになっても、ずっとずっと友達だよね』

といて言って、みんなで涙を流して誓い合ったんだよ。

それに、私、中学、高校と、ずっと女子校だったから、同じ年頃の男の子たちと、あんなに遊んだことなかったのよね。だから、本当に楽しかったなあ。

ホントに、銀河系中に『友達百人』できちやったよ。これからは、弁天丸で銀河系のどこへ行っても、友達がいるから心強いよ。

楽しかったなあ……ふふふ。

あれ？

ねえ、私の話を聞いて驚かないということは、もしかして、ミーサも『夕食会』に行つたことあるの。」

「ホホホ……。さあどうかしらね。覚えてないわ、そんな昨日のことでもないし……。

昔は、お屋敷ではなく、船の中でやっていたらしいけどね。」

ミーサは、遠くを見るような眼をして、微笑んだ。

「それじゃあ、茉莉香も海賊シヨールをご披露したんでしょ。」

「ナハハ……。分かりますか？」

「分かるわよ。リクエストされて、茉莉香がノリノリでやっている姿が目には浮かぶわよ。」

「そうなんだ。」

私の場合は、サーシャも含めてレオニー二家の四人の女の子たちと一緒に『白波五人娘』というタイトルで、海賊シヨールをやったんだ。」

「茉莉香、『白波』というのは、何のことか、知ってるの？」

「もちろん、教えてもらったもの。昔から海賊のことを言うんだって．．．  
それで、セリフはねえ、

『お前は、誰だ!?』『誰だ!?』って、男の子が掛け声をかけてくれて、

私は、ねえ、

『知らざあ、言つてきかせやしよう。』

浜の真砂とゴンザエモン、歌に残せし海賊の、

種は尽きねえ新興浜、その白波の一粒種、

生まれた家は母一人、海の明け星世を忍び、

定め之星を知らされず、お嬢様よと育てられ、

それでもヨットで星の宇宙（うみ）、出たいと願う船乗りの、

血は争えぬ十六歳、急な知らせで親の跡、

百年続くこの家業、女子高生で受け継いで、

腕に覚えの乗組員、お得意様に支えられ、

辺境宇宙で大繁盛、そこに現わる謎の船

仲間を狙う海賊に、売られたケンカ買って出て、

命を懸けた大戦（おおいくさ）、戦いすんで日が暮れて

敵（かたき）のお嬢に気に入られ、広い宇宙（うみ）に出ておいで

誘い誘われ帝国へ、今はちぎりの義姉妹（ぎきようだい）、

此度（こたび）はヒガンのこの地まで、船を飛ばして大遠征、

またも演じた海賊の、名せえゆかりの、

弁天お嬢、加藤茉莉香たあ、このわたし〜〜〜。』

と、最後のセリフを言つて、効果音に合わせて、ポーズを決めるんだよ。」

そう言つて、茉莉香は、いつの間にか立ち上げて、セリフとともに振りをつけ、ポーズを決めていた。

「いよ〜〜。船長、宇宙。」

「茉莉香様〜〜〜！」

いつの間にか茉莉香のセリフを聞いていた三代目やクーリエたちが掛け声をあげた。

「こうやつて、一人ひとり、セリフを言つて、海賊の名乗りを上げる演出だよ・・・。

みんな、セリフが本当にびつたりと決まつて、かつこよかつたよ。」

「そう。みんな上手なのね。それじゃあ、チアキちゃんも何かやつたんでしょ。」

「うん。」

チアキちゃんは、男の子たちを従えて、海賊王女の名乗りを上げたんだ。

これも、すぐく盛り上がっていたよ。青い薔薇の花をいっぱい浮かべた温水プールの前で演じて、チアキちゃん、きれいだったなあ。

そして、終わったならみんな感激して、チアキちゃんが『突撃!』と号令して、先頭になって、手下の海賊役をした男の子たちとみんなで温水プールへ飛び込んだんだよ。」

「アハハハ……乗りに乗ってたのね。」

「それに、最後はグリューエルも仮面をつけて、海賊ショーをやったんだよ。レオニー二家の男の子や女の子たちを海賊のクルーとして従えてね。」

「受けたでしょ。」

「そう、バカ受け。」

しかも、グリューエルは演技がすごくまいんだよ。本当に怖い声で、

『金目のものを出しな!』

と言うんだもの。みんな、本物より怖いって言ってたよ。

グリューエルも、やっと念願の海賊ショーに主演できたので

『これで、今日から、私も海賊ですわ。』

って、喜んでたよ。」

「ハハハ……、そうなの。」

さすが、レオニー二家の『おもてなし』ね。」

「ねえ、ミーサ。」

茉莉香ちゃん、ずいぶんお楽しみだったようだから、そろそろ、船長としても、重力

推進の新しい船について、勉強を始めてもらったらどうかしら。

こっちは、先週から大変だったのよ。」

クーリエが言った。

「ええ！ 勉強？」

「そう。先週に、船を頼んでいるステープル重工業から新型船のクルー向けの教材やマニュアルが送られてきたの。それ見て、改めて思ったわ。やっぱり、重力制御推進工法と時空トンネルの実用化は、宇宙航海の大革命よ。」

だから、勉強することがいっぱい。」

天文学の分野だって、重力波観測によつて新たに発見された現象がいっぱいで、海図が大きく変わっているのよ。茉莉香ちゃん、『銀河間の重力潮流』って知ってる？」

「ええ？ ジュウリヨクチヨウリュウ？」

「まあ、知らないなら、その辺から勉強することね。」

銀河系の重力圏外の銀河間空間では、銀河団の重力エネルギーの流れに影響されて、船が流されることを計算に入れろつて、ことね。」

ルカが言った。

「そんなことが、あるの？」

「あるのよ。銀河自体が高速で運動している原因が、その銀河潮流よ。」



「もちろん、本命の宇宙物理学や宇宙工学のテキストが、一番量が多くて、たいへん。エンジンやワープの仕組みが変わるんだから、俺たちの仕事も変わっちゃうからね。」

三代目が言った。

「船長。私は、先日、グランドマザーで、グランドクロスの操縦シミュレーターに乗せてもらいました。」

新型船の操縦は、グランドクロスと同じようにコンピューター化されているそうですから、その予行演習のつもりでした。

しかし、実際に乗ってみると、楽ではありませんでしたねえ。パイロットは、例のジグザグ飛行をするため、電子機器を体に装着して操縦するのですが、その時にパイロットの心身にかんりのストレスが掛かります。

その理由はこうです。慣性が中立化されていますから、ジグザグ飛行の急加速、急停止による過重の増加は無いと、理屈は分かっているんです。しかし、私のように地上育ちのパイロットは、ジグザグ飛行では反射的に緊張して力が入り、過重の増加に備えようとします。こういう緊張が繰り返し返されることが、ストレスの第一原因ですね。

もちろん、天地がめまぐるしく回転するわけですから、ベテラン船員でも船酔いになる恐れがあります。

ですから、帝国軍が、グランドクロスのパイロット資格を厳重に制限している理由が

よくわかりましたよ。一応、私も帝国軍ではSクラスのパイロット資格があるのですが、私のような『老いぼれ』には、正直言ってキツかったですね。」

新しい操舵士のウイリー・モーガンが言った。ウイリーは、帝国軍を定年退官したベテランパイロットである。

「そうだろうなあ。」

そもそも、あのジグザグ飛行の操縦は、パイロットで言うところと戦闘機乗りの仕事だ。戦艦などの大型船舶のパイロットの仕事ではない。操縦の目的や要求される技術が違うから、同じパイロットでも、そこは従来、専門が違うとされてきたからな。」

シユニツツアーが言った。

「そうなんですよ。グランドクロスを乗りこなすパイロットには、戦闘機と大型船の両方の操縦をこなす能力が必要なんです。」

それに加えて、タッチ・アンド・ゴーやその三機編隊飛行作戦のように、戦闘機のようないくつかの艦隊の火力を使って大艦隊に対して行うのですから、攻撃の規模が違います。だから、パイロットが決断する事項も飛躍的に多くなります。

それに比べたら、時空トンネルを通行する操船は、大型船の操船と同じなので本当に楽ですね。ハハハ・・・。」

ウイリーが言った。

「へえ、そうなんだ。グランドクロスグランドクロスの操縦が難しいってそういうことなの。」

それを乗りこなしているチアキちゃんやウルスラウルスラって、やっぱり、すごいんだね。」  
茉莉香は、改めて驚いた。

「新しい武器もできるようだから、これからは戦闘戦術も変わるだろう。重力エネルギーの粒子としての性質を利用した、一種のビーム砲の開発が進んでいるそうさ。」

もつとも、帝国がそんな最新兵器を弁天丸弁天丸に搭載することを許すかどうかかわからないが……」

シュニッツァーシュニッツァーが言った。

「なるほど。あれは、やっぱりそうだったのかなあ。」

マンチュリア人との戦闘の時にね、チアキちゃんの船からビーム砲が発射されたんだけど、ビームシールドを簡単に突き抜けて命中したでしょ。」

あの光景を、みんな、見ていたよねえ。」

あのビーム砲って、その、重力エネルギーをビーム砲に応用した新兵器かなあ。」

茉莉香が言った。

「確かに、船長の言うとおり、開発中の新兵器の可能性はある。あれは、通常のビーム兵器の閃光ではなかった。」

「そういうことだから、新しい船のための勉強が必要ね。」

どれもこれも、船長がまったく知らないでは済まされないわよ。茉莉香も、がんばりましようね。」

ミーサが言った。

「ミーサも勉強するんでしよう。いつしよにやろうね。」

「何を言ってるの。私は、医者だから、そっちは関係ないわよ。」

でも、新型船の乗組員の健康管理は、これまでやったことがない仕事だから、こっちもいろいろ大変なのよ。」

「テキストの理論編は、高等数学が結構出てくるわよ。茉莉香ちゃん、大丈夫?」

クーリエが微笑んだ。

「高等数学!? 海賊船の船長にそんなものが必要なの?」

「重力推進方式の簡単な原理くらいは知っておくためにね。少しは必要があるわね。」

ルカが言った。

「茉莉香ちゃん。帝国軍の偉い人たちの間では、うちの船長は若いだけあって、重力制御推進の船に詳しいって、大いに期待されているらしいわよ。」

クーリエが言った。

「それは、船長が、例の戦闘シミュレーションで、時空トンネルの分岐を作って包囲網を出し抜いたり、時空震を起こして第一艦隊を破ったりしたからだろう。」

実際、あのシミュレーション上での敗北に学ばなければ、帝国軍はマンチュリア人との実戦で同じように敗北していたはずだ。

だから、船長が期待されるのは当然だ。」

シユニツツアーが言った。

「そうでしょうね。茉莉香ちゃん、その期待に応えないとね。」

クーリエが言った。

「それに、あなた、女王様と一緒にアンドロメダ銀河まで行ってみたいんでしょう。」

ミーサが突然言った。

「うん。行けるものなら行ってみたい。」

今回だって、私、銀河系から見えないヒガン星団を初めて見て、とっても嬉しかったもの。さらに、ヒガン星団の星々が見えたら、次は、あそこまで行ってみたいと思ったわ。

だから、女王様がアンドロメダ銀河に遠征するなら、ぜったい私も行ってみたいなあ。」

「だったら、連れて行ってもらえるように、新しい船の勉強も頑張らないとねえ。」

ミーサが言った。

「あ、言い忘れていたけど、船長用の教材ももちろん別にあるのよ。教材が入った電子

ブックは、船長室に届けてあるから。

電子ブックはハイエンドの機種が使われているところを見ると、かなり、データ量が多くて、勉強は大変そうね。

船長、頑張ってね。」

クーリエが最後に爆弾を落とした。

「ううう……頑張ります……」

「さあ、茉莉香。帰ったら、まずは、弁天丸のお仕事よ。頑張りましょうね。」

「ハイ。加藤茉莉香、頑張ります。」

さあー！ みんな、帰ったら、海賊の時間だあ。」

茉莉香は、元気な声でそう言って、両手を腰に当てて、立ち上がった。

22-5 チアキの部屋（グランドマザー貴賓室）

チアキは、レオニー二家からグランドマザーに帰ると爆睡してしまい、翌日の夜にやっと目を覚ました。

そして、まずは、姉のクリスティア王女に報告のため、電話をした。

「ご報告が遅くなって、すみません。」

「チアキ、ずいぶん楽しく遊んだそうじゃないか。」

「いやあ、私はあんなに長居をするつもりじゃなかったのですが、サーシャたちレオニー二家の若者にすっかり乗せられてしまいました……」。

それで、自分で体験してみても分かりましたが、母上も昔、あのような夕食会に出席し、その場で大勢の海賊たちと友人になったのだと思いました。

母上と女海賊たちの雰囲気から、きつとそうだと思います。まるで同窓会のノリでしたから。」

「母上が、昔、乗っていた船のことは、わかったかい？」

「すみません、わかりませんでした。若い人々は知らされていないようでした。」

「そうか。ありがとう。」

それで、サーシャの用事は分かったのか？」

「はい、サーシャ自身から聞きました。」

グランマは、サーシャが、亡くなった実のお父様の後を継いで、旧宇宙マフィアのボス、つまりアメージング族の族長となって欲しいと思っていたようです。

そして、ヒガン共和国の大統領の息子との婚約を勧めたそうです。」

「それがレオニー二家や銀河帝国にとってどういう意義を持つのか、聞いたのか？」

「はい。」

その昔、レオニー二家が、表社会で生きるヒガンの支配者の家系と、裏社会で生きる

宇宙マフィアのボスの家系と二つに別れたのですが、二人の結婚で両家系を統一したいというのが、グランマのお考えだったようです。安住の地を得たのだから、二つに分かれている必要はないということですね。

そして、将来は、ヒガン共和国を王制に改めて、二人がこの地を治めて、レオニーニ家がこの地の繁栄に永遠に責任を負っていく決意を示すことを考えていたそうです。」

「なるほどなあ。年寄りたちから見れば、もつともな話だなあ。そうなれば、銀河帝国も無関係ではないなあ。

で、サーシヤはどういう返事をしたのかな？」

「もちろん、サーシヤは全部、断ったそうです。」

「あの子なら、そうだろうな。」

でも、そういうお目出度い話にならなかつたにもかかわらず、チアキたち三人は、よくまあ、派手に遊んだなあ。」

「いやあ、逆です。」

レオニーニ家の若者たちは、サーシヤの族長就任と婚約のお披露目を見込んで銀河系中から呼ばれていたようですが、サーシヤが全部断ったのですっかり当てが外れて、手持ち無沙汰だったそうです。



そこへ、私たち三人が現れたので、やっと出番が来たと、みんな、思いつきりハジケタそうです。」

「ハハハ、その気持ちは分かるなあ。」

チアキ、ありがとう。その夕食会の話は、帰ってからゆっくりと聞くとしようか。」

「はい。では、おやすみなさい。お姉さま。」

チアキは、そう言って電話を切って、ベッドにもぐりこんだ。まだまだ、疲れと眠気は取れていないからだ。

しかし、寝られなかった。『楽しい夕食会』のシーンが次々と頭に浮かんできて気持ちが高ぶり、次第に顔が赤くなってきた。

「ううう……」。

なんて恥ずかしいことを、次々とやっちゃまったんだろう。

芸能人みたいな派手な舞台衣装とメイクで、ノリノリで歌って、踊って、

セパレートで布地の小さい水着を着て、男の子たちとプールで水を掛け合って……。

海賊ショーでは、海賊王女だと名乗って、男の子たちみんなに『従者にしてあげる』などと言ってしまった。

これじゃ、まるで、ガキ大将じゃないの。

シヨールが終わると、私が突撃と号令を掛けて、みんなで、海賊衣装を着たまま、青い薔薇の花の浮かんたプールにとびこんで、

向こう岸まで泳ぎ、プールから上がってそのまま勝ち名乗りを上げて、髪が濡れて乱れた姿をみんなに披露して、……

うううう……うわーっーっー。」

チアキは、たくさんの『やっちまった』ことを『後悔』して、悶々とし始めた。

## 第二十三章 茉莉香とグリューエルの進路

23-1 帝都クリスタルシティ

遠征終了後の、ある日の午後、茉莉香は、弁天丸に乗って久しぶりに帝都を訪れた。メトロポリタン空港につくと、モーガン家のリムジン車が、茉莉香を迎えにやってきた。

今日の茉莉香は、少しおめかししたドレス姿である。もちろん、これはマミの最新作である。

「ギルバートさん、どうもすみません。本当は、私の方からお迎えに行かなければいけないですが……。」

今日は、ギルバートも私服であり、車の運転も執事に任せ、リムジンの後部座席に座っている。二人は、並んで座った。

「お気になさらないでください。それにしても、茉莉香さんは、コンピューター車の運転免許をまだ取っていらっしやらなかったんですね。」

「いやあ、高校生になつてから、忙しい日々が続いていたもので、教習を受けるヒマがなくて……。」

「そうですね。大活躍でしたからね。」

「ナハハハ……。」

茉莉香は、照れ笑いしつつ、こう言った。

「さて、今日は、ギルバートさんの日頃の献身に感謝申し上げますために、心ばかりのお礼を差し上げたいと思います……と。」茉莉香は本日の口上を述べた。

「はい、ありがとうございます。」

それにしても、これが本当にチアキ様からの罰ゲームなんですかあ。」

「ナハハ、そうですねえ。私にも、なぜこれが罰ゲームになるのか、サツパリわかりませんがねえ。」

茉莉香も軽く相槌を打った。しかし、罰ゲームに関する本当のことはギルバートには言えなかった。というのも、罰ゲームの本当の内容は、『ギルバートの前で、帝都に暮らす大人の女性を演じること』だったからである。これでは、恥ずかしくて彼に言えるわけがない。

そのために、茉莉香は、グリユーエルとチアキから徹底的に様々なマナーや、帝都の有名店での客としての振る舞い方を教えられた。それは、茉莉香が新学期から帝国女学院大学のお嬢様たちに交じって帝都で暮らすためにも、必要なことではあった。そして、その成果を試すため、ギルバートとともに帝都のセレクトご用達のお店を一回りするのが、罰ゲームの具体的内容だった。その際にギルバートに日頃のお礼もしようと言う

のだった。

もちろん、チアキとグリュエルの真意は、マナー習得を口実にして、茉莉香をギルバートとデートさせることだった。罰ゲームと称して、煮え切らない茉莉香の背中を押してみようと思ったのだった。

茉莉香は、グリュエルが書いたメモを見ながら言った。

「それで、まずは、洋服屋さんですね。」

運転手さん、グリーンガーデン通りのニュー・イングランド洋服店へお願いします。

予約を入れてありますから。」

「承知しました。」

この店は帝都でも最高級の紳士服店のひとつであり、モーガン家の男性がよく利用する店である。この紳士服店へ来たのは、日頃のお礼として、ギルバートにオーダーメイドのスーツを一着、プレゼントするためである。もちろん、茉莉香は、事前にグリュエルから男性のスーツの見立て方について、講義を受けている。

茉莉香とギルバートは、店主の出迎えを受けて応接室に通され、鏡の前でスーツの生地選びから取り掛かった。店主の軽妙な話術にも助けられ、茉莉香にとっても、楽しいひと時だった。

その後は、二人で、茉莉香の大学入学後の生活に必要な、鞆、アクセサリー、靴など

様々な品物を買ひ揃えるため、いくつかの店を回った。どの店も、茉莉香に対して、最高級のもてなしをしてくれた。

更に、二人は、同じグリーンガーデン通りにある、シャネル洋服店本店に行った。女子大の入学後に着る茉莉香のスーツを注文するためである。

店の入り口でコッキー・シャネル本人が出迎えてくれた。

「ようこそ、茉莉香さん。当店へのお越しを心から歓迎いたします。

どうぞ、こちらのお部屋へ。」

「ど、ど、どうもありがとうございます。」

茉莉香は、緊張していた。豪華な本店のたたずまいと、それにも負けずにオーラが輝くコッキー・シャネルの雰囲気は圧倒されたからだ。

そのころ、この店に別のカプセルが乗ったリムジン車が近づいていた。

しかし、二人の乗った車は、店の玄関前に横付けできなかつた。前方を見ると、リムジン車とそれを取り巻く帝国の紋章をつけた数台の警備車両が店の前を占拠していた。

「お姫様がご来店されているのでしようかねえ。

スージーさん、仕方ありませんね。ここで降りて、少し歩きましょう。

もうすぐ予約の時間ですからね。」

「そうですね。」

銀河テレビのキャスター、スージー・リットンは、車の運転手にドアを開けてもらい、路上に出た。有名人なので、たちまち通行人や観光客の視線が、彼女に集まる。スージーは、連れの男性にエスコートされながら、シャネル洋服店本店に向かって歩き出した。

『ようやく、ここまで来たわ。』

田舎の高校生だった頃にテレビで見て憧れた、聖王家御用達のこのお店の客になるのが、私の一つの目標だったのよね。』

スージーは、喜びにあふれて、店のドアを入った。

そこには、この店の三番目のデザイナー、キャサリン・カトーが出迎えていた。

キャサリンは、最近メキメキ売れてきたデザイナーであり、彼女も聖王家御用達の榮譽に輝いていた。それは、フランソワ・シャネルが、チアキの注文を独占せず、かといって娘のコツキーに譲らず、店の有力デザイナーにも王家からの仕事を担当する機会を与えているからでもあったが、キャサリンの実力、努力は、シャネル母子も認めていた。

一方、スージーも、持ち前の美貌だけでなく、努力の人だった。田舎の普通の家庭で育ちながら、自分の力だけで、銀河テレビのキャスターという競争の激しい世界を勝ち抜いて、トップの座を維持してきた。もちろん、彼女は、『あの星の高みまで駆け昇る』という、強い上昇志向と固い意志の持ち主であった。

その彼女の最終目標は、玉の輿。銀河系の名家の嫁になることだった。

そもそも、銀河テレビのトップ・キャスターともなれば、いろいろな男性からお誘いがある。縁談も数えきれないほど持ち込まれる。しかし、スージーは、一切無視していた。

正確に言うと、次のような難題を出して、相手を追い払っていたのである。

『わたし、シャネル洋服店本店で、聖王家御用達のデザイナーに、ドレスを作ってもらうのが少女時代からの夢なのよ。』

来週にでも、予約を取って下さるかしら……。』

要するに、最近はどうなにお金を積んでも新しく担当デザイナーになるのは不可能と言われるシャネル母子に、無理を言える程のコネクションがないとお断りだということである。

しかし、先週、銀河テレビ副社長のクラーク・ケントが持ってきた縁談の男性は、ついに難関の予約をとってスージーにデートを申し込んできた。デザイナーはキャサリンであったが、スージーが喜んだのは言うまでもない。スージーにとって、自分の力で聖王家御用達にまで登り詰めたキャサリンは好ましい存在だった。

その男は、銀河テレビのオーナーである大富豪ウオーターメロン家の三男、ジョージ・ウオーターメロンだった。



茉莉香は、本店で3着のドレスを注文して、店を出た。

グリュールエルとチアキからは、とりあえず春物（はるもの）を十着注文するように言われていたが、茉莉香にはこんな高い服を十着も一度に注文すると言う二人の感覚はまだ理解できなかった。さすがに、いつも制服一着で済ませていた高校時代とは違うだろうとは思っていたが……。

「運転手さん、えーつと、最後の目的地は、レストラン・ヌーベルフランセイーズですね。」  
「承知しました。」

レストラン・ヌーベルフランセイーズは、帝都で一番の高級料理店だった。

ここでも茉莉香は支配人から心のこもった言葉を掛けられ、楽しい時間を過ごしていた。ただし、今日の茉莉香は、私服のドレス姿であり、海賊服でも、帝国軍の制服でもなかったもので、店に入っても他の客の注目は集めなかった。

その後、この店に二人の客が現れた。スージー・リットンとその縁談相手の男、ジョージ・ウオーターメロンだった。

スージーはここでも店に入るや否や、他の客から注目を集めていた。

『実物は、テレビで見るとは、はるかにきれいな人なんだねえ。』

そういうつぶやきが聞こえそうなほど、今日の彼女は、美しかった。そういう彼女をエスコートしてきたジョージは本当に嬉しそうだった。

スージーは上機嫌で、店の客をこっそり眺めていたが、その中にギルバート・モーガンと茉莉香がいるのに気が付いて、驚いた。

「あの二人、こういう関係だったの。ふーん。」

スージーがつぶやいた。

「ああ、ギルバート・モーガンがいますねえ。彼とは、久しぶりですね。

それに、今日は、二人連れで来ていますねえ。驚きました。」

スージーの視線を追って、ジョージが言った。

「モーガンさんをご存じなんですか？」

「ええ、帝国第一高校の同級生ですからね。」

「そうなんですかあ。」

実は、まだスージーはギルバートには未練たっぷりだった。自分が会ったセレブの系の未婚男性の中でも、ギルバートは飛びぬけてスゴイ人物だと思っている。ジョージを見ても、ギルバートと比べてしまう始末だった。

「そうか、この前の遠征のテレビ中継で、一緒に一緒だったんですね。」

私、遠征のテレビ中継で、あなたがアナウンスするのを見ていました。すべて、台本無しのアドリブだったんですねえ。すごいなあって、父も母も感心していました。」

「ありがとうございます。」

「それにしても、今日のギルバートは、珍しいことに女の子連れか……。」

女の子と言えば、確か、彼は、遠征のテレビ中継に出演していたキャプテン茉莉香の秘書官ですよねえ。」

「その茉莉香さんだったら、彼の前にいますよ。」

「ええ!？」

あ、あのコがそうですか！制服じゃないからわかりませんでした。

なるほど、そうですか。

でも、そうだとすると、あの二人はなかなか面白いカップルですよ。」

「どうしてですか？」

「海賊伝説のある家の息子に、本物の海賊の娘ですよ。」

お話が、出来過ぎていますね。　ハハハ……。」

「海賊伝説?」

「そうです。彼の家に行くと、玄関ホールに高さ三メートルくらいの、表面が擦り減った銅像があつて、これが帝国海賊だった御先祖なんだそうです。千年前の話ですがね。」

「でも、今は、投資銀行を経営されているのでしょうか。」

「表向きはそうです。」

でも、高校時代の噂では、あの家は裏で何かヤバイことをやっているのではないかと

言われていました」

「ええ!？」

「実は、成績優秀でスポーツ万能のギルバートが、帝国大学ではなく帝国軍士官学校へ進学すると聞いて、同級生はみんなびつくりしたんです。

その理由を聴くと、モーガン家では、昔から同世代の中で最も優秀と認められた者が士官学校へ進み、帝国のために働くように求められるからと言うのです。

もちろん、彼は、一族の人たちからその義務を果たすように指名されたことを誇りに思っていると言うのです。」

「軍人を本業と考える家系なのででしょうか?」

「そうではないと思います。」

高校の先生たちの話では、士官学校に進んだモーガン家の若者は、みんな、定年まで勤めず、将軍に出世する前に帝国軍を辞めて、隠居してしまうそうです。」

「どうして、隠居するんですか?」

それに、若くして軍を退役すれば、その後、経済界で活躍することもできるでしょう。」

「そうなのです。」

だから、噂では、隠居は表向きの話で、本当は大切な理由がある。例えば人に言えな

い裏稼業を継ぐためだろうというのです。その準備として軍人になるのだという訳です。」

「では、民間軍事会社でも運営しているのでしょうか。」

「そこまで、わかりません。」

まあ、高校生のいい加減な噂話かもしれませんが……。

まさか、いまだに海賊をやっているわけじゃないでしょうけど……。

ジョージは、冗談のつもりでそう言つて、笑つた。

帝国海賊について、とりわけモーガン家など海賊八氏族の当主が、晩年はガーデンキーパーとして銀河聖王家に仕えていることは、今でも王室機密である。だから、国民はみんな、帝国海賊は伝説だと思つている。

「そうですねえ。いまだに海賊なんて……。」

スージーも笑つた。

しかし、スージーは、ギルバートと茉莉香の間にある『知つてはならない、危険な秘密』に自分も触れそうになった気がして、冷や汗が出た。

遠征の際に目撃した二人の様子から、きつと秘密があると思つていたからである。それも単なる「男と女」の間の秘密というよりも、もつと、「危険な秘密」があるのではないかと思つていた。

彼女も、危険を察知する勘が鋭いのだ。

銀河帝国は普段は爪を隠しているが、知ってはならない秘密を知った者には専制国家として本性を現し決して容赦しないというのが、マスコミ業界の常識であったからだ。

実際、あの遠征のテレビ中継では、副社長クラーク・ケントが、突然、カメラで写すのを避けるよう指示する場面がたびたびあった。また、自分の乗った軍艦（グランドマザー）には、なぜか、チアキ姫と茉莉香の友人らしい二人の女の子が乗船していたが、副社長は二人を存在しないものとして取材するように指示していた。

それらは、銀河帝国の危険な秘密に近づかないためにカメラを遠ざけたとしか、思えなかった。むしろ、現場でその判断をするために、副社長が、わざわざディレクターとして遠征に同行してきたのだらうとも思った。副社長クラーク・ケントは、「パーマン」というあだ名がつくほど残念な男性だと女性たちの間では定評があるが、危険を察知する勘は極めて鋭いと業界では定評があったからだ。

「ところで、スージーさん。お願いがあるんですが……。」

「なんですの?」

「いやあ。突然ですみませんが、実は、今夜、私の家で母の誕生日を祝うパーティが予定されているんですが、宜しければご一緒に行っていただけませんか。」

「ええ!? よろしいんですか?」

「ご招待もいただいておりませんが。」

「かまいません。あなたさえよろしければ、お客様ではなく、私のパートナーとして一緒に出席していただきたいのですから……。」

「パートナー……。」

でも、私、今夜、パーティにおじやまするようなドレス姿じゃありませんし、……ウオーターメロン家の広大な屋敷で行われるパーティならば、たいそう華やかであると思われたので、今の服では少し気後れしそうだった。そんなことなら、あらかじめ言つて欲しかったと言うのが、正直な気持ちだった

「大丈夫ですよ。」

副社長に頼んで、あなたがテレビ出演の時、いつも担当しているスタイリストやメーキャップ・アーティストたちを我が家に呼んであります。

もちろん、ご存じのキャサリン・カトーが、あなたのために心を込めて用意したパーティ・ドレス、アクセサリーや靴なども我が家に届いているはずですよ。

今夜は彼女が『魔法使い』の役を演じてくれます。」

「ええ！　そこまで準備して頂いているんですか。」

「はい。」

実は、先ほども母から、早くあなたをお連れするようにと催促のメッセージが届いて

いまして……。

いかがですか、スージーさん。」

「……………」

はい、喜んで。」

スージーは、迷うことなく、しかし、少し恥ずかしそうに振る舞って、ジョージと進む道を選んだ。

スージーの目の前に二つの道があった。ウオーターメロン家に続く道は、彼女の念願を実現する道だった。もう一つの道、つまり正体不明の素敵な男・ギルバートを独りで追いかける道は、今、閉じられた。

スージーとジョージの二人は早々にレストランを後にした。

やがて、茉莉香たちもレストランを出て、歩道に降り立った。夜風が心地よかった。

「スージーさんが、来ていましたね。」

彼女、とてもうれしそうにして、帰って行きましたね。」

茉莉香が言った。

「連れのジョージも、とてもうれしそうでしたねえ。」

「あの二人、うまくいくと良いですねえ。」

「そうですねえ。」



.....

ところで、茉莉香さん。今日は本当に楽しかったですか？

スージーさんと同じくらいに、うれしかったですか？」

ギルバートが突然に聞いた。

「.....」

茉莉香は即答しなかった。そして、少し考えて言った。

「あのおう.....」

確かに今日行ったお店はどれも素敵で、お店の方にも本当に親切にさせていただいて、楽しかったです。

それに、今日、私がこういう楽しい時間を過ごさせていただくために、大勢の人に陰で力を貸して頂いているのだらうなあと思ひ、感謝しています。

だって、みんな、本当に最高級のお店ばかりで、女子高生の私が電話一本ですぐに予約できる店ではありませんからね。そのくらいは、知っています。」

「そうですか.....」

「でも、私、分かったんです。

帝都の最高級のお店に来たときに私が感じたうれしさよりも、初めて銀河のネットワークの星空を見た時の感動の方が、私には大切だって、分かったんです。

私はこういうお店に来るのを夢見て、広い海に出てきたのではないって、分かったんです。

ごめんなさい。

ギルバートさんに、きょう一日、つきあつて頂いているのに、こんなことを言うて……。」

茉莉香は、頭を下げた謝った。

「いいんですよ。」

茉莉香さんの顔を見てれば、そんな気持ちだろうなあと分かっていましたから。」

そして、ギルバートは、携帯端末で時刻を確認して、言った。

「この時間なら、まだ間に合います。行きましょう。」

「ええ？ どこへ行くのですか？」

「茉莉香さんの行きたいところですよ。」

そう言つて、ギルバートは運転手や警備の軍人たちに、言った。

「予定外ですが、今から、帝国軍宇宙博物館に行きます。お願いします。」

「了解しました。」

「ええ!? え〜〜〜〜〜?」

2312 ヨット部の部室（白鳳女学院・海明星）

「それで……、その後、二人で宇宙博物館に行ったの？」

チアキが、少し呆れ顔で言った。

「あんな所に行くって、まるで、小学生の社会見学じゃないの……」

先ほどから、ヨット部の部室で、チアキとグリュエルは、茉莉香からギルバートとの「罰ゲーム（デート）」の様子を聞いているところだった。

話を聞いているうちに、他の部員たちも三人の周りに集まってきた。

「ナハハ……でも本当に楽しかったなあ。」

茉莉香が言った。

「まずは、玄関ホールに浮かぶ、巨大な銀河系の立体映像をご覧になったんでしょ。」

グリュエルが聞いた。

「なるほど。夜間営業中の宇宙博物館は、旅行ガイドにも載っている、有名なデートコースだからね。」

直径二十五メートルの巨大な銀河系の立体映像の下を二人で歩いているときに、プロポーズされるというのが、デートの定番よねえ。」

リリイが言った。

「なるほど、きらめく銀河の星空の下でプロポーズなんて、ロマンチックな場所なんです

ねえ。」

グリユーエルが言った。

「茉莉香、それで、どうだったの？何か進展があったの？」

リリイが聞いた。

「いやあ〜玄関ホールでは、……」。

銀河系の立体映像を見ながら、ギルバートさんと、

ここが航海の難所だとか、

この星系には行ったことがあるとか、

ミルキーウェイのゲートステーションは何処に出来る予定だとか、

あれが有名な古戦場だとか……、

船乗りの話題で盛り上がったよ。」

「はあ……？」

「まあ、茉莉香さんつたら……」。

「もういいわよ。それで、次はどこへ行ったの？」

「えーつと、その次は、展示されている歴代の軍艦の模型や実物大の軍艦のブリッジのセツトを見に行ったよ。」

ギルバートさんが、一つ一つ説明してくれたんだけど、軍艦の改良の歴史って、面白

「いんだよねえ。」

「はあ……?」

「それで、ねえねえ、聞いてよ。」

昔の船のブリッジって、びっくりするぐらい狭いんだよ。天井も、立ち上がると私でも頭をぶつけちゃうくらい低いんだよ。」

「はあ……。それがどうしたの?」

「だって、面白いでしょ。弁天丸とは、ずいぶん違うんだよね……。」

「茉莉香、それじゃあ、あなた、軍事OTAKUの仲間入りだよ。」

「ええ!? だって、私、これでも帝国軍人だよ。OTAKUじゃないよ。」

「茉莉香あ……。あなたねえ、女子高生でいられるのも、あとわずかなのよ。」

もつと、十八歳の女の子らしいことをしなさいよ。」

「それで……、その次は、どこへ行ったの?」

「その次は、ねえ……。」

茉莉香は、楽しそうに話を続けた。

『だめだ、これは……。』

そう思っつて、チアキとグリューエルは顔を見合わせた。

しかし、茉莉香は、帝国軍宇宙博物館を出る際に、玄関ホールの銀河の立体映像の下

で、ギルバートと交わした大切な会話を、友人たちには話さなかった。

それは、こんな会話だった。

「ギルバートさん、宇宙博物館に連れて行って頂き、ありがとうございました。本当に楽しかったです。」

「そう言って頂けると、私もうれしいです。」

「……ところで、茉莉香さん、お返事、待っていますから。」

「……」

すみません。お待たせして。

私、自分の気持ちだが、まだわからなくて……。

今日のスージーさんみたいに、決断できなくて……。

「それでいいんですよ。」

彼女だって、長い間、考えた末に出した結論だと思いますよ。

それに、あなたは、まだ十八才なのですから……。

「そう言って頂けると……。」

そのまま黙って、二人は、頭上に輝く銀河系の立体映像を眺めた。

『何時みても、銀河の宇宙（うみ）は美しい……』

茉莉香は、そう思った。

2313 グリュエルの私室（海明星・セレニティ王家の屋敷）

グリュエルは、今夜も、ベッドに入ってから、レオニー二家のグランマから渡されたカードを眺めていた。このところ、寝る前に毎日眺めて、これを渡された時のことを思い出している。

グリュエルは、惑星ライセのレオニー二家の屋敷から帰る直前に、グランマに呼ばれて、彼女と二人だけで会った。

その時、彼女はこう言った。

「一人で来てもらったのは、あなただけに渡しておきたいものがあつてね。

これは、私たちからのあなたへの友情と期待の証（あかし）だよ。」

グランマは、手元の電子カードのようなものに自筆でサインをして真紅の海賊封筒に入れて、グリュエルに渡した。

グリュエルが封筒を開けてカードを見ると、中から、ヒュー&ドリトル星間運輸の帝都メトロポリタン空港支店が発行した無記名のお客様優待カードが、出てきた。

一見すると、何の関連もないものだったので、グリュエルは驚いた。

「これは、どういうものですか。」

「なあに、海賊船のフリーパスだよ。海賊船なら、いつでも、どこからでも乗って、自由

に旅ができるということさ。

最初だからね、その印のようなところに指をのせて、自分の名を名乗ってごらん。そして、パスワードを設定してごらん。」

グリューエルがカードを手に取ると、カードが光を放ち、グリューエルの上半身の立体映像が浮かび上がってきた。

「われは、グリューエル・セレニティ」

「認証しました。」

パスワード設定作業を開始します。パスワードを唱えてください。」

カードから、音声が発せられた。

「エロイムエツサイム、エロイムエツサイム。我は求め、訴えたり。」

グリューエルが、パスワードを唱えた。

「パスワードを設定しました。確認のため、もう一度、パスワードを唱えてください。」

グリューエルは、もう一度唱えた。

「パスワードを確認しました。」

パスワード設定作業が、終了しました。」

そのアナウンスと同時に、彼女の上半身の立体画像の下に、次のような要請文が書かれた立体映像が現れた。



その要請文にはこう書かれていた。

海賊協会会員各位

我らの大切な友人である本券の所持人、グリュール・セレニティを、如何なる航海においても支障なく乗船させ、同人の望む目的地まで送り届け、かつ、同人に必要な保護扶助を与えるよう、関係の諸船長に要請する。

海賊協会理事長　　マリア：レオニーニ

海賊協会理事長の名前のところは、手書きのサインになっている。

「生体認証機能があつてね、カードが本人と認めると、こういう立体画像が浮かび上がる仕掛けさ。秘密を守るためだよ。」

それにしても、なかなか凝ったパスワードだねえ。」

「なにか、魔法使いになったような気がしましたので。」

そう言つて、グリュールは微笑んだ。

「なるほどねえ。」

グランマも微笑んだ。

「それで、このカードの文言を拝見すると、これは、私一人で、旅に出るためのものですか……。」

「そうだ。もしも、あなたが、殿下という敬称を捨て、広い海に出て旅をする決心をした

ならば、迷わず、海賊船を呼んでおくれ。

このカードには、通信機能もあるからね。

それまでは、このカードのことは、くれぐれも王宮のうるさがたには内緒だよ。」

「確かに、王宮に知れると、取り上げられそうですね。」

グリユーエルは、微笑んだ。

「そうですね。」

今年であなたも十六歳になるからね。

旅をするには良い年ごろになってきたと思って、これをあなたに差し上げることにした。」

「ありがとうございます。」

「私たちは、全力であなたを応援するよ。」

アンは、18歳のときに、殿下という敬称を捨て、一人で旅に出て、女を磨いたんだよ。あなたも、そろそろ、自分の人生を自分の足で歩きだすことを考えても良い年ごろじゃないかと思ってさ。」

「.....」

そうですね。

グランマ。心のこもったものを頂いて、ありがとうございます。

大切にします。」

「ああ、そう言ってくれれば、私もうれしいよ。」

グリュールエルは、毎晩、このカードを見ながら、マリア・レオニーニとその母親の人生に思いを巡らしている。

レオニーニ家の伝統では、名前の後に、母方の姓、父方の姓を並べて名乗るのが、正式な氏名である。例えば、サーシャの実の氏名は、サーシャ・ケストナー・レオニーニだった。

しかし、グランマの直筆のサインは、「マリア・レオニーニ」と書かれており、母方の姓が書かれず、むしろ空白のようにも読める。

しかも、直筆のサイン自体は、グリュールエル本人がカードを手にとって、生体認証をクリアしない限り見ることができないように隠されている。

『これは、とても興味深いことですね。』

グリュールエルは、「姓」を持たない女性が存在するのは二つの場合があると考えている。

ひとつは、グランマの母親が父母も分からない無縁の子として育った場合である。旧宇宙マフィアのコミュニティでは、そういうことも起こりうるのだろうか。

もうひとつは、彼女が姓を持たない家系の出身者である場合である。そして、グリユーエルの知るかぎり、姓を持たない家系は、ただひとつ、銀河聖王家だけであった。神の子孫を自認する銀河聖王家は、人の家系に属する証（あかし）である「姓」を持たないとされているからだ。

『もし、そうだとすれば、その方は銀河聖王家の王女。グランマがその方の子供なら、サーシャさんは、その方のひ孫……』

グリユーエルは、銀河聖王家の秘密の一端に触れた、いや触れる事を許されたことに思い至った。しかし、そのことよりも、彼女はその女性の人生に心引かれた。

『でも、王族である私にとつては、その方がどのような方なのか、

そして、そういう選択をなさった理由の方が関心がありますわ。

結局、その方は、どんな人生を送られたのでしょうか。』

グランマの母親は、どんな人だったのか。

どうして、「殿下と言う敬称を捨て」、つまり王族の身分を自分から捨てて、旅に出たのであろうか。

そして、自分の人生、自分の幸せをつかんだのだろうか。

グリユーエルは、知りたくなった。

もちろん、彼女がそう思うのは、これからの自分の人生に対する満ち足りない思いが

あるからだ。

この先、自分は、王女として、どのように生きていくのだろうか。

そもそも、セレニティ王宮がいつまで自分に対して、今のような気ままな暮らしを認めるつもりなのであるうか。

母国の政治情勢も耳に入っている。

改革から時が経過し、その熱も冷めると、守旧派が影響力を復活させつつあるという。海明星への留学は、守旧派にとつて、改革派のシンボルである自分を母国から遠ざけるために容認されていたと思われる。

公爵の反乱の際に、自分に第一王女を支援させたのも、仮に女王側が敗北しても、改革派の自分の個人行動として責任を逃れる思惑もあつたと思われる。

しかし、これからの帝都への留学は、彼らに、新たな目的で、自分を利用しようとする思惑を生む結果になることも分かつている。

女王側が勝利したことで、女王側に味方した自分を銀河聖王家に売り込んで、セレニティ王宮との絆を深める道具にしようとするだろう。

年頃になった自分に、ある日、王宮からの使者として、侍従が『このうえない、良い知らせ』を持って訪れるだろう。

そして、侍従は、大仰な作法に従って、こう言うだろう。

『お喜びください。大公様の御意により、姫様のご婚約がととのいました。』と。もとより、王族には結婚の自由など、ないのだから。

これからは、その日がいつ来るかという不安と向き合わねばならない。

『グリユーエルよ。お前はそれでよいか？』

この問いに対して、以前の自分なら「イヤダ！」と即答していただろう。

グリユーエルは、自分をそう言う人間だと思っていた。

しかし、銀河帝国の遠征に同行し、銀河聖王家のアレックス王子と出会った体験から、自分の中に、そうでない自分もいることに気が付いて、グリユーエルは身を震わせた。

自分の心の中で、大人の女としての打算と「分別」を備えた自分と、少女としての夢や理想を追い求める自分が言い争いを始めているのだ。

大人の女としての自分、女性としての豊かな肢体と色香を備えた姿をした自分が、小悪魔のような魅惑的な瞳を輝かせて、嬉しそうにこう言う。

「銀河聖王家にも、アレックス様のように立派な殿方もいらっしやることを知って、心強いですわ。

私のお相手も、きっと私にふさわしい立派な方に違いありませんわ。

安心して、レッド・カーペットの上を歩いて行きましょう。」

これに対して、少女としての自分、未成熟ながらも凛々（りり）しい肢体と才気あふ

れる清純な雰囲気具备了自分が、怒りに燃える目をして、こう言う。

「何をおっしゃいますの。」

それでは、貴方は、運命の出会いにより、恋に落ちて、愛を育んで、結ばれたいという、今まで育んできた夢をあきらめるのですか!？」

そして二人は言い争いを始める。

「いつまでも、夢を見ていらつしやるのね。」

そんな殿方、いったいどこから現れると思つていらつしやるのかしら。

きつと、ある日、窓の外にペガサスに乗つてお迎えに来て下さるとも信じていらつしやるのでしょうかね。ホホホ……。」

「失礼な！」

私はそんな子供ではありませんわ。」

「そもそも、恋をした経験もないあなたに、

世間知らずのあなたに、

貴方にふさわしい殿方を探し出し、見極める力がありなの？

大公様の御判断に従うのが、よほど確実じゃないかしら。」

「私は、自分の『人を見る目』を信じております。

『真実の愛』を求めるところを信じております。」

「あらまあ、自信家でいらつしやるのね。

でも、もうすこし『大人』になられたらどうかしら。

たとえばアレックス様ほど立派な殿方でなくとも、とにかく銀河聖王家の王族の妃（きさき）になるのですよ。

セレニティ王家などとは比較にならない権威を誇る王族の一員として、

今まで以上に王族らしい立派な暮らしができますわよ。

それを『イヤダ』なんて、女の幸せをわかつていらつしやるのかしら。」

「幸せは、富や権力で計るものではありません！」

「何をおっしゃっているのかしら。

あなたは、貧乏した経験も、命懸けで戦った経験もありじゃないのよ。」

「失礼な！」

私は、必要な時には、どんな苦勞も乗り越えて見せますわ。

そういう意思と覚悟を、常に持っているつもりですわ。」

「ひとりの少女としての貴方に、そんな力が備わっているとお考えなのかしら？」

セレニティの政争で貴方が『力』を発揮できたのも、貴方が王女だからでしょ。

ただの小娘では、誰も相手にしませんわ。」

「そんな嫉妬には、私は負けません。」



私は、ひとりの人間として、真剣に国の将来を憂い、自分の意思で行動したのです。」  
「もったいないわねえ。」

せつかく、クリスティア様やチャキ様に信頼される関係になったのに。

このまま、聖王家の嫁になれば、銀河帝国の宮廷でも重用されるのは確実なのにねえ。  
そうすれば、貴方の実力を発揮できるチャンスも得られるのにねえ。」

「そんな誘惑には負けません。」

そもそも、コネや人脈で世界を動かせると考えるのは、愚劣な妄想です。

高い理想や清廉な志こそが、最終的に世界を動かすと、私は信じています。」

「ご立派ねえ。ほんと、口だけは……。」

もう少し、『大人の分別』というものを、お持ちになるべきよ。」

「ご存知ですか?」

このまえ読んだ古代の書物に、こういう言葉がありましたのよ。

『分別のある人間は、世の中に自分を合わせようとする。』

分別のない人間は、世の中を自分に合わせようとする。

だから、世の中の進歩は、分別のない人間の双肩に掛かっている。』と。」

「あらまあ、理屈だけじゃなくって、皮肉もお上手ね。」

それじゃあ、あなたは、本当にグランマの誘いに乗るおつもりなのかしら。

王族の身分を捨てて、ひとりの女として、辺境宇宙を旅してご覧になるといいわ。あなたに、その決心が出来るかしら……。」

「その時が来たら、迷わずそうしますわ。」

でも、今は、まだその時ではありませんわ。」

「逃げたわね。」

「私は、逃げてなどおりません。」

「ところで、茉莉香さんはアレックス様とのご縁談をお断りになるつもりかしら。」

拝見するところ、王族になりたいという夢を抱いたり、王族としての責任を負う覚悟をしようとなさっている様子ではないでしょうか。」

「まあ、ひどい。泥棒猫のようなことをお考えなのですか?」

「失礼ねえ。」

貴方だって、もしも、大公様の選ばれたお相手がアレックス様だったら、本当にお断りになるのかしら。」

あんな素敵な方、今までお会いしたことがなかったのですよ。」

それは、貴方も同じお気持ちでしょう。」

女のカンは、正直よ。」

「いい加減にしてください。」

私は、茉莉香さんが、ゆっくりと自分の幸せを考えていかれるのを、見守って差し上げたいのです。」

少女のグリュエルは、反撃に出た。

「では、あなたにお聞きしますわよ。」

今、銀河系は辺境開発ブームと聞いております。

そして、銀河聖王家の男性にも、退屈な王族の生活に見切りを付けて、辺境宇宙の開発のために王宮を飛び出そうという方が少なくないと聞いております。

もしも、あなたの殿がそうご決心なさったのなら、あなたはご一緒されますか？

その覚悟はありますか？

「その時が来たら、状況を総合的に判断し、適切に決断しますわ。」

「オホホ……。」

そんなあなたに、王宮を飛び出して、額に汗して大地を耕す生活が出来ますかしら。

それとも、離婚するのですか？

「では、あなたならば、そんなことが出来るとおっしゃるの？」

「出来ますわ。」

運命の赤い糸で結ばれた殿方と力を合わせて、辺境で二人の王国を築く。

ロマンチックですわあ。」

二人の論争はいつまでも続く……。

グリユーエルの心配はそれだけではない。

茉莉香との幸せな日々はいつまで続くのだろうか、不安に思うときがある。

まもなく、白鳳女学院での楽しい日々は終わる。

そして、茉莉香を追って、帝国女学院大学に通うことになるが、その日々もやがて終わるだろう。

茉莉香が、その先にどういう人生を選ぶか、自分にも予測がつかない。それが茉莉香のおもしろいところだ。

『これからのことを考えると複雑な気持ちですわ。』

茉莉香さんがどんな進路を選択しようと、私は、今まで通り、あの人の後を追っていきたい気持ちです。

でも、あの人の後を追えない日が来るかもしれないという予感もありますわ。』

例えば、茉莉香は、女王陛下の念願であるアンドロメダ遠征にも参加するつもりでいるだろう。

では、自分も同行するのだろうか。今回のM―八八〇一星団への遠征に同行した経験から、今の自分では、アンドロメダ遠征では果たすべき役割が無いよう思われた。

なにより、今の自分は、船乗りではないと思っただからだ。

アンドロメダ星雲までの二百万光年を超える未踏の宇宙を駆ける旅路が自分にとってどういう意味を持つのか、今の自分には分からなかった。

『思い起こせば、十三歳の時に、茉莉香さんと知り合ってから、私の生活はずいぶん変わりましたわ。』

それまでの王宮の退屈な生活とは比較になりませんわ。

なにより、自分の意志で生きていると言う実感がありますもの。

だからこそ、この先、私の人生をどう描くのが問題ですわね。』

グリューエルは、思った。

『やがて、自分も大人になる。』

その先に、自分はどういう人生を望んでいるのだろうか。』

グランマからもらったカードは、それを考えるように、自分に迫っていると思った。

『それにつけても、』

レオニー二家で演じた、念願の海賊ショー、面白かったですわ。

久々に、血が湧きたち、

自分の居場所を一つ見つけたような気がしましたわ。』

それは、次のようなショーだった。

グリューエルは、彼女の憧れたカリビアンスタイルの伝統的な海賊衣装に身を包み、

レーニー二家の大勢の男女を手下として従えて、堂々と舞台に登場した。

衣装は、小柄なグリュエルの体型をカバーするように、大きく盛り上がった派手な金モールと勲章のようなアクセサリーに溢れていた。

そして、彼女は、観客の前で抜いた太刀を身体の右手側に立てて、構えた。

八相の構えという、余分な力を使わない実戦的な姿勢であるが、立てた太刀がスポットライトに照らされて、ひとときわ鋭く白銀に輝き、美しかった。

「誰だ、誰だ。」「お前は誰だ。」という掛け声に応えて、グリュエルは口上を述べた。

『問われて名乗るも おこがましいが

産まれは祖先の移民船 王家の薔薇の泉から

生まれる定めの子 十三歳で遊学に

身の生業（なりわい）も白浪の キャプテン茉莉香にあこがれて

海の明星新興浜 白い凰（とり）の女子高の

泣く子も黙るヨット部に 中学生で入りびたり

密航すれども船降りず 無茶はすれども結果オーライ

わがまま言えども笑顔欠かさず ロマンチックは座右の銘

イカツイ顔の海賊も オトメが見ればまあカワイー

此度はヒガンへ大遠征 留守番イヤヨと押し乗って

たどり着いたる 新天地くくくく』

そこまで口上を述べると、グリュエルは太刀を頭上に掲げた。

『さあ、さあ、皆様、これなる、セレニティ王家伝来の名刀をご覧あれ。

抜けば玉散る氷の刃（やいば）。その切れ味をご覧にいれます。

ここに取り出だしたる一枚の白い紙。

これ、この通り、

一枚の紙が二枚、

二枚の紙が四枚、

四枚の紙が八枚、

八枚が十と六枚、

十六枚が三十と二枚、

三十二枚が六十四枚、

六十四枚が百と二十八枚。

これを散らせば、春の落花か、名残の雪か、吹雪の舞とごぎますうくくく。』

そう言つて、グリュエルは切り刻んだ白い紙切れの塊を手にとって、勢いよく、頭

上へ放り上げた。

同時に、海賊服に身を包んで後ろに並んだ男女からも、白い紙切れの塊が頭上に放り

上げられた。

パーン

白い塊が高く上がったところで、火花がはじけたような音がした。

そして、白い紙ふぶきではなく、五色の色鮮やかな紙吹雪が、グリユーエル達の頭上から降り注いだ。

鮮やかなマジック（手品）である。

五色の紙吹雪を浴びながら、グリユーエルは最後の口上を述べた。

『儂い（はかない）その身の境界（きょうがい）も

花の命は短いと 一刻たりとも無駄にせず

春から帝都の女子大生 高校飛ばして後を追

事件と聞けばどこまでも 船を飛ばして宇宙（うみ）駆ける

恋と冒険、探し求める プリンセス・セレンディティ（Serendipity）

海賊女王 グリユーエル・セレンティとは、このわたし（わたし）。

そう言つて、グリユーエルは、剣を正眼に構えて観客に突き付け、ドスの効いた声をだした。

『さあ、金目のものを出しな。』

「・・・・・・・・」



その迫力に一瞬の沈黙が支配した後、彼女は大きな拍手喝采に包まれた。

『あの時のことは、何度思い出しても血が騒ぎますわ。』

王族も、海賊も、太古の時代は似たようなものと言われておりますから、私にもそのような血が流れているのでしょね。

フフフ・・・』

## 第二十四章 王女と茉莉香の生きる道

24-1 銀河帝国第二王宮（レッドクリスタル星系）

この日、茉莉香はクリスティア王女と呼ばれて、弁天丸で銀河帝国の第二王宮を訪ねた。第二王宮は、レッド・クリスタル星系の惑星軌道上にある巨大な宇宙ステーションである。

現在、たう星系には、レッド・クリスタル星系に通じる臨時の時空トンネルゲートが設置されており、弁天丸はそれを通して、第二王宮まで航海してきた。

茉莉香は、クリスティア王女の部屋に入ると、直立して敬礼し、言った。

「加藤茉莉香大佐、ただいま参りました。」

「いやあ。遠いところを来てくれて、ありがとうございます。」

「すわりなさい。」

「はい。」

「どうだい。時空トンネルは便利だろう。」

「はい、辺境の海明星と王宮との間を、弁天丸が一日で往復できるなんて、夢のようですよ。ミルキー・ウェイ計画が早く実現するといいですね。」

「そうだなあ。それで、用と言うのは、チアキのことなんだが……。」  
「はい。」

「この前の遠征の時、惑星ライセで、レオニー二家の若者たちと夕食会で遊んだよね。」

その時、チアキも海賊シヨールを演じたと聞いているのだけど。」

「はい。そうです。」

チアキちゃん、かつこよくてきれいでしたよ。」

「その海賊シヨールの様子について、チアキが恥ずかしがつて、話すのを嫌がつているんだ。仕方がないから、あなたから話を聞きたいと思つてね。」

「はい。司令官のお望みとあらば……。」

茉莉香は少し不安に思つたが、応じた。

「そうか。実は、母上と公爵夫人もぜひ聞きたいとおっしゃつておられるので、ついてきてくれ。別の部屋で、三人一緒に話を聞きたいのでね。」

「ええ？ エカテリーナ様も御一緒にですか？」

「そうだ。さあ、中廊下（なかるうか）を通つていくから、こつちだ。」

中廊下とは、王宮内を王族達が移動するための専用の通路である。中廊下を通行できるのは、王族のほか、侍従や女官など限られた人たちとされている。

王族達も普段は部屋の外にある本来の廊下を用いることが多いが、特に内密の会議を

する際には中廊下を通つて集まると言われている。

茉莉香は、王宮の中廊下を歩くのは初めてだった。茉莉香は、チアキの身に、今何が起こっているのかと考えながら、緊張して、クリスティア女王のあとに従つた。

公爵夫人エカテリーナは、聖王家の女性達の親睦会である「ローズガーデンクラブ」の会長である。しかし、その本当の役割は、聖王家の王族達の縁談を取り仕切ることである。聖王家の王族の婚約、結婚は、女王の許可が必要であり、彼女はその補佐役として縁談を取り仕切っているのだ。

その彼女が加わるというのは、どういうことだろうか。

クリスティア女王と茉莉香は、小さな部屋に入ると、女王と公爵夫人が現れるのを待った。

やがて、二人が現れたので、茉莉香は立ち上がつて敬礼し、席を勧められた。

侍従や女官の同席は無く、部屋の中は四人だけだと知つて、茉莉香は更に緊張した。それだけ重要な用件だと思つたからだ。

「茉莉香、話は聞いていると思うが、チアキの海賊ショーの様子を、貴方から直接に聞きたいと思つてね。

チアキの女海賊ぶりは、どうだったかい？」

女王陛下が聞いた。

「はい、チアキ様は、海賊ショーではとてもお美しく、颯爽（さつそう）と演じておられました。」

茉莉香は、チアキに対して敬語を使いながら、話し始めた。

24—2 レオニー二家の「夕食会場」（ヒガン星団・惑星ライセ）

チアキの海賊ショーは、次のようなものだった。

舞台は、大きな川に架かる橋の手元である。舞台後方に、橋をイメージした大階段のセツトが作られている。

橋のデザインは、オリエンタル・クラシックを呼ばれる古い木造橋のイメージで統一されている。すなわち、階段の両側には、赤く塗られた欄干とその上には金色の丸い擬宝珠（ぎぼし）がつけられ、階段の両脇の丸いカーブは、この橋が、上部が湾曲したアーチ形、すなわち太鼓橋であることを示している。

手前の欄干には、橋の名前が、「GOJO」と書かれている。

夜の闇の中、最初に、橋のセツトの最上段中央から、背が高く大きな体格の一人の戦士が登場し、控えめのスポットライトを浴びた。

彼は、多くの傷のついた黒光りする鎧に身を包み、その背中に何本のもの剣を背負い、手には、槍の先に蛮刀のような大きな刃がついた、特大のナギナタを持っている。

黒い戦士は、階段を降りながら、語った。

「われこそは、銀河の勇者、ベン・ケイイなり。」

われは、銀河系を征服する魔力を得るため、魔王に、千人の勇者を倒して千本の剣を捧げると誓った。」

「おお~~~~~!」

黒ずくめの鎧を身に着けた兵士のような姿をした大勢の男女が、四足の獣のような動きで彼に従うように現れ、そして、彼の言葉に合わせて、歓声を上げた。

「すでに、我は、九百と、九十九人の勇者を倒し、九百と、九十九本の剣を魔王にささげた。」

我の願いも、あと一人、あと一本で、成就する。」

「おお~~~~~!」

「今宵こそ、千人、千本目にふさわしい勇者を倒して、魔王への誓いを果たさん。」

「おお~~~~~!」

「我に敗れた勇者たちよ、お前たちも我の大願成就を願ってくれるか。ワハハハ……」  
黒ずくめの兵士たちは、彼に敗れて魔物となった勇者たちだった。

その時、横笛の音（ね）が響き渡った。

「おお、美しい笛の音が聞こえる。」

さては、高貴な生まれの戦士が吹く笛の音に相違ない。

あれこそ、千人、千本目にふさわしい勇者。いざ、打ち取らん。

さあ、モノども、姿を隠せ……声を潜めよ……。」

狂戦士ベン・ケイイが舞台のそでに隠れると、橋の上段中央から、横笛をふきながら、若い勇者が、スポットライトを浴びながら、現れた。

もちろん、チアキの登場だった。チアキは、大きなつばの帽子を浅めにかぶりお気に入りの青い海賊衣装に身を包んでいるが、長い髪を後ろで縛ってまとめて、美少年風の男装をしていた。

チアキは、笛を吹きながら階段を下りた。

そして舞台中央に進んで言った。

「はて？　夜毎に帝都を騒がすベン・ケイイなる妖しい者が現れるのはこのあたりと聞いたが、なにも現れぬではないか。

さては、私が現れると知って、逃げ出したのか。ホホホ……  
では、しばし、星空の風流を楽しもう。

川浪の立てる音を聞きながら、月の出るのを待つとするか……。」

チアキは、笛をしまい、懐から、金銀五色に輝くきらびやかで大きな扇を取り出すと、大げさな動作で笑みながら、自分の顔を扇いだ。

そこへ、銀河の狂戦士、ベン・ケイとその一団が忍び寄ってくる。

「おい、その若造（わかぞう）。命が惜しければ、剣を我に捧げ、立ちされ。」

「無礼者。名を名乗れ。」

「生意気な若造だ。黙って剣を我に捧げれば、許してやったものを……。」

よかろう。聞いて驚くな。

われこそは、銀河の勇者、ベン・ケイなり。

われは、銀河系を征服する魔力を得るため、魔王に、千人の勇者を倒して千本の剣を捧げると誓った者だ。

どうだ。恐れ入ったか！

「やはり、近頃、帝都を騒がす怪しい者とは、お前か。

立ち去るがよい。」

「我を恐れぬのか。我の力を知らぬのか。

かくなる上は、最後の言葉じゃ。剣を我に捧げ、命乞いをするならば、我の従者にしてやろう。

さあ、命乞いをせよ。」

ベン・ケイは、チアキに向かって言った。

「何をいうか。私を誰と心得る。」



「元氣な若造じやのう。これは戦うのが楽しみじや。

もう一度言うが、勝つのはわしじや。

お前が戦うと言うならば、お前を切り捨て、お前の剣を奪うだけじや。

それだけではないぞ、お前は死しても魔物となつて我の下僕(しもべ)となるのじや。」  
「何を言うか。身の程知らずの戦士よ。

ならば、私をそのナギナタで切つてみよ。ほれ……。」

そう言つて、チアキはベン・ケイイを扇で仰いだ。

「うむむ……。身の程知らずは、お前の方じや……。ヤ〜」

ベン・ケイイは、ナギナタをふるつて、チアキに切りかかった。

その時、チアキはベン・ケイイが振り回すナギナタをかわして、さつと5メートルほどの高さに飛び上がると、後ろ向きの姿勢のまま、後方の橋の欄干の上に飛び乗った。

そして、擬宝珠(ぎぼし)の上に、まるで浮かんでいるように立っている。

「うむむ。すばしい奴だ。」

この時代には、人間が短距離の飛行や跳躍をすることは、人工重力の古典的な応用として実用化されている。

ただし、それが兵器として、あるいは自動車に代わる移動手段として広く普及することとは無かつた。

なぜなら、結局、人間の肉体は鳥のように速く遠くまで飛ぶ機能を備えていないため、実用性に劣ることがわかったためであった。また、軍事では、いくら歩兵が空を飛べても、結局、ビーム砲やミサイルの標的になるだけで、兵器としての費用対効果が著しく劣るからであった。

しかし、芸能の世界では、夢と冒険の表現手段として、大いに活用されていた。チアキの人間技でない跳躍もその応用である。

「さあ来い。どうした、怖気（おじけ）づいたか。さあ、来い。来い。」

チアキは、扇でひらひらと手招きをして、ベン・ケイイを挑発した。

「なにを、小賢しい。」

ベン・ケイイは、またチアキに切りかかり、チアキが飛びはねて交わした。

しかし、その時、ベン・ケイイは素早く態勢を立て直し、チアキのジャンプの行方を先読みして、チアキの着地点めがけて、ナギナタで渾身の一撃を放った。

『危ない!!』

だれもがそう思った瞬間、

「ハハハ……。お前に私は切れぬ。負けを認めよ。」

そう言つて、チアキは飛びながら方向を変えてナギナタをかわし、別の擬宝珠の上に着地した。

「うぬうう……。鳥のようなヤツめ。」

「では、そろそろ、こちらから行くぞ。えい〜〜」

チアキは、これまでとは比較にならないほどの速さで飛んだ。

そして、チアキは、ベン・ケイの頭上を飛び越えざまに、手に持った扇で彼の頭をぴしやりと打った。

「ああああ……。」

ベン・ケイは、激しく叫んで、頭を押さえ、地面に膝をついた。

周りを取り囲む、黒い獣のような戦士たちも、同じように苦しい表情を見せている。

「この扇は、光の神のご加護を受けておる。」

その扇で触れただけで、かくも苦しむとは……。

勇者ベン・ケイよ。

さては、お前も、既に魔物と成り果てていたのか。哀れじやなあ。」

「お助けを……。」

ベン・ケイは、苦しみながら、チアキに助けを乞うた。

彼の周りを取り囲む、黒い獣のような戦士たちも、同じように助けを乞い、うめき声をあげた。

「神の力に敗れ、塵に還るのが、魔物の宿命（さだめ）ではないか。」

命乞いなど、身の程をわきまえよ。」

「お助けを。御恩は、決して忘れませぬ。」

「ベンよ、私に魔物の言葉を信じよと言うのか？」

「今は魔物に落ちたといえども、元は人間、元は勇者。」

お誓い申し上げます。偽りなどありません。」

彼の周りを取り囲む、黒い獣のような戦士たちも、同じように誓った。

「よかろう。たとえ、その身は魔物に落ちたといえども、もとは人間。もとは勇者。」

我に助けを乞うならば、捨ててはおけぬ。」

「ありがたき幸せ。御恩は決して忘れませぬ。」

この後（のち）は、あなたの下僕（しもべ）として、お仕えいたしましょう。」

黒い獣のような戦士たちも、口々に、下僕として仕えると誓った。

「ならば、お前たちを私の従者にしてやろう。」

わが家に伝わる、破邪の剣を見よ。

これなる剣にて、お前たちに取りついた魔を払う。

見よ。」

チアキはそう言って、帽子をとり、腰の剣を抜いて、頭上に掲げた。

舞台全体が、暗転すると同時に、

ピカーツ！　ゴロゴロ、ババーン！

大きな稲妻がチアキの掲げた剣から放たれ、周りの魔物たちを貫いた。魔物たちは皆、地面に倒れてしまった。

そして、舞台の中央で飛び交う火花に照らされた、チアキの顔は、神々しいほど美しかった。

『チアキちゃん。すごくきれい。』

観客として見ていた茉莉香は、感動した。

もちろん、飛び交う火花は演出である。

効果音と共に静電気の火花が派手に飛び散って、薄暗い舞台を鮮やかに照らした。

舞台が静かになって、やがて明るくなった。

倒れていた狂戦士ベン・ケイが立ち上がり、チアキの元へ歩み寄り、ひざまずいた。

いつの間にか、彼の甲冑は金色に輝き、衣服は鮮やかな赤や青の輝きを取り戻していた。

他の魔物たちも、チアキの元へ近づき、ひざまずいた。

彼らの甲冑も同じように金色に輝き、その衣装も色鮮やかな輝きを取り戻していた。

みな、見目麗しい男女の姿に戻り、勇者としての輝きを取り戻した。

「かくも強く賢く美しい姫よ。

我らが主（あるじ）よ。

如何なる高貴な生まれか、高らかに、御名を名乗らせたまえ。」  
従者となった勇者ベン・ケイが叫んだ。

「名乗らせたまえ。」

他の勇者たちも叫んだ。

チアキは、声にこたえて、舞台中央に進んだ。

「今となつては、隠すこともあるまい。」

よかろう、我が名を名乗ろう。」

そう言つて、チアキは口上を述べ始めた。

「われの名は勇者USIWAKAと 幼き頃は遮那王と

大鳥羽ばたくその日まで この世を忍ぶヒナ鳥の

仮の姿で過ごせしを 時は来たりと人の言う

わが本名をいま明かさん。

生まれは辺境海賊船 必ず帰ると言い残す

生みの母とは生き別れ 幼き我が身託されて

必ず守ると誓い建て 命懸けで育んだ

見かけはコワイ海賊の 心は優しいオヤジから

弁天丸の訃報聞き 同じ齡（よわい）の十六歳

弁天お嬢が白波の 跡継ぎ候補はどんなヤツ

ひと目見ようと立ち寄った 白波寄せる奥浜の

白い鷗（かもめ）の女子高で 出会った少女は赤い髪

赤い血潮の友情の 名前で呼び合う間柄

だけど私は『ちゃんじゃない』 凄腕揃いのヨット部で

練習航海アヲヨット 非武装ヨットで電子戦

ネビュラ・カップで大暴れ オテンバお嬢は女子の本懐

もとは海賊今教師 なぞの女に誘われて

帝都目指した旅の先 秘された母の名前すら

つゆも知らずにたどり着く 銀河帝国薔薇の園

見渡す銀河の星々に 必ず探すと誓いたて

やがて来たる誕生日 十八歳のその時に

襲った船で海賊の 初の名乗りを上げたとき

帰って来たる海賊の 親子の名乗りで遂に知る

我は銀河の主（あるじ）の子 海賊女王の娘なり

奇蹟の薔薇と日輪の 誉れも高いエンブレム

掲げた船で宇宙（うみ）を行く

銀河帝国海賊王女 キャプテン・チアキとは、このわたしくくくく  
そう言つて、キアキが効果音に合わせて、剣を構えてポーズを決め、大きな拍手喝采  
が起こつた。

だが、そこでシヨールは終りではなかつた。

これからが、ファイナーレのはじまりだ。

ファイナーレは、出演者総出の「パレード」である。

階段の上部から、華やかな衣装を身にまとつた女の子や男の子達が、鈴を付けてリボンを垂らした「シャンシャン」を振り、音楽に合わせて鈴の音を響かせながら、階段を下りてくる。

途中で左右や中央に向かつて「ありがとう」「ありがとう」と手を振っている。

最後に、チアキとベン・ケイ役をした男の子の2人が、クジャクのようにきらびやかな羽を背中に付けて、同じように音楽に合わせて踊りながら、階段を下りてくる。

二人も、階段を下りる途中から、左右や中央に向かつて「ありがとう」「ありがとう」と手を振っている。

全員が舞台に揃うと、また左右や中央の観客に挨拶し、盛大な拍手、歓声を浴びた。

舞台の手前のプールには、水面一面に奇蹟の薔薇、つまり銀河聖王家のシンボルである青い薔薇の花が浮かべられ、スポットライトを浴びたチアキは本当に美しかった。



豪華な演出のステージは、そこで終わるシナリオだった。

しかし、突然、チアキが舞台の上、天井のスポットライトの方を見上げた。

「……………」

チアキにつられて、ほかの出演者も観客も天井を見上げ、一瞬の間、みんなが沈黙した。

パーン

その時、小さな破裂音がして、天井のスポットライトが壊れた。

「アレを見よ、ものども。」

我らの勝利に魔王が挑戦状を寄こしたぞ。

さあ、最後の決戦じゃ。

私に続け！

突撃だあ~~~~！」

チアキはそう叫ぶと、衣装のまま、手前のプールに飛び込み、水面に浮かぶ青い薔薇の花をかき分けながら、向こう岸まで泳ぎだした。

「姫に続け！」

「おお~~~~！」

すぐさま、ステージの出演者みんながプールに飛び込んで、向こう岸まで泳ぎだした。

そして、向こう岸に泳ぎつくと、皆は整列して、勝どきの声を上げた。  
「えい、えい、おー！」

24—3 銀河帝国第二王宮（レッドクリスタル星系）

こう言つて、茉莉香は、チアキの海賊ショーの様子を話し終えた。  
「なるほどねえ。」

チアキもなかなか芸達者で、楽しく遊んだのだなあ。」

女王陛下が言つた

「ほんとに、楽しそうですねえ。」

でも、そのような豪華なショーは、かなり前から準備されていたのでしよう。あなた達三人が来たから、即席で用意できるものではないでしょう。」

エカテリーナ公爵夫人が聞いた。

「そう言えば、そうかもしれません。」

私たちはとにかく楽しかったので、そういう背景を考える機会もありませんでしたが、今、考えるとそうかもしれません。用意が良すぎますね。」

茉莉香が言つた。

「茉莉香。チアキが共演したベン・ケイ役の男の子は、誰だか知っているかい？」

クリステイア王女が聞いた。

「はい。ヒガン共和国の大統領の息子さんだと聞いています。名前は、確か、ジュリアーノとか、言っていました。」

「それで、その男の子は、どんなコだったかい？ カッコよかったかな？」

「はあ、確かに。背も高く、美男子で、ショーの演技やダンスはバツチリ決まっています。華がある人と言うか、カッコよかったです。」

若者世代では、『一族のリーダー候補NO. 1』だそうですね。」

茉莉香が言った。

「やはりそうですわね。」

その方は、あなたのお友達、サーシャさんとの縁談がおありだった方でしょう。」

「そうらしいですねえ。縁談は、サーシャが断つたと聞いていますが……。」

茉莉香が言った。

「ふうーん。それで、チャキの様子はどうだったかい？」

チャキが海賊ショーの様子を話さないことと関係があるのかなあ？」

クリステイア王女が聞いた。

「ええ!？」

あの、……ジュリアーノさんと、チャキちゃんのことですかあ？」

自分のことはニブイ茉莉香も、聞かれたことの真意は理解していた。「それはないと思います。」

チアキちゃんが、失礼しました、チアキ様が、恥ずかしがって海賊シヨウの様子を話しならないのは、そういう理由ではないと思います。

チアキ様は、ノリノリで、また失礼しました、お元気でいろんなことをされるのですが、その後で恥ずかしがって後悔されるようなところがおりなので、今回もそれではないのかと思います。」

茉莉香は、少し緊張しつつ、そう答えて否定した。

「そうか、茉莉香はそう思うんだね。ありがとう。」

それにしても、あなたとチアキは本当に仲が良いんだね。これからも、チアキのそばに居て助けてやってほしい。頼んだよ、茉莉香。」

女王陛下が、そう言った。

「はい。」

茉莉香は緊張して答えた。

『そうなのかあ。』

お姫様って、男の子と遊ぶのも難しいんだなあ・・・。

それに、きつと、チアキちゃんが演じた役はサーシャがやるために準備されていたん

だよねえ……。

この話は、チアキちゃんには言えないなあ……。』

茉莉香は、チアキが王女として生きる道は思ったより険しいものであることを実感した。

「そうはいつても、やっぱり、ヒガン系のレオニー二家は、欲しいのだろうなあ。」

女王陛下が言った。

「今のところ、旧宇宙マフィア系の海賊を束ねるレオニー二家だけですからね。そして、これからは、さらに絆が強くなるわけですから。」

エカテリーナ公爵夫人が言った。

「そうだね。」

それに加えて、帝国が援助した軍艦などの武器は、旧宇宙マフィア系が独占しているらしいからね。

だから、これに対抗して勢力を挽回するために、ヒガン系のレオニー二家が、姻戚関係の構築に乗り出すと考えられるというのだね。

今後、二つに分かれた家の間で、水面下の勢力争いは激しくなるかもしれないね。」

「サーシャさんの縁談はその融和を狙ったのでしようが、彼女が断ったので、その影響がこちらに出てくると思われます。各家に情報提供しておきましょうか。」

「そこまで心配する必要があるということか……。」

茉莉香は、女王陛下とエカテリーナ公爵夫人の間で交わされた、持つて回った言いまわしの意味深な会話を黙って聞いていた。もちろん、二人が、自分には知らされていない重大な秘密を前提に話をしているらしいことは、わかった。

『チアキちゃんといい、サーシャといい、大勢の人の人生を背負う星の下に生まれたことは、結婚ひとつをとっても、大変なことなんだなあ。』

それにしても、私に、こんな秘密の話を聞かせて、どうしようと言うのだろうか。』

茉莉香は疑問に思った。

「ところで、茉莉香さん。」

白鳳女学院の卒業式の夜に行われるダンスパーティーに、今年は、聖王家の男性が出席するのよ。彼はまだ学生で、もちろん独身よ。

たまたま、用事で海明星に来ているので、お招きがあつて出席するそうよ。ついでに、あなたも一曲踊つて下さいね。」

エカテリーナ公爵夫人が言った。

「ええ！ 私がダンスのお相手を勤めるのですか……。」

もちろん、断れる話ではないと思ひ、茉莉香は言った。

「私でよろしければ、よ、よ、喜んで……。」

茉莉香は緊張して返事をすると同時に、ダンス部や校長の言う「サプライズ」がチアキたちの推測どおりだったことを悟った。

「そんなに緊張しなくてもよろしいわよ。」

すでにあなたもお会いになったことのある方よ。」

「ええ？ 私は、聖王家の独身男性の方にお会いしたことはないと思いますが……。」  
「茉莉香。彼の名は、アレクサンドル・ホワイトローズ。医者のアレックスだよ。遠征で会わなかったかい？」

クリステリア王女が、笑いながら言った。

「ええ！ あのくオ……お医者さんと言えば、あのホワイト先生ですかあ。」

「そうよ。どうかしら。彼のこと……。」

エカテリーナ公爵夫人が、茉莉香を見て、微笑んだ。

「茉莉香、健康診断では失敗したようだが、彼はまだ医学生にもかかわらず、すでに医者としての腕前は一流だぞ。遠征でも、大勢の人が彼に命を助けられたそうさ。」

それに、彼の性格なら、船医として、喜んで弁天丸に乗るんじゃないかなあ。」

クリステリア王女が言った。

「はあ……。」

茉莉香は、この場をどう逃げきるか、思案を巡らしていた。

その時、ドアをノックする音が聞こえた。

「私です。入ってよろしいでしょうか。」

チアキの声が聞こえた。

この声を聞いて、女王、エカテリーナ公爵夫人、クリステイア王女は、チアキに気づかれたと顔をしかめた。

「入りなさい。」

女王が平静な声で答えた。

チアキは部屋に入ると、四人の顔を眺め、茉莉香が少し困った顔をしているのに気がついた。そして、機嫌の悪い、よそよそしい声で言った。

「これは、これは。お三方おそろいで、茉莉香を囲んでいったい何のご相談ですか。」

私は、茉莉香が王宮に来ると聞いていたのに姿が見えないので、何処へ行ったのかと思つて、探しておりました。」

チアキは、茉莉香の縁談の話に自分が呼ばれていなかったと思つて、不満だった。

「まあ、チアキ。そんなに怒るな。今、茉莉香と卒業記念ダンスパーティーの話をしていたところだ。」

クリステイア王女がなだめようとした。

「やっぱり、茉莉香をアレックスと踊らせて、お見合いさせるといふ相談でしょうね。」



「今、それを話していたところだ。」

「そう言う話なら、何故、私をお呼び頂けないのですか。この間、茉莉香にアレックスを引き合わせたのは、私ですよ。」

「まあ、チアキ。そんなに怒るな。こういう話は、正式に、母上やエカテリーナ様からお話し頂くのが、正しい筋道というものだ。」

「それはそうでしょうが、その席になぜお姉様がいらつしやるのですか？」

「わ、わたしは、その、茉莉香の『姉』、つまり、年上の先輩、だからな……。茉莉香のことを、心配しているのだ。」

「私は茉莉香の親友です。その私も、とても心配しています。」

「それは、そうだが……。」

「それに、お姉様のどこが、『先輩』なのでしょう。エカテリーナ様のご紹介下さる縁談をことごとく断っていらつしやるのは、誰でしょうか。」

縁談の話でご自分のことを茉莉香の『先輩』とおつしやるからには、結婚か、せめて婚約されていないと、その資格がないのでは……。」

チアキは、姉の地雷を力一杯、踏んづけた。

「お前にそれを言われたくないね。王位継承者と言うものは、難しい問題が……。」「クリスティア王女の表情が険しくなってきた。」

二人が口げんかを始めたので、茉莉香は見かねて、仲裁しようとした。

「まあまあ、二人とも。ちよつと冷静に、冷静に……。」

「なに言ってるんだ。こうなったのは、いつたいだれのせいだと思ってるんだ？」

「そうよ。茉莉香が、いつまでもハツキリしないからよ。」

先日だって、せっかく、ギルバートさんとデートする切っ掛けを作ってあげたのに、成果なしじゃないの。」

「ええ！この間の、罰ゲームって、そういう趣旨だったの？」

「あたり前でしょ。気づいていなかったの？」

「アハハハ……茉莉香らしいなあ。」

「チアキちゃん、ヒドイよ……。」

お母さんみたいな、お節介はお断りです。私、自分のことは自分で決めます。」

茉莉香もすこし怒って、チアキを冷やかに始めた。

「でも、いいよねえ、チアキちゃんは。」

エドワードさん一筋と、心に決めているからね。」

「何を言い出すの。あれは、アイツが勝手に言ってきただけで、私は何も……。」

そう言いながら、チアキは、顔を赤くした。

「またまた、そんなこと言って……。誰も信じないよ。」

それより、早く何とかしないと、卒業式の日、ウルスラが自分のダーリンを派手に見せびらして、学校中を歩きまわるよ。

チアキちゃん、それでいいの？」

「私は、何もウルスラと競ってなんかいないから……。」

そう言いながら、負けず嫌いのチアキの顔はますます赤くなつていった。

女王と公爵夫人は、3人の口げんかを微笑して眺めていた。

「ウフフ……ケンカするほど仲が良いんですねえ。」

それに、この子供達を見ていると、私たちが初めて出会った頃を、思い出しますねえ。」

公爵夫人が言った。

「そうだなあ。あれはたしか、私が18歳の時だったなあ。」

女王が言った。

「そうですね。行儀見習いの研修生として、私が王宮に使っていたときですわ。」

王宮での研修が退屈でイヤになって、廊下に出てサボっていると、同じように退屈を

もてあました女性が歩いて来て、私に声を掛けたんですね。」

「そうそう。私は一目見てわかったよ。こいつは、同類だつて。」

「私は、最初、貴方が王女だつて分かりませんでした。同じ研修生だろうと思つてました。」

「ハハハ、すつぴんで、王女らしくない服を着てたからね。

それから、毎日、二人で何か面白いことはないかと、王宮の中を荒らし回ったよね。」

「そうですね。いろんないたずらをしましたね。」

「何が一番面白かったかい？」

「やっぱり、バード・グライダーを身につけて、王宮の塔の最上階から飛び降りたことでしょうね。」

「あれは気分爽快でした。忘れられません。」

「そうだなあ。私も同感だ。」

二人が並んで飛んでいるところを衛兵達が驚いて見上げているのが、おかしかったよねえ。」

「そうでしたね。」

「もつとも、私は、あとでずいぶん叱られましたけどね。」

「私の分まで叱られて、済まなかったね。」

でも、私は、あの体験でやっぱり自由な空を飛びたいという気持ちがありますます強くなっただ。」

女王が言った。

「そうだろうと思っていましたよ。」

私が研修を終わって実家に帰ってからすぐ、王女様が家出されたので探していると王宮の方が私の実家にも密かに来られました。

私は、それを知って私は驚くと同時に、やっぱりなあと思いましたよ。」

「心配かけたなあ。

でも、私が王宮に戻ってきた時、貴方が私の元婚約者の嫁になっているを知って、私も驚いたよ。」

「そうでしたね。」

私もあの縁談が王家から来たときは驚きましたよ。でも、貴方の後というのは、これも運命かなと思いました。」

「お陰で、今もこうしていつしよにいられる訳だからね。」

「そうですね。」

「ハハハ・・・」

いつの間にか、クリスティア、チアキ、茉莉香の三人は、口喧嘩（くちげんか）を止めて、女王と公爵夫人の「武勇伝」を驚いて聞いていた。

公爵の反乱にもかかわらず、女王の公爵夫人への信頼が厚い理由がわかったからだ。

24—4 レストラン・ヌーベルフランセイーズ（帝都・クリスタルスター）

茉莉香が銀河帝国の第二王宮に参上した日の夜、ミーサとシュニツァーは、銀河テレビの副社長クラーク・ケントと、帝都のレストラン・ヌーベルフランセイーズで食事をしていた。

ミーサは豪華なドレス姿であり、ケントも高級な背広姿だった。そして、シュニツァーは、めつたに見せないヒューマノイド型のボディで、同じように高級な背広姿だった。このため、彼の外見は、サイボーグではなく、2メートルほどの大男にしか見えなかった。

「やっぱり、この店のお料理は何度食べてもおいしいわねえ。」

「ごちそうしていただいて、ありがとうございます。お礼を言うわ。」

「ミーサが食後のコーヒーを飲みながら、言った。」

「いいえいえ、こちらこそ。この前の遠征のテレビ中継は、大好評でしたからねえ。視聴率も、記録的でしたよ。」

「それもこれも、先生のおかげですよ。お礼を言うのはこちらの方です。」

クラーク・ケントが言った。

「あら、お礼を言うなら、私ではなく、船長の方に言わないと……。」

それから、もう一つお礼を言わないといけないわね。スージーさんを上手に遠ざけてくれたわね。ありがとう。船長も感謝していると思うわよ。」

「あはは……」

もともと、スージーは玉の輿狙いですし、幸いオーナーのウォーターメロン家の三男坊がスージーにベタ惚れでしたからね。

それに、モーガン家の嫁には、スージーは無理ですよ。その方が、彼女の為です。」  
「そうね。」

それでああなたは、この縁談をまとめた功績で、ウォーターメロン家の大奥様の御覚え目出度く、次期社長は間違いないし、なのかしら。彼女は、孫の三男坊を特に可愛がつていたそうだからね。」

「そんなお世辞を言わないでくださいよ。先生らしくもない。」

「あはは……。お世辞もお礼のうちよね。」

でも、スージーさんは、裏の事情に気付いているの？」

「いいえ。」

でも、勘のいい奴ですから、モーガン家の息子と弁天丸の船長との間に、なにか秘密があるのかと、私に聞いてきましたよ。

もちろん、男女関係のことじゃないですよ。」

「あの二人の男女関係のことなら、いくらでも探ってもらって、良いんだけどねえ。」

「あはは……」

男女関係といえば、ねえ、ミーサ、良い返事を聞かせてくださいよ。」  
「あら、そう言う話になるの。」

「あなただって、いつまでも弁天丸に乗っていられないでしょう。こちらのシュニッツアーさんだって、同じような事情でしょう。」

だって、船長も代替わりして慣れてきたし、彼女にもそろそろ自分のスタッフを自分で集めることが必要な時期に来ているんじゃないですかあ。」

「クラーク。あなた、相変わらず、勘のいい人ねえ。」

裏事情を、全部、知っているようなふりをして、今までの話を全部、ヤマカンで言っているとは、とても見えないわねえ。」

「実は、シュニッツアーさんにも良いお話があるんですが……。」

「私はまだ、弁天丸を離れるつもりはないよ。後任のめどがついているわけではないし……。」

「後任なら、船長自身か、あるいはモーガン家が何とかするでしょう。」

私を見ると、船長が望めば、ギルバート・モーガン自身がシュニッツアーさんの後任を勤めるのではないのでしょうか。」

「その肝心の船長の気持ちだが、定まらないからねえ。」

ミーサが言った。



「そうですねえ。．．．やはり、まだ18歳だからでしょうか。」

「そうねえ．．．．あら、やだ、もうこんな時間。」

今晚はごちそうさま。」

「ああ、ひどいなあ。またですかあ。」

「これで何回目か、覚えてるかしら。」

「38回目かなあ．．．。」

「フフフ．．．。」

三人は、店を出て、歩道にでた。星空がきれいだった。

「シュニツツアー、車を呼んで頂戴。」

「そこに来てますよ。私たちのも、ケントさんのも。」

「そう。じゃあ．．．。」

ミーサがクラーク・ケントに別れの挨拶をしたと思った瞬間、ミーサは毛皮のコートのポケットから、携帯型のブラスターを取り出して、いきなりケントに向かって発射した。

シューツ！

最小限の出力で、ブラスターが光も音もなく発射された。これは、相手の手足を痺れさせて、抵抗を止める使い方である。

「ああ、またですかあ・・・ううう」

クラーク・ケントは足が痺（しび）れてよろめいたので、シュニツターが体を支えた。

「今のは、回数を間違えたペナルティよ。今日で37回目のはずよ。」

誰か、他の女の人に言ったプロポーズを数えているんじゃないの。

まったく失礼しちゃうわ。」

「ひどいなあ。遠征中に言ったら、断られたじゃないですかあ。」

あれも数えると、38回目ですよ。」

「あら、そうかしら・・・じゃあ」

ミーサはそう言うと、動けなくなりシュニツターに体を支えられているケントに近づいて、その頬にキスをした。

「ごめんなさいね。これで帳消しね。」

ミーサは、まだ充分に動けないクラークに微笑んで、シュニツターに言った。

「シュニツター、クラークを車まで送ってあげて。」

「了解。」

「クラーク、2、3分で体は元に戻るわよ。いつものことだけど。」

おやすみなさい。

茉莉香のことも、心配してくれてありがとう。」

「どどど・うも。」

クラーク・ケントは、テレビ局の車に乗って帰って行った。

その車を見送ったミーサは、帝都の星空を見上げて言った。

「茉莉香。クラークの言うとおりよ。」

あなたもそろそろ、自分と人生をとにもするクルーを自分で集めないといけない時期にきているんじゃないかしら……。」

「そうだなあ。」

いつまでも、ゴンザエモンが集めたクルーに頼っていてはだめだ。

弁天丸は、もう、加藤茉莉香の時代なのだから。」

シュニッツアーも言った

## 第二十五章 新しい弁天丸

25—1 加藤茉莉香邸（新奥浜市・海明星）

ピンポーン、ピンポーン。

白鳳女学院高等部の卒業式まで、あと三日と迫った3月のある日の夕方、加藤茉莉香邸の玄関ドアホンが鳴った。

帰宅して、ようやく一息ついた茉莉香は、玄関の応対に出た警備隊員から来客の名前を告げられた。

「加藤梨理香さまです。」

『ええ!? お母さん! 今ごろ、どうしてこの星に戻ってきたの?』

茉莉香はつぶやいた。

すぐに、リビングルームに加藤梨理香が現れた。

「いよゝゝ。茉莉香、久しぶりだね。」

「お母さん、久しぶり。いったい、どうしたの?」

「それはごあいさつだねえ。」

三日後は、お前も、いよいよ高校卒業だろう。

だから、お前の卒業式に出席しようと思って、やって来たんじゃないか。」

「ええ!?」 ありがとう。うれしいよ。

あんなに遠いところから来てくれるとは、思っていなかったもの。

この前の電話で話したのが、最後になるかと思つてたんだ。」

「ごあいさつだねえ。何が『最後』だよ。私がもう死んでるようなことを言わないで欲しいね。」

「でも、どうやって帰つてきたの?」

「ミルキーウェイのおかげさ。」

M—9801（星団）からヒガン（星団）まで行けば、あとはミルキーウェイを通つ

て、ビュンと飛んできたよ。

だから、卒業式に、なんとか間に合つたわけだよ。」

「そうだね。あれを使えば早いものね。」

それで、パラベラム号に乗つて来たの?」

「いいや。あのロクテナシの船なんか、乗るもんかい。」

ブルツク星系に寄つて、あそこの王子さんたちの船に同乗させてもらつたんだよ。」

梨理香は相変わらず元気そうだったが、無理に元気よく装つているようにも見えた。

「エエッ! それは、どういう訳なの。お母さん、急に海明星に戻つてくるなんて。」

私の卒業式以外に、なにか理由があつたんじゃないの？」

茉莉香は、少し茶目つ気のある笑顔を作つて、母に聞いてみた。

しかし、梨理香は、茉莉香の質問に答えず、家の中を見回して、独り言のようにつぶやいた。

「この家も、すこし留守にしている間に、警備の軍人さんたちが住みこんだりして、様子が変わっているねえ。」

やっぱり、お前の家になつているんだねえ。」

「いやあ、私は、高校の卒業式が済んだら、女子大のある帝都の方に引越すので、そして、元の静かな家に戻ると思うんだけど。」

「そうなんだよなあ。」

私が戻つてきても、茉莉香はすぐに出て行ってしまふんだよなあ。」

梨理香は、少し寂しそうな声で答えた。

「でも、お母さんも、私の卒業式が終わつたら、M—9801星団に戻るんでしょう？」

「いや、しばらく、ここに居ようかなと思つてるけど……。」

「あれ？ お母さん、パラバラム号のクルーを辞めたの？」

茉莉香は、また作り笑いをしながら、母に聞いた。

「いや……。辞めてないけど、正式には……。」

茉莉香は、母が無理に平静を装っているのを見逃さなかった。

「やっぱり、何かあったんだね。」

さては、おと・いや『鉄の髭』さんとか、ケンカでもしたのかなあ。」

茉莉香はカマをかけてみた。

「別にケンカなんかしてないよ。」

私は、あのロクデナシとなんか、何の関係もないし、何とも思っちゃいないからね……。」

梨理香は、口では何ともないと言っているが、茉莉香の言葉に動揺していることは隠しようがなかった。

茉莉香は母のこんな一面を見て驚くとともに、攻め方を変えた。

茉莉香は、ヨット部の友人たちが自分を質問攻めにして追い詰めるやり方を真似て、何気ない話題に切り替えた。

「ふーん。それで、M-9801星団の開拓はうまくいったの？ 何か、問題が起きたの？」

「開拓そのものは、順調だよ。」

ただ、人手不足でねえ。これからも大変だ。」

そこで、あらかじめ、マンチュリアのアルファ4、つまりニュー・アトランティスに

潜入したついでに、行き場の無かったクローン人間の子達を、これ幸いと大勢乗せて行つたんだ。」

「お母さん、クローン人間の子たちは、美男美女で気立てのいい子ばかりなんだつてね。だから、旧宇宙ファイアの人たちは、あの子たちを自分たちのパートナーにしてきたそうだね。」

「へえ〜、お前、そういう船乗りの『大人の事情』を分かるようになったんだねえ。」

「遠征の時に、いろいろヒガンの話を教えてもらったからね。」

「そこまで知ってるなら、大人の話を言おうか。」

その通りさ、ここへ来る途中にもその噂でもちきりさ。」

「へえ〜、どういう噂なの？」

「帝国軍のニュー・アトランティス駐留部隊の話さ。」

まず真つ先に、海賊たちにも名前の知られた古参軍人で、『アイツだけは絶対に結婚できない』なんて言われていた奴らが、男も女も、クローン人間の子たちと次々と結婚したそうさ。

しかも、顔なじみの海賊たちにツーショットのニヤケた写真をメールで送りつけてきて、結婚祝いをよこせと言いやがったそうさ。

海賊たちは、酒場でその写真を見ながら、みんな、大笑い、大騒ぎさ。」



「ナハハ……。やっぱり本人は結婚してうれいんだ。」

「それに影響されて、駐留部隊の若い兵士らも、クローン人間の子たちを自分の嫁や婿にするって、次々に言い出して、あちこちで大騒ぎらしいよ。」

例えば、恋人として故郷に連れて帰るために軍艦に密航させた奴がいたとか、

あそこは公式にはまだ戦場にもかかわらず、突然ハネムーン休暇届を送りつけてきて仕事を長い間、休む奴がいたとか、

夫婦として住む部屋にすると行って、兵舎で同居する同僚兵士を強引に追い出してしまふ奴がいたとか、

帝国軍を辞めてニュー・アトランティスに残って結婚すると言って、突然出て行った奴がいたとか……。

いろいろ自分たちの勝手な都合を言い出して、人事担当の士官を困らせているようだ。

とにかく、遠征に参加した兵士たちの間では、結婚ブームらしいよ。」

「ナハハハ……。」

へえ〜。そうなの。

じゃあ、パラバラム号も結婚ブームなんだね。」

茉莉香は、本題に切り込んだ。

「まあ、若い奴はなあ、くつついちやうヤツも出てくるだろうねえ。」

「へえ、それじゃあ、鉄の髭さんもモテるんじゃないの。船長だし……。」

茉莉香は核心に触れる質問を試してみた。

「へっ！ あんなヤツ、クソくらえだよ。」

かわいい女の子たちに囲まれて、『船長、船長』とか言われて、すっかり鼻の下伸ばして、ニヤついてやがるんだよ。

まったく、あのロクデナシは、やっぱりロクデナシなんだよ……。」

「まさか、浮気とか、ヤバイ展開になったの……？」

茉莉香がそう言うと、梨理香はいきなり、壁に向かって右手を銃の形に組んで、言った。

「バキューン！」

「そういうことなら、話が早いんだけどなあ。」

あのロクデナシなんか、一発ぶっ放して、風穴開けてやるよ。」

「ナハハハ……。」

茉莉香は、母の「女」としての激情を見て驚くとともに、それだけ今も彼に惚れていることが分かって、子供として、少しうれしかった。

「まあ、そんな甲斐性のあるロクデナシじゃないことは、確かだね。」

「ナハハハ……」

茉莉香は、苦笑いするしかなかった。

「それって、お母さん。『ヤキモチ』と言うんじゃないのかなあ……」

「なんてこと言うんだい。茉莉香。」

それじゃ、全部、私が悪いみたいじゃないか！

悪いのは、あのロクデナシだよ。」

「じゃあ、許してあげなよ。気が済んだところで……」

「何を言うんだい。茉莉香。」

私は別に怒ってなんかいないし、許すも許さないも……」

「ナハハハ……」

ここまで聞くと、茉莉香は、『夫婦ゲンカは、犬も食わない』という古代の格言を思い出して、これ以上この話をするのをやめようと思った。

「……ところで、お前、帝都ではどこに住むのか、決めたのかい？」

梨理香が話題を変えた。

「うん、決まっているよ。」

警備のことも考えて、帝国軍の基地の中にある、士官用の单身寮に住むことにした。」

「一人暮らしかい？」

「そうだけど。なにか。」

「いやあ、ひよつとすると、王宮とか、モーガン家の御屋敷に住むのかなあ、と思つてたものでね。」

「確かに、チアキちゃんや、モーガン家の人たちからは、そうしてほしいと勧められたんだけどねえ。」

でも、そうすると、自分の進路を決めたと誤解させたり、期待させたりするかもしれないでしょう。

だから、丁重にお断りしたよ。」

「そうかい。お前らしい、けじめだね。」

その晩は、加藤梨理香、茉莉香の親子は、これまでのお礼を兼ねて、警備隊の女性たちと楽しく食事をした。

25—2 弁天丸（海明星衛星軌道上）

次の日、つまり白鳳女学院高等部の卒業式の前々日、加藤茉莉香は、朝から忙しかつた。

まず、朝早くから、引越し荷物をまとめ、午前中にそれを衛星軌道上にある弁天丸へ運び込んだ。

「ふうふう。これで、引越しのメドがついたかな。

あと、残ったのは手荷物だけだから、ひと安心だね。

・・・

でも、なにか、あつけないなあ。

故郷を出るつて、もつとドラマティックな事件だと思つていただけであらう。」

茉莉香は、弁天丸のブリッジで、ひとり言のようにつぶやいた。

その時、ミーサが近づいてきた。

「茉莉香、おつかれさま。いよいよ『出航』が近いわね。」

それで、忙しいところに悪いんだけど、新しい船のことで、シュニツアーが船長に

話したいことがあるそうよ。」

「ええ!? 新しい船のことです?」

「そうよ。新しい船のことで、なにか、帝国軍から秘密の依頼が来ているそうよ。」

「へえふうふう。なんだろう。」

あれ? シュニツアーはどこにいるの?」

「もうすぐ、資料をまとめて、こちらへ来ると思うわよ。」

船長室で聞いたらどうかしら。」

「船長室? その方が良いの?」

その後、茉莉香は、ミーサと一緒に船長室でシュニツターの説明を聞いた。

「船長。帝国から難しい依頼が来ている。」

どう対応したらよいか分からず、私も船長に意見をどう言おうか迷うくらいだ。」

「そんなに変なことなの？」

「ああ、これを受ければ、弁天丸自身がまったく違う船になってしまいかもしれない。」

「ええ？　どんな依頼なの？」

「帝国からの依頼は、簡単に言うと、重力制御推進航法に通じた船長の腕を見込んで、新しい弁天丸に、開発中の様々な最新鋭装備を搭載させてくれないか、ということだ。」

「最新鋭装備!?　なんか面白そうじゃない。」

「簡単に言わないでよ、茉莉香。」

それって、結構、危険な話じゃないの？」

ミーサが言った。

「そうだ。帝国軍の奴らですら、

『弁天丸のクルーほどの腕があれば、新装備のテストなんか、簡単、簡単。大丈夫ですよ。』

なんて、見え透いたオベンチャラを言うくらいに、ヤバイ話だ。

だから、ミーサの心配はもつともだ。

もちろん、新装備の開発に協力するのだから、弁天丸の運航費用は払うといっているし、開発や試験担当のスタッフも帝国軍から派遣するので乗船させてほしいと言っている。」

「それで、帝国軍は、どんな最新鋭装備を載せたいって言うてるの？」

茉莉香が興味津々で聞いた。

「動力系は、複数の重力波発生装置が付いた新型エンジンの試作機を載せたいと言っている。」

武装系は、そのエンジンの生み出す重力波を使った武器の試作品だ。例の重力波ビーム砲もあるが、物体を他の空間へ吹き飛ばす重力波砲の最新型の試作品もあるそうだ。

センサー系は、今の時空ナビをさらに超える、画期的なものを入れたいと言っている。

空間の位置、歪みや運動ベクトルだけでなく、時間の流れの速さを図るセンサーの試作品を極秘に開発したらしい。

新装備では、実は、これが一番の目玉だと言っている。

こいつを使って、時空トンネルの新しい使い方を実験、開発してほしいと言っているんだが……。

あとは、亜空間での戦闘能力を持つ小型の艦載機とか……。」

「なに、それ！」

これじゃあ、新しい弁天丸全体が、新しい装備の実験場になってしまいうじゃないの。」  
ミーサが言った。

「そんなに新しい機械ばかり詰め込んで、宇宙船としてのバランスが壊れないの？」

エンジンのパワーとか、エネルギーの消費量とか、居住性とか、いろいろ考えなきやいけないことが、あるんでしょ。」

茉莉香が聞いた。

「その点は、ブラウン中尉が大丈夫と言っている。

むしろ、無理な改造を重ねてきた、今の弁天丸の方が、よほどバランスが悪いと言っている。」

「ブラウンさんって、時空トンネル切断の実験に付き合ってくれた技術士官の人ね。

まあ、あの人が言うのなら、大丈夫かなあ。」

茉莉香が言った。

「ウルスラちゃんの婚約者と言った方が、茉莉香には分かり易いかも……。」

ミーサが微笑んだ。

「ナハハハ……。」

「ブラウンだけでなく、ギルバート・モーガンをチーフとする帝国軍のエンジニアチームが、ステープル重工業が作った設計図を見直しているから、その点は任せておいて、大



丈夫だろう。」

「へえ、ギルバートさんが手伝ってくれているんだ。」

茉莉香は、目を見張った。

「彼だけじゃなく、この前の演習で船長とチームを組んだエンジニアたちが、大勢参加して、毎日楽しそうにやっているそうだ。」

「ナハハハ……。あの人たちかあ……。あの演習、楽しかったなあ。」

「それに、新しい弁天丸は、長さが今の1.5倍、体積なら約3倍もあるので、これだけの新装備を積んでも、船体の機関部に楽々収まるはずだ。」

「そうだったね。」

船体の形、デザインや色彩が今までの弁天丸と同じと言っても、ずいぶん大きくなるんだったね。」

茉莉香は、新しい弁天丸の設計図を見ながら、つぶやいた。

「それで、こういう船にしても、海賊営業を続けるうえで、問題は無いの？」

私、海賊はやめないよ。」

茉莉香が念を押した。

「私は、問題ないと思う。船長が船に居てくれさえすれば、ね。」

シュニツツアアが、この頃、茉莉香が船を空ける時が多いことへの皮肉を言った。

「ナハハハ……」

でも、ひとつ、引つかかるなあ。

こんな船つて、完成すればグランドクロス以上の巨力な新兵器でしょ？

なぜ、いまどき、帝国軍の人たちは、こんな船が必要だと思うのかしら？」

「船長。軍人つて『人種』はいつも新兵器の開発をやりたがるものでしょう。」

ミーサが言った。

「でも、宇宙マフィアとの和平も実現して、いつそう平和になったでしょう。」

だから、帝国軍の人たちを、ミルキーウェイの実施要員に振り替えることで、『民間経済を発展させるインフラ整備と事実上の軍縮』の一石二鳥を狙うと言うのが、宰相さんのお考えだと聞いているのよね。

そういう方向性とは、明らかに違うよねえ。」

「なるほどねえ。」

でも、茉莉香。そんな帝国の極秘情報を良く知っているわねえ。」

ミーサが言った。

「エへへ……。宰相さんとも最近、仲良くなつてねえ。いろいろ私に教えてくれるんだ。」

「茉莉香、あなた、すごいわねえ。」

あの、腹黒いタヌキオヤジと評判のリシユリユ閣下にも、気に入られたわけね。」

フフフ……」

ミーサが微笑んだ。

「本題に戻ると、

私は、たぶん、未知の宇宙（うみ）への不安とか恐怖が、開発の動機だと思う。」

シユニツツアーが言った。

「それって、アンドロメダ銀河への大航海のことを言っているの？」

「そうだ。未知の宇宙（うみ）。未知の生物。未知の文明……。」

何が起るか、まったく予測できないから、不安を押さえるために何かしようとするのだろう……。」

だから、この試験の結果を基に、大航海に乗り出す船の標準設計案を作るつもりだろう。」

「そうなのかなぁ。」

じゃあ、みんなの気持ちを少しでも明るくするために、弁天丸が、がんばりましょう。

この話、受けるって返事して。」

「決断、速いわねえ。」

「私のトリエだもの。」

「じゃあ、続いて、新しい船の居住区の設計をどうするかという、相談なんだけど。」

今の弁天丸じゃ、そこが一番貧弱だったのよねえ。何せ、昔の船だったからね。」  
ミーサが言った。

「そうだね。一般船員は、四人部屋が普通なんだものね。」

「でも、新しい船は広いから、船乗りが家族で暮らす居住スペースをたくさん設けることもできるのよ。」

これは、新しい弁天丸での船乗りの暮らしをどんなふうにかえるかと言うことね。

まずは、シユニツツアー、船室プランの二案を、船長にみせて頂戴。」

「わかった。」

シユニツツアーは、船乗りが家族で暮らす区画をたくさん設ける船員室のプランと、今のような单身者主体のコンパクトな船員室と広い共用スペースを持ったプランを説明した。

「なるほど、どちらも面白いねえ。」

でも、この話については、私の気持ちはもう決まっているんだ。

家族の居住区画をできるだけたくさん設ける案でいきましょう。

私ねえ、自分の子供の頃を振り返って思ったんだ。それに、チアキちゃんだけでなく、サーシャやウルスラから、宇宙船で生まれ育ったあのコたちの子供の頃の話を書いて、やっぱりそうだって思ったんだ。つまりねえ、……

船乗りも家族を持つべきだし、

家族は一緒に暮らすべきだと思うのよね。」

「これも、決断は速いのね。ふうん。」

じゃあ、船長のお相手を誰にするか、もう心の中では決まっているのかしら。」

ミーサが微笑んで、言った。

「いえいえ、そんな。」

高校生の私には、そんなこと、決められませんよ。まだ、まだです。」

茉莉香は、顔を赤くし、両手を強く振って、答えた。

これに対して、ミーサは真剣な表情で言った。

「船長。この際だから、ハッキリ言っておくけど、新しい弁天丸のクルー選びをするときに、今までのクルーに気を使う必要はないわよ。」

あなたの船乗りとしての人生にとって、ベストな選択をしなさい。」

「ミーサの言うとおりだ。船長。」

みんな、一流の船乗りだから、弁天丸以外でも、乗って欲しいと言われる船はいくらでもある。後のことなど、心配無用だ。」

シユニツツアーも言った。

「……うん。よく考えるよ。」

ありがとう。」

茉莉香も、その表情から、ミーサとシュニツターがわざわざこんなこと言つて、念を押した意味は分かっているようだった。

いや、むしろミーサとシュニツターは、茉莉香にこれを言うために、三人だけで新しい船の話をしたのかもしれないなかつた。

「それに、私だって、いろいろ道はあるのよ。」

この際だから、梨理香みたいに地上に降りて、貴方みたいに可愛い女の子でも産もうかしら……。

そういう道も、面白いでしょ……。フフフ……」

「え……!?!」

茉莉香は、ミーサの言葉に絶句した。

その時、クーリエから、艦内電話を通じて連絡があつた。

「船長。そろそろ、お客さんが待つ宇宙空間へ到着するわよ。」

海賊営業の準備、よろしく。」

「了解。」

茉莉香は船長服に着替えて、元氣よく、ブリッジへ向かつた。

「今晚が最後の『女子高生海賊』よ。」

弁天丸、いきましよう。

さあ、海賊の時間だあ！」

この夜、弁天丸は一晩に二つの船で海賊営業を行う予定だった。加藤茉莉香の女子高生海賊としての最後の営業をぜひ見たいと言うお客さんが多かったからだ。

25—3 大宴会場（豪華客船プリンセス・アプリコット号）

この夜、弁天丸は、クイーン・エメラルダス号での海賊行為を終えて、さらに、プリンセス・アプリコット号に向かった。普段ならお断りする無理なスケジュールだったが、このお得意さんからの依頼は、茉莉香も断れなかつたからだ。

いつもなら、ショービジネスとしての海賊の襲撃は、予告なしに突然に始まる。

しかし、今夜は違った。

そもそも、旅行社が、プリンセス・アプリコット号の航海クルーズ募集時から、『航海中の3月某日、女子高生海賊・キャプテン茉莉香、最後の海賊営業！』をうたい文句にしていたからだ。

船の大宴会場に集うお客さんたちには、夜が更けるとともに、しだいに期待と興奮が高まってきた。

突然、ライトが消えた。

「キヤー」

「ウワー」

黄色い悲鳴がして、興奮がさらに高まる。

やがて、闇に隠れて、数人の人影が大広間に入り、宴会場の正面扉の前に整列した。そして、中央の人影にスポットライトが集中する。

もちろんスポットライトの中心に立つのは、茉莉香であった。

「お待たせしました。宇宙海賊船、弁天丸船長、加藤茉莉香です。

海賊しに来ました。」

「キヤー、茉莉香様！」

「待ってました。」

大広間には、歓声が飛び交う。

茉莉香が海賊の名乗りを上げると同時に、左右に並んだ弁天丸のクルーたちにもスポットライトが当てられていく。

ぼろぼろの船員服に、派手な色のバンダナ、手に手に大きく輝く蛮刀や古式ライフルを持った船員たち、片手・片目のおとぎ話に出てくる海賊のような姿に扮装した船員、腰に二丁拳銃をぶら下げた女海賊……。みな、それぞれに古代からの海賊というイメージを大事にした、いつもの格好である。もちろん、今日は、メタルボディーのシュニツ



ツアーもいるし、露出度の多いいつもの海賊服を着たミーサもいる。

それぞれに歓声があがり、興奮が増してゆく。

海賊たちは、茉莉香を先頭に大広間に進み出た。

そして、いきなり、船員たちが船の天井めがけて、ビーム・ガンを発射した。

「ひゃー！」

悲鳴とそして歓声があがる。

「いまのは、もちろん威嚇です。船の安全には支障はありません。」

加藤茉莉香は、大広間のスポットライトを浴びながら言った。

「では、いつもの注意ですから、よく聞いてください。」

我々の指示に従って頂く限り、皆さんの安全は保障いたします。おとなしくこちらの言うことを聞いていただければ、無事な身体と宇宙海賊キャプテン茉莉香の女子高生としての最後の日に襲われたという、本当に珍しい自慢話を持つておかえりになれます。

さあ、命が惜しければ、金品財宝、よこしなさい。

さあ、さあ……。」

ここまで、いつの通りの進行だった。この後、事前に潜入した船員のサブローと組んだ剣劇ショーに入るはずだった。

しかし、茉莉香の前に、一人の青年が乱入してきた。

「待った、待った、このオンナ白波。お前は誰だ。

本当にキャプテン茉莉香なのか。

もし、本物のキャプテン茉莉香なら、由緒正しい名乗りを上げてみる。」

「困ったわねえ。命知らずの人ねえ、後で命乞いしたって知らないわよ。

でも、良いわ。今日は大サーブス。

聞かせてあげましょう、女白波、キャプテン茉莉香の名乗りを。」

『この人、どこかで見た顔だ』と思いながら、茉莉香は前に進み出て、右手を青年の方に出しながら、語り始めた。

「知らざあ、言つてきかせましょう。

浜の真砂とゴンザエモン、歌に残せし海賊の、

種は尽きねえ新奥浜、その白波の一粒種、

生まれた家は母一人、海の明け星世を忍び、

定め之星を知らされず、お嬢様よと育てられ、

それでもヨットで星の宇宙（うみ）、出たいと願う船乗りの、

血は争えぬ十六歳、急な知らせで親の跡、

百年続くこの家業、女子高生で受け継いで、

腕に覚えの乗組員、お客様に支えられ、

辺境宇宙で大繁盛、船から船へ駆けまわり  
ついに目出度く十八歳 女子高生の海賊も  
今宵限りでついに見納め」

茉莉香がここまで言うと、

「やめないで〜！」という悲鳴や、

「続ける〜！」という掛け声が上がリ、

場内の興奮は一層高まった。

「皆様、〜」安心を。

私、女子高を卒業しても、海賊、辞めません。

これからもよろしくお願いいたします。」

そう言つて、茉莉香は口上を続けた。

「百年続くこの看板 途切れさせては名がすたる

この春からは女子大生 続いて演じる海賊の、

名せえゆかりの、弁天お嬢、

加藤茉莉香たあ、このわたし〜〜〜。』

「いよ〜 宇宙」

「茉莉香様あ〜〜〜！」

大きな拍手と共に、大歓声が上がった。

「どうやら、本物だね。」

さあ、キャプテン茉莉香、勝負だ。

私が勝てば、手下の海賊たちは、さっさとお引き取り願おう。」

飛び入りの青年は、彼の近くに立っていた弁天丸のサブローから剣を取ると、茉莉香に向けて剣を構えた。

「どこのだれだか、知らないけど、ほんと、命知らずねえ。」

さあ、来なさい。」

茉莉香が堂々と言った。

こういう時の茉莉香は、予定外の事態にも落ち着き払っていた。

むしろ、剣を構える茉莉香が、いつそう華やかに、輝きだしたように、お客様たちには、感じられた。

「ヤアー！」

青年が切り込んできた。

カシーン、カシーン

剣と剣がぶつかり合う甲高い金属音がして、二人が剣をふるっている。

『この人、自分から飛び込んでくるだけあって、なかなか剣道がうまいわね。』

男として、劍のパワーもある。

でも、私は負けない……。」

二人は、一方が技を繰り出し、他方がこれを受けとめるという展開で、激しい攻防を繰り返して、大宴会場のお客様を興奮させた。

「がんばれ、キャプテン茉莉香！」

「茉莉香様……！」

もちろん、お客様は、茉莉香を応援する声ばかりだ。

二人の勝負は、茉莉香が青年を壁際に追い詰める形で進んでいった。

そして、もう少しで茉莉香が青年を壁に追い詰めると言う時に、茉莉香の劍が青年の劍を払い飛ばして、青年は壁に崩れて座り込んだ。

「ワー、やった……！」

「キャプテン茉莉香の勝ちだ……！」

その後は、興奮した観客が茉莉香を取り囲んでしまい、ショーは自然に終わってしまった。

そこへ、プリンセス・アプリコット号のハーレー船長が現れた。

「みなさま。

ただいまから、船長主催のパーティを始めたいと存じます。

いま、シャンパンやソフト・ドリンクをお配りしますので、グラスをお取りください。まず最初に、私たちみんな、キャプテン茉莉香の高校卒業を祝って、乾杯いたしましょう。」

劍劇に興奮した乗客たちの気持ちを落ち着かせようというベテラン船長の知恵だろうか。たちまち、宴会場はいつものような和やかな雰囲気にも包まれた。

「グラスは、行き渡りましたでしょうか。よろしいですか。」

では、キャプテン茉莉香の高校卒業を祝って、乾杯！」

「乾杯！」

乗客たちが唱和した。

こうして、二人の船長を囲んで華やかなパーティーの始まりとなった。

茉莉香は、その後、お客さんたちと話したり、記念撮影を頼まれたり、プレゼントを受けたりして、夜遅くまで、プリンセス・アプリコット号に留まった。

その間にクルーは、弁天丸に引き上げて、船長の帰りを待っていた。

25—4 弁天丸船内

ようやく弁天丸のブリッジに戻った茉莉香は、言った。

「ああ〜、疲れた。疲れた。」

長い間、立ちっぱなしだったので、足が棒のよう。・・・」

「お疲れ様。船長。」

クーリエが言った。

「じゃあ、海明星へ帰るとしますか。」

出航！」

「了解。」

弁天丸は、プリンセス・アプリコット号から離脱して、メインエンジンに点火した。

そして、全速で航行を始めた。

「そう言えば、あれえ〜。ミーサはどうしたの？」

「茉莉香ちゃん、聞いてないの？」

剣劇に出演したエキストラの人を、治療中よ。

あの人、船長の知り合いだって、聞いているわよ。」

「ええ〜〜！ 本当なの？」

茉莉香は、あわてて医務室へ向かった。

茉莉香が、まだプリンセス・アプリコット号でお客様のお相手をしている頃、弁天丸のクルーは、ミーサの指示で、茉莉香との剣劇で倒れた青年を弁天丸の医務室に運びこ

んだ。

クルーが医務室から出て行ったのを確かめてから、ミーサが青年に言った。

「もういいわよ。気絶したふりしなくても。」

「バレてました?」

「フッフ……。」

でも、貴方の剣の腕前もなかなかのものだったわね。誉めてあげるわ。

茉莉香と真剣勝負で渡り合って、お客さんは、とても喜んでたわね。」

「お誉めにあずかって、光栄です。」

剣道は、大学の下級生の頃に、結構やったんですよ。」

「でも、私が、あそこで消音プラスターを撃ってあなたを痺れさせなかったら、その後、

どうするつもりだったの。」

あの雰囲気では、茉莉香を倒してしまう訳にはいかないでしょ。」

「そうなんですよ。まあ、何とかなると思っって、飛び入りましたんですけどね。

やってみると、実は、どうやって終わろうかと困っていました。」

もちろん、手加減してワザと負ければ、かえって茉莉香さんを怒らせるでしょうから

ね。」

「フッフ、アドリブって、結構難しいでしょ。」



「そうですね。想像以上に難しかったですね。

でも、なんとか、お客さんに喜んで頂けるように、茉莉香さんに負けることができたのも、先生のおかげですよ。

ありがとうございます。」

「ホホホ……でも、これを知ったら、茉莉香はなんといいかしらねえ。

そういえば、茉莉香は、貴方だって気付いているのかしら。

その様子は無かったけど。」

「そうですねえ。気付いてないかもしれないですね。私も白衣を着ていたわけじゃないし。それにしても、茉莉香さんは、なかなか船に戻ってきませんね。」

「そうですね。まだ、お客さんに囲まれているのじゃないかしら。

今夜は記念興業だからねえ。」

「じゃあ、気長に待ちましょう。」

「そうですね。それで、茉莉香に会ってどうだったの?」

「はい、予想以上に素敵な女の子で、本当にうれしかったです。

グランドウッド先生。今日の茉莉香さん、とても綺麗でしたねえ。

また会えて、うれしかったなあ。」

「それは、よかったわね。」

「はい。やっぱりテレビで見ると違って、本物の方がはるかに美しくて、かつキュートですね。」

健康診断で初めて会った時にも、思わず、見とれてしまつて……。」

「それで、採血に手間取つたのね。」

「恥ずかしい話です。」

でもね、茉莉香さんの素敵なところは、容姿だけじゃないですよ。……。」

「フフフ、茉莉香のことをずいぶん気に入つているみたいね……。」

こうして、ミーサは、茉莉香のことを熱く語り続けるホワイト医師の話聞いていた。

やがて、医務室のドアをノックする音が聞こえた。

「茉莉香です。ミーサ、入つて良い?」

「どうぞ、船長。」

茉莉香は、医務室に入つてくると、ベッドにいる青年の顔を見た。

「やっぱり、ホワイト先生でしたね。」

どこかで、お会いしたような気がしてたのですが……。」

「アハハ、ついにわかつてしまいましたね。」

「おケガは無いのですか?」

「大丈夫です、軽い打撲だけで、怪我はありませんでしたから。」

彼は、ミーサの放ったブラスタのことは言わなかった。

「そうですか。よかった

でも、どうして、あんな危ないことをされたのですか？ 海賊の剣劇では、真剣を使

いますよ。」

「実はね、こう見えても、私、剣道はけっこう得意なんですよ。」

「先生の腕前は、剣を打ち合つて、わかりましたけど……。」

「認めて頂いて、ありがとうございます。」

それで、ご質問に対するお答えですが、私が飛び入りした理由は、私も一度、弁天丸の海賊行為を経験してみたかったからなんですよ。」

「それって、あの……、例のお話と関係があるのですか？」

「はい、そうです。そのことで、ダンスパーティーの前に貴方とお話をする時間も頂きたかったんですけど……。」

そう言つて、彼は、ベッドから離れ、立ち上がつて一礼し、言った。

「加藤茉莉香さん、私も、改めて、名乗らせていただきます。」

私は、アレクサンドル・ホワイトローズと申します。」

彼が、茉莉香を見つめて、静かに、自分が、銀河聖王家、白薔薇家の王子であることを示す本名を名乗るのを聞き届けて、ミーサが言った。

「茉莉香、私はちよつと席を外すから．．．。」

「ミーサ、ちよつと待つて。話はすぐ済むから．．．。」

しかし、ミーサは茉莉香が止めるのにもかかわらず、部屋を出て行ってしまった。

「あああ．．．」

茉莉香は緊張し、困ったことになったという思いで、頭がいつぱいだった。

「加藤茉莉香さん、そんな困った顔をしないでください。」

誤解のないように、最初に申し上げると、私も聖王家も、王室の権威や力によつて、あなたに無理やり結婚を迫るようなつもりはありませんよ。

もつと言えば、もし仮に聖王家がそのつもりでも、私はそんなのは嫌です。」

「ええ？ どういうことですか？」

「そんなことをしても、私にとって何の価値もないからです。私は、そういう性格です。」

「はあく〜。」

茉莉香は、納得していないようだった。

「だつて、あなた自身もそう思っているでしょう。」

自分の人生、結婚は、自分の意志で決めたい、他人に押し付けられるのは嫌だと思つているでしょう。」

「それは、まあ、そうですか．．．。」

「王族の私だって、同じ気持ちです。」

私だって、自分の意志で王族の家に生まれた訳では、ないんですからね。」

「先生は、そう思われるかもしれませんが……。」

茉莉香は、まだ納得していないようだった。

「しかし、自分の意志で王族の家に生まれた訳ではないにもかかわらず、王族として生まれると、いろんな制約が直ちに課されます。」

例えば、自分の人生や結婚などが、自分で自由に決められないんです。

結婚のことで言えば、結婚相手を選ぶどころか、女の子に近づくことすら自由にできません。誤解させてはいけなと言われてますから。」

これって、結構、理不尽だと、思いませんか。」

「ナハハ・・それはそうかもしれませんが……。  
うーうーん。」

でも、そういうえば、亡くなられたアンドレア公爵様も同じようなことを、おっしゃってましたね。」

「それだけじゃないですよ。」

王族の人間は、王族以外の人々からも、特別扱いされるといふか、仲間に入れてもらえないというか、同じに扱ってもらえないんです。」

これって、結構、孤独感を味わうんですよ。」

「孤独感ですかあ。」

「私は、医者の世界ならそういう事は少ないと思つて、医者になつたんです。」

でも、ちよつと、見込み違いでした。」

「どうしてですか？」

「実は、今度、海明星で銀河宇宙医学会があり、そこで私が発表をするんです。」

でも、実績のある大学教授や研究者を差し置いて、私が発表者に選ばれたのは、なぜだと思いませんか。しかも、遠征に参加した大勢の医師や研究者と分担した『ヒガン回廊の星々の病理学的調査』の発表ですよ。」

私、自分の業績がどの程度のものか、ちゃんと自分で分かっているつもりです。

だから、このこと一つみても、なにか、王族だから学会発表の業績を上げさせてやるという特別扱いというか、別枠に棚上げされているようで、悲しい気がするんですけどね。」

ここまで彼の話を聞いて、茉莉香は言った。

「先生も、そうなんですな。」

もちろん私の場合とは比べられませんが、同じ仲間として扱ってもらえないという、先生のお気持ちは、よく分かります。

実は、私も、海賊の娘、それも女子高生を売り物にした海賊シヨをやる女ということとで、船乗りの人たちから、キワモノ扱いというか、厳しい視線を向けられたことがありました。

帝国軍人になってからも、私を特別な目で見ると人はいますし……。「そうですね。あなたも同じような経歴をなさったことがあるんですね。」

ありがとうございます。加藤茉莉香さん。

そう言っていただけなのあなたは、やっぱり、私の思っていた通りの人ですね。「あ、気が付きませんでした。私、失礼していました。ゴメンなさい。」

改めて、私も名乗ります。

弁天丸船長、加藤茉莉香です。茉莉香って、および下さい。」

「ありがとうございます。私のことも、アレックスと呼んでください。」

では、茉莉香さん。

できれば、先生と呼ぶのも、避けて欲しいのですが……。グランドウッド先生のことをミーサと呼んでいるように、私も扱ってほしいんですけど。」

もちろん、敬語を使うのもやめて欲しいです。」

そう言つて、アレックスは、嬉しそうに微笑んだ。

「わかりました。アレックス。」

「うれしいなあ。やっと、そう呼んでももらえましたね。

これで、初対面の挨拶がやっと済みましたね。」

「そ、そうですね。本当に失礼しました。」

茉莉香は、少し落ち着いた気分になった。

「それで、茉莉香さん。」

私、貴方をお願いがあつてきました。」

「え!? なんですか?」

茉莉香は、結婚の申し込みだと予想して、身構えた。

「あ、茉莉香さん。」

私を船医として弁天丸に乗せてもらえないでしょうか?

ぜひ、お願いします。

弁天丸船長であるあなたは、王族だからって私を特別扱いしない、素晴らしい上司です。私は、茉莉香さんのもとで、船乗りとして働きたいのです。

あの話とは、関係ありません。必要なら、王族からも脱走します。

もちろん、海賊行為もしますよ。海賊としての名前も付けてください。

お願いします。

私を、船医として弁天丸に乗せてください。」





## 第二十六章 茉莉香の答え

26—1 加藤茉莉香邸（新奥浜市）

翌日、つまり白鳳女学院高等部の卒業式の前日の午前に、茉莉香は、海明星の自宅に戻った。

自宅に戻つてすぐに、茉莉香を、ギルバートが訪ねてきた。

「おはようございます。茉莉香さん。」

「おはようございます。ギルバートさん、海明星に到着されたんですね。」

「はい。今朝ほど、到着しました。」

お聞きになっているかと思いますが、新しい弁天丸に乗る、帝国軍の技術スタッフの人事について、ご説明したいのですが。」

「わかりました。」

茉莉香は、ギルバートから、新しい弁天丸に乗り組むエンジニアのスタッフの人事について、ひとりひとり、説明を受けた。

メンバーは、若い軍人たち10人で構成されていた。チーフはもちろんギルバート・モーガンであった。

そのうち、ギルバートを含め、5人が茉莉香と帝国軍参謀本部で模擬戦を戦った『仲間』たちだった。さらに、ブラウン中尉が加わっている。この6人の男性の他、新しいスタッフには、女性が4人加わっていた。

「4人の若い女性たちも、みんな茉莉香さんのファンですよ。」

この3人もエンジンニアですが、みんな軍人ですから、射撃や剣道もうまいですよ。女海賊もできると言つて、楽しみにしていました。」

「ナハハハ……。それはちよつと……。」

「それから、この4人目のこの女性ですが、茉莉香さん、見覚えがあるんじゃないですか。」

ギルバートが言った。

「あつ。ケイコだ、間違いないです。ケイコ・サトー。惑星ライセで友達になった子ですね。」

しかし、帝国軍の方はこの子をメンバーに加えて良いのですか？

この子は、レオニーニ家の一族でしょう。」

「ええ、ヒガン共和国軍の推薦がありますし、本人が弁天丸に乗りたいと言っているようですから、その点は大丈夫でしょう。」

私たちだけのナイショ話ですが、このコも海賊の娘ですし……。」

ギルバートがそういつて笑い、茉莉香も微笑んだ。

「それに、私としては、彼女の経験の評価しています。」

子供の頃から、旧宇宙マフィアの船に乗って、銀河系外延部の未開拓惑星の調査に行っていたそうなので、船乗りとしても経験豊富だそうですから。」

「なるほど、アンドロメダ航海には必要な人材ですね。」

それにブラウン中尉も加わるのかあ。ウルスラが何と言うのかなあ・・・フフフ。」

「それから、茉莉香さんの警備隊のメンバーも引き続いて乗船します。この家に住み込んで守ってくれたジェーンさんも加わっています。」

「楽しみですなあ。」

ジェーンさんまで加わってくれて、みんなのお母さん役までいるんですね。」

「そうですね。人事はこれで船長の了解を得たと報告してよろしいでしょうか。」

「了解です。参謀本部にそう報告してください。」

ギルバートさんも加わってくれるので、心強いです。」

「ありがとうございます。」

「それから、ギルバートさん、ちょっと、教えてください。」

帝国軍の考えている時空トンネルの『新しい使い方』って、何ですか？」

茉莉香が聞いた。

「それなんです、・・・」

経緯から言うと、最近、時空トンネルを航行していた帝国軍の船が、不思議な事故に遭遇しまして、その事故の原因を探ろうと調査が進められました。

でも、その調査を進めるうちに、時空トンネルには別の使い方があってきたのか、この事故はそれを偶然に実行したのではないかという仮説が浮かび上がってきたのです。

そこで、その仮説を実証する実験ができないかと言うことなんです。」

そう言つて、ギルバートは真剣な眼差しで茉莉香を見つめた。

「やっぱり、とても危険そうですね。」

「リスクはありますが、仮説通りの航海に成功すれば、宇宙航海の概念が変わるかもしれません。少なくとも、その入り口を開くことができるかもしれません。」

「ギルバートさんがそこまで言うなんて、すごい話になってきましたね。」

それで、その事故と言うのは、どんなものだったのですか？」

茉莉香は、少し真顔になって、更に質問した。

「はい、その軍艦は、ミルキーウェイを利用せず、自力で時空トンネルを形成して、ある辺境惑星までロングジャンプをしました。」

そして、タッチダウン後に、目的地の惑星の中継ステーションと連絡を取ろうとしたのですが、連絡が付きませんでした。」

困惑しているうちに、コンピュータが警報を発しました。目的地と違うところに着いたと言うのです。タッチダウン地点の星座を観測したところ、目的地の星座とは一致しないというエラーがでていたのです。

しかし、目的地の惑星の外見はかなり特徴があるので、光学映像を経験のある船乗りが見れば、間違えるはずはないと思われました。

ますます困惑していたところに、コンピュータから、ここまで通ってきた時空トンネルを閉鎖して良いかという確認メッセージが出たので、不安を感じた船長は出発地に戻ろうと思い、時空トンネルの中に戻りました。

その結果、もとの出発地に無事に帰還しました。

「こういう事故でした。」

「通信機とか、複数の機器が同時に故障していたのでしょうか？」

「茉莉香さんもそう思われますね。最初は、みんなそう思っていたのです。」

しかし、調べてみると、故障はどこにもありませんでした。」

「でも、それと、時空トンネルの新しい使い方とどう結びつくのですか？」

「今のところ分かっている事故に関する情報から言いますと、

実は、その船は、時空トンネル航法の開発された初期の頃に建造された船でして、コンピュータプログラムも現在の船と違って、完全マニュアル制御方式でした。しか

も、このプログラムは、いろいろと不具合を起こすと評判の悪いもので、近々アップデートの予定でした。

おまけに、航海士はこの船に初めて乗船して、初めてこのプログラムを操作した者でした。そのため、旧式のマニュアル制御方式に不慣れで、行き先の座標の入力などを間違ったためにこういう結果になったと考えられています。」

「まだ、おっしゃっていることの意味が、よく分かりません。」

では、その船が実際に経験した事故は、どこが『不思議な』のですか？」

「さすが、茉莉香さんです。」

そこが、問題を解くポイントなんです。

航海の記録を精査した結果、信じられないことが分かりました。

まず、目的地の惑星の光学映像は、99%以上の一致点があり、目的地の惑星で間違いはありませんでした。船乗りのカンは、正しかったわけです。

そして、観測された目的地の星座ですが、コンピュータの星座シミュレーターで類似的の星座を探したところ、なんと約1万5千年前の目的地の星座と一致しました。

それから、出発地と目的地の距離は、約1万5千光年、離れています。」

「そこからは、私に言わせてください。．．．」

ギルバートの話を茉莉香が遮った。興奮して、黙っていられなくなつたのだ。

「航海士の入力した座標は、1万5千年前の目的地の座標、つまり出発地からの見かけ上の目的地の座標だったんでしょ？」

だから、その船は、1万5千年前の時空に飛んだのではないかということですね。」

「その通りです、さすが、茉莉香船長。お見事です。」

現在の最新のプログラムでは、見かけ上の座標でも、真の座標でも、どちらを入力しても、コンピュータが判別して、間違いなく飛んでくれますからね。こんなことは起きないはずなんです。」

「ということは、時間を超えた航海をするというのが、時空トンネルの新しい使い方ですか？」

それじゃあ、弁天丸が、タイムマシンのになるのですか？」

茉莉香は、笑顔で言った。茉莉香は、未知の世界を経験できるといふ期待感で胸がいつぱいだった。

「ハハハ……。茉莉香さんなら、そう言って目を輝かせると思っていました。」

私も、そう言いたのですが、実は、その船が本当に1万5千年の時間を超えた航海をしたと言う確証が十分ではないのです。航行記録は、さらに詳しく調査する必要があります。今のところ、わかっているのは、星座の観測記録だけですから。」

「確かにそうですね。確証はありませんね。」



では、弁天丸で、どうやって、調査、実験をするんですか？ まさか、いきなり……。」「いえいえ、いきなり1万5千年前の宇宙を目指して弁天丸で飛んでみるようなことは、しませんよ。」

それは、実験でも調査でも、もちろんも冒険でもありません。無謀と言うヤツです。「なるほど……。ナハハ。言われてみればそうですね。」

船長は、乗組員の安全を確保する責任もありますからね……。」

「ですから、実際には、基礎的などころから科学的に検証できる仮説を立てて、一步一步着実に、調査と実験を積み重ねようと言うのです。」

「それは、そうですね。」

でも、未踏の『広い宇宙(うみ)』と言うのは、外宇宙のアンドロメダ銀河方面だけじゃなくて、時空を超えたところにも広がっているかもしれないですね。」

「なんか、楽しくなってきたなあ。」

「そうですね。」

だから、帝国軍のエンジニアたちも、この調査にみんな興奮しているんです。」

茉莉香も、未踏の広い宇宙に対する興奮を抑えきれず、叫んだ。

「未踏の宇宙を駆けるのも海賊の仕事。」

「さあ、弁天丸。行きましょう。」

全速前進。」

26—2 ランプ館（海明星新奥浜市）

この日の夕方、加藤茉莉香は、学校の制服姿でランプ館にやってきた。

茉莉香は、警備隊の人たちに手伝ってもらいながら、自宅から大きな鍋を運んできた。卒業式を前日に控えるこの夜に、ランプ館を借り切つて、夕食会を主催するためである。

もちろん、夕食会の主賓は、卒業記念ダンス発表会に、自分の来賓として招待した人たち、つまり銀河聖王家のアレクサンドル王子、ブルック王国の3王子、そしてギルバート・モーガンの5人である。

この他の出席者は、チアキ、グリユール、ヒルデ、ブルック王国のアメリアの四人の王女、そして主催者の茉莉香である。夕食会はこの10人で行われる。

「カンパニー！」

茉莉香の挨拶もそこそこに、和やかな会食が始まった。ただ、男性たちは、少女たちに気を使ってノンアルコールの飲料を飲んでいる。

「茉莉香さん、昨晩は最後の女子高生海賊ショーだったんでしょ？」

どうでしたか？

私も、先輩の海賊ショーを見たかったです。

できれば、一緒に出演したかったです。」

アメリカ王女が、真つ先に茉莉香に話しかけた。

「だめですよ。あれは、海賊のお仕事です。お姫様のお仕事ではありませんよ。」

「だって、ヨット部の先輩たちは、一緒に出演されたんでしょう。みなさん、そのお話をなさるときは、本当に楽しそうですからね。」

「ナハハハ……あの時は、乗組員が病気で入院している間に海賊免許の期限切れを防ぐため、選択の余地がなかったというかあ。……」

「で、どうでしたの？茉莉香さん。」

グリーンエールが聞いた。

「いやあ……昨晩の船は、まず、クイーン・エメラルダス号でしょう。」

その次、つまり最後に乗ったのは、プリンセス・アプリコット号だったんだ。

そこで、海賊の名乗りを上げる時に、

『女子高生の海賊も、今宵限りでついに見納め』

なんて、口上を言ったものだから、大歓声で盛り上がったよ。」

「茉莉香さん、本当に、残念でしたよ。」

私たちも見に行こうと思って、プリンセス・アプリコット号に予約を申し込んだら、売

り切れだと断られてしまって・・・。

それなら、私たちも海賊して、乗り込んでやろうかと思っただけですよ。

ハハハ・・・」

ブルツク王国のジョージ王子が笑った。

「プリンセス・アプリコット号かあ。なつかしいなあ。

海賊シヨールは一年生の時だけど、つい昨日のように思えるね。」

チアキが言った。

「ほんとうですわ。」

もう、明日で卒業なんですものね。」

グリユーエルが言った。

その時、三人のメイド服姿のウエイトレスたちが、料理を運んできた。

「お待ちどうさま。どうぞ召し上がれ。」

「あれえ！ マミに、リリイに、サーシャまで。一体どうしたの？」

茉莉香が言った。

「ウフフフ・・・みんないるわよ。ウルスラ以外はね。」

サーシャが笑った。

「『どうしたの？』、じゃないわよ。」

茉莉香を助けてあげられるのも、今夜限りかなと思つて、私たち、手伝いに来たのよ。」  
リリイが言つた。

「ええ？ 手伝い？」

私、引越しの準備も済んだし、今は、余裕だよ。

みんなに海賊ショーで助けてもらった時のようなピンチには、追い込まれていないよ。」

「何、言つてるのよ、茉莉香。」

このあいだの部室での『大報告会』。聞いて、アキレタわよ。

あれじゃあ、やつぱり、この私が手伝つてあげないとイケナイ、と思つてさあ〜。」

「茉莉香さん、何か講演会でもなさつたのですか？」

アレックス王子が茉莉香に聞いた。

「いえいえ、なんでもありません。ただの女子高生のおしゃべりですから。」

茉莉香はあわてて否定した。

「それより、お料理が冷めないうちに、召し上がってください。」

今日は、加藤家秘伝のレシピで私が作ったポトフもご用意しましたので、ぜひ召し上がってください。」

「へえ〜。これがあの加藤家秘伝のお料理ですか。いただきます。」

ギルバートが言った。

食事をとりながら、白鳳女学院での楽しい思ひ出話や出席者の男性たちから、最近の身近な出来事の話がつづいた。みな話題が豊富で、楽しい会話が続いた。

そして、思ひ出したように、ブルック王国のジョージ王子が茉莉香に聞いた。

「そういうえば、茉莉香さん。」

弁天丸は新しい船になるという噂話を聞いたんですが……。どうなんですか、「はい。そのとおりです。」

今、新弁天丸の設計を進めているところです。

実は、それを皆さんにお見せしようと思つて、今日、持つてきたんです。」

茉莉香は、そう言つて、手元の携帯端末から立体映像をテーブルの上に投影した。

「茉莉香さん。これつて、今の弁天丸と同じではないですか？」

グリユーエルが言った。

いつのまにか、ヨット部員たちもメイド服姿のまま、テーブルの周りに集まつて来て、立体映像を眺めている。

「違うよ。デザインは同じだけど、大きさが1.5倍になるんだ。」

つまり、長さが300メートルになるんだよ。だから、船の体積は、3倍になるんだ。」

「なるほど。ずいぶん大きくなるのね。」

それじゃあ、新しい弁天丸も、チアキちゃんの船のように、重力制御推進方式の船になるんでしょ。」

ハラマキが聞いた。

「そうだよ。それが新造船を作る最大の理由だもの。」

「ふーん。それでさあ、茉莉香の部屋はどうなるの？」

それに、弁天丸の船室って、4人相部屋だったよねえ。あれはそのままなの？」

リリイが聞いた。

「私たちが乗った時は、あれはあれで、楽しかったけどねえ。」

練習航海とか、強化合宿みたいだったから……。」

サーシャが言った。

「新しい弁天丸の船員室は、できるだけ家族で暮らせる部屋をたくさん設けるプランを考えているよ。」

私もねえ、自分の子供の頃のことや、みんなの話を聞いて考えたんだ。

船乗りも家族を持つべきだし、家族は一緒に暮らすべきだと思うんだ。

だから、新しい弁天丸は、それができる船にするんだ。」

「なるほど、それが、茉莉香さんが望む自分の将来の姿と言う訳ですね。」

アレックス王子が言った。

「はい。私は、これからも船乗りを続けたいと思っています。海賊をやめるつもりはありません。」

私はそういう人間だと言うことを理解してほしいと思います。」

「僕たちも乗りたいなあ。弁天丸。」

ブルック王国の3王子たちが、口々に言った。

「茉莉香、帝国軍からの依頼で、乗り込む人たちの話も言っておかないと、フェアじゃないかも。フフフ……」

チアキが、ギルバートの方をちらりと見て、笑った。

「チアキちゃんは、あの話を知ってるんだね。」

「そうだね。ご披露します。」

みなさん、この新しい弁天丸では、帝国軍からの依頼でいろいろな新装備のテストをします。そのために10人の軍人さんが、エンジンアとして、新しい弁天丸に乗り込む予定です。ほかに警備の人もいますが、新しい弁天丸に関してお話ししておきたいのは、この10人のことです。」

「誰ですか？ さては？」

「ええ、ここに居る、ギルバート・モーガンさんをチーフとして10人の若い人たちです。」



「へえー……」

部屋の中の人たちが、一斉に声を上げた。

「僕たちも乗りたいなあ。弁天丸。」

また、ブルツク王国の3王子たちが、口々に言った。

「私の気持ちは、お話した通りですよ、茉莉香さん。」

アレックス王子は、平然と言った。すでに知っていたのかもしれない。

「新しい船の乗組員については、まだ考え中です。今の乗組員もいますし……」

それから明日のことですが、明日、私が着るドレスは、こちらにいるママが作ってくれました。ご紹介します。

「すぐ、きれいなドレスですよ。お楽しみに。」

「どうも……」

ママがぺこりと頭を下げた。

その後は、この一年の思い出話や明日の卒業式やダンス・パーティーについて、話が弾んだ。

そして、楽しい夕食会もお開きになり、茉莉香は、9人のお客様を見送った。

「はあく。終わった、終わった。」

みんな、どうも今日はありがとうね。」

茉莉香が、テーブルの上を片付けているリリイたちに、お礼を言った。

「……………」

しかし、みんなの様子が少し変だった。

茉莉香の言葉に対して、何も言わず、黙々と片付けている。

やがて、片付けが済むと、リリイたちが言った。

「茉莉香。あなた、そこに座りなさい。」

椅子に座った茉莉香を、みんなが取り囲んで、座った。

「そうよ。聞きたいことがあるんだけど。」

「私、やつぱりなあと、思ったよ。」

「茉莉香も、同じ女子高生だから、私たちと同じで、そういう話はまだ早いだろうと思っ  
ていたけど、違ってたね。」

「やつぱり、茉莉香は外の世界では弁天丸の船長として、一人前の大人として扱われているんだね。よくわかったよ。」

「私も、分かったよ。」

「あなた、隠していたでしょ！」

みんなが口をそろえて言った。

「ええ!? 私、何も隠していないよ。」

茉莉香が言った。

その時、チアキとグリユーエルとヒルデがランプ館のドアを開けて入ってきた。

「やっぱり、そういう話になっていましたわね。」

戻ってきてよかったですわ。」

茉莉香を囲んで、皆が座っているのを見て、ヒルデが言った。

「ねえ、あなた達は、知っていたんでしょ?」

リリイが少し尖った口調でチアキたちに言った。

「お察しの通りよ。茉莉香、観念しなさいよ。」

チアキが言った。

「それで、茉莉香。」

あなた、今晚、お客様として呼んだ5人の男性から、結婚申し込まれていたのでしょ。

隠していたわね。」

「もう、あなたの天然な笑顔に、すっかりダメされていたわ。」

「私、ダメしたりしてないよ。黙っていただけだよ。」

「何、言っているの。そんな子供ダメシの言い訳、私たちに通用すると思うの?」

「ナハハ……。私たちは、その『子供ダメシの言い訳』に丸め込まれたことがありますたわね。」

グリユーエルは、茉莉香の苦笑いを真似て、ヒルデの方を見てつぶやいた。黄金の幽霊船での出来事を思い出したのだ。

「みんなが、気を悪くしてるなら、ごめんなさいね。」

だって、いきなり大人の人から結婚申し込まれても、私はまだ高校生だし、どうしていいか、自分でも分からなかった事だったんだもの・・・。」

茉莉香は、みんなにお詫びを言った。

「まあ、それはそうね。」

それじゃあ、あの弁天丸の話が、今のあなたに出来る、最大限のお返事ってことね。」

ママが言った。

「あれって、茉莉香は、

『自分は弁天丸の船長を続けたい。結婚して相手の家に入って、お城の奥方様や、お屋敷の奥様にすんなり収まる気はない。』

って、言いたかったのよねえ。」

ハラマキが言った。

「結婚するなら、そういう茉莉香さんと、一緒に弁天丸に乗って、広い宇宙（うみ）の果てまで仲良く一緒に行って頂ける殿方が理想だということですね。」

茉莉香さんらしい、とても、ロマンティックなお話ですわ」

グリユーエルが言った。

「でも、茉莉香さん、本当に、よく頑張つて、あそこまで言ったわよね。」

サーシャが言った。

「それで、誰にするの？」

やつぱり、ギルバートさんに決めたの？

だって、今度は、彼、弁天丸に乗るんでしょう？ ということは……。」

リリイが突っ込んで聞いた。

「いやあ、まだ高校生の私には、そんなことは何も決められないと言うか……。」

茉莉香は、口ごもった。

「そのところは、相変わらずかあ。」

それじゃあ、新しい弁天丸での茉莉香の部屋、プライベートルームはどうするの？

まさか、今の弁天丸の船長室みたいに、オジサンくさいのを考えているんじゃないでしょうね。」

リリイが再び聞いた。

「ええ!?! あれでイケナイのかなあ?」

「茉莉香、あなた、『女子力』が無さ過ぎだよ。あれじゃあ、男の子の部屋だよ。」

リリイが言った。

「そうはいつても、茉莉香さんにとって、今の弁天丸の船長室は、お父さまのお部屋だから、大事になさりたいお気持ちは分かりますわ。」

でも、新しい弁天丸は、茉莉香さんの作る船、茉莉香さんが暮らす船なのでしょう？」  
グリユーエルが言った。

「そうよ。茉莉香、あなた、いずれその部屋で家族を持つことになるのでしょ。」

つまり、その部屋は、いずれ新婚夫婦の部屋になるわけでしょ。」

サーシャが言った。

「だったら、当然、ベットは天蓋付きの御姫様ベッドだし、部屋の壁紙とか、布団のシーツとか、鏡台とか、その他みんな、うろうると、ロマンティックで、可愛いものにしなといけないわよ。」

ハラマキが言った。

「チアキちゃんの船の部屋を見たでしょ。理想を言えば、あのくらい、可愛くしないと・・・。」

これって、夢見る乙女の常識よ。」

リリイが言った。

「ええ!? そうなの？」

「マミはどう思うの？ チアキちゃんは？」

「マミ、どう思う？ 相変わらず、これだよ。茉莉香は。」

リリイは言った。

「やつぱり、この私がついて行ってあげないと、イケナイのかなあ。」

宇宙では、チアキちゃんがマミの代わりだよって、頼んでいたんだけど……。

チアキちゃんも忙しくなりそうだし……ねえ。」

マミは、そう言つてチアキの方を見た。

「そうねえ。『女子力』の方は、茉莉香が女子大生の内に、なんとかしようと、思つていたんだけどねえ。」

チアキが言った。

「マミは、船乗りには向いてないよ。無理することないよ。」

う~~~~ん。

ここは、やつぱり、この私がそばにいてあげないと、イケナイのかなあ。

ねえ、茉莉香。私を弁天丸に乗せてよ。」

突然、リリイが言った。

「ええ？ リリイは、家政学部のお嬢様コースに進学するんじゃないの？」

突然、どうしたの？」

茉莉香が言った。

「正直言うと、それもつまらないなあって思つて、迷つてたのよ。

それに比べたら、一年生で海賊船に乗った時の、あのワクワクした気持ちは、忘れられないわよねえ。

私、やっぱり、船乗りに憧れてたのかなあ。

今、決めたわ。

私、看護学部に移部して、看護師になる。

それに、自慢じゃないけど、私、結構かわいい方で、男の子にすぐ人気あるんだ。通学の時にラブレターもらうなんて、しよっちゆうだよ。

だから、弁天丸に乗せてよ。

茉莉香、新しい弁天丸のような大きな船には、私のような、美人で人気の看護師も必要でしょ？ ねえ！」

「なんか、少し、セールズ・ポイントがずれているような気もするけど、リレイも真剣なのね。」

ハラマキがつぶやいた。

「……ええ!? うう……」

茉莉香が口ごもっているときに、ランプ館のドアが、音を立てて勢いよく開いた。

「茉莉香！ 聞いたよ。どうして、教えてくれなかったの!？」



大きな声を出して、ウルスラが店に飛び込んできた。

「ウルスラ、どうしたの？」

「今日は、ご両家の両親と顔合わせの食事会だったんでしょ？」

「ウルスラさんは、私たちより一步先を、着々と、進んでいらつしやるのね。素敵ですわ。」

「実は、茉莉香も結婚を申し込まれていたらしいのよ。この話、あなた、どこで聞いたの？」

皆が口々に言った。

「いや、その話じゃなくて、新しい弁天丸に、うちのダーリンも乗るって話が決まってるんだって!？」

「ええ〜〜!?! さっき、茉莉香は、そんなことは言わなかったよ。」

みんなが、また声を上げた。

「いやあ〜〜。帝国軍の人事の話だから・・・。」

それに、私は、今朝、正式に了承したところで、まだ内定しているだけだし・・・。」茉莉香は言い訳した。

「それなら、私も弁天丸に載せてよ。」

ダーリンと一緒にさあ。

私、今でも予備役の帝国軍人だよ。

自慢じゃないけど、パイロットとしての腕前は、帝国軍のSクラスだよ。

重力制御推進の大型戦艦も、操縦できるよ。

あのグランドクロスⅡだって、操縦したよ。

小型の戦闘機も操縦できるよ。

大型戦艦でも小型の戦闘機でも、タッチ・アンド・ゴーができるよ。

実戦経験もあるよ。

私、海明星を守ったよ。

実戦での射撃の命中率は、95%以上だよ。『こんな奴見たことない』って、ミニッツ

大佐も誉めてくれたよ。

重力波砲だって、発射した経験もあるよ。

だから、私、茉莉香の役に立つよ。

それに、これから頑張って、士官学校を卒業するからさあ~~~~。

ねえ~~~~お願いだからさあ~~~~。」

ウルスラは、必死になって、茉莉香に頼み込んだ。

その顔は、すこし涙ぐんでいるようだ。

そして、ウルスラの言葉を聞いて、ヨット部員たちはこの一年にウルスラがどんなに

頑張ってきたか、改めて思い知らされた。

白鳳女学院のヨット部員のなかでは茉莉香やチアキやサーシャの陰に隠れて目立たなかったが、ウルスラのやってきたことは、普通の女子高生では到底できない、すばらしい功績の連続だった。

「茉莉香さん、先ほどあなたは、

『船乗りも家族を持つべきだし、家族は一緒に暮らすべきだ。』

新しい弁天丸は、それができる船にする。』

と、おっしゃいましたよね。」

グリューエルが、にっこり笑って言った。

「そうなの。茉莉香！

ありがとう!!

やっぱり、茉莉香はすごい船長さんだねえ。」

ウルスラは、茉莉香の返事も聞かず、大喜びして、茉莉香の腕を握って、振った。

「ナハハハ・・・」

茉莉香は、ウルスラの喜ぶ顔を見て、照れ笑いをするしかなかった。

## 第二十七章 卒業

27—1 白鳳女学院（海明星）

卒業式の日は、快晴だった。

この日、午前に、まず中等部の卒業式が行われた。グリューエルが卒業したが、中等部の生徒は卒業しても高等部へ進学するのが大半なので式典は簡素だった。

続いて、午後に高等部の卒業式が行われた。

「只今より、白鳳女学院高等部の卒業式を行います。卒業生、入場。」

教頭先生の開式宣言で、卒業生がひとりひとり講堂に入ってきた。

茉莉香も、チアキも、サーシャも、ウルスラも、リレイも、ハラマキもいる。一つ変わったことと言えば、チアキがセーラー服をやめて、みんなと同じ高等部の制服を着ていることだ。チアキは、みんなと同じ服を着て記念写真に写りたかったので、そうしたのだった。

しかし、講堂内の雰囲気は張りつめていた。父母席の一番の上席に、周りを屈強な女性たちに囲まれ、校長と並んで一人の女性が座っていたからだ。もちろんその人は、チアキの母、銀河帝国のアン女王だった。

「卒業証書、授与。」

檀上に立った校長から、ひとりひとりに、卒業証書が手渡された。

チアキが卒業証書を受け取ると、女王はうんうんと肯いて、嬉しそうだった。

茉莉香は、卒業証書を受け取ると梨理香の方を見て、微笑んだ。茉莉香と目を合わせた梨理香も、微笑んでうなずいた。

その後、校長や来賓の祝辞があり、型どおりの卒業式は、滞りなく終了した。

「ああ、終わった。終わった。あつけないなあ。」

短い最後のホームルームと記念写真撮影を済ませて、ヨット部の部室に集まってきたヨット部員たちに向かって、ウルスラが言った。

ヨット部の卒業生は、休憩の後、着替えて夕方からの謝恩会とその後の最後のダンス発表会に出席する予定である。

「ねえ、チアキちゃんは今これから謝恩会まで、どうするの。何か予定はあるの？」  
ウルスラが聞いた。

「別に何も・・・私は・・・。」

チアキはそっけなく答えた。

「ふーん。女王陛下は？」

「母上は、謝恩会にはちよつと出たいと言っていたけど、今、別室でいろんな人と会って

いるのかなあ……。この星には初めて来たそうだから。」

その時、ヨット部の部室の扉がノックされた。

ドアを開けて応対に出た一年生が、うわーと黄色い歓声を上げて、言った。

「ウルスラ先輩。お客様です。」

「あ、来てくれたのかな。今、いくよ。」

ドアの向こうから、帝国軍の制服姿のブラウン中尉が恥ずかしそうに、顔をのぞかせた。

ウルスラは、彼の腕をとると、並んで部室のみんなに言った。

「改めて、紹介します。私のダーリンです。」

「お久しぶりです。」

「このたびは、おめでとうございます。」

皆が次々にお祝いを言った。

「じゃあ、ダーリン、卒業式にせっかく来てくれたのだから、私の学校を案内するね。」

みんなくくく、謝恩会の始まる時間までには戻るからね……。」

そう言うと、ウルスラは彼を連れて、上機嫌で行ってしまった。

「うわー、ついにウルスラの『パレード』が始まるよ。チアキちゃん。」

茉莉香が言った。

「なぜ、私の名前を呼ぶのよ。私は関係ないわよ。」

チアキは早くも機嫌を悪くしているようだった。

「先輩。それって、婚約した卒業生がやるという『伝説の儀式』ですかあ？」

「本当にやるんですね。」

一年生たちが言った。

「そうだよ。ウルスラは、その気だよ。」

生徒会の子たちに、その準備をしてほしいと言ってたよ。」

茉莉香が答えた。

『パレード』には、後輩の私たちにも役割があるのよ。

さあ、みんな、ブーケに、クラッカーとかの用意はいいかな？

それに、他の下級生たちがどんな歓迎をするか、面白そうだから、早く見に行こうよ。

ここ数年無かったそうだし、これからも当分ないかもしれないよ。」

復学したジェシカが、一年生たちを誘ったので、みな興奮して、部室を出て行った。

『パレード』では、校内を練り歩くカップルは、中庭を通る際に、後輩たちから少し手荒な祝福を受けるといふ「しきたり」になっている。

その「祝福」の大半は、花吹雪とか、クラッカーとか、シャボン玉の雨とか、お嬢様学校らしく、かわいいものだったと伝えられている。

しかし、今年のヒロインは、ウルスラである。三年生の一部から「ふろ（バスタブ）の栓」（つまり最低の存在）と影口をたたかれていたウルスラには、どんな歓迎が待っているのか、関心を集めていた。

ウルスラは、ダーリンに学校のあちこちを説明して回り、中庭に差しかかった。

いつの間にか腕を組んだ二人が、中庭で待ち構える下級生たちの前に現れると、歓声が上がった。

「うわー！」

「おめでとうございませす。」

パン、パンとクラッカーが鳴らされ、飛び出した紙吹雪や紙テープが風に乗って舞った。

二階の窓から手を振ったり、紙吹雪をまいている下級生もいる。

「おめでとうございませす。」

こういつて、大勢の下級生がブーケをウルスラに渡している。

ウルスラの手には、持ちきれないほどのブーケが贈られたが、いつの間にか後ろに控えたヨット部の一年生たちがウルスラからブーケを預かってストレッツチャーに乗せて運んでいた。一年生たちの「パレードでの役割」とはこれだった。

同時に、金銀のふさが付いたレイがいくつもいくつも、パートナーのブラウン中尉に



も贈られていた。

女子高生にレイをかけてもらって、ブラウン中尉は顔を真っ赤にして恥ずかしがっていた。どうやら、彼は、女の子が至近距離に近づくといいだけで緊張しているようである。

それを見た、下級生は、「少女の小悪魔」を始めた。

「帝都の乗り物の中で、先輩をナンパしたって、ほんとですか？」

「ねえ、先輩とのファーストキスは、いつ？どこで？」

「プロポーズの言葉は、何といわれたんですか？」

「先輩のことを、なんと呼んでいるんですか？」

「まさか、ハニーなんて言ってますよねえ。」

などと言いながら、レイを首にかける時に、レイから手を離さずに彼にぐつと接近して、ビックと彼を緊張させた。

さらに質問をして、その答えに困った彼は、ますます恥ずかしがって顔を赤くする。

少女たちは、彼のこういう様子を見て、目を輝かせ、笑みを浮かべている。

少女たちは残酷なのだ。

「パレード」で男性に贈られるレイにもあだ名があった。

それは、「結婚のくびき」と呼ばれていた。

そう呼ばれる意味は、二人が中庭を歩き出すと、すぐにわかった。

レイにはヒモが結び付けられ、そのヒモには派手な音のするものがいっぱい結び付けられていた。大半は、空き缶だったが、中には、引つ張つて転がすとコロコロコロと可愛い音のする幼児用のおもちゃもあった。

しかし一番目立ったのは、一メートル以上もある、赤や黒やピンクの大きな風船だった。これは、古代のおとぎ話に出てくるような、奴隷の足や首に鎖で結び付けられた鉄球のパロディだと思われた。

後輩からの「手荒な歓迎」の正体は、これだった。

ブラウン中尉は軍の制服姿のまま、レイから伸びたヒモを肩にかけて、派手な音をさせながら、引いていった。レイはたくさんあったので、これに結び付けられたヒモを引いて歩くのは実は大変な重労働だったが、そうやって進む二人に、惜しめない拍手と歓声を送られ、中庭の校舎の間にこだましていた。

やがて、二人は、中庭の反対側の端までたどり着いた。パレードは、そこで終わるはずだった。

しかし、事件はその時に起こった。

「おめでとうございませす。」

そう言つて三人の「生徒」が、どこからともなく現れた。

三人とも顔に仮面をつけている。

しかも、三人とも白鳳女学院の制服を着てはいるものの、サイズが合っておらず、いかにも胸は窮屈そうで、ミニスカはますます短くなっていた。

また、三人は背が高く、その鍛え抜かれたアスリートの体つきは、周りのお嬢様の生徒たちと全く違っていた。しかも、その髪型は、派手な金髪のツインテールが二人、腰まで届く長い黒髪が一人と言うもので、これはコスプレ用の「かつら」であることは明白だった。

だから、どこからみても、彼女たち三人は、「ニセの生徒」だった。

三人は、それぞれ、右手に大きな赤い薔薇のブーケを持ってウルスラに近づき、ウルスラにお祝いを言って、ブーケを渡した。その後、

「おい、カレシにも、お祝いだ。」

「そうだ。大勢の美女を差し置いて、女子高生をゲットするなんて、メデタイ奴だ。」  
「それ！」

三人は、ブラウン中尉を取り囲むと、左手に隠し持っていた、白い丸いものを、次々と、目にもとまらぬ早業でブラウン中尉の顔に投げつけた。

そして、さっと風のように、姿を消してしまった。

この三人の「ニセの生徒」の正体は、帝国軍の警備の女性兵士以外にはありえなかつ

た。

本日の白鳳女学院は、女王陛下の来校で嚴重な警備が敷かれ、関係者以外立ち入り禁止となっていたからである。校内に入ることができる関係者の中で、警備兵に咎められることなく、そんなことのできる女性にはいないはずだった。

まあ、お祝いだから良いのだろう。しかも祝われる二人は帝国軍人、警備の兵士にとつていわば身内である。校内のあちこちに立ち並ぶ警備の兵士たちは、三人の女性の行動を無視していた。内心、笑いかみ殺していただろうが……。

もちろん、彼女たちが使った白い丸いものは、クリームパイだった。

ブラウン中尉は、パイが顔に命中して、顔から制服から、クリームでベタベタに汚されたが、恥ずかしそうにしているだけだった。ウルスラもブラウン中尉にやさしそうに言葉をかけているが、とてもうれしそうだった。

そこへ生徒会の役員たちが、濡れタオルをブラウン中尉に差し出して、顔をふくように促した。

「さあーっ。本日のメインイベント、ブーケ投げ、はじめますよ。」

生徒会役員が声を上げた。

その声を聴いて、生徒たちが一斉にウルスラの前に集まってきた。

ウルスラは、それまでにもらった沢山のブーケとさらに自分が持ってきたプレゼント

用のブーケを、ヨット部の一年生から少しづつ受け取って、それを生徒たちの人だからの上に放り投げ始めた。

「うわー。」

「キヤー。」

みんな大騒ぎして、ウルスラが投げたブーケを取り合っている。

結婚式の後の花嫁のブーケの奪い合いのようなものだ。

これをやるために、みんなが、沢山のブーケをウルスラにプレゼントしたのだ。ウルスラの幸運を分けてもらうために。自分にも必ずブーケの幸運が授かるように。

いつのまにか、先ほどの「ニセの生徒」三人組もブーケ投げの人だからの中に加わっている。

もちろん彼女たちは、抜群の身体能力と気迫で高々と飛び上がり、お好みのブーケを素早くゲットして、姿を消してしまった。

「やはり、こういう奪い合いの力比べでは、大人の女性（ひと）には、かなわないわね。」

「あの人たち、切羽詰まった気迫があったわよね。」

「いったい何歳なのかしら。ウフフフ……。」

「それを言うなら、カレシ・イナイ歴28年とか……。」

「アハハハ……。」

口の悪さでは、女子高生たちも負けてはいなかった。

27—2 ヨット部部室（白鳳女学院）

「ただいま〜〜。」

『パレード』を終えた、ウルスラが一年生たちと部室に帰ってきた。

「みんな！　ありがとうね。おかげで、無事終わったよ。」

ウルスラが、手伝ってくれたヨット部の一年生にお礼を言った。

「いえ、いえ、先輩。どうも。」

「お二人を見てみると、やっぱりお幸せそうですね。うらやましいなあ。」

一年生たちが、口々に言った。もちろん、みんな、ゲットしたブーケをしつかり握っている。

「校内テレビで中継されていたけど、なかなか派手なパレードだったわね。」

ところで、『ダーリン』は、一緒じゃなかったの？」

リリイが聞いた。

「服をきれいに拭いた後、食堂へ行くと言ってたわ。」

懇親会のお客様が集まり始めているから、ごあいさつをすると行ってた。」

ウルスラが答えた。

「ねえ、チアキちゃん。ハイ、これ。」

ウルスラが、碧いバラの花で作られたブーケをチアキに手渡した。

「え！ 私に？」

「そうだよ。チアキちゃんにプレゼントするために、用意してきたんだよ。」

「私は別に、予定はないけど……。」

そう言いながらも、チアキは、少しうれしそうに顔を赤くして、ブーケを受け取った。

「さあ、先輩方。」

そろそろ着替えて、用意を始めないと、懇親会の時間が迫ってきましたよ。」

ナタリア部長が言った。

ナタリアがそう言った時、実際には懇親会とそれに続くダンス発表会の始まる時刻までには、2時間以上時間があつた。

支度を急ぐには、まだまだ早い時間のはずだった。

しかし、「女の子の支度は時間がかかる」といわれる

実際、そのとおりで、ヨット部の三年生を中心に一年生、二年生を含め、今日のドレスやアクセサリーについてお互いに見せ合ったり、誉め合ったり、ワイワイと楽しくおしゃべりしながら、着替えの「用意」をしているつもりだったが、何もしないうちに、いつの間にか1時間半が経過してしまった。

「ヤバイ。急がなくっちゃ。」

「メイクも、しなくっちゃ。」

みんなが、バタバタと急いで用意を始めた。

そして、茉莉香は、着付けをグリューエルに手伝ってもらい、白く輝くドレスを着て、みんなに見せた。虹のような輝きを放つシルク生地で作られた白いドレスを着た茉莉香は、頭にグリューエルから借りたダイヤモンドのティアラをつけ、首にはチアキから借りた三色の宝石をちりばめたネックレスをつけている。

その姿は、18歳の若さに気品が加わり、そして本当に輝くように美しかった。

「これ、マミに作ってもらったドレスだよ、どう？ みんな？」

「うわー、すごい。」

「先輩、素敵です。」

「やっぱり、茉莉香さんですわ。想像していた通りの、ロマンチックなお姿ですわ。」

グリューエルが言った。

今日の彼女は、自分は中等部の卒業生なので、高等部卒業生の懇親会にもダンス発表会にも出ないつもりだった。しかし、茉莉香の晴れ姿を一目見るために、わざわざ居残っていた。

「本当に、お姫様みたい……。うっとりです。」



一年生たちは、目を輝かせ、ぼーっとなつて、茉莉香のドレス姿を見ている。

「ナハハハ……。そういうのに憧れているわけじゃないんだけどね……。」

ヨット部の他の三年生たちも、これまでのダンス発表会で見せたことのない、新しいデザインの白いドレスと派手なアクセサリーで、目いっぱい着飾っている。

みんなは、今日のために、またドレスを新調したようだ。

しかも、今日は、全員、頭にティアラをつけている。

「みんな、ティアラをつけているんだね。」

茉莉香が言った。

「そうよ。茉莉香がティアラをつけると聞いたからね。」

最後の懇親会とダンス発表会だから、何か一つ、今までにない、何か楽しいことはないかなあと考えていたところだったのよね。

茉莉香のティアラの話聞いて、これだと思つたわけよね。」

「ヨット部の私たちだけじゃなくて、他の三年生も、今回はティアラをつける子が大勢いるらしいわよ。」

「そうよね。これって、とてもきれいだものね。」

ヨット部員たちは、ようやく着替えのめどがついたと安心し、また、みんながお互いのドレスを誉めあっていた。

しかし、この時に、彼女らは大変なことに気が付いた。

チアキが、ドレスに着替えず、学校の制服のままポツンとソファに座っていたのだ。

「え〜〜〜！」

チアキちゃん、どうしたの？ 着替えは？」

「良いのよ。私は。」

今日は学校の制服でいくわ。せつかく新しい制服を着ているんだから。」

「え〜〜〜！」

チアキちゃん、何を言ってるのよ。」

みんな口々に言って、心配し始めた。

「今日は、お母様である女王陛下も、わざわざ、おいでになっているのでしよう。」

懇親会では、聖王家の正式なドレスを着て、正装なさらないと……。」

グリユーエルが言った。

「あれは……ねえ……。」

チアキは、はつきりした返事をしない。

その時、ヨット部の部室のドアがノックされた。

一年生部員が応対に出ると、メイド服姿の女性たちが心配そうな顔をして、部室の中を覗き込んできた。

「あ~~~~！」

いらつしやいました。姫様はこちらです！」

チアキの姿を見つけた女性が外の方に向かって叫んだ。

やがて、少し年配のメイド服を着た女性たちが部室に入ってきた。どうやら、銀河帝国の宮廷の女官たちだった。

そして、彼女らが、チアキに言った。

「姫様。お探ししておりました。」

お召し替えをなさってください。ほどなく、懇親会が始まります。」

「良いのよ、別に。私は学校の制服で出席するから……。」

「そんな、姫様。……。」

「良いのよ。心配しないで。」

「姫様……。」

……

何度も押し問答が続いたが、チアキは着替えようとしなない。

ヨット部員たちも、ハラハラして見守っている。

なぜなら、チアキは、今日の懇親会でもダンス発表会でも注目の的になるはずだった。銀河帝国の王女が、この辺境の星の女子高を卒業するというだけで、この星にとって

は『大事件』だったからだ。

しかも、一度もこの星に来たことがないと言う女王陛下が、娘の卒業式に出席するために、わざわざ帝都からやってきたという、もうひとつの『大事件』も重なっている。

茉莉香も困って、チアキに何か言おうと思っていたその時、茉莉香の軍用携帯通信機の呼び出し音が鳴った。

「はい。茉莉香です。」

茉莉香は携帯通信機を取って、返事をした。

「はいー。」

茉莉香の声が緊張したトーンに変わったので、周りのみんなはびっくりした。

「はい。承知いたしました。」

チアキ様に、そのようにお伝えします。」

「今の電話は、女王陛下からですか？」

グリューエルが聞いた。

「そうだよ。」

ねえ、チアキちゃん。陛下からチアキちゃんに伝言だよ。

遅れていた、エドワード・ドリトルさんが、もうすぐ白鳳女学院に到着されるらしいよ。

それで、直接、この部室へ来られるそうです。

だから、チアキちゃんが彼を懇親会場までご案内するようにと、陛下はおつしやつてました。」

茉莉香は、そう言つて、ニコリと笑つた。

「ええ……??」

これを聞いたチアキは、急に緊張し、顔をこわばらせていた。

「どうしよう? グリユーエル!」

どうしよう?

どうしよう?

困つたわ。

エドがこの部室に来るつて……。」

チアキは、とても困惑し、どうしたらよいか分からなくなつたようだった。

ひどくあわてて、グリユーエルに聞いた。

「大丈夫、間に合いますわ、チアキ様。

まずは、お召し替えですわ。

さあ、みなさん、お願いします。」

グリユーエルは、笑顔で、女官たちにチアキの着替えを手伝い始めることを促した。

女官達は安心して、笑顔でうなずいた。

たちまち、着替えが進んでいき、チアキはパニック状態を抜け出した。

それを見て、茉莉香が言った。

「そういえば、チアキちゃん。」

陛下が、『チアキちゃんの携帯通信機に連絡がつかない』って、おっしやっていたよ。

今日は忘れてきたの。」

茉莉香が言った。

「何言うのよ。ちゃんと持っているわよ。」

「……あー！」

「どうしたの?」

「卒業式の最中に呼び出し音が鳴らないようにと、朝から電源を切ったままだった!」

「ああ〜私と一緒に。チアキちゃんも、やっちゃったわね。」

ハラマキが言った。

チアキは、さっそく電源を入れて、軍用の携帯通信機をいじりだした。

そして、

「まあ、エドつたら……。」

「こんなにたくさんメールをくれていたわ……。」

グフフフ……」

と、ひとりごとを言い、微笑んだ。

機嫌が直っていることは言うまでもない。

もちろん、ヨット部員は、チアキがエドワード・ドリトル氏のことを、親しそうに名前前で呼んだことを聞き逃さなかつた。

「ねえ、チアキちゃん。ドリトルさんとはどういう関係になつているの？」

ウルスラが、空気を読まず、みんなが聞くのを遠慮していたことを、チアキに聞いてしまった。

「別に、何もないわよ。

彼は仕事でこの星に来ていたので、母上が呼んだらしいわよ。

私は、母上の言いつけどおりに、彼をご案内するだけよ。」

チアキは、何事もないと、いつものように言った。

「ふ~~~~ん。」

ウルスラは、チアキの言葉通りに受け取って、納得したようだった。

もちろん、他のヨット部員はそんなチアキの言葉は信じていない。

その時、ヨット部の部室のドアがノックされた。

今度は、すでにドレスに着替えているリレイが応対に出ると、燕尾服で正装した男性

が立っていた。

「お久しぶりでございます。」

チアキちゃん、ドリトル様がいらっしやいましたよ。」

応対に出たリリイは、ドリトル氏に挨拶すると、チアキを呼んだ。

「お忙しいところ、わざわざおいで下さって、お礼申し上げます。」

チアキが、一礼していった。

そう言うチアキの声のトーンは、先ほどまでの不機嫌さやその後のあわてぶりを全く感じさせない、完璧な御姫様モードになっている。

「いえいえ、お招きいただき、光栄に存じます。」

では、姫様、参りましょう。」

チアキは、彼のそばに歩み寄って、部屋の中を振り返った。

「皆様、お先に参ります。どうもありがとうございます。」

チアキはそう言って一礼した。

その時、チアキが来ている白いドレスは、聖王家の女性の正装であった。そのドレスは、肩口や胸元で、バラの花びらのようにカールした布が重なっている、白く輝くロングドレスである。そして、彼女の頭にはダイヤモンドのティアラが、その首には、碧い大きな宝石を小さなダイヤが取り囲むデザインのネックレスが、輝いていた。



「うわー。チアキちゃん、きれい。」

そうやって、二人が並んだ姿は、ヨット部員から、思わずため息が出るほど、素敵だった。

「では、参りましょう。会場まで、ご案内しますわ。」

チアキは、エドワードの方を向いてそういうと、部室の外の廊下を進んでいった。

その左手には、ウルスラからもらった碧いバラのブーケを握り、右手は彼の腕を取っていた。

そして、二人は、いつのまにか部室の外の廊下にひかれた赤いじゅうたんの上を歩いて行った。

二人の歩く先には、大勢の人たちが両脇に並び、歓声が響き、カメラのフラッシュが光っていた。

「まるで、バージン・ロードみたい。」

そんな声があちこちから聞こえてきそうな雰囲気だった。

ヨット部員たちは、部室のドアから身を乗り出して、そんな二人を見送った。

そして、部員たちは、黙って顔を見合わせ、急いでドアを閉めた。そして、

「ウハハハハ……」

「ああ……おかしい。」

みんな一斉に笑い出した。

「やっぱり、彼が来るのが遅れて、イライラしてたのね。」

「それなら、早く来てほしいって、言えば良いのにねえ。」

「そう言えないのが、チアキ先輩の可愛いところですね。」

「でも、チアキちゃんったら、また、やってくれたわね。」

「そうですね。メトロポリタン空港の出迎え事件以来ですね。」

「でも、今度は、彼女から誘ったのよ。」

『招かれた』と彼が言っていたのを、私、すっかり聞いたわよ、ね。」

「そうですね。」

でも、チアキ先輩、本当に嬉しそうでしたね。」

「そうだよね。」

さあ、私たちも行こう。」

茉莉香が言った。

27—3 白鳳女学院食堂（懇親会・ダンス発表会の会場）

懇親会場である白鳳女学院の食堂は、寺院の礼拝堂のような、天井の高い壮大な吹き抜けの空間を持つ建物である。

今日の食堂は、まばゆく輝き、門出の日に花を添えていた。

ヨット部の卒業生一同は、食堂に入り、建物の内部を見上げて言った。  
「うわー。」

今日は、これがあの食堂かと思う程、きれいになっているよ。」

「そうね。」

「女王陛下が来ると言うので、急にお化粧直し、したのよね。」

うちの親も、そのために寄付したらしいわよ。」

「うちも、そう。」

「フフフ．．．．そんなに見え張らなくても良いのにねえ．．．。」

そうは言うものの、みな、上機嫌だった。真新しく磨き上げられた建物は、とても気分が良かったからだ。

懇親会場は人でいっぱいだった。昨年よりもはるかに人が多いという。

茉莉香たちヨット部の卒業生一行が、そういう懇親会の様子を見ると、チアキとドリトル氏が、左右の人々に挨拶をしながら、ようやく女王と校長が待つ会場の奥にたどり着いたところだった。

二人は、並んで作法通りの礼を女王にし、その姿を女王はともうれしそうに見守っている。

それからは、茉莉香たちも、女王陛下、来賓の人たちや、各園の校長や先生たちに挨拶したり、他の生徒やその父兄とあいさつをしたり、記念写真を撮ったりと、大忙しだった。ヨット部の卒業生は、人気者が多いせいか、みんな、大勢の人に囲まれていた。

一時間ほどして、校長の挨拶があり、その後女王陛下が退出された。

それを合図のように、懇親会は事実上、終了していった。

やがて、ダンス発表会の準備が進められた。入場行進のために、卒業生とダンスのパートナーが、会場から控えの間に移動し、食堂ホールの中央にダンスのための空間が空けられた。

「ご来場の皆様、ただいまより、白鳳女学院高等部の卒業生によるダンス発表会を開催いたします。」

ダンス部の司会による開会宣言のあとに、校長の短いあいさつが続いた。「それでは、卒業生の入場でございませう。」

先頭は、ダンス部部长のカトリーヌ・クレソンと、銀河聖王家の王子、アレクサンドル・ホワイトローズ殿下のペアである。

今日のカトリーヌは、本当に美しかった。

白いドレスに多数の大きなダイヤモンドが光輝くティアラをつけて、まるでお姫様の

様だった。聖王家の王子様と踊るため、ずいぶんと気合が入っている。彼女の実家も、プラタナス通りに豪邸をかまえる銀河系の名家の一族であり、今日はお嬢様としての本領を發揮しているのだった。

その後に卒業生と来賓のペア、そして卒業生と在校生のペアが続いた。

今日の白鳳女学院の卒業生たちは、どの子も、輝く白いドレスに、ティアラや首飾りなど豪華なアクセサリーをつけて、お姫様ようだった。聖王家の王子様を始め、王子様が四人も出席すると聞いて、みな気合が入っている。

茉莉香の登場は、かなり後の順番になり、パートナーもダンス部の次期部長である2年生イボンヌ・マルソーだった。もちろん、下級生にも『茉莉香サマと踊りたい』という生徒は多いのだが、そこはダンス部が仕切った。

やがて、全員が登場すると、ホールの中でカトリーヌとアレクサンドルのペアが踊りだし、会場全体に踊りの輪が広がって行った。

「うわー。みんな、すごいなあ。」

やっぱり、本物のお嬢様って、感じだよな。」

踊りながら、茉莉香が、つぶやいた。

「いえいえ、先輩もとても素敵です。本物の『お姫様』のような気品があたりですもの。」  
男装した次期ダンス部長のイボンヌは、嬉しそうに茉莉香を見つめて答えた。

しかし、他の生徒たちが予想以上に着飾って登場したので、茉莉香は、マミの作ってくれたドレスを着て、グリユールから借りたティアラをつけ、チアキから借りたアクセサリーを身につけたお姫様スタイルにもかかわらず、あまり目立たなかつた。

「今日は、みんな、本当に気合が入っているわねえ。」

踊りながら、リリイも、つぶやいた。

「そうよ。私も、うちのおかあさんから、言われているわよ。」

『お前も頑張れ、目指せ、お姫様！』、だって。ハハハ・・・」

ハラマキも、踊りながらそう言って、笑った。

「そうだね。確かに、気合が入っているね。」

ウルスラも踊りながら答えた。

「ねえ、先輩。でも、ウルスラ先輩が、一番注目されていますね。」

リリイと踊っている後輩の生徒が言った。

「そうね、どんな豪華な衣装より、やっぱり、『最終兵器』の威力はすごいわね。」

みんな、ウルスラの方をチラ見してゆくよね。」

リリイが言った。

「アハハハ・・・。そうかなあ。」

ウルスラはそう言って踊りながら、彼氏の方を見て微笑んだ。

今日のウルスラは、他の卒業生に比べるとずいぶん地味なドレスで、ティアラやネックレスなどの派手なアクセサリーも付けていなかった。

しかし、ホール内の女生徒の視線を集めていた。

その理由は、もちろんダンスのお相手、婚約者ブラウン中尉の存在と、ウルスラの左手薬指に輝くダイヤモンドの婚約指輪のためだった。

やがて、曲が変わり、ペアが交代する場面となった。

「あれ？ アレックス王子様、次は、サーシャと踊るみたいよ。」

茉莉香。踊らないの？ 彼と・・・」

「良いのよ。」

私、今日も順番決められているから、そのうちね。」

茉莉香に関係する来賓たち、つまりアレクサンドル王子、ブルック王国の王子たち、そしてギルバートは、まずこの星の名家のお嬢様たちと踊るように決められていた。

彼らも、茉莉香も、そのダンス相手の順番は、聖王家の意向を密かに聞いて校長がダンス部に指示したのであるが、茉莉香は自分ばかりが目立つことにならず、ほっとしていた。

実際のところは、少女たちの浮かれた気分とは裏腹に、政略結婚を狙う有力者たちの思惑から、ダンスのペア選びについて校長に対して希望や注文が殺到していた。その対

象としては、聖王家のアレクサンドル王子よりも、むしろブルック王国の三王子たちの方に希望者が多かった。ガードの堅い聖王家より、新しいブルック王国の方に食い込もうと狙っているのだ。

それを校長がさばいた。結果は、例えば、アレクサンドル殿下については、トップの入場者とし、その相手は慣例通りダンス部の部長が踊る。あとはこの星の有力者の序列通りという、皆が納得せざるを得ない順当なものだった。なお、チアキ王女については、ダンス・パーティーは欠席の予定と父兄・来賓筋には伝えられていた。

そう言う事情からも、やはり、少女たちにとって、今日のダンス・パーティーは大人の世界への入り口だった。

「そう言えば、チアキちゃんの姿が見えないわね。」

茉莉香が言った。

「チアキちゃんなら、ダンスの始まる前に、『パレード』に出かけて行ったよ。」

ウルストラが答えた。

「ええ！『パレード』？」

「彼に学校を案内するんだって、言ってた。」

「ああ・・・そういうこと・・・。」

やっぱり、チアキちゃん、『パレード』をやったかったんだ。



素直にそう言えばいいのに……。」

茉莉香は、そう言つて微笑んだ。

ダンスは、休憩なしで次々に進んでいった。

パーティも終盤になって、ようやく、茉莉香が、ギルバートと踊る順番が回つてきた。茉莉香さん、ようやくあなたと踊れますね。うれしいです。

早く順番が回つてこないかなあと、遠くから眺めていたんですが、

やはり近くで見ても、そのドレスやアクセサリーがとてもよくお似合いですね。

茉莉香さんは、もう女子高生ではなく、立派な貴婦人の品格がとおりですよ。」

「いやあ……。そんなに誉めて頂くなつて……。それに、このアクセサリーはみんな借りものなんですけどね。」

茉莉香は、少し頬を赤くして照れた。

「でも、あなた自身の気品は借り物ではないでしょう……。」

それにしても、白鳳女学院の卒業記念パーティはすごいですね。」

「いやあ。私もびつくりです。」

特に、今回は、女王陛下や皆さんが来られたので、今までになく派手になったそうです。」

「私も、アレクサンドル殿下まで出席されると聞いたときは、驚きましたよ。」

「そうですね。」

「そう言えば、今日はギルバートさんも大忙しでしたね。大勢の女の子と踊っておられましたね。」

「いかがでしたか？」

茉莉香は、すこし意地悪そうな微笑みを浮かべて聞いた。

「ええ？ 見ていらしたのですかあ？」

「参ったなあ。」

実はねえ、私はこういうパーティに出席するのは、初めてなんです。

だから、その話を聞きつけて、母や父のところ、私とダンスのペアを組んで欲しいという話がずいぶん寄せられたようですよ。」

「やつぱり、モーガン家ですね。」

「まあ、礼を失しない程度のこととは……。」

でも、茉莉香さん。私が今日、このパーティに出席したのは、貴方からご招待いただいたからですよ。ほかの人からのお誘いなら、お断りしていましたよ。」

「そう言つて、ギルバートが茉莉香を見つめたので、茉莉香はまた少し頬を赤くして、黙つてうつむいた。」

茉莉香は、自分の胸の鼓動が、いつもより激しくなつたような気がした。

曲が変わり、茉莉香は、次々とブルック王国の三王子と踊った。

それまで、三人とも、この星のお嬢様たちに大歓迎され、楽しそうに踊っていた。

彼等と踊ってみて、茉莉香は驚いた。ちよつと会わない間に、もう三人とも、踊りが上手で、立ち振る舞いやマナーも洗練されて、どこから見ても本物の貴公子になっていたのだ。

どうりで、名家のお嬢様や父兄たちから、大歓迎されるはずだ。

「ダンスが、本当にお上手なんですね。」

茉莉香が言った。

「いやいや、茉莉香さんと踊るんだからと思って、私たち、一生懸命、練習したんですよ。

茉莉香さんの方こそ、アネキが無理やり頼み込んだのにもかかわらず、快く引き受けて頂いて、本当にありがとうございます。ハハハ」

長男のジョージ王子が礼を言った。

その次に、茉莉香が踊る相手は、アレクサンドル王子だった。

「やつと、茉莉香さんと踊れますね。」

長かったですよ、貴方のところまで来るには・・・。」

王子は、茉莉香と組んで踊りながら、他の人に聞こえないように小声で言つて、茉莉香の目を見つめた。

『だめですよ、アレックス。王子様が、そんなことをおっしゃっては……』

それに、貴方も、カトリーヌや、サーシャとか、この星の名門のお嬢様たちと、楽しそうに踊っていらしたではないですか。』

茉莉香は、そう言つて、軽く受け流そうと思つた時に、自分の変調に気が付いた。声が出ないのだ。

しかも、ものすごく緊張し、胸の鼓動が激しくなっている。

そして、茉莉香の頭には、いろんな思いが浮かんで、すぐに消えた。

『殿下が、他家のお嬢様と楽しそうに踊っていたのを見て、私がスネていると思われたら困るなあ……。そんな関係でもないんだし……』

危ない、危ない！

とにかく、私、もう高校卒業だと言うのに、またまた、オバカで、わがままな女子高生を演じるどころだったわ。』

また、こうも思つた。

『これからは、船長として、彼に接する以上、もうちよつと堂々と大人の淑女らしい振る舞いをして、イトコ見せない、イケナイわよねえ……』

『なんだかんだと言つても、私にも、弁天丸の船長としてのイメージと言うものがあるのよね……』

いろいろな思いが頭の中をめぐり、茉莉香は考えがまとまらなくなってきた。

決断の速さが茉莉香のトリエ（取得）なのだが、今回はそれがまったく発揮できなかった。

『なぜ、いつものように、パツと答えが浮かんでこないんだろう？』

茉莉香は焦った。そして、こうも思った。

『こんなことなら、グリユーエルにもっと聞いておけばよかったなあ。』

罰ゲームの時に帝都でのお買い物や食事のマナーは教えてもらったのだけどねえ  
…。』

茉莉香は、すこし後悔した。

辺境惑星の女子高生と、海賊船の船長と、帝国軍人としてのわずかな経験しかない自分には、王族も出席するような華やかなパーティでの大人の淑女らしく振る舞うにはどうすれば良いか、分かっているわけもないと思ったからだ。

クリスティア王女からは、チャキと一緒に王宮のパーティにも誘われたこともあったが、弁天丸の仕事が忙しいのを理由に断ったこともあった。今思えば、経験を積む良いチャンスだった。

アレクサンドル王子は、踊りながら次々と優しい言葉をかけてくれるのだが、茉莉香は、大人の女性、つまり淑女として、どう振る舞って良いか分からず、笑顔が曇り、言

葉も途切れ、下を向き勝ちになった。

やがて、曲が終わり、いよいよ最後の一曲、ラストダンスということになった。この一曲は予めペアが決まっていなかったので、会場内はざわついた雰囲気になっている。

「ラストダンスも、ぜひ茉莉香さんと踊りたかったのですが……。」

ご気分がすぐれないようですね。

あちらに座って、飲み物でも頂きましょう。」

アレクサンドル王子に促されて、茉莉香は踊る人々の輪から出て、ホールの端のテーブルに座った。

「お嬢様、お飲み物をお持ちしました。」

こちらから頼みもしないのに、待っていましたとばかりに、メイド服を着た小柄な女の子が近づいてきて、茉莉香にソフトドリンクを差し出した。

茉莉香がその子を見ると、黒くて小さい丸型のフレームの眼鏡をかけて、黒髪を三つ編みにしている。

しかし、茉莉香には、その声に聞き覚えがあった。

「まさか、グリユーエル!? そうなの?」

「ウフフフ……。さすがですね、茉莉香さん。」

完璧な変装を見破られましたわね。」

「でも、ありがとう。頂くわよ。

それにしても、その変装は完璧だよ。

一年生の時に二人で中継ステーションに行った時とは大違いだよ。」

そう言つて、茉莉香は微笑みながら、ソフトドリンクを口にした。

「茉莉香、大丈夫？」

ハラマキが近づいてきた。

「どうしたのよ。急に座つてしまつて……。」

チアキがホールに現れ、近づいてきた。もちろん、エドワード・ドリトルが隣にいる。

「いやあ、ちよつとねえ……。」

茉莉香は、あいまいな返事をした。

更に、ギルバートとمامミも、他のヨット部員たちも次々と茉莉香を心配してやつてきた。

そして、少し気分の落ち着いた茉莉香は、自分たちがホール中の注目を集めていることに気が付いた。

自分たちが踊りの輪の中に戻るのを待っているのだ。

なぜなら、ここには主賓のアレクサンドル王子だけでなく、チアキ姫までいるのだから。

茉莉香は、立ち上がって、アレクサンドル王子に近づいて、小声で言った。

「私、まだ気分が良くないので、ダンスは遠慮します。」

それで、アレックス。ここにいるハラマキ、じゃない、原田真紀子をダンスに誘って下さい。

先ほどから、みなさん、お待ちかねですから・・・。」

「はい。わかりましたよ、茉莉香さん。では、あとで。」

アレクサンドル王子もその場の空気は読めていたようであり、すぐに了解した。

「では、原田さん、私と踊って頂けますでしょうか？」

「ハ、ハ、ハイ。喜んで。」

というか、あのう、私、原田真紀子と申します。初めまして、殿下。

ヨット部では『ハラマキ』と呼ばれています。

よろしければ、そう呼んでください。」

「そうでしたね。初対面のごあいさつもまだでしたね。」

初めまして。アレクサンドル・ホワイトローズです。アレックスとお呼びください。」

「では、まいりましょう。ハラマキさん。」

「はい。」

ハラマキは、嬉しそうに肯いて、二人は踊る人々の輪の中に入って行った。



「ほら、チアキちゃんたちもどうぞ。」

茉莉香が言った。

それに応じて、チアキがエドワードを見つめた。

もちろん、彼が踊りに誘い、二人も踊る人々の輪の中に入って行った。

「ギルバートさんも、そう言う訳で、ママをダンスに誘ってください。」

「わかりましたよ。では、ママさん、お願いします。」

二人も、人々の輪の中に入って行った。続いて他のヨット部員も戻って行った。

それを合図に、ラストダンスの曲が演奏され始めた。

みんなが踊り出すのを見ながら、茉莉香は隣のグリユーエルに言った。

「ねえ。グリユーエル。」

さつきから、私が踊っているところを見てたの？」

「はい、そうです。」

「ゴメンなさい、黙って見ていました。」

「いやあ、そんなことは良いの……。」

それより、私を見ていて、何か気が付いたかしら？」

今日の私、なにか、変だったでしょ？」

「そうですかあ……。特に気が付きませんでしたけど……。」

グリユーエルは、言葉を選んで答えた。

「あのねえ、グリユーエル。」

帝都に行ったら、私にも、マナーとか言葉づかいとか、大人の女性として必要なことをもつと教えてね。お願い。」

「はい。喜んで。」

「ありがとう。」

私ね、思ったんだ。

今、私の持っているものだけじゃ、これからは、足りないって思ったんだ。

アレックスとギルバートの二人が、私の弁天丸に乗るようになるよね……。

私、もっと、大人にならないと……。」

グリユーエルは、茉莉香が、ギルバートだけでなく、アレクサンドル王子まで弁天丸に乗ることが決まっているかのごとく、話していることに少し驚いた。

しかし、その気持ちを表すことなく、いつものように答えた。

「私で出来る事でしたら、なんでもしますわ。」

だって、茉莉香さんのためですもの。」

グリユーエルは、茉莉香がこれほど迷うのは、知識や経験が不足しているからではないという自分の見立てを、まだ茉莉香に話さないことにした。

## 第二十八章 出航の日

28—1 加藤茉莉香邸（新奥浜市・海明星）

卒業式の次の日も、空は青く、少し肌寒いが、空気はさすがに良かった。

この日、茉莉香は、自宅を朝早く出て、私掠船免状に関する住所変更の手続きと帝都へ引越す挨拶のため、海明星行政府の關係するお役所を回った。

三年前、初めて海賊船の船長になるときには、ミーサに連れられて、訳も分からず、いろいろな所に引越張りまわされたという記憶しか残っていない。

しかし、今日は、警備の女性兵士は随行しているが、ミーサはいない。お役所は、自分一人で回っている。しかも、行先の部署も、日頃いろいろな関係で接触があり、担当者も、顔なじみになった人が多い。

やはり、この三年間の違いは大きい。だから、茉莉香の姿を見つけると、役所の人たちから、声がかかり、みんなが笑顔を向けてくる。

しかも、どこに行っても、茉莉香の扱いが違う。お役所にしては、最上級の対応と言ってもよかった。

それには、海明星行政府なりの理由、思惑があった。

そもそも、茉莉香は、帝国海賊の免許をもらった時に、海明星政府の私掠船免許を返上しようとした。

しかし、行政府は免許の返上を認めなかった。私掠船免許という彼女との唯一のつながりを維持しようとしたのである。

しかも、私掠船免許を維持してもらうため、免許には、帝国海賊としての弁天丸の行動に一切制約をつけず、帝国海賊としてのいかなる行動も、私掠船免許の免許条件に適合した行為とみなすという破格の条件までつけられた。

なぜなら、行政府にとって、加藤茉莉香が、帝国海賊の免許をもらい、キャプテンになったこと以上に、たった17歳で帝国軍の大佐、しかも第一艦隊の司令官である第一王女の副官という、公式の世界で王族並みの破格の処遇を受けたことが、衝撃だったからである。第一王女は、銀河帝国の第一順位の王位継承者であるため、茉莉香は、今後、銀河帝国の中枢への影響力を強めていくのは間違いないと思われるからだ。

このため、彼女とのつながりを維持することは海明星にとって大きな利益になると考えたからだ。

そもそも、銀河帝国にとって、海明星は辺境の星のひとつに過ぎず、これまでまったく注目する理由もない存在に過ぎなかった。だから、これを機会に、良い意味で海明星に関心を持ってもらいたかったのである。

「いやあ、キャプテン茉莉香、ご卒業おめでとうございます。」

「いよいよ、帝都へ上京されるのですね。」

「はい。これからもよろしくお願いします。」

「今日は、例のコツキー・シヤネルの軍服姿ですねえ。」

実際にお召しになってお姿を、初めて拝見しますが、良くお似合いですねえ。」

「いやあ、そう言われると、恥ずかしいですねえ。」

「帝都へ行つても、私たちのこと、忘れないでくださいよ。」

「もちろんです。この星は私の生まれ故郷ですからね。」

あちこちから、茉莉香に声がかかり、茉莉香が丁寧に挨拶をした。

この日、茉莉香は帝国軍の大佐の制服を着て、お役所を回つたのだ。

女子高の制服は、もう着られない。四月からは女子大生になるが、女子大は私服で制服がない。だからといって、いきなりキャリア・ウーマン風のミニスカ&スーツ姿で行くのも、恥ずかしかつた。もちろん海賊船の船長服も、イメージに合わないと思われた。

結局、警備隊の服を見て、自分も帝国軍の制服を着ていくことにしたのだ。

その日の午後になって、茉莉香は自宅に帰つた。

明日の出発の用意をしていると、ブルック王国のバレンシア王女から電話が入つた。

「いやあ。茉莉香、昨日はありがとう。」

弟たちも、『茉莉香さんと踊った』と、大喜びだったよ。

それに、弟たちは、海明星の人たちからも、ずいぶん歓迎されたようだね。」

「ありがとうございます。」

「ところで、なあ、茉莉香。」

新しい弁天丸の話も聞いたよ。弟たちも新しい弁天丸に乗りたがっていたよ。」

少し真剣な表情で、バレンシア王女は話し始めた。

「その話も聞いた上で、もう一度、貴方に確かめたいのだけど……。」

というのも、我王国は出来たばかりで、今がその基礎を固める大切な時期だ。

この時期に、弟の一人と言えども、国を出て船乗りになるようなことは、認めたくない。

これは、私だけでなく、父、国王も同じ意見だ。

そこで、茉莉香。あなた、ブルック王国に来る気はないか？

弁天丸の船長はやめなくても良い。

こちらに腰を落ち着けて、王国のために働いてくれないか。

もし、お前さえよければ、弟たちの誰かと結婚して欲しい。お前の夫が次期国王、お前がその妃だ。二人で王国を継いでほしい。これは父の望みでもある。

私たちはそう思っている。

そこで、お前の気持ちを聞かせてほしいんだが……。」

「王女様、せつかくですが、私の気持ちは既にお聞きになつているとおりです。

私は、船乗りとして生きていきたいと思ひます。」

「そうか……。」

「ごめんなさい。」

それに、もう約束したんです。」

「ええ!? 婚約したのか?」

「いえ、いえ……そっちの方じゃなくて……。ナハハ……」

茉莉香は、顔を赤くした。

「じゃあ、どういう『約束』なんだ?」

「私、チアキちゃんや女王陛下と約束したんです。」

「これからまずと、チアキちゃんのそばにいるつて。」

「……そうか。わかった。」

きつと、そうだろうと思つていたよ。

私の方こそ、茉莉香が言いにくいことを聞いて、すまなかつたね。

弟たちにも、父が自分の意向を伝えなくてはならないから、その前に、私からあなた

に直接確かめたかったんだ。

だから、弟たちがあなたに贈った『白百合』の話は、たぶん、これでおしまいだ。」

「ごめんなさい。ご期待に応えられなくて。」

「気にすることはないよ。」

バレンシア王女は、すつきりとした表情で言った。

「ところで、茉莉香。4月からよろしくね。」

「ええ!?! 何のことですか?」

「4月から、私とクリスティアも、帝国女学院の女子大生になることにしたのさ。」

「ええくくく!!」

「あはは……。そんなに驚くことはないだろう。」

「はあ、その訳をお聞きしてもよろしいですか?」

「いやあ……。話は、昨年末の大みそかの夜のことだ。」

私は仕事を終えて、夜遅くに自分の部屋で、一人で酒を飲んでいたんだ。

それで、ちよつと誰かと話したくなって、クリスティアのヤツに超光速通信で電話したのさ。

そうしたら、アイツも王宮の自分の部屋で、仕事を終わった後、一人で酒を飲んでたのさ。」



「ええ！ そんなことがあったんですか？」

「ああ。」

それで、お互いの近況を話していくうちに、

『こんな夜に、こんな良い女が、一人で酒を飲んでいるのは、なぜか？』

という話になってなあ……。

「ハア……。」

「その原因について、あれこれと二人で話していると、

クリスティアが、お前たちの女子高、白鳳女学院に女性教師として潜入したときの話を始めたんだ。

あの時は、本当に楽しかったと言っていたよ。

特に、女子高生の振る舞いを間近で見て、

『なるほど、女の子と言うものは、こういうものか。』

と、わかったと言うのだ。」

「どういう意味ですか？」

「いやあ、お前も知つての通り、私もクリスティアも、家庭の事情で子供の頃から大人に交じって働いて、学校には行かず、教育はすべて通信教育だったんだよ。」

「はい、伺っています。」

「だから、私たちがこうなったのは、女子高にも女子大にも行っていないため『女子力』が足りないからだと分かったんだ。」

「はあ……。」

「あのなあ。クリスティアがこう言ったんだ。」

『オトコに関して、自分は、妹のチアキに差をつけられている。』

これは、女子力の違いが原因だ。』

それに、彼女は、その女子力については、先日、チアキの船に乗って、チアキの寝室を見た時に、自分との違いに、改めて衝撃を受けたそうだ。

チアキの部屋は、女の子らしい、可愛いものが所狭しと並び、いかにもおとぎ話に出てくる御姫様の部屋のような感じだったそうだ。

それに比べれば、機動空母グランドマザーの自分の部屋は、帝国軍参謀本部の執務室のようだったと思う。

そして、クリスティアが言うのには、

『チアキの女子力は、あいつが小さい頃から、お嬢様の通う学校に通学して大切に育てられたから、身に着いたのだと思う。』

それに対して、自分は子供の頃から、孤児院で大人に交じって働き、今は銀河帝国で男たちに交じって母上に代わって働いている。

だから、女子力が身に着かないのだ。』と。

まあ、この点は、私も同じような育ちでなあ、大いに共感するところがあるんだ。

私も、子供の頃から、父や、元海賊のヤツラと一緒に、惑星開発の仕事をしていたからな。

私には、『お嬢様』扱いされた記憶はないよ。

むしろ、私は、女の子だからとバカにされまいと頑張ってきたから、男以上に乱暴に振る舞ってきたさ。自慢じゃないが。」

バレンシア王女は、自分の思いを一気に語った。

「はあ。クリス様のものすごい働きぶりは、私も知っていますが、王女様も同じお立場だったんですね……。」

「その点、お前は、海賊の娘と言っても、海賊稼業と関係のないところで育ち、お嬢様学校に通っていたわけだろう。」

だから、うちの弟たちが気に入ったわけだ。」

「はああ……。」

茉莉香は、余計な反論はせずに、話の聞き役に徹することにした。

「そこで、だなあ……、」

私たちが学校に通うとしても、さすがにこの歳では女子高生は無理だろうが、女子大

生なら、まだ十分イケるだろうと思ったのさ。

幸い、グリユーエルが女子大に入ってから、惑星開発学を勉強したいと言うので、特別ゼミナール、それも大学院レベルの最高級のを新たに開設すると言う話を、クリステリアから聞いたんだ。

やつぱり、三年も飛び級する天才少女は、言うことが違うねえ。

それに、グリユーエルの意向を知った女王陛下から教授の人選に指示が出ていて、銀河系中の各分野から本当にすごい人たちが集められているそうさ。

そこで、そのテーマなら私も興味があるし、そのゼミナールで学ぶと言う名目で、大学院生として、帝国女学院に入ればいいと思ったのさ。

結局、その夜のうちに、

『婚活の為だと言って、面倒な仕事は親に押し返して時間を作り、二人で女子大生になる』

ということ、意見が一致したのさ。」

「そうなんですか。では、こちらこそ、よろしくお願いします。

ナハハハ・・・。」

茉莉香は、そう言って愛想笑いするのが精いっぱいだった。

茉莉香は、酔っぱらってそんな大切なことを決めて良いのかと思った。

いや、そもそも、女子大生になりさえすれば『女子力』が身について、問題がすべて解決するという「二人の意見の一致」自体が、大きな間違いなのだが・・・。

しかし、これまで忙しく働いてきた二人には、もつとゆつくりと過ごす時間が必要なことは間違いではないと、茉莉香も思った。

茉莉香は、電話を終えた後、明日の用意を再開すると、しばらくして、また電話が掛かってきた。

今度は、ヨット部の先輩、ジェニー・ドリトルからだった。

「茉莉香さん、お久しぶり。」

この間の『最後の女子高生海賊』の興業は、無理なスケジュールだったのに、引き受けてもらって、ありがとう。お礼を言うわ。

お客さんからは、大好評だったわよ。」

彼女は、旅行会社フェアリー・ジェーンの社長として、電話してきたようである。

「ありがとうございます。」

プリンセス・アプリコット号のハーレー船長も付き合いの長いお得意様なので、ちようどよかったですよ。」

「そうね。」

それから、お客様からは、『女子大生海賊の初舞台は、いつか』という問い合わせが、

早くもきているわよ。

弁天丸のスケジュールが詰まっているのは、承知しているけど、そこを何とかしても  
らえないかしら？

船は、同じ、プリンセス・アプリコット号を使うつもりなんだけど・・・。」

「はあ、そういうことなら、スケジュールのどこに挟めるか、ちよつと相談してみます  
が・・・。」

「ありがとう。持つべきものは、ヨット部の後輩ね。」

ところで、茉莉香さん、いよいよ春からはチアキちゃんと帝国女学院へ入学ね。

貴方は、女子大でもチアキちゃんのそばに居るんだから、これからも、チアキちゃん  
とエドのこと、応援してあげてね。

お願いね。」

「もちろんです。」

それに、あの二人、白鳳女学園の卒業式でも、一緒に女王陛下に挨拶していたし、い  
い感じに進んでますよ。

結果オーライです。」

「そうね。ほんとに結果オーライね。良かったわ。」

それに、結果オーライは、ヒュー&ドリトル社も同じなのよ。

貴方も巻き込んでしまった『次期社長争い』は、もう終戦。まったく平和そのものよ。なんと说着ても、エドが聖王家の御姫様と婚約、結婚することになれば、彼を将来の社長、会長にしない訳にはいかないでしょう。

おまけに、クリスティア王女はあの性格でしょう。

アイツは、『絶対に』、いえ、『間違つても、結婚できない』と、私も断言できるから、エドとチアキちゃんの子供が王位を継ぐこともありうるのよ。

だから、私たちも、あの二人を大事にしない訳にはいかないのよ。

おかげで、私も自分の望み通りの人生を送れるし、叔父のロバートは、チアキちゃんも乗っていた弁天丸を砲撃したことが響いて、刑務所から出てきても会社に復帰できず、引退でしょうね。」

「そうですかあ。平和になって、よかったですねえ。」

「ところで、茉莉香さん、あなたが帝都の女子大生になると、もうモテモテで、大学生の男の子や大人たちから、いろんなお誘いが来るわよ。パパラッチも盗撮を狙っているわ。」

注意してね。

なんとつて、弁天丸船長は、人気商売なんですからね。

まあ、チアキちゃんと一緒にいると、そこは王家がガードしてくれと思うけど。」

「はあ．．．でも、私、女子大生になったら、ボーイ・フレンドを作ろうと思っているとか、そんな気はありませんから、心配ないかと．．．。」

「あなたに『そんな気』はなくても、向こうにはあるのよ。そういうものよ、男つて、気をつけなさい。」

ジェニーは厳しい口調で言った。

「はあ．．．。」

「まあ、その点は、ガールフレンドの方が安心よね。」

あなたさえ良ければ、紹介するけどね．．．。」

ジェニーは、茉莉香の顔を覗き込んだ。

「．．．．．。」

「．．．．．。」

二人の間にしばらく沈黙が支配した。

やがて、ジェニーが言った。

「オホホホ．．．、冗談よ、冗談。」

ではまた、帝都でお会いしましょう。」

そう言つて、ジェニーは電話を切つた。

『あれは、冗談ではなく、本気だったかなあ。はあくあく』



茉莉香は、そう思って、ため息をついた。

茉莉香は、電話を終えた後、フェアリー・ジエーン社からの仕事の話をミーサに伝えた。そして、一休みしていると、また電話が掛かってきた。

今度の電話は、帝国軍の秘話回線を使って、クリステイア王女からだった。

「いよつ、茉莉香。卒業おめでとう。」

「いよいよ帝都に来てくれるんだね。」

「はい。明日、こちらを出発しますから、ミルクィウエイなら、明日中には帝都に着きます。」

「そうかい。」

それなら、直接会って話した方が、良いなあ。

こちらに着いたら、一度、私のところに顔を出してくれないか。

弁天丸船長としてのあなたに、頼みたいことがあるんだ。」

「はい、どのような御用でしょうか。」

今、弁天丸のスケジュールが立て込んでいまして、……。

お差支えなければ、少しでも教えて頂けると、スケジュール調整に早く取り掛かれると思うのですが……。」

「まあ、具体的なスケジュールを立てるのはこれからだが、私のプランを具体化する手伝

いをしてほしいんだ。」

「その『プラン』って、何ですか？ まさか婚約式とか、結婚式とか……。」

「お前、私をからかっているのかあ？」

チアキと違って、そう言う可能性のある話が、まったく無いから、女子大生になることにしたんじゃないか……。フフフ……。」

「いやあ、お許しください。」

バレンシア様からいろいろ話を伺っていたもので、そっちの方のお話しかと……。」「アイツは、茉莉香にダンスパーティーのお礼を言いたいと話していたが、結局、そんな話ばかりしていたのかあ。本当にしようがないヤツだなあ。」

でも、私は、アイツと違って、遊ぶためだけに女子大に行くわけじゃないよ。」

クリスティア王女は、少し強がって言った。

「大学院の『惑星開発学』の特別ゼミナールが準備されているのは聞いているかい？

あれは、グリユーエルのためだけではないのだ。私もためでもあるんだよ。」

私は、そこで学んだ成果を生かして、一つのプランを作ろうと思っているんだ。」

「何か、新しい惑星開発のプランをお考えですか？」

「茉莉香。私が、何を考えているか、当ててみる。」

お前の『勘』の良いところを見せてもらおう。」

まずは、場所だね。銀河の何処だと思うかね。」

そう言われて、茉莉香は考えた。

今、銀河の辺境地域は、開発ブームになっているという。

その辺境地域と言えば、王女ならば、恩返しのために自分の育ったランバート星系の開発を考えても不思議ではない。

でも、その答えは、平凡すぎる。

王女の口ぶりでは、何か、もつと、人を驚かすような壮大なことを考えているはずだ。なにせ、彼女は、銀河系を支配する強大な銀河帝国の王位継承者なのだから。

そこまで考えて、茉莉香は『方舟（はこぶね）』という言葉を出した。

その言葉を、茉莉香は練習航海の時に聞いた。それは、古代宗教の神話に出てくる、地上の生き物を大洪水から救った船のことだという。

『そうだ。あの時のようにグランドマザーのことを方舟と呼ぶなら、王女様は方舟を作らなければならないかもしれない。』

でも、今時、大規模な移民船が必要なことと言えば……『

茉莉香は答えがすぐに浮かばなかった。

『ミルキーウェイの建設により、宇宙移民による大航海時代は終わりを告げるはずではなかったか？』

だから、もう、方舟のような大規模な移民船は必要ないはず……。」  
そう考えた時に、茉莉香は、一つのことばが浮かんできた。

「王女様、場所は銀河中心の紡錘状星雲、つまり核恒星系ですね。」

「ほう、茉莉香はいつも面白いことを言うなあ。」

その理由を聞かせてくれ。」

王女は、少し得意げな表情で言った。

「『遷都』をお考えだから、でしょうか？」

「ハハハ……。お前は面白いことを言うなあ、いつも。」

その発想は、どうやって思いついたんだ。」

王女は、笑顔で言った。

「はあ、練習航海の時に、ジェニファー・ブラウンさんが、機動空母グランドマザーのことを、『約束の方舟』とおっしゃっていたのを、思い出したからです。」

ジェニファーさんもおっしゃっていたように、銀河帝国は、赤色巨星レッドクリスタルからの避難体制を常時確保するという負担を負っています。これは銀河帝国の宿命です。」

そして、その宿命から逃れるためには、遷都が一番抜本的な対策だと思ったからです。」

「なるほど、自分で考えて、その結論にたどり着いたのか。

さすがだな、茉莉香。」

「ええ!? やっぱり本当に遷都をお考えなんですか?」

「そうだ。」

前から、母上は、私が銀河帝国の王となった時に何をするか、ライフワークを今から考えておくと、私に言っておられる。

遷都は、その問いに対する私の答えだ。

母上の場合、アンドロメダ大航海がライフワークだ。

そのために安心して旅立つことができる条件を整えようと、銀河の辺境宇宙の統一と銀河の中心である聖王家の再統一を図ろうと考えられた。

その結果、宇宙ファイアは宇宙開拓時代からの『宿命』から逃れることができた。

では、私は王になって何をライフワークとするか?

そこで、考えたのが、お前の言うとおりに、銀河帝国をその宿命から解放することさ。」

「なるほど。でも、遷都なら、昔から様々なプランが考えられたはずですよね。」

「そうだ。」

でも、どれ一つとして、実現しなかった。

なぜだと思うかな？」

「うーくん、費用の問題かなあ、そのために税金が重くなるのは困るし……。」

「遷都の費用なんて、戦争に比べれば安いものだと思うよ。私は。」

「ナハハ……。」

では、なんでしようか？

可住惑星の資源の豊かさや惑星の自然環境の良さかなあ……。」

「今は、宇宙開拓時代と違うぞ、茉莉香。」

惑星の天然資源の豊富さは、帝都に必要な条件ではない。

ましてや、惑星の環境改造なんて、今の科学では困難なことではないだろう……。」

「ナハハ……そうですね。」

「ヒントだ。お前が初めて帝都に来た時に、何を思ったか、思い出してください。」

「ええ!? 私が、ですかあ……。」

「う……ん、

そうかあ、星空かあ。

チアキちゃんと一緒に、レッドクリスタル星系の星空、銀河のネットワークスを見て、感動したんです。

「ここが、銀河の中心。私たち、銀河の中心に来たんだって。」

「そうですね。」

「そうだ。」

新しい帝都には、『ここが銀河系宇宙の中心、銀河帝国の首都だ』と、人々が誇りにする何かが必要だ。

星空が一番分かり易いが、必ずしも、それに限らないだろう。

今までのプランは、経済性など、ツマラナイことに固執して、そういう感動がないんだ。」

「そうですね。」

「それで、私がどうすれば、お役に立てるんでしょうか。」

「ああ、私と一緒に、ここが宇宙の中心だと言える星を弁天丸で探してほしい。」

実は、遷都の候補となる母星はきわめて多いのだよ。

つまり、現在の科学技術を前提にすれば、移転費用の経済性、宇宙航路の安全性、寿命の長いスペクトルG型恒星系であることなど、誰でも考えつく帝都の条件を備えた恒星は、核恒星系では、ありふれた星なんだ。

その中から、『これこそは宇宙の中心』と言う星を探したいんだ。

期待しているぞ、茉莉香。」

「はい。そういう事でしたら、喜んで。」

「ところで、茉莉香。

先ほどの女子大の話だが、せっかく女子大に行くんだから、女子大生としていろいろ『見聞』を広めたいと思っっているんだ。

そう言う希望を、この間、ジェニー・ドリトルと話した際に相談してみたら、アイツが私たちにふさわしい『友達』を紹介すると言ってくれたんだ。

それで、私とバレンシアだけじゃ息苦しくなるといけないので、茉莉香も一緒に来てくれると、集まりも華やかになって私も楽しいと思うんだ。

その時は誘うからな。よろしく。」

「それは、大人の男性方との『集まり』と言うことですか……。」

「そうだけど。何か?」

そういえば、ジェニーは、

『茉莉香は、同じ年頃の男の子の方に興味があるはずだから、こういうお誘いは嫌がるのではないか』

と心配していたので、私は、

『茉莉香は同じ年頃の男の子には興味が無さそうだから、大丈夫。』

と言っておいたけど……。」

「だからですね……。」



茉莉香は、ジェニーがガールフレンドを紹介してくれると言う話をしたことを王女に話した。もちろん、ジェニーの趣味は話さなかった。

「アハハハ……」。

お前は、高校でも女子に大人気だったから、そう言う傾向かと、誤解されたのか……。アハハハ。

私は、『茉莉香は、オジサン趣味、つまり歳の離れた男性の方を好むから、心配無用。』と言ったつもりだったのだけどね。

ハハハ……ゴメン、ゴメン……」。

クリス王女は大笑いした。

「ナハハハ……」。

それ、ちよつとひどくないですかあ……」。

私だって、普通の女の子ですよ、変わった趣味はありませんよ。」

「そうかい？」

16才から海賊船弁天丸の船長の務めを立派に果たす女の子は、『普通の女の子』じゃないと思うけどねえ……。ハハハ……」。

「それにしても、王女様は、ジェニー先輩とお親しいのですね。」

「ああ、彼女は、チアキとエドワードのことを心配してくれて、いろいろ話をするよう

になつたんだ。

まあ、彼女にとつても、政略結婚の圧力が減つて気が楽になるんだろうね。

しかし、アイツの、あのキツイ性格じゃ、まあ普通の結婚は無理だろう。

しかも、アノ性格が知れ渡つているので、子供の頃と違つて、今となつては政略結婚の話をもとめることすら難しいと、私も思うのだけどねえ……。ハハハ……。」「

「皆さんは、ほんとに仲が良いんですねえ。」

「ええ!」

仲が良い訳ないだろう。あんなヤツらと私が、……。」「

そう言いながらも、クリス王女は微笑んでいた。

茉莉香は、電話で三人それぞれの考えを知つて、帝都で自分の進む道が少し見えてきたように思った。自分のことを『誤解』しているところもあるが、三人が三人なりに、自分に好意を寄せてくれているからだ。

それよりも、茉莉香は、グリューエルが大学に入って何を勉強するか、もうはつきりとビジョンを持つていることを知つて、驚いた。

そして、こう考えた。

『グリューエルの希望する特別ゼミナールは、女王陛下が帝国海賊の長老たちの話を聞いて勉強してきたのと、ちよつと似ているよね。』

これが、王様になるための教育、帝王学というものかなあ。

やっぱり、グリユーエルは、期待されているんだろなあ。」

しかし、この時の茉莉香は、海賊たちの陰謀を知らなかった。

グリユーエルが、惑星開発学を学びたいと言うのも、海賊たちの誘いに乗る意思があることをほのめかしていることもわからなかった。

「それに比べて、私は女子大で何を勉強したいのだろうか……。

私も、しつかりしないと……。」

茉莉香は、大人の世界という『広い海』に出て行く不安を感じたが、すぐにその不安を追い払った。

「でも、くよくよしないのが、私のトリエだものね。

さあ、明日は、出発の日。

加藤茉莉香、行きまゝくす。」

その夜、茉莉香は、夕食を済ますと、早々と床に就いた。

28—2 加藤茉莉香邸

翌日も快晴だった。

今日は、茉莉香が海明星を出発する日である。

「大佐、出発の準備は出来ております。」

荷物も積みましたし、出迎えの車も外に待っていますよ。」

警備隊長のジェーンが茉莉香に言った。

今日の茉莉香は、帝国軍の制服姿だった。

「茉莉香。いよいよ出発だね。見送るよ。」

母の梨理香が、そう言つて、玄関ドアに向かつて歩き始めた時だった。

ピンポーン、ピンポーン。

ドアフォンが鳴った。

応対に出た警備隊の女性が、少し困惑して茉莉香のところへ来た。

「お客様はだれ？」

茉莉香が聞いた。

「あの一、お客様というか、……。」

ドアのカメラで顔を拝見すると、大佐のお父様ではないかと……。」

警備隊の隊員が、すこし自信が無さそうに答えた。

もちろん、外周の警備を通り抜けて、ドアのところまでたどり着く以上、不審者ではないはずなのだが、意外な人物の登場に驚いているようだった。

「私が出ます。」

茉莉香が答えると、背後から声がした。

「あのロクデナシだったら、家に入れるんじゃないよ。追い返せ、茉莉香。」  
梨理香が、すこし尖った口調で言った。

そして、彼女はリビングの奥に引っ込んでしまった。

茉莉香は、ドアまで行って、モニターに映った男性の顔を見た。

自分と同じ、赤毛、碧眼、そしてその目鼻立ちは、どこかで見たような形で、なつかしいような……。

『この人は、「鉄の髭」としては常に仮面をかぶり、素顔を茉莉香に見せたことは無かったが、素顔はこうだったのかあ。』

でも、今は、仮面をつけていないのは、なぜだろうか……。』

茉莉香は、そんなことを考えながら、ドアホンの呼び出しに返事をした。

「はーい。どなた様でしょうか。」

「茉莉香かい。」

やっぱり、間に合ったねえ。よかった。

加藤権左衛門だ。」

その声を聞いて、茉莉香は、少し緊張して、ドアを開けた。

そこに、赤毛、碧眼、そしてどこか懐かしい顔立ち、つまり自分によく似た顔立ちの

男性が立っていた。

「お、お、お父さんですか？」

「そうだよ。茉莉香。……」

少しの間、二人は黙って見つめ合っていた。

そして、ゴンザエモンが口を開いた。

「いやあ。なんとか、間に合ったね。お前を見送ろうと思つてね。

今日が、帝都への出発の日なんだろう。

それから、高校卒業、おめでとう。」

ゴンザエモンは、茉莉香に向かって静かに言った。

「ありがとうございます。」

茉莉香は、そう答えるのが精いっぱいだった。

「その帝国軍の制服姿をこの目で見るのは初めてだけれど、本当にお前は立派になったね。お前は、私の誇りだよ。」

ゴンザエモンが言った。

茉莉香が、すこし顔を赤くして、その声に応えようとした時、

「茉莉香。早く追い返せ。ゼツタイに家に入れるな。」

遠くから、梨理香の声がまた聞こえた。

もちろん、自分から出てきて、玄関のドアを閉める気はないようだ。

こういう時の梨理香は、普段の豪放磊落な行動とは違って、どこか可愛げがある。

その声を聞いて、茉莉香は微笑んだ。

ゴンザエモンも微笑み返した。

そして、茉莉香は、ゴンザエモンの後ろから、警備隊の人たちが様子を見ていることに気が付いた。茉莉香が、家から出てくるのを待っていたのだ。

茉莉香の表情から、ゴンザエモンも気が付いたようだ。

「茉莉香、皆さんがお待ちかねだ。

行つてらっしゃい。元気だな。」

ゴンザエモンはそう言つて、横目で家の奥の梨理香がいる方向を見て、そして茉莉香の方を向いて、微笑んだ。

『あとは、まかせなさい。』

そう言っているように、茉莉香には感じられた。

「うん。ありがとう。お父さん。

.....

じゃあ、お母さん、行つてきます。」

茉莉香は、母親に聞こえるように、少し大きな声で言った。

そして、玄関から出て、庭を進み、車の前までたどり着いた。

「茉莉香、元気だなあ。」

電話くらい、よこしなよ。」

後ろから梨理香の声がしたので、茉莉香は振り返った。

玄関の外にでてきた梨理香が、手を振っている。

「お母さん、行つてきまゝす。」

そう言つて、茉莉香も手を振った。

そして、茉莉香が父母二人の様子を見てみると、ゴンザエモンが梨理香に歩み寄つて、並んで茉莉香に手を振つたと思つたその瞬間、梨理香がゴンザエモンの脇腹に肘鉄を食らわせた。

梨理香は、ゴンザエモンの足も踏みつけているようだ。

しかし、二人は何事もなかつたように並んで、茉莉香に向かって笑顔を送り、手を振り続けている。

「フフフ・・・」

では、行つてきまゝす。」

茉莉香は、二人の様子に微笑みながら、最後にあいさつし、警備隊の車に乗った。

目指すは、シャトルの待つ、新奥浜空港である。



青い空は、どこまでも澄み切っていた。

28—3 新奥浜空港（海明星）

茉莉香は、新奥浜空港の出発ロビーに到着した。

すでに白鳳女学院の制服を着た、多くの女の子たちが待っていた。

「うわあ——」。茉莉香様あ——。」

「ステキ——！」

少女たちは、帝国軍の制服姿の茉莉香の姿を見つけると、歓声を上げた。

「どうも——。」

茉莉香は歓迎に答えて、あいさつした。そして、茉莉香は、たちまち大勢の女の子たちに取り囲まれてしまった。

茉莉香は、どの子にも笑顔で対応している。

だから、茉莉香がこの人垣を抜けるのには、ずいぶん時間がかかった。

「茉莉香、遅いよ。待ちくたびれたよ——。」

ハラマキや、リリイが言った。

「ごめん、ごめん。大勢、来てくれたもので……。」

茉莉香の笑顔がはじける。

たちまち、ヨット部員たちが茉莉香を取り囲んだ。

「茉莉香さん、帝都に行っても大活躍されるのを、楽しみにしてますね。」

サーシャが、言った。

「サーシャも、医学部の勉強は大変そうだけど、頑張つてね。」

「茉莉香。帝都に行つて、落ち着いたら連絡するからね。」

いっしょにお買いもの、行こうよ。

それに、帝国女学院にも行つて、大学のテキストとかも買わないといけないしね。」

チアキが言った。

「うん。行こうね。」

それで、チアキちゃんは、いつごろ、帝都に出發するの?」

茉莉香が聞いた。

「いちおう、明日、出發の予定かなあ。」

チアキが、少しあいまいに答えた。

「ねえ、茉莉香。帝都に行つても、仲良くしてね。私との約束、忘れないでね。．．」

ウルスラが、茉莉香の手をしっかりと握つた。

「大丈夫だよ。それより、士官学校の方、頑張つてね。」

茉莉香が答えた。

「うん。がんばる。」

それに士官学校の入学式には、チアキちゃんも来賓で来てくれるそうなんだ。

最初から、心強いよ。」

ウルスラが答えた。

「ええ？ どういうこと？」

茉莉香はチアキに聞いた。

「母さんの随行よ。」

入学式には、帝国軍最高司令官として毎年、母さんが出席するからね。

去年は姉さんが随行したんだけど、今年は私よ。

姉さんは、この春から公務はしないって、言い張っているからね。」

チアキが言った。

「ああ、あの話ね。」

「そう。」

ホント、女子大に行けば女子力が付くって、本気で思っているのよね。

もうくくくそう思い込んでるから、間違いに気付くまで、勝手にしろって感じね。

ホントに、いい年をして、あの二人は、アレなんだから・・・。」

チアキの愚痴は止まりそうになかった。

「茉莉香さん、私は、一度、セレニティに帰って、大公様にご報告してから、帝都に参ります。向こうでお会いしましょうね。」

グリユーエルが言った。

「うん。待つてるよ。またこれからも、よろしくね。」

「はい。」

グリユーエルの笑顔が輝いた。

次々と友人が別れの言葉をのべ、話は尽きなかったが、シャトルの出発時間が迫ってきた。

「では、茉莉香先輩。」

最後にヨット部の『エール』で、お見送りさせていただきます。」

部長のナタリアが言った。

「そうだね。ありがとう。」

「ヨット部のみんな、集まって。」

一年生、二年生、卒業生と、ヨット部のみんなが集まって輪になった。

「先輩方、ご卒業おめでとうございます。」

この三年間、特にこの一年はヨット部始まって以来の冒険の連続で、本当に楽しく貴重な経験をさせて頂きました。心からお礼を申し上げます。そして、これから、私たち

は、その伝統を受けつぐため、日々練習に励みたいとおもいます。

それでは、卒業された先輩方の人生が良い航海となりますこと、とりわけ今日帝都へご出発される加藤茉莉香先輩の人生が良い航海となりますことを、祈念して、エールを捧げたいと思います。

フレ~~~~、

フレ~~~~、マリカ！

それ！」

「フレ、フレ、マリカ！

フレ、フレ、マリカ！」

ナタリアのリードに合わせて、ヨット部員のエールとそれに続く拍手が空港ロビーにこだました。

「ありがとう。では、卒業生から答礼だよ。」

茉莉香が言った。

「下級生のみなさん、これまで、ヨット部を支えてくれて、本当にありがとう。」

私たちも、ヨット部魂を胸に、これから、大人の世界という広い海に出て、頑張ります。

それでは、白鳳女学院ヨット部のますますのご発展とみんなの航海の安全を祈念し

て、そして、私たちが再会できる日が来ることを祈念して、エールを捧げます。

フレ~~~~~、

フレ~~~~~、ハクオウ！

それ！」

「フレ、フレ、ハクオウ！

フレ、フレ、ハクオウ！」

続いて、拍手が空港ロビーにこだました。

そして、茉莉香は、大勢の女の子たちに見送られて、出発ゲートを越えて、シャトルに乗った。

28—4 弁天丸

茉莉香の乗ったシャトルは、弁天丸に到着した。

そして、茉莉香は、警備隊の人と共に、ブリッジに顔を出して、驚いた。

「あれえ！ どうして、みんな弁天丸に乗っているの？」

さつき、私を見送ってくれたじゃないの!？」

ブリッジには、リライ、サーシャ、チアキ、ハラマキ、ウルスラ、ナタリア、アイ、ヤ  
ヨイ、ジェシカ・・・ヨット部の卒業生から一年生まで、もちろん、グリユーエルや

ヒルデも、先ほど新奥浜空港で見送ってくれたヨット部員全員がいた。

「アハハ。私たち、今日は『密航者』じゃないよ。」

私たち、『随行者』だから。」

リリイが言った。

「ええ!? どういうこと?」

茉莉香が聞くと、ミーサが答えた。

「ウルスラちゃんのおかげよ。」

この『ブルーチケット』を見なさい。私も、初めて見たわ。」

茉莉香は、ミーサから渡された青い紙を見た。その紙は、上部中央に日輪に奇跡の薔薇という銀河帝国聖王家の紋章が正式に印刷された特別な用紙であり、こう書かれていた。

銀河帝国管下の船長、船主各位

銀河帝国宇宙軍士官学校の新入生である本券の所持人、ウルスラ・アブラモフを、如何なる航海においても支障なく乗船させ、同人を所定の日時までに帝都の聖王宮へ送り届け、かつ、同人に必要な保護扶助を与えるよう、貴殿に要請する。

また、同人の随行者についても、必要な便宜を与えるよう、要請する。

なお、以上の要請を果たすために必要な費用については、当校が負担する。

銀河帝国宇宙軍士官学校校長　ジョージ・パットン

これは、船乗りの間では「ブルーチケット」とよばれ、帝国軍士官学校に入学する生徒が、宇宙船に乗って、帝都にある士官学校に赴任するための一種の「切符」であった。

もちろん、目的地の「帝都の聖王宮」とは、女王陛下が臨席して入学式が行われる場所であり、惑星クリスタルスター上にある王宮クリスタルパレスの中でも最も格式の高い場所とされている。

そして、この切符には、特典がついていた。

それは、この切符は、士官学校に入学する新入生だけでなく、その「随行者」にも有効なのである。もちろん、随行者には往復の切符となる。

この切符は、もともとは宇宙船の定期航路が十分発達していない時代に、帝国軍の軍艦が新入生を迎えに行くためのものであった。もちろん、そんな盛大な送迎は、帝国軍の強大さを見せつけようと言う示威行為でもあった。

したがって、「随行者」とは、本来、入学式に参列する父母を意味した。

しかし、長年の間に、兄弟姉妹はどうか、祖父母は、親戚は、婚約者は、・・・と議論が重ねられ、次第に官僚主義的な「拡大解釈」が施された挙句、今では「随行者は誰でもいいが、軍艦を使うならば一隻に乗れる人数に限る」ということになっていた。

このような一見すると太っ腹な解釈が行われるようになった背景には、この切符の要



請は、特に辺境の帝国軍の艦船の乗員にとっては、「花の都」の帝都まで公務で出張旅行ができるという、是非獲得したい、オイシイ仕事だからである。しかも、その費用には船の運航経費や自分たちの人件費も含まれているので、随行者が多少増えても往復の船内の食費等の負担が増えるだけで、実際の費用総額としては影響が軽微という事情があつた。

つまり、帝都に行きたい人はみんな乗せるから、ぜひ私たちの船を使つてほしいという訳である。

したがつて、この仕事は、民間船でもよいと言う建前にはなっているが、帝国軍の艦船が独占してきた。だから、民間船、ましてや海賊船に依頼が来るような仕事ではなかつた。

「ウルスラちゃん、よくまあ、弁天丸に頼んでくれたわねえ。」

クーリエが言つた。

「私の場合も、たう星系を管轄する第七艦隊の艦長さんたちから、ぜひ私の船だと誘われていたのだけどねえ。」

でも、私は、茉莉香の船で行きたいからと言って、断つたんだ。

弁天丸も、軍艦の一種だしね。」

ウルスラが言つた。

「なるほど……。ありがとうね、ウルスラ。」

でも、みんな、私の乗ったシャトルをどうやって追い越して、先に弁天丸に来たの？ 私、中継ステーションでシャトルまで歩いているとき、みんなに追い越されなかったよ。」

茉莉香が、最初の疑問を改めて聞いた。

「それも、ブルーチケットのおかげよ。茉莉香。」

チアキが答えた。

「弁天丸までは私の船のシャトルで来たんだけど、中継ステーションに、今日はブルーチケットのお客さんに乗せていると言ったら、茉莉香の乗ったシャトルより先に発進許可をくれたそうよ。」

「なるほど、そうなんだ。」

でも、みんな、帝都に行って何するの？」

茉莉香が聞いた。

「決まっているでしょ。」

まず、ウルスラの入学式に随行者として出席して、その後、チアキちゃんが王宮見学をさせてくれるって。

それと、茉莉香とウルスラのお引越しのお手伝いよ。茉莉香のお部屋も、ちゃんと女

の子らしいお部屋にしてあげるから、まかせなさい。」

「ナハハハ……。あ、あ、ありがとうね。」

茉莉香は苦笑いして礼を言った。

「まあ、それが済んだら、練習航海の時の続きで、みんなで帝都を見て、食べてまわろうかと思っているんだけどね……。」

ちようど、春休みだから、私たちも時間があるからね。へへへ……」  
リリイが笑った。

「でも、私の部屋は単身用でみんなが泊まれないよ。どうするつもりなの？」

「ずつと、弁天丸に泊まるの？」

「そんなこと、ちゃんと考えてあるから、茉莉香が心配することないよ。」

「サーシャの家の、帝都にあるお屋敷に泊めてもらうのよ。」

「なるほど。サーシャ、ありがとうね。」

「いえいえ、お礼を言うのは、私の方よ。」

茉莉香さんのおかげで、私も、本当に晴々した気分です、久しぶりに帝都の家に行けるようになったわ。

それはね、お母さんも同じ気持ちなの。

私が、みんなを帝都の家に泊める話をお母さんに頼んだら、お母さんったら、自分も

帝都に行きたくなつたのよ。

それで、卒業式が終わつた翌日、つまり昨日、先に出発してしまつたのよ。もちろん、シャネル本店とか、あちこちのお店に予約をいっぱい入れてたわ。ウフフ…、おかしいでしょ。

お母さんも、こんなに晴々した気分ですごい帝都に行ける日が来るなんて本当に幸せだと言つていたわ。

だから、茉莉香さんに良くお礼を言つて頼まれたわ。」

「いやあ、その、お礼を言われるのは、私だけじゃなくて……。」

それにしても、私に内緒でそこまで話が進んでいるなんて……ビックリ。

リリイ、ちよつと……アレじゃないの。」

「何、言っているのよ。お相子（あいこ）よ。」

茉莉香だつて、『アレ』のはなしを、隠していたじゃないの。」

「ナハハ…それを言われると……。」

「まあ、私たちが、春休みに気軽に帝都へ見学旅行ができるようになったのも、ミルキーウェイのおかげなのよね。」

ホントに早いから、便利ねえ。」

「そうね。みんな、みんな、喜んでいると思うわ。」

それもこれも、平和になったおかげだからね。」

サーシャが、遠くを見つめる表情で、言った。

「先輩方、お話が盛り上がっているところ、申し訳ありませんが、帝都での『見学先』についてご相談があります……。」

ナタリアが控えめに言った。

「そうだったね。」

リリイが答えた。

「だったら、ブリッジではなく、船室か食堂でゆっくり相談した方がよいよ。」

そろそろ、弁天丸が発信するからね。」

茉莉香がそう言ったので、ヨット部員たちはブリッジを出て行った。

「三代目、発進準備は？」

「OK。」

「では、目標は、レッドクリスタル星系、帝都クリスタルシティ。」

弁天丸、エンジン点火。

ミルキーウェイのゲートまで、全速前進。」

「了解。」

「さあー、弁天丸、いきましよう。」

弁天丸は、広い宇宙（うみ）に向かって、出航した。

## エピローグ1 銀河聖王家の伝説

1 帝国軍演習宙域（銀河系、核恒星系180—10—21星系）

チアキの乗ったローズアロー2号は、今、180—10—21星系を飛んでいる。

この180—10—21星系は、帝国軍の演習宙域である。

しかし、単に番号で呼ばれている事実が示すように、核恒星系にあっても、この周辺星域は、これまでほとんど開発の手が及ばず、辺境扱いされているところだった。

その理由は、銀河系の開発はレッドクリスタル星系のある半円部分に集中しているためである。これに対して、この星系は銀河の中心核を挟んで、帝都のあるレッドクリスタル星系から角度で180度の位置、つまり正反対の位置にあった。

ここは、もつとも開発から取り残された宇宙であった。

「それにしても、寂しいところねえ。」

このあたりは、半径一万年、人類の住む惑星がないのよねえ。

まるで、海賊が出てきそうな宇宙（うみ）だわ。」

ブリッジの貴賓席に座ったチアキが、立体スクリーンに映る海図を見ながら、つぶやいた。

「ハハハ．．．」

姫様。海賊って、誰のことでしょうかねえ。」

チアキの言葉に、艦長のソフィア・クキが笑った。彼女もその苗字が示すように、帝國海賊クキ家の一族だった。

「フフフ．．．．．。私たちのことに決まっているじゃないの．．．」

チアキも笑った。

「間もなく、演習開始時刻になります。」

「まあ、この寂しい演習宙域は、新兵器の秘密テストには最適ですね。

姫様、ご用意はよろしいですか？」

「もう、スタンバイしているわよ。」

艦長、船の指揮権をこちらに委譲してください。」

チアキは、すでに艦長席の横に設けられた透明な球体の操縦席に移動し、そこから艦長に返事をした。

銀河聖王家の血を引く者は、コンピュータの認証機能が自動的に反応して、認証をクリアできる。しかも、チアキは、重力制御の新型艦のパイロットとしての能力も備えているので、速やかに自動操縦補助システムを起動できるのだった。

したがって、たった一人でこの船の大艦隊並みの火力、機動力を制御できるという訳



だった。ローズアロー2号は、軍艦としては、グランドクロスIIの改良型として、最新の重力推進エンジンを搭載し、武装の火力はグランドクロスIIに匹敵し、しかも新兵器の試作品まで搭載している重武装の船だ。だから、ピンク色で流線型のため『金魚』あるいは『姫様の船』と呼ばれたりする可愛い外観にもかかわらず、正体は『怪物』だった。

もちろん、これだけの軍事力をたった一人のパイロットの判断に委ねることが認められるのは、チアキが第二王女だからである。

さらに今回の演習でチアキがパイロットを勤める理由はそれだけではない。

この実験は危険極まりなく、質量融合爆発が発生する可能性もあるとされていた。だからこそ、第二王女であるチアキが乗船するのだった。聖王家のプライドにかけて、王家の者は常に将兵の先頭に立つ気概を示すためだった。

「いつもながら、姫様は、機動が早いですね。」

了解しました。戦闘モードに移行します。

秒読み、3、2、1、ゴー。」

もちろん、「戦闘モード」とは、戦闘に備えて船の指揮権をチアキに委譲した状態をいう。

戦闘モード移行後は、チアキの意志に従って、船はジグザグ飛行でもなんでも、自由

自在に飛んで戦闘を行うことができる。

だが、戦闘モード移行後、しばらくは、ブリッジに沈黙と緊張が支配した。

やがて、航海士が言った。

「演習開始時刻です。」

.....

時空ナビが、微弱なブレドライブ反応感知。

亜空間から、何かが近づいてきます。

現段階では、敵味方識別不能ですが.....」

「今回は識別不要よ。シナリオ通りに、亜空間の標的船を迎撃する。

えくと.....

今、亜空間の標的を捕捉したわ。

さあ、みんな。いくわよ。」

チアキが言った。

その言葉と同時に、ブリッジの操縦パネルが一斉に反応を始めた。

ローズアロー2号の船体全体が、七色の光に包まれた。

やがて光は先端部分に集中し、さらにそこからビーム線のようなものが、ブレドライ

ブ反応を示した空間に向けて、何発も放たれた。

それは、帝国軍の新兵器、重力粒子ビーム砲であった。

今回の実験は、通常空間を飛行中のチアキの船から、亜空間を飛行中の標的となる宇宙船を攻撃するものであった。

重力の粒子としての性質を利用して、重力シールドをも貫く重力粒子ビーム砲は、すでに開発されている。この兵器は通常空間内で使用することを想定して開発され、先の遠征でも実戦で使用された。

しかし、帝国軍のエンジンアは、この兵器は亜空間を飛行する船に対しても有効ではないかと考えた。

なぜなら、重力という力は、宇宙空間を構成する多次元空間の間でも伝わる究極の力とされるからである。それならば、通常空間から亜空間にも重力粒子ビームは伝わるのではないかという訳である。

今回は、その実証実験を兼ねた演習をおこなうのである。

やがてチアキが言った。

「亜空間の標的に命中したわ。」

私の時空ナビからは、そういう手ごたえがあったわ。」

「ウオー、すごい、すごい．．．予想どおりだ。」

これで、時空トンネルや亜空間を飛行してくる敵から、星を守ることができるとぞ。」

ブリッジは歓声に包まれた。

しかし、それも一瞬のことだった。

「通常空間に、強いプレドドライブ反応。

強力なエネルギーを持ったものが、亜空間から出てきます。」

航海士が言った。

「これは、融合爆発だ。

確認不要。逃げるぞ。

姫様、タツチ・ダウン予定地点からできるだけ離れてください。

ここが、爆心になります。」

艦長がチアキに言った。船の操縦権限は、まだチアキにあるためだった。

「もう、やってるわよ。

.....

でも、これじゃ、間に合わないかも！

え〜〜い。イチかバチかで、シートジャンプよ。

野郎ども、行くぜ〜〜。」

「おお〜〜！」

思わずチアキの口から発せられた、海賊船の船乗りらしい気合に、クルーが答えた。

ローズアロー2号は、瞬時に、時空トンネルを形成して、亜空間へ超高速跳躍した。

「時空トンネル入口、閉鎖を確認。」

融合爆発のトンネル内への侵入は無いようです。」

「ふう……、ひと安心ね。さて……」

チアキは、船を爆心から数十億キロ離れた地点に、タッチ・ダウンさせようとした。

「姫様、この程度の距離では、爆発のエネルギーに対して絶対安全とはいえません。」

この距離では、爆発により発生した放射線は十分拡散してないと予測します。」

ですからここに停泊すると、すぐに大量の放射線、特に中性子線を浴びる危険がありますので……。」

実験担当の技術士官が言った。

「分かったわ。」

でも、タッチ・アンド・ゴーで、いったん通常空間へ復帰して、超光速ジャンプをやり直すわよ。」

大丈夫よ。」

これだけ離れていれば、放射線がタッチ・ダウン地点に届く前に、亜空間へ戻る時間は十分あるわ。」

通常空間に復帰したチアキの船は、すぐさま亜空間へ消えた。」

結局、チアキは、タッチ・アンド・ゴーで超光速ジャンプ（跳躍）を4回繰り返した。今の転換炉のパワーでは、タッチ・アンド・ゴーの短いタイミングで、長い距離を飛ぶエネルギーを放出できないとされていたからだ。

しかし、チアキの効率的な操船で、ジャンプの距離は飛ぶたびに長くなり、合計百光年ほどの距離を飛ぶことができた。

そして、船と乗員の安全を確認してから、船を慣性航行に移行させ、船の指揮権を艦長に委譲した。

「姫様、危機一髪でしたね。」

それにしても、姫様の操縦は、本当に速いですね。

通常のクルーによる操縦では、超高速跳躍が間に合わず、融合爆発に巻き込まれていたらかもしれませんね。

姫様のお蔭で、私たちは救われました。」

艦長のソフィア・クキが、チアキに礼を言った。

「ありがとう。」

咄嗟のことだったけど、私もいい経験になったわ。」

「いやあ……『銀河聖王家の伝説』を、目の前で体験させていただいた気分です。」

艦長の言った『銀河聖王家の伝説』とは、船乗りの間に伝わる伝説である。

それは、船が絶望的な危機に陥ったときに、乗船している銀河聖王家の者が、警告を発したり、活路を示して導いてくれるという伝説であった。実際に、植民船の航海や軍艦の戦闘などにおいて様々な逸話が伝えられている。

しかし、現代ではそれらは聖王家を神格化するための『おとぎ話』と考えられていた。「ちよつと、それは大げさよ。」

チアキが顔を赤くして、言った。

「失礼しました。」

でも、今回の経験で、重力制御推進方式の船に、思考制御型の自動操縦補助をつけて一人で操縦する意味が、私もやっとわかりました。

こういう事態にも対処できるスピードが必要なのですね。

自動操縦補助については、これまで、私も含め、船乗りの間では、自分たちの知識、経験を見下しているという評判が悪かったんですけどね。」

「そうですね。」

でも、私としては、一人で出来る自動操縦でも、ベテラン船乗りがそばに居てくれる安心感は欠かせないと思うけどね。」

「ありがとうございます。」

「それで、融合爆発の様子は、どう？」

チアキが、演習担当の航海士に聞いた。

「光学映像では、まだ確認できません。百年後になります。」

「ハハハハ……。」

まだガチガチに緊張している航海士の的外れな答に、ブリッジから笑い声が漏れた。もちろん、他のクルーは、笑う余裕が出てきたのだ。

「クララ、肩の力を抜きなさい。……もう大丈夫よ。」

ソフィア艦長が、若い女性の航海士クララに優しく声をかけた。こういう気遣いが、彼女が『お母さん』と慕われる理由である。

「演習空域の観測モニターのデータを収集、分析してちょうだい。」

もちろん超高速通信を使うのよ。

クララ、気分は落ち着いたかしら？」

「はい。艦長。」

「それから、演習視察のために、他の船が来ていたはずだよねえ？」

その船はどうなったのかしら？」

近くにいるなら、その船のデータも欲しいわ。」

艦長の指示に従って、演習のデータ分析を担当するクルー達が、動き出した。

「ねえ。……は、どの辺かしら。」



でも、なにか、どこかで見たような星空ねえ。」

ブリッジのモニターに映った光学映像を見ながら、チアキが言った。

「えーっと、時空ナビの示している座標から判断しますと、ここは180—9—21星系です。ここも、核恒星系ではとても辺鄙なところですよ。」

しかも、この星系の海図は百年前に作られたままですから、信頼できません。もちろん精密な海図を作る必要性も極めて低い辺境空域として放置されています。

ですから、通常の超高速跳躍ではタッチ・ダウンすべきでない航路回避空域とされているところですよ。」

男性の航海士が答えた。

「急いでジャンプしたので、さらに辺境に来てしまったわけね。」

ホント、時空トンネル航法でなければ、こんなところを安全に航海できないわね。

それで、今、船は、この恒星の惑星公転面にいるのかしら。」

チアキが聞いた。

「はい。そのようですよ。」

母星はスペクトルG型。比較的若い星ですよ。」

星系内のハビタブルゾーンにふたつの惑星があるようですよ。未調査ですが。」  
「でも、ここには初めて来たはずなのに、そう言う気がしないのよねえ。」

ねえ、全天の星空をモニターに映せないかしら……。」

「可能ですが、全天スクリーンは姫様の貴賓室のものをお使いになりますか？」

「それでいいわよ。映像を送ってちょうだい。」

艦長、ちよつと星座を眺めて、休憩してきます。」

「承知しました。ごゆっくり、お休みください。」

艦長が答えた。

チアキは、自分の部屋に入って、全天スクリーンを起動させた。

チアキは、今でも星空を眺めるのが大好きだ。

だから、星空を眺めながら、危機一髪のところを乗り切った疲れを癒そうと思ったのだ。

全天の星空をスクリーンに表示させて、これを眺めたチアキがつぶやいた。

「うわ〜。」

ここにも、銀河のネットワークがあつたのね。

どうりで、見たことのある星空だと思つたわ。フフフ……

でも、なかなか綺麗な星空よね。気に入ったわ。

この星の星座には、どんな物語がふさわしいかしら。……」

そう言いながら、チアキは居眠りを始めた。

## 2 ローズアロー2号貴賓室（レッドクリスタル星系 第二王宮）

チアキの乗ったローズアロー2号は、演習から帰還し、第二王宮の港湾区域に停泊した。第二王宮は、帝都クリスタルスターのあるレッドクリスタル星系の惑星軌道上にある巨大な宇宙ステーションである。

船が帰還すると、さつそく、クリスティア第一王女が、船を訪れた。

「やあ、チアキ。融合爆発に巻き込まれそうになつて、大変だったそうだね。

でも、元氣そうでほつとしたよ。」

「そんな。わざわざお見舞いに来ていただくほどのことありませんが・・・。」

「いやあ、心配したぞ。」

それで、めつたに行かない辺境星域は、どんなところだったかい？」

「半径一万年、人類の住む星がないところでしたよ。」

だから、海賊が出そうなくらい、寂しいところでした。」

「ハハハ・・・。核恒星系にも、そんなところがあるのか。」

「だから、危険な演習にはうってつけの星域です。」

でも、爆発から逃れるためにたどり着いた180-9-21星系は、なかなか美しい星空でしたよ。

なんといつても、あそこには、銀河のネックレスのような星空があるんです。

それに、全天にも鮮やかに輝く星々がたくさんあって、星と星を結びつけて星座としてどういう名前をつけるか、星座の物語を考えるだけで面白かったですよ。」

「そうか、面白そうなところだね。」

新弁天丸が動き始めたら、今度、茉莉香に、見に行つてもらおうかなあ。

ところで、ちよつと二人だけで話があるんだが……。」

クリスティア王女は、そう言つて、そばに控える副官のスカーレットを見た。

「席を外しましょうか……。」

「いいわ。スカーレットさんはここに居てください。」

お姉さま、よろしかつたら、私の寝室で話しましょう。

あちらは、更にセキュリテイが嚴重ですから……。」

「わかつた。」

そう言つて、二人はチアキの寝室へ入つて行つた。

寝室に入ると、クリスティア王女は部屋の中を見回して言つた。

「うわ……」。寝室の模様替えをしたのかい？

相変わらず、きれいな寝室だねえ。

部屋全体の色彩のコーディネートが、暖色系でとても柔らかくて、エレガントだねえ。

それに女の子らしい可愛いものも、いっぱいあって・・・。

チアキ、なかなかセンスがいいねえ。」

「いやあ、どうも。お誉めにあずかって・・・。

それで、お姉さま、ご相談とは・・・。」

二人は、コーヒーターブルを挟んで、椅子に座り、話し出した。

「話と言っても、私のことだが・・・。」

「はい。なんででしょうか。」

「いやあ。私のことだが、・・・なあ。」

母上やエカテリーナ様から早く身を固めろとうるさく言われていて、・・・なあ。

そう言う訳でもないのだが、今度、とある名門一家の長男の家を訪問することになつて・・・なあ。

それで、なあ・・・。」

「なんだか、言いにくそうにお話になっていらつしやいますね。

嫌なら、お断りになれば良いではないですか。お姉様らしくもない・・・。

お話だけで、まだお会いになったこともないんでしょう？」

「いや、実は、ジェニーの開いたホームパーティーで知り合ってから数回会っている。

今までは、茉莉香やバレンシアも一緒だったんだが、今度、二人だけでこっそり会お

うと言うことになって……。」

「フフフ……。」

出来るんですか？そんなこと。」

「出来ると思っただけが……。」

一旦、別な場所へ出かけて、警備隊には黙って、そこで変装して抜け出せば……。」

「アハハハ……。変装して出かけるところで、アウトでしょうね……。」

「いや、その前日にバレたよ。」

そもそも、私の日程に、空白の時間があるので怪しまれていたところに、相手の家の警備陣から王宮の警備陣に打合せが申し込まれて……。」

「アハハハ……。」

無敵の第一艦隊司令官が自らお立てになった作戦だったのに、失敗ですか……。」

「笑うな！」

それで、やむなく、相手の家に行くことになってなあ……。」

「へえ……。」

二人で自由にデートもできないなんて、相手も本当に立派な家の方ですね。

お姉さまのお相手は、どなたですか？」

「名前は、アーサーというんだ。」

私にもお前にもかかわりのある家の長男で……なあ。

両親には、私もお前も会ったことがあって……」

そこまで言われて、チアキは姉が、どの家のことを言っているのか気が付いた。

『ドリトル家では、ないはず……』

ジェニーの両親やエドワードの両親には、私はまだ会ったことは無いから……とすれば、ステープル家だろう。

海明星のステープル家の屋敷で開かれたダンスパーティーの時に、二人はサーシャの両親に挨拶している。もちろん、二人とも王女として会ったわけではないが……。

それに、サーシャの上には、帝都で暮らす二人のお兄様がいると聞いている。』

もちろん、姉の言い方が、いつもの姉らしくなく、恥ずかしそうにしている理由も気が付いたが、それは言わないことにした。

「わかりました。それは、ステープル家でしょう。」

「おまえ、本当に鋭いなあ。どうしてわかるんだ。」

「だって、あの家には、女子高生憧れの、カッコイイお兄様達がいらつしやると聞いていましたからからね。」

あのダンスパーティーの時に、サーシャのお兄様たちが出席されないのを残念がついてたコたちが大勢いましたよ。」

「そうか。」

「やっぱり、白鳳女学園の生徒たちにも評判だったのだなあ。」

「でも、そんな名家の御曹司に、お姉さまがご興味をもたれるのは不思議ですね。」

「聖王家の権力や富を利用しようという男性は、お断りのハズでしょう。」

「そうなんだが、アイツはそういうヤツではない。」

「アイツは、家業よりも、孤児院とか福祉事業に興味があるんだ。」

「そういうところは、私と話が合うんだ。」

「へえー。どういう訳ですか。」

「サーシャが身元を隠すため孤児院として孤児院に潜入していたことは知っているだろう。」

そして、ステープル家の父母は彼女を探すふりをして、多くの孤児院を回ったそうだ。

彼も、時々、忙しい父の代わりに、母と一緒に孤児院を回ったそうだ。

そこでの体験が、彼には、とてもシヨックだったそうだ。

自分たちが孤児院に入って行くと、子供たちが一斉に注目するそうだ。

自分の父母兄弟ではないか、自分を向かえに来てくれたのではないか、とね。

でも、帰る時には、みんな背中を向けて気が付かないふりをしているそうだ。

その失望を隠した背中を見るのが、とてもつらかったそうだ。」



「なるほど、そういうものなのですか。」

「ああ、私も孤児として育ったし、孤児院で子供たちの世話をしていたから、そういう時の子供たちの気持ちは痛いほど良くわかる。」

「そういう子供の気持ちが分かる人って、ずいぶん優しい人なのですね。」

「そうなんだよ。私には過ぎた人だと思っよ。」

それに、彼は、その時はサーシャの為にと思って我慢していたが、今は家業を弟に譲つてでも、自分は福祉事業をやりたいと思っているんだ。」

「なるほど、お姉さまとの結婚で、長男として家業を継ぐ宿命から飛び出そうと言うのですね。」

「ああ。もちろん、私の代わりにやってくれるという意味もあるがねえ。」

「それで、私に何かお話がぁありでしょうか。」

「ステープル家との縁談には、母上も乗り気でなあ。」

ただ、エカテリーナ様から詳しく話を聞いていると、少し疑問に思うところがあつてなあ。」

「はあ。どういうことでしょうか。」

「母上も、エカテリーナ様も、サーシャの事情は十分知つている。」

しかし、二人の話を聞いていて、私は気が付いたんだ。

サーシャの存在が私の縁談の障害になるところか、むしろ積極的に縁談を進める理由になっているのではないかと。

母上は、『長男のアーサーがステープル家の福祉事業を継げば、サーシャが自由になるはず。』とまで言うのだ。

それだけ、二人は彼女のことを大切に考えているようだ。

しかし、これは変だ、何か秘密があると思わないかい。」

「そうですわねえ。」

普通なら、旧宇宙マフィアの大ボスの実の娘なんて、王家としては交際を禁じるのが当然でしょうからねえ。

まして、養父母の家とはいえ、彼女の家の方との縁談なんて……。」

「そうだろう。」

そう思つて、この間、母上やエカテリーナ様を問い詰めて、分かったことがある。」

「なんででしょうか、やつぱり……。」

「ああ、お前も気が付いているかもしれないが、

サーシャには、そして、旧宇宙マフィアの大ボスの家系には、銀河聖王家の血が流れている。」

「それも、青薔薇家の血という訳ですか……。」

「そうだ。」

お前は、前から知っていたのか？」

「いいえ。」

でも、王宮で暮らしてみても分かったのですが、惑星ライセで見たレオニー二家の屋敷やその暮らしぶりは、聖王家に似ているような気がしました。

特に、聖王家の王宮で王族たちだけで開くパーティーに参加してみてもわかったのですが、私が以前、惑星ライセで参加した『時間無制限の夕食会』と言う彼らのパーティーの作法や言葉づかいなどが、何から何まで、王宮のパーティーとそっくり同じだとわかって驚きましたよ。」

「アハハ……。あのバカバカしいやつか。」

そっくり同じというなら、それを知っているヤツが持ち込んだことは明らかだよなあ。」

「それに、あの家で私が海賊シヨを演じた時に、舞台の前のプール一面に、ものすごい数の青い薔薇の切り花を浮かべてくれたんです。」

とても美しかったですよ。」

それで、シヨのあとでお礼を言いつつ、どこから持ってきたのかと聞くと、あの屋敷には青薔薇だけを育てている薔薇園があり、私のためにその薔薇を切って浮かべた

というのです。

そこは、高い塀に囲まれた、六角形のシークレット・ガーデンだそうですよ。」

「六角形・・・王宮の中庭と同じじゃないか。」

チアキ、その庭を見たのか？」

「いいえ。怖くなったので見ませんでした。」

その話を教えてくれた人たちの目がとても真剣で、なにか強い願いを私に向けているような気がして、今にもそれを言い出しそうな気がして、ちよつと怖くなったんです。

だから、シークレット・ガーデンを見て、彼らが大切にしている秘密や願いを知ると、あの屋敷に閉じ込められて帰れなくなるとか、想像したもので・・・。

その時は、気にし過ぎかなと思っただのですが・・・。」

「なるほど。」

レオニー二家の屋敷には、今も、銀河聖王家や青薔薇家とのかかわりを示すものが堂々と存在するわけだね。

やっぱり、マリア王女の話は本当だったんだなあ。」

「マリアというと、まさか、レオニー二家のグランマご本人じゃないでしょうね。」

「いや、違う。あの人は、その人の娘だそうだ。」

「では、どのマリア様なのでしょう、青薔薇家のマリアで、その時代の人という

と……。」

「私たちの曾御爺（ひいおじい）様の妹だ。」

聖王家の歴史書では、十八歳で事故死したことになっている。」

「へえ〜。」

でも、どういう経緯（いきさつ）で、そうなったのでしょうか。

私が習った王室の歴史には、そんな王女がいたことは書かれていませんでしたよ。」

「そうだろう。もはや、彼女の存在自体が隠ぺいされているからな。」

私が、母上から聞いた話では……。」

そう言つて、クリスティア王女は、女王から聞いたマリア王女の話を持ちアキに聞かせた。

「なるほど。」

それで、お姉さまのお話を聞いて思ったのですが、私たちの父親も、そのマリア様や、レオニー二家の一族となにか関係があるのでしょうか。」

「チアキもそう思うだろう。」

母上に聞いたが、それは違うと否定された。

しかし、私の父親については、『その時が来たら話す』というだけで、相変わらず何も話してくれない。」

「でも、お姉さまは、縁談が具体化してきたので、そろそろお父様のことを教えて頂く時期のはずだと、お考えなのでしょう？」

「そうだ。」

だが、母上は『まだ早い』と言っておられる。」

「では、どうなさるつもりなのでしょうかね。」

「私にもわからない。」

でも、母上がそんな調子だから、自分たちで、もつと、レオニー二家を探ってみる必要がありそうだね。……」

「そうですね。」

私も、今になって思うんですが、父のケンジョーがご先祖のことを話すときは、『分かっているのは、爺さんが私掠船免状をもらってからのこと。』

それ以前のご先祖は、ただのロクデナシで、どんな星を飛び歩いて、何をして暮らしていたのか、まったくわからない。

海賊なんだから、そんなものさ。』

と、いつも言っていました。

母上のことだって、

『彼女も海賊だから、詳しい身元は分からない。』

今、どこで何をしているかも、わからない。』

なんて、平然と言っていましたよ。

ホント、まったく。

その時は、そう信じ込んでいましたがね……。」

「そうだろう。」

でも、母上のことを隠したのは、お前を守るためだったんだろう。

大事に守られていたのだよ。」

「分かっておりますよ。今は。」

感謝もしておりますよ。」

チアキは、顔を赤くして答えた。

「それにしても、『海賊だから……』と言うのは、ご先祖の正体を隠す良い手段だった

のかもしれないなあ。」

「そうですね。」

## エピローグ2　マリア王女の伝説1

ピローグ2　マリア王女の伝説

クリスティア王女が語ったマリア王女の話は、次のようなものだった。

### 1　銀河系境界星域・恒星SS―56008の第三惑星

今から150年ほど前のある日、銀河境界星域の恒星SS―56008の第三惑星の衛星軌道に一台の小型宇宙船が到着した。

船は、数日間、衛星軌道上から地上を観測した。やがて、船からはシャトルが発信し、惑星に降り立った。

この惑星は、SS―56008―3と番号で呼ばれ、母星ともども、まだ固有の名前がない。それだけ、注目されない恒星系の惑星である。

それもそのはず。惑星の気候は、酸素や窒素の成分比などは人間の居住できる条件を備えているものの、その表面温度は低く、地表の大半が氷に覆われていた。

この惑星に降り立ったのは、宇宙考古学研究所の5人の研究員たちだった。これ



が調査隊の全員であり、静止軌道上に留まる小型宇宙船は現在、無人で、自動運転になっている。

「主任、本当に、この星に超古代文明の遺跡があるのでしょうか？」

研究員のトム・ケンブリッジが言った。

「あるわよ。それも氷に閉ざされて、荒らされていない、手つかずの遺跡がね。

知っているでしょ。これまでの資源調査では、この星は300万年前までは緑の生い茂る惑星だったことが分かっているのよ。その後、何かの原因で、惑星の軌道が変化して、今の氷の惑星になったのよ。

「だったら、寒冷化する前には、超古代文明があってもおかしくないわ。」

主任研究員のマリア・スミスが言った。

「そうでしょうか？」

「それを見つければ、人類の起源に関する『太古植民説』の決定的証拠になるわ。

人類の起源の星が、ついに明らかになるのよ。

事前の調査で、この星の氷の下の岩盤には、不自然な凹凸や平坦な地形がたくさんあるのも、分かっているわ。

その最大の平地の上に、今、いるのよ。

「ここは、超古代文明の大都市の跡に違いないわ。」

「はあ．．．」

でも、まずは、キャンプを設営しましょう。

今晚寝るところを作らないと、凍えてしまいますから。」

研究員のアンナ・フェリーニが言った。

「そうね．．．」

やがて、5人は、シャトルから荷物を降ろして、キャンプの設営、つまり調査隊の基地となる宿舎や研究資料棟などを組み立て始めた。

施設は粗末なものだった。いつの時代にも、考古学などというお金にならない学問をする人は、お金に恵まれないものだ。

翌日から、一行5人はシャトルに乗って、衛星軌道上の小型宇宙船からの観測データで目星をつけた地点を見て回った。

「あの山の向こうが、最有力ポイントよ。」

地平面の岩盤に不自然なほど、平らな個所があつて、そこには空洞もあるので、都市の遺跡を直接、この目で見ることもできるかもしれないわ。

「楽しみね。」

マリアは、ようやく実現した発掘調査に期待を膨らませていた。

「まもなく、峠を飛び越えます。」

少し気流が悪いので、揺れるかもしれませんが。何かに捕まってください。

・  
・  
・

今、越えました。

主任、何か見えますか？」

シャトルのパイロットを勤めている、研究員のアンナ・フェリーニが言った。

「ああー、見えた。

これは……。」

シャトルの下に見える氷の平原には、垂直な壁で囲まれた巨大な四角形の穴が開き、その穴の周りにほぼ水平な地表面が広がっていた。穴の大きさは縦横50メートルほどだったが、穴は地下深くまで掘られているらしく、底が見えなかった。

穴の周辺の平面上に雪が積もっているが、上空から観察すると、このあたり一帯が人工的な造成地であることは明らかだった。

それは、どう見ても、古代文明の遺跡ではなく、無許可で採掘をしていた鉱山の採掘場の跡地だった。ずっと以前に放棄されて荒れ果て、その上に雪が積もり、凍りついたものだと思われた。

更に、望遠カメラで地表の光学映像を見ると、地表にはあちこちに赤錆びた作業機械の残骸が放棄され雪をかぶっているのが見つかった。

「廃棄された鉱山でしょうか。」

でも、こんなところで、何を掘っていたのでしょうか？」

「墓泥棒に違いないわ！」

この地下には、やっぱり古代文明の遺跡があるのよ。

アンナ、地下の坑道の様子を探ってちょうだい。

墓泥棒は何をしていたのか、探るのよ。」

主任研究員のマリアは、ここは古代遺跡だという思い込みが強く、まだ諦めていなかった。

「はい、主任。」

シャトルは、採掘跡の上空を旋回して着陸予定地点を探して、着陸した。

そして、地下の構造を探るため、船から数台の自走式探査ロボットが出て行った。

ロボットは昆虫型で、六本の足を動かしながら氷の平原を進み、やがて羽を伸ばして飛んで行った。そして、ところどころで着地して触手のようなセンサーを氷の地面におろし、氷の中に超音波信号を発して、その反響を観測した。

「地下の様子がわかりました。」

主任、ご覧ください。

地下の氷の中には、枝分かれした坑道でつながった空洞が何層にも形成されていていま

す。各空洞の大きさは、数百メートルもあります。」

パイロットのアンナは、小さいスクリーンに映った地下坑道の映像を見せた。

「なんて規模なの。採掘した人たちは、何を探していたの？」

「わかりません。」

通常の辺境鉱山ではエネルギー資源が採掘されるのですが、この様子では氷を掘って  
いたとは思えません。」

「氷なんて、掘ってどうするの？」

そんなもの、わざわざ宇宙船で運んで、交易する品物じゃないでしょう。」

「そうですね。わざわざ費用をかけて運ぶ意味があるのでしょうか？」

「でも、意味があるとすれば、この星の氷の質が良いことかしら。」

氷の分析データはあなたも知っているでしょう？」

「はい。古代の氷は極めて良質で、溶かせば塩分の濃度を調整する必要もなく、そのまま  
飲料になるほどの水質だと報告されています。」

もともと、可住惑星だった時代の海の水が凍ったものですか。」

「そこなのよね。」

人間の血液の塩分濃度と、海水の塩分濃度がほぼ一緒というのも、この星が人類発祥  
の地だと私が考えた理由の一つなのよね。」

でも、やっぱり、氷の鉞山なんて、商売になるとは思えないわ。

聞いたことないし……。う……ん。」

マリア主任研究員は、首をかき上げて考えた。

「あのお。主任。」

そろそろ、帰りましょう。

天候が悪くなりそうです。雪が降り出す前に、キャンプに戻りましょう。」

操縦席のモニターに写った天候観測データを見て、アンナが言った。

「そうですね。今日はこの辺で終わりましょう。」

帰って、地下坑道の様子を改めて検討して、今後の調査計画を再検討するわ。」

やがて、昆虫型の探査ロボットが調査を終えて、全機、船に戻って回収された。

そして、調査隊5人を乗せたシャトルは離陸して、キャンプに戻って行った。

キャンプに戻った一行は、夕食を済ませて、研究棟に集まって地下探査のデータの整理と、今後の調査計画の再検討に取り掛かった。

宿舎の外は、低気圧、つまり雪風が吹き荒れていた。宿舎や研究棟の建物は揺れながら、猛烈な強風に耐えているが、寒さは一段と厳しくなった。

「う……ん。」

この構造では、やっぱり、この立坑から地下の一番深いところの坑道に入って実地調

査しないと、遺跡にたどり着かないわねえ。

危険だけど、仕方ないかなあ。

地下ならば、こういう雪嵐を気にしなくて良いし……。」

地下坑道の3D映像を見ながら、研究主任のマリアが言った。

「主任、危険です。」

ご覧のように、地下坑道は、かなりデタラメに掘ったものと思われます。

ですから、岩盤の荷重に耐える構造にはなっておらず、特に、最深部の地下1500メートルにある巨大な空洞は崩落する危険が大きいと思います。」

研究員のアンナが言った。

「じゃあ、探査ロボットでその空洞を探らせば良いじゃないですか。」

研究員のトム・ケンプリッジが言った。

「そうよ。出し惜しみしないでよ。」

ほかの研究員も口々に言った。

「あれは高価な機器で、宇宙大学の管理局から、

『無くすな』、

『壊すな』、

『必ず、全機持って帰って来い』

と厳しく言われて、

そのための誓約書を何通も書き、やっと貸してもらったもので……。  
ですから、かなり危険で回収が困難な地下の調査には……。」

アンナが、反論した。

「大学側は、考古学者の命より探査ロボットの方が大事なのよ。

ホント、失礼しちゃうわ。」

主任研究員のマリアは、少しすねて、悪口を言った。

「はあ、どうもすみません。」

私ともう少し大学側から有利な条件で借りておけば……。」

アンナは、苦しげに詫びを言いつつ、下を向いてしまった。

「あなたを責めているんじゃないわよ。」

アンナ、下を向いてないで、こちらを向いて。」

そう言って、マリアが微笑んだ。

マリアの笑顔を見て、アンナは気持ちが悪くなった。

『この人の笑顔は、いつも人の心を明るくする。

本当に不思議な人だ……。』



二日後に雪嵐が収まった。

結局、他の隊員が怖がったため、最深部の坑道への実地探査は、マリアとアンナの二人が行くことになった。後の三人は、キャンプに残って、二人から送られてくる探査の通信を記録することになった。

「さあ、いくわよ。」

「はい。主任。」

二人は、登山用の人工重力装置で体重、荷物の荷重や慣性をほぼゼロにして一旦空間に浮かんだ。次に、通信用の有線ケーブルを引きつつ、ふわりと浮かびながら穴の上の空間まで進んだ。そして両手両足を大の字に広げ、垂直の坑道をゆっくり降りて行った。

この時代、人口重力装置を使って山や急斜面を登り、また降りる方法は、登山家たちからは『外道』又は『邪道』とされ、嫌われている。古代から、登山は人間の力だけで行うことに意味があると考えられているためだ。だから、登山家は、人工重力装置は救命救急用の道具としてのみ使うべきものと考えている。

しかし、登山方法にこだわりの無い二人は、最初からこの装置を利用している。

「空を飛ぶように降りていくのね。」

「これは、まるで鳥になった気分よね、なかなか快適だわ。」

「はあ。

私は、地獄の底へ降りていく気分ですが……。

主任、くれぐれも危ないことはやめてください。」

「わかっているわよ。わかっています。」

「お嬢様がそうおっしゃるときは、たいてい、そのお気持ちが無い時なので心配です。」

「私のことを、いつまでも、お嬢様と呼ぶのはやめてよね。」

もう、子供じゃないんだから。」

やがて、ふたりは1500メートルほど降下し、縦穴の底に着地した。

底の地面は、意外なことに雪は積もっておらず、やや濡れた氷の岩盤だった。

「変ねえ。雪も積もっていないし、そもそも凍っていないわよ、ここは。」

「底の岩盤の温度は、零度です。この星にしては、温かいです。」

アンナが、観測センサーを氷の岩盤に当てながら、答えた。

「周辺を探查してみます。」

たしか、目の前のこの穴が、最深部へつながる坑道の入り口だと思えます。」

アンナがセンサーを氷の岩盤に当て探查を始めようとしたときに、二人の周辺に、ドサリと何かが落ちてきた。

「なに!? 岩盤が崩れてきたの?」

「いえ。主任。もっと深刻な事態です。

通信ケーブルが切断されました。」

そう言つて、アンナは、鋭利な刃物で切り裂かれたようになっていているケーブルの端を見せた。

「では、通信も切れたわけね。

ケーブルは、自然に切れたのかしら、それとも、誰かの仕業かしら。」

「誰かの仕業でしようね。」

今、センサーは、地下坑道に、熱源を発見しました。今まで氷しか無かつたはずなんです。……。」

二人が坑道の入口を見ると、防護服を着た数人の人間が銃を構えて現れ、言った。「動くな。手を上げろ。」

2 海賊の地下基地（銀河辺境・恒星SS—56008の第三惑星）

二人は、銃を突きつけられて、地下坑道内に作られた建物に連行された。

そこは、氷の坑道内に建設された建物だった。建物と言つても、むき出しの鋼材で組み立てられた大きな箱というような外観の粗末なものだった。

二人は、その中のある部屋に通された。

その部屋は、明らかに廊下や他の部屋より上質の材料で作られており、この建物のリーダーの部屋と思われた。

そして、その部屋には、リーダーらしい若者とその従者らしい若者、そして目つきの鋭い、怪しげな老人の合計三人がいた。

「お前たちは、何者だ？ 名を名乗れ！」

アンナが厳しい口調で言った。

「それは、こつちが言いたいセリフだよ。御嬢さん。」

従者の若者が言った。

「では私たちから言わせてもらおうわ。」

私たちは、宇宙大学考古学研究所の研究チームよ。

私は、マリア・スミス主任研究員。こちらはアンナ・フェリーニ研究員よ。」

マリア主任研究員が、微笑みながら答えた。

「ボス。こいつら、ただ者じゃありませんよ。」

我々を見ても、ちつとも怖気（おじけ）づいていないんですぜ。」

「じい。まあ、そう言わずに。」

では、私たちも名乗ろう。

我々は、宇宙海賊だ。

私が船長のデーヴィット。こちらが従者のアルベルト、そして長老のジャコモだ。

それで、御嬢さんたちのような考古学者さんが、こんな辺境の氷の惑星に何の用だい？」

「この星の地下に眠る、超古代文明の遺跡を探すために来たのよ。

私は、この星こそ、『太古植民説』が言うところの『人類の起源の星』だと考えているの。」

マリアが答えた。

「はあ???

なんだい、そりや。

ずいぶんと、ブツ飛んだ怪しい話だねえ。

そんな話は、詐欺師どころか、海賊でもしないよ。」

「私の研究をバカにするの!!

そう言う常識を超えたところに、新しい発見が待っているのよ。

そうやって、学問の未来、人類の未来が、開かれるのよ。」

「そりやまあ、ずいぶんと気合の入った研究ですね。

何かの役にたつんですかい?」

「確かに、実用的な研究じゃない。」

そもそも、宇宙考古学は、お金儲けのための学問じゃないわ。

でも、人類の歴史を正しく知ること、人類の未来を拓くことにつながるわ。

私はそう信じている。」

そう言つて研究の大切さを力説するマリアを、デーヴィット船長は、微笑みながら見つめていた。

「とにかく、ここまで来たのですから、地下の大空洞から氷の下の大地を調査させてほしいの。」

それから、いままでの貴方たちの採掘で、なにか超古代文明の遺物が出土したのではないかしら。あれば、それも見せてほしいの。」

「そんな！」

地下最深部の坑道で調査をするなんて、御嬢さんたちには危険すぎるよ。

もちろん、超古代文明の遺物なんて今までに見つけたことは無いよ。見つけたのは、過去に訪れた資源調査隊が氷の割れ目の中に捨てたゴミだけさ。

さあ、もう帰りなさい。

ここは海賊の仕事場だ。御嬢さんたちの来るところではない。」

デーヴィット船長が言った。

「イヤよ。ゼツタイ、イヤよ。」

宇宙大学の学長や理事会から

『金儲けにならない宇宙考古学の調査研究に資金は回せない』

と、さんざん嫌味を言われながらも、5年間もの間、耐えて、耐えて、説得して、やっと研究資金を大学からもらったのよ。

そして、はるばる三万光年も旅をして、ここまでたどり着いたのよ。

それなのに、現場も見えないで帰るなんて、できません。」

マリアが言った。

「へえ〜。」

私から見れば、宇宙大学の研究員なんて、空の星のようなお偉い存在なんだけど、ずいぶんと苦勞しているんですねえ。

初めて知りましたよ。」

「そうよ。」

それに、見損なわないでね。

考古学者は、お金は無いけど、根性はあるのよ。」

「ハハハ．．．。」

元氣なお嬢さんですねえ．．．。」

「ねえ。わかったでしょう。」

この調査に懸ける私たちの思い、意気込みが、わかったでしょう。だったら、最深部の坑道へ案内してくださいよ。

ねえ、いいでしょう？」

そう言つて、マリアは、笑顔で頼んだ。しかし、デーヴィット船長も、笑顔でこう言つた。

「いや。やっぱり駄目だよ。

話はこれでおしまい。もう帰りなさい。

じい。この二人を立て坑の出口まで、お見送りしなさい。」

「いいんですかい。このまま返しても。」

「ああ。この人たちは、私たちには無縁の人だ。

このまま無事に帰つてもらう方が、問題がないだろう。」

「承知しました。」

「さあ、行こう。」

「イヤよ。ゼツタイ、イヤ。」

「お嬢さん、私の言うことに従ってください。」

私としては、できれば、あなたに銃を突き付けて言うことをきかせるようなことは、や



りたくないんですよ。

それに、そちらのお嬢さん。

そんなに怖い顔をしないでください。

私たちは、あなたたちに、危害を加えるつもりは無いんだから。

むしろ、こんな危険な場所から早くこちらのお嬢さんを連れ出すことができるのだから、あなたにとつても悪い話じゃないでしょう。」

「……」

デーヴィット船長がそう言つても、アンナは何も答えなかつた。

マリアは相変わらずイヤだと言いつつ続けたが、アンナと「じい」と呼ばれる長老のジャ

コモに腕を引っ張られて、建物を出て坑道をもどつた。

そして、三人は立坑の底面までやってきた。

「さあ、ここから、もと来たように浮かび上がって、穴を登って行って下さい。

さあ、さあ。」

長老ジャコモが言った。

その時、アンナは立坑のはるか上に小さく見える空の景色の変化や、辺りに響く風の

音の変化に気が付いた。

「この風の音、気が付いていますか？」

このようすでは、地上は極めて強い風が吹いています。

ですから、今は、人工重力装置で飛び上がってこの穴を登るのは危険です。地上に出た途端に、強風で吹き飛ばされます。」

アンナは、長老ジャコモに行つた。

「そういえば、天気が悪くなつたようだ。

困つたなあ。ボスに相談してみよう。」

長老はそう言つて、小さな通信端末を出して電話をかけた。

「・・・はい。わかりました。」

いったん、そちらへ連れて、戻ります。」

三人は、再び、箱型の建物に戻つた。

「お嬢さん、この星の天気は私たちの方が良く知っています。

この風は、明日の夜明け前には収まります。

夜明けとともに、帰って下さい。今度は、ゼツタイですよ。」

デーヴィット船長は、戻つてきた二人に向かつてそう言つた。

「イヤよ。」

さつそく、地下の大空洞の調査をしたいわ。

夜明けまでの間でも、時間を無駄にしたいくないの。

案内してくれなくてもいいわ。自分で行きます。それなら良いでしょう？

目的を果たせば、貴方の言うとおり、大人しく帰りますから。

ねえ、ぜひ、行かせてください。」

マリアが微笑みながら言った。

「だから、それはダメだと言ったでしょ。」

船長は、苦笑しながら答えた。

「そんなの、了解していいわ。」

マリアは、また考古学の理念、考古学者の心意気、この調査の意義など、これまでに言ったことを、さらに熱心に繰り返し言いだした。

その時、船長室に海賊の手下が入ってきて、長老に耳打ちした。

耳打ちされた長老が船長に言った。

「ボス、この部屋から電波が出ているようですぜ。」

たぶんこのお嬢さんが、助けを呼んでいるに違いない。」

「おい、おとなしく発信器を出せ。」

そういうと、海賊の手下が、アンナに近づいて、強引に手荷物や衣服のポケットを調べようとした。

「おい。やめておけ。手を出すな。」

この女は、たぶん、SFだ。

女だと思つて軽く見るな。お前の手におえるタマじやない。」

デーヴィット船長が言つた。

「なに？ 『エス・エフ』つて何のこと？ どういう意味なの？」

マリアが言つた。

「お嬢さんが知らないんですか？」

「こりや、ますます、本物のお嬢さんだねえ。」

デーヴィット船長が笑つた。

「だつて、アンナは、この航海のために大学側が臨時の船員として公募して、採用された人なのよ。」

「私を知る訳はないでしょ。」

「SFとは、Security Force のことですよ。要人警備専門の凄腕の軍人です。」

本当に心当たりがないんですか。とぼけないでください。

とにかく、明日の夜明け前に帰つて下さい。それまで、この船長室でお休みください。

こんな粗末な部屋で申し訳ないのですが、この部屋がこの建物で一番良い部屋なもので、ここでお許しください。

それから、救難信号は、すでに妨害電波でブロックしていますから。」

デーヴィット船長が真剣な表情で言った。

「イヤよ。」

ぜひとも、地下の大空洞を調査したいわ。

だから、あなたにもっと考古学の大切さをわかって欲しいの。

私の話を聞いてください。そうすれば・・・」

そう言つて、マリアは、再び考古学の理念、考古学者の心意気、この調査の意義などを、熱心に語り始めた。徹夜してでも、彼を説得しようという意気込みだった。

諦めず、熱心に自説を説くマリアの顔は、本当に輝いていた。

そして、デーヴィット船長は時々相槌を打ちながら彼女の話を聞きつづけ、彼女の姿を笑顔で眺めるようになっていた。彼は、彼女の話を書くことをやめなかった。

やがて、この星の夜の時間になった。

船長は、少し考えてから、言った。

「おい、アルベルト。もうすぐ食事の時間だろう。」

客人にお食事もお出さなかつたとあつては、船長の恥だ。

せつかくの機会だから、このお嬢さんたちに、この星の魚料理を食べて頂こう。

コックのジェーンに私とじいの分も含め、四人分用意するように伝えてくれ。」

「承知しました。」

従者のアルベルトは、部屋を出て行った。

「いや、せつかくですが……。私たちは食べ物を持って来ていますので……。」  
アンナが断ろうとした。

それを遮って、マリアが驚いて、言った。

「船長。今、なんとおっしゃったの？」

「この星の魚ですって!? この星に生きた魚がいるんですか？」

「ええ、いますよ。」

この魚料理は、我々にとっては、一番の御馳走なんです。

と言つても、あなたがたのお口に合うかどうか疑問ですがね。」

デーヴィット船長が答えた。

「どういうことですか？ 生きた魚がいるなんて。」

「実は、この星の厚い氷の下には、海があるんですよ。もともとの海で、凍らずに液体の海のままに残っているとところがあるんです。」

そこには、この星が凍りつく前の海の生物が、生き残っているんです。

水に閉ざされ二度と太陽を拝めない、暗黒の深海という厳しい環境の中ですが、今でも生き残っているんです。

健気（けなげ）なものですよね。

私はこの魚料理を食べるたびに、俺たちもコイツラを見習わなきゃいけないと思うんですよ。

「そう思いませんか？」

「・・・そうですね。」

それにしても、生物の適応力はすごいですね。

でも、氷の下の生物は、いずれ凍ってしまふのでしょうか？」

「大丈夫でしょう。」

地下には、火山の熱水が湧きだす『ホットスポット』もあるようですし、そもそもこの星は一応、ハビタブルゾーンにありますから、『氷の星』と言っても外惑星と違って温かい方ですよ。」

「そうですね。」

では、皆さんは、地下の海に潜って、魚を取る漁をしているんですか？」

「いえいえ。海があるのは、地下三キロメートル以下ですから。」

そんな高圧で暗黒の環境に耐えて漁をするなんて、我たちには、とてもできません。

私たちは、時々、氷の裂け目から吹き出す海水に交じって地表に吹き出される魚たちを拾い集めているだけです。」

「そうですか。では、頂きます。」

「主任、……。」

「良いのよ。アンナ。」

毒が入っていないことを示すために、船長さんも一緒に食べるとおっしゃってるのよ。お料理を頂きましょう。

ここに来ないと、食べられないお食事だわ。」

やがて、料理が運ばれてきた。香辛料の良い香りが部屋に満ちた。

それは確かに「魚」の煮込み料理、ポトフだった。

しかし、切り身になってお皿に盛られた「魚」の姿は、奇怪だった。

食べやすいように鱗（うろこ）が剥ぎ取られているが、表皮の色は真っ白だった。しかも、この魚には目がなかった。

そして、一匹の魚が切られて四人のお皿に分けて盛られている様子から、魚の全身の形を推測すると、かろうじて魚のような形を維持しているものの、極端に大きな口があり、ひれとヒゲが触角のように異様に長く伸びた、奇怪な形をしていると思われた。

しかし、マリアは、その姿を見ただけで食欲を失い、そんな魚料理を前に、こう言った。  
「ああ、良い香り。」

コックさんは、私たちのために貴重な香辛料を惜しみなく使って頂いたのですね。



あとで、感謝の言葉を伝えてください。

頂きます。」

そういつて、マリアは、魚の切り身をフォークで取りながら食べ始めた。

「ああ、おいしいスープの味。」

氷の中で、こんな温かい料理を頂けるなんて、とても贅沢ね。

魚の切り身も、柔らかくて、結構、脂がのっついて、おいしいわね。」

「本当ですかあ。」

本当に、おいしいと思っっているのですか？」

長老ジャコモは、いぶかしげに聞いた。

「そうよ。なかなかおいしいわ。」

なにより、『おいしいものを食べさせようと、一生懸命に作った』というコックさんの

思いが伝わってきますもの。」

そういつて、マリアは微笑んだ。

そのマリアの笑顔を見て、長老の表情が和らいだ。

その様子を見ていたアンナは、また、同じことを思った。

『この人の笑顔は、海賊たちの心も明るくする。』

本当に不思議な人だ……。』

食事が終わろうという頃に、ひとりの海賊の手下が入ってきて、船長に言った。

「船長。そろそろ、荷出（にだし）の準備をする時間です。」

「よし、いま、行くぞ。」

では、お嬢さんたち。これで失礼します。

今夜は、徹夜で仕事なんでね。

夜明け前には、じいがお迎えに来ますから。

それまで、お嬢さんたちは、この部屋でごゆっくりとお過ごしください。」

船長はそう言った。

これを合図に、海賊たちは全員、部屋を出て行ってしまった。

翌日、夜明け前の暗い闇の中で、マリアとアンナは、じいと呼ばれる長老ジャコモに見送られ、立て坑を登って、シャトルに帰った。船長は見送りに現れなかった。

長老ジャコモは、別れ際にマリアに一つの箱を渡した。

「コックのジェーンから、あなたにお土産です。」

あの料理をおいしいと言って食べてくださったと聞いて、とても喜んでいました。その感謝の気持ちです。

箱の中身は、この星の氷の下で生きる、魚、エビカニ、イカ、ナマコ、貝など、各種の生物の氷漬けです。

せつかく調査に来たのに、何の成果もなくお帰りになるのでは残念でしょう。サンプルとしてお持ち帰りください。

もちろん、みな食べられますので、食べて頂いても良いんですが……。ハハハ

### 3 考古学調査隊のキャンプ

マリアとアンナが無事に帰ってきたので、他の研究員は大喜びだった。

「いやあ、帰ってこられてよかったです。」

通信が途絶えたのは、ケーブルが切れたからだと知った時は、パニックでしたよ。」

「でも、アンナさんから、無事だと言う通信があったので、ほっとしましたよ。」

安心して、待つことができましたから。」

「あれは、正しくは、救難信号なんですけど……。」

「え!? そうなんですか? 分かりませんでした。……。ごめんなさい。」

「いやあ、たとえ救難信号とわかってても、どう対応したら良いのか知りませんでしたし、ただ安心して待ってればいいのかと思っていました。」

「これから、調査マニュアルを良く読んで、こういう時はどうしたらいいのか、よく勉強しておきます。」

「。。。。。」

キャンプに残った調査隊のメンバーは生粋の考古学者ばかりなので、救難信号を受けた時にはどう対応するか知識・経験がなく、全く頼りにならなかつた。

その事実を知って、アンナは怒る気にもなれず、黙ってしまった。

「とにかく、主任、よくぞご無事で。」

「今から朝食ですが、祝杯をあげましょうか。」

他の研究員は無邪気に喜んでいた。

彼らも、研究所の上司であり、この調査のリーダーであるマリアが戻ってきたので安心していた。実際のところ、彼らは、なにもかもマリアに頼り切っていたからだ。

その時、夜明けの景色を写真に撮るため外に出ようとしたケンブリッジ研究員が、あわてて戻ってきた。

「主任！ たいへんです。」

空に、大きな風船のようなものが飛んでいます。」

「ええ？」

研究員は全員、外に飛び出した。

空には、大きな円筒形の形をしたものがふわりと浮かんでいた。それは、少しずつ高く、高く、空を登っていくようだった。その表面は、金属のような光沢を帯び、夜明けの日の光に照らされて、輝いていた。

「大きいですね。長さは1キロほどあるでしょうか。」

なるほど、面白い仕組みですね。」

アンナが言った。

「アンナ、どういう仕組みなの？」

なぜなの？ あんな大きなものが風船のように浮かぶなんて。」

マリアが聞いた。

「たぶん、浮き上がる仕組みは重力制御ですね。」

私たちが立て坑を登ってきたのと同じ仕組みで、スピードはゆっくりですが大量の物資を運ぶ仕組みでしょうね。」

なるほど、こういう使い方もあるんですね。」

「では、これで、大気圏外まで氷を運ぶのですか。」

「そうだと思います。」

「ふーん、こうやって、夜明けの光に照らされながら、穏やかな空を昇って行くのね。なかなか美しい光景だね。」

あの人も、乗っているのかしら……。」

マリアは、空を見つめて微笑んだ。

その時だった。

「うわああああ〜〜〜!!」

空を見つめていたマリヤは、いきなり目を抑え、大声を上げて、苦しみ始めた。研究員たちが驚いてマリヤの周りに駆け寄った。

「主任。どうされました?」

アンナが心配して聞いた。

「何か、ここで起こるのよ。恐ろしいことが……。逃げましょう。」

マリヤが言った。

「そうですね……。」

みなさん。どうしても失いたくない大事なものだけ手荷物として持って来てくださ  
い。

それを持って、とにかくシャトルへ避難しましょう。」

アンナが言った。

「ええ、どういうことですか?」

ほかの研究員は戸惑っていた。

「主任の悪い予感には当たります。ゼツタイ当たります。」

アンナが厳しい表情で言ったので、みな慌てて荷物を取りに戻った。

マリヤも大切なものがあると言って荷物を取りに戻った。

その時、ズズンという地鳴りに続いて、激しい地震が起こった。

「みなさん、急いでこちらへ。」

アンナが、荷物を持って集まってきた皆に避難誘導の指示をした。

そして、調査隊全員を乗せると、シャトルは浮上し、キャンプ周辺を旋回して上昇した。

#### 4 考古学調査隊のシャトル

「熱い、熱い、身を焼かれるような波動を感じたわ。これは何の『知らせ』かしら。」

アンナ、上空の宇宙船から気象観測データを取って下さい。特にこのあたりの地表の観測データを取り寄せてください。」

シャトルの操縦室にいるマリアが言った。

「はい、主任。」

そう言われると、アンナはすぐに操縦席でキーボードをたたき始めた。

「主任。わかりました。」

地表の温度が上がっています。地磁気の異常も観測されます。

それにこの地震、ということは……。」

「アンナ。この土地の地形って、周辺の山脈によってリング状に囲まれているよねえ。」

「そうですね。少し上昇してみます。」

アンナは、シャトルを上昇させて、キャンプから離れた。

「ああ、本当だ。上から見るとよくわかる。主任の言うとおりです。」

こういうのを外輪山と呼ぶのですよね〜。学校で習いましたよ〜。

他の研究員が、マリアたちの心配を知らず、楽しそうな声を上げた。

「正確には、噴火湾というのでしょうか。古代の噴火口が海とつながった形でしょう。」

アンナが、訂正した。

「たぶん、火山の噴火よ。間違いないわ。」

「そうかもしれないですね。」

地底の氷の温度が零度と温かかったのは、噴火の前兆とみるべき地熱の上昇のためだったのでしょうかね。

それでは、このまま、いったん衛星軌道上の宇宙船に戻り、火山噴火の様子を見守りましょう。」

アンナは、そう言ってシャトルを更に上昇させようとした。

「待って、あの人たちがまだ残っているんじゃないかしら。」

マリアが言った。

「ええ!? あの人たちって、誰ですか?」



他の研究員たちが言った。

「あの風船のようなものを飛ばした人たちよ。自分たちは海賊だつて言つてたわ。」

「穴の中で出会つたのですか？」

「そうよ。ここは俺たちの仕事場だからって、追り返されたわ。」

ねえ、アンナ。あの人たちに連絡が取れないかしら。

彼らを見捨てて、自分たちだけで逃げる訳にはいかないわ。」

マリアが言った。

「分かりました。彼らの通信電波を解析してみます。」

アンナは、シャトルが火山の外輪山から距離を取つて旋回するように自動操縦をセツ

トすると、通信コンピューターを操作し始めた。

「電波が発信されているのは、確認しました。でも、通話が解析できません。」

「困つたわねえ。」

あのおじいさんが持っていた通信機は、とても古いものだったから、話が通じないの

かしら。こんな非常時なのに……。」

マリアは、ため息をついた。

「古い機種!?! そうか……わかった。」

アンナは、通信コンピューターを別のチャンネルに切り替えて、操作した。

すると、いきなり、大きな声が響いた。

「至急、至急。船長、聞こえますか。」

こちらの仲間は、無事です。なんとか地上まで脱出できそうです。

何度も言いますが、我々を救出するために、船で降りてくるのは、やめてください。「じい。何を言っている。お前たちを見捨てるわけにはいかない。必ず助けに行く。」

「船長、危険です。先に行ってください。」

俺たちは自力で、噴火口の外まで避難します。

船長が船に戻っても、俺たちを乗せていると逃げ遅れて、船ごと火山の噴火に巻き込まれてしまいます。」

「何を言ってるんだ。」

すでに、船は戻り始めている。お前たちを見捨てることはできない。」

緊迫したやり取りが聞こえてきた。

そこへマリヤが割り込んだ。

「船長、海賊のみなさん、聞こえますか？」

宇宙大学調査隊のマリヤ・スミスです。

こちらのシャトルには、残ったみなさんに乗せる余裕があります。

私たちの船に乗って下さい。」

現在位置を知らせてください。救援に向かいます。」

「ええ！ 御嬢さんたち、まだそんなところにいたのか！

さっさと、逃げなさい。」

船長が言った。

「何を言ってるの。みなさんを見捨てて逃げるわけにはいかないわ。」

マリアが言った。

「大丈夫です。」

こちらのシャトルは、見かけより頑丈でスピードが出ますから、残った皆さんを助けて噴火から逃げることも出来ます。

それより、早く現在位置を教えてください。」

アンナが口を挟んだ。

「船長、SF (Security Force) ができると言うなら、間違いないでしょう。」

この際、助けてもらいますよ。

ですから、船長、船をそのまま上昇させてください。降下するのは危険です。」

長老ジャコモは、冷静に言った。

「何、言ってるんだ……。」

「御嬢さん、ジャコモだ。こちらは、ようやく地表に出たところだ。

誘導電波を発信するので、来てくれ。待っているぞ。」

「了解した。」

アンナは、シャトルを誘導電波が出ている方向に向けて、飛ばした。

やがて、氷の上で大勢の人間が手を振っている姿が見えてきた。

シャトルはその近くに着陸して、海賊たちを乗せ、発進した。

シャトルの貨物室に乗った海賊たちに、操縦席にいるアンナが言った。

「今、椅子を出しますから、そこに座って下さい。」

急上昇しますから、人工重力が対応できず、倒される恐れがありますので。」

たちまち、シャトルの荷物室の壁から椅子がせり出してきた。

それを見て、長老ジャコモは思った。

『なんだ、この椅子は。幅がやけに広い。』

戦闘用の防護服を着ていても、楽に座れるサイズだ・・・ということは。

思い出したぞ。この椅子には見覚えがあるぞ。

やっぱり、この船は、軍用機だな。

外見は偽装されているが、中身は白兵戦に突撃する兵士を運ぶ帝国軍の強襲艦だ。敵

艦に体当たりもできる、頑丈な船だ。

これなら、火山の噴火に遭遇しても大丈夫と言うはずだ。フフフ・・・。』

シャトルは海賊たちを乗せて、衛星軌道上の宇宙大学の小型宇宙船まで急上昇した。やがて、シャトルは、小型宇宙船とドッキングして、まず他の研究員を乗り移らせた。他の研究員は、海賊を怖がり、顔も見たくないと言って小型宇宙船の自室に早く引つ込んでしまうことを強く望んだからだ。次いで、運んできた荷物も移された。

その後、マリアとアンナは、貨物室を訪れ、ジャコモ達に会った。

「けがをしている人はいませんか？ みなさん、大丈夫ですか。」

マリアが言った。

「それと、保存用の宇宙食ですが、飲み物や食べ物をお持ちしました。」

アンナがそう言って、カートで運んできた大きな箱を渡した。

「けが人はいません。」

それに、食事までご配慮いただき感謝します。

なにせ、こちらは、朝の食事もこれからと言う時に、逃げ出してきたものですから。」

ジャコモが礼を言った。

他の海賊たちは、歓声をあげて宇宙食を食べ始めた。

「それで、次は、貴方たちを、母船にお送りするのですが、・・・。

ジャコモさん、母船に連絡が取れますか？

私の方から連絡する必要があるなら、通信方法を教えてください。」  
アンナが言った。

「いや。その必要はありません。位置は分かっています。」

この星の赤道上の静止軌道で、この調査船とほぼ反対の位置にいますから、そちらに向かってください。」

「わかりました。」

シャトルは発信して、母船に向かった。

その途中、地上では、火山の大噴火が起こっていた。

マリアたちのいたキャンプや海賊たちの基地は跡形もなく吹き飛ばされ、辺り一面は、巨大な噴火口になっていた。

やがて、小型宇宙船の前方に、古めかしい移民船のような船の姿が現れた。その近くに、夜明けに空を飛んでいるのを見た飛行船のような形の超大型の荷物運搬船が停泊していた。

「あの母船は、トレスポンダーを発信していません。」

ですが、外見から型式を判断すると、200年以上前に建造されたと思われる移民船に似ています。」

アンナが、コンピューターの船舶データベースを操作しながら、言った。

「あの船の正体を探るのは、やめましょう。私たちにとって、意味のないことだわ。」

マリアが言った。

シヤトルは、誘導電波にしたがって、母船とドツキングし、救助した海賊たちを母船に返した。

「うーん。これで、用は済んだけど……。」

これで帰るのは、何か心残りなのよねえ。……。」

マリアは、手を口に当てて、少し考える様子をした。

「そうだ、まだ船長に会っていないわ。」

もう、母船まで帰ってきているはずよね。運搬船が見えたもの。

それなのに、あの人、私にお礼の一つも言つて来ないし……。

失礼しちやうわ。

これは、ひとこと、言つてやらないとねえ。」

そう決意すると、今すぐに船長に会いたくなつたマリアは、まだ繋がっていたドツキングブリッジを走つて渡り、一人で船のドアを開けて海賊たちの母船に乗り込んでいった。

その後を、あわててアンナが追つた。

## 5 「海賊」たちの母船

海賊たちの母船の内部は、想像以上に旧式だった。エアコンの浄化機能が低いためか、船内の空気はよどみ、悪臭がした。

しかし、マリアは気にせず、船内に入って行った。

やがて、マリアたちの侵入に気付いた海賊の男たちが、銃を突きつけて、マリアとア  
ンナの行く手を遮った。

「おい。止まれ。何の用だ。」

『『おい』とは、ひどいご挨拶ねえ。』

先ほど、ジャコモさんたちを助けてあなた達の元に送り届けたのは、私たちなのよ。

船長を呼びなさい。」

マリアが言った。

「う．．．．」

おい、とにかく、船長に連絡を．．．．」

「それが、あの．．．．」

海賊たちが何か、ひそひそと話している間に、マリアは船の中を見渡した。

すると、廊下の角や半開きのドアの間から、子供たちがのぞいていた。その表情は好奇心にあふれた、澄んだ目をしていた。そのそばには、その母親や祖母らしい大勢の女



たちが、同じように好奇心と、そして驚きに満ちた目で、マリアたちをのぞいていた。マリアが、彼らに笑顔を向けた。

すると、子供たちはすぐに笑顔を返してきた。しかし、大人の女たちはますます驚きの表情を深めていた。

「おい。みんな、下がれ。わしがお相手する。」

やがて海賊たちの後ろから、長老ジャコモが姿を現した。

ジャコモは、宇宙船の床に片手片足をつけて頭を深く下げる、臣下の礼をした。

それを見た海賊たちが驚きの声を上げたが、それにかまわず、ジャコモは言った。

「先ほどは、私たちをお助けいただき、御礼の申し上げようもございません。」

この御恩は、決して忘れません。そして、御恩は、必ずお返しします。我らの命と海賊の誇りにかけてお誓い申し上げます。」

そう言つて、ジャコモは再び深く深く頭を下げ、そして言った。

「ですが、お嬢様。この船から直ちにお帰り下さい。」

ご覧のように、ここは我ら海賊たちの棲家（すみか）です。

お嬢様が足を踏み入れるのにふさわしいところではございません。」

「ジャコモさん。ごめんなさい。」

あなた達達の家に、許しも得ないで入り込んだ非礼は詫びます。

ただ、私は最後に一言、船長にあいさつをして帰りましたただけです。船長に会わせてください。」

「仰（おっしゃ）ること、真（まこと）に、ごもつともでございます。」

この場合は、船長自ら、お嬢様にお礼を申し上げねばならないところでございます。しかし、お許しください。船長は今、船におりません。

噴火の前に、まだ地上に残った仲間を救うために、シャトルで降下していったそうです。」

「なんですって……。まだ、地上に残っている人たちがいたのですか!？」

それに、噴火の前とおっしゃいましたね。

今、船長はどうしているんですか？ 連絡は取れているんですか?」

マリアの問いに、ジャコモは首を振った。

「ええ〜!! デーヴィットが行方不明なの!!」

マリアは大きな声で叫んだ。

その後、マリアは涙を流し、今にも気を失って倒れそうな状態になってしまった。

そのため、マリアは、彼のことを「船長」と呼ばず、「デーヴィット」と名前と呼んでいることには気が付かなかった。

それを見たアンナはマリアの腕を取って寄り添った。そして、二人は、ドッキングプ

リッジを通って、シャトルに帰っていった。

二人がシャトルに戻り、ドッキングが解除されたことを確認して、ジャコモが言った。「誰だ!? 二人を船の中に入れたのは?」

俺が船に戻った時に、ドアはちゃんとロックしたはずだ。」

「いえ。俺達じゃありません。」

あいつらが、勝手に入り込んできたんです。」

「嘘をつくな。若くて美人の女たちが来たと思って、誰かがドアを開けたんだろう。」

「本当です。俺たちは何もしていません。」

「まあいい。無事に済んだからな。」

言っておくが、あいつらはタダモノじゃないぞ。俺には分かる。

従者のようにふるまっていた女は、強いぞ。SF (Security Force) と言っても良いレベルだ。素手でお前たちの五人や十人、相手に出来る凄腕だぞ。

それに、あの軍用シャトルも、軽々と操縦していやがった。

そんな凄腕の奴を当たり前のように従えている、もうひとりの女は、さらに正体が知れない、本当に怖い奴だ。

笑顔に騙されるな!

あんな奴らに関心を持つな。いいな。」

そう言っているジャコモのそばへ、一人の黒い喪服姿の老女が近づいてきて、言った。「ご苦労様。ありがとうございます。」

## 6 考古学調査隊のシャトル

マリアとアンナを乗せたシャトルは、海賊の母船から離れ、宇宙大学の調査船に向かった。

マリアは、操縦室の助手席に座って、しばらく泣いていた。

やがて、泣き止んだマリアが言った。

「でも、変だわ。」

私、デーヴィットに会っても、彼がまもなく死ぬという運命を感じなかったわ。

珍しいことねえ。

それとも、彼は、私が泣くほど大切な人じゃなかったのかしら。

ふうむ……。」

そう言つて、マリアは考え始めた。

「やっぱり、そうだわ。デーヴィットは、まだ生きているのよ。

私が助けに行かなくちゃ。

アンナ、通信機を貸してください。」

マリアは、シャトルの通信機を海賊たちのチャンネルにセットすると、通信を始めた。

「こちらは、宇宙大学考古学調査隊のマリア・スミスです。」

海賊船、聞こえますか？

これから船長を助けに地上へ行きます。

船長の降下した位置を教えてください。」

しかし、返事は無かった。

「うーん。教えないつもりかしら。」

そうだ、考古学調査隊のメンバーに連絡を取っておかないと・・・。」

マリアは、通信チャンネルを切り替えると、宇宙大学の小型宇宙船に連絡を取った。

「こちらマリア・スミス。調査船、聞こえますか。」

「はい。聞こえます。」

「海賊たちは無事に母船に送り届けたわ。」

でも、まだ地上に人が残っているらしいの。これから救助に向かうわ。」

マリアが言った。

「あの人。地上では火山の噴火もあり、何が起こるか分かりません。」

みなさん。今度は、非常対策マニュアルをちゃんと読んで、もしも私たちが24時間

たつても戻らなかつたら、救難信号を発信して助けを呼んでください。」

お願いします。

皆さんだけでは、その宇宙船で宇宙大学まで帰れないでしょう？」

アンナが口を挟んだ。

「そ、そ、そうですね。ちゃんと助けを呼びますから……。」

「でも、そんな怖いことを言わないでくださいよ。我々だけで帰るなんて……。」

緊張した声で、研究員たちが答えた。

「相変わらず、海賊船からは連絡がありません。」

主任。どういたしましょうか？」

アンナは、シャトルを宇宙大学の調査船に向かって飛行させながら、マリアに聞いた。

「そうねえ、船長が仲間を探しに地上に降下して音信不通になったと言うなら、降りた場所は噴火口付近以外に考えられないわ。」

「噴火口の近くを空から探してみましようか。」

「承知しました。」

やがて、シャトルは、噴火口周辺の上空を飛び地上の様子を探したが、手掛かりは得られなかった。

「やっぱり、火山の噴火に巻き込まれたのかしら……。」

「あのおう、お言葉を返すようですが……。」

私としては、別の可能性の方が高いと思います。」

「別の可能性!? なに、それ。言ってみて。」

「はい。ジャコモさんが真実を言っていないと言うことです。」

「私たちは、ダマされたと言うことですか……。」

「ダマされたというか、彼らの船から追い返されただけというか……。」

「うーん。デーヴィットは、やっぱり、あの船にいたのね。」

何のために、そんなことをしたのかしら……。」

「わかりません。……。」

これまでずっとマリアのそばに寄り添っていたアンナの『女のカン』は、ひとつの答えを見つけていた。しかし、彼女はそれを言わなかった。

「もおくく。失礼しちゃうわねえ。」

やっぱり、デーヴィットに直接会って、ひとこと言ってやらないとね。

アンナ、船を海賊船に戻してちょうだい。」

「よろしいのですか? 彼らが乗船を認めるとは思いませんが……。」

「その時は、その時よ。無理やり乗り込んででも良いわ。」

この船が軍用の強襲艦だってことは、私だって知ってるわよ。

私も、考古学者になる前は、軍人になろうと思っていた時もあったのよ。」

「はあ……」

アンナは自分の『女のカン』が当たっていることを実感するとともに、マリアがまだそれを自覚していないことを知って、ため息をついた。

シャトルが、海賊の母船をリーダーで捕捉し、接近しようとした。

しかし、海賊船と運搬船はシャトルの接近に気付いたらしく、直ちに超高速跳躍して通常空間から消えてしまった。

「もお〜〜！ ジャコモのヤツ、命の恩人に対して、態度悪いわねえ。」

『御恩は、必ずお返しします』なんて言ってたのに、やってくれるじゃないの。

アンナ、時空震の航跡を探查して、あの船を追いかけてよ。この船はそう言うことも出来る船のはずよ。」

「その通りですが、そこまでなさる御気持ちですか。」

私としては、『去る者は追わず』でもよいかと思いますが……」

「私の気が済まないの。バカにしているわよ。ホント。」

「はあ……。では、お嬢様のおっしゃるとおりにいたします。」

二人を乗せたシャトルは、航跡を追って、超高速跳躍した。



## エピローグ2 マリア王女の伝説 2

## 7 「海賊」たちの母船

海賊たちの母船と運搬船は、亜空間を飛行して、恒星系SS—56008から一光年ほど離れた宇宙空間にタッチ・ダウンした。

「よし、どうやら振り切ったな。」

長老ジャコモはそう言い、ブリッジのデーヴィット船長は、だまつて肯いた。

「あ、船長。後方にプレ・ドライブ反応があります。船が出てきます。」

「ええ！ まさか、追いかけてきたのか？」

まもなく、母船、すなわち海賊船の後方に、一台のシャトルが現れた。

「こちら、宇宙考古学調査隊の連絡シャトル、パイロットのアンナ・フェリーニです。

デーヴィット船長、そちらの船に乗船の許可を求めます。」

「だめだ。帰れ。」

長老ジャコモが言った。

「ジャコモさん。聞いてください。」

マリア主任は、そちらが許可しないなら、カづくでも乗り込むとおっしゃっています。

失礼ながら、貴艦の現状では、体当たりの強襲上陸を受けると船体に重大なダメージが発生するのではないでしょうか。

私どもはあなた達やご家族のみなさんを傷つける意図はありません。

マリア主任がデーヴィット船長との面会を求めているだけです。」

アンナが言った。

「今度は、脅してきやがった。アイツ、本性を出してきたな。」

「もういいわ。」

向こうが本気なら、この船では抵抗できないわ。

これも、サンタ・マリア号と名付けられたこの船の運命なのかしら。」

彼女は、この船のドアに銀河聖王家の王族に対する自動認証機能がついていることを知っていた。

250年前に、この船が当時最高の豪華客船として作られたときの進水式には、聖王家の王女様をお招きして、彼女により盛大に支綱切断（しこうせつだん）の儀式が行われたという。

その時、王女様の異例の行幸を喜んだ船のオーナーが、この船のドアに、軍艦のような自動認証機能を付けたという。

『王女様、いつでもこの船にお越しく下さい』と。

これをいたく喜んだ王女は、この船に自分の名前を与えたという。

『サンタ・マリア号』の誕生である。

250年後、その機能により、船のコンピュータは聖王家の末裔であるマリア王女を認識し、ドアを開けたのだった。もちろん、進水式に臨席したマリア姫とは同名だが別人である。

「その後、移民船に改造されて、そして私たちの船になつてもその機能が残っていたのね。」

でも、デーヴィット、貴方の立場は分かっているでしょう。」

黒い喪服姿の老女が言った。

「はい。お母様。自分の立場は十分、承知しています。」

やがて、ドッキング・ブリッジが二つの船を結んだ。

そして、マリアとアンナの二人は、ドッキングブリッジを通り、海賊船のドアの前までやってきた。

ドアの前に立った二人に、海賊船の内部から声が聞こえた。

「私は、この船に乗る民(たみ)の族長を勤めております、テレサと申します。夫亡き後、族長を勤めております。」

最後のお願いを申し上げます。

この船は、お嬢様にお乗りいただける素性のもものではございません。

どうか、そのことをご賢察いただき、お帰り下さい。」

「おっしゃりたいことは、わかります。

でも、私は、デーヴィットに会いたいです。会って、言いたいことがあるのです。

ドアを開けてください。」

「そうですか……。」

では、仰せに従います。

しかし、船のドアは、お嬢様自らお開き下さい。そして、お嬢様の御意志でお乗りください。

この船には、お嬢様に乗船の許可を差し上げることができません。

そして、それは、はるか昔にこの船が名づけられた時から決まっていることです。」

「テレサさん、私はあなたの船の歴史は知りませんが、お話は分かりました。

今、私は、私の意志でああなたの船に乗ります。」

そう言うと、マリアはドアのキーを押した。

少しの間をおいて、ドアが開いた。

ドアの向こうには、黒い喪服姿の老女がひざまづいて、頭を床に着けていた。

「テレサでございませす。」

船長室は、こちらでございます。」

老女は、顔を上げると、船の奥を指差した。

そして、マリアとアンナの二人は、ジャコモに先導されて船長室に向かつて船の中を歩き出した。

その途中、あちこちのドアの陰や廊下の角から、大勢の男女や子供たちが二人の姿を覗いて（のぞいて）いた。女たちの中には、両手を合わせて祈っている者もいた。乗員たちの中には、自分たちが銀河帝国に捕獲されたのかという不安が広がっていたからだ。

やがて二人は、船長室の前までたどり着いた。

「こちらです。」

ジャコモに促されて、二人は船長室に入った。

「やあ。いらっしやい。」

船長室の応接椅子から立ち上がったデーヴィット船長は、二人に対して何事もなかったように声をかけた。

これに対して、マリアも何事もなかったような挨拶を返そうとした。

しかし、彼女の心の中に、いろいろな思いが同時に湧き上がった。自分を騙して船から追い払った非礼な振る舞いに文句を言いたかった。他方、船長が行方不明と聞かされてどれだけ心配し、つらい思いをしたか、聞いてほしかった。

このため、彼女は興奮して言葉に詰まってしまった。  
やがて、マリアは、叫んだ。

「なぜ、私に会おうとしなかったの。」

バカ、バカ、バカ……。デーヴィットのバカ……。!

そう言つて、応接セットの机の上にあつた小物や椅子のクッションなどを手当たり次第にデーヴィット船長に投げつけ始めた。

「バカ、バカ、バカ……。」

あなたが行方不明と聞いて、私がどれだけ心配したと思つているの。」

マリアは、あいかわらず船長室のものを次々と手に取つては、デーヴィット船長に投げつけている。ついには涙を流しながら、投げ続けている。

「シャトルであなたを探しに行つても見つからないので、あなたが死んだかもしれないと思つて、私がどれだけ悲しい思いをしたと思つているの。」

バカ、バカ、バカ……。」

それに対して、デーヴィット船長は、何も言わず、投げられたものを受け止め続けていた。

「あんな嘘をついてまで、私から姿を隠すなんて……。」

私のことを何だと思つているの……。」

マリアは、投げるものが無くなると、船長につかみかかろうとした。しかし、船長に優しく肩を抱かれると、彼の胸で激しく泣き始めた。

この時、船長室には、長老ジャコモ、従者のアルベルト、アンナ、そして遅れてきたデーヴィットの母・テレサがいた。また、船長室の空いたドアから大勢の人がのぞいていた。

テレサは、二人の様子を見ていたが、船長が「すまなかった。」と優しく答えて、マリアの肩を抱いたのを見て、小さく首を振った。

そして、テレサは、他の人に部屋を出るように促し、自分も部屋を出た。そして、船長室のドアを閉めてしまった。

8 チアキの私室（帝都クリスタルスター上の銀河帝国の王宮）  
「・・・と、まあ、私がお姉さまから聞いたのは、こういう話よ。」

こうして、マリア王女は、宇宙マフィアの大ボスの息子、デーヴィット・レオニーニと結婚したのよ。

そして、私たちが会ったレオニーニ家のグランマがその子供、サーシャがその曾孫（ひまご）に当たるといふ訳よ。」

チアキは、グリユーエルと茉莉香にマリア王女の話を明かした。

二人は、帝国女学院の授業が終わってから、チアキから大事な話があるからと言って呼び止められ、チアキと一緒に王宮までやってきたのだ。

「チアキちゃん、こんな大事なこと、私たちに話しても良かったの？」

茉莉香が言った。

「良いのよ。」

母上も、そろそろ二人に話しておいた方が良い頃だとおっしゃってたわ。」

「それって、どういう意味なのかなあ？」

茉莉香が聞いた。

「私が、知る訳ないでしょ。茉莉香、心当たりがあるんじゃないの？」

チアキが言った。

「う．．．ん。心当たりねえ．．．。」

茉莉香は、女王からチアキの海賊シヨ一の事情を聴かれた時のこと思い出したが、チアキにかかわることなので言えず、わからないふりをした。

グリユーエルも何か心に秘めているようで、黙っていた。

「それにしても、完璧に秘密が守られていたんですね。」

グリユーエルが感慨深げに言った。

「今でも、第一級の王室機密だからね。そして、疑惑を抱かれないように、綿密な偽装工



作が行われたそうよ。

そのために、マリア王女が、聖王家から脱走しようとして、自分で作ったニセの死亡届まで、利用したそうよ。

公式には、マリア王女は、宇宙大学に入る前に事故で死んだことになっているの。

そして、宇宙大学には、マリア・スミスという一般人の女子学生として、入学したの。」

「お姫様の死亡届なんて、そんなこと、簡単にできるの？」

茉莉香が、不思議そうに聞いた。

「もちろん、そんなの、当ても王室にはバレバレよ。」

最初は、王女のワガママとして、そんな死亡届は無視されていたそうよ。」

「そりゃまあ、そうでしょうねえ．．．ナハハハ．．．。」

茉莉香は、苦笑した。

「ただ、宇宙大学には、王室からは何も教えなかったそうよ。彼女が、聖王家の、それも青薔薇家の王女であるということとか．．．。」

オテンバ姫、マリア王女の意志を尊重するという建前になっていたらしいけど。」

「それにしても、マリア様は、本当にオテンバさんだったのですね。」

王家を脱走しようとするなんて．．．私にはとても真似できませんわ．．．。」

グリユーエルは、笑顔で、すこしブリッコ気味の相槌を打った。

グリユーエルがこんな態度をする時は、本心は言葉通りではないのだが……。

「それには、彼女なりの事情があつたそうよ。」

「そうなのですか? ……」

グリユーエルが興味深そうに聞いた。

「そうよ。彼女は小さな子供の頃から、独特のカンが鋭くて、突然、何かを感じて、怯えたり悲しんだりすることがあつたそうよ。」

そのあと、決まって自然災害が起こつて大勢の人が死ぬとか、親しい人が事故や病気で死ぬといった事件が起こつたそうよ。」

「予知能力なのでしょうか?」

グリユーエルが聞いた。

「そんな『能力』は存在しないと、現代科学では結論が出ているでしょ。」

ただ、医者診察では、自然災害については、彼女は気温、気圧、地磁気、電磁波、雲の動き、音などで、普通の人間には感じ取れないはずの変化を感じて、不安を感じていたらしいわ。

でも、何を感じて、人の死を言い当てたかは、研究されたことがないそうよ。そんな研究は、インチキ科学だからね。」

「そうですね。マリア様は、本当に鋭い感性の持ち主だったのでですね。」

でも、人の死を預言するような行動は、周囲の方々からは、喜ばれないでしょうね。」  
「そうよ。それで、ついたあだ名が『聖王家の巫女（みこ）』。」

それも、巫女は巫女でも、死神の巫女よ。つまり死神からのメッセージを託される巫女として、陰で恐れられたそうよ。」

「それじゃあ、他の王家の方々とは、・・・。」

「そうよ。表向きはともかく、本音では仲間外れにされていたそうよ。」

不幸の預言なんて、誰も聞かされたくないからでしょ。

その結果、彼女は、王家に居場所がないと感じて、脱走したと思われるわ。」

「考古学という学問を志したのも、そういう影響があるのでしょうか。」

「そうよ。」

過去を研究する仕事なら、自分がこれ以上、忌み嫌われることも無いだろうってね。」

さすがのチャアキも、ここまで話すと、少し気分が落ち込んできたようだった。

『王女様は、そんな逆境にもめげず、御自分の道を切り開き、愛を貫かれたのですね。』

グリユーエルは、チャアキの話を聞いて、胸が締め付けられる思いがした。

こういう話を聞くと、今までの自分なら

『銀河帝国の聖王家と宇宙マフィアのレオニーニ家は、仇敵とも言える関係。』

その壁を乗り越え、両家のプリンセスとプリンスが、強い愛情で結ばれたのですね。

きつと、一目ぼれでしょうねえ。

「真実は、お芝居よりもはるかにロマンチックですわあ。」

と、目をつむり、目を輝かせた。

しかし、もうそんな気分になれなかった。

「マリア王女は、いまのセレニティの王宮における自分と同じような立場におかれていたと思っただけだ。」

「今や、セレニティ王国では、改革の熱がまったく冷め、保守派・王制派が完全に復活していると聞いている。それなら、もはや祖国の王宮には、改革派の自分の居場所はないのだから。」

「ねえ、ねえ。その話、すごい話だねえ。」

「魚料理のこととか、まるで、実際に見てきたようなリアルな話だね。」

茉莉香が驚いて、そう言った。

「グリユーエルと違い、茉莉香の表情はいつものように明るい。」

「それについては、私も、茉莉香と同じように、疑問があつてね。」

「とにかく、母上は詳しく知り過ぎているのよね。まるで、自分が、その場において、すべてを見ていたみたいだ。」

「だから、まだ、何か、私たちに隠しているのよね。」

チアキが言った。

茉莉香が魚料理の話をして、グリユーエルは、いつそう胸が締め付けられる思いがした。

自分にとっても、その魚の運命は他人事ではないと思われたからだ。

『氷の下の、暗黒の海に閉じこめられても、生き続ける魚。』

それは、宇宙マフィアである自分たちの境遇に似ているとデーヴィット船長は思っていたのだろう。

だから、王女様にその魚の料理を出したのは、自分たちの正体をそれとなく教えるつもりだったのだろう。

そして、王女様は、その話に共感したのだろう。

自分も、同じような境遇だと・・・。』

グリユーエルがそんな思いにひたっていると、茉莉香が唐突に言った。

「あつ、いけない。もうこんな時間。」

さあ、研修の時間だあ。」

そう言つて、茉莉香は背伸びをした。

「わたしもそろそろ・・・。」

グリユーエルがそう言いかけた時に、チアキが言った。

「茉莉香。セリフが違うわよ。

『さあ、海賊の時間だあ』じゃないの!? フッフ・・・」

チアキが笑った。

「違うよ。ひどいなあ。

これからは、大人の女になるためのマナー研修のお時間。

新しい弁天丸の進水式と、お披露目（おひろめ）パーティの日が迫っているからね。

その時までには、お客様に失礼のないように、私も少し大人の船長になっておかないとね・・・」

茉莉香は、このところ、王宮や銀河帝国の中枢を担う人達と付き合うためのマナー、常識というものを必死に学んでいる。その講師には、王宮の意向で、王宮の元女官長達だけでなく、銀河聖王家白薇家の大奥様、つまりアレックス王子の祖母も加わっているという。

茉莉香は、こういう研修は、自分が大人として弁天丸船長の務めを果たすために必要だと思っているようだが、グリュエルの見方は違った。

『ついに始まりましたわね。』

これは、茉莉香さんへの密かなお妃様教育ですわね。

ご本人は、まったく自覚していらっしやらないようですけど・・・。』

「ホント。この頃の茉莉香は、急に勉強熱心になったのよねえ。」

「なんだか、私だけ置いてきぼりになったみたい。」

チアキが言った。

「そんなことないよ。」

チアキちゃんの方こそ、公務で忙しくて私たちとお茶するヒマがないじゃないの。」

「それについては、すっかり、姉さまに騙されたわよ。」

アイツ、少しだけ、公務を代わって欲しいと言っていたのに、最近はカレシのことが

最優先で、結局、私が全部受け持つ羽目になっているのよ。」

「そうかあ、みんな忙しくなったんだねえ。」

今にしてみると、部活が終わって、部室やランプ館で一緒にお茶するなんて、本当に楽しくて、貴重な時間だったんだよねえ。なつかしいなあ。」

茉莉香が言った。

「そうだねえ。あのころは、楽しかったねえ。」

女子大生になっても、あんなふうに、のんびりとお茶しているヒマがあると思っ  
たんだけどねえ。」

「ウフフフ……。それはお二人がフツの女子大生ではないからですよ。」

では、わたしもそろそろ、お暇（いとま）しないと……。。」

グリユーエルが言った。

「グリユーエルまで早く帰りたいがるって、ゼミの予習のためなの。」

「はい。」

「へえ〜。ほんとスゴイ勢いで勉強しているわね。さすがね。」

チアキが言った。

「いえ、そんな。チアキさんこそ、本気の本気で、恐れ入りましたわ。」

チアキも、ゼミでは熱心に勉強している。高校時代とは別人のようだ。

「じゃあ、チアキちゃん。そろそろ行くね。」

「行かつて、茉莉香。待ちなさいよ。」

あなた、また、その格好でマナーの研修に行くの？

私の服を貸してあげるから、着替えなさいよ。」

チアキが言った。

実は、茉莉香は、今日も帝国軍の制服姿で大学に通学してきたのだった。研修もそのままの格好で行くつもりだった。

「ええ!? この格好でイケナイの？」

大学でも、研修でも、私の制服姿、カッコイイと好評だよ。

それに、毎日、違う服を着ていくほど、私、たくさんの服を持ってないもの。」



「軍服で通学なんて、女子大生には、コスプレみたいで、物珍しいからでしょ。

一応、その軍服、コツキー・シャネルの作だし……。

でも、研修講師の人たちにも好評なんて、ヘンねえ。

茉莉香、誉められたたっていうけど、なんて言われたの。」

「ええ、自分で言うの？……ちよつとはずかしいけど……。

あのね、

『茉莉香さんは、何を着てもお似合いですね』と言われて、誉められたよ。」

「ううう……。茉莉香。」

その言葉は、『その服、TPOに合っていない』って意味の皮肉よ。

わかってないの。茉莉香。」

チアキが、頭を抱えて、言った。

「ええ!! そうなの？」

ナハハハ……。

チアキちゃん、どうしよう。ねえ、ねえ……。」

茉莉香は苦笑いして、チアキにすり寄ってきた。

「しかたないわねえ。今日は、私の服を着て行きなさい。

ほら、こつちへ来て。……。」

チアキは、茉莉香を自分の衣裳部屋に案内し、着替えさせた。

やがて、茉莉香はシックな紫のワンピースを着て、グリユーエルの前に現れた。

「どうかしら、グリユーエル？」

「とてもよくお似合いですよ。胸のアクセサリーが可愛いですね。

私としては、ミニスカでないのが、残念ですけどね。フフフ・・・」

「うん。これで今日は、何とかなるわね。」

茉莉香、これからも、ちゃんと着替えて研修に行きなさいよ。」

チアキは茉莉香の衣装を確認して、言った。

「でも、私、そんなにたくさん服を持ってないよ。」

「だから、前から、たくさん服を作りなさいって、言ってるでしょ。」

チアキは、相変わらず、茉莉香の世話を焼いているようだ。

「でも、チアキちゃんみたいになくさん作ったら、私の部屋が服でいっぱいになっちゃうよ。」

「だから、私の隣の部屋に住みなさいって、前から、言っているでしょ。」

その方が何かと便利だって、言っているでしょ。

服だって、私のものを貸してあげられるし・・・。」

「王宮に住むのは、ちよつと・・・ねえ。」

「茉莉香、遠慮しないでよね。」

「なんか余計なこと考えてない？ 心配無用よ。」

「それは、今は、考え中ということよ……」

「そにかく、今日は、ありがとね。チアキちゃん。」

「じゃあ、行ってきます。」

いつものように明るい笑顔でそう言うと、茉莉香は出かけて行った。

茉莉香を見送って、グリユーエルも席を立とうとしたとき、チアキが言った。

「ねえ、グリユーエル。」

「あなた、我慢しない方が良いわよ。辛いだけよ。」

「全力で、茉莉香に勝負を挑みなさいよ。」

「私は何も……。」

「何も言わなくても、この頃のあなたを見てれば、わかるわよ……」

たとえば、アメリカ姫を御覧なさいよ。

アイツ、エドのことをまだ諦めずに、私に勝負を挑んでくるでしょ。

こっちは、関係ないって言ってるのに……。

でも、アイツのそういう一途（いちず）な性格と行動は、時々、良いなあって思うのよね。」

「そうでしょうか。」

「そうだよ。」

だから、貴方の場合も、きつと、茉莉香もわかつてくれるよ。」

「あのおう、私は、大学生と言つてもまだ16歳で、あの方にはまだ子供だと思われているのではと……。」

グリュールは視線を落として、自分の胸元を見た。

「自信を持ちなさいよ。」

王族の、特に女性の婚約は、一般人よりも早いわよ。

あなたくらいの歳では、早くないわよ。」

「それは、わかつていますが……。」

「私はねえ、こう思うの。」

あなたが自分の気持ちに正直に振る舞うのも、茉莉香のためだと思うの。」

「ええ!？」

「だつて、茉莉香はギルバートとアレックスの二人から結婚申し込まれているのに、相変わらず結論を出さなのまま、二人とも弁天丸に乗せようとしているでしょう。」

「そういうことになりますよね。」

「そんなことを何時までもやっている、最後には二人とも目の前からいなくなつて、茉

莉香の方が泣く羽目になるわよって、私が言っても、今の茉莉香には決められないのよね。

しかし、グリユーエルの気持ちを茉莉香が知れば、茉莉香が自分の気持ちを自覚するキツカケになるかも知れないと思うのだけどね。

どうかしら、こういう考え方は？」

「そんなものでしょうか……。」

グリユーエルは、力なく、下を向いた。

今のグリユーエルには、そんな大胆な行動をとることは、考えられなかった。

9 グリユーエルの私室（セレニティ王国大使公邸内）

グリユーエルは、帝都に來てからはセレニティ王国大使公邸と言われる、大きな屋敷の中に自室を与えられている。

大使公邸と言っても屋敷の管理者が外交特権を持つ大使であると言う理由でそう呼ばれているだけである。しかし、帝都に來る王族は、すべてこの屋敷に滞在するのが慣例になっている。そのため、離宮と言っても良いほどの華麗な屋敷となっている。

その自室で、この頃、グリユーエルは、帝国女学院のゼミのために、日夜、必死に勉強している。

そのゼミとはもちろんグリユーエルの希望で設けられた『惑星開発学』のゼミナールである。ゼミは週二回行われている。惑星開発に関連した、幅広く、たくさんのテーマが取り上げられ、講師はテーマごとにその分野で最も優れた学者や実務家が担当することになっている。だから、テーマごとに講師も次々と変わる。

もちろん、ゼミには、グリユーエルだけでなく、チアキ、茉莉香、クリスティア王女、ブルック王国のバレンシア王女も参加している。

しかし、最近、グリユーエルとチアキの勉強ぶりが際立っている。

他の参加者の勉強ぶりは、グリユーエルが事前に予測していた通りになった。

茉莉香とバレンシア王女は、大学以外にもいろいろと忙しく、予習もままならない有様である。ただし、討論になると、二人とも度胸と言うか、決断力と言うか、なかなか鋭い発言を連発して講師たちを感心させている。

クリスティア王女は、最初は気合が入っていたが、途中から関心が薄れてしまった。理由は言うまでもない。チアキからは、『まさかのイロボケ』と酷評されているが……。

ゼミには、予習をして、つまり事前にあらかじめ指定された多くの文献、資料に目を通し、疑問点を整理したうえで、臨むことになっているのだが、グリユーエルはそれを完璧にこなしていた。

グリユーエルがそこまで頑張るのには、彼女なりの覚悟がある。

『自由な時間が与えられているうちに、出来る限りのことを学んでおきたい。』

彼女は、自分に与えられる『自由な時間』は、そう長くはないと思っている。だから、少しの時間も惜しんで、学んでいた。

しかし、この夜のグリユールは、夕食後に勉強を始めたものの、途中で資料を読むのをやめて、考え事を始めた。

先ほどのグリユンヒルデからの電話で心が騒いで、今晚は落ち着いて勉強する気になれなくなったからだ。

グリユンヒルデの話では、王制派の人たちは、『薔薇の泉』の再建を、ついに考え始めたという。

『薔薇の泉。

あんなおぞましいものを、また作ろうと言うのですか。

神をも恐れぬ、悪魔の所業ですわ。』

グリユールは、怒りが込み上げてきた。

あの時、自分は茉莉香の弁天丸に助けられ、祖先の移民船である「クイーン・セレンディピティ」に乗り込んだ。その目的は、『薔薇の泉』を命懸けで破壊することだった。薔薇の泉、その正体は人工子宮。王家に優れた人材を供給し続けるために、選ばれた受精卵を保存、そして出生させるための大掛かりな装置である。

優れた人材の輩出は王家存続のための必要不可欠の条件だと、教えられてきた。なに  
より、自分もそうやって生まれてきた。

だが、それは本当に必要なものだろうか。

王制であろうが共和制であろうが、国民の支持を失えば、いずれ体制は転覆してしま  
う。

その現実には気が付いたからこそ、自分は王制存続の仕掛けである薔薇の泉を破壊しよ  
うとしたのである。自分の命を懸けて薔薇の泉を破壊し、王族の人々に目を覚まして欲  
しかったのだ。

『私のあの命懸けの戦いは、どういう意味があつたのでしょうか。』

グリューエルは、セレニティ王宮の現状にさらに失望した。

『それにしても、セレニティ王家のどこを比べても銀河聖王家にはかないませんわ。  
本当にすばらしいですわ。』

今のグリューエルは、どうしても、祖国のセレニティ王家と、銀河聖王家を比較して  
しまう。

もちろん、その権力や富の大きさが祖国とは比較にならないことは以前から知ってい  
た。

とはいっても、それまで、銀河聖王家は、はるか遠くの存在でしかなかった。



しかし、白鳳女学院ヨット部の練習航海に参加して、公爵の反乱を治めた女王を始めとする銀河聖王家の手際を自分の目で見た経験は衝撃だった。

王族の人材の優秀さ、豊かさだけでなく、王家を支える体制の盤石さ、国民の支持という面でも、祖国とは比較にならないことを思い知らされた。

だからこそ、グリューエルの祖国への失望は深く、大きくなる。

それに反比例して、銀河聖王家への憧れが強くなる。

『チアキさんも、このごろ本気の本気で、勉学に取組み、王女としての公務も担っていらつしやいますわ。だから、ますます銀河聖王家の王族として輝きを増してきましたわ。

やはり、血は争えないものですね。

素敵ですわ。

アレックス様も、きっとそうなのでしょうね。

初めてお会いしたときに、その輝きに圧倒されましたもの。』

グリューエルはさらに想像をめぐらした。

なぜ、どうやって、銀河聖王家は、あれほど優秀な人材を次々と輩出し続けることができるのだろうか。

自分が目の当たりにした範囲でも、女王陛下とその王位継承者である娘二人の、人間

としての能力、資質は本当にまばゆいばかりだ。

一方、セレニティ王国の場合、仮に、薔薇の泉を復活させたとしても、果たして、それにどのような意義、効果が見込めるのだろうか。

例えば、これまで、薔薇の泉は、銀河聖王家に匹敵するような優れた人材をどれだけ輩出してきたのだろうか。そして、新しい薔薇の泉は、これから、どれだけの人材を輩出することができるのだろうか。

『もつと、銀河聖王家の事情、歴史を知る必要がありますわね。』

まだまだ、チアキさんやクリスティア様も知らない秘密があるのでしようね。』

例えば、グリューエルでも、銀河聖王家の「自動認証システム」が、いったいどういう仕組みなのか、見当もつかない。マリア王女の場合は、250年あとの子孫である彼女まで識別したという。それだけでなく、チアキ王女やクリスティア王女のように、隠された秘密の王女までも識別したと言う。そのような仕組みの正体は、いったいなんだろうか。

一方、セレニティの王族の認証システムの鍵は、公表されている遺伝子IDだった。

それは、グリューエルの遺伝子IDによる認証をクイーン・セレンディピティが受け入れたことから、弁天丸のクルーに薔薇の泉の仕掛けを気づかれてしまう程に、簡単なことに過ぎなかった。

『そのためには、聖王家の方々と、もっともっと親しくなる必要がありますわ。あの方も含めて……』

……

ああ、そうですわ。良いことを思いつきましたわ。

白鷗女学院の卒業記念ダンスパーティーの時間にお聞きしましたが、あの方が海明星にいらつしやったのは、宇宙医学会での研究発表のためでしたわよね。

その時、いったいどういうことを発表されたのかしら。

その発表論文に目を通しておく必要がありますわね。

次にお会いしたときのために……。フフフ……。』

そう思うと、グリユーエルはすこし楽しい気分になった。？

## 第二十九章 弁天丸Ⅱの進水式 —セレニティ編—

1 進水式（シャーロット造船所 惑星クリスタルシティ）

ここは、ステープル重工業のシャーロット造船所である。

造船所は、銀河帝国の帝都である惑星クリスタルシティの工業都市シャーロットタウンにある。宇宙海賊船弁天丸の新しい船は、この造船所で作られている。

最近では、宇宙船は宇宙空間の造船ドックで作られることが多い。

最近の宇宙船、特に民間船は、無重力の宇宙空間の飛行に必要かつ最小限の機能を持つてよいという考えで、コストと機能を限界まで削減して作られる。このため、ほとんどの船は推進剤を燃料にして地上から宇宙空間まで自力で加速・上昇できる従来型の高出力エンジンを装備しないからである。

これに対して、新しい弁天丸は、軍艦同様の頑丈な作りの海賊船というだけでなく、最新鋭の重力制御推進エンジンを搭載して大気圏の飛行能力を持つなどの理由から、地上の造船ドックで作られた。

だから、進水式も地上で行われる。

「それでは、ただいまより、進水式を行います。」

まず、最初に命名の儀を執り行います。」

司会者である銀河テレビの元人気キャスター、スージー・ウオーターメロンがそう言うのと、プラスバンドが華やかなファンファーレを演奏した。

その様子を、銀河テレビの報道スタッフが録画している。

「命名は、グリューエル・セレニティ殿下に、お願い致します。

殿下、どうぞ。」

セレニティ王室伝統の正装をしたグリューエルは、そう言われて、造船所のドックの中に設けられたひな壇の中央に進み出た。

大勢の来賓、関係者そして造船所の職員が見守るなかで、彼女は言った。

「私は、この船を、弁天丸Ⅱ（にせい）と命名します。」

拍手がこだまし、また、プラスバンドが華やかなファンファーレを演奏した。

「それでは、いよいよ支綱切断（しこうせつだん）の儀を執り行います。

支綱切断もグリューエル・セレニティ殿下に、お願い致します。」

グリューエルは、ひな壇最前部の机に歩み寄った。そこには、弁天丸Ⅱ世と結び付けられた支綱（しこう）の端が結び付けられていた。

「えい！」

渡された小さな銀の斧を、グリューエルが振りおろし、支綱を切断した。

すると、綱の先に結び付けられた赤ワインの大きなビンがゆつくりと弧を描いて、弁天丸Ⅱに向かって進んで行った。古代の海賊船の進水式では、いけにえの血が捧げられたといわれるが、現代では赤ワインである。

ガシャーン

ビンが船体にぶつかって割れ、赤ワインが船体にかかった。

拍手がごだまし、プラスチックが勇壮な音楽を演奏した。

「いよいよ、これから、進水式のメインイベントである。」

「いや〜。ついに、本物の浸水式ですよ。うれしいです。」

「ああ、ステープルさん。本当にありがとうございます。」

船の発注者として、ひな壇にいた茉莉香が、隣に座っているステープル重工の社長・ジョージ・ステープルにお礼を言った。

「いえいえ、お礼をいうのは、こちらです。」

特に、茉莉香さんの御希望で、本当に100年ぶりの昔ながらの進水式、しかも、いわゆる『アメリカン・スタイル』の進水式を、この造船所で行うことができるのですからね。

造船所の職員は、とても喜んでいましたよ。」

「いえいえ、こちらこそ。」

無理なお願いを聞き入れて頂いて、感謝しております。

わたし、新しい弁天丸も海賊船なので、進水式も海賊船らしいものにしたかったものですから。」

「そうですね。海賊船くらい頑丈な宇宙船でないと、こんなことはできませんからね。さあ、ご覧ください、間もなく、動き出しますよ。」

茉莉香は、ひな壇の席から、ドックの上でレールに乗せられた弁天丸とそれを取り巻く造船所の様子を眺めた。

「あつ！ 対岸の岸壁に、造船所の人がたくさん並んでおられますが、進水式を見に来ていただいているのですか？」

茉莉香が、ステープル社長に聞いた。

「あれは、今日の進水式の余興のために集まっていますのです。」

「えつ。『余興』？ いったい何をなさるのですか？」

「ハハハ……。それは見てのお楽しみということだ。」

それにしても、茉莉香さん。

少しお会いしていない間に、ずいぶん帝都の雰囲気になじんで、ご立派になられましたね。もう堂々としたレディですね。」

社長は、茉莉香の立ち振る舞いや言葉遣いが洗練されてきたことを誉めた。

誉められて、茉莉香が喜んだことは言うまでもない。今日のために学んで、練習してきたのだから。

「うわ〜っ。」

その時、弁天丸Ⅱ世が、レールの上を動き出した。これをみた人々から、歓声が上がった。拍手が湧き上がり、勇ましい行進曲が演奏された。

弁天丸は後退でも前進でもなく、船体ごと右舷に向かつて、横すべりを始めている。そして、しだいに速度を増してゆく。

弁天丸Ⅱ世は、観客の予想以上の速度でレールの上を進み、そしてレールから離れた。その瞬間、全長300メートルの巨体が一瞬、宙に浮いた。

「ああくっ!!」

驚きの声が上がった次の瞬間、弁天丸Ⅱ世の巨体が、そのまま、ドック前の海へ落ちた。

いや、海に投げ落とされたと言う方が正確だろう。

この横滑りで海に投げ込むような形の進水式を、この造船所の言葉では『アメリカン・スタイル』という。なお、今では、『アメリカン』の語源は誰にもわからないという。

ドボン!!!

弁天丸は、轟音を響かせ、水面に落下し、きわめて大きな波しぶきを周辺にまき散ら



した。その波しぶきは、広く遠く、進水式の来賓席や造船所関係者のところまで届いた。

「キヤ〜」

「うわー」

波しぶきをかぶった人たちから、悲鳴のような、歓声のような叫び声があがった。

次の瞬間、弁天丸Ⅱ世を中心に大きな波が湧き上がり、海面が激しく逆立った。

その海面の上で、弁天丸Ⅱ世は、ひっくり返りそうなくらいに大きく傾いて揺れている。船が大きいだけにその動きも迫力がある。

「うお〜っ!!」

それは、今まで見たこともない、豪快な光景だった。そして、それを見た来賓や造船所の人々は、大きな歓声をあげた。

もちろん、話はそれだけでは終わらない。

大きな波は、造船所ドックの岸壁にぶつかって、また大きな波しぶきを、高々と吹き上げた。

そして、また波しぶきをかぶった人々から、大きな歓声や悲鳴があがった。

さらに、大きな波は、造船所の対岸にある岸壁を襲った。

こちらの岸壁はドック側よりもやや低いせいにか、迫ってくる波の高さは、岸壁の上で進水式を見ていた造船所の人々の頭上を越えていた。

「こりや、やばい。」

「キヤー」

それまで対岸の岸壁で楽しそうに進水式を見ていた人たちは、一斉に逃げ出した。

そして、大波は岸壁の上へ乗り上げ、水の壁となつてかなりの速度で彼らを追いかけ始めた。もちろん、対岸で見ていた人たちは、波に追いつかれまいと必死に走つて逃げている。

それを見た、貴賓席の招待客から、声援が飛び始めた。

「おい。逃げろ、逃げろ。」

「がんばれ。」

「キヤー．．．がんばつて．．．。」

しかし、逃げる人の後から、波が追い付き、次々と人々が波をかぶつた。

「あくあく。びしょ濡れになつたじゃないか。」

「あ．．．、逃げ遅れたヤツが、波の中で転んだ！　ワハハハ．．．あのカツコウ！」

「あれでは、もう、お洋服が、びしょ濡れですわね。」

やがて、波は引いて、海に戻っていくが．．．。

「あ、引き波から逃げ遅れた人が何人か、波にさらわれて、海に落ちたぞ。」

「キヤーっ！　溺れちゃうわ．．．！」

「おーい。あいつらを助けろ！」

しかし、海に落ちた人々は、身に着けていたライフジャケットが自動的に膨らみ、海面に浮かんできた。

そこへ、飛行式のライフセーバー・ロボットがやってきて、海に落ちた人々を次々拾い上げていく。

先ほどまで心配顔をして成り行きを見ていた人々に、安ど感が広がっていった。

「みなさーん、大丈夫ですか〜〜？」

いつの間にか、来客席の最前列まで出て来ていた茉莉香が、波をかぶってびしょ濡れになった人々や、海に落ちて救助された人々に向かって、そう呼びかけて手を振った。

「大丈夫で〜〜す。」

呼びかけられた人々が、みんな、笑顔で手を振って茉莉香に答えた。

「ああよかった、みんな無事で。」

でも、あれは、やつぱり『余興』なのですよね。社長さん。」

自分の席に戻ってきた茉莉香が、ステープル社長に聞いた。

「そうです。楽しんでいただけましたか？」

「まあ、ホホホ・・・波の迫力にはちよつとびっくりいたしましたけれど」

「そうですね。やつぱり、彼らも本物の大波が迫ってくると怖くなったようですね。」

コンピューター予測通りの大波だったようですが、逃げる時はみんな本気で逃げましたね。ハハハ・・・」

## 2 弁天丸披露パーティ

弁天丸進水式終了後に、造船所のあるシャーロットタウンの高級ホテルで披露パーティが行われた。

パーティは、ホテル最大の大広間で行われた。大広間の正面には、弁天丸の大きな模型が飾られ、進水式披露パーティの雰囲気盛り上げている。

大広間には、多くの招待客が集まった。

その来客を前に、主催者の、ステープル社長と茉莉香が最初に挨拶し、その後、帝国軍のエース、ミニッツ准将が乾杯の発声をした。

そして、パーティは、懇談と会食に移って行った。

パーティの出席者は、王族、政治家、財界、軍人などのトップクラスが多く集まり、豪華な顔ぶれだった。これは、弁天丸の船長加藤茉莉香の交際の広さと、彼女への期待を反映している。

加えて、今日は女性の出席者が極めて多い。だから、会場は余計に華やかな雰囲気になっっている。

招待状が男女同伴というのは帝都の常識であるが、進水式の披露パーティは帝都から遠く離れた造船所で行われることもあって、普通は女性の出席者は少ない。

しかし、今日、出席した女性たちには、特別な理由、期待があった。

また、会場では、ウエイトレスによつてシャンパンやドリンクが配られているが、そのウエイトレスの中に、メイド服を着た白凰女学院のヨット部員やそのOGたちが加わっていた。

茉莉香は、大勢のお客さんに挨拶をするため、忙しく会場内を回っていた。

それもやっと一段落したころ、茉莉香は、リリイを見つけて礼を言った。

「やあ、リリイ。今日はありがとう。」

「おめでとう！ 茉莉香。」

進水式、すごかったねえ。

さすが、海賊船の進水式は豪快だって、みんな感動していたよ。」

リリイは、ロングスカートの黒のメイド服スタイルで、お盆にドリンクを乗せていた。

「いやあ、ありがとう。」

ねえ、リリイ。そのメイド服、マミの新作でしょ。

可愛いねえ。よく似合っているよ。」

「いやあ、ありがとう。」

でも、茉莉香にもお礼を言わないとね。

進水式だけじゃなくて、茉莉香の新しい弁天丸に、明日、実際に乗せてくれると言うので、みんな大喜びだよ。

特に今年入部した一年生は、『憧れの加藤茉莉香先輩に会えて、しかも海賊船に生まれて初めて乗る』と言うので、オオハシヤギだよ。」

「ナハハ……。ありがとうね。」

それにしても、今年の一年生は、私たちの時よりも元気そうだね。」

「そうね。留学生も増えだし、帝都の華やかな雰囲気にもすぐになじんで、昔の私たちみたいに、田舎モノって感じがしないのよねえ。」

「あー！ クリス先生が見えたよ。しかも、男性同伴で。なんと、腕まで組んでいるわよ……。」

リリイが、少し遅れてパーティにやってきたクリステイア王女を見つけて、そう言った。

「違うわよ、リリイ。」

あの男性は、パーティの主権者側、ステープル重工業の若（わか）専務、アーサー様。だから、今日のパーティでは、先生はその同伴者という立場でもあるのよね。」

ハラマキが訂正した。

「ということとは、彼が噂のサーシャのお兄さんなの。

それにしても、先生、本当に嬉しそうですね。」

リリイが言った。

「そうですね。」

だから、今日は、王女様とその交際相手とのツーショットが見られるかもしれないと期待して、王室ファンの女性の出席者が多いのよ。

みんな、わざわざ帝都からここまで、二人の姿を見に来たのよ。

そこへ、堂々と二人で腕を組んで御登場とは、ほんとに期待以上の展開ね。フフ  
フ・・・」

王室ファンのハラマキが、笑って解説した。

「へえええ。そうなんだあ。」

茉莉香が言った。

「私も、茉莉香には悪いけど、今日は、そっちの方に興味があるんだなあ。へへへ・・・。

二人の交際は、まだ、報道禁止らしいからね。」

噂の二人は、あつという間に大勢の人に取り巻かれ、パーティ中の注目を集めている。いつの時代も、王室の慶事は人々の関心の的である。

「うわっ。先生たち、すごい人気。」

いつの間にか茉莉香の周りに集まっていたヨット部員たちからも、ため息と歓声が上がった。

「私も、ご挨拶をしなくちゃ……。」

茉莉香は、リリイ達と離れて、人垣の中へ進んでいった。

そのころ、注目を集める第一王女のカップルの陰に隠れて、四人の男女が目立たないように会場に入ってきた。

「あつ、チアキちゃん。」

リリイがチアキを見つけて、声をかけた。

「や、久しぶりねえ。みんな元気？」

「そうだ、チアキ先輩。今年の一年生を御紹介します。こちらから……。」

ナタリアが、一人一人、一年生を紹介していた。

これに応えて、一年生たちは一人一人、上手にカーテシーの作法通りの挨拶をしていた。

挨拶を受ける間も、チアキはエドワードとぴったり寄り添って、時々見つめ合って言葉をお互いに交わしていた。腕こそ組んでいないが、こちらもツーショットの雰囲気だった。

「殿下、お久しぶりです。卒業ダンスパーティではありがとうございました。」

その傍らでは、ハラマキが、真つ先にアレックス王子に挨拶した。



遅れてやってきたのは、チアキ、アレックスの王族と、エドワード・ドリトル氏、ギルバート・モーガン氏の四人だった。

ヨット部員は、口々に三人の男性に挨拶したり、一年生を紹介したりしていた。

「アレックス様、ギルバート様。」

茉莉香をお探しなら、あちらです。クリス先生のところへごあいさつに行つて、まだ戻りませんよ。フフフ……」

リリイが、会場のあちこちに目線を配つて人を探している様子の男二人を見て、意味ありげに微笑んだ。

「では、グリユーエルさんは、どちらですか？」

アレックス王子が、リリイに聞いた。

「グリユーエルは、あちらの一番奥ですよ。いろんな方と話が弾んでいるようですね。」

アレックス王子がグリユーエルを目線で探すと、奥にいるグリユーエルの姿が目にとまった。彼女は、セレニティ王家の正装姿のまま、パーティに出席していた。

グリユーエルはアレックスが来たことに気が付いて、周りに挨拶しながら、彼の方へ動き出した。

そのとき、

「ハイ、ハイ。ヨット部のみなさん。」

今日の私たちは、メイドさんですよ。

先輩へのご挨拶はそのくらいにして、お仕事をしましょう。」

今日は可愛いメイド服を着て女の子らしい姿をしたヨット部長のナタリアが、みんなに声をかけた。

「ハイ、部長。」

ヨット部員たちは、元気よく返事をして、さつと会場に散って行った。

実は、そのころまでには、会場の来客も、チアキ女王やアレックス王子の存在に気が付いて、二人に挨拶しようと集まってきたが、ヨット部員が二人の周りを取り囲み、近づけなかった。これに気が付いたナタリアが、部員に声をかけたのだった。

たちまち、チアキ、アレックスの二人は、大勢の来客に囲まれた。

グリューエルは、アレックスに向かって歩いてしたが、彼を取り囲んでいる人垣に圧倒されて、立ち止まった。

「あんな人垣の中って、ちよつと近寄れない雰囲気だよねえ。グリューエルさん。」

そう言つて、グリューエルの隣にサーシャがやってきた。

今日の彼女は、ヨット部OGではあるが、メイド服ではなく、豪華なドレス姿だった。ステープル家の娘としての役割もあることを考えてのことだろう。

しかし、グリューエルを見ると、サーシャの視線は、アレックス王子ではなく、兄の

アーサーとクリスティア王女の方に向けられていた。

グリユーエルは、サーシヤの秘めた思いに気が付いた。

「そうですね。ちよつと入っていきませんね。」

グリユーエルは、気付かないふりをして、相槌（あいづち）をうった。

「そうよねえ。あの人の多さではねえ……。」

現役ヨット部員として、メイド服を着ているブルック王国のアメリア王女が、そつと二人に近づいてきて、同じようなことを言った。

しかし、彼女の視線は、チアキとエドワード・ドリトルに向けられていた。

三人は同じような言葉を口にしながら、それぞれの思いは違っていた。

「そのの三人！ ハイ、ハイ、元氣を出しなさいよ。笑つて、笑つて……。」

今日は、おめでたい、弁天丸のお祝いパーティなのよ。」

メイド服姿のリリイがそう言つてやつてきた。彼女なりに励ましてくれているようだ。

やがて、一人の青年がサーシヤの前にやつて来た。

「サーシヤ。あちらへまいりましょう。お母様がお呼びですよ。」

「はい。お兄様。」

サーシヤは、ステープル家の次兄ヘンリーに従つて、兄のアーサーとクリスティア王

女を囲む人込みの方へ進んでいった。人込みの中では、ヘンリーが彼女の手を取ってリードして進んでいった。ヘンリーは意気揚々とした表情をしていた。

グリユーエルは、サーシャを見送りつつ、再びアレックス王子を囲む人々を眺めていた。

「グリユーエル！ どうしたの、早くこっちへ来なさいよ。」

そう言つて、チアキが、グリユーエルの前にやつてきた。

「あ、チアキ様。」

「さあ、いきましよう。」

チアキは、彼女をアレックスの前まで連れて行つた。

すると、アレックス王子の方からグリユーエルに話しかけてきた。

「いやあ、グリユーエルさん。お久しぶりです、遠征以来ですね。」

「ええ!! 私（わたくし）のことを覚えて頂いているのですか・・・。

とても、光栄です。」

グリユーエルは、少し頬を赤くして、答えた。

「何をおっしゃいます。」

遠征では、患者と医師という立場でお会いしたので、お話も十分できなかったのですが、あの時、『モンブランの神童』も遠征に同行されていると聞いて、お会いするのを楽

しみにしていたのですよ。」

「ええ、そんなことまで……では、以前から私のことをご存じでいらしたのですね。」  
グリユーエルは、顔を真っ赤にして恥らっていた。

「えっ、『モンブラン』？ お菓子の名前じゃないよねえ……。」

茉莉香は、アレックスの話を聞いて、そう言った。

茉莉香は、クリスティア王女にあいさつを済ませて、ギルバートとアレックスのところへやってきたところだった。

『モンブラン』とは白い山という意味ですが、セレニティでは、王族の住む丘のことを意味します。丘の上に王族の住む白い建物が並んでいることから、そう呼ばれております。

そして、お姉さまは、小さな子供の頃から、学問の才能を高く評価されておられましたから……。」

メイド服を着たヒルデが、茉莉香に言った。

「へえ〜。やっぱりグリユーエルって、すごいんだねえ。」

茉莉香が感心した。

「ところで、ねえ、ヒルデ。」

あなた、今日はメイド服を着ているけど、かまわないの？

あなたも王女様なんだし・・・」  
「ご心配なく。これは『変装』です。」

この方が正体もバレませんから、自由に動けますわ。

それに、あちらのアメリカ様も、ご一緒ですわ。ほら・・・。」

ヒルデは、アメリカ姫のいる方向を目線で示した。

「アツ！ アイツ。私がちよつと目を離れたすきに・・・もう。」

チアキが憤慨して、エドワード・ドリトルに楽しそうに話しかけているアメリカの方へ飛び出していった。

やがて、パーティーの終了時間が迫ってきた。

会場の出口に、主催者側のステープル重工業社長夫婦、次男ヘンリーと娘のサーシャに、弁天丸船長・加藤茉莉香が並んで、来賓の皆さんにお礼を言いつつ、お見送りをした。

長男アーサーとクリスティア王女は、先に帰っていた。長男のアーザーは、もうステープル家の一員としての活動はしないという意思を示しているのだろう。

こうしてお客様は帰っていったが、茉莉香は会場に残った。

この時、会場に残っていたのは、造船所の職員、その家族、それに会場スタッフとして働いた白鳳女学院ヨット部だけだった。このメンバーで、内輪の二次会パーティーを行

う予定だった。

茉莉香は、この二次会パーティーで、今日お世話になったスタッフみんなに、お礼を言うために残ったのだ。

「カンパニー」

造船所の職員や家族たちが、陽気に、ビールをジョッキでごくごく飲み、料理をパクパクと食べ始めた。

たちまち、会場は騒がしくなってきた。

「なんだか、さつきより人が増えている気がするんだけど……。」

茉莉香が言った。

「そうよ。造船所の人たちが、これから始まる『余興』を楽しみにして、集まっているんですからね。」

ハラマキが言った。

「えっ!? 余興……?」

今夜は、白凰女学院ヨット部員もいるということは……。

まさか……。」

茉莉香は、背中を冷や汗がタラリと流れるのを感じた。

「いやあ、茉莉香先輩のお考えを聞いて、私も大賛成です。」

「先輩、ありがとうございます。」

「進水式では造船所の人たちに『余興』を見せてもらったから、お返しをしなくちゃね。さあ、さあ・・・茉莉香、いくよ。」

その時、リリイが茉莉香に小声でささやいた。

「大丈夫よ。ママが衣装を用意して、グリユーエルが演出を考えてくれたから。」

茉莉香は、いつもの調子で、始めればいいのよ。」

「ええ!? マミとグリユーエルが・・・?」

そう言う二人のまわりを、ニコニコ顔のヨット部員とOGたちが、とり囲んでいる。

茉莉香は、そのヨット部員のまわりを囲むようにこちらを眺めている、造船所の人たちの顔を見た。

みんな、笑顔で、これから始まる『余興』を楽しみにしているようだ。

『ああ、今さら、何も聞いてないなんて、言えないよ～～。もう、断れない。～～。う～～ん、

でも、弁天丸船長・加藤茉莉香は決断が早いのがねえ。』

### 3 白凰海賊団

「さあ、みんな。そろそろいくよ。用意は良いかな。」



「いよいよ、今晚のメーン・イベント、弁天丸船長・加藤茉莉香と白凰海賊団の定番だよー！」

「おお〜〜！」

元気な返事が返ってきた。

茉莉香とヨット部員が叫ぶと、たちまち、会場中が拍手と歓声につつまれた。

その中を、茉莉香と白凰女学園ヨット部一行は、一団となつて会場の中央を進んでいき、大広間正面の特設ステージにたどり着いた。

特設ステージでは、中央に海賊服を着た加藤茉莉香が立ち、その周りを二十名ほどのメイド服姿のヨット部員とOGが、横一列になつて並んだ。

中央の茉莉香が、スポットライトを浴びながら、いつものセリフを言った。

「みなさま、お待たせしました。」

弁天丸船長、加藤茉莉香です。海賊しに来ました。」

「わあ〜〜。」

「待ってました。」

会場から歓声が上がった。

「それ！」

その時、ヨット部員たちは掛け声をかけて、メイド服を肩から脱いで足元に落とした。

鮮やかな早変わりで、たちまち、クラシックな軍服風のデザインの子海賊衣装に身を包んだ白凰海賊団が現れた。

「おお〜〜！」

会場から歓声が沸き上がった。

軍服風の衣装と言っても地味なものではない。衣装を構成する布のパーツに、ところどころ、色鮮やかな赤や黄色や青のチェック柄の生地が使われており、全体では、華やかな女子高生海賊にふさわしいものになっていた。

もちろん、スカートはミニスカだ。

会場が騒がしくなったところへ、いきなり、リリイ達、数人が天井に向かって、銃を放った。

「バキューン、バキューン・・・」

大きな音がして、会場は静まり返った。

「皆さんご安心を。今のは、空砲です。」

さあ、みなさん。よく聞いてください。

初めに、海賊に襲われた時のご注意を申しあげましょう。

私の指示に従って頂く限り、皆さんの安全は保障いたします。

おとなしく、こちらの言うことを聞いていただければ、無事な身体と、このシャーロット

トタウンで女子高生宇宙海賊に襲われたという、楽しい自慢話をお持ち帰りになれます。」

茉莉香がいつものように言った。

大広間のスポットライトを浴びる茉莉香の笑顔は、一層、輝きを増して、観客たちの目を引き付けていた。

「茉莉香サマア~~~~!」

会場内の女性たちから、掛け声がかかった。

その時、会場の男たちからも、別の掛け声がかかった。

「女子高生の宇宙海賊? 聞いたことないぞ!」

「本物かあ?」

「本物なら、海賊の名乗りを上げてみる。」

もちろん、それは、舞台進行のための掛け声だった。

それにこたえて、茉莉香が一步前に身を乗り出し、剣を抜いて、口上を切り出した。

「それでは、ご覧に入れましょう。」

オホン……。

浜の真砂とゴンザエモン、歌に残せし海賊の

種は尽きねえ新奥浜、寄せては帰す白波の

シブキを浴びて海を飛ぶ、白い凰（おおとり）かたどった

オデット二世と名のれども 宇宙（うみ）を駆ければたちどころ

泣く子も黙る海賊船 白鳥号へ早変わり

われら白凰ヨット部員 お嬢お嬢と呼ばれても

呼べば答えるかけ声ひとつ 白凰海賊団へ早変わり

さあ〜、ご覧あれ。」

茉莉香が両手を広げて、両側の白凰海賊団へ観客の目線を誘導した。

それにこたえて、白凰海賊団が各々、剣を振りかざし、声をあわせて言った。

「我ら、白凰海賊団。参上！」

「うわーっ。カッコイイ！」

「キヤー、本物の、キャプテン・マリカだあ。」

観客の大歓声が大広間に響いた。

「さあ、みなさん。

海賊に襲われた以上、大人しく、あきらめましょう。

金品、プレゼント、その他金目のものを出しなさい。」

茉莉香がそう言った時、観客の中から、小柄な一人の女性が飛び出してきた。

「お待ちなさい。キャプテン茉莉香。」

女性は、黒髪を三つ編みにして両肩にたらし、黒く丸いメガネをかけて、頬にはソバカスがあった。大人っぽいメイクにソバカスまで書いて、美少女の素顔を隠している。衣装は、カリビアン・スタイルの黒い海賊服に、きらびやかな貴金属の飾りをつけ、肩からマントをかけていた。

「あなた、だれ？ 何の用？ 私のお仕事を邪魔するなんて、許さないわよ？」

「オホホホ……」

私は、恋と冒険の探検者、宇宙海賊・レディ・セレンティピティですわ。

キャプテン茉莉香、あなたに決闘を申し込みます。

私たちが勝ったら、ここにいらっしゃる皆さんから何も奪わず、シッポを巻いてお帰りなさい。」

レディ・セレンティピティと名のる女は、変装したグリューエルに違いなかった。

彼女は自分が出演するシナリオを書いていたのだ。

「あら、困ったわねえ。ここにも、命知らずの女がいたのねえ。」

私は本物の海賊よ。命を落としても知らないわよ。」

「もとより、負けることなど考えておりませんわ。」

「さあ、お前たち。キャプテン茉莉香をやっつけておしまい。」

「おお〜〜！」

女海賊レディ・セレンディピティの命に代えて、二人の仮面をつけた男が現れた。二人も、カリビアン・スタイルの黒い海賊服の衣装を着て、剣を持っていた。

『うわあ〜。アレックス王子と、ギルバートさんじゃないの。』

グリューエルは、この二人に何をさせるつもりかしら？』

茉莉香は、突然、2人が登場してきたので、驚いた。

しかし、どんな筋書でも直ちに対応して見せるのが弁天丸船長・加藤茉莉香。

たちまち、華やかな笑顔を浮かべて、大見得を切った。

「どこの誰だか知らないけれど、

このキャプテン茉莉香に勝負を挑もうなんて、命知らずね。

二人まとめて、相手になってあげるわ。さあ、来なさい。」

「あらあら、貴方の方が命知らずねえ。

いくら海賊でも、男が二人がかりであなたに勝つても自慢できませんわ。

いいですわ、一騎打ちの勝負にして差し上げましょう。

そのかわり、貴方が負けたら、観念して、勝った男の嫁になりなさい。」

グリューエルは、剣を抜き、その剣で茉莉香を指して、言った。

グリューエルの口上を聞いていたリリイは、驚いた。

『ちよつと、グリューエル。そんなセリフ、無かつたはずよ。』

なんて大胆なことを言い出すのかしら……。』  
変装して別人になったグリューエルは、いつものグリューエルではなかった。ノリノリで脱線し始めたようにも見えたが、実は普段から隠していた思いがあふれ出ているのだ。

「ふーん。私を誰だと思っているの。」

そんなセリフ、私に勝って、男を上げてから言いなさい。

さあさあ、いくわよ。」

「では、私から。私は、宇宙海賊ブランキーと申します。」

キャプテン茉莉香。いざ、勝負。」

宇宙海賊ブランキーと名乗ったのは、アレックス王子だった。

剣の上手な二人は、最初から激しい打ち合いを始めた。

カン！ カン！ カン！

真剣のぶつかり合う甲高い音が会場に響き渡った。

「がんばれー。」

「茉莉香サマー！」

それまで黙って成り行きを見ていた観客たちが騒ぎ出した。

もちろん、声援はみんな、茉莉香の応援だ。





そう思った茉莉香は、つばぜり合いをして、宇宙海賊ブランキーに近づいた。近づいた二人の目が合った。

茉莉香は、背の高いブランキーを上目づかいで見上げる表情になった。

すると、宇宙海賊ブランキーは、雨上がりの空のように清く青い、茉莉香の瞳に、思わず見入ってしまった。

「ええ〜いつ!」

その時、茉莉香が、靴で、宇宙海賊ブランキーの向う脛(むこうずね)を強く蹴った。「うう〜。」

激しい痛みに耐えかねて、宇宙海賊ブランキーが怯(ひる)んだスキに、茉莉香が剣を彼の首に突き付けた。

「さあ、勝負あったわね。」

「ええ〜!?!」

予想外の奇襲に、宇宙海賊ブランキーは、すこし不服そうだった。

「なにか、文句があるのかしら。」

でも、娘海賊相手に油断する方が悪いのよ〜。

ねえ〜、みなさん。この勝負、私の勝ちでしょう?」

そう言つて、茉莉香は観客に向けて、ウインクして見せた。

「ワハハハ・・・。」

「美しさも、女の武器ですわあ。」

「そうであ~~~~!」

「わあ~~~~。キャプテン茉莉香の勝ちだ!」

茉莉香の勝利に、観客が歓声をあげた。

「は~~~~い、そこまで。」

では、次は私が参ります。

私は、宇宙海賊モルギーと申します。

キャプテン茉莉香、いざ勝負!」

たちまち、二人の剣劇が始まった。

攻防を繰り返しながら、茉莉香は思った。

『今日のお客さんは、いつもの豪華客船のお客さんと違うなあ。

何と言つても、ノリが良いからねえ。

だからといって、さつきと同じことをやるとウケないわねえ。』

剣劇を続けていると、少しギルバートの剣さばきと動きが甘くなってきた。

彼が切り込んでくるところを茉莉香が交わすと、逆に茉莉香が彼に切り込むスキがで

きる。

『さすが、ギルバートさん。私が勝つチャンスを作ってくれているのね。

でも、あなたの示してくれた筋書き通りに動くのは、ちよつと悔しいなあ。

なんたつて、私も、もう大人ですからね。』

先ほどから気分が高揚している茉莉香は、いつもの茉莉香ではなかった。

また、ギルバートが切り込んできた。

さつと身をかわした茉莉香は、彼の後ろに回り込むと彼の背中を力（ちから）一杯押して、テーブルの上に突き飛ばした。

すると、彼は、テーブルに並んだ料理の上に派手に飛び込んで、テーブルをメチャクチャにしてしまった。

「ワハハハ……。」

「まあ、ヒドイ。」

「あのカツコウ。サイテー」

「食べ物を粗末にしては、イケマセンわあ〜。」

などと、お客さんは、ひっくり返した皿に載っていた料理で全身を汚したギルバートの悪口を言いつつ、大喜びだった。

「ハア……終わつたなあ。」

茉莉香は一息ついたが、剣劇が続いて汗をかいたため、少しのどの渴きを覚えた。そ

して、思わず唇をなめた。

造船所の酔っ払いの男性達は、茉莉香のそのしぐさを見逃さなかった。

「キャプテン、お疲れさま。お疲れさま。」

さあ、のどが渴いたでしょう、一杯どうですか？」

といつて、ジョッキに入ったビールを茉莉香に勧めた。

しかし、茉莉香は、一瞬、ためらった。

茉莉香は、まだビールをジョッキでグイグイ飲んだ経験は無かったからだ。帝都に來てからはジェニー先輩の主催するパーティに何度も出て、もう『大人』だからと言われ、てお酒も少し飲んだが、こういう雰囲気ではなかったからだ。

困った茉莉香が周りを見ると、男性達だけでなく女性達も、ジョッキでビールをグイグイ飲み、大きな口を開けて料理を食べ、白鳳女学院の女子高生海賊達とわいわい楽しそうに、大きな声でおしゃべりしている光景が目に入った。

『そうなんだ。造船所の人たちはこういう人たちなんだ。……』

茉莉香が納得したところへ、グリユーエルが割り込んできた。

彼女は、まだ、ハイテンションだった。

「私も頂きますわ。」

そう言つて、グリユーエルは、造船所の酔っ払い叔父さん達が茉莉香に差し出した

ジョッキを取って、ビールをひと口飲んだ。

「ああ、大丈夫？」

思わず、茉莉香は言った。

「茉莉香さん、次は『女の勝負』ですわ。これでいたしましょう。」

グリユーエルは、ジョッキを片手に、茉莉香に勝負を挑んできた。

「ワハハハ……。」

「どうですか、キャプテン茉莉香？ 『女の勝負』を受けますか？」

それとも、しつぽ巻いて逃げますか？」

酔っぱらい達は、そう言って笑いながら、茉莉香を挑発した。

「何をおっしゃいますか。」

私はこれでも親子代々、百年続く海賊の家の娘です。

ビールといえば、お前はビールで産湯（うぶゆ）を使ったと、死んだ親父に言われたくらいです。

「ナハハハハ……。」

茉莉香も、負けずにハイテンションで、上滑りのジョークを言いつつ、両手を腰に当てて、笑った。

「そりゃスゴイ。さあ、『女の勝負』だあ。」

茉莉香の狙い通り、そのジョークは酔っぱらい達にバカウケし、その場は、ますます盛り上がってしまつた。

「カンパーイ！」

「カンパーイ！」

ガチンとジョッキを鳴らし、茉莉香とグリューエルの二人は、あつという間にジョッキのビールを飲み干した。

「……………」

「……………」

飲み終わつて、二人は無言でにらみ合つた。

これを見た周りの酔つ払い達は、大喜び。

「引き分け、引き分け。」

さあ、もう一杯いきましよう。」

すぐさま、二杯目、そして三杯目と続いた。

『女の勝負』

グリューエルのこの一言で、なぜこういう流れになつたのか、二人は自覚していなかったが、茉莉香もグリューエルも勝ちを譲らず、張り合っている。

この時、少し離れた所からグリューエルを見守っていた、メイド服姿のキャサリン小

隊長が、スゴイ形相で近づいてきて、アレックスとギルバートをにらみつけた。

『姫様を、早く連れ出せ！』

と、迫っているのだ。

彼女は、いつものように無言だったが、男達に意味は伝わった。

「レデイ、レデイ。そろそろ、お帰りのシャトル便の時間が迫っています。」

「それに、そろそろパーティーもお開きの時間ですから、お支度を・・。」

「・・・・・。」

グリューエルは無言だった。不服なのは明らかだった。

しかし、男二人にキャサリンまで加わって、グリューエルを部屋から連れ出してし

まった。

海賊シヨールはその後も続いた。

最後は、白凰海賊団全員がステージで歌いながら、ダンスを披露して、盛大な喝采を浴びた。

## 第三十章 グリユーエルの危機

—セレニティ編—

### 1 徹夜の出来事

パーティーの後、茉莉香は、ホテル関係者に挨拶を済ませ、ようやく部屋へ帰ってきた。茉莉香の部屋は、ホテル最上階のスイートルーム。スイートルームといっても最上階のフロアをすべて独占する広さがあり、ベッドルームだけで六室あるというものだった。

茉莉香は、ここに帝国軍の警備隊の人たちと一緒に宿泊する予定だった。

と言つても、本音は白凰女学院のヨット部一行が、夜になったら自分を訪ねて来てても良いように、大きな部屋を確保したのだった。

だが、茉莉香が、警備隊の留守番役の人たちにドアを開けてもらつて部屋に入ると、予想外の事態が待っていた。

スイートルームのダイニングルームでは、小テーブルを囲んで、セレニティ軍のキャサリン小隊長、帝国軍のジェーン警備隊長の女性二人に、茉莉花の副官として弁天丸に乗っているギルバート・モーガン帝国軍中尉と、弁天丸の船医を希望している銀河聖王家のアレックス王子がカードゲームをしていたのだ。男性二人は茉莉花に結婚を申し



込んでいる。

ダイニングルームでは熱戦が続いていた。

「……………」キャサリンが無言で手札を開いた。

「ええ〜！ またストレートフラッシュですかあ〜。」

アレックスが天を仰いだ。

「これで、五連敗だあ〜。」

若いときには、こんな負け方はしたことがなかったのですが……………」

ジェーンもため息をついた。

「やつぱり、何か賭けてゲームをしませんかあ。賭けないと、やる気が出ないという

かあ。」

ギルバートが少し愚痴を言った。

「私は、いつも命懸け（いのちがけ）です。」

珍しく、キャサリンが口を開いた。

「セレンティの戦士はそうでしょうが、ここは銀河帝国だし……………」

ギルバートが苦笑して、言いわけをした。

「お金を賭けるのは、ダメですよ。」

お金を賭けたギャンブルでは、モーガン家の男は負けられないという評判ですからね。」

ジエーンが言った。

茉莉香は、ダイニングルームに入って、四人に声をかけた。

「どうしたんですかあ、みなさん。」

このメンバーがカード・ゲームをするなんて、初めてじゃないですか？」

茉莉香が驚いた。

「いやあ。キャサリンさんが、どうしてもやるといいますので……。」

ジエーンが言った。

「いやあ、キャサリンさんに怒られましてねえ。」

アレックスが言った。

「キャサリンさんは、先ほどまで大忙しだったんですよ。」

姫のお帰りのスケジュールが急に変更になったものですから。」

ギルバートが言った。

「加藤大佐。原因は、おわかりですよね。」

ジエーンが少し厳しい口調で言った。

「ナハハハ……。『女の勝負』のためですね。」

ところで、姫は、どちらにおられるのですか？」

茉莉香が、聞いた。

「姫様は、先に、船長のお部屋でお休みです。」

本当に予定外の宿泊で、真相が本国の王宮に知られたら、姫が叱責されるのではないかと心配です。……。」

無言のキヤサリンに代わって、ジェーンが答えた。

「茉莉香さんも、早く着替えて、お休み下さい。」

ジェーンは、いつものように、茉莉香のお母さんのような口調で言った。

「はあ。でも、皆さんはどうされるのですかあ。」

「私たちは、明朝まで徹夜です。みなさんの警備を兼ねています。」

キヤサリンが強い口調で語った。

もちろん、彼女の本心は、目が覚めたグリユーエル姫が脱走しないように、姫のターゲットとなる男性をこの場所に徹夜で拘束しておこうというものだった。

しかし、真面目な彼女には、そのための方法としては、徹夜のカード・ゲームしか思いつかばかなかったのだ。

茉莉香は、部屋に入って着替え、グリユーエルの寝顔を見るために大きなダブルベッドに上がって、……。

気がついたら、朝だった。

「ううう、また、やってしまった！」

昨夜は、一段と激しく、ノリノリで……。」

翌日の朝、茉莉香は目が覚めた。と同時に後悔し始めた。

「せつかく、『もう立派な淑女（レディ）』になったと、誉められたのに……

私って、やつぱり、淑女より海賊の方が似合っているのかなあ……。

それに、やつぱり、頭痛いなあ……。」

茉莉香は、少しずつ昨日の記憶がよみがえってきた。

「そう言えば、グリユーエルは……。」

茉莉香が周りを見ると、グリユーエルが隣で眠っていた。

「ということは、ここは……。」

ここは、造船所のあるシャーロットタウンの高級ホテルのスイートルームだった。昨夜のパーティが二次会で盛り上がりすぎて、グリユーエルは帝都へのシャトル最終便に乗り遅れたと言って、『やむなく』、茉莉香の部屋に宿泊したのだった。

「そういえば、グリユーエルに予定外の外泊をさせることになったので、男性陣はキャサリンさんに激しく怒られて、カード・ゲームをすることになったのよねえ。

どうなったかなあ。」

次第に昨夜のことを思い出した茉莉香は、着替えてダイニングルームへ行った。

ダイニングルームでは、相変わらず四人がカード・ゲームをしていた。

「勝負は、どうなりましたか？」

茉莉香が聞いた。

「キャサリンさんのひとり勝ちですね。」

ギルバートが言った。

「茉莉香さんがお目覚めのようですから、ここでゲームは終わりにしましょう。」

ジェーンがそう言うのと、皆がうなずいた。

「ところで、確か、何か賭けてゲームをしていたのですよね。」

何を賭けたのですか？」

いたずらっぽい目をして、茉莉香は聞いた。

「それは、勝った人の願いをひとつ、かなえることになりました。」

アレックスが言った。

「それでは、キャサリンさん。どういう願い事をするんですか？」

よろしければ、聞かせて下さい。」

茉莉香が微笑みながら聞いた。

「アレックス様には、姫様の願いをひとつ叶えていただきたいと思えます。」

あとのお二方には、・・・考えておきます。」

少し微笑んで、キャサリンが答えた。

「へくく。姫様は何をお願いするんでしょうねえ。

アレックスは、どう思う？」

茉莉香は、アレックスを少しからかいながら、そう言った。

「それは、とても素敵なお話ですわね。」

そう言つて、茉莉香の後ろから、グリユーエルが現れた。

「キャサリンさん。よろしいんですの。」

大切な願いをかなえる機会を私に譲つてしまつても……。」

「もちろんです。私は、何事も『姫様第一』ですから。」

キャサリンは、きつぱりと言つた。

「ありがとうございます。」

では遠慮なく。

アレックス様、お願いしてよろしいでしょうか？」

「なんででしょうか？ とにかくお聞きしましょう。」

「はい。アレックス様に、私の家庭教師をお願いできないでしょうか。」

「ええ!? 『モンブランの神童』に私がお教えすることがあるのでしょうか。」

「もちろんです。宇宙物理学を教えて頂きたいと思ひまして。」

「宇宙物理学ですか、私は医者ですが……。」

「何を仰いますの。」

先生は、立派な宇宙物理学者ですわ。

私、先生が海明星で開かれた宇宙医学会で発表された論文を拝見いたしましたの。

そこには、ヒガン回廊の可住惑星に生息する生命体に関する調査データの報告のほかに、先生の宇宙物理学に関するお考えに由来する仮説が述べられておりましたわね。」

グリユーエルは、アレックスのことを先生と呼び始めた。

「ええ！ ああの論文を実際に読まれたのですかあ？」

「はい。それから、その仮説の元となった帝国大学天文倶楽部の会報に掲載された先生の論文も拝見しました。」

「参ったなあ。そんなことをおっしゃるのはあなたが初めてですよ。」

でも、私の論文のどういうところに、興味を持たれたのですか？」

アレックス王子は困ったと言いながら、とても嬉しそうだった。

「宇宙空間の1次元理論で、余剰次元とされて、その存在が数学上の仮定に過ぎなかったものについて、先生は、その通常空間への発露が、我々が認識できる具体的な事象の中に含まれていると、お考えですよね。」

グリユーエルが話を続けた。

「ねえ、何のお話なの？」

茉莉香は、そばにいたギルバートにこっそり小声で聞いた。

「宇宙物理学の理論に関する話ですよ。」

「もう！ そのくらいは、私でもわかってるわよ。」

難しい話だからって、私を子ども扱いしないでね。」

茉莉香は少し腹を立てた。

グリユーエルも、とてもうれしそうに話し続けている。

「先生は、宇宙医学会の論文で、『ヒガン回廊の諸惑星の生物は、すべて、銀河系の生物と同じく、核酸はD型、タンパク質はL型のアミノ酸のみでできている。』と報告されていますわね。」

「そうです。この点は、あの報告で最も注目すべき事実なのです。」

なぜかという、従来は、高分子レベルの対称性の破れ、つまり非対称性こそが、人類を始めとする諸生命に関する太古植民説の証拠の一つとされてきましたからね。

だから太古の植民の痕跡や可能性が無いと思われる銀河系外延部の星系では、違うものがあるだろうと思われるかもしれませんからね。」

「しかし、先生の発表では、それらの星系の生態系でも、すべて、銀河系と同じ『非対称性』が観察されたのですよね。」

グリユーエルが言った。



「そうです。だから驚くとともに、考えました。

そして、この現象を説明する仮説は、いわゆる『中立説』、つまり、これは自然現象にすぎないと言う説ですね、これしかないと思いました。

とりわけ、その中の『時空説』、つまり、時空の性質から、その非対称性が生まれると言う説しかないと思ったのです。

素粒子の対称性の破れと、その原因と言うか、因果関係は同じだろうという訳です。」

「そして、その時空の性質とは、具体的には、余剰次元の発露だと……。」

グリユーエルは確かめるように聞いた。

「恐れ入りましたねえ。

そこまで、お分かりになるのですね。では、お聞きしますが、天文倶楽部の論文では、その数学的根拠について試論を書いたのですが、あの公式はどう思われますか。

論文の私の説明はお分かりになりました？」

「拝見しました。

結論として導きだされた公式の、なんと美しいこと！

感動しましたわ。」

グリユーエルは、微笑んだ。

「ええー！ あのシンブルな公式の美しさを理解して下さるのですか？  
うれしいなあ。」

あの公式を導き出した時は、興奮して、一晩、眠れなかつたくらいうれしかったので  
すよ。」

アレックスは嬉しそうに言った。

「でも、あの公式を導く式の展開は、紙面の都合なのか、省略が多くて、わかりづらかつたです。」

そこをじっくりと教えて頂きたいし、公式の意味について先生と議論したいのです。」  
「わかりました。」

そこまで理解されておられるなんて、光栄です。さすがです。

家庭教師、喜んでお引き受けしましょう。」

「ありがとうございます。うれしいです。」

「あはは……。でも、一応、エカテリーナ様のご了解を得ておかないと……。」

私も銀河聖王家の王室典範に、拘束されていますから……。」

銀河聖王家の王室典範とは、聖王家の王族たちの結婚や親族関係、親子関係、相続などの身分法規を定めた勅令であり、エカテリーナ公爵夫人がその実務を仕切っている。

王室典範では、王族の未婚の男女が、年頃の異性と接触しようとする際には、予め、女

王の許可を得なければならぬと言うルールがあった。

そして、許可を要する『接触』とは、通常は男女交際につながるような行動を意味したが、家庭教師の依頼を受けることも含まれているのだ。

「もちろんですわ。よいご返事をお待ちしています。」

グリユーエルは、とてもうれしそうだった。

「姫様、お話が弾んでいるところにすみません。」

まだ、お食事も済んでいないのですが、人目を避けるためには、今のうちにご出発いたしませんと……。」

キャサリンが申し訳なさそうに言った。

「仕方ありませんね。原因は私にあるのですから。」

今朝のグリユーエルは、いつものグリユーエルだった。

「では皆様、これで失礼します。」

グリユーエルが別れの言葉を言った。

「出発に際してのお願いですが、姫様が昨夜この部屋でお過ごしになったことは、絶対に、命懸けの、秘密厳守でお願いします。」

セレニティの倫理観、道徳観は、昨夜のようなことにはとても敏感なのです。」

キャサリンが強い口調で言った。

「承知しました。」

これに対して、茉莉香をはじめ、全員が約束した。

グリューエル達は、急いで出発していった。

「さて、私達も部屋に戻りましょうか。」

白凰女学院のお嬢様たちが、この部屋に来る前に。」

「そうですね。」

アレックスとギルバートが言った。

「そうでしたね。」

深夜にこちらを訪ねたいというご連絡があつたのですが、グリューエル様が部屋にいらつしやることを知られないようにという、キャサリンさんのご要望で、お断りしたのでしたね。」

警備隊長のジェーンが言った。

「ええっ！ 知らなかったよ。」

でも、それって、ヤバイよ、ヤバイ！

あの子たち、もうすぐ来るんじゃないかなあ。」

茉莉香が慌てて言った。

「…… それでは、失礼します。」

アレックスとギルバートは、急いで部屋を出て行った。

そのころ、白凰女学院のヨット部員とOGたちは、スイートルームへ上がるエレベーターの中にいた。

「これで、スイートルームをブロックするセキュリティ・システムを突破しました。間もなく、エレベーターはスイートルームのある最上階に着きます。」

ヨット部の二年生、マリリン・パーシーが、携帯端末を操作しながら、言った。「よし、さすが。」

ヨット部は、いつの時代も人材豊富ね。

お蔭で、茉莉香の部屋を、アポ無しの突撃訪問できるわよ。フッフ・・・。

茉莉香のヤツ、昨夜、私たちの訪問を拒否するなんて、許せないわ。

いったい何を隠していたのかしら。」

リリイが言った。

「まあ、茉莉香さんもお年頃ですし、

昨夜、みなさんにお話したように、結婚を申し込んでいる男性もいらつしやるし、

何があつても大きな声を出したりせず、けつして驚かず、大人の対応をする心の準備

が必要かと・・・。」

ハラマキが、微笑みながら、期待する事態が目撃できることを前提に、落ち着いて対

応するようにと現役ヨット部員に言っている。

「しかし、茉莉香さんは、きつと、また、私たちを子ども扱いしようとしていますわ。」

ヒルデがすこしふくれっ面で言った。

「そうそう、」

『徹夜で、トランプして、遊んでました。ナハハハ・・・』なんて言つて、私たちを丸め込もうとするでしょうね。」

「あ、その笑い方。茉莉香先輩にソツクリですね。」

「とにかく、茉莉香さんは、女子高生を甘く見ています。」

私たちは、もう大人です。」

「まあ、そこまで茉莉香が隠したい気持ちなら、これは本物つてことね。」

だから、その時は、私たちも『大人の対応』をしてあげましょう。

今日のところはね。」

後日、白状させるけど。」

リリイが言った。

「ホンモノ・・・ですか。」

「ホンモノ・・・よ。」

「先輩、エレベーターのドアが開きます。」

「よし。みんな静かに、静かに。行くわよ。」

少女たちは、緊張してエレベーターを降りた。

廊下を少し歩くと、バツとドアの開く音がして、男性の話し声が聞こえてきた。

「あの声は、アレックス様とギルバート様……。」

「ということは……うわああ、『ホンモノ』だあ。」

「どうしましょう。廊下で出会ってしまいますよ。」

「……。」

「…… やつぱり、隠れましょう。」

「…… そうですね。やつぱり。」

「こちらです。非常階段のドアの奥に隠れましょう。」

「そうね。」

冷静に考えると、わざわざ隠れることはなかった。

しかし、実際に、茉莉香の部屋から朝早く男性が出て来る事態に直面した少女達は、慌ててしまった。

もちろん、大人の対応をする心の余裕はなく、『予感的中!』と興奮していた。

そして、少女達は急いで非常ドアの影に隠れた。もちろん、少しドアを開けて、聞き耳を立てている。

「いやあ、それにしても、昨日の茉莉香さんは、さすがでしたね。」

ギルバートが昨日の海賊シヨールのことを振り返って、言った。

「私も、やっと、念願が叶いました。」

アレックスが答えた。

「そうですね。」

いつも以上に、ノリノリでしたね。」

「そのお陰というか、結局、朝まで寝ないで、彼女とあれをすることになってしまいましたからね。」

「そうですね。彼女は『初めて』と言っていました。強かったですねえ。」

我々二人を相手にしても、堂々としていましたね。」

「アハハハ、楽しかったです。」

「その結果というか、彼女があんなお願いを言い出すとは、驚きました。」

アレックスもギルバートも、秘密厳守と言われたこともあって、キャサリンや、グリユーエルの名前は言わずに、昨夜の出来事を話していた。もちろん彼女の『お願い』とは、グリユーエルがアレックスに家庭教師を頼んだことを指している。

二人の男性は、上機嫌でエレベーターに乗って、自分の部屋に戻って行った。

「ねえ、聞いた？」



「聞いた！ 『初めて』 だって。」

「そうか、茉莉香も、とうとう……」

隠れて聞いていたヨット部員とOGたちは、アレックスとギルバートの話を、すべて茉莉香のことだと思った。

「だから、また、私たちに隠そうとしたのね。友達なのに……」

普通、そういうのって、自慢したがるものよねえ。」

リリイが言った。

「茉莉香さんは、私たちに隠そうとしたのではないと思いますわ。」

ヒルデが言った。

「あつ。そうかあ。……」

彼女達は、昨夜、アレックスの前でグリユーエルが恥じらっていた姿を思い出した。

「じゃあ、これは、やっぱり、『大人の対応』をしないといけないわね。」

ヒルデ。大丈夫？」

「大丈夫です。」

ヨット部員とOG達は、気を落ち着けて、茉莉香の部屋を訪れた。

「おはようございます。」

ヨット部のみんなは、元気よく挨拶をしつつ、豪華なスイートルームの中を見渡して

いる。

「スゴイ部屋ね。これなら、何人でも泊まれるね。」

「ナハハハ・・・スイートルームだからね。」

ところで、昨夜は、済みませんでしたねえ。

いろいろ取り込んでいたもので・・・。」

「良いのよ。茉莉香もいろいろと、忙しいだろうから。」

ところで、ねえ、茉莉香。私たち、朝食がまだなのだけど・・・みんなと一緒に食べようと思って。」

リリイが言った

「そうなんだ。では、一緒に食べよう。」

実は、私も、今起きたばかりでさあ。」

そう言う茉莉香の言葉を、ヨット部のみんなは少し、いぶかしげに聞いていた。

やがて、大きなダイニングルームに、全員分の朝食が運ばれ、みんなが席に着いた。

そして、朝食を食べながら、昨日の海賊ショーの話进行い出して、あれこれ楽しいおしゃべりが続いた。

「それで、昨夜、茉莉香は徹夜で何をしていたの？」

実は、私たち、アレックス様とギルバート様が、あなたの部屋から出てきたのを、見

「ちゃったのよねえ。」

突然、何気ない口ぶりで、リリイが聞いた。

「ええ!？」

少し慌てた口調で茉莉香が答えた。

「いやあー。実はねえ、アレックスさんとギルバートさんの三人で、徹夜でトランプして遊んでいたんですよ。ナハハハ・・・。」

『でたー! 茉莉香先輩のコドモダメシ!』

茉莉香の話聞いて、ヨット部員は、みなそう思った。

もちろん、茉莉香は、グリユーエル達がいたことを秘密にしようと、苦し紛れに、自分がカード・ゲームをしていたと嘘を言ったのだが、誤解されるにはそれで十分だった。

## 2 弁天丸Ⅱ（シャーロット造船所）

朝食後、白鳳女学院ヨット部の現役部員とOGたちは、シャーロット造船所に行き、進水式後再びドックに据え付けられた弁天丸Ⅱの前に立った。

「うわあー。新しい弁天丸って、本当に大きいねえー。」

リリイが言った。

「全長300メートルあるからね。」

茉莉香が答えた。

「さあ、みんな、入り口はこっちだよ。」

一行は、加藤茉莉香船長の案内で船に乗り込み、ブリッジへ向かった。

ブリッジでは、今までの弁天丸のクルーと、新しく乗り込む帝国軍のスタッフが、忙しく動き回っていた。

「あつ。船長、今日からよろしくお願いします。」

帝国軍のスタッフたちが、茉莉香のところへ挨拶に来た。

「こちらこそ、よろしく。」

「というわけで、今朝、造船会社から船の引渡しを受けたので、この船は、今日から私たちの新しい弁天丸です。」

茉莉香は、白鳳女学院ヨット部の現役部員とOGたちに説明した。

「茉莉香、この船、もう飛べるの？」

「そうだよ。エンジンテストや試験飛行とか、造船所で出来ることは終わっているからね。」

あとは、帝国軍側の仕事が残っているだけだよ。いろんな新装備のテスト・試運転が必要だけだね。」

「あれ？ ギルバートさん、アレックスはどうしたの？」

今は、ミーサが休暇中だから、船医がいないと困るのよねえ。」

「殿下は、急用だと言つて、今朝、帝都に戻られましたよ。」

「へえ。どうしたんだろう。」

でも、まだ、テスト中で、航海に出るわけじゃないから、いいかなあ……。」

「ねえ、茉莉香。あなたのお部屋を見せてほしいなあ。せつかく、私たちが内装のデザインに協力したんだから、出来上がったところを見せてほしいなあ。」

「そうだね。」

でも、ちよつと、恥ずかしいなあ……。」

茉莉香は、みんなを自分の部屋に案内した。

茉莉香の船長室は、弁天丸船長室と同じような、いかにも海賊船と言つたイメージで統一された部屋だった。

茉莉香はさらに、隣にある自室、つまり寝室にみんなを案内した。

「うわあ……。きれいなお部屋。」

リリー達が内装のデザインに知恵を貸した茉莉香の寝室は、女性らしい華やかな家具と、淡い暖色系の壁紙に包まれた、本当に素敵な空間だった。

「うわあ……。このベッド、大きいね。普通のダブルサイズじゃないね。」

「これじゃあ、トリプルサイズだよ。」

「ちようどいいかも……」

「ワハハハ……」

「でも、これは最高級の新婚用だよ。お姉さんの嫁入り道具と同じメーカーの品物だよ。ほら、とても、クッションが良いでしょう。」

一年生たちが、茉莉香のベッドの端に乗って、はしやぎ始めた。

### 3 セレニティ王国大使館（銀河帝国・帝都クリスタルシティ）

グリユーエルは、急いでシャーロットタウンから、帝都のセレニティ王国大使館に戻った。帰りのシャトルの機中で朝食をとるほどの慌ただしさだった。

グリユーエルもキャサリンも、無事に大使館に帰り、静かに迎えられたことにホッとした。

そして、いつものように、何気なく自室に入ったグリユーエルは、自分の部屋の雰囲気、なにか得体のしれない違和感を覚えた。

『何かが、いつもの自分の部屋と違う！』

『いったい、どこが違うのだろう……』

彼女は、五感を総動員して、違和感の正体を探った。

『臭いだわ。』

この、かすかな甘い臭いは・・・香水!? それともタバコ!?」  
自分の留守中に、誰かがこの部屋に入ったことを知ったグリユーエルは、急に恐怖を感じた。

彼女は、窓際に寄って、窓を背にして屋内を見つめ、侵入者に警戒した。

そして、茉莉香から貸し与えられた帝国軍用の携帯通信端末を操作して、茉莉香に、そして、昨日アドレスを教えてもらったばかりのアレックスにも、緊急通信を放った。

「助けてください!・・・」と

その時、侵入者は、彼女の前に姿を現した。

「お久しぶりですなあ、姫様。

ずいぶんと、お美しく、お育ちになりましたなあ。

伸びやかで優美な手足、

鮮やかな金髪、

澄んだ青い目、

そして、あなたの目には、類(だぐい)稀なる知性の光が宿っておられる。

本当に素晴らしい。」

中年の精悍な男性が、姿を現して、誉め言葉を言った。

しかし、その言葉はまるで人形を眺めて言ったような、冷たい空気を運んできただけ

だった。その言葉を聞いて、グリューエルは全身に鳥肌が立つような嫌悪感に襲われた。

「バルデン伯爵様！」

「いったいなぜ、あなたが、私の留守中に、私の部屋に入っておられたのですか？」

バルデン伯爵は、王国の守旧派の中心人物といわれる男だ。かつて王制の在り方を巡って、グリューエルと激しく対立した人物だった。

「私は、姫様のお帰りをお待ちしておりました。

お出かけのまま、戻られないのかと、心配しましたぞ。

「アハハハハ……。」

その時、部屋のドアが開いて、もう一人の男性がグリューエルの部屋に入ってきた。

その男性は、キースという名の、セレニティ大公の警護役を務める兵士だった。

「どうした？」

バルデン伯爵が、聞いた。

「済みました。」

キースが答えた。

「では、姫様。」

そう言って、バルデン伯爵がブラスターをグリューエルに向けた。



## 4 弁天丸Ⅱ（シャーロット造船所）

茉莉香は、白凰女学院ヨット部の現役部員とOGたちに、新しい弁天丸の艦内を一回り案内して昼食を済まして、ブリッジに戻ってきた。

そこへ、クーリエから声がかかった。

「船長。緊急通信だよ。グリユーエル姫から。」

「ええ!?! グリユーエルから?」

「どれどれ……。」

茉莉香はメッセージを読んだ。それにはこう書かれていた。

『助けてください! 今、私は大使館 誘拐? 襲撃?』

たったそれだけの単語が並んだ文面だったが、帝国軍の高度な秘話通信網で送られた緊急通信だった。

それを見て、茉莉香は全身が震えた。

あのグリユーエルが、たったそれだけしか書くことができなかつたほどの緊急事態であることは、疑う余地は無かつたからだ。

「船長、また緊急通信。」

今度は、アレックス殿下からTV電話よ。」

クーリエの声も、緊張している。

「出ます。メインモニターに回してください。」

やがて、メインモニターにアレックス殿下が現れた。

「茉莉香さん。大変です。グリューエル姫から、救難信号です。

そちらにも来ていますか？ ご覧になりましたか？」

「見ました。」

今、彼女に身に何が起こっているのでしょうか。

「ご存じのことがあったら、教えてください。」

「私は、先日の家庭教師のご依頼の件について、お返事をしようと大使館にいるはずの姫様に電話を入れたのです。しかし、『姫様は、急用で国にお帰りになった』と言われ、電話がつながりませんでした。」

そうしているうちに、救援メッセージが届いたのです。

『助けてください！ 今私は大使館にいる、誘拐か 襲撃か』という趣旨の文面です。アレックスが言った。

「文面は、私に来たものと同じですね。」

それにしても、居留守を使うとは、大使館もグルですか!?

「厄介なことになりましたね。」

茉莉香が言った。

「そうですね。」

大使館には外交特権がありますので、うかつに手を出すと、外交問題になりますからね。」

ギルバートがいつの間にか、茉莉香のそばに来て言った。

「それにしても、グリユーエルは、まだ大使館に居るのかしら。」

もう外へ連れ出されたのかしら?」

茉莉香が心配していった。

「あの一、そういう事でしたら、

大使館のセキュリティ・システムから、館内のカメラ映像をチェックしてみることは出来ないでしょうか?」

2年生ヨット部員のマリリン・パーシーが言った。

「なるほど。部屋に閉じ込められているのならば、見つかるはずだね。」

「でも、どうやってやるの?」

大使館のシステムって、ホテルのセキュリティより頑丈なはずでしょ?」

「そこは、私もやってみないと……。」

「でも、弁天丸は海賊船だから、何とか出来るかもしれない……。」

「先輩たちも、初めての練習航海で電子戦を経験したと自慢していらしたでしょう？」  
ヨット部員が口々に言った。

「うーん。なるほどねえ。大使館相手に電子戦かあ……。」

おもしろいねえ。」

茉莉香が言った。

「ねえ、弁天丸の新しい電子戦システムを使って、できないかなあ。」

茉莉香の呼びかけに、ギルバートが答えた。

「船長のご命令は、姫のご依頼を海賊業務として引き受けるということですよね。」

「……そ、そうですね。その通りです。これは海賊のお仕事。」

「それで、安心しました。」

では、保険組合に連絡するのも忘れないでください。」

「はい。保険組合には、すぐに連絡します。」

茉莉香が、保険組合の代理人を呼び出しているそばで、ギルバートが帝国軍から出向してきた弁天丸クルーに向かって言った。

「では、やりましょう。新米の海賊諸君、初仕事ですよ。」

「おおーっ！」

元気に、かつ楽しそうな声を上げたのは、新しく弁天丸に乗り込むことになった帝国

軍のエンジニアたちだった。OTAKUとして、腕に覚えのある彼らには、願ってもない初仕事だった。

もちろん、かれらは「こんなこと、初めてなので……」とか、「うまくいくか、不安ですう。」などと、口では言っていたが。

「クーリエさん。電子戦はこちらのシステムでやりたいので、あなたは船長の通信担当をお願いします。」

「了解。初仕事、頑張ってください。フッフ……。」

たちまち電子戦を見ようと、担当するデスクのまわりにヨット部員が集まってきた。

「でも、茉莉香！」

電子戦だけじゃ、足りないわよ。

もし、グリユーエルが見つかったとして、それからどうするの?」

リリイが言った。

「それは、もちろん助けるんだよ。」

「だから、ここは帝都から2000キロ離れた、シャーロットタウンなのよ。」

「そうですね……。」

「そうですね、じゃないわよ。」

リリイは、そう言って、ドンと足で弁天丸の床を蹴って鳴らした。

「ええ〜!?」ま、まさか、弁天丸で行けっというの?」

「当たり前でしょ。それが一番早いはずよ。」

それに、グリユーエルを助けに行くという一番肝心のことを人に任せるつもりなの?」

「それはそうだけど、今、ミーサだけでなく、シュニツツアーも休暇で休んでいるし……まだ弁天丸Ⅱの『初飛行式』も行っていないと言うか……。」

「茉莉香。セレモニーより、お仕事優先でしょ。」

「うーん。」

三代目、弁天丸Ⅱは飛べるの?」

「大丈夫。船は仕上がっているんで、もう、銀河の果てまで飛べるぜ。」

「よし。シュニツツアーはいないけど、ギルバートさんがいるから戦闘になっても大丈夫かなあ。」

弁天丸、発進準備!」

「ええ! 船長。ちよつと待ってください。」

まず、造船所に連絡して、ドック内に人が残っていないか、安全確認が必要です。

次に、船長から、造船所の所長に緊急発進の了解をもらってください。

それから、私は、帝国軍の帝都防空司令室に連絡します。

「帝都上空は飛行禁止ですからね。事情を話して許可をもらわないと、撃墜されますよ。」

ギルバートが言った。

「ナハハハ……。そうですね。ごもつとも。」

加藤茉莉香船長がドックの所長と話している間に、ギルバートは帝都防空司令室に連絡した。

彼が、管制官に飛行許可を申請すると、すぐさま、帝都防空司令室長のリッジウエイ准将がTV電話に顔を出してきた。

「やあ、ギルバート。」

早速、海賊船の出番かあ。なるほどなあ。」

「事件を知っておられたんですかあ。」

「ああ。すでに、白薔薇家のアレックス殿下から、救援要請を受けている。」

しかし、外交特権のある大使館の中の出来事だから、表立っては警察も軍も動けないので、困っていたところだ。」

「そうですか。では、遠慮なくやらせてもらいます。」

「ああ、そう言う事情だから、帝都の航空管制は、大丈夫だ。」

ところで、弁天丸では、あの儀式は終わっているのか？」

「終わっていません。」

「じゃあ、弁天丸は何も使えないな。それなら、こちらとしては、一層安心だ。」

「はい。まあ、キャプテン茉莉香なら、そのところはうまくやってくれると思います。」  
「ハハハ……。お前さんもついているからな。」

では、頼んだよ。

実は、この件は、女王陛下や宰相閣下からも逐次状況報告を求められているので、我々の想像以上に大ごとになりそうだ。

気を引き締めてかかれ。」

リッジウエイ准将は、最後に一番重要なことをそつと言って、緊張した顔で敬礼し、通信は切れた。

「船長、帝都防空司令室から、飛行許可が出ました。」

「船長、造船所の所長から、発信許可が出ました。」

「では、帝都のセレニティ大使館へ行きましょう。」

弁天丸Ⅱ、発信します。」

茉莉香が言った。

弁天丸Ⅱは音もなく、スーと造船所のドックから上昇を始めた。重力制御エンジンは快調に稼働を始めたようだ。



「うわーあ！ 推進剤の噴射も無く、スーッと飛び上がるんですね。」

「まるで、魔法みたい。」

「私、重力制御推進の船って、初めて乗りましたが、すごいですねえ。」

ヨット部員の一年生たちが、興奮した声を上げた。

「高度10キロに達しました。水平飛行で、帝都に向かいます。」

操舵手が言った。

「すぐさま、ドーンという軽い衝撃が艦内を貫いた。」

「マッハ1を突破した衝撃波です。間もなく、マッハ2を超えます。」

「ですから、本艦は、帝都に1時間以内で到着します。」

「大気圏内にもかかわらず、すごい加速ですね。」

帝都まで2000キロをひとつ跳び。さすが、新しい弁天丸。」

茉莉香は、うれしくなってきた。

「船長、セレニティ大使館の監視カメラの映像が出ます。」

「ご覧になりますか？」

「ねえ。ヒルデ。」

カメラの映像を見て、グリユーエルを探すのを手伝って……。

あなたなら、大使館の中の様子を知っているでしょう？」

「そうですね。お手伝いします。」

ヒルデは、大使館の各箇所を写しているカメラ映像を見て、グリユーエルを探し始めた。

「船長、早めにミーサ先生にご連絡をとって、至急、弁天丸に戻れないかお聞きいただくように進言します。」

やはり、医師が必要な事態が想定されますので……。」

ギルバートが言った。

「そうですね。クーリエ、お願い。」

茉莉香は『医師が必要な事態』を想像しながら、少し重い口調で言った。

「了解しました。連絡を取ります。」

クーリエの口調も重かった。

「お姉さまの御部屋には誰もいません。」

ああっ！ 地下の小部屋に誰かが、閉じ込められています。

その映像を拡大できませんか。」

カメラの映像を見ていたヒルデが叫んだ。

「やっぱり、キャサリンさんだ。」

キャサリンさんが、縛られて閉じ込められています。」

「これはヤバイわね。彼女はグリユーエルの警護役でしょう。」

茉莉香が言った。

「そうですね。お姉さまの身に何かが起こったことは確かですね。」

ヒルデが答えた。

「でも、いくら、グリユーエルの部屋の監視カメラが動いていても、大使館ごとグルだから、誰も助けに来てくれなかったのね……。」

茉莉香が、力（ちから）なく、言った。

「監視カメラ……！」

変ですわ。お姉さまはいつも監視カメラのスイッチをオフにしていらしたはず。

それがオンになっていると言うことは……。

あのう……。このカメラの映像は、過去の録画部分も見ることができるとはですか？」

ヒルデが聞いた。

「はい。できますが……。」

あつ。そうか。『犯行』の瞬間が映っているかもしれないと言うのですね。」

電子戦を指揮していた技術士官のブラウン中尉が言った。

「わかりました。」

おい、姫様の部屋の映像を遡って再生しろ。」

「はい。」

「ああつ!!」

遡つて映像をチェックしていた人たちは、そろつて大声を上げた。

そこには、一人の男が何かを話しながら、グリューエル姫に近づいて、そしてブラスタで姫を撃つ様子が映っていた。続いて、もう一人の男と一緒に、倒れた姫をストレッチャーに乗せて、部屋から運び出して行つた一部始終が映っていた。

さらに地下駐車場と裏口の監視カメラ映像から、グリューエル姫が地下駐車場でストレッチャーごと車に乗せられて、その車が裏口から大使館を出る様子が確認された。

「ヒルデ、この男が誰か、知っているのね。」

茉莉香が聞いた。

「はい。バルデン伯爵、セレニティの有力貴族です。」

そして、お姉さまの一番の政敵です。」

そう言うヒルデは、怒りを必死に抑えて、冷静さを保とうとしていた。

「グリューエルは、大丈夫かしら。」

「あの男の考え通りに事が運んでいるとしたら、お姉さまは殺されてはいないと思います。す。」

そのために、わざわざ、お姉さまに会いに帝都まできたのでしょから。

あの男は、お姉さまをセレニティに連れて行こうとしています。」

『あの男の考え』って、何をしようと言うの、彼は？』

「……………」

茉莉香が聞いたが、ヒルデは答えなかった。

「ヒルデ様、この映像を銀河帝国に提供してもよろしいでしょうか？

帝国の首脳たちも、この事件にご関心をお持ちのようですから……………」

ギルバートが言った。

「はい。承知しました。」

「どうかお姉さまを助けてくださいとお伝えください。」

「わかりました。」

「よろしいですね、船長。」

「はい。次は帝国の出番ですね。」

茉莉香の返事を聞いて、ギルバートが帝都防空司令室長のリツジウエイ准将に連絡を

取った。

「船長、まもなく帝都上空に着きます。」

「どこへ着けますか？」

操舵手が聞いた。

「もちろん、セレニティ大使館よ。」

「ええ!? グリユーエルを追って、宇宙空港へ行くのじゃないの?」  
リリイが聞いた。

「それは、銀河帝国に任せましょう。空港の管理者はあちらだから。」

それより、私たちは、キャサリンさんを助けに行きましょう。」

「あつ。それなら、船長。」

弁天丸のビーム砲などの武器は、帝国軍の慣習に従ってまだ封印されたままですから、使えません。

「ご承知おきください。」

「ナハハハ……。それを早く言ってよ、ギルバートさん。」

でも、弁天丸のビーム砲は強力過ぎて、この帝都の真ん中で使っちゃいけないのは分かっていたわよ。

大丈夫よ。何とかして見せるわ。」

茉莉香は、艦内放送のマイクを握った。

「聞いて、弁天丸のみんな。これから、セレニティ大使館へ海賊しに行きます。

仲間を助けるのよ。」

白兵戦の準備よろしくう。」

さあ！ 海賊の時間だあ。」

「おぉー！」

館内放送を使った茉莉香の掛け声に、船員たちが答えた。

やがて、弁天丸は、セレニティ大使館の上空に到着し、大使館の建物すれすれの高度にまで降下して、静止した。

「おもしろいわあ。重力制御方式だと、こういう船の使い方もできるのよね。

さーて、まずは降伏勧告かなあ。」

茉莉香は、在銀河帝国セレニティ王国大使に電話をかけた。

大使はなかなか電話口に出てこなかった。

しかし、茉莉香が大使館上空に静止している弁天丸から電話していると知って、ついに電話に出てきた。

「大使閣下。お初にお目にかかります。宇宙海賊船弁天丸船長、加藤茉莉香です。

グリユーエル殿下のご依頼により、参上しました。

殿下にご連絡を取りたいのですが、お取次ぎを願います。」

「残念ですなあ。姫様は、先ほどお出かけになりました。」

「ほうほう。殿下が大使館にいないとおっしゃるのですね。」

これは、興味深い御発言ですねえ。記録に残しましょう。

王族たる殿下の身にもしも何かがあれば、銀河帝国では、聖王家に対する不敬罪に準ずる大罪にあたります。ご存じですよね。」

「なんのことが、おっしゃる意味が分かりませんな。」

私は、外交使節として、帝都に滞在する身ですぞ。

いくら海賊でも、そのくらいのご存じでしょう。」

「もー。お上品なおしゃべりは、やめたわ。」

あなたの言う通り、私たちは海賊。だから外交特権なんか気にしないわよ。

いまから、グリユーエル殿下を探すため、大使館を占拠します。抵抗するなら、あなたたちの頭上にいる弁天丸から砲撃します。

さあ、降伏しなさい。」

そう言って、茉莉香は大見得を切った。もちろん、監視カメラの映像を見て、誘拐の事実を知っていることは隠していた。

「……。大使館には、海賊船と戦う武力はありませんからな。」

降伏しましょう。どうぞ、好きに探してください。」

大使は冷たい微笑を浮かべて返答した。しかし、その返答は、まだまだ負けていないと言う意気込みがあった。

「では、そちらに上陸します。」



## 5 セレニティ王国大使館（帝都クリスタルシティ）

茉莉香たち、弁天丸のクルーは、白兵戦用の防護服に身を包んで、弁天丸から大使館の庭に飛び降りて行った。もちろん、白凰女学院のヨット部員達は船に残ったままだった。

そして、弁天丸に残ったヒルデの道案内を無線で聞きながら、一隊はグリユーエルの部屋に、一隊はキャサリンの閉じ込められている部屋に、そして茉莉香たちは大使の執務室に向かった。

「大使閣下。グリユーエル殿下はどちらにおられるのですか？」

「ご存じなのでしょう？」

大使の執務室に入った茉莉香が言った。

「私は何も知りませんな。」

お出かけの行き先も聞いておりませんからねえ。

でも、ひよつとすると、殿下はまだ、自室におられるのかもしれないねえ。」

「船長。殿下の部屋には、誰もいなかったと連絡がありました。他のクルーは、これから、大使館全体を捜索すると言っています。」

ギルバートが言った。

「では、キャサリンと一緒にどこかへ御忍びで出かけたのでしょうか。」  
先日も、ほとんど無断外泊ともいふべき『ご活躍』でしたからなあ。」

大使が、グリューエルの近頃の行動について皮肉を言った。

その時、大使の執務室のドアが、大きな音を立てて空いた。

そして、キャサリン小隊長が、激しい勢いで飛び込んできて、いきなり大使に飛びかかろうとした。

あわや大使に激突と言うところを、ギルバートが割って入って、キャサリンを投げ飛ばし、彼女の突進を止めた。

彼女は、ギルバートに床に抑え込まれているにもかかわらず、

「邪魔をするな。放せ。私は裏切り者を成敗するんだ。」

と、まだ抵抗をやめない。

「大使に向かつて、何を言うか。衛兵の分際で！」

大使は立腹していた。

「キャサリンさん、私は大使を守るために、あなたを止めたわけではありませんよ。」

あなたを守るために、止めたのですよ。」

ギルバートが言った。

「……………」

キャサリンは沈黙した。

「あなたは、大使を『成敗』して、自分も死ぬつもりだったでしょう。でも、あなたには、まだ任務があります。姫を助けると言う任務が。死んではなりません。いっしょに、姫を助けに行きましょう。」

茉莉香が言った。

「船長。大使館内に姫様のお姿は無いとクルーから連絡がありました。」

まだ、キャサリンを抑えながら、ギルバートが言った。

「そうですか。」

では、どこかへ連れ去られた姫様を追いましょうか。

おっと、忘れるところでした。

大使閣下、これは、今回の姫様の御依頼を果たすための費用の請求書です。

一応、費用は、姫を探して、セレニティ星系まで行く予定ですから高額になっていますが、事件が簡単に片付けば、もちろん、実費精算しますから。

海賊は、明朗会計です。

そののところ、よろしく。」

そう言つて、茉莉香はにっこり笑つて、大使に請求書を渡し、大使は呆然とした表情で受け取つた。

実は、茉莉香は、大使に請求書を渡すためにこの部屋を訪れたのだった。

「さあ、グリユエールを助けに、弁天丸、出航よ。」

乗船を急ぎましょう。」

船長の掛け声に応じて、弁天丸のクルー達とキャサリンは大使館から去って行った。

## 第三十一章 セレニティ王国占領作戦

## 1 弁天丸Ⅱ

弁天丸Ⅱは、セレニティ王国大使館を離れて上昇した。

「グリユーエルは、今どこにいるのかしら。」

誘拐犯は、宇宙空港で拘束されたのかしら？

ねえ、情報収集してみて。」

茉莉香は、クルーに指示を出した。

「船長、帝都防空司令室から聞きました。」

二時間ほど前に、宇宙空港に停泊していたセレニティ軍のシャトルが、無許可で緊急発信していったそうです。行先は、セレニティの軍艦が駐機している空域だそうです。」

ギルバートが言った。

「誘拐犯を威嚇して捕まえられなかったの？」

「はい。向こうはこちらが撃たないと見越して、強引に発信していったようです。」

実際のところ、姫様だけでなく、空港にいる民間人に危害が及ばないように、軍に交戦を控えよと指示が出ていたようです。」

「そうかあ。確かに、人質を取られているわけだからねえ。」

茉莉香も、悔しそうに言った。

「船長、船長。チアキちゃんから通信よ。」

クーリエが言った。

「茉莉香！ 見たわよ。例のビデオ。許せないわね、アイツ。」

チアキが画面に現れると、いきなり怒りをぶちまけた。

画面に現れたチアキは、帝国軍の軍服姿だった。それも、第一艦隊司令官の肩章をつけた上級大将の制服を着ており、表情にも緊張感が溢れ、戦闘モードになっていた。

「誘拐犯は、二時間前、帝都の宇宙空港を堂々と発信していったそうよ。」

茉莉香が悔しそうに言った。

「そうなのよ。」

おまけに、向こうは、セレニティに向かうために超光速跳躍の航路追跡が難しい新型船に乗りかえるそうだし、誘拐されたグリューエルの無事が最優先だから、途中で捕獲するのは難しいらしいわ。

それなら、目的地を先に押さえたらどうかという話をしているの。」

「ええ！ どういうこと？」

「簡単よ。」

第一艦隊を出して、先回りしてセレニティ星系を占領してしまえばいいのよ。

時空トンネル航法のスピードでは、セレニティの軍艦なんか、あつという間に追い越してしまうからね。」

「ええー!! セレニティ王国全体を占領しちゃうの?」

茉莉香は驚いた。

「そうよ?」

だって、弁天丸から送ってもらったビデオに決定的な証拠があるそうよ。」

チアキがこともなげに言った。

「そりゃ、実行犯が『バルデン伯爵』という奴だつてことはわかるけど・・・」

茉莉香が言った。

「船長。もう一人の男は、キースといいます。」

セレニティの近衛隊第一小隊長を勤め、大公様専属の凄腕の警護役として知らぬ者はおりません。」

ヒルデが口を挟んだ。

「そうなのよ、茉莉香。」

キースと言うヤツが帝都にやってきたと言うことは、この件にセレニティ大公もかわっている証拠だそうよ。」

それに、情報部から、セレニティの政治情勢やアイツの狙いも聞いたわ。ヒルデ、話してもいいかしら。

あらかじめ、茉莉香にも知っておいてもらった方が良いと思うのよ」  
いつの間にか、チアキも沈んだ口調になっていた。

「どういうことかしら。」

「チアキ様、おぞましい話ですが、母国のことですから、私からお話します。」  
ヒルデが言った。

「茉莉香さん、バルデン伯爵の狙いは、人工子宮、『薔薇の泉』の復活です。

そのために、お、お、お姉さまの……」

ヒルデは、途中で涙を抑えて、言葉が続かなかった。

「ええっ!! まさか?」

グリーユエルの体で、薔薇の泉の『コア』を作り出そうというの?」

茉莉香が言葉をつづけたが、茉莉香も全身に鳥肌がたつような悪寒に襲われた。

そばで聞いていたヨット部の少女たちも、顔色を変えるほどの衝撃を受けている。

『薔薇の泉のコア』、それは、人間の受精卵だった。

その材料となる卵子がどこにあり、どうやって受精卵が作り出され、人工子宮にセツトされるかを考えると、それは、特に女性にとって、気を失いそうになるほど、恐ろし



いことだった。

「ごめんなさい。ちょっと、刺激がきつ過ぎたかしら。

それで、茉莉香。

とりあえず、あなたの弁天丸で、バルデン伯爵の船を追いかけてほしいの。

セレニティ王宮への最終的な対応方針は、今、母上、宰相、参謀本部が相談しているらしいけど、それが決まるまで追跡を継続して欲しいの。

ついては、時空トンネルで超光速跳躍する前に、私のいる中央基地まで来て。

私が、弁天丸の武器につけられた封印を解除するから。」

「わかりました。

こちららも、乗員を乗せるために中継ステーションに寄るので、その後、すぐに向かいます。」

茉莉香が答えた。

弁天丸は、大気圏外まで上昇すると、帝都クリスタルスターの民間航路用中継ステーションに寄港した。

ここで、ミーサとアレックスの二人を乗船させるためだった。

幸いなことに、ミーサは『旅行』から帰ったばかりということ、中継ステーションにいたのだ。そこでアレックスも乗船するという。

「えーっ！ ミーサ先生、結婚したんですか!？」

弁天丸に乗船してきたミーサを見て、茉莉香と白鳳女学院ヨット部員・OGたちは、びつくりして、大声を出した。

「ノーコメントよ。海賊なんだから、プライバシーは詮索しないの。」

ミーサは、いつものように言った。

しかし、ヨット部員たちは、ミーサの左手薬指にある豪華な指輪を見逃さなかった。

しかも、彼女の服装はいかにもリゾート惑星に新婚旅行に行ってきたという感じの華やかなものであり、何よりも、一人の男性がミーサに付き従って、その男性の背丈より高く積み上がったスーツケースと土産物などの荷物を載せたカートを弁天丸に運び込んできたからだ。

「あつ。ケントさん。どうも、このたびはおめでとうございます……。」

茉莉香は、ミーサに付き従ってきた男性に挨拶した。

「いやあ、どうも、どうも。」

クラーク・ケントは、嬉しそうに茉莉香に返事をした。

「あの人、だれ？」

リリイが小声で言った。

「今は、銀河テレビの社長、クラーク・ケントさんよ。ヒガンの遠征で一緒だったの。」  
茉莉香が答えた。

「えー！」

茉莉香の説明を聞いて、ヨット部員たちが騒ぎ出した。

その騒ぎを見ながら、アレックスが弁天丸に乗り込んできた。

「休暇がずいぶん長いと思っていたら、ミーサ先生は新婚旅行だったんですね。」

アレックスが言った。

シュニッツアーは都合がつかないと行って、結局、乗船してこなかった。

着替えてブリッジに現れたミーサとアレックスは、さつそくクルーから現在までの経

過を聞かされた。

すると、ミーサが言った。

「そういうことなら、ヨット部員は、この中継ステーションで直ちに船を降りて、海明星へ戻りなさい。」

ねえ、船長。

ヨット部員は、そろそろ学校へ戻る時間でしょ。

あなたの後輩のことだから、きつと、練習航海だと言って学校を抜け出してきたんでしようねえ。『代返』がバレないうちに、戻らないとね。

それに、今回は、未成年には、ちよつと見せたくない仕事になりそうね。」

「そ、そうですね……。学校のことを忘れていました。」

ハイ、ハイ。みんな。船を降りましょう。学校へ戻る時間です。」

茉莉香が言った。

「ハイ。」

ヨット部員は、意外にも、素直に返事をして、帰り支度をするために船室に戻っていった。

弁天丸Ⅱは、中継ステーションを出航した。

メインモニターには、弁天丸の出向を見送るために、中継ステーションから手を振るヨット部員やOGたちの姿が映り、それも小さくなっていた。

そして、弁天丸は、帝国軍中央基地に向かって航海を始めた。

「おい、どうするんだよ。いつまで黙っているつもりなんだよ?」

「オレ、どんなことになっても、知らないよ。」

弁天丸では、船長よりミーサの方が怖いんだよ。分かっているの!」

「分かっています、私たちも『脅されて、しかたなく』、手伝ったワケで……。」

三代目と百目が、電子戦を担当した帝国軍のスタッフ、ジョージ・ワトソン少尉とビル・グリーン少尉と、ヒソヒソと小声で話している。

「そこ、聞こえてるわよ。」

ミーサが腕を組みながら言った。

「はああ。お聞きの通りなんですけど……。」

「また、ヨット部員の密航ね。今回は何人なの？」

「全員です。」

「なにそれ！ 彼女たちは今どこにいるの？」

「談話室にいます。」

ミーサが、談話室を呼び出すと、ヨット部員たちがメインモニターに現れた。

「ドーも。よろしくお願します。」

ヨット部員は、あいさつしながら、手を振っている。

「ねえ。先生、結婚式とか、新婚旅行のお話、聞かせてくださいよ。」

「楽しかったんでしょう？」

「先生、素敵です。」

「お二人の出会い、どういうイキサツですか？」

ヨット部員は、各々、ミーサの結婚話に強い関心があるらしく、詳しい話を聞きたがっていた。

「ううう……あなたたち、懲りないわねえ。」

そういつて、ミーサはメインモニターから顔をそらし、クルーの方を振り返った。  
「それで、なぜ、密航の手引きをしたの？」

ミーサは、手引きをした二人に詰問した。

「いや。今日、彼女たちがセレニティ大使館との電子戦を観戦していた時に、私たちのパソコン画面上にある『マスコット』を彼女たちに見つけられて……」

「船長に密告されて船を降ろされたくなかったら、言うことを聞けと……」

帝国軍のスタッフ、ジョージとビルが言い訳をした。

「それで、密航の手引きをしたわけなのね。……まったく、女子高生に脅されて言うことをきくなんて、情けない。」

ミーサが、すこし憮然とした表情で言った。

「はい。すみません。」

でも、おかしいんです。中継ステーションに寄港する前とくらべて、三人も乗員が増えているんです。女子高生達のほかにも密航者がいるんでしょうか？

たしか、乗船したのは、ミーサ先生とアレックス殿下の二人のはずなのに……」

ジョージが言った。

「はあ……？ まさか……」

ミーサは医務室に電話をした。

「ねえ、アレックス。クラークがまだそっちにいるの？」

「はい。まだ、ミーサ先生から『帰っていい』というお許しが出ていないと言って。」

「まったく何やっているのかしら。それで、彼は、今、何をしているの？」

ミーサは、頭を抱えながら、言った。

「いやあ、今回の弁天丸の仕事について、大事件の臭いがすると行って、ケントさんにいろいろ質問するので、私も返答に困っていたところですよ。」

アレックスが答えた。

「ああ……。電話をクラークに代わってちょうだい。」

モニター画面に、クラーク・ケントが現れた。

「ミーサ、もう弁天丸は次の仕事のために出航したようだけど、僕も乗っていいんだよね。」

僕の直感では、今度の仕事は、とても面白そうなんだけど……。」

「かなりやばい仕事よ。」

たぶん、銀河帝国から報道禁止に指定されるから、取材はあきらめなさい。「ひどいなあ。マスコミの役割を何だと思っているんですか。」

「いまさら、あなたの口から、そんな言葉がでるの？ アキれたわ。」

とにかくダメだから。」

「いやあく、そこをなんとか。」

この間も、銀河テレビのオーナーから、

『お前が仕入れてくるネタは面白いけど、報道禁止ばかりで売り上げにつながらない。』

つて、言われたもので……。」

「あの……。お取込み中、済みませんが、本題に戻っていいですかあ。」

茉莉香が言った。

『『マスコット』つて、なんですかあ。』

どうして、それが私に見つかると、船を降ろされるようなことになるんですかあ？」

「あっ！」

ジョージとビルは、顔色を変えた。

マスコットとは、帝国軍の男子兵士の間で大流行しているコンピュータのアクセサリだった。デスクトップに常駐したアバターが、パソコンの操作者に語りかけ、愛嬌を振りまいてくれる。

例えば、パソコンの操作を始めると、メイド服姿のアバターが可愛い声でこう言う。

「お帰りなさいませ。」

極めつけは、夜勤の兵士を励ますものだった。



深夜になると、Tシャツと超ミニスカ姿のアバターが現れて、ボンボンを振り、スコトが見えるほど両足を高くあげて飛び跳ねながら、こう言う。

「フレ、フレ、○○○」

ご丁寧に自分の名前を呼んで励ましてくれる。

もちろん、ジョージとビルのマスコットのモデルは、茉莉香だった。

茉莉香の声や映像を使った、3等親のアバターが動き回る。さすがにスコトはアニメであり本物の映像ではなかったが・・・。

勿論、製作に本人の了解を得ているはずがない。

バレたらどうなるか、明らかだった。

2 セレニティ軍ハルモニア号（バルデン伯爵チャーター船）

バルデン伯爵達を乗せたセレニティ軍の戦艦ハルモニア号は、帝国軍の臨検要求を無視して、帝都のあるレッドクリスタル星系・惑星軌道上の各国軍用駐機エリアを出航した。

そして直ちに超高速跳躍を行った。

「ふん。帝国軍なんか、張子の虎だ。」

人質を気にして、一発も撃ってこないじゃないか。」

バルデン伯爵は、ハルモニア号のブリッジで、興奮して勝ち誇るように言った。  
「伯爵。まだまだ油断禁物ですぞ。」

帝国軍の追跡は、当然、予想しなければなりません。セレニティ星系までは、まだ7000光年ほどありますから。」

ハルモニア号の艦長が言った。

「だから、ヤツらの追跡を振り切るために、この船で来たんじゃないか。」

この新型船は、時空震の航跡を追尾するのが困難なステルス性をもつからな。さて、グリューエル姫にそろそろ御目覚め頂く時だろう。」

姫には、ご自分の運命を受け入れてもらうのだ……。」

バルデン伯爵はそう言って、ブリッジを離れ、姫のいる医務室へ向かった。

伯爵は医務室に入ると、医師のフランクに聞いた。

「どうだ、先生、作業は進んでいるか？」

「はい。患者の遺伝子などの検査は終わりました。」

ご覧ください。素晴らしい結果です。」

身体的特徴を伝える遺伝子などは、初代王アレキサンダー一世のような、金髪、碧眼、優美さと意志の強さを兼ね備えた目鼻立ちなど、六百六十六のチェック項目すべてで、偉大な王の御姿を十二分に備えております。」

知能だけでなく、勇氣、忍耐力などの情動をつかさどる因子も、三百三十三のチェック項目すべてで、極めて高い能力を備えております。

もちろん、病気などの劣った形質を伝える恐れのある因子はまったく見当たりません。

この結果をみると、患者が、幼いころから、

表では『モンブランの神童』と称賛を集めつつも、

裏では『薔薇の泉の最高傑作』と揶揄されてきたのも当然ですなあ。」

フランク医師は、グリユーエルを名前で呼ばず、ただ「患者」と呼んでいた。

「そうか、そうか、私の目に狂いは無かったな。」

では、次の段階のテストを進めてくれ。」

「はい。承知いたしました。」

まずは、極細ファイバースコープを使って最小限の『組織片』を採取するだけですから、患者に傷が残ることも無く、痛みもありません。

おそらく、患者は気が付かないでしょう。ハハハ・・・。

組織片を培養して成熟させるのに時間がかかりますから、検体の状況によつては、実験開始までは、ひと月ほどかかる場合もありますが・・・。

フランク医師は、自分がこれから行うことを、ごく普通の医学的実験のように表現し

ていた。

「もつと早くできないのか。」

「薬品を投与すれば可能ですが、お望みですか？」

「いや、可能な限り自然体のままで実験を行おう。時間は十分あるからな。」

「それでは、『組織』の採取が済んだら、患者の目を覚まさせてくれ。」

「承知しました。」

「ここは、何処なのですか？」

「グリュールは、医務室のベッドの上で目覚めた。」

「お目覚めですか。姫様。ここは私の船の中です。」

バルデン伯爵が答えた。

「伯爵！ では私を誘拐したのですね。」

「どうして、このようなことを。」

「直ちに私を開放しなさい。」

「グリュールは怒りを込めて言った。」

「オホホホ……。姫様は、御自分の置かれた状況を自覚されておられないようですね。」

「なにをいうのですか！ 臣下の身分をわきまえなさい。」

「では、申し上げます。」

そう言つて、伯爵は恭しく一礼した。

「臣下として、心より、お喜び申し上げます。」

大公様の御意により、姫様の御縁組が整いました。

姫様は、新しい『薔薇の泉の花嫁』に選ばれました。

セレニティ正統王家の輝かしい伝統を受け継ぐため、その御役目を果たして頂くよ

う、心より、お願い申し上げます。」

「なんですつて!?!」

ウソです。大公様がそんなことをお決めになるはずはありません。」

「本当です。姫様。」

「絶対に、ウソです。」

大公様に通信をつないでください。直接、お話を伺いすればわかります。」

「それはなりません。」

姫様、もう決まったことです。

どうか、お気を静め、御覚悟をお決めください。」

伯爵は、あくまで、慇懃無礼に言った。

「イヤです。私は、絶対にイヤです。同意なんかいたしません。」

「そうは申されましても……。」

「薔薇の泉。あんな、おぞましいものはこの世からなくすべきだと、私は、申し上げてきたではないですか。」

押し問答は続いたが、グリューエルは強く拒否し、全く態度を変えなかった。

伯爵は、この場で同意を得ることをあきらめ、医師にこう言った。

「少し、冷静になって考えて頂こう。安静剤を指し上げる。」

「はい。」

フランク医師は、再び、グリューエルを眠らせた。

### 3 契約の儀式

茉莉香は、「マスコット」について詳しく詰問しようと思った。

しかし、グリューエルを誘拐した船を追うために、逃走した船の情報を入手しようとはちこちと連絡を取るために忙しく、それも後回しにせざるを得なかった。

「船長、船長。」

間もなく帝国軍中央基地に到着しますよ。

到着次第、第二王女殿下が弁天丸に乗船されるため、連絡シャトルで待機されているとのことですよ。」

クーリエが言った。

やがて、チアキが乗船してきた。

「茉莉香。ごきげんよう。」

「チアキサマこそ、ごきげんよう。」

・・・ナハハハ、帝国女学院風の挨拶は、なんだか恥ずかしいね。」

「そうね。普通りにいきましよう。」

でも、今日のあなたは、ずいぶんイキイキとしているわね。

やっぱり、茉莉香は、海賊営業の方が楽しくて仕方ないようね。」

「ナハハハ・・・。そうかなあ。」

「そうよ。」

時間もないから、それじゃあ、さっそく始めるわよ。」

そういつて、チアキは船のブリッジの中央、戦闘管制デスクの前に立った。

『契約の儀式ね。私も初めて見るわ。』

ミーサが言った。いつのまにか、クラーク・ケントも彼女の側に来ている。

それだけではなく、ブリッジのクルーやヨット部員までが集まって、チアキに注目している。

帝国軍の軍艦は、戦闘管制デスクにある認証装置による認証をクリアしないと、武器の操作ができない仕組みになっている。

弁天丸Ⅱは、海賊船という自由な船で、帝国の指揮下にはないので、本来、そのような認証装置の装備は、弁天丸の方で拒否するはずである。

しかし、今の弁天丸Ⅱは、銀河帝国軍の最新装備をテストするという帝国の仕事を請け負っているのです、帝国軍の軍艦と同じような認証装置が特別に装備されている。

しかも、新造艦である現在の弁天丸Ⅱでは、認証装置に『封印』と言われる始動時のみの特別なロックがかけられた状態になっており、これを解除するのは、銀河聖王家の王族の役割とされている。

そして、この『封印』を解除するために王族が行う一連の操作は、『契約の儀式』と呼ばれている。それは、まるでお伽噺（おとぎばなし）において、魔法使いが悪魔を使徒として従わせる際の儀式のような名前である。それは、実際の操作が、リアリストの帝国軍人ですら、そう呼びびたくなるようなものだからである。

チアキは、弁天丸Ⅱの戦闘管制デスクの中央にある、認証装置に自分の手を置いて、目を閉じて言った。

「大宇宙始まりの時、

われら銀河聖王家をこの銀河系（うみ）に遣（つか）わした八百万（やおよろず）の神々よ。

そして、三千年の銀河帝国を支えし、祖先の英霊よ。



謹んで訴える。

銀河聖王家の一族である、私、チアキは、わが名において、謹んで訴える。」

チアキがそう言い始めると、艦内の照明が暗くなり、一方、チアキが手を置いた認証装置が光り始めた。

かまわず、チアキは祝詞（のりと）を続けた。

「私は、この船に新たな命を吹き込むことを、乞い、願う。」

この船を我らが無敵艦隊の一翼に加え、未永く、われら銀河聖王家に仕えさせるためにこの船に新たな命を吹き込むことを乞い、願う。」

認証装置はますます強い光を放ち始めた。

さらに、チアキの長い黒髪が風に舞うように浮き上がり、光の中を漂い始めた。

「弁天丸Ⅱ（にせい）よ。」

目覚めよ。私の声を聞くがよい。」

認証装置の発する光はますます強くなっていく。

やがて光が点滅を始めた。心臓の鼓動のように。

「弁天丸Ⅱよ。」

わが声が届いたならば、

銀河聖王家の一族である、私、チアキは、わが名において、汝、弁天丸Ⅱに問う。

汝は、我ら銀河聖王家を主（あるじ）として、命果てるまで我らに仕えることを誓うか。」

チアキの声を聞くと、弁天丸の認証装置はそれ以前よりもゆつくりとした光の点滅を繰り返し始めた。

見ていた人たちには、弁天丸Ⅱがチアキの言葉に答えたように感じられた。

「八百万の神々よ。祖先の英霊よ。

この船、弁天丸Ⅱは、今、我ら銀河聖王家を主として、命果てるまで我らに仕えることを誓った。

よって、私は、謹んで訴える。

この船が、我が無敵艦隊の一翼に加わることに、祝福を授けたまえ。

そして、この船が出陣するすべての戦場において、勝利の祝福を授けたまえ。

そのために、今、この船に、我が無敵艦隊の一員としての名を授けたまえ。」

チアキがそう言うと、チアキが手を置いていた認証装置が閃光を発した。

そして、ひと呼吸おいて、武器管制装置のコンピュータの電源が点灯し、システムが起動し始めた。

「うわぁー、魔法みたい。」

ヨット部の下級生たちが感嘆の言葉を漏らした。

『確かに、魔法のように見えますわ。』

でも、それは、この儀式を支えているテクノロジーを私たちが理解できないからですわ。』

ヒルデは、『契約の儀式』の迫力に圧倒されつつ、冷静に考えていた。

『おそらく、なんらかの人工知能』。

ヒルデはそう考えた。

『そして、自分たちが、単なるセーフティロックとしての認証装置と想っていたものは、おそらく、全く知られていない高度な科学技術による通信デバイスの機能も有している。』

それにより、船に装備されたきわめて高度な人工知能がひとつのネットワークでつながっているのでしょうね。』

と、ヒルデは思った。

自律的に考える機械としての人工知能の技術は、古代において『悪魔、悪霊を作り出す研究』として宗教界や環境主義者から激しい弾圧を受けたため、人間のクローン技術よりもはるかに厳しく禁じられ、現代には存在しないものとされている。

現代技術による人工知能は、予め人間が与えた指示のうち、遭遇した環境に最適なものを選んで実行する機能を持つにすぎないとされ、自立型とは程遠いものとされている。

る。

『歴史で習ったような、禁断のテクノロジーである人工知能が、現代に、それも銀河帝国の権力の源泉である王族と帝国軍の中において、何らかの形で隠されて存在しているかもしれないわ。』

銀河聖王家の血を引く者であることの自動認証は、その人工知能が有する、ひとつの機能に過ぎないのでしょね。

きつと、人工知能の方は、契約の儀式での誓いを果たしているつもりなのでしょうね。』

と、ヒルデは思い至った。

「よし。」

これで、弁天丸で追撃できる準備が整ったわ。

チアキちゃん、ありがとねえ。」

茉莉香は、チアキがこんな魔法のようなことをいつの間に行けるようになったのか、そしてこの儀式が自分の弁天丸にとって、どのような意味を持つのか、疑問に思った。

しかし、今の茉莉香は、グリユーエルを一刻も早く救い出したいという思いでいっぱい、それをチアキに問う心の余裕は無かった。

そのため、思わず、いつものタメ口が出てしまった。

「だから、茉莉香く。」

『ちゃん』じゃないって、いつも言っているでしょ。」

「ええ……だって、チアキちゃんは可愛いから、チアキちゃんだよ。」

「茉莉香。恥ずかしいこと、言わないでよ。」

また、いつものように、仲のいい掛け合いを始めてしまった二人を、ブリッジにいた人々は笑顔で見つめていた。

#### 4 銀河帝国の宰相執務室（帝都クリスタルシティの王宮内）

銀河帝国の宰相、リシユリユーは、帝国軍の最高首脳会議の決定を受けて、セレニティ王国の宰相ミツテランと会談した。もちろん超高速回線を使ったリアルタイムの会談である。

「ご機嫌、麗しゅうございます。宰相閣下。」

セレニティ王国の宰相ミツテランが、先に挨拶した。

「こちらこそ。ご機嫌、麗しゅうございますなあ。宰相閣下。」

銀河帝国の宰相リシユリユーが、あいさつに応じた。

しかし、儀式のようなエールの交換はここまでだった。

ただ一人の兵も動かさず、言葉と知恵による「戦闘」が二人の間で始まった。

「今日は突然の会談要請でございましたが、如何（いかが）、なされましたか？」

「それは、こちらが聞きたい話ですぞ。」

「なんと。なにを申されますか？」

「では、こちらから申しませう。」

本日、帝都のセレニティ王国大使館からグリューエル・セレニティ殿下が誘拐されました。証拠によりますと、誘拐犯の一味は、セレニティ王国のバルデン伯爵とセレニティ大公の近衛隊長キースと申す衛兵が中心ですな。

誘拐犯一味は、グリューエル殿下をセレニティ軍の軍艦に乗せて、帝都から逃走しました。」

リシユリユーが言った。

「ほう。初耳ですなあ。」

わが王族にそのような重大事件があれば、すぐさま報告が来るはずですが・・・。」

ミツテランが受け流した。

「なるほど、そう言う状況ですか。」

他の星の王族といえども、王族に対するこのような非道な行為は、わが銀河帝国では不敬罪に準ずる大罪にあたります。

特に、グリューエル殿下は、青薔薇家の二人の王女様と親交が深く、女王陛下もこの

件には、たいへんにお怒りでした、

『直ちに、姫を救いませ。そのためには、手段は問わない。』、

『犯人を直ちに与らえて、厳罰に処せ。』

とおっしゃっておられる。

この意味は、お分かりですか。」

「何をおっしゃりたいのか、計りかねますが。」

「それでは、こちらから申しませう。」

陛下は、先ほど、帝国軍の第一艦隊に動員準備指令を出されました。王族がらみの軍  
事問題は、第一艦隊の所管ですからな。

目的は、もちろん、セレニティ星系です。

司令官は、グリューエル殿下とお親しいチアキ殿下ですぞ。殿下は生真面目なご性格  
であらせられるので、殿下が艦隊の全権を振るわれると、妥協や腹芸は通用しませんぞ。

すでに、先遣隊として最新鋭戦艦三隻を、セレニティ星系の航路調査の為、出発させ  
ました。

帝国の最新型の戦艦ですから、誘拐犯を追い抜いて、今日の夕刻には、セレニティ星  
系の外延部に到着するでしょう。

言うまでもないことですが、重力兵器を備えた最新型の戦艦ですぞ。

セレニティ星系軍と戦うだけならこれで十分な軍事力ですが、当方の目的はセレニティ星系の七つ星を占領し、捜索し、誘拐犯の共犯者である逆賊全員を逮捕することにありますからな。

まず、地上部隊の到着を支援するための調査を行います。」

それは、あくまでも犯罪に対する軍の強制捜査の形を取っているが、セレニティ王国にとつては、宣戦布告にも等しい行為だった。

これに、あと二つの行為、すなわち宣戦布告の公式声明と、セレニティ星系を戦闘空域と宣言し、民間船の立ち入りを警告する声明が加われば、戦争開始の手続きは完了である。地上軍の降下による惑星の占領準備などは、戦争開始に不可欠の行為ではないのだから。

「そんな、一方的に軍事力の行使を宣言されるなど、尋常ではありませんな。」

銀河帝国は、自治条約を踏みにじり、我王国の自治を犯そうと言うのですか？

我が王国が、一体何をしたと言うのですか？」

「それは、こちらが言いたいことですか？」

グリユーエル殿下に関しては、セレニティ大公様から銀河聖王家の方との縁談が申し込まれていたそうではありませんか。



しかるに、その姫を『薔薇の泉の花嫁』とすることを大公様は、お認めになったのですかな？

事実ならば、無礼な扱いを受けているのは銀河聖王家の方でしょう。

それに、帝都の秩序を蹂躪し、大罪を犯したのは、どなたでしょうか。

しかも、その理由が、『薔薇の泉の花嫁』となれば、女王陛下や王女様たちが激しくお怒りになるのも当然ですなあ。」

リシユリユーは、帝国中枢の王族がすべて女性であることを、わざと強調した言いまわしをした。

「そのようなことは、決して大公様はお認めになつてはおりません。」

ミツテランは、そう言うしかなかった。

「しかし、その証拠は、余るほどありませんぞ。大使館での犯行の様子をとらえた映像まで確保しておりますからなあ。

ですから、宰相閣下、ご決断をされるならば、今しかございませんぞ。」

「そう申されましても、何のことか……。」

「では、こちらから申し上げましょうか。」

早ければ、明日にも帝国軍は動員の準備が整うでしょう。そして、第一艦隊の大軍に出動が命じられるときには、誘拐の事実も公表されます。

そうなれば、もう、帝国も後には引けませんからな。

第一艦隊は、明日の夕方にはセレニティ星系へ到着するでしょう。今の帝国軍には、7000光年など、ひとつ飛びですからな。

その後、明後日には、セレニティの『奇跡の七つ星』に対して同時に降下作戦を行うでしょう。

時間はありませんぞ。閣下。」

リシユリユーは、帝国軍首脳会議では、参謀本部が作成した占領スケジュールの試案をさらに遅くすることを主張し、それが認められている。外交交渉でセレニティ側に言うことを聞かせる時間を確保するためである。

しかし、彼は、先遣隊が既に派遣されていること以外は、セレニティ王国側には、参謀本部の作成した占領スケジュール案よりもさらに早い日程を言った。ブラフ（脅し）である。

もつとも、誘拐の事実と帝国軍の占領作戦が公表されてしまえば、占領が少し遅れようが、事態は同じである。むしろ、帝国軍の占領まで時間がかかれば、その間にセレニティ星系は大混乱に陥るだろう。

少しの間、二人の間に沈黙が支配した。

「.....」

すこし、本当にすこしの間ですが、お時間を下さい。

大公様に進言いたします。

私といたしましても、セレニティ王国の独立を維持するのが、最大の使命ですから。それにつきましても、宰相閣下の御助言を頂ければ、幸いかと存じます。」

ミッテランは、顔色一つ変えず、外交的な言い回しながら、占領を回避できるのならば、帝国の要求を飲むことを示唆しているのだった。

銀河帝国が大軍を派遣してセレニティ王国を占領する決断をした以上、セレニティ王国にとって、自らの独立をかけて、銀河帝国と戦うという選択肢は、もともと無かった。軍事的には、彼我の戦力差は明白だった。

そうはいっても、セレニティ側も、無条件で銀河帝国の主張を受け入れるつもりは無かった。

二人の「戦闘」は、これからが本番だった。

「それでは、大変失礼ながら、私からのアドバイスを少し。

まず、一つめは、グリユーエル殿下の無事解放と、帝都への御帰還を確保することでしよう。

殿下に『もしものこと』があれば、私としては、セレニティ王室の存続は保証しかねます。

陛下の御怒りを鎮め、寛大な処置を進言すべきことばが見当たりませんので。」

『王室の存続は保証しかねる』という、感情を一切表に現さないリシユリユーの言葉に、ミツテランは戦慄した。

「私の聞き間違えでなければ、今、閣下は『王室の存続』と申されましたな？」

恐れ多くも、銀河聖王家ほどではございませんが、セレニティ王家も二千年続く栄光ある家系でございます。

その『存続』を論じられるほどの重大な意味がこの事件にあると言うことでしょうか？」

「ああ、確かに、そう申し上げました。」

「これは、いかに。」

失礼ながら申し上げますと、グリユーエル殿下は、このセレニティ王家においては、王位継承順位は第十四位でございます。

殿下より年長の王族として、六男六女がいらつしやいます。

しかも王位継承第一順位の皇太子にすでに第二順位のお子様がいらつしやるわけですので、グリユーエル殿下が実際に王位を継承する可能性は極めて低く……。」

『『カツコウの巢』の席順に、どれほどの価値がありますでしょうか。』

リシユリユーは、ミツテランの言葉を遮って、冷たい言葉を放った。

『カツコウの巢』、それは薔薇の泉によつて維持されてきたセレニティ王宮の内実に対する痛烈な恨み、悲しみ、非難、絶望を込めて、王室内外で密かに語られてきた言葉であつた。

それをリシユリユーは知っている。

カツコウは、托卵（たくらん）をする。つまりカツコウは他の種類の鳥の巢に自分の卵を産み落とす。その鳥の巢では、親鳥がカツコウの雛を自分の雛と思つて育てる。しかも恐ろしいこと、カツコウの雛は親鳥の本当の雛を巢から追い出してしまふという。まるで、セレニティの王族が、バラの泉から生まれた子供を自分の子として育てるやうに。もちろん自分の子が生まれても、王族として認められず、自ら育てることも許されない。

そのむごい現実のことを「カツコウの巢」と呼ん出来たのだ。

『カツコウノス』という言葉は、初めてお聞きしますなあ。

だいたい、我王国の占領と王室の廃絶のような非道が許されるはずがありません。

どんなことを理由にそのようなことを申されますか。

ミツテランは知らないふりをするしかなかつた。

「ハハハ、王制の正統性は、血統ですぞ。

セレニティ王宮の眞の血統図を、貴国の国民が知つたらどうなりましよう？

そして、その血統を維持するために、どのような非道が行われてきたか、そして今またその非道が繰り返されようとしていることを、国民が知ったら、どうなりましょう？  
しかも、今回の犠牲者がグリューエル殿下だと国民が知れば、どうなりましょう？  
グリューエル殿下は、今も国民には人気のある姫だと聞いておりますぞ。

国民が真実を知れば、銀河帝国の第一艦隊がそちらに到着する前に、暴徒どもによって、王宮は焼かれているかも知れませんかあ。

それとも、武力で、国民の反乱を鎮圧されますか？」

リシユリューは、最大限の脅しをかけた。

『犠牲者』とは、不適切なお言葉ですなあ。

それにしても、どうやら、議論は平行線のようなあ。

時間を無駄にしないためにも、閣下から、この他の御助言があれば、伺いたく存じます。」

ミツテランは、負けを認めない姿勢を維持しつつ、さらなる条件を聞こうとした。

「それでは申し上げますよう。

なにぶん、あとは、大したことではございません。

二つめは、大公様から、女王陛下に対して、

『グリューエル殿下と聖王家の王子殿下との縁組が正式に決まっても、姫様には王位

継承権を保持されることを願っている。』

と、お話し頂くことも、女王陛下の御怒りを鎮め事態を解決に向かわせる良い方法の一つかと愚考いたします。もちろん、御結婚後も同じです。

この縁組みによつて、銀河聖王家とセレニティ正統王家とは、特別な友好関係になるわけでございますから、そのことを表明いただくと、より友好が深まるかと存じます。

三つめは、大公様から

『セレニティ王国の次期国王の人選については、いずれ女王陛下にご相談したい。』

と、お話し頂けると、後顧の憂いもなく、今後の事態がさらに良い方向に進むのではないかと愚考いたします。

セレニティ王宮でも次期国王の決定の際には、有力王族にはそれとなく大公様のご意向をお伝えになるのでしょうか？

セレニティ正統王家は、銀河帝国と特別な友好関係となるわけですから、同じようになさると、より友好が深まるかと存じます。

さすれば、両家はますます強い絆で結ばれ、大公様の御世におけるセレニティ王国の御繁栄はますます盤石のものとなると、両国民は安心するのではないかと存じます。

以上は、私に分をわきまえずに申し上げた『たわごと』でございますので、単なるご参考の材料に過ぎませんが……。

言うまでもありませんが、姫様が帝都に御帰還された後は、銀河聖王家が責任を持って姫様をお守りいたします。その詳細は、後日ご相談いたしましょう。

私のアドバイスは、以上のたった三つです。

おっと、忘れるところでした。

もちろん逆賊は引き渡してもらいますぞ。生きていればの話ですが……。」

「大したことではない」と言いつつ、銀河帝国宰相リシユリユーは、外交的な言い回しで、セレニティ王国の王位継承問題への銀河帝国の関与という最大の爆弾を投げつけてきた。

そして、その三つの条件さえ満たされれば、事件の処理は、セレニティ側に委ねることを示唆していた。

『セレニティの王位継承に、銀河帝国が関与すると言うのか！』

そして、その時、女王が何を言うか、私でも予測がつく……。

我が王国は、銀河聖王家との姻戚関係をこれまで持たないことを、独立の証（あかし）としてきたが、それは王位継承問題に帝国の介入を避けるためだったはずだ。

グリユーエル姫は王位継承順位も極めて低いため、その点では安心して嫁がせる事が出来ると考えていたのだが……。

それに、軍事力で覆せない形勢を、言葉と知恵で逆転するには、相応の大義名分が必



要なのだ。それなのに、なんということだ。

その大義名分が、今は、当方ではなく、彼らにあると言うのか……。」

ミツテランは、沈黙しつつ、考えた。

『グリニューエル姫に関する事件は、銀河帝国にとつては、セレニティ王国が自治国家になったこの数百年の間に、初めて訪れた絶好のチャンスということなのだろうなあ。

それとも、これは、手段と目的を取り違えた政争の挙句に、我が王国がたどり着いた結末、いや運命か……』

セレニティ王国宰相ミツテランは、そう考えつくと、心の中で苦笑した。

ミツテランは、もちろんセレニティの保守派であったが、宰相を勤められるほどの人物である以上、リアリストでもあった。

だから、自らの願望を、目の前の現実と、混同することはなかった。

沈黙ののち、ミツテラン宰相は、口を開いた。

「これまでの宰相閣下の御助言を踏まえて、大公様に私から進言いたしますので、しばしのお時間を頂きたい。」

二人の戦鬪は、終わった。

## 5 弁天丸IIブリッジ

「契約の儀式」を終えた弁天丸Ⅱは、帝国軍中央基地をすぐさま出港した。

しかし、帝国軍の必死の搜索にもかかわらず、グリューエルを乗せた船の所在は、まだわかっていなかった。

「う〜ん。困ったなあ。」

帝国軍の航路データ解析ソフトでは、グリューエルを乗せた船の時空震の航跡をきちんと追跡できないのよねえ。

ねえ、こういうのは、時空ナビで解析できないの？」

茉莉香が言った。

「はあ。この時空ナビで直接観測したデータではないですし、初めてのパターンなので特徴がつかめないと言うか……。」

エンジンアチームも困っていた。

「困りましたね。」

では、敵の身になって考えましようか。

こういう時は、船長ならどういう航路で逃げますか？」

ギルバートが言った。

「そうねえ。」

私なら、敵に姿を見つけれられないように逃げようとしているわけだから、まず、セレ

ニティ星系まで、一直線の最短コースで逃げるようなことはしないはずよね。

出来るだけ、見つけにくいコース、例えばタツチダウンするには障害物の多い空域とか、船がほとんど通らない星系を通って、少し遠回りして行くわ。」

「なるほど。さすが海賊船ですね。」

「それなら、幾つか、ヤマを張ってみましょうか。」

百目が言った。

「私なら、こういうコースはどうでしょうか?」

「いや、私ならこういうコースに行くかな?」

それにこたえて、帝国軍出身の新米海賊たちが、口々に予想を言った。

「うーん。どの航路も、今ひとつ、ぴんとこないのよねえ。」

何というのかなあ、……

理想を言うと、みんなの船が避けるような、とても危険なコースだけど、自分達だけは抜け道を知っていて、だから安全に行けると言うような……、

そんなズルができる航路があると、いいんだけどなあ。

ねえ。

みんな。そういう航路って、ないのかなあ。」

茉莉香は、首をひねりながら、弁天丸のクルー全員に向かって言った。

「あるわけないでしょう。そんな都合主義満載の話なんて……」

「『ズルができる航路』なんて、美少女アニメのストーリーじゃないですよ。」

帝国軍のエンジニア達は、口々に、否定的なことを言った

「まあ、確かに、船長の言うような、一方の側だけに都合の良い航路なんて……」  
百目がぼやいた。

「そうねえ……それも、相手は、セレニティ軍よねえ。」

クーリエも苦しそうに言った。

「なるほど。……セレニティ軍の側から見ると、そういう条件にピッタリなコースが、あるじゃないの。」

「忘れたの。あれよ。」

ルカが言った。

「……あ、そうかあ。」

クーリエも気がついた。

「え!? なになに、教えてよ!」

茉莉香が身を寄せてきて、結果を聞きたがった。

「加藤茉莉香さん。大人は自分で考えないと、いけませんよ。」

クーリエが、少しおどけていった。

「えー！」

「じゃあ、ヒントくらい出してよ。」

「ハイハイ、では、ヒントは、幽霊船です。」

「幽霊船……どういふことかなあ。」

セレニティと、幽霊船……うーん。それにグリユーエル。

あ、そうかあ。黄金の幽霊船だ！」

茉莉香も気がつき、早速、百目に言った。

「百目。」

セレニティの『黄金の幽霊船』の周回航路を、時空ナビに表示してよ。」

「なるほど。あれかあ。」

あれなら、セレニティ軍は安全な抜け道を自分たちだけが知っている、思い込んでいても不思議じゃあないね。」

百目が、『黄金の幽霊船』の航路を、時空ナビの立体画像の中に表示させた。

「うわー！ これは、まともな航路じゃ、ありませんねえ。」

「宇宙（うみ）の難所ばかり選んで、周回していったんですねえ。」

「なるほど。ここを利用していけば、帝国軍の船に見つからずに、セレニティ星域へ近づけると思えますね。」

弁天丸の時空ナビが写しだした映像を見て、弁天丸のクルーみんなが呻（うな）った。

「それで、敵の逃走ルートが、黄金の幽霊船の航路だとヤマを張るとしても、グリユーエルを乗せた船は、今どのあたりを飛んでいるのかなあ？」

茉莉香が聞いた。

「それは分かりません。」

でも、向こうの戦艦は通常の超光速跳躍エンジンでしようから、そのスピードなら、どんなに急いでも、まだ千光年も進んでいないと思いますよ。」

ギルバートが言った。

「それなら、ここは海賊らしく、この60—20—109宙域、このあたりで待ち伏せと  
言うのはどうかなあ。」

「ここなら、かならずやってくるでしょう。」

茉莉香が示したのは、帝都から千五百光年ほど離れた比較的平穏な空間である。

しかし、そこは最大の難所への入り口にあたる場所だった。そこからセレニティ星系に行くには、左右にいくつもあるブラックホールの間を進む危険な航路を通らなければならぬからだ。

そうはいっても、そのルートにはメリットもある。この難所を通り抜けると、セレニ

テイ星系へはかなりの近道になるのだった。

「なるほど、面白いですね。」

ギルバートも賛成した。

「よし。弁天丸、行きましよう。目指すは、60—20—109宙域。」

「了解、船長。目的地は、60—20—109宙域。」

ルカが言った。

「到着次第、その周辺にあるセレニティの観測ブイとのデータ・リンクを張ってね。

向こうの到着をお出迎えするための準備よ。」

「了解。」

クーリエが言った。

そして、弁天丸IIは、60—20—109宙域へ、一気にジャンプした。

6 セレニティ軍ハルモニア号医務室（バルデン伯爵チャーター船）

グリユーエルは、目を覚ました。

しかし、すぐに目を空けず、まだ眠ったふりをしながら、耳を澄まして医務室の様子をうかがっていた。そして、今、囚われの身になった自分に何ができるか、必死に考えていた。

「やっと、亜空間から通常空間へ戻りましたね。

私は、超光速ジャンプは気持ちが悪くて、好きになれません。」

女性の医療スタッフが言っている。

「そうですか？ 私は平気ですよ。」

男性の医療スタッフが言っている。

「ところで、・・・患者は、まだ眠っているのでしょうか。」

「そうですね。」

「出航してから二日目になりましたが、患者には点滴による水分・栄養分の補給だけで、食事も飲み物も与えず、眠らせてばかりで、ちよつと心配です。

目が覚めたら、何か召し上がっていただかないと・・・。」

女性のスタッフが、自分の健康を心配してくれている。

「それは、フランク先生に聞いてみないと・・・。」

それに患者が目を覚ましたら、先生と伯爵を呼ぶようにと言われていきますから「そうですね・・・。」

医療スタッフの気楽で個人的な会話が聞こえてきたので、フランク医師も、バルデン伯爵も近くにはいないようだ。

それを聞いて、グリユーエルは行動に出た。



「あ、ああ〜。」

グリュールエルは目覚めた声を出した。

「あ、お目覚めですか？ ひ、ひめ．．いや患者さん。」

男性スタッフが緊張した声で答えた。やはり、この人たちは自分が誰か知っているよ  
うだ。

「あ、はい。」

何か、顔がカサカサ、ひりひりして不快だったもので．．．」

グリュールエルは、眠そうに答えた。

「私の化粧ポーチは、ないでしょうか。」

肌がカサカサしたときにつける乳液が入っているのですが．．．」

「あ、はいはい。今、お持ちします。」

女性スタッフがはじかれたように答え、引出しをあけて、化粧ポーチを持ってきた。

グリュールエルは、二人のしている前で、時間をかけて、乳液を顔に塗ったり、手に付  
けたりした。そして、乳液の入った小瓶を化粧ポーチの中へ戻した。

その時、彼女は化粧ポーチに入れた指先で、ポーチの中のカードを探した。

『あった。 ヒュー&ドリトル社の優待カード！』

もちろん、そのカードの正体は、「グランマ」と呼ばれる旧宇宙マファイアの大ボス、マ

リア・レオニーニからもらった海賊協会のフリーパスだった。(第23章参照)  
グリューエルは、カードをポーチの中に入れたままで、その表面を指でなぞり、ボタンのような突起を見つけ、それを力(ちから)いっぱい押して、海賊船を呼んだ。  
「ありがとう。」

そして、何気ないように装って、グリューエルは眠そうな声で礼を言い化粧ポーチを返し、また、ベッドに横になった。

『体が重い。』

手足の感覚が鈍くて、いつものように動かない。』  
睡眠剤がまだ効いているようだった。

でも、なすべきことをなした満足感で、彼女はまた眠ってしまった。

## 第三十二章 海賊艦隊 VS セレニティ艦隊

1 待ち伏せ

弁天丸Ⅱは、60—20—109宙域にタッチダウンしてきた。

通常空間に復帰した途端に、弁天丸Ⅱの船体に荷電粒子が衝突して、火花をあげている。

「いつもながら、荒い海ねえ。

荷電粒子の流れが多くて、レーダーでも遠くまで見えないわ。

クーリエ、セレニティの観測ブイとのリンクは、まだあ？」

茉莉香が言った。

「今、やってる。

グリューエルの認証を入れて・・・と」

たちまち、時空ナビに周辺宇宙空間の鮮明な画像が映し出された。

「近くに他の船はいないわ。

まだ、セレニティの軍艦も来ていないようね。」

クーリエが言った。

「こちらが待ち伏せしているんですから、静かにして待ちましょう。」  
茉莉香が言った。

静かな時間が流れていった。

そこに、突然ブザーが鳴った。

「ああ、船長、船長。」

海賊通信による救難信号よ。0.5光年かあ。意外と近いところからよ。

この救援依頼の発進人は、えーと……。

ええ！ これは、お姫様からよ。」

クーリエが言った。

「通信の発信場所は分かったの？」

茉莉香が聞いた。

「もちろん。セレニティの観測ブイが教えてくれたわよ。」

弁天丸はただちに電波の発信源へジャンプした。

弁天丸は、グリユーエルからの救難信号が発信された場所の近くにタッチダウンした。

「船がいたわ。前方10万キロ。」

トレスポンダーを発信していないけど、電波の発信位置からみて、これがグリユーエル姫を乗せたセレニティの戦艦よ。」

クーリエが言った。

「そのようね。接近しましょう。」

弁天丸、全速前進。

逃げられないように捕まえるのよ。」

茉莉香が緊張して言った。

「あつ、船長。また、海賊通信が流れてきたわ。」

発信者は、海賊船ネバーランド号のフック船長よ。」

いま、データを解析するわよ。」

クーリエが言った。

「解析結果を、メインモニターに表示します。」

ああ、これは、この空間の座標を示して、ここに集まらって言っているのね。」

「海賊達が、みんなでグリユーエルの呼びかけに答えているんだ。」

茉莉香が、データの解析結果を見て言った。

「なあ、今の海賊通信だけど、何か、歌声のようなものが聞こえなかったかあ？」

気のせいかなあ？」

「ああ、俺にも歌声が聞こえた。

なんか、女の子の歌声だったよなあ。」

「やっぱり、そうかあ。」

『声をあげよ、トキの声を・・・』とか、歌っているように聞こえたよなあ。」

「そうだなあ。」

「そんな声、聞こえてないわよ。空耳よ、ソラミミー！」

茉莉香が両手を振りながら、強引に二人の話をさえぎった。

「……………」

茉莉香の圧力を感じて、男たちは、顔を見合わせて黙ってしまった。

「船長、セレニティの船は超高速跳躍で逃げるつもりでしょう。」

だから、私たちが逃げられないということ、教えてあげましょう。」

シユニツツアーに代わって、武器管制の席に座ったギルバートが言った。

「それはそうだけど、いったいどうやるの？」

「お任せください。」

「さあ、重力波砲の発射準備だ。」

「おう！」

「ええ!? 重力波砲を撃つの？」

あの船には、グリユーエルが乗っているんだよ。」

「大丈夫ですよ。」

ギルバートはそう茉莉香に答えてから、クルーに命じた。

「目標は所属不明の宇宙船。」

時空トンネルの出口は、現在位置から10万キロ後方の宇宙空間だ。

もちろん重力波砲に使うのは、今すぐに使える第二エンジンの方だぞ。」

「了解。」

「ええ!? 後ろに飛ばすって、どういうこと?」

「重力波砲は、時空トンネルを作る機能を武器として利用しているわけですから、本来の使い方をするだけですよ。」

「なるほどねえ。」

「船長、敵の船が全速力でこちらに近づいています。超光速跳躍の準備でしょう。」

「時空トンネルのルート、セットできました。」

「よし、重力波砲、発射。」

茉莉香が発射を命じた。

## 2 砲撃戦

セレニティ軍の戦艦ハルモニア号のブリッジは、グリューエルが発信した通信波を感じて、混乱していた。

しかし、通信自体は暗号通信の為、彼らには、それが海賊船を呼んでいるものとは、わからなかった。

「なんだ、今の超高速通信は。誰が発信したんだ？」

ブリッジの艦長が部下に聞いた。

「まだわかりません。本艦内部から発信されたことは、間違いありませんが……。」

「さては、姫の味方をする奴が本艦に潜んでいるのだな。」

まったく、油断がならん。

おい、念のため、直ちに現在位置を変えよう。超光速ジャンプを緊急に、もう一度行え。」

バルデン伯爵が命じた。

彼は、まだ眠っているはずのグリューエルよりも、むしろ船内に潜んでいるはずの、自分に敵対する勢力が、先ほどの超高速通信を発したと考えていた。

彼は、自分の乗る戦艦のスタッフを全面的には信用してはいなかった。

「了解しました。転換炉の出力が安定次第、すぐに飛びます。」

全速前進だ。」



「了解。」

「あつ。前方に戦艦クラスの大きな宇宙船がタッチダウンしてきました。トランスポンダー、解析できました。」

所属は、銀河帝国。船名は、宇宙海賊船、弁天丸Ⅱです。」

「うわあ、キャプテン茉莉香の船だ。」

クルーに緊張が走った。

「なんだと！ 我々を追いかけてきたのかあ。」

さては、さっきの通信は、我々の位置を知らせるためだったのか。

おい、超光速跳躍を急げ。逃げ切るんだ。」

バルデン伯爵が、少しあわてて命じた。

「了解しました。」

転換炉の出力が少し不十分ですが、緊急事態なので飛びます。

超光速跳躍の航路がセット出来次第、ジャンプだ。」

ハルモニア号の艦長が命じた。

「航路セット完了。超光速跳躍開始。」

「艦長、弁天丸から高出力の重力波が出ています。」

真つ直ぐ本艦に向かってきます。」

「回避しろ！」

「ダメです。もう、超高速跳躍に突入しています。」

「こうなれば、弁天丸の重力波を真正面から突っ切って、超光速跳躍だ。」

「行け！」

超光速跳躍の閃光と共に、ハルモニア号は通常空間から消え、亜空間を経由して、再び通常空間に復帰した。

「うまく飛べたな。」

ハルモニア号の艦長が言った。

「はい、しかし、タッチダウン予定地点から大幅にズレました。」

「現在位置は不明です。」

「早く調べろ。」

クルーは、星座を観測して現在位置の座標を割り出した。

「ええ、そんな！」

星座観測の結果、現在位置がほとんど変わっていないことが分かりました。

むしろ、少し後退しています。」

「ソナナ、バカな。何をやっているんだ、お前らは。」

バルデン伯爵がイラついた声で口を出したが、その原因を考えているヒマは無かつ

た。

「あ、ごく近くに、船がタッチダウンしてきます。

トレスポルダー取れました。弃天丸Ⅱです。」

「弃天丸だと……。」

「弃天丸から、ビーム砲の攻撃が来ます。」

「ふん。どうせ、威嚇射撃だろう。無視しろ。」

しかし、伯爵がそう言った途端に、艦体に衝撃が響いた。

ガン。

「ビーム砲、後部船体に命中。装甲版にかなりの損傷です。」

「第二派のビーム砲、本艦に来ます。」

「おい。じつとしてないで、撃ち返せ。」

「はい。しかし、この近距離での砲撃戦は、双方にとって、自滅行為です。

ここは、離れましょう。」

艦長が冷静に言った。

戦艦ハルモニア号は、弃天丸と砲撃戦をしつつ、方向転換をして距離を開いて言った。

弃天丸がこれを追撃しないのには理由があった。

「あー、前方にプレドライブ反応、8つ。船がタッチダウンしてきます。」

「なんだと！」

「トレスポルダー、解析できました。」

宇宙海賊船ネバーランド号、宇宙海賊船キミーラ・オブ・スキュラ号、宇宙海賊船愛の女王号……現れた8船は、いずれも海賊船です。」

「なんだ？ こいつらも海賊だと？」

先ほどの弁天丸Ⅱもそうだが、我々は海賊に襲われているというのか？

一国の正規軍に所属する軍艦を、無法者の海賊が襲うだと？

おい、我々は、海賊になめられているぞ。

セレニティ軍の誇りにかけて、ヤツラを沈めてしまえ！」

バルデン伯爵は、憤慨していた。

「おっしやる通りです。撃て。」

主砲は、最大出力で一斉射撃だ。

誘導ミサイルも発射しろ。

相手は無法者の海賊船だ。容赦するな。9隻、まとめて沈めてしまえ。」

艦長が激しい声で命令した。

ハルモニア号は、その火力を総動員して、海賊船を攻撃し始めた。

一方、8隻の海賊船も、主砲の一斉射撃でこれに応じた。

双方の射撃は、一部がそれぞれの船に命中して、激しい火花を散らし始めた。激しい砲撃戦が続いた。

単独ではハルモニア号の火力が勝っているものの、9対1で撃ちあっているだけに、次第にハルモニア号が劣勢になってきた。

弁天丸Ⅱからも、ハルモニア号の艦体の損傷が、次第に大きくなってきたのが分かった。

もちろん、海賊船も無傷ではない。

このままでは、近距離で撃ちあう、激しい消耗戦が続くことになる。

### 3 セレニティ艦隊の登場

「よし。」

そろそろ、グリユーエルを助け出すために、白兵戦に突入の頃合いかなあ。

みんな。準備は良いかなあ。」

茉莉香が弁天丸の白兵戦部隊に声をかけた。

「おお！ 準備完了です。」

「船長、待って、待って。」

時空ナビをみると、亜空間から、新手（あらて）の艦隊が接近してくるわよ。

まもなく、タッチダウンしてくるわ。」  
クーリエが言った。

「ええ〜！ 新手つて、だれ？ 海賊なの？」

「セレニティ方面からやってきたから、たぶん、違うわね。」

セレニティ軍の援軍かもしれないわ。」

やがて、近傍の通常空間に、セレニティ軍の艦隊がタッチダウンしてきた。

「トレスポンドー取れました。」

うーんと、戦艦2、巡洋艦6、輸送艦2。重装備の船と補給艦か。

ああ。戦艦には、クイーン・セレンディピティがいるわよ。」

「この機種だと、速度重視の本格的な艦隊編成です。」

急いで、こちらにやってきたのでしょうかね。」

ギルバートが言った。

「ということは、敵の狙いは、今回の事件の口封じね。」

そのために、我々海賊船を沈めてしまおうっていうのね。」

セレニティ軍の旗艦クイーン・セレンディピティがいることを見ても、相手は、本気の本気だあ。」

茉莉香が言った。

「そうですね。私もそう思います。」

このままでは、形勢逆転もありえます。

そこで、艦長。弁天丸に備えられた、例の新装備の使用を進言します。

私が操縦します。

テストもしていないし、できれば弁天丸の新しい装備や武器は見せたくなかったので、敵に多数の援軍が来た以上、これに対抗するため必要と判断します。」

ギルバートが言った。

「そうですね。お願いするわ。」

この時、茉莉香をはじめ、弁天丸IIのクルーは、銀河帝国とセレニティ王国の宰相同士の外交交渉で、事件が決着に向かっていていることを知らなかった。

しかし、「敵の狙いは、口封じ」という、茉莉香の予想は正しかった。

それはすぐに明らかになる。

#### 4 帝国軍の先遣隊

銀河帝国の新鋭戦艦、ムサシ、ジュウベイ、ベンケイの三艦は、帝都のあるレッド・クリスタル星系帝国軍中央基地を発信して、4時間ほどでセレニティ星系外延部に到着した。

セレニティ星系軍には時空トンネル航法の技術は無く、軍事力の量だけでなく展開速度においても、帝国の圧倒的優勢は明白だった。

三艦は、惑星公転面において、セレニティの母星を中心に正三角形を描く位置に、それぞれがタッチダウンした。三方向から正確な測量を行うためである。

戦艦ムサシに搭乗する先遣隊の総司令官、ミニッツ准将は、時空ナビを見ながら言った。

「よし。三艦とも所定の位置に着いたな。

トレスポルダー発信せよ。我々の到着をセレニティ政府に知らせてやれ。」

「はい。」

クルーが答えた。

「続いて、作戦計画に従って、まず、セレニティ星系における天体配置と重力分布に関するデータ収集作業を開始する。」

「了解。」

「それから、特に、星系内の人工天体について、詳しいデータを収集しろ。

そこから奇襲攻撃を受ければ、帝国の艦隊に被害が出るのは避けられないからな。」

「了解。」

調査作業が一時間ほど続いた。



「そろそろ、我々の到着に対して、セレニティ軍の動きがあっても不思議ではない時間だが、動きはあるか？」

「セレニティ軍の動きはありません。交信要請もありません。」

「そうか。宰相の脅しが効いているのだろう。」

今回は、軍の出番は無いかもしれないなあ。」

ミニッツ准将が言った。

さらに数時間の作業が続いた。

「司令官、第一段階のデータ収集作業は、完了しました。」

「よし、データを帝国軍測量部に送れ。解析するのは、プロの仕事だ。」

それで、この星系には、軍事基地と思われるような、警戒すべき人工天体は、あるのか。」

ミニッツ准将が彼の副官、スミス中尉に聞いた。

「特にありません。これまでのセレニティ王国に関する情報通りです。」

ただ、情報部からのセレニティ情勢報告の中で、ひとつ気になることがあります。」

スミス中尉が答えた。

「なんだ？」

「はい。」

宇宙移民博物館として公開されていたクイーン・セレンディピティが、最近、メンテナンスと改修工事を理由に閉鎖されています。

しかし、その改修工事の内容が軍事機密に指定され、公表されていません。」

「なに、軍事機密指定だということのか？」

「はい。」

もちろん、セレニティ議会が承認した改修工事の予算総額は、あのような巨大な宇宙船全体を軍事基地に改造できるほどの巨額ではありませんので、大したことはできないと思うのですが……。」

「ふーむ。それが最近の動きと関係があるのだろうか。」

セレニティ星系への最初の移民を運んだ宇宙船「クイーン・セレンディピティ」は、長らく行方不明とされ、まれに目撃されても幽霊船の出現として扱われてきた船だった。それを、グリュールエル姫とキャプテン茉莉香が見つけ出して、セレニティ星系まで持ち帰ってきたのだった。(原作「黄金の幽霊船」参照。)

しかし、ミニッツ准将は、かつて「薔薇の泉」がこの船に設置されていたことまでは知らなかった。

「まあ、姫とかかわりのある船であることは間違いないが……。」

.....

よし。移民船のクイーン・セレンディピティの動きを詳しく観測しろ。

改修工事に関する情報が、入手できるかもしれないからな。

それから、情報部にクイーン・セレンディピティに関する、さらに詳しい情報を提供するように要求しろ。」

「了解。」

## 5 艦隊決戦 セレニティ艦隊 vs 海賊艦隊

「艦長、60—20—109宙域に、まもなくタツチダウンします。」

「よし、タツチダウンしたら、すぐに射撃管制レーダーを放て。」

ハルモニア号は海賊船と交戦中だそうだから、レーダーで敵味方を識別次第、直ちに援護射撃を行う。」

「はい。艦長。」

セレニティ軍の旗艦クイーン・セレンディピティの艦長、ヨセフ・セレニティが言った。

彼も第三王子という王族、グリユールエルの兄にあたる人だった。

「よし、事前の情報通りだ。ハルモニア号を援護して、最大出力で、一斉射撃。海賊どもを蹴散らせ。」

クイーン・セレンディピティの艦長、ヨセフ・セレニティは、タッチダウン後に交戦状況を把握して、そう言った。

「了解。」

セレニティ軍の艦隊は、通常空間にタッチダウンして、すぐにハルモニア号の援護を始めた。軍艦八隻が、一斉に、海賊船を激しく砲撃し始めた。

これで、艦船の数は9対9で対等になった。しかし、個々の船の火力はセレニティ軍の方が勝っているのです、形勢逆転は時間の問題と思われた。

「海賊船、後退を始めました。」

「よし。追撃だ。攻撃の手を緩めるな。」

このスキに、本艦は、ハルモニア号にドッキングするため接近する。

各艦は、海賊船の動きに注意して、本艦を援護しろ。」

ヨセフ艦長が言った。

「了解。」

「うわー。こりやたまらんなあ。後退だ。」

最先端の位置で攻撃を仕掛けていたネバーランド号艦長フックは、艦に後退を指示した。

しかし、セレニティ軍は追撃の体制に移った。

口封じのため、海賊たちを追い詰める意志があるのは、明らかだった。

「まずいですね。形勢逆転の恐れがあります。」

艦長、弁天丸の重力シールドを最大限に展開します。

ほかの海賊船は後退して、弁天丸のシールドの陰に隠れるように連絡いただくことを進言します。」

ギルバートは、重力制御方式の船に装備されている一人用操縦器に入っているにもかかわらず、茉莉香に船長としての指揮権を保持させたまま、船を運航しようとしていた。

「了解。クーリエ、海賊のみなさんに連絡をとってね。」

「はいはい。」

やがて、8隻の海賊船の船長と弁天丸の茉莉香は、同時回線で結ばれた。

「みなさん、敵は本気で、私たちの口封じを狙っています。」

ですから、まず、敵の砲撃から逃れるために、弁天丸の重力シールドの陰に一旦引いてください。」

それから、弁天丸が、セレニティ軍の攻撃を封じますから、

最後に、みんなでハルモニア号に白兵戦を挑んで、グリニューエルを救出しましょう。」

茉莉香が言った。

「了解だ。」

なあ、茉莉香。お前の船のブリッジの映像を見て、分かったよ。

お前の弁天丸Ⅱが、同じ船のようどこか違うと思っていたら、新造艦だったのか。でも、おかげで助かったよ。」

宇宙海賊船愛の女王号の船長マイラ・グラントが言った。

「そうだな。助かった、ありがとう。」

宇宙海賊船キミール・オブ・スキュラ号の船長ミューラ・グラントも言った。

「ナハハ……そういうことで、詳しい話は、またあとで。」

では、弁天丸も行きます。」

一方、セレニティ軍の戦艦クイーン・セレンディピティのブリッジでは、ヨセフ艦長は、セレニティ艦隊に与えられた『真の命令』を実行しようとしていた。

「次に、ハルモニア号に交信要請を送れ。」

私から、バルデン伯爵に通信要請だと伝える。」

「了解。」

やがて、クイーン・セレンディピティのブリッジのモニターに、バルデン伯爵が登場した。

「ヨセフ殿下、お久しぶりですなあ。」

セレニティ軍大将の軍服、良くお似合いですぞ。

わざわざ、殿下直々にお出迎えてくださるとは、恐れ入ります。」

「いや。大事な役目なので……。」

では、伯爵にお伝えします。

グリューエルは、私の船でセレニティまで送りますので、こちらに引き渡していただきたい。

これは、大公様のご指示です。」

王族であるヨセフ王子は、伯爵のお世辞には反応せず、単刀直入に用件を言った。

「なんと……なんと申されました。姫を引き渡せと……。私がそんな畏れ多いことをしているとお思いですか？

なぜ、そんな滅相もないことをおっしゃるのですか？

残念ながら、私には、心当たりがございません。

私の船に姫様が乗っているはずはございません。」

ヨセフ王子の言葉で、伯爵は、情勢が代わり、大公に裏切られたことを悟った。

このため、グリューエルを乗船させていることを否定した。

「伯爵、今更、何をおっしゃるのですか？」

「誓って、嘘は申し上げておりません。お疑いなら、私の船をお調べください。」

伯爵は大見得を切った。

もちろん、言葉通りの船内の搜索など許すつもりは無かった。

こういう伯爵の抵抗に合っているにもかかわらず、ヨセフ王子は、意外に落ち着いて、もう一つの、一見呑気そうな大公の伝言を伝えた。

「ああそうだ、そこにいるのはキースではないか。

あなたにも、大公様から伝言だ。

大公様は、『王宮の庭のウメの花が見ごろなので、あなたが帰ったら一緒に花見をしようとお楽しみになっている。』と、おっしゃっていた。」

「承知しました。」

「では、殿下、私は、自分の船でセレニティに向かわせて頂きます。

王宮には、バルデンの船には姫は乗っておられなかったと、お伝えください。」

「何を言うのだ！……」

王子はまだ説得を続けるつもりでいたが、バルデン伯爵は通信を切ってしまった。

弁天丸Ⅱは、重力シールドを最大限に展開しつつ、セレニティ軍に向かって進んで行った。

これに呼応するように、海賊船たちは、弁天丸の後ろに回り込み、その重力シールド



を盾にしつつ、弁天丸と楔形の陣形を組んで、前進していった。

当然のことながら、敵の砲撃は弁天丸に集中し、その重力シールドには多数のビーム砲が向けられた。このため、シールド周辺の宇宙空間は、高エネルギービームの乱舞により、空間を漂う雑多な微粒子が蒸発して、色鮮やかな光を放ちはじめた。

しかし、シールド内の空間のゆがみによりビームの進路が曲げられ、ビームは四散し、弁天丸は守られている。

「うおー、すごいねえ。これが最新式の重力シールドつてやつかあ。」

百目が感心して言葉を漏らした。

「では、そろそろ、こちらから行きましょうか。」

船長、戦艦クイーン・セレンディピティに対して、重力粒子砲による威嚇射撃を行うことを進言します。

出力は最小限にして、相手の船体にダメージを与えないように撃ちます。

艦長は、セレニティの王族だと思われまますから、慎重に攻めて、できれば降伏勧告を受諾してほしいものです。」

「そうですね。」

重力粒子砲、威嚇射撃、発射。」

茉莉香が言った。

「発射します。」

弁天丸Ⅱの船体全体が一瞬、光を放ち、そして先端から鋭いビームのようなものが、まっすぐに戦艦クイーン・セレンディピティに向かって進んでいった。

弁天丸Ⅱの放った重力粒子線はエネルギーが強いため、その放射エネルギーで周辺宇宙空間をただよう微粒子を融合爆発させる。このため、重力粒子線は、肉眼で直視できないほどの激しい光と稲妻を放ちながら、戦艦クイーン・セレンディピティの側を突き抜けて行った。

「なんだ、今のビームは？」

「すごいパワーだったなあ。」

「それに、弁天丸の重力シールドを真っ直ぐに突き抜けて、こちらに来たぞ。」

「こちらから発射したビームは、シールドに跳ね返されていると言うのに……。」

「そんなことがどうして出来るんだ？　ありえないよ。」

戦艦クイーン・セレンディピティのブリッジでは、驚きの声が上がった。

「さあ、次は降伏勧告よ。」

今の攻撃で、こちらの有利は分かったでしょう。このままでは、討死よ。」

茉莉香が言った。

「降伏勧告、送信しました。」

「艦長、弁天丸Ⅱから降伏勧告です。」

次は、戦艦クイーン・セレンディピティを直接に狙うと言っています。」  
クルーがヨセフ王子に告げた。

「我々には、降伏の選択枝は無い。」

海賊船に降伏など出来るものか！

弁天丸に返信だ。

『誇り高き我らに降伏の選択なし』とな。」

ヨセフ王子は、決然と言った。

「船長、クイーン・セレンディピティから返信です。」

『誇り高き我らに降伏の選択なし』だそうです。

敵の艦長の名前は、ヨセフ・セレニティ。

これは、王族でしょうね。」

クーリエが、重苦しそうに言った。

「そいつは、王室公表データによると、第三王子様だな。」

百目が言った。

「うーん。グリユーエルやヒルデのお兄様かあ。」

これじゃあ、やっぱり、やりにくいなあ。

それに降伏を拒否するなんて、プライドが高いのかなあ。」

茉莉香が困惑した声を出した。

「そうですねえ。」

王族出身の司令官は、退くことを嫌い、命懸けで突撃する人が多いと言われている。「す。」

ギルバートが言った。

「困ったなあ。」

これじゃあ、グリユーエルを助けるために、お兄さんを攻撃して、沈めてしまうしかなくなるよねえ。

お兄さんも、先ほどの弁天丸の攻撃で勝ち目がないと分かったでしょう。

負けると分かっている戦いなのだから、無駄なことはやめて欲しいのだけど……」

茉莉香も困っていた。

その時、ヒルデがブリッジに飛び込んできた。

それまで、ヒルデは他の白鳳女学院の生徒たちと一緒に、談話室で戦況を見ていたが、兄の出現が分かって、急いでブリッジにやってきたのだ。

## 6 兄妹の対決

「もう、黙って見ていられませんかわ。」

茉莉香さん、私にヨセフお兄様と話をさせてください。

無駄な戦いをやめるように説得します。」

ブリッジに飛び込んできたヒルデが、そう言った。

「わかったわ。」

でも、一刻も早く、ハルモニア号に白兵戦を挑んで、グリューエルを助け出しに行きたいのよ。」

「時間が無いのは分かっています。」

私の名前で、交信要請を送って下さい。」

「それは、まずいわね。船長名で交信要請を送りなさい。」

相手の艦長が王族なら、船長名でも堂々と出てくるでしょう。」

ミーサがヒルデの願いを訂正した。

「じゃあ、私の名前で交信要請。ヒルデもここに控えていてね。」

「はい。」

やがて、モニター画面にヨセフ艦長が現れた。

「お初にお目にかかります。」

弁天丸Ⅱ船長、加藤茉莉香です。」

茉莉香は、そう言って頭を下げた。

「クイーン・セレンディピティ艦長ヨセフ・セレニティだ。船長、何の用だ。」

いきなり降伏勧告を送ってきたが、私は海賊に降伏するつもりなどは無い。」

「お兄様。ヒルデです。聞いてください。」

モニターカメラの前に、ヒルデが現れて、言った。

「ヒルデか!？」

お前、なぜ、そんなところにいるんだ。

お前、自分のしていることが分かっているのか。海賊船に乗っているんだぞ。」

「お兄様、弁天丸を始めとして、この宇宙（うみ）に集まった船は、海賊船ではありません。ん。」

グリユーエルお姉さまからのご依頼で、お姉さまを助けに来られた方々の船です。」

「何を言っているんだ。海賊が人助けだと。グリユーエルがそれを頼んだと!？」

「そうです。」

お姉さまは、こんな宇宙（うみ）の果てまで、命懸けで助けに来ていただける、大勢の御友人をお持ちなのです。」

「なんだと?」

「ですから、お兄様。」

「この方たちに降伏するのは、海賊に降伏することではありません。この方たちがお姉さまをお助けするのを認めることです。」

「そんなことは、大公様から命令されていない。」

ヒルデ、弁天丸から退船しなさい。でないとお前も一緒に沈めることになるぞ。」

「お兄様。冷静にお考えください。」

先ほどの弁天丸からの威嚇射撃をご覧になったでしょう。

弁天丸に勝てないことは、もう、お分かりになっているのでしょう。」

「何を言っている。」

私達は、いかに強力なビーム砲に対しても恐れはしない。

命令に順じて、死ぬことも私の使命だ。」

「あれは、単なるビーム砲ではありません。」

最新型の重力兵器、重力粒子ビーム砲というものだそうです。

お兄様も、『重力兵器』という名前くらいはお聞きになったことがおありでしょう。」

「重力兵器、そんなものを、海賊が持っているなんて……。」

『ありえないことだ』と言いかけて、ヨセフ王子は言葉を飲み込んだ。

『弁天丸Ⅱは、銀河帝国、いや銀河聖王家と裏でつながっている。

でなければ、こんな最新兵器を海賊が持つことを許されるはずはない。

重力兵器は今も銀河帝国が独占し、セレニティ軍には重力兵器を持つことも、開発することも許されていないからだ。

そして、最新兵器を持つ、この船が現れたと言うことは、銀河聖王家が本気でグリユールを救い出そうとしている証拠だ。』

事態の深刻さを悟って、ヨセフ艦長は戦慄した。

彼は、セレニティ大公がバルデン伯爵以下、事情を知った者すべてを肅清することを命じた本当の理由を理解した。

しかし、ヨセフ艦長は、ヒルデの降伏の勧めを受け入れなかった。

それどころか、グリユールエルの救出のために弁天丸と協力する意思もなかった。

「ヒルデ。私には降伏どころか、退却も許されていない。

大公様は、この件では、グリユールエルの救出を命じられた。

その一方で、あの忠臣キースに対しても自決を命じられている。セレニティ王国の為、事情を知っている者すべてを排除される強い意向だ。

そんな事情だから、海賊たちの口封じに失敗すれば、私も生きて帰る訳にはいかないんだ。



戦って果てるのも、王族たる、それも第三王子たる私の運命だから・・・」

「お兄様、それはおかしいです。」

お兄様は、もつとご自分の望む生き方をされるべきです。

以前のお兄様は、もつといろいろな夢を語っておられました。

お忘れになったわけではないでしょう？」

「忘れてはいない。」

しかし、私は、王家にこの命を捧げるために生まれてきたのだよ。

ヒルデも、わかっているだろう。」

彼は、遠回しの言い方で、それが『薔薇の泉』から生まれた王族の宿命だと言った。

茉莉香は、二人の話に口を挟んだ。

二人の話の雰囲気次第に深刻な方向へ移っていくのを止めようと思ったからだ。

「ちよつと、口を挟ませていただいてよろしいですか、殿下。」

自分で後退するのは許されていなくとも、敵に遠くまで飛ばされるのはアリですよ

ね。」

そういつて、茉莉香はにつこりと笑顔を作つて、ヨセフ殿下を見た。

「何を言っているのだ。意味が分からないぞ。船長。」

「殿下。殿下はもう少しヒルデ様とゆっくりお話になった方がよろしいかと存じます。」

しかし、ここは戦場。その時間はありません。

そこで、殿下を、殿下の艦隊ごと、ゆつくりと話ができる場所に移動させて頂きます。その移動は、弁天丸が担います。強制的ですが・・・ね。

つまり、この船の重力推進エンジンで時空トンネルを作り出し、艦隊ごと、セレニティ星系外延部までジャンプさせます。」

「そんなことができるのか？」

「はい。お任せください。」

ギルバートさん、お願い。目標は、セレニティ星系外延部。

時空トンネルをセット出来次第、展開してください。

セレニティ艦隊をセレニティ星系まで送って差し上げてください。」

そう言つて、茉莉香はギルバートに指示をした。

ただし、ヨセフ殿下にも話が聞こえているため、茉莉香は、『重力波砲』と言う武器としての名称は使わなかったが、もちろんギルバートには分かっていた。

「了解。・・・」

船長、時空トンネルの出入口が、コンピューターでセット出来ました。」

一人用操縦席に座ったギルバートが素早く航路をセットした。

「では、発射。」

茉莉香が指示を出した。

「おい、何をするのだ……。」

ヨセフ殿下がそう叫んだその瞬間、セレニティ艦隊全艦は、重力波砲の作り出した時空トンネルに飲み込まれ、セレニティ星系へ超高速跳躍した。

「さあ、ヒルデ。」

お兄様とゆつくりとお話しなさい。

場所は、あそこよ。ブリッジの奥のお客様用の部屋よ。

あそこなら、通信の秘密も守られるからね。」

茉莉香は、弁天丸Ⅱのブリッジ奥に新しく作られた貴賓室を指差した。

「ありがとうございます。茉莉香さん。」

「いえいえ、こちらこそ。無駄に血を流さずに済んだのは、ヒルデのおかげよ。

さあ、みんな。

ハルモニア号へ白兵戦よ。グリユーエルを救い出すわよ。」

「おーっ！」

ブリッジのクルーが茉莉香に答えた。

## 7 グリユーエルの救出

弁天丸Ⅱを始めとする海賊船は、ハルモニア号に乗り込むため、同船に接近していた。

その中でも弁天丸Ⅱの戦いぶりは、他の海賊たちの度肝を抜いた。

弁天丸Ⅱは、あわや衝突するかというほどの激しい加速でハルモニア号に使つuitかと思うと、ハルモニア号の船体直近でピタリと急停止して敵艦に取りつき、白兵戦の侵入準備を始めた。

それは、重力制御推進方式の飛行方法の一つである、ジグザグ飛行を応用した、全く新しい白兵戦のやり方だった。

そして、海賊たちは、電子戦を仕掛けて、ドッキング・ブリッジを開かせようとしていた。

そのころ、ハルモニア号のブリッジでは、伯爵がセレニティ大公の方針転換を知って、怒っていた。

そして、伯爵は、今後の進路について指示を出していた。

「セレニティ軍の船団からも距離を取れ。あいつらは裏切り者だ。」

そして、この宙域から、全速力で離脱しろ。

進路は予定通りだ。

ブラックホール街道の難所に突入すれば、弁天丸Ⅱも戦いどころではなくなるだろ

う。

それを抜ければ、セレニティ星系はすぐ近くだ。

とにかく、『神聖なる箱舟・クイーン・セレンディピティ』まで、たどり着くのだ。バルデン伯爵は、艦長に命令した。

「了解。」

ハルモニア号の艦長は、その指示に従おうとした。

「お待ちください。その超光速ジャンプはお控えください。」

キースが言った。

キースは戦艦クイーン・セレンディピティのブリッジとの通信以後、席を離れていたが、またハルモニア号のブリッジに戻ってきたところで、そう言った。

「何を言うのだ？」

キースは敬礼し、直立不動の姿勢を取った。

「伯爵さまに、大公様の御意をお伝えいたします。」

「なんだと。やっぱり貴様か、裏切り者は。」

あの、現在位置を知らせる通信も貴様の仕業か!？」

「……」

キースは一瞬、沈黙したが、言葉をつづけた。

「謹んで申し上げます。」

伯爵様におかれましては、大公様より、自決の榮譽を賜りました。

どうか、大公様の寛大な御心に感謝しつつ、最後のお勤めを果たして頂くよう、お願い申し上げます。」

キースは、そう言つて白い布に覆われた包みを開き、黒い小型のプラスチックを取り出して、伯爵に向かって両手を伸ばして差し出した。

『自決の榮譽』。

それは、セレニティの身分ある者が重罪を犯した時に課せられる一種の処刑であつた。

ただし、罪状が確定する前に自決するのであるから、自分の死と引き換えにその名譽は守られ、一族郎党は連帯責任の追及を免れることになる。その意味では、寛大な処分であつた。

「……なんだと。」

さては、先ほどのウメの花見の話は、私に自決を命じろと言う意味だったのか。

そういうえば、古代の風習では、ウメの花は死んだ人を偲（しの）んで眺めるものとされてきたなあ。」

「……」

キースは何も答えなかった。

「……………」

伯爵は、しばらく沈黙していたが、やがてキースの手から黒いブラスターを受け取った。

そして、ブリッジのクルーを見渡して言った。

「艦長、ブリッジのみんな。」

君たちには、子供の頃から本当に世話になった。礼を言う。

あとは、家に帰ってゆっくり余生を送ってくれ。」

「伯爵様。ありがたいお言葉ですが、私たちはカゲとして子供の頃から伯爵さまをお守りするために育てられました。」

伯爵さまの身を守って死ねと教えられてきました。

このたびの航海もそのつもりでお供しました。

私達も、ご一緒に参ります。」

「ありがとう。」

あのころは、毎日、毎日、いたずらばかりして遊んでいたなあ。

楽しい日々だった。感謝している。

さて、キース。手紙を一つ書かせてくれ。

それから、下級船員は事情を知らぬ。連れて帰ってやってくれ。」伯爵はそう言うと、船内の自室に入って行った。

彼は、最後までセレニティの貴族としての誇りを失わなかった。

ガガン

その時、船体をゆさぶる振動が伝わってきた。

「船長。海賊船が船体に接触した振動です。」

かれらは、ドッキング・ブリッジを占拠しました。

「こちらに乗り込んできます。」

「よし。我々も、最後の仕事だ。」

乗組員に戦闘を禁じ、総員退去と伝えよ。

次いで、自爆装置をセットしろ。警報を鳴らせ。

伯爵さまのお体は、最後まで俺たちが守る。誰にも渡さんぞ。」

「おー。」

男たちの低い声がそれに答えた。

そういうブリッジの士官たちの動きを見て、キースは医務室へ向かった。

茉莉香たち弁天丸の白兵戦隊は、真っ先にハルモニア号へ乗り込んだ。



「うわー、何、これ？」

かれらは船内での白兵戦を覚悟してきたが、すでに船内は騒然としていた。

自爆装置の警報が鳴り響き、乗組員は緊急脱出を始めていた。

「とにかく、グリューエルを探そう。」

どこにいるのかしら、貴賓室、それとも医務室？」

そう言いながら、茉莉香たちは船室めがけて走り出した。

そして、医務室前の廊下で立っていたキースに出会った。

「キャサリン。姫様は、こちらです。」

彼は、キャサリンの名を呼んで、医務室のドアを指差してそう言った。彼女は、茉莉

香の後ろに従って、廊下を走ってきていた。

「……………」

キャサリンは、彼を見て、そして何も言わずに、ドアを開いた。

ドアの向こうには、ベッドに横たわったグリューエルの姿が見えた。

「ああ、グリューエル！ 助けに来たよ。」

茉莉香がそう叫んで、部屋に飛び込み、グリューエルにしがみついた。

「茉莉香さん。信じていましたわ、きつと来て下さると。」

グリューエルは、それまでの緊張が解け、涙ぐんでいた。

「私だけじゃないわよ。」

キャサリンさんも、アレックスも、ヒルデも、みんな、あなたを助けるために弁天丸に乗ってここまで来ているわよ。

さあ、弁天丸に行きましょう。」

茉莉香はそう言った。

グリユエルは、茉莉香の言葉に涙を流しながら、うなづいた。

そして、キャサリンは、弁天丸Ⅱに戻るため廊下の安全を確認しようと、先に部屋の外に出た。

彼女が廊下の様子を見ると、キースが歩いて遠ざかっていくところだった。

キャサリンが出てきたことに気が付くと、キースは振り返って、言った。

「キャサリン、達者で暮らせよ。」

『お兄様……』

キャサリンは、誰にも聞こえないほどの小さな声でつぶやいた。

そして、キースは、自爆までのカウントダウンを知らせる警報が鳴り響く中、ブリッジに向かってゆつくりと歩いて行った。

その背中が、死を覚悟しているものだった。

キースがブリッジに着くと、ハルモニア号の士官たちは誰もいなかった。

おそらく、伯爵の部屋に行ったのだろう。

警報が鳴り響く中、彼はブリッジの椅子に座って、タバコを吸い始めた。

そして、目を閉じた。

不意に警報が鳴りやんだ。

驚いて周りを見渡すと、一人の女海賊が立っていた。その後ろには、数人の海賊が従っていた。

「自爆装置は、今、私たちが止めたよ。」

女海賊が言った。

その女は若く美しいが、男勝りの気性の激しそうな顔立ちだった。海賊の服装も、男と同様なもので、娘海賊らしい華やかさは微塵も無かった。しかし、かなり豪華な衣装を身にまとっていることから見ると、船長に次ぐ副長クラスの上級船員と思われた。

女海賊は、キースに近づいてその顔をしばらくの間、じっと見つめていた。

そして、静かに言った。

「お前、セレニティの戦士だろう。」

一方、茉莉香たちは、グリューエルを弁天丸Ⅱに連れ帰った。

そして、念のため、彼女を医務室に連れて行った。

「はい。みんな、医務室を出なさい。診察するから。」

ミーサの一言で、茉莉香たちは医務室から追い出された。

ミーサとアレックスは、グリユーエルの体のあちこちにセンサーを当てて、モニターに表示された診断結果を見た。

「これと、これです。」

アレックスが、診断結果を示して、ミーサの判断を求めているようだった。

「これなら、全く心配ないわ。それでしよう?」

「そうですね。」

二人が診察している間、グリユーエルは恥ずかしそうに顔を赤くしていた。

やがて、診断結果がまとまり、ミーサがグリユーエルに言った。

「グリユーエル、何も問題はありませんよ。無事でよかったですね。」

「ええ? 私が眠っている間に、何も変な手術をされていらないのですね。」

「そうよ。安心していいわよ。」

「はい。……。」

「でも、今まで、点滴だけで過ごしてきたようですから、空腹を感じてもすぐに普通の食事をとらないでください。」

流動食からお出しするよう、コックに指示しておきますから。

そして、十分に休養をとってください。」

アレックスが言った。

「はい。」

グリューエルは、嬉しそうに言った。

しばらくして、グリューエルは弁天丸Ⅱのブリッジに現れた。

その時、茉莉香は、とても忙しかった。

グリューエルを無事に救出したという連絡を銀河帝国に送る指示をしたり、いつしよに戦った海賊たちと、船を脱出したハルモニア号の乗組員の収容の手配や、戦いの後始末、おもに戦利品の分配の交渉をしているためだった。

「船長、殿下がお見えます。」

あとは私がやりますから、殿下のお相手をしてください。」

ギルバートが言った。

「ありがとう。よく気が付くね。」

茉莉香は、そう言って礼を言ってから、グリューエルに向き直った。

「大丈夫？ まだ寝ていないのいいの？」

茉莉香が心配して、言った。

「大丈夫です。」

それより、茉莉香さんに、大切なお願いがあります。」  
「なに？」

「あの黄金の幽霊船をもう一度探して、船まで私を連れて行ってください。」

「ええ!?! 黄金の幽霊船!?!」

茉莉香は驚いて、大きな声を出した。

「それで、見つけ出して、どうするの?」

「私は、薔薇の泉は、またあの船に再現される計画だったと確信しています。」

もしそれが事実なら、そんなことが二度と出来ないように、あの船を沈めてしまいたいのです。」

グリユーエルは真剣な表情で言った。

「ええー!」

茉莉香は、グリユーエルの決意に驚いた。

## 第三十三章 黄金の幽霊船クイーン・セレンディピティの攻防戦

### 1 帝国軍の先遣隊（セレニティ星系）

帝国軍第一艦隊の先遣隊司令官ミニッツ准将は、戦艦ムサシ号のブリッジで、弁天丸のキャプテン茉莉香がグリユーエル姫を救出したという知らせを聞いた。

「これで、この事件は終わりだな。

あとは、何事も無かったかのような『政治的解決』が図られるだろう。

我々軍人が出る幕はなかったな。予想通りだ。

それにしても、せっかく届いた、第一級の王室機密の文書だ。

この際、中身を拝見しておくとするか……。」

ミニッツ准将は、船内の司令官室で、情報部から届いた『黄金の幽霊船クイーン・セレンディピティに関する機密報告書』を読み始めた。

「なんだってえ。セレニティ王国でこんなことが起こっていたのかあ……。」

ミニッツ准将は、思わずつぶやいた。

この報告書は、『薔薇の泉』の真実の姿というセレニティ王国にかかわる大問題を含む

ため、銀河帝国の第一級王室機密に指定されており、今回、司令官限りで女王から情報開示の許可がでていた。

「セレニティの内紛は、グリユーエル姫がこの古い移民船であるクイーン・セレンディピティを探し出して国民に見せ、祖先の国づくりに懸けた気持ちを思い起こさせたことで収束に向かったと言うことは、私も知っていた。

『薔薇の泉』の存在自体は秘密ではなく、すでに公表されている。

しかし、その裏にこんなセレニティ王宮の内情が隠されていたなんて……」

ミニッツ准将は、さらに今回の事件に関する機密報告書を読み始めた。

そして、次々現れる驚愕の事実の声を上げた。

「ええ〜！ セレニティ王国は、『薔薇の泉』の再建を考えていたのかあ〜。なぜ、今さら、そんなことを。」

私には理解できないが、これが復古主義というものか。」

「それに対して、姫は『薔薇の泉の花嫁』となることを拒否したのか……。

もし姫が承諾していれば、帝国も手が出せなくなっただろうなあ……。」

さらに、彼は、無言で資料を読み続けた。

「それに対して、女王陛下は戦争まで覚悟して、あの姫を守ろうとした。その真意は、お



そらく……。

まあ、これは王室の問題。軍は関係ないということかなあ。」

「……………」

また、彼は無言で資料を読み続けた。

「一方、セレンディティ側は、薔薇の泉の再建は内政問題だと思っており、そこまで帝国が厳しい対応を取るとは、想定外だったのだろうなあ。

そして、急な方針転換で、肅清か。

右往左往させられた軍も大変だっただろうなあ。

軍にも犠牲者が出たことは間違いがないだろう。」

資料を読み終わって、ミニッツ准将はつぶやいた。

「やっぱり、黄金の幽霊船クイーン・セレンディピティが、最後の問題か。

全長27キロの巨大な船。これほどの人工天体は、帝国にも少ない。この船に『薔薇の泉』の再建が予定されていたのは間違いないだろう。」

そして、彼はクイーン・セレンディピティに関する資料をもう一度見ながらつぶやいた。

「本来、この船の去就はセレンディティの内政問題だが、銀河聖王家はグリユーエル姫に肩入れして、介入するかもしれないなあ。」

王家直属の第一艦隊の軍人としては、そういう事態に備えておくべきだろう。」  
彼は、ブリッジに戻ると、部下に命じた。

「無人探査機を三機、黄金の幽霊船クイーン・セレンディピティの調査のために、急いで飛ばせ。」

本艦も、巡航速度で静かに接近する。」

帝国軍の戦艦ムサシ号が動きだしてすぐに、黄金の幽霊船クイーン・セレンディピティに変化があった。

「司令官、クイーン・セレンディピティが動き出しました。」

「どうした？ 超光速跳躍したのか？」

「いいえ。あの船には、超光速跳躍ができるエンジンは装備されていません。旧式の原子力エンジンを動かして慣性航行で発進しました。」

船は、現在、内惑星地帯を抜け出し、セレニティ星系外延部へ向かう軌道を進んでいます。

その加速度から見て、セレニティ星系の重力圏を飛び出すつもりなのでしょう。」  
「ふーん。なにを考えているのか？」

今の時代なら、そんな速度で飛んでも、帝国軍の追跡から逃げられないのは承知しているはずだろう。」

とにかく、本艦は、クイーン・セレンディピティを追跡する。

他の二艦も追跡に加わるように命令しろ。」

「承知しました。」

## 2 セレニティへの旅路

グリューエルを救出した弁天丸Ⅱは、他の海賊船と一緒にセレニティ星系へ向かって亜空間を飛行していた。

ブリッジでは、茉莉香船長が、チアキ第一艦隊司令官に報告していた。

「……というわけで、姫様を救出後、本艦は、姫の依頼で黄金の幽霊船クイーン・セレンディピティを探しにセレニティ星系へ向かっております。」

茉莉香船長は、他のクルーの存在を意識して、チアキに対して上官に対する敬語を使つて、そう言った

『向かつております』つて、茉莉香、そんなこと勝手に決めていいの?」

それに対して、チアキがタメ口（ぐち）で話しかけてきた。

「ええ!!? イケナイの?」

だつて、うちは海賊船だよ。

海賊は、自分の責任で、自由に宇宙（うみ）を往くんだよ。」

茉莉香もタメ口で答えた。

「そりやそうだけど．．．帝国とセレニティの外交問題もあつてねえ。

私としては、いろいろ、考えないといけないのよ。」

結局、二人はタメ口で話し始めた。

「チアキちゃんも、大変だね。考えることが多くて．．．。」

「う～～～ん。」

でも、茉莉香。

クイーン・セレンディピティは、今も、セレニティ星系に留まっているの？その辺は確かめているの？」

「ナハハハ．．．それはこれから、おいおいね。」

『『おいおい』だなんて．．．。』

クイーン・セレンディピティの現在位置を確かめないで、セレニティに向かって飛んじやったの？」

「ナハハハ．．．。だつて、海賊だもの。」

それにね、チアキちゃん。

救助した戦艦ハルミモニア号の乗組員もセレニティへ送り届けないとね。」

「そうかあ。茉莉香は、ホント、ちつとも変わらないねえ。」

まあ、それが茉莉香らしいっちゃ、らしいんだけどね。

とにかく、何かわかったら、知らせるから。

あ、それから、母上からグリユーエルに伝言があるの。伝えてね。

一度、グリユーエルに会って話をしたいって、言っていたわよ。時期は帝都へ戻ってからでいいからって、言ってた。」

「ご伝言、承りました。」

茉莉香は、チアキに敬礼して、通信を終えた。

「フフフ……。」

茉莉香さんとチアキさんは、相変わらず、仲がおよろしいんですね。」

二人の通信を聞いていたグリユーエルが、微笑みながら言った。

「ナハハハ……。」

それで、姫様、女王陛下からのご伝言、お聞きの通りです。」

「はい。確かに承りました。」

「それはそうと、姫様、ご依頼の件、中間報告をしたいのですが。特に、戦艦ハルモニア号との戦闘結果をご報告したいのですが、よろしいでしょうか。」

茉莉香は、グリユーエルに対して、敬語を使って話し出した。

「わかりました。」

グリュールは、緊張して答えた。

「では、あちらのお客様用の部屋で、お話いたしましたよう。」

茉莉香は、そう言つて、グリュールを貴賓室へ案内した。

グリュールは、貴賓室に入り部屋の様子を眺めて、言った。

「まあ、ずいぶんと素敵なお部屋ですね。」

茉莉香さん。私が初めて弁天丸に密航したときのことを覚えていらつしやいますか？

あの時、茉莉香さんは、『弁天丸には、王女様をご案内する部屋が無い』つて困つていらしたでしょう。

これなら、もう大丈夫ですね。困ることはありませんわ。」

「そうね。密航さえなければね。」

茉莉香が答えた。

「ウフフフ……」

「ハハハハ……」

二人は笑いだした。

しかし、すぐに黙つて、二人とも深刻な表情になつた。

部屋には二人のほか、ヒルデ、ギルバートとキャサリンが同席した。

「・・・それで、これが戦闘経過です。」

双方の艦隊が近距離から撃ちあつて、消耗戦というか、デス・マツチに陥つたのですが、ヒルデ様が仲裁してくれました。

だから、大変なことになる前に時空トンネルを使って、ヨセフ王子様の率いるセレニティ艦隊をセレニティ星系へ送り返すことができました。」

茉莉香が言った。

「そうですか。ヒルデ、ありがとうございます。」

「いえ。茉莉香さんが機転を利かせてくれたからです。」

「いえいえ、あれは、ヒルデ様の協力がなければ、できなかつたわよ。」

「二人とも、本当にありがとう。」

それにしても、なぜ、第三王子のヨセフ兄様が艦長をお勤めになられたのでしょうか。

本来なら、皇太子であるお父様が艦長をお勤めになられるはずでしょう。」

「何か事情がありそうですね。お姉さま。」

ヒルデが言った。

「それから、これが救助した乗組員の名簿です。みな、下級船員でした。」

こちらが、宇宙葬で葬った方々の名簿です。バルデン伯爵、ブリッジの士官たち、キース小隊長、そして医務室の医師とスタッフ全員です。」

これで、乗組員全員だそうです。」

茉莉香が言った。

「ええ！ 医務室のスタッフ全員が死亡したのですか？

どうして脱出できなかつたのですか？」

グリユーエルが驚いて、聞いた。

「残念ですが、口封じのため殺されたと思われま

仲間の海賊たちが医務室の研究エリアに踏み込んだときは、死体と徹底的に破壊された実験機器しか残っていなかつたそうです。」

茉莉香が沈んだ声で言った。

「……そうですか。」

大公様は、口封じのため、バルデン伯爵の御命まで犠牲にされたのですものね……。」

一瞬の沈黙ののち、グリユーエルは静かに答えた。

「それから、キャサリンさん。

宇宙葬の名簿では、キースさんも亡くなったことになっていますが、彼は名を変えて、新しい人生を送ることにしたと思われま

ギルバートが言った。

「……」



これに対して、キャサリンは何も言わなかった。

「ええ!? どういうこと!？」

茉莉香が驚いて、聞いた。

「いやあ。先刻、帝都にいる父から電話がありました。

それによると、宇宙海賊船愛の女王号の船長マイラ・グラントが大喜びで父に電話をかけてきたそうです。

父によると、あの家の有名なオテンバ娘、リディアさんが、営業中に会った男に一目ぼれして、即、結婚することになったそうです。

それで、マイラ船長は、父にも結婚式に出てほしいと言ったそうです。」

ギルバートが言った。

「その営業中に会った男と言うのが、キース小隊長だというのですね。」

グリューエルが言った。

「はい。あくまでも、推測でしかありませんが……」

まず、第一に、タイミングから見て、愛の女王号が『営業中』といったのは、セレンディ艦隊との戦闘中ではないかと思われます。

さらに、結婚相手は、気の強いリディアさんが一目ぼれするほどの『強い男』なのだろうと思われます。

第三に、キース小隊長の死亡確認の署名は、愛の女王号のマイラ・グラント船長のものです。この通りです。

そして、なによりも、グラント家は長命種であるということです。

長命種の女性は、パートナー選びが難しいとされていますから、母親が大喜びするのはパートナーの男性も長命種だと思われれます。」

「どうして、パートナー選びが難しいんですか。

いつまでも、美しく若々しい長命種の女性なら、モテモテじゃないですか。」

茉莉香が、ギルバートに聞いた。

「それは、相手から見ればそうですが……。」

でも、夫婦で寿命が極端に違うということは悲しいこともあるのです。特に、長命種の人から見れば……。」

「なるほど。パートナーの方が先に老いて、死んでしまう……とか、そういうことですね。」

「そうです。」

そういうこともあって、普通の人間の間で暮らす長命種の人々は、それまでの人生が転機を迎えたと判断すると、名を変えて新しい人生を送るそうです。

そしてセレニティの戦士は長命種であることが多く、キースさんも長命種だそうです。

ね。」

「なるほど、そういうことですか。」

でも、お父様とマイラ船長は、お知り合いだったのですね。さすが帝国海賊。」

茉莉香が言った。

「いや。愛の女王号は、父の銀行の取引先でして、銀行が出資や融資をしているようです。」

マイラ船長は、結婚式と宴会に父を呼ぶから、ご祝儀代わりに借金を棒引きにしろと言ったようですよ。」

「ナハハハ・・・さすが海賊。」

茉莉香は苦笑いした。

「それは半分冗談でしょうが、父は即座に断ったそうですよ。ハハハ・・・。」

でも、マイラ船長が言うには、いずれ、私と茉莉香さんとグリューエル姫とクーリエさんにも招待状を出すと言っていたそうです。

特に、グリューエル姫には是非出席していただくように父からも口添えしてほしいと頼んできたそうです。もちろん護衛役としてキャサリンさんも随行するようにとわざわざ言ったようです。

ですから、これが、彼女が父に電話をかけてきた本当の理由ではないかと思われれます。

姫様。父から、くれぐれもご出席のほどをよろしくと言われております。」  
ギルバートは言った。

「はい。承りました。」

マイラ船長にも私を助けに来ていただいた恩義がありますからね。

それでは、マイラ船長がキャサリンさんのことまで言うのも、そういう証拠だと、お考えですか。」

グリューエルが、キャサリンの顔をちらりと見ながら、ギルバートがキャサリンの事情をどこまで知っているか、確かめるように言った。

「はい。実際に結婚式に行ってみないと分かりませんが、わざわざそう言うのは、やはり、花婿の男性がキースさんだからだと思うのですが・・・。」

ギルバートは、すべて知っているとかわせる余裕の表情で答えた。

「なるほど。きつと、そうでしょうね。納得しましたわ。」

キャサリンさん。お兄様はあなたのことも御心配なさっているようですね。」

グリューエルが、キャサリンとキースの間柄を明かし、彼女を気遣うような声で言った。

「・・・。」

相変わらず、キャサリンは黙ったままだった。

「それから、これは一応、姫様のお耳に入れておかないとイケナイと思ひまして……」  
茉莉香が、急に他人行儀な言い方をして、話題を変えた。

「なんですの？」

良くないお話のようですが……。」

グリユーエルが、少し微笑みながら、答えた。

「はあ、セレンティ軍が放棄した戦艦ハルモニア号のこと、なんです。」

「海賊のみなさんが、戦利品にしたのでしよう。」

「はあ、そう言うことなんです、その分配について、意見が対立しまして。」

誰かが船を引き取って、その者が他の者に分配金を払って、差額を調整するつもりだったのです。

しかし、ステルス機能をもつ新鋭戦艦ということで、誰が引き取るか希望者が多くてモメ、その分配金の額を巡って更にモメたんです。

うちは、新造船に乗り替えたばかりで引き取る気は無かったのですが、皆さんはうちの弁天丸Ⅱの活躍を見て、自分も新鋭戦艦が欲しくなつて……。」

「そうかもしれせんわね。」

私も、新しい弁天丸に乗せてもらつて、びっくりしましたわ。」

「困つたところで、ギルバートさんが私の代わりに決着をつけてくれたんです。」

茉莉香が言った。

「どういう結論になったのですか？」

グリユーエルが聞いた。

「はあ、私は、まず、どういう方法で結論を決めるか、みんなの意見が一致しないこと、つまり、入札で一番高い者が船をとるという方法すらも合意できないことを確かめました。」

その上で、船を製造メーカーのラキオン社に売値で買い戻させたのです。

船は戦闘でかなり傷んでおり修理が必要なのですが、売値のままですべて買ってくれました。

そして、その代金をみんなで分配しました。」

ギルバートが言った。

「はあ!?! なんですって? ラキオン社は、本当に買い戻したのですか?」

グリユーエルがびっくりして、聞いた。

「はい。新鋭戦艦のステルス機能はまだ企業秘密だと思っているのでしよう。」

それで、新鋭戦艦が海賊の手に渡るくらいなら買い戻すと、即答で了解しました。

実は、最近になって、急に銀河帝国からこの新鋭戦艦について照会が多くなったので驚いていたところだそうです。

それまでは、帝国軍は、重力制御方式の軍艦建造にしか関心がなく、従来型の超光速跳躍方式はもう古いと、関心を示してくれなかったのですが、これで事情が分かったと言っていました。

これで、この新型戦艦は売れるようになったと強気になっているのでしょうか。

「ウフフフ……。ギルバートさんは本当にスゴ腕ですね。」

「ねえ。そうでしょう。私もそれを聞いたときは、びっくりしましたよ。」

茉莉香が嬉しそうに言った。

「ということは、また、セレンディティがその戦艦を買い戻すことになるのでしょうか。」

「それはどちらでも。私たちに関わりの無いことですから。」

茉莉香が言った。

「ウフフフ……。海賊の皆さんには、かないませんねえ。」

そういうことなら、高い買い物になりますわね……。」

グリユーエルは、微笑んだ。

### 3 グリユーエルの帰還

グリユーエルを乗せた弁天丸Ⅱと海賊艦隊は、セレンディティ星系の中心、「青の姉」の衛星軌道にタッチダウンした。

そして、直ちに、グリユーエルが、王宮・政府・星系軍、そして全ての国民に向けて、語りかけた。

清楚な青いドレスをまもってモニターテレビに姿を現したグリユーエルは、一瞬、緊張した表情をして息を飲んだ後、一気に話し出した。

「みなさん、私はセレニティ王宮の正統皇女、グリユーエル・セレニティです。

たつたいま、私は、私を支えてくれる友人たちに守られて、セレニティに無事、帰還いたしました。

国民のみなさん、聞いてください。

私は、先日、銀河帝国の帝都クリスタルシティのセレニティ王国大使館において、賊に誘拐されました。そして、私の助けを求める声に応えて、私の友人たちが命がけで私を救い出してくれました。おかげで、無事、セレニティまで帰還することができました。私を誘拐した賊の目的は、身代金ではありません。

かつてセレニティの王や王族を生み出してきた人工子宮『薔薇の泉』の復活です。そのために、私の体で、薔薇の泉のコア、つまり受精卵を作り出そうとしたのです。みなさん、

何百年も前に作られた『薔薇の泉』のシステムをまた復活させて、それがセレニティにとって、いったい何になるのでしょうか。



それが本当に、セレニティに平和と繁栄をもたらすため、必要不可欠なことなのでしようか。」

そこまで一気に話して、グリューエルは一息ついた。感情の高ぶりを抑えるためだった。

「私は、国民の皆さんが、王を必要としなくなれば、王制は存続の意義を失うと思つています。」

では、国民の皆さんが王を必要とする理由は何でしょう。

それは、王が、王族が、国民のみなさんのために、子子孫孫、無限に続く重い責任を負つて、そのなすべき役割を果たすことにあると、私は思います。

だからこそ、宇宙大航海の時代になって、王制が復活したのです。」

再び、グリューエルは一息ついて、さらに静かな語り口になって話し始めた。

「私は、留学した海明星（うみのあけぼし）や帝都クリスタルスターで、セレニティ星系の王宮の中で育つていては決して出会えなかった多くの方々と、お知り合いになることができました。銀河聖王家の王族の皆様とも、お知り合いになることができました。」

その経験からも、今、お話しした自分の考えが正しかったことを確信いたしました。

銀河聖王家の方々も、王として、王族として、その責任を果たすために、日々、身を尽くしておられることを、目の当たりに拝見いたしました。

そして、銀河帝国の国民の皆さんも、王や王族がその責任を果たしているか、しっかりと見守っていらっしやるのです。

だからこそ、銀河帝国、銀河聖王家の王は、代々、三千年の長きにわたり、銀河系を治めることができたのです。」

グリユーエルは一息ついて、決意を込めた表情で、宣言した。

「では、わがセレニティ星系は、セレニティ王宮は、どうすべきなのでしょうか？」

私は、手段と目的を取り違えてはならないと思います。

セレニティの王たるものが、王族たるものが、国民の皆さんの負託にこたえ、その責任を果たすという自覚こそが大切なのです。

私たちは、そのような自覚を持つ方を王として頂かねばなりません。

この目的を果たすために、優れた人材を確保する手段の一つが、薔薇の泉だったと考えます。

しかし、長い年月の間に、

『薔薇の泉の生まれでなければ、王族として認められない』とか、

『薔薇の泉の生まれでなければ、王位を継げない』

などと、手段と目的が入れ替わってしまったと思います。

その結果、薔薇の泉から生まれた子供たちたちは、自分の意志で自分の人生を歩むと

いう人間性を否定され、自分は王制を維持するための道具として作られたに過ぎないという非情な運命を背負わされていると感じてきました。

それは一面の真実ですが、これまでの留学経験と今回の誘拐事件を通じて、私は、この考えが、自己中心的な、愚かなものに過ぎなかったことを痛感しました。

つまり、薔薇の泉の存在自体が、薔薇の泉から生まれた子供たち以外の方々、とりわけ王家以外から嫁いでこられた方々をも深く傷つけ、その人間性を否定していたことまで、思いが至りませんでした。

私自身も薔薇の泉の生まれのひとりとして、今は、心からお詫びを申し上げたいと思います。

だからこそ、この現状はおかしいと心の底から思います。

この現状、この意識は、改めなければなりません。

そのために、私たちは、建国の時、すべての始まりの時に立ち返らなければなりません。

そのために、私たちは、古い衣（ころも）を脱ぎ捨てなければなりません。

私、グリユーエル・セレンディティは、その手始めとして、かつて薔薇の泉が設置され、おそらくその復活の場所とされていたと思われる、移民船クイーン・セレンディピティを破壊します。

もう、あんなものには頼ってはならないのです。

私たちは、自らの足で、未来に向かって歩いていかねばなりません。  
国民のみなさん。

私たちは、私たち自身の力で、セレニティの平和と繁栄を築きましょう。」

そう言つて、グリユーエルの演説は終わった。

「ふう〜〜。」

通信が切れた後、グリユーエルは大きなため息をついて、弁天丸Ⅱの船長席に座り込んだ。

「グリユーエル、感動したよ。涙が出たよ。すごい演説だったよ。」

茉莉香が、すこし涙ぐみながら、グリユーエルに近づいた。

「お姉さま!」

ヒルデが、グリユーエルに抱き着いてきた。

「グリユーエル!」

そう呼ぶ声に、グリユーエルが周りを見回すと、白鳳女学院のヨット部現役OGのみなが、涙ぐんで彼女を取り巻いていた。

そして、弁天丸Ⅱのクルーからの拍手が、ブリッジに響いた。

「ありがとうございます。みなさん。．．．．．」

そして、グリユーエルが、ブリッジのスタッフに礼を言うために、ヨット部のみんなに背を向けた瞬間、事件が起こった。

「あつ！ グリユーエル。背中に変なものがついている。取ってあげる。」

そう言つて、ハラマキがグリユーエルの背中に近づいて、ドレスの背中についていた金属製のクリップを、素早く引き抜いた。

「あつ。それ、ダメ。」

「きゃー！」

次の瞬間、グリユーエルは、悲鳴を上げ、ドレスの胸を抑えて座り込んだ。

「あつ。」

グリユーエルのその姿を見たヨット部のみんなは、事情を理解した。

グリユーエルの着ていた、清楚でエレガントな青いドレスは、彼女の体のサイズに合っていないかった。特に、ドレスの胸はブカブカで、かなりサイズが大きかったのだ。

「ゴメン。グリユーエル。」

それで、クリップをつけて、サイズを調整していたのね。」

ハラマキが詫びた。

「でも、そんなイイ加減なこと、誰に言われてやったの？」

「これ、誰のドレス？」

リリイが、聞いた。

「ウフフフ、茉莉香さんですわ。」

テレビには、背中も足元も写らないから、大丈夫って。」

「茉莉香！ あんたねえ……。」

「ナハハハ……。」

いい考えだと思っただけだなあ。

グリユーエルから、演説する時に着る服を貸してほしいって相談を受けた時、私、閃（ひらめ）いたんだ。チアキちゃんからもらった、このドレスならピッタリだってね。」

「それは、そうだけど……。」

「だって、チアキちゃん、胸、大きいんだもの。」

「私よりもずっと大きいんだよ。」

茉莉香は言い訳した。

「ウフフ……。茉莉香さん、ありがとうございます。」

帝都へ戻ったら、シャネル洋服店へ行って、私のサイズに合った、同じドレスを作ってもらいますわ。」

それまでは、みなさん。今のことはナイシヨですよ。」

グリユーエルは笑顔で言った。

その後、弁天丸Ⅱからの連絡に応えて、セレンティ軍の補給艦が接近して各海賊船にドッキングし、ハルモニア号の乗組員を収容していった。

「なくんか、意外と簡単に、乗組員の引き渡しができちゃったね。」

グリユーエルの演説のお蔭かなあ。

もっと、グダグダと文句を言われるかと思って、覚悟していたけど……。」

茉莉香は、ほっとして言った。

「でも、茉莉香さん。」

黄金の幽霊船、クイーン・セレンディピティが、ここにはいません。

たしか、宇宙移民博物館として、『青の姉』の惑星軌道上の、ラクランジェ・ポイントに停泊していたはずなのですが……。」

グリユーエルが、周辺宙域を映した時空ナビの立体モニターを見ながら、そう言った。

#### 4 グリユーエルの覚悟

この時、黄金の幽霊船クイーン・セレンディピティは、すでに『青の姉』の惑星軌道を外れ、セレンティ星系の外延部に向かっていった。

「ねえ。ギルバートさん、帝国軍から先遣隊が派遣されていたはずだよねえ。」

あの人たちなら、幽霊船が今どこにいるか、知っているんじゃないかなあ。」

茉莉香が、聞いた。

「そうですね。連絡を取ってみましょう。」

しばらくして、ギルバートが茉莉香に報告した。

「分かりました。」

クイーン・セレンディピティは、セレニティ星系の外延部へ向かって飛行中です。

このままの加速度で飛べば、セレニティ星系の重力圏を脱出するそうです。」

「なんですって!？」

どこに行こうと言うのでしょうか？」

グリューエルが憤慨して、言った。

「目的地は分かりません。とにかく、逃げているようだと聞いています。」

ギルバートが冷静に答えた。

「では、追いかけてみましょう。超光速跳躍、準備。」

茉莉香が言った。

「了解。航路セツトします。」

弁天丸と海賊艦隊は、亜光速で飛行する黄金の幽霊船、クイーン・セレンディピティと並走する位置と速度で、通常空間にタッチダウンした。

「なにこれ! この前に見た時と違って、クルクル自転しているのね。」



見ていると目が回るわ。

私には無理。」

ルカがそう言つて、目を閉じて、顔をそむけてしまった。

「さあ〜て。」

今、この大きな船で、誰が何をしようとしているのかなあ。

クーリエ。クイーン・セレンディピティの中の様子を探つて頂戴。」

茉莉香が言つた。

「了解。向こうのセキュリティ・システムが、以前のままでと良いのだけど・・・。」

「うわー。すごい旧式。というか伝説級の古きですね。」

「こういう古いシステムをハッキングするのを見るの、初めてです。」

「おもしろそうだなあ。」

帝国軍のスタッフたちが、クーリエの操作を覗き込んで、楽しそうな声を上げている。

「艦内の様子、出たわよ、船長。」

船のセキュリティ・システムは、そのままだったみたいね。」

クーリエは、艦内の指令室のデータを、立体モニターに表示させた。

モニターには、艦内の見取り図や、要員の配置が表示された。

「うわー。なにこれ。」

兵隊さんがいっぱい乗っているじゃないの。」

茉莉香が、声を上げた。

「ざっと、三千人は、乗っていますね。」

ドッキングポートから、『薔薇の泉』のある区画に至るルートが、特に守りが手厚くなっています。

『薔薇の泉』を守るために、船内で広範囲に白兵戦を行うことを覚悟した布陣でしょう。」

ギルバートが、船内の要員配置を分析して、言った。

「だとすると、海賊艦隊の兵力では、ドッキングポートから白兵戦で正面突破して、『薔薇の泉』までたどり着くのは、難しいわね。」

困ったわね、茉莉香。どうするの?」

ミーサが言った。

「指揮官は、誰なのでしょう。分かりますか?」

グリユーエルが聞いた。

「えくと、あ、艦内メールに名前があつたわ。」

発信人は、セレニティ軍最高司令官ヨセフ・セレニティよ。

戦艦クイーン・セレンディピティの艦長さんと同じ人ね。」

「また、ヨセフお兄様ですか。

どうしても、私の邪魔をしようと言うのですね。

茉莉香さん、彼に交信要請を送ってください。」

「分かったわ。

でも、グリユーエル。気を付けて。

この前にごあいさつしたときに感じたんだけど、あのひと、なにか思いつめている感じがするんだよねえ。

命が惜しくないと言うか……。」

茉莉香が言った。

やがて、通信モニターにヨセフ・セレンティ殿下が現れた。

「グリユーエルか。無事で何よりだなあ。

私もお前を救出に行ったのだが、海賊艦隊に先を越されてしまったよ。」

「おかげさまで、このとおり無事です。感謝申し上げます。」

グリユーエルは、緊張して答えた。

「それで何の用だ。

先ほどの演説の通り、この最初の移民船クイーン・セレンディピティを本当に破壊するつもりならば、諦めるがよい。」

私は、この船を守るため、最後の一兵となっても戦い抜く覚悟だ。」  
「お兄様、無益なことはおやめください。」

もはや、『薔薇の泉』には、お兄様の御命をかけてまで、守る価値はありません。  
退船してください。」

「私は、そうは思わない。この船と『薔薇の泉』は、セレニティの栄光と繁栄を未来に伝えるために、不可欠なものだ。」

だから私は、最高司令官として、これを命懸けで守るのだ。」

「ええ!？」

今、『最高司令官』と、お兄様自らおっしゃいましたね。

それは、セレニティ大公様の御役目ではないですか。」

「私は、お前を救出するために出撃せよと、大公様に命じられた時に言ったのだ。」

私を、セレニティ軍の『最高司令官』として出撃させてくださいと。

この願いに異存があるならば、皇太子であるお父様ご自身、あるいは大公様ご自身が出撃なさるべきだと言ったのだ。」

「なんとということを。」

「大公様も、お父様も、了解してくださいましたよ。」

今回の事件を治めれば、私は、だれに遠慮することもなく『最高司令官』としての実

権をふるうことができるだろう。」

「そんなこと……。それがお兄様の本当の望みだったのですか。」

お兄様は、文化や芸術や学問に幅広い関心がありで、その方面でセレンディティの発展に貢献したいと、何度もおっしゃっていただけではないですか。」

「その気持ちに嘘はない。今も、その気持ちだ。」

しかし、私は、『私の望み』を聞く人たちから、こんな質問をされたことは無かったのだ。

『お前の一番なりたいたいものは、何か』とね。」

「そんな。兄様は、本当は、王になりたかったのですか。」

「そうだ。」

薔薇の泉から生まれた子供は、王になるべくして生まれたはずだ。

生まれた順番で王位継承順位が決まっているとしても、その定めは同じはずだ。

私は、その運命を全うしたいと、願っているだけだ。

そして、今回の事件で、私にそのチャンスが巡ってきたのだ。」

「お兄様。おやめください。」

お兄様は、利用されているだけです。」

「そんなことは分かっているさ。」

それが大公様のいつものやり方だよ。今回は、父上も同じだ。彼等は、お前に対してもそうだろう。分かっているだろう。」

「ええ。分かっています。」

「ミツテラン宰相は、お前を銀河聖王家に嫁（とつ）がせようとした。

それは、お前を利用して、銀河聖王家の権威、そして銀河帝国の実力で共和主義者を抑え、王制を強固なものにしようとするためだ。

バルデン伯爵は、お前を利用して、薔薇の泉を復活させ、そしてセレニティ王家を、セレニティを支配しようとした。

この相矛盾する企てを同時に進めることを、大公様はお認めになった。

そして、大公様は、勝ち馬に乗る。

それが、いつものやり方だ。

そのためには、どんな人でも、どんなことでも利用する。

バルデン伯爵が、大公様にとってどういう方が、お前も知っているだろう。」

「はい。存じています。」

「彼ですらも、大公様は利用されたのだ。

大公様は、それが王としての務め、それがセレニティ王家の支配を永続させるやり方だと信じていらっしやるのさ。」

「分かってはいても、お兄様にそうまでハッキリと言われると、悲しいです。本当に、王というものは悲しいものですね。」

それを知っても、お兄様は、その道をお進みになられるというのですね。」

「そうだ。そういう覚悟がない者には、王道を歩む資格など無い。」

「そんな考え、やはりおかしいと思います。」

「何を言うか。」

グリューエル、セレニティ軍の最高司令官として命じる。

船を引きなさい。

帝都クリスタルスターに戻りなさい。

そして、兄として、お前に言おう。

お前は銀河聖王家に嫁ぎなさい。

銀河聖王家は、お前を歓迎し、受け入れてくれるだろう。

そして、王族の妃として、一人の女性として、幸せに暮らしなさい。」

「お兄様。そんなことをおっしゃらないでください。」

その優しいお言葉にすがってしまいそうです。」

グリューエルは、目頭を押さえた。

二人のやり取りを見守っている者からは、彼女が涙をぬぐっているように見えた。

「でも、お兄様、私が、どのような気持ちで、どのように国民に語りかけたとお思いですか。」

意を決したような表情で、グリューエルは言った。

「もう一度言おう。グリューエル、船を引きなさい。」

「いやです。私の気持ちは変わりません。」

「ならば、この私を撃てるか。この私を踏み越えて行けるか。」

言っておくが、お前たちの戦力を分析して、こちらも作戦を立ててきたぞ。」

「なんですって?」

「教えてやろう。」

お前の手下たちの兵力では、白兵戦でこの艦内の武装した将兵を制圧できない。

私たちは、命をかけて薔薇の泉とクイーン・セレンディピティを守る。

私も、将兵も、その覚悟で、必要な武装をして、待ち構えている。」

「お兄様、そんなことを・・・。」

「もちろん、重力粒子ビーム砲とかいう新兵器でこの船を沈めることは出来るだろう。

威嚇射撃として発射されたビームの力は、想像を絶するものだったと聞いている。

それで分かったのだが、弁天丸に装備された重力兵器は艦隊決戦用の兵器ではない。

ケタ外れに強力な大量破壊兵器の試作品だと考えられるそうだ。知っているか?」



「知っています。」

「ならば、わかるだろう。」

その新兵器を使うと、超新星並みの融合爆発が起きる可能性があるそうだ。

こんな母星に近いところで超新星並みの爆発が起きれば、セレンディピティ星系全体も吹っ飛んでしまうぞ。もちろん、お前の手下の船も、みんな巻き添えになるだろう。

そんなリスクを冒してまでも、あの新兵器を使うのかな？

それとも、爆発させても安全な距離まで、この船がセレンディピティ星系から離れるのを待つか。しかし、この船の巡航速度では、100年以上の時間がかかるだろう、フフフ。それならこの前のように、この巨大な船ごと、時空トンネルで、どこかの空間に吹き飛ばすのかな？

私と、三千人の将兵を乗せたまま……。

それこそ、本物の『黄金の幽霊船』の誕生だ。ハハハ……。

ヨセフ殿下は、虚勢を張ったような高笑いをした。

「もつとも、全長三百メートルの弁天丸の力で、全長二十七キロもある、このクイーン・セレンディピティを運べる時空トンネルが作れるのかな？」

仮に亜空間に飛ばされたとしても、お前がやったように、私も、たとえ『千年の時』を経ても、必ずセレンディピティに帰還しよう。今度は、王として……。

ハハハハハハ・・・  
ハハハハハハ・・・

ヨセフ王子は、今度は本当に不気味な高笑いを繰り返した。

「・・・だから、結局、お前とその手下たちは、敵味方の将兵の血と肉で覆われた道を踏みしめて、ここまでするしかないのさ。

さあ、来い、グリユール。

私は、クイーン・セレンディピティで待っている。

その覚悟がなければ、船を引くがよい。」

そう言つて、興奮したヨセフ王子は通信を切つてしまった。

通信が終わつた後、グリユールは黙つて船長席に座り込んでいた。

茉莉香が見かねて近づこうとしたが、グリユールは一人にしてほしいという表情だった。

しかたなく、茉莉香は、一人用操縦席にいるギルバートのところへ行き、聞いた。

「ねえ。本当に、ヨセフ殿下の言うとおり、弁天丸ではあの船を攻略できないの？」

そりゃあ、三千人も兵隊さんが待ちかまえていれば、白兵戦で攻めるのは難しいだろうってことは、わたしも見当が付くんだけどね。」

「うーん。白兵戦でなければ、通常兵器であるビーム砲の砲撃だけで、あの巨大な船を攻

める訳ですからね。

うーん。……何か、攻略法はないか考えてみます。」

彼は、エンジン担当のブラウン中尉を呼んで、話し始めた。

「茉莉香さん、ちよつと相談があるのですが……。」

ようやく、グリユーエルが重い口を開いた。

「なあに……。」

そう言った茉莉香の声や表情は、いつもと全く変わらなかった。

「まったく、なんと申しましょうか、……。」

「こんな時でもいつもと変わらない笑顔をできる茉莉香さんって、すごい人ですね。」

「ええ!? それって、誉めているのかなあ?」

「うふふふ……。」

はい、誉めているんですよ。

それで、茉莉香さんに伺います。

あの船に乗っている、ヨセフ最高司令官だけを狙うことができますか。」

「それは、弁天丸から砲撃して、狙うことができますか、という意味ね。」

「そうです。」

「なんてことを……。」

「あの船に乗っている三千人の将兵は、決死隊です。」

ヨセフ最高司令官が撤退を命令しない限り、退船しないでしょう。

そして、ご覧のように、お兄様が決意を変えることは、ないでしょう。

生きている限り。」

「そりゃ、そうかもしれないけど・・・いいの、お兄さんなのでしょ。」

「そうです。私たちは、兄と妹として育てられました。」

「グリューエル、あなた・・・。」

茉莉香は、意を決したグリューエルに対して、これ以上の言葉が出てこなかった。

「茉莉香さん。」

先ほどのお兄様との会話を聞いておられたでしょう。

大公様が自決を命じられたバルデン伯爵は、大公様にとってどのような意味を持つお

方か、ご存知ですか。」

グリューエルは、緊張を秘めて、異様なほど静かな声で言った。

「いや、・・・それは。」

おそらく、それは聞きたくないほどの深刻な話だろうと、茉莉香も思った。

「バルデン伯爵は、大公様とお妃、マリーナ様の実のお子様です。」

妃となったマリーナ様は、大公様を愛するが故、どうしてもご自分と大公様の子供が

産みたいと、おっしやったのです。

自分は『カッコウの巢』の親鳥にはなりたくない。

マリーナ様は、自分に薔薇の泉から生まれた子供を育てるだけの人生に甘んじろと言  
うなら、自分を離婚しろとまで、大公様におっしやったそうです。

その結果、あの方がお生まれになりました。」

「ううう……。」

それじゃあ、あの人は、『薔薇の泉』のオキテによって、王族として認められず、伯爵  
家の子供として育てられたのですか。」

「そうです。」

バルデン伯爵家は、セレニティ貴族でも一、二を争う名門のお家柄、そしてなにより  
もマリーナ様の御実家ですから、セレニティ王家のためにその子を引き取ったのです。

なぜなら、伯爵さまは、大公様の息子と認められたならば、第一王子つまりセレニティ  
の皇太子、そして王となられるはずの出生の順位でしたから。

しかし、当時の大公様は『薔薇の泉』の生まれでない子供には王位を継がせられない  
と言って、彼を王族にすることすら認めませんでした。」

「それじゃあ、大公様は、今回の事件で、ご自分の子供に自決を命じられたのですか。」

「そういうことです。大公様も、そんな、おつらい決断をなされたのです。」

その決断をさせた原因は、私にもあります……。」

「もういいわ。グリューエル、それ以上言わなくても、いいわ。」

あなたの覚悟が、わかったから。」

茉莉香は、グリューエルの話をさえぎった。

「私、ヨセフ最高司令官を狙う方法を考えるから。そして、私が、彼を撃つから。」

「何を言うのですか、茉莉香さん。」

茉莉香さんが撃てと命じるではありませんよ。

私が命じるのです。」

「グリューエル……あなた。」

「私は、できるだけ死傷者を少なくして、あの船を沈める方法を考えていたのです。」

そのためには、やはり、最高司令官を倒すしかありません。

私は、その覚悟を決めました。」

## 5 「二人はお似合い」

弁天丸IIのブリッジでは、茉莉香船長とギルバートが、帝国軍セレニティ派遣軍の先遣隊司令官である、ミニッツ准将に、作戦計画を説明していた。もちろん、超高速回線を使って通信している。

「・・・なるほど、わかった。」

しかし、作戦行動の政治的意味は極めて重要だから、銀河帝国として作戦に加わるには、女王陛下の御裁可が必要だろう。」

「それは、十分、承知しています。」

グリユーエル殿下から、第一艦隊司令官経由で、女王陛下に御裁可を頂きたいと思っています。」

ギルバートが言った。

「分かった。当艦隊は、作戦命令が下るのを待とう。」

当艦隊三隻は、まもなく、そちらへ到着する予定だ。

それにしても、加藤船長は、また面白いことを考えたなあ。」

「ナハハ・・・。」

まあ、私の考えた作戦を、数学的、物理的に成り立つようにフォローして頂いたのは、ブラウン中尉なんですけどね。・・・」

弁天丸Ⅱは、女王陛下の返事を待ちつつ、作戦の準備に入った。

弁天丸Ⅱは、クイーン・セレンディピティにゆっくりと接近している。

向こうからの砲撃は無い。もともと、移民船なので軍艦のような装備はないからだ。

海賊艦隊は、一旦距離をとるため、弁天丸Ⅱから離れ、入れ替わりに、帝国軍の新鋭

戦艦三隻が弁天丸Ⅱに接近してきた。

「船長、船長。チアキ殿下から交信要請です。」

うん!? これは、グリユーエル殿下宛てではなく、船長宛てですけど。」  
クーリエが言った。

「とにかく、出るわ。メインモニターに画像を出して。」

やがて、画面にチアキが現れたが、またいつものタメ口だった。

「ねえ、茉莉香。グリユーエルは本気なの?」

「そうだよ。本気の本気。」

「その意味も分かっているんだよね。」

「そう思うよ。グリユーエルも思いつめているよ。」

「ヘタをすると、セレニティ王国から追放よ。反逆者になるからね。」

「そうでなければ、もっと大変なことに……。」

「それで、グリユーエルは今、何処に?」

「医務室で休んでいるよ。呼んでこようか。」

「いや、そのままでもいいよ。」

あとで、この通信を医務室にいるグリユーエルにつないでよ。

女王陛下からの返事を、私から伝えるわ。」



茉莉香がそう答えると、チアキは少し深刻な表情で言った。

「ところで、茉莉香。」

あなた、アレックスのこと、どう思っているの？

例の話、いったいどうするつもりなの？」

「なに、チアキちゃん。イキナリ、そんな話を。」

いまそんな話をしている場合じゃないでしょ。」

「いや。あなたにも関係のある大事な話よ。」

あなた、知っているんですよ。グリューエルの気持ち。」

「薄々はね。彼女から聞いたことはないけど。」

『ウスウス』って、あなた、いったいどうするつもりなの!？」

だから、ずっと前から、私が心配してあげているでしょ。

いつまでもあなたがハッキリしないと、最後には誰もいなくなってしまうって。」

「ナハハ……。そう言われても、こればかりは……。」

私も、気持ちの整理がつかなくて……。

それに、あの二人なら、お似合いだと思えるなあ。

年齢（とし）は離れているけど……。」

茉莉香は、笑顔でそう言った。

「ええ!? そんなこと言うの?」

それ、本心から言ってるの?」

「そうだよ。あの二人、けっこうお似合いだよ。」

この間なんか、宇宙物理学の話で意気投合していたし……。

あの話のどこがおもしろいのか、私には全然わからなかったけど。

でも、アレックスは喜んで、その勢いでグリューエルの家庭教師を引き受けるって  
言っていたし……。」

茉莉香は、二人のことをとても喜んでいて、屈託のない笑顔でそう言った。

「ふうくん。」

茉莉香。あなたの、その表情から見ると……。

わかったわ。

あなた、アツチの方は優柔不断のようにみえて、ちゃんと答えが出ているじゃない  
の。」

「え? そうかなあ。」

「うくん。本人は自覚なしなあ。」

でも、今のあなたの言葉、エカテリーナ様に話していいよね。」

「うん。別に誰に話しても構わないよ。」

『あの二人はお似合いだ』って、みんなそう思うよ。」

「茉莉香、私の言ってるのは、そういうことじゃなくて……。」

「ねえ、チアキちゃん。おしゃべりしないで、早く作戦を始めようよ。」

女王陛下の了解、取れたんでしょ。」

「そうよ。」

でも、コレ、意味のない、おしゃべりじゃないわよ！

茉莉香、後になって泣いても、本当に、私、知らないからね！

もう……。私はあなたのこと、心配して言っただけだよ。

……

じゃあ、通信をグリューエルにつないでよ。」

茉莉香は自覚がなかったが、「二人はお似合い」という茉莉香の返事は、女王がグリューエルを支援するために帝国軍の軍事行動を許すための最後の問題に答えたものだった。それを確かめるのがチアキの役割だった。

なぜなら、それは、銀河聖王家の次世代をだれが担うかという、銀河帝国にとって極めて重要な問題につながっていたからである。

歴史の転換点を、加藤茉莉香は、何気なく踏み越えて行った。

グリューエルに通信回線が転送されたあと、チアキが言った。

「グリューエル。女王陛下のお返事をおつたえします。

『銀河帝国は、あなたを支援します。』

そして、あなたが指揮する戦闘を支援するため、あなたが望む帝国軍の艦船を、あなたの指揮下に置くことを認めます。』

以上よ。

これはすごいわね、グリューエル。

あなたが動かす兵力には何の制約もないわ。どこの帝国軍艦隊も動かせるつてことよ。」

そう言つて、チアキはグリューエルに敬礼した。

「そこで、第一艦隊司令官として、あなたに進言します。

これは聖王家に関わる軍事作戦ですから、第一艦隊をお使いください。

第一艦隊の先遣隊は既にそちらに配置されており、本隊もすでに動員を完了しています。ご命令があれば、本隊は約四時間でセレニティ星系に進軍できます。

以上です。

グリューエル、頑張つてね。」

「ありがとうございます。」

「それから、グリューエル。エカテリーナ様からの伝言もあります。

話はこうよ。オホン。

『アレックスがあなたの家庭教師を務めることは、銀河聖王家としては、あなたをアレックスの交際相手として認めると言う意味を持ちます。

それで、異存ありませんね。』

という伝言よ。

聞くまでもないかもしれないけど、一応、返事を聞かせてほしいの。」

「あのお、茉莉香さんは、なにかおっしやっていましたか。」

「いつもの調子で、『二人はお似合い』と喜んでいるわよ。」

「そうですか。・・・」

グリユーエルは、表情には現さなかったが、一瞬、目を見張った。

「では、エカテリーナ様に『承知しております』とお伝えください。」

そう答えた後、グリユーエルは、顔を赤らめ、少しうつむいてしまった。その口元には年頃の少女らしい微笑みがこぼれていた。

## 6 黄金の幽霊船クイーン・セレンディピティの最後

チアキからの通信のあと、グリユーエルはブリッジへ戻った。

「加藤船長。」

女王陛下の御裁可が下りました。

始めましょう。」

グリユーエルは、緊張した声で言った。

「了解しました。」

弁天丸、予定通り、クイーン・セレンディピティのまわりを旋回します。

操舵、お願い。」

「了解。」

『旋回』と言っても、実際の動きは螺旋型のコースを進む運動だった。弁天丸Ⅱは、自転しながら高速で移動するクイーン・セレンディピティの進行に合わせて、その周りを回るので、第三者の視点からは、螺旋運動をしていることになる。これも、自由自在な船の運動ができる重力制御推進エンジンならではの操船だった。

しかし、クイーン・セレンディピティの側から見ると、自分のまわりをグルグルと弁天丸Ⅱが高速で回転し始めたように見えた。

「弁天丸は、突然、本艦の周りを回り始めたではないか。」

「いったい、何を始めるつもりだ？」

クイーン・セレンディピティのヨセフ最高司令官は部下に尋ねた。

「弁天丸は、両サイドのドッキングポートではなく、外壁から『薔薇の泉』の区画に

直接、攻め込むことを狙っているのではないでしょうか？

殿下のいらっしやるこの区画の位置、つまり『薔薇の泉』のまわりを中心にして、回転しているように見えます。」

セレンディティ側は、あくまでも弁天丸が白兵戦を挑んでくるとの前提で、戦術を分析していた。

「そうか。」

しかし、弁天丸が体当たりしても進入路は空けられないぞ。

移民船であるクイーン・セレンディピティには軍艦のような装甲版は無いが、外壁は二重のハニカム構造で強靱だからな。その程度のことは、こちらも予測済みだ。

それに、通常のビーム砲では外壁の内部まで穴をあけられないぞ。

ハニカム構造の隙間は、デブリの衝突や宇宙放射線の被曝（ひばく）に対する防壁としても機能するように、水や氷などのタンクになっているからな。」

「では、砲撃開始。狙いを正確にね。」

茉莉香が言った。

「了解。でも、この作戦では、重力推進機用に開発された新型の自動照準装置を使うのですが……。」

ギルバートが、笑いながら答えた。

「ナハハ……。私も、前の弁天丸の口グセが抜けませんね……。」  
茉莉香も笑った。

弁天丸Ⅱは、加速して旋回しながら、船首をクイーン・セレンディピティに向けた。そして、主砲を発射した。

放たれたビームは外壁を貫いたが、ハニカム構造の第一層の内壁を貫くことは出来なかった。外壁からは、ビームで加熱されたため爆発した水などが霧状の噴煙になって大量に船外に放出されているが、船体には影響が無いように見えた。

更に弁天丸Ⅱは、旋回しながら砲撃を続け、別の場所も同じように霧状の噴煙を上げている。噴煙は、合計三か所から上がっている。

「こしやくな。」

おい、弁天丸をこちらの対空砲火で撃てないのか？」

ヨセフ最高司令官が言った。

「はあ、先ほどから試みているのですが、どうも弁天丸の動きが通常の慣性航行と違って、自動照準装置のコンピューターでも動きが予測できません。」

「なんだと……。」

「というのも、旋回する軌道がランダムに乱れていて、加速、減速も頻繁にあつて、狙いが絞れないのです。」



それで、しかたなく、光学照準器を肉眼でみて、撃っています。やつぱり、当たらず。なぜか、ビームが曲がって弁天丸Ⅱに届かないと言う情報も届いています。」

「そうか。でも、あきらめるな。」

必ず、敵は白兵戦を仕掛けてくるはずだ。

そのためには、必ず、減速して接近、接岸し、上陸してくるはずだ。

あきらめるな。チャンスは必ず来る。」

「はい。」

「さあ、第二派攻撃、第三派攻撃と、どんどん行くわよ。」

船長席の茉莉香が、号令をかけた。

弁天丸Ⅱは、旋回しながら、主砲を発射し続けている。

そして、ついに、弁天丸の狙いを、セレンディピティ軍も気が付いた。

「おい、さつきから同じところを狙って撃っているのではないか?」

「はあ、確かに砲撃が3か所に集中しています。」

特に、最初に砲撃されたL21区画では、外壁に深刻な損傷が認められます。さらに砲撃を受けるとハニカム構造の第二層を突破されるおそれがあります。」

「まさか、船の内部、『薔薇の泉』までビーム砲で貫くつもりなのか。」

でも、薔薇の泉までは、まだ何層も隔壁で仕切られた区画があるぞ。グリユーエルは

それを知っているはずだろう。そんなことは不可能だと。

それにしても、あんな不規則な船の動きで、どうしても向こうは正確な照準ができるのだ。

．．．．．

とにかく、狙われている箇所に近い内部区画に命令だ。

気密が破られ、爆発する恐れがあるので、撤退させろ。

それから艦内の他の区画にも、内部隔壁をロックして衝撃に備えろと警告しろ。

そして、総員に伝えよ。

あきらめるな。

必ず反撃の機会は来る。

信じて待て．．．とな。」

ヨセフ最高司令官は、守りに徹しながら、粘り強く反撃の機会を待つことにした。

そして、弁天丸Ⅱの砲撃は続き、ついに、3か所の穴から次々と爆風が噴出した。船の内壁について穴が開いたのだ。

「よし。いよいよ、船体内部への攻撃よ。

これからが勝負よ。

続いて、三系統に分かれた艦内の電力ケーブルや有線通信ケーブルの切断を狙うわ

よ。」

茉莉香が号令をかけた。

弁天丸Ⅱは、旋回しながら、それまでも攻撃を集中して外壁に空けた三か所の穴を通って、船内に向けて、更に、ビーム砲を打ち込み始めた。

「あ、停電だ。」

弁天丸Ⅱの攻撃に耐えているクイーン・セレンディピティの艦内から、爆発の衝撃と共に、突然、照明が消えた。

「先ほどの攻撃で、船内の電力ケーブルが破損しました。」

「非常電源は大丈夫か？」

「大丈夫です。艦内の電力供給は、第二ケーブルに切り替えます。」

コンピュータは瞬時に非常電源に切り替わったため、停電の影響を受けなかった。

そして、まもなく、電力は完全に復旧した。

しかし、その直後、艦内にまた爆発の衝撃が響いた。

「あつ。第三ケーブルがビーム砲の攻撃で破損しました。」

弁天丸の狙いがわかりましたね。

敵は、この『薔薇の泉』の区画のライフラインを狙っていたんですね。」

将校が言った。

「今頃、なにを呑気なことを言っているんだ。」

破壊された第三ケーブルは、予備だな。」

ヨセフ最高司令官はいらだっていた。

「はい。電力供給に支障はありません。」

その間にも、弁天丸Ⅱからの砲撃は続いている。ビーム光線の着弾により爆発が引き起こされ、その衝撃が断続的に艦内に響いている。

「あつ。また、停電だ。」

また、爆発の衝撃と共に、再度、艦内の照明が消えた。

「第二ケーブルも破壊されました。」

同時に艦内の通信ケーブルも破壊されました。」

「艦内のエアコンが切れました。」

「通信は、無線に切り替える。そっちは大したことはない。」

「はい。」

「問題は電力ケーブルかあ。」

非常電源はあるが、戦闘時に使用すると消耗が早いから、修理するしかないが……。

おい、電力ケーブルを修理できるか？」

「できませんが、難しいです。」

まず、この船の内部で、気密が確保された区画から、気密が破れた区画を通って、ケーブルが破壊された箇所へ、直接に行くためのエアロックがありません。

だから、別のブロックのエアロックから一旦、艦外へ出て、外からこのブロックへ移動し、気密が破れた内部区画に入って、修理箇所にとどり着く必要があります。

しかも、そもそも、弁天丸からの砲撃が止まないと、破壊された箇所の修理も始められません。」

照明の消えた部屋の中で、技術士官の絶望的な返事を聞いていた付近の兵士たちは、黙り込んでしまった。

やがて、砲撃でこの区画の気密も破られ、自分たちの命も危険にさらされるのではないかという恐怖に襲われたからだ。

もちろん、白兵戦用の防護服を着ていれば即死は免れる。しかし、弁天丸の砲撃による爆発で防護服の気密が破られる恐れもある。いずれにしても、防護服に備えられた酸素ボンベの使用可能時間には限界があり、救助が来るのを待てないかもしれない。

すでに、『薔薇の泉』の区画では電源が切れ、エアコンも止まっている。ドアも開かず、この部屋に閉じ込められたようだ。

ならば、砲撃で破られなくとも、いずれは全員、窒息だ。

既に終末へのカウントダウンが始まっていることは、船乗りであるクルーみんなが承

知っていた。

しかし、戦士として、兵士としては、敵と戦って華々しく散るのではなく、このような形の最後を迎えるのは悔しい。

それどころか、むしろ怖かった。

兵士たちの戦意が急速に失われていった。

単なる『電源の喪失』で、このような深刻な事態に陥るとは、彼らも予想外だった。

「よし。全員、防護服着用。砲撃に備えよ。」

そう言いつつ、ヨセフ最高司令官は、暗闇の中で非常用ライトを照らして、技術士官と艦内の見取り図を見ながら、電力ケーブルの修理方法を検討していた。

「なるほどなあ。」

砲撃を受けていない箇所を経由する代替ルートで、ケーブルをショートカットしてつなぐのか。これならいけそうだな。」

ヨセフ最高司令官は、意を決して言った。

「修理は、私が直接に指揮を執る。突撃隊長、5人を指名して、私に続け。」

ヨセフ最高司令官は、部下と共に、代替ルートにケーブルを敷く作業に出発した。

しばらくして、彼らの向かった箇所で、ビームの着弾と爆発の衝撃があった。

「あ、グリユーエル殿下。」

クイーン・セレンディピティから、交信要請がありましたよ。

発クイーン・セレンディピティ艦長、ジョー・マケイン中将、

宛弁天丸、グリユール・セレニティ殿下。

あれ、ヨセフ殿下じゃないね。」

クーリエが、グリユールを呼んだ。

「出ます。」

グリユールがはじかれたように答えた。

やがて、画面に年配の軍人が現れた。

「殿下、ジョー・マケインでございます。」

先ほど、ヨセフ殿下が重傷を負って倒られましたので、私が指揮を執っております。」

す。」

「そうですか。それで、將軍。何の用です。」

グリユールは、強い調子で答えた。

「殿下。どうか、お怒りを鎮め、砲撃を中止してください。」

私たちは、殿下のご指示どおりに、退船いたします。」

そのために、しばしの御猶予を頂きたい。」

生存者や、負傷者も救助する時間が必要です。」

重傷を負ったヨセフ殿下も、病院へ一刻でも早くお連れする必要があるのです。」  
それを聞いたグリユーエルは、意外にもさらに強い調子で言った。

「私の言うことを聞くと言うならば、貴官の口から、降伏を明言せよ。捕虜としての救助を要請せよ。」

そうすれば、帝国軍規に則って対応しよう。」

「殿下、今、なんと、申されました……。」

私たちは同じセレニテイ王国に属しております。敵味方ではございません。

そのようなことを申されましても……、

どうか、軍事のことは、私ども軍人にお任せください。」

「私は、女王陛下から、銀河帝国軍の指揮権も頂いている。

接近してきた帝国軍の戦艦三隻は私の指揮下にある。

お前たちは、銀河帝国とも戦っていることを理解するがよい。」

「まさか。それは、殿下……。」

マケイン中將は、グリユーエルは軍事の素人であり、その外見から、たった十六歳の小鹿のような少女に過ぎないと軽く見ていた。

しかし、実際に通信モニターに現れた彼女は、予想とは全く異なる存在、それも猛獣のような存在だった。



そして、彼女の口から、銀河帝国軍の戦艦までも従えている事実が明かされた。

「……………」

マケイン中将は、深刻な事態を悟って、沈黙した。

「お前は、私を欺こうとしている。」

お前は、セレンディピティ軍最高司令官の代理、代行として、私に話しているとは、一言も言っていない。

下がりなさい、無礼者。攻撃は続行する。」

グリューエルはそう言って、通信を切った。

弁天丸は、攻撃を続けた。クイーン・セレンディピティのまわりを高速で旋回しながら、狙いをつけた三か所に対して、ビーム砲の攻撃を続けた。

正確な照準で砲撃を続ける弁天丸は、確実にクイーン・セレンディピティの内部隔壁を破壊して、『薔薇の泉』に迫っていた。

「ねえ、クーリエ。ビーム砲はどのくらい内部まで貫通しているの？」

あとどのくらいで、薔薇の泉に届くの？」

茉莉香が聞いた。

「うーん、それがねえ。内部の通信ケーブルも破壊しちゃったので、攻撃している区画の様子が分からなくなったのよねえ。」

クーリエが答えた。

「ナハハハ……。あとは、ヤマカンかあ。」

「フフフフ……。加藤船長のヤマカン、期待してますわ。」

グリューエルが、微笑んだ。

弁天丸は、さらに攻撃を続けた。そして、弁天丸IIのビーム砲は、クイーン・セレン  
デイピテイ内部隔壁に確実に打ち砕いていった。

ついに、ひととき大きな爆発とともに、激しい爆風が三か所の穴から同時に噴出した。  
「どうやら、内部隔壁をすべて打ち抜いたようですね。」

ギルバートが言った。

「中心部が薔薇の泉ですから、砲撃は薔薇の泉に届いたと言うことですね。」  
グリューエルが確かめるように言った。

「やったね。グリューエル！」

茉莉香が言った。

「ありがとうございます。」

「あ、グリューエル。」

セレニテイ軍から、交信要請がありましたよ。

発、セレニテイ軍最高司令官、アブラハム・セレニテイ、

宛、弁天丸Ⅱ、グリユーエル・セレニティ。

あれ、この方、ひよつとして……。」

クーリエが、言いかけたときに、

「父です。通信に出ます。」

つないでください。」

グリユーエルが、静かに真剣な表情で答えた。

やがて、画面に、きらびやかな軍服姿をした、人の良さそうな人物が現れた。

「やあ。グリユーエル。久しぶりだなあ。」

「私こそ、お久しぶりでございます。」

「グリユーエル。話は聞いている。」

クイーン・セレンディピティには、降伏を命じたところだ。

好きにするがよい。」

「ありがとうございます。」

「それで、これが済んだら、お前は帝都に戻るのかい？」

「はい。そのつもりです。」

「それから、お前はという人生を歩むつもりなのか、お前の望みを教えてほしいのだけ  
れど……?」

「まだ、わかりません。」

「そうだろうなあ。」

では、父として、お前にお願いだ。

いつでも、どこに居ても、故郷・セレニティのことを忘れないでほしい。

故郷を出て、銀河の広い宇宙（うみ）に出て行っても、そして、どこかで結婚して家族を持つても、故郷・セレニティのことを忘れないでほしい。

そして、グリューエル。

お前は、お前が望むままの幸せを手に入れなさい。私は、それができるようにしてあげたいと思っている。

この父の気持ちも、忘れないでほしい。」

「お父様……。」

通信が切れても、しばらく、グリューエルは、目を伏せて、船長席に座ったままだった。

やがて、グリューエルは言った。

「茉莉香さん。クイーン・セレンティピティは降伏しました。」

乗員を退船させ、次の作戦を準備してください。」

「了解しました。」

クーリエ。クイーン・セレンディピティに、私から交信要請を。」

茉莉香が言った。

クイーン・セレンディピティから、乗員の退避が始まった。

ドッキング・ポートに停泊していた船だけでは収容できないので、海賊船にも乗員が収容されていった。

やがて、全長二十七キロの巨大な船、クイーン・セレンディピティは、無人の船となった。

「では、乗員の退避も終わったようですから、第二作戦を実行します。

帝国軍の艦長さん、所定の位置についてください。

海賊船のみなさんは、巻き込まれないよう、十分な距離を確保してください。」

「了解しました。キャプテン茉莉香。」

それぞれの船から返答があった。

帝国軍の戦艦三隻は、クイーン・セレンディピティの後方で、船の進行方向に対する垂直面において、正三角形を形作る位置に並んだ。もちろん、正三角形の中心には、弁天丸が位置している。

「重力波砲、最大出力で発射。」

グリユーエルが命じた。

「了解。重力波砲、最大出力で発射します。」

四人の船長が、命令を復唱した。

四艦は、船体全体が一瞬、光に包まれ、そして、七色に輝くリングが次々と船のまわりの空間から現れて、クイーン・セレンディピティの方向に向かって進んで行った。

そして、現れた四つのリングは次々に合体してより大きなリングとなり、その大きなリングが、クイーン・セレンディピティの方向に飛んで行った。

合体して大きくなったリングの内径はさらに大きくなり、クイーン・セレンディピティを飲み込んで、その進行方向に向かって飛んで行った。

次の瞬間、クイーン・セレンディピティの姿は、消えていた。

何の衝撃もなく、静かに消えて行った。

「クイーン・セレンディピティの現在位置を、確認しました。」

計算通り、銀河系の外延部から千光年離れたところを、銀河の外に向かって亜光速で飛行中よ。」

クーリエが言った。

「これでいいのです。」

あの船は、銀河間の宇宙を飛び続け、やがて朽ち果ててしまうでしょう。」

グリユーエルが、もの悲しい声で、静かに言った。

## 第三十四章 王道

## 1 静かな日々

クイーン・セレンデイピテイとの戦いの後、弁天丸Ⅱも、グリューエルを乗せて、帝都クリスタルスターへ帰還した。

茉莉香、チアキ、それにグリューエルには、帝国女学院大学に通う静かな日々が戻ってきた。三人とも、大学での勉強を再開し、グリューエルは家庭教師のアレックスからも毎週、授業を受けている。

ただ、グリューエルは、住まいを在銀河帝国セレニテイ大使館から銀河帝国の王宮に移した。もちろん、理由は、警備の為である。

そして、グリューエルは、銀河帝国のアン女王と面会した。

小部屋に案内されたグリューエルは、その部屋には三つしか席がなく、女官や侍従は同席しないことを知って、緊張した。

自分のほかは、女王と、そして多分、エカテリーナ公爵夫人だけが同席する予定であり、それだけ、銀河聖王家にとつては大切なことが話されるのは間違いないと思われた。小部屋でしばらく待つと、予想通り、アン女王とエカテリーナ公爵夫人だけが現れた。

「やあ、グリューエル。

大変だったね。無事で何よりだ。」

アン女王が言った。

「ありがとうございます。」

戦いの勝利は、女王陛下のご支援のお蔭でございます。

重ねて、御礼申し上げます。

それから、言うまでもないことですが、戦いの際に頂いた帝国軍の指揮権は、いま、お返しいたします。」

グリューエルが立ち上がって、深々と頭を下げて、言った。

「ああ、役に立ってよかったよ。」

もう座りなさい。あなたがそんな挨拶をする必要はないよ。

それにしても、茉莉香は、また面白いことを考えたなあ。

4機の重力波砲を並べて発射してその時空トンネルを合体させ、あんな大きなものを超高速跳躍させるなんて・・・ハハハ。」

「そうですね。私も、それを始めて聞いたときは驚きました。

茉莉香さんは、

『重力波は、波というくらいだから、三角波のように波の合成で大きな波を作ることがで



きないのか』

と言いだしたのです。

そのアイデアを聞いて、帝国軍のエンジニアさんたちがお考えになって、最も効率的な戦法を作り出していただきました。

皆さん、楽しそうにお仕事をされていらつしやいました。」

「それができたのも、あなたが強い意志で、全軍を指揮したからですわ。

誘拐されても決して屈しなかったことと合わせて、本当にお見事でした。」

エカテリーナ公爵夫人が、グリューエルの意志の強さをほめたたえた。

「ありがとうございます。」

グリューエルは素直に礼を言った。

「それにしても、チアキがっかりしていたよ。

てつきり、グリューエルに呼ばれて、セレニティ星系まで進軍するものと思い込んでいたからね。」

自分の第一艦隊司令官としての初仕事が、茉莉香やあなたと一緒にできる仕事だと、張り切っていたからね。」

「はあ、存じております。」

でも、必要最小限の軍事力の行使で、目的を達成したかったものですから。」

「ハハハ……『最高司令官』としては、当然の判断だね。立派だよ。」  
女王は、そう言った。

「ところで、グリューエル様。」

今日、ここにいらして頂いたのは、あなたの御意志を確かめたからですのよ。」  
エカテリーナ公爵夫人が、緊張感のある声で言った。

「私から話そう。」

グリューエル。セレニティの王になるべき者として、あなた以上の人はいない。

だから、あなたは、セレニティの王になるべきだ。

私はそう思っている。

では、あなた自身は、自分がセレニティの王になることについて、どう思っているんだらうか。

あなたの本心を聞かせてほしい。」

女王が、グリューエルの顔をまっすぐ見つめて、そう言った。

「お答えする前に、陛下に、ひとつ、質問をしてよろしいでしょうか。」

グリューエルは、意外なことを言い出した。

「いいよ。この問題を良く考えてもらうために必要ならば、質問を許そう。」

「はい。以前、クリステリア様からお聞きしたところによりますと、陛下は暗殺者から逃

れた後、二度と王宮には戻らないと誓って、姿を隠されたそうですね。

しかし、お兄様達が亡くなられ、帝国海賊たちから、父君、すなわち銀河帝国の王があなたを探していると知らされて、王宮に戻られたそうですね。

(注：第五章「銀河帝 国の女王」参照)

ということとは、王宮に戻れば、王位を継ぐことになるのは、ご承知の上ですよね。

では、どういう心境の変化で、王宮に戻られ、王になられることを決意されたのですか。

それは、私にとって、自分のことのように切実な問題です。

どうか、陛下のお心の内を、お聞かせください。」

グリューエルは、以前から聞きたかったことを、一気に話した。

「そうか。あなたも、あのころの私と同じような心境かもしれないなあ。

これはチアキにも話していないことなのだが、あなたには話そう。」

そう言つて、女王は語り始めた。

「私は、帝国海賊から、最初に、父が私を探していると聞いた時には、王宮に戻る気にはならなかった。あんな不毛な世継ぎ争いの世界とは、縁を切つたつもりだったからね。

それに、私は、生まれたばかりのチアキとケンジョーとの親子三人の暮らしにとても満足していたからね。」

でも、ある晩、ようやく一歳になった赤ん坊のチアキを抱いて、星空を眺めているときに、ふと思ったのさ。

『私は、この子にどんな人生を送らせてやりたいのだろうか』とね。

今の自分のように、海賊として、辺境で自由に暮らす方がいいのだろうか、それとも、銀河帝国の王として、この子の能力を發揮させる機会を与えてあげる方が良いのだろうかとね。

そう思いながらチアキの顔を見ていると、親としての強い思いが湧き上がってきたのさ。

『この子は、銀河帝国の王となる資質を持っている。』

だから、この子は、銀河帝国の王になるべきだ。』とね。」

「驚きました。」

陛下は、わずか一歳のお子さんに対しても、その才能がお分かりになるのですか？

「いや。その時はそう思ったが、今にして思えば、単なる親バカだったなあ。」

「ウフフ……。」

思わず、グリユーエルは微笑んだ。

「まあ、親つてものは、そういうものさ。」

でも、成長したチアキの才能は、ミッキー（ハヤマ小将・グランドマザー艦長）から、

とても高く評価されていたので、全くの見込み違いではなかったけれどね。

うーうーん。これも親バカかなあ。ハハハ・・・」

女王は、そう言って笑った。

「母親というものは、そういうものなのでしょうね。」

「ああ、そうだなあ。」

だから、私は、チアキのために王道を拓（ひら）こうと、銀河帝国に戻ったのさ。

もちろん、その時は、クリステイアが生きていることは知らなかったよ。」

「そうですか。」

「ああ、そうだ。グリユーエル。」

良い機会だから、銀河聖王家の女たちに伝えられている、銀河帝国の偉大な母親の話  
を、あなたにも語りつごう。」

「それは、どなたのことでしょうか？」

「あなたも知っている、テオドラ皇后さ。」

王妃の中の王妃として、今でも、特別に『皇后』の尊称をもつて呼ばれている母親さ。」

——注：このエピソードは、「補章 恐怖の大王の伝説」を踏まえて書かれています

「あの方のお話ですか。」

「ああ。

それは、皇后陛下が、まもなく一歳になる息子を抱きながら、王宮中庭の庭園で星空を眺めていたときのことさ。

二人の後から庭園に入ってきたユステイアン大王に、テオドラ皇后は涙を流しながら言ったそうさ。

『王よ。私は、臆病者、卑怯者になりました。』とね。』

「ええ!?! なぜ、そんなことを、おっしゃったのですか?」

意外な言葉に、グリュールは聞き返した。

「皇后陛下は、こうおっしゃったそうさ。

『私は、この子が生まれるまでは、自分が死ぬことなど何も怖くありませんでした。

むしろ、あなたのために死ぬのは、草原の神から与えられた自分の使命、運命とすら思っていました。

でも、この子が生まれてからは、死ぬのが怖くなりました。

生きたいと思うようになりました。

生きて、生きて、この子があなたの後を継いで、銀河帝国の王になる姿を見届けたいと思うようになりました。

そのためなら、どのような恥も、どのような汚名も忍ぼうと思うようになりました。

だから、そのようなことを考える私は、臆病者、卑怯者です。』とね。

これを聞いて、王は、

『私も同じ気持ちだ』

と言い、二人は涙を流したと伝えられている。」

「なるほど……。」

今、陛下は『まもなく一歳になる』と、おつしやられましたね。

それではこの話は……。」

「ああ、例の事件（聖王家反大王派の処刑）が起こる直前の話さ。

その後、第三次マンチュリア戦役が起こって、結局、三千人と十六億人もの血が流れたのさ。」

悲しいことだが、王道というものは、そうやって拓（ひら）かれることがある。」

「そうなのですね。……。」

「特に、母親でも、父親でも、人の子の親となると、今まではとても出来なかつたことが出来る力が体中から湧き上がってくるものさ。どんなことでもね。」

「やっぱり、そうなのですかあ。」

グリユーエルは、そう言つたため息をついた。

「あなたの質問に対する私の答えは、これで良いだろうか。」

さあ、グリユーエル。聞かせてほしい。

あなたは、セレニティの王になる気持ちはあるのか……。」

「まだ、わかりません。」

……

王になりたいという思いが、今一つ湧き上がってこないのです。

今までのお話を聞くと、それは、私が、まだ母親ではないからでしょうか。

加えて、王になって、私はいったい何をしたいのか、考えがまとまらないのです。

今、勉強している辺境宇宙の開発問題は確か面白いのですが、それがセレニティ王国にとつて最大の課題ではないことも明らかですから……。」

「そうか、ゆつくり考えると良い。」

「はい。」

「それならば、あなたがゆつくり考える時間を確保するために、銀河聖王家として、あなたに一つの提案があるのだ。」

グリユーエル。私たちの提案を聞いてほしい。

いずれ、セレニティ大公の了解を取らねばならないが、まずはあなたの気持ちを聞かせてほしい。」

そう言って、女王とエカテリーナ公爵夫人はグリユーエルに一つの提案をした。



「まあ、私のような者に、そのようなお話を……。」  
もつたいないことです。」

グリューエルは、話を聞いて、こう答えた。

「謙遜なんか、不要ですよ。」

陛下、あなたが、最近おっしゃっている『愚痴』を話してもよろしいでしょうか？」

エカテリーナ公爵夫人がこう言った。

「あはは……かまわないよ。」

「グリューエル様。あなたに関して、陛下は度々こうおっしゃっておられます。」

『私には二人の娘がいるが、息子がいないのが残念だ。』

息子がいれば、我が家にグリューエルを迎え入れるのに……。」とね。」

「まあ……。」

グリューエルは、そう言って笑顔を浮かべたが、同時に緊張した。

この三人の間に流れる、このような打ち解けた雰囲気自体が、自分が進むことを期待されている道を示していると感じたからだ。

## 2 スクープ報道

グリューエルは、帝都に戻り、大学に通う静かな日々を取り戻した。

しかし、それは長くは続かなかった。

銀河テレビが、夜の7時、ゴールデンタイムのニュースで、「スクープ報道」と自ら宣言した、とんでもないニュースを報道したからである。

男性のアナウンサーが、やや緊張して、ニュースを読み上げた。

「こんばんは。銀河テレビの、七時のニュースです。

まず、最初は、このスクープ報道からです。

信頼できる筋からの情報によりますと、セレニティ王国は、次期国王を、グリユーエル・セレニティ正統皇女殿下とすることを内定いたしました。

グリユーエル殿下は、幼いころから『モンブランの神童』と呼ばれ、15歳の中学生でありながら大学入学資格試験に合格され、現在16歳で帝都の帝国女学院大学に留学しておられます。

しかも、ご覧のように、たいへん美しい方でいらつしやいます。

それだけでなく、殿下は、つとに政治的なリーダーシップも発揮され、13歳で母国の政治改革をリードされ……」

テレビの映像には、グリユーエルの輝く笑顔が大写しになった。

さらに、帝国女学院大学で、茉莉香、チアキと並んで歩く彼女の姿が資料映像として流された。彼女が、銀河聖王家のチアキ姫の御学友であることも、さりげなく紹介され

ている。

「ウフフフ……」

ねえ、クラーク。

『信頼できる筋』というのがあなたのことだと知ったら、みんな、すぐに『誤報だ』って叫ぶでしょうね。

でも、このニュース、取材源は怪しくても、内容は当たっているわよね。

みんなが心の底ではそうだと思っていた話よね。」

ミーサが、帝都の自宅で、豪華なソファにくつろぎながら、夫のクラーク・ケント（銀河テレビ社長）に向かって言った。

『取材源は怪しい』だなんて、相変わらず、ひどい言い方だなあ……ミーサは。

この報道は、弁天丸Ⅱに乗ってセレニティまで行って取材した結果をまとめたものだよ。

取材したネタから報道規制に引っ掛かる恐れのあるものを除くと、このニュースが残ったのさ。」

クラークが、答えた。

「ウフフ……。あなたの狙いはいいわよ。認めているじゃないの。」

「ありがとう。認めてもらえてうれしいよ、ミーサ。」

それに、これは儲かりそうなネタなんだ。

なんたつて、強く賢く美しいお姫様は、人気の的になりそうだからね。」

「それはそうね。」

それにしても、あの子、短い間に、ずいぶん大人っぽく、美しくなったわね。

これつて、あの君に恋しているためかしら。フフフ・・・。

それで、銀河聖王家は、やつぱり・・・。」

「ああ、そうらしいよ・・・。まもなく発表になるだろうね。」

このスクープは、その予告編も兼ねているのさ。」

セレニティ王国のことなら、帝国も報道規制できないからね。」

その日のうちに、セレニティ王宮の報道官は、スクープ報道に関するマスコミからの質問に答えて、次のような、簡単な回答をした。

「そのような事実はありません。」

セレニティ王国政府は、報道の自由、表現の自由を尊重しますが、王宮には、皇太子として、グリユーエル姫の父君、アブラハム・セレニティ殿下がいらつしやることも御承知おきください。」

つまり、丁寧な表現ではあるが、無礼な報道だと言っているのだ。

そのため、セレニティ国民の反応は半信半疑であった。

もちろん、どういう形であれ当局からの非難の声は、マスコミ業界人にとっては誉め言葉であった。これは、古代から変わらない業界人の習性だった。

しかしながら、この「スクープ報道」は人々の心に確実に影響を与えていった。

グリューエル姫の存在は、セレニティ王国だけでなく、銀河帝国全体に知れ渡り、マスコミは、美しく賢い姫君の行く先々を追いかけて、その行動を報道し始めたからだ。

今日も、銀河テレビは、グリューエル姫の行動を追って、ニュースを流した。「では、次のニュースです。」

本日、セレニティ王国のグリューエル正統皇女殿下は、帝都で開催された宇宙古代語学会に来賓として出席されました。

殿下は、来賓としてあいさつされ、宇宙古代語のひとつ、ラテン語で、宇宙古代語研究の重要性を訴えられました。

殿下のスピーチについて、学会の出席者、帝国大学のケプラー教授は、銀河テレビの取材に対して、次のように語っています。

『殿下は、たいへん流暢（りゆうちよう）な古代ラテン語でお話しになりました。

スピーチの内容もたいへん素晴らしく、大きな感銘を受けました。・・・』

銀河テレビは、白髪の老教授が目を細めて、グリューエル姫のスピーチを称賛する姿を映し出していた。

こうして、グリユーエルは、自分の名前を知られずに街を歩くという、帝都に来て以来享受していた「静かな日々」を失った。

### 3 初仕事

銀河帝国宇宙軍・第一艦隊旗艦・機動空母グランドマザーは、銀河系の外延部から約千光年離れた宇宙空間にタツチダウンした。

「目標は、補足したか？」

艦長のミツキー・ハヤマ小将が、時空ナビを担当する航海士に聞いた。

「捕捉しました。約50万キロ先を慣性航行で飛行中です。」

航海士が答えた。

「よし、このまま、接近する。」

「なにか『慣性航行で飛行中』よ。漂流しているだけでしょ。」

ブリッジの玉座に座ったチアキが、不機嫌そうな声で言った。

「まあまあ、姫様。キゲンを直してくださいよ。」

クリステイア様から直々に頼まれたお仕事ではないですか。」

「それはそうだけど、私の第一艦隊司令官としての『初仕事』がこれじゃあね。」

私は、てつきり、初仕事として、茉莉香やグリユーエルと一緒に、第一艦隊を率いて

セレニティ星系に攻め込むのかと緊張していたのだけど……。

結局、グリューエルからは、お呼びがかからなかったのよね。

もう……、友達なのに……。」

「だから、姫様。……お友達と言っても、一緒にお買い物に行くのとは違いますよ。

あれも軍事力の行使ですからね、必要最小限で良いのです。」

「分かっているわよ。そんなこと！」

チアキは、一層不機嫌になった。

「それに、セレニティの件と、今回のお仕事とは、全く別の筋の話でして……。」

「そりゃあ、一応、別の筋の話よ。」

それにしても、私の初仕事が、こんな『特大の粗大ごみ』の回収だなんて、ひどいわ。

ねえ、そう思うでしょ!？」

チアキの機嫌は、なかなか直らなかつた。

「艦長。」

まもなく、クイーン・セレンディピティが、重力波砲の射程内に入ります。」

武器管制を担当する士官から、発射準備をもとめる進言があつた。

「よし。重力波砲、発射準備。」

目標は、ランバート星系の第三惑星の指定空域。」

「航路、セツト確認しました。」

「では、姫様、発射しますよ。」

「了解。」

チアキが答えた。

「重力波砲、発射。」

ミツキー・ハヤマ艦長が言った。

機動空母グランドマザーから、七色に輝く巨大な光の輪が放たれ、クイーン・セレンディピティを包んでいく。

そして、その光の輪の中で、巨船の姿は、ふっと消えてしまった。

チアキの初仕事は、銀河の外を飛行しているクイーン・セレンディピティを回収して、ランバート星系まで運んでくることだった。

そして、チアキの言う『特大の粗大ごみ』つまり、クイーン・セレンディピティのような全長27キロの巨大な船を運ぶには、機動空母グランドマザーの重力推進機関が作り出す時空トンネルが必要と考えられたので、チアキに依頼が来たのだ。

「それにしても、茉莉香がぶっ壊して、グリューエルが銀河の外に捨てた船を、私に拾わせて、修理して使おうなんて、姉上も何を考えているのかしら。」

そんなにこの船が欲しければ、自分で回収しに行けばいいじゃないの。」



「姫、キゲンを直してくださいよ。」

本艦も、これからランバート星系へのジャンプの為、時空トンネルへ入りますよ。向こうでは、クリスティア様がお待ちかねですよ。」

ミツキー艦長が苦笑して言った。

もちろん、ブリッジのスタッフは、先ほどからのチアキとミツキー艦長のやりとりを聞いて、笑いをかみ殺している。帝国軍では『コワモテ』で通るミツキー・ハヤマ将軍が、チアキ姫のご機嫌を取るために手を焼いている姿は、めつたに見られない面白い光景だった。

「時空トンネルに入りました。」

ランバート星系へのタツチダウンは、約3時間後です。」

船の航海士が言った。

「ああ、退屈。あと3時間もかかるの……。」

チアキが言った。

その時、ミツキー艦長に、一つのアイデアが浮かんだ。

「そうだ。姫様。」

私と模擬戦をしませんか。

それも、パイロット同士、一对一の空中戦、ドッグファイトというヤツですよ。」

「ええ？ そんなこと、ここで出来るの？」

「姫様、初めて、この船にお乗りになった時のことを覚えていらつしやいますか？」

「ああ、そうか。ゲームセンターね。」

「自慢しますと、私は、もと『ライトスタッフ（Right Staff）』のメンバーですよ。」

「ご存じでしょうが、帝国軍士官学校パイロット科でも、教官仲間からその名に値すると認められた教官パイロットだけが『ライトスタッフ』と名乗れるのです。」

「当然のことですが、私は、ドッグファイトでは、教官になって以来ほとんど負け知らずですよ。」

「知ってるわよ、そんなこと。わざわざ自慢してもらわなくても・・・。」

「まだ、チアキの機嫌は直っていない。」

「ですから、姫様。」

「私は、ライトスタッフの名に懸けて、王族でも手加減しませんよ。よろしいですよね？ それとも、対戦するのをやめますか？」

「ミッキー艦長がチアキを挑発した。」

「見え透いた挑発ね。でも、乗ってあげるわ。」

「退屈して、ヒマを持って余していたところだから。」

チアキの負けず嫌いに火が付いた。

「では、参りましょう。三時間もあれば、十分楽しめますよ。」

おい。タッチダウンが近づいたら、呼び出してくれ。」

「了解。」

「艦長！ 我々も観戦させていただいてよろしいでしょうか？」

「姫様、よろしいですか。」

「もちろんよ。ギャラリーは多い方が良いわ。」

二人は、「ゲームセンター」、すなわち乗組員の訓練用シミュレーターが並んだトレーニング・ルームへ向かった。

#### 4 責任の所在

セレニティ大公シムシエル5世は、朝から続いた公務を早めに切り上げて時間を作る  
と、例の事件（グリユールエルの誘拐事件とバルデン伯爵の死）以来、ふさぎ込みがち  
なマリーナ王妃と話すために、寝室に入った。

彼女は、ベッドで上半身を起こし、テレビの録画を見ていた。

「マリーナ。また、グリユールエルの演説を見ているのかい。」

セレニティ大公は、例の事件以来、急に年を取ったように感じられる妃に対して、優

しく言葉をかけた。

「はい。何度見ても見飽きません。」

見るたびに、あの子のことや、いろんなことを思い出して……。

そう言つて、マリーナ妃は、目頭を押さえた。

もちろん、妃の言う「あの子」とは、自分の生んだ実子、バルデン伯爵のことを言つている。

「そうだなあ。」

「あの子は、本当は、『薔薇の泉』から、グリューエルのような娘が現れるのを長い間待っていたのですよ。」

グリューエルが、もう二十年、せめて十年早く生まれていれば、あの子たちは仲良くできたかもしれませんねえ。」

「それを言つても、仕方のないことさ。」

「そう思うと、運命は残酷ですねえ。」

あの子にそんな人生を歩ませたのは、私の我儘だったのでしようか。」

「いや、あの時のセレニティ王家でなければ、何の問題もなかったよ。」

あの子は即位して、立派なセレニティ大公になっていたはずさ。」

「そうですよねえ。」

それに、グリューエルも、私の気持ちをわかってくれましたものねえ。」

「あの演説で癒された人たちは、たくさんいると思うよ。」

時代は変わるのさ。」

「そうですねえ。」

これからは、王家の若い女たちにとって、以前とは比べ物にならないくらい良い世の中になるのでしょうねえ。

年寄りには、いつも損をしますわ。」

「大人は、後に続く若者のために苦労するのが、世の常さ。」

そうだろう。」

「そうかもしれないねえ。」

ところで、陛下。わざわざ寝室までおいでになったのは、私に何か御用があったからですか？」

「ああ、そうだった。」

宰相と司法大臣が、グリューエルのことで裁可を求めに、これから来るそうだ。

それで、お前にも同席して、話を聞いていて欲しいと思つてね。」

「なぜ、大切な公務のご裁可の場に、私が同席を許されるのですか。」

「ぜひ同席してほしい。」

それが必要不可欠なことだと、私は思うからだ。

あと、皇太子も同席するようにと、呼んでいる。」

「承知いたしました。」

でも、ベッドを離れるのは久しぶりなので、身支度にお時間を頂きたく存じます。」

「ああ、待っている。」

大臣たちには、紅茶を何杯もお代わりさせて、待たせておこう。」

「ウフフフ……。」

あなたは、お若い時にも、同じようなことをしていらつしやいましたね。

別の理由で……。」

「そうだったかなあ。　ハハハ……。」

二人は久しぶりに心から笑い合った。

果たして、セレニティ大公とお妃は、予定の時間よりかなり遅れて、国王執務室に現れた。

部屋では、アブラハム皇太子、ミッテラン宰相、ラガルド司法大臣が待っていた。

「お待たせして、すみません。」

皆さんにお会いするのは、久しぶりですね。」

マリーナ王妃が言葉をかけた。

「いえいえ、私どもも、ご心配申し上げておりました。

陛下にあらせられましては、お元気なご様子、なによりでございます。

国民も、安堵することでございます。」

これに対して、ミツテラン宰相が、答えた。

「では、さつそく用件を聞こうか。」

大公が、大仰なあいさつを遮って、言った。

「では、まず私から申し上げます。

今から申し上げることに、ご不快の念を覚えられるかもしれませんが、何分、それが司法大臣の御役目でございますので、なにとぞ、ご理解を賜りたく存じます。」

司法大臣の必要以上に長い前置きは、それだけ深刻な用件であることの証拠である。はるか古代ならば、それを諮った大臣は死を賜ったかもしれないものだった。

「前置きは良い。早く述べよ。」

「はい。先般の一連の事件における、グリューエル様の責任問題でございます。

誘拐から自由の身になって以降の殿下の行動は、殿下の御意志であり、その責任を考  
えなければならぬと存じます。

そして、ご存じのとおり、グリューエル殿下は王族でございますから、その責任は裁判ではなく、大公様が裁かれます。

そこで、三つの御裁可の案をもつてまいりました。」

「三つも持つてきたのか……。心配性だなあ、大臣は。」

セレニテイ大公が言った。

「はい、一つ目は、グリユーエル様の罪を認めつつ、恩赦とする案でございます。

二つ目は、罪を認めず、不起訴とする案でございます。

三つ目は、罪を認め、罰する案でございます。罪状は、書類に明記されております。もちろん、罪は認めつつ刑の執行を猶予することも可能でございます。

いかがいたしましたでしょうか？ 陛下。」

そう言つてラガルド司法大臣は、三つの書類を大公に示した。

「この問題に対する私の考えは、決まっておる。

グリユーエルの責任は、グリユーエル自身が裁けばよい。

良いな。」

そう言つて、大公は、マリーナ王妃とアブラハム皇太子の顔を見た。

「はい。あなたなら、そうおっしゃると思つておりましたわ。」

王妃が、静かに、異議の無いことを告げた。

アブラハム皇太子は、黙つて頭を下げた。

大公がグリユーエルの事件に深い関わりのある二人をこの場に呼んだ意図は、二人が



大公の決定に異議の無いことを、重臣たちに示すためだった。

「そう言うことじゃ。」

従って、このいずれの書類にも余は、署名をしない。」

そう言つて、大公は、三つの書類の表紙を取つて、破り捨てた。

「御裁可、承りました。」

ラガルド司法大臣はそう言つた。

「自分の責任を自分で裁く」

これは、セレニティの国法では、国王及び国王に準ずる者のみに適用される規定であつた。

もちろん、「国王に準ずる者」の定義は無いが、皇太后（国王の母）や皇太子はこれに該当するというのが慣例だった。

この決定は、それだけグリユーエルが王国にとって重要人物であると、大公自身が認めたと物を語っている。

5 ドッグファイト（シミュレーター内の仮想空間）

チアキは、深窓で育つたお姫様ではない。

18歳まで宇宙海賊の娘として育つた。その間、パイロットとしての才能は早くから

開花していた。

16歳で、スペース・ギンギーの女子高校生大会・ネビュラカップに優勝した。

17歳で、重力制御推進機関を備えた帝国軍の新型戦艦グランドクロスIIを軽々と操縦し、新戦法タッチ・アンド・ゴーを駆使して帝国軍の第三艦隊を抑え、公爵の反乱を鎮圧した(第七章、公爵の反乱参照)。

この戦歴により、チアキは、女子高生でありながら、帝国軍の中佐という階級にふさわしい、実戦経験済みのパイロットと認められた。また、ミッキー・ハヤマの直弟子で、パイロットとしてはSクラス相当の腕前として帝国軍内で知られることとなった。

しかも、これらはチアキが王女であることが公表される前のことであった。

他方、対戦相手のミッキー・ハヤマ艦長は、かつて、帝国軍士官学校パイロット科の鬼教官として活躍し、帝国軍内では彼女の腕前を知らないものはいない。

この二人の勝負に、乗組員は興味津々だった。乗組員は、それぞれの持ち場でモニターに二人の戦闘実況を表示させる形で、二人の戦いを『観戦』している。

彼らも、少し退屈していたのだ。

二人はパイロット・スーツに着替え、トレーニング・ルームのシミュレーターに乗って、スタンバイした。

「では、いきますよ。姫様。」

「ご遠慮なく、『恩返し』をご覧にいただけますわ、教官サマ。」

「では、レディ、ゴー!」

シミュレーター内の仮想空間では、最初に10万キロ離れていた二人の操縦する戦闘機が、全速力で接近していく。

この時代では慣性中立化技術が完成しているので、戦闘機の猛烈な加速度による負荷からパイロットは保護される。

したがって、戦闘機のシミュレーターは操縦者に加速度の負荷をかけない設定になっており、パイロットの身体能力の差は勝負に影響がない。また、シミュレーター上のドッグファイトでは、機体の性能の差もないので、パイロットの操縦技術や戦術の判断が勝敗の分かれ目になっている。

「フフフ……。姫様、いつまで我慢できますか?」

「うう……。いつまで全速力の接近を続けるつもりかしら。」

「……これじゃ、チキンレースよ。」

レーダーで、急速に接近する相手の戦闘機の機影を見ながら、チアキがつぶやいた。

「ウイン、ウイン、ウイン」

二人の戦闘機のレーダーシステムから、衝突を警告する警報が鳴った。

「ビー、ビー、ビー!」

警報音は、さらにレベルアップした。

「ここで衝突をさけるために反転すれば、そこを狙い撃ちするつもりね。

私の度胸を試しているのかしら。

でも、私は負けない。」

「フフフ……姫様。ここまで接近しても怯（ひる）まないとは、さすがですね。」

「至近距離から、撃つてくるかもしれないから、こちらも警戒して……。」

チアキは、再接近に備えた。

とはいっても、実際に至近距離から撃ちあうことは少ない。

照準も定めにくく、なによりも至近距離から撃ちあえば、両機は相打ちで自滅になるからである。また、先に相手を撃墜しても、破損した相手の機体に衝突する危険もある。

そして二機は、きわめて至近距離ですれ違った。

宇宙空間での戦闘機のニアミスは、大気の影響がないため、交差する戦闘機に特別な衝撃は発生しない。もちろん実際に衝突すれば両機は大破するが。

「フー。」

無事にすれ違ったけど、ミッキーの戦闘機は反転する様子もなく、後方に遠ざかっていくわ。でも、ドッグファイトの勝負と言っていたのだから、一撃離脱の戦法でもないでしょう。

変ねえ。」

そうつぶやいたチアキは、レーダーの警告音に驚いた。

「ビービービー！」

「ええ!? 前方からミサイルが来るって? 誰が撃つたの?」

ミツキーの戦闘機は後方を飛行中のはずでしょ?」

実は、このミサイルは、ハヤマ艦長が最接近前に戦闘機から放つたものである。しかも、ミサイルは、いったんハヤマ艦長の乗った戦闘機に追い越されたのちに、敵を探知してからエンジンが再点火するように、仕組まれている。

驚きながらも、チアキは、迎撃ミサイルを発射して、敵のミサイルの照準をそちらに誘導し、同時に機体を反転させて、ミサイルの直撃を避けようとした。さらに、機体からチャフを放出して、追跡してくるミサイルのレーダーをかく乱した。

「ピンポン、ピンポン」

シミュレーターの勝負は、ポイント制である。ミサイルが発射され、チアキの機体を追いかけたことで、ハヤマ将軍にポイントが付いたことを知らせる音が鳴った。ハヤマ艦長がワンポイント、リードした。

「フー。」

大半のミサイルはかわしたけど、まだミサイルが一機、追ってくるわ。

直ちに、もう一度、反転とチャフの放出を……。」  
「フッフ、姫様。なかなか手際が良いですね。」

でも、ドッグファイトの醍醐味は、敵機の撃墜です。獲得ポイント数で勝利の判定を得るなんて、ライトスタツフの沽券（こけん）に係わりますからね。

勝負は、これからですよ。」

チアキがミサイルをかわしている間に、ハヤマ艦長の乗る戦闘機は反転して、チアキの乗る戦闘機に近づいていた。

「ああ、ミツキーの戦闘機が接近してきている。」

このままでは、後ろを取られる……。」

ドッグファイトで、「後ろを取られる」つまり、敵の戦闘機に後ろから追いかけられる展開になることは、最も不利な形勢になることだ。当然、獲得ポイントは3ポイントと、多い。

チアキは、宙返りして、さらに機体を横滑りさせ、ハヤマ艦長の戦闘機の接近をかわそうとした。

しかし、ハヤマ艦長の戦闘機は、チアキの乗った戦闘機の進行方向を、先読みしているかのように、ぴたりとチアキの戦闘機の後ろに付いて、追いかけ始めた。

「ピンポン、ピンポン」

ハヤマ艦長側にポイントが付いたことを知らせるチャイムが鳴った。ハヤマ艦長が、チアキの後ろをとったところで、更に3ポイント、計4ポイント、リードした。

もちろん、普通のパイロットならここでハヤマ艦長に撃墜されている。

しかし、チアキは、ハヤマ艦長にビーム砲の狙いをつけられないように、激しく機体を揺らして、逃げ続けた。

『ううう……まずい展開よね。このままでは、撃墜される……』

でも、撃墜されるのは、絶対に、イヤ！

もう、どんな手でも使って、この場を逃れないと……』

チアキは、ハヤマ艦長の追撃を必死で交わしながら、考えた。

『そうだ。あの手があった。』

オヤジに教わった海賊戦法だけど、多少文句言われても、負けるよりはマシよねえ。

フフフ……』

チアキは、反撃に出た。

「さつき、教官殿は、ほとんど負けたことがないと自慢されていましたが、一度や二度は、負けたことはあるのですね。」

「なんですか、姫様。訓練中に、いきなり御質問ですか？」

「良いから、答えてください。」

「そりや、負けたことはありませんよ。」

ライトスタツフの教官たちには、私より腕の立つヤツがいましたからね。」  
「へへ。」

では、その黒星の中には、ドッグファイト中に、『この勝負に勝ったら、俺と結婚してくれ』と言われて、ワザと負けたのもあるのでしょうかねえ？

好みのオトコだったのでしょ、その人。」

「そ、そ、そんなこと、絶対、ありません。」

一瞬、ハヤマ艦長の心が動揺したのが感じられた。

その一瞬のスキについて、チアキは素早く機体を宙返りさせて、ハヤマ艦長の戦闘機の後ろをとった。

「ピンポン、ピンポン」

チアキ側にポイントが付いたことを知らせるチャイムが鳴った。チアキに3ポイントが入り、勝負は、3対4の僅差になった。

『うううう……。姫様、やりますね。』

では、私も……。』

口には出さずに、心の中で報復を誓ったハヤマ艦長は、戦闘機を操縦する手を休めずに、チアキに対して言った。



「そう言えば、姫様。」

先日、グロリア姫様がマスコミのインタビュアーに答えて、

『私は殿方とお付き合いましたこともなく、恋愛の経験はまったくありません。』と言って、顔を真っ赤にして恥ずかしくがっていましたが、本当でしょうかねえ。」

「そんなワケないでしょう。」

そう言う発言やしぐさ自体が、『カマトト』というあの人の芸（アート）よ。

バカな男は、彼女の『純情無垢』の演技にコロツと騙されるけどね……。」

（第十一章「銀河聖王家の魔女」参照）

チアキも、戦闘機を操縦する手を休めずに、辛口の批評を述べた。

「そうでしょねえ。」

では、御経験があるとして、そのお相手は、誰でしょうかねえ？

元婚約者のエドワードさまでしょうかねえ？」

「そ、そ……そんなわけないでしょ……。」

狙い通り、一瞬、チアキの心が大きく動揺した。

ハヤマ艦長は、「御経験」という、曖昧な言葉をわざと使ってチアキの誤解を誘い、動揺させたのだ。彼女は心理攻撃も心得ていた。

そして、今度は、そのスキについて、ハヤマ艦長が同じように機体を宙返りさせて、チ

アキの後ろを取った。

ポイントが付いたことを知らせるチャイムが鳴っている。

『ううう．．．』

ミツキー、よくも落とし穴にはめてくれたわね。

この借りは、倍にしてお返しするわよ〜〜。』

チアキは、少し怒った。

「このような仁義なき「女の戦い」は果てしなく続くと思われたが、意外なところから、「タオル」が投げられた。

「姫様、そろそろ、お召し替えの時間です。訓練を終了してください。」

ランバート星系へのタッチダウンまで、あと一時間ですよ。」

チアキ姫付きの筆頭女官の声が、直接、ヘルメットのヘッドフォンに響いてきた。

「まだ、一時間もあるじゃないの．．．。」

チアキが不服そうに言った。

「コホン。」

年配の女官は、咳払いを一つして、言った。

「淑女にふさわしい姿への御召し替えには、相応のお時間が必要です。」

それに、歓迎行事も予定されております。

まさか、その、汗まみれのパイロット・スーツのまま、お出ましになるおつもりじゃないでしょうね。」

「そうね。このままでもいいかしら。」

チアキは少しすねている。負けたままでは終わりたくないのだ。

「コホン。姫様。」

向こうでは、クリステイア様と交際相手のアーサーさま、銀河経済界の有力者、ロズ福祉財団の幹部たち、それに大勢の子供たちが、姫様をお待ちになっておりますよ。

みなさんは、姫様が、公式写真から抜け出てきたような、麗しい御姿で御登場されることを期待していますよ。

特に、財界人には、エドワード様のご友人方も大勢いらつしやいますからね。」

筆頭女官は、チアキのウィークポイントを突いて、トドメをさした。

白鳳女学院の卒業式での「お召し替え」事件以来、女官たちはチアキのウィークポイントを承知しているからだ。(第二十七章「卒業」参照)

「ううう……。仕方ないわねえ。」

ミッキー。この勝負、お預けよ。」

負けず嫌いのチアキが、まだ未練を残しながら、そう言った。

「承知いたしました。」

この訓練以来、帝国軍内では、チアキ姫とハマ艦長は極めて親しい間柄となり、姫もワガママを言つて艦長を困らせなくなったと言われている。

## 6 「あの子」の望み

セレニティ王国の国王執務室では、大公、大公妃、皇太子、宰相、司法大臣の会議が続いていた。

「では、続きまして、私からでございます。」

ミッテラン宰相が、まったく何事も無かつたような平静な表情で、話し始めた。

「先日、銀河聖王家より使者が参りまして、女王陛下からの申し出を伝えて参りました。女王陛下は、グリューエル殿下を、銀河聖王家の白薔薇家の養女にしたいとお考えになつておられます。」

「まあ、養女ですって……。きつと、婚約のお話かと思つておりましたわ。」  
マリーナ王妃は、声を上げた。

「私も、白薔薇家のアレキサンダー殿下とのご婚約のお話かと予想しておりましたら、使者がそのように申しました。」

使者は、『理由は、グリューエル様をお守りし、静かにお過ごしいただくため。』と、申ししております。」

ミッテラン宰相が答えた。

「まあ、グリユーエルは大学生と言っても、まだ十六歳だからなあ。

結婚までの間、白薔薇家の養女として安全かつ静かに過ごすという意味も、確かにあるだろう。」

しかし、養女となれば、グリユーエルは、直ちに銀河聖王家の王族になるわけだ。

この意味は重いぞ。」

セレニティ大公は言った。

「陛下。私からお願ひがあります。

グリユーエルが白薔薇家の養女になっても、セレニティの王位継承権を保持するようにして頂きたいのです。」

グリユーエルの父である、アブラハム皇太子が言った。

「なぜだね。あなたの考えを聞こう。」

「国民が、グリユーエルを求めているからです。」

先日のグリユーエルの演説は、多くの国民を感動させました。

だから、国民は、これからはずっと、グリユーエルがセレニティのために尽くしてくれるものと、期待しているからです。」

「なるほど。もしグリユーエルが王位継承権を失うとしたら．．．。」

「ですから、もしもグリューエルが銀河聖王家の養女となることにより王位継承権を失い、セレニティ王家から出てしまうと、国民は見捨てられたと感じるでしょう。」

王家への反感も芽生えるかもしれません。」

「私としては、国民の気持ちよりも、あなたの気持ちを聞かせてほしいのだが……。」  
「私としても、グリューエルには、何処に居ても、いつまでもセレニティのことを気にかけていてほしいのです。」

だから、グリューエルの王位継承権は、残してほしいのです。」

「では、グリューエルは、セレニティの王位に就くことを望んでいるのかな？」

「今は、望んでいないでしょう。」

「それは、彼女に確かめたのかね。」

「いいえ。」

でも、軍からの情報では、クイーン・セレンディピティをめぐる戦いの際に、グリューエルは、女王から銀河帝国宇宙軍全軍の指揮権もゆだねられていたそうです。そして、銀河帝国宇宙軍の第一艦隊は、セレニティ星系へ侵攻して占領する準備を整えていたそうです。

ですから、グリューエルが、たとえ軍事力を行使してでも、今すぐに王位に就くことを望んでいれば、迷わず出撃命令を出していたでしょう。

でも、グリユーエルはそれを命令しませんでした。

この経緯をきくと、グリユーエルは、今は、王位に就くことを望んでいないと思います。」

「そうか。」

では、マリーナは、グリユーエルの王位継承権について、どう思うかな。」

「私も、アブラハム（皇太子）と同じ気持ちです。」

あの演説は素晴らしかったです。グリユーエルは私の気持ちもわかってくれました。

私も、グリユーエルはこれからもずっと、ずっと、セレニテイのために尽くしてくれると信じています。」

グリユーエルが、セレニテイの新しい時代を拓いてくれると信じています。」

マリーナ大公妃は答えた。

「私も同じ気持ちだよ。マリーナ。」

セレニテイ大公は、そう言つて、微笑んだ。

「では、決まりだな。」

養子縁組の話は、了解する。

銀河帝国には、グリユーエルの王位継承権を保持したままで養子縁組ができることを条件とするよう、申し伝えよ。」

セレニティ大公は、ミツテラン宰相に命じた。

こうして、グリューエルの王位継承権という最もデリケートな問題は、セレニティ側の自主的な決定により、銀河帝国の干渉を受けない形で決着した。

グリューエルには、セレニティの王への道が残された。

宰相と司法大臣が退席した後に、大公、大公妃、皇太子の三人が、執務室に残った。

新しい紅茶が三人に出され、女官が退席したのを見計らって、マリーナ大公妃は、口を開いた。

「アブラハム。

何度も同じことを言うようですが、私の気持ちを聞いてください。

今も、私は、グリューエルが、もう二十年、せめて十年早く生まれていればと残念でなりません。

そうなれば、きつと、あの子たち（バルデン伯爵とグリューエル）は仲良くできたでしょう。そうなれば、グリューエルを銀河聖王家に取りられてしまうことも無かつたでしょう。

だから、あの子は、帝都まで、グリューエルを取り返しに行ったのですよ。きつと。

だって、あの子は、本当は、『薔薇の泉』からグリューエルのような娘が現れるのを長い間、待っていたのですから。」



「マリーナ……それを言うのは……。」

大公は、優しい声で、大公妃の名前を呼んだ。

「いいえ。言わせてください。」

あの子（バルデン伯爵）は、優しい子でした。

だから、あの子がグリューエルを『薔薇の泉の花嫁』にした場合でも、かつての花嫁たちのような、ひどい扱いはしなかったと、私は信じています。」

「母上様。」

あの方は、かつて、王家の者たちが『薔薇の泉の花嫁』が『聖母』として王宮に君臨するのを恐れて、彼女たちを幽閉したり事故に見せかけて暗殺したりした歴史を決して繰り返さなかっただろうとおっしゃるのですか？」

「そうです。私はそう信じています。」

だから、あの子は、王家の娘を、それもグリューエルのように女王となるべき資質の持ち主を、『薔薇の泉の花嫁』として選んだのです。」

「そうなのですか……。」

アブラハム皇太子は、聞き役に徹することにした。

「そうです。」

『薔薇の泉』を再建した後、あの子は、グリューエルの後ろ盾となって、彼女を国政の

中心へと押し出して行ったでしょう。

グリユーエルが王になれば、宰相として補佐したでしょう。

彼女が望めば、パートナーになったでしょう。

そして、彼女が、あの子の子供を産めば、その時、名実ともに薔薇の泉は終わるはずでしょう。

私は、それがあの子の望みだったと信じています。」

「心中、お察しいたします。」

アブラハム皇太子は、子に先立たれた母親の気持ちを思い、深く頭を下げた。

もちろん、マリーナ妃が信じていることは、反面では、バルデン伯爵による王家への復讐の意味も込められているなどは、言わなかった。

## 7 妹からはじめます

セレニティ王家からの返答があつて、一週間ほど経過したある日、マスコミは、銀河聖王家の慶事を一齐に伝えた。

銀河テレビでは、夜の7時、ゴールデンタイムのニュースで、男性のアナウンサーが、満面に笑みを浮かべて、ニュースを読み上げた。

「こんにちは。銀河テレビの、七時のニュースです。」

まず、最初は、この喜ばしいニュースからです。

本日、銀河聖王家は、セレニティ王国のグリユーエル・セレニティ正統皇女殿下を、白薔薇家の養女としたことを、公表しました。

それでは、本日、宮殿の聖王宮で行われた記者会見の様子をご覧ください。

なお、記者会見には、グリユーエル殿下が未成年であるため、兄君のアレクサンダー殿下が同席されておられます。」

テレビは、壮麗な宮殿の広間で行われた記者会見の様子を放送した。

「それでは、各社を代表して、私、銀河テレビのスージー・ウォーターメロンが、殿下にご質問いたします。

殿下。本日は、おめでとうございます。

まず、今日の日を迎えられた、ご感想をお聞かせください。」

「ありがとうございます。」

今日の良き日に、銀河の中でも、最も歴史と伝統ある銀河聖王家の一員に加えて頂いたことを、光栄に存じます。

これから、微力ながら、銀河聖王家の一員として、国民の皆様の期待に添えて参りたいと存じます。

.....」

会見での質問自体は、予め聖王家の広報室とマスコミ各社の代表記者が打合せて作成したものである。だから、マスコミ各社も、その回答の内容よりも、グリューエルがどんな姫様かそのお姿を見たいという国民の期待に応えることに関心がある。

グリューエルは、その期待通り、有名な美人キャスターからの質問に対して、優雅な立ち振る舞いと美しく上品な銀河標準語で答え続けた。

テレビ画面は、彼女の輝く笑顔を写し続けている。

そうして、なごやかにインタビュ어가進んでいく。

「それでは次の質問に移ります。

殿下におかれましては、セレニティの王位継承権を保持したまま、白薔薇家の養女となられると伺っておりますが、そのことにつきまして、殿下のお気持ちをお聞かせください。」

「はい。

セレニティは、私の生まれ育った故郷（ふるさと）です

私は、これからも、何処に居ても、何をしても、片時も、故郷のことを忘れません。

大公様は、こういう私の気持ちを理解して下さい、王位継承権についてご配慮して頂

いたのだと思っております。

私は、いつまでも故郷（ふるさと）のことは忘れません。これからも、私は銀河聖王家の一員としての私の役割をはたしつつ、故郷のためにも尽くしたいと思っております。」

グリューエルはそう言つて、テレビカメラに向けて強い意志を込めた表情をした。テレビを通じて、自分の思いを故郷セレニティの人々に伝えようという表情だった。

実際、この映像を見たセレニティ国民は、グリューエルの熱意に期待した。

そして、「グリューエルが次期国王に内定」という銀河テレビの報道はやつぱり正しい、いや、そうあつて欲しいと感じた国民が少なくなかったという。

故郷への思いを語つたあと、彼女は、隣で自分を見守つているアレクサンドル殿下の方を見た。

二人の目が合い、グリューエルとアレクサンドル殿下は、笑みを交わしあつている。そして、グリューエルは、顔を赤くし、目を伏せた。

テレビカメラはその一瞬を見逃さなかった。むしろ、待ちに待った瞬間だった。

そして、テレビは、グリューエルとアレクサンドルの二人が、王族の持つ光のオーラに包まれて、仲良く並んでいる姿を映し出した。

それは、二人の未来を想像させる映像だった。テレビを見た国民は、グリューエルを

養女にした銀河聖王家の意図を理解した。

「うん、うん……」。

二人は、やっぱりお似合いだねえ、チアキちゃん。」

茉莉香は、チアキの部屋で記者会見の様子を伝えるテレビを見ながら、そう言った。茉莉香は、大学の帰りにチアキに連れられて王宮に来たのだった。

「そりゃそうだけど。」

でも、茉莉香、アンタ、本当にそれでよかったの？」

いつものように、チアキが言った。

チアキは、まだ茉莉香に王族となつて自分のそばにずっと居てほしいと願っているからだ。

「チアキちゃん、このごろ、同じ話を何度も、何度も言うけど、ちよつとしつこくない？」

私、ちゃんと意味、わかつてるよ。」

「何、言ってるの、茉莉香は……もう。」

私は、あなたのことを心配して言っただけだよ。」

「だから、それがしつこいと言うか……」。

二人は、また、タメ口で仲のいい掛け合いを始めた。

会見を終えて退出したグリユーエルとアレックスは、王宮の廊下を並んで歩いていった。

「これから、どうなされますか？」

アレックスが聞いた。

「はい。チアキ様のところへごあいさつに伺おうかと思えます。

今日は大学に行かれていて、まだお会いいたしておりませんので。

それに、茉莉香さんもお見えになると伺っていますし。」

「今日は、あなたは、大学をお休みされたんですね。」

「はい。朝からいろいろと準備がございましたので。」

「では、私もご一緒してよろしいですか。」

「はい。」

そう言っているうちに、グリユーエル達はチアキの部屋の前に着いた。

これから茉莉香に会うと思うと、グリユーエルは少し緊張した。

そして、彼女はこう思った。

『茉莉香さん。私は、妹からはじめますわ。』

## 第三十五章 ウルスラとリリーの「学生生活」

### 1 ウルスラの入学式

話は少しさかのぼる。

ウルスラは、4月1日に、銀河帝国の帝都にある帝国軍士官学校に入学した。

銀河帝国の帝都にある士官学校は、正式には士官学校の帝都キャンパスと呼ばれている。主要星系にも帝国軍の士官学校のキャンパスが置かれているので、士官学校は全部で八つのキャンパスをもつ。ただし、これらの士官学校キャンパスは全体で一つの士官学校とされ一体であることが強調されるため、各星系においても、ただ単に士官学校と呼ばれている。もちろん、その中で最も歴史と伝統があるのが帝都にある士官学校であることは言うまでもない。

士官学校の入学式は、女王陛下臨席の下に、帝都クリスタルスターの聖王宮で行われる。

聖王宮は、最も格式の高い宮殿とされる。聖王宮には実際にはいくつかの部屋があるが、通常は聖王宮と言うと最も大きな大宮殿をさす。ここは、部屋といっても帝国の大規模な儀式用に用いられるため、その規模は立席なら十万人を収容できるとされる。銀



河帝国の富裕さと強大さを見せつける豪華な内装と相まって、聖王宮は、誰もが驚く壮麗な屋内空間である。

従って、士官学校の新入生は、帝都キャンパスだけでパイロット科、エンジニア科、普通科を合計して千人にもなるが、聖王宮はこれらの新入生と大勢の随行者を難なく収容できる。

その広大な空間の観客席に座った白鳳女学園ヨット部現役・OG一行は、はるかかかたに整理している新入生の中から、ウルスラを探そうとしていた。

「ねえ。ウルスラはどの辺に居るの？人が多すぎて分からないよ。」  
「今、探します。」

音楽鑑賞用オペラグラスを使いながら、ナタリアがリリーの質問に答えた。

本来なら、軍用双眼鏡を使いたいところだが、警備のため使用禁止とされているため、ナタリアは、オペラグラスを使っている。

「ねえ、あれじゃないの！」

あそこ。ど真ん中に、一人だけ浮いてるコがいるよ。きつとあのコだよ。」

ハラマキがウルスラを肉眼で見つけた。

パイロット科は、士官学校でも最もエリートコースとされるので、入学式でも真ん中の位置に整理していたのだが、ウルスラは其中で自然と目立ってしまう存在だった。

「きつと、そうでしょうね。」

他の新生は緊張して直立不動で立っているのに、彼女だけは、うれしそうに、そわそわしていますからね。」

ウルスラの婚約者、ブラウン中尉が言った。彼もウルスラの入学式に出席していた。「今、確認しました。あれがウルスラ先輩に間違いありません。」

ナタリアがオペラグラスを見ながら、答えた。

「やっぱりねえ。ウルスラらしいわね。」

「それで、わたしも、この間、聞いたのですが、今年の新生には実戦経験のある猛者（もさ）が入ってくる噂になっているそうですよ。」

士官学校の上級生は、どんなコワイヤツが入ってくるかと、戦々恐々だそうです。」

「ワハハハ……。それがウルスラと知ったらみんなびっくりね。」

「そうですね。」

ウルスラさんの着ている制服の肩章は、予備役少尉のものです。

これで、ウルスラさんが、実戦経験がある新生と一目でわかります。」

「でも、士官学校って、そんなことが話題になるのですか？」

「そうですよ。軍では実戦経験が重視されますから、彼女はこれから注目の的でしょう。」

「へえ〜！」

やがて、入学式が始まった。

開会宣言の後、国歌「永遠の銀河帝国」が演奏される中、女王陛下が入場した。

もちろん、今年の随行者である第二王女殿下も入場した。

そして、入学式は、校長の挨拶、帝国軍最高司令官である女王陛下の祝辞、新入生代表の決意表明・・・と、形どおりに進み、終了した。

そして、女王陛下一行が退場した後、解散となった。

ようやく緊張がほぐれた新入生たちは、観客席のなかにいる随行者の両親たちを探しはじめ、見つけた者は手を振っている。

やがて、聖王宮のあちこちで、新入生と随行者たちの歓談が始まった。記念撮影をしている人たちもいる。

「チアキちゃん、王宮見学に連れてってくれるって言ったのに・・・」

チアキちゃんは出て行っちゃったし・・・、

これじゃ、何処へ行ったらいいか、わからないよ。」

ウルスラは、こうつぶやいて、新入生の中で立ち尽くしていた。

その時、黒服の侍従が彼女に近づいてきて、言った。

「ウルスラ・アブラモフ少尉でいらっしゃいますね。」

王女殿下から、あなたをご案内するように言われて参りました。」

「え！ 新入生が、少尉だって！」

「少尉ってことは、実戦経験のある新入生ってこと。あの女のコが……。」

「本当だ。あのコの肩章をみろよ。我々のものと違う、予備役少尉のものだ。」

「おれたち、四年後に士官学校を卒業して、晴れて『少尉』に任官するんだよねえ。」

「こりゃ、『一周』、抜かれているな、おれたちは。」

「それで、彼女に、王女殿下が何のご用なの!？」

侍従の言葉に、ウルスラよりも、その周りにいた新入生が素早く反応した。

それに対して、ウルスラはやっとな安心して答えた。

「はい。ウルスラ・アブラモフは、私でございます。」

「では、こちらへどうぞ。」

ウルスラは、まわりの新入生だけでなく、士官学校関係者の注目を集めながら、侍従について行った。

遠ざかっていくウルスラを見ながら、女子の新入生たちが一つの発見をした。

「ねえ、あのコ、左手に指輪をしているわよ。」

「指輪なんて、士官学校の入学式に場違いねえ。あのコ、何、考えているのかしら。」

「ねえ、左手の薬指に指輪ってことは、まさか……。」

「ええ！ あ、ホントだあ。」

「それじゃあ、私達、女子は、あのコに二周、抜かれているってことに……。」  
ウルスラが注目を浴びたのは、肩についている予備役少尉の階級章だけではなかった。

本来、場違いなはずの大きなダイヤモンドの婚約指輪を左手薬指につけて、彼女は入学式に出席していた。

女子の新入生が、その「女の階級章」を見逃すはずは無かった。

やっぱり、ウルスラは、常識はずれの猛者（もさ）だった。

## 2 士官学校での猛勉強

「うわあ〜。また赤点だあ〜！」

ウルスラが、毎週行われる小テストの結果を情報端末で眺めて、つぶやいた。

「ウルスラさん、もう勘弁してくださいよ〜！」

「あ〜あ、追試対策のお付き合いで、また私たちは今週末も外出禁止ですよ。」

士官学校は全寮制で平日は外出禁止。当然、学生は、週末の外出を楽しみにしている。だから、週末の外出禁止は、学生にとってなかなか厳しいペナルティだった。

「そうです。それも、もう三週連続ですよ。」

「ちがうよ。戦勝記念日の休暇を挟んで数えれば、五週連続だよ。」

「そんなの自慢になりませんよ！ ウルスラさん！」

「まあまあ、そんなに興奮しないで。」

大秀才の皆さんにとつて、私がわかるように教えるスキルを磨くのも、良い経験になると校長先生も仰つていたじゃないですかあ。アハハ・・・」

「自分でそれを言うんですか！」

「だって、翌週の追試では、必ずギリギリの低空飛行で合格ラインを飛び越えているのは、皆さんのおかげですよ。やっぱり、みなさん教えるのがとても上手だと、私、感謝していますよ。」

そう言つて、ウルスラは、笑顔を見せた。

銀河帝国の帝都クリスタルスターにある帝国宇宙軍士官学校パイロット科に入学したウルスラは、士官学校で「事件」を次々と起こしていた。

良い方の話からいうと、

「今年の新生には、実戦経験のあるヤツがいるらしい。これは百年ぶり！」というウワサが新生や士官学校内に広まっていたが、その噂の当人がウルスラであり、しかも一八歳の女の子と知つて、皆を驚かせた。

しかも、ウルスラの実戦経験の内容が軍事機密とされ、彼女の経歴の最も肝心な部分

を知ることが許されなかったことで、更に教官たちを驚かせた。

『このコは、どんな軍事機密にかかわっているのだろうか』と。

しかし、極めつけは、新入生の授業ガイダンスでの事件である。

教官は、パイロットシミレーターシミュレーターの授業で装置の説明をしたあと、ウルスラを指名してシミレーターを実際に使ってみせることを命じた。もちろん、教官はウルスラを少し痛い目に合わせて、鼻をへし折ることを狙っていた。

これに対し、ウルスラは、射撃のシミレーターで最高難度レベルでのプレイを求められたにもかかわらず、命中率95%以上という驚異的な成績を上げて、生徒だけでなく教官も驚かせた。

もちろん、明るくオチャメな性格から、男女を問わずみんなに好かれる女の子だった。しかし、よいことばかりではない。

授業では、よく居眠りをして怒られている。

勉強には、あまりやる気が出ないようだ。

特に、パイロット科の専門学科については徹底的な理解と暗記が求められるため毎週、小テストがあるが、この小テストではウルスラは赤点続きだった。

これを知ったパットン校長は、パイロット科の秀才三人を指名し、ウルスラの勉強を手助けするように命じて、こう言った。

「とにかく、ウルスラ君はパイロットとしての腕前の方は極めて優秀だから、学科の成績不良で退学処分にするわけにはいかないんだ。

そこで君たちが、彼女の勉強を手助けしてほしい。私からもお願いする。

お返しに、彼女からは操縦の極意でも教えてもらってくれ。

なにせ、ウルスラ君は伝説の鬼教官、ミッキー・ハヤマ將軍の推薦状を持って当校に入学してきた、実戦経験済みの予備役少尉だからな。」

「わかりました。」

彼らは、ミッキー・ハヤマの名前を聞いて、素直に校長の頼みを了解した。

「ああ言い忘れたが、もちろん、ここは士官学校なのだから、結果については連帯責任だからな。」

つまり、彼女が小テストで赤点を取ったら、全員、週末の外出禁止だ。

どうせ、お前ら、週末にデートする彼女なんか、いないんだろう。

問題ないよな。ハハハ・・・。」

パットン校長は最後に爆弾を落としていった。

優等生たちが、ウルスラに付き合っつて外出禁止のペナルティを連発されることになったのは、このためだった。



## 3 ミリタリー・ケイデンス

士官学校の授業は、教室での講義だけでなく、専門訓練もある。

それでも、一年生は、本格的な専門訓練の準備のため、学科中心のカリキュラムからスタートする。まずは、宇宙船の基礎知識を詰め込むためである。これが毎週小テストの対象である。

それと並行して高度なメディカルチェックと基礎体力をつけるトレーニングが行われる。

メディカルチェックは、パイロット科の知られざる難関である。宇宙飛行士にふさわしい強靱な精神と肉体を備える資質があるかが問われるからだ。極めて高度な医療技術により、隠れた不適合因子を見つけられ、毎年何人かが不適合判定をうける。

入学させてからパイロットに不適合と判定するのは非情な措置だが、これから始まる厳しい訓練や実戦で事故を起こさないために必要不可欠なことでとされている。パイロットは他人の命まで預かるからだ。

もつとも、昔の士官学校では不適合判定で即退学だったが、いまはパイロット科以外のエンジニア科や普通科（通常の士官コース）に転科するものとされている。軍も優秀な人材を逃がしたくないからだ。

一方、基礎体力作りのトレーニングは、昔ながらのものである。

体力作りと言えば、まずは、ランニングから始まる。

パイロット科の学生たちは、今日も、昔ながらの「ミリタリー・ケイデンス」と呼ばれる歌を歌いながら、整列し歩調を合わせて、集団でランニングをしていた。

帝国軍士官学校では、掛け声をかける役が即興で歌詞を考えて、ケイデンスのメロディに乗せて、みんなに歌わせるのがシキタリだ。

今日の掛け声役は、ウルスラである。

「おうちに帰っても、意味ないさ。」

(注：歌のメロディは、ファミコンウォーズのCMを思い出してください♪)

ウルスラが、走りながら歌った。

新入生は、生まれた星系の自宅を離れ、遠く帝都までやってきた。そして、帝都の郊外にある士官学校の寮で泊まり込みの生活をする。入学してしばらくすると、だれでも、ちよつとホームシックの気分になる。

ウルスラは、その気分を振り切ろうと、歌った。

ザッ、ザッ、ザッ、ザッ……

「おうちに帰っても、意味ないさ。」

歩調を合わせて走りながら、他の学生が、それにならって唱和した。

「おまえの彼女は、もういない」

「おまえの彼女は、もういない。ナハハ……」

走りながら男子学生たちが苦笑している。みんな、思い当るところがあるようだ。

「ジョディのヤツに、取られてる〜」

「ジョディのヤツに、取られてる……。ワハハハ……」

今度は、男女を問わず、学生たちが大声で笑い出した。

女の子にこうハッキリ言われては、笑うしかないのだろう。

「叫べ（さけ・べ）、チク・シヨ―、叫べ（さけ・べ）、チク・シヨ―！」

「叫べ、チク・シヨ―！ 叫べ、チク・シヨ―！」

この掛け声には、力強い掛け声が返ってきた。

「叫べ、叫べ、1、2、3、4！」

「叫べ、叫べ、1、2、3、4！」

「1、2、3、4！ 2、2、3、4！」

「1、2、3、4！ 2、2、3、4！」

……

歌いながら、パイロット科の学生たちは、男女一緒にひとつの集団となってグラウンドを走って行く。

この後は、柔軟体操、腕立て伏せ、腹筋運動、腹這いになって地面を進むホフク前

進、・・・と、続いていく。

運動メニューは毎週、毎週、厳しいもの変わっていく。

こうやって、少しばかり心に残ったホームシック気分を振り切りながら、学生たちは大人に、そして軍人になっていく。

#### 4 士官学校の専門訓練

そして、士官学校の入学から3か月経過すると、いよいよ、マシンを使った専門訓練が始まった。ただし、最初の課程は、メディカルチェックの最終試験を兼ねている。マシンによる負荷に心身が耐えられるか、医学的にチェックされるのだ。

マシンを使った実践的な訓練は、その後、メディカルチェックに合格した者に対して、本格的に行われる。

マシンの第一番目は、「Gショック」と呼ばれるマシンである。

巨大なアームの先に取りつけられた球体の中の操縦席に座って、アームごと高速回転し、遠心力によるGの荷重に耐える訓練である。いうまでもなく、エンジンの推力による加速度の負荷に耐える訓練である。

もちろん、現代技術では慣性が中立化され、加速度の負荷を感じない仕組みが確立している。その意味では一般人には不要な訓練かもしれないが、パイロットにとってはそ

うは考えられていない。何が起こるか分からない戦場では、最後は自分の肉体だけが頼りという極限状態も予想されるからだ。

従って、現代でも、パイロットの最低限の能力として、慣性中立化装置の助力なしの状態で、つまり自分の体力だけで「G」、つまり加速度の負荷に耐え、宇宙船を惑星の引力を振り切って大気圏外まで上昇させるように操縦する能力は必要とされる。

「さあ、いくぞ……。Gショックかあ、久しぶりだなあ……。」  
ウルスラの番が回ってきたが、彼女はなつかしそうにしている。

やがて、アームが高速回転し始めた。

Gの影響はまず眼に出る。最初に、眼への血流が減少し、「グレイ・アウト」と呼ばれる色が見えない灰色の世界になる。色覚が失われるのだ。

続いて、「トンネル・ヴィジョン」と呼ばれる視界が生じる。視野が狭窄になり、トンネルの中を走っているように見えてしまうので、そう呼ばれている。

そして、ついには、失神状態となってしまう。

「ううう……。きついなあ……。」

メーターは6Gまで上がって、それから減速し始めた。これでも最初の訓練なので手加減したレベルだが、普通の人なら失神している強度だ。

「ああ、終わった、終わった……。」

ウルスラは、何気なく、いつもの調子で鼻歌を歌いながら、席を立ってマシンから出てきた。

しかし、見ていた人たち、特にメデイカル・チエックをしていた人たちが驚いて、ウルスラの方を見ている。

「どうしたんですか、みなさん。私になにか？」

ウルスラは、周りのスタッフに声をかけた。

「ウルスラさん、本当に大丈夫なんですかあ？　気分が悪くなっていますか？」

同じ訓練グループの学生たちがウルスラに近寄ってきた。彼らは、いつもウルスラに勉強を教えている学生たちだ。

「別に……。キツイことはキツイけど……」

G ショックは、実家の宇宙船では、私の遊び道具だったし……」

「え!?!……」

マシン訓練の2番目は、「ガチャポン」と呼ばれるマシンである。

パイロットは、丸い透明な球体型の装置の中で、中心部に設置された椅子に座る。この装置は球体がランダムに3軸回転するので、パイロットは、無重力状態のなかでキリモミ状態になって回転する体験ができる。

学生は、その装置で、まず、無重力空間である宇宙空間の中で、方向感覚や上下感覚を失う状態を体験する。

もちろん、本格的な専門訓練であるBクラス・レベルでは、この状態から操縦桿一本で機体を立て直す訓練を行い、更にAクラス・レベルでは、実戦を想定してこの状態において敵機からのビーム砲の攻撃に対処する訓練を行う。

もちろん、それぞれのクラスでマシンの回転数が違い、上級になるほど厳しい環境での対応が求められる。

「では、行きますよ。」

でも、ウルスラさん、大丈夫ですか。高速回転ですよ。

教官の指示でいきなりAクラス・レベルから始めるのですが・・・。」

マシンの係官が心配してくれた。マシンの訓練では、いつもウルスラだけは、他の新入生とは別の高度な課題を与えられていたからだ。

「なんでも良いよ。退屈していたし・・・。」

「え・・・!?!」

装置が回転し始めた。装置の外で見ている人たちからは、ウルスラがくるくるとランダムに回転している様子が見えた。

「では、ウルスラさん。Aクラスの仮想空間に入ります。」

「オーケー、いつでもいいよ。」

体を不規則に激しく回転させられながらも、ウルスラの声はいつも通りだった。

ウルスラが被ったヘルメットの中からは、宇宙空間の星々が見える。もちろん仮想空間の映像だ。

そして、それらの星々はウルスラの体の回転に合わせて、ぐるぐると動いている。全くアトランダムに動いているように見える。この星々の動きを目で追うと、それだけで気分が悪くなってしまうほど、星々は激しい運動をしているように見える。

しかし、ウルスラは、平然としていた。いや、むしろ喜んでいた。

「ふーん。ずいぶんクルクルと動いているね。」

面白い動きだなあ〜。ウフフフフ。これは、楽しいね。

.....

それで、Aクラスのモードでは、敵機はどうやって接近してくるのかな.....

ウフフフ.....」

ウルスラは、ヘルメットの中から見える仮想空間の中で、近づいてくる複数の敵機の動きに神経を集中した。

「くるくる回る星々と違う運動をするヤツが敵機のはず。」

.....



見つけたら〜！ あれだ——！

1、2、3・・・全部で3機かあ。

よろし。もう少しで、射程距離に入るぞ。

・・・」

そう言つて、ウルスラは身構えた。

ウルスラは、敵機の攻撃を回避するどころか、撃墜するつもりだった。

ウルスラは、3機の敵機の接近とのタイミングを見切つて、姿勢制御エンジンを少し吹かし、自分の機体の回転を、連続した攻撃に都合の良い角度に調整した。

そして、回転しながら、3機の敵機を同時に狙つて、一気にビーム砲を連射した。

ピンポン、ピンポン、ピンポン。

全弾の命中を知らせ効果音が鳴り続ける。

「すごい〜！

あの高速回転する姿勢のまま、三機の敵機を確実に、かつ同時に撃墜するとは…。

やっぱり、彼女が新型戦艦の3号機のパイロットだったという噂は、本当だなあ。」

観戦していた教官たちから、ため息がもれた。

「ウルスラさん、すごいですね。」

あんなにすごい回転運動なのに、きちんと敵機の接近の様子が見えているなんて！」

マシンから出てきたウルスラに、学生たちが声をかけた。

「そんなに褒めてもらうと、恥ずかしいよ。」

だって、それは、うちの実家がオンボロ宇宙船だってことだから、そんなの自慢にならないよ。」

「ええ？ どういうことですか？」

「要するに、貧乏だったから子供の頃におもちゃを買ってもらえなかったってことさ。」

それで、赤ん坊のころから、両親は、無重力状態を利用して、私を空中に飛行させて遊んでくれたんだ。

最初は、父が投げて、母が受け取るというようなやり方だったそうだよ。

赤ん坊の私は、無重力状態の空中飛行を、ヨダレを細長があくく空中に垂らすほど、喜んでいたらそうだよ。」

「へえ。ウルスラさんは宇宙船育ちだったんですか。」

「ああ、そうだよ。」

空中飛行に慣れると、さらに私をクルクル、回転させて飛行させたんだって。」

「それで、無重力状態の回転に慣れているんですね。」

「そうかもしれないね。」

私には当たり前すぎて、自分では気が付かなかったんだけどね。

それで、少し大きくなって、私が回転飛行に慣れて、周りの様子がちゃんと見えるようになったと分かると、両親は、私に向かつて変な顔をして、回転飛行をしている私を笑わせようとしてくれたり……。」

「ご両親に可愛がられていらんですね。」

「へへへ……。」

さらに、小学生くらいになると、両親は、『オニゴッコ』をして、遊んでくれたんだよ。」

「オニゴッコ？」

「オニゴッコはねえ、私の回転飛行中に両親が飛んで逃げるんだ。」

逃げた両親を追いかけるために、私が壁まで飛んだら、その壁に足を突いて反転して飛び、逃げた両親を追いかけるといふものさ。」

「それって、慣れないと、とても難しいんじゃないですかあ」

「そうだね。」

私も、最初は失敗ばかりだったからね。

追いかけて飛ぶには、回転しながら、両親がどの方向に逃げたか見極めていないと、ダメなんだからね。

しかも、壁に足から着地して、すぐに壁を蹴って追いかけられるように、回転の角度やタイミングも調整しないといけないからね。

だから、私はこんな訓練なんか平気。

回転飛行は、ほくんと、楽しいよ。」

学生たちにとっては恐怖の無重力空間も、ウルスラにとっては、両親の愛情に包まれた、懐かしく、楽しい思い出に満ちた空間だった。

「はあく。」

でも、宇宙船育ちでない私たちには、そんなこと言われても、どうしたらいいのか……。何か、『回転飛行』に慣れるヒントでも、教えてくださいよ。」

いつもウルスラに勉強を教えている秀才たちが、ウルスラに聞いた。

「そうだねえ……。」

あ、そうだ。ハママ先生は、『天動説を信じろ』と言っていたなあ。

意味わかる？」

「つまり、動いているのは、自分ではなくて、回りの宇宙空間だと思えということでしょうか。」

「そうだね。正解。」

「そうはいつでも……。」

「そんなに難しく考えないで、バーンといけばいいんだよ。バーンと。」

「バーンと、ですかあ……はあく。」

「だって、世の中は、何でも自分中心に動いているって考えるのは、秀才の皆さんならお得意でしょう……へへへ。」

「ウルスラさん、それ皮肉ですかあ……。」

「アハハハ……。」

まあ、このジョークは、ハヤマ先生の受け売りだけどね。

先生は、昔、士官学校でそういうジョークを飛ばして、パイロット科の学生を教えていたらしいよ。」

「タハハハ……。」

さすがの秀才たちも、これには苦笑いせざるを得なかった。

## 5 海賊の看護婦

リリーは、海明星の白鳳女学院大学から帝都のグランドウツド医科大学看護学科に転学するために、茉莉香やウルスラとは少し遅れて、六月に帝都にやってきた。

もちろん、彼女は弁天丸の看護婦を目指している。

それで、上京するとまず弁天丸を訪れ、真つ先にミーサに挨拶に訪れた。

「ミーサ先生、いよいよ看護師を目指して、帝都で勉強することになりました。

今後とも、よろしくお願いします。」

「とうとう来たのね。あなた、ただのお嬢様じゃなかったのね。偉いわね。」

看護師は一生かけて勤める、大切なお仕事よ。ガンバリなさい。」

医務室で、白衣を着たミーサが言った

「はい。ありがとうございます。」

「それで、本当に、弁天丸に乗る気なの？」

ミーサが、すこし厳しい表情で言った。

「はい。そのつもりです。茉莉香には、私がついていてあげないと・・・。」

「フフフ・・・。」

最初に言っておくけど、今まで通りの、茉莉香の友達でいたいのなら、船に乗らない方が良いわよ。

船のスタッフともなると、船長の部下、今まで通りの関係ではないわよ。」

「その辺は、ヨット部でも茉莉香船長だったので、わかっているつもりです。」

「そう。そういう覚悟があるなら、良いわよ。」

それで、授業が始まるのは、九月から、かしら。」

「そうです。」

「それまでの間、二か月もあるけど、どうするの？」

そう聞きながら、ミーサの目がきらりと光つたのを、リリーは見逃した。

「はあ。特に決まった予定はありませんが……。」

「そう。それならば、ちょうどいい時に来たわね。」

実は、今日から知り合いの御子さんと、新米医者 of 二人が、弁天丸に船医としての修行に來ているのよ。

あなたも、今日から弁天丸に泊まり込んで、海賊の看護婦としての修業をなさい。

二か月間では基礎的なことしか教えられないけど、私が、みっちり、仕込んであげるわ。」

「え!?……私、まだ、医療的な知識・技能はこれから、勉強するんですが……。」

「そうね。看護学は大学できっちり勉強しなさいね。」

でも、海賊の看護婦は、医療看護だけじゃないわよ、度胸もいるわよ。」

「度胸ですかあ……。」

「そう、度胸よ。」

宇宙海賊船弁天丸に乗るつもりでしょ、あなた。」

ミーサは、そう言って、本気の氣迫で、リリーをみつめた。

## 6 「度胸」の修業

リリイは、その日から、ミーサ先生による、海賊の看護婦としての「度胸」をつける修業をすることになった。弁天丸に乗る以上、それが必要と言われれば、リリイも従うほかなかったからだ。

ただし、「度胸」の中身をよく聞いておかなかったのは、ウカツだったが。

「それで、先生、なにかから始めるのでしょいか？」

「そうねえ。まず、医者之二人を紹介するわ。それから、三人にあたらしい弁天丸の医療施設を見てもらいましようか。」

そう言って、ミーサは、医務室の奥にいた二人に、こちらに来るように声をかけた。

「スージー、トム。こつちへいらつしやい。新入りを紹介するわ。」

「はい。」

「はい、ミーサ先生。」

「こちら、ミス・リリイ・ベル。」

この九月からグラランドウッド医科大学の看護学科に入学予定よ。

もちろん弁天丸の看護婦希望。だから、これからあなた達と一緒に、研修を受けても  
らいます。よろしくね。

それから、リリイは、船長とは、高校の同級生よ。」

ミーサが、リリイを紹介した。



「初めまして。スージー・グランドウッドです。スージーと呼んでください。」

「初めまして。トム・グランドウッドです。トムと呼んでください。」

「こちらこそ、初めまして。リリー・ベルです。リリーとお呼びください。」

あの……、つかぬことをお伺いしますが、ファミリーネームが同じということは、お二人のご関係は……。」

「アハハ……。大学で初めて会ったくらいのも、遠い親戚ですね。」

スージーが、簡単に答えた。それは、自分たちのプライバシーには関心を持たないようだという意思を表明したようにも受け取れる答えだった。

「さあ、それでは、弁天丸の医療施設を見てもらいましょうか。」

結構、最新の施設もあるのだけど、何よりもここは、普通の病院ではなく、宇宙海賊船だからね。その違いをしつかりと知って頂戴ね。」

ミーサは、なにか、意味深な表現を使ったが、その意味はまだ三人にはわからなかった。

「まず、手術室からかな。新しい弁天丸には、ちゃんと最新型の手術室もあるのよ。」

「すごいですね、先生。」

「まあね。では、手術室は無菌のクリーンルームだから、そこに入るため、全員、医療用のシャワールームできれいに体を洗い、滅菌措置をうけて、手術着に着替えてね。さあ、

いくわよ。」

四人はそれぞれ、服を脱いで、個室タイプのボックスになった全自動シャワールームで、全身を洗われ、医療用の手術着に着替えた。

「私、こういう手術着を着るのは、初めてなんですよ。なんか、すごく立派な看護師になった気分ですね。」

リリイが言った。

「そう・・・よかったわね。」

まあ、なんでも、ハジメテは初めてよ。

・・・ん？

あなた、脱いだアンダースコートをまた着たの？

「はい。下に着るものが何も無かったので・・・。」

「ウフフフ・・・。」

女性医師のスージーが、少し微笑んだ。

「ダメじゃないの。せつかく除菌したのに。」

その手で、除菌していないアンダースコートを触ったでしょう。

問題は、それよ。

手術室では、自動ドアを足で開ける仕掛けにするくらい、手を清潔に保もつように気

を使っているよ。

仕方ないわねえ、消毒液で手を洗いなさい。」

ミーサが注意した。

「はい。分かりました。気を付けます。」

リリーは、素直に答えた。

「それでは、その件について、リリーにペナルティよ。」

「ええ！ ペナルティ？」

「そうよ。」

まず、あなたから、患者の代わりになつてもらうわよ。練習台つてわけね。」

「はあ……」

リリーは、修行ではそう言うこともあるのか思いと、肯いたが……。

「さあ、手術着もアンダースコートも全部脱いで、この台の上にあおむけに寝なさい。」

ミーサは、四人が今いる手術室横の準備室にあるベッドのような診察台を指差した。

「ええ!? ここで、ですかあ。」

男性もいらつしやる前で……、ですかあ。」

「そうよ。手術着に着替えたら、もう男も女もないのよ。これは、病院も、海賊船も、医務室では同じよ。」

あなた、看護師志望でしょ。よく、覚えておきなさい。」  
「はあ……。」

ミーサの気迫に押されて、リリイは言われたとおりに診察台に横たわった。  
「さて、トム。今度は、あなたの番よ。」

そのサージカル・クリツパーで、リリイに剃毛（ていもう）処置をしなさい。  
傷つけないように、丁寧に、全部ね。」

「ええー！ 私がやるんですかあ！」

それに、医学的には、剃毛は必要不可欠な処置ではないのでしょうか。」

医師とはいえ、まだ若いトムは、リリイの体を直視できないほど緊張していたので、  
ミーサにいきなり言われて、激しく動揺した。

「あなた。」

毛むくじやは、手術の邪魔でしょう。私はイヤよ。

だから剃るのよ。あなたも今に分かるわよ。

それに、病院では剃毛は看護師の仕事かもしれないけど、海賊船に乗りたいたなら、たった一人で何でも出来るようにならないとダメよ。」

こういう時のミーサは厳しかった。

トムは、クリツパーと呼ばれる、大きめのヒゲ剃り器のような道具で作業を始めた。

「よし。一応、合格ね。」

リリー。トム。お疲れ様。」

「ハア〜。どうも。」

トムは、緊張のあまり、青い顔をして、ぐったりしていた。

「さあ、気持ち切り替えて・・・リフレッシュ。」

手術着を着たりリリーは、持ち前の明るい性格で、背伸びをして気持ちを立て直そうとした。

「その心意気よ。さすが、オンナは強いわねえ、リリー。」

それじゃあ、今度は交代ね。」

トム。手術着を脱いで、そこにあおむけに寝なさい。」

「ええー！」

そう聞いて、今度はリリーの顔色が変わった。彼女も、やっぱりお嬢様だった。

「ええ〜。今度はボクが、患者の役ですかあ〜。」

トムが言った

「そうよ。だって、男は、あなた一人しかいないんですもの。」

「ハア〜。」

トムは、今度は、とても赤い顔になった。

「さあ、リリイ。今度はあなたがトムに剃毛処置をなさい。

ただし、今度は、サージカル・クリップパーじゃなくて、これでやるのよ。」

ミーサは、大きなジャックナイフを取り出した。よく見ると、そのナイフの刃はきれいに研(と)がれており、とても良く切れそうだった。

「ええ〜！ 先生、本気ですかあ!?!」

リリイは、驚いて声を上げた。

「刃物のことを『カミソリ』っていうことを知っているわよね。

それは、昔は、刃物で毛を剃っていたからよ。」

「でも、そんなジャックナイフなんて・・・。」

「海賊なんだから、有り合わせの刃物で手術をやるしかないこともあるのよ。

だって、患者の命の方が、大切でしょう。

これも、度胸をつける修業よ。」

「はあ・・・。」

「まあ、今日は時間が無いから、刃物を研いで消毒するところからは、やらないけどね。

でも、ちゃんと、隅々まで、手とナイフで剃るのよ。剃り残しはダメよ。」

「ええ！ 隅々までつて、まさか〜。」

リリイは、シヨックで、さらに青い顔になった。

「当たり前でしょ。何、言ってるの。」

「ここでは、男も女もないって、さっき言ったでしょ。」

「はああ……。」

「それから、リリー。今なら感染症の心配はないから、失敗してもかまわないわ。安心しなさい。」

チャンと出来るまで、何度でもやり直せばいいんだからね。」

ミーサは、きつぱりと断言した。

「ええ！ 失敗って、なんのことですか？」

今度は、医師のトムが青い顔をして聞いたが、ミーサは答えなかった。

「はあ……。」

とにかく返事をしたものの、リリーは、まだショックから立ち直っていなかった。

「うふふふ……。」

そう言う三人のやり取りを、女性医師のスージーは微笑んで見守っていた。

…… 更に『修業』は続く。

その日の夕方、弁天丸の食堂で、茉莉香は、リリーと顔を合わせた。

リリーは、疲れた様子でうつむき勝ちだった。

茉莉香は、そんなリリイに、いつもの調子で声をかけた。

「やあ、リリイ。ミーサの研修を受けているのでしょ？」

調子はどうか？」

「ああ……、茉莉香……船長。」

私、人間が変わったよ。

もう、『恥』とか、『恥じらい』とかは、私の辞書には無いわよ。」

リリイは、手を伸ばして上半身をテーブルに倒して、弱弱しく、答えた。

「ええ!? どういうこと？」

「……今は、とても言えないわ。そのうちね。」

リリイが答えた。

しかし、彼女はまだ知らなかった。

今日の修業は、海賊船の看護婦が備えるべき『度胸』としては、まだほんの入り口にすぎないことを……。

「そうだあ。茉莉香……船長。」

ミーサ先生の研修が終わったら、二人で、大告白大会をやろうよ。

私も、この研修のことを茉莉香に話してあげるからあ……。

それでえ、茉莉香も私に聞いてもらいたいことが、たくさんあるでしょ。



私が聞いてあげるからさあ……。

ねえ、ねえ……船長。」

リリーは、そう言うと、少し元気を取り戻した。

「ええ!? ダイコクハク大会!」

ナハハ……それ、何のこと?」

リリーは、弁天丸進水式の夜の茉莉香の行動を、まだ誤解していた。

さらに、茉莉香は、誤解を受けているという自覚が無く、とつさに苦笑いをしてしまったが、それを見たリリーがさらに確信を深め、こう思ったことは言うまでもない。

『茉莉香は、まだシラを切るつもりね。

もうバレてるのよ。観念しなさい。』

## 第三十六章 名も無い星

1 銀河系、核恒星系180—9—21星系

弁天丸は、核恒星系180—9—21星系の外延部にタッチダウンした。

「予定地点にタッチダウン完了。計器に異常なし。」

・・・うらむ。

それにしても、ずいぶんと辺鄙（へんぴ）なところに来たわね。」

ルカが言った。

それもそのはず、ここは核恒星系と言っても、帝都のあるレッドクリスタル星系とは、銀河の中心核を挟んで正反対の位置にあり、周辺一万光年の範囲には諸人類の居住する惑星が無いという辺境地域だった。そのため、いまだに母星に固有の名称が無く、番号で呼ばれている程の、文字通り「名も無い」辺境の星系だった。

こんなところに弁天丸がやってきた目的は、以前にクリスティア王女から頼まれた調査を行うためである。

クリスティア王女は、自分が銀河帝国の王に即位したときに行うライフワークとして、銀河帝国の帝都を移転するという大プロジェクトを考えている。

それは、銀河帝国の帝都である惑星クリスタルスターの母星、レッドクリスタルが赤色巨星であり、天文学的には比較的寿命が短いとされているからだ。このため、銀河帝国はいずれ帝都を移転せざるを得ないと言う宿命を背負っていた。しかし、移転の候補地について議論百出状態で、移転先は長い間全く決まっていなかった。

彼女は、自分が即位したら、この問題に決着をつけようと意気込んでいた。

このため、以前、演習の際に偶然にチアキが立ち寄ったこの星系の可住惑星が帝都移転の候補地として適切かどうか検討するデータを集める仕事を弁天丸に頼んだ。

(エピソード「銀河聖王家の伝説」参照。)

彼女が注目した理由は、ただ一つ、この星系には帝都のあるレッドクリスタル星系のような美しく壮大な星空、すなわち「銀河のネットワーク」があるからだ。

「百日。時空ナビで、この星系の母星や惑星に関するデータを収集してね。」

それが済んだら、ハビタブルゾーンの惑星まで、ジャンプするわよ。」  
茉莉香が、てきぱきと指示をした。

それを横から、チアキとグリューエルが見守っている。

「ねえ、私が言った通り、ここいらの星座は、なかなか綺麗でしょ。そして、銀河のネットワークも、ちゃんと輝いているわよ。」

チアキが星空を指差して、言った。

「そうですわね。色鮮やかな星々が輝いていますわ。

ロマンティックですわね。」

グリユーエルも星空の美しさを誉めた。

最初、今回の弁天丸の航海には、クリステイア王女自身が同行する予定であった。しかし、婚約発表目前で多忙という理由で同行しなかった。代わりに、クリステイア王女の勧めもあって、チアキとグリユーエルが同行することになった。

それだけでなく、看護師になるために帝都にやって来たリリイまで、弁天丸に乗り込んでいる。しかし、リリイはミーサ達のいる医務室に入ったままでブリッジには顔をださない。

「え〜つと。」

船長。この恒星系に関する精密測量データが取れました。

まず、事前の予測どおり、この星系の惑星公転面は、銀河の回転面と並行で、ほぼ一致しています。

また、惑星公転面は、核恒星系の紡錘状星雲の回転軸ともほぼ同一平面上にあります。だから、綺麗な銀河のネットワークが見えるのは当然だよな。」

百目が言った。

「なるほど。第一条件は、クリアしているわけね。」

茉莉香がうなずいた。

「それで、星系の天体は、母星はスペクトルG型で、質量はやや小ぶりのタイプ。

母星をめぐる天体は、惑星と呼べるような大きなものが、全部で九個。内側の四個が岩石惑星で、外側の五個が大きいガス惑星。

ハビタブルゾーンには、内側から三個目、四個目の惑星があります。

表面温度から見て、両方とも水が液体で存在できる星ですが、第三惑星の方が温かくて人間が住むには適しているでしょうね。

とにかく、人類が居住するのに適した恒星系のモデルを示せといわれれば、ほとんどの人々が、この星系のようなものをイメージしますよね。」

「うーん。そうだねえ。」

あとは、可住惑星に人類が居住できるだけの環境が整っているかってことよね。

その第三惑星が、海明星みたいな星だと良いねえ。

さあ、行ってみよう。弁天丸、ジャンプ準備よ。

目標は、まず、第三惑星。ルカ、航路セット、お願い。」

2 第三惑星（核恒星系180—9—21星系）

「第三惑星近傍の通常空間に復帰しました。」

操舵手が告げた。

「第三惑星の光学映像がでるわよ。」

クーリエが言った。

「おお〜！」

光学映像を見たブリッジのクルーたちが声を上げた。

モニターには、広い海と点在する大陸を備えた、典型的な可住惑星の姿が映っていた。

「減速して、この星の衛星軌道に入ります。」

操舵手が告げた。

「ええ〜と。海は地表面の約80%もあるね。表面温度は、平均20度。

．．．．

大気は、窒素72%、酸素20%、水蒸気3%．．．特に有害な成分は無く、可住惑星としては問題ない。

．．．．

自転速度は、銀河標準時間で26時間かな。この星の一日は、帝都より、少し長いなあ。

．．．．

自転軸の傾きは、ほとんどないようだ。

でも、母星を回る軌道は海明星よりも楕円に歪んで、離心率が大きいから、これに伴

う気候の変動はあるだろう。」

衛星軌道から観測を続けた百目が、次々と、報告した。

「それじゃあ、地表では、四季の変化も楽しめるのかしら。」

「それは調べないとね。緯度、経度によつて気候も違うしねえ。

いずれにせよ、正確な気候の把握には、膨大な観測データが必要よ。」

クーリエが言った。

「そうなのかあ。けつこう大変だなあ。」

茉莉香が言った。

「でも、この星は見込みがありそうね。」

大陸も結構大きくて、緑が豊かな感じだね。」

チアキが言った。

「そうね。調べてみる価値はありそうね。」

茉莉香が言った。

ビー、ビー、ビー。

その時、弁天丸の警報が鳴った。

「ええ！ 船長。これは、救難信号よ。この星の地上からだわ。」

クーリエが言った。

「ええ？ この星に遭難者がいるの？ 発信者を識別できるかしら。」

茉莉香が言った。

「今、やってる。」

あく、敵味方識別ソフトは味方だと判定しているけど、通信ソフトでは救難信号の発信者は、『UNKNOWN』と表示されたままだねえ。

これ、どういうことかなあ。

コンピュータは、未確認の発信者をなぜ味方だと判定できるのかなあ。」

クーリエが言った。

「クーリエさん。発信者を識別するコード・データベースを通常モードから、廃船などを含む過去履歴モードの併用に切り替えてください。」

いま弁天丸には帝国軍の敵味方識別ソフトが入っていますが、これは過去履歴モードのデータも併用していますから。」

帝国軍のスタッフが言った。

「あく、なるほど、了解。」

『カコ・リレキ』・・・と

・・・

あ、一発で答えが出たわ。



なになにく、客船サンタ・マリア号だつてえ。

救難信号の発信元は、約500年前に廃棄された船のコードと、一致したわよ。」  
クーリエが言った。

「なに、それ！ 既に廃棄されたはずの船が、ここで生きているって、いうの？」

「フフフ・・・茉莉香ちゃん。これは、きつと、また幽霊船よ。」

あなたの大好きなヤツ。」

「からかわないでよ、クーリエ。私、そんなの好きじゃないわよ。」

そんなことより、救難信号の発進地点は、わかつてるの。」

「もちろん。」

それでは、幽霊船を探しに行きますか、船長。フフフ・・・。」

「オホン。」

そもそも、遭難者の救助は、船乗りの義務です。

みんな、ただちにシャトルの発進準備。

それから、ミーサにも連絡して。遭難者を救助するために、地上に降りるからつて。

・・・

オホン。それで、みなさん。」

そう言つて、茉莉香は、再び、わざとらしい咳ばらいをした。

「誤解のないように申し上げますが、

私は、幽霊船が苦手なだけではなく、ホラー映画が苦手なだけです。

そここのところを、お間違いなく。」

「ウフフフ……。」

わざわざ、そんな言い訳をするなんて、茉莉香さんって、本当に可愛いですね。」

ブリッジで話を聞いていたグリューエルが、微笑みながら言った。

「幽霊船も、ホラー映画も、たいした違いはないわよ、ねえ。」

おまけに、自分の苦手なものを堂々と告白してしまったことに、気が付かないなんてね。

茉莉香らしいよね。」

チアキも、微笑みながら言った。

### 3 海賊の看護師の修業 その2

看護師志望のリレイと、医師のスージー・グランドウッドと、トム・グランドウッドの計三人は、今日もミーサによる、海賊船の医療において必要とされる「度胸」の修業を受けている。

「それでは、今日は、まず、戦場でのけが人の治療について、話すわよ。」

海賊船も戦闘をすることがあるから、考え方は軍の戦場の医療と同じよ。

それでは、戦場で人の治療について、最も大切なことは何でしょうか？  
リリイ。答えてみなさい。」

「はい。けがの治療に最善を尽くすことです。

看護師はそれを全力でサポートします。」

リリイが元氣よく答えた。

「残念だけど、それは間違いね。

スージー、答えてみなさい。」

「はい。医師としては、まず、助かる見込みのある患者と、そうでない患者を素早く見抜き、次に、見込みのある患者に治療を集中することです。」

スージー・グランドウッドが、答えた。

「正解。さすがね。」

「えー!？」

先生。助かる見込みのないと判断した患者さんは、見殺しにするんですか？

最後まで、誰に対しても、あきらめないで治療するんじゃないんですか？

普通、そうやってますよね。うちの御爺さんが病院で亡くなった時は、心臓が止まってからでも、電気ショックとか、お医者さんはいろいろやってくれましたよ。

父が、もうかわいそうだから止めてくれと言うまで……。」  
リリイが、驚いて言った。

「病院では、そうするでしょうね。あなたの言うとおりだね……。」

でも、私は戦場での医療について質問しているのよ。

戦場では、けが人は次々と運び込まれてくるわよ、医師や看護師の手が足りなくなるくらいにね。

それに、薬や医療資材のストックにも限りがあるわ。

手当たり次第にやっていると、助かる人も助からなくなるでしょう。」

ミーサが厳しい声で言った。

「合理的に考えるとそうかもしれませんが……。」

でも、死んでいく人を目の前にして何もしないなんて、悲しすぎます。」

リリイが、少し悲しそうに言った。

「リリイ。決して、何もしない訳じゃないのよ。」

医師としては何もできなくても、人として、その人にしてあげられることはあるわよ。」

ミーサが言った。

「え!? なんですかあ。」

リリイが聞いた。

「その人の話を聞いてあげることよ。」

死ぬ前の、意識のあるうちに、話せるうちに、家族や恋人に言い残しておきたいメツセージを聞いてあげるのよ。」

「なるほど。」

「ビデオ映像が取れば一番良いけど、戦場じゃそれもかなわない時もあるわ。」

そういう時は、とにかく覚えておいて、あとでメモにするしかないけどね。」

「そうですね。それなら、私にもできそうです・・・。」

「そうよ。話を聞いてあげると、すーっと、安らかな気分で逝ってしまうものよ。」

新米看護師は、戦場では、そういう役を受け持つことになるかもしれないから、覚えておいてね。」

「はい。」

「それから、戦士の一族の中には、死ぬ前に短い詩を詠む『シキタリ』のある人たちがいるわ。」

それをしっかりと聞いて、記録してあげるのも、大事な仕事よ。」

「ええ!!? 詩を詠むって、死ぬ前になって、そんなノンキなことをする人たちがいるんですか?」

「そうよ。でも、その人たちにとっては、死に臨んで行う、とても大切な儀式よ。その詩を、『ジセイノク（辞世の句）』というそうよ。」

そういうシキタリを知らないなら、やっぱり、見てもらった方が分かり易いかしら。それじゃあ、研修と言うことで、弁天丸のお宝映像を、特別に見せてあげるわ。」

ミーサは、医務室のキーボードを操作して、モニターに映像を再生させるためのキーを押した。

「この人は、宇宙海賊船フリーフラッグ号のフリーマン船長、

かって、銀河系にその名をとどろかせた、大物海賊よ。」

ミーサが映像にこれから写る人物について説明した。

やがて、映像が映り、音声が流れてきた。

一人の男性が治療台に横たわっているが、船長服は血まみれで、左手も無く、下半身はもつと傷ついているのは明らかだった。

「いいわよ。始めてちょうだい。」

ミーサの声が聞こえるが、姿は映っていない。

「ああ、ミーサ。こんな時に俺のために時間を取ってくれて、礼を言うよ。」

横たわったままで。フリーマン船長が礼を言った。

「何を言ってるのよ。貴方らしくないわね。」

「ハハハ、

．．．それであと、どのくらいだ？」

少しの沈黙の後に、フリーマン船長がミーサに尋ねた。

「長くても、三分くらいかしら。」

「それだけあれば、OKだ。」

俺の辞世の句を聞いてくれ。」

「分かったわ。どうぞ。」

少しの間、沈黙が支配した。

「それでは、言うからな。ゴホン、ゴホン．．．。」

『ああ愉快 思いは晴れて 身は捨てて 浮世の月に かかる雲なし』

「どうだ、ミーサ？」

「ウフフフ．．．。」

この場に臨んで、いきなり『ああ愉快』だなんて、あなたらしいわね。」

ミーサの声は、すこし涙声になってきた。

「ありがとうよ。」

辞世の句については、大人になった時に、オヤジからこう言われたんだよ。

『戦士たるもの、いつ死んでもいいように、常に準備しておけ』とね。

だから、辞世の句はいろんなヤツを考えていたんだが、いざとなったら、こんな句が思い浮かんできたんだ。

俺には、これしかないってね……。」

「そうね。……。」

本当に、銀河系を縦横無尽に飛び回って大暴れした、あなたの人生を良くあらわした詩よね。

これ以上素晴らしい辞世の句はないと思うわ。」

「ありがとう。……。」

まあ、俺も『泥棒』を8年もやったが、もう充分だと思っっているよ。

ミーサにも世話になったなあ。」

「『泥棒』って、なにそれ？」

「あはは……。」

俺たちの戦士一族では、50歳を超えたヤツを『泥棒』っていうんだ。

人間50年が神様から与えられた命であって、それを超えて生きているヤツは、神様から歳を盗んで生きているって、なあ。

つまり、『泥棒』だよ。」

「あはは……。面白いことを言うのね。」



「まあ。実際、戦士の世界では、50歳が天命と言うのは実感として分かるね。

「おれも、死んでいった仲間が使い残した命をもらって生きてきたようなものさ。」

「あなたは、そういう『生き残った者の痛み』のわかる優しい人ですものね。」

また、ミーサは、涙声になっている。

「ありがとう。ミーサ。」

・・・

うん？・・・さつきから、もう3分以上たっているじゃないか！

この、やぶ医者めえ！ 誤診だぞ、これも。」

フリーマン船長は、そう言って笑顔を浮かべた。

「あら、まだ、そんなこと言う元気があるのねえ・・・」

それに、そのことば。懐かしいわねえ。

あなたには、『やぶ医者』って、何回、言われたかしら、ねえ。」

「ハハハ。」

・・・

そーいやあ、お前さんと初めて会ったのは、・・・」

「あつ。」

映像がそこまで再生された時、ミーサは、あわててスイッチを切ってしまった。いつものミーサらしくなく、つつい映像に見入ってしまったようだ。

「ウ〜、オホン。」

ミーサは、その場を取りつくろった咳払いをして、言った。

「まあ・・・こういう訳よ。」

この人も、辞世の句を聞いてもらって、自分の人生に満足して死んでいったわよ。「はあ〜。すごい映像ですね。」

三人の生徒は、映像の迫力に押しつぶされ、ぐったりしていた。

「なによ〜。まだまだ、疲れるには早いわよ。」

今日は、これからが、修業の本番。

次は、死体の見分け方の勉強よ。」

気持ちを切り替えたミーサが、キリリとした表情で言った。

「ええ〜!!」

死体の何を見分けるんですか!?! 死体は死体でしょ!?!」

リリイが驚いて言った。

「それなら、僕にもわかるなあ。」

死体の中には、伝染病で死んだものなど、乗組員にも害を及ぼす恐れがある『危険な

死体』があるのでしょうか。

そいつを見分けることじゃないかなあ。」

トムが言った。

「正解ね。」

ミーサが言った。

「先生、まさか、これから、本物の死体が出てくるのでしょうか？」

それとも、私が、死体の身代わりになるのでしょうか？」

リリイが、少し怖そうに聞いた。

「アハハ。安心しなさい。本物も身代わりも無いわよ。」

教材として使うのは、帝国軍付属医科大学の教材、つまり3Dの精密立体映像よ。

それと、百年の歴史を誇る弁天丸医務室のお宝映像も、特別に見せてあげるわ。」

「はあ。」

弁天丸の大事なお宝ですから、無理に見せて頂かなくとも……。」

珍しく、スージーが弱気なことを言った。彼女にも苦手があるらしい。

「スージー。」

何、ミズクサイことを言っているのよ、遠慮しなくていいわよ♪。

私はあなたに期待しているのよ。

弁天丸のものだけじゃなく、私の個人的な秘蔵コレクションも特別に見せてあげるわ。

死体の様子を診察して毒物の種類を見分ける方法を学ぶには、帝国軍にもこれ以上の教材は無いわよ。

私の自信作よ〜♪」

「はあ〜。」

三人のため息が聞こえた。

「では、まず、おもな生物兵器と化学兵器で死んだ死体の見分け方からね。

こいつが、一番、基本の『危険な死体』なのよ〜♪。

資料映像を見て頂戴……。」

いつもの調子を取り戻したミーサの講義は続く……。

その日の夕方、リリイは、弁天丸の食堂で顔を合わせた茉莉香に言った。

「茉莉香〜あ。私、また人間が変わったよ〜。」

もう、ホラー映画なんて、怖くないよ。

映画なんて、しょせん、フィクションなんだものね〜。」

そういう気丈なことを言いながら、リリイとほかの二人の医師は、疲れてぐったりしていた。

「がんばってるわねえ、リリイ。

今日も、ミーサに研修でシゴかれたんでしよう。

それで、今日は、何の研修だったの〜?」

「それは、食事の時には話したくないわ。そのうちね……。」

リリイは、言葉を濁した。

「そうですよ。医師や看護婦が守るべきマナーの問題ですよ。これは……。」

トム医師が言った。

「でも、船の安全に関わる事だから、特別に、船長には知っておいてもらっても、良いのじゃないかしら。

ねえ、船長。」

スージー医師が言った。

「ナハハハ……。」

茉莉香は、危険を察知し苦笑いして、三人から離れた。

#### 4 遭難者の捜索

「では、弁天丸ブリッジ、聞こえますか? シャトル、発信します。」

シャトルの副操縦席に座った茉莉香が言った。

もちろん、操縦席にはギルバートが座っている。

他の乗員は、女性ではヒガン共和国軍から来たケイコ・サトー、それに医師のスージー・グランドウッド、リリーの三人だけで、あとは医師のトム・グランドウッドと弁天丸の男性クルーが四人、合計十人だった。

「了解。先発隊のみなさん、よろしくね。」

でも、応援が欲しいと判断したら、いつでも連絡してね。」

弁天丸では、船長代理を務めるミーサが、これに答えた。

「船長、危険を感じたら、応援を呼ぶ前に素早く引き返すことだ。」

それから、ギルバートさん、船長の警護をよろしく頼みます。」

久しぶりに乗船しているシュニツァーが言った。

実は、茉莉香船長は、最初からミーサにも同行してほしかったのだが、ミーサはこう言つて、スージーとトムの二人の医師とリリーに行かせることにした。

「まあ、何事も経験よね。三人で行つていらつしやい。」

それから、この未開の星は湿気が多そうだから、地上に降りると、虫がたくさん出てもしれないわね。防虫対策を忘れずにね。」

「虫……ですか。」

「虫……よねえ。」

グリューエルとチアキは、ミーサの「虫」という言葉を聞いて、顔を見合わせた。

この言葉を聞いて、いつもなら真っ先に行きたがるはずの、チアキとグリューエルが地上へ降りるのに消極的になったのは言うまでもない。

茉莉香を乗せたシャトルは、衛星軌道上の弁天丸から発進して、救難信号の発進地点を目標して降下した。そこは、この星では高緯度地帯、つまり地理上の北極に近い位置にある山岳地帯だった。

そして、シャトルは、目的地の上空、高度一万メートル付近で、地上の様子を探るために旋回飛行に写った。

「ケイコ。どうかなあ、地上の様子は？」

茉莉香が、ケイコ・サトーに聞いた。

ケイコ・サトーは、先ほどから、地上の様子をモニターと計器で観察している。

彼女は、現在はヒガン共和国軍の兵士だが、子供の頃から旧宇宙マフィアの一員として可住惑星の探索に同行していたので、未知の惑星に関する調査経験が豊富だ。だから、この任務には最適な人物として茉莉香が先発隊に加えたのだった。

「はい、船長。救難信号の発進を確認しました。」

発進地は比較的なだらかな岩山が続いている場所です。シャトルが下りられる場所もあるでしょう。ご覧のように、地理上の北極に近い位置にあるといっても、この土地

は雪や氷に覆われてはいません。

発信元の遭難した宇宙船は、まだ、空中からは発見できませんが……。

土砂の下に埋まっているのでしょうか？」

「まあ、ジャングルでなくてよかつたわ。

見たところ、危険なところではないようだし、とにかく、近くに降りてみましょう。

着陸態勢に入ります。全員、安全ベルトを点検。」

茉莉香が指示を出した。

「では、降ります。」

ギルバートがそう言つて、高度を下げた。

「無事、着陸しました。船体に異常ありません。」

操縦席のギルバートが言った。

「外の様子は、気温8度、気圧0・8気圧ですが、湿度が30%と乾燥しているのが予想外です。」

着陸地の地盤は安定しているようです。地表に降りて大丈夫でしょう。

湿度がかなり低い以外、いまのところ、大気成分には問題がありません。

しかし、未知のウイルス感染を防ぐため、防護服の気密を保つて外気に触れないまま  
で、上陸することを進言します。」



ケイコが言った。

「了解。全員、防護服着用よ。」

さあ、エアロツクを経由して、外に出るわよ。」

茉莉香たち先発隊一行は、シャトルの守備要員を残して、第三惑星の地上に降りた。

そして、救難信号の発信元の方向に歩き出した。計器によると、目標は現在地から500メートルほど先だという。

「目的地はこの先なんだから、普通のサイズの宇宙船がそこにあるなら、もう見えるはずよねえ……。」

茉莉香が、進行方向の先を見ながら、言った。

「そうですねえ……でも、この先は岩壁になっていて、何も無いようです。計器の示す電波の発信源は、この先なんですけどねえ……。」

ケイコが言った。

突然、腹の底に響く地鳴りが聞こえた。

次の瞬間、大きな地震が襲った

「うわあ。地震だ、地面が揺れている。」

突然の異変に、茉莉香が驚いて、声を上げた。

「船長、みんな！」

非常用の重力軽減装置のスイッチを入れて、飛び上がって下さい。後ろへ飛んで、ここから離れましょう。」

ギルバートが言った。

「どうしたの？」

茉莉香が、飛びあがりながら聞いた。

「見てください、あの岩壁に土煙（つちけむり）が上がっています。それに、岩のきしむ響きがありません。」

前方の岩壁が崩れる兆候ではないでしょうか。」

ギルバートも飛び上がりながら、前方の岩壁を指差して、茉莉香に答えた。

一行がシャトルの着陸地点に戻ったところに、ついに岩癩が崩れ出し、大きな土煙が舞い上がった。

やがて土煙が静まり、岩壁のあった場所を見て、一行は驚いた。

「ああ！ 岩壁が崩れて、洞窟の入り口が現れました。」

ケイコ・サトーが言った。

「ふん、．．．．． なんか、怪しいのよねえ．．．。」

さっきの地震のタイミングといい、まるで私たちに『この中に入れ』って、誘ってい

るようなのよね。」

茉莉香は、自分のあごに手を当てて、考えながら言った。

「ふくむ。船長のおっしやるように、警戒を怠ってはなりませんよねえ。

ここは、隊員の代わりに、探査ロボットを差し向けることを進言します。

岩盤が崩れた直後ですから、また崩落があるかもしれない。」

ギルバートは、あくまでも、船長である茉莉香の判断を促す言い方をしている。

「なるほど、隊員の安全確保も船長の仕事ですね。

それじゃあ、ケイコ。

シャトルに連絡して、探査ロボットを出すように言つて。

目的は、あの洞窟の探査よ。」

「承知しました。」

ケイコ・サトーが連絡すると、シャトルの側面のハッチが開いて、長さ50センチほどの最新型探査ロボットが一体、出てきた。このロボットは、六足歩行の昆虫型である。

ロボットは、まず、触角のようなセンサーで地面を探索しこの星の地磁気や重力を測定している。重力軽減装置による飛行の準備を整えるためだ。

そして、昆虫型ロボットは羽を伸ばして、飛んで行った。

「なぜ、あのロボットは、『ムシ』の形をしているのかしら……。」

飛んでいった昆虫型ロボットを見ながら、医師のスージー・グランドウッドがつぶやいた。

「そうですよねえ。意味ないですよねえ。」

だから、あれを作ったのは、ゼツタイに、男の子ですよねえ。

男の子はムシの好きなコが多いですからね。

そういうコは、ムシの形の方がカワイイとか、カツコイイとも思っているんですよかねえ。」

リリイが言った。

「私は、カワイイロボットを作るなら、ムシ型より、ハチユウ類型だと思うわ。」

ゼツタイよく♪。

ヘビとか、トカゲとか、ハチユウ類の方が、断然、カワイイもの。

ねえ。あなたも、そう思うでしょう〜。」

スージーは、リリイを見て笑った。

「はあ〜．．．．．そ、そ、そうですね。」

リリイは、スージーの意外な一面を知って驚きながら、作り笑いをして同意した。

「．．．．．」

もちろん、男の子であるトム・グランドウッドは、顔をしかめて沈黙している。

## 5 洞窟の秘密

「どうかしら。何か見つかったの？」

茉莉香がきいた。

茉莉香始め、惑星に上陸した一行は、一旦シャトルに戻って、ロボットによる洞窟の探査の様子をみまもることにした。

一方、ロボットは、随時、洞窟内の映像を送って来る。その映像は、シャトルを経由して、衛星軌道上の弁天丸にも伝えられ、その内容をみんなが見守っている。

「まだ、なにも・・・遭難者の手掛かりは、発見できません。」

ロボットは、岩の中から現れた穴の中を進んでいるところなのですが・・・。  
中は、意外に広く、奥まで続いています。」

「ふーん。この洞窟が遭難者の棲家（すみか）になっていたのかしら。」  
「まだ、そうとは断言できません。」

「でも、なんか、怪しいのよねえ。」

穴の壁面の様子からすると、自然に出来た穴とは思えないわね。

穴の壁が、整い過ぎているもの。」

茉莉香が、モニターの画像を見ながら、ケイコ・サトーに言った。

「あ、正面に巨大な黒い岩の壁があります。その先は行き止まりです。

結局、洞窟には何も無かったのでしょうか。」

「行き止まりかあ……。」

でも、待つて、待つて。その黒い壁をアップで映してよ。

なんか、壁の表面がツルツルしていかないかしら。つまり、人工的に磨かれた壁かもしれないでしょう。」

茉莉香が言った。

「なに、それ……。人工的に磨かれた岩の壁ですつて……？」

そうして、そんなものがここにあるのかしら……。」

弁天丸で映像を見ていたチアキは驚いて、声を上げた。

「……はい。」

ロボットに、岩の表面に近づき映像を送るように指示します。」

ケイコ・サトーは、ロボットの操作を続けた。

「ロボットからの映像が送られてきました。」

「ああ！ これは、壁の表面に文字のようなものが刻まれているんじゃないかしら。」

「そうかもしれませんが、自然の造形物が人工物のように見えることは、未知の惑星探査では昔からよくあることです。」

『宇宙人が存在した痕跡を発見した』、『超古代文明の遺跡を発見した!』などという早合点は、慎むべきです

簡単に断言はできません。

なによりも、この映像は壁の一部分を、一定の角度から見ているだけですから。ケイコ・サトーは冷静だった。

「そうね、一部分だけを見ていても良くわからないわね。

それじゃあ、ケイコ。

ロボットに壁面全体を順番に隙間なく撮影させて。

次に、その映像を一つに合成できるでしょ?

やってみて、お願い。」

茉莉香が指示した。

やがて、巨大な壁面全体の画像を合成した精密な立体映像が出来上がった。

それは、明らかに文字のようなものが書かれた石碑のようだった。

「ああ!」

その映像を見て、衛星軌道上の弁天丸にいたグリユーエルが、声を上げた。

「これは、古代ルーン文字ですわ。」

「グリユーエル、この文字を読めるの？」

チアキが聞いた。

「はい。おおよその意味なら、辞書なしで分かります。」

「やっぱりすごいわね、あなた。」

それで、どんなことが書いてあるの？」

「はい。……」

簡単に言うと、ここには、銀河聖王家の神話と良く似たことが書いてあるようです。

つまり……

『遠い、遠い昔、神々は、一族の若者に命じて、言った。

星の海を渡り、あまねく星々に我らの国を打ち立てよと。

その命により、我らが主は、この星を訪れた。

そして、この星を取り囲む星々の海に、国を建てた。

我らは、主に付き従いこの星々の海を訪れたものなり。

国を建て役目を果たした我らは、主から永遠の安息を賜った。

よって、我らはここに静かに眠るものなり。

何者も、我らの眠りを妨げてはならない。

たとえ死すとも、ここより先に入ってはならない。



我らの永遠の眠りを妨げる者には、大いなる災いが降りかかるであろう。』

「だいたい、こんなことが書いてあります。」

「なくんだ。それじゃあ、これは、墓碑じやないの。」

「ずいぶん勿体つけた文章ねえ。」

「ご丁寧に、墓泥棒への警告まで書いてあるわよ。」

「なるほど。そういうことですかあ。」

「チアキさんは、よくご存知ですね。」

「まあね。海賊もお宝探しはするからね。」

「こんな呪いの文言なんて、虚仮脅し（コケオドシ）だって、オヤジはよく言っていたわ。」

結局、茉莉香は遭難者を発見できなかったため、その日の調査を打ち切ることにして、シャトルを衛星軌道上の弁天丸に帰還させた。

惑星探査という弁天丸の調査目的からみて、洞窟の奥の石碑をさらに調査することま  
で必要か、王宮と相談する必要があると判断したからだ。

なぜなら、シユニツツアーから、洞窟の奥の調査は危険を伴うので、茉莉香やチアキ、  
グリユーエルらがわざわざ自分で行く必要はないという意見が寄せられていたからだ。

茉莉香も「自分だけが洞窟の調査に行く」と言うと、いつものようにグリユーエルが

勝手について来る結果になることを恐れて、慎重にならざるを得なかった。

「私だけで行くと言ったら、グリューエルは一緒に行きたがるだろうなあ。

あそこには虫がないことが分かったからねえ。

でも、グリューエルは銀河聖王家の御姫様になったのだから、以前のようにはいかないわ……。

なにより、わたしも、もう大人の船長なんだから、乗員の安全を第一に考えて、無謀な冒険は慎むような、冷静な判断をすべきだよねえ……。

もともとは、遭難者の救助のために、あそこに行っただけなんだし……。

やっぱり今回の調査では、あれをこれ以上調査するのは、やめるべきよね。」

その日の夜、着替えてベッドに入った茉莉香は、船長としてそう考えていた。

そこへ突然、手元の携帯通信機が着信音を鳴らし始めた。

端末に表示された発進者を見ると、ギルバート・モーガンの名前が表示されている。茉莉香は慌てて電話を取った。

「はい。茉莉香です。」

「モーガンです。お休みのところ、しかも夜遅くにすみません。」

ちよつと茉莉香さんに大事なお話があるのですが、今から船長室にお邪魔してもよろ

しいでしょうか?」

「ええ!! 私部屋にですかあ!？」

「今からですかあ!？」

茉莉香は驚いて、緊張して、顔だけでなく体中がカツとなって火照(ほて)ってしまった。

「ええ……、着替ええますから、今から15分後に来てください。」

それだけ言うと、茉莉香は大慌てで着替え始めた。

着替えの間じゆう、茉莉香の頭にはこんな言葉が浮かんでは消え、しだいに緊張が高まって行った。

『私の部屋に……。』

『彼が……。』

『こんな夜遅くに……。』

『大事な話……。』

『二人だけで会う……。』

そして、着替えが終わり、カガミの前で髪をとかし始めると、茉莉香の緊張はさらに高まった。

やがて、茉莉香はベッドルームから船長室に移動して、彼が来るのを待った。

『どくん、どくん．．．』と心臓が高鳴り、どんどん緊張が高まっていく。  
「コン、コン。」

ギルバートです。入ってよろしいですか？」

ノックの音とともに彼の声が聞こえた。

茉莉香の緊張は、最高潮に達した。

「は、は、はい。茉莉香です。どうぞ。」

「失礼します。」

そう言って、ギルバートが入ってきた。

しかし、彼の後ろから、二人のクルーが続いて入ってくるのを見つけて、茉莉香は思わず声を出しそうになった。

『なあくん。貴方たちも一緒なんだったの。』と．．．。

一緒に入ってきた二人とは、帝国軍人のジョージ・ワトソン少尉とビル・グリーン少尉だった。

茉莉香は、自分が何か大きな勘違いをしていたことに気付いたが、それを三人に気付かれないよう、表情と声のトーンを取り繕った。

「なんででしょう、お話とは．．．。」

「実は、こちらのジョージとビルの二人が深夜の当直勤務中に、不審な通信をキャッチし

ました。」

「ええ!! 不審な通信ですかあ?」

茉莉香は、船長としての普段の自分が、急速に復活してくるのを感じた。

「はい。」

その通信を解析して、音声を再現すると、会話が聞こえたのです。

それで二人が私に相談に来たので、私は船長に報告に来たわけです。」

そう言つて、ギルバートは手元の装置から録音を再生して、次のような会話を茉莉香に聞かせた。

「ああ、サトシ。聞こえてる?」

「OK。聞こえてる。」

「はあく……。」

ねえ、アンタたちは、いったい何をやっているのよ。

私に『コロニーや神殿の存在をキャプテン茉莉香に気付かれないように協力しろ』と言つておきながら、自分からわざわざ救難信号を出して、弁天丸を『神殿』に誘導するなんて。

私をバカにしているの?」

「いや、ケイコ。そんなに怒らないで……。」

ボクの話をきいてよ。」

「オマケに、救難信号の発信者が、よりによって、サンタ・マリア号だつてえ。」

私は、救難信号が出たことよりも、そっちの方に驚いたわよ。

アンタたち、なぜ、あの名前を使ったの？」

「いやあ、あの信号は我々が発したものじゃないんだよ。」

僕もあの信号をキャッチして、びっくり仰天さ。」

「何、他人事にみたいに、言っているのよ。」

この星にはアンタたちしか、いないんでしょ？」

「そりゃ、そのはずなんだけど……。」

「あのねえ。」

私はねえ、あの『神殿』は、お宝探しに行つて行方不明になった者が大勢いて、化け物が出るという噂まである、とても危険なところだから、茉莉香さんたちが近づかない方が良くと思つて、協力したのよ。

でも、私が協力したことがバレたら、やつと乗せてもらった弁天丸から追い出されてしまふかもしれないわよ。

そうだったら、どうしてくれるのよ。」

「そんなことを言っただって……」

「しっかりしてよね、サトシ。」

もうじき、エマがあなたの子供を産むんでしょ！

あなたも父親になるんだから、しっかりしてよね。」

「それとこれとは……」

「とにかく、もう協力はお断りよ。」

長老に伝えておいて、ね。」

私の話、聞いている？ サトシ。」

明日、キャプテン茉莉香が神殿へ調査に行くと言えば、私も行くけど、もうあんたた

ちの味方じゃないからね。」

もう知らないわよ。」

「あ、あ、ケイコ、待って、待って。」

通信を切らないで……」

「……という訳です。」

会話の女の子は、ケイコ・サトーに間違いありませんね。」

ギルバートが、少し深刻な表情で言った。

「そうですね。彼女に話を聞かないといけませんね。」

「では、今から彼女を呼びましょうか。尋問の場所は、ブリッジにしますか？」

「いえ。ここで良いわ。船長室に来てほしいと言ってください。」

「了解しました。ジェーン隊長たちに連れて来てもらいましょう。」

では、ジョージとビルは、持ち場に戻ってください。」

「あつ、待つて、待つて。尋問と言えば……。」

ジョージとビル。今回はお手柄でしたが、私、例の『マスコット』の件、忘れていませんからね。

あなた達も、後で、じっくりと『尋問』します。」

茉莉香は、ジンモンという言葉を強調して言い、二人をにらみつけた。

「え〜〜〜！」

二人は小さな声を上げて、顔を見合わせた。



## 第三十七章 新たな敵

### 1 尋問

間もなく、警備隊の女性たちに連れられて、ケイコ・サトーが船長室に現れた。

「……………クスン、クスン……………」

ケイコは、泣きべそをかいていた。

録音では威勢の良い話しぶりをしていたが、今は全く違っていた。

「ケイコ。話は聞いたわよ。」

あの星には、アメージーグ族の人たちが住んでいたのね。」

茉莉香が静かに言った。

もちろん「アメージーグ族」とは、宇宙マフィア一族が自ら定めた呼称であるが、和  
平以後は『宇宙マフィア』という言葉は銀河帝国内でも使わないものとされ、こう呼ば  
れていた。

「私とサトシの話は、全部、盗聴されていたのですね。」

「そうよ。さつき聞いたわ。」

「はくあ。そのとおりです。あの星には、一族のコロニーがあります。」

「……ほんとにごめんなさい。……ウウウ……」  
ケイコは、泣きじやくり始めた

「そんなに泣かなくてもいいのよ……。訳を話してよ。」

茉莉香が言った。

「あの神殿は危険です。正体不明です。」

私達が『神殿』と呼んでいる、あの古代の遺跡のような洞窟中にお宝を探そうとして入っていった人は、ほとんど行方不明になりました。運よく帰ってきた人は、お化けを見たと言って怯えています。

私は、茉莉香さんたちがあの神殿に近づかない方が良いと思ったので、協力したのですが、それをあの人たちは……ウウウ……。

結局、茉莉香さんのお仕事を邪魔して、裏切る結果になってしまった……。

「……私、どんな罰でもうけます。……クスン。」

「あの星は、あなた達にとつて、特別な星なの？」

「はい。あの星は、私たち一族が、聖地として、大切にしてきた星です。」

「神殿があるところだから、聖地にしたの……？」

「いいえ。」

ずっと昔、マリア様がこの星を訪れた時に、あの神殿で啓示を受けたと言われている

す。

マリア様は、『アメージング族は、ヒガンの地に栄えよ。』という声を聞いたと伝えられています。

そして、マリア様のその言葉に導かれて、一族はあの暗黒星雲の向こう側にある球状星団の中に理想的な可住惑星を発見し、惑星ライセと名付けて開発を行ったのです。

そうでなければ、あんな遠いところに可住惑星を探しに行こうなんて、誰も考えなかつたでしょう。」

「そうですね。私も実際に行ってみて分かつたけど、ヒガン星団は本当に遠いところよね。でも、えくと、そのマリア様って・・・誰？」

コン、コン。

その時、ドアをノックする音が聞こえた。

「茉莉香。入っていいかしら。」

チアキの声が聞こえた。

「ええ!! チアキちゃん・・・今ちよつと・・・。」

しかし、茉莉香の返事が終わらないうちに、チアキがドアを開けて入ってきた。

その後ろから、グリユーエルが続き、さらに弁天丸Ⅱの女性乗務員たちがその後ろから部屋の中を覗き込んでいる。

「どうしたの？ チアキちゃん。

今、ケイコを尋問中だから、ここは船長である私に任せて部屋に戻ってほしいんだけど」

茉莉香が言った。

「どうしたも、こうしたもないわよ。

ケイコが大泣きしながら警備隊に連れて行かれたって、『女子寮』では大騒ぎよ。

ケイコはこれからどうなるのかって、みんな心配しているわ。」

チアキが言った。

「女子寮」とは、弁天丸Ⅱの船室のうち女子の部屋が集まっている一角のことをいう。女性乗務員自らそう呼んでいる。弁天丸Ⅱに乗船して以来、毎日毎晩、楽しい交流があり、女子乗務員はとても仲が良くなって、「ここは女子寮みたいね〜♪」と誰かが言い始めたのが始まりだという。

「連れて行かれた事情は、もうみんなにバレちゃったのかなあ……ナハハ。」

「マルワカリよ。あれだけ騒いでいれば……ね。」

「とにかく、今は尋問中だからみんなが入って来てはダメよ。」

「そ、そうですね。」

みなさん、ここは私たちに任せて、一旦、お部屋へお帰り下さい。」

グリュールは、他の女性乗務員にそう言いながら、船長室のドアを閉めてしまった。もちろん、その結果として、チアキとグリュールが船長室の中に残っている。

「あのく。私は、チアキちゃんとグリュールにも自分の部屋に戻って欲しいと言ったのだけど．．．ナハハハ」

茉莉香が、苦笑しながら言った。

「それなんだけど、茉莉香。ちよつと気になることがあつてね。

ケイコの言っていた『神殿』の話を良く聞かせてもらおうと思つて。」

「そうですね。なにより、私たちは、役に立ちますわ。

石碑の文字の意味だつて、解説できましたでしょう。」

二人とも、いつもの調子で答えた。もちろん、茉莉香の言うことを聞いて船長室を出るような雰囲気は、まったく感じられなかった。

「それで、茉莉香。さつそく、尋問の続きを始めなさいよ。」

それどころか、チアキは茉莉香に尋問続行の催促まで始めた。

「ナハハハ．．．。これ以上、言つてもダメかくなあ。仕方がないわねえ．．．。

ねえ、ケイコ．．．マリア様つて、誰？どんな人？」

「あのく．．．。」

ケイコはそう言いながら、横目でチアキの方を見た。

「茉莉香。」

その人は、まだ「宇宙ファイア」と呼ばれていた時代のアメージング族の族長の奥様よ。

彼らが乗っていた船の名前が、サンタマリア号よ。」

「ええ?! なぜチアキちゃんがそんなことを知っているの?」

「茉莉香。今はそれだけで十分よ。ケイコもわかっているわね。」

チアキは茉莉香の質問に答えなかった。

そればかりか、ケイコがそのことについてこれ以上詳しい話をするのを禁じるような意味に受け取れることまで言った。

「……………!」

「……………!」

チアキのこの返答を聞いて、ギルバートと警備隊長のジェーンは、急に真剣な表情になって、黙って顔を見合わせた。

チアキは、「王室機密」という言葉こそ使わなかったが、そのような、危険な問題に触れないように促したと、二人は理解したからだ。

実は、それまでギルバートとジェーンの二人は、この事態を二人の姫様が好奇心とワガママで船長の尋問の場に割り込んできたものと考えて、二人の姫様を諫（いさ）める

言葉をかけるタイミングを見計らっていたのだ。

つまり、「この場合は、お友達同士のおしゃべりではなく、『船長の警察権限及び懲戒権限』という宇宙航海法でも認められた船長権限を行使するものであり、姫様たちが船長ととても親しいご友人であっても、相応の『ケジメ』が必要です。」と言おうとしていたのだった。

「うーん。なんか難しい問題があるのね。」

それじゃあ、あの『神殿』について、あなたが知っていることを話してよ。」

茉莉香は、さらり話題を切り替えて、次の質問を言った。

「はい。」

エマの実家がこの星のコロニーにあるんです。

エマのところへ婿入りしたサトシが、彼の実家のお母さんに近況を知らせる手紙を送ってきたんですが、その中に神殿のことが書いてあったそうです。

私はサトシの実家の隣の家に住んでいて、それをサトシのお母さんから聞いた訳です。『神殿』に実際に私が言ったことはありません。」

「ふーん。それで。」

「はい。」

昔、偶然に洞窟を発見して、人工のようなトンネルが奥まで続いていることを知って

びつくりしたそうです。

それで、『古代遺跡じゃないか』と、墓泥棒と言うか、お宝探しが始まったんです。でも、さきほど言ったように、入って行ったまま帰ってこないという、行方不明者がいっぱい出たそうです。

行方不明者の捜索隊も派遣したそうですが、彼らも行方不明になったり、化け物が出たと怯えて帰ってきたりしたそうです。

結局、何のお宝も見つからず、いまだに真相は分かっていないそうです。」

「では、この星には昔から一族の人がコロニーをつくっていたの?」

「はい、昔は、かなり人口が多くて、有力なコロニーだったそうです。」

探し求めていた『安住の地』はここだと皆が信じていたくらい有力だったそうです。」

「そうなの?」

「はい。でも、マリア様がこの星にいらした時に、声に導かれて洞窟に行かれ、例のお告げを聞いたそうです。」

「そう言うこともあって、あの洞窟は『神殿』と言われているそうです。」

「ふーん。そうなんだあ。」

「それで、あなたは彼らの指示で何をしていたの?」

「こちらの調査の様子を知らせることと、後は指示するという話だったのですが……。」



でも、いきなり、救難信号が出て、茉莉香さんについて行ったら、洞窟が現れて……それで、話が違くとサトシに怒っていました。

だから、具体的なことは、まだ何もしていません。」

ケイコ・サトーが消え入りそうに小さな声で言った。

「もういいんじゃないかなあ。茉莉香。」

とりあえず、処分保留、要監視というところで、良いんじゃないかなあ。

『スパイ』の罪で囚人として拘禁するのは、かわいそうだよ。やめようよ。

なにせ、未開惑星調査には欠かせない人材なのだし、茉莉香や私たちのことを大切に思ってくれていて、悪意が無かったのもわかっているし……。」

チアキが言った。

「そうですね。」

今日のケイコさんの行動には、特別、不審なところは無かったと思いました。

忠実に船長の指示どおり行動していたと思いますよ。」

グリューエルも弁護した。

「う……ん。」

でも……それじゃあ、船長としては、ちよつと甘すぎる気もするんだけどねえ……。」

茉莉香は、チアキたちの要望には直ちに応じなかった。

その時、船長室の電話が鳴った。

「はい。茉莉香です。」

茉莉香が電話に出た。

「船長、あの星に住んでいるという、旧宇宙マフィアの族長から通信要請が入っています。」

至急、船長と話したいそうです。」

ブリッジで当直していたジョージ・ワトソン少尉が言った。

「分かりました。そちらで話しましょう。」

これから急いで、ブリッジに行きます。」

茉莉香は、振り返ってジェーン隊長に、船長としての方針を伝えた。

「向こうから先に動いてきましたね。」

ケイコの処分は、電話の内容も聞いて、最終的に判断しましょう。」

それまでの間、ケイコは処分保留のまま、自室で拘束とします。」

「承知しました。」

## 2 コロニーへの招待

「初めまして。」

私は、私たちがサンタマリア星と呼んでおります、この星のアメリカグ族のコロニーで長老を勤めております、ステファンと申します。

夜遅くの通信要請に応じて頂きまして、キャプテンにお礼を申し上げます。」  
「初めまして。」

弁天丸船長、加藤茉莉香です。

夜遅い時間であることは、お気遣いなく、船長の務めですから・・・。

それで、御用件は？」

「どうか、私たちからお願いを聖王家の皆様にお伝えください。」

もちろん、船長の調査には協力させて頂きます。この星の資源や気候など、私たちが知っている限りの情報はご提供いたします。

ご希望なら、コロニーにもお越しください。どこでも、隠さずにご覧に入れます。

神殿のことをお聞きになっていらっしゃいますが、入り口までのご案内します。

それ以上は、皆様の身の安全を保障できませんので、おやめください。」

「それで、皆さんのお願いとは、なんでしょう？」

「はい。」

どうか、この星を開発するのは止めてください。このまま辺境の星として、誰にも知られずに、私たちが静かに暮らせるようにしてください。」

そういう私たちの願いを、女王陛下にお伝えください。」

「お言葉ですが、その理由をお聞かせください。」

この星のコロニーは、かなり衰退しているという話も聞いているのですが。」

「私たちは、神殿を人に知られないように守って、静かに暮らしたいだけなのです。」

だから、銀河帝国との和平条約に反して、私たちのコロニーの存在を公表しなかつたのです。コロニーの存在を公表すると、神殿のことも知られる結果になることを恐れたからです。」

「失礼ですが、それだけでは、納得しかねます。」

あなたは、皆さんが神殿と呼ぶ遺跡について、何か私たちが知らないことをご存じなのですか？」

「いえ、何も知りません。」

しかし、確かに、私たちの言葉をすぐに信じろと言われても、難しいでしょうね。ではこうしましょう。

今日はもう遅いですから、明日、コロニーにお越しください。

直接にお会いして、さらにお話ししましょう。」

「分かりました。明日ですね。」

「はい。コロニーの位置は、この通信から探知して把握されていると思いますが、明朝、

改めて誘導電波で御案内しましょう。

あつと、それからコロニーにお越しいただくに当たつて、お願いがあります。

どうか、ケイコ・サトーを罰しないでやってください。あの子には気の毒なことをしました。

そして彼女もコロニーに連れてきてやってください。あの子はきつと、船長のお役に立つと思います。」

「うゝゝん。ケイコの件は、考えておきます。」

それでは、明日、午前八時、通信再会でよろしいでしょうか。」

「承知しました。」

通信が終わってから、茉莉香はブリッジのクルーに言った。

「さあ。明日は早起きして、上陸準備よ。」

この星のコロニーに行くわよ。」

### 3 ガールズ・トーク

弁天丸の女性乗務員たちは、船長室から女子寮に戻つてきても、ケイコのこと心配だった。それで、自分の部屋に戻つて寝る気にもならず、女子寮の「談話室」に集まつて船長の裁きが決まるのを待つていた。

彼女たちは、しばらくは無言で待っていたが、しだいにいつものように話し始めた。

「大丈夫かしら……ケイコ。」

「あの子は、悪い子じゃないわよ。それに、キャプテン茉莉香の熱狂的なファンよ。」

だから、茉莉香さんを本当に裏切ったりはしないはずよ。」

「そうよね。」

「それにしても、ケイコはどんなことを地上の人と話していたのかしら？」

「それは、私たちも知りたいよね。」

「通信をキャッチしたのは、ジョージとビルでしょう。よくわかったわねえ……。」

「まさか、アイツラ、女の子の電話をずっと盗聴してんじゃないでしょうねえ。」

「いやだろ。アイツラ、ヘンタイよ。チカンよ。」

「ホント、サイテーね。」

「よし。アイツラを『尋問』して、話を聞こう。」

「アイツラ、教えてくれるかなあ？」

「大丈夫よ。私たちの言うことをきかないなら、『いつも、いつも、女の子の電話を盗聴していた』と、帝国軍じゆうに言いふらすって、脅せばいいのよ。」

「アハハハ……。そうなれば、『アブナイ君』決定ね。」

女性兵士には口（くち）をきいてもらえなくなるわね。」

「それに、例の、キャプテン茉莉香のマスコット事件も未決着のままなんでしょ。

アイツラの方が、よっぽど悪いわよ。」

「よし。私が電話して、呼び出してみる。」

「脅すの？」

「まかせて。もつといい方法があるのよ。」

そう言つて、帝国軍兵士のブリジットは、ブリッジに連絡を取つた。

「ジョージさん、いらつしやいますか。」

「はい。ジョージです。」

「あもう、実はお話がく……。」

「なんででしょうか？」

「それは、電話ではちよつとく……。」

そうかと言つて、こんな夜にく、私の部屋とか、あなたの部屋とかで、あなたとく、二人だけでく、話していると誤解されるしく……。」

こつちの談話室にきていただけるとく、そのく……♪。」

ブリジットは、恥ずかしそうに、最後は消え入りそうに小さな声で言つた。

「……承知しました。」

「あ、ありがとうございます。」

ブリジットは、うれしそうな声で電話を切ると、こう言った。

「掛かったわ。魚が釣れたわよ。」

「キヤハハハ・・・。すごいね、ブリジットは。」

「あんな、可愛い声、何処から出るの？」

「でも、ちよつとかわいそうかな。ダメしたことになるのよねえ。」

「甘いわねえ。」

私は、談話室で二人だけで話したいなんて、一言も言っていないわよ。

そう思ったとしたら、それは、アイツの妄想よ。」

「なるほどねえ。」

「ほら、そろそろアイツが来るから、みんな隠れて。」

アイツが談話室の中に入って、自分でドアを閉めるまでは、・・・ね」

コン、コン。

ノックの音が聞こえた。

「はい。」

ブリジットは、恥ずかしそうな声で、答えた。

「ジョージです。」

「どうぞ。」



「失礼します」

ジョージ少尉は、ドアを開けるとブリジットが一人で座っていたので、緊張して部屋の中に入ってきた。そして、後ろ手で、ドアを閉めた。

「いらつしやい。」

その時、入ってきた彼に対して、ドアの後ろに隠れていた女性乗務員たちから声がかかった。

「あつー！」

こうして、ジョージ少尉は、用意周到な女性クルーたちに尋問され、船長室でのやり取りをすべて話し、さらにブリジットから録音を持って来て、女性クルーに聞かせてしまった。

もちろん、女性乗務員にとって「用済み」となったジョージは、「女子寮は男子禁制よ」とばかりに、談話室からすぐに追い出されてしまったのは言うまでもない。

「なるほどねえ・・・外部と通じていたことは明らかね。」

でも、まだ、たいしたことはないわね。」

「どうなるのかなあ・・・ケイコは船を降ろされてしまうのかなあ。」

「あのコ、『茉莉香さんの船に乗れた！』って、毎日、大喜びだったのにねえ・・・。」

「・・・・・・・・」

厳しい現実を想像して、みんな、沈黙してしまった。

コン、コン。

その時、ドアをノックする音が聞こえた。

「わたくしです。入ってよろしいでしょうか。」

「え!! グリユーエル様でいらっしやいますか!?!」

「はい。」

「どうぞ、お入りください。」

グリユーエルが談話室に入ってきた。続いて、チアキも入ってきた。

「あのー、みなさまにその後の様子をお知らせしようと思つて、まいりました。」

グリユーエルが、いつものように、だれに対しても丁寧な言葉づかいで言った。

「あのー、わざわざ、姫様にそんなことをしていただかなくとも……。」

「いえ、『ここは私たちにおまかせ下さい』と申し上げた以上、その結果をお話しする責任があると存じまして……。」

「それにね、私からもみんなにお願いがあるのよ……。」

チアキがグリユーエルの話に付け加えた。

「それで、あれから……。」

……

グリユーエルは船長室でのやりとりや、その後にあの星のコロニーから通信が入ったことを簡単に話した。

「ええ！ それじゃあ、明日、彼らのコロニーに行くのですかあ!？」

「ええ、ケイコさんのことは、そこで伺った話も踏まえて決めると、船長は仰ってました。」

「うゝゝん。」

「………」

また、みんな沈黙してしまった。

現実はずますます厳しい方向に展開していくと思われたからだ。例えば、ケイコはこの星で船を降ろされることもあると思われた。

それでも、かなり寛大な処分なのだが……。

「それで、チアキ様のお話とは……。」

沈黙に耐えかねて雰囲気を変えたいと思った、帝国軍兵士のブリジットが聞いた。

「あのねえ、救難信号を発信していた大昔の船、『サンタマリア号』とか、その船に乗っていたマリアという名前の女性のことなんだけど……。」

この航海では、これからもいろいろな場面でこの名前を耳にするかもしれないけど、積極的な関心を持たないでほしいの。

もちろん、この名前を聞いたことも、他言無用よ。」

チアキがすこし重苦しい声で、言った。

「ええ!? 本当ですかあ。」

「ええ、私からの重要なお願いよ。」

だから、誰に聞かれても、例えば、軍の上官に聞かれても、答える必要はないわ。

上官から答えない理由を聞かれたら、私の名前を出していいわ。

お願いね。」

予想外のチアキの厳しい話に、談話室の女性乗務員たちは凍りついてしまった。

チアキは、「重要なお願い」という言葉を使ったが、聞いている女性乗務員たちには『ハイレベルの軍事機密、あるいは王室機密』の存在を窺わせる事態だとすぐわかったからだ。

なぜならば、チアキは、王室では女王の第二王女であり、帝国軍では帝国軍上級大将、帝国軍第一艦隊司令官という軍のナンバーツの地位にあるからだ。だから、チアキの名前を出せば、一般軍人は従わざるをえない。

それどころか、この航海に二人も姫様が同乗してきたのは、船長のお友達として「退屈しのぎ」や「遊び半分」のためではないと、得体のしれない恐怖を感じ始めた者もいた。

だから、これでは、ケイコの命が危ないかもしれないと皆がますます心配した。その結果、部屋の中はますます重苦しい雰囲気になってしまった。

「はああ・・・気分を変えたかったです。」

さらに女子寮らしくない雰囲気になってしまいましたねえ。・・・

あのおもつと違う話をしていいでしょうか？」

帝国軍兵士のブリジットが、氣力を振り絞って聞いた。

「私たちは、かまいませんけど」

グリューエルが答えた。

彼女も、今夜のうちに、皆の気分をすこしでも明るくさせたいと思ったからだ。

「それで、皆様たちに質問してもよろしいでしょうか。」

「なあにく？ 楽しい話題なら、歓迎よ。」

チアキが答えた。

「あのお。」

皆様たちは、以前からケイコとお知り合いだったのですよね？」

「そうよ。ヒガン遠征で知り合ったのよ。」

「それで、ケイコの話を知っていると、サトシという男の子と結構、親しい関係だったよ。うなのですが、結局、サトシは、エマという女の子と結婚したんですよね。」

「どういふワケでそうなったか、ご存じですか？」

「うくん。興味深い話だけど、私たちは詳しい話は知らないわ。」

確かに、最初に彼女を紹介された時には、サトシとペアの形で紹介されたわ。

結構いい雰囲気だったよね、あの二人。・・・ねえ、グリユーエル。」

チアキは、グリユーエルに同意を求めた。

「そうですね。幼馴染（おさななじみ）のあの二人は、お似合いのカップルだと思います。」

「ええ！二人は、幼馴染だったのですか〜！」

「うくん・・・なんか、やっかいなことがあったのかなあ。」

その場にいた女性たちが一斉に考え込んだ。

コン、コン。

また、誰かが談話室のドアをノックする音が聞こえた。

「茉莉香です。入ってよろしいですか。」

その声を聞いて、談話室の女性乗務員は驚き、緊張した。

『この時間に、このタイミングで、船長が何の用でこの部屋に来るのだろうかと・・・。』

「どうぞ。」

チアキが、すこし緊張した声で、返事をした。

ドアを開けて、茉莉香が入ってきた。続いて、ケイコ・サトーが警備隊の女性に伴われて入ってきた。

「どうしたの？船長。」

ケイコは、お咎（とが）め、ナシという訳でもないんでしょ。」

チアキが言った。

「それはそうなんだけど……。」

とにかく、明日の朝まで自室に拘束よ。

だから、みんなも、ケイコと接触禁止。面会はもちろん、電話もダメよ。

警備隊の人たちがきちんと監視しているから、協力してね。

それを言いに来たのよ。

それと、ケイコから一言。」

「あの一。本当に、さきほどはすみませんでした。

反省しています。

とくに、夜中に騒いで女子寮の皆さんを起こしてしまい、申し訳ありませんでした。」

ケイコ・サトーが、立ったままで、少し悲しそうに詫びを言って、頭を下げた。

「という……。」

ケイコが、謹慎前に、皆さんに、一言、お詫びが言いたいと言うので、こちらに寄ら

せてもらいました。」

茉莉香がそう言つて、ケイコを連れて部屋を出ようとしたとき、チアキがつぶやいた。「それにしても、てつきり、ケイコはサトシと一緒になると思つていただけねえ。

エマつて子は、気の弱そうな、おとなしい子だと思つていただけねえ……。

まさか、あんなことになつていたとは……。びつくりよ、ねえ。」

その言葉に、ケイコが答えて、ポツリとつぶやいた。

「はあ……。」

それがあ……いわゆる、一発逆転というヤツでして……。」

そう言つた時のケイコは、悪夢を思いだしたような、ゆがんだ表情をしていた。

「うわあ、あ、あ……！！！」

「ええ、え、え……！！！」

「そんなあ、あ、あ……！！！」

ケイコの話の聞いて、その場にいた女性たちから、いつせいに大きな声が上がつた。ケイコ、エマ、サトシの三人の間に繰り広げられたであろう『修羅場』を想像したからだ。

しかし、その場にいた女性たちの中で、グリユーエルが一人だけ、納得がいかないようなキョトンとした表情で座つていた。



「あのく、『一発逆転』というのは、どういうお話でしょうか……」

グリユーエルがそう問いかけた時に、談話室にいる彼女以外の女子全員がいつせいにグリユーエルの顔を覗き込んだ。

「え！ え〜！ ……まさか、……そういうことなんですか……」

わたししたら……」

ようやくその意味に気が付いたグリユーエルは、顔を真っ赤にして、下を向いてしまった。

その時、ドアを開けて、警備隊長のジエーンが、談話室に入ってきた。

「船長！ いつまで、話し込んでいるんですか！」

ケジメと言うものがありますよ。」

「あ〜、はい、はい。」

すみません。すみません。つい深刻な話になってしまい……」

そう言いながら、茉莉香は急いでケイコを連れて出て行った。

「あなたたちも、早く寝なさい。消灯時間はとくに過ぎていきますよ。」

ジエーンは談話室の女性たちにもそう言って注意して、部屋を出て行った。

#### 4 新たな敵

翌朝、弁天丸Ⅱ船長・加藤茉莉香は、衛星軌道上の弁天丸ブリッジから、サンタマリア星の長老ステファンと通信を行っていた。

「今の通信で、コロニーの位置を確認しました。」

これから、シャトルで降下して、そちらに伺います。」

「承知しました。お待ちしております。」

王女殿下をお二人もお迎えするとは、光栄に存じます。

両殿下に、私たちの歓迎の気持ちをお伝えください。」

ステファンがそう言って、通信を終えた。

そして、茉莉香たちは、弁天丸からシャトルへ乗り換えるため、ブリッジを出ようとした。

その時、ブリッジに鋭い警報音が響き渡った。

ビー、ビー、ビー。

「警戒警報よ。プレドライブ反応を検知。」

正体不明の宇宙船が五隻もタッチダウンしてくるわ。」

クーリエが言った。

「ああ！」

おまけに時空ナビは、周辺空間に、強い重力異常が発生しているのを検知。

こんな大事な時に、光学映像が乱れ始めたわ。」

「怪しいわねえ。」

攻撃に備えて、弁天丸の重力シールドを、展開。」

茉莉香が言った。

「ええ!? いったい誰が私たちを攻撃しようと言うのですか?」

グリユーエルが声を上げた。

やがて、弁天丸の前方に、五隻の宇宙船がタッチダウンしてきた。

「船長、5隻の船からトレスポンダーの発信は無いわ。」

おまけに、高エネルギー反応を検知。

撃ってくるわよ。」

「正体不明なのにこっちから先に討つのもねえ……。」

重力シールドを、全力展開。

全船、対衝撃防御。

もちろん反撃の用意もね。」

「了解。」

シユニツツアアが、手短な返事をした。

正体不明の5隻の宇宙船は、タッチダウン直後に、ビーム砲を一斉に発射した。

ビームは弁天丸を狙っているはずだった。

しかし、本来、直線的に進むはずのビームは、途中の空間でねじ曲がり、弁天丸に届かなかった。

もちろん、弁天丸の重力シールドがはじき返したわけではなかった。

「あれ？　なにこれ。」

発射されたビームが途中でねじ曲がって、どっかへ行っちゃたわ。」

茉莉香がつぶやいた。

「急に発生した重力異常の影響で、ビームが捻じ曲がっているのだろう。」

こんなこと、自然現象では考えられない。

誰かが意図的にやっているのか？」

シュニツツアーがつぶやいた。

「そのようね。」

時空ナビは、時空トンネルの開口部が形成されているのを、検知しているわ。

また、船が出てくるわよ。

正体不明の艦隊の現在位置に対して、左舷の方向から出てくるわ。」

クーリエが言った。

「ええ？　今度は誰が出てくるの？」

「茉莉香、そんなの、決まっているじゃないの。」

チアキが言った。

「ええ？」

「だって、民間船で時空トンネル航法を使えるのは、いまのところ、弁天丸だけでしょ。ということとは……。」

「それじゃあ、帝国軍なの？」

「正解よ。」

トレスポンドアの発信をキャッチしたわ。

船籍は、銀河帝国宇宙軍、所属は第一艦隊。船名は、うーんと、面倒だから省略ね。……

とにかく、戦艦が十隻、ずらりと並んで出てくるわよ。」

クーリエが、茉莉香とチアキの会話に口を挟んだ。

「ナハハハ……。」

第一艦隊の船といえば、チアキちゃんちの船じゃないの。

要するに、私たちはこっさり後をつけられていたのね。

それでもって、肝心のところで、弁天丸の獲物を奪う気なのね。」

茉莉香が、ニヤリと笑った。

「まあ、そういうことかしら。」

ハヤマ艦長は、キャプテン茉莉香に見つかからないように私たちを警備するって言うていたけど、こういうことだったのね。」

チアキが茉莉香に答えた。

「も〜お！」

警備だけじゃなくて、海賊の獲物まで狙おうなんて、やってくれるじゃないの！

こつちも負けないからね。

ムフフフ……」

「あら、そうかしら。

ウフフフ……」

茉莉香とチアキは、笑顔を見せて笑いながら、意地を張りあっていた。

しかし、帝国軍の戦艦は、通常空間に復帰すると直ちに、正体不明の五隻の艦隊を狙って、ビーム砲で、一斉射撃を行った。

弁天丸が、迎撃を控えているスキを突いて、先制攻撃したのだ。

正体不明の艦隊は、いきなり左舷から砲撃を受けてかなりの損害を出した。

あわてて、反撃を始めたが、帝国軍の戦艦が火力を弱めず攻撃を続けたので、たちまち追い詰められていった。

そもそも、主体不明の艦隊にとって、個々の船の火力でもかなりの劣勢にある上に、五

対十の数的劣勢を挽回することはさらに困難だった。

十分も経過しないうちに、五隻の内、三隻が爆発を起こし、炎上し始めた。

さらに、残りの二隻も大破して、戦闘能力を失った。

「ああ。私たちが先に見つけた獲物に、私たちより先に出を出すなんてズルいじゃないの、チアキちゃん。」

「何、言っているの。」

人を出し抜くなんて、そんなの、あんたの十八番（オハコ：得意技）じゃないの。」

「ナハハハ……。」

「あ、船長。」

お取込み中、すみませんが、敵艦から、トレスポンドー発信。

それと、降伏声明があつて、救助要請も来ているわ。」

クーリエが言った。

「へえ。あの船はどこのだいつなの？」

「ええーと、トレスポンドーは、船籍は銀河帝国、所属は『ハピネス財団警備艦隊』と表示しているわね。」

「なに、ハピネス財団って？ 私は初めて聞く名前だわ。」

茉莉香が言った。

「宇宙の環境浄化事業を営む財団です。最近、勢力が急拡大しているそうです。

私も財団のイベントに来賓として招かれたのですが、聖王家の広報からは出席を断れと言われました。」

グリューエルが答えた。

「へへへ。なるほど。」

でも、それでわかったわ。

帝国軍の敵味方識別ソフトは、この船を『UN KNOWN』と表示しているからね。銀河帝国船籍の船にもかかわらず……。

これは、どういふことかしらね。なにか、裏がありそうね。フッフ……。」

クーリエが笑った。

「あ、来ましたよ。第一艦隊から加藤船長に通信要請よ。」

発信人は、第一艦隊旗艦、機動空母グランドマザー艦長のミッキー・ハママ准将よ。」

「ええ!? グランドマザーが、ここいらの空間にいるの?」

ぜんぜん、姿が見えないよ。」

「そこにいるわよ、茉莉香。」

「ええ、この重力異常が、グランドマザーなの?」

「そうよ。」



「うへえ〜。」

それじゃあ、グランドマザーは、弁天丸より、ちよつと大きめの船つてわけでもないんだなあ……。」

茉莉香は、つぶやいた。

機動空母グランドマザーは、船体自体を亜空間に隠したまま、通常空間に重力エネルギーを放出して重力シールドを作り出したり、船体から艦隊を出撃させて、通常空間へ発進させたりしていたのだ。

これが、グランドマザーの本来の機能、戦い方なのだろう。

「本当は、実力が桁違いなんだ……。」

茉莉香はそう思った。

「お話中、済みません。」

船長、通信がつながりません。」

クーリエが言った。

「よっ！ キャプテン茉莉香、久しぶりだねえ。」

モニターの向こうから、ハヤマ艦長が親しげに声をかけてきた。

「どうも……茉莉香です。こちらこそ、お久しぶりです。ミッキー艦長。」

今日は、こちらからお願いする前に、お客さんのお相手までして頂いて済みません。」

茉莉香が、すこし皮肉の入った挨拶をした。これも親しい間柄だから言えるのだが……。

「お礼まで、言ってくれてうれしいねえ。」

実は、部下も、このところ実戦が無くて退屈していたんだよ。

だから、『それ！敵が来た』と思って、すぐに撃つちまったので……ハハハ。

私は、てつきり、獲物を横取りしたって、茉莉香に抗議されるかと思っていたよ。」

「ナハハハ……。」

茉莉香は苦笑いするしかなかった。この女性に皮肉は通じないと。

「でも、ずいぶん素早い攻撃でしたね。」

コンピューターの敵味方識別機能がちゃんと敵と判定してから攻撃したのですか？」

「いいや。それを待たずに撃ったのさ。」

だいたい、コンピューターなんてものは、帝国軍規でも、船長判断の補助に過ぎないと定められているからね。

全面的に頼っちゃだめだろう。

大切なのは、船乗りのカンさ。

もつともこれは、加藤船長に教えられたことだけだね。」

「ナハハハ……そうなんですかあ。」

その結果、敵さんを、ずいぶん、ボロボロにしちやいましたね。」

「ハハハ・・・、つい、本気出してしまったからな。」

こっちは、姫様が、弁天丸Ⅱに乗っておられるのも、知っていたからね。」

「それで、司令官。この星に降りられるのですね。」

ハヤマ艦長は敬礼すると、茉莉香の隣にいるチアキに敬語で話した。

チアキは、今、第一艦隊の司令官を務め、ハヤマ艦長の上官である。

「そうよ。引き続き、衛星軌道上から警備をお願いね。」

「承知いたしました。」

ハピネス財団の船の乗務員は救助して、取り調べておきます。やつらの正体を明らかにするにはちょうどいい機会でしょう。情報部にも連絡してありますので。

もちろん、司令官が、弁天丸Ⅱにお乗りになつてゐることは機密事項ですから、ご安心を。」

「わかつたわ。よろしくね。」

「承知いたしました。」

ハヤマ艦長は、再び敬礼すると、通信を終えた。

「ナハハハ・・・。本当に、獲物を横取りされたね。」

「茉莉香、何、言っているのよ。」

弁天丸Ⅱの実力を知られないままで、事態が収まったのだから、喜ぶべきよ。」

「それはそうなんだけど、チョット悲しいと言うか、つまらないと言うか……。」

「そんなこと言っているより、茉莉香。シャトルの発進が先よ。」

上陸するんでしょ、この星へ。」

「あつ、そうだったよ。ありがとね、チアキちゃん。」

そう言うと、茉莉香はブリッジのクルーに向けて言った。

「さあ、シャトルの発進準備、再会よ。」

それで、誰かが、まだ狙っているかもしれないから、警戒は怠らないでね。」

そして、茉莉香は少し考えて、言った。

「それで、もう、新たな敵も現れたから、事態が変わったわ。」

一人でも味方が欲しいから、ケイコ・サトーも連れて行くわ。」

やがて、弁天丸Ⅱから一隻のシャトルが発信した。

## 第三十八章 母なる星

## 1 コロニー

茉莉香たちを乗せたシャトルは、サンタ・マリア星の大陸の山岳地帯に向かった。「神殿」と呼ばれる洞窟のある場所からは、かなり離れている。

この星にあるアメージング族のコロニーは、旧宇宙マフィア時代に作られたものである。従って、上空から各星系の警察や軍隊に発見されないように、山岳地帯の山肌をくりぬいて山体の地中に作られている。もちろん、彼らは、今日でも地上に建物を築くことを禁じていた。

「彼らの話では、向こうに見える山の斜面にある洞窟の穴が、コロニーの入り口です。」

手前の平坦な岩肌が見えている土地がシャトルの発着場だそうですので、そこに着陸します。」

シャトルを操縦しているギルバートが言った。

「いよいよ、会えますね。どんな人たちでしょうか。」

助手席に座った茉莉香が言った。

やがて地上に降り立った茉莉香を、コロニーの族長であるステファンが出迎えた。

出迎えに現れた人々は、高齢者ばかりで、ゆつたりとしたローブのような衣服を着ていた。

「ようこそ、サンタ・マリア星においで下さいました。キャプテン茉莉香。」

心より歓迎いたします。」

「ありがとうございます。お出迎え、感謝します。」

型どおりのあいさつの後、茉莉香たちは山体の地中に作られた迎賓館に案内された。

大きな部屋の大きなテーブルを挟んで、茉莉香、チアキ、グリユーエルたちと、ステファンたちは向き合った。

まず、ステファンは、この山中の施設の概要、コロニーの歴史などを、モニター画面に映し出された映像を基に説明した。

山をくりぬいて作った巨大な地下空間は幾層にも分かれて居住区や作業所が作られ、自給自給の生活ができる施設がつくられていた。

「以上が、このコロニーのあらましです。」

ここは、昔は、一万人以上の人が暮らす地下都市だったのですが、今は、わずか50人ほどが暮らすだけの街です。

地下のほとんどの施設は、今は、使われていません。」

「みんな、ヒガン星団に行ってしまったのですか。」

茉莉香が聞いた。

「そうです。あの星なら、地下に隠れて暮らす必要がありませんからね。

太陽の下で、家族全員が、笑顔で暮らせるのですよ。夢のようです。

そういう惑星ライセの暮らしぶりが知れわたると、移住が進んでいきました。

その結果、今、ここに住むのは年寄りばかりで、若者は数えるほどです。

この十年ほどは、赤ん坊が一人も生まれていません。

これが、このコロニーの現状です。」

「なるほど……」

「それで、通信でもお願いしましたが、どうか、私たちをここで静かに暮らせてください。お願いします。」

「それは、私がお約束できることはありませんので……」

「そうですね。分かっています。」

「それから、ご覧になっておられたと思いますが、私たちはこの星に降りる直前に襲撃を受けました。」

襲撃した賊は警備の帝国軍が撃退しましたが、私たちには襲撃を受ける理由が思い当りません。」

何か、ご存じのことがあれば教えてください。

この星をめぐるって、何か、争いごとがあるのですか？」

茉莉香が聞いた。

「私たちにも、彼らが何を考えているか、わかりません。

ですが、ここしばらくの間に、何度か、この星を探っている者たちが目撃されています。」

私達は、彼らに見つかからないように隠れていたもので、彼らの事情は分かりません。」  
ステファンは、そう答えた。

## 2 神殿の探索

弁天丸とコロニーの一部のメンバーは、「神殿」と呼ばれる洞窟の入り口の前にやってきた。

もちろん、茉莉香の判断で、チアキやグリユーエルは洞窟の探検に参加せず、コロニーでロボットから送られてくる映像をみていることになった。

「本当に、神殿に入られるのですか？」

ステファンが茉莉香に聞いた。

「はい。でも、ご心配なく。」



「私たちが探検するものではありません。」

安全を考慮して、入り口から探査ロボットを入れて、再度、洞窟内の様子を撮影したいと思ひまして……。」

茉莉香は、そう答えた。

しかし、襲撃事件のあと、茉莉香はこう考えていた。

『やっぱり、怪しい環境財団の人たちも、この神殿を探していたのでしようね。』

私のカンなんだけど、なにか、お宝の臭いがあるわあ。」

だって、海賊の血が騒ぐのよねえ。ぜひ行つてみたいつてね。』

そこで、茉莉香は、まず洞窟の様子を再度探るため、昆虫型の探査ロボットを発進させた。ロボットは、6足歩行で軽々と洞窟の奥へ進んでいった。

「さあ、タブレット端末のモニター映像が見えますか。みなさん。」

えくと、コロニーにいるチアキちゃん、映像は見えていますかあ?」

茉莉香は、携帯通信端末でチアキに話しかけた。

「うん。よく見えるわよ。」

「あれえ〜! ……ずいぶんはつきりとチアキちゃんの声が聞こえるねえ……。」

「当たり前よ。あなたのそばに居るんだから……。」

「え!?! ……。」

茉莉香がまわりを見ると、調査隊一行の最後尾に、アメージング族のローブを頭からかぶって、チアキとグリューエルが立っていた。その周りのアメージングの人たちも、姿かたちをよく見ると、スカーレットやキャサリンら警備の人々だった。

「ええ〜！ 留守番だつて言つたじゃないのお〜！」

グリューエルまで、一緒にいるじゃないの〜・・・。

もう〜。船長の指示に従つてくださいよ〜。」

「だつて、茉莉香の目が爛々と輝いていて、

『さあ〜！これから楽しい海賊の時間だあ〜！』

という顔をしていたんだもの。」

チアキが言つた。

「そうですわあ。

私たちに隠し事をしていらつしやつたのは、すぐにわかりましたよ。」

グリューエルが言つた。

「そんな茉莉香を一人で行かせるなんて、とても私にはできないわよ。」

チアキが言つた。

「そうですわよ。お宝探しなら、私たちもお手伝いできると思いますよ。

それに、私、留守番なんて苦手ですわあ・・・フフフ。」

グリュールエルが言った。

二人とも茉莉香を助けるために来たと強弁している。

「もう、困った姫様たちだよねえ……。」

茉莉香は、ぼやいた。

「ほら、茉莉香。」

端末を見て、ケイコに指示をしないと。

そろそろ、ロボットが例の黒い石碑のところに着くわよ。」

チアキが愚痴をこぼしている茉莉香に、促した。

「ああ、そうだ、そうだ……。」

中の様子は……、変わらないわね。

落盤の痕跡はないね。意外とシツカリした洞窟かしら。

……

ねえ、ケイコ。あの石碑の表面までロボットを近づけて……。

洞窟をふさいでいる石碑の向こうはどうなっているのか、探れないかしら。」

「はい。石碑と洞窟の間に隙間が無いか、センサーで探らせます。」

ロボットは、ケイコの指示で、石碑のまわりを触手や触覚で触り始めた。

「洞窟と石碑の間には、隙間がありません。洞窟の岩盤に沿って黒い岩がびったりとは

め込まれているような感じですね。

洞窟が石碑の壁に機械で穴をあけないと石碑の向こう側、洞窟の奥は探れません。」  
ケイコが言った。

「うん。」

「船長。これ以上進むのは、無理でしょう。」

文字の書かれた石碑は傷つけない方が良いでしょう。

残る方法は、壁を掘削してトンネルを掘ることですが、それには、岩盤を掘削したり、発生した岩石を排除できるロボットが必要です。

弁天丸にはその用意がありませんし、そもそも石碑の厚さがどのくらいあるか分かりませんし……。」

ギルバートが茉莉香に慎重な行動を促した。

「そうねえ。」

でも、石碑のところまででは行ってみたいわあ。

ねえ、大丈夫でしょう？」

茉莉香が訪ねた。

「はあ、少しの時間ならば……。」

今のところ、洞窟の中の空気や、放射能、地磁気などの観測データは、正常のようで

すし……。」

ケイコが、探査ロボットから送られたデータを見ながら、言った。

やがて弁天丸一行は、洞窟内を進んで石碑の前にたどり着いた。

「へへへ。これが例の石碑かあ。」

映像で見ていた印象と違って、見上げるとずいぶん大きいわねえ。」

茉莉香が言った。その表情は、生き生きしている。

やっぱり、『危険な冒険が大好き』という海賊の血が騒いでいるようだ。

そして、茉莉香は好奇心に駆られて、石碑の表面を手でペタペタと触った。

「うへへん。石の冷たい感触って、結構、気持ちいいね。」

「もう、茉莉香さんったら……。子供みたいですね。」

なんでもペタペタと、触って良いってものじゃありませんわよ。

ウフフフ……。」

グリユーエルはそう言って微笑みながら、自分も石碑の表面を触った。

『この石碑は、いったい誰が作ったんでしょねえ。』

アメージング族の人たちは、まだ真実を話していないようですからねえ。』

グリユーエルは石碑を触りながら、そう考えていた。

しかし、石碑を見たチアキは、表情を硬くしていた。

「この石碑の素材は、もしかして、『ブラック・マター』じゃないかしら。だとしたら、こんなに大きなカタマリなんて、初めてみるわ・・・。」

チアキは、緊張して石碑に近づいた。

「おい、みんな動くな。手を上げる。」

その時、突然に調査に同行してきたアメージング族の男たちがそう言って、弁天丸一行に銃を向けた。

「そこにいるSF！ 動くと、姫様の命は無いぞ。」

銃を持った男たちが、スカーレットやキャサリンに脅しをかけた。

SFとは、セキュリティ・フォース、つまり要人警備専門の凄腕の軍人を意味する言葉であり、この場合、チアキやグリユーエル付きの警備兵であるスカーレットやキャサリンたちをさしている。

「む・・・。」

キャサリンたちは、男たちと向かい合った。

「お前たちは、何者だ。」

何を考えているか知らんが、銀河帝国に逆らおうなんて無謀なことはやめた方が、身のためだぞ。」

スカーレットが言った。

「何を言うか。逮捕された仲間を釈放しろ。」

それと、破壊された船の代わりに弃天丸を頂こうじゃないか。

言うことを聞かないと、姫様の命は無いぞ！」

どうやら賊は、茉莉香たちを襲ったハピネス財団の一味のようだ。

「む……。」

スカレットたちは黙ったまま賊と向かい合っている。

「まずい。」

このままでは、人質にされて、次々と法外な要求を突き付けられそうだ。

それに、重力兵器を装備した弃天丸が、敵の手に渡ったら恐ろしいことになる……。」

チアキは、焦った。

「そうだ！」

もしかすると、この石碑が助けてくれるかもしれないわ。

もしも、この石碑がブラック・マターで出来ているなら、そして過去にマリア様に忠

誠を誓っているなら、私の願い、私の言うことも聞いてくれるはず……。」

そう思ったチアキは、賊に銃を突き付けられたまま、後ずさりして石碑の壁に手を突

いた。

先ほどまで石の表面を触っていた茉莉香とグリユーエルも、石碑の前に立っていた。

「おい、姫。逃げようとしても後ろは壁だぞ。ハハハ……。」  
それとも、俺たちが怖いのかなあ。

そんなに怖がつちや、そのキレイな顔がダイナシだよ……ハハハ。」  
賊の一人が、そう言つて嘲笑い、チアキを見つめた。

チアキは、石碑に背中を向けたまま、石碑の表面に手を触れた。  
掌（てのひら）を通して、冷たく堅い石の感触が伝わってくる。

『助けて……！』

チアキは、強く強く念じ、自分の願いを石碑に伝えようとした。

ブーン、ブーン

やがて、洞窟中に鈍い音が聞こえた。

そして、チアキの掌（てのひら）から冷たい石の感触が消えた。

同時に、チアキの体が石碑の中に引き込まれていった。

チアキは驚いて、茉莉香とグリユーエルの方を見ると、彼女たちも体が石碑の中に引き込まれ始めている。身体が浮き上がって、まるで水の中に沈むように、すーっと石碑の中に引き込まれようとしている。

チアキが周りを見ると、敵も味方も三人の異変に気が付いたが、誰も身動きをせず、ただ見つめていた。実際には、その光景に圧倒されて身動きできなかつたのだが……。



「うわー！」

チアキ、茉莉香、グリユーエルの三人は、激しい光を浴びたように感じて、目を閉じた。激しい光で意識が遠のき、そして何か、長い夢を見ているような気分になった。

しかし、それは、ほんの一瞬の出来事だった。

次の瞬間、気が付くと三人は、どこかの地面の上に立っていた。

そこは真つ暗な空間だった。

三人は得体のしれない恐怖感に襲われたが、グリユーエルが気力を振り絞って携帯電話信端末を開いて、その小さな明かりで周りを照らした。

「ここは、石碑の向こう側でしょうか？」

グリユーエルが、か細い光でまわりの様子を見ると、目の前に同じような石の壁があった。

「どうやら、そのようね。」

茉莉香が言った。

「とにかく、人質にされるのだけは、免れたようね。」

「どうしてこうなったのかは、わからないけど。」

チアキが言った。

『お言葉ですが、

『どうしてこうなったか』について、チアキ様は、何かを知っていらつしやるようですわ。』

グリユーエルは、チアキの言葉からそう感じ取ったが、何も言わないことにした。

その頃、洞窟の壁の向こうでは、激しい格闘が行われていた。

人質の姫様たちがいなくなったので、スカーレットたちが賊に反撃して、取り抑えようとしていたのだ。

賊の男たちは、スカーレットやキャサリンをSFではあるが女であり、しかも自分たちは銃を持っていると、甘く見ていた。

しかし、彼女たちは強かった。特に、銃を持った相手には手加減する必要も無く、全力で戦ったので、たちまち賊は、全員が倒されてしまった。

「よし。シャトルの要員に暗号通信を出せ。

アメージング族が裏切ったと伝えろ。

シャトルを敵の支配下に置かれないように、確保しろ。

それから、上空の弁天丸にも事情を連絡しろ。」

スカーレットが指令を出した。

シャトルとは、この洞窟に来るために一行が乗ってきた弁天丸の上陸用シャトルのこ

とである。もちろんその正体は、軍用の強襲上陸艦であつて、単なる旅客運送船ではない。

「グランドマザー、グランドマザー、こちらはスカレット。」

「聞こえるか？ 緊急通信だ。」

「聞こえます。」

「スカレット中尉、どうされましたか？」

「アメージング族が裏切つた。」

「ハピネス財団と共謀していたようだ。」

「彼等は、姫様たちを人質にとつて我々に仲間の釈放や弁天丸の引き渡しを要求した。」

「今、賊は全員取り抑えたが、」

「その際に、姫様お二人とキャプテン茉莉香が例の石碑の中へ消えてしまい、行方不明だ。石碑の向こう側におられると思うが、そうなつた原因は、分からない。」

「とにかく、救出のために、トンネルも掘れる探査ロボットなどの設備をここまで持つて来てほしい。」

「それから、地上部隊を派遣して、アメージング族のコロニーを制圧しろ。」

「不敬罪の現行犯だが、事情を探るために、なるべく生かして捕獲しろ。」

「もちろん、抵抗するものは排除してもかまわない。」

ケイコは、スカーレットの最後の言葉を聞いていて身震いした。

それまで、賊が倒され、ひと安心して、これから茉莉香たちを探そうと張り切っていた。それに『悪いのはハピネス財団のヤツラで、一族の人々は脅されていたただけだろう』と、事態を都合のいいように考えていた。

しかし、スカーレットの話では、コロニーに居た一族、サトシ達が大変なことになるかもしれないのだ。

『不敬罪だなんて……』。

本気を出した帝国軍に、彼らがかなうはずはない！

おまけに、不敬罪はその場で射殺されるのが当たり前の大罪。

宇宙マフィア時代もそんなことはしなかったじゃないの……』

そう考えて、ケイコは暗い気持ちになっていた。

スカーレットの部下が、ケイコの前に来て、言った。

「ケイコ・サトー、あなたを拘束します。」

「はい……」。

ケイコは、他のアメージング族の随行者と一緒に、洞窟の壁際に座らされた。

彼らは、警備兵たちから銃を向けられて、監視された。

## 3 神殿の秘密

「どうしましょう、これから。」

グリユーエルがチアキに聞いた。

「う……ん。困ったねえ、チアキちゃん。」

さつきから携帯通信機で壁の向こう側の人たちや、弁天丸を呼び出しているんだけど、電話が通じないんだよねえ。」

茉莉香が言った。

「そうなの。困ったわねえ。」

「こう、真つ暗じや、何もできないわよねえ。」

チアキもつぶやいた。

その時、ブーンと言う音とともに、洞窟内がうつつすらと明るくなり、回りの様子が見えるようになってきた。

「ええ〜！ チアキちゃん、今、なんかしたの？」

茉莉香が驚いた。

「私が何かした訳ないじゃないの。照明のスイッチなんか、触っていないわよ。」

チアキも驚いて言った。

グリユーエルは、そう言う二人のやり取りを聞いていて、思い当たるところがあった。

「ねえ、茉莉香さん。」

せつかく明るくなったのだから、この際、洞窟の奥を探検してみませんか？」

グリユーエルはそう言った。

「そうねえ。」

茉莉香は、最初からそのつもりだったのでしょ。

私たちに留守番させて……。」

チアキが言った。

「ナハハハ……。まあ、そのつもりだったけどねえ……。。」

三人は、薄明かりで照らされた洞窟の奥を目指して、歩き始めた。

そして、一分ほど歩くと狭い洞窟は途切れ、天井の高い大きなホールのような空間に出た。

「うわく……。。」

中は、こんなに大きな洞窟になっているんだあ！」

茉莉香が驚いて、言った。

「ホールの中は、黒い岩の大きな塊があるだけでしょうか。」

グリユーエルが言った。

でも、彼女は、本当はこう言いたかったのだが、言葉を飲み込んだ。

『この岩がお宝なのでしょいか?』と。

その時、茉莉香が動き出した。

「そうだ、お宝、お宝・・・と。」

きつと、この目の前の黒い岩の向こうに、何かあるんじゃないかなあ・・・。」

そう言いながら、茉莉香は黒い岩の向こうを見ようと、岩をよじ登り始めた。

「茉莉香、危ないわよ。」

墓泥棒退治の罠が、仕掛けられているかもしれないわよ。」

チアキが言った。

「大丈夫だよ、チアキちゃん。エサなんか見えないもの。」

「何、言っているの。意味が分かんないわ。」

「あのねえ、罠（ワナ）っていうのは、エサが見えるところに仕掛けるものなんだよ。」

でも、今、お宝なんて、何も見えないから、罠なんて無いわよ。」

「はあく? 何を根拠にそんなこと考えるのよ。」

「アハハハ・・・。海賊のカンだよ。カン。」

「ええ! 呆れたわよ、そのご都合主義は・・・。」

それで、どうなの、茉莉香。向こうに何か見えるの?」

「うん。うん。」

茉莉香は岩の上にたどり着いて周りを見回している。

「それでどうなのよ。」

チアキが結果を知らせるように、催促した。

「う〜ん。何もないわよ。」

黒い岩が、ずっと奥まで続いているだけよ。

その奥は行き止まりのようね。」

茉莉香がすこし落胆して言った。

「う〜ん。どうしてでしょうねえ。」

お墓なら、ここが玄室のはずなのですけどねえ。」

グリューエルが茉莉香の言葉を受けて、そう言った。

『ふ〜ん。やっぱりそうかあ。』

それで、お前たちは、いったい何者なの?』

チアキは、そう思いながら、黒い岩に近づき、その表面に触れた。

「うわ〜〜!!!」

「きや〜〜!!!」

「ああ〜〜!!!」

三人は同時に悲鳴を上げた。



チアキ、茉莉香、グリュールエルの三人は、激しい光を浴びたように感じて、目を閉じた。激しい光で意識が遠のき、そして何か、長い夢を見ているような気分になった。

次の瞬間、正常に戻ったことに気が付くと、三人はお互いに顔を見合わせた。

「見た？」

「見ましたわ。」

「あなたたち二人にも、見えたのね。」

「チアキちゃん。これは、いったい……。」

「後でちゃんと説明するわ。」

それまでは何も見なかった、洞窟の中は何も無かったって、ことにしておいてね。」

「わかったわ。」

「分かりました。」

「じゃあ、帰ろうか。」

「はい。」

三人は、洞窟の中を戻って、石碑の前にたどり着いた。

「石碑の前まで来たけれど、これからどうするの？ チアキちゃん。」

「たぶん、大丈夫。」

そう言って、チアキは石碑に手を当てて、開けと念じた。

チアキがそう念じると、入ってきたときと同じようにチアキの体が石碑に吸い込まれ始めた。

「ほら、茉莉香。手を……。」

「あ、はいはい。……。」

茉莉香は、チアキと手をつなぎ、石碑の中へ入り始めた。

「ほら。グリューエル。手を……。」

「はい。茉莉香さん。……。」

グリューエルも茉莉香に続いて、石碑の中に入って行った。

次の瞬間、三人は、石碑の向こう側、ギルバートやスカーレットたちの前に、手をつないで姿を現した。

#### 4 エマの願い

茉莉香たち一行は、アメージング族のコロニーに戻った。

すでに帝国軍の警備部隊により、コロニーは制圧され、安全が確保されたと言う連絡があったので、戻ることができた。

やがて、コロニーの貴賓室に集まった、茉莉香、チアキ、グリューエルらの一行に、警備部隊の士官から、状況報告が行われた。

「アメージング族を尋問しましたが、彼らは、ハピネス財団の兵士に武力でコロニーを占領され、家族を人質に取られたため、彼らの言うことを聞いていたと言っております。」  
「それは、本当か。ハピネス財団の方は何と言っている。」  
スカーレットが聞いた。

「生き残った者は、ほぼ同様のことを言っております。」

「そうか……。」

「それから、アメージング族の女性から面会の要請が来ております。」

「医者に診てほしい者がいるので、医者を派遣してほしいと言う要請を直接、姫様にお願ひしたいと言っております。」

「なんだ、医者だと。けが人か？」

「いえ、医者に診てほしいのは臨月の妊婦だそうですが、帝国軍との戦闘にショックを受けて、体調が急変したそうです。」

「それは、エマじゃないかしら。彼女、妊娠していたんでしょ。」

「面会希望の人は、エマ本人じゃないのね。」

チアキが言った。

「はい。妊婦の母親だと言っております。」

やがて、一人の女性が、茉莉香たちの前に現れた。

「初めまして。族長ステファンの妻、シルビイです。

このたびは、姫様や、キャプテン茉莉香様を、大変危険な目にあわせ、心からお詫び申し上げます……。」

「前置きは良いわよ。エマがどうしたの？」

チアキが、聞いた。

「どうか、エマを助けてやってください。

あの子は、私たちのために、このコロニーのために、自分がここで子供を産んでみせると言つて、パートナーを探しに出かけて行つたのです。

お蔭で身ごもりましたが、今、様子が変わつて、母子ともに危険じゃないかと心配です。どうか、無事に子供が授かりますよう、お力添え下さい。」

「分かりました。医者を行かせます。

ねえ、スージーたちに連絡して、患者さんのところへ案内して……。

戦闘でのけがが人の治療は、もう済んでいるでしょう……。」

茉莉香が、船員に指示をした。

「それにしても、あのパーティで彼女と知り合つただけで、彼女がそんな決意を秘めて出席していたとは気付かなかつたなあ。」

茉莉香が言つた。

「でも、エマさんがそんなに思いつめていらした事情が分かりませんわ。

お差支えなければ、お話しただけませんか。」

グリユーエルが聞いた。

「はい、このコロニーには、ずいぶん前から医者がおりません。

そのせいもあつて、年頃の若い男女はほとんどこの星を出て行つてしまい、ついに子供も生まれなくなつてしまいました。

エマは、自分がこの星で子供を産むことにより、この流れを変えようとしたのです。

『族長の娘がやつて見せない、誰もついて来ない。』と言つて。」

「お医者さんなしの、自然分娩に挑戦しようと言われたのですね。」

「そうです。昔はそれが当たり前だったので。

しかし、まれに不幸なことが起きるので、今は敬遠して、誰も挑戦しようとはしなくなりしました。そんな危険なクジを引く必要はないと言つて……。」

「なるほど。わかりました。

さすが、彼女は、族長さんのお子さんですね。」

グリユーエルが言つた。

「あのう、それで、お見舞いができるならば、私もエマに会いたいんだけど……。」

茉莉香が言つた。

「ありがとうございます。エマも皆様たちに会いたがっておりました。実は、そういうエマの気持ちを皆様に直接にお伝えしたいと思つて、御面会をお願いしたので……。」

## 5 エマの出産

「もう、お見舞いの面会は、大丈夫よ、

容体も心配ないわ。妊婦さんの気持ちも落ち着いたし……。」

スージー医師の言葉に従つて、茉莉香たちは、産室に入った。

「いらつしやい。」

それで、いよいよ始まるよ。もう全開だ。

さあ、一族の女たちを呼び集めておくれ。」

一族の年配の女性がそう言うのと、産室の内と外は少し騒がしくなった。彼女が助産婦の役割を務めているようだ。

ただし、茉莉香たちは、彼女が言った言葉の意味が分かっていなかった。

「エマ、久しぶり。大丈夫なようで、よかつたわね。」

エマに再会した茉莉香が言った。

「エマ、久しぶり。」

やつぱり、臨月のお腹つて、こんなに大きくなるんだね。

あなた、細すぎるくらい細かったのね。」

チアキが言った。

「エマさん、お久しぶりでございます。」

グリユーエルが言った。

「お見舞いありがとうございます。」

ああ、ああ、・・・」

そこまで言った時に、エマが苦しみだした。

「あの、先生。エマさんの容体が悪化したのでしょうか？」

グリユーエルが慌てて言った。

「大丈夫よ。今のは、陣痛よ。いよいよお産が始まるわよ。」

スージー医師が、少し微笑んで言った。

「ええ！・・・お産。」

グリユーエル、茉莉香、チアキの三人は、すこし、たじろいでいた。

もちろん、三人とも身近な人の出産の場に立ち会った経験は無い。特に、グリユーエルは、王家の間は代々人工子宮『薔薇の泉』から誕生してきたため、その経験ができるはずも無かった。

それどころか、自分たちがこのまま産室に居てよいものか、心配になってきた。

その時、病室の外から、元気のいいリリーの声が聞こえた。

病室の外には、大勢の人が集まっている気配がしている。

「はい。立ち合いの人は、この容器の消毒液に手と腕をひじまでつけてね。3秒間よ。

それから、こつちの自動乾燥機で手と腕を乾かしてね。

タオルが何かで、手を拭いちゃだめよ。

そして、手が乾いたら、何も触っちゃだめよ。アンダースコートにも触っちゃだめよ。

赤ちゃんに触れたい人は、特にね。」

やがて、大勢の女性たちが、部屋に入ってきた。

アメージング族の女性たちだけでなく、弁天丸の女性乗務員やスカーレット、キャサ

リンまで、一緒に入ってきた。

「ええ!？」

みんなどうしたの？」

茉莉香がびつくりして、訳を聞いた。

「この一族のシキタリでは、出産のときに大人の女は全員、妊婦のもとに集まるのだそうです。そして、無事、赤ちゃんが産まれるように祈り、応援するのだそうです。

私たちも、是非、力を貸してほしいと頼まれて……。」

スカーレットが、少し顔を赤らめて、答えた。



「さあ、姫様たちはどうなさるかね？」

助産婦役の女性が言った。

「私たちも、ここでエマさんが無事ご出産なさるよう、応援します。

私たちも、もう大人ですから……。」

まだ十六歳のグリューエルが、決意を込めた力強い声で答えた。

「そうですね。」

チアキも同じように力強く答えた。

「私も、そ、そうですね……。」

茉莉香も、気持ちの動揺が収まっていないことは隠せなかったが、応じた。

「そうかい、ありがたいことだね。」

聖王家の姫様たちが導いて下されば、きっと健康な赤ちゃんが授かるさ。」

「あれ……？」

先ほどの『陣痛』というものは、すぐに収まってしまうものなのですか？」

グリューエルが、エマの様子の変化に気が付いて、質問した。

「陣痛は、はじめは一定の間隔で周期的に起こるものですよ。」

「フフフ……、姫様は出産をご覧になるのは初めてですね。」

「はい。」

グリユーエルはそう言つて、顔を赤くして下を向いてしまった。

グリユーエルだけでなく、チアキや茉莉香や、そのほかの弁天丸の女性乗組員も、全員が初めての経験だった。

「出産どころか、臨月の妊婦の方をこの目で見たのは今日が初めてなのですか……。」  
「では、姫様にとつても今日は良い経験になりましたよ。」

「私たちは、みんな女ですからね。フフフ……。」

アメージング族の年配女性たちは、口々にそう言つて余裕の微笑みを浮かべた。後輩の女性たちを教育するような気分なのだろう。

「ねえ、トム。胎児の様子を診察してくれないかしら。」

医師のスージーが、同じく医師のトムに言った。

「わかりました。今、診察します。」

トムはそう言うと、目にゴーグルのような装置をつけて、右手に持った棒のようなものをエマのお腹にそつと当てて、撫でまわした。

「大丈夫ですよ。胎児は、頭から子宮口に入っています。」

へその緒からの血流も正常です。」

「よかった。」

「よかった。逆子（さかざい）じゃないよ。」

アメージング族の年配女性たちは、口々にそう言つて、微笑みを浮かべた。

しかし、まだ妊婦のエマは、少し不安そうだった。

「トム、ほら、妊婦さんにも胎児や子宮内の立体映像を見せてあげて。

妊婦さんの気持ちを安定させるのも医師の仕事よ。」

「はい。では、リレイさん、立体ディスプレイのスイッチを入れてください。」

「はい。」

リレイの返事を聞いて、トムは棒のようなセンサーでもう一度、妊婦のおなかをなで始めた。

次の瞬間、リレイが持った手鏡のようなものから、妊婦の眼前の空間に、体内の断層映像が浮かび上がった。立体画像はカラーではなく、白黒の映像だった。

トムがセンサーを動かすと、それにつれて、胎児の頭、手、足が見えてくる。またたく間に、画像は合成されて、頭の大きな胎児の全身の立体映像が表示された。

「ああ、赤ちやんだ。」

チカチカと光が点滅して、動いているのは心臓かしら……。

「この子、生きているのね。」

映像を見て、エマは涙ぐみ始めた。彼女だけではない。その場にいる若い女性たちはみな、感動に震えていた。

次の瞬間、陣痛が襲ってきた。

「うううう……」

私、サトシの子供を産むのよ、サトシの子供よ。だから、頑張るわ。」

エマは、自分に言い聞かせるように、そう言つて、陣痛に耐えていた。

それからは、怒涛のような時間が流れた。

陣痛は次第に激しく連続してきた。

立ち会つた女性たちは、エマの苦しむ声を聞き、自分も同じような苦しみを体験しているような気分になりながら、『無事、生まれますように』と、ただひたすら祈つた。

「私、サトシの子供を産むのよ、サトシの子供よ。だから、頑張るわ。」

エマは、うわ言のように、同じ言葉を繰り返していた。

やがて、助産婦役的女性が言つた。

「よし。胎児の頭が見えてきた。もうすぐだ。」

父親を呼びなさい。」

すぐにサトシが現れ、エマの側に来て、彼女の顔を見ながら手を握つた。

「エマ、頑張つてね。もう少しだから……」

「ああ、サトシ。来てくれたのね。」

ねえ、私、私、サトシの子供を産むよ、サトシの子供よ。だから、頑張るわ。」

エマは、同じことを何度も言っていた。

「さあ、みんなで応援だ。」

エマ、プツシュ、プツシュ！」

「プツシュ、プツシュ！」

その場にいた女性たちが一斉に叫んだ。弁天丸の若い女性乗務員たちも、茉莉香も、チアキも、グリユーエルも、女たちは声を合わせて叫んだ。

「オギャー。オギャー。」

胎児は、頭が外に出るとすぐに泣き声を上げた。

そして、ついに子供が生まれた。

「大丈夫です。健康な赤ちゃんです。」

スージー医師が手早く新生児を診察してそう言いつつ、へその緒を切断した。お産婆役の女性は、スージーにその役目を譲ったようだった。お産婆

「エマ、頑張ったわね。ごらんなさい、あなたの生んだ赤ちゃんよ。男の子よ。」

「はい。……」

「さあ、父親の役目だよ、ほら、こうやって頭を支えながら……」

お産婆役の女性が、そう言ってサトシに生まれたばかりの赤ちゃんを託した。

「はい。……」

そう言いながら、サトシは緊張してこわばった姿勢のまま、腕の上で小さな生まれたばかりの赤ちゃんを抱いた。そして言った。

「この子は、僕の息子です。」

父親が真つ先に生まれた子供を抱いて、親子であることを宣言するのが、一族のシキタリだった。

「よし。よく言った。おめでとう。」

「エマ、サトシ、赤ちゃん、おめでとう。」

「おめでとう。今日から、三人家族だね。」

一族の女性たちが、一斉に、親子三人を祝福した。

「おめでとう。」

弁天丸の若い女性たちも、茉莉香も、チアキも、グリユーエルも、女たちは声を合わせて祝福した。

赤ちゃんは、その後、産湯（うぶゆ）で体を洗われた。

その赤ちゃんを見ようと、弁天丸の若い女性乗務員たちが産湯の周りを取り囲んだ。

「うわゝ。男の子なんだあゝ。」

「私、男の子の全身、初めて見るのよねえゝ。」

「ホントかしら……。」

みんな、先ほどまでの緊張から解放されつつも、まだ興奮していた。

産湯の後、赤ちゃんは白い布にくるまれて、エマのところに連れてこられた。

「さあ、おかあさん。赤ちゃんだよ。」

後産の処置も済んで、ようやく落ち着いたエマは、満面の笑みで、自分の産んだ子を抱いた。

赤ちゃんの様子がすっかり変わっていた。生まれたばかりの「あかちゃん」の体はかなり青白く、普通に見る赤ちゃんの様子とは違っていたからだ。

それが、今は、身体一面が真っ赤になっている。だから、新生児のことを「赤ちゃん」と言うのかと納得したくらいに。

エマが赤ちゃんを抱く姿を見ていたグリユーエル、茉莉香、チアキは、感動した。

なんというか、赤ちゃんを抱くエマの姿は神々しかった。エマが赤ちゃんに向ける笑顔は、深い喜びや子供への慈しみの気持ちが体中から湧き上がっているようだった。

「なにか、良いにおいがありますわ。」

グリユーエルが言った。

「気のせいかなあ。赤ちゃんと一緒にいるだけで、私たちもうれしくなって、元気が湧いて来るよね。」

チアキが言った。

「ねえ、触つても良い？」

茉莉香が聞いて、エマが肯いた。

「ほら。こんなに小さい赤ちゃんでも、手にはちゃんと小さな指があつて、キッチンと爪まで生えているのよねえ。」

そういつて、茉莉香は、赤ちゃんの手を触つた。

「ああ！ 赤ちゃんの手が、私の指を握つたよ。」

「うわ〜！ 意外と力強いんだねえ、びっくりだよ。」

赤ちゃんの小さな手は、茉莉香の人差し指の第一関節、つまり爪の辺りを握るだけの大きさしかなかったが、その小さな手が茉莉香の指を握つた姿は、とても愛らしかった。

「まあ、茉莉香さんたら。ズルいですわ、真つ先に赤ちゃんを触つて……。」

「そうよ。茉莉香、抜け駆けよ。」

「ナハハ……抜け駆けは、私の特技でして……。」

一方、務めを果たしたスージー、トムそしてリリーの三人は、産室の隣の部屋で休憩していた。

「はい。どうぞ、お茶を召し上がって下さい。」

リリーが二人に紅茶を勧めた。

「ありがとう。」



それで、どうだった？ リリイは、出産のこと、どう思った？」

スージー医師が聞いた。

「はい。感動です。」

お仕事の緊張が解けて、今頃、涙が出てくるくらいです。」

「そうよね。何度体験しても、感動よね。」

そして、スージーはトムの方を向いて言った。

「でも、トム。あなたは違ってたでしょ。」

ちゃんとわかっているんだからね。」

青白い新生児が妊婦の体の中から出てくるところを見て、気持ち悪いと思っていたで

しょ……。」

スージーが、そう言つてトムを見た。

「いえ。そんなことないです。僕も感動しました。」

「ウソツキ。男の医者はみんなそう思うのよ。バカだから……。」

ねえ、リリイ。この人の顔、ウソをついている顔でしょ。」

リリイは、スージーとトムの二人の顔を見比べた。

「さあ、どうでしょうか、ウフフ……。」

「あ〜！ あなた、トムの肩を持つ……。いつの間に……。」

その日の晩に、族長主催の祝いの宴が催された。族長夫婦に初孫が生まれたことを祝う宴だ。もちろん、コロニーの住民たちも10年ぶりの子供の誕生に大喜びだ。

茉莉香、チアキ、グリューエルの三人は、宴の主賓としてもてなされた。このため、弁天丸の出航は、明日とされた。

その一方で、弁天丸と帝国軍の警備隊は、この晩も警戒を緩めてはいなかった。姫を人質に取られるような失態を繰り返すことは許されないからだ。

もちろん、警備隊は、アメージューグ族に対しても気を許していなかった。祝宴の料理や飲み物に対して、チアキたちの目の前で嚴重な毒物検査を行って、チアキの不評をかうほどだった。

やがて、宴も最高潮と盛り上がっている頃に、グリューエルは宴の場を抜け出して、コロニーの入り口にやってきた。星空を眺めるためだ。

空には、この星ならではの鮮やかな星々が輝いていた。

その中で、彼女は、銀河の中心核の向こう側にある星、つまり帝都クリスタルスターの方角を眺めて、こうつぶやいた。

「アレックス様、私、今日一日でずいぶん大人になりましたわ。」

## 第三十九章 未踏宇宙の先駆け・弁天丸

## 1 試験休み

弁天丸は、サンタ・マリア星の調査を終えて、帝都に帰還した。

茉莉香、チアキ、グリユーエルは、再び静かな大学生としての生活を取り戻した。

といつても、サンタ・マリア星での出来事について、ゆつくり話す時間は無かった。三人は、大学の単位認定のための試験を受けるため、大忙しだったからだ。

帝国女学院大学特別コースの試験は、ペーパーテストではなく、教官たちによる口頭試問の形で行われる。これは、元来は、お勉強にあまり熱心でない王女様やお嬢様たちを救済する方法でもあった。

それでも試験は試験。恥をかきたくなければ、勉強するしかない。特に、茉莉香は、試験では、自分はチアキやグリユーエルと比較されると思うと、勉強せざるを得なかったが……。

「あ、あ〜！ 今日で、やっと終わったナア。明日から試験休みかあ。

私、口頭試問って初めて受けたけれど、結構、厳しかったねえ。」

茉莉香は、軍の制服姿のまま、腕を上げて背中を伸ばしながら、言った。

三人は、久しぶりに大学のカフェテリアでお茶の時間を楽しんでいる。

「そうよねえ。なかなか鋭く突っ込んだ質問が飛んで来たよねえ。」

茉莉香の話にチアキが応じた。

「でも、楽しかったですわ。」

わたくしも、久しぶりに学生らしい暮らしができましたわ。」

グリューエルが微笑んだ。

「いや〜あ。グリューエルにはお世話になったナア。」

ありがとうね。」

もう、本を始めから読んでいる時間がなくなつて、要点だけ教えてもらつて、さあ〜。

あれがなかったら、落第だったよ〜。」

茉莉香が、そう言つてお茶を飲み干した。

「お役にたててうれしいです。」

グリューエルは、そう言つて微笑んだ。

「ごきげんよう、チアキ様」

「ごきげんよう、茉莉香様」

「ごきげんよう、グリューエル様」・・・

そう言つて、三人がカフェテリアでくつろいでいるところへ、帝国女学院の女子大生

たちが、次々と集まってきた。

たちまち、おしやべりの花が咲いてゆく。

会話の中心は、やつぱり茉莉香だった。

「茉莉香様。今日も軍の制服をお召しになっていらつしやいますね。

私、以前から申し上げたかったのですが、茉莉香様の制服、とてもよくお似合いですわ。」

「そうですわ。その御姿、なんというか、凛々しいと言うか、端正と言うか、華麗と言うか……」

「やつぱり、『カッコイイ』としか言えませんわ。」

「あら、あら、それは街のワカモノ言葉ですわ。お控えなさつて……。」

「いやあ、私のこと、お誉め頂いてありがとうございます。」

でも、みなさん、そんなに私の方を見つめないでくださいよ。

私、軍人と言うより、海賊ですから、皆さんにそんなに見つめられるは慣れてないんですよ……。」

茉莉香は少し顔を赤くして、答えた。

「まあ、茉莉香様……。」

「フフフ……。」

茉莉香の恥かしげなしぐさを見て、茉莉香を囲むお嬢様たちは、ますます茉莉香の魅力のとりこになっていく。

茉莉香は、誰に対しても丁寧な話を聞いて、気配りの行き届いた言葉を返している。特に勇気を振り絞って茉莉香に話しかけてきた子には、必ず、こう言う。

「私のことを、茉莉香って呼んでください。」

もちろん、そう言われた子は、『茉莉香様とお友達になれたなんて、夢のようですわ・・・』

と大喜びだ。

だから、茉莉香と言葉を交わした女の子は、一瞬で茉莉香のことが大好きになり、ますます茉莉香と話したがる。

茉莉香はここでも大勢のお嬢様に囲まれるようになってきた。

そんな茉莉香の様子を、グリユーエルとチアキは、微笑んで眺めていた。

「結局、茉莉香さんの周りは、白鳳女学院と同じような雰囲気になってきましたわね。」  
「そうよね。」

そのうち『マリカサマ〜ア!』っていう、例の掛け声がでるようになるわよ。」  
「きつとそうですわね。うふふふ・・・」

その後、茉莉香、チアキ、グリューエルの三人は、帝国女学院を出るとそのままチアキに同行して、王宮のチアキの部屋に入った。

試験も終わったので、約束していたサンタ・マリア星の話をしたいから一緒に来てほしいと、チアキが言ったからだ。

「それで、何から話そうかな。」

チアキが言った。

「許されることなら、マリア様ってどんな方なのか、教えてほしいなあ。どうだろうか？」

茉莉香が即答した。

『さすが、茉莉香さん。銀河聖王家の秘密にズバリ、切りこんできましたわ。』

それはたぶん、グランマやサーシャさんにつながる秘密のはずですわ。あの星で、マリア様の名前が出てきたとき、私は、最初は、グランマご本人かと思いましたが。』

グリューエルは心の中でそう思った。

「さすが、茉莉香。核心に切り込んできたわね。

いいわよ。母上の許可はもらっているから。

でも、あらかじめ言うておくけど、それは第一級の王室機密。命がけの秘密よ。

茉莉香、もちろんその覚悟があるわよね。」

「ナハハハ……。改めて聞かれると恥ずかしいけど……。

私、チアキちゃんの側にずっといるって約束しているでしょう……。」

「そうね。グリューエルももちろん、良いわね。」

「はい。」

二人の意志を確かめると、チアキは、銀河聖王家のマリア王女の話を語り始めた。女王や姉から聞いたことだけでなく、自分で調べたことなども含めて、すべて話した。

（エピソード2 「マリア王女の伝説」 参照）

「ええ……。それじゃあ、サーシャは、宇宙マフィアの大ボスの実の娘だから、銀河聖王家の血も引いているってことになるのかあ。

なるほどなあ……。

でも、これで、いままで不思議だったことがはつきり理解できるよね。

やっぱり、サーシャは、本物のお姫様だったのかあ。」

茉莉香が言った。

「それにしても、マリア王女様って、すごいオテンバさんですね。

これが王家の伝統でしょうか……フフフ」

グリューエルは、マリア王女の話にはあまり驚いたようすは示さなかった。

「そうよね。母上や姉上のさらに上に行く、オテンバ娘がいたのよね。」



そして、グリユーエルは、自分の聞きたかったことを聞いた。

「それで、チアキ様。

私も一つお伺いしてよろしいでしょうか？」

「どうぞ。」

「サンタ・マリア星の『神殿』と言われる例の洞窟で見たあの黒い岩、あれはなんですか？」

「ご存じなのでしょう、あの岩の正体を」

「グリユーエルは、なんだと思う？」

「一種の人工知能だと思いました。」

チアキ様が、あれに触りながら、何かなさっているように思いましたもの。

ただ、きつと洞窟の奥に本体の装置があるはずと思ったのですが・・・」

「そうですね。どこまで行っても、あの黒い岩が続いていたものね。」

「ああ、そうかあ。それで思い出したよ。」

あれって、大きさは違うけれど、軍艦の認証装置についている黒い球形のデバイスに似ているよねえ。

新しい弁天丸にも装備されていて、チアキちゃんがあればあれを触りながら封印を解除したでしょう。(第三十一章「セレニティ王国占領作戦」参照)

まさか、あれと同じモノってことは、アリかなあ……。」

茉莉香が、目を輝かせながら言った。

「茉莉香、あなたって、やっぱり鋭いわね。」

その通りよ。軍艦の認証装置にも同じような材料から作られたものがセットされているわ。」

「それで、あの岩の正体は、いったい何なの？」

「正確に調べた訳じゃないけど、私の見た限りでは、『ブラック・マター』に間違いないと思うわ。」

「『マター』と呼ぶのですか。『ロック』や『ストーン』と呼ばずに……。」

グリューエルが、少し驚いて言った。

「グリューエル、あなた、鋭いわね。言葉使いひとつで、正解にたどり着くのね。」

「ええ!? どういう意味？」

あれは、やっぱり岩と言うか、小さいのは石というか……そんなものでしょう?」

茉莉香が不思議そうにつぶやいた。

「あれは、銀河帝国の科学力で作られたものではないのよ。」

そう言う意味では正体不明の「物体」よ。ただの黒い自然石のように見えるけどね。」

更に言うくと、どこかの星の科学文明が作った人工物かどうか、わからないのよ。」

だから、これもひとつの生命の形ではないかと極論を言う軍の研究者もいるくらいよ。」

「では、ブラック・マターは、独自の意思を持っているのですか？」

グリューエルが真剣な表情で聞いた。

「それは、『意思』と言う言葉の定義にもよるわね。

だけど、人間と情報のやり取りが出来ることは分かっているの。それから、膨大な情報を記録していることもわかっていそうよ。その情報を利用するために、軍艦にセツトされているのよ。

それから、一番大事なだけで、銀河聖王家に忠実に仕えてくれることも、長年の経験で信じていいそうよ。」

「それじゃあ、あの洞窟の岩壁に書かれていた碑文が、その正体を探る手掛かりになるのかしら？ だったら、私達、大発見だよねえ。」

茉莉香が目を輝かせて言った。

「そうねえ、研究者に資料を渡すよ。」

「その必要はありませんわ。」

グリューエルがきつぱりと言った。

「ええ？ どうしてなの？」

茉莉香が驚いて聞いた。

「あの碑文は、サトシさんがお書きになったものです。」

私、あの方に直接お聞きして確かめましたわ。」

「ええ！　なぜ、サトシの仕業だとわかったの？」

「あの晩の祝宴の際に、サトシさんに、あの碑文は貴方たち一族の誰かがお書きになったのかとお聞きしたら、あの方、あっさり自分が書いたとお認めになりましたから。」

「ええ〜!?　でも古代ルーン語で書かれていたんでしよう？」

チアキが聞いた。

「古代ルーン語の本を読んで、勉強されたそうですね。本物らしい碑文を作るために。」

ウフフフ……」

少し嬉しそうに、グリユーエルが答えた。

「どうして、そんなことがわかったの？」

「それはもう、あの碑文には、古代ルーン語の文法や単語の綴りが間違っている箇所がたくさんありましたから。」

特に、『星』つまり恒星を男性名詞と勘違いして碑文を書いていらつしやいましたから。

星は女性名詞です。この感覚は現代にも引き継がれています。

だって、私たちは、星系の恒星を『母星』と呼んでいますでしょう。」

「なるほどねえ、現在の銀河標準語では名詞の『性』なんてあまり意識していないけどね。」

チアキがうなずいた。

「それに、ご存じのように、古代ルーン語では、男性名詞と女性名詞では、名詞の複数形の綴りとか、動詞の活用形が違います。」

本物の古代ルーン人なら、そんな間違いをすることはありませんもの。」

「ナハハハ……。『ご存じ』じゃないんだけどねえ……。」

茉莉香が苦笑いした。

「それにしても、グリューエルは、やっぱりすごいなあ。」

一緒に来てもらって良かったよ。」

茉莉香は、グリューエルの方を向いて、満面の笑顔で感謝の気持ちを表した。

「そうよね。さすが、語学の得意なグリューエル。本領発揮ね。」

チアキも感心した。

「私も、少し茉莉香さんのお役にたてて、うれしいです。」

グリューエルが、少し恥ずかしそうに微笑んだ。

「それでさあ、チアキちゃん。」

洞窟の奥で私たちが見た、アンドロメダ航路にある星々の美しい姿とか、その銀河間の大航海をしている銀河帝国の大船団の映像は、いったいどういうことなの？

あの石は、未来の映像も見せるのかなあ。」

茉莉香が言った。

「ええ!! 銀河帝国の大船団、ですってえ？」

茉莉香さんは、本当にその姿を見られたのですか？」

グリューエルが驚いて、聞き返した。

「そっだよ。だって、女王陛下の船だけでなく、私の弁天丸もいたから、間違いようがないよ。」

茉莉香は、自信を持って言った。

「ふう……む。」

「どうしたの？ グリューエル？」

茉莉香が聞いた。

「私たちは、同じ夢というか、同じ映像を見たのでしょうか？」

「ええ？ もしかして、グリューエルの見たものは、私と違うものだったの？」

「ええ。違います。」

私が見たものもアンドロメダ航路の星の海を往く大船団なのですが、それは、太古に

この銀河に渡ってきた『神々』の船とも言うべき、ものすごい数の移民船団でした。

それが太古の移民船であることは、なぜか、はつきりわかりました。」

グリューエルが、アゴに手を当てて考えながら、言った。

「ねえ、チアキちゃん。これって、どういうことなの？」

「なるほどねえ。やっぱり教えられたとおりだね。」

私ね、ブラック・マターの取り扱いを教えられた時に注意されたことがあるのよ。

つまり、アイツから情報を取り出すときに、自分の感情や願望をアイツに読まれてし

まうと、自分の感情や願望に沿って加工された情報をアイツが送ってくるそうよ。

だから、気をつけなさいってね。」

チアキが言った。

「なるほどねえ。だから、私の願いやグリューエルの興味に沿ったお話になったわけな

んだ。なるほどねえ。」

茉莉香が言った。

「そうならば、洞窟の探検に行つて、怪物を見たとか言つて逃げてきた人がいた訳が分かりましたわ。」

これは、ブラック・マターから見れば、一種の自己防衛とも考えられますわね。」

グリューエルが言った。

「それなら、行方不明になった人たちはどうなったのかなあ？

洞窟には、海賊の骸骨さんとか、何もなかったよね。

自分の行きたいところへ飛んで行っっちゃったのかなあ……。」

茉莉香が言った。

「茉莉香。あなたが見た洞窟の姿が、本当の姿ならそうでしょう。」

チアキが言った。

「でも、本当でしょ。」

だって、明るくなったのも、チアキちゃんが願ったからでしょう？」

「あの明るくなった洞窟内の様子自体が、私たちがアイツから送られてきた映像を見ていただけのことかもしれないでしょう。」

チアキが言った。

「ええ!? それじゃあ、本当は……。」

「茉莉香さん、本当は洞窟の両脇には骸骨とか死体がずらりと並んでいたのですよ。」

私には、それが見えていましたよ。

気が付きませんでしたか？」

グリユーエルが、深刻な表情で言った。

「ええ……! 本当!？」



茉莉香がそう言うと、チアキとグリユーエルは堅い微笑を浮かべた。

「……………」

茉莉香はごくりと生唾を飲み込みながら、二人を無言で見つめた。

そして、次の瞬間、叫んだ。

「ああ〜！ また〜、私が怖い話が苦手なのを知っていて、遊んだでしょ。

もう、やめてよね。」

「ウフフフ……………」

「予想より早く、気が付いたわね。茉莉香。

もちろん行方不明は、行方不明のままよ。何もわからないわ。」

しかし、茉莉香は逆襲に出た。

「ねえ、チアキちゃんの場合は、どんな映像を見たの？」

自分だけ言わないなんて、ずるいよお、教えてよ。」

「私は別に、アイツの正体は何者かって、聞いただけよ。」

だから、アンドロメダ銀河から来たって、返事をしてきたわ。」

「それだけなの？ なにかチアキちゃんの願いが叶う夢を見ていたのじゃないの？」

茉莉香は、いたずらっ子のような笑顔で、チアキを見た。

「見てない。何も見てないよ。」

「チアキは、少し顔を赤らめて否定した。」

「ああ、やつぱり、何か見たんだ。ねえねえ、教えてよ。」

茉莉香は、チアキの否定にもかかわらず、追求を緩めない。

「見てない。何も見てない。……とか、そんなチャラチャラした夢なんか見てない！」

「ええ!!? 今、チアキちゃんなんて言ったの? 聞こえなかったよ?」

「何も言っていないわよ。」

「ウフフフ……。何も教えてくれなくとも、私、だいたい分かるなあ。」

星の海を旅する大船団と一緒に航海でしょ。

だから旅行に関係のあることよねえ。」

旅行で、チアキちゃんの大好きなロマンチックなヤツ、というと……」

「私も、答えが分かりました。」

グリーユールが微笑んでいった。

「予め言っておくけど、私、新婚旅行とかそんなチャラチャラしたこと、考えてないから

ね。もう、よしてよね、茉莉香。」

「ああ。チアキちゃん、答えを自分で言ったよ。」

茉莉香が笑った。

「言っていない! それは違うって言っているでしょう!」

チアキは、顔を真っ赤にして強く否定した。  
「ウフフフ……。」

## 2 実験航海

翌日、茉莉香は弁天丸に乗船した。

弁天丸は、帝都クリスタルスターの衛星軌道上まで、茉莉香を迎えにやってきていたので、茉莉香はシャトルから直接に弁天丸に乗船できた。

「やあ、みんな。ちよつと久しぶりだね。」

「船長。試験、どうでしたか？」

乗務員たちから声がかかる。

「まあ、ぼちぼちというかあ。赤点で追試はないだろうと言うか……。」

茉莉香は、ブリッジのクルーと各々の近況報告を兼ねたあいさつを交わしていた。

それが一段落したところを見計らって、ギルバート、シュニツァー、ミーサが今後のスケジュールについて相談があると言ってきた。

茉莉香は船長室で話を聞くことにした。

「それで、いよいよ帝国軍から依頼された『実験航海』を始めるのですね。」

茉莉香が言った。

「そうです。実験航海の最初は、やはりアンドロメダ航路に関連するものです。」  
ギルバートが言った。

「ええ!?」 アンドロメダ航路の先駆けをするの？

私、ヒガン星団のその先、ずっと遠くまで行って見たかったのよね。」

「いえ、それは、まだまだ時期尚早です。」

弁天丸の出版、つまり有人船でアンドロメダ航路における航海の安全性を実証する段階になるには、まだまだ準備不足です。」

「そうなのか。新航路を拓く準備は大変なのね。」

「そうです。銀河間の宇宙（うみ）は、人類にとって未踏どころか、未知の宇宙です。」

ギルバートが答えた。

「それで、話を元に戻すと、弁天丸が行う最初の実験航海は、有人船として初めてダーク・マターの宇宙（うみ）を飛んでみることにしようだ。」

もちろん、航海は、推進剤を使う通常航海、ワープによる超高速跳躍。そして時空トネルの三種類の方法で飛んで、その結果を分析するためのデータを集めることだそう  
だ。」

シュニツァーが言った。

「ダーク・マターの宇宙（うみ）、ですか？

うーん……

わたしだって、銀河系の星々の円盤の外側には、ダーク・マターが取り巻いていることは知っていますよ。それが巨大な重力源になっていることも知っていますよ。

それに、アンドロメダ航路は、実際は銀河間をつなぐダーク・マターの細長く伸びた腕に沿って点在する星の間を渡っていくルートであることも知っていますよ。」

「船長も、勉強しましたね。」

シュニツツアーがにやりと笑った。

「私だってもう大人ですから、勉強は人に言われなくとも、ちゃんとやるんです……でも、実際には、ダーク・マターは、素粒子状になって宇宙を漂っているだけで、星の形になっているわけではないんですよ。」

「だから、そこには何も無いはず。そうでしょう?」

「その通りです、茉莉香さん。」

ギルバートが言った。

「じゃあ、そんな何も無いところを弁天丸が飛ぶことに、なにか意味があるのですか?」  
「茉莉香さんは、ダーク・マターを構成する素粒子は、物質を構成する原子とぶつからない、つまり、われわれの体を通り抜けても、何の害も無いはずということはご存じでしょう。」

「そうですね。重力波エンジンの船長用テキストにもそう書いてありました。」

「でも、ごくまれに原子とぶつかって、ガンマ線を放って発光するのではないかという説も御存じですよ。」

「知っています。確率が低すぎて、実際に観測に成功した例がない現象のようですが……。

……

ええ！ まさか？ 弁天丸で飛んでみて、それを観測というか、体験しようと言うのですか？」

「いやいや、無人機のテスト航海や、実験動物を乗せたテスト航海では、すでに何回も安全な航海に成功しています。その際にも、有害なガンマ線の発光現象は観測されず、生物にも無害という結果が出ています。」

「じゃあ、なぜ、弁天丸が真っ先にダーク・マターの宇宙を飛ぶのですか……。」

「それは、海賊だからです。」

ギルバートは、微笑みを浮かべてそう言った。

「ああ、そうか。」

それは、誰かが最初に実際に飛んで見せなければならぬからですね。

だったら、それは、『未踏の宇宙の先駆け』である、海賊の出番ですね。」

「そうです。」

「わかりました。弁天丸、いきましよう。」

茉莉香は、楽しくて仕方がないと言う笑顔で、そう言った。

「それで、茉莉香。」

二人で仲良く話が盛り上がったところで、悪いのだけど……

ミーサが、話し始めた。

「ええ!!? ミーサ、どうしたの?」

「言いくいんだけどねえ、私、今回の航海は遠慮させてもらうわ。」

船医の方は、スージーとトムが代わってくれるから大丈夫よ。」

ミーサは、用意周到なところを見せた。

「ええ? ミーサ、どうしたの? 理由を聞いてもいいかしら。」

「茉莉香、私は、なんのために結婚したと思っているの……。」

そう言つて、ミーサは、自分のお腹をやさしくなでた。

「ええ! 赤ちゃんができたの?」

「前から言っているでしょう、茉莉香みたいな可愛い女の子が欲しいって……。」

「ナハハハ……とにかく、ミーサ、本当におめでとう。」

「ありがとう。ウフフフ……こういう御祝を言われるのって、やっぱり嬉しいものねえ。」

ミーサは、とてもうれしそうだった。

「ところで、ミーサ。ひとつ聞いて良い？」

もちろん、茉莉香は、絶対に聞いてはいけないことを十分承知していた。

ミーサは、外見は三十歳を少し過ぎたように若々しく見えるが実際は何歳かということ、そして、そのような実際の年齢で子供が生めるのはどういう訳かという、一番の謎は絶対に聞いてはいけないことを……。

「なに？」

「弃天丸の就業規則に、産休ってあったのかなあ？」

「失礼ねえ。ちゃんとするわよ、百年前から。」

あなたのお父さんとお母さんも、産休を取ったそれぞれのおばあさんが弃天丸で生んで育てたのよ。」

「ナハハハ……。」

茉莉香は顔を赤くした。

「もつとも、梨理香は、産休を取らずに弃天丸を辞めて、船を降りたけどね。」

あなたを地上で生むためにね。

それで、私も梨理香のように地上で子供を産もうと思つて……。」

「え……！」



でも、ミーサ、産休が終わったたら、弁天丸に戻って来てくれるんでしよう？」

「分らないわく、そんな先のこと。」

「……」

ミーサもミーサの航路（みち）を往く。

### 3 グランドウッド医科大学

リリイは、弁天丸での『修行』を終えてから、グランドウッド医科大学の看護学科に入学するために、帝都の同大学を訪れ、その女子寮に入居した。

翌日の入学式を終えると、リリイは、パジャマ姿で女子寮の自室のベッドに寝転んで、くつろぎながら、電子ブックで、もらったばかりの大学案内を眺めていた。

「うわく、すごく広いキャンパス。施設も充実しているわあ。」

大学の中に湖があつて、ヨットも乗れるのかあ、もちろん宇宙ヨット部もあるわ。

やっぱり帝都の大学は、海明星の白鳳女学院大学とは、ひとケタ違うわねえ。

ここにしておかたわ。……」

そう言いながら、リリイは上機嫌で、更にページをめくっていった。

「大学の歴史かあ……あんまり関心ないけど……」

リリイはページを飛ばしていったが、ふと一枚の写真が目にとまった。

「あれえ、こんなところに、ミーサ先生が写っている・  
・そんな訳ないかあ。」

この写真の人はよく似ているけど、えくと、三百年くらい前の大昔の人かあ。  
なになに・・・この人は、大学教授、もちろん医学博士。偉い人だねえ。」

リリイは写真のタイトルだけを読んでそう言った。

「でも、私たちのミーサ先生は、グランドウッド医科大学とは関係ないよねえ・  
・。なんとって、宇宙海賊船弁天丸の船医なのだから・・・。」

そもそも、そんな話は聞いていないし・・・。」

リリイはそう思って、ミーサ先生によく似た人が写っているページの詳しい記事を読  
み飛ばした。

「・・・そう言えば、トムとスージー先生のファミリーネームは、『グランドウッド』だっ  
たわねえ。」

もしかして、この大学の創建者である、グランドウッド一族となにか関係あるのかし  
ら。

そうならば、これは他人事ではないわねえ・・・。」

リリイは、トム・グランドウッド医師のことを、親しみを込めて『トム』と呼んでい  
た。

トム医師に個人的な関心があるリリイは、携帯型タブレット端末で『グランドウッド家』を検索して、調べ始めた。

「やっぱりねえ。トムのお父様だけでなく、お母様、お祖父様、お祖母様も、有名な医者様かあ。

トムは、正真正銘のグランドウッド一族という訳ね。

「すごいわねえ……。」

リリイは、タブレットで調べる手を止めて、大学案内を表示した電子ブックに目を移した。

「ふーん。グランドウッド一族は、研究業績もすごいのね。

……

この大昔のミーサ・グランドウッドっていう人の名前も、大学の業績リストに論文がいくつも出てくるわ。主な研究業績は、銀河系の生物毒の研究かあ……。なんか怖そうねえ。

……

そう言えば、ミーサ先生のファミリィネームは、何だっけ？

確か、聞いたような気がするんだけど、思い出せないなあ……。そうだ、白鳳女学院 ヨット部の卒業記念アルバムに乗っているはずよねえ……。」

リリイはアルバムの記録編を表示させて、ミーサのフルネームやプロフィールを探した。

「あつた。やつぱり『グランドウッド』だ。

それと、年齢は学校の先生紹介のプロフィールでは、32歳だったよね。

それで、ヨット部の練習航海の乗員名簿では・・・う、う、う、なんと29歳。

そうだ、思い出したわ。

ハラマキが、ミーサ先生の年齢を32歳と書いた乗員名簿を見せたら、29歳に直されたと言っていたのよね。

『いくら、先生の年齢は自己申告が原則と言ってもねえ・・・』

と言って、ハラマキも笑っていたよね。

ウフフ・・・まあ、ウチラの学校はこんな調子だったよねえ。

なんか楽しい思い出だねえ。

そう言えば、練習航海では・・・」

リリイは、楽しい思い出に浸り始めて、それ以上、ミーサについて調べるのをやめてしまった。

#### 4 褐色矮星からの通信

「有意通信を受信しました。」

超高速通信による『救難信号』のようです。

発進場所は、M-19003球状星団のT-3と呼ばれる褐色矮星の付近と推定されます。」

辺境を管轄する銀河帝国第七艦隊司令部の管制官が、一通の通信を受け取った。

「ええ!? 『救難信号』だってえ？」

そもそも、M-19003って何処にあるんだ? そんな星団、聞いたことがないぞ。

場所はどこだ?」

第七艦隊司令部の管制室長が驚きの声を上げた。

「銀河系と大マゼラン雲の、だいたい中間地点のあたりです。」

「たとえ海賊のような命知らずでも、そんな遠いところまで、行った船は無いはずだろう。」

そもそも、その星団には人類は住んでいないのだろうか?」

「そうですね。」

あの星団は、観測の結果、明るく輝く輝くスペクトルG型の恒星が少なく、大半は質量不足で自力での核融合反応が維持できず、T型の褐色矮星となった恒星ばかりだと、観測されていますから。」

発信場所と推測されるT-3も、褐色矮星の一つです。」

「だから、人類からすれば、わざわざ開拓に行く魅力が乏しい星団という訳だなあ。それで、通信は、だれが発信しているのか？」

その内容はなんだ」

「今、解析中で、まだわかりません。」

かなり微弱で雑音が混じった通信ですので、通信内容の解析に時間がかかっています。す。

．．．

今、解析が終わりました。通信の音声が出ます。」

「緊急通信、緊急通信。」

救援を乞う、救援を乞う。

われら、マンチュリア軍、新天地移住船団、第212船団から305船団です。

M-19003星団内に停泊中に、正体不明の海賊船団に襲われています。

彼らは、銀河標準語で降伏を呼び掛けてきましたが、交戦中です。

銀河帝国軍に、救援を乞う。救援を乞う。

ビー．．．．．。

「これ以後の内容は、通信妨害により判別できません。」

「うくん、どうやら、救難信号の発信者は、マンチュリア軍の残党かあ。

帝国との戦闘の前に逃げ出したヤツラが、そんなところに隠れていたのか……。」  
「そのようですね。」

「しかし、救難信号を受信したとなれば、必ず助けに行くのは船乗りのオキテ。

問題は、誰があそこまで行くのか……ということかあ。

司令官、どうされますか？」

管制室長は、話を聞きつけてやってきた第七艦隊司令官、アイゼンハワー将軍に聞いた。

「うくん……まさかワナではないだろうが……」

そこまで考えて、今、すぐにあそこまで航海できる準備が整っている船と言えば、

……

ハハハ、考えてみれば、これは、簡単なことだった」

将軍は、そうつぶやいて、微笑んだ。

## 5 新しい依頼

弁天丸のブリッジでは、ブラウン中尉が資料の説明をしていた。

「それで……、帝国軍がダーク・マターの宇宙（うみ）で行った、無人機による実験航

海のデータがこれです。

データによれば、人間の健康に有害な事象は発見されていません。」

「それは良かったわね。当然と言えば当然だけど……。」

ルカが言った

「しかし、超高速飛行の場合、エンジンの精密な制御が支障なく出来るかという点では、いくつかの問題も発見されています。」

「ええ!? どういうこと? 問題ないって話だったじゃないの?」

クーリエが言った。

「弁天丸の皆さんには、『問題ない』という程度ですが……。」

それで、まず、時空トンネル航法の場合ですが、トンネルにユガミが生じて、タッチダウン空域の制御にかなりの誤差が生じます。ダーク・マターの強い重力が、エンジンの重力波に干渉している可能性があります。」

「それは、要するに出口の位置が高重力源の方に引つ張られてズレる現象が起こると言うことか。ブラックホールの時みたいに……。」

シュニッツァーが言った。

「原理的には、同じ現象と考えられます。」

ただし、ダーク・マターの宇宙(うみ)の方が、質量が大きく重力は強いのですが、ブ



ラックホールのように狭い範囲の空間に急激な重力の傾斜がある訳でなく、広大な空間に緩やかな傾斜があるわけでして・・・現象はかなり違うと考えられます。」

ブラウン中尉が言った。

「ふーん。あんまり怖がる必要はないというの？」

クーリエが言った。

「そう思いたいです。」

「そこは、わからないわけね。」

ルカが言った。

「はい。実際に飛んでみないと・・・。」

「でも、無人機は遭難して行方不明になったわけではないでしょう。」

「はい。無事に戻ってきました。」

ただ、帰還予定日から大幅に遅れました。

それで航跡を確認すると、かなりジグザグに飛んで方向を修正しながら、なんとか帰ってきたようです。」

「苦労したのね。機械は機械なりに・・・。」

「そうですね。」

また、時空震を利用する従来型の超高速跳躍飛行でも、タッチダウン地点に、かなり

のずれが生じています。」

「それは困ったわね。」

でも、そのたびに航路を修正していけば、大丈夫よね。」

クーリエが言った。

「はあ……。正しく航路の修正ができれば、問題はありません。」

「その言い方だと、何か問題がありそうね。」

ルカが言った。

「はあ……。実は、ダーク・マターの宇宙（うみ）の中には、時空ナビがうまく動かないようです。あれは銀河系内の航海用として開発されましたから、その外ではまだうまく動かないようです。」

ダーク・マター全域の重力分布と言うか、重力地図がまだできていませんので……。」  
ブラウン中尉が、すこし言いにくそうに言った。

「つまり、ダーク・マター自体は全体としてみれば銀河の星々より質量が多く、重力源としても大きい訳だよな。」

「そうです。」

「……ということは、ダーク・マターの宇宙の中では、銀河内の高重力源からの重力波が把握しづらく、時空ナビでは現在位置がつかみにくいと言うのか……。」

シユニツツアーが言った。

「そういうことです。ダーク・マターの宇宙内で正確に動く時空ナビのソフトウェアを作るためには、ダーク・マター宙域内の正確な重力分布図が必要です。

これを作るには、無人機のデータだけでは、まだ足りません。

今回の弁天丸の航海で、データをもつと集めてほしいというのが、帝国軍からのお願いです。」

「じゃあ、弁天丸の航海の安全は、どうやって保障されるの？」

時空ナビに頼れないなら、目隠しで航海するようなものでしょう？」

それまで黙って話を聞いていた百目が、たまらず、口を挟んだ。

「いや・・・そうではなくて・・・。」

ダーク・マターの宇宙の中でも、光は問題なく透過するので・・・。」

ブラウン中尉が、百目の気迫に押されて少し額（ひたい）に汗を浮かべながら、言った。

「それじゃあ、結局、最後に頼るのは自分の目と言うわけかあ。」

百目が言った。

「正確に言うと、弁天丸は、昔ながらの『天測航法』で、ダーク・マターの宇宙（うみ）を飛ぶことになるのね。」

ルカが少し辛辣な語調で言った。

「はあ……、そうとも言えます。」

でも、星座観測ソフトは、ダーク・マターの宇宙（うみ）を飛ぶために、改良されていますから……。」

ブランウン中尉が、苦しそうに説明した。

「今回の航海は10万光年にもなるのよ。こんな長距離を『目測』で飛べというの〜」  
ルカが呆れて言った。

「やれやれ……」

三代目がため息を漏らした。

クルー達が、そういうため息を漏らしているところへ、茉莉香とギルバートが、ブリッジにやってきた。

「ねえ、みんな。聞いて、聞いて。追加で、お仕事の依頼が来たわよ。」

茉莉香が、ブリッジの船長席から話し始めた。

「帝国軍の総司令部経由の依頼なんだけど、もともとの依頼主は第七艦隊よ。」

「また、演習のお相手？」

第七艦隊からの依頼なんて、今度の航海に関係があるの？」

クーリエが聞いた

「オオアリよ。」

予定航路を少し変更して、M—19003星団にまず寄って、遭難者を救助してほしいっていうのよ。

そこから救難信号が発せられたそうよ。」

「そんな遠いところに、なぜ遭難者がいるのか？」

M—19003なんて、そもそも誰も言ったことが無いはずの、遠い星団だろう。」

シユニツツアーが茉莉香船長に聞いた。

「そうね。」

でも、救難信号を発したのは、マンチユリア軍の新天地移住船団の一部だそうよ。

彼らから、正体不明の海賊船団に襲われているって、帝国に救難要請が来たらしいわ。」

「マンチユリア軍のヤツらは、そんなところに隠れていたのか。」

でも、それは、畏じやないか、復讐をたくらんでいるとか……。」

シユニツツアーが聞いた。

「その可能性は、全く無いとは言えません。」

でも、救難信号が出た以上、救助は船乗りの義務。

そして、辺境宇宙の担当は、銀河帝国の第七艦隊です。

そこで、第七艦隊から、その付近の宇宙を航海する予定の弁天丸に依頼が来たんです。」

ギルバートが答えた。

「まあ、弁天丸Ⅱ号が行くのが一番早いし、武器も試作品とはいえ並みの帝国軍の艦隊よりスゴイものが装備されているからねえ……」

クーリエが言った。

「まあ、こんな遠くの宇宙（うみ）への航海は帝国軍の艦隊でも嫌がるから、私達、海賊船に依頼が回ってくるんでしょう。」

でも、頼まれたのだから、私、このお仕事、受けます。」

「船長は相変わらず、決断が早いねえ。」

百目が、嬉しそうに言った。

「だって、頼まれたお仕事は絶対に断らないのが弁天丸のモットー、それが一流の海賊の証（あかし）でしょう。」

それに儲けなくちや。」

「ナハハハ……」

百目が、茉莉香のような苦笑いをした。

「さあ、宇宙海賊は、未踏宇宙の先駆け。」

弁天丸、行きましよう。」  
茉莉香が言った。

準備を整えた弁天丸は、M-19003星団にむかつて出発した。

## 第四十章 海賊の取引

1 ダーク・マターの宇宙（うみ）

「まもなく時空トンネルの出口に到達します。」

今回の航海で操舵手を勤める、コータロー・モーガンが言った。もちろん彼は帝国海賊モーガン一族のひとりだが、辺境の航海（海賊）経験が豊富なため、今回の航海のためにはスカウトされてきた。

「ふーむ……。」

M—19003 球状星団って、どんな星なんだろうねえ？」

茉莉香が言った。

「可視光や電磁波の観測では、ごく普通の球状星団のようですが……。」

でも、安全を見込んで、弁天丸の時空トンネルの出口は、M—19003 星団の外延部です。

もちろん、航海の最終目標はT—3と呼ばれる褐色矮星の付近でしょうが、いきなりその星を目指すわけにはいかないからです。M—19003 星団は海図も無い、未踏の宇宙（うみ）なので……。」



操舵手のコータローが答えた。

「そりゃ、わかっているけどね。」

「船長、今、M—19003球状星団の外延部にタッチダウンします。」

弁天丸は、M—19003球状星団の外延部にタッチダウンした。そして、クルーは、直ちに周辺の星々や宇宙空間で発生している重力波や電磁波を観測し始めた。

「ビー、ビー、ビー」

いきなり警報が鳴った。

「なに？ 何が起こったの？」

茉莉香が聞いた。

「船長、重力の傾斜が予想と異なった異常値を示しているのよ。」

航海士のルカが言った。

「へえ。このあたりを境に重力の傾斜が違うのかあ。」

初めて見たねえ、こんなところ。」

三代目が驚いて言った。

「モニターを見ると、このあたりは、まるで山の稜線よねえ。」

ルカは、重力傾斜を3次元映像で表示したモニターを見て、そう言った。

「興味深いですね。初めて観測される現象です。」

おそらく、銀河系からアンドロメダ星雲を近づけ、大小マゼラン雲を遠ざけているダーク・マターの重力の均衡点がこの辺りにあるのでしょうかねえ。」

ブラウン中尉が言った。

「なるほどねえ。」

それで、このあたりの宇宙（うみ）は宇宙船（ふね）の航海にとって危険な所なの？  
入ったら抜けられないようなヤバイ宇宙（うみ）とか……。」

茉莉香が、質問した。

「さすが、船長。」

あくまでも、船の航海にとってどういう影響があるかという実用的な視点から、このあたりの宇宙（うみ）を理解しようとしていますね。」

ギルバートが、茉莉香を誉めた。

「ナハハハ……。」

ギルバートさんにそんなに褒められる、ちよつと恥ずかしいと言うか……。」  
茉莉香は、顔を赤くして照れていた。

「なるほどねえ。実用的な視点ですか。」

「……うむ。考えてみます。」

ブラウン中尉はそう言って、手元のデータを見ながら考え始めた。

「船長。M—19003 球状星団の観測結果がでるわよう。」

クーリエが言った。

「うおー！ こりや、球状星団ではなくて、まるでヒモ状星団だよ。」

銀河系方面からの観測結果はアテにならないねえ。」

百目が言った。

「でも、銀河系から見ると、球状星団にみえたんでしょ？」

茉莉香が聞いた。

「このあたりの空間での重力レンズ効果で、そう見えたのでしょうか？」

ブラウン中尉が言った。

「うーん、また難しいことを言わないで……。」

茉莉香が顔をしかめた。

「それで、モニターを見ると、M—19003 星団の先は、水素ガスの雲がかすかに続いていっているのね。」

雲の先をたどると……なるほど、これは、大小マゼラン星雲へ続く道、さしずめ『マゼラン航路』というわけね。」

クーリエが言った。

「マゼラン航路と気安く名付けしないで欲しいわ。」

このルートが、安全な『航路』だとは限らないでしょう。慎重に考えないと……。」

ルカが言った。

「そうねえ。ルカの言うとおりだわ。」

でもここまで無事たどり着いたのだから、さつそく、海難救助の作業を始めましょう。クーリエ、救難信号を発した、マンチュリア軍の新天地移住船団宛てに通信を送ってみてちょうだい。」

彼等は、今、何処にいるのか、様子を聞いてね。」

茉莉香船長が指示を出した。

## 2 疑惑の船団

「今、M-19003星団の外延部にプレドライブ反応がありました。」

反応のパターンから見て、時空トンネルの開口部が形成されていると思われる。マンチュリア軍の戦艦「黒い稲妻」号の通信士が、ウイン艦長に報告した。

「ええ！ 時空トンネル航法が出来る船がやってきたのかあ！」

それなら、タツチダウンしてくるのは、銀河帝国軍の新鋭艦に違いない。

全艦、警戒体制を取れ。」

「了解しました。」

あの、今、開口部から船がタッチダウンしてきました。」

「どこの船だ。帝国軍の第七艦隊か？」

「トランポンダーを受信しましたが・・・これは！」

「どうした？」

「あの船は、宇宙海賊船、弁天丸二世号だそうです・・・。」

「ええ！ 時空トンネル航法が使える海賊船なんて、聞いたことが無いぞ。」

トランスポンダーの偽装かもしれん、気を許すな。」

「はい。」

「それにしても、どうして、こんな時に、こんなところへ海賊船がやってきたのか。」

「この船はヤツラの先駆け、仲間なのか？」

「艦長、弁天丸から交信要請が来ています。」

「よし。通信に出るぞ。相手はたった一隻だ。予定通りの作戦で行く。」

こんな時に、時空トンネル航法のできる船が来るなんて、なんと運の良いことか。

神に感謝だ！」

やがて、黒い稲妻号のモニタースクリーンに加藤茉莉香船長の姿が現れた。

「初めまして。宇宙海賊船、弁天丸船長、加藤茉莉香です。」

「こちら、マンチュリア軍戦艦「黒い稲妻」号の艦長、エイドリアン・ウインです。

私どもの救難信号に応えて、駆けつけて頂いて感謝いたします。」

「いえいえ、海難救助は船乗りの義務。当然です。

まずは、そちらの船の正確な位置を教えてください。

それから、緊急に対応が必要なことはありませんか？

遭難した経緯と、そちらの船の現状を教えてください。」

そう言いながら、茉莉香はウイン艦長の落ち着いた態度に違和感を覚えていた。

『この人、なにか、隠しているわねえ……』

「まあ、船団が航海に出発した事情は、加藤船長もご存じと思いますが……。」

ウイン艦長は、事情を長々と説明し始めた。

「……それで、目的地を目指して航海していましたが、我々はこのあたりの宇宙空間で、急に時空トンネルから放り出されてしまいました。」

その原因は、私たちには分かりません。

なんとか無事に通常空間に戻ったのですが、船の現状を点検すると、故障が発生して修理が必要なのが分かりました。このままでは自力での航海が出来ません。

そうして困っているところを海賊に襲われました。

そこで救難信号を出したというわけです。」

「海賊の方はどうしたのですか？　今も交戦中ですか？」

長い話を遮って、茉莉香が聞いた。

「いや、なんとか撃退しました。」

それから、緊急に必要なことと言えば、船にケガ人や、病人がいて、医者 の 応 援 と 医 薬 品 の 補 給 が 必 要 で す。

具体的には……。」

ウイン艦長は、長い時間をかけて、よどみなく事情を説明した。

「そうですか。では、座標を確認次第そちらに接近します。」

茉莉香船長は、長い話に嫌な顔一つせず耳を傾け、通信を終えた。

通信が切れてから、茉莉香はブリッジのクーリエに向かって言った。

「ふー。なにかから始めようか。……」

まず、クーリエ。

現在までの状況を帝国軍の第七艦隊に連絡しておいてね。」

その後、茉莉香は顎（あご）に手を当てて、考えながら言った。

「どう思う？」

遭難したと言うわりには、あまりにも落ち着いていて……。

なーんか、ヘンなのよねえ、あの人たち。」

「やっぱり、何か企んでいるんでしょうねえ。」

彼らマンチュリア軍はまだ銀河帝国と戦争しているつもりでしょう?」

百目が言った。

「それなら、彼らの狙いは、まずこの弁天丸だろう。」

目的地まで旅を続けるには、船が、特に時空トンネル航法ができるこの船が、ノドから手が出るほど欲しいはずだ。」

シユニツツアーが言った。

「私も同意見です。」

かれらは、この船を乗っ取るために白兵戦を仕掛けてくると思っています。」

ギルバートが言った。

「そうねえ、気をつけなくては。」

それから、スージー。彼らの中に怪我人とか病人がいると言う話もウソかしら。」

茉莉香が、ミーサの代わりにブリッジにいるスージー医師に聞いた。

「それは分かりません。」

事前に病気の内容とかケガの部位とかを記述した患者のデータを送ってくれば、医者としての嘘は見分けられるかもしれませんが・・・」

「その話は、ドッキングブリッジをつなげさせる口実かもしれない。白兵戦部隊を送り



込むためだ。」

シユニツツアーが言った。

「まあ、そうなつても大丈夫ですよ。

そういう時のためにミーサ先生がいろいろな仕掛けを用意してくれたのは、皆さんご存知でしょう。ミーサ先生の代わりに、私がちゃんとやりますからね。」

スージー医師が言った。

「あつ。交信要請がまた一件。これは、帝都からの秘話回線を使っているわよ。

だれかしら。

発進人は、メイフラワー・モーガン。宛て名は、ギルバート・モーガン。

ねえ、この人、お祖母さん？　メイフラワーって名前は、もしかして……」

クーリエがギルバートの方を見た。

「お察しの通り、私の祖母ですよ。

クーリエさん、『二丁拳銃のメイフラワー』というあだ名の女海賊のことを聞いたことありませんか。

祖母のあだ名です。祖母は、若い時はとてもヤンチャな女海賊だったんですよ。」

「ええ！　やっぱり、あの二丁拳銃のメイフラワーなの！」

「クーリエ、知ってるの？」

私、知らなかったよ。」

茉莉香は初めて聞く話に驚いてクーリエの方を見て、そしてギルバートの方を見た。

「その話は後ほど、ゆっくりと……。」

それで、祖母はどうやら秘話回線での通信を望んでいるようですから、通信は私の部屋に回してください。」

ギルバートが微笑んで言った。

やがて、弁天丸は、M—19003星団のT—3と名付けられた褐色矮星の外延部にタッチダウンした。

「船長、遭難信号を発した船団の存在をレーダーがキャッチしたわ。」

クーリエが言った。

「うわあ、船の数が多いねえ。212隻もいると表示されているよ。」

百目が言った。

「こんなにたくさんさんの船、いったい、どうやって救助するつもりなの？」

遭難が本当だったら、弁天丸だけでは遭難者の面倒を見切れないわよねえ、船長。」

ルカが、感情を交えない声で言った。

「船長、黒い稲妻号から交信要請です。」

「加藤船長、黒い稲妻号艦長のウインです。」

「こんなところまで、駆けつけてくださって感謝します。」

ウイン艦長が相変わらずの冷静な表情で、モニター画面に現れた。

「いえ、お気遣いなく。」

それで、さっそく救助の段取りをご相談したいのですが……。」

茉莉香も答えた。

「それならば、黒い稲妻号のブリッジにお越しいただくか、そちらのブリッジにお邪魔して、じっくりご相談したいのですが……。」

何せ、ご覧のようにこちらの船も多く、それぞれ事情が複雑なもので……。」

「そのことなのですが、皆さんは今後、銀河系に帰還されるおつもりですか？  
それとも、このまま旅を続けたいとお考えですか？

それをまず教えて頂きたいのですが……。」

茉莉香艦長が、核心を突いた質問をした。

「……遭難した以上、もはやマゼラン星雲までの旅は続けられません。」

皆さんの力を借りて、銀河系に帰還するしかないと思っています。」

ウイン艦長は、静かに言った。

「それなら、あなたは軍人、この船団は軍の艦隊なのだから、降伏を宣言して頂こう。  
軍人は、帝国軍規に従って捕虜として扱われることを保障しよう。」

乗員の救助活動はそれからだ。」

シュニツツアーが言った。

「私たちは遭難者ですから。もう戦闘も何もありませんよ、いまでは。」

ウイン艦長は、苦笑して静かに言った。「降伏」と言う言葉は使わなかったが……。その時、通信用のモニターカメラの視野の外にいる百目が、意味ありげに船長やシュニツツアーに目で合図した。

船外の宇宙空間において、密かに弁天丸に接近している小型船の存在をキャッチしたのだ。

彼等は弁天丸がどういう返事をしようと、力づくで白兵戦を仕掛けるつもりだということが、これではつきりした。

もちろん、弁天丸では海賊のクルーが対空砲火や白兵戦の用意をして待ち構えていた。

「……」

一瞬、茉莉香が沈黙し、シュニツツアーを見た。

シュニツツアーは、敵が対空砲火の射程距離に入ったことを見極めて、船長に合図した。

これを見た茉莉香は、黙って『攻撃開始』の合図をした。

「撃て。」

シュニッツアーが戦闘開始を指示した。

弁天丸の対空砲火が一斉に発射された。接近していた敵の小型強襲艇は、次々と火を噴いている。

「ウイン艦長。お客様が来たようですので、お話は後ほど……。」

茉莉香は、わざとらしく皮肉を言って、通信を切った。

対空砲火は激しく続いているが、敵船の数は予想よりはるかに多かった。弁天丸は、まるで小さなムシの大群に襲われたような状態だった。

「ええ。いちいち撃墜しては、キリがないわ。」

これじゃあ、いずれ弁天丸に敵が侵入してくるかもしれないわよ。

ねえ、重力トンネルを前方に緊急展開。T-3の重力圏までショートジャンプよ。」

茉莉香が言った。

「なるほどね。」

シュニッツアーが言った。

「みんな、もうわかったでしょう。敵の小型船をみんな時空トンネルに巻き込んで、T-3に突き落とすわよ。」

あんな船じゃあ、褐色矮星の強い重力圏を突破できないでしょう。」

「時空トンネルの航路セット、完了。」  
ルカが言った。

「ついでに、ジャンプの間、ずっと弁天丸を高速回転させたらどうでしょうか。  
敵の兵隊さんが弁天丸にすがりつけないようにね。」

操舵手のコータロー・モーガンが言った。

「なるほど。それって、宇宙海賊船の白兵戦対策としては常識よね。」

クーリエが言った。

### 3 白兵戦

人工重力を備えた宇宙船では、船体を回転させても、内部の空間には船の回転で生じる遠心力の影響がない。従って、白兵戦対策としてこういう操船ができる。

人工重力の無い船でこんなことをやれば、船の中も大変なことになるが……。  
もちろん、こんな戦法をとることができるのは、海賊船だけだ。

帝国軍のような艦隊編成の軍隊では、こんな戦い方はしないとされる。なぜなら、敵の小型船には、味方の小型船つまり戦闘機が発信して戦うからだ。それに、回転しながら対空砲火を撃てば、戦闘機などの味方を誤射してしまうおそれもある。

「でも、これって、すがる男を振って、振って、振りまくる女のようなね……フフフ……」

ルカがそう言って笑った。

「弁天さまは、たしか女の神様よね。だから弁天丸には、ぴったりの戦法かも……。フフ」

クーリエもそう言って、笑った。

「さあ、みんなまとめて、お願い。」

茉莉香が言った。

加藤船長の指示で、弁天丸は、機体を高速回転させながら、ショートジャンプをした。「船長、まもなく通常空間に出ます。」

「よし、敵船の運動ベクトルも最大船速でT-3に向けて直進よ。」

「さあ、弁天丸、いきまゝす。」

弁天丸と敵の小型船は、T-3褐色矮星に相当に接近した通常空間に、かなりの高速でT-3に突入する運動ベクトルを維持したまま、タッチダウンした。

「さあ、機体を180度反転。そして、重力エンジン全開よ。」

T-3の重力を振り切るわよ。」

「アイアイサーー！」

操舵手のコータローが言った。

弁天丸は、重力エンジンを全開させて、T-3褐色矮星の強い重力を振り切った。

もちろん、敵の船も反転して推進剤を全力で噴射した。逆推進を掛け重力圏から離脱するためだった。しかし、敵船には、やや落下速度を落とす程度の変化しか生じなかつた。通常の推進剤による航法では十分な加速が得られなかつたようだ。

結局、弁天丸を襲つたすべての小型船は、T-3褐色矮星に落下していった。

「よし。うまくいったわ。」

百目、船内に異常は無いよね。」

茉莉香が言った。

「……うーんと、

船長、残念だけど、警報が出ている。侵入者がいるぞ。」

振り切られる前に弁天丸に侵入した敵がいるらしい。」

百目がモニターを見ながら言った。

「ええ〜！ あんな短時間のうちに侵入してきたの！」

クーリエが言った。

「じゃあ、お出迎えしなくっちゃねえ。」

キャサリン、よろしくね！」

茉莉香は、元セレニティ軍近衛隊のキャサリンに指示した。



茉莉香の指示を聞いて、キャサリンは無言でうなずいた。

彼女は、グリューエルの指示により、今回の航海では弁天丸に乗り組んでいる。

「ブリッジを指して敵が来るぞ。合図したら一斉に攻撃開始だ。」

キャサリンは廊下に出て通路を進むと、待ち構えている守備隊に指示した。

足音が近づいてきた

「撃てー！」

弁天丸側は、ビーム・ライフルで敵の侵入者を狙撃した。

ビームは命中したが、敵の進撃は止まらなかった。かなり装甲の厚い防護服なのだろう。

「敵は五人だ。一人もここを通すな。」

「ブリッジを守れ！」

たちまち守備隊に緊張が走った。

「よし、いくぞ。」

最初に、キャサリンが斧を持って飛び出した。海賊の猛者たちがそれに続いた。

艦内の戦いも、最後は対人格闘戦で勝敗が決まる。白兵戦という言葉がこの時代にも死語になっていないのはこのためだった。

「えーい。」

キャサリンが斧で先頭を行く兵士を切りつけた。

彼女の振り下ろした斧は、先頭の敵兵士にかなりのダメージを与えたが、敵はまだ抵抗を続けた。すかさず、キャサリンは斧を振りかざして、第2、第3の攻撃を続けていく。

「やあゝ。．．．」

ようやくキャサリンは敵を倒した。その時すでに彼女の防護服は血まみれだった。

「．．．．．」

鍛え上げた彼女は息を切らすことなく、無言でまわりの様子を見わたした。

すると、他の海賊たちも血まみれになりながら戦っていたので、すかさず、手近な戦闘に加勢した。

こうやって、たちまち三人の敵が倒された。

この時、格闘戦に加わらず後方に待機していた二人が、廊下を反対方向に走って行った。

「敵は、機関部へ向かった。追撃しろ。」

さらにキャサリンは無線を使って連絡を取った。

「機関部の守備隊、聞こえるか？」

そっちへ敵が行った。爆発物を持っているかもしれないから、ガンマ線プラスターを

「使え。」

ガンマ線ブラスターは、防護服を貫くガンマ線を放つ最新兵器である。その主な使用目的は、マンチュリアの生体兵器、すなわち人間爆弾の起爆装置を無効化させることだった。

この白兵戦の様子をブリッジのモニターで見守っていたシュニツアーと百目が声を上げた。

「あゝゝゝ！ 伏兵がいた。二人だ。」

「さっきの五人は陽動だったのか。」

「間もなく、こつちへ来るぞ！」

「私が相手をする。」

そう言つて、シュニツアーが立ち上がった。

その時、ブリッジのドアがブラスターで焼き切られ、敵が侵入してきた。

「動くな、動くと船長の命は無いぞ！」

二人の敵の兵士は茉莉香にブラスターの銃口を向けて言った。

かれら二人はすでに防護服のヘルメットを脱ぎ、少し身軽な姿になつてブリッジに突入してきた。

「あらら。ノックもせず私のところに入つてくるとは、ずいぶん失礼しちゃうわよ、

ねえ。」

茉莉香が、悠然と言い放った。

「何を言うか。船長、手を上げる。」

「それは、こつちのセリフよ。三つ数えるうちに降伏しなさい。」

それを聞いた敵の兵士たちの表情が険しくなった。

銃を突きつけられても茉莉香がまったく怯まないで、むしろ恐怖を感じたのだ。

たかが「女の子」のはずなのに、この落着きは何だと……。

「ワン、ツー、スリー！」

茉莉香はそう数えて、指をばちんと鳴らした。

敵の兵士は怯えて、茉莉香に向けて銃を撃った。

すると、茉莉香に向けて発射されたビームが、バチバチとバリアーに突き当たっては

じけた。

「バリアーだと……そう言う仕掛けか……それじゃ直接に人質として身柄を……。」

「うん!!? なんだあ!!? ……体が動かないぞ!」

「……お前たち、おれたちに何をし……た……ん……だ……く……。」

そう言いながら、二人の敵兵士は気を失って倒れた。

「兵隊さん。これは、ミーサ先生特製の神経ガスですよ。」

「・・・と教えてあげても、聞いてないかな? もう気を失っているものね。」  
スージー医師が言った。

「さて、百目さん、換気装置から解毒ガスを流して、空気を浄化してください。」

「予め解毒剤を飲んでいない人でも、十五分もすれば、全く影響がなくなるはずよ。」  
「了解。」

「それまでは、要注意よ。」

館内放送で、マニュアル通りに回避しているように、伝えてくださいね。」

「了解。」

百目が言った。

#### 4 海賊の登場

「さあ、船長。次はどうします。」

敵船が嘘をついていたのが分かった以上、報復のために敵船を全部沈めますか・・・。  
クーリエが言った。

「うーくん。あの船には、民間人が大勢乗っているのですよね。」

「だったら、その人たちをなんとか助けてあげたいよね。」

「この宇宙空間にこのまま留まっても、希望はないのでしようからねえ。」

「それはそうですが・・・。」

「分かっているわよ。クーリエ。」

弁天丸だけで、あんなにたくさんの船を武装解除することは出来ないよねえ。」

茉莉香も困っていた。

「あ、船長宛てに交信要請が来ました。

発、宇宙海賊船ブルックリン号、船長ダークマン。

うわあ、コイツが出てきたのかあ。

船長、気を付けてね。

コイツは、辺境宇宙で人身売買をやっている悪名高いゴロツキよ。

おおかた、遭難者を救助すると言う名目で誘拐して、奴隷として売り飛ばすことを

狙っているんでしょうね。」

クーリエが、口をゆがめて言った。

「分かったわ。」

茉莉香は、ひとつ深呼吸して、モニター画面に映像が出るのを待った。

辺境宇宙でもっとも金になる交易品は、エネルギー資源でも貴金属でも食料でもな

かった。古代社会と同じように、もっとも金になる交易品は、奴隷、すなわち人間だっ

た。

「お初にお目にかかる。オレは、宇宙海賊船ブルックリン号、船長ダークマンだ。」

モニター画像には、いかにも悪人風の、目つきが鋭く顔に醜い傷のある老人が現れた。

「初めまして。宇宙海賊船、弁天丸船長、加藤茉莉香です。」

茉莉香は、緊張しつつ、そう答えた。

「ガハハハ・・・初対面で、もう警戒されているねえ。」

オレは、自分では結構、善人の方だと思っっているが、この顔つきですいぶん損をしているからなあ。ガハハハ・・・」

ダークマンは、見かけによらず、明るく豪快な高笑いをした。

「ナハハハ・・・。」

茉莉香は、思わずつられて愛想笑いをしてしまった。

「おう、海賊ショーの評判どおりだねえ。」

愛想笑いでも、お前さんみたいなベツピンさんに笑顔を見せてもらうと、ちよつとうれしくなるねえ。

同じベツピンさんでも、マイラ・グラントのヤツなんか、用件だけ言うとお愛想笑いも世間話もなしですぐに通信を切ってしまうやがるからなあ・・・。

せっかく、おらつちがジョークを言っつて、笑わせようと待ち構えているのにさあ・・・。」

「・・・それで、あのおう、御用件はなんでしょうか？」

「おう、それぞれ。」

オラツちも、救難信号をキャッチして、救援に駆けつけてきたんだが、お前さんに先を越されてなあ。

でも、船の数が多くてヤツラの武装解除は大変だろうから、助太刀（すけだち）しようかと思つてなあ。俺の仲間の船も、そのうち、おおぜい、ここいらにタツチダウンしてくるだろうから、手数（てかず）はそろつてるぜ。

なにせ、マンチュリア軍のヤツラには、用心しないとなあ。ヤツラは、こつちがスキを見せれば、すぐに襲ってくるだろうからなあ。

だから、弁天丸の美人さんたちを危険な目にあわす訳にはイカンだろう。

まあ、危ないことは、俺たちに任せてくれよ。」

茉莉香は、困った。

確かに手助けは欲しい。しかし、こんな銀河の外延部まで「救援」にやって来てくれた相手は悪名高いゴロツキ。とても、信用できる相手とは思えないからだ。

茉莉香は、そつと、左隣のクーリエの方をみた。

もちろん、彼女は首を横に振っている。「断れ」と言っているのだ。

さらに困つた茉莉香は、右隣のギルバー・モーガンの方を見た。

ところが、彼は、肯（うなず）いて微笑んでいる。「申し出を受ける」と言っているのだ。



「ええ!? どうしてですかあ?」

茉莉香は、思わず声を出してしまった。ダークマン船長との交信が続いているにもかかわらず。

「茉莉香さん、船長同士のお話に、口を挟んで良いですか?」

彼は、船長としての茉莉香の立場を尊重して、了解を求めてきた。

茉莉香は肯いた。彼がなにかの解決策を考えていると思ったからだ。

「ダークマン船長。初めまして。ギルバート・モーガンです。」

「おう、話には聞いていたが、モーガン家の若様、メイフラワールの孫がお前さんかい。」

「はい。そうです。」

それで、船長の救援の申し出をお受けするには、条件があります。」

「ほう。なんだい、言ってみな。内容次第では聞いてやらないこともないが・・・。」

「はい。まず、第一に、船長にとつても、海難救助はボランテアですよ。こんな辺境、銀河の外延部の事故でも、それは同じですよ。そのことを確認してください。」

「まあ、そりやそうだなあ。」

ボランテアは、俺には似合わないと言っただろうがねえ」

「では、第二に、海難救助である以上、乗客乗員は全員、安全なところまで送り届けるんですよ。」

「うゝむ。まあ、そりゃあ、そうだよ。」

でも、俺がイヤダと言ったら、あんた、どうするかい？」

ダークマン船長は、ギロツと目を見開いてギルバートを睨んだ。

「戦いますよ。船長が率いる皆さん方と……。」

そして、船長の船は、必ず沈めて見せますよ。」

ギルバートは、真剣な表情でダークマン船長を睨み返した。

「フフフ……。いい度胸だ。」

よし、お前の言うとおりにする。約束は守る。乗客、乗員は全員送り届けるぜ。」

「……。という訳です。よろしいですか、船長。」

「あ、あ……。はい。ダークマン船長、ではお願いします。」

茉莉香がそう言うと、通信は切れた。

「おっと、後回しにしていたけど、黒い稲妻号のウイン艦長に、最後通告をしないとねえ。」

茉莉香は、通信を始めた。

マンチュリア軍はすぐに降伏し、シュニツツァーが武装解除の手順について相手の軍人たちと打ち合わせを進めていった。

その後、次々とタツチダウンしてきた海賊船も加えて、荒くれ者たちの船は、40隻

ほどになった。これらの船に対して、シユニツツアールが中心になって、誰が、敵のどの船に乗り込むか割り当てが決められた。

弁天丸ブリッジは、ようやく落ち着いた霧囲気になってきた。

「これでいいわ。全艦、戦闘体制を解除。次の指示があるまで休憩よ。」

茉莉香が艦内に指示を出した。

「ふう〜。ようやく遭難者の救済にメドがついたわね。」

「これでひと安心ね。」

しかし、その霧囲気はすぐにかき消された。

「ああ〜。大変なことを忘れていたわ。」

神経ガス本体と、皆さんに予め飲んでもらった解毒剤は、胎児に対する安全性がまだ証明されていないって、ミーサ先生から言われていたのよねえ。」

スージー医師はあわてて言った。

「船長。妊娠の可能性のある女性に、至急、検査をしないとイケません。」

ねえ、船長、至急、該当者に連絡してください。」

「ええ!! 該当者と言っても……。」

「いったい、『妊娠の可能性のある女性』って、どういう意味なの？」

まさか、あのことを……自己申告しろって言うの？」

茉莉香は、顔を赤くして戸惑った。

「あ、あ……。なんてことを言うんですかあ、船長。

なんでも男女の恋愛に結び付けて理解する女子大生、いや女子高生のレベルで、変な誤解をしていますね。もう……」

スージーが呆れて、言った。

「医者が『妊娠の可能性のある女性』というのと、閉経まえの女性全員と言う意味ですよ。もう、そんなに顔を赤くしちやって……。

『閉経』って言葉、意味わかりますよね。」

「あく、はい、わかっています。」

茉莉香は、ますます顔を赤くして答えた。

「もう、なぜ、そんなことで恥ずかしがっているんですかあ。

困りましたねえ。」

それじゃあ、私が、船長の代わりに艦内放送で言いますよ。良いですね……。」

スージーは艦内放送で、若い女性は、全員、検査を受けるために医務室に来るように伝えた。

「スージー先生、どうもありがとうございます。」

そう言つて、茉莉香は船長席に座つて、ほつとひと息ついた。

「いえいえ。」

「さあ、医務室に行かなくちゃ。」

スージー医師は、そう言つて立ち上がった。

そして、茉莉香の方を見て行つた。

「ん？・・・船長、なぜ座つているんですかあ。医務室に行きましょう。」

船長も検査を受けるのでしょうか？」

「えええ！ 私は後で良いから。みなさん、お先に。」

「なに言つているんですかあ。こういうことは率先垂範。いきましよう。」

「いやあ、私は別に・・・検査なんか・・・。」

「何、言つているんですか。サア、行きますよ。」

スージーは渋る茉莉香を引つ張つて、ブリッジを出て行つた。

「あくあく。茉莉香ちゃん、何を怖がつているんだかく。」

クーリエが、茉莉香が出て行つた方を見て、微笑んだ。

「興味深い問題ね。そういえば、私たち若い女性も医務室に行かないとね。」

ルカが言つた。

「ええ。でも、その前に聞いておきたいのだけだ。」

ねえ、ギルバートさん。船長にどこまで話しているんですか？

やっっているんでしょう？ ダークマン船長たちとの裏取引。」

クーリエが聞いた。

「わたしも、ダークマンの口から『メイフラワー』の名前が出た時に、ピンときたわ。

これは、海賊同士の取引があるってね。」

ルカが言った。

「そうだろうなあ。だいいち、彼らの到着が早すぎる。

ここは、普通の超光速跳躍で飛ぶと銀河から何か月もかかる遠隔地だ。だから、彼らは、救難信号を受信する前からここを目指して航海していたはずだ。」

シユニツツアーがそれに加勢した。

「当然、その目的は、いつのも営業。アレのはずだったよねえ。」

百目が言った。

「そうでしょうねえ。海賊なんだから。

それにしても、アイツ、うちの船長の前であんなに善人ぶつちやって……。

もう、笑い声を出さないようにするのに苦労したわよ。」

クーリエが言った。

それまで黙っていたギルバートが、弁天丸のクルーに対して言った。

「私は、茉莉香さんに、まだそんな仕事をさせたくないんです。それだけです。」

まだ、茉莉香には何も事情を話していないようだった。

「そうねえ。・・・気持ちには分かるけど・・・。」

クーリエがつぶやいた。

スージー医師は、茉莉香を引つ張って、医務室に入つて来た。すでに何人かの女性乗務員が医務室前の廊下に来て、待っていた。

「船長、嫌がつてないで、検査を受けてくださいよ。」

みんな、見えていますよ。」

スージーは、茉莉香を診察席に座らせた。

「検査つて、何をされるんですか？ 注射で血液を採るとか。」

「子供みたいないなことを言わないでください。」

妊娠の検査なら、昔から尿検査と決まっていますよ。

それと、今回、一番大切なのは、神経ガスの残留濃度検査です。この試薬のスティックを口にくわえて、唾液で濡らしてください。」

「ああ、よかった。注射はないんだあ。」

注射の苦手な茉莉香は、ほっと安心した表情を見せた。

「何、言っているんですか。まったく子供みたいですねえ・・・。」

もう、私は、船長のことを、とても心配しているんですよ。

私は、リレイからも頼まれているので、船長には継続的な診察が必要だと思つていましたからね。」

スージーが言った。

リレイは、弁天丸を下船する際に、医師としてのスージーに対して、茉莉香のことをくれぐれもよろしく頼むと言ひ残していった。

その理由として、「早朝に、茉莉香の部屋から男性が出てきたところを目撃した」と打ち明けたのだ。もちろん、それはずいぶん前のこと。弁天丸進水式の翌日のことだった（第三十章「グリユーエルの危機」参照）。

しかし、リレイは、単に「早朝」としか言わなかつたので、スージーは、最近の出来事だと受け取っていた。このため、スージーは茉莉香の健康状態に特に注意していた。

やがて、茉莉香が尿検査のために席を外し、そして試薬スティックを持つて戻つてきた。

「うん。尿検査の結果は陰性ですね。でも、船長も御存じのように、一度の検査で安心してはいけませんよね。」

それから神経ガスの残留濃度検査の値は、すこし高いですねえ。やっぱり、ブリッジが戦場になつたからでしょうか……。



念のため、船長に関しては、継続的な診察が必要という判定ですね。」  
「はい、分かりました。」

茉莉香が最初に検査をうけることになったため、医務室では、その後に検査を受けるため大勢の「若い女性」が待っていた。

このため他の乗員に、茉莉香とスージー医師とのやり取りを聞かれてしまった。茉莉香は、そのことをまったく気にも留めず、診察結果を了解して、ブリッジに戻った。

## 5 海賊の取引

マンチュリア人の船団の武装解除は、海賊たちの協力によつて速やかに終了した。

なぜなら、海賊たちが乗船してみると、船団の乗員の大半はコールドスリープ状態のクローン人間であり、船団の船に乗り組んでいた軍人の大半は弁天丸との戦闘で戦死していたからという。

その報告を受けて、茉莉香は安堵した。

そして、次は、弁天丸が、マンチュリア人の船団を、m—8801星団のニューアトランティス星に送り届けることになった。

それは、乗員のうち被支配階級の人々の多くが出発地である故郷へ帰りたいと願ったからだだった。また、ここ（M—19003星団のT—3）からニューアトランティス星

までは、銀河の外延を周回すると約6万光年もの距離があるが、時空トンネル航法のできる弁天丸にとって、そんな長距離を船団ごと輸送するのは簡単なことだからだ。

「ダークマン船長、お世話になりました。」

弁天丸、出航いたします。」

「ああ。無事な航海を祈っているよ。じゃあなあ。」

「ありがとうございます。」

「ああ、そうだ。」

お前さん、メイフラワーのヤツから、赤い宝石をもらっただろう。

良ければ、俺に見せてくれないかなあ。」

「はあく。これですか。」

茉莉香は、ポケットから「モーガンの赤」と呼ばれる宝石を取り出して、彼に見せた。

「へえ、そんなに大きくて光るスター・ルビーなのかあ。初めて見たよ。」

なにせ、メイフラワーのヤツは、俺がいくら頼んでも、宝石が『ケガレル（汚れる）』とか、『ヘル（減る）』とか言って、一度も見せてくれなかつたんだぜ。」

「そうなのですか。」

「ああ、死んだ亭主から贈られた宝石だから、アイツ、とても大切にしていたんだよ。」

「なるほど……。」

それでは、弁天丸、出航します。」

茉莉香は、帝国軍式の敬礼をして、通信を終了した。

「では、出航の準備、確認してください。」

「時空トンネルの航路セット、完了。」

「エンジン、異常なし。」

「時空ナビ、異常なし。」

「では、重力波エンジン起動。」

「時空トンネル、開口部発生確認。」

「では、弁天丸、いきましよう。」

多数の海賊船が見守るなか、弁天丸とマンチュリア人の船団は、亜空間へ消えた。

「弁天丸、巡航速度に達しました。目的地まで約6時間です。」

「と言っても、出口では天測をやって、誤差の修正が必要なんでしょうねえ。」

「しかたないだろう。それが今回の航海の目的なのだからなあ。」

「やれやれ。」

「船長とスージー先生は、もういいわよ。休憩ね。」

クーリエが言った。

「は〜い」とスージー医師が返事をして、自室に戻って行った。

「……」

茉莉香は、船長席に座ったまま動かず、黙って何か考えていた。

「船長、どうしたの？」

クーリエが聞いた。

「うん。」

ねえ、ギルバートさん、ちよつと話があるので、船長室に来てもらえませんか。」

「はい。」

二人は、ブリッジを出て行った。

茉莉香とギルバートは、船長室のテーブルに向き合つて座った。

「ねえ、ギルバートさん。」

私の知らないところで、ダークマン船長さんたちと何か約束をしていたのですか？」

「どうしてそんなことを考えられたのですか？」

「私、この仕事がかまうまういき過ぎて『なんか変だなあ』と思つていたんです。」

例えば、武装解除のために人手が足りない困っているところに、タイミングよく海

賊たちが現れたでしょう……」

でも、ダークマン船長が最後に『モーガンの赤』を見せてくれと言ひ出したことで、

ヤッパリそうかと分かつたんです。」

「どうしてですか?」

「だって、なぜ、ダークマン船長は、私があたの宝石を持っていることをご存じなのでしょうか。」

きつと、モーガン本家のメイフラワー様から直接、お聞きになったのでしようねえ。

「ということは、……」

「ははは……。やっぱり、茉莉香さんは鋭いですねえ。」

「かないませんねえ。」

「ええ! 本当なのですか。」

「そうです。」

もともと、ダークマン船長たちの一味は、奴隷狩りのためにマンチュリアの船団を襲おうとしていたのですが、最初の襲撃では撃退されてしまったのです。

そこで再戦を期して仲間を集め、M-19003星団のT-3に向かっていたのです。

一方で、マンチュリアの軍人たちも、海賊たちからさらに船を奪おうと狙っていました。

「救難信号も船をおびき寄せて、奪うためでしょう。」

「そこへ私たちがやってきた訳ですね。」

「そうです。」

でも、ダークマン船長たちの一味は、自分たちが先に出發している以上、帝国軍が到着する前に自分達でカタをつけることが可能だと考えていました。」

「そりやそうですね。普通ならば。」

「しかし、銀河帝国が、弁天丸に救助を依頼したので、形勢が変わりました。」

弁天丸なら時空トンネル航法で彼等より先に目的地に到着しますからね。」

「これを知ったダークマン船長は、うちの祖母に探りを入れてきたようです。」

「メイフラワー様は、なんとおっしゃったのですか。」

「祖母は、」

『加藤船長の後見人は、海賊女王と八氏族の長。』

だから、加藤船長に敵対するのは後見人が許さないよ。』

と言ったそうです。

それに弁天丸には、お前たちがどんなに大勢で艦隊を組んでも勝てないと言っておいたそうです。」

「うわあ・・・後見人の睨みって、すごいんですね。」

「いや、いや、ダークマン船長はこの程度の脅しで怯（ひる）むヤツではありませんよ。」

「やっぱりそうですかあ。」

「それで、祖母は、茉莉香さんは私が『モーガンの赤』を譲った娘だから、彼女を傷ついたら絶対に許さないと凄（すご）んだそうですね。」

「ナハハハ……。それで事情が分かりました。」

メイフラワー様が凄むと、ダークマン船長もすごく怖かったのですね。

でも、彼も海賊なんだから、それだけで話はつかないでしょう。

何か、取引というか、獲物を与えたのでしょうか。

だとしたら、私、その内容が気になるんです。変なことが入っていないかと心配なのですが。」

「さすが、茉莉香さんも海賊ですね。」

いいでしょう。お教えしましょう。

彼らの獲物は、『死んだはずのマンチュリアの軍人』と、用済みになった移民船です。

マンチュリアの被支配階級の人間に手を出さないという条件を守ればの話ですが……。

この条件には、最後までダークマン船長は抵抗したそうです。クローン人間も少しくらいは自分ももらっても良いじゃないかとかね。でも、最終的には了解しました。

ですから、獲物の件も茉莉香さんの気持ちを傷つけないようになっていきますよ。」

「なるほど。安心しました。」

でも、ダークマン船長は、きちんと約束を守ると信用していいのですか？

かれは、とんでもないならず者だと、クリーエは嫌ってましたよ。」

「この件は信用できますよ。なぜなら、海賊の取引は、一生の長い間、貸し借りを続けるものだからです。」

だから、信用するし、相手も約束を守るしかないのです。」

「なるほど。『海賊の取引』ですかあ……。」

それで『死んだはずの軍人』をもらって、何か意味があるんですか？」

「彼らを海賊の仲間にするんですよ。」

『死んだはずの軍人』は、死人ではありませんからね。」

彼らは本物の軍人、プロですからね。海賊たちにとつては、即戦力ですよ。人材獲得が、海賊経営にとつてとても大切だということは、ご存じでしょう。」

それに、マンチュリアの支配階級出身の軍人は、銀河系に戻つても行き場がありませんからね。」

「そうですね……。」

でも、この話が私の知らないところで決まっていたなんて……。

私、まだ、海賊の取引では、一人前の船長として扱われていないのでしょうかねえ……。



ちよつと悲しいと言うか、悔しいと言うか……。」

茉莉香は、暗く沈んだ表情で目を伏せた。

「私は、茉莉香さんにまだそんな仕事をさせたくないですよ。

汚い話が飛び交う交渉事ですからね。」

「でも、……私、海賊なんです。」

海賊船の船長としての私は、あなたの目で見ても、交渉相手として認められないくらい、頼りないのでしょいか。

そういう、悪い意味でお嬢様扱いされているというか……

そう思われているのかと思うと、私、悲しいです。」

「やっぱり、茉莉香さんはそう思うのでしょいかね。」

祖母の予想通りですな。

ねえ、茉莉香さん。祖母が言っていました。

茉莉香さんがそう感じるようなら、自分が直接、あなたと話をするからと。」

茉莉香は、船長室から帝都にいるメーフラワー・モーガンと通信した。

「やあ、茉莉香さん。うまくいったようだね。」

「ありがとうございます。お力添え頂いたことに感謝します。」

「うふふふ……。その顔だと、すこし不満なようだね。」

「いえ、そんな、あの……」

「気を遣わなくてもいいよ。あなたの気持ちは良く分かるよ。」

「はあ。あのおく、それでは、お聞きしてもいいですか?」

「ああ、良いよ。」

「あのおく。例の取引のことですが、どうして私の知らないところで話をまとめたのですか。」

私って、交渉相手としては頼りないのでしょうか。」

「そのことだが、海賊の取引は一生かけての長い取引だということは、聞いたかい?」

「はい。お聞きしました。」

「それでねえ、……」

うん!? ギルバート、なんでお前がまだそこにいるんだい!?

さつさと、船長室を出なさい。

私は茉莉香さんと二人だけで話したいと言ったんだよ。」

メーフラワーは、孫のギルバートを船長室から追い出してしまった。

「さて、茉莉香さん。今度は私から聞こう。」

あなたは、一生モノの海賊の取引ができるためには、どういう条件が必要だと思うかい?」

「はい。それは分かります。」

それは、これからもずっと海賊をやっていて、いずれ、借りを返してもらおう機会があるだろうと、相手に信頼されることが必要だと思えます。」

「鋭いねえ、そのとおりだよ。」

「それで、わたし、ずっと、ずっと、これからも海賊をやっていくつもりなんです。」

私のその思いは、わかってもらえないのでしょうか。」

「そうだね。」

悪いけど、女の私でも、今のあなたに対しては、そう思うね。」

「なぜですか。私、そんなに頼りないですか。」

「そう思われていると思うと、なんか悲しいです。」

茉莉香は、涙ぐんできた。

「そうじゃないよ。じゃあ、ハッキリ言おうか。」

それは、あなたには、若い女性の特権、自由があるからだよ。」

「ええ! 『自由』ってなんですか?」

「自分の運命、人生を、自分の好きなように決められる『自由』さ。」

特に、お前さんの『自由』は、一等星のようにキラキラ輝いて、眩しい(まぶしい)くらいだよ。」

「はあく？ 何の自由ですかあ。

わたし、いきなりそう言われても、ピンとこないんですが。」

「そうかい。それじゃあ、別の言葉で、もうちよつと具体的に言おうか。」

お前さん、この一年の間に、四人の王子様からプロポーズされたんだってなあ。」

「はあ、もう、その話ならば……。」

「お前さんの気持ちは、聞いているよ。」

でも、お前さん、もしもそのうちの一人の話を受ける気になったら、海賊を辞めていたかもしれないだろう……。」

「それはそうですが……。私、そんなつもりは無くて……。」

「それは分かっているよ。」

でも、お前さんと取引をしようと考えた海賊たちは、これからもお前さんの気持ちはずっと同じだとは、思えないのさ。

だって、普通の女の子なら、王族のお妃様になるような良い話を断るはずがないだろう。」

「はあ……。」

茉莉香は、そこまで聞くと黙り込んだ。

そして考えた。

『そういえば、チアキは自分が銀河帝国の女王の娘だと知って以来、そのことを当然のように入力して、王女として振る舞っている。』

自分と違い、海賊の娘として育ったにもかかわらず、海賊の娘という過去へのこだわりは無いように見える。

みんなそう考えるのだろうか。

王族になるということは……。』

しばらく考えた後に、茉莉香は言った。

「……」

でも、私は違います。

私は、父が亡くなって弁天丸の船長候補になったと知らされた時、断ることもできませんでした。あのまま、海明星で女子高生やって、そして女子大生になって、普通の娘として暮らすこともできたんです。

でも、私は、自分の意志で船に乗りました。

私は海賊になろうと思って、父の後を継いで海賊船の船長になったんです。」

「そうかい……。やっぱり、お前さんは私の見込んだ通りの娘だったねえ。」

「ナハハハ……」

茉莉香は少し照れ笑いした後、真剣な表情で言った。

「あのう、それで教えてください。」

わたしは、どうすれば海賊船の船長さんたちに、一人前の取引相手として認められるのでしょうか。

女の子だから、女だからダメなのでしょうか。」

「そうさなあ、もちろん、女だからダメつてもんじやないよ。」

その答えは、女でも一人前の海賊として一生、生きていく覚悟を誰にでも分かる形で示すことだよ。」

「具体的には・・・結婚とか、そういうことですかあ。」

「それも、一つの方法だよ。」

海賊の子供でも産めば、誰もが認めるだろうがね・・・ハハハ。

そんなことより、なにより、お前さんは、今、自分の進路について、迷っているだろう。」

「それは・・・。」

「その迷いが、海賊のヤツラにも見えているんじゃないかなあ。」

「見透かされているのでしょうか。」

「そういう言い方は、嫌いだなあ。」

お前さんは大事にされているんだよ、あんな荒くれ者たちからも、ね。

みんな、お前さんが覚悟を示すのを待っているのさ……。  
「はあ……。」

「よく考えてごらん。自分のことを……」

自分の気持ちに正直に……。」

「メイフラワーさんは、母と同じことをおっしゃるんですね。」

「そうかい。私は、あなたのお義祖母さん（おばあさん）のつもりなだけだね。

……ハハハ。」

「ウフフフ……。」

茉莉香もつられて笑ってしまった。

通信を終えた茉莉香は、ブリッジへ向かった。

茉莉香は艦内の通路を歩いている途中も、先ほどの会話のことを考えていた。

『結婚かあ……』

『子供を産むかあ……』

『はあ……』

途中で二人の女性乗務員とすれ違ったが、茉莉香は考え事にふけて、気にも留めなかった。考えていたことをうっかり口に出してツブヤいたことも……。

だが、女性乗務員たちは違った。

「ねえ、いまの船長の独り言、聞いた!？」

「聞いたわよ。ハッキリと……!」

「ということは、船長もついに……。」

「やっぱり、船長が検査で引つかかった理由は、アレだよ、アレ。」

「そうだね。それに間違いないよ。」

なんでも男女の恋愛に結び付けて理解する女の子たちが、ここにもいた。

やがて、弁天丸は時空トンネルを出た。

予想通り、タツチダウン地点は大きくずれていたが、クルーの懸命の天測によって座標を把握し、再び飛び立った。

そして、弁天丸は、無事、目的地のニューアトランティス星に到着し、海難救助の務めを果たした。



## 第四十一章 薔薇の泉

## 1 銀河帝国 王立図書館

グリユーエルは、女王に連れられて帝都郊外のある施設にやってきた。

リムジン車で大きな門を入ると広大な緑の庭園が広がり、その奥まで進むと小さな宮殿のような建物があつた。

この建物は、最初、離宮として建造された。そこは、政治や行政にまつたくヤル気を無くした王が、王宮を抜け出して、遊び暮らす場所だった。緑の庭園では、かつては、プール、各種球戯場、コンサートホール、景色を楽しむ庭と秘密の四阿（あずまや）：王のお気に入りの遊び場が作られ、王が死ぬとまた元の緑に戻されるということを繰り返していた。

現在、ここは、帝都で唯一の王立図書館である。「図書館」と言っても、一般国民には銀河聖王家の歴代の王の遺品、美術品の保存施設、つまり「宝物庫」として知られていた。

王立図書館に収められた歴代の王の遺品などの「宝物」は、時々、『銀河聖王家三千年の秘宝展』などという仰々しい名称で一般公開され、話題を集めている。しかし、この

「王立図書館」は、単なる宝物庫とは違う秘密の役割を持っていた。

その役割とは、銀河聖王家にとつてあるいは諸人類にとつて極めて重要な情報を、限られた人に伝えるために密かに保存することだった。

秘密を守るため、この施設はすべてのネットワークから遮断されていた。また、この施設は「勅封」であつた。すなわち王の許可が無いと出入りできなかつた。そして、その管理人、すなわち図書館長は、歴代、銀河聖王家の王族が務めていた。

グリユーエルと女王は、建物の地下に降り、長い廊下を進んでいった。

ここまで、二人は延べ何百人もの警備兵が見守る中、多くのセキュリティゲートを通つた。

「グリユーエル、あなたが見たいものはこの先だよ。」

「はい。陛下。」

それにしても、ずいぶん嚴重な警備とセキュリティですね。」

「ははは。『宝物』の警備だから嚴重に行う必要があるとされているからね。」

でも、これから先の区画は、私の許可なくしては入れない本物の機密エリアだよ。」

いいね、グリユーエル。信頼しているよ。」

「はい。」

グリユーエルは顔を上気させて、返事をした。

廊下の先の荘重なドアの前で、一人の老人が二人を待っていた。

「やあ、フランク。わざわざ出迎えに出てきてくれて、すまないねえ。」

「いえいえ、陛下の行幸とあれば、当然でございませう。」

「ありがとうございます。今日は、この人を連れてきたよ。」

グリューエル・ホワイトローズだ。」

女王は、グリューエルを銀河聖王家の王族として紹介した。

「初めまして、殿下。フランク・イエローローズです。この図書館の館長を務めております。」

彼は、自分も王族であること示す家名を付して名乗った。

「初めまして、殿下。グリューエルとお呼びください。」

そして二人は最後のドアを通って機密エリアに入り、貴賓室に通された。

「それでは、陛下。」

慣例に従って、グリューエル様のセキュリティ区分をご指示ください。」

「ああ。・・・グリューエルの区分は、六等級だ。」

グリューエルは、「六等級」と言う数字を聞いて、一瞬、怪訝そうな表情を浮かべた。

「一」ではなく、「六」という高い数字が与えられたことは、情報開示のレベルが低い可能性があると思ったからだ。」

「承知しました。」フランク館長が言った。

「・・・心配はいらないよ。あなたの区分は最上級さ。」

ここでは、『秘密を開示できるレベル』それ自体が秘密なんだよ。

だから、秘密を開示できるレベルの内容自体と、それをあらかず数字とは無関係になっっている。」

グリューエルの心配に気が付いた女王は、そう言つて微笑んだ。

「陛下が、そこまでご信頼されておられる方なのですね。」

フランク館長も微笑んだ。

その後、グリューエルは、女王と別れ、王族用の閲覧室に一人で通された。

「では、グリューエル様、どのような情報をお望みでしょうか。」

「あのお・・・殿下。」

殿下が、私のような若輩者に『様』という呼び方をなさるのは、どうも・・・。」

「グリューエル様、ご自分の地位をご承知おきください。」

ここでは情報開示のレベルがすべての尺度です。

そして、あなたさまと同じ高いレベルの情報開示を女王陛下からご指示されているのは、王族の中でもごく少数の方だけです。普通の王族はもつと低いレベルです。

このレベルでは、銀河聖王家の系譜や血縁関係の『真実』もすべてご覧になれますか

らね。

それがどれほど高い地位か、お考えください。」

「はい……。」

グリユーエルはそう言つて顔を伏せた。

「それでは、閲覧を始めましょうか。」

グリユーエル様、どのような情報をお望みでしょうか。」

「はい。では、まずセレニティ王国の『薔薇の泉』の真実からお願いします。」

「よろしいですね。ご自身のことも書かれていると思われませんが……。」

フランク館長は、そう言つて微笑みながら、グリユーエルの表情を探つた。

彼自身も、薔薇の泉に関する機密情報に深く通じているようだった。

「はい。覚悟はできております。」

私は今般、銀河聖王家の一員に加えて頂きました。

それであるがゆえに、自分のルーツを見極めておきたいと思ひまして……。」

「承知しました。では、本を持って参りましょう。」

「ええ!! 『本』というものがあるのですか?」

「はい。」

グリユーエルが驚いたのも無理は無かつた。

それは、この時代では、古代から続いた「本」という形の記録媒体は、すでに物理的には存在しなかったからだ。すべての「本」は電子化され、ネットワークを通じて、「情報」として提供されていた。

だから、古代世界でいう公共の「図書館」の機能を営む施設は存在しなかった。いや、図書館どころか、本屋という店舗もすでに存在しなかった。ネットワークの世界では、図書館も本屋も同一の機能を営むものとしてはるか昔に融合し、固有の施設を持つ必要性すら消滅してしまった。本は、ネットワーク上に、情報のカタマリとして存在すればよいからだ。

やがて、館長が美しい貴金属で装飾を施された、豪華な革表紙の「本」を持ってきた。それは、古代史の写真などで見る、紙のようなもので作られた『本』であった。

「これが、薔薇の泉の歴史と真実を書いた本でございます。」

最新の情勢まで、書き足されております。」

「ええ！ 最近と申しますと、私の行ったことも書かれていますか・・・。」  
「はい。」

フランク館長は、表情を変えず、肯いた。

「では、ごゆっくりとご覧ください。」

それから、別の本をお読みになりたいのでしたら、そちらの館内電話でお呼びください

い」

そう言つて、館長は部屋を出て行つた。

グリユーエルは、机に向かつて「本」を読み始めた。

その表紙には、『セレニティ王国史 別巻 薔薇の泉の系譜』と書かれていた。

## 2 薔薇の泉の始まり

「ええ!? 『薔薇の泉』の始まりは、このような不幸が原因なのですか。

私達は、異なつた歴史の解釈を教えられていたのですね。恥ずかしいことです。」  
読み始めてすぐに、グリユーエルはつぶやいた。

そして、大粒の涙を流し始めた。

薔薇の泉の始まりは、一人の女性の身に起こつた悲しい出来事であつた。

それは、セレニティ王国が、諸人類の宋主星のひとつ、クリプトン星の一地域を領地とする小さな国家に過ぎなかつた時代に遡る。

当時、王国は緑濃い山岳地帯に囲まれた、辺境の地にあつた。また、気候風土は温和であるが、豊かな穀倉地もなく、恵まれた鉱山資源もなかつた。従つて、大同士の領土争いの対象となることもない、小さな王国だつた。

このため、多くの王制が倒れ民主共和制に移行した政治的激動の時代にあつても、国

民は昔ながらの質素、清貧な生活を営み、王国は千年以上も平和を保ち、存続できた。今日のセレニティ星系のセレニティ王家が、クリプトン星のセレニティ王国の分家として、銀河聖王家に次ぐ長い歴史を誇っているのは、このような経緯からである。

もちろん、王国存続の理由はそれだけではない。歴代の王は、民生の安定こそが自らの最大の責務と考えて、時代の変化に適切に対応しながら、国を治めてきた。このような真摯な王の姿に国民が不満を抱くはずは無かった。

特に、王国中興の祖とされるアレキサンダー13世は、その賢人ぶりが、国内だけでなく諸外国にも高く評価され、小国ながらも尊敬を集める国として王国の存在感を高めることに寄与した。

その妃エリザベスも、美しく聡明な女性として国内外に人気が高かった。

王と王妃、二人は国民の模範となる理想のカップルとされた。

しかし、この二人には一つだけ大きな問題があった。それは、跡継ぎとなる子供に恵まれなかったことである。

家臣や国民は、二人の子供が後を継ぐことを願い、長い間、その誕生を待ち続けた。

しかし、医師がエリザベス王妃の身体では子供を授かることが困難と診断したため、風向きが変わった。家臣たちは、せめて英明なアレキサンダー13世の子孫だけでも残そうと、王に側室を持つことを勧めはじめた。もちろん、王妃を愛する王はこれを拒否、



事態は暗礁に乗り上げていた。

ところが、事態を憂慮した王妃が、王国存続のために身を引くので離婚してほしいと王に願ひ出て、王の返事も聞かずに王城を一人で退去し、山奥の修道院で出家してしまつた。

このよう悲壮な決意をした自らの心境について、王妃は一言も述べなかつたと記録されている。

王妃の出家を機に事態が動き出す。自分の死後に王族間の王位継承争いが勃発することを懸念した王はついに決断し、三人の側室を迎えた。王妃との離婚手続きは行われなかつた。いきなり三人もの側室を迎えたのは、権力の分散を恐ろうという王宮の思惑と、王との縁談を希望する諸外国の名家の思惑の一致するところだつたといわれている。

これを機会にセレニティ王国は大きく変貌していった。

側室はいずれも過去にセレニティ王族の娘が嫁いだこともある大国の富裕な名家の娘であつた。そして、側室たちは、王国における自らの勢力拡張のため、実家の支援を受けてセレニティ王国の振興に乗り出した。セレニティ振興公社をそれぞれが設立し、その傘下で実家の様々な家業を営み、国民を雇用した。とりわけ、仲介貿易、保険・金融、情報産業など、国土の狭さや人口の少なさがハンデとならない産業分野が大きく発

展した。

そして、たちまち、辺境の清く貧しかったセレニティ王国は経済大国にのし上がった。国民も王国の経済的繁栄を喜んで受け入れ、アレキサンダー13世の名声はますます高まった。

もちろん、側室の実家の当主たちは、無償の善意で、娘のために大金を投資したわけではなかった。それは、当時のセレニティ王国が、『タックス・ヘブン』（税金の無い天国）とか、『タックス・キングダム』（税金の無い王国）というあだ名で呼ばれるようになったことから明らかである。

そして、セレニティ王国はもう一つの危機を迎える。

側室間の王位継承争いが次第に深刻になったのである。

側室は、それぞれに王子を授かった。これを受けて、アレキサンダー13世は、世継ぎ争いを防ぐため、王位は三人の王子が順に継ぐことを定めた。しかし、三人の王子はほぼ同じ年齢であり、長男の死を待つ次男三男の在位は極めて短いものと考えられた。このため、家臣や国民の間に各側室を支持する派閥がしだいに形成され、順送りの王位継承に不満を唱え始めたからだ。

このように王の外戚が王国を事実上支配する趨勢に対して、王族もこれに抵抗するどころか、婚姻関係を張り巡らされ外戚の一族に取り込まれてしまった。

このような王国の将来を憂慮した保守派の家臣たちは、近年の王国の経済的繁栄は「夢（はかな）い夢」、「砂上の楼閣」に過ぎず、王国の永続の為に国を元の清貧な姿に戻そうと考え始めた。

もちろんこのような意見の人々は繁栄を謳歌する王国の中では極めて少数派であった。保守派の人々は、自分たちの意見を王国の国民に説いて回ったが、それがまったく支持されないことを思い知らされ、絶望した。

その結果、保守派の人々は、狂気とも言える信念のもとに、ひとつのプロジェクトを始めようと決意した。その信念はつぎのようなものだった。

『アレキサンダー13世とエリザベス王妃の御子が王位を継げば、王国は蘇る。』

もちろん、そのプロジェクトとは、最新の科学技術、つまり人工子宮を活用して、アレキサンダー13世とエリザベス王妃の子供を生み出そうというものだった。もちろん、それは自然の摂理に反するという理由で、かつて王妃から拒否されたものだった。しかし、彼等は、そのような手段に儂い希望を託すしかなかった。

保守派の家臣たちは、修道院に隠遁するエリザベス王妃を訪ね、プロジェクトを始めると許しを乞うた。

それに対して、病床に横たわる王妃はこう言ったという。

「もう私には、王のお役にたてることはないと思っております。」

しかし、まだ私に出来ることがあるとおっしゃるならば、この身体と命、捧げましよう。」

こうして、辺境の修道院で狂気のプロジェクトが進められていった。そのプロジェクトは、薔薇の泉と名付けられた。

### 3 阿呆船

しかし、この保守派の動きは、すぐに三派の側室支持派に知られた。

側室支持派は事態を憂慮し、「共通の敵」に連携して対策を練った。

もともと簡単な手段は、関係者の暗殺である。しかし、これは結局、出来なかつた。エリザベス王妃の人氣が国民に根強く残っているだけでなく、三派のいずれがこの悪役を担うか、譲り合つて決まらなかつた。悪役はいずれ肅清されるからである。

では、他にどのような対策があるのか、三派の幹部は協議を重ねたが、良いアイデアは出なかつた。

あるとき、協議に参加していた者が、アイデアが出ず困り果てた挙句、こんなジョークを呟（つぶや）いたという。

「あゝあゝ、いっそうのこと、彼らがみんな宇宙移民に行くと言つて、旅立つてくれれば良いのだがなあ。」

そうすれば、ジャマ者はいなくなり、王国はスッキリするんだがなあ。」

「あ、それだ！」

その結果、三派は協力して一つの巨大プロジェクト、宇宙移民事業を始めることにした。

宇宙移民は、当時からブームが始まっていた。

そのブームを利用して、三派は、国土の小さいセレニティ王国にとっては、このプロジェクトは新領土獲得の好機であり、大いに有望な投資であると宣伝し、莫大な資金を要する計画を推進した。

しかし、その真の目的は、宇宙移民と称して、狂信的な保守派の人々とその狂気が生んだ人工子宮装置をセレニティ王国から厄介払いするためだった。自らの望む王国を平和的に建国できる唯一の方法と説き伏せて……。

そして、王国の威信をかけた巨大な宇宙船が建造され、「クイーン・セレンディピティ」と名付けられた。

しかし、側室支持派の重臣たちは、密かにこの船をこう呼んでいた。

『阿呆船』

それは、古代の物語に描かれた恐ろしい船のことだった。それは、狂人あるいは反社会的とされた人々を排除するため、船に乗せて彼らが望む「王国」を目指して大海原を

航海させるといふ物語だった。

やがて、宇宙船は、華々しい見送りのなかで旅立った。

しかし、宇宙船の出発から、百年を経ずして、クリプトン星のセレニティ王家は滅びた。

クイーン・セレンディピティが宇宙航海に出発すると、「共通の敵」を排除した側室三派は、また世継ぎ争いを始めたからだ。

アレキササンダー13世の死後に長男が即位したが、ますます争いは激しくなっていた。

その後も王位継承の争いと混乱は続いた。

そして、ついに隣国の軍隊が王国に攻め入った。彼らはこう叫んで攻め入ったと言う。

「タックス・ヘブンをつぶせ！」

「税金泥棒を捕まえろ！」

もちろん、三人の側室の血を引く王族は、実家のある大国に逃亡し、大勢の国民がそれに付き従ったという。

もはや命を懸けて王国の独立を守る人々はいなかった。

そこまで「本」を読むと、グリユーエルは流れる涙で文字が読めなくなった。

「現在のセレニティ王国の礎（いしずえ）を築き、その誇りとなつた宇宙移民が、このよ  
うな悪意に満ちたものであるとは……。」

これでは、宇宙海賊の処刑と何も変わりません。……。」

もちろん宇宙海賊の処刑方法は、今日でも、おとぎ話と同じやり方だった。

それは、目隠しをした罪人に宇宙服を着せて、船外に張り出した細い板の上を宇宙空間に向かつて歩かせるというものだった。もちろん、罪人は、人工重力の有効範囲の外まで歩いて身体が板の上から浮き上がると、または、目隠しで歩いたため板から足を踏み外すと、そのまま宇宙空間を漂う。運良く、他の船に救助されるまで……。」

「私たちは、『クイーン・セレンディピティ』の名は、『偶然であつても幸運をつかみ取るといふ聖なる権能をもつ女神』を意味し、セレニティ星系の奇跡の七つ星を発見した喜びと誇りをあらわす言葉だと教えられてきました。」

私たちは、歴史の真実を全く知らされていなかったのですね……。」  
グリユーエルは、また涙を流した。

#### 4 サルバトール計画

グリユーエルは長い間、目を閉じて祈った。

そして、決意を新たに、また「本」を読み始めた。

彼女は、「本」の後半部分、セレニティ星のセレニティ王国における薔薇の泉について書かれた部分を読み始めた。それには自分にもかかわりのある歴史の真実が書かれているはずだった。

苦難の宇宙航海は、自然環境と資源に恵まれた可住惑星を七つ持つ星系の発見で終わった。

クイーン・セレンディピティは、その名の通り、偶然にも幸運をつかみ取ったのである。

宇宙船生まれの初代の王は、アレキサンダーと名のつた。もちろんその名は、遺伝子上の父親の名を継いだものだった。ただし、宇宙移民後のセレニティ王家は、みずから新王朝と称し、それまでの王朝とは時代を画した。

アレキサンダー王は、その星系を王家の名前を取って、セレニティ星系と名付けた。そして、開拓は孤立した状況のなか、失敗はできないという悲壮な決意のもとで始められた。

初期のコロニー開拓は目覚ましい成功をおさめた。それを基礎に多くの都市がつくられ、農業そして工業の発展、人口の増加、それを導いた王家の名声と内政の安定……。今日の視点で見ても、それは、諸人類の宇宙移民の中でもっとも輝かしい成功物語のひとつとなった。



その過程で、不安におびえる国民を励まし、助け合うことを訴え、自らも贅沢を嫌い質素儉約に努めた、アレキサンダー王とその子孫である王家の名声は不朽のものとなった。

他方、開拓当時の技術水準では母星との通信も途絶していたので、セレニティ星系の人々は、自分たちだけの孤立した世界の中で何百年も暮らしていた。

やがて、超光速通信、超光速跳躍などの現代技術の開発で、銀河系宇宙に「大航海時代」が到来した。銀河系内の往来が始まると、セレニティ星系の人々は、ついに故郷クリプトン星のセレニティ王家の滅亡を知ることとなった。

このニュースが、セレニティ星系の人々に大きなショックを与えたことは言うまでもない。なかでも王家を支える保守派の人々は驚愕し、怯え、そして自らの信念をさらに強めた。

それは次のような信念である。

『アレキサンダー王の子孫が王位を継いでいけば、王国は永遠に繁栄する。』

その手段としての薔薇の泉は、ますます重要視された。

セレニティ星系への移民の成功体験が、薔薇の泉を永続させる力となった。

だが、二百年前の、銀河帝国の大艦隊の襲来と降伏の体験がまた新たな事態を招いた。

セレニティ王国は、銀河帝国内の自治国家として服属することになった。銀河帝国は

自治国家の内政に干渉しなかつたため、国民生活には大きな影響はなく、王制は安定していた。

しかし、銀河帝国への服属は、王制護持を信念とする保守派には脅威であつた。銀河帝国から王位継承に干渉があれば、王国は滅びる恐れがあると思われたからだ。保守派にとつて、銀河聖王家から新しい王を迎えることは、セレニティ王家の「滅亡」と同じであつた。

王国の独立に対する危機感が、薔薇の泉にまた新しい役割を与えた。

#### 「サルバトーレ計画」

これが、薔薇の泉の新しい目的である。

これは、軍事力で王国の独立を確保するものではなく、王の仁徳、名声で王国の独立を確保しようとする計画だつた。これは、外戚の専横から王国を救うという、薔薇の泉が作られた動機と似ていた。

そのために、薔薇の泉を使って優れた王を生み出そうというのが、「サルバトーレ計画」だつた。

「サルバトーレ」とは、古代語で「救い主」を意味する。

この言葉は古代語では、古代宗教の教祖、あるいはその教えに示された救世主を意味する言葉として使われている。保守派は、この言葉を銀河帝国の支配から王国を救う王

の誕生を意味する言葉として使ったのだ。

そのために、サルバトール計画が作られた。しかも、その内容は、薔薇の泉によって、アレキサンダー王の血統を守ることにとどまらなかった。さらに最新の生命科学の力により、王家の血統を改良することにまで踏み込んだ。遺伝子検査により、新しい卵子を提供する「遺伝子上の配偶者」すなわち「薔薇の泉の花嫁」選びを厳しく行うとともに、遺伝子改良によつて、より優れた王としての資質を持った御子を生み出そうとした。こうして、セレニティ王国は、薔薇の泉のもとで禁断の秘儀を行つていった。

そして、いつの日か、王家に「サルバトール・ムンデイ」（世界の救い主）、つまり銀河帝国から王国を救う「救世主」を降臨させようとした。

「なんとという所業でしょうか。

過ちというものは、一点の曇りもない善意、誰もが信じる正義からも、生まれるのですね。」

グリユーエルは、もはや泣いてはいなかった。

心は緊張を増し、体は冷えきつていたが、彼女は目をそらすことなく本を読み続けた。

「本」には、サルバトール計画には、二つの問題があつたと記されている。

ひとつは、その人が「サルバトール・ムンデイ」であることは誰の目にも明白に分か

るものと考えられていたことであり、もう一つは、「サルバトール・ムンデイ」がどのようにして最終目的である「セレニティ王家の独立」を回復するかというシナリオは予め考えられていなかったことである。

これらは、やがて、深刻な問題を引き起こした。

それは王位継承をめぐる王族間の緊張である。王位の継承原理に、出生による「世襲」だけではなく、救世主への「禅譲」という、いわば実力主義が導入されたからである。

しかし、表面上、王位継承争いは起きなかった。クリプトン星のセレニティ王家滅亡の教訓が、王族に自制を促していた。

他方、外戚に対して、王族は厳しい警戒を怠らなかつた。警戒の対象は王妃とその一族はもちろんのこと、薔薇の泉に卵子を提供した女性、つまり「薔薇の泉の花嫁」及びその一族にも及んだ。これが、悲劇を生んだ。

実際のところ、王族の人々にとって、「サルバトール・ムンデイ（救世主）」の降臨は、恐怖であった。その人を「鏡」として「凡庸な自分」という醜い姿を見せつけられるからである。

その母たる女性が「聖母」として王宮に君臨することも恐怖だった。

そして、恐怖に駆られた王族たちは、まだ見ぬ「救世主」に対してではなく、目の前の「薔薇の泉の花嫁」に対して、過酷な仕打ちを行った。外戚の専横を予防するという

大義名分の下で、幽閉、事故死、毒殺、……。

「本」には、王族の人々が行った陰惨な所業が、一人一人の「薔薇の泉の花嫁」について、こと細かに書かれていた。

グリユーエルは、それを読みながら、思った。

「私たちが、薔薇の泉のコアとなる受精卵がどこから来たのか教えられていなかった理由は、これだったのですね。

だから、王族の方々は、薔薇の泉の花嫁のことを知らないふりをされていたのですね。私も、『聞いてはいけない怖い話』だということは、漠然とわかっていましたが。それにしても、真実を教えられていない私は、まだ子供扱いだったことが良くわかりました……」

グリユーエルは、気持ちを引き締めて、本を読み続けた。やがて自分たちの世代が登場するからだ。

そこで、グリユーエルは驚愕の真実を知ることになる。

## 5 グリユーエル登場

「本」にはこう書かれていた。

ひとりの女の子が、薔薇の泉から生まれた。きつと美しく育つと思わせる、整った顔立ちの赤ん坊だった。もちろん、美貌だけならば、王族の子供たちには当たり前のことだった。

その子は言葉を覚えるのが早かった。それだけでなく、周りの大人の言うことを理解している様子だった。もちろん、賢いだけなら、王族の子供たちには当たり前のことだった。

「本」には、その子について、こういうエピソードが書かれていた。

その子は、姉の第三王女フローラ姫が家庭教師から外国語（銀河標準語）を習っているのをそばで聞いていたが、突然、こう言った。

「お姉さま。私、わかりました。」

犯人は、執事のビルトではなく、メイドのエマソンですね。」

家庭教師は、母国語のクリプトン語ではなく、銀河標準語で書かれた推理小説を読み上げ、フローラ姫がその話を一度聞いただけでどこまで理解するか、試していたところだった。フローラ姫も語学が得意だったのだ。

驚いた家庭教師は、こう言った。

「グリユーエル様は、今のお話がお分かりになるのですか。」

「はい。いつも、お姉さまの側で、聞いておりましたから……。」

「こういうお話でしたよね。」

少女は、嬉しそうに、家庭教師がたった今まで読み上げていた銀河標準語の小説を、その書きだし部分から流暢な銀河標準語で復唱してみせた。

「……」

家庭教師は、驚愕した。セレニティの王族は優秀な子供ばかりだが、この子はその中でも飛びぬけているのではないかと。

その時、姉のフローラ姫がやさしく言った。

「グリューエル。私の勉強に口をはさむのは、いけないことですよ。」

二度としてはいけません。」

「はい。ごめんなさい。」

ですが、私、犯人が分かったのでとても嬉しくなって、どうしてもお姉さまにお話ししたくなりました……。

「ごめんなさい。」

彼女は涙ぐんであやまった。

「グリューエル。」

そのことですけれど、推理小説を読んでいる途中の方に、犯人やトリックの謎解きを教えるのは、マナー違反ですよ。

推理小説というものは、読者が犯人は誰か推理しながら読んで楽しむものです。

それだけでなく、真犯人が自分への追及を逃れようと仕掛けたトリックを推理しながら、探偵がそれをどうやって見破っていくか、二転三転する筋書きを読んで楽しむものですからね。」

フローラ姫は、優しくグリユールに論（きと）していた。

「はい。ごめんなさい。ほんとうにごめんなさい。」

それ以後、彼女は二度とこんな無作法な真似はしなかった。

グリユール姫が6歳の時のエピソードである。

そして、この出来事をフローラ姫から聞いたセレニティ大公は、グリユール姫に本格的な英才教育を始めるよう命じた。

「この話は、いまでも覚えていきます。」

.....

それにしても、セレニティ王家の中のこんな小さな出来事までが、銀河帝国に知られているとは、どういう訳でしょうね.....」

グリユールはため息をついた。

だが、それは物語のほんの序章だった。

グリユール姫に対する英才教育は、目覚ましい成果を上げた。



姫は、母国語のクリプトン語の読み書きだけでなく、銀河標準語など主要な現代言語をたちまちマスターし、古代言語まで学び始めた。もちろん、歴史、文学、数学、物理学、化学など主要な学問を軽々とマスターしていった。

スポーツに関しては凡庸というより苦手だった。しかし、そんな才能は姫に期待されていなかった。スポーツは健康維持の程度にとどめられた。

もちろん、公務や社交の場において王族の姫としてふさわしい振る舞いができるように、マナーなどの儀礼や社交術、王家の歴史や系図、王族の慣例、ダンスなど最高級の淑女としての教養も教えられた。

たちまち姫の立ち振る舞いは洗練された。そして、これに喜んだ王妃や宮廷の女官たちの勧めもあって、彼女は十歳から兄や姉に付き従って公務に同行するようになった。

このころからグリユーエル姫は国民の注目を集め始めた。そして、姫のずば抜けた英才ぶりを知った人々は、姫のことを、王宮の所在地の別名をとってこう呼び始めた。

「モンブランの神童」

そして、姫が成長するにつれて、姫の名前は、広く王国の国民の間に知られていった。もちろん、話はそれで終わらない。姫の存在は、つとに王族や重臣たちの政治的関心を集めていた。それも極秘事項の関心を集めていた。

それはこんな関心だった。

「この姫こそ、待望の『サルバトール・ムンディ』ではないのか？」

「いやいや、『サルバトール・ムンディ』は男の子のハズだ。」

「では、『サルバトール・ムンディ』を生む女性、つまり聖母になられるのか？」

「なにを言うのか。姫を『薔薇の泉の花嫁』になど出来るはずはない。」

「そもそも、女の子だから『サルバトール・ムンディ』ではないと決まっていたのか？」

私は聞いたことがないぞ……。」

「といつても、姫はまだ幼い。どういう風にお育ちになるか、見守らないと……。」

「そうだなあ。庶民には、幼少のころは神童と騒がれても、『二十歳過ぎたら、ただの人』という話もあると聞くぞ。」

重臣たちの議論は尽きなかった。そもそも、『サルバトール・ムンディ』に該当するか否かを決める明確な基準がないため、結論は出るはずもなかった。

本は、このような王族の身边情報や重臣たちの思いは、銀河帝国からセレニティに派遣された名誉大使からの情報であると記されていた。

銀河帝国は、王制を敷く星間国家には、二人の大使を派遣する。

一人は通常の外交官だが、もう一人は王族が派遣される。こちらを名誉大使と言う。名誉大使は外交の実務にはかかわらず、その星の王族と交友を深めるのが仕事とされる。

本には、このころから、王制の動向に関するオフィシャル・レポートだけでなく、グリユーエル姫に関する「ストーク・レポート」が名誉大使から帝国に送られるようになってきたとだけ記されている。

しかし、グリユーエルが本の索引を探しても、「ストーク・レポート」に関する記述は、他に見当たらなかった。

『ストーク・レポート』ですか。

初めて聞く名前ですわねえ。

いったい何のために、何を知らせているのでしょうか。

フランク様にお聞きしてみましよう。」

グリユーエルは、いかにも旧式の内線電話を取って、フランク図書館長に話した。

「フランク様、すこしお伺いしたいことがございます。」

「では、すぐにそちらへ参ります。」

グリユーエルは、部屋に現れたフランク館長に尋ねた。

「本に、私に関する『ストーク・レポート』が送られるようになったと書かれています。ですが、これはどのようなものなのでしょうか。よろしければ、お教え下さい。」

「はい。お話ししましょう。もう申し上げてもかまわないでしょうから。」

ストークは、storkです。ホワイト・ストークと言えば、お分かりになるでしょ

うか。」

「ええ!」 コウノトリのことですか? それでは……。」

グリユーエルは、顔を赤くした。

「お気づきになりましたね。」

コウノトリは、子宝のシンボル。

つまり、ストーク・レポートは、銀河聖王家の王族の結婚相手にふさわしいと思われる子供たちの動静を、ローズガーデンクラブの会長にご報告するものです。」

ローズガーデンクラブは、銀河聖王家の女性たちの親睦会である。もちろん、その会長も単なる名誉職である。しかし、長年の慣例では、会長は、王族の縁談はじめ王族の人事全般にわたり女王を補佐するものとされている。このため、銀河帝国の王族の序列においては、ローズガーデンクラブの会長は女王（又は王）に次ぐナンバー・ツーと言われている。

「では、皆さんは、私のことを小さな頃からご存じだったのですか……。」

グリユーエルは、恥ずかしさで、顔を伏せ耳まで赤くなってしまうた。

## 6 セレニティの「政治改革」

「いよいよ、これからですわ。」

この本には、私が十三歳の時からの出来事について、どのようなことが書かれているのでしょうか。

当時、子供の私には知らされていなかった真実が書かれているのでしょうか。」

グリユーエルは気を引き締めて、本を読み続けた。

グリユーエルが十三歳になった時、彼女の運命は急展開し始めた。

この時、国民の間に、政治改革、王制改革を求める運動が巻き起こったからである。

そのころになると、セレニティ王族の間には、長年の経済的繁栄と王家の絶対的な威信の下で、安逸で自堕落な生活態度に溺れる者、自尊心ばかり高く高慢又は自信過剰と陰口を言われる者など、無条件に尊敬できない残念な人物が現れ始めたからである。もちろんそれは、官僚組織の怠惰と腐敗、そして外戚の勢力拡大と同時進行していた。

これに反発して政治改革を求める人々が立ち上がった。

改革派の中には、王制廃止などの「過激思想」を唱える者もいたため、王族は全体として改革派に距離を取っていた。

もちろん、セレニティ王国政府は、長年、言論・表現の自由など国民の権利を尊重してきた伝統があり、改革派を弾圧せず、問題の行方を国民の議論に委ねていた。

そこで、改革派の人々は、王族の心ある人々にも、改革の必要性を訴えようとした。

「本」には、政争の動きのほか、グリユーエルに関するエピソードも書かれていた。

その日も、王宮において、改革派のリーダーであるバルデン伯爵家の次男、ジョセフ・バルデン氏が、アブラハム皇太子に、自らの王制改革の思想を説いていた。もちろん、改革派にもかかわらず皇太子に直接会えるのは、彼がセレニティの名門貴族の出身者だからである。特にバルデン家は大公妃の御実家であり、ジョセフ・バルデン氏は大公妃の甥にあたる。

これに対して、皇太子は、自身が改革派に好意的という疑念を持たれないよう、個室で彼と会ったりはしなかった。大勢の人が出入りし、その意味で二人を容易に監視できる状況にある王宮の喫茶室という場所を選んで、彼から話を聞いていた。

「私は、共和主義者ではありません。」

アレキサンダー王が定めた王国の憲法を、今の時代に合わせて変えることを求めているだけです。

もはや宇宙移民の時代ではありません。そして、セレニティ王国は、辺境宇宙の開拓王国から、銀河系有数の富裕な経済大国へと発展しました。

この時代の変化に合わせた改革が必要です。

まず、議会を開設して、王国の予算や税を議会の議決を経るものとします。

諸人類の歴史を見れば、王制でもそのようにうまくやっている例があります。

セレニティ王国のように、国民を大切にする王国にはふさわしい制度でしょう。

「……………」

ジョセフ・バルデン氏は、自身の改革構想を説明した。

皇太子は、彼の話を丁寧に聞いていた。しかし、その表情からは、賛成か反対かいずれの意志も読み取れなかった。

「ダメだな。彼は、改革に踏み出す勇気が無い。」

「このままでは……………」

ジョセフ・バルデン氏がそう思ったとき、ふと隣のテーブルで一人の少女が携帯端末で電子ブックを読んでいるのが目に留まった。

彼には、少女は電子ブックを読むふりをして、二人の話を聞いていたように思われた。

「……………ん。あちらのお嬢様はどなたですか？」

「ああ、あの子は、私の娘、グリユールです。」

皇太子が答えた。

「なるほど、あの方がグリユール様ですか。聡明そうなお嬢様ですね。」

「いやあ、まだまだ子供です。」

「お父君の目から見ればそうかもしれないませんが、姫の評判は聞いております。」

「そうだ。」

もし殿下のお許しが得られれば、私の著作を献上してもよろしいでしょうか。

もちろん、献上するのは、王室アカデミー賞を頂きました『セレニティ王朝の栄光』でございます。昨今の政治問題とは関係がありませんので、どうかお許しを。」

「その本なら、私も拝見しました。」

申し出をお受けしましょう。ありがとうございます。」

ジョセフ・バルデン氏は、皇太子の許しを得るとグリユーエル姫に声をかけ、彼女の携帯端末に自著を送信した。もちろん彼の狙いは、グリユーエル姫に改革思想を説くことだった。

ジョセフ・バルデン氏の本職は、王立大学の歴史学の教授であった。

そして、彼の主著である「セレニティ王朝の栄光」とは、セレニティ王朝の中で名君とされている大公五人の言動を分析し、「君主たるものかくあるべし」と論じた歴史学と政治学の研究本であった。復古主義的な論法で貫かれたその内容から、王室では広く読まれ、また保守派からも名著と評価されている本である。

しかし、その本は、現在の彼が改革派のリーダーとされていることだけでなく、やや実践的な政治の在り方にも踏み込んだ研究書であるため、未成年のグリユーエル姫にはまだ早いと遠ざけられていたものだった。

グリユーエルは、「本」から目を放して、当時のことを思い出して行った。



「あの御本を頂いたことは忘れません。

この出来事が全ての始まりかもしれないね。

あの御本は、皆さんがおっしゃるような復古主義のバイブルではありません。私にはわかりました。

あれは、憂国の書、警世の書です。

なぜなら、著者ご自身が、諸人類の歴史にある『古代哲学者の悲劇』と同じ立場に立つておられたのですもの。

古代の哲学者たちが、伝説の賢帝を理想の政治の在り方を示すものと説く時は、きまつて、彼の生きている時代の政治のあり方に強い不満や絶望感を抱き、かつ彼自身も権力者から迫害されていたのですから。

そして、あの方も、今の政治の在り方に不満を抱き、かつご自身も、『薔薇の泉』がなければ、『薔薇の泉』が王家の心を支配していなければ、バルデン家の当主になられたはずでしたから……。

もつとも、それをいうなら、あの方の代わりにバルデン家の御長男となり、御当主となった、ピーター・バルデン様も、『薔薇の泉』がなければ、皇太子になられたはずの方でしたね。

悲しいことに、みんな、みんな、『薔薇の泉』に運命を狂わされてしまったのです。

薔薇の泉の存在は、王家の人々に留まらず、多くの人々を苦しめていたのです。だから、私は、あのころから、薔薇の泉は無くすべきだと思ひ始めました。」

当時のバルデン家の当主ピーター・バルデンは、実は、セレニティ大公とマリーナ妃の間に生まれた実子であった。しかし、当時の王家は『薔薇の泉』の生まれでない彼を王族として認めなかった。そのため、マリーナ妃の実家、バルデン家がその子を当主の子として引き取った。

その結果、その子ピーターが長男としてバルデン家を継ぎ、当主の実子ジョセフは次男となった。その後長男のバルデン伯爵はグリューエルを誘拐した罪に問われ自害している（第三十章から三十二章参照）。

グリューエルは目を閉じて亡くなった人のために祈り、再び目を開くと本を読み始めた。

「本」には、そのころから、グリューエル姫も、単独の公務として、会合やパーティーに出席する役目を担う機会が増えてきたと書かれていた。

特に、学問に秀でた彼女は、王立アカデミー傘下の各分野の学会に呼ばれることが多かった。彼女は、多くの学会に出席し、来賓スピーチを行い、その学会の会員である学者たちと懇談した。彼女は、出席したどの分野の学会においてもその先端分野についての深い造詣を披露して「モンブランの神童」の実力を披露し、称賛を集めていた。

もちろん、王族の彼女が、改革派の人々と政治について公然と語り合うことは出来なかった。王族は国民の間の政治的論争からは、距離を置くものとされていたからである。

また、公務の場でグリユーエル姫と懇談する場合は、改革派の人々といえども、王制を公然と批判する発言をすることはなかった。そのような「不規則発言」をする無作法な人々はそもそも王族との懇談の場に出席できるはずも無かったからだ。従って改革派の人々といえども、彼女の前では、復古主義的な論法で改革を暗示するのが限界であった。

これに対して、グリユーエル姫は、セレニテイ王朝の栄光の歴史を引き継ぐため微力を尽くしたいと、復古主義的な論法でみずからの考えをさりげなく語るようになった。だが、その表情からは改革への賛意が読み取れた。

このような彼女の言動は、改革派に「王族の中にも改革に理解のある人がいる」という期待を抱かせるに十分であった。

こうして、彼女は少しずつ改革派の思想に触れて行った。

それを受けて、改革派の中には、彼女を運動のシンボルとして改革を進めようと言う機運が生まれきた。

もちろんこれに対しては保守派の中からも懸念する声が上がった。

「もう、グリユーエル姫を人前に出すな。過激思想に染まってしまふぞ。」

当時、保守派の人々、特にその中心であり将来の宰相候補と目されていたバルデン家の当主、ピーター・バルデン伯爵がこう言つて、グリユーエル姫を表舞台から遠ざけるように重臣たちに迫つたと「本」には書かれている。

「急にグリユーエル姫を国民から遠ざけるわけにはいかんだろう。国民に人気ある姫だからなあ。」

国民からの、姫に対する『お出まし』の要請は、王族の中でも飛びぬけて多いからな。」  
「かつては、姫こそが『サルバトール・ムンデイ』だと期待した者がいたが、とんだ間違  
いだったなあ。」

「とにかく、姫の行動は常時監視することが必要だ。」

総じて、保守派は、グリユーエルに批判的になつた。彼女のことを『サルバトール・ムンデイ』と期待した人々も失望した。もつとも、そのような混乱は、『サルバトール・ムンデイ』がどのような人を意味し、そして、どのように『王国の独立』を回復していくのか何のプランも示されていなかったことにも原因があるのだが。

こうしてグリユーエルは、本人が関わらないところで政治抗争の駒になり、紛争に巻き込まれていった。

## 7 ゴンザエモン・カトー船長との出会い

「本」には、彼女の運命を変える出会いのエピソードも詳しく書かれていた。

グリューエルは、在セレニティ王国銀河帝国大使館で開かれた銀河帝国の女王陛下の誕生日を祝うパーティに出席した。

パーティの主催者は、銀河帝国の名誉大使であった。名誉大使の名は、ピヨトル・ホワイトローズ。彼は、その名の通り、銀河聖王家の王族、それも銀河聖王家の四家（青薔薇家、白薔薇家、赤薔薇家、黄薔薇家）のうちの白薔薇家の当主であった。銀河聖王家の当主クラスの大物が在セレニティ王国名誉大使として派遣されるのは前例がなく、当時のセレニティ王室はその意図を図りかねて緊張していたという。

そのパーティの席で、彼女は銀河帝国の名誉大使に挨拶をした。

「本」には、パーティでの名誉大使とグリューエルとの会話も記録されていた。

「初めまして、殿下。グリューエル・セレニティでございます。」

本日は、私のような若輩者をこのような席にお招きいただきまして、光栄に存じます。」

グリューエルが名誉大使に礼を言った。

「いいえ、こちらこそ、お出で頂いて、光栄です。」

「それにしても、大使殿下、本当に素晴らしいパーティでございますね。」

「いやいや、女王陛下からは、私の誕生日を祝うなんて不愉快なことをやっているのはセレニティ大使館だけだと、いつもお小言（おこごと）を頂いております。」

大公陛下のお誕生日パーティに呼ばれている以上、返礼の意味も込めて陛下のお誕生日パーティをするのが、外交儀礼だとお話しているのですがね……。」

「そうなのですか……。」

外交問題にもなりそうな一見深刻な内幕話に、グリユーエルは困惑した表情で答えた。

「というのも、

『私のような年齢の、イイオトナの女が歳をとったことを祝われ、それを喜ぶと思うのか。』

女王は歳だから早く死ねと、言われているようなものではないか。』

と、陛下はいつもおっしゃるんですよ。

『どうしても誕生日をやりたいなら、毎年、私は18歳だと言って祝え。』とも、おっしゃっています。

ハハハ……。

そういうご自分中心のところは、ワガママと言うか、陛下が銀河聖王家史上最強のオテンバ女王だった頃と変わっておられませんな・ハハハ。」

名誉大使は、軽く笑い飛ばした。

出席者には今の話はジョークのように思われた。もちろん銀河帝国の女王をジョークのネタにできるのは、彼が白薔薇家の当主という銀河聖王家の王族の中でも大物だからであると、出席者は思った。

「ウフフフ……」

グリューエルも笑った。

グリューエルは、「本」から目をあげて考えた。

「この話は、後日、本当の話だと知って驚きました。

でも、今なら、この時、大使殿下が、私にだけ女王陛下のお話をなさった理由がわかります。」

少しでも、銀河聖王家に親しみを持ってもらいたいとお考えだったのですね。」

辺境の自治国家の国民、その王族にとって、銀河帝国は遠い存在であり、その頂点に立つ銀河聖王家はさらに遠くかつ恐ろしい存在だったからだ。

「ところで、殿下、先日歴史学会でのスピーチは、本当に素晴らしいものでした。

宇宙移民時代の王制復古の本質を良く理解され、分かり易くお話になりましたね。」

名誉大使は、グリューエルのスピーチを誉めた。

「殿下のお誉めにあずかって、恐縮です。」

彼女は礼を言つて頭を下げたが、顔をあげると、大使の背後に、警護役らしからぬ男性が控えていることに気が付いた。

彼女は、思わず怪訝そうな表情を浮かべてしまった。

「おお、お気づきになられましたか。ご紹介します。」

この男は、ゴンザエモン・カトーと申します。今日は私の警護役として同行しておりますが、本職は船乗り。実に面白い男です。

これを機会にお知り合いになると、なにかと姫のお役にたつこともあると存じます。」  
名誉大使は、さりげない笑顔で彼を紹介し、その男は姫に頭を下げた。

グリューエルは、二言三言、その男と言葉を交わした。

グリューエルは「本」を読みながら、思った。

「あの時、私は、ゴンザエモン船長が身にまとう特別な雰囲気には驚きました。この方は軍人なのでしょうか、それとも、情報機関のエージェントなのでしょうかと……。」

私はその時まで、宇宙海賊というものを知りませんでしたから……。

もちろん、大使殿下の真意は、密かに手助けが必要ならば、あの方に頼むようにと私

に おっしゃりたかったですよね。」

グリューエル姫は、大使の言葉や身振りからそう感じたのだった。

姫は、小さな頃から、面会した人の言葉や身振りなどから、その人の真意を言い当て



てきた。物心ついてからは、失礼にならないように口には出さなかったが……。

そして、姫の見立ての通り、大使がゴンザエモンを紹介したのは、改革派に理解を示す姫の身を案じてのことであつた。

「そうだ。これは今日の出席者へのお土産ですが、今ここで、姫にそれを献上いたしましょう。銀河聖王家の歴史に関する書物です。」

この書物のなかで、是非、姫に見て頂きたいところを、私からご説明しますぞ。」

大使は、突然そう言つてゴンザエモン・カトーに目で指示をした。彼は手元の一冊の電子ブックをグリュエルの前で広げた。

「これが、私の家、白薔薇家の子供たちです。」

こちらから、長男のニコライ、次男のアレクサンドル、長女のソフィア……。

この中では、アレクサンドルが学問に秀でております。姫とお話が合うかもしれませんねえ……。」

電子ブックは、凛々しい少年少女たちの立体映像を次々と映しだした。

「残念ながら、白薔薇家の女王陛下にはお子さまがおられませんので、姫と近い年頃の方をご紹介できませんが……。」

それでは、どうか、この本をお納めください。」

名誉大使がそう言うと、ゴンザエモン・カトーが電子ブックを差し出した。グリューエルは自分自身の手でそれを受け取った。

なお、この時、女王には、二人の娘（クリステリアとチアキ）がいることは秘密にされてきた。

「この時のことも良く覚えていきます。

カトー船長は、電子ブックを手渡す際に、私の手の中に何か小さなものを押し付けて渡そうとなさいました。

私は、回りの方々に気付かれないようにそれを頂きました。なにか、とても大切なものだと感じましたから。

それが、弁天丸船長のIDリングだったのです。それは、やがて、私と茉莉香さんをつなぐ輪になったのですわ。

それにしても、この時に私はアレックス様を紹介されていたのですね。

でも、私は、その時、あの方のことをまったく気にも留めませんでした。やっぱり、私は、まだまだ子供だったのですねえ。ウフフフ・・・。」

「本」を読みながら、グリューエルは微笑んだ。

グリューエルが受け取ったものは、安物のオモチャのような髑髏マークの付いた指輪だった。

後日、彼女は、それを手渡された電子ブックに近づけると、ゴンザエモン・カトーからのメッセージが表示されることを知った。そして、彼女は、宇宙海賊の存在とその指輪の使い方を知った。

結局、グリュール姫がゴンザエモン・カトーから指輪を受け取ったことは誰も気が付かなかつた。

というのも、姫のまわりに居た人々は、その直前に、銀河帝国名誉大使が自ら家族の写真を姫に披露しながらアレックス王子の名前を挙げたことに、大いに驚いたからである。

彼等の注意はそちらに注がれていた。

もちろん、その電子ブックはグリュールの為だけの特製品であつた。他の人々のお土産の電子ブックには、その家族写真は入っていないからつたからだ。

王宮の関係者は、パーティ終了後、大使の行動について、ささやき合つたという。

「大使のあのような行動は、初めて見ましたわ。」

「これは、姫の縁談について前ぶれなのではないでしょうか。」

「直接、王子の姿を姫ご自身に見せて反応をうかがつたのでしょうか。」

「いやいや。これで、白薔薇家の当主を勤めるような大物が、銀河帝国の名誉大使として我国へ赴任してきた理由が分かつたよ。」

大使ご自身が、姫に直接、会うためだろう。」

## 8 グリユーエルの決意

その後、セレニティ王国内の政治的対立は、さらに激しさを増した。

とりわけ、セレニティ貴族の名門、バルデン家においては、長男の当主ピーター・バルデン公爵が保守派、次男のジョセフ・バルデン帝国大学教授が改革派に分かれ、兄弟で激しい政治闘争を繰り広げたことが人々を驚かせた。

彼らは、セレニティ王朝を支える人々に多数派工作を行い、国論は分裂した。

これに対して、王族は論争からは一歩引いて、議論を国民に委ねる姿勢を保っていた。王室は、グリユーエルに対しても公務で外出する機会を減らし、改革派の人々の前に姿を現さないようにさせていた。

「さすがに、『本』には、このころの私の内心までは書いていませんね。

この頃、私は、このまま、王族が何も発言しないまま、何のリーダーシップも発揮しないまま、事態の推移を見守っていても良いのかと、焦りが募っていました。

それでは、国民は、王制はもはや必要でないと思ひ始めます。

そうなれば、もはや王制は終わりを迎えます。

それは、歴史が教えるところです。

そうだったら、それも我が国の運命でしょう。

でも、私は、傍観していることは出来ないと思い始めました。

しかし、当時の私は籠（かご）の鳥。王宮に閉じ込められていると感じていました。

それで、私は、なんと少しでも改革への支援を求める人々の声に応えなければと、独りで思い詰めていったのですよね。」

グリューエルは当時の自分の思いを振り返った。

「そして、突然、私は、長期の外国出張を命じられたのです。

これは、私をセレニティ王国から遠ざける企み（たくらみ）だと思いました。そのために、警備を名目に軍艦まで同行させて、私が逃げ出さないように監視しました。

このままでは、私は故郷から遠ざけられてしまうと絶望しました。

ところが、その出張のために乗った客船で、ある夜、アトラクシオンに宇宙海賊シヨールがあると知らされました。そして、その海賊船が弁天丸だと知って、私は決意したのです。

行動するなら、今しかないと。

私は、私を監視する警備役を油断させるため、パーティドレスを着たまま弁天丸に密航し、そこで茉莉香さんに出会ったのです。」

グリューエルは当時を懐かしく思い出した。

「本」には、その後の出来事も詳しく書かれていた。

グリユーエル姫は、船長のＩＤリングを使って、弁天丸に密航したこと。

そこで、加藤ゴンザエモンの娘である新しい船長、加藤茉莉香に出会ったこと。

その後、姫は海明星に「留学」したこと。

それは保守派にとつても都合良かったこと。

しかし、姫の真意が、宇宙海賊船を使ってクイーン・セレンディピティにある「薔薇の泉」を破壊することだと知った保守派は、妹のグリーンヒルデ姫を押し立ててそれを阻もうとしたこと。

そして、二人の対決を、弁天丸船長加藤茉莉香が仲介し、クイーン・セレンディピティをセレニティ星系に帰還させたこと。

帰還に際して、グリユーエル姫がクイーン・セレンディピティ艦上から演説し、祖先の国づくりに掛けた思いを受け継ぎ、政争の停止と王制の改革を訴えたこと。

そして、王制改革が本格的に始まった。その時から、彼女は籠の鳥ではなかった。自ら、先頭に立って政敵と論争し、改革を訴えた。

やがて、改革を終えた彼女は、ヒルデと共に茉莉香のいる海明星に再び留学したと……。

（原作「ミニスカ宇宙海賊・黄金の幽霊船編」及びアニメ版「モーレッツ宇宙海賊」参照。）

「海明星では、本当に楽しい日々を過ごしましたわ。

なにより、茉莉香さんといると大冒険の連続で、退屈しているヒマがありませんでしたもの。

それに、銀河聖王家のクリステイア様、チアキ様そして、アレックス様との出会いもありましたわ。

今の私があるのは、あの楽しい日々のお蔭ですわ。

それにしても、よく調べてありますねえ。」

グリユーエルはそう言つて、当時を懐かしんだ。

「でも、あの、私を誘拐した事件の真相は、知つておくべきでしょうね。

大公様は、なぜ相矛盾した二つの陰謀を行わせたのか……。」

（第三十章「グリユーエルの危機」参照。）

グリユーエルは、表情を引き締めて、また本を読みだした。

「本」には、グリユーエル誘拐事件前のセレニティ王国の政治情勢が書かれていた。

改革の熱が冷め、勢いを取り戻した保守派のなかでは、グリユーエル姫の今後について深刻な意見の対立が生まれていたという。

「姫が『サルバトーレ・ムンディ』だと思つたが、期待はずれだった。

幸い、銀河聖王家が姫に関心を持つているのだから、姫の縁組をさつさと決めてしま

おう。姫が結婚のために王国を出てしまえば、それで一件落着だ。」

こういう意見がミツテラン宰相を始めとする保守派の大勢だった。

しかし、保守派のもうひとりの中心人物、バルデン伯爵は違った。

「私は、姫には『サルバトール・ムンディ』となられる資質があると思う。

姫と私とは、王国の進むべき道について意見が違うが、それは問題ではない。

なぜなら、皆さんもご存じのように、姫は人と会って話を聞いただけでその人の真意を見抜く目をお持ちだ。これは、かのアレキサンダー王がそうであったと伝えられるように、『王たる者』が備えるべき資質だ。

そして、私は、姫が『サルバトール・ムンディ』となられる為に何よりも大切なことは、姫がずっとセレニティ王国に留まって、国民のために働いて下さるかどうかだと思ふ。そして、王たる資質を發揮した姫の血を引く王族が将来もセレニティ王国を治めていくことだと思ふ。

この点から見ると、貴方たちの言うように、姫を銀河聖王家へ嫁がせてしまうと、姫の血筋はセレニティ王国から永久に失われてしまうのではないか。

これは、私にとつては認めがたいことだ。」

保守派の人々は、バルデン伯爵がグリユーエル姫を高く評価していることに驚いた。

なぜなら、彼は、政治改革騒動の時に保守派の代表として姫と激しく争い、自身も姫



から直接に厳しく非難された経緯があるからだ。

そして、彼は、他の保守派が誰も考えなかつたプランを言い出して、保守派の人々をさらに驚かしたという。

「姫の血筋を王国に残すために、『薔薇の泉』を復活させようと思う。

これは、ある意味で保険だ。

姫がご自分の将来を自由にお決めになることが出来るようにするためだ。」

「どういう意味ですか？」

「私は、たとえ姫がご自分の意志で銀河聖王家に嫁ぐことを決められたとしても、せめて姫の血筋だけは王家の中に残さねばならないと考える。

そのための仕掛けが薔薇の泉だ。これがあれば、何が起こつても、確実に、姫の子孫がセレニティ王宮を継いでいくことになる。」

「なるほど、確かに。」

「もちろん、薔薇の泉は最悪の事態に備えた保険であつて、本来、行ふべきことは別にあります。

やはり、私は姫には次の国王になつて頂こうと思う。

私は、王国のためにはこれが最善の道だと思つている。

次期国王ともなれば、姫もセレニティを離れることは出来ないだろう。

そうなれば、この私も命懸けで姫にお仕えしよう。」

このプランに保守派の人々は反発したという。

「伯爵。いきなり何をおっしゃるのですか?」

「そうです。姫は、改革派の女神ですぞ。」

それに対して、伯爵はこう反論したという。

「何を言うか。」

『サルバトーレ・ムンディ』が、我々と同じ思想の持ち主だと決まっていたのか?

これまで、私もみなさんと同じように考えてきたが、今はその考えに疑問を持っている。

現に、姫のお蔭で、セレニティ王制は安定を取り戻し、過激な共和主義者は面目を失ったではないか。

私は、これまでの出来事を振り返って、こう思うのだ。

姫がこのようなお力を示された以上、姫をお守りすることが我々の使命ではないかな。」

「でも、王室には、跡継ぎとして皇太子殿下がすでにいらっしゃるじゃないですか?」

「それについては、心配していない。薔薇の泉から生まれた御子達ならば、自分の成すべき事はわかるはずだ。」

我々が、姫を『サルバトーレ・ムンデイ』として崇め、ひざまずくようになれば、陛下も皇太子殿下も譲位せざるを得ないだろう。

それが、セレニティ王宮の不文律だ。」

このようなバルデン伯爵の発言に、保守派の長老たちは困惑した。

「本」には、伯爵が突然に方針転換したことに困惑し、保守派の人々の間では、このような言葉も交わされたと言われている。

「いったい、なぜ、伯爵は、心変わりしたのか？」

なぜ、最大の政敵だったはずのグリューエル姫を支援すると言いだしたのか？」

「まさか、ご自分がグリューエル姫のパートナーになるつもりじゃないだろうな。」

「そんな、冗談でもそれは言うべきではないぞ。」

伯爵は46歳、姫は16歳だぞ。親子ほど年齢が離れているじゃないか。」

「でも、伯爵は、いまだに独身だからなあ。」

「それはそうだが……。」

「なんですって!？」

伯爵さまは、私を国王にしようというお考えだったのですか!？」

それに薔薇の泉の復活が、私の行動が原因だったなんて……。」

ここまで「本」を読んできたグリューエルは、思わず声を上げた。伯爵の方針転換とその内容は、グリューエルも知らなかった。

「では、私の誘拐事件については、どのような真実が書かれているのでしょうか」

「本」には、バルデン伯爵とミッテラン宰相との意見対立について、セレニティ大公は両者の進言を認めたと書かれていた。その理由は、相矛盾する企てを同時に進めて勝ち馬に乗ることは、大公としての政治的な信念であったからという。

ただし、大公は、両者に対して自分の気持ちとして

『グリューエルがセレニティを去ってしまう結果になるのは、とてもつらいことだ』  
と言ったと、「本」には記されている。

「それで、あの時、お父様（皇太子）は、私に、

『いつ、どこにいても、故郷セレニティのことを忘れないで欲しい』  
と、おっしゃったのですね。」

グリューエルは、目を閉じて、故郷を思い浮かべていた。

王宮庭園の咲き誇る花々、

清らかな小川の流れ、

波の音と潮のかおりに包まれた夏の離宮の夕べ

澄み切った青空と白い雪を抱く山々、

そして、親しい人々の笑顔  
「何もかも、なつかしいですわ。」

## 第四十二章 海賊の結婚式 1

## 1 海賊の巣

「まもなく、目的地『海賊の巣』付近の空間にタッチダウンします。」

弁天丸Ⅱ号の臨時操舵手を勤めるウルスラ・アブラモフが言った。

弁天丸は、宇宙海賊マイラ・グラントの娘、リディアの結婚式に参列するため、海賊の巣に向かっている。

結婚式に招待されているのは、茉莉香、グリユーエルそしてクーリエの三名である。この他に、ギルバートも父の代わりに招待され、元セレニティ軍親衛隊のキャサリンは、グリユーエルの護衛として随行する。

そこに、茉莉香が結婚式に参列するという話を聞いたウルスラが、「自分の結婚式の参考にしたいので私も行きたい、見たい」と言つて強引に乗り込んできたのだ。ウルスラは、「士官学校の方は『休暇』をもらったから大丈夫。」と言つている。

茉莉香は、士官学校の学生に「休暇」などあるのだろうかと疑問に思いつつ、ウルスラの頼みをきいて、今回の航海に同乗するのを了解した。

「了解。」

「どうかなあ？ ウルスラ。弁天丸の操舵手となった感想は？」

茉莉香が聞いた。

「最高だよ。ダーリンと一緒にの船に乗れてうれしいなあ。

船長、ありがとうね、私のお願いを聞いてくれて。」

「いや、そんなに感謝されると。・・・」

「それに、私、いままで友人とか親戚とか、他の人の結婚式に呼ばれたことが無かったんだよ。だから、自分の為にも、ぜひ見たかったんだ。

もちろん正式な招待者でなくてもいいんだ。ウエイトレスでも何でもするからさあ・・・。」

「ナハハハ・・・まあ、それは、了解をもらってあるから、大丈夫だけど。」

茉莉香はウルスラが本当に喜んでいるのを見て、自分も少しうれしかった。

『初めて海賊の巣に行った時とは、ずいぶん気持ちが違うなあ。』

茉莉香は思った。

初めて、海賊の巣に行ったときは、グランドクロスとの決戦に備えて海賊の同盟を作るためだった。特に弁天丸は、海賊の巣にたどり着く前にグランドクロスと戦って、傷つきながらようやくたどり着いた。だから、命懸けの緊張感があった。

しかし、今回は、宇宙海賊リディア嬢の結婚式と披露宴に出席するために行くのだ。

そのため、どこか船全体がホンワカとしたムードに包まれている。それもそのはず。

ブリッジを見渡しても、前回とはメンバーが大きく違っている。メンバーは若手ばかりだ。ペテランのクルーは、この際とばかりに休暇を取っている。

まず、シュニツァーが休暇で不在だ。その席には、代わりに、ギルバートが座っている。もつとも、シュニツァーは次のように物騒なことを言つて下船したが……。「若いものばかりで危ない目に会つて苦労するのも、いい経験になる。」

ミーサも、もともと産休で不在だ。医務室には、船医としてスージーとトムが乗っている。かれらも、海賊の結婚式には興味があるようだ。

医務室と言えば、リリイも茉莉香が結婚式に行くという話を聞いて弁天丸に乗つてきた。

三代目と百目は不在だ。二人とも訳あり顔でこう言つて、休暇を取つて消えた。「行先は聞かないでくれ。」

もつとも、クーリエに言わせると、こうなる。

「二人とも、行先（女性）の当てもないくせに……何、カッコつけてんのよ。」

代わりに、百目の席には、ケイコ・サトーが座り、三代目の席には機関士としてウルスラの婚約者・ブラウン中尉が座っている。



ブラウン中尉は、星間物質に囲まれ外部から見えない「謎の空間」という、海賊の巢の立地する空間の宇宙物理学的性質に興味を持っており、観測装置を総動員して宇宙空間を探ろうとしている。

ケイコ・サトーは、サンタ・マリア星の調査の際に、旧宇宙マフィアのグループと内通していたことがバレて、帝国軍とヒガン共和国軍を懲戒免職になっていた（第三十八章「母なる星」参照）。

そこで彼女は、こう言つて茉莉香に頼み込んできた。

「懲戒免職が二つ。私は、これで真面（まとも）な仕事につけなくなりました。もう故郷にも帰れません。」

でも、これは、本物の海賊になる資格（キャリア）が出来たということですよ。

どうか弁天丸に乗せてください。」

茉莉香は、もともとケイコの能力を認めており、彼女をクルーに加えた。

ルカは、休暇を取らず、この航海に同行している。

彼女は、この頃、若手女性乗務員のアネキ分として、毎晩毎晩、「女子寮」に入り浸っている。海賊の巢を良く知っていることもあり、女性乗務員をひきつれて「海賊の巢」の探検ツアーを行うと言つて、この航海を楽しんでいる。もちろん女性乗務員たちは「海賊の巢」に対する好奇心（怖いもの見たさ）で盛り上がっている。

元セレニティ軍親衛隊のキャサリンは、今は帝国軍の警備部隊に所属している。グリュールルの誘拐事件の際に怒って大使に襲いかかったためセレニティ軍を辞職せざるを得なかったが、グリュールルの計らいで帝国軍に移籍したのだ。

彼女もルカと一緒に毎晩「女子寮」のガールズトークに参加している。しかし、彼女はこれまで戦士として仕事一途で生きてきたため、ガールズトークには相当なカルチャーショックを感じているようだ。

もちろん、宇宙海賊マイラ・ラグランツの娘、リディア嬢が結婚する相手は、自分の兄・キースではないかと言われており、心境は複雑らしい。彼女も自分の人生を考え始めたようだ。

## 2 「Don't Worry」の乗客

「おかしいなあ。」

ケイコ・サトーが、艦内の管理モニターを見ながら首をひねっている。

「なにが？」

その声にこたえて、他の乗務員たちが会話に加わった。

「出航以来、食事をしている人数と乗員名簿の人数が合っていないのよ。」

「どういう意味？」

「一人多いのよ。」

「そりや、誰かが食事を二人前食べているんだよ。」

「それは、ちゃんと数えているわよ。それを引いても多いのよ。」

ねえ、そつちのモニターを戦闘モードにして、艦内の生体反応の数を調べてくれない？」

「わかった。」

え〜と……

帝国軍から乗り込んでいる若手乗務員たちが、ケイコの頼みをきいて調べ始めた。

「ああ、三十六名。やつぱり一人多いよ。」

「ええ!? どういうこと?」

「密航者がいるの?」

乗務員たちの会話を聞いていた茉莉香は、『密航常習者』のグリューエル姫がブリッジに居るのを確認しつつ、乗務員の会話に口を挟んだ。

「いや、生体反応では、不審者（Unknown）という表示は出ていません。」

「ええ? でも一人多いんでしょう。」

その人は、今、どこにいるの?」

茉莉香がさらに聞いた。

「船長。弁天丸Ⅱの乗員数は、この航海では少ないと言っても三十五名おりまして、艦内の生体反応だけでその三十六人目の人を識別するのは難しく……。」

乗務員たちが言い訳した。

「そう言えば、警報が鳴らなかつたわねえ。」

本来、密航者がいるなら、出航するとき警報が鳴るはずよねえ。」

茉莉香が冷静になって考え始めた。

「う……ん。警報が鳴らない『密航者』ってアリかなあ。」

「ククク……ッ」

考え始めた茉莉香の側で、クーリエが忍び笑いをしている。

「ああ！もしかして……。」

ねえ、貴賓室には、今、生体反応はあるの？そこには今、誰かいるの？」

茉莉香が聞いた。

「貴賓室？調べてみます……。」

ああ、今、一人いるという反応があります。」

「やっぱり。」

茉莉香は、貴賓室の方をヨコ目でにらんだ。

「えええ!？」

船長。乗員名簿をもう一回、チェックしたところ、乗員数が三十六人に増えています。」

「ええ？ 増えている人は、誰？」

「それが、名前の欄には『Don't Worry』って、表示されています。」  
「なに、それ。」

『Don't Worry』ってことは、『心配するな』ってことね。

コンピュータのくせに、ずいぶん『上から目線』の言い方じゃないの。」  
茉莉香は少し不服そうにそう言っつて、グリューエルに向かつて言つた。

「ねえ、グリューエル。あなた、出航以来、貴賓室に居たわよねえ。」

「ということは、私をダメしていたの？」

「ダメしてなんかいませんわ。ダメっていただけですわ。」

グリューエルは微笑んでそう言つた。確信犯のようだった。

「もう。ひどいじゃないの。それをダメしたっていうの！」

「ウフフ。それって、船長お得意のセリフじゃないの……」

ルカがポツリと言ひ、クーリエは笑っている。

「ウウウ……」

「ナハハハ……」

これには、一瞬、声を荒げた茉莉香も、最後には苦笑いするしかなかった。

このやり取りを聞いて、乗務員たちは事情が呑み込めてきたようだった。

「茉莉香さん。ご自分の目でお確かめください。」

グリユーエルが、微笑みながら言った。

その頃、貴賓室では、三十六人目の乗客が、上機嫌でカガミの前に立っていた。

その人は、この航海のために新しく仕立てた豪華な服を試着していた。

それは、カリビアンスタイルの海賊船の船長服だった。黒を基調としつつ、金モール、金ボタン、襟や袖には華やかなフリルがつき、肩には帝国海賊の印、黄金の髑髏がついていた。

「ルン、ルン、ル、ル、ル〜♪」

そうね〜。デザインといい、生地の色や肌触りといい、最高ね。

やっぱり、おニューの衣装は、気持ちいいわあ〜。」

その人はカガミの前でポーズを取りながら、顔に仮面をつけた。

「ふむ、ふむ。これで変装も完璧ね。グフフフ……。」

そして、カガミに自分の正面、右半身、左半身、後姿を映して、楽しんでいた。

その時、いきなり貴賓室のドアが開いた。

「ああ、やつぱり、チアキちゃんだ。

もおく。いるならいるって、言ってくればよかつたのにく。」

そう言つて茉莉香が、貴賓室の中にいた人に、いきなり抱き着いた。

「う、わ、わ、私は、『チアキちゃん』じゃない。

宇宙海賊アンドロメダ・ジュニアだ……。」

仮面だつてつけて、ちゃんと変装しているくう、う、う……。」

チアキは、茉莉香に抱き着かれて慌てながらも、そう言つた。

「わあ……。キアキちゃんだあ。うれしいなあ。

私さあ、今、初めてチアキちゃんが弁天丸に来てくれた時のことを思い出したよ。」

「初めてつてというと、船長見習いの研修の時？」

茉莉香、何言っているの。そんな昔のことく。」

「ウフフ……。やつぱりチアキちゃんといっしよだと楽しいねえ。」

「ウフフ……。茉莉香つたら、もう。」

チアキも、茉莉香のその言葉を聞いて、微笑んだ。

「ねえ、チアキちゃんも、いっしよに海賊の巣に行くんでしよう？」

それで、リディアさんの結婚式・披露宴に出席するんでしようく？」

茉莉香が聞いた。

「そうよ。母上の名代だけどね。」

「へえ。」

それは、『また、茉莉香とグリユーエルが二人で出かけてしまう。』と、少し寂しそうにしているチアキの姿を見て、女王が昔馴染みのマイラ・グラントに連絡を取って、チアキも行けるように手配したためであった。

もちろん、チアキとグリユーエルは、銀河聖王家の姫としてではなく、宇宙海賊アンドロメダ・ジュニアと、宇宙海賊レディ・セレンディピティの名前で出席する。

やがて、弁天丸Ⅱは、海賊の巣に到着した。

「ドッキング・ブリッジが、まもなくつながります。」

ウルスラがそう言つて船を操作すると、滑らかにドッキング・ブリッジが連結され、弁天丸は海賊の巣の港湾区画へ停泊した。

### 3 海賊の巣

「まだ出てこないのかあ。もう一時間も経過しているぞ。」

「何を、やっているんだ？」

海賊の巣に到着した弁天丸の一行を出迎えようと、ドッキング・ブリッジの前で待っていた人たちは、待ちくたびれていた。



やがて、加藤茉莉香船長、宇宙海賊アンドロメダ・ジュニア（チアキ）、宇宙海賊レディ・セレンディピティ（グリユーエル）、クーリエ・・・弁天丸の乗務員が続々降りてきた。

「おぉ〜！」

「ヒュ〜。船長以外の女性は、みんな派手に着飾ってるねえ。」

「それで時間がかかったのかあ〜。」

「うう〜む。やっぱり、女性たちの衣装は結婚式に来たつて雰囲気だねえ。」

「お蔭で、今晚の結婚式と披露宴にむけて気分が盛り上がってきたよ。」

出迎えの人々の視線は、着飾った女性たちに釘づけだった。

先ほどまでの不機嫌は吹き飛び、お祭りムードが盛り上がっていた。

「ああ、やっぱり、こうなるよねえ。」

私だけ普段の船長服なんて〜。

私もドレスに着替えればよかったかなあ。」

出迎えの人々に挨拶しながら、茉莉香はそう思った。

なぜ、こうなったか。それは、こんな事情だった。

「船長、与圧、正常。ハッチを開けてもいいですか。」

ウルスラが艦内放送で茉莉香船長に連絡してきた。

「ちよつと待つて。まだ、スージー先生が来ていないわよ。」

茉莉香が、医師のスージーがハッチ前に来ていないことに気が付いて、彼女を待つことにした。

「いやあ。ゴメン。ゴメン。着替えに手間取っちゃって……。」

まもなく、スージー医師が、遅れてやってきた。

「……………」

その時、他の乗務員は、スージーの華やかに着飾った姿を見て、絶句していた。

彼女の衣装は、女性らしい華麗さと上品さを保ちつつ、キャリアウーマンとしてのピントとした緊張感のある、おニューの濃紺の上着とミニスカに、エナメルハイヒールだった。それだけでなく、髪、耳、首元、手首、足首と全身にダイアのアクセサリーを幾つも着け、身動きするたびにキラキラと星の光の粒がこぼれるようだった。

一方、他の乗務員は、女性もみな普段、弁天丸で過ごしている制服姿のままだった。

「ええ!?」 だって、今晚の宿泊先は、ホテル・エルドラドでしょう?」

みんなの視線を集めていることに気が付いたスージーが言った。

「みんなも知っているように、エルドラドは、その名(黄金郷)のとおり、帝都でも1、2を争う豪華なホテル。」

だから、帝都の女の子は、みんな、エルドラドに行くなら、まずエルドラドに着ていく服を買いに行くことから始めるって言うくらいなのよねえ。」

「……………」

「ねえ、いくら海賊の巢にあつても、『エルドラド』は『エルドラド』でしょう？  
ねえ、そうでしょう？……………」

「……………」

女性乗務員は、まだ絶句していた。

ただし、その理由は変わっていた。

まったく、スージーの言うとおりだと気が付いたからだ。

『こんな普段着の制服姿で、ホテル・エルドラドのロビーを歩きたくない！』

みんな、そう思った。

「う……………。私、着替えてくる。」

「私も……………」

「メイクも、決めてこなくちゃ……………」

たちまち、ハッチ前から女性乗務員の姿が消えた。

「私も着替えようかなあ、ドレスに……………」

茉莉香もつぶやいた。

「ダメよ、茉莉香は。船長なんだから、制服着用！

まだ、入港手続きのお仕事が残っているでしょ。」

おニューの海賊服に身を包んだチアキがダメ出しをした。  
「ナハハハ……。」

再び、全員がハッチ前にそろった時には、一時間が経過していた。

#### 4 結婚式

結婚式は、海賊の巢にある古代宗教の礼拝堂で行われた。

少し薄暗い礼拝堂の中はステンドグラスから青や赤の光が差し込み、荘厳な雰囲気にかまれている。礼拝堂のホールの内には中央の通路に祭壇まで赤いじゅうたんが敷かれ、その両脇に参列者の席が設けられている。

もちろんその赤いじゅうたんは、「ヴァージン・ロード」だ。

参列者が待ち受ける中を、礼拝堂のオルガニストにより、荘厳かつすこし楽しそうな宗教音楽風の曲が演奏された。

その音楽に乗って、まず、白いドレスを着た二人の小さな子供が、赤いじゅうたんの上に花びらをまきながら進んでいく。

その次に、尼僧の衣装を着た女性に先導されて、白いウエディングドレスに身を包んだりディア嬢が、両手でブーケを持ちながら一人で進んでいく。ドレスの裾は、10メートルはあろうかというほど、長くのびている。そして、その裾を別の子供たちが

持つて従っていく。

「なんて立派なウエディングドレスなの。こんなの見たことがないわあ〜」

「花嫁さん、きれいなええ。」

「そうねえ。そう言えば、この音楽、マリア賛歌だよねえ。」

「そうそう。今の雰囲気ピッタリねえ。」

「そうね、結婚式の進行もマリア賛歌の物語とそっくりね。物語でも、シスターが先導するのよね。」

「ステキ〜！ 私も、こういう結婚式をあげたいわあ・・・。」

結婚式に参列した弁天丸の女性乗務員たちは、うつとりと眺めていた。

「ステキ！ わたしも礼拝堂で式を挙げたいなあ。ねえ、いいでしょう。」

でも、お母さんに聞いた話では、うちの一族では、ヴァージン・ロードは花嫁をお父さんが連れて歩くシキタリだそうだよ。うちのお父さんは、今からそれをちよつと楽しみにしているんだって。」

式に参列していたウルスラが、小声で婚約者ブラウン中尉にささやいていた。

「マリア賛歌かあ。オテンバ・リディアにはピッタリの曲だね。ハハハ・・・」

式に参列していた男性の海賊たちがそう言って微笑んだ。

「マリア賛歌」の物語とは、修道院の問題児、オテンバのシスター・マリアが礼拝に来

た王子様に間違えてバケツ一杯の水をぶっかけてしまったが、それがキツカケとなつて、王子様に見初（みそ）められ、その後、様々な困難を乗り越えて、そのお妃様になるというシンデレラ・ストーリーだった。

リディアの結婚式は、その物語そっくりに進められていた。

それは新婦である彼女の願いだつた。

やがて、新婦は、礼拝堂の祭壇の前で待つ新郎と司祭役の老人の前に進んだ。

司祭役の老人の先導で、二人は誓いの言葉述べ、新郎が新婦にキスをした。

そして、司祭は、神の祝福の下に二人が結婚したことを告げた。

参列者の拍手と、礼拝堂の鐘が鳴る音が響いた。

その後、礼拝堂の入り口に参列者は集まった。新郎新婦を見送るためだ。

歓声の中、新郎と新婦が現れた。

その時、グリュールは、礼拝堂の入り口の階段付近の、人々が集まっている場所から少し離れた位置に立っていた。

そして、彼女は、礼拝堂の周りを見回した。礼拝堂前の広場のあちらこちらでは、昼間から大勢の大人の男女が、敷物の上に輪になって集まり、歌ったり踊ったりして騒いでいる。

「どうやら、私たちが来たために、その種の『大人のお店』は、みな臨時休業させられた

のでしようね。

暇を持て余した方々が、昼間からお酒を召し上がって、歌って踊っていらつしやるのでしよう……。」

グリユーエルはそうつぶやいて、踊っている男女を眺めていた。

「あつ！ グリユーエル、そつちに飛んで行つたよ。」

「あ、あ、地面に落ちるよ……。取つて、取つて……！」

いきなり茉莉香やほかの女性たちの声が聞こえて、よそ見をしていたグリユーエルは、驚いた。そして、急いで礼拝堂の入り口の方向に向き直り、そちらの方向にいる人々を見た。

みんな、自分の方を見ている。

しかし、自分に、今、何が起ころうとしているのか分からなかった。

その時、彼女の横から人影が飛び出してきた。それは警護役のキャサリンの姿だと、グリユーエルも気が付いた。

「……。」

キャサリンは、無言で、さつとグリユーエルの顔に向かって飛んできたものを手で受け止めた。

「まあ、花嫁のブーケ！」

グリユーエルは、キャサリンが手にしたものを見て言った。

「これは、姫様のものです。姫様に向かつて飛んできました。」

キャサリンは、ブーケを姫に差し出して、そう言った。

「なにをおっしゃいますの。それはあなたのものですよ。」

だから、キャサリンさん、次の花嫁は、あなたですよ。」

グリユーエルはそう言つて、微笑んだ。

「うわー、キャサリンさんがブーケを取つたよ。」

「キャサリンさん、おめでとう！」

キャサリンは、礼拝堂の入り口付近にいた人々から祝福された。

そして、その時、キャサリンは、礼拝堂の入り口にたつ新郎新婦の顔を、初めてはつ

きりと見た。

新郎は、間違いなく兄のキースだった。

彼は、につこり笑つて、キャサリンに向かつて拳を握つた右腕を伸ばし、親指を立て

た。

「GOOD JOB !」

(次に幸せになるのは、お前だよ) 「」

そういう意味を込めたポーズで、彼は妹のキャサリンを祝福した。



どんな時にも表情一つ変えないキャサリンも、この時ばかりは頬を上気させていた。

## 5 披露宴Ⅰ カードゲーム

「うわー。おいしそう。」

思わず、茉莉香が楽しそうな声を出した。

茉莉香の座るテーブルは、メイン会場でチアキやグリユーエルと一緒に中央最前列である。他に同席しているのが、弁天丸のギルバート、クーリエ、キャサリン、スージーだった。だから、今日の茉莉香はとても気楽だった。海賊会議の時とは大違いだ。

もちろん、披露宴では、海賊の巢の名物、「おやしさん」の料理が振る舞われた。

だから披露宴の出席者全員が、来賓の海賊たちのあいさつも聞かず、おしゃべりもせず、料理を食べることに集中していた。

.....

「ああ、おいしかったわ。これが、ミーサ先生の言う『伝説の料理人』の味ね。」

ここまで来た甲斐があったわ。」

スージーが、至高のデザート（かき氷）を食べながら満足して言った。

彼女は、船医は常に船長と同格のもてなしを受けると言う船乗りの伝統に従って、茉莉香と同じように招待客としてもてなされていた。

「では皆様、そろそろ、余興を始めます。

まず、エキジビション競技の参加者ですが、本日は公平を期すためフォーチュン・ルーレットで決めさせていただきます。

さあ、ルーレットを回してください。」

司会者が、海賊の宴会で恒例となつている余興、海賊八人で争う七種競技とその勝敗への賭けを始めると告げた。もちろん参加者は、新郎新婦への祝い金として海賊宝箱一杯の金貨か黄金のインゴットが必要とされる。

バニーガールたちがルーレットを回して、参加者の席番号を書いたメモを司会者に届けた。

「最初の参加者は、席番号が、一の二番。次は、十二の五番、……」

「ええ……!!? 席番号の一つて、うちの一番テーブルじゃないの。」

一番テーブルの一角がチアキちゃんて……一番の二と言うことは、……」

茉莉香が、恐る恐る、席順を数えた。

「私ですわ。茉莉香さん。」

グリユーエルが静かに言った。

「ええ!!? 七種競技には、剣の勝負とか、強いお酒の一气飲みとか、危ない競技もあるんだよ、グリユーエル。」

やめておいた方が……。」

茉莉香が、辞退するように勧めた。

「はい。一番の二、レディ・セレンディピティ、参加します。」

グリユーエルは、茉莉香の言葉にもかかわらず、右手を挙げて立ち上がり、そう言った。

「うお〜〜。」

会場の海賊たちから、歓声が上がった。

もちろん、会場の海賊たちにとって、「レディ・セレンディピティ」と名のるグリユーエルが新しく銀河聖王家の王女となった姫であることは「公然の秘密」。だから、彼女が、オテンバぶりを発揮してどんな勝負をするか、みんな興味深々だった。

「ご心配なく、茉莉香さん。私には、幸運の女神がついておりますのよ。」

グリユーエルはすまし顔で、心配顔の茉莉香にそう言つて、競技者の席に向かった。「では、皆様。最初に競技の出席者をご紹介します。」

1番、レディ・セレンディピティ。」

司会者がそう言つと、グリユーエルは歓声にこたえて手を振つた。

「続いて紹介します。」

2番、キャプテン・フリーマン三世、3番、キャプテン・フック、4番、キャプテン・

ブラックサンダー、5番、キャプテン・ドナルド、6番、キャプテン・クリスタルスカ  
ル、7番、キャプテン・トーゴー、8番、キャプテン・スカイドラゴン。以上八名です。」  
みんな歓声に包まれていた。

「では、まず、第一の競技をルーレットで選びます。それ!」

やがて、バニーガールが放った球が、ルーレットのカードゲームのところまで止まった。  
「皆さん、最初の競技は、カードゲームです。」

カードゲームと言えば、もちろんポーカーですよね。」

バニーガールスタイルのきれいな女性が進み出てきた、そう言った。彼女がデー  
ラーを務めるようだ。

「おお〜」

歓声が上がった。

やがて、会場の中央にテーブルが出され、皆がその周りに集まってゲームの行方を見  
守った。

「さあ、みなさん、お手元のタブレットに誰にいくら賭けるかを入力して、

張った! 張った!」

司会役のバニーガールが、会場の観客に賭けを促した。

「それからもちろん、第二会場でテレビをご覧の皆さん! 張った! 張った!

オッツは、副チャンネルの映像を見てくださいよ。」

バニーガールは、宴会場を映すテレビカメラに向かって、声を張り上げた。

披露宴は、茉莉香たちのいるメイン会場以外にも、ホテル内の第二会場とホテル外の広場を利用した第三会場があり、ここでも、海賊船の船員たちが大勢集まり、自由に飲み、食事をしていた。もちろん彼らはこれから始まるゲームと賭けを楽しみにしている。

ディーラーが、テーブルを囲んだ八人にカードを配った。

『ふくむ。皆さんは、なにか、私に含むところがお有りのようですね……』

グリューエルは、ゲームの参加者をさっと見渡して、直ちにそう思った。

『カードを配るディーラーさんまで、何か私に含むところがおありのようですね。』

なんですの？……』

グリューエルは、参加者やディーラーの真意を見抜こうと、彼らの行動をじっくりと見ていた。

その間に、ゲームは進んでいく。ゲームの参加者は、まず、ビッドの成立を確認する。海賊たちには、ここでいきなりパスする人はいない。参加者はすぐにドロウ（カードの交換）を始めた。やがて、グリューエルがドロウする順番になった。

『ワンペアの手ですから、ここは三枚交換でしょうか……』

彼女はそう思って、3枚の札を捨てて、言った。

「三枚、ください。」

グリューエルは、自分の言葉を聞いた瞬間、ディーラーの女性が少し満足げな表情をしたことを見逃さなかった。

彼女は、配られたカードを手に取ると、なんと3枚とも同じ数の札。

フルハウスの手が、出来上がっていた。

『なるほど。わかりました。』

ディーラーの方は、誰にどんなカードを配るか、決める力をお持ちなのですね。

これが、いわゆる「八百長」というものですか……。

だから、一回目のゲームでは、私を勝たすおつもりなのですね。』

その間にまたゲームは進んでいく。参加者たちは、次々と掛け金のコール（同じ額を賭ける）またはレイズ（賭け金を上げる）をしていく。

グリューエルは、自分からはレイズをせずにコールをして受け身で振る舞った。

「最初だから、コールが一回りしたところで勝負と行こうか。」

参加者の中で年配のキャプテン・フックが言うと、みな肯いた。

当然、勝負はグリューエルの勝ちだった。

「あら、どうしましょう。」

「こんなにたくさん黄金のチップを頂いて……」

グリューエルは、いかにも世間知らずのお姫様らしい、すつ呆（とぼ）けた声を出して喜んだ。

もちろん、これを聞いて参加者や観客が微笑んだ。

しかし、内心では、グリューエルは怒っていた。

『私のカマトト、うまく決まりましたわね。』

そして、この笑顔で皆さんの本音が分かりましたわ。

ゲーム参加者のみなさんも、ディーラーさんも、私を適当に遊ばせて、厄介払いするおつもりなのですわね。

これでは、皆さんに、きっちりとお仕置きをして差し上げないと、私の気持ちが収まりませんわ。』

グリューエルの猛攻が始まった。

次のゲームも、グリューエルに配られたカードは、最初からツープアが出来ており、十分に良い手だった。

『なるほど、ディーラーさんは、まだ私に勝たせるおつもりなのですわね。』

でも、いつまでも、私を思い通りに動かせると思っただら大間違いですよ……フフフ。』  
グリューエルは、声を出さずに笑った。

ドローはグリユーエルから始まったが、彼女は、まずゲームを支配するディーラーの裏をかいて、思わぬ行動に出た。

「ワタクシ、おりますわ。」

ねえ、悪い手の時は、そうしてよろしいんでしょう？」

グリユーエルは、ディーラーの方を見て、相変わらずのカマトト調の言葉づかいで、そう言った。カードゲームのルールに不慣れな、世間知らずの姫を演じ続けることにしたのだ。

グリユーエルの声を聞いて、ディーラーは怪訝（げげん）そうな表情を一瞬、浮かべた。

「よろしいんですか、レディ？ ドロップ（おきる）ばかりでは、勝てませんよ。」

参加者の一人、年配のキャプテン・フックが言った。

「でも、先程よりは、ずいぶん手札が悪うございましたから……。」

「おお、姫、なりませんぞ。」

このゲームではご自分の手の内をおっしゃってはなりませんぞ。

『ポーカーフェイス』と申しまして、悪い手の時でも、良い手を持つている様に振る舞って、相手の戦意をくじいて勝つのも、このゲームの醍醐味ですからなあ、ハハハ……。」  
フックは、グリユーエルのカマトトに乗せられて、次第に気を緩めてきた。



その証拠に、グリユーエルのことを「姫」と呼んでしまった。正体を知っていることを認めてしまったのだ。

この時とばかりに、ディーラーは手に持ったカードの山札を片手で素早くシャツフルした。他の参加者が気付かないほどの早業で、二番目の参加者がカードの交換枚数についてドロウする前に、グリユーエルに配るはずだった一枚のカードを山札の一番上から移動させて、隠したのだ。

もちろん、グリユーエルはそれを見逃さなかった。

「なるほど、こういう方法でゲームをコントロールするのですか……」

でも、これほどの早業、かなりの熟練が必要でしょうねえ……」

二回目のゲームが終わり、グリユーエルの手札を見た参加者一同は、ため息を漏らした。

『ツーペアで、降りることはないのに』

『この姫はポーカーを知らないなあ』

ため息はそう言っている様だった。

三回目のゲームが始まった。

グリユーエルの最初の手札はハートのカードばかり。今回は、いきなりフラッシュが完成していた。

「なるほど。ディーラーさんは、まだ私を勝たせるおつもりですね。

この方は女性だけあって、私のカマトトは通じにくいかもしれませんがねえ。

それでは、勝負ですわ。」

グリューエルは、今回も、コールをしつつ、受け身で振る舞っていた。

しかし、他の参加者がコールしている最中に、グリューエルは、大げさな動作で片手を動かして、カードをイジっていた。他の参加者から注目を集めるために……。

「ウワア……。キヤー。」

そして、グリューエルは黄色い声を上げて、手に持っていたカードをテーブルの上に落としてしまった。相変わらずのカマトトぶりだった。

その結果、四枚のカードが表を見せて散らばり、彼女の手はどうやらフラッシュらしいと参加者に分かってしまった。

「これは、これは、いけませんなあ。

姫。いったい何をされていたのですかな？」

ベテラン海賊、フリーマンⅢ世が、にこやかな表情で話しかけてきた。

「はあ、ディーラーさんのカード裁きがあまりに素晴らしいので……。

私も真似をしようと、片手でカードをシャッフルしようとしていたのですが……。」

「ハハハ、彼女はプロですからなあ、その技は簡単にはできませんぞ……。」

フリーマン三世は、にこやかな表情でグリユーエルにそう言ったが、すぐに顔をディーラーに向けて、少し厳しい顔をしてこう言った。

「おい。悪いが、次のゲームからカードを配るのは、透明のカードケースから一枚ずつ出す方法にしてくれ。」

シャツフルも俺たちがするからな。

そして、次のゲームには、新しいカードを使ってくれ」

それは、言外に『下手な八百長はやめろ』という圧力だった。

結局、グリユーエルは参加者の顔色を見て、自分より強い手を持つ者がいることが分かり、そのゲームを下りてしまった。

「うまくいきましたわ。これでディーラーさんは八百長が出来なくなりましたわ。」

彼女は、海賊たちに八百長だと悟らせて、海賊たちがディーラーのカード操作を止めさせるように、仕向けたのだった。

いつの間にか、海賊たちはグリユーエルに操られていた。

「これで、カードは運任せになりました。これからは勝負ですわ。」

皆さんに、私の強運をご覧に入れますわあ……。」

グリユーエルは、闘志を燃やしていた。

やがて、新しいカードが配られた。

その手を見たグリユーエルは思った。

『ああ、これは面白いカードが配られましたね。

でも、ここで喜んではいけませんわ。』

そう思うと、グリユーエルはディーラーに言った。

「あのう、ルールブックを見せて頂けませんでしょうか。」

自信の無さそうな、頼りない声を出して、グリユーエルはそう言った。

「姫、ルールブックをご覧になりたいとは、どうなされました？」

キャプテン・フックが言った。

「はあ……、カードの中に、ピエロさんのような方がいらつしやいますので、この方はお強いのかどうかと……。」

「それはジョーカーでしょう。ポーカーでは、本来使わないカードです。」

「やつぱり、そうなのですかあ。」

「きつと、新しいカードを使った時に抜き忘れたのですね。」

カードの配り直しをしましょう。」

キャプテン・フックが言った。

「はい。」

そう言つて、グリユーエルがあつさりと捨てたカードを見て、参加者一同は驚いた。

エースが四枚とジョーカーが一枚、フオーカードの強い手が完成していた。

黙ってジョーカーの一枚を交換すれば、このゲームは自分の勝ちだったのに……。それを惜しげもなく捨ててしまおうとは、

『姫は、ポーカーの勝負を知らない』

と他の参加者は思った。

しかし、これもグリューエルの作戦だった。

『ウフフフ……。殿方を楽しませるのはこの辺でよろしいでしょうか。』

さあ、まいた種を狩り取りに行きますわよ。』

グリューエルは、勝ちに行くことにした。

新しいカードが配られた。

グリューエルは、コールやレイズをしていく参加者の顔を見て、思った。

『なるほど。今回は、皆さん、なかなか良い手が出来たようですね。』

勝負する気ですね。』

コールが一巡しても降りる者はいなかった。

「では、私は、レイズと参ります。チップを五枚、賭けますわ。」

「おお、姫も勝負されるのですね。」

「はい。降りてばかりでは面白くありませんもの。勝負ですわ……。』

今回も、グリューエルはカマトト風のノンビリした調子で、『シヨウブ』と言った。  
「ハハハ、姫はお元気ですねえ。」

参加者たちは、一回ぐらい姫に付き合つて勝たせようかという気になっていた。

コールが一巡して、グリューエルにまた番が回つてきた。

「では、もう五枚。グリューエル、いきまゝす！」

「ハハハ……」

姫の可愛い掛け声に参加者たちは笑顔を浮かべ、また同じ掛け金を出して、姫に続いた。

「も〜〜！ 誰も私を怖がつて、降りるとか、おつしやいませんのね。」

グリューエルは、わざとらしくすねて見せた。

「ハハハ……」

参加した海賊たちは、この時はまだ笑っていた。

「もうこんなこと、何回もやるのは飽きましたわ。」

私、手元のチップを全て、賭けます。

さあ、みなさん。私を恐れてください。私、猛獣ですよ〜。」

このグリューエルのカマトトぶりは、見事だった。

「ハハハ……」

どう見てもバンビ（小鹿）にしか見えないグリユーエルが、自分のことを猛獣と言ったので、参加者はまた、微笑んだ。

「では、いきましよう。姫、負ければ、『ドボン』（破産）ですぞ。」  
「怖くありませんかあ、姫。」

そう言つて逆にグリユーエルを怖がらせるようなことを言つて、参加者の海賊たちは、グリユーエルと同じ数の多額のチップを賭けた。チップが足りない海賊は借金をして賭けた。

「はい。ありがとうございます。」

グリユーエルはにっこり笑うと、参加者を眺めた。

そのとき、グリユーエルの目は、参加者の心の底を覗き込むような、不思議な威厳のある光を放っていた。

「あ、俺たち、なにか、間違つたか……。」

「引きずり込まれていく……。」  
「やられた。」

グリユーエルに見つめられた参加者には、そんな思いが浮かんだが、何も言えなかつた。

「では、皆さん。勝負ですわ。」

グリユーエルが、自分の手を開いた。

「ハートのロイヤル・ストレート・フラッシュユ！」

「ああ……」

「うわああ……」

もちろん、グリユーエルの大勝ち。彼女は、テーブルいっぱい、山のように積み重なった黄金のチップを手に入れた。

会場は大歓声に包まれた。

「ディーラーさんに伺いますが……」

ホールに観客の興奮した歓声が響く中で、グリユーエルはディーラーに話しかけた。

「このチップは、この場ではお金として使えるのでしょうか？」

「はい。その通りでございます。」

「では、ホテルの支配人を読んでもください。」

「はあ!？」

やがて現れた支配人に向かってグリユーエルが言った。

「支配人さん。」

このチップで、ホテル内の第二会場とホテル外の第三会場周辺で、この勝負をご覧の皆様、飲めるだけのお酒と、食べられるだけのお料理を振る舞って、差し上げて下さ



い。」

「はい。姫様。承知いたしました。」

支配人が下がると、グリユーエルは、カードゲームの様子を写していたテレビカメラに向かつて立ち上がり、ワイングラスを持って、言った。

「さあ。みなさん。」

花嫁、花婿の幸せを祈って、乾杯いたしましょう。

そして、皆さん、今宵、海賊の巣のお酒を、全て、飲み干してしましましょう！

乾杯！

これに応えて、全ての人々が、乾杯と唱和した。

グリユーエルは、グラスのワインを飲み干すと、以後の勝負を棄権すると告げて、ゲームを下りてしまった。

グリユーエルは、カードゲームを知らないのではない。

強すぎて参加できないのだ。

セレンディピティという幸運の女神のように、偶然にも最強のカードを引き当てる信じられない「強運」と、見ただけで相手の真意や思惑が分かる、「王の資質」とされる目を持っているからだ。だからポーカーフェイスは彼女には通じない。

グリユーエルは、小さな子供の頃に王族の子供たちとカードゲームをしていて、自分

がそのような力を授かっていることを自覚した。

だが、彼女がその力を発揮すると、それにより負け続けた子供たちが不機嫌になっていくのを知って、悲しんだ。そして、仲良く楽しく遊ぶため、その力を発揮することに慎重になった。

グリユーエルは、今宵、仲良く楽しく遊ぶために、久々にその力を発揮した。

## 第四十二章 海賊の結婚式 2

### 5 披露宴2 適齡期

その後も海賊たちの競技とその勝敗に対する賭けは続いた。それぞれに盛り上がり、宴会場は大いに沸いている。

そんな騒ぎと全く無関係に、ひな壇の席に並んで坐る新郎と新婦は楽しそうに言葉を交わしていた。

茉莉香は、そんな新郎と新婦の様子をぼんやりと眺め、最近の出来事を振り返っていた。

「結婚かあ。う〜〜ん。」

「どうしたの？ 茉莉香。ため息なんかついて・・・。」

チアキが声をかけた。

「あのねえ。結婚するって、あんなに楽しそうなことなのかなあ。」

茉莉香は、そう言いながら、新郎新婦の方を目で示した。

「そうねえ。私も結婚が楽しいかと聞かれると分からないけど、彼女は間違いなく楽しそうだねえ。」

「うくん。年齢の問題もあるのかなあ。

私たち今年やつと19歳になるでしょう。

結婚適齢期というのがあって、その年になると自然とそう思えるのかなあ。

だから、私たちには、まだ早いのかなあ。」

「それとこれとは関係ないでしょう。ねえ、グリユーエル。」

「そうですね。でも、茉莉香さんも、そのうちおわかりになりますよ。ご安心を。」

「そうかなあ。」

そう言えば、チアキちゃん。新婦のリディアさんつて、いったい何歳なんだっけ？」

「それは、茉莉香、あのねえ……。」

チアキが言葉を濁したときに、何かチアキの顔に向かって飛んできた。

咄嗟に身をひるがえし、チアキは飛んできた白く丸いものをよけた。

そのため、何も気付かずにいたグリユーエルの顔に、その白く丸いものが命中した。

「キヤー。なんですよ、これ!？」

それは、クリームパイだった。海賊のパーティーで最後に投げ合うお約束の小道具であ

る。

「やったわね。」

少し怒ったチアキは、タイミングよくテーブルに運ばれてきたクリームパイを力い

ばい投げ返した。

茉莉香とグリユーエルが驚いて、チアキが投げた方向を見ると、新婦のリディアがこちらを睨んでいた。どうやらクリームパイを投げたのは、彼女のようだった。

もちろん、彼女はさつと身をひるがえして席を離れ、チアキの投げ返した白いクリームパイの皿をよけた。そして投げられたパイはそのまま飛んで、新郎のキースに命中した。彼は避けずに当たることを選んだようだった。

「逃げるな！ 待て！」

チアキは、そう言つてリディアを追いかけた。

「フン。私が逃げるものかあ。」

そう言いながら、リディアは手近なテーブルにあつたクリームパイを奪い取つて、チアキに投げ返した。

もちろん、チアキもさつと身をひるがえして、リディアの投げた白いクリームパイの皿をよけた。そして投げられたパイはそのまま飛んで、近くのテーブルに座っていた海賊船の船長の顔に命中した。彼も、避けずに当たることを選んだようだった。

「私に反撃しようなんて……。思い知るといいわ。」

そう言いながら、チアキも手近なテーブルに走り寄つてクリームパイを取つて、走り回るリディアを狙つて投げ返した。

二人は、テーブルの間を追いつ追われつ、走り回り、お互いにパイを投げ合っていた。これを見た宴会の出席者たちはどうしていいか分からず、凍りついていた。

「ええ!?! 投げ合っているのは、新婦と姫様じゃないか。」

「しかも、二人は本気でケンカしているよ——!」

「おい、誰か、あのケンカの仲裁に行けよ……。」

「仲裁と言っても事情が分からないよ。」

「ケンカの原因は何だよ?」

「女のケンカというと、フツ、原因はオトコだよなあ。」

「それなら、恐ろしいなあ、新婦と姫は三角関係だったのかあ。」

「オンナのケンカに口を挟むなんて……俺はまだ死にたくないよ。」

「そうだよ。そんな恐ろしいこと出来るわけがない……。」

海賊たちがそんなことを小声で話し合っているうちにも、二人の投げたパイは、流れ弾となって、テーブルで凍り付いている彼らに次々に命中していった。

もちろん、彼らは、お約束のパイ投げ合戦を始めるような気分にならず、予想外の展開に戸惑っていた。

「ねえ、ねえ……。」

チアキちゃんも、リディアさんも、やめてよ。やめて!

今日は、お祝いの宴会でしょう……。」

そこへ、茉莉香がケンカを止めようと、二人の間に割って入った。

「ケンカは、白黒つくまでヤルものじゃないでしょ……。」

ここは、お互いに反省し合つて、穏やかに握手して……手打ちというかあ……。」

茉莉香は何とかこの場を納めようとした。

茉莉香も最初は驚いていたが、『これじゃあ、イケナイ』と思つて動き出したのだ。

ところが、二人の反応は、茉莉香の予想外だった。

「何、言つてるんだ。誰のせいでケンカになつたと思つてるんだ。」

新婦リディアがこう言うと、

「そうよ。茉莉香。あなたのせいよ。」

チアキもそう言つて、応じた。

「ええ〜！ ケンカの原因は、キャプテン茉莉香かあ。」

「ということは、三人で、男を取り合つたのか？」

「それじゃあ、キャプテン茉莉香も、カワイイ顔してるけど、ヤルことはヤルんだなあ。」

三人の話を聞いていた海賊たちの間に誤解が広がっていく……。」

「ええ！ 私が原因なの？ どうして？」

茉莉香が怪訝そうにチアキに聞いた。

「ええ!! あなた、わかつてないの!?

原因は、茉莉香が私に花嫁の歳(とし)を聞いたからよ。」

チアキが呆れて答えた。

「あれは、私、自分の『結婚適齢期』って何歳だろうと考えていて……。」

そう言いながら、茉莉香も気が付いた。

女性の歳を聞くのはマナー違反だが、特に長命種の『若い女性』の歳を聞くのは、タブーであることを……。そして、茉莉香は、自分の『結婚適齢期』についての考  
えごとに集中するあまり、うっかりやってしまったのだ。

しかも、茉莉香たちの席は、最も上席つまり新郎新婦の目の前だった。だからその会  
話が新婦に聞こえてしまったのだ。

「う……くん。ゴメン。本当にごめんなさい。

だから、さあ……。

だからといって、あんなに派手にケンカすることないじゃないの。

もうやめてよ。」

茉莉香が言った。

「何、言っているんだ。

私が悪い訳じゃないのに、なぜ始めたケンカを途中でやめなきゃいけないんだ。



だいたい、私は、『お互い悪かった。』と両者反省してケンカを止めるような、『キレイゴト』なんか、ダイキライだ。」

「そうよ。私も売られたケンカを買った以上、勝つまでやるわよ。」

「なんで、私が負けなきゃイケナイのよ。」

「まあ、リディアが、『私が悪かった』と謝るなら許してもいいけど……。」

「なんだと……。さつきも言ったが、私が悪い訳じゃない！」

「リディアとチアキが口をそろえて言った。二人とも負けず嫌いで、まだまだやる気のようにだ。」

「ええ……ゴメン、とにかくゴメン。ケンカをやめてよ。」

「……………」

二人は沈黙した。不満なのは明らかだった。

「ふくくくうん。」

その時、茉莉香は二人を交互に眺めて、顎（あご）に手を当てて言った。

「こうして見るとさあ……、

二人は結構、気が合うんじゃないかなあ。いいお友達になれるよ。

「だって、二人の息がぴったり合っているよねえ。」

「……………」

二人の間に、一瞬、沈黙が支配し、二人は顔を見合わせた。

しかし、次の瞬間、二人は互いに顔をそむけ、そして茉莉香に向かつて言った。

「何、言ってるんだ！ 悪いのは、加藤茉莉香だ！」

「そうよ。話を逸（そ）らさないでよ。」

悪いのは、茉莉香よ。」

「ええ〜い。くらえ！ 加藤茉莉香〜〜あ！」

そう言つてリディアが茉莉香にパイを投げつけた。

チアキも負けずに投げつけた。

「あわあ〜。」

茉莉香は、あわてて逃げたが逃げ切れず、二人の投げたパイが当たり、船長服を汚してしまった。

「ひど〜い。」

チアキちゃん、リディアさん。ヒドイよ。

このパイ投げは女性にぶつけないのが、お約束でしょう〜。」

「知らないわよ、そんな『お約束』。」

「そうだ。とにかく、お前が悪い〜〜！」

この時、それまで黙つて三人のやり取りを聞いていた海賊のオヤジたちが、一斉に立

ち上がった。

「そうだ！ キャプテン茉莉香が悪い！」

海賊のオヤジたちは、いつせいに茉莉香めがけてパイを投げ始めた。

「ええ!? え、え、え〜!?」

茉莉香は驚いて、逃げ回った。

もともと、海賊のオヤジたちの狙いは正確でなかった。彼らはとにかくバカ騒ぎを始めればよかつたからだ……。

「ひど〜い！ 船長さんたち、ホントにひどいよ。」

「何を言うか！ キャプテン茉莉香が悪い！」

「そうだ！」

たちまち、宴会場は、いたるところでパイ投げ合戦が始まり、めちやくちやになった。

もちろん、茉莉香はこのバカ騒ぎの中心にいる。

「も〜〜！」

みなさん、私、怒りましたよ。」

怒っているのか、困っているのか、楽しんでいるのか、どこか楽しそうな茉莉香の声に、海賊たちが一斉に反応した。

「上等だ。」

ならば、どうだ、一騎打ちと行こうか、キャプテン茉莉香。」

銀河のサジタリウス腕をナワバリにしている、ブラックフラッグ号のブラン船長がそう名乗り出て、茉莉香と向き合った。

「お相手するわよ。」

私、申し込まれたお仕事や海賊の決闘は断らないのがモットーですから。

ナハハハ……。

それに、これでも、私、小さいころから、ドッジボールや雪合戦は負け無しよ。」  
そう、茉莉香が言つて、二人は向き合った。

「……………」

「……………」

二人は互いに相手の動作を窺（うかが）つてゐる。

そして先に、茉莉香がパイを投げる動作をした。

「ほほう。それは頼もしい。」

茉莉香の動作を見ながら、ブラン船長は、余裕の表情で茉莉香の投げたパイをかわそうと左に動いた。

「かかったわ。」

そう言いながら、茉莉香は、そのままの動作でパイを投げず、わずかにタイミングを

遅らせて、ブラン船長のかわす動作が行く先に素早くパイを投げつけた。

「うわくく。しまった。『先の先』を読まれたか。」

ブラン船長は更に素早く方向転換が出来ず、茉莉香の投げたパイをまともに胸にぶつけてしまった。

「フフフ……。フェイントって言葉をご存じかしら。」

茉莉香がそう言って微笑んだ。

「アハハハ……。ブラン。お前の負けだ……。」

二人の対決を見守っていた海賊たちは大笑いした。

海賊通しの一騎打ちは、まだまだ続いた。

茉莉香が次々と一騎打ちの相手を倒し、海賊たちのハデな負けっぷりに宴会場は爆笑に次ぐ爆笑に包まれた。

こういうバカ騒ぎが始まると、茉莉香以外の女性たちは宴会場を抜け出して行った。そして、パーティーは事実上、お開きになった。

## 6 御役目

パーティーのあと、チアキとリディアは宴会場の隣の「続きの間」に移った。

「姫様、そろそろ、陛下から命じられた御役目を……。」

副官のスカレットがチアキに促した。

しかし、チアキはそれに答えず、リディアを見て言った。

「あなたもなかなかヤルわね。面白かったわよ。」

「お誉めにあずかつて、光栄でございます。」

リディアも敬語を使いながら、チアキの言葉に答えた。

「では、握手と行きましょうか？」

「承知いたしました。」

二人は仲直りの握手をしようとするのだが、なぜか、二人の言葉には緊張感が漂っていた。

二人は、言葉通りに、右手でしっかりと握手をした。

しかし、二人は握った手を離さず、お互いの手に力を込めて相手の手を握っていた。

「むむ……。」

「これは……。」

次の瞬間、チアキとリディアは、左手に隠し持っていたクリームパイを相手の顔に押し付けた。つまり、力強い握手は、パイを押し付ける相手を逃がさないためだった。

「やるわね。同じことを考えていたのね。」

顔をクリームまみれにしながら、チアキが言った。

「恐れ入ります。」

同じように顔をクリームまみれにしたリディアも、言葉だけは敬語を使っているものの、チアキに負けていなかった。

「姫様……お役目を。」

スカーレットがタオルをチアキに渡して、再度促した。

そこへ、新郎のキースがリディアに近づいてタオルを渡し、そして二人はチアキの前で片手片足を床につけ、跪（ひざまず）いた。

「では、よろしいですか。始めますよ。」

チアキが言った。

「はい。」

「はい。」

新郎のキースと新婦のリディアが神妙な声で返事をした。

「キース・グラント。」

海賊女王の名において、あなたを帝国海賊のキャプテンに任命します。

その証（あかし）として、ここに黄金の髑髏とマントを授けます。」

チアキがそう言うと、スカーレットが黄金の髑髏とマントをリディアに手渡し、受け取ったリディアはキースの肩に髑髏をつけ、マントを羽織らせた。

そして、リディアは、キースの晴れ姿を、嬉しそうに見つめていた。

「おめでとう。」

チアキが言った。

「ありがとうございます。」

私、キース・グラントは、陛下に永遠の忠誠をお誓い申し上げます。」

キースが女王の名代であるチアキに対して、宣誓の言葉を述べた。

「身に余る光栄でございます。」

殿下におかれましても、このような辺境の地にわざわざお越しいただき、御礼申し上げます。

お帰りになりましたら、どうか、陛下に私どもの感謝の言葉をお伝えください。」

母親のマイラ・グラントも現れ、チアキにお礼を言った。

そしてこの日、チアキは、リディアという「女海賊の友情」で結ばれた友人を得た。

## 7 出航

「もう」。『海賊の巢探検隊』は、まだ、帰ってこないの。

出航まで、あと2時間というのに……。

まあ、女の子ばかりで出かけたといっても、ルカが隊長として率いているから、遅く



なっても安心だけど……。」

茉莉香は、すこし苛立っていた。

「ねえ、ダーリン。そのカードは何？ 何かの会員証？

本当に嬉しそうだねえ……。」

操縦席のウルスラが、隣の機関士席に座る婚約者・ブラウン中尉が嬉しそうに眺めている金色のカードについて聞いた。カードには黄金の髑髏マークがついている。

「これは、海賊の巢博物館の『友の会』の会員カードです。

この存在は噂には聞いていましたが、海賊でないと会員になれないので諦めていました。

でも、いまは宇宙海賊船・弁天丸のクルーだから「立派な海賊」だと加藤船長の口利きで、会員にしてみました。感激です。」

「どうして、それが、そんなにうれしいの？」

彼が喜ぶ訳が分からないウルスラが聞いた。

「時空トンネルに関する研究のヒントをさがすためですよ。これがあると、博物館のデータベースにアクセスできるんです。

博物館には、マッド・サイエンティストとして世の中から排除された研究者の書いた論文から、超高速跳躍に失敗して遭難した海賊船の航海記録まで、宇宙大学にもない貴

重な資料がたくさんありますからね。

ウルスラさんも御存じのレイ・レオニー氏は、この海賊の巢博物館と宇宙大学図書館の両方の資料からヒントを探して、時空トンネルの原理を開発したそうです。

なかでも彼が最も苦労したのは、時空の同時性をどうやって確保するかという問題です。同時性が確保できないと、時空トンネルで目的地に到達しても、何百万年も前の時代とか、その逆に未来とか、とんでもない時空に放り出されてしまう恐れがありますからね。

この問題について、それまでの研究では……」

ブラウン中尉の話は止まらなかつた……」

やがて、ふと、話を止めた彼が、自分の話を笑顔で聞いていたウルスラに言った。

「私の話、分かりますか、ウルスラさん？」

「ぜんぜん。」

ウルスラは首を横に振つた。

「ええ!? それじゃあ、なぜそんなに嬉しそうな顔をしているんですかあ？」

「決まつてるじゃないの！」

そんな難しいことを一生懸命に考えているダーリンって、『立派な人だなあ』って思つてダーリンの顔を眺めていたんだよ。

私、ダーリンのこと、尊敬しているんだよ、ほんとだよ。」

ウルスラが嬉しそうに言った。

ウルスラに大真面目でそう言われて、ブラウン中尉は顔を真っ赤にしていた。

「うあゝ」

「あ、あ、あゝゝ」

その時、弁天丸のブリッジのあちこちから、声が上がった。

「ウフフ．．．、ウルスラさん、ごちそうさまです。」

同じく、話を聞いていたグリューエルが言った。

ウルスラは、宇宙物理学の最先端の研究をまったく理解できなかった。でも、彼女は

『古代哲学者の妻』ではなかった。

ちなみに『古代哲学者の妻』とは、夫である哲学者の考えていること（哲学）に全く無関心で、むしろ『哲学』などというお金儲けとは全く無縁のことに熱中する夫を『役立たずの怠け者』と思っているような女性のことをいう。

ウルスラはとても素直な性格で、彼のことを尊敬していた。

こういう姿を見ると、二人はお似合いだった。

やがて、『探検隊』が帰ってきた。

「面白いところが、見られたねえ．．．。」

「あんな大人のお店なんて、私たち素人が出入りできるところじゃないものねえ。」

「それに、『大人のお店』の最深部、ヒミツの奥の小部屋まで、覗（のぞ）かせてもらつたよお〜〜〜！」

「それもこれも、ルカ先輩のお蔭です。ありがとうございます。」

女性隊員たちはまだ興奮が収まらない様子で、ルカに礼を言った。

「ありがとう。でも、奥の小部屋まで覗けたのは、今日もお店が休業だったからよ。」

休業の原因を作つた姫様にも、感謝しないとね。」

ルカが言った。

「うふふ．．．．．」

グリユーエルが笑つていた。

「仕方ないでしょ。」

ホテルの支配人が、『海賊の巢中の酒を全部飲み干すためには、酒代が足りなくなつた』と、お金を取りに来たからよ。」

チアキが言った。

「いやあ〜。チアキちゃんが挑発したからだよ。」

『全部飲み干すと言うなら金は払うけど、飲み干す前に酔いつぶれたら、海賊たちの自腹だぞ。』つて言うんだもの．．．．．」

茉莉香が、笑いながら言った。

「そうねえ。みんな意地になつて飲んだようね。」

おかげで、みんな今日は二日酔い。お店は休業になつたわ。」

ルカが言った。

「でも。そのせいで、海賊船の医師団は、昨夜は全員、徹夜だつたんですよ。」

急性アルコール中毒の患者さんとか、酔つてケンカしたり転んだりしてけがをした人とか、次々と海賊の巢病院に運びこまれてきたので、海賊船の医師や看護師が全員応援に行くことになつて……。

それで、なんとか、患者さん全員の応急処置が済んだら、夜が明けていましたよ。」

まだ看護師の資格は無いものの、看護師の代わりに医師の治療を助けて、てきぱきと動き回つたりリイが言った。リイは、ミーサ先生による『修行』のおかげで、早くも、救急医療の厳しい現場で動き回る度胸を身に着けていた。

もちろん、リイが結婚式や披露宴に出席せずに居残り当直の役目を選んだのは、その方がトム医師の身近に居られるからだつた。

「それにしても、ルカ先輩は、あのお店の女将（おかみ）さんにずいぶんと、気に入られていましたね。」

「まあね。海賊の巢に立ち寄ると、決まって声をかけてくるわよ、彼女。」

『おまえさんなら、店を譲る』とか、

『若女将（わかおかみ）にならないか。』ってね。」

「ハイ、ハイ。全員揃ったところで、話はそのくらいよ。

そろそろ弁天丸に出航の順番が回ってくるわよ。

総員、配置について。出航、準備。」

「はい。」

茉莉香が掛け声をかけると、みんな持ち場に戻って行つた。

弁天丸Ⅱが、海賊の巢を出航する準備をしている間に、宇宙海賊船愛の女王号が出向して言った。

こちらの船は、新郎キースと新婦リディアも乗船しており、大勢の人々の見送りを受けていた。二人の新婚旅行も兼ねて、お客を大勢乗せてリゾート惑星を回るクルーズに行くという。

見送りの海賊たちの間では、昨夜の宴会の話題で持ちきりだった。

「これでどうとう、オテンバ・リディアも結婚かあ。」

「ああ、そうだなあ、母親のマイラのヤツも喜んでいたよなあ。」

「結婚となると、リディアも急に女らしくなったなあ。オテンバも卒業かあ。」

「それにくらべて、アイツのオテンバぶりは、相当なもんだなあ。」

「ああ、面白かったよ。新しいオテンバ海賊の誕生だ。」

「そうだなあ。アイツは、パイ投げも本気で参加していたものなあ。」

「やつぱり、アイツは何をやらせても華（はな）があるよ、なあ。」

「そうそう、人の目を引き付ける魅力があるって、いうか……。」

アイツの出演する海賊ショーが大人気だという理由が良くわかったよ。」

「でも、色気がないのが、残念だなあ……。」

「ハハハ……。あの調子じゃ、そりやまだ、当分無理だなあ。」

「それに、アイツには、パイをぶつけても良いと姫様も言っていたし……。」

「これで、もう、アイツは、俺たちの仲間だ。」

「そうだな。もう一人前の海賊だ。」

そう言えば、来月は、銀河系のサジタリウス腕をナワバリにしているグーフィー船長の息子の結婚式だろう。」

「よくし。面白いから、アイツも来賓で呼べと言っておこう。」

「来るかなあ？ アイツはグーフィーとは面識がないんだろう。」

「そこはそれ、手はある。」

「どんな手だい？」

「簡単だよ。海賊ショーの仕事を紹介して、サジタリウス腕に呼ばばいいのさ。」

「なるほど。弁天丸は依頼された仕事は断らないがモットーだからなあ。」

「楽しみだなあ……。」

「ハハハ……。」

こうして披露パーティでの「アイツの活躍」の噂が伝わると、銀河系のあちこちの海賊たちから、様々な海賊のイベントへのご招待の声が、弁天丸船長加藤茉莉香にかかりはじめた。



## 第四十三章 嵐の予兆

1 司令官のユウウツ

「ワア~~~~！」

「キャ~~~~！」

テレビ中継は、民衆の歓声を伝えている。

「クリスティア様とアーサー様ご夫妻を乗せたパレードの車列は、ゆつくりと帝都の中心、ガーデン・ストリートに差し掛かります。

沿道では、本日、結婚されたお二人の姿を見ようと大勢の国民や観光客が集まっています。

お二人は、笑顔で手を振っていらつしやいます……。」

「ヤツパリ、アイツ、逃げ出す気だな……。」

チアキは、テレビ放送を見ながら、不機嫌な独りごとを言った。

というのも、昨日、女王と姉のクリスティア王女から次のような話を聞かされていたからだ。

「チアキ、第一艦隊の司令官のことだが．．．、

明日の結婚式がすんだら、お前に頼んだ「代行」は解消して、私がやるつもりだったのだが、事情が変わった。

実はなあ．．．．」

そこで言葉を区切つて、姉は少し顔を赤らめて言った。

「すでに、妊娠していることがわかつたんだ。

どうも体調が変だと思つていたのであ．．．．。

ハハハ．．．．」

「(ええ!)．．．．」

チアキは驚いたが、言葉を飲み込んだ。

「チアキ。医師の話では、おなかの子は男の子だそうだ。

アハハハ．．．．。

男の子だぞ．．．．男の子。」

女王は、とてもうれしそうだった。

こういうとき、つまり母親としての女王は、チアキがあきれるほどノー天気だった。

「それで、だなあ．．．．」

チアキ。すまんが、もう少し司令官の代行を続けてくれないか。

私の出産がすむまででいいんだ。

大学の勉強もあるのに、公務までさせて、本当に済まんなあ……。」

「だって、アイツの妊娠なんて、予期せぬ出来事じゃないわよね。

それに、前から、言っていたもの。」

チアキが姉のクリステイア王女から聞いた話は、こんな話だった。

「孤児院で子供たちの世話をしていると、いろんな事情を抱えた子供たちがいるんだ。

中には、心がとても傷ついている子供たちがいる。

たとえば、宇宙船の事故で両親をなくした女の子がいたんだ。

その子は、いつもこう言っていて、泣いていたよ。」

『私、朝起きた時、いつも、いつも、とても幸せな気分だったの。

だって、お母さんとお父さんの楽しそうな声を聞いて目を覚ますのよ。

それに、朝ごはんや仕事に出かける支度をしている物音が聞こえてきたわ。

私がベッドを飛び出すと、朝ごはんのいいにおいが廊下まで漂ってきて、今日の朝ごはんは何か、そのにおいをかいただけでわかったわ。

私は、食堂まで走って行って、おはようと言って、お母さんに飛びついたわ。

お母さんは、メアリー、おはようと言って、私を抱き上げてくれたわ。

次は、お父さんに飛びついたわ。．．．

私、今でも、毎朝、目が覚めるたびに、回りの物音に耳を澄ますのよ。

そして気がつくの。

ここはあたしのおうち（船）じゃない！つてね。

あんな楽しい朝は、もう二度と来ないのよ．．．』

「そうやって泣く子供を、私は抱きしめることしかできなかつたよ。

チアキ、お前、この子の話を聞いて、どう思う？

本音のところを聞かせてほしいんだ。自分と比べて．．．。」

クリステイ王女は、少し真剣な顔でチアキに尋ねた。

「そうですね。

本音をはつきり言えば、たとえ短い期間でもいいから、そんな思い出を持ちたかつた

ですね。私も、母親不在の海賊船で暮らしてしまいましたからね。」

チアキは、そう答えた。

もちろん、姉がそんなことを聞いてくる意図はわかっている。

そして、クリステイ王女は、こういった

「そうだろう．．．。」

私もそうだ。

自分も孤児院で育って、さらに孤児院で多くの訳ありの子供たちの世話をしていたから、わかったんだ。

子供にとって親はどういう存在か、

親は子供にどうしてやればよいか、

そういうことが、痛いほどよくわかったんだ。

だから、私は、自分が親になったら子供にこうしてやろうって、決意していることがたくさんあるんだよ。」

テレビ中継を見ながら、キアキはそんな話を思い出していた。

もちろんチアキはわかっている。

姉のクリスティア王女にとっては、銀河帝国の後継者としての富や権力より、母親としての子育てのほうが大切なのだ。

その気持ちは、痛いほどよくわかっている。

それに血統が正統性の根源である王家にとって、後継者となる子供の育成は重要だということもわかっている。青薔薇家の後継者を育てることが、銀河聖王家の安泰を守り、それは、実際のところ宇宙の平和を守ることにつながっている。

他方、チアキにも、姉に言い返したい気持ちはある。

『私に、こんなに仕事ばかり押し付けて、何よ。姉さんは、身勝手よ。』

『私だって、やりたいことがいっぱいあるのよ。』

『なんで、私ばかり、こんな思いを……。』

しかし、チアキは、そんな思いを口に出して言えなかつた。

チアキは、そんな自分の気持ちを自ら押さえつけて、じつと重責に耐えていた。

そして母や姉の期待にこたえようとしていた。

銀河聖王家の王族たる自分は『全知全能』の神の末裔なのだから……。

## 2 二人のお誕生会

「ねえ、チアキちゃん、また、出かけちゃったの？」

次の授業まで、一時間しかないのに……。

茉莉香は、大学のカフェテリアの隅で、グリューエルとお茶をしていた。

「そうですね。でも、お時間までにはきちんと戻ってこられますよ。」

チアキさまは、そういうお方です。」

グリューエルは、微笑みながら答えた。

「それにしても、いくらお互いが忙しいからって、わざわざ、昼間のこんな短い時間にデートすることはないと、思うんですけどねえ。」

「そういうものらしいですよ、デートというものは。」

茉莉香さんも、そういうお立場になられたら、お分かりになりますよ。」

「……『そういうお立場』ねえ……ナハハ。」

「ではお聞きしますが、茉莉香さんなら、お忙しい中でたった一時間お暇ができると、どうなさいますか?」

グリユーエルが笑顔で聞いた。

「そうねえ、私なら、寝ちやうなあ。ヒルネ。」

「あら、まあ。」

グリユーエルは予想外の言葉に大きな口を開け、そして急いで口を手で覆った。

「だって、忙しいときに急に一時間、ヒマができると、途端に眠くなるでしょう。」

そういう時は、私、弁天丸の船長室の奥にある寝室でバツタリとね。寝るんだよ。

だって、私、どこでも、いつでも、すぐに寝られるし……ナハハハ。」

「(はあく。)」

グリユーエルは口には出さないため息をついた。

「あ、そうだ。」

ヒルネ(昼寝)の前に、とっておきのプリンなんかがあると、まつさきにそれを食べるよ。一人でね。

チアキちゃんからもらって初めて食べたんだけど、帝都で人気のスイートシヨップ、モロゾフィーの『プレミアム・プリン』って、本当においしいんだよねえ。

でも、すごく人気があるから、なかなか手に入らないんだよ。

秘密の話だけどね、私、そのプレミアム・プリンを船長室にストックしてあるんだよ。今度、船長室で、いっしょに食べようね。」

茉莉香は、いたずらをしている最中の子供のような、うれしそうな顔をして言った。

「(はあく。)」

グリューエルは、さらに深いため息をついた。

『茉莉香さんもお年頃なのですから、もっとトキメキのあることをなさったら・・・』  
グリューエルが別の意味で心配する、最近の茉莉香だった。

「うくん。」

ところで、ねえ、グリューエル。

私から見ると、やつぱり、チアキちゃん、このごろ、忙しすぎて、すこしストレスが溜まっているんじゃないかなあ・・・。」

茉莉香は、あごに手を当てて、名探偵のマネをして、そう言った。

「そうですねえ。」

私たちにもお話下さらない会議とかご面会が多くなっているようですねえ。」



「そうですね。」

だって、この間までは、お姉さまの結婚式がすんだら、司令官の役割は終わりになるから、もうすぐ、ただの女子大生に戻るって、言つてたんだよ。

それが、かえつて忙しくなつてるんだよねえ。

何か、あつたのかなあ。」

「そうですね。その辺のご事情もお話になりませんわねえ……。」

「ほら、チアキちゃんの性格だと、そんなことになつても頑張つちやうでしょう。

だから、心配なんだ、私。」

「そうですね。確かに。」

「あら、茉莉香様、こちらにいらしたんですかあ。」

お探しましたよ。」

気がつくつと、数人の女子大生たちが茉莉香を取り囲んだ。

「いやあ、ごめんね。」

ゆつくりとお茶したい気分だったので……。」

「ところで、先日お願いした、茉莉香様のお誕生会のことですが……。」

「ご出席いただけますよねえ。」

「お仕事の日程を無理に空けていただくことになって、本当にご迷惑をおかけしているのではないかと、案じていたのですが……。」

「それで、ご都合のほうは、いかがですか？」

女子大生たちが、口々に茉莉香の返事を求めた。

茉莉香は、先日、親しくなった帝国女学院の女子大生たちから、茉莉香のお誕生会を開きたいと申し込まれていたのだった。もちろん、本人の出席が前提である。

しかし、最近の茉莉香も、とても忙しかった。

というのも、弁天丸のお仕事が大？盛。銀河のあちこちから、お仕事の依頼が寄せられて、大学の授業への出席もままならない状況が続いていたからだ。

「ああ、大丈夫だよ。お仕事の日程調整ができたから……。」

「うわ~~~~~！」

女子大生たちが大きな声で歓声を上げたため、カフェテリア中の女子学生がこちらを振り返った。

「ありがとうございます。」

ケイト・ケネディが、頭を上げて丁寧に礼を言った。

「いや、こちらこそ。」

だって、私のお誕生会なのに、ケイトの家でやってもらおうなんて。

『ご迷惑』をかけているのは、私のほうじゃないのかなあ。」

もちろん、茉莉香の「家」は、現在、帝国軍の士官用独身寮の一室であり、大勢の友人を招いてパーティができるところではなかった。

他方、ケイトの家は、帝都のメインストリート、ガーデン・ストリートの奥まったところにある大きなお屋敷だった。彼女もお嬢様なのだ。

「いえいえ、母も喜んでおります。」

茉莉香さんを我が家にお迎えできるなんて、光栄だと申しております。」

「ナハハ・・・そこまで言われると・・・。」

「そういえば、グリユーエルも出席してくれるんだよね。」

「はい。喜んで・・・。」

「ああ、そういえば。ねえ、ケイト。」

「チアキちゃんから、出席の返事をもらってるの?」

茉莉香が、少し真剣な表情で聞いた。

「いえ。まだ、日程調整中としか・・・。」

「ふむむ。」

チアキさんが、茉莉香さんのお誕生会にそういうご返事をされるなんて、やっぱり、本当にお忙しいんですね。」

グリユーエルが、しみじみといった。

「私のお誕生会かあ……。」

そういうえば、一年前のお誕生会は、海明星の私の家でやったんだよね。

（「第十二章 茉莉香とチアキ 十八歳の誕生日」参照）

あれからずいぶんいろんな出来事があつたよねえ。」

「そうですねえ。」

チアキ様のお誕生会も予定していたのですが、結局、開かれないままに卒業でしたね。」

「そうね。チアキちゃんは、お誕生日にお母さんに会えたんだものね。」

「ということは、ねえ、グリユーエル。」

「何でしょうか。」

「王室では、チアキちゃんのお誕生日に、何か、行事が予定されているのかなあ？」

グリユーエルは、聞いているの？」

グリユーエルは、今、銀河聖王家の王族でもあつた。銀河聖王家の一家、白薔薇家の養女になったからだ。同時にセレニティ王家の王族としての身分も保持していた。

（「第三十四章 王道」参照。）

「私は何も聞いておりません。」

「ちよつと聞いてみてくれないかなあ。女官長さんとかに。」

「承知しましたが、茉莉香さん、どうなされるおつもりですか？」

「あのね。私、いいこと、思いついたんだ。」

もし王室の行事に差し支えなければ、私たちで、チアキちゃんのお誕生会をやりようよ。

チアキちゃん、こういうことは自分からやろうと言い出さないけど、きつと喜ぶと思うよ。このごろ、チアキちゃんは忙しすぎるみたいだから、リフレツシユさせてあげようよ。

ねえ、みんなも協力してくれるよね。」

「はい。」

茉莉香を囲む女子大生も賛成した。

「わかりました。さつそく聞いてみましょう。少しお待ちください。」

グリュエールはそういつて席をはずした。

しばらくして、グリュエールが戻ってきた。

「茉莉香さん。王室のスケジュールは、大丈夫ですわ。」

それで、理由を聞かれたので、茉莉香さんのお考えをお話したところ、宮廷の皆様は、大喜びでしたわ。

実は、チアキ様にお誕生日の行事についてご相談しても『ちよつと待つて』としか、おつしやらないので、お困りになつていたさうです。

それで、チアキ様さえよろしければ、王宮でお誕生会を開催されたらどうかとおつしやつてましたわ。」

「うわ~~~~~!」

茉莉香を囲む女子大生たちが、また大きな歓声を上げたため、カフェテリア中の女子大生がこちらを振り返つた。

授業が始まる5分ほど前になると、帝国女学院周辺の道路において交通規制が始まり、その中を多数の黒塗りの大型車が帝国女学院のキャンパスに入つてきた。チアキと警備関係者の乗る車列である。

やがて車列中央のリムジン車の中から、チアキが降りてきた。

チアキは警備の人垣に囲まれ、少し表情を硬くしたまま、校舎のほうへ歩き始めた。そのとき、茉莉香が近寄つて声をかけた。

「ねえ、チアキちゃん。」

「お願いがあるんだけど、聞いてもらえるかなあ・・・。」

「なあに、茉莉香。」

茉莉香の顔を見て、チアキの表情が少し緩んだ。

「あのねえ、チアキちゃんのお誕生会を開きたいんだけど……。」

「え！……。」

それを聞いて、チアキの表情が一変し、たちまち満面に喜びの笑みを浮かべたことは言うまでもない。

### 3 姫のお国入り

「グリユーエル様の『お国入り』のスケージュールは、ご覧のとおりです。

王国を挙げての歓迎行事が予定されております。

まず、宇宙空港でのお出迎えは……。」

グリユーエルは、帝都での生活も落ち着いたので、近況報告の名目で、セレニティ王国を訪問することになった。

これは、『銀河聖王家との養子縁組以後、できるだけ早い時期にセレニティ王国に一時帰郷してほしい』という、セレニティ大公の意向に、ようやく答えたものだった。

その日程を、在銀河帝国セレニティ大使ラファイエットが、銀河聖王家白薔薇家のスチュワード侍従長立会いの下で、グリユーエルに説明していた。

ラファイエット大使は、このたびのグリユーエルの旅を『お国入り』と表現して、グ

リユーエルがセレニティ王国の王族であることを強調する言葉を使っていた。もちろん大使は、グリユーエルの誘拐事件後に新たに帝都に赴任してきた人物である。

〔第三十章 グリユーエルの危機〕 参照

そして、大使の説明に、スチュワード侍従長が口を挟んだ。

「大使閣下、失礼ながら申し上げます。

この日程では、往復の移動時間が掛かりすぎるのではございませんか。

無理にセレニティの軍艦を使わずとも、帝国の軍艦をお使いくだされば、帝都との往復に要する時間が大幅に短縮できると存じます。」

スチュワード侍従長は、通常の超高速跳躍航法を使うセレニティの軍艦では帝都からセレニティ星系までの移動には数日かかるが、時空トンネル航法ができる最新の帝国軍の軍艦を使えば、移動に要する時間は半日ほどであることを指摘した。もちろん、帝都とセレニティ星系の間には、時空トンネルの航路は開かれていない。

グリユーエルも侍従長と同じことに気づいていた。

もつとも、彼女の本音は、セレニティの軍艦でも帝国軍の軍艦でもなく、茉莉香の弁天丸で行きたいというものだった。

「おっしやる通りでございませうが、

このたびのグリユーエル様の『お国入り』では、ぜひともわが軍の船を使って頂き



たいというのが、軍人たちの強い希望でございます。

そのことを、グリユーエル様にお会いして直接に訴えたいと、軍の三首脳が参つております。

殿下。こちらに呼んでよろしいでしょうか。」

『……なんですつて！』

自分に会うために、三首脳が同時に国許（くにもと）を離れるとは……！』  
ラファイエツト大使の意外な答えに、グリユーエルは驚いた。

軍の三首脳とは、最高司令官（国王である大公または皇太子）を補佐する、国防大臣ミラボー、参謀総長テュルゴー及び宇宙軍司令官ケツツェルの三人である。

この三人が同時に国許を離れること自体が異例である。というより、平時でもそのようなことが国防上許されないことは、軍人ではない自分でも知っている。

もちろん、軍の首脳たちがそんな不文律を知らないはずがない。

グリユーエルは、自分の知らない間に、王国に大きな変化が起きていることを実感した。

「わかりました。

わざわざ御出でいただいたのですから、お会いしましょう。」

グリユーエルは、緊張した声で返答した。

部屋に呼ばれた三首脳は、入室後に敬礼し、そしてグリューエルの前で、三人は、片手片ひぎを床につけ、さらに頭も床に着くほど低く下げ、臣下の礼を示した。

「殿下におかれましては、お健やかにお過ごしのこと、お喜び申し上げます。」

・  
・  
・

さて、本日はお願いの儀がございまして殿下の足下に参上いたしました。」

「お話を聞きしましょう。お顔を上げてください。」

「はっ。ありがとうございます。」

殿下、このたびのお国入りには、ぜひ、わが軍の軍艦（ふね）をお使いください。

道中の殿下のご安全は、我らが命に代えましてお守り申し上げます。

そのため、お召の船は、わが艦隊の旗艦クイーン・セレンディピティをご用意いたします。

以上、軍を代表して、心よりお願い申し上げます。」

丁寧な挨拶の口上に続いて、三首脳を代表して国防大臣ミラボーがこういった。グリューエルが顔を上げてよいといったにもかかわらず、彼は、臣下の礼を維持して、顔を床に伏せたままの姿勢で軍の希望を述べた。もちろんその声は、緊張感にあふれていた。

その声を聞いて、グリューエルは、彼らが国防上の不文律を無視して帝都までやって

きた理由を理解した。

それを確かめるため、グリューエルは聞いた。

「では、聞くが、そなたたち三人がそろって王国を離れた理由は何か？

それが国防の備えに欠けることは承知していよう。」

グリューエルの声は、とがめるような厳しいものだった。

「恐れながら、申し上げます。」

どうか、我らに、グリューエル様に忠誠を示す機会をお与えください。

我らは、グリューエル様のいかなるご命令も、鋼（はがね）の意思を持つて実行する覚悟でございます。」

その言葉を聞いて、グリューエルは、自分の直感が間違っていないかかったことを感じた。「そちらの、そのような言葉は、最高司令官である大公様に捧げるべきものであろう。

軍の首脳が、私ごとき者に、軽々しく口にすべきものではない。」

グリューエルは慎重な言葉を返した。そして、こう思った。

『この方たちの心にあるのは、ただ、ただ、私に対する恐怖です。

私のことを16歳の女の姿をしたバケモノのように恐れているのでしょね。

海賊の巢では、海賊たちからは世間知らずの小娘として侮られました。母国の人々からは「リバイアサン（国家権力が実体化した怪物）」のようなバケモノとして恐れ

られているのですか……。

いやはや、なんとも……。』

グリューエルはため息をつきたい気分だった。

しかし、彼女が感じた『自分に対する恐怖』は、もつと奥深いものだった。

『そういう恐れ 배경には、このたびのお国入りで、王室に何かが起こるかもしれないという恐れがあるのですね。たとえば、私の王位継承順位が変更されるとか……。』

グリューエルは、彼らの言葉遣いや振舞いから、セレニティの人々は、自分の前に二つの『航路（みち）』が開かれていると考え、恐れていると感じた。

もちろんそれは、『国王への航路（みち）』と『王権の篡奪者としての航路（みち）』であった。そして、王権の篡奪には内戦や流血を伴うことがあると恐れている。それは、歴史が教えるところであった。

しかも、グリューエルが銀河聖王家の王族となったため、彼女を守るという名目で銀河帝国が軍を動かせば、セレニティ星系を簡単に軍事力で制圧できることも国民は承知している。

その出来事は、一般国民には他人事かもしれないが、軍人たちはその当事者である。もしも、そのとき大公が銀河帝国に対抗して軍を動かせば、軍人たちは敗北必死の戦いに赴かなければならない。そして、敗北すれば、たとえ生き残っても賊軍となる……。

グリューエルが、それについてさらに考える前に、国防大臣が答えた。「恐れながら申し上げます。」

グリューエル様におかれましては、近年のご活躍の際に、一度ならずわが軍と砲火を交える事態に至りましたが、これにつきましては、軍として、まことに弁解の余地のないことと存じております。

たとえ、命令に従つてなしたこととはいえ、グリューエル様には大変ご不快な思いをさせてしまったことと存じ上げます。

このことを思い返しますと、我らは、誠に、誠に、心苦しく、胸が張り裂けそうな思いでございます。

この上は、ただ、ただ、グリューエル様に忠誠を示すことのほか、我らがなすべきこととはないと存じております。

いかようなご命令にも従う覚悟でございます。」

ミラボー国防大臣は、雄弁家であつた。力のこもつた彼の言葉は、聞く者の心を打つ。『まずは、私をクイーン・セレンディピティの玉座に座らせ、国王並みに扱おうというのですね。』

そうはおっしゃいますが、この方は、心の底から、私を玉座につけようと考えているわけではありませんね。』

グリューエルは、国防大臣の言葉に、他人の思いを代弁しているに過ぎない『軽々しさ』を感じた。

彼は、自分の信念だけで行動しているわけではなかった。

確かに、軍の中には、「王位継承順位が変更され、グリューエルが国王になれば自分たちは粛清される」と恐れている者もいるのだろう。だから王室に変化が起こる前に、真つ先にグリューエルに忠誠を誓い、その歓心を買おうというのだろう。そして、国防大臣は、そんな軍人たちの意見を国防軍のトップとして代弁しているに過ぎないのだから。

だが、同時に、グリューエルは、彼の言葉の中に新しい時代の流れも感じた。

それは、彼が、純粋な職業軍人でも世襲の貴族でもなく、国民の選挙で選ばれた職業政治家であることと無関係ではない。

セレニティ王国の政治改革の結果、彼のような政治家が登場したのだった。選挙で選ばれた政治家に内閣を作らせ、内閣を構成する大臣たちに国政をゆだねた結果である。

そして、政治家としての彼は、大公、王族、貴族、軍、国民各層のさまざまな思いを汲み取りながら、一步一步自分の行動を決めていると、グリューエルには感じられた。

『民主政治における政治家とは、そういう存在なのではないか。』

もう、私がサルバトーレ・ムンデイ（救世主）がどうか、議論している時代ではなくなっているのでしょうか。』

（『第四十一章 薔薇の泉』参照）

そう感じると、グリューエルは次のように厳しく言い渡して、大使や軍の三首脳との会見を打ち切った。もちろん、それは、彼らの言葉にのせられ『王権の篡奪者』になる意思は無いという印象を与える言葉だった。

「ミラボー国防大臣。これまでの私と軍とのかかわりを憂慮するあなたのお気持ちには感謝いたします。

しかし、案ずることはありません。私は、王族の一人として、最高司令官の命令に忠実に従い、命がけで戦った兵士を誇りに思います。そのことを軍の皆様にお伝えください。

それから、あなたの私に対するお言葉は、あなたが雄弁でいらつしやるがゆえに、行き過ぎた響きを聞きとつてしまう方々もいらつしやるでしょう。今のお話は聞かなかったことにいたしましょう。

往復の交通手段については、追って指示を出します。

みなさんは、今日はこれで下がりなさい。

そして国防大臣は、直ちに国許（くにもと）にお帰りなさい。」

そして、グリユーエルは見逃さなかった。会見を終えて部屋を出るために立ち上がったミラボー国防大臣の口元の表情は、グリユーエルの厳しい言葉を聞いたにもかかわらず、満足したものであったことを。

『これで、軍人さんたちも少しは落ち着くでしょう。』

それにしても、政治家というものは、なかなか抜け目のないヒトですわ。

やはり、ミラボー大臣は、先ほどの私の言葉を職業軍人のトップである参謀総長と宇宙軍司令官に直接に聞かせるために、帝都までわざわざ三人でいらしたのでしょね。』

グリユーエルは、国防大臣の満足した表情からその意味を読み取った。

『それにしても、王族が「一人前の大人」として扱われるということは、とても寂しいものですわ。』

みな、私を恐れ、近づこうとはいたしませんわ。

...

そういうえば、アレックス様も王族というものは孤独なものだとおっしゃっておられましたわね。』

セレニティ大使らとの会見を終えて、自室に戻ったグリユーエルはそう思った。

『だから、王族たる私たちにとって、茉莉香さんの存在は貴重なのですわ。』



決めました。

私は、弁天丸の船長室で、茉莉香さんと一緒に秘密のプリンを食べながら、セレニティに行くことにいたしましたしょう。

ウフフ・・・きつと、退屈しませんわ。』

そう決めると、グリユーエルは微笑を浮かべた。

その微笑みは、16歳の乙女にふさわしく、明るく輝いていた。

#### 4 三人のお仕事

「船長、乗組員の撤収完了です。」

「船長、ドッキング・ブリッジの収納完了です。」

「了解。さあ、弁天丸、出航。」

茉莉香が、言った。

弁天丸は、海賊行為を終えて、ゆっくりと豪華客船から離れていった。

「船長、今日の海賊ショーも大盛り上がりでしたね。」

操舵手を務めているケイコ・サトーが茉莉香に言った。

「そうね。それにしても、ケイコやブリジットがあんなに演技力があるとは驚きだよ。」

お客さん、本気で怖がっていたよね。」  
茉莉香がほめた。

ブリジットをはじめ、帝国軍の女性兵士たちも彼女らの強い希望で海賊ショーに参加し始めた。ただし、みんな、「嫁入り前」という意味不明の理由で、素顔を出さずに仮面をつけることになった。

ところが、これが面白いと評判になっていた。

「いやあく。参りましたよ。」

本物のサイボーグであるシュニツアーさんは、お客さん、特に子供たちに大人気なんですよ。特に小さな子供たちは、彼の足をベタペタと手で触ったり、足に抱きついたりするんです。

でも、サイボーグ女海賊の仮面をつけた私たちが銃を構えて近づくと、それまで前列でニコニコ笑ってショーを見ていた小さな子供たちが悲鳴を上げて逃げ出すんですよ。怖がられた私たちもちよつと傷つくくらい必死の表情でね……。

それで、親たちのところまで逃げると、親たちの陰から怖そうにコッチを覗いているんですよ。」

ブリジットが、苦笑して言った。

「アハハハ……海賊は怖いくらいがちょうどいいのさ。」

ブリッジのクルーたちが笑った。

「さくて、次の仕事はくく。」

茉莉香が、話題を変えた。

「えくと、次の仕事はねえ、まず、あの有名なりゾート惑星、ネオ・オアフ星に寄って環境改造キットを受け取るのよ。それをM-19019星団まで運ぶのよ。」

M-19019星団は、銀河の外延からはざつと片道2万光年のところにある球状星団よね。」

クーリエが言った。

「うわく、遠いところだねえ……。」

「まあ、今の弁天丸ならともかく、通常の超高速跳躍航法では、簡単には行けないところよねえ。」

「でもさあ、なんで今頃、環境改造キットを届けるの？」

「そんなもの、はじめから植民船に積み込んで持っていくものでしょ？」

茉莉香が疑問を口にした。

「そうね。M-19019星団に行った開拓移民船も、いろんなタイプの星に対応できるキットを持っていったはずなんだけどね……。事前の観測データは、可住惑星の適切な開発プランを決定するには不十分だったってことかしら。」

クーリエが言った。

「それでねえ、実際に行つて見ると、最初の船が持つて行つた環境改造キットでは、現地の星の環境条件に適合しないことがわかつたそうよ。それで、温暖で海洋生物の生態系が豊かなネオ・オアフ星系統の環境を再現するキットが最適と判断したそうよ。」

しかし、別のキットが必要だとわかつて、M—19019星団があまりに遠いため、それを運んでくれる船が簡単に見つからず、困つていたそうよ。」

「それで、弁天丸にお仕事の依頼が来たつてわけ？」

「そうよ。名指しでね、特急料金込みの前払いよ。」

「おーおー！ 儲けなくちゃ。」

でもさあ、次の航海は、全部でどのくらいの距離になるの？」

「片道で、ざつと4万5千光年つて、とこね。」

「ここからネオ・オアフ星まで1万5千光年、そこからM—19019星団まで3万光年。」

クーリエがこともなげに言った。

「うわー、こりゃ、この前の実験航海なみの遠距離だよな。」

百目が二人の会話に口を挟んだ。

「そういえば、M—19019星団つてどこかで聞いたことがある名前だと思つたんだ。」

けど、前に海難救助に行ったM-19003星団と番号が近いっていうことは、その近くのの。」

「そうよ。マゼラン星雲へ続く水素ガス帯の中よ。」

でも、こちらのほうが銀河から近くて可住惑星が多いからって、最近、入植が始まったようね。」

「ふーん。」

「いやあ、楽しみだなあ。」

銀河の外宇宙（そとうみ）を航海すれば、また新しい重力分布図のデータが取れますよ。」

それに、今度も、予想外のイレギュラーな現象が観測できるかもしれませんね。」

ワクワクしてきたなあ……。」

ブラウン中尉が言った。

「あなたも、危険な航海が大好きになったのね。」

船長の影響かしら。それとも、ウルスラちゃんの影響かしら……。」

ルカが言った。

「まあ、海賊らしくなったということ……。フフフ」

クーリエが言った。

そのとき、通信要請があつたことを知らせるブザーが鳴つた。

「通信要請がありました。あ、次も、その次も来たわ。」

クーリエが言つた。

「珍しいわね、同時に3件もあるなんて。」

ルカが言つた。

「え〜と、最初の通信は、メイフラワー・モーガンさんからギルバートさん宛て。秘話回線希望よ。」

次は、グリューエル姫から船長宛よ。

最後のは、チアキ姫から船長宛よ。これは、軍用機密回線ね。」

「私宛ての通信は、私の部屋につないでください。」

ギルバートがさういつて、ブリッジを離れようと立ち上がったときに、茉莉香と目が合った。

「船長の気持ちは、わかってますよ。内容はお知らせしますから……。」

さういつて、彼は微笑んだ。

「で、船長。あとはどうするの？」

「どちらから、つなぎますか？」

「まず、チアキちゃんの通信につないでちょうだい。グリューエルには、こちらから掛け

なおすつて、伝えておいて。

チアキちゃんが軍用機密回線を使う時つて、大事な話に決まつてるわ。

あの子、そういう子だもの。」

やがて、モニターには、第一艦隊司令官の軍服を来たチアキの姿が映し出された。

「船長。．．．」

弁天丸が、M—19019 星団に物資を運ぶ仕事を引き受けたのは、本当ですか。「チアキは、茉莉香のことを名前で呼ばず、船長と言った。少し緊張した表情だった。

それは、この通信がオフィシャルの立場で行われていることを告げていた。

「どうしたの？ 何か変なことでも．．．」

「その仕事、断るように要請します。

理由は何でもかまいませんが、私や帝国の要請であることを明かさずにその仕事を断るよう要請します。」

「ええ!! 殿下、理由をお聞きしてもよろしいでしょうか。」

茉莉香も、事態を察して、お互いのオフィシャルな立場を踏まえて、敬語で話し始めた。

「これは一般には機密事項ですが、近々あの星団で超新星爆発が起こるといふ予測があります。」

でも、あの星団の入植者たちのリーダーは、その予測を信じようとしません。よい植民星をやつと見つけて、これからという時だから、信じたくないのでしょうか。まだ数年くらい先のことではないかと思つています。

だから一般の入植者たちは、事態を知らされていません。」

「ええ!?!」でも、そんな大事なことは公表して、みんなに避難を呼びかけたほうがよいのではないのでしょうか?」

「予測を公開して余計な騒ぎとかパニックを起こさない方がいいと判断したからです。」

あんな遠い宇宙空間で超新星爆発があつても銀河系には影響がほとんど無いと考えられるし、あの周辺の空間へ行く船は限られているからです。」

チアキは、オフィシャルな言葉遣いで、理由を語つた。

「それにしても、殿下が直々に弁天丸に要請されるとは……」

「それは、茉莉香が乗っている船だからに、決まつてるじゃないの……」

ほかの船には、航路管制局経由で航海を取りやめるよう要請してるわよ。」

チアキは、ついにタメグチで話し始めた。

「なるほど。このお仕事を引き受ける船がなかなか見つからないって聞いていたけど、裏にそんな事情があつたのね。ビックリだよ。」

茉莉香も、タメグチで答えた。



「ビツクリは、こちらのほうよ。」

あの星団付近に向かう船のリストの中に弁天丸の名前を見つけたときは、本当にビツクリしたわよ。」

「それで、どうしてもやめろというのね。」

「そうよ。要請と言ったけど、禁止というのが本音よ。」

「うーん、困ったなあ。」

ほら、宇宙海賊船弁天丸は、頼まれたお仕事は断らないのがモットーでしょ。

それに、そんな危険な航海だからこそ、海賊船の出番なのよねえ。」

「予想通りね。茉莉香ならそう言うだろうって、思ってたわ。」

でも、今回は、私の言うことを聞いて。

私は、あなたのためを思って言っているのよ。」

「だけど、チアキちゃん。弁天丸の営業方針は昔からお客さん第一だよ。」

それはわかってきているでしょ。」

「それは知っているけど、今回は私の言うことを聞ききなさいよ。」

私は、あなたのためを思って言っているのよ。」

二人の押し問答は続いた。

「うーん。いつものチアキちゃんらしくないなあ。」

．．．はあ、ということは、

チアキちゃん、なにか私に言えない事があるのかな．．．。」

「．．．特にお話しすることはありません。」

タメ口から急に事務的な口調になったチアキの言い方は、なにか言えない事情があるのは明らかだった。

「だったら、無理に聞かないけど、私、大丈夫だよ。

だって、私は、海賊だもの。

海賊は、危険を買うのがお仕事なんだよ。」

「茉莉香、今回はいつもと違うのよ。

．．．

そうね、これだけはいえるわ。

狙われているのは、弁天丸かもしれないわよ。」

「なるほどねえ。

でも、チアキちゃん。私、覚悟できているよ。

いつでもね。どんなことでもね。

だって、私、キャプテン茉莉香は、海賊だもの。

それも、女王陛下から黄金の髑髏を頂いた帝国海賊だよ。．．．」

茉莉香はそう言うと、不敵な微笑（ほほえみ）を浮かべた。

こういうときの茉莉香は、海賊ショーで口上（こうじょう）を述べて大見得（おおみえ）を切つたときのように、人々を魅了するオーラに包まれていた。

「待ちなさいよ、茉莉香……」

「チアキちゃん。わざわざ警告してくれて、ありがとう。」

チアキはまだまだ話し続けたい様子だったが、茉莉香はそう言うと通信を打ち切つた。

二人のやり取りを聞いていた弁天丸のブリッジは緊張に包まれた。

「えーつと、次はグリユーエルかあ。」

クーリエ、グリユーエルにつないで。」

弁天丸のブリッジに漂う沈黙を破って、茉莉香が言った。

グリユーエルからは、自分のお国入りに弁天丸を使いたいという依頼だった。

殿下、その時期でございましたら、確かにお引き受けいたしました。

詳しい打ち合わせは、後日でよろしいですね。」

茉莉香がお客様としてのグリユーエルにそういった。

「ありがとうございます。船長。」

……ん？

ところで、茉莉香さん。何か、あったのですか？

ブリッジの雰囲気、いつもと違いますね。」

グリユーエルが、彼女なりのタメグチで言った。

彼女の目は、弁天丸のブリッジに漂う緊張した雰囲気を見逃さなかった。

「うふふ……」

弁天丸は海賊船だからね。そういうこともあるんですよ。

グリユーエル殿下。」

茉莉香は、最初はタメグチで応じながら、最後はオフィシャルの立場を踏まえた敬語で応じて、通信を終えた。それは、この問題にかかわらないで欲しいと言う意思表示でもあった。

「よろしいのですか、あれで……」

いつのまにか、グリユーエルとの通信を茉莉香の背後で聞いていたギルバートが言った。

「いいのよ。今回の航海では、グリユーエルが密航できる余地はないわ。」

茉莉香が答えた。

「では、ちよつと船長にご報告があります。」

「ありがとう。船長室で聞かせてもらうわ。ついてきて。」

二人は、船長室に向かう廊下を並んで歩いていった。

「今、銀河で何が起ころうとしているのか、もう、メイフラワーさんはお見通しなのでしようね。」

茉莉香は、ギルバートの顔を見ながら言った。

「何が起こっても、私は全力であなたをお守りしますよ。」

「ありがとう。」

茉莉香は、少し顔を赤くして、うなずいた。

グリユーエルは、茉莉香との通信を終わってから少し腹を立てた。そして、今、密かに進行している事態に興味を掻き立てられた。

『ふうふうむ。』

チアキ様だけでなく、茉莉香さんまで、まるで「戦闘モード」のような緊張感ですわ。

しかも、お二人とも、私に内緒でお仕事を進めようとなさるなんて……。

・  
・  
・

でも、お二人とも、私のことを少し甘く見ていらっしやいますよ。

帝都にいる私には、どうせ何もできないだろうって。

・  
・  
・  
決めました。

私にどんな「お仕事」ができるか、ご覧に入れましょう。』

そう決心すると、グリユールは、ポーチの中から一枚のカードを取り出した。

これは彼女のとっておきの切札だった。このカードは、表面はヒュー&ドリトル社のお客様優待カードであるが、中身は海賊協会理事長マリア・レオニーニからもらった「海賊船のフリーパス」である。(参照 第二十三章 茉莉香とグリユールの進路)

そして、グリユールは、カードのボタンを押して不思議な言葉(パスワード)をつぶやき始めた。海賊船を呼ぶために。

「エロイムエッサイム、エロイムエッサイム。我は求め、訴えたり。」

## 第四十四章 海賊の戦い

### 1 海賊の掟（銀河系辺境宙域）

「ボス。ヤツラを発見しました。

一光年ほど先の宇宙（うみ）を、編隊を組んで飛んでいます。」  
「そうか、やっと捕まえたな。

行き場のないヤツラをまとめて面倒見てやったのに裏切るとは、恩知らずドモめ。

海賊の掟を思い知らせてやる……。」

銀河の辺境宙域を縄張りにする宇宙海賊船ブルックリン号のダークマン船長が、うなつた。

ダークマン船長とその仲間の船は、逃げ出した「裏切り者」を追跡していた。

ダークマン船長らは、海難救助の報酬として、マンチュリア人の船を自分たちの船とし、その乗組員であった軍人たちを海賊の仲間にした。（第四十章 海賊の取引 参照）。

その後は、ダークマンらの思惑通りに事は運ぶかに見えた。

しかし、そのマンチュリア人たちは各地の海賊たちの元から同時に脱走した。そして、ひとつの船団にまとまってどこかへ向かっていた。

「それにしても、誰がヤツラの逃走を手引きしたんだろうか？」

まずは、逃げ出したヤツラを捕まえて、そいつの正体を吐かせないといけなあ。

手引きした黒幕にも、きつちりケジメを付けないと……。」

マンチュリア人たちは海賊船を奪って逃げたが、それも優れた船、新しい船を選んで奪っていった。盗まれた船は、海賊船としてはかなりハイクラスの武装船だったので、かれらは大量の武器を手に入れたことになる。しかも、逃げ出す際に食料、武器弾薬から燃料まで彼らに必要な物資を海賊たちから盗んでいった。

このように、彼らは用意周到かつ組織的に逃亡しており、それを指揮している者の存在が疑われる事態だった。

「あつ。ボス、やつらがいつせいにジャンプしました。」

「どこへ向かった？」

「ジャンプの航跡はどこへ向かっているかを見ると……銀河の外へと向かって……。」

ボス！　　こりゃあ、M—19003星団の手前の、M—19019星団の方向です

ぜ。」

「なに！　それじゃあ、そこに遭難したやつらの仲間が生き残っていたのかあ。」



## 2 全員集合！（ネオ・オアフ星衛星軌道上）

弁天丸は、ネオ・オアフ星付近の通常空間にタツチダウンした。

「船長、まもなく、ネオ・オアフ星の中継ステーションに着きます。」

「了解。着いたら、お客様の荷物や補給物資の運び込みと、それから助っ人の海賊さんたちを乗せる作業開始よ。」

それから前にも言ったけど、予定の作業が終了するまで2日かかるから、その間、希望者は休暇を取って、ネオ・オアフ星のビーチに降りて行ってもいいわよ。」

茉莉香船長が言った。これから始まる厳しい仕事に備えて、乗組員にほんのひと時でも休暇を楽しませようという船長の配慮だった。

「わーい。」

弁天丸の女性乗務員たちが歓声をあげた。

「私たちみんな、ビーチとか、リゾートホテルを見学しようよ。」

「今後の参考になるよ♪。」

「ルカ先輩は、この星に旅行された経験があたりですよね？」

「あるわよ。新婚旅行の『経験』はないけどね・・・。」

ルカが、聞かれてもいないのに、自虐的な返事をした。

「ククク……。なんだって、この星は新婚旅行では人気一番のところだからねえ。」  
クーリエが笑った。

「ナハハ……。本当は、休暇のためにこの星に滞在するんじゃないのだけど……。」  
乗組員のやり取りを聞いていた茉莉香は、お得意の苦笑いをした。

実際、今の弁天丸は、リゾート惑星に立ち寄って優雅にひと時の休暇を楽しむという  
ような、浮ついた雰囲気ではなかった。これから戦闘覚悟の危険な仕事に行くのだから。

やがて、連絡シャトルが、弁天丸から中継ステーションへ向けて、リゾート惑星に降りる乗員を乗せて発進していった。このシャトルは、弁天丸に戻るときには「助っ人」、つまり増援の戦闘要員を乗せてくることになっている。そして、戦闘に備えた物資の補給も始めることになっている。

そんなあわただししい雰囲気の中で、茉莉香は、モーガン家のメイフラワーからの通信内容をギルバートから聞いた時のことを、改めて思い出していた。

「船長。

祖母からの通信は、チアキ殿下からの通信とほぼ同じ趣旨です。

つまり、弁天丸がM—19019星団まで荷物運びのお仕事をするのはやめたほうが

いいという話です。」

茉莉香とギルバートは、船長室で向かい合って座っている。

そして、彼の話を聞いた茉莉香が問い返した。

「ええ！ どうしてですか？」

チアキちゃん詳しい理由を言ってくれなかったけど、メイフラワー様はなんとおっしゃっていたのですか？」

茉莉香は、その理由が知りたかったのだ。

「船長、M—19003星団での海難救助の話をお願い出してください。」

これは海賊たちだけの極秘情報なのですが、実は、あの時ダークマンたちが助けて仲間にしたマンチュリアの軍人たちが、船を奪って脱走したそうです。

そして脱走した彼らはM—19019星団方面に向かっており、ダークマンたちがそれを追いかけているそうです。」

「ええ、本当ですか？」

「そうです。」

しかもM—19019星団付近の宇宙（うみ）では、すでに海賊たちと逃げ出したマンチュリア人の戦闘が始まっているそうです。

したがって、付近の海では治安が極度に悪化しているそうです。」

「うーん。私に危ない仕事をさせたくないと言うお気遣いはうれしいのですが……。弁天丸は海賊船です。」

危険を恐れていては、海賊の仕事は成り立ちません。

ですから、私は行きます。」

キツパリと茉莉香が決意を述べた。

「やつぱり、茉莉香さんなら、そうおっしゃるでしょうねえ。」

私や祖母の予想通りですね。」

ギルバートは微笑んだ。

「それなら、ひとつ策があるので船長に進言してくれと、祖母は言ってきました。」

「どういうお話ですか?」

「祖母は、船長と弁天丸の護衛として白兵戦の得意な猛者達を大勢乗り込ませたいので、受け入れて欲しいと言っています。」

もちろん、同乗させる乗員は、祖母自身とモーガン家が総力を挙げて、えりすぐりの強いヤツを集めるといっています。」

「白兵戦の得意な猛者ですか……。」

「そうです。ご存知のように、海賊の戦いは白兵戦が中心ですからね。」

命がけの肉弾戦というヤツですよ。」

「そんな、私のためにそこまでして頂くなんて……。」

茉莉香は、緊張して少し頬を赤くした。そして、申し出を承諾した。

その後の打ち合わせの結果、彼らは弁天丸の寄港予定地ネオ・オアフ星で乗り組むことになった。

ネオ・オアフ星は、銀河系各地からの旅行者のために定期航路が発達しており、しかも最近、時空トンネルが整備され、集合地としてきわめて便利だからである。

「船長、これが今回乗り組んでくる戦闘員の名簿です。今、届きました。」

総勢50名、みんな歴戦のコワモテだそうですよ。」

茉莉香は、ギルバートから乗員名簿を受け取った。

しかし、そういうギルバートの顔がなぜか微笑んでいた。

「助っ人の戦闘員って、どんな人なんだろう？」

ちよつと怖い人たちかなあ。……少し不安だなあ。

それにしても、ギルバートさんはなぜ微笑んでいるんだろうか……？

はっ！もしかして……。」

茉莉香は、あわてて乗員名簿を調べ始めた。

「あつ、キャサリンさんがいる。彼女は凄腕だからねえ……選ばれて当然といえば当然だけど、どうして海賊の仕事なんかに加わっているのかなあ。」

ということとは、……」

茉莉香は、もう一度、乗員名簿を隅々まで読み返した。

「あれえ!？」

グリユーエルは名簿には入っていない!

けど、ウルスラとリリイが入っている。

「どういふことですか?」

「その二人は、チアキ様からのご推薦だそうです。」

「まあ、ウルスラは実戦経験があるから当然としても、リリイはまだ看護学部の大学生でしよう?」

「ええ、もちろん、ふたりとも、『歴戦のツワモノ』と祖母も認めたとすよ。」

ギルバートが答えた。

茉莉香が知らない間に、二人とも海賊の人たちに実力を認められているようだった。

「……ん?」

……でも、ウルスラのほかに土官学校パイロット科の学生さんが三人もいますね。

この人たちも『歴戦のツワモノ』なんですか?」

「いや、その三人は帝国軍士官学校・パットン校長のご推薦です。三人は、パイロット科の優等生で、将来はエースパイロットになること間違いないそうです。」

いい機会だから実戦を経験させて欲しいと……。」

「大丈夫なんですか？いくら優等生と言っても、未経験の人たちを加えて……

……うん。

でも、メイフラワー様が認めたということは、やっぱり何か事情があるのですか？」

「アハハ、茉莉香さんもそう思いますよね。実は、パットン校長はこの三人とワンセットでないというウルスラさんは貸せないと言ったそうです。

というのも、この三人は、日頃、ウルスラさんにパイロット科の勉強を教えているそうです。彼らのおかげでウルスラさんは落第を免れているそうですよ。

だからこの機会にウルスラさんに恩返しをさせろというわけです。」

「ナハハハ……そういうわけですかあ……。ウルスラらしいというか……。」

茉莉香も仕方がないと思った。

「では、キャサリンさんが加わっているのは、なぜですか？

いつものように、グリーンエールが密航してくる手筈になっているからですか？」

茉莉香がもうひとつの疑問を聞いた。

「いいえ。これは、彼女の意思だそうです。」

形の上では、チアキ様の副官スカレットさん、つまり帝国海賊のクキ一族からのご推薦だそうです。それは海賊の仕事をもっとやってみたいという彼女の意向を受けて

のことだそうですね。」

「へえー……。」

キヤサリンも自分の人生を考え、動き出しているようだ。

やがて、新しく乗ってきた海賊の助っ人たちが、弁天丸の食堂ホールに集まりはじめた。

ケイコが乗員名簿を見ながら乗船してきた者の集まり具合をチエックしている。全員をホールに集合させるのは、船長が乗船を認める儀式を行うとともに、全員そろったところで船長加藤茉莉香から今後の方針を告げるためでもあった。

彼らは、その怖そうな姿を一目見ればわかるほどの歴戦のツワモノたちばかりだった。

したがって、ホールの中は重苦しい雰囲気だ漂い、誰も口を開かなかった。

茉莉香も、まだ全員がそろっていないため黙っていた。

そこへ、リライが遅れて一人でホールに入ってきた。

すると、その場の雰囲気が変わった。

「お〜お！ リライちゃん。お久しぶり。」

「海賊の巣で会って以来だねえ。」



「その節は、怪我の治療でリリイちゃんに世話になったねえ。」

「やっぱり、リリイちゃんが来てくれたのか。うれしいねえ。」

「来ないんじゃないかと、気にしてたんだぜ。」

ツワモノたちがニコニコして、リリイを取り囲んだ。

「やあ、ビリーさんもお元氣そうね。景気はいいの？・・・」

これに対して、リリイはツワモノたちとタメグチで楽しそうに会話を始めた。

「イテ、テ、テエ・・・。」

突然、一人の『ツワモノ』が声を上げた。

よく見ると、リリイに手をつねられている。

「また！ もう。フラंकさん、私のお尻、触ろうとしたでしょう！」

リリイの言葉を聞いて、ホール内の海賊たちが爆笑した。

「ワハハハ・・・。大口たたいたフラंकの負けだ。」

「一人負けだぞ。」

「さすが、『アンタツチャブル・リリイ』だねえ。」

「ん？ 『一人負け』ですって？」

さては、みんな、お金を掛けてたんですか？

フラंकさんが私のお尻を触れるかどうかで？」

「ワハハハ……。」

海賊たちは笑って答えなかった。

「もーっ。アナタたちは……。」

じゃあ、儲けの半分は私に寄こしなさいよ。出演料よー！」

「リリイちゃん。そりゃひどいじゃないか、海賊のウワマエをはねるなんて

……ハハハ。」

「そんなの当たり前です。私も海賊ですから。それも、ミーサ先生の直弟子よ。」

もちろん、リリイが、海賊のオジサンたちからのセクハラを軽々と払いのけているのも、ミーサから受けた修行の成果だった。そのため、早くも『アンタツチャブル・リリイ』というあだ名まで付けられている。

「知ってるよ……ハハハ。」

相変わらず、海賊たちはリリイを囲んで笑っている。

「ナハハハ……。」

茉莉香も話を聞いて苦笑いするしかなかった。しかし、リリイが『歴戦のツワモノ』として認められている理由がわかった気がした。リリイを囲む楽しそうな雰囲気は、彼らがリリイを自分たちの命を預ける医療スタッフとしてとても信頼している証拠だった。

「おい、パイロットたちが来たぞ。」

「おつ、……」

その声でそれまでの和気アイアイの雰囲気が消えた。ツワモノたちの間に緊張が走り、ホールの中を沈黙が支配した。

その中を帝国軍士官学校の制服に身を包んだ四人が、ホールに入ってきた。もちろん先頭は、ウルスラだった。

そのウルスラにツワモノたちの視線が集中している。

これに対して、ウルスラもピンと張り詰めた表情をして軍人らしいキリツとしたオーラを放ちながらホールに入ってきた。

船乗りの世界では、パイロットと戦闘員（白兵戦要員など）の間には厳然とした上下関係がある。これは海賊船でも同じである。

したがって、ベテランの戦闘員といえどもパイロットに馴れ馴れしくタメグチで話しかけたりはしない。弁天丸のホールに集まったツワモノたちが、緊張して沈黙したのもそのためである。

『へえ〜。ウルスラが、こんな顔するんだあ〜。』

茉莉香は、ウルスラの軍人としての姿を始めて見て、驚いた。

ウルスラも、お茶目な女子高生から大人の軍人へと成長しつつあった。

「へえーっ。コイツが、ハヤマ將軍の秘蔵っ子かあ？」

「実戦で、重力制御式の巨大戦艦を軽々と操縦して帝国軍第三艦隊をさんざん痛めつけ、降伏させたつて噂だけ。」（第七章 公爵の反乱 参照）

「そんなヤツを帝国軍から借りてくるなんて、やっぱり船長のコネはスゴイなあ。」

「それで、コイツを借りてきたつてことは、船長は弁天丸でも例のヤツをやる気なのかなあ。」

「そうかもなあ。地獄の『タッチ・アンド・ゴー』て、いうやつを……。」

ウルスラも、海賊たちから『歴戦のツワモノ』として認められているようだった。

「船長、全員集合しました。」

ケイコが報告した。

「みなさん。私は船長の加藤茉莉香です。皆さんの乗船を歓迎します。」

皆さんに集まってもらったのは、今後の方針をお話するためです。……」

茉莉香が今後の航海に関する弁天丸の方針を説明し始めた。

説明がおわるころ、ブリッジの乗員がギルバートにメモを持ってきた。

「あ、これは……。」

「どうしたの？」

「船長、追加の乗員があると連絡がありました。明日、乗船するそうです。」

「ええ？」

茉莉香は、ギルバートが手に持つメモを覗き込んで言った。

「ええ〜つと、追加は、一人は、宇宙海賊マリア・ジュニア・レオニーニ、19歳。そのほか護衛兼務の兵士4名の合計5名……?」

「理事長のご推薦だそうです。」

「理事長? グランマのこと?」

二人のやり取りを聞いて、その前に並んだ海賊の猛者たちが声を上げた。

「理事長? 海賊協会の理事長か?」

「ソイツは、宇宙マフィアの大ボスと言った方が、わかりやすいなあ。」

「じゃあ、『マリア・ジュニア』って、だれだ。」

「大物に決まってるよ。理事長が護衛までつけるヤツだぞ。」

「ソイツは、グランマが自分の後継に指名しているという噂の、例の孫娘じゃないか。」

「いや。孫娘は後継指名を断ったという噂だぞ。」

「でも『マリア・ジュニア』を名乗る以上、後継指名を受けたってことか……。」

「すげえなあ。理事長がマフィアの次期トップを寄こすなんて。」

船長は、理事長とどういふコネを持っているんだ?」

海賊たちの話を聞いていた茉莉香は、驚いた。

『グランマの孫って、サーシャのことじゃないの!』

あの子ども、弁天丸に乗船してくるって言うの!？」

### 3 白兵戦 (M—19019 星団周辺宙域)

「ボス。『獲物』との接触まで、あと3分です。」

宇宙海賊船ブルックリン号のブリッジでは、操舵手が、相互の船の航行状況を表示するディスプレイを見ながら言った。

「電子戦、80%完了。まもなく乗っ取れます。」

航海士が、電子戦の進行状況を表示するパネルを見ながら言った。

「よくし。触手(強襲用のドッキングブリッジ)をぶち込む用意だ。」

オマエラ、白兵戦準備。」

宇宙海賊船ブルックリン号のダークマン船長が、突入準備を命じた。

「おう！」

M—19019 星団周辺宙域において、宇宙海賊船ブルックリン号は、「獲物」と狙い定めた、マンチュリア人の船に襲いかかろうとしていた。

M—19019 星団周辺宙域では、多数の海賊船とマンチュリア人たちの船が戦闘状態に突入していた。戦闘の状況は、敵味方入り乱れた混戦になっている。

このような成り行きになったのは、当初マンチュリア人の船が集団で砲撃戦を挑んで

きたが、海賊船たちは砲撃をかわして散開し個別に接近戦を挑んでいったからだ。これは、相手の船に乗り込んで白兵戦を行うためである。

つまり戦況は海賊たちに有利に進んでいた。

なぜなら、海賊たちの戦い方は、正規軍同士の戦闘のような艦隊決戦ではなく、白兵戦が中心だからである。その理由は、目的の違いである。

海賊たちが戦う目的は、経済的な利得である。利得とは、敵の船の乗員、積荷、そして船自体を奪うことである。このため、海賊たちの戦法は、大切な獲物である敵の船を沈めず、敵の船に乗り込んでこれらを奪うため「白兵戦」が中心になる。

やがて、宇宙海賊船ブルックリン号は、マンチュリア人の船の側面に接触し、襲いかかった。触手は、まるで生物のような柔軟な動きをしつつ、敵船の装甲を突き破って船内に侵入していった。

船長らの突撃要員は、ドッキングブリッジ前に集合していた。全員、重装備の防護服を着用し、それぞれの得物（武器）を持っている。

「ボス、触手が敵の船を捕まえました。」

「よし、催眠ガス投入に続いて、突撃だあ。」

「了解。」

「おい。腕がなまっているヤツ、真剣勝負に怖気（おじけ）づいてるヤツは、ジヤマだか

ら、引つ込んでてイイんだぜ。

「ここんところ、平和が続いたからなあ。」

ダークマン船長は、後ろに控える手下に対して、戦闘を前にして沸き立つ興奮を抑えつつ、上機嫌でうそぶいた。

「へへへ、ご冗談を。ボス、おれたちや、海賊ですぜ。」

「そんなヤツ、この船にはいませんよ。」

「むしろ久々の荒事（あらごと）で血が騒いでますぜえ。ああ、この気分、タマラナイですぜ。」

「へへへ……この斧が久々に血を吸いたいって、言ってますぜ。」

「相変わらず、おまえらはアブナイヤツだなあ。」

ダークマン船長は、ニヤリと笑いながら言った。

「ボス、それ、ほめ言葉ですかあ……」

「ハハハ。……それはそうと、オマエラ、わかってるな。」

裏切り者には、降伏は許さないぞ。」

ダークマン船長は、表情を引き締めて、手下の海賊たちを睨んだ。

「おう。」

腹に響く声で答えが返ってきた。



ドスン。

そのとき、衝撃が船を揺らせた。触手が敵の船内に催眠ガス弾を放った衝撃だ。続いて、ドッキングブリッジが開き始めた。

「ブリッジ、聞こえるか？」

敵の船の人工重力をカットしたか。」

「もうやってます。」

ダークマン船長はにやりと笑った。

「よし。突入だ。」

海賊ショーではない、本物の海賊の襲撃が始まった。

#### 4 観察者 (M-19019 星団周辺宙域の亜空間)

「それで、この混戦模様は、海賊有利と見ていいの？」

「はい、殿下。マンチュリア側の先鋒船団は、海賊船に白兵戦に持ち込まれて苦戦していると存じます。」

「マンチュリアの軍隊は、白兵戦を軽視しているからねえ。」

私の経験でも、それはよくわかったわ。」(第二十一章 茉莉香とチアキ 華麗なる出撃 参照。)

「殿下のご活躍は、お見事でした。」

「それで、戦況の見通しは？」

「海賊たちは、ここ1、2時間以内に先鋒の船団を制圧して、マンチュリア軍の後衛つまり本隊に迫るものと思われます。」

「なるほど。でも、あと2時間もこれを見るだけというのも、イライラするわね。」

「殿下。まあまあ。お楽しみはこれからですよ。」

われわれは、ヤツラが追い詰められた時に使う『奥の手』を持っているか、見極めるために、ここにいますから。」

「お楽しみ、といつてもねえく．．．。」

チアキは、口を濁した。

帝国軍第一艦隊旗艦グランドマザーのブリッジでは、艦隊司令官のチアキ、艦長のハマヤマ将軍、それに参謀たちが、戦況について会話を交わしていた。

帝国軍第一艦隊旗艦グランドマザー率いる第一艦隊の精鋭艦隊は、M—19019星団周辺宙域の亜空間に身を隠しながら、探査機を飛ばして海賊とマンチュリア人の戦闘を観察していた。

もちろん、彼らの使命は、観察にとどまらない。

『茉莉香』。お願いだから、こんな危ない宇宙（うみ）に、突然、タッチダウンしてこ

ないでよろ。」

チアキは、声に出さずに、茉莉香の無事を祈るしかなかった。

そして、チアキは出陣に当たって下された女王の命令を思い出していた。

##### 5 王家の義務（銀河帝国最高司令部・星の大広間）

女王から、姉のクリスティア第一女王の妊娠を理由に第一艦隊司令官の統投を命じられた翌日、チアキは帝国軍最高司令部に呼ばれた。

チアキは、何のブリーフィングも無く、いきなり最高司令部の「星の大広間」に通された。

「星の大広間」は、銀河帝国軍の最高司令官である女王から帝国軍の艦隊指揮官たちが出撃命令を賜る場所である。

もともと「出撃命令の下賜」自体は儀式であって、作戦内容は事前に艦隊司令部と参謀本部で練られており、艦隊司令官にも事前にもブリーフィングされるのが慣例である。

しかし、今回は何も事前説明がなく、異例なことが起こっている。

チアキに続いて第一艦隊の主要幕僚や数名の艦長が、星の大広間に入った。

そのあと、最高司令官である女王と参謀本部のヤマシタ総長と二名の次長が入室した。

『え！ 向こうは四人だけか。』

チアキは驚いた。

「司令官。見てのとおり、異例なことだ。

だから、手短かに言おう。」

女王は娘のチアキのことを司令官と呼んだ。女王も、この場が帝国軍のオフィシャルの場であることを意識している。

女王が語り始めた。

「第一艦隊の旗艦と指名された艦船は、準備が整い次第、速やかに中央基地を発進せよ。

なお、本作戦の内容自体は言うまでもなく、そのための艦船の発進も第一級軍事機密とする。

行き先と作戦内容は、時空トンネル突入後に、同行するミニッツ参謀次長から説明する。

そして、特に今回の作戦では、いかなる兵器の使用も許可する。

兵器の運用については、司令官の判断に一任する。以上だ。」

「承りました。

必ずや、陛下の下に勝利の吉報をお届けいたします。」

そう言つて、チアキは敬礼した。

そのあとに、星の大広間を退出しようとするチアキは、侍従から呼び止められた。

「チアキ様。陛下がご昼食にお呼びです。」

女王の私的エリアの一室で、女王とチアキはテーブルに向かっていた。

侍従や女官たちの給仕で昼食が進む間に、女王はチアキに最近の帝国女学院大学での生活の様子を聞いた。これに対して、チアキは、加藤茉莉香と自分のふたつのお誕生会が近々行われることになった経緯を話した。それは19歳のただの娘としてのチアキにとつて、楽しい、楽しい時間になるはずだった。

女王は、チアキの話を終始笑顔で話を聞いていた。その笑顔は、女王の母親としての顔だった。

食事のあとのお茶の時間になると、女王は侍従や女官たちを下がらせた。

『いよいよ・・・かな。何を言われるのだろうか・・・。』

そう思ってチアキは緊張した。

「チアキ。星の大広間でいきなり出撃を命じられて少し驚いたかなあ。」

「はい。何か、大きなことが起こる予感がしました。」

「うゝむ。何から話そうか・・・。」

そうだ。良い機会だから、王族としての『義務』について話そうか。

これは、今回の作戦にあたって、ぜひ二人だけで話しておかなければいけないことだ

からね。」

「はい。」

チアキは緊張した。女王の言葉は、今回の作戦において王族である自分が果たすべき役割があることを意味した。

そして、それは『ろくでもないこと』に間違いなかつた。

「チアキ、われわれ銀河聖王家の王族は、王の子孫だというだけで、今のような暮らしを続けているわけではない。それはお前も知っているだろう。」

「はい。承知しています。」

王族には王族としての『義務』があることを存じています。」

「そうだ。特に、青薔薇家のわれわれには、『宇宙の平和を守る』と言う義務がある。」

「はい。」

「そのためには、非情の決断をし、それを命じ、実行させることを逃げてはならない。」

チアキ。お前には、その覚悟があるかい？」

「はい。……。」

チアキは、ここでも母の期待に全力でこたえようとしていた。

「そうか。やはりチアキはチアキだな。」

「……。」

母上。具体的には、どのようなことでしようか？」

チアキは、話を本題にもどした。女王が言った「チアキはチアキだ」と言う言葉に隠された意味も気になったが、それを問わなかった。

「チアキ。お前が弁天丸に乗って、サンタ・マリア星を訪ねたときのことを覚えているかい？」

「はい。多くの貴重な経験をさせていただきました。」

「うゝむ。そのとき、お前たちを襲った『パピネス財団』の一味のことを覚えているかな。」

「はい。慈善団体と聞いていましたが、一国の軍事力並みに戦艦を十隻も保有していたのには驚きました。」

「うゝむ。その後の彼らに対する捜査は秘密裏に進められたが、難航していた。」

そして、つい先日、私に中間報告があったが、内容は直ちには信じがたいものだった。

これでは、捜査が難航するのも当然だと思ったよ。」

「どんな結果だったのですか。」

「結論から言うと、

まず第一に、ハピネス財団自体が、もともと旧宇宙マフィア非主流派が秘密裏にくつたフロント組織だったそう。フロント組織とは、表向きは合法の活動を行う団体

だ。それが和平後も存続していたのだ。」

「せっかく合法化して作った慈善団体なんですから、おとなしくしていればよいのに。それなのに、どうして、かれらはサンタ・マリア星で私たちを襲ったのですか？」

.....

まさか、まだ銀河帝国と戦争するつもりだったんですか？」

「結論から言えば、そうだ。」

だが、それには裏がある。

第二の問題は、彼らの中に、秘密の出自をもつメンバーがいたことだ。」

「どういうことですか？」

「彼らの中に、われわれとの戦いの前に、マゼラン星雲まで逃げたマンチュリア人の末裔が、隠れていたのだ。」

「いま、『末裔』とおっしゃいましたね、母上。」

その言葉の意味をお聞きしてもよろしいでしょうか。」

「末裔と言ったのは、マゼラン星雲まで逃げようとして遭難したマンチュリア人の一部が、時間を遡って100年ほど前の時代のM-19019星団に漂着していたからだ。」

今、問題になっているのは、その子孫というわけだ。」

「ええ！ 100年前ですか？」



「信じがたいだろう。」

「そうですね。」

「それでは、彼らは、時空トンネルで、時間を遡る（さかのぼる）航海をしたのですか？」

「そういうことになる。その後の調査結果からみて、間違いないようだ。」

彼らを遺伝子検査した結果とか、没収した船に残された航海記録とか、複数の手段で検証して、100年ほど前に漂着したことに間違いないようだ。」

「なるほど。わかりました。」

でも、百年後の未来で戦って敗れることがわかっているのに、また、100年前から戦う準備をしてきたのですか？」

「彼らとしては、祖先に当たる人々に、子孫の自分たちが敗れたという『惨めな未来』を話したくなかったのだろう。」

まあ、実際のところは、再び戦いを挑む準備をするどころではなく、彼らはM-19019星団で文明を失いながらも、かろうじて生き延びていたに過ぎなかったそうだが。

だが、50年ほど後に、宇宙マフィアの連中が、資源調査で訪れ、彼らを発見・救助したそうだが。その後、彼らは旧宇宙マフィアの仲間になって、今に至っているようだ。」

「そうですか。」

でも、今はわれわれと戦争する気なのでしよう。」

「そうだ。彼らは、その後、『末裔』たちだけで、合法組織パピネス財団を作り、さらにその団体の表向きの活動として、20年ほど前から辺境に『人類の理想郷』を築くと称して、M-19019星団の開拓をしていると見せかけてきたそうだ。」

「彼らは、そこで、銀河帝国にまた戦いを挑もうと、着々と準備をしてきたのですね。つまり、未来を変えようというわけですか。」

チアキの背筋がびんと伸びて、緊張が体中に走った。

「そういうことだ。さすがチアキだ。」

「では、彼らは重力兵器の技術を手に入れているのですか?」

「それが一番重要な点だ。残念だが、それについては、今までの捜査でも、ハッキリわからない。」

もちろん、銀河帝国の軍事技術を盗もうとする悪巧みは続けてきたようだ。

だから、彼らはブラック・マターを狙って、サンタ・マリア星に現れたのだ。」

「すると、彼らの軍事力は、通常兵器でも、かなりの水準なのですね。」

「報告では、M-19019星団に隠された彼らの軍事力は、帝国には劣るが、他の自治星系よりもはるかに強大と推測されている。これは意外だった。」

「それで、チアキ。ここまでは話の前置きだ。

ここからが、王族として、二人だけで話しておきたい大切な点だ。」

「はい。母上。」

チアキは、緊張した。

「作戦の内容は、表向き、M-19019星団周辺で行われているマンチュリア人の未裔と海賊との戦いの様子を、彼らに気づかれぬように観察することだ。」

「はい。」

「でも、私がお前に託したいことは、かれらが重力兵器を持っていることがわかったら、直ちに彼らを始末して欲しいということだ。

そのために重力粒子砲の使用を許可する。最大出力の一撃ですべてを撃破しろ。」

女王はチアキの目をまっすぐ見ていった。

「わかりました。」

.....

でも、そうすれば、M-19019星団全体が爆発してしまうかもしれませんね。超新星爆発のように.....

非戦闘員も海賊も大勢巻き込まれるでしょうね。」

チアキは、少し間をおいて言葉を続けた。

「そうだな。」

チアキ、繰り返して言うが、『宇宙の平和を守る』ということが、銀河聖王家の嫡流、青薔薇家の義務だ。われらの使命ともいえる。

なぜなら、銀河系で彼らと重力兵器を使った戦争を始めるわけには行かないからだ。そうなれば銀河全体での犠牲者は、何百億人にも及ぶだろう。」

「そうならないように『打て』と命じるのが、私の役目・・・と言うわけですね。」

「もうとも、今回、参謀本部が立案した作戦では、できる限り秘密裏に行い、当分の間、自然現象である超新星爆発にすぎないと説明するつもりだが・・・。」

銀河系外延部の爆発なら、銀河系内にはほとんど影響が無いはずだから・・・。」

「そうですか・・・。」

「それにしても、この作戦の重要性から見て、本来、これは王位継承者の役目なのだが・・・。」

女王は、続く言葉を飲み込んだ。

チアキは、その先に続く言葉を察し、きつぱりと言った。

「わかりました。母上。」

「私が、必ず、我が家の義務を果たします。」

チアキは、母の期待に全力でこたえようと決意した。

6 後継者（ネオ・オアフ星の衛星軌道上）

翌日、ネオ・オアフ星の衛星軌道上に停泊する弁天丸に、最後の搭乗者一行が到着した。

最後の一行は、船長加藤茉莉香ら弁天丸の主なスタッフと助っ人の戦闘員50人全員が見守る中を、弁天丸の食堂ホールに入ってきた。

先頭は、若い女性だった。黒ずくめの上下の戦闘服にマントを羽織り、目と口以外は皮製の仮面で素顔を隠している。

何も言わずに入ってきたためか、彼女の周りの空気にピーンとした緊張感が漂っている。

「コイツが、宇宙マフィアのボスの後継者か……。」

「なんだか、すごい威圧感だな。」

あとの四人の兵士は、先頭の女性に続いて入ってきた一人が女性、他の三人が仮面をつけた男性だった。みな長身で、いかに近接戦闘のプロといった、引き締まった体格をしており、『歴戦のツワモノ』であることは間違いがなかった。

先頭の女性の兵士は素顔で仮面をかぶっていなかったで、ツワモノたちの間で彼女

の名前をつぶやく声が広がった。海賊の間では、かなりの有名人だった。「ウワァ〜。エリーナ隊長が来た。」

弁天丸乗務員のケイコもつぶやいた。彼女は、元宇宙マフィアのメンバーだったので、やってきた女性兵士のことを知っていた。

「だれ？　今なんていったの？」

茉莉香がケイコに聞いた。

「本名、エリーナ・フリーニ。グランマ直属の警護役として有名な方です。」

一族の間では、SF（セキュリティ・フォース）、フェリーニ三姉妹の長女として有名です。」

五人は、ホールの中央に来たところで立ち止まり、先頭の若い女性が、ホールに集まった兵士たちを一瞥した。

たちまち「ザッ。」と言う大きな音がして、荒くれものぞろいの兵士たちが靴を踏み鳴らして直立不動に姿勢を正し、勢いよく敬礼した。ホールにいたツワモノたちは、彼女に見られただけで、これまで経験したこともないほどの威圧感を感じたからだ。

これに対して、彼女は満足した様子で口元に微笑を浮かべ、あごを少し動かして答礼した。それは、自分に対しては常にそうするのが当たり前という振る舞いだった。

茉莉香もその気迫に押されたが、次の瞬間、深呼吸をした。

「(はあくゝ)」

そして、茉莉香は言った。

「マリア・レオニーニ様。

お目にかかることができました、誠に、光榮に存じます。

弁天丸船長の加藤茉莉香でございます。

どうか、茉莉香とお呼びください。

船長として、皆様の乗船を歓迎いたします。」

そのあと、エリーナ・フェリーニが、一行を代表する形で、船長加藤茉莉香に話しかけてきた。

「初めまして。私は、エリーナ・フェリーニと申します。

船長、お願いがあります。」

彼女は、自分の所属する組織や階級などを明らかにせずに、名前を名乗った。

「始めまして。弁天丸船長の加藤茉莉香です。茉莉香とお呼びください。

それで、ご用件は、なんでしょうか。」

「では、茉莉香船長に申し上げます。

この船には貴賓室があると伺っております。

どうか、お嬢様の控え室にそのお部屋を使わせていただきたい。」

「はい、承知いたしました。」

そのとき、エリーナは、「お嬢様」と彼女が呼んだ若い女性の顔を見た。何かを待つ様子だった。

「船長。マリア・レオニーニと申します。マリアと及びください。」

お氣遣い、感謝します。」

その女性は自分で名前を名乗った。

「おおっ。」

その瞬間、ホールの兵士たちにドヨメキが広がっていった。

それは、予想した『宇宙マフィア・レオニーニ家の後継者』がついに現れ、名乗りを上げたという興奮であった。レオニーニ家の有名なSF（セキュリティ・フォース）であるエリーナが警護している以上、本人に間違いないと、皆、確信していた。しかし、ご本人が自分の声で名乗りを上げたところを聞いて、興奮がさらに増したのだ。

だが、茉莉香の反応は違っていた。

『このコは、サーシャじゃない。』

声だけで判断すると、この声はあのコに似ている。たぶん、間違いない。

でも、あのコは、こんな体格ではない。私より小柄なはず。

いったい、どうなっているの？



それとも、この方は、あのコのお姉さまとか、なの？』

茉莉香は困惑していた。

マリア・レオニーニと名乗った女性は、その茉莉香の困惑を面白がるかのように、仮面の中に見える口元に微笑を浮かべた。

茉莉香は、その表情を見逃さなかった。

『あー！ やっぱり、グリユーエルだ。』

## 第四十五章 大人の条件

1 海賊の戦い（銀河辺境 M—19019星団周辺）

「よくし、この区画も制圧した。奥のブリッジに進むぞ。」

宇宙海賊船ブルックリン号のダークマン船長が言った。

「ボス。その辺に、気絶して浮いている奴隷たちはどうしますか？」

人工重力が切られた船内では、人間も浮き上がり漂っている。

「大事な獲物だ。手を出すなよ。」

「へーい。」

宇宙海賊船ブルックリン号のダークマン船長とその手下は、まず、電子戦で敵であるマンチュリア人の船のコントロールを乗っ取り、船内の人工重力を切断した。

続いて、敵船に攻め入り、敵の兵士たちを無重力下の白兵戦で打ち破って船内を占領しつつある。

マンチュリアの軍人たちも必死で抵抗した。しかし、そもそも兵力が少ない上に、慣れない無重力空間で、刀剣による近接戦闘を強いられたため、これに手馴れた海賊たちの敵ではなかった。無重力空間ではチョツとした弾みで体が浮き上がり、いつものよう

に反動を利用して刃物を振り回すこともできないため、それに適した闘い方が必要なのだ。

「よし。ブリッジのドアを、ビームガンで焼き切れ！」

「アイアイサー。」

「ドアが開いたら、不可視ガス弾を打ち込め。」

不可視ガス弾は、宇宙船内での白兵戦用の必須アイテムだった。それは視界を遮（さえぎ）るガスを発生させる。もちろん、このガスは、敵の放ったエネルギー・ビームを吸収して、突入する味方の兵士を守る機能がある。そして、このガスにはもうひとつの重要な機能があった。

ドアが焼き切られると、海賊たちがいつせいに不可視ガス弾を放った。

スガーン、スガーン！

「よし突入だ。」

これに対抗するため、マンチュリア人のブリッジ内からビームガンの光線がドア付近に放たれたが、ビームはガスに吸収され、海賊たちには届かなかった。

ドカーン　ドカーン

しかも、その直後、ドア付近で爆発が起こった。このため、ブリッジ内は爆風の直撃を受け、ビームガンを構えた敵の兵士たちは吹き飛ばされ、迎撃体制を崩してしまった。

無重力化でも爆風の風圧は変わらないからだ。

爆風を耐え凌ぐには無重力下に適した耐圧防御姿勢をとらねばならない。しかし、慣れない無重力下で銃の照準を合わせるのが精一杯という兵士たちにはそんなことはできなかつた。

そして爆風による混乱に乗じて、海賊たちはブリッジ内に攻め入り敵の兵士との間合いを詰め、斧や剣で戦う白兵戦に持ち込んでいった。

海賊たちは、通常の重力がある空間と変らぬ勢いで斧や剣を振り回していた。

そして、銃撃戦で戦う間合いを破られ、斧や剣による身体への直接攻撃に恐怖を感じた敵の兵士は、海賊のエジキになるか、降伏するかを選択を迫られる。「裏切り者」は選択の余地がないが……。

たちまち、ブリッジは海賊たちに制圧された。

これが海賊の白兵戦である。

もちろん「獲物」とされる人間は、ガスで気絶させて無傷で捕獲する段取りである。

実は、ブリッジのドア付近で起きた爆発も不可視ガス攻撃の一環だった。不可視ガスはビームの透過を妨げる機能があるだけでなく、ビームの熱エネルギーを吸収してガス自体が急激に膨張して爆発を起こす機能もあるからだ。

「よーし。ブリッジは制圧した。一隻、取り返したぞ。

おーい。通信士、聞こえるか？

制圧完了だ。俺たちはもうすぐこの船を出す。

俺たちが出たら、そちらからこの船を操作して、敵の援軍が来る前にこの船を戦場から離脱させる。お宝探しの乗員はこの船に乗せたままだぞ。

それから、俺たちが戻ったらすぐにブルックリン号を発進できるように、用意をしておけ。

直ちに次の獲物を狙うからな。」

ダークマン船長は、防護服から自分の船のブリッジに指示を出した。

彼は急いでいた。

もちろん、次の獲物は他の海賊に奪われる前に手に入れなければならない。

それだけではない。彼の仲間は集団で協力して戦っているが、それは獲物を得るための必要最小限の「協力」だった。だから、自分の船が敵の反撃を受ければ、彼の仲間は彼を見捨ててそのスキに逃げ出すだろう。

自分の身は自分で守らなくてはならない。それはお互い様だ。

「こちらブリッジ。アイアイサー。」

「これで、よし。」

おい。ヤロウドモ!

次の獲物を狙いに行くぞ。

艦内に残るヤツは、これから掃討戦だ。

スミからスミまで探せ。隠れている『獲物』や『お宝』を探し出せ。」

ダークマン船長は、艦内の手下に向かって号令した。

「おっつ!」

「エへへへ。ボス、裏切り者は容赦しないですよねえ。」

「そうだ。いけ。」

戦いの形勢は海賊側が有利だった。

2 お客様 (弁天丸ブリッジ)

「船長。まもなく、M-19019 星団付近の、お客様から指定された座標の通常空間に出ます。」

ウルスラが落ち着いた声で言った。

しかも、茉莉香に対して敬語を使っていた。これは、自分たちの関係は、船長とパイロットというオフィシャルの関係であり、友人(白鳳女学院の同窓生)ではないというケジメを示していた。

「了解。この調子じゃ、指定された時間前にタッチダウンできるわね。」

茉莉香が言った。

「船長、指定された座標は海賊たちの戦闘宙域にかなり近いと思われます。

しかも指定された空間の安全状況についても情報がありません。

ですからタッチダウン後に、非常事態と判断されれば、すぐに離脱します。」

今、ウルスラは、戦闘宙域の真つ只中にタッチダウンすると言う最悪の事態に備えて、透明な球体型の操縦席に座って、一人で船をコントロールしていた。

つまり、船の操縦はすでに戦闘モードである。こうしておけば、船の操縦は思考制御方式で行われ、迅速な応戦や緊急の超高速跳躍ができるからだ。

他方、通常の操縦席とその両脇には、士官学校の優等生が座っている。彼らは操縦に携わっていないが、初めての实战を経験するためとても緊張していた。

「了解。乗組員の安全第一ってことは、私も同感よ。」

ウルスラの慎重な言葉に、船長加藤茉莉香も応じた。

「船長、白兵戦要員は船の各所でスタンバイしています。」

シュニッツァーに代わって戦闘指揮を取るギルバートが言った。

「了解。」

さあ、弁天丸、いきましよう。」

「通常空間に復帰しました。」

ウルスラの声にブリッジは緊張に包まれた。

「リーダー、センサー、敵味方識別を開始。トレスポンダー発信して。」

船長が声を上げたが、戦闘モードではこれらの機能はすでに自動で動き出していた。

一瞬の間を置いてブリッジの立体モニターに映像が写った。

「指定された座標の付近には、お客様の船はいないわね。」

ピ、ピ、ピ、ピ。

そのとき、警告音が鳴った。

「重力異常を検知。エネルギー反応が強いわ。」

かなり大きな船がタッチダウンしてくるわよ。」

クーリエが言った。

「この反応では、通常の超光速跳躍ですね。」

少し安心した声で、ブラウン中尉が言った

「安心するのは、まだ早いわよ。」

ルカが言った。

「おお、出てきたぞ。」



「でかい!」

「この船が、お客さんの船なの?」

「へんな形……」

ブリッジのクルーからいつせいに声が上がった。

その船は、奇抜なデザインの船を見慣れているはずの海賊船のクルーから見ても「変な形」の船だった。

その船は、中央の大きい船の両側に、やや小さい船の胴体が連結されて、ひとつの船の構造になっていた。つまり三胴船であった。

もちろん三胴船だからクルーから「変な形」と言われたのではない。

変な形と呼ばれた理由は、三胴船の外側の二つの船体が同じ大きさではなかったからだ。つまり、この船は「船の形は左右対称」という船乗りの常識に反した不ぞろいな形をしていた。

おそらく、この船は、当初から三胴船として建造されたものではなく、船の容量を大きくするために、有り合わせの船体を連結して三胴船に改造されたのだろう。

しかも船の甲板全体が老朽化し、古びた印象だった。

「お客様」の船でなければ、クルーたちも「何? このボロ船は?」と即座に言ったことだろう。

「コンピューターの敵味方識別機能は、あの船に対して『Unknown』を表示しています。」

「ええ!?! 少なくとも敵ではないと言うこと・・・?」

茉莉香が怪訝そうに答えた

「船長、あの船から通信要請です。」

発、ビッグホープ社社長兼、宇宙移民船ビック・ホープ号船長イワン・ロゴスキー、宛、弁天丸船長加藤茉莉香殿、ですって。」

「なるほど。ビッグホープ社の船かあ、この航海のお客様だよね。」

出ます。通信をつないで。」

「了解。」

クリーエがそういった。

そのとき、突然、ウルスラが射撃管制用レーダーを放った。それも、最高出力で全天探索モードだった。

続いて、重力波探査も最高感度で行った。

これらは、戦闘開始の合図も同然だった。

「ウルスラ、お客様に向かって、いきなり何をするの?」

茉莉香があわてて言った。

「船長。戦闘記録をみますと、この前のマンチュリア人との戦闘では、通信中に敵の強襲を受けて白兵戦に持ちこまれましたよね。（第四十章 海賊の取引 参照）」

その用心です。」

士官学校の優等生たちは、平然と返事をした。

「船長、ビッグホープ号からの映像がです。」

クーリエが淡々と言った。

その声を聞いて、いったいどんな怪しげなヤツが現れるのだろうかと、ブリッジに緊張が走った。

「加藤船長、初めまして。私がイワン・ロゴスキーです。」

このたびは、難しい依頼を引き受けていただき感謝します。」

予想に反して、モニターには、若い男性が現れた。なかなかの美男子。年齢はどう見ても20代前半のようだ。

「弁天丸船長、加藤茉莉香です。初めまして。」

感謝のお言葉、ありがとうございます。弁天丸は依頼された仕事は断らないのがモットーですので、これを機会にまたのご依頼をお待ち申し上げております。」

茉莉香は、船長として、そつのない返事をした。

だが、茉莉香も、緊張し警戒していた。

その証拠に、いつものように自分のことを「茉莉香」と呼んでくださいとは言わなかった。

「では、早速ですが、荷物の受け渡しを始めたいのですが……。」  
「承知しました。」

「ご依頼の荷物は、気密・保温の宇宙コンテナ・パッケージに入っております。」

「貨物室のハッチからそちらの船に向けて射出しますので、回収をお願いします。」

茉莉香が答えた。

「あー！ こちらから小舟を出して、そちらの船まで取りに伺うのかと思っておりませんが……。」

「お客様にそんなお手間は取らせません。」

「宇宙コンテナは自走式ですので、誘導電波でお客様の船の貨物ハッチまで自分で飛びますよ。」

そう言つて、茉莉香は微笑んだ。

「ええ、いや、もう荷受のために連絡船がそちらに向かつて発進してしまいました。」

「困りましたねえ。コンテナを発進させず、私どもの連絡船に直接、お渡しください。」

そのとき、ウルスラが、再び射撃管制レーダーによる全天走査を行った。

このレーダー波の発信は相手の船にもわかるはずだ。射撃管制レーダー波を感知す

ると、自分の船が射撃の照準に入ったことを知らせる警告音になるからだ。

実際、茉莉香は、通信モニターを通して、相手の船のブリッジで警告音が鳴っているのを聞いた。

しかし、ログスキー船長は少しも動じていなかった。

『これは怪しい！ 彼らは、絶対に、何かたくらんでいる』

弁天丸ブリッジのクルーは、皆そう感じた。

「船長、コンテナはすでに発進を指示しています。もう取り消しはできません。」

そう言いながら、ウルスラはコンテナを切り離すスイッチを入れていた。

茉莉香が、百目のほうを見ると、彼も戦闘用の立体モニターを指差した。

立体モニターには、複数の小型船がタッチダウンして、弁天丸に接近していることを示していた。

「ログスキー船長、別のお客様がいらしたようですので、これでご依頼の仕事は完了とさせていただきます。」

それでは……。」

茉莉香が通信を切ろうとすると、ログスキー船長が少し悲しそうな表情で言った。

「ありがとうございます。これで私たちも最後の航海に出発できます。」

加藤船長も、御武運を……。」

「え!?!?!」

茉莉香は意外な言葉に驚いたが、通信は切れてしまった。

「戦闘開始! 対空砲火、撃て!」

ギルバートが命令した。

「敵の侵入を妨害するため、船体の回転、始めます。」

ウルスラが言った。

そのとき、警報が鳴った。

モニターは、不審者が侵入したことを警告している。

「やっぱり、先ほど荷物を射出した貨物ハッチから敵が侵入しているぞ。その数、8人。」

百目が言った

「貨物ハッチ付近の第五小隊、出撃。」

他の小隊は、他の敵の進入を警戒しつつ、第五小隊の援護を準備。」

ギルバートが指示を出した。

「パイロットのウルスラ・アブラモフです。」

戦闘員以外の乗員は、白兵戦に備えシートベルト着用、確認。」

ウルスラから号令がとんだ。この時点ですでに弁天丸の船長権限は、ウルスラが代行

している。

ウルスラの号令は、これから弁天丸船内で本気の白兵戦が始まることを告げている。たちまち、船内は緊張感に包まれた。

「いよいよ始まりますね。」

そう言つて、貴賓室からマリア・ジュニアが、お付きの兵士を連れて現れた。

「グ・・・ええ、マリア様、シートベルトをお付けください。」

茉莉香が、少し緊張しながら言つた。

マリア・ジュニアは、乗船後、茉莉香船長の再三の呼びかけにもかかわらず、自分は「グリユーエル殿下とは関係がありません。」と言つて、仮面をとらず、茉莉香を遠ざけていた。

茉莉香は、その意図がわからず困惑していた。

そのとき、緊張した声でブリッジに連絡があつた。

「こちら第一小隊長、ホーガンだ。」

侵入した敵は、なかなか手ごわいぞ。第五小隊が苦戦している。

ブリッジ、聞こえたら『海賊の白兵戦』に移行してくれ。

こちらはいつでも用意はできている。」

白兵戦全体の指揮を執る第一小隊長のホーガンから、ブリッジに報告があつた。

「なるほど。そのとおりだな。」

敵は、あのベツピンさん（元セレニティ軍のキャサリン小隊長）と互角にやりあうほどの腕前だあ。」

貨物ハッチ付近の戦闘を艦内モニターで見ている百目がつぶやいた。

モニターには、剣や斧を激しく振り回して攻守が頻繁に入れ替わる、ハイレベルな近接戦闘が映し出されていた。

「では、『海賊の白兵戦』モードに移行します。

一般乗員は、シートベルト着用！

3、2、1 ゴー。」

号令を掛けて、ウルスラは人工重力のスイッチを切った。

「うわ〜っ！」

船の人工重力が切れた後に起きた現象は強烈だった。

すでに弁天丸は高速で自転していたので、船内のヒトやものは、いきなり強い遠心力により船の外壁に向かって押し付けられたからだ。

弁天丸の一般乗員たちは、天地がひっくり返るような圧力を受けて悲鳴をあげたが、自分の体をシートベルトで固定してなんとか座席にしがみついている。

一方、白兵戦で闘っていた敵の兵士は、何が起こったか分からないまま、バランスを崩し側壁や天井にたたきつけられた。そのスキをつけて味方の兵士たちが手馴れた動



きで攻撃を仕掛ける。

「よくし。なんとか4人、仕留めたぞ。

ブリッジ。次の手をたのむ。」

第一小隊長ホーガンから報告があった。それでも、まだ4人も敵が残っているという。

「了解。

弁天丸、全速力で発進。」

ウルスラが言った。もちろん弁天丸が全力で発進するのは、襲ってくる小型船を振り切る狙いもある。

弁天丸が発進すると、今度は、いきなり体が後方へ押し付けられた。

エンジンがかかり、前へ進む加速度が加わったためだ。

白兵戦を闘う戦闘員は、事前にすばやく、自分のベルトからケーブルを伸ばし、艦内の各所に目立たないように設置されているフックに引っ掛け、自分の体を支える用意をしている。

そして、弁天丸の乗員たちの体は後方に強く押し付けられる。皆、必死で耐えているが、その圧力は、1G、2G・・・と強くなっていく。この圧力は船の回転による遠心力とは比べものにならないくらい強い。

一方、敵の兵士は、予想外に強烈なGの圧力に耐え切れずバランスを崩し、体を後部の側壁にたたきつけられた。

これに対して、味方の兵士は強いGの圧力に耐えながら戦闘を再開し、ほかの小隊から応援にきた兵士とともに、敵の兵士に槍を突きつけ、止めを刺した。

「船長、侵入した敵の兵士は全員倒しました。」

「白兵戦は終わりです。」

「みなさん、ありがとうございます。」

「われわれの勝利です。」

「うお〜！」

ブリッジに歓声があがった。

3 チアキの覚悟（銀河帝国軍第一艦隊旗艦グランドマザー・ブリッジ）  
「う〜ん。」

チアキは、グランドマザーの貴賓席に座って、海賊とマンチュリア人の戦闘を見守っていた。ただし、その姿勢は、いすの肘掛の上に腕を立てて、その上にあごを乗せるといふ、お姫様らしからぬものだった。つまり待ちくたびれていたのだ。

「もう少し早く、チャ、チャツつと、決着が着かないものかしら・・・。」

「……………」

艦長のハママ准将は、なにも言わない。

過去の経験から、『今、両軍は必死の白兵戦中ですから……』などと、当たり前のことを言うと、姫の機嫌を損ねるのは間違いないからだ。

「ブー、ブー……………」

そのとき、時空ナビゲーションシステムの警告音がなった。

「戦闘宙域から0.5光年離れた空間に、時空トンネルの開口部が形成されています。

船がタッチダウンしてくるようです。」

「トレスポンドアの発信をチェックしろ。」

「敵味方識別システム、起動します。」

ブリッジはあわただしくなった。

「来たわね、茉莉香。」

「いちいち確認しなくても、あなただと分かるわ。」

チアキが姿勢を正して、言った。チアキは弁天丸の到着を待っていたのだ。

また、チアキにとっては、弁天丸が戦闘宙域から少し離れた空間に現れたので、ひと安心だった。

「トレスポンドアを確認。宇宙海賊船・弁天丸です。」

チアキの声を追いかけるように、ブリッジから応答があった。

しばらくすると、通常の重力異常が検知された。

「船がタツチダウンしてきます。大型船のようです。」

「トレスポンダーの発信をチェック。」

「船が通常空間に復帰したら、光学映像を出せ。」

「光学映像、モニターに出します。」

「なにこれ。すごいボロ船じゃないの。」

チアキがつぶやいた。それは、マンチュリア人の船「ビック・ホープ号」だった。

「トレスポンダー、発信していません。」

「光学映像をデータベースで検索しても、船籍を確認できません。」

「弁天丸は、あとから現れた正体不明の船に向けて、貨物コンテナを射出しました。」

「なるほど、この怪しい船が依頼主ってわけね……。」

チアキがつぶやいた。

「あつ。弁天丸が船体を回転させ始めました。」

「ローリングかあ。こいつは、海賊の白兵戦を始めているに違いない。」

ハヤマ艦長が言った。

「ええ!? 弁天丸が襲われているの?」

チアキは驚いてハヤマ艦長に聞いた。

「そう判断します。ですから、ただいまからこの船籍不明の船を敵船と判定します。」

ハヤマ艦長が言った。

「それじゃあ、弁天丸に味方するの？」

チアキが聞いた。

「いえ。われわれの今回の任務は、この戦いの観察です。手出しはできません。」

ハヤマ艦長は静かに言った。

「……！」

チアキは驚いたが、一呼吸のあと、言葉を続けた。

「まあ、茉莉香なら何とかするでしょう。応援も大勢、加わったようだし……。」

チアキは、何気ない風を装って言ったが、その言葉は少し震えていた。

「姫様……お覚悟は、よろしいのですか？」

「大丈夫よ。陛下からもご指示があったわよ。」

私は、覚悟しているわよ。」

チアキは大見得（おおみえ）を切った。しかし、内心は、穏やかでなかった。

『茉莉香……。とにかく頑張つて、無事に乗り切つて……。』

## 4 弁天丸 参戦

「よし。」

白兵戦は勝ったし、襲ってきた小型艇は振り切ったし、

その間に、依頼主のビツク・ホープ号はどこかへ行ってしまったし、

これでお仕事は終わりね。さあ、帰ろうかなあ。」

茉莉香がつぶやいた。

「船長、ブルックリン号のダークマン船長から通信要請です。」

通信担当のクーリエが言った。もちろん、相手がダークマンと分かって、イヤな顔をしながら、そう言った。

「です。画像をモニターに出してください。」

・・・でも・・・なんか悪い予感。」

茉莉香も、顔を曇らせた。

モニターには、緊張して目をぎらつかせたダークマン船長が現れた。

「加藤船長。近くにいるんだから、オラッチに加勢してくれないか。」

ヤツラの動きが少し変なんだ。

今までは、散開して俺たちと白兵戦を戦っていたんだが、ヤツラが急に終結して、後方に控えていた船団といっしょに楔（くさび）形の艦隊陣形を組み始めるようなんだ。

こりや、何かたくらんでいるな。

たとえば、おれたちに、なんか一発、ぶっ放すつもりなんじゃないだろうかとね。」

「それは、確かに心配ですね……」

弁天丸船長加藤茉莉香は、ダークマン船長のことばに相槌（あいづち）を打ちながら、左右のクルーを見た。

もちろん、クーリエは首を横に振っている。断れと言っているのだ。

ルカは、茉莉香と目をあわさず、天井を向いている。

一方、ギルバートは渋い顔をしながら、頷（うなづ）いた。『海賊の頼みは、断れない』  
と思っっているようだ。

その時、それまでブリッジの後ろの席に座って黙って戦況を見ていた、マリア・ジユニアがさっと立ち上がって、言った。

「船長。海賊たちに加勢してください。」

弁天丸が一緒に戦わないと、たぶん彼らは負けるでしょう。

そしてその敗北を後で償うには、とても高い代償を払うことになると思います。」

「ですが、グ……お嬢様。

なぜそのようにお考えですか。

ご自分の手下である海賊たちを守るためですか？

理由を聞かせていただいてもよろしいでしょうか。」

茉莉香は、マリア・レオニーニが自分はグリューエルとは関係ないと主張していることに沿って、彼女のことを「お嬢様」と呼んだ。

「船長がご指摘のように、海賊たちを守ることが第一の理由です。

でも、船長。おかしいと思いませんか？

海賊たちとマンチュリア人がこれだけ大規模な戦闘を繰り返しているのに、辺境の治安を担当する銀河帝国第七艦隊は動き出しません。

それどころか、銀河帝国はこの宙域に民間船も海賊船も近づくなと警告していました。

なぜでしょうか？」

「それは、この付近で超新星爆発が起こるかもしれないという話でしたよね。」

「でも、船長。自然現象としての超新星爆発がこのM-19019星団で発生すると、本当に考ええますか？」

そんなことは宇宙天文学の常識に反します。

なぜなら、ここには赤色巨星もブラックホールもありません。若い恒星と小さな褐色矮星だけです。」

「そりゃそうですけど……。」



そういうながら、茉莉香はチアキの警告を思い出していた。あの時、チアキは本当の理由を言わなかったのだ。

「銀河帝国は、何かを企んでいます。」

その結果、超新星爆発のような現象が起こるかもしれないということでしょう。

では、何が、銀河帝国の狙いだと思えますか？

船長。もうお分かりですよね。」

マリア・ジュニアが、凍りつくような低い声で言った。

「銀河帝国は、今度こそ、マンチュリア人を滅ぼすつもりだと思えます。」

そのためには、M-19019星団や、海賊たちが巻き添えになってもかまわないと思っているのでしょうか。」

「ええ!? いったいなぜですか？

目の前にいるマンチュリア人の船団は、銀河帝国が恐れるほどの大軍ではないでしょうか?」

「私も詳しいことはわかりません。」

でも、マンチュリア人は弁天丸を乗っ取ろうと狙ってきましたよね。」

マリア・ジュニアがそういった。

「そういえば、チアキちゃん、いえ、第一艦隊司令官閣下からも『狙われているのは、弁

天丸かも知れない』と、警告されてきました・・・」

茉莉香もうなずいた。茉莉香はチアキのことを公式の官職名で呼んだ。

その瞬間、茉莉香の頭の中で、ばらばらな情報がひとつにつながった。

「重力兵器だ！」

茉莉香が叫んだ。

茉莉香の言葉を聞いて、マリア・ジュニアは口元に微笑を浮かべた。

マリアは仮面をつけているので表情からその思いを読むことはできない。しかし、口元の変化は読めた。彼女も同じ事を考えていたようだ。

「船長のお考えどおりだと思います。」

銀河帝国とマンチュリア人との戦闘は、お互いが重力兵器を打ち合う恐ろしいものになるでしょう。」

「だったら、みんなで、早く逃げなくちゃ。」

茉莉香が言った。

「はあ？」

一緒に戦わないのですか？

弁天丸は、最新式の重力兵器を装備しているのでしょう？」

マリア・ジュニアは、怪訝な表情を口元に浮かべた。

「だって、銀河系の平和を守るとか、そんな本気の戦いは、海賊の仕事じゃないわよ。

そういうことは銀河帝国にお任せして、海賊としては、巻き添えをくわないように、さっさと逃げればいいのよ。

「そうでしょ？ マリア様」

茉莉香は、左目でウインクしながら言った。

「もう、かないませんねえ。船長には……」

でも、簡単には逃がしてくれないかもしれないかもしれませぬよ。」

「それは、もちろん承知していますから。

だから、こっちだって、必死に逃げますよ。ウフフフ……」

茉莉香は、モニターの向こうにいるダークマン船長に向かって言った。

「船長、お待たせしました。事情は、お聞きのとおりですが……」

とにかく、いっしょに逃げましょう。

今すぐに、そちらへ向かいます。」

「おう。ありがたいねえ。

それでこそ、海賊の仲間だ。」

ダークマン船長は、茉莉香に向かってそう言うと、通信を切った。

「さあ、弁天丸、行きましょう。」

茉莉香が言った。

弁天丸は、戦場のど真ん中に向かって、超高速跳躍した。

## 5 弁天丸 v.s. マンチユリア艦隊

「船長のみなさん、弁天丸船長の加藤茉莉香です。」

みなさんに危険が迫っています。少しでも早く逃げましょう。

弁天丸がタツチダウンしたら、その後方に集合して、密集陣形を作ってください。

弁天丸がみなさんを時空トンネルで、安全なところまで運びます。」

茉莉香は、タツチダウン前から超光速通信で各海賊船の船長に呼びかけた。

「ええ？ なぜ逃げるんだ!？」

今、営業中だぞ。これから美味しいところなのに……。」

「弁天丸も一緒に闘ってくれるんじゃないのか?」

しかし、各船長たちは、事情が分からず戸惑っていた。

「皆さん、聞いてください。」

これから銀河帝国とマンチユリア人の本気の戦争が始まります。

それに巻き込まれないように、すぐに逃げる必要があるんです。」

茉莉香は必死に説得した。しかし、海賊船の船長たちは茉莉香の言葉を信じなかつ

た。

その時、マリア・レオニーニがモニターに現れて呼びかけた。

「みなさん、マリア・レオニーニです。」

この宙域は、銀河帝国が航海禁止にしていたことをご存知でしょう。戦闘による爆発に巻き込まれないように、今すぐに逃げましょう。」

「ありがとうございます。マリア様、御礼、申し上げます。」

おい、ヤロウドモ。俺は、先に逃げるからな。アバヨ。

こんなヤバイところに残りたいヤツは、残りなく。」

ダークマン船長が、二人の呼びかけに、真っ先に反応した。

「ええ!? あのダークマンが逃げるのかあ。」

ダークマン船長の話を聞いて他の船長に動揺が広がった。

「弃天丸。まもなく、タッチダウンします。」

ウルスラが言った。

弃天丸は、海賊船団の前方にタッチダウンし、マンチュリア人の船団と向き合った。

同時に、すべての海賊船が弃天丸の後方に集合して、密集陣形を作りはじめた。

みな、茉莉香とマリア・ジュニアの呼びかけに応じた。

「よかったなあ。みんな従ってくれて……。」

茉莉香はほっとした。

ビッ、ビッ、ビッ……

その時、弁天丸のブリッジに警報が鳴った。

「船長、マンチュリア人の船団から、一斉砲撃です。

いまのところ、有効射程の外から撃つてきますけど……」

ウルスラが報告した。

「射程の外つてなに？ 当たらないのを承知で撃っているの？

彼らもプロでしょう。どうしてそんなことをするの？」

茉莉香が怪訝（げげん）な顔をした。

「たぶん、私たちの注意をひきつけるためでしょう。

ダークマン船長が言ったように、私たちがひきつけて、『なにか一発ぶつ放す』という

のを狙っているのでしょうか。」

ギルバートが言った。

「なるほど。やってくれるわね。

それじゃあ、こちらからも一発お見舞いしようかしら。

ねえ、ウルスラ。あれ、やってくれないかなあ。」

茉莉香がウルスラにたのんだ。

「ええ!? すぐに逃げないで、タッチ・アンド・ゴーをするんですか?」  
「海賊の意地よ。」

私たちは負けてないというところを見せるのよ。」

「フフフ……(茉莉香らしいなあ)

いいですよ。船長の頼みとあらば。」

「ありがとうございます。ただし、一撃離脱でお願いね。」

敵が次の攻撃に備えて身構えているスキに、逃げ出すのよ。」

「こんなヤバイ空間、ユツクリと遊んでいられないからね。」

「ええ! また驚いたなあ。」

でも、なるほどねえ、さすが茉莉香。第二次攻撃をスツポカして逃げるのね。」

「この戦法にこんな使い方もあるんだあ。フフフ……了解。」

「パイロットのウルスラです。」

これから、タッチ・アンド・ゴーをやります。」

乗員は、シートベルト着用確認。」

ウルスラが、船内に放送した。」

「ええ!?!」

「うわあ、あゝあ!」

「キヤー」

タッチ・アンド・ゴーをやるといふ放送を聞いた乗員は、表情が青ざめた。

そもそも超高速跳躍における亜空間突入とタッチダウンの際に、乗員は、通常空間と亜空間を渡る間の独特の浮遊感覚に襲われる。これは、慣れない一般乗員には大変なストレスである。

それでも、一日一回とか、数時間に一回というようなペースで行うならば、なんとか耐えられる。

しかし、「タッチ・アンド・ゴー」は、一分から三分という極めて短い間隔で何回も通常空間と亜空間を行き来し、短い時間の攻撃を繰り返す戦闘方法である。その際には、上下左右の方向感覚まで頻繁に転換を迫られる。

この連続した空間転移のストレスに耐えられない者は、一種の「船酔い」で気分が悪くなり、なかには嘔吐する者まで出るといふ。

しかも乗務員は戦闘中のおのおのの業務をしながらこれに耐えなければならぬ。これはベテラン船員でも「地獄」と言われている。

タッチ・アンド・ゴーの経験者はウルスラだけという弁天丸のブリッジ乗務員は不安のどん底に突き落とされた。

『人前でゲロ吐いたら．．．』



『そんなところをみんなに見られるなんて……』

『もく……恥ずかしくて生きていけないよう……』

『もしそうだったら、どうしよう……』

そんな『嫁入り前』の若い女性乗務員の心配を知らないかのように、ウルスラは重力波を発射して時空トンネルを展開していった。

「海賊船の皆さん、時空トンネルを開きました。」

弁天丸に続いて、亜空間に突入してください。」

茉莉香船長が言った。

「了解。」

ビービービー

その時、時空ナビから警報が鳴った。

「ああ、マンチュリア人の船から、強力な重力波が出たぞ。」

もう避けられない。こちらの時空トンネルとぶつかる。」

百目が言った。

「大丈夫。弁天丸のほうがパワーは強いです。」

ブラウン中尉が言った。

「船長。大丈夫です。弁天丸、このまま、時空トンネルに突入しましょう。」

ウルスラも続いた。

「了解。」

さあ、海賊船の皆さん、弁天丸の後に続いて、時空トンネルに入って下さい。

いくよ、みんな。 弁天丸、全力推進！」

茉莉香が言った。

弁天丸と海賊船団は、時空トンネルに入った。

「船長、海賊船団は百光年先のトンネル出口へ送り出しました。」

それでは、弁天丸は、マンチュリア人の船に一発お見舞いしますよ。」

「了解。やって頂戴。宇宙海賊の手ごわいところをお見せしないとね。」

このとき、銀河帝国軍第一艦隊旗艦グランドマザーのブリッジでは、戦況を見守っていたハヤマ艦長が言った。

「姫様。今の重力波砲の一撃で、敵が重力兵器を保有しているのが明らかになりました。」

「いかがいたしますか？」

「弁天丸や海賊船はどうなったの？ 亜空間に無事にいるんでしょう？」

「時空ナビでは、弁天丸と海賊船は自らの時空トンネルを航行しているようです。」

「では、重力粒子砲、発射用意。」

照準は、作戦通り、マンチュリア人の艦隊を打ち抜いて、褐色矮星M—19019—31に向かう角度にしてください。

これで、『千年戦争』に決着をつけるわ。」

チアキは、約900年前からの、銀河帝国とマンチュリア人との因縁の戦いを『千年戦争』と呼んだ。

「照準セツトできました。」

「では、発射。」

第一艦隊総司令官であるチアキが、命令した。

そのころ、マンチュリア人の船団の旗艦、レコンキスタ号のブリッジは勝利に酔っていた。

「重力波砲の試射は、成功です。」

「やったぞ。弁天丸や海賊船たちを、重力波砲で吹っ飛ばしたぞ。」

今頃、ヤツラは宇宙の果てまで吹き飛んでいるぞ。」

「ああ、われらの祖先に感謝だ。われらもついに重力兵器をもったぞ。」

「これで、銀河帝国と互角の勝負ができる。祖先の恨みを晴らせるぞ。」

その時、弁天丸は、マンチュリア人の船団の後方にタッチダウンした。そして、直ち

にビーム砲の一斉射撃を行った。

予想外の角度から、突然、攻撃を受けたマンチュリア人の船団は、混乱した。

このとき、銀河帝国軍第一艦隊旗艦グランドマザーのブリッジでは、時空ナビを見守っていた通信士が言った。

「弁天丸が、通常空間にタッチダウンしてきました。」

敵の船団を攻撃しています。」

「なにをやってるの。茉莉香。」

もう、重力粒子砲を撃てと命令しちやったわよ。」

チアキがあわてていた。このままでは茉莉香の乗る弁天丸も爆発に巻き込まれると思ったのだ。

そのころ、マンチュリア人の船団の旗艦、レコンキスタ号のブリッジでは、体制を立て直して、突然現れた船に反撃しようとしていた。

「タッチダウンしてきた船は誰だ。敵か。銀河帝国か？」

「トレスポルダー確認。攻撃してきたのは、弁天丸一隻です。」

「弁天丸だと・・・ヤツラは吹き飛ばされたんじゃないのか。」

「とにかく、たった一隻でこちらを攻撃してくるなんて、我々をナメているぞ。」

よし、撃て！ 相手はたった一隻だ。打ち落とせ。」

「了解。射撃管制レーダー確認。撃ちま……。」

あつ。艦長、大変です。

弁天丸のレーダー映像が消えました。ヤツは、また亜空間に消えてしまいました。」

「ふうくん、……逃げたのかあ。」

それにしても逃げ足が速すぎる……。

もしや、これがウワサに聞いた帝国軍の新戦法、タッチ・アンド・ゴーかもしれん。

おい、弁天丸の第二次攻撃に警戒しろ。今度は、真下からくるかもしれないぞ。

レーダーの全天走査を続けろ。……。」

……。

「艦長、何かが左舷からタッチダウンしてきます。」

「よし、それが弁天丸だ。向こうがタッチダウン次第、打つぞ。」

主砲一斉射撃、用意。」

「了解。」

「まもなく、敵がタッチダウンしてきます……。」

ええ!?

艦長、タッチダウンしてくる『敵船』の質量が弁天丸に比べて異様に大きいです。

いや、質量じゃない、エネルギーがケタ外れに大きいんです。

これは？……」

次の瞬間、亜空間から重力粒子砲の攻撃を受けたマンチュリア人の船団は、消滅した。重力粒子砲は、亜空間からでも通常空間の標的を攻撃できる兵器である。重力は、多次元空間を通過できる万能の力であり、その粒子としての性質を利用した重力粒子砲は、多次元宇宙を貫く究極の兵器であった。

そして、放たれた重力粒子線のエネルギーは、敵艦隊を消滅させても衰えず、そのまま導かれるように進んで、付近の褐色矮星M—19019—31を直撃した。

褐色矮星は、急に輝き始めて星自体も膨張を始めた。星内部の温度と圧力が高まっていく。超新星のような爆発の兆候が現れ始めたのだ。

このとき、銀河帝国軍第一艦隊旗艦グランドマザーのブリッジでは、冷静に戦況を分析していた。

「マンチュリア人の船団は、消滅しました。」

なお、褐色矮星M—19019—31は、膨張を始めました。まもなく爆発を起こすと思われる。

いまのところ、この星系の可住惑星β星から避難船が発進するような動きはありません。

ん。」

β星は、マンチュリア人が開拓していた星である。爆発が起きれば可住惑星も吹き飛んでしまうだろう。その星には多数の非戦闘員も住んでいるだろう。

この攻撃命令は、それらの人々を犠牲にすることも覚悟の上で発せられた。

「弁天丸はどうしたの？ 亜空間へ離脱したんでしょう？」

チアキが聞いた。

「最後の観測データではおっしやるとおりです。

ですが、現在位置は、いまのところ、確認できません。重力波の乱れが大きく、亜空間が波立っていますので……。」

時空ナビ担当者が答えた。

「まあ、大丈夫でしょうねえ。

茉莉香は、逃げるのはお得だから、ねえ、ハヤマ艦長。」

チアキが言った。

「そうですね。初めて彼女に会ったときも、そうでしたね。」

ハヤマ艦長も言った。(第三章 練習航海Ⅰ 海賊教師の正体 参照。)

「そうね。茉莉香らしいわ。フフフ……。」

「よし。任務終了。天文観測者に見つからないように、すみやかに銀河系に帰還する。」

「グランドマザー、発進。」

艦長のハママ将軍が言った。

「了解。発進します。」

グランドマザーは、亜空間を銀河系に向かって進み始めた。

「姫様、お疲れ様でした。任務終了です。良くご決断なさいました。」

ハママ艦長がチアキに言った。

「もちろんよ、こういう命令を発するのは、王族たるものの義務よ。」

チアキは、元気そうに答えたが、その顔は笑っていないかった。

チアキの心には、次のような緊張感がみなぎっていた。

『自分は、大人の王族としての一步を踏み出した。』

## 6 大人の海賊

「うわあ。危ないところだったよう……！」

パイロットのウルスラが、大きな声を上げた。

「どうしたんですか？」

「何が起こったんですか？」

ブリッジのクルーが、次々とウルスラに声を掛けた。



「大丈夫?」

ウルスラの婚約者ブラウン中尉も、声を掛けた。

「いやあく。ダーリン。」

もうすこし超高速跳躍が遅れたら、弁天丸もやられてたよ。」

「ええ!? どういうこと?」

茉莉香が驚いて、口を挟んだ。

「いやあ。私たちが亜空間に入った直ぐあとに、重力粒子砲が発射され、敵艦隊は消滅したよ。」

それだけじゃない。付近の褐色矮星に爆発の兆候がでている。」

「じゃあ、その星が爆発したら、周辺の可住惑星もそこに住んでいる人々も吹っ飛ばされてしまうじゃないですか!」

ブラウン中尉が言った。

「ええ! 誰が、重力粒子砲なんか、ぶっ放したの!」

茉莉香が驚いて聞いた。

「船長。そんなことのできる者は、決まっていますわ。」

マリア・ジュニアが、こともなげに言った。

「そうね。銀河帝国だけだよ。そんなことのできるのは……。」

「ということは、チアキちゃん、もしかするとその辺に隠れていたのかなあ。」  
「そうですねえ。」

何も話していただけなかったのは、そういうことだったんですね。」  
マリア・ジュニアが、少し寂しげに言った。

『?』

そんなチアキちゃんとの経緯（いきさつ）を知っているのは、私とグリユーエルだけ  
のはずなんだけどなあ……。』  
そう思いながら、茉莉香は微笑んだ。

「船長、まもなく当初の目的地の宇宙空間にタッチダウンします。」

「了解。」

やがて、弁天丸は、通常空間に復帰した。

「あ、船長、ビック・ホープ号がいます。」

それも、海賊船団とビック・ホープ号が戦闘モードで向き合っています。」  
ウルスラが言った。

「ええ!?!」

茉莉香が驚いているところに、クーリエが不機嫌そうに言った。

「船長。ブルックリン号のダークマン船長から通信要請です。」

「でます。」

やがて、モニターにダークマン船長の顔が現れた。

「よう。加藤船長、無事、逃げお寄せたようだね。」

「いやあく、それより、この戦闘状態は何ですか？

何か、あつたのですか？」

「それは、俺たちが聞きたいところだよ。」

ビッグ・ホープ号は、お前さんのお客さんだろう。何かあつたのかい？

向こうはいきなりケンカ腰なんだよ。」

「はあ……。事情を聞いて見ます。」

「まあ、なんだなあ。アイツのお相手は、弁天丸にお願いして、俺たちはこの辺で失礼するとするか。世話になつたな。」

マリア様、ありがとうございます。おかげで、命拾いました。

加藤船長にも、世話になつたな。」

またオラツチに何か頼みごとがあつたら遠慮なく言ってくれ。力になるぜ。」

ダークマン船長が言った。

「あ、それじゃあ、事情は後でご連絡します……。超新星爆発を避けて、安全なルートでお帰りください。」

茉莉香は、そう言って通信を終えた。

「船長。アイツ、船長の前では猫かぶってますよ。」

弁天丸が来なければ、あの船を襲う気だったのでしょね。」

クーリエがあきれて言った。

「そこまでいかなくとも、面倒な海難救助の義務を弁天丸に押し付けて逃げたって読みもあるわね。」

あんなボロボロのビック・ホープ号は、どうみても、獲物というより厄介物の遭難船よね。」

ルカが言った。

その時、茉莉香は、ダークマン船長が最後に言った言葉の意味を十分理解していなかった。あの言葉は、弁天丸の加藤茉莉香船長を「海賊の取引」の相手として認めると言う意味だった。それは、「女子高生海賊」でもない、「女子大生海賊」でもない、対等の貸し借りができる「大人の海賊」として認めると言うことを意味していた。

もちろん、マリア・ジュニア・レオニーニは、素顔を見せないまま、宇宙ファイアの後継者としてその実力を海賊たちに認められた。

やがて、ビック・ホープ号と通信が繋がった。

「弁天丸船長、加藤茉莉香です。」

「こんなところに停泊されているようですが、どうなさいましたか。」

「宇宙移民船ビック・ホープ号船長イワン・ロゴスキーです。」

「また船長にお目にかかれるということは、・・・戦闘は終わったのですか?」

「・・・終わりました。」

茉莉香は、少し寂しげに言った。

「・・・そうですか。・・・」

イワン船長は、少し沈黙し、そして気持ちを切り替えるように語った。

「私たちだけになったのなら、もはや沈黙する必要はないでしょう。」

私たちの話を聞いていただけですか。」

まず、今の状態ですが、タッチダウンの空間がずれて、目標の星を見失ってしまったので、それを探しているところですよ。」

「どここの星を指しているのですか。」

「このあたりのマゼラン星雲へつづく宇宙は、銀河帝国の海図もないところだと思えますが。」

「マリア様が、神の啓示で授かったもうひとつの新天地を目指しているんです。」

「ええ!! 惑星ライセのほかにも、移住の候補地があったのですか?」

「さすが、船長はよくご存知ですね。」

そうです。宇宙マフィアの安住の地として、マリア様は、アンドロメダ銀河に続く道の中と、マゼラン星雲に続く道の中にそれぞれ候補となる星を示されたのです。

結局、宇宙マフィアは、アンドロメダ銀河に続く道の中にある星を選びました。それが、茉莉香さんもご存知の惑星ライセです。」

「では、マゼラン星雲に続く道の中にある星の位置は、分かっているのですか?」

「正確な位置はわかりません。ある特定の恒星を指すことだけが伝えられています。」

「それで、タッチダウンして誤差修正に手間取っておられたのですか・・・。」

茉莉香が深刻そうな表情で黙ってしまった。

行き先を見失ったということは、遭難も同然の深刻な事態だと思ったからだ。

「あのお、ちよつと、質問をしてもよろしいですか。」

みなさんは、どうして、場所も定かでない新天地を目指して旅をしようと言われたのですか?

あのM—19019星団の可住惑星は、皆さんが住めないほど人口過剰ではなかったでしょう?」

突然、マリア・レオニーニが話に加わった。

「それは、……」

イワン船長は、口ごもった。

「あのう、大変失礼な言い方ですが、もしかして、逃げ出してこられたのですか？」

マリアが言った。

「……もう隠すこともありませんね。お話ししましょう。」

私たちは、マンチュリア社会の差別から逃れるために、新天地に旅立つことにしたのです。私たちの旅立ちに当たって、王政府はこの船を与えて送り出してくれました。」

マリアは、『そのために、こんな古い船を……』と言いかけて黙った。

マリアは真実を悟ったからだ。先ほどから、イワン船長の背後で動く、ブリッジのクルーの姿が見えていたが、彼らを眺めていて真実を悟ったのだ。

「あのく、大変失礼なことを申し上げるかもしれませんが、ブリッジの皆さんの顔を拝見していると、とても良く似ていらつしやるんですが……。」

そのことが、皆さんがああ星を脱出した理由と、なにか関連があるのでしようか。」

マリアは、遠まわしな言い方で真相を尋ねた。彼女は、乗員の多くがマンチュリアのクローン人間かその子孫ではないかと思つたので、そういつた。

「お気づきになられましたか。」

そうです。私たちは、マンチュリア人と他の部族の混血人種なのです。

その昔、M-19019星団の可住惑星に流れ着いた祖先の人々は、文明を失い滅亡の危機に瀕しながら、必死に生き抜いたのです。

その過程で伝統的な身分階級制度は崩れ、部族間の混血が始まりました。

私たちはその混血人の末裔です。」

「やはり、そういうことだったのですね。」

「そうです。」

でも、銀河系の人々と連絡がついて生存の危機が去ると、再び伝統的な身分制度を復活させようという動きが強くなりました。

その結果、居場所のなくなった私たちは、再度、宇宙移民に出発すべきだということになりました。

そして、私はマンチュリア王族の血を引く混血人だということ、この移民船のリーダーに選ばれたのです。」

「なるほど。それで新しい惑星開発キットが必要になり、弁天丸が運んだわけですね。」

茉莉香が納得していった。

しかし、マリアの反応は違っていた。

『なんとということでしょう!?!』

「これでは棄民ではないですか。」



セレニティ王国において、クイーンセレンディピティが移民船として出発させられた理由と同じではないですか！』(第四十一章 薔薇の泉 参照)

マリアは、口には出さなかったが、最初は怒り、そして次に悲しい気分になった。

『なんとか、この人々を助けて差し上げたい。』

この人たちは、セレニティ王国の祖先と同じ境遇ですから。』

マリアは、悲しい思いがあふれ、モニターパネルに写ったイワン船長の顔を正視できずに目を伏せた。すると、弁天丸の武器管制パネルに設置されている認証装置が目に入った。

『あつ。これは、ブラックマター。』

弁天丸の認証装置には、ブラックマターがセットされているではありませんか。

これがあれば、今の私なら、この人たちを救う道を示せるかもしれません。』

そう思うと、マリアは、認証装置の中の黒いボールに手を当てて、目を閉じて祈った。

この人たちに救いの道を示して欲しいと。

「どうされたのですか？ マリア様」

茉莉香は、マリアが認証装置に手を当てて祈っていることに気がついた。

「あつ。時空ナビが動き出した。なんか映像が出るぞ。」

ブリッジの百目が叫んだ。

「ああ、これは、いったいなに？」

茉莉香は、ブリッジの空間に浮かんだ立体映像を見て、思わず叫んだ。

その映像は、銀河系から星々が細長くヒモのように伸びてつらなるものだった。これはどう見ても宇宙の海図だった。

そして、そのうちの銀河系から程近い一点で、赤い光が点滅していた。さらに細長く連なる星々の中ほどにある一点が、青く点滅していた。

「これは、マゼラン星雲と銀河系を結ぶ海図かなあ。

そうだとすると、赤い点は、銀河系との位置関係から見て、どうやら弁天丸の現在位置だな。

では、青い点はなんだあ？」

百目が、映像を観察してつぶやいた。

「さすが、百目さん。カンがいいですね。

その赤い点は弁天丸の位置、青い点はビック・ホープ号が目指す星の位置を示しています。」

マリアが言った。

「それで、時空ナビでは、弁天丸からこの星までの距離は、約7万光年と表示されていますよ。」

機関士のブラウン中尉が言った。

「ええ？ 時空ナビでこの海図が読めるんですか？」

マリアが驚いた。

「ええ!! 読めるから表示されたんでしょう? . . . . !」

あ、そうかあ。

よく考えるとこの宙域は人類にとっては未踏の宇宙。海図なんかあるはずがないですね。

ならば、この海図は誰が作ったんでしょうか? ふむむ . . .」

機関士のブラウン中尉が言った。

「そういう難しいことはあとでユツクリご相談することにしませう。フフフ . . .」

それより、茉莉香さん。

ビック・ホープ号をあの星まで運んで差し上げてください。

この海図があれば、できるでしょう。」

マリアは、ブラックマターの秘密を話すわけにいかないので話をそらした。

「ええ!! だってこの海図の情報で、時空トンネルの航路をセットできるんですか？」

それに信用してよいのでしょうか？」

誰が作ったかわからない海図なんですよ。」

茉莉香も、秘密を知らないことを示すために、大げさに驚いた表情で言った。「大丈夫です。恐らく、この海図に示された星が伝説の星でしょう。」

航海士さん、コンピュータで時空トンネルの航路がセットできるか、試してみてください。」

そういいながら、マリア・レオニーニは微笑んだ。

「あつ。時空トンネルの航路がセットできましたよ、船長。マリア様

あつさりど、いとも簡単に。」

航海士を勤めるケイコは驚いた。

「ということとは、この目的地は本物の『伝説の星』なんででしょうか？」

私の聞いている伝説の星という話は、マリア様が啓示を受けて授かったもの……

……

そうか、レオニーニ家の後継者、マリア様だからこそ、出来ることなんですね。」

旧宇宙マフィアの一員だったケイコは、自分で自分に言い聞かせるように言った。

「船長、改めて、お願いします。」

マリアが言った。

「うん。お嬢様なら、なんでもアリかあ。」

でも、ビック・ホープ号のイワン船長に、意見を聞いてみるかなあ。

.....  
イワン船長、お聞き及びの通り、リスクの高い選択なのですが、いかがが致しませうか？」

しかし、茉莉香が言葉を言い終わらないうちに、モニターの向こうから歓声が聞こえた。

「ウワッ。助かったアッ。」

そして、喜びにあふれた大勢の若い男女が、モニター画面に顔を出した。

「加藤船長、ヨロシクお願いします。」

もう、私たちには帰る星はないのですから……。」

イワン船長が言った。

弁天丸は、ビック・ホープ号を伴い、7万光年先にある、伝説の星に向かって航海を始めた。

## 第四十六章 グリユーエルの帰国

### 1 お茶会（弁天丸船長室）

「うくん。やっぱり、このプレミアム・プリン、何度食べても美味しいよねえ。」  
「本当に、美味しいですわ。」

それにこのお茶も、いい香りですわ。」

「そうでしよ。たくさん持ってきたからね。召し上がれ。」

「差入れ、ありがとうね、チアキちゃん。」

茉莉香、グリユーエル、チアキの三人は、弁天丸の船長室で、チアキが差し入れた紅茶とプリンを味わっている。

これから、グリユーエルがセレニティ星系へ帰国するための艦隊の航海が始まろうとしている。艦隊と言っても、三人の乗った加藤茉莉香船長の弁天丸、チアキ王女殿下の船・ローズアロー2号さらにセレニティ王国の軍艦三隻の、合わせて五隻の艦隊である。

もちろん、茉莉香、グリユーエル、チアキの三人は弁天丸に乗って、一緒に行くつもりである。

しかし、表向きは、グリユーエル本人は、銀河聖王家の一員として、チアキの船・銀

河聖王家の御用船ローズアロー2号に乗り、弁天丸はあくまで後続に控えた随行艦であると公表されている。

チアキはグリユーエルのお国入りに際しては公式のお役目はない。それどころか、公式訪問して仰々しい歓迎行事を設営され、これに笑顔で出席する羽目になるのは、最近のチアキが最も嫌うことだった。したがって、チアキは、『私の船で行く以上私も一緒に行く』と言いながら、お忍びで同行することになった。

そして、それらの護衛を勤めることを名目に、セレニティ王国の軍艦が三隻、随行している。もちろん、重力推進式の新鋭艦である弁天丸やローズアロー2号にはセレニティ軍の警備など必要ない。しかし、軍の船が警備を勤める『形』を取らせて欲しいというセレニティ軍の強い要請の結果だった。

「姫様。これから、時空トンネルを展開させて、発進したいと存じます。

つきましては、発進の御指示をお願いいたします。

トンネルに入れば、三時間ほどでセレニティ星系の外延部に到達する予定でございます。」

ローズアロー2号の艦長ソフィア・クキが軍用携帯を通じてチアキに連絡してきた。「了解です。他の船を時空トンネルへ誘導するのも、よろしくお願いね。

それから、私は航海中、このまま、弁天丸にとどまるから・・・。」

「承知いたしました。」

チアキは、ローズアロー2号の艦長に発進の指示をだした。

まもなく、五隻の艦隊は、ローズアロー2号の作り出した時空トンネルに入り、セレンテイ星系に向かって亜空間を飛行し始めた。

「それでさあ、チアキちゃん。」

この間、弁天丸がビツク・ホープ号を連れて行った惑星の開発に、銀河帝国が支援してくれることになったの？」

茉莉香がチアキに聞いた。

「そうよ。あの星は、マゼラン星雲方面への航路の中継基地としては、絶好のポジションだからね。」

しかも、例の海図と弁天丸の航海データが手に入ったので、航路局は大喜びよ。」

「よかったなあ。これで、宇宙に、あの人たちの居場所が出来るね。」

平和に暮らせるといいなあ。」

「そうですね。これで、マンチュリア人との因縁の争いも終わりになるといいですね。」

グリユーエルが答えた。

「そうね。またひとつ、平和になるわね。」

チアキは少し沈んだ声で答えた。



「そういえば、チアキちゃん。

私が、そのお仕事で大学を休んでいる間、チアキちゃんも大学を休んでいたんですって？

何をしてたの？」

茉莉香は、微笑みを浮かべながら、さりげなく、M—19019 星団付近にチアキを乗せた船もいたのではないかと思ひ、話題にした。

「ええ!!」ゴホン、ゴホン。・・・公務よ、公務。

王族も、見えないところで結構忙しいのよ。」

チアキは咳き込みながら何事も無かったかのように振舞った。茉莉香やグリユーエルに対しても、この任務は秘密だと考えていた。

「ええ、なんかヘンなの。」

じゃあ、グリユーエルはどうなの？あなたも、その間、大学を休んでいたのでしょうか？」

「そうですね。私も公務で忙しかったですわ。」

グリユーエルも微笑みながら、平然と答えた。

グリユーエルも、今回の航海では茉莉香に言えない秘密がたくさん出来た。

もちろん、マリア・ジュニア・レオニーニとして弁天丸に乗船した者が自分であった

ことは言えない。それを秘密にしたことで、さらに秘密が増えてしまった。

実は、グリユーエルはM-19019星団からの帰り道に、旧宇宙マフィアの大ボスを務める「グランマ」ことマリア・レオニーニから、自分の後継者にならないかと誘われていた。

グリユーエルがグランマに超光速通信を使って、お礼の連絡をした際の話だ。

「今回のことは、急をお願いしたにもかかわらず、過分のお力添えをいただきまして御礼申し上げます。」

本当に良い経験になりました。

結果は、満点とはいえませんが……。」

「それでもあの一族の末裔が生き残れたじゃないか。未来へ希望が残るベストの解決だよ。もちろん、海賊たちも守ってくれたしねえ。」

グランマが答えた。

「そう言っていただけでは……。本当に、ありがとうございます。」

「それにしても、今回の働きぶり、さすがだねえ。」

エリーナも、あなたが『マリア・ジュニア』として『王者の品格』を示したと興奮して言っていたよ。」

「そんな。過分の評価を頂き、恐縮でございます。」

「それで・・・グリユーエル。」

今回は、あなたは、一時の、仮の姿としてマリア・ジュニア・レオニーニを名乗ったわけだ。

でも、私としては、今後は、仮の姿ではなく正式にマリア・レオニーニを名乗ってもらいたいと考えているよ。」

「私が、ですか？ 血縁者ではない私に、『大ボス』を継げとおっしゃるのですか？」

「ああ、そうだ。」

それに、もともと、アメジューグ族（旧宇宙マフィア）の大ボスの地位は、世襲なんかじゃないのさ。よく言えば、実力者への『禅定』、ハッキリ言えば、力づくで奪うものさ。

まあ、返事は今すぐでなくともいいから、考えておいて欲しい。」

「でも、私は、すぐには『殿下（王族）』と言う肩書きを捨てて、一人の女として旅に出る決意が出来そうではありませんし・・・。」

（第二十三章 茉莉香とグリユーエルの進路 参照）

「なあに、王女のままでも、いいのさ。」

アン（銀河帝国の女王）のヤツも、海賊女王を兼ねているじゃないか。」

「はあ・・・。」

それでは、ひとつお伺いしてもよろしいですか。」

「なんだい？」

「あのう・・・、実のお孫さん、つまりサーシャさんは今、その・・・跡継ぎのことをどう考えておられるんですか？」

「サーシャは、私の跡を継ぐ気はないよ。あなたも知っているとおりさ。」

いづれ、ステープル家の次男と結婚するんじゃないかなあ。長男は、クリステイア王女と結婚したし・・・。」

（第八章 サーシャの秘密、第二十二章 レオニーニ家の夕食会 第二十九章 弁天丸Ⅱの進水式 参照）

「そうですか。」

私も良く考えて、ご返事したいと思います。」

「ああ、期待してるよ。」

グリユーエルは、グランマ（二代目のマリア・レオニーニ）とのそういったやり取りを思い出していた。

「うーん。私に対しては、二人とも秘密が出来たのかなあ。なんかねえ。」

茉莉香は、微笑を浮かべながらも残念そうに言った。

「なにを言ってるのよ。茉莉香。」

先に『ヒミツ』を作ったのは、あんたの方よ。  
ウルスラから聞いたわよ。

リリイが『茉莉香は、親友の私に対してもトボケて、本当のことを告白してくれない』とウルスラに愚痴を言ったそうね。」

「だって、リリイったら、なんでも、話を男女のことに結び付けて、

『ねえ、彼とはどこまでいったの?』とか、

『船内の女性乗務員のうわさでは船長の婚約は公然の秘密だよ、本当なの?』とか、  
そういう話ばかり聞いてくるんだもの。」

「まあ、茉莉香さんったら・・・フッフ」

グリユーエルは微笑んだ。

「はあく・・・もう～～！ 茉莉香。」

私の言っているのはそこじゃないわよ。」

チアキは苛立って言った。

「ええ!? 私、隠し事なんか、ないよ。」

茉莉香は、少し困惑してそう言った。

「あのねえ、茉莉香。あなた、いつからリリイと『親友』になったの?」

二人の間に何があったの?」

親友の私は、何も聞いてないわよ!？」

チアキは、苛立って言った。

「それはさあ、チアキちゃん。リリーのいつもの『手』というかあ。

あのコさあ、私たちに何か『白状』させようと思うと、

『親友の私にだけ、ナイシヨで言っつてごらんよ。』

ぜんぶ言うと、気分がスッキリするよ。』とか言うじゃない。

それだよ。

チアキちゃんだって、言われたことあるでしょう……。」

「う……ん。そう言われて見れば、そんな気もするけど……。」

「ねえ、そういうことだよ。」

「まあ、そういうことにはしておこうかなあ。今回は。

それで、茉莉香。彼とはどこまでいってるの？

ホンモノの『親友』の私にだけは、話さないよ。」

「だから、チアキちゃん。私、何もナイよ。秘密なんか。

それに、チアキちゃんだって、彼とのデートの様子を何も話してくれないじゃないの

。」

茉莉香は、少し反発して言った。

「あのねえ、茉莉香。私と彼が会うのを『デート』だなんて、あなた何か誤解しているんじゃないの？」

「だいたい、二人だけで会っていると思っているの？」

「ええ!! 違うの？」

「違うわよ。こつちには傍に、侍従や女官が大勢いるし、向こうにも執事と秘書が3人も傍にいるのよ。」

さらに、その周りを両家の警備陣が取り巻いて、警備の人は全部で何人いるか数えたこともないわよ。」

「へえ。なにそれ。」

「そうだ、ねえ。チアキちゃんがそうなら、グリユーエルがアレックスと合うときも、そうなの？」

茉莉香がグリユーエルを振り向いて聞いた。

「私とアレックス様は義兄妹(きょうだい)ですし、家庭教師をしていただいているだけなのですが……。」

グリユーエルは顔を赤らめながら、言葉が続けた。

「私は、小さいころから、何をするにも女官の方に付き添って頂いていましたから……それが当たり前かと……。」

「うわ〜！ そうなの・・・。私には、そんな生活は、ぜんぜん、無理だなあ。」  
茉莉香が驚いた。

「だから、茉莉香。さっきの話に戻るけど・・・。」

私は、茉莉香、あなたのことを心配して言っただけなのよ。」

「そんな心配、要りません。自分のことは自分で決めます。」

「また、いつもの調子で、のんきなことを言ってる。」

いつまでもそんなことを言っていると、茉莉香の周りから誰もいなくなってしまうわよ。

たとえば、この間の航海でのキャサリンさんの話、ウルスラから聞いたわよ。

茉莉香、知ってるの？

「グリユーエルも知ってる？」

「いいえ。私はこの間の航海に関する話は聞いていません。」

このごろ、キャサリンさんは私の周りにいないのですから。」

グリユーエルは、弁天丸に乗っていなかったことになっているので、知らないフリをした。

「私、知っているよ。」

弁天丸でのキャサリンさんは、今までと違って乗員の女の子たちとも打ち解けて話を



したりして、とても楽しそうだったよ。

それに加えて、美人で強くて、戦闘でも大活躍したから、男性船員さんたちからもモテモテだったよ。」

茉莉香が言った。

「それで、どうなったか、知ってるの?」

チアキが聞いた。

「知ってるよ。」

男性たち、特に助つ人の戦士の人たちから交際申し込まれたり、なかにはいきなり結婚申し込まれたりしたそうね。それでキャサリンさんが困つて、ギルバートさんに相談してたそうよ。」

茉莉香は、なんでもないことのように答えた。

『してたそうよ』なんて、他人事のように言っちゃダメじゃないの。茉莉香。

その種の相談を女の側から持ちかけるって、どういう意味か分かっているの?

ねえ、グリユーエル。

セレニティの『女性の慎み(つつしみ)』としては、そういうことでしょうか?」

チアキがすこし声を荒立てて言った。

「そうですねえ。」

女性から、ある殿方に、他の男性から申し込まれた交際や結婚の話について御相談するということは、自分に対するその殿方の気持ちを確かめたいと女性の側は願っているからですわ。

もちろん、セレニテイの道徳観から言うと、女性の側から殿方に自分の気持ちをハッキリと言葉に出して伝えるのは、慎みを欠いた行いとされます。

ですから、その種の『御相談』は、女性の側から出来る最大限のアプローチですわ。」  
グリュールは、すらすらと答えた。

「ええ〜！ それって、遠まわしに告白するってことなの？  
どうしてそんなことするの？」

自分の気持ちは素直に表現すれば言いじゃないの？」

茉莉香が、少し不満そうに答えた。

「そうはしないのが、女性の慎みと言う伝統文化もあるのよ。」

だから、茉莉香。

ライバルが現れたのよ、少しは緊張しなさいよ。」

「だって、ギルバートさんだって、何てことない話のように言ってたし……。」

それに私は加藤茉莉香だから、加藤茉莉香のやり方ってモノがあるし……。」

「また、そんな、ノンキなことを言ってる。」

でも、ひよつとすると……  
はあくん……

今、気がついたけど、茉莉香、あなた、最近、変ったわよねえ。

なにか『自信たつぷり』じゃないの？

やっぱりね。

バレバレなのよ、茉莉香！」

「ええ！ チアキちゃん、カマ掛けないでよね。私、何も変ってないわよ……」

「ねえ、茉莉香。彼と、なんか、あつたんでしょ！」

私に話してみなさいよ。

そっちの話題は、弁天丸では、『公然の秘密』だそうね。」

「だから、チアキちゃん。私、秘密なんか何も無いよ。」

「そうなの？ ……」

「私、ヒトに言えないようなヤマシイことはしていませんよ！ なにも。」

「まあ、チアキ様。その辺で、許して差し上げたらいかですか。」

茉莉香さんのお顔を拝見していると、ウソをついているようにも見えませんか。」

二人のやり取りを見かねて、グリユーエルが笑顔を浮かべていった。

グリユーエルは、弁天丸進水式の披露パーティでの飲酒と酔いつぶれたための外泊

を茉莉香たちに秘密にしてもらっていることもあり、茉莉香の弁護に回った。

(第二十九章 弁天丸の進水式、第三十章 グリユーエルの危機 参照)

チアキは、そう言うグリユーエルのスキのない笑顔を見て、言った。

「うくん。．．．．．そうかなあ。」

．．．

でも、改めて思うけど、こういう話はグリユーエルが一番、手ごわそうね。

『アレックスと、どこまでいつてるの?』とかストレートに聞いても、完璧な『カマトト』の笑顔を決められたら、まったく分からないような気がする。」

「そうだね。やっぱり、グリユーエルって、すごいんだねえ。」

茉莉香が言った。

「茉莉香。ナニ、言ってるの。そこは誉(ほ)めるところじゃないわよ。」

「それは、そうですね．．．フフフ。」

もう、茉莉香さんったら．．．。」

「ナハハハ．．．。」

「話は変わりますが、この間から続いたお二人のお誕生会、楽しかったですわ。」

グリユーエルが話題を変えた。

「そうね。本当に楽しかったよね。」

茉莉香も、グリユーエルも本当にありがとう。」

「茉莉香さんのお誕生会では、白鳳女学院（高等部）での卒業ダンス発表会のお話で盛り上がりましたね。」

「ナハハハ……。あの子達の卒業した帝国女学院（高等部）では、卒業ダンスパーティーをやつてないのね。」

わたし、女子高はみんな、白鳳女学院と同じことをやっているのかと思つていたよ。」

茉莉香が苦笑した。（第二章 卒業記念ダンスパーティー 参照）

「みんな、すごく興味を持つて話を聞きたがったのよね。」

そして、茉莉香とグリユーエルが踊ったという話を聞くと、ぜひ踊つて見せてくれという話になって……。」

「いやあ、恥ずかしいからダメつて、何度も断つただけど……。ピアノ伴奏もやるからぜひワルツを踊つてみせて欲しいって言われて……。」

「そう言いながら、最後には、茉莉香とグリユーエルがノリノリで踊つちやうんだもの……。バカウケだったわよ……。」

チアキが笑つた。

「茉莉香さん、ステキでしたよ。」

「それで、結局、『見ているだけじゃ、ツマラナイ』って言つて、みんなが茉莉香と踊つたのよね。」

「やっぱり、茉莉香の男役は、カッコイイよね。」

「その勢いで、チアキちゃんのお誕生会では、王宮の『花の大広間』に入つて、王家主催のダンスパーティーのまねをして、あの子達みんなとダンスを踊つてしまつて……。」

「迷惑かけたというか、ルール破りというか……チアキちゃんごめんね。」

「いいのよ。私も踊つたし……。」

「実は、そういうことになるんじゃないかと、あらかじめ『花の大広間』の飾りつけや照明を舞踏会モードにしてみらつていたのよ。」

「2メートルもある『イマリ』の大きな陶器が、大広間の壁際に並んでいたでしょう。あれは、鮮やかな色彩の花柄の陶器を舞踏会の出席者に見立てた飾り付け、だそうよ。」

チアキが言った。

「そうだったの〜。」

「そして、茉莉香さんが、帝国軍の制服をお召しになつて、『花の大広間』の中央で、ドレス姿のあの子たちとダンスを踊っているお姿、本当に、素敵でしたわあ。」

「そうね。王宮の女官たちも、私たちが踊っている姿を見て、『姫様らしい、素敵な御誕生会になつた』と目を細めて見ていたわ。」

「チアキちゃん、ありがとうね。」

「いや、一応、私のお誕生会だからね。ハハハ・・・」

それに、あの子達も、もう少し大人になったら、着飾って王宮のダンスパーティーにデビューするのが夢なのよ。

みんな、そういう話がありそうな、お嬢様ばかりなんだから・・・」

チアキが、彼女たちの家庭の事情は全部知っているといるという表情で言った。

「次は、グリユーエルのお誕生会だね。」

今年は、私たちに祝わせて欲しいなあ。」

茉莉香が言った。

「あら、それは楽しみですよ。」

グリユーエルが微笑んだ。

「グリユーエルのお誕生会なら、ヒルデも呼ばないとね。」

茉莉香が言った。

「それなら、『白鳳海賊団』（宇宙ヨット部の現役・OG）も呼んだらどうかしら。」

（第二十九章 弁天丸Ⅱの進水式 参照）

アイツラも呼ばないと、また、なんだかんだとワル知恵をしぼって、密航してくるわよ。」

チアキが言った。

「宇宙ヨット部の伝統ですね。昔も今も、その方面のことには、人材豊富ですよね。」

グリューエルが笑った。

「ええ〜!?」

それじゃあ、今度は、ダンスじゃなくて、海賊ショーをやるというの!?!? . . . . .」

茉莉香が驚いた。

こうして、お茶会での三人のおしやべりは、航海が終わるまで続いた。

そして、グリューエルは思った。

『こうしてみると．．．私たち三人は、それぞれに、オトナのヒミツを抱えたわけですね。

まあ、ヒミツといっても、乙女の夢という程度の話かもしれませんが．．．。

でも、私たち三人の強いキズナは、未来永劫、変わりませんわ。』

2 お国入り（セレニティ星系、惑星「青の姉」）

「グリューエル殿下を載せたシャトルは、アレキサンダー宇宙空港に着陸して、所定の位置で停止しました。」

あゝ、たつたいま、シャトルのタラップ最上段に、殿下が出てこられました。」

テレビ放送は、グリューエルの帰国をセレニティ星系全体にライブ中継していた。



「この、美しく澄み切った青い空、芳（かぐわ）しい大気。あゝあゝ……。」

私は、本当にセレニティに帰って来ましたわ。」

グリユーエルは、シャトルの昇降タラップの最上段に立って、空を見上げ、深呼吸した。

『さて……、』

わがふるさととは、大人になった私に、どんな姿を見せてくれるのでしょうか。

今まで、子どもの私には隠されていたことが、いっぱいあるはずですわ。』

そう思いながら、グリユーエルは、タラップの下で出迎える王族や政治家たちの歓迎の輪に入っていた。

それからの3日間、グリユーエルは過密なスケジュールをこなした。

国民の大歓迎のなかで、王宮に入り、大公両陛下に挨拶したものの、ユツクリ話し合う時間はなかった。

そして、次から次へと、決められたスケジュールに従って、大勢の人々、見知らぬ人々との接見をこなしていった。

もともと、王族の日常の行動は半ば「公務」でもあり、なかなか自分の意思で決められないのだと承知してはいた。かつては自分もそれを当然のことと受け止めていた。

しかし、白鳳女学院や帝国女学院の留学時代には自分の意思で行動することが当たり前になってしまったためか、今ではグリューエルはこんな日常を窮屈（キュウクツ）と感じてしまう。

「はあく。窮屈な日々でしたわ。少し疲れしました。」

でも、決められた日程も、今夜の王族のパーティでおしまいですわ。

それにしても、これまでにお会いした国民のみなさんは、みな、私の人物や思想を見極めようと目を凝らしていらつしやいましたね。

その背景に、なにか、課題というか緊張を抱えていらつしやるのがわかりました。どういうことでしょうか。

セレニティの内政にそんな課題や緊張はないはずですが……。」

グリューエルは、そんな感想を持ちながら、パーティに出席した王族と歓談していた。なごやかな会話、ほほえましい身の上話、上品なジョーク……表面的には今までと同じような楽しいパーティが続いていた。

「グリューエル様、最近、セレニティでは、国民の間にとっても人気のある宇宙ツアーがあるのを御存知ですか。」

「何でしょうか。」

「俗に『大航海巡礼ツアー』と言われておりますわ。」

「大航海?」

「そうです。『大航海』とは、われわれの祖先が宇宙移民のために行った航海のことです。千年前に、故郷の星クリプトン星を出発して、セレニティ星系にたどりついた移民船の航海ですわ。」

実際の宇宙ツアーは、超光速宇宙船で移民船のルートを逆にたどって、途中では、かつて移民を検討した可住惑星にも寄りながら、最終目的地、クリプトン星の旧セレニティ王国の遺跡を見物するものです。」

「九百年前に滅んだ旧王朝の都市の遺跡ですか?」  
「そうです。」

今は、山岳地帯の森の中で朽ち果てているそうですが、王城、修道院、城下町の街並みなどの遺跡をめぐるものです。」

「なるほど。なかなか面白そうですね。」

「我が王国のルートともいえる『聖地』をめぐるので、『巡礼』と呼ばれています。」  
「ウフフフ。・・・旅行者の方たちは、本当に、面白いことを考えるのですね。」

しかし、そのような和やかなパーティの中で、グリユーエルは強い違和感を覚える事態を発見した。

『なんとということでしょうか!』

王族の中でも一番仲睦まじいと評判だったフローラお姉さま御夫妻が、こんな冷めた仲になっているなんて……。

お二人がどんなに隠そうとしても、私には分かりますわ。

いや……お姉さま御夫妻だけではありませんわ。

昔は王族の全員が大公様を中心に心をひとつにして団結していたのに、今は、みな、気持ちがバラバラになっていますわ。

いったい、なにがあつたのでしょうか……。』

そう思ったグリューエルは、一瞬、驚きと困惑の表情を浮かべてしまった。

それまでは何を見聞きしても完璧な笑顔と作法どおりの振る舞いで、内心の動きを見せずにいたのだが……。

その時、父のアブラハム皇太子が声をかけてきた。

「グリューエル。

今夜は外の方が心地よいですよ。いっしょに夜の中庭の景色を楽しみませんか……。」

### 3 希望の航路（みち）

グリューエルと父のアブラハム皇太子の二人は、中庭を見渡す二階のバルコニーに

やってきた。

周りに誰もいないことを確かめた父は、グリユーエルを見て言った。

「どうやら、あなたは気がついたようですね。

みなの変わりように・・・。」

「はい。お父様。

そのわけを教えてくださいだいてもよろしいでしょうか。

私が留守をしている間に、王国に何か、あったのでしょうか。」

「どんなことに気がつきましたか？ 言って御覧なさい。」

「はい。まず、フローラ姉さま御夫妻には何があったのですか。

あれほど仲睦まじい御夫婦は他にはいないと信じておりましたのに・・・。」

「そうですね。それに気がつきましたか。

あなたももうすぐ17歳になるのでしたね。もう大人の王族としてその話を聞いても良いでしょう。そのわけを教えましょう。

それは、フローラも自分の子供が欲しくなったからですよ。

それまでは、あの子は、『王族の女は薔薇の泉から生まれた子供を育てるのが定め』と自分で自分に言い聞かせて、自分の気持ちを押しえつけていたのでしようね。

そして、あの子は、『薔薇の泉の定め』から自分が解放されたことを知りましたから

ね。

ところが、夫のフランク伯爵も、フローラの従兄弟（いとこ）に当たる王族。

これがどういう意味か分かりますね。」

「お二人は薔薇の泉から生まれた方、ということは、遺伝子上は実の兄妹（きょうだい）ということですね。」

グリユーエルは二人の苦悩の真実を悟り、低く凍り付いたような声で答えた。

「そうです。」

ですから、言いにくいことですが、フローラが自分の子供を産むためには、夫以外の方の子を産まねばなりません。

では、どうすればよいか、フローラとフランクは愛し合っているがゆえに悩んでいます。

まだ答えが出ていません・・・。」

「それでは、お姉さまの悩みは、私が『薔薇の泉』を壊してしまったことが原因なのですね。」

すべて、私の行いが原因なのですね、なんとということでしょう・・・。」

グリユーエルは、涙ぐんで顔を伏せてしまった。

「そうではありません。」

物事には光と影があるものです。

『薔薇の泉の定め』から解放されて、心から喜んでいる王族の女性も大勢います。それに、これはあくまで二人の問題です。

実際に、解決策はいくつもあるのですからね。

・  
・  
・

グリユーエル、あなたが気づいたことはそれだけですか？」

父は優しく問いかけた。

「あの、私が子供のころ、どれだけ世の中の真実を理解していたか、今は少し自信がないのですが……」

それでも申し上げますと、以前に王族のパーティーに出席したときと比べて、王族の団結と言うか、一体感と言うか、何か張り詰めたものが失われているように感じました。」

「そうですか。それに気がつきましたか。

もつとも、私は若いときから、パーティーで示された『王族の団結』は過剰な演技だと感じていたのですが……。フフフ。

それでも、私は、『王族は、非常時には大公様を中心に一致団結できる』と信じていました。王家や王族は、命がけで国民に責任を負うのですからね。

ですが、新しい立憲君主制の下では、政治の責任が王家から内閣に移ってしまいま

た。このような世の中では王族たる自分たちが命を懸けて担うものがないと感じられるかもしれないね。特に王位継承順位の低い王族の中に、そう思うものが増えていくようです。

そういう影響でしようかね、

王族の団結といっても、もともと『建前』とか『演技』に過ぎなかったのですが、それすら、今までより熱意が冷めているように感じられるのは……。」

「それも、やっぱり私の主張した政治改革の結果でしようか……。」  
グリュールは、また沈んだ表情をした。

「案ずるには及びません。」

あなた一人が、何事も自分の行いの結果だなんて、すべてを背負い込むことはありません。」

「そうでしようか。」

「そうです。程度の差こそあれ、王族は自分の人生に退屈して倦み疲れているのです。『こんな、ただ待つだけという、退屈な人生が続くなんて耐えられない』とね。」

「皆さん、そうなのでしようか……。」

「たとえば、あなたがヨセフ（王子）と戦ったときのことを思い出してください。」

あの時まで、ヨセフは学問や芸術などの才能にあふれた人物として人気者でした。



そのヨセフですら、それまでの王族としての退屈な人生に耐えられなくなっていたのです。そのため、貴方に勝って大公の位に就くとまで言って最高司令官として出撃し、あなたと戦ったのでしたね。

ヨセフは、あなたにもそんなことを言っていないませんでしたか。」

(第三十三章 黄金の幽霊船クイーン・セレンディピティの攻防戦 参照)

「確かに、そうおっしゃっていました。」

「古代であれ、宇宙時代であれ、王制を敷く以上、王族にとつて、これは避けられない問題なのです。」

「そうですね．．．．。」

でも、なにか、少しでも希望のある航路（みち）が示されると良いですね。

それが何か、まだ分かりませんが．．．．。」

「そうなのです。私がグリユーエルにお願いしたいのは、そのことなのです。」

貴方の行動で、そのような希望のある航路（みち）があることを王族の皆に指し示してはもらえないでしょうか。」

「しかし、まだ、私には、何を示せばよいか答えが思い浮かびませんが．．．．。」

「答えは、急がなくて良いのです。」

私たち王族には、退屈するほど、たつぷりと時間はありますから。ハハハ．．．．。」

「フフフ．．．」

グリユーエルもつられて、微笑んだ。

#### 4 大航海巡礼ツアー

「それで、帰りの航海では、その『大航海巡礼ツアー』の星々に寄港して帰りたいとおっしゃるんですね。」

加藤茉莉香船長が、グリユーエルの話に答えて言った。

「そうです。」

セレニティ王国の歴史を学ぶ良い機会になると思いまして．．．。

そのため、巡礼ツアーのコースと同じように、移民船がセレニティにたどり着く前に移住の可能性を検討した、クツク星、マーシャル星、ソロモン星に立ち寄って、出発地である旧宗主星クリプトン星にあるセレニティ王国の遺跡を訪ねたいのです。」

「はあく、弁天丸のほうは、お望みのおりのコース変更については何の問題もないと思います。」

ですが、王女様の御訪問となりますと、外交上の問題はないのか、クリプトン星連邦政府、銀河帝国とセレニティ王国にも話を通して頂かないと．．．。」

茉莉香は、グリユーエルに対して敬語で答えた。これは、帰路の航路変更はオフィ

シャルの問題だという意思表示だった。

「そこは、これから調整しますわ。」

しかし、グリユーエルが巡礼コースを旅したいという希望は、実現しなかった。

グリユーエルは、セレニティ政府の外交ルートを通じて日程調整を依頼したが、その結果を伝えるためにわざわざコルベル首相がグリユーエルを尋ねてきて、こう言った。

「私どもも、外交ルートを通じて、要請いたしました。」

今回の殿下の御訪問は、両国の親善を深めるためのもので、それ以外の意図はないこと、

旧王朝の遺跡御訪問についても歴史学に御造詣の深い殿下の勉学の御参考にするためであって他意はないことを、何度も言葉を尽くして、御説明申し上げたのですが……。

クリプトン連邦政府は、殿下の御訪問がいわゆる『聖地回復運動』に無関係なはずがないと譲らないわけでございます……。

日程を決めるために交渉を続ける時間的余裕も無いため、真に残念ながら、今回は御訪問を見送っていただくしかないとお詫びに参った次第でございます……。

「わかりました。皆様の御尽力、感謝します。」

帝都へは寄り道せずに戻ります。」

グリューエルは答えた。

「恐れながら、殿下は、最近、国民に流行しております『聖地巡礼』について御興味をお持ちでしょうか。」

『遠まわしにお聞きになっていますが、この方は、聖地巡礼ではなく、聖地復興運動に関する私の本心を探りたいのですね。』

だから、忙しい首相の身でありながら、自ら私に会いにこられたのですね……。

ミラボー国防大臣以上に、この方は油断のならない政治家ですわ。』

そう感じたグリューエルは、いかなる意見も読みとることができない表情で答えた。

「今の立憲君主制の元では、王族は政治的発言を控えねばなりません。

もちろん、そのように受け取られる言動も控えたほうが良いでしょう。

このお話もそういうカテゴリーの問題なのでしょうね。……」

「はは。恐れ入ります。」

コルベール首相は、そう言って引き下がった。

グリューエルは、その結果を加藤茉莉香船長に連絡した。それを聞いたキアキが、通信に割り込んできた。

「きいたわよ。グリユーエル。」

クリプトン星の連邦政府があなたの『聖地』訪問に強い『懸念』を示したそうね。いくらなんでも、千年前の話を今頃『領土問題』として気にする方がどうかしているわ。単なる遺跡の観光として平然としてればよいのにねえ。」

チアキが言った。

「そうですね。」

私は、単なる観光だと思っていたのですが、外交上、とてもセンシティブな問題でした。

自分の至らなさが恥ずかしいです。

それで、この件についての銀河帝国からのレポート、よろしくお願いします。」

「了解よ、もう頼んであるわ。」

まあ、一般人なら何の問題もないんだらうけど、グリユーエルは、もはや『ただの女の子』ではないというわけね。」

チアキが訳知り顔で言った。

「そうですね。私も、このたびの件で思い知らされました。」

これからは、自分の行動が人々にどのような受け止められるか、もつと注意します。」

グリユーエルが、肩を落として言った。

「じゃあ、チアキちゃんも、アレをやめようよ。外交問題になる前に……」

二人のやり取りを聞いていた茉莉香が言った。

「イヤよ。アレとコレとは、関係ないわよ。」

「ええ!?! 何のことですか……?」

グリユーエルが心配そうにたずねた。

「いやあ、チアキちゃんがお忍びでセレニティの街を何度も歩き回っているのよ。」

お供は、私だけでね。

一緒にウインドーショップピングして、気に入ったものがあるとそこでお買い物したり、カフェでお茶飲んだり……それだけなんだけどね。」

茉莉香が微笑んで言った。

「うふふふ……それなら大丈夫ですわ。」

グリユーエルが微笑んだ。

「ええ!?! どうしてなの?」

茉莉香が言った。

「それは、その、いわゆる……『バレバレ』というヤツですわ。」

警備のほうは、セレニティ政府と銀河帝国が打ち合わせて、怠りなく勤めているはず

ですわ。チアキ様に気づかれないうちに……。」

グリユーエルが微笑みながら、答えた。

「なんだあ。それで、安心したよ。ねえ、チアキちゃん。」

「ウウウ……イヤよ、そんなのイヤ！ だって、スリルがないじゃないの。」

私、もう行かないわよ。」

チアキは、顔を赤くして叫んだ。

「また……、そんな、わがまま言つて……。」

「コレは、わがままじゃない！」

「ナハハハ……。」

その晩、セレニティ王宮の自室で、グリユーエルは、「聖地巡礼ツアーと聖地回復運動」に関するレポートを読み出した。レポートは、当事者であるセレニティ政府に依頼することを避け、第三国である銀河帝国からチアキに依頼して取り寄せたものだ。

それには次のようなことが書いてあった。

『当初、クリプトン星の連邦政府は、巡礼ツアーをただの観光客として歓迎していた。

しかし、観光業者が、旧王宮や教会・修道院跡の一部を復元・利用して、ホテルなどの観光客用の施設を作りたいと言いつ出した事から、問題が始まった。

連邦政府は、旧王朝の遺跡に手を触れることには慎重だったが、経済界に押されて、

開発に前向きになった。

これに対して、クリプトン星の宗教界、とりわけ旧セレニティ王国では国教の地位にあつた聖十字教会が反発した。彼らは、聖十字教の教会や修道院は跡地といえども神聖な場所であつて、これを復元するならともかく、ホテルや観光施設に利用するなど論外だと主張した。

遺跡の復元は、観光業者も反対ではなかつた。観光名所となるからである。しかし、それを完全に復元するための莫大な費用は、宗教界も観光業者も負担できなかつた。続いて歴史学者が貴重な遺跡の現況保存を訴えた。観光客もありのままに保存された遺跡を見に来るのだと主張した。

こうなると、連邦政府はどっちつかずの模様眺めを決め込んだ。多額の復元費用の負担を政府に押し付けられることも警戒していた。

こうして、「有効利用」か「復元」か「現況保存」か、旧セレニティ王国の遺跡をめぐる議論は、果てしなく続く不毛の論争に陥ると思われた。

しかし、ある人物が、この論争に超新星級の爆弾を投じた。

その人は、新セレニティ王朝、つまりセレニティ星貴族出身の保守政治家、ベルナル卿である。彼は清廉潔白な政治家として尊敬を集めつつ、惜しまれながら政界を引退し、晩年は歴史研究や執筆活動に専念していた。



そして、彼は、その知見を元に、クリプトン星における「セレニティ王国の復興」を提唱した。彼の主張はこうである。

『クリプトン星の旧セレニティ王朝は、周辺国の侵略により滅んだ。あの星では、旧王朝の血統もすでに途絶えている。』

しかし、旧王朝は降伏したわけではない。周辺国が併合を宣言して、そのまま千年経過しただけに過ぎない。これは旧王朝の側から見れば戦争は終了していないことを意味する。

そして、セレニティ星系を治める新王朝の王、セレニティ大公は、旧王朝の王族の子孫である。

したがってセレニティ大公は、旧王朝の正当な後継者として、その権利を行使しその王としての責任を果たすべきである。

祖先の地を侵略者から奪い返そう。』

この主張に対して、セレニティ星系では共感する人々は少なかった。復古主義もここまでくると『妄想』と思われるからだ。千年前の失われた王国は、「旧王朝」どころか歴史上の「古王朝」であり、人々にとって、はるか遠い存在だった。

しかし、クリプトン星の人々の反応は違った。静かな、それゆえに本気の警戒感が生まれた。

『ついに恐れていた亡霊がよみがえった』と。

そもそも、宇宙の大航海時代になって、クリプトン星の人々は、セレニティ星系の新王朝の存在とその繁栄ぶりを知って大きな衝撃を受けた。

滅んだ小王国の王族による宇宙移民は失敗して消滅したと思われるからだ。

もちろん彼らは、「宗主国」として宇宙移民のために投資をした関係でもないのに、セレニティの繁栄から配当を受け取れるはずもなかった。

むしろ、「旧王朝の滅亡は革命と言う実力行使に過ぎない。だから逆に、新王朝が、その軍事力を背景にして、旧王朝の承継者として、その復活要求を突きつけてくれば、厄介ことになる」という警戒心が生まれた。

その背景には間違いなくセレニティ星系に対する「劣等感」、あるいは自らの体制に対する「自信の無さ」があった。

クリプトン星の人々は、自分たちはいわゆる宗主星にあたる歴史ある文明国であり、しかも王制よりも進んだ民主共和制を採用した国家として、セレニティ星系に対して、他の植民星と同様の「優位」に立てる関係にあるものと考えていた。

しかし、セレニティ王国の繁栄した姿は、その期待を完全にぶち壊した。

その後の千年においても、セレニティ星系の発展は目覚しく、現在では、人口、経済力、軍事力などすべてにおいて、クリプトン星の十倍以上の規模を持つ星間国家となっ

ている。

他方、セレニティの新王朝は、当初は、宇宙移民出発の経緯やその後の旧王朝の滅亡の経緯から故郷のクリプトン星の政府を快く思わず、その存在を無視する方針を採ったと思われる。その方針は、その後の年月を経て、クリプトン星への不快感が薄れていても継続されていった。

その結果、両国の外交関係は疎遠なままで、何百年も経過した。双方が銀河帝国の自治国家となった後も、両国の関係には変化が無かった。

そして、銀河テレビの「グリユーエルが次期国王に内定」という「スクープ報道」（「第三十四章 王道」参照）以来、クリプトン星の連邦政府は、グリユーエルの動向に注目し、神経を尖らせていた。

銀河系の政治の世界では、グリユーエル王女は、次期国王と噂されるほどの実力と実績を兼ね備え、国民からの信頼も厚いと評価されていた。

しかも、グリユーエルは、すでに養女として銀河聖王家の王族となっている。

このため、クリプトン星の連邦政府は、グリユーエルの行動は自国の命運を左右するほどの影響力を持つと考えていた。

そして、突然に、グリユーエルの『聖地』訪問の希望を聞いて、クリプトン星の連邦政府は驚愕した。

もちろん、連邦政府は、グリューエルの訪問により同星の宗教界やセレニティ星系の極右政治家の主張する『聖地復興運動』に決定的な弾みがつくと、強く警戒した。

そして彼女の訪問希望は、それらの影響を承知の上で表明されたものと考えた。

・・・  
』

「なるほど、以前から、クリプトン星の連邦政府は、セレニティや私の行動に対して警戒していたのですね。

他方、私も含め、セレニティの側は、彼らがどう思っているか、まったく無関心だったのですね。

それならば、ここはいったん引きましょう。これ以上、彼らを刺激して事態が思わぬ方向へ転ばないように・・・。

それに、今のセレニティの立憲君主制の下では、王族の行動が政治へ影響を与える事態は控えねばなりませんからね・・・フフフ。

私は、セレニティとクリプトン星との千年にわたる外交関係を、もう少し、しっかりと学ぶといたしましたでしょうか・・・。」

グリューエルは、そうつぶやくと、レポートを閉じた。

その日、グリューエルを乗せた艦隊は、帝都にむけてセレニティ星系を出発した。

もちろん、グリユーエルの王位継承順位について何の変更も無かった。

## 5 「民主政治」のジレンマ

だが、グリユーエルがクリプトン星訪問の希望を表明し、クリプトン星の政府がこれに応じなかったことは、確実に波紋を広げていった。

グリユーエルが帰国した後のセレニティ政府の閣議では、政治家たちの議論が沸騰していた。すでに、閣議の出席者には世襲貴族はおらず、選挙で選ばれた政治家たちばかりであった。

「姫（グリユーエル）は、いったい何を考えるのですか？」

今回の件は、『姫のケアレス・ミス』つまり、姫が、御自身の影響力を過小評価して、クリプトン星の反発を読み誤っただけなのでしようか？

それとも、本当に、姫は、聖地復興運動を支持されているのですか？

首相は、この件で姫にお会いになったのでしょうか。いかがでしたか？」

国防大臣ミラボーが、コルベール首相に問いかけた。

「姫は今回のご訪問断念を了解されたが、それ以上は何もおっしゃらなかった。

『王族は政治的発言を控えねばならない』と、おっしゃっていたが……。」

コルベール首相は、姫の本音までは聴けなかったという趣旨の回答をした。

「では、われわれはどうしますか。」  
「それが難しい。」

セレニティの民主政治は生まれたばかりだ。定着したといえるほどの実績はない。しかも、現在のセレニティ憲法は、統治権が王から議会すなわち民主勢力へ完全に移行したとは言いい切れない曖昧なところがある。

この曖昧な隙間を埋めるには、われわれの民主政治がさらに実績を積み上げていくしかない。

したがって、今は、王や王族と真つ向から対立する事態は避けねばならぬ。」

コルベール首相が言った

「その情勢分析は、まだまだ甘いところがありますぞ。」

われわれは、まだこの国を完全に掌握していません。特に、軍人たちは、われわれよりも、王・王族の動向に注目しておりますぞ。

私は、先日、軍を代表して、姫のお国入りの際にわが軍の軍艦を使って欲しいというお願いをするために姫にお会いしました。しかし、本当の狙いは、姫が即位すれば姫に敵対した軍人の粛清を行うのではないかと怯える軍首脳の動揺を治めるためでした。

その結果、姫は、軍が命令に忠実だったことを評価されておられるとわかり、軍首脳部は大いに安心しました。

その際に分かったのですが、軍首脳部はもう姫と対立する意思はありません。それどころか、次は姫の指揮の下で戦いたいとすら思っております。これまで、バルデン伯爵、次いで、ヨセフ王子の指揮で、姫と戦ってすべて敗北しましたからな。しかも、姫は、いまでは銀河帝国の王族。軍人たちは負ける戦はしないのです。

ですから、姫の命令とあらば、軍は、われわれに対するクーデタも躊躇（ちゆうちよ）しませんぞ。」

国防大臣ミラボアの『クーデタ』という言葉に、閣議の出席者は戦慄を覚え、沈黙した。

．．．

「皮肉なものですねえ。」

姫は、セレニティの民主政治を生み出したヒロインですぞ。

その姫が優れた指導者としての資質を備えるがゆえに、生まれたばかりの民主政治の最大の脅威となっているのですか．．．ハハハ。」

「教育大臣、笑いごとではありませんぞ。」

それでは、あなたの御意見を伺いたいものですな。」

首相が、ポアンカレ教育大臣をたしなめた。ポアンカレは、政治家になる前は、王立大学の経済学教授であった。

「私は、『神の見えざる手』によってセレニティを導いてもらえばよいと思います。」  
「はあく？ 何をおっしゃっているのですか？」

今、論じているのは、先生お得意の経済学の話ではなく、政治の話ですぞ。」

他の閣僚たちは、ポアンカレの意図が分からず困惑した。

「私の考えは、政治の意思決定においても、『完全な自由競争』によって、『最適な資源配分』を実現すると言う経済学のセオリーどおりにやればよいということです。

政府がどの政策が良いと一方的に判断して国を導くことが出来ると考えるのは、身の程知らずというものですな。」

「先生のお説は、政治家の識見やリーダーシップの価値を否定して、ニヒリズムに傾いているようにも聞こえますが……。」

それはさておき、先生は具体的にはどうすればいいとお考えですか。」

「われわれの役割は、まず、政治的意思決定における『完全な自由競争』を実現する条件を作り出すことです。具体的には、政策決定の根拠となる情報や、考えられる選択肢を公表して、国民に自由な議論を促すわけです。」

そして次の役割は、国民の議論の動向を観察することです。そこでは、『神の見えざる手』がわれわれの行方を指し示していることがわかるでしょう。

このような方法こそ、われわれの民主政治にふさわしい選択ではありませんか。



なお、念のために言うと、私はニヒリストではありませんぞ、リアリストですぞ。」「まあ、先生のおっしゃることを政治家の言葉に直すと、情報を小出しにして国民の反応を探るということでしょうか。手堅い方策ですな。」

コルベール首相が言った。

「それならば、政策の選択肢の一つとして、『宇宙総合開発計画（素案）』を公表させていただきたい。この前から、多数の辺境惑星を開拓するのは、費用がかかりすぎるから再検討が必要と棚上げになっているプランです」

国民に、わが国を今以上の経済大国とする、平和的な航路（みち）を示したいのです。」  
ローマン公共事業大臣が言った。

「それなら、大航海巡礼ツアーを行う旅行者者からの要望も、開発計画に入れたらどうでしょうか。」

つまり、大航海の移民船が移住の可能性を検討した、クツク星、マーシャル星、ソロモン星の三つの星で、地上の宇宙空港と、衛星軌道上の中継ステーションを新設する計画を入れたらよいと思います。」

ミラボー国防大臣が言った。

「それを入れると、クリプトン星を刺激するのではないか？」

軍事施設に転用されるのではないかと、警戒するでしょうか。」

ローマン大臣が疑問を述べた。

「いや。これは、われわれにとつての保険です。

もし姫が聖地復興運動を支持されると分かったなら、われわれもその準備をしていたと言えるものが必要ですから。

われわれも姫と正面から対決するのは避けるべきでしょう。」

ミラボー国防大臣が言った。・

「まあ、それもいいでしょう。

今はあくまでプランの段階ですから、すべての選択肢を並べることに意味がありません。」

ポアンカレ教育大臣が賛成した。

「それでいきましよう。

そのうち、姫の本音もわかるでしょう。」

コルベール首相が閣議をまとめた。

三日後、銀河テレビが、独自スクープ報道として、「クリプトン星の連邦政府が、グリュールエル姫の、セレニティ旧王朝の遺跡を訪問したいという希望を拒否した」と報じた。

## 第四十七章 千年の王国 その1

1 スクープの裏側（ミーサ夫婦の自宅・帝都クリスタルシティ）

「クラーク、また、面白いスクープね。」

ネタは、弁天丸から仕入れたの？」

マタニティ・ドレス姿のミーサが、『クリプトン星の連邦政府が、グリユーエル姫のセレニティ旧王朝遺跡訪問を拒否した』というスクープ報道について、夫の銀河テレビ社長、クラーク・ケントに聞いた。

ミーサは既に産休で弁天丸から降り、近頃、お腹も目立って大きくなってきたので、帝都の自宅で過ごしている。

「もちろん、それは違うね。」

弁天丸は口が堅くて、お客様の秘密厳守だつてことはミーサも承知しているだろう。

実は、セレニティ政府のkolべール首相から極秘情報を提供するので、スクープ報道してくれと頼まれたんだ。」

「なに、それ!? 首相自ら自国の外交機密を漏らすなんて!」

「首相は、重要な情報を国民に公開するためだと言っていたがね。」

『センチティブな情報』なので、政府から公開するわけにはいかないけれども、国民が知る必要があるそうだな。」

「そのためにマスコミを使うなんて、ずいぶん腹黒いタヌキ・オヤジね。」

何が本当の狙いのの？」

「首相の本音は、『聖地復興運動』に国民や王族がどういう反応をするか探りたいのだから。」

「ええ!? 『聖地復興運動』って、クリプトン星にセレニティ王国を再建しようというアレのこと。いくらなんでも、千年前に滅んだ王国を再建しようなんて、時代錯誤よね。」

「私もそう思うよ。」

しかし、王制を敷くセレニティ星系では、国の威信や今後の国政の方向を決める大問題になると考えているようだね。」

「ふくん。でも、モノの弾み(はずみ)って怖いからね。下手をすると大人のケンカ(戦争)になつたりして・・・フフフ。」

「さすがに、戦争は無いだろう・・・千年前の恨みといつても。」

「それにしても、この問題の発端がグリニューエル姫自身ですものね。」

あの賢い子が問題をどう収めるか、お手並み拝見かしら。」

「そうだね。」

ところで、お腹の子供の名前は どうするんだい？

私としては、女の子なんだから、クリスティアとか、チアキとか、銀河聖王家のお姫様と同じ名前でもいいと思っっているんだけどね・・・。」

二人は、女の子の名前を考えていた。この時代の帝都では、父母が出産前に胎児の性別を知るの、当然のことだった。

「なにを言っているのよ。マリカに決まっているでしょう。」

私が何のために結婚したと思っっているのよ。」

「ハハハ・・・そうでしたね。」

ミーサは、弁天丸の同僚だった加藤梨理香が茉莉香を生み、立派に育てたことに深く共感しており、自分も同じことがやってみたくなっって結婚したからだ。

## 2 セレニティ民主政府の迷走

「それで、例の報道に対する王族や国民の反応はどうだね。」

セレニティ民主政府の閣議において、予定の議事が終了した後、コルベール首相が話題を変えた。

「それが、意外と国民は冷静ですなえ。」

もちろん、『聖地回復運動』の提唱者・ベルナル卿は、マスコミのインタビュに答えて、烈火のごとく怒っておられましたかね。ハハハ……

『無礼千万であり、世が世なら軍事制裁も加えるべき』だと……」  
ポアンカレ教育大臣が答えた。

「彼は老いてますます頑固、というか過激になっているなあ……フフフ。

それで、王族の方は、どうなのかね？」

「特に御意見を述べられた方はおられません。

皆さん、国民の議論に任せる姿勢を守っておられます。グリューエル姫についても同じです。」

「そうか。では何事も無く終わりそうだなあ……。」

「ところが、同時に公表した『宇宙総合開発計画（素案）』の方は、御存知のように賛成派と反対派の間で激しい議論になっておりまして……。」

ローマン公共事業大臣が言った。

「予想通りじゃないか。

反対派は、健全財政派、増税反対派と環境原理主義派。

これに対して、賛成派は、積極財政派と開発賛成派だろう。」

コルベール首相が答えた。

「はあ、議論の大勢は、そうですが・・・。

でも、我々の予想よりも、国民の間に、星系外への拡大進出に好意的な意見が多かったのは意外でした。

『フロンティア（辺境）開発を進める銀河帝国に後れを取るな』とか・・・。」

「私に言わせると、そういう国民の意見は、ホンモノの覇気が足りない気がします。

『銀河帝国と同じ事をやっていけば、間違いはない』というのでは、『バスに乗り遅れるな』というビジネスマンの処世術と変わりませんなあ・・・。」

ポアンカレ教育大臣が言った。

「ハハハ・・・。先生は厳しいですなあ。」

ポアンカレ教育大臣は、前職が王立大学の経済学の教授であり、当時から著名人だった。このため、いまでも、首相を始め閣僚は彼のことを先生と呼んでいる。

「それで、例の巡礼コースに宇宙空港を整備するという話はどうかだね。」

「はあ、国民の反応は特に無く、当然のことと受け止めていると思います。

いままでの不便が解消されるのですから・・・。」

「ああ、それで思い出した。忘れるところだったが、クリプトン星の連邦政府や連邦議会の反応はどうかね。」

『宇宙総合開発計画』については、予想通り、批判的なトーンに終始しています。

『セレニティは、ついに領土的な野心をむき出しにした。』とか、

『セレニティは、第二の銀河帝国になるつもりなのか。』とか・・・ですね。」

「ええ？　我々セレニティ星系が更に発展して、『第二の銀河帝国』になることが、イケナイことなのかね。ハハハ・・・。」

コルベール首相が笑った。

「そうですね。自分たちが征服されると怯えているのでしようか。ハハハ・・・。」

「しかし、姫の御訪問を拒絶した連邦政府の判断には、あちらでも批判があるようです。」

「そうだろうな。連邦政府は、何を怯えていたのか。情けないヤツラだ・・・。」

セレニティ民主政府の閣僚たちですら、「旧宗主星」ともいうべき歴史的関係にあるクリプトン星に対して、否定的な感情をもっていた。それは良くて「軽視」、悪ければ「蔑視」だった。

「それで、公共事業大臣は、『宇宙総合開発計画』を進めるつもりなのかね。」

「はい。次期会計年度の予算が議会で承認されれば、まずは、宇宙航路の調査と、開発候補である可住惑星の環境改造に関する調査を進めたいと思っております。」

「これなら金額も小さく、最終判断を下すために計画全体の経費をより正確に見積るための調査だと説明できますから。」

ローマン公共事業大臣が言った。



「お役所は、何事も、まずは調査、調査ですなあ。

しかし、調査に時間を費やしていると、税金を浪費していると批判されますぞ。」  
ポアンカレ教育大臣が、また皮肉を言った。

「それならば、巡礼コースの三惑星の衛星軌道に中継ステーションを新設することからはじめたらどうでしょうか。

これは『宇宙総合開発計画』とは切り離して建設しても問題ないでしょう。

中継ステーションだけなら、早期に建設可能で国民も便利になるし、地上の宇宙空港と違って環境派からの抵抗も少ないでしょう。

なにより、これで我々が『聖地回復運動』に消極的と批判を浴びる恐れはなくなります。」

ミラボー国防大臣が言った。

「うゝむ。なるほど。．．．では、それでいこう。我々には、実績が必要だ。

いつまでも何もしないというのは、政府は無能だと批判されるからな。

もちろん、引き続き、国民世論の動向には注意しよう。」

そう言つて、コルベール首相は閣議を終えた。

コルベール首相らセレニティ民主政府のメンバーは世論の動向を踏まえて国政をリードしているつもりだった。

しかし、世論の批判を受ける事態を回避することを優先するあまり、確固たる信念も無いまま、『聖地回復運動』の支援とも受け取られる中継ステーション建設に踏み出してしまった。

### 3 グリユーエルの「博士論文」

「ねえ、グリユーエル。宇宙物理学って、本当に面白いねえ。」

茉莉香が、グリユーエルに言った。

今日の惑星開発学ゼミナールのテーマは、宇宙物理学だった。

ゼミが終わって、茉莉香、チアキ、グリユーエルの三人は並んで帝国女学院の校舎の廊下を歩いていった。

「そうですねえ。」

茉莉香さんは、宇宙物理学のどんなところに興味がおありですか？」

グリユーエルが、いつもの丁寧な言葉で茉莉香に聞いた。

「だって、さあ、母星の周りを回る惑星の並び方と、原子核の周りを回る電子の並び方が同じルールで出来ているなんて、驚きだよ。」

それも、「素数倍の間隔」つまり、惑星の公転軌道の場合、母星系の振動波長の素数倍の間隔で惑星の公転軌道が並ぶという、私でも分かる簡単なルールなんだよ。」

私、白鳳女学院（高等部）の数学の授業で『素数』ってものがあるって聞いたとき、そんなものには何の意味があるのかって思ったけど、宇宙の真理とつながっていたんだよね。

感動しちゃったよ〜〜。」

茉莉香が興奮して答えた。

「そうですね。本当に興味深いですね。」

グリユーエルは、微笑んで答えた。

「あ〜、茉莉香。」

『感動中』のところ悪いんだけど、その理解、間違っているところがあるわよ。」

チアキが言い出した。

「ええ!? 違うの〜。」

「そうよ。」

茉莉香。あなた、今、『原子核の周りを回る電子』って、言ったでしょ。

そこから間違いよ。

母星を回る惑星の軌道と違って、原子核の『ボーア・モデル』が真実の姿だと思っちゃダメって言われたでしょ。量子力学の世界では、電子の運動と位置は確率的にしか捉えられないわよ。

だから、電子の軌道じゃなくて、原子核のエネルギー準位という考え方があって、……」  
「チアキちゃん、しつこいよ。」

わたしは『だいたい』のことを言っているのよ。」

「だから、『だいたい』で済ませちゃ、ダメなのよ。茉莉香。」

「言われなくても、私、惑星の楕円軌道だってランダムにずれるってこと、ちゃんと知っているよ。」

弁天丸で超光速跳躍からタッチダウンしたときに、自分の船がタッチダウンした実際の位置とフライトプランの位置とのズレをチェックするだけじゃなく、近くの惑星の現在位置と海図の示す軌道とのズレもチェックするよ。」

「だから惑星の軌道は、『だいたい』そういうイメージだけど、原子の運動は……。」

「チアキちゃん、ひどいよ。」

さつき、『だいたい』で済ませちゃダメって私に言ったじゃないの。」

ねえ、グリユール。私の言ったこと間違っていないよね。」

「茉莉香、違うわよ。私の言うことが正しいわよ。ねえ、グリユール。」

「ウフフフ……。」

お二人の言うことはどちらも間違っていないわ。」

『だいたい』のところは……。」

グリューエルはそう言つて微笑んだ。

「あら、まあ、ヘーゲル先生の宇宙歴史学研究室の前まで来てしまいましたわ。

私、博士論文の草稿を先生に見ていただくので、ここで失礼いたしますわ。」

グリューエルは、二人に一礼してドアをノックすると研究室に入つていった。

その後、茉莉香とチアキは、大学のカフェテリアでお茶を飲んでいた。

「あくあ、やつと落ち着いて、大学生らしい勉強が出来るようになってきたね。」

チアキが言つた。

「そうねえ。」

それにしても、グリューエルつて何でも知つているんだね。

あれじゃあ、大学で勉強する必要なんて無いんじゃないかなあ・・・ナハハハ。」

茉莉香はジョークを言つたつもりだったが、チアキの返事は違つていた。

「そうよ。」

そもそも、グリューエルがなぜ帝国女学院へ進学したと思つているの?」

「ええ!! 勉強するためじゃないの?」

「違うわよ、忘れたの? 茉莉香の傍(そば)にいるためよ。」

「そういえば、そんなことを、昔、言つていたよね。」

でも、それつて、『一緒に勉強したい』つていう意味じゃないの?」

「違うわよ。」

ハツキリ言うのと、グリユーエルは、茉莉香の傍にいて、『茉莉香と遊びたい』からの大学の来たのよ。自分のための勉強なら、王族らしく家庭教師を呼ぶわよ。」

「ナハハハ……。そこまでハツキリ言わなくても……。」

茉莉香は苦笑いした。

「それより、茉莉香。さっきのグリユーエルの言葉を聞いた？」

「聞いたよ。『博士論文』ってどういうこと？」

「私たち、まだ家政学部の学生、それも一回生でしょう？」

「まあ、私たちの在籍する特別コースは何でもアリだから、博士号の取得も可能なのだけどねえ……。」

「そのせいか、このごろ、王宮でもグリユーエルの勉強は凄まじいのよねえ。」

「チアキは、ため息混じりにつぶやいた。」

「うくん、どうしてそんなに急いでいるのかなあ？」

「ええ!!? グリユーエルが『急いでいる』って言うの?」

茉莉香の言葉にチアキが驚いた。

「うん。チアキちゃんの話の話を聞くと、グリユーエルは、なんか、生き急ぐというか、シメキリに追われているというか……。そんな雰囲気だよねえ。」

「ふくん。そういう見方も出来るわね。でも、どうしてなんだろう。」  
「そうだね。どうしてなんだろう。」

二人は、グリューエルがいる大学の研究棟の方を見ながらそういった。

#### 4 千年の墓

「グリューエル。」

建国記念日の大切な御公務、大公陛下の英雄記念碑への参拝には、入院している私の代わりにあなたが同行してください。」

セレニティ王国のマリーナ大公妃は、超光速回線を通じて、銀河帝国の帝都にいるグリューエルにそう告げた。

「ええ!? 私、・・・ですか?」

代行のお役目でしたら、皇太子殿下はじめ、私より高位の王族の方が、大勢いらつしやいます。・・・」

「私は、あなたにお願いすると言っているのですよ・・・。」

大公妃の言葉には、有無を言わせない強い響きがあった。

「はい。・・・承知いたしました。」

このため、グリューエルは、急遽、セレニティ王国へ帰国した。

セレニティ王国の「建国記念日」は、セレニティ星系の中心となる惑星「青の姉」の大地に新王朝の始祖アレクサンダー一世が降りた日とされている。毎年、この日に大公夫妻が「英雄記念碑」に参拝し、祖先と功臣の偉業に感謝する。

セレニティ王国の英雄記念碑は、歴代セレニティ大公夫妻の墓である大きな緑の丘と、それを幾重にも取り巻く英雄の墓のある王立墓地に設けられている。もちろん、英雄とは、殉職した将兵や功臣たちである。

英雄の墓石は、まったく同じ形の墓石が並べられている。これは、王国のために命を捧げた貢献の価値は等しく同じだという、アレクサンダー一世の言葉に基づいている。

したがって、公式行事としての参拝は、両陛下のきわめて重要な公務とされてきた。グリューエルが知る限り、他の王族が代行、又は随行了したことはない。

「どうして、他の王族方を差し置いて、私が指名されたのでしょうか……」

グリューエルはしばらく考えて、つぶやいた。  
「……やっぱり、そうでしょうね。」

英雄の墓には、薔薇の泉の復活をめぐる私と戦って死んだ将兵も眠っているのだね。バルデン伯爵様も、両陛下のご意向に沿って、英雄の一人として、そこに眠っておられるのだね。

私が選ばれた意味も、そのあたりでしょうか……。」



グリユーエルは、そうやって自分を納得させた。

セレニテイ大公による英雄記念碑の参拝は、毎年の慣例どおり、厳かに行われた。

首相の司会にそつて、国歌演奏、英霊に対する大公陛下の献辞、献花、そして英霊の遺族による献花が続く。

グリユーエルの役割は、大公陛下の献花のお手伝いであつた。二人で大きな花輪を持つて、記念碑に捧げたのだ。

一連の儀式が終わつた後、グリユーエルは、大公陛下とともに、バルデン伯爵の墓を訪ね、献花し、祈りを捧げた。

「グリユーエル、あの子のために祈つてくれてありがとう。礼を言います。」

そして、大公は緑の丘のほうを眺め、言った。

「この地に来た機会に、あなたにぜひ会わせたい人々がいます。」

私についてきてください。」

「はい。」

二人は、歴代大公夫妻の墓所である緑の丘にやってきた。

もちろん、玄室など墓の本体施設は地下にある。

二人はエレベーターに乗つて降りていった。

地下に降りた二人は、内部の通路を通つて、新王朝千年の間に即位した歴代三十一組

の大公夫妻の棺を納める玄室にやってきた。

玄室の内は暗く、玄室全体は見渡せなかつた。

しかし、大公とグリューエルが歩くと、足元の床が少し明るくなってきた。

その明かりで玄室の奥を見ると、中央に細長い通路があり、その左右に歴代大公夫妻の等身大の石像が立ち、その傍にそれぞれの棺が置かれているようだった。

大公は、歴代大公夫妻の石像の前に立つとその名前を読み上げた。そして、グリューエルは一人ひとりに礼をしつつ、通路を進んでいった。

そして、二人は、通路の行き止まり、つまり玄室の最も奥の空間にたどり着いた。

そこには複数の女性の石像に囲まれる男性の石像があつた。その姿はまるで天女に囲まれる神のようであつた。

また、奥の壁には王と王妃が向かい合う姿でその横顔が彫られていた。

その前まで来ると、今までと違って、大公は沈黙した。

「・・・」

「これは・・・どなたですか？」

たまたらず、グリューエルは、大公に尋ねた。

玄室の奥には、始祖アレクサンダー一世とその妃の大きな石像があるとばかり思っていたからだ。

「奥の壁に彫られたレリーフは、旧王朝のアレクサンダー十三世陛下とその妃（きさき）エリザベス陛下です。」

手前の男性像は、もちろん我らが始祖アレクサンダー一世陛下であり、その周りを囲む天女のような女性たちは、王妃陛下と薔薇の泉の花嫁たちです。・・・」

大公は、静かに告げた。しかし、それ以上何も言わなかった。

『セレニティ王室が、公式の王統譜では存在を認められていない薔薇の泉の花嫁（人工子宮にセットする卵子の提供者）を秘かに敬（うやま）い、祭っていたことは、驚きです。でも、大公様は、なぜ、私を帝都から呼び寄せてこの玄室を見せたのでしょうか・・・』  
グリユーエルはそう考えながら、石像に深い祈りを捧げた。

5 グリユーエルの論文発表（帝都・宇宙歴史学会）

「ねえねえ、学会の論文発表というから、もっと地味なイベントかと思って、気楽な気持ちで来たんだけど・・・。」

こんな大きなホールが満員。こんなに大勢の人が詰め掛けてくるなんて・・・。  
なんか、大変なことになっているわね。」

茉莉香がチアキに小声で言った。

「そうね。おまけに、マスコミがこんなに大勢、取材に来るなんて・・・。」

「それはそうと、チアキちゃん。そろそろ壇上の貴賓席に移ったほうが良いんじゃないの?」

「イヤよ、あんなところ。」

私が見世物になるだけじゃないの。」

今日は、茉莉香とチアキは、帝都クリスタルスターで開催される王立宇宙歴史学会にやつてきた。グリューエルから、学会で博士論文を発表するからぜひ来て欲しいといわれたためだ。

もちろん、壇上の貴賓席にはグリューエルの分の他に、もうひとつ席があった。

しかし、恥ずかしがりやのチアキにとって、銀河帝国の第二王女として、貴賓席に座って出席者の注目を集めるのは御免だった。

学会は議事を次々終え、最後の記念講演としてグリューエルの論文発表が行われる。

司会の紹介に続いて、グリューエルが拍手を浴びながら、登壇した。

「本日は、私に、歴史と伝統ある宇宙歴史学会における発表の機会を与えていただいたことに、深く感謝いたします。・・・」

グリューエルは壇上で簡単な謝辞を述べたあと、博士論文の概要について、発表を始めた。

「この論文は、これまで行われた諸人類のさまざまな宇宙開拓事業を分析し、今後の宇宙

開発のあり方について考察したもので、『惑星開発学』の分野において博士号を頂いたものです。

しかし、審査の際に、宇宙開拓事業の歴史的考察を踏まえた今後の宇宙開拓の方向に關する提言について評価を頂きました。

このため、本日、発表の機会を頂くことになりました。

従いまして、本日は、この宇宙歴史学会の趣旨に沿って、論文の歴史的な考察と今後の提言に關する部分を中心に、発表したいと存じます。」

最初に、グリューエルは、論文発表のねらいを説明した。

グリューエルは、ひと呼吸おいて、さらに話しつづけた。

「人は生まれ故郷を愛し、住みなれ土地に未永く暮らしたいと願うものです。これは宇宙時代の今も変わらないと思います。

にもかかわらず、その土地を離れ、未知の惑星に移り住むという大きなリスクのある行動をするのは、それ相応の事情があるからです。

その事情とは、資源の枯渇や貴重資源の獲得など経済的な動機や未知の世界への冒険など知的好奇心もありますが、宇宙時代においても『政治的迫害』から逃れるためという場合もあります。

そして、このような宇宙移民、特に政治的迫害を逃れるための移住では、移住者が開

発のために利用できた資源は極めて少ないものでした。当然、移住先の惑星開拓は過酷な状況の中で行われました。

わが故郷、セレニティ星における宇宙移民を例にとつて、その経過を話しましょう。

・  
・  
・

グリユーエルは、祖国の移民船クイーンセレンディピティが旅立つ経過を簡単に話し始めた。それは、薔薇の泉の起源とも重なるセレニティ旧王朝の激動の歴史だった。

(第四十一章 薔薇の泉 参照。)

「え〜！ 『阿呆船』なんて、ヒドイ言葉があるんだあ。

あの『黄金の幽霊船』の旅立ちの裏に、そんなドロドロした出来事があったの〜！

あの船は金色に輝くすぐく立派な船だから、さぞかし、みんなから祝福されて旅立ったのかと思っていたよ〜。」

セレニティ星系への宇宙移民の裏事情を知つて、茉莉香は驚いた。

「このように政治的迫害による宇宙移民は、苦難の連続となることが多いのですが、悪いことばかりではありませんでした。

その過程では人々は助け合い励ましあつて、困難を乗り越えていきます。もう後戻り（帰国のための宇宙航海）は出来ず、自分たちで助け合う以外に選択の余地が無かつたからです。

宇宙時代の王政復古も、このような困難な事態に対処できるリーダーが求められたことから生まれたものといわれます。個々の利害損得を超えた公正無私の判断が出来るリーダーは、王政だからこそ世代を超えて次々に生まれるものだとも信じています。

わが故郷、セレニティ星系が七つの可住惑星をほぼ同時に開拓し、今日まで団結を保って一体の国家として成立した理由もそこにあります。七つの星に王族の兄弟姉妹が別れ住んでそれぞれの星のリーダーとして、ともに助け合い尊敬しあつてきたからこそ、国としての一体性を保ちつつ、目覚ましい経済発展を遂げることが出来たと信じます。」

「なるほどねえ。宇宙時代に王政がなぜ復活したかつて、教科書にも載っている話だけ、改めて聞くとすごいことなんだねえ。」

茉莉香は感心して、つぶやいた。

「なお、立憲君主制においても、同じように公正無私のリーダーシップが実現できると私は信じます。」

なぜなら、憲法に、君主である王に奏上（説明）するという手続きが定められていることには、大きな意味があるからです。

たとえば、現在のセレニティの憲法では、王には国政の実権がないのですが、首相が王に国政の話を奏上することにより国家の意思決定手続きが完了するという仕組みに

なっています。

私はこれでも十分に意味があると私は考えます。

それは、国政の実権を握ったリーダーが王に対する奏上を行うに当たって、彼に自己抑制を促し、公平無私の正しいリーダーとなることを促すからです。」

「これは、今のセレニティの政治状況を踏まえての分析でしょうねえ。

少し皮肉が効いているけれどもね……。」

チアキがつぶやいた。

「他方、政治的迫害が無いケース、たとえば経済的な理由が中心となった宇宙移民においては、開拓が成功し植民星が豊かになるなど経済的な事情が変化することにより、人々の心も変化していきます。」

その典型例が、植民星の独立問題です。

この問題については、これまで宇宙歴史学会で多くの議論が交わされてきました。学問的な分野において、私がそれに付け加える知見はほとんどないでしょう。

しかし、私は、多くの植民星の歴史を学んでいくうちに、『宗主星も、植民星も、同じ文明、同じ歴史を共有している。』という意識をもつと強く持つべきではないかという思いを抱きました。

植民星としても宗主星の文明に感謝と尊敬を忘れてはなりません。



他方、宗主星としても植民星の発展に祝福と尊敬の念を持つべきです。

いま、改めてそのことを訴えたいと思います。」

「なるほど。言われて見れば、もつともだよな。」

相互に尊敬しあうかあ。海明星（うみのあけぼし）の場合でもそれが足りないから独立戦争になったのかなあ。

それにしても、グリユーエルって、すごいんだなあ。」

茉莉香は、素直に感心していた。

「これも、セレニティ星系とクリプトン星の現状を踏まえたコメントね。

・・・なるほど、これがグリユーエルの狙いなね・・・。

これを聞いて、クリプトン星のような民主共和制の政治家たちはどういう反応するかしら。」

チアキは、王族の一人として、グリユーエルが民衆をリードする手腕に興味を持った。

「さて、発表の時間も限られておりますので、もうひとつ、宇宙植民事業の歴史を踏まえながら、今後のあり方について、思うところを述べたいと思います。

これまでの宇宙植民のための航海は、本当に苦しいものでした。

超高速跳躍航法が開発される以前は、何世代にも及ぶ長期の宇宙旅行を行う必要がありました。そのために、セレニティでも全長23キロにも及ぶ巨大な移民船が建造され

ました。

また、可住惑星を探す事前調査も十分な正確さが無く、実際に行ってみないと移住可能かどうか確定的な判断はできない有様でした。再度の移住という悲劇すらありました。

また、超光速宇宙船はその運航コストも高く、輸送力には経済的限界があるとされてきました。

このような宇宙航海上の制約から、これまでも、現在でも、宇宙移民においては出来るだけ出発地から近い星に移住するのが常識とされてきました。

実際、諸人類は、各々の宗主星から少しずつその版図を広げてきました。宇宙移民の歴史は、宗主星周辺星域の開発の歴史といっても過言ではありません。

しかし、これからの宇宙移民においては、新しい科学技術の発展を踏まえ、この常識は、抜本的に見直されるべきだと考えます。

具体的には、時空トンネル航法が今後、実用化されることを考慮すべきです。

時空トンネルは、御承知のように低コストで大量の物資を運べる、超光速輸送システムです。そして銀河帝国はこれを銀河全体に張り巡らせる『ミルキーウェイ計画』を進めています。もちろん、この計画は民生利用も想定しています。ですから、今後の宇宙開発においても、大いにその利用を前提とすべきです。

では、時空トンネルの活用を前提にして、私たち諸人類は、どのようなフロンティアを目指すべきでしょうか？

今日の常識では、宇宙開発の目的地は、旧宗主星の周辺宙域だけでなく、銀河系外延部の辺境星域も対象とすべきでしょう。これは、みなさんご承知のとおりです。

しかし、本当にそれだけででしょうか？」

このとき、グリユーエルは合図して、演壇の背後のスクリーンに巨大な銀河系の絵図を映し出させた。それを見ると、中心に紡錘状星雲を抱えた渦巻き銀河系の絵図上に、銀河帝国はじめ主要国の母星の位置が示されている。

「おお〜」

学会の聴衆から声が上がった。彼らにはこれからグリユーエルが言おうとしていることが分かったのだ。

同時にマスコミのカメラがグリユーエルの演壇に集中した。

「もう、私の申し上げたいことがお分かりの方もおられると思います。

ご覧のように、銀河系には膨大な未開発の宙域があります。

すなわち、紡錘状星雲の帝都とは反対側の宇宙は、資源豊富な核恒星系にありながら、各々の母星からあまりにも距離が遠いという理由で未開発のままになっています。

そのため、この宇宙空間は、「裏宇宙」とすら呼ばれております。

これからは、この裏宇宙とよばれるこの宇宙空間にもっと関心を持つべきではないでしょうか。

・  
・  
・

以上で、本日の発表を終わります。」

グリューエル公演が終わった後も、会場は興奮が収まらず、ざわついていた。

銀河帝国軍が管理する時空トンネルの民生利用を、銀河聖王家の王族でもあるグリューエル姫が推奨した意義は大きい。もちろん姫の個人的意見にとどまらないものと聴衆は受け取っている。

「よし。トップニュースはこれで決まり！」

そう叫んでマスコミ各社は会場を飛び出していった。

「なるほどねえ。」

私たちがサンタマリア星に行った経験が、この論文のネタになったのかなあ。」

茉莉香はつぶやいた。

「ウフフ・・・打ち合わせどおりね。」

これをきつかけに、やがて姉上の遷都構想が浮上していくのね・・・。」

チアキは、微笑んでいた。

（宇宙海賊キャプテン茉莉香―銀河帝国編・エピローグ―「銀河聖王家の伝説」及び

## 第三十六章 名も無い星（参照）

## 6 アンドロメダ銀河航路調査隊の派遣

今日、加藤茉莉香は、銀河テレビのニュース放送番組に、帝国軍大佐の制服を着て、ゲストとして出演した。

「加藤茉莉香隊長、本日発表された、銀河帝国の『アンドロメダ銀河航路調査隊』の派遣について、お話しください。」

銀河テレビの男性ニュースキャスター、ジャクソン・スミスが、航路調査隊の隊長に任命された帝国宇宙軍大佐兼弁天丸船長・加藤茉莉香に聞いた。

「はい。調査の目的は、アンドロメダ銀河までの航路予定帯上にある星々及び高重力源の近くを実際に飛んでみて、それらの位置、質量、軌道などを調べることです。」

この調査結果を元に、アンドロメダ航路の海図を作成します。

宇宙航海は『安全第一』ですから、まずは海図の作成からはじめます。

今回の調査は第一回目ですから、全航路の半分、約100万光年の宇宙（うみ）を実際に飛んで見る予定です。」

茉莉香は、少し緊張した表情で、模範解答どおりのコメントを言った。

今日の茉莉香は、とても張り切っていた。先日のグリューエルの学会発表を見て、自

分も『大人の女性』として、あのような堂々とした発表をしようと思っただからだ。

だから準備も念入りに行った。模範解答の内容を隅々まで勉強するだけじゃなく、軍の制服も新調し、銀河テレビの社長に頼んでテレビ出演時のメイクにも最高のスタッフをつけてもらった。

その成果もあって、テレビ画像は、いつもどおりの華やかなオーラに包まれながらも、凛としたオトナの雰囲気醸し出す茉莉香の姿をアップで映し出していた。

予定通りの順調な滑り出しだった。

しかし、茉莉香が最初の質問に答えている間に、ニュースキャスター、ジャクソン・ミスは、自分がテレビカメラの映像から外れていることを確認しつつ、スタジオの隅に立って収録を監督していた銀河テレビ社長クラーク・ケントの方を見た。

二人の目が合うと、社長は、そつと指を三本、立てた。

『指が三本か……。フッフ、面白いなあ。キャラを壊して三枚目になれという指示だな……。』

ミス・キャスターは、黙ってうなずいた。

銀河テレビ社長クラーク・ケントは、ニュース報道の分野では「視聴率王」としてカリスマ的な人望があり、スタッフは彼の指示に喜んで従っていた。

「なるほど、安全第一ですかあ。」

でも、正直言って、茉莉香さん、今回の調査航海は怖くないですか？

だって、海図を作るための航海は、当然、どこに危険が隠れているか分からない、誰も行ったことのない宇宙（うみ）を行くわけでしょう。」

スミス・アナウンサーは、加藤茉莉香調査隊長を『茉莉香さん』と名前で呼ぶなど親密な口調で、予定されたシナリオから外れて、アドリブの質問を茉莉香にぶつけてきた。「怖い!？」

いいえ。むしろ、私は、早く行ってみたい、どんな宇宙があるのか早く見たいって、ワクワクした気持ちでいっぱいです。

それに誰かが最初に危険を覚悟して航海しないと安全な海図は出来ないわけですから。

その点、船団のメンバーは、ベテランの船乗りばかりですから、心強いです。」もちろん、アドリブに強い茉莉香は、さりと答えを返した。

そして、そう答える加藤茉莉香の表情が変わった。それは、見つめる人の心を明るくする、いつもの茉莉香の笑顔だった。

「その笑顔を見ると、茉莉香さんは、本当に宇宙の海を飛ぶのが大好きなんですね。宇宙の海を飛ぶって、そんなに気持ちが良いですか？

実は、私も学生時代は『部活』が飛行部だったんですよ。」

飛行部は、バード・フライングをやりませう。重力軽減装置をつけて、鳥のように翼で飛ばたいで大気圏の空を飛ぶって、ほんとに気持ちいいですよ。」

「そうなんですかあ。その気持ち分かります。」

私も、高校の部活は宇宙ヨット部だったんですよ。

衛星軌道から降下して、風を切って大気圏を飛ぶのは、本当に気持ちいいですよ。」

スミス・キャスターに話を合わせて、茉莉香は知らず知らずに脱線していった。

「そうなんですよ。」

だから、バード・フライングの編隊飛行をするときは、みんなで飛行部の歌を歌いながら飛ぶんですよ。無線通信でお互いの声が届きますからね。

盛り上がりましたねえ。」

「ええ!? スミスさんのところにも、部活の歌があるんですかあ……。」

このとき、テレビスタジオのディレクターが、両手でTの字を作りながら、ケント社長の色を伺った。「T」は、タイム、すなわち放送時間が迫っているというサインだった。

それに対して、彼は右手の指と左手の指で二つの丸を作って並べた。

『マルがふたつで、∞（無限大）のマークか。』



二人がノリノリになってきて、話が面白くなりそうだから時間延長しろという指示だな。

この番組は、お堅いニュース番組なのに……。さすが、社長。やるなあ……。』  
 デイレクターはニヤリと笑って、テレビの編成スタッフにニュース番組の時間延長を指示した。

「そうですよ。歌ってみましょうかあ……。」

白雲流るる 大空へ 翼広げて 風になる

見下ろす大地 どこまでも 濁世の巷(ちまた) 続くなり

果てなき空を 往く先に われらの世界が拓けゆく

我ら鳥人 帝大飛行部 まだ見ぬ国々へ 今、往かん♪」

「うわく……。ステキですねえ。分かります、その気持ち。」

(パチ、パチ、パチ……。と茉莉香は拍手した。)

鳥のように空を飛ぶときの、そのワクワクする気持ち、良くわかりますよ。」

茉莉香は、そう言って、満面の笑顔で拍手した。

その時、テレビ画面には、十九歳になったばかりの若さと、華やかな美しさに溢れた茉莉香の笑顔が映し出された。

「ありがとうございます。」

さあ、今度は、茉莉香さんの番ですよ。

あなたの母校、海明星（うみのあけぼし）の白鳳女学院高等部、宇宙ヨット部の歌を歌ってくださいよ。

（パチ、パチ、パチ・・・）

そう言つて、スミス・キャスターは、拍手までして茉莉香の歌を催促した。

「いやあ、私の母校を御存知なんですかあ。まいったな。」

でも、ヨット部の歌は、メロデーといいい、歌詞といいい、帝大飛行部の歌とよく似ているんですが・・・。」

「似ているのは、当然ですよ。・・・だつて青春の歌なんですから・・・。」

「青春の歌ですかあ、ナハハハ・・・ちよつと、恥ずかしいなあ・・・。」

（ううう・・・でも、こんなところで尻込みできないよなあ・・・）

では、加藤茉莉香、いきまゝす。

ヨット部の歌を歌います。（第三章 練習航海Ⅰ 参照）

即断即決が、茉莉香の持ち味Ⅱお得意だつた。

「いよゝ！待つてました〜♪（パチ、パチ、パチ・・・）」

そして茉莉香は、女子高生に戻つたような気分で歌いだした。

「見送る人に手を振れど 古い世間に未練無し」

たう星系に背を向けて 星の海原ひた走る

広い宇宙の 旅行く先に どんな出会いが待つのなら

われら 船乗り 白凰 ヨット部

まだ見ぬ 人々よ 今 往かん ー

その後、茉莉香は、スミス・キャスターに問われるままに、弁天丸で危険な宇宙（うみ）を航海した経験談を話し続けた。

ブラックホールの要警戒重力圏内にタッチダウンしたが、危うく脱出した話（第十四章 海賊の力 茉莉香、帝国軍を破る 参照）。

銀河系の外延部、アンドロメダ銀河まで続く星の海をヒガン星団まで遠征した際に、銀河の姿や未知の星々を始めて見て感動した話（第二十章 M—8801星団の包囲戦）

銀河の外を取り巻くダークマターの宇宙（うみ）を人類で初めて航海した話（第三十章 未踏宇宙の先駆け・弁天丸 参照）。

マゼラン星雲へ細長く続く星々の宇宙（うみ）を何万年も航海した話（第四十五章 大人の条件）

・・・・などなど、話題は尽きなかった。

航海の経験談を話すときの茉莉香の表情は、本当に生き生きと輝いていた。

テレビを見ていたオトナの人々は、十九歳の茉莉香がとても経験豊富な『オトナの船乗り』であることに驚き、そして「アンドロメダ銀河航路調査隊長」に任命されたことに納得した。

「茉莉香サマ~~~~~!」

「今宵は、茉莉香サマの歌声が聞けたわ。幸せ〜!」

もちろん、このように、テレビの前で叫んでいる少女たちも大勢いた。海賊ショーで有名な芸能タレントとしての弁天丸船長・加藤茉莉香の人気も、不滅だった。

おかげで、テレビの視聴率は驚異的な水準になった。

もちろん、後にオンデマンドで有料配信される映像商品（もちろん目玉は、加藤茉莉香の歌声だった。）も驚異的な売り上げになった。

そして、現場で演出の指示を出したクラーク・ケント社長の「視聴率王」としての伝説がまたひとつ出来た。

だが、白鳳女学院宇宙ヨット部の現役・OGの少女たちの反応は違った。彼女たちは茉莉香がヨット部の歌をテレビで歌ったのに驚いて、次のようにつぶやいていた。

「うわ~~~~~!」

「・・・なんとというかあ~~~~~・・・」

「ヨット部の歌って、ヒトが歌っているのを見ると、結構〜、恥ずかしいね〜。」

「やっぱり、自分たちだけでノリノリで歌う歌だよねえ……」  
「あゝあ、先輩（茉莉香）、ヤッチマツタね〜〜！」

## 第四十七章 千年の王国 その2

### 8 セレニティ王家の誇り

セレニティ王宮では、コルベール首相が大公陛下に国政の方針を奏上していた。

「御承知の通り、グリニューエル殿下の論文発表は、大変な反響を呼んでおります。」

そのため、銀河系の主要星間国家は、どこも、『裏宇宙』の開発計画を検討し始めました。わが国も遅れをとってはならないと存じますので、裏宇宙の開発計画を早急に作成する方針でございませう。」

「うむ。よきにはからえ。」

「はは。仰せのままに。」

「ところで、卿がそう申すからには、銀河帝国との関係は問題ないのだろうか。」

「はい、銀河帝国は、直轄領として自ら開発すべき一部の区域を除いて、各星間国家による『裏宇宙』の開発を歓迎する方針と聞いております。」

従いまして、各星間国家との自治条約の改定（対象地域の拡大）も応ずる方針であると聞いております。その際には、開発希望が重複した区域の調整もすると聞いておりま

す。

なお、極秘情報でございますが、『裏宇宙』の開発に關しましては、青薔薇家（銀河聖王家の嫡流）のクリスティア第一王女殿下が直々に御担当なさる予定と伺っております。殿下は御出産のため公務を休んでおられますが、復歸次第、陣頭指揮を執られるご意向とか……。」

「なるほど、銀河帝国は準備万端、怠りないという訳か。

グリユーエルの論文発表もその一環であろうなあ……。」

セレニティ大公が、つぶやいた。

「つきましては、大公陛下にお願いしたい儀がございます。」

「申して見よ。」

「はい。わがセレニティ王国の歴史を顧（かえり）みますと、『奇跡の七つ星（ななつぼし）』の開発において、歴代の大公様及び王族の皆様方の果された御業（みわざ）は他の星系に類を見ず、例（たと）えようもないほど大きなものと承知しております。

つきましては、今後の宇宙開発においても、お力添えをいただきたくお願い申し上げます。」

「卿の願いとは、端的に言うると、王族がそれぞれの開発惑星に赴くということか？」

「はい。さようでございます。」

これからは未来志向です。過去のこと、例えば聖地回復運動など、これまでの千年の歴史に囚（とら）われている時ではございません。

セレニティ王国の『次の千年』のために、ぜひとも、王家の皆様方のお力添えをいただきたく存じます。

さすれば、各開発惑星が、本セレニティ王国と連帯感、一体感を持ちながら発展を続けることができるかと存じ上げます。」

セレニティの王族が、セレニティ星系の『奇跡の七つ星（ななつぼし）』の開発を陣頭指揮して成功に導いたことは、王家の誇りである。

そして、民主政治を担う政治家であるコルベール首相は、王家の誇りと目先の利益を巧妙に結びつけ、裏宇宙の開発に参入しようとしていた。

彼は、もはや『聖地回復運動』には関心を失っていた。民主主義の政治家である彼は、確固とした信念がないだけに、世論の変化に応じて、風見鶏のように向きを変えるからだ。それは彼の長所でもあった。

「ふくむ、興味深い話ではあるが……。

卿のことであるから、既に王族を派遣する開発惑星の候補リストがあるのである……。」

「いえ、裏宇宙に関してはまだございませませんが、先に公表しましたセレニティ星系周辺の



宇宙開発計画については、候補リストがございます。」

「少し、考えて見よう。後で必要な書類を届けるように……。」

「はは〜。」

そう言つて首相は大公の元を退出した。

翌週、大公は、王族の主なメンバーを王宮に招集した。出席者は、大公、大公妃、皇太子、皇太子妃、皇長孫の王子（皇太子の息子・独身）の五名だった。

挨拶と、お互いの近況を報告する会話が続いた後、大公が言った。

「皆に集まつてもらつたのは、セレニティの未来を決める重要な話について、意見を聞きたいからだ。」

先日、首相から、国政の方針についてひとつの内奏があった。

首相は、現在検討中の宇宙開発計画の実施や、最近話題になつている銀河系の『裏宇宙』の開発に当たつて、国民の陣頭に立つてその士気を鼓舞するため、それぞれの開発惑星に王族が赴任することを願つておる。

『奇跡の七つ星』開発の故事に習い、セレニティ王国の『次の千年』のために王族の力がぜひとも必要だと首相は考えておる。」

『次の千年』というのは、今回の宇宙開発計画が、われらの祖先の『大航海』、すなわち千年前のセレニティ星系への移民に匹敵する重要なことだと、首相は考えているのです

ね。」

アブラハム皇太子が言った。

「そうだ。その規模からみても、成功すれば、我が王国は広大な星間国家へと発展するこ  
とは間違いないだろう。」

そこで皆の意見を聞きたいのだ。」

「……」

あまりにも壮大な話に、出席者の沈黙が続いた。

そして沈黙を破って、アダムス王子（皇長孫：皇太子の息子）が言った。

「大公様、ぜひ、私を派遣してください。私の心からのお願いでございます。」

父上様、お許してください。」

「アダムス、何をいうのだ。」

お前は、王位継承順位第二位ではないか。父の次の大公はお前ではないか。

王位継承権を捨てる気か？

この星を離れ開発惑星に赴くことで、自動的に王位継承権を失うことは、おまえも  
知っておろう。」

大公は、少し驚いて言った。

「他の王族はともかく、お前だけは自制すべきではないか。」

それが大公の位を継ぐべき、お前の定めではないか。」

アブラハム皇太子も、息子をいさめた。

「私は、王位継承権などにこだわっておりません。開拓惑星に骨をうずめる覚悟で参ります。」

「しかし・・・」

大公は言いよどんだ。そのスキにアダムス王子が話し出した。

「聞いてください。」

私は、これから先、どのように自分の身を処したらよいか、密かに思い悩んできたのです。

・・・自分は、セレニティ王家にとって『ジャマモノ』ではないのかと悩んできたのです。」

「なんとということを使うのか。自分のことを『ジャマモノ』だなどと。」

「いいえ。私はそう思っています。」

なぜなら、王位には、私よりもふさわしい方がいるからです。あの方こそ、セレニティ王朝が待ち望んだ『千年の夢』ではないのですか。

そして、王族の王位継承順位から見ると、私が存在するために、あの方が王位につくことを妨げているのではないかと思っていました。」

「アダムス。めったなことを口にしてはいけない。」

父のアブラハム皇太子がいさめた。

「いいえ。お父様、聞いてください。」

私は、王位継承権が第二位と高いゆえに自分の一存で出処進退が決められず、この悩みに対する答えが見出せぬままに鬱屈した日々をすごしてきました。

しかし、今の大公様のお話を聞いて、私の目の前に道が開けたと感じました。もちろん、それはあの方が私の進むべき道を照らしてくれたからです。

薔薇の泉の廃止に続いて、今回の裏宇宙の開発。

あの方は、やはり、セレニティ王朝の王族を導く『サルバトーレ・ムンディ』（救世主）です。」

「それらをすべて、グリニューエルの功績というのは、過大評価であろう。」

大公が、穏やかな口調で反論した。

「大公様、父上様、どうか、私を開発惑星に派遣してください。」

アダムス王子は、自分の思いを一気に吐き出して、訴えた。

「.....」

「.....」

長い沈黙が支配した。

「ウフフフ……」

その沈黙を破って、マリーナ大公妃が、忍び笑いをもらした。

「陛下も、アブラハム（皇太子）も、うそがお上手ではありませんねえ……」

ねえ、ジョセフィーヌ。」

そう言って、大公妃は、ジョセフィーヌ皇太子妃に発言を促した。

「そうですわ。お二人とも、アダムス（王子）よりも、ご自分の方が『先に行きたい』というお顔をしていらっしやいますわ。」

「そうでしょう。昔から、王家の男たちは、『国民の先頭に立つ』とかなんとか、格好のイイ事を言って、危ないことをするが大好きでしたからねえ。ウフフフ……」

大公妃は、微笑んだ。

「……………」

「……………」

二人の女性の皮肉たっぷりの言葉に、大公と皇太子は沈黙せざるを得なかった。

翌日から、セレニティ大公と皇太子は、ひそかに王族の意向確認を始めた。

首相は、王室が動き出したという情報を聞いて、喜んだ。

「かかったな。王室を釣り上げたぞ。」

これで開発ブームを起こせるぞ。

王室の協力により、宇宙開発が、国の総力をあげる『クラウン・カンパニー』によって行われるのだ。国民の支持も集めやすくなるだろう。」

## 9 千年の大計

「これが、いわゆる裏宇宙における帝国領土の線引き原案か。」

銀河帝国のアン女王は、リシユリユー宰相が立体モニターに投影した図を見ながら、尋ねた。

「はい。さようでございます。」

要点は、二つございます。

ひとつは、クリスティア様の遷都構想を実現し、将来の帝国本土となるにふさわしい領域を確保すること。

もうひとつは、それ以外の領域におきましても、時空トンネルの補給基地となる星域、さらに国防上の要衝や帝国軍の演習区域など、必要な地域を追加しました。」

宰相が答えた。

「これを公表すれば、各自治国家は驚くであろうなあ。」

帝国が一方的に広大な領土の確保を狙っていると思うであろう。」

「御指摘のように、彼らは、内心、そういう印象を抱くかもしれません。」

「裏宇宙では、もともと、帝国軍の演習宙域が広大なエリアを確保していたとはいえ、それはあくまで不毛の辺境地域と扱われていた時代の話だからなあ。」

「はい。」

御存知のように、現在の帝国領と自治国家の領土は、複雑に入り組んだものとなっております。これは、現在の帝国領が、過去の戦争や宇宙植民の経緯など歴史的経緯や帝国の穏健な領土政策が積み重なって形成されてきたためでございます。

このため、実際に、帝国が直轄支配する領土は、意外に小さく見えております。

こういう現状を自治国家の既得権と考えれば、彼らは、裏宇宙の空間も大半は自分たちに配分されるべきものと考えるでしょう。」

「そうであらうなあ。」

「はい。」

しかし、今後の計画開発では今までの様には参りません。

これは、銀河帝国千年の『大計』でございますから。」

「うむ。そこは押し切るしかないなあ。」

「はい。」

そのことと関連いたしますが、

グリユーエル様から、セレニティ王国も裏宇宙の開発に参加したいので、開発惑星の

候補地について、帝国と極秘の調整をさせたいとのお話が寄せられております。」

「その話は、名誉大使（セレニティ王国に大使として赴任している銀河聖王家の王族）からも聞いている。」

セレニティの王族たちが、国民の先頭に立つて、裏宇宙の開発惑星に赴く意向だそう  
だ。

とすれば、王族の人事のため、早めに開発惑星の選定と帝国との調整をすませたいの  
であろう。

できるだけ便宜を図ってやってくれ。」

「はい。」

それにしても、この調子では、裏宇宙の開発レースは、まず帝国とセレニティ王国の  
独走で始まることになりそうです。ご注意くださいなあ。

他の自治国家は、帝国の出入を見極めてから検討を始める方針ですから・・・。」  
「そうだなあ。それに、この話は、グリユーエルの初仕事となるだろう。」

もちろん、セレニティ王国にとっても『千年の大計』であろう。

・・・

それにしても、『帝都移転』とは。

クリステイアは、面白いライフワークを見つけたなあ。フフフ・・・。



それで、帝都の移転候補は決めたのか？」

「まだ、決めておりませんが、例のサンタマリア星が有力でございます。」

「決め手は、銀河のネックレスか。チアキが見つけた、あの星空だな。」

（宇宙海賊キャプテン茉莉香―銀河帝国編・エピソード―「銀河聖王家の伝説」及び第三十六章「名も無い星」参照）

「はい。それも、ひとつの理由でございます。」

クリスティア様も、実際にご覧になって気に入られたようでございます。」

「もうひとつの理由は、あれか。ブラックマターの『神殿』……。」

「はい。詳細は、軍のほうで極秘に調査中でございますが……。」

「陛下、そろそろお時間でございます。」

宰相の報告が一段落したタイミングで、女官長が促した。

「そうか、アンドロメダ銀河航路調査隊の出発式の時間だな。」

私も、自分のライフワークを着々と進めることにするか。

茉莉香も張り切っているからな。フフフ♪。」

女王は、上機嫌で「星の大広間」に向かった。

アン女王が宮殿の「星の大広間」に入場した。

すでに、チアキ銀河帝国軍第一艦隊司令官、ヤマシタ参謀総長など軍首脳が整列していた。

一方、アンドロメダ銀河航路調査隊は、隊長である弁天丸船長加藤茉莉香を含め10人の船長が並んでいた。そのほかに補給支援艦の船長5人が並んでいた。

調査隊の10人の船長のうち、加藤茉莉香を含む6人は宇宙海賊船の船長、4人は帝国軍の航路調査測量船の船長だった。

航路調査は、本来帝国軍の役割であるが、今回は未踏の宇宙に関する調査のため、経験豊富な民間船（海賊船）の力を活用するという異例の人選だった。

出発式は、簡素だった。

整列した15人の船長が女王に紹介された後、女王陛下から出動命令が下された。

これを受けて、調査隊を代表して弁天丸船長加藤茉莉香が、決意表明を行った。

「私たち航路調査隊は、陛下の命によりアンドロメダ銀河へ続く宇宙（うみ）の道を拓く航海に出発いたします。

必ずや、陛下の下に、吉報をお届けすることをお誓い申し上げます。」

「うむ。アンドロメダ銀河への大遠征は我がライフワークとして、必ず実現したい。

茉莉香、頼んだぞ。良い成果を期待している。」

茉莉香の宣誓に対して、女王がお言葉を述べた。

公式行事にもかかわらず、女王は、弁天丸船長加藤茉莉香を「茉莉香」と名前で呼んだ。それは、茉莉香と弁天丸がそれほどの信頼を築いてきた証拠であった。

出発式を終えて、廊下に出た茉莉香に、一人の海賊船の船長が話しかけてきた。宇宙海賊船ブルックリン号のダークマン船長だ。

「よう。加藤船長。お前さんは、本当に想像もつかない、面白い事をやらかすなあ。」  
「そう言いながら、船長はとても上機嫌だった。

「オレツチも、何か頼みがあれば聞いてやるとお前さんに言っただけだが・・・」  
まさかこの俺が女王陛下の前に出る仕事を頼まれるとは思ってもみなかったぜ。

おかげで、ほら。

今日の出発式のために船長服を新調しちまったぜ。ハハハ・・・」

ダークマン船長は、辺境宇宙を縄張りに行っている悪名高い宇宙海賊である。もちろん、このような評判の悪い宇宙海賊を女王陛下から依頼された仕事に抜擢するという、この人事は『使える者（もの）は、悪人でも使う』という茉莉香の考えからだった。

「ナハハハ・・・」

それより、私のお願ひ、よろしくお願ひしますよね。」

茉莉香は、微笑んだ。

「おう、任せとけ。」

アンドロメダ予定航路上にあるヒガン星団に行くまでの間に、わざわざ海図の無いダークマターの宇宙(うみ)を飛んで、船団の連中に海図のない宇宙を飛ぶ訓練をするってえ、お前さんの考え、俺も賛成だぜ。

オレツチが、やつら若造をたつぷりしごいてやるさあ。

なにせ、『はずれの宇宙(うみ)は、俺の宇宙(うみ)』だからなあ。」

ダークマン船長は、自ら『はずれの宇宙(うみ)』と呼ぶ、銀河系の外延部を縄張りになっている海賊だった。そのため、彼は、海図の無い宇宙を安全に飛ぶための実践的な経験が豊富だった。

現在、弁天丸はじめアンドロメダ銀河航路調査隊と補給艦の計15隻は、銀河帝国の中央基地に停泊している。出発式を終えて弁天丸に戻った茉莉香は、ブリッジのメンバーから報告を受けていた。

「船長、各船の出港準備は進んでいますの、予定通り、明日に出航できます。」  
「ありがとう。」

ねえ、ギルバートさん。ダークマン船長が今回の航海のメンバーに選ばれて、とても喜んでいたわよ。

それに、他の4人の海賊船の船長さんは、若いけど本当に頼もしい人たちばかりねえ。こういう人たちと一緒に仕事が出来るなんて、楽しみよね。」

「そう言ってもらえたらうれしいですね。」

彼らは、帝国海賊のなかでも将来有望と評判が高い若手船長たちですから。」

「彼らの船は通常の超光速跳躍船だけど、銀河の外宇宙（そとうみ）を航海する経験を積んでもらうことも、大事なことよね。」

「そうです。帝国海賊のなかでも、将来の『アンドロメダ大遠征』を担う人材を育成しておくことが必要です。海賊は、帝国の先駆けですからね。」

「そうね。」

ところで、企業や大学の研究機関からお仕事の依頼がいつぱい来ているそうだけど、みんな何を考えているの？」

「大半は、銀河間の航海を安全に行うための設備や機械の試作品をテストするものです。」

そのなかで乗員たちが注目しているのが、ステイプル重工業から頼まれた依頼です。」

「なんなの？」

「それは、時間の進む速度が、銀河間空間ではどう変化するか、計測するものです。」

銀河帝国が開発した『時間センサー』を使って、銀河間の宇宙空間を実際に航行する船内で、船の運動や銀河系の重力場との距離によって時間の流れがどう変わるか、具体的に計測するものです。」

宇宙物理学では、高速で運動している船とか、船が星などの重力源から離れると、船

内の時間の進み方が遅くなるとされていきますからね。」

「それって、『ウラシマ効果』ってこと？」

『浦島太郎』のおとぎ話みたいに、私が航海から帰ったら、チアキちゃんたちが御婆さんになつていたりとか……。ナハハハ……。』

茉莉香は、チアキやグリューエルが御婆さんになつている姿を思い浮かべて笑んだ。

「ははは。そんなSF小説のようなことにはなりませんよ。」

実際の時間のズレはとても小さいですから。

でも船の現在位置を正確に知るには、時間の流れの速さの違いを計算に入れないといけませんからね。船乗りにとっては重要です。」

「なるほどね。」

それで、依頼は、全部、引き受けられそう？

弁天丸の営業方針は、『依頼された仕事は断らない』ってことよね。特に弁天丸に期待してくれている人たちからの依頼は、何とかしてあげないとね。」

「大丈夫ですよ。」

それに、仕事は、弁天丸だけで独り占めしませんよ。

メインの作業は船体や定員に余裕のある弁天丸で引き受けるしかないのですが、出来るだけ他の海賊船にも協力してもらって、すべての依頼は、海賊船みんな引き受ける

ように仕組んでいます。」

「そう、ありがとう。」

それなら結果オーライで、『儲けは山分け』という海賊の掟（おきて）も守れそうね。やっぱり、頼りになるね、ギルバートさんは……。」

弁天丸には、仕事の依頼が殺到していた。弁天丸は、最新の重力制御推進エンジンを備え時空トンネル航法ができる新時代の宇宙船（ふね）、しかも船の容量に余裕がある大型船として注目されていたからだ。

しかし、弁天丸は、仕事を独占せず各海賊船に配分し、『儲けは山分け』という海賊の掟を守った。もちろん、各海賊船は、仕事の配分に満足している。これも『宇宙海賊は明朗会計』という弁天丸の営業方針に対する日頃の信頼があつてこそ可能なことだ。

その結果、「民間船」である6隻の海賊船には、ステイプル重工業、ヒュー&ドリトル星間運輸、銀河テレビなど宇宙造船業、宇宙運送業、宇宙通信業の巨大企業や、宇宙大業やグラントウッド医科大学の宇宙医学・宇宙生物学研究所など有力な研究機関がタイアップすることになった。

「ねえ、ギルバートさん。

私、時々思うんだけど……、この先に、本当にやってくるのかなあ。

『銀河間の大航海時代』ってやつ。」

「ええ、私たちの生きているうちに、必ず始まると思います。

現に私たちも、新しい大航海時代のための調査研究の手伝いを請け負っているのですから……。」

「やっぱりそうかあ。」

「茉莉香さんは、そんな時代が来るのを楽しみにしているんでしょう?」

「そうだよ。さすが私のこと、わかってるね。」

私ねえ、そんな時代が来ると良いなあ、

向こうの銀河で一体どんな星々にめぐりあえるんだらうか、

そんなことを考えるとワクワクしてきちゃうんだ。」

そういう茉莉香の目は、光り輝いていた。

こうして弁天丸船長加藤茉莉香は、次の『大航海時代』を夢見て、着実に人脈を広げ、人望を集めていった。

10 セレニティ大公の大風呂敷

「なるほど。これが帝国の開発予定区域か。

ずいぶん広いなあ。恒星系単位でもいくつあるか多すぎて数えられないじゃないか。

帝国は、これを何年かけて開発するつもりなのかなあ。」



セレニティ大公は、コルベール首相からの説明を受けて、つぶやいた。

「はあ。帝国の方も、千年がかりで開発するつもりでしょうか。」

ともかく、グリューエル様のおかげで、今の段階で他の星系が知らない『極秘情報』が得られた意義は大きいです。

帝国の資料をもとに、我が王国がこれと重複しないように開発惑星を検討すると、このあたりの星が考えられます。」

そう言つて、首相は5つの恒星系にある5つの可住惑星を示した。

「たった5つか。最初はそのくらいかもしれないが、それで全部というのは、規模が小さいすぎないか。」

そもそも、我が王国は、過去の千年で同時に7つの惑星開発に成功しているのだぞ。

とすれば、次の千年で、7の7倍で49。つまり、50個ほどの惑星開発に成功しても当然ではないか。」

「はあく。それですと事務的には、あまりにも資金規模が大きくなりすぎまして……。」  
首相が口ごもった。

「何を言うか。セレニティ王国の『千年の大計』だぞ。」

銀河帝国も千年単位の大きな規模の構想について議論しているのであろう。

だから我々も、開発惑星の数を数えないで、帝国の何パーセントの規模の宇宙空間を

取るかという規模の大きな話をすべきではないか。」

「はあく。．．．．では、どのくらいの規模が．．．．。」

「控えめにいつても、銀河帝国の開発予定区域の隣で、その2〜3%の広さを要望したらどうか。」

「それでは、恒星系単位で、数千の規模になりますが．．．．。」

「かまわぬ。同時に開発を始めるわけではないだろうからな。」

とにかく、銀河帝国の隣で、我が王国にふさわしい規模のエリアを確保すべきだ。」

「はあ．．．．。」

首相は、セレニティ大公のあまりの大風呂敷に反論する気を失って、下がっていった。

「やれやれ、大公様の大風呂敷にもあきれんなあ。」

これを実現するには、いったい、どれだけの資金が必要だと思っているんだ．．．．」

首相は、大公への奏上を終えて、王宮の廊下を歩きながら、顔をしかめてため息をついた。

「しかし、なぜ、そんなに大風呂敷を広げるんだ。」

グリユーエル様が味方してくれるから帝国の了解が取れると思っっているのか。

．．．．

は!? まさか、大公様みずから開発惑星に赴かれる、おつもりか．．．。

ふむ。これは、もしかすると。  
.  
.  
.

では、5%くらい欲しいと、更に大公様の2倍の大風呂敷を広げたプランを帝国に示してみるか。

帝国の同意が取れば、わが国が『第二の銀河帝国』となることも夢ではないなあ。  
.  
.  
.  
アハハハ。」

変り身の早い首相は、もう微笑んでいた。

### 11 第二王女の婚約問題

「どうだ、お腹の子供は元気か？」

銀河帝国のアン女王は、チアキ第二王女を連れて、クリスティア第一王女を産院に見舞った。

「はい。もう元気で、元気で……。」

少しでも早く生まれたいのか、自分の存在をアピールしているのか、私の体を内側から蹴り飛ばすんですよ。

もう、痛い、なんの……。」

クリスティア王女は、笑った。その笑顔は幸せと自信にあふれていた。「そうか。なによりだ。」

今日は、生まれてくる王子の名前のことで相談に来た。まもなく、エカテリーナも来るだろう。

それから、公務のことだが・・・セレニテイ王国の宇宙開発計画は、原案通り承認することで、お前も異存ないだろうか？」

エカテリーナ公爵夫人は、表向きは、銀河聖王家の女性王族の親睦会、ローズガード・クラブの会長に過ぎないが、王族の人事全般について女王を補佐する役割を担っていた。

「はい。セレニテイの宇宙開発計画には異存ございません。」

「わかった。」

それにしても、一時はまったく帝国の公務に関心を失っていたお前が、また以前のようなやる気を取り戻してくれて、私は、ひと安心さ。

なあ、チアキ。」

「はい。」

姉上は、『子育てに専念する』とおっしゃって、王宮を飛び出すのではないかと心配しております。

以前から、子育てについては、御自分のお考えをしつかりお持ちのようでしたので……。」

チアキが言った。

「ふくん。やはりそう思っているのを、見透かされていたのだなあ。」

「お差し支(さ)しつかえ)えなければ、ご決意を変えられた理由をお教え願えませんか。」

チアキは、ズバリと質問した。

「こういう核心を突いた質問を遠慮なくできるところは、妹の特権である。」

「ははは……。チアキはいつも厳しいな……。」

「いいよ。その理由を話そうか。お前にも参考になるだろう。」

「あれは、妊娠8ヶ月になった頃だったかな。」

「私が、揺り椅子に座りながら、自分の念願の子育てを実現するために王宮を出ようかと考えていたときのことだった。」

突然、この子がいつもより激しく動いて、私の体を蹴ったのさ。」

「これが本当に痛かったのさ。」

「胎動というヤツだな。チアキ、お前も私をがんが蹴つ飛ばしていたんだぞ。」

女王が言った。

「母上。話をそらさないでください。」

チアキは、少し顔を赤くして、言った。

「それでなあ、そのとき、私は分かったのだ。」

「この子は、もう私とは別の人間。自分の意思で動いているのだったね。」  
「なるほど。」

「だから、私は、思ったのだよ。」

「この子の人生は、自分で決めさせてやろうってね。」

つまり、この子は、次世代の帝国の王位継承者として生まれるはず。王位を継ぐかどうかは、この子自身に決めさせてやろうって、な。

だから、私が勝手に王族の身分を捨てて、この子の王位継承権をなくすことはやめようと思ったのだ。

それどころか、逆に『この子のために帝国をもっと繁栄させなくては』と思ったのさ。」  
「なるほど。そういうものですか。」

チアキはうなずいた。

「ああ、そういうものさ。母親つてのはなあ。」

ところで、チアキ。グリュエルのことを、本人から聞いているか？」

女王がチアキにたずねた。

「ええ？ 何のことでしょうか。」

「婚約の話さ。」

先日、白薔薇家の当主から、グリユーエルとアレクサンドルの婚約を認めて欲しいという話が、正式に私のところに来た。

もちろん、グリユーエル自身も了解みだ。」

「ええ!?」 彼女はまだ16歳になったばかりじゃないですか。」

「しかし、王宮育ちの王族としては。むしろ遅いくらいじゃないのかなあ。」

婚約だけは、みな、かなり早いぞ。

というより、クリスティアとチアキが特別なのさ・・・。

それでだなあ・・・、おまえも、もう19歳になったのだから・・・。」

「い、いえ、いえ、そ、そ、そんな・・・、」

私は・・・まだ、まだまだ、未熟者でして・・・。」

チアキは、突然、話の風向きが変わったことに驚いて、女王の言葉を遮った。

「いやいや。もう、お前は、立派なおトナの王族だよ。」

誇っているよ。」

第一艦隊司令官の公務だって、私以上に立派に勤めているじゃないか。

だから、そっちのほうも、そろそろ決めたらどうかと私も思うよ。」

姉のクリスティア王女が言った。

「もちろんお相手は、エドワードだ。

彼なら、お前も異存はないだろう……。」

「うとう……。」

「それで、まもなくエカテリーナもやってくるから、少しその話をしないか。」

女王が言った。

「はああ……。」

では、少し『お花を摘みに』……

エカテリーナ様がいらっしやる前に、気持ちを落ち着けてきます……。」

チアキは、そう言つて席をはずした。

そして、まもなく、エカテリーナ公爵夫人が産院にやつてきた。

だが、チアキがなかなか戻らなかった。

「……。」

「誰かいるか。チアキはどうしたのか、聞いているか？」

たまらず女王が女官に聞いた。

「はあ……チアキ様は、先ほど『急な御公務が出来た』とおっしゃつて、お帰りになられましたか……。」

女官がいぶかしげに答えた。



「フフフ．．．」

「チアキのヤツ．．．逃げたな．．．」

「姉のクリスティア王女がそう言つて微笑んだ。」

「はあく。やはり、少し無理をさせてきたかなあ．．．」

「陛下、何か思い当たることでも、おありですか？」

「エカテリーナ公爵夫人が聞いた。」

「いやあ、なに．．．」

「思い返せば、私は、チアキが18歳の誕生日を迎えた日に親子の名乗りを上げて、チアキを王宮に連れ帰った。(第十二章 茉莉香とチアキ 十八歳の誕生日 参照)」

「もちろん、チアキはその日まで自分の出生の秘密を知らなかった。」

「しかし、それ以来、チアキは王女として私の期待以上にがんばってくれた。まるで、自分が銀河帝国の王女として認められるのをずっと待ち望んでいたようにね。」

「確かに、目覚ましいご活躍でしたねえ．．．」

「だが、それは、チアキが相当、無理をして頑張っていたということかなあ．．．」

「女王が言った。」

「そうでございませぬえ。」

「利発な方ですから、陛下の御期待は十分自覚されておられたでしょうから．．．」

「そうだなあ……。」

「そういうことなら、急がば回れと申します。」

もう少し、たとえば大学を御卒業なさるまで、静かに見守るほうがよろしいかもしれません。」

エカテリーナ公爵夫人が言った。

「それにアイツの性格では、こういう話は自分の方から言い出さないだろう。」

アイツなら、

『何度も何度も結婚を申し込まれて、もう断るのも気の毒というか、メンドーになって……』

というようなことを言いながら、婚約を承諾するのではないかなあ。」

女王とエカテリーナ公爵夫人の話に、クリスティア第一王女が口をはさんだ。

「さすが、クリスティア。」

チアキの性格を良く見抜いているなあ。ハハハ……」

女王が微笑んだ。

「では、当面、殿方のほうに頑張って頂きますか……。」

「そうだな。」

「そこで、差し出がましいようですが、陛下に申し上げます。」

今の件、チアキ様によくよくお話になって、気持ち落ち着かせておいてくださいます。

万が一にも、チアキ様が王宮を飛び出して、旅に出ることがないように……。」

「それは、どういう意味だ？」

「古代から『二度あることは三度ある』と申しますから……。オホホホ……。」

「……………」

「……………」

エカテリーナ公爵夫人のことばに、女王とクリステイア王女は何も言えなかった。

彼女は、かつての女王とクリステイア第一王女のように、チアキも家出をして海賊にならないかと心配しているからだ。

「どうしよう?」

どうしよう!

婚約なんて……

結婚なんて……

どうしたらいいの?

ねえ……!

うわあぁ~~~~~!!!

そのころ、チアキは王宮の自室のベッドの中で布団を頭からかぶって、パニックに陥っていた。

こうして、チアキの「婚約問題」は棚上げになった。

## 12 銀河帝国からの使者

セレニティ大公とマリーナ王妃は、セレニティ王宮の接見の間において、銀河帝国女王の使者として訪れたイワン・ホワイトローズ殿下と会談していた。彼は、その名が示すように、銀河帝国の銀河聖王家の白薔薇家に属する王族である。

「大公、大公妃両陛下におかれましては、ご機嫌麗しく、お喜び申し上げます。

本日は、銀河聖王家を代表いたしましたして、両陛下に『この上も無く良い知らせ』と『御相談』をもってまいりました。」

使者の言葉を聞いて、その場の空気が一気に緊張した。

「相談」だけでなく、「知らせ」も持ってきたということとは、銀河帝国の一方的な決定事項の伝達があることを意味していた。

「お話をお聞きしましょう。」

大公は、対等な立場を意識した感情を表さない言葉遣いで応じた。

「はい。女王陛下におかれましては、白薔薇家からの申し出を受けて、白薔薇家のアレク

サンドル王子と、養女のグリューエル王女のご婚約をご裁可なさいました。

グリューエル王女は先日16歳になられたばかりでございますので、正式な御結婚は18歳になられるのを待つてからと考えております。お二人のお忙しい御様子から察すると、御結婚は早くとも3、4年先でございましょう。

これが、この上も無い、良いお知らせでございます。」

「なるほど。それは目出度いことですわ。」

マリリーナ大公妃が、緊張感と少しばかりの不快感を示して答えた。

銀河聖王家の王族である二人の婚約自体は、銀河聖王家の家内問題というのがタテマエだろう。だから、セレニティ王国には決定事項として、「この上も無く良い知らせ」が伝えられる。

しかし、グリューエルはセレニティ王国の王女でもあり、その婚約を一方的に決めたと通告されるのは、彼女にとって不愉快であった。

「それで、相談とは……。」

しかし、大公は、また、感情を表さない言葉遣いで問うた。

「はい。」

申すまでもないことですが、グリューエル王女は、セレニティ王国の王女でもあら

れます。

大公様は、銀河聖王家の白薔薇家のアレクサンドル王子と、セレニティ王家のグリュール王女のご婚約をいかがなさいますか。」

「是非もない。」

もとより、二人の縁組は、当方から銀河聖王家に申し入れたものだ。今、ようやく御返事がいただけたものと考えている。

本当に、この上も無い良いお話しが聞けて、喜びにあふれている。

陛下に、そうお伝えください。」

大公は、そう言つて微笑んだ。彼は、もとよりこの話の主導権はセレニティ側にあつたというプライドを示した。

「ありがとうございます。必ずお伝えいたします。」

「それで、二人の結婚は3、4年ほど先になるようだが、今後の二人の住まいについては白薔薇家とも相談したいと思つている。」

いま、セレニティの国政の方向が定まるのを見守つておるところでなあ。」

「国政の方向とは・・・それは『裏宇宙』の開発のことでしょうか。」

「知つておられるのか？」

「はい。少しばかりは・・・。それは、『帝国の隣、5%』という案でございますよね。」

この話は、王族の皆様限りにはいただきたいのですが……。

私が陛下から使者を命じられた際に、陛下はすでにセレニティ王国の開発計画を御裁可されたとおっしゃっておられました。」

「そうですか。それは喜びに耐えません。陛下にそうお伝えください。」

「はい、確かに。」

ところで、『お二人の住まい』と、今、おっしゃいましたが、よろしければ、その意味をお教えいただけませんかでしょうか。」

「いや、なに。たいしたことではない。」

御存知のとおり、わが国の王族も、自ら国民の先頭に立つて国難に立ち向かうのが古くからの習わし。したがって、裏宇宙の開発に当たっては、多くの王族が開発惑星に赴いて、国民と苦楽を共にする覚悟をしておる。

今のお話のようにセレニティの開発計画が認められるならば、開発計画の具体化も急速に進むであろう。

そこで、グリューエルには、出来るだけ早くセレニティ星系に戻り、我ら王族が安心して開発惑星に赴けるように、この国を護ってもらおうと思っておる。」

大公は、たいしたことではないと、自らの既定方針のように、グリューエルの今後についてあいまいに述べた。もちろん、「即位」などの明確な言葉は、使われなかった。

『銀河帝国に、我がセレニティ王国の王位継承問題を相談している訳ではない。』  
『両国は対等の関係である。』

そういう自負が込められた言葉遣いであった。

### 13 宇宙ヨット部の凱旋

「みなさん、ネビュラカップの優勝おめでとう。」

二年連続の優勝ですが、

今年は、特に注目されたいへんだったでしょう。

それを跳ね返して、ナタリアさんの個人優勝、みなさんの団体優勝。

本当にすばらしいわ。おめでとう。」

「ありがとうございます。」

白鳳女学園の校長が、宇宙ヨット部員たちをねぎらった。

校長室から出たあと、宇宙ヨット部員たちは、三年生のナタリアを先頭に二つの優勝カップを持って、ヨット部の部室まで、校内の廊下を歩いていった。

廊下には、大勢の生徒たちが集まっていた。

その真ん中をヨット部員たちは進んでいった。

それはまさに凱旋行進だった。



「ナタリアさま。」

「ヒルデさま。」

廊下を進むヨット部たちの周りを囲む生徒たちの中には、そう叫んで手を振るものが大勢いた。

「ふうう……。」

部室に入り、優勝カップをガラス棚に収めたところで、ヨット部員たちは、ようやく緊張が抜けて、おしゃべりを始めた。

「やっぱり魔女（校長）の前に出ると緊張するなあ。」

「そうよねえ。」

「それにしても、今年のネビュラカップは、昨年までとは大違いだったね。」

「そうそう、大会直前に茉莉香先輩が銀河テレビに出演して、宇宙ヨット部の話をしたでしょう。」

あれで、一気に大会に注目が集まって、テレビの取材もあって……。」

「理事長さんが、大喜びだったわね。」

「各出場チームも、テレビの取材を受けて、実は、結構喜んでいたわね。」

私たちは、

『アンタたちのおかげでマスコミがうるさくって、試合に集中できなかった』とか、

『そのせいで負けた』とか、

文句言っていたのにね。」

「アハハハ……。いつも白鳳女学院には風当たりが強いですね。」

「そんな風なんか、ヘーキよ。」

「そうよ。ヨットは風に乗って飛ぶのよね。だから私たちは負けないわ。」

「先輩、そのとおりです。」

「アハハハ……。」

「その意気だ。お前ら、私が卒業しても負けるんじゃないぞ。」

前部長の三年生ナタリアが言った。

「はい。お任せください。」

なあ、みんな！ 目指せ、三連覇であらう」

部長のジェシカが言った。

「おおく!!!」

白鳳女学院宇宙ヨット部は、茉莉香やチアキが卒業したあとも、快進撃が続いていた。

セレニティ大公シムシエル・セレニティは、セレニティ王国国民議会の開会に当たって、新年度の施政方針について演説していた。

もちろん、演説の内容は、大公の独断ではない。立憲君主制に移行してからは、大公は、議会において、内閣が作成した演説原稿を読み上げるものとされている。

「・・・以上が、新年度の一般施政方針である。

王国をこれまで通り、つつがなく運営していくために、この施政方針とその実施に必要な予算の支出、税の徴収、法律の制定について、議員諸君の賛同を期待する。

しかしながら、新年度は、これにとどまらない特別な施政方針がある。

それは、新たな宇宙開発計画の策定とその実行に着手することである。

ご承知のように、われらの祖先は、千年前に移民船『クイーン・セレンディピティ』に乗って、宇宙移民の『大航海』を行った。

そして王国のこれからの千年を考えると、私は、今、これに勝るとも劣らない、あらたな大航海を企てる時代に来ていると考える。

その具体策の一つは、すでに素案を公表し、国民の意見を聴取しているところの、セレニティ星系周辺の宇宙開発である。

私は、これにとどまらず、最近、銀河帝国から開発促進が提唱されている、いわゆる『裏宇宙』、すなわち核恒星系の反対側にある、辺境の宇宙空間の開発に、わが王国も参

入すべきと考える。」

大公がそこまで演説したところで、議場には興奮した雰囲気は漂い始めた。

興奮と緊張は次第に高まっていくようだった。

「この宇宙開発の実行に当たって、私は、国民に次のことを約束しようと思う。」

第一は、宇宙開発計画は、千年計画であること。すなわち、王国のこれからの千年の発展を見据えた、空間的にも時間的にもスケールの大きい計画を立案することである。

第二は、宇宙開発計画は、着実かつ現実的なものであること。すなわち、開発の実施には、科学的な調査に基づき、国民生活を圧迫しないように節度を持って資金や資源が投入されることである。

この結果として、たとえ開発に千年の時間を要しても、私は恥じることはないと考えてる。

幸いにして、これまでに政府の調査は相当進展しており、早ければ、2、3年後には先遣隊が出発できるであろう。

第三は、諸君も知つての通り宇宙開発は苦難の事業であるが、わが国民がこのような苦難の事業に立ち向かうのを、私たち王族は傍観しないことである。

歴史を振り返れば、我が王国は、これまでの千年でも、セレニティ星系の7つ星の開発に当たって、王族が各惑星に赴き、国民と苦難を共にしてきた。

その歴史に習い、これからの千年も、宇宙開発に当たって、われら王族も、開発惑星に赴き、国民と苦難を共にする所存である。

具体的には、セレニティ星系周辺の開発には、アブラハム皇太子が王族を率いて赴くであろう。

核恒星系のいわゆる『裏宇宙』の開発には、アブラハムの息子アダムス王子と私が王族を率いて赴くであろう。

われらセレニティの王族は、国民の先頭に立って、この困難な事業に立ち向かう決意である。

以上の詳細は、後日、政府から説明があらう。

議員諸君の賛同を期待する。」

大公自らが開発惑星に赴くという言葉聞いて、議員たちの興奮は最高潮に達した。

そして、大公の演説が終わるや否や、議場では嵐のような拍手が巻き起こった。

保守派の議員たちは立ち上がり、『大公万歳』と叫び始めた。

そして、セレニティの国歌を歌う声が、議場に響いた。

セレニティ王国の歴史がまたひとつ動き出した。

そして、それはグリュエルの運命を急展開させていく。

## 15 グリユーエルの使命

グリユーエルとその婚約者、銀河聖王家のアレクサンドル王子は、セレニティ大公の呼び出しに応じて、セレニティ王国を訪ねた。

二人は謁見室で大公に会った。同席したのは、大公妃だけであった。儀礼に則った挨拶の口上が交わされた後、大公が言った。

「グリユーエル、アレックス、あなたたちに来てもらったのは、私からグリユーエルに託したいことがあるからだ。」

「はい。……」

グリユーエルは緊張して答えた。

「先の国民議会会での私の演説のことは、知っておろう。」

「はい。……」

「私と、皇太子のアブラハムと、その息子アダムス王子だけでなく、大勢の王族が開発惑星に赴くため、これから数年の間に、セレニティ星を離れるであろう。」

「はい。……」

グリユーエルは、さらに緊張して答えた。

「わが王家の王室典範では、このセレニティ星系の「青の姉」の星を離れる者は王位継承権を失うことになっておる。」

もちろん、王位にあるものが星を離れても、同じことじゃ。

まあ、これは宇宙移民が生還も見通せない難事業であつた時代に出来たルールであるが、今日でも有効だ。

これは知っておろう。」

「はい。」

それでは、どのようなことに……。」

グリユーエルは、半ば答えを予測しながら、質問した。

「王族の雰囲気で察しておろうが、グリユーエル、ここ数年のうちに、あなたより王位継承順位の高い者は、全員、セレニテイの王位継承権を失うことになるう。」

私も同様だ。

中には、フローラ姫夫婦のように、開発惑星には赴かず、この際に王位継承権だけでなく、王族の身分も捨てて、一市民として静かに暮らしたいと願う者もいるがなあ……。」

「ええ、全員ですか……。」

「そこで、あなたに託したいのじゃ。

我々が安心して旅立てるように、セレニテイという国をあなたに託したい。」

「……。」

グリユーエルは、即答しなかった。

「どうしたのじゃ。グリューエル。」

私は、自信に満ちた答えが返ってくると思っておったが・・・なあ。」

「すぐにご返事できなくて、申し訳ございません。」

ですが、ご返事する前に確かめたいのです。」

このセレニテイという国を、大人になった自分の目で・・・。」

「そうか。」

・・・

では、首相に巡行の便宜を図ってもらおうよう、伝えよう。」

「ありがとうございます。」

それから一つ、伺ってよろしいでしょうか。」

「なんだね。」

「はい。先ほどの王室典範の決まりは、わたくしにも適用されるのですよね。」

もし、仮に、私が銀河帝国に永住すると宣言すれば、自動的に、私も王位継承権を失うのですよね。」

「答えたくない問題だが、現行の規定では、そのとおりだ。」

そこで、お前が銀河聖王家の養女となるときに、セレニテイ王家ではお前はあくまで留学中で、星を離れてはいないと判断した。」



「それがお前の王位継承権を保持する仕組みだ。」

「そうですね。」

失礼なことをお聞きしました。お許しください。」

それから二週間の間、グリューエルとアレクサンドルは、セレニティ星系の七つの星を巡行した。各地のパーティに出席し、また大勢の重要人物たちとの接見をこなした。

どこも大歓迎。大変な人波に囲まれた巡行だった。

「ふうう。」

王宮に戻ったグリューエルは、少しため息をついた。

「お疲れですか。どこも大変な歓迎でしたからねえ。」

アレクサンドル王子がグリューエルをねぎらった。

「はい。」

でも、みなさまは、すぐにも私の即位が行われると思っておられるようでしたね。」

「マスコミ報道の影響でしょうね。」

王位継承権をお持ちの王族方のうち、どなたが開拓惑星に赴く意向をお持ちか国民に知られており、当然に貴方が繰り上がると思っておられますからね。」

「そうですね。」

「それから先日のパーティで、私は、セレニティの王族の皆様と初めてお会いしました

が、皆さん、活気に満ちた雰囲気、頼もしかったですね。

あれなら惑星開拓も志気が上がりますね。」

「はい。この前にお会いした時と比べて、どの方も生き生きとして、目が輝いていらつしやいました。」

グリユーエルは、嬉しそうに語った。

「それでは、国内巡行を終えて、あなたの決意は、変わりませんよね。」

「はい。変わりません。」

私は、自分に与えられた使命を全うしようと思います。

明日、大公陛下にお会いする時間をいただいで、その際にご返事しようと思つています。」

「では、私は、あなたと一緒に歩んでいきますよ。」

私たちは夫婦になるのですからね。」

「はい。．．．．．」

あのく この気持ち、何と言つたらよろしいのでしょうか。

．．．

うれしいです。とても、．．．。」

グリユーエルは小さな声でそう言つて、アレクサンドル王子と見つめあい、そして顔

を赤くしてうつむいた。

翌日、グリューエルの返事を聞いたセレニティ大公は、その日のうちに王室会議を召集してその賛同を得て、王位継承順位の変更を正式に決定し、公表した。

決定事項は、二つだった。

一つは、開拓惑星に赴く意向を示している皇太子等の王族が王位継承権を失うこと、もう一つはグリューエルを新しい皇太子とすることだった。

もちろん、皇太子就任に伴って、グリューエルの留学は打ち切られ、正式に帰国したものとされた。

しかし、セレニティ大公の譲位は決定されなかった。理由は、グリューエルは16才であり、まず皇太子として王位を継ぐ準備期間を与えるためとされた。それも、大公が開拓惑星に赴くまでのことであるが。

「さあ。グリューエル、アレックス、バルコニーに行きましょう。

皆が待っていますよ。」

セレニティ大公と大公妃が、二人に呼び掛けた。

「はい。」

「はい。」

王室会議の発表があつた翌日、四人は、王宮のバルコニーに並んで姿を見せた。新皇太子就任の祝賀のために、王宮前の広場に集まる国民の声に、こたえるためだつた。

ワー・・・

国民の前に姿を見せたグリユーエルは、大きな歓声に包まれた。

宇宙海賊キャプテン茉莉香 Ⅱ セレニテイ編 Ⅱ 完